愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第80集

門間沼遺跡（かどまぬま）

1999
愛知県埋蔵文化財センター

序

濃尾平野は全国でも有数の大平野でありますが、けっして人口過密ではなく、多くの自然にも恵まれております。門間沼遺跡が所在する木曽川町も濃尾平野最北部の田園地帯にあり、環境にも優れています。こうした恵まれた環境に太古から人々が生活してきたことが、この度の発掘調査によって明らかになりました。

門間沼遺跡の発掘調査は、愛知県一宮市と富山県小矢部市を結ぶ東海北陸自動車道の建設に伴う事前調査として、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会より委託を受け、平成６年度・平成７年度両年度にわたって実施いたしました。調査期間中には現地説明会を行うなどして皆様に調査の速報をお伝えしてまいりましたが、今回そのまとめとして報告書を刊行するはこびとなりました。今後とも広く皆様のご理解を賜りますようにお願い申し上げます。

最後になりましたが、昭和60年度に発足しました財団法人愛知県埋蔵文化財センターは、平成11年度より財団法人愛知県教育サービスセンターへと衣替えいたしました。今までのご支援に感謝申し上げますとともに、引き続き変わらぬご支援をお願い申し上げます。

平成１１年８月

財団法人愛知県教育サービスセンター
理事長　　久留宮　泰啓

例言

1．本書は、愛知県葉栗郡木曽川町に所在する門間沼遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団および愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが平成7年4月から平成9年3月まで行った。

調査面積は、平成6年度10000㎡、平成7年度28440㎡。

3．担当者は次の通りである。

発掘調査　平成6年度

主査：前田雅彦

調査研究員：石黒立人・栗林典昭・秋田幸純

平成7年度

主査：神谷友幸

調査研究員：坂倉澄夫・石黒立人・栗林典昭・中野良法・酒井俊彦・西原正佳・秋田幸純・小川芳範

報告書作成　平成9年度

調査研究員：小川芳範

平成10年度

専門員：石黒立人

4．調査にあたっては次の諸機関の御指導・御協力を得た。

愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、建設省、日本道路公団、木曽川町教育委員会

5．本書の執筆者は目次及び文末に記載したとおりである。なお編集は石黒が行った。

6．遺物の整理・製図等に下記の方々の協力を得た。

研究調査補助員：平野昌子、田口雄一、杉山恭也

整理補助員：大迫慶子、大津洋子、大西多賀子、加藤美和子、神田善子、斉藤智可子、高山正美、野々垣裕美、穂波由枝、松田典子

7．報告書の作成にあたって、次の諸機関・諸氏の御教示・御協力を得た。

奈良国立文化財研究所、国立歴史民俗博物館、一宮市博物館、木曽川町教育委員会、（財）岐阜県文化財保護センター、三重県立埋蔵文化財センター、長野県埋蔵文化財センター、（社）石川県文化財協会、嬉野町教育委員会、一志町教育委員会、仙台市教育委員会、天理市教育委員会、（財）滋賀県文化財保護協会、名古屋市立見晴台考古資料館、愛知県清州貝殻山貝塚資料館、松本市立考古博物館、大町市教育委員会、静岡市立登呂遺跡博物館、仙台市富沢遺跡保存館

岩野見司、平川 南、早川万年、城ヶ谷和広、渡辺博人、尾野善裕、上村安生、深澤芳樹、土本典生、久保禎子、森 泰道、村木 誠、贄 元洋、鈴木 元、小竹森直子、伊庭 功、赤澤徳明、久田正弘、和気清章、伊勢野久好、松本洋明、青木勘時、藤田三郎、豆谷和之、禰宜田佳男、若林邦彦、秋山浩三、青木一男、町田勝則、臼井直之、直井雅尚、小林正春、島田哲男、鈴木敏則、中島郁夫、佐藤由紀男、石川日出志、松本 完、御堂島 正、黒沢 浩、西川修一、荒井 格、斎野裕彦

8．調査区の座標は建設省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠した。

9．出土遺物及び調査記録は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管している。

目次

Ⅰ 調査の概要　2／石黒立人

1．1994年度の調査 …… 2
2．1995年度の調査 …… 5

Ⅱ 遺跡の概要　8／石黒立人

1．地理的環境 …… 8
2．歴史的環境 …… 14

Ⅲ 調査の成果　18／石黒立人・小川芳範

1．遺構

A. 弥生時代 …… 18
B. 古墳時代 …… 23
C. 古代 …… 51
D. 中世 …… 76

2．遺物

A. 弥生時代 …… 82
B. 古墳時代 …… 84
C. 古代 …… 87
D. 中世 …… 88
E. その他 …… 89

（金属製品 …… 89／鈴木正貴・藤山誠一）

Ⅳ 分析

1．水田遺構について …… 108／石黒立人
2．弥生時代中期前葉の土器について …… 110／石黒立人
3．古墳時代初頭の土器について …… 114／石黒立人
4．統計的報告　—古代・中世— …… 129／小川芳範
5．門間沼遺跡出土の土師器把手について …… 146／田口雄一
6．微化石分析 …… 149／鬼頭　剛・(株) パリノ・サーベイ
7．花粉分析 …… 176／吉野道彦・堀木真美子
8．昆虫遺体分析 …… 177／森　勇一
9．脂肪酸分析 …… 185／鬼頭　剛
10．胎土分析 …… 191／永草康次

Ⅴ まとめにかえて

1．古墳時代の様相 …… 194／石黒立人
2．古代の様相 …… 199／石黒立人
3．中世の様相 …… 212／石黒立人
4．大毛沖と大毛池田、そして門間沼 …… 220／永井宏幸

論考

●古墳時代初頭の地域類型 …… 226／石黒立人
●粗製剥片石器の使用痕 …… 235／原田　幹
●門間沼遺跡における
古代・中世の鉄器生産を考える …… 248／鈴木正貴・蔭山誠一
●尾張北部における古代の開発をめぐる様相 …… 256／小川芳範

I

調査の概要

門間沼遺跡の調査は、１９９４年と１９９５年の２年間にわたって実施した。それぞれ各年度の概要を以下に述べる。全体的な作業工程は表１に示したとおりである。

１．１９９４年度の調査

A区

最初に調査の手をつけた地区である。水田耕土を重機によって剥ぐと、調査区の東部では基盤層と思われる黒色シルト層が露出し、西部では黒色シルト層上面に薄く灰色粘土層が堆積している部分があり、黒色シルト層上面に起伏のあることが窺われた。灰色粘土層中には中世前半期の遺物が含まれ、この層を切って斑土を埋土とする方形土坑が掘削されていることから、方形土坑が中世でも最終段階の遺構であることが確認できた。

方形土坑には２種類あって、大型で内部に円礫を含むもの（ＳＫ41・ＳＫ42）には埋没過程が認められ、しかも周囲には土盛りの痕跡さえあったので、埋め戻されなかったものであることがわかった。一方で、規模の小さいものの多くは内部が斑土で充填されており、短時間に埋め立てられていることがわかった。

ただ、それでも、埋土中に砂層が形成されていたことから、いち時に完全に埋め戻されたわけではなく、１、２回程度に分けて埋められたことが窺われた。

黒色シルト層上面を検出していくと、調査区北寄りで平行して走る何条もの溝が検出された。掘り下げると、意外なほど遺物は少なかったものの、古墳時代前半期まで遡る可能性は十分に考えられた。平行して走る何条もの溝はほとんどが掘り直しを受け、溝底部には掘削痕（鋤先痕？）が規則的に並んでいるのが認められた。調査区北西部では弧状に走る溝が検出され、円形墳の痕跡ではないかと思われた。実際掘削を進めると、身南部には開口部も検出でき、溝内から須恵器類が多く出土し、円形墳の残欠であることが確定した。

建物は古墳時代後半期に属す例を１棟（ＳＢ03）検出したにとどまった。柱穴は４本で、うち一つ（Ｐ01）に丸底甕が正立に据えられていた。

当調査区は全体に遺物量が少なく、集落とは離れているといった印象を受けた。

B区

状況的にはＡ区と大差はない。中世の遺構は溝・土坑にとどまったが、古墳時代後期では庇付掘立柱建物や井戸を検出した。しかし、建物が密集

図１・１　調査区位置図（1/5000）



する気配はなく、遺物が非常に少ない。生活域という雰囲気もないことから、これらの遺構は墳墓に伴う可能性が高いと調査当時には考えた。

C区

東西にａ・ｂの２小地区に区分して、まず西側のＣａ区から進めた。表土剥ぎ後の状況はＡ・Ｂ両区と全く異なり、調査区南北縁で一部に黒色シルト層が露出したにとどまったので、中央に大きな窪地があるのではという印象をもった。遺構精査を進めていくうちに、南北の黒色シルト縁辺ラインが平行しているようでもあったので、調査区中央付近には幅の広い溝（調査時には「ＳＤＩ」と呼称）のようなものがあるのではと考えた。全体にかなりの掘削量があるのではないかと予想したが、結局機械掘削は不適切であると考え、すべて手掘りで進めることにした。

中世遺構の検出面を調査区北部で一部露出した黒色シルト面に設定したので、調査区中央付近では中世包含層の上部を削ってしまうことになった。遺構精査中には、調査区北西部の黒色シルト層部分で下呂石のフレークやコアが多量に出土し、弥生時代前期の土器も出土したので当該期の集落跡が存在するかもしれないという思いを抱かせた。黒色シルト層上面では遺構の密度が極めて高いだけでなく、古式土師器も多量に出土したので、この調査区が古墳時代前半期における集落の中心部分ではないかと考えた。

中世遺構の調査終了後、中央部では検出面から機械的に20cm掘り下げて再び遺構検出を実施したところ、洪水層と考えられる黄灰色シルト上面で溝を検出した。内部から須恵器片が出土し、周辺からも５世紀末から６世紀代の須恵器が出土したので、当該期の遺構である可能性が高くなった。溝を掘り進めていくと愛知県下で初例となる板作りの琴が出土した。

「ＳＤＩ」を掘削し、それが人工の幅広い溝ではなく、実は浅い谷状を呈する自然の窪地であったことが確認できるまでに調査が進むと、この窪地の北よりに、逆に言えば北側の微高地の南縁に沿って、溝が掘削されていることがわかった。そして溝肩の斜面には古墳時代前期後半の土器が多量に廃棄されていた。

南側の微高地では前方後方形墳丘墓の周溝のような溝（ＳＤ17）を検出し、内部に多量の土器が廃棄されていたことから墳墓の検出が期待されたが、調査の進展によって建物の周囲（宅地？）を画す溝である可能性が高くなった。この溝の内側にもさらにＬ字状を呈する溝状の遺構があったが、調査を進めた結果それは溝ではなく、切り合い関係にある土坑が見かけ上連結したもの（ＳＸ01）であることがわかった。そのほか、ＳＤＩの南北縁にそって大形の円形土坑を多数検出した。

つまりこの部分は南北に展開する居住域の間の窪地であったということであり、そのように考えれば、当初やたら目についた大型で深い円形土坑群も、ただの廃棄用土坑というのではなく居住域縁辺に営まれた井戸である可能性が高い、というように急に具体的なイメージが湧いてきた。このイメージを頼りに門間沼遺跡を古墳時代集落として位置付け、そして最初の現地説明会を実施した。

このように、当初は人工的な遺構とみなしていた「ＳＤＩ」も、調査の結果自然地形であることが判明したのだが、じつはこの部分が廃棄空間である可能性が高くなってきた。しかしこの溝を調査していた期間は天候が不順で、しばしば滞水によって調査不能の事態が続出し、遺物の取り上げなどに支障をきたした。

その後の調査はセオリーどおり切り合いの新しいものから掘削を進め、最後にはようやく弥生時代中期の遺構にたどり着くことができたし、また円形土坑の一つから待望の丸太刳り抜きの井筒が検出されるに及び満足のいく結果を得ることもできた。とはいえ、居住域の縁辺であるという限界を超えるものではなかった。

東側Ｃｂ区の調査は一部Ｃａ区と



図１・２　門間沼94A区調査風景（西から）

平行して進めた。表土剥ぎ後の状況はＣａ区と全く異なっており、比較的遺構の展開も掴みやすかった。

まず、円礫を多量に含む中世の方形区画溝の掘削からはじめ、次に円形墳の周溝の検出を進めた。しかし、調査区南半の遺構検出面をやや下方に設定したために、南半分の周溝の上部を削り取ることになった。

円形墳は東西に２基（ＳＺ01・ＳＺ02）並んで検出した。東側円形墳の周溝内側のラインがはっきりせず、当初墳丘が早い時期に削平されたのかとも考えたが、精査を進めていくうちに、内側にも断続的に浅い溝が巡ることを確認し、２重周溝風であることが明らかになった。また、この円形墳に重複する中世溝内には大きなものも含んで円礫が多量に出土したことから内部主体に関係するのではという感触を得た。　周溝の掘削が進むうち、東側の円形墳（ＳＺ02）では溝内の数カ所で針葉樹の板が出土した。南側の開口部付近の板が最も長大なだけでなく、レベル的には板より上位ではあったが、各種須恵器が板の縁に沿うように並んで、一部は板の方へ傾斜して出土した。このことはわれわれに溝内埋葬の可能性が高いことを印象付けた。また、開口部付近では多量の木屑も出土し、何らかの木材加工が行われたことを窺わしめた。さらに開口部北側では丸太材が何本も倒れこんだ状態で出土した。

ところで、溝内埋葬については、周溝開口部の反対側、円形墳の北東側周溝内で検出された板や土坑もその可能性が高いと考え，土壌サンプルを採取して脂肪酸分析を行った。

２基の円形墳は周溝に特徴があった。自然堆積層の下部に斑土からなる整地層があり、その下の基底面には凹凸があった。凹凸は半月形のピットが規則的に並ぶもので、先に指摘した溝底の鋤先痕に共通するものである。

包含層の掘削を進めていくと、調査区北西部で複数の竪穴建物が検出されたが、良好な状態ではなかった。

円形墳の下部ではＣａ区から続く溝を検出した。同様に遺物の出土量も多かった。調査区東部では北東に折れて鍵状に向きを変えるが、ちょうどこの部分で平行する何条もの幅の狭い溝を検出した。内部には黒色シルトが堆積し、遺物はほとんど含まれていなかった。黒色シルトで埋まっていることから古い時期の所産であることが予想できたが、いっぽうで溝の屈曲とも関連があることから、Ｃａ区から続く溝が古墳時代集落の最古段階まで遡る可能性も出てきた。

Ｃａ区では集中して検出された円形土坑も、Ｃｂ区ではやや散漫な分布にとどまり、溝の南側では全く検出されなかった。このことから鍵状に屈曲する溝の北側が居住域として機能していたという結論に至った。また溝については、従来古墳時代の集落で溝を伴う明確な事例が無く、ランクにかかわる可能性があるのかどうかなどが検討課題として残った。

Ｄ区

調査区東端で比較的傾斜の強い微高地縁辺を検出したほかは、調査区のほとんどがやや低い平坦地であり、微高地以外のところでは、古墳時代前半期の水田の一部、古代の大型土坑を検出したにとどまった。集落の外部という印象が強く、墓域としての利用もまったく想定できる条件は無いと考えた。

図１・３　94Cb区
調査風景（東から）



２．１９９５年度の調査

A区

９４Ａ区の西に接する調査区で、門間沼遺跡で初めて確実に古墳時代に属す水田遺構を検出した。また古代の遺構群や中世の遺構群も検出でき、新しい展開の始まりを予想させた。

耕作土除去後に遺構精査を実施したところ、調査区西部では黒色シルト層が露出したのに対し、東部では黄灰色シルト層が広がり、地形が東に下降していることが窺えた。また、部分的に粗砂層の広がりも確認でき、遺構面は複数存在することも予想された。

調査はまず調査区全域で中世遺構の検出と掘削から進め、方形土坑群に続いて小区画の屋敷地を調査した。その後調査区東部を中心にして古代の調査に移り、粗砂を混じる粘土層の掘り下げを進めた結果、それが平安時代の堆積層（洪水層）であることが判明した。当該期は掘立柱建物が１棟検出できたにとどまり、遺構の密度が薄いので、集落の縁辺であるとの印象をもった。この段階で奈良時代の井戸を発見した。さらに下部に掘り進めていくと、竪穴建物が複数検出するにいたり、しかも出土した須恵器から７世紀代にまで遡ることが確実になった。

調査区西部では黒色シルト面での遺構検出を進めた。その結果、７世紀代を遡る掘立柱建物や竪穴建物、井戸等を検出した。これらは９４Ａ区につながるものである。この調査と並行して黒色シルト面の縁辺では帯状の高まりを認めたため、一部水田遺構の精査を始めた。黄灰色シルトを薄く剥いでいくと黒色の帯びが格子状に現れるといった状況で、小畔の検出は比較的容易であった。ただ複数の遺構面を同時に調査することは得策ではないと考え、３面目の遺構面として改めて調査することにした。

調査区全域にわたって黒色シルト面の精査を行ったところ、微高地の縁取りのように小区画水田を検出することができた。また大畔も把握でき、水田面の存在が確実になった。

この結果、門間沼遺跡の1995年度調査区は、中世で１面、古墳時代後期から古代で約１面、古墳時代前期相当で１面というように、複数面の調査が確実となり、当初計画の見直しが必要となった。調査上大きな困難を伴うことは明らかで、少しでも状況を改善するために、調査員配置の検討、表土剥ぎ以外での機械掘削の導入、機械図化面積の追加など、可能な対策を講じることとした。

水田測量後に黒色シルト面の掘削を行ったところＢ区にのびる断続する溝や土坑を検出した。遺物の出土はわずかであったが、弥生時代に属す可能性が高いと考えた。

B区

中世と古代が同一面での調査となりこれを上面、そして水田遺構を下面として２面の調査を実施した。農道と水路によって大小の小地区に区分された。

中世は方形土坑と細い溝、古代は平安時代に属す掘立柱建物、溝、井戸、飛鳥時代に属す竪穴建物、井戸等を、同一面で検出した。中世による削平が著しく、竪穴建物は深さが10cm程度しか遺存しておらず、カマドの残りもよくなかった。

上面調査の終了後に機械掘削で下面の検出に移り、古墳時代前期の水田遺構を全面で確認した。さらに上面で検出できなかった掘立柱建物も追加した。

水田遺構は小畦畔と大畦畔に限定され、水路は検出されなかった。大畦畔は高さ約10～20cmで遺存状態は良好で検出も容易であった。ところが小畦畔は高さが3cm程しかなく、完全に掘り下げるとかえってどれが小畔かわからなくなる可能性が高かったので、水田耕土直上までの掘削は行わず、黄灰色シルト面での小畦畔検出と測量に変更した。そして、耕土上面の標高を1枚あたり1点程度個別に測量し、あわせて土壌サンプルの採取を行った。

実際、梅雨時には調査区がしばしば冠水して検出面が不良になったので、こうした方法を今後の基本方針にした。水田遺構の検出・調査と維持は度重なる降雨に悩まされたが、門間沼遺跡では初めての成果であったので、Ａ区も含めて水田遺構を中心にして現地説明会を実施することにした。しかし、やはり降雨によって説明会の公式開催を断念せざるをえない状況に至ったことは、きわめて残念であった。

現地説明会の後に黒色シルト層を剥いで最下面の調査を行ったところ、Ａ区からのびる断続する溝を検出した。内部からは弥生Ⅳ期の細頸壺と粗製剥片石器が出土した。

C区

調査区の全域に中世遺構が展開。とりわけ北東部で井戸や柱穴が多数検出されたが、奈良時代の遺構群も同一面での検出となったために、掘立柱建物の認定には特に困難が伴った。古代の竪穴建物は比較的深さを保っており良好であったが、調査上のミスで十分には検出し得なかった。

一方下面はＢ区と同様に水田遺構であった。しかし、検出面には当時のものとは思われないような微妙な起伏があり、小畔も確実に検出できたとはいえない。しかし、平行する２条の大畔に挟まれた水路を検出できたことは注目すべき成果であった。

D区

Ｄ区は水路によって大小の小地区に分断された。中世は散漫で、古代は濃密であった。下面は古墳時代前期の水田遺構に加えて古墳時代前期後半から中期にかけての溝群（大毛池田遺跡の成果に照合するなら「上層水田」に関連する可能性が高い）、さらにそれらを切る自然流路もあり、新たな展開が見られた。

南のＤａ区は竪穴建物や掘立柱建物の重複が激しく、現代の廃材坑も

あって、遺構の輪郭の把握などに困難があった。Ｄｂ区では逆に古代の大溝が何条も走り、掘削土量には膨大なものがあった。ようやくＤｂ区にいたって大毛池田遺跡との関係が見えてきたと言えよう。

Ｄｂ区で検出された竪穴建物は少なかったが、大溝と重複するものがほとんどで、時期的な変遷を予想させた。大溝からの遺物の出土量は意外に少なかったので、遺構の切り合いに関する知見が最重要であった．下面はＤｂ区で水田遺構を切って錯綜する多数の溝とさらにそれらを切る自然流路が見つかったが、そのことはまた水田の検出を困難にした原因となった。多数の溝は平行しているものが多く、近い時期のものであることはわかったが、遺物の出土量がきわめて少なく、時期認定には苦慮した。

最下面では弥生時代中期前半代に遡る埋積谷を検出した。

E区

大毛池田遺跡の94KL区に南接する調査区で、門間沼遺跡というよりは大毛池田遺跡と言うにふさわしい。水路によって大小の小地区に細分された。上面はいずれも古代が中心で、下面は古墳時代前期水田であったが、Ｄｂ区と同様錯綜する溝が検出され、中面として認定した。

上面はＥａ区でＤｂ区から続く大溝群やそれに切られる竪穴建物群が検出された。Ｅｂ区では調査区中央付近で竪穴建物の集中する区域があり、また竪穴建物としてのプランは確認できなかったもののカマドも多数検出された。カマドのみの検出例が多かったのは、竪穴建物の深さが遺存状態が良くても約10cm程度というように、Ｂ区と同様に中世の削平が著しかったからである。そのほか、道状に平行する溝も検出できた。

中面は、Ｅａ区で鍵状に折れる複数の平行する溝が検出された。とくに屈曲部分にはシガラミが伴い、水田関係の遺構である可能性が考えられた。大毛池田遺跡の成果に対応させるなら上層水田ということになるのだが、確定できなかった。Ｅｂ区では調査区の南よりで古墳時代中期の竪穴建物群と井戸を、北東隅よりで重複する竪穴建物を検出した。南の一群は、雰囲気的には南東に同時期の居住域がありその縁辺といった印象を持ったが、北の一群は旧河道に近接した位置にあり、旧河道の変遷もからめて展開を想定する必要が考えられた。とくに前者は、竪穴建物群の位置が平行する溝群の東側で、鍵の手状に折れるのとは反対方向であることから水田の外側、つまり水田に隣接する居住域というイメージを与えた。

下面は水田遺構が展開し、大毛池田遺跡に接続した。ただ、調査区東壁寄りには展開せず、河道の推移が作用している可能性が考えられた。しかし、一方で中央微高地北側の小区画水田群は地形的な制約を強く受けているようで、それまでの整然とした(ように見えた)水田遺構との対比が印象的であった。この部分の小畦畔は比較的容易に検出できたのだが、微高地斜面にはＳ字甕Ｃ類が散乱しており、水田面が複数存在することとの関連も考えられた。実際に検出できた小畦畔のプランをみると、２面の水田遺構が重複しているようであり、やや検出を失敗したかもしれない。

水田測量後に黒色シルトを機械掘削した後に埋積谷の断ち割りを行い、弥生中期の壺片を得た。

（石黒立人）

図１・４　95B区上面・遺構検出状況（西から）



Ⅱ

遺跡の概要

1．地理的環境

門間沼遺跡は大毛池田遺跡の南西、大毛沖遺跡の西に隣接する。行政上は別の遺跡ということになってはいるが、時期によっては一連の遺跡と考えられる。とりわけ、大毛池田遺跡とは各時期を通して強い関係を有し、両遺跡への目配りがないと正しい把握は不可能である。

現在門間沼遺跡は濃尾平野の北部域、犬山扇状地の西端近辺に位置し、すぐ北には現木曽川の南派川が西流している。門間沼遺跡東方の犬山扇状地端部付近では、土地条件図によれば数多くの旧流路を認めることができるが、当遺跡付近になると旧地形の読み取りはかなり困難となっている。

門間沼遺跡付近の現地表標高は9～10mを測る。現状では水田や畑が展開する平坦地と化しているが、発掘調査によって最下部から黒色シルトに覆われた比較的起伏のある旧地表面が検出された。それがいつ形成されたのかは確定しないが、門間沼遺跡の北方に位置する北道手遺跡や田所遺跡の調査では弥生時代中期中葉までの遺物が出土し、大毛池田遺跡では弥生時代前期かやや遡る時期の遺物が出土している。また南方の西上免遺跡では突帯紋土器期にまで遡る遺物が出土し、当該期にはすでに形成されていたことがわかっている。門間沼遺跡でも黒色シルト層中から弥生時代前期の遺物が出土している。これらのことから、恐らく縄文時代晩期後半までには一部の地区で黒色シルト層が形成されていたものと推定される。

おそらく、森勇一氏が述べているように、濃尾平野北部において人間活動に関わる地表面の最初のものをこの黒色シルト層上面に求めることができるであろう。

しかし、現状では埋没地形であり、地表面観察によって、そして土地条件図によって読み取ることも困難である。

これら黒色シルト層上面の状況を門間沼遺跡で観察すると、'94調査区全体に展開し一部９５Ａ区に及ぶ北北西･南南西方向の比較的浅い谷、９５Ｄ区の西北西・南南西方向の流木を含んだ深い谷、９５Ｅ区の北北東･南南西方向の大きな谷、大毛池田遺跡と大毛沖遺跡の間に検出された旧河道などからみて、大きくは犬山扇状地の傾斜方向に対応して北東･南西方向に開析した主埋積谷と、それに直行して微高地を分断する比較的深い埋積谷、その間をうめる細波のような谷から形成された、意外にも変化に富んだ起伏によって構成されている。主埋積谷は古墳時代後半期以降には河道化して、７世紀代には大毛池田遺跡の東部を攻撃面として大きく抉るにいたっている。

古墳時代前期の水田遺構は、このような微妙な起伏が比較的少ない主埋積谷への緩やかな傾斜面に造成されている。詳しくは遺構解説で触れるのでこれ以上述べないが、旧地表面の把握が極めて重要である点をここで確認しておきたい。

黒色シルト層は大毛沖遺跡の方向に向かって下降している。大毛沖遺跡は７世紀代前半まではほぼ全域が旧河道となっている。それ以前がどうであったかという知見は得られていないが、主埋積谷の流路は弥生時代まで遡る可能性はある。この点で９５Ｅ区で検出された北東・南西方向の小微高地に沿う弥生時代中期の流路が重要である。この流路は幅約8mと決して大きくはないが、深さは約1.5mを測る。基底部の標高は約6mで、同じ９５Ｅ区の黒色シルト最高所からは２mも下がっている。このように流路はかなり深く下刻している。そ

して流路下部の堆積層には粗砂とともに5cm程度の大きさのシルトブロックが多量に含まれており、速い水流が流路壁面を崩落させ、そして細かく砕いていったことが窺える。全体の地形から見て９５Ｅ区が比較的高位に相当していることからいえば、さらに低位の東部に同様の流路が、さらに規模を大きくして存在する可能性は高いであろう。

さて、古墳時代前期まではこのように起伏に富んだ地形も古墳時代中期以降には度重なる洪水によって平準化が進行し、古代にほぼ平坦化したと考えられる。しかし、それでも明治の地籍図から読み取れるように、門間沼遺跡と大毛沖遺跡の間には旧河道が低地として残っていた。それが最終的に消滅したのは昭和40年代に区画整理が実施されるときであった。

地形の変遷は、自然過程においては意外に中世以降の古地形が痕跡として残っており、人間の手が加えられてもそれほど大きく変わることはなかった。やはり、最近の高度成長期における改変がまったく地貌を変えてしまい、われわれを過去から切り離してしまったといえる。

（石黒立人）

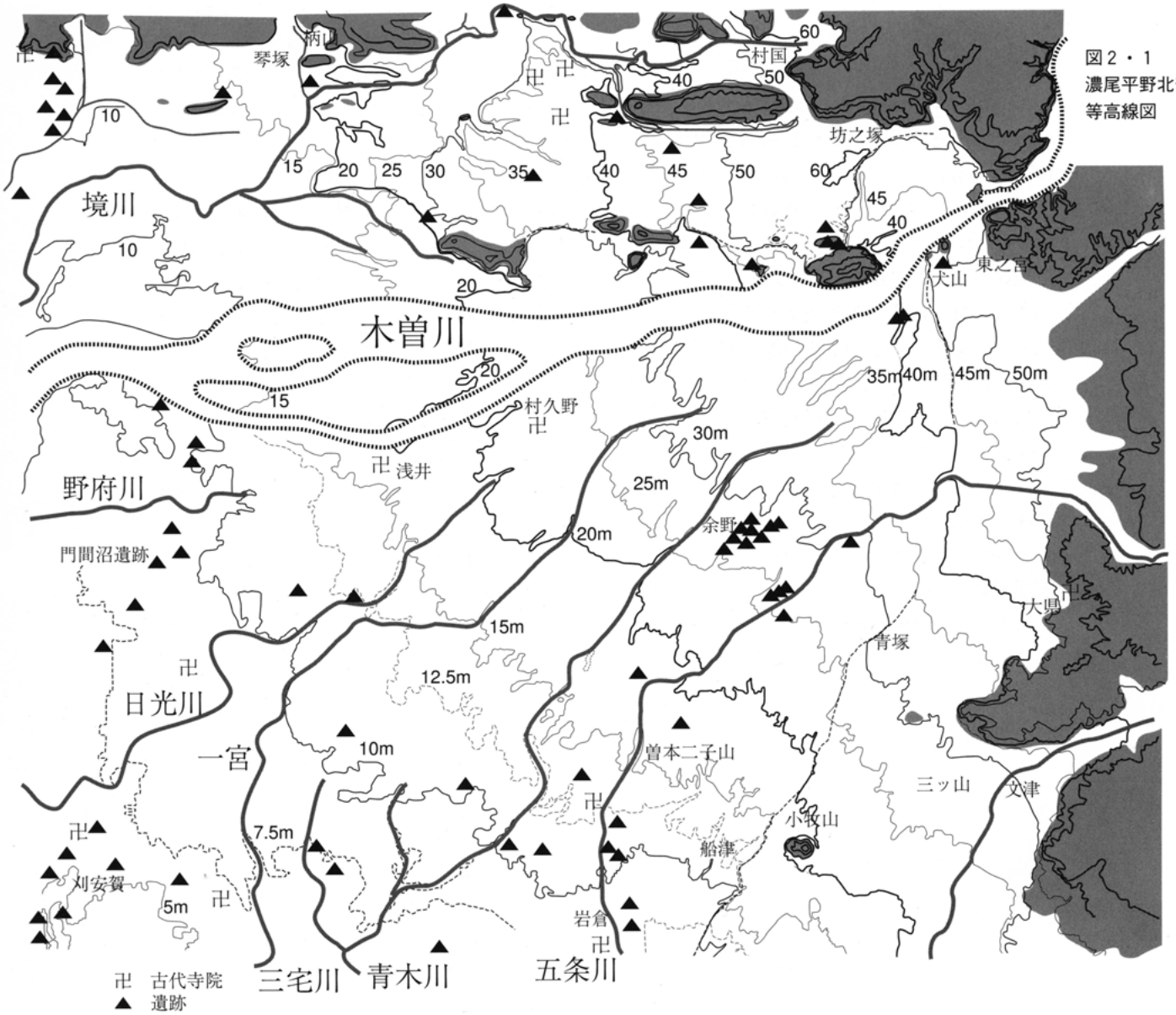


図２・１
濃尾平野北部
等高線図

図２・２　門間沼遺跡位置図（1/25000）



Y：弥生　D：古代
K：古墳　C：中世



木曽川
松倉町
小網町
北山町
渡町
川島町
松原町
河田町
竹早町
光明寺緑地
サイクリング道路
光明寺
極楽寺
黒岩
黒岩廃寺
宮田町
浅井古墳群
氏神東（D）
奥屋敷（D）
東高見（D）
後飛保町
河野町
清郷（D）
大日比野
大塚（D）
藤塚古墳
大毛沖
高田（C）
瓦ケ野（D）
宮前（D）
浅井神社古墳
前田（D）
富塚（Y）
富塚古墳
森下（Y）
東浅井
西浅井
四日市場
佐千原
丹羽
西島
時之島
北神明町
小栗町
松山町
西大海道



図2・3　濃尾平野北部の地形と遺跡


福塚前
目久井
卍
神戸廃寺
西上免
東新規道
15m
10m
一宮
毛受城
5m
5m
八王子
薬師堂跡
卍
北川田
刈安賀城
山中
5m
下り松
卍
妙興寺
5m
萩原遺跡群
中島廃寺
卍
佐野
平松
馬見塚
弥勒
三ツ井
伝法寺廃寺卍

2．歴史的環境

門間沼遺跡の年代は、A期：縄文時代晩期～弥生時代中期、B期：弥生時代後期末～古墳時代中期、C期：古墳時代後期、D期：古代前半期、E期：古代後半期、F期：中世の6期に区分できる。この区分に対応させて概観してみよう。

A期

濃尾平野北部における遺跡分布は縄文時代晩期から密度が上昇し始め、弥生時代中期になって見かけ上の分布は安定する。東海北陸自動車道関係で調査された諸遺跡でもおおむね弥生時代中期中葉までの遺物が散発的ではあるものの出土しており、その頻度には一種驚きにも似た印象を持つ。

ところが実際に遺跡の中身という点になると、ほとんどの遺跡は遺物の散布地といった程度であり、確実な定住を示す遺構は未検出なのである。

たとえば、東新規道遺跡では石鏃と粗製剥片石器が出土しているにもかかわらず土器の出土がみられず、集落の存在を想定する条件にはない。西上免遺跡でも石鏃・打製石斧・粗製剥片石器や土器にとどまらず下呂石の石核・剥片が出土しており石器製作の痕跡が認められる点で東新規道遺跡に比べて生活感を強く残す遺跡といえるが、それでも遺構となると土坑に限定され、竪穴建物などは検出されていない。

こうした状況は門間沼遺跡も同様であり、見かけ上の分布密度の上昇が実質的な集落増を意味していないのである。

ところで、貧弱ながら分布するこれら遺跡群の状況で共通しているのは、黒色シルト層を中心に遺物が出土していることである。黒ボクではないものの有機分の濃い層位であり、こうした環境に遺跡が営まれるという点では、濃尾平野南部の朝日遺跡や月縄手遺跡でも同様である。有機分の起源に関してははっきりしないものの、人為的である可能性は高い。

微高地上の黒色シルトである点で、凹地などでみられるような、植物遺体などが集積され、それが分解して有機質の濃い層位が形成されるのとは異なるわけで、単に植生起源とかたづけるわけにはいかないだろう。少なくともなんらかの人間活動の痕跡が残るところで形成される傾向にあるようだ。この点について、今回の門間沼遺跡の調査では重要な成果を得ることができた。

現木曽川を挟んだ岐阜県から愛知県にかけての濃尾平野北部地域における弥生集落の動向はいったいどのようなものなのか、現木曽川下に埋没している遺跡も含めて、その解明についてはますます課題が増えているといった状況である。

B期

門間沼遺跡の主要な時期のひとつである。おおむね'94調査区は集落域、'95調査区は水田域となり、大毛池田遺跡に連続する。東海北陸自動車道関係でも北道手遺跡、八王子遺跡、西上免遺跡などがほぼ同時期であり、一宮市域ではほかにも多くの遺跡が知られている。とりわけ西上免遺跡では前方後方墳が検出され話題をさらったことは記憶に新しい。

この時期前半の水田域はかなり広いようで、西上免遺跡、山中遺跡で検出されている水田もほぼ同時期であると考えられる。大毛池田遺跡では同時期の水田が埋没した後に新たに上層水田が開発されたことが調査によって明らかにされ、水田全体の面積縮小と1枚あたりの水田区画（小区画）の拡大が確認されている。水田面積の変化が単位生

産量の変化に連動しているのかどうか、あるいは単に地形変化による水準の変動、あるいは復旧作業の進捗度に過ぎないのか、課題は残っている。

後半期は濃尾平野北部でも集落の動向がよくわかっていない。古墳時代論が墳墓の展開によって語られてきた経緯のなか、墳墓が比較的よく把握されているのとは対照的である。

門間沼遺跡では'94調査区に加え、新たに９５C・D区で集落の縁辺を調査している。９５D区では井戸も検出されている。大毛池田遺跡においても水田域の一角に井戸を伴う区域があり、集落とまではいかないが、何らかの活動の痕跡が認められている。

C期

古墳時代後期には'94調査区で掘立柱建物・井戸と重複して墳墓が検出されている。集落と墳墓が隣接して共存しているのかどうは微妙な時間差に関係し難しいところであるが、集落縁辺の状況を示している可能性はある。

墳墓については、大毛池田遺跡でも円形墳の残欠が検出されており、比較的まばらに点在している様相が窺える。門間沼遺跡周辺では、門間古墳などいくつか墳墓の存在が知られているが、それらはこうした点在する墳墓群の中でも大型のものが削平を免れて後世にまでのこったものかもしれない。したがって、地下にははるかに多くの中小規模の墳墓が－もちろん多くは痕跡であろうが－眠っているといえる。

この時期には大毛池田遺跡や大毛沖遺跡では集落としての様相が薄く、集落部分は門間沼遺跡に限定される。田所遺跡では新しく水田跡が発見されており、古墳時代前期までの水田は埋没したまま再開発されなかったようだ。

洪水の繰り返しによって自然堤防が新しく形成され水田はその下に埋没し、逆にかつての微高地が低地化になるという、地表面の逆転現象がこの時期に大きく進行した可能性が高い。

D期

７世紀代は濃密な集落の時代となる。大毛池田・沖両遺跡では同時期の集落が検出されており、主要な時期の一つである。とりわけ７世紀後葉には、大毛池田遺跡から連続して大溝群が掘削されていることが注目される。ほぼ河道に平行していること、河道の攻撃面に相当することなどから、治水に関連する可能性も言われているが、実態は不明である。

また、大溝掘削に際して居住域の移動が行われているようであり、周辺地区の土地利用に大きな変化が起きている。

この時期は浅井古墳群の主要な時期に相当し、新しい集落の展開と無関係ではない可能性がある。とくに７世紀代後半期には「壬申の乱」という古代史上のエポックもあり、門間沼遺跡の西方にある「村久野」という地名を冠する地区や黒岩廃寺はその立役者であった村國氏に関係すると言われている。一地域の動向にとどまらない、時代的な変化に連動しているとでもいえるのであろうか。

E期

９５A区では９世紀から１０世紀代にかけて時期的に空白期を挟みながら居住域が展開している。大毛沖遺跡や田所遺跡でも集落が見つかっているが、一方で洪水の頻発した時期でもあることが文献から知られる。実際、自然流路の形成が活発で、堆積層にもこの時期に関係しそうなものがある。

F期

中世は、前半の散居村から後半の集村への移行が当地方での全体的な趨勢のようであり、大毛池田遺跡では１５世紀代の集村の中核となる居館が

検出されている。いっぽう、時期的に先行する田所遺跡では集落の外縁を画すと考えられる大溝が検出され、集村の先行形態ではないかと話題になったものの、その性格を決定するまでには至っていないようだ。しかし、同時に塚墓および墳墓堂も検出されており、現田所集落を中心とする区域に在地勢力の拠点が存在したことは間違いないと思われる。

中世の集落形態については、集落全域が調査された例がほぼ皆無であり、凝集域と散在域の空間的様相について確たる情報が無く、果たして集村化への動きが全域的であったのか、けっして明確ではない。調査の偶然性、つまり調査地点の個性が反映されている可能性もなお残っており、今後解明すべき重要な課題である。

大毛沖遺跡では畑作害虫遺体の集中出土などもあり、周辺での濃密な畠の展開が想定された。門間沼遺跡ではそうした事例は欠いたものの、屋敷地の区画としては軸線が不明瞭な溝群が多数あり、それが方形土坑と重複する例の多いことから区画であると考えて畠の展開を想定した。

おそらく地籍図に見られる水田景観もけっして古くまで遡るものではないだろう。基本的に近世以降のものであり、それ以前は畠の発達した地域であったと考えられる。

（石黒立人）

Ⅲ

調査の成果

1．遺　構

概観

弥生時代の遺構・遺物は全体に占める割合が極めて低い。こうした点は歴史的環境に記したように濃尾平野北部域では通常のようであり、とくに注目すべき点というわけはなさそうだ。しかし、今回の調査では弥生前期から中期にかけての土器編年上重要な資料が出土し、また石器についても時期が限定できるなど、いちおうの成果を得ることはできた。

さて、以下記述を進めるにあたっては、年代区分についてはⅠ期からⅤ期の５区分を採用する。なお、Ⅴ期の新しい段階については記載の都合で、古墳時代に含めた遺物があることをここで断っておきたい。

A．弥生時代

弥生Ⅱ期およびⅣ期を主とする。

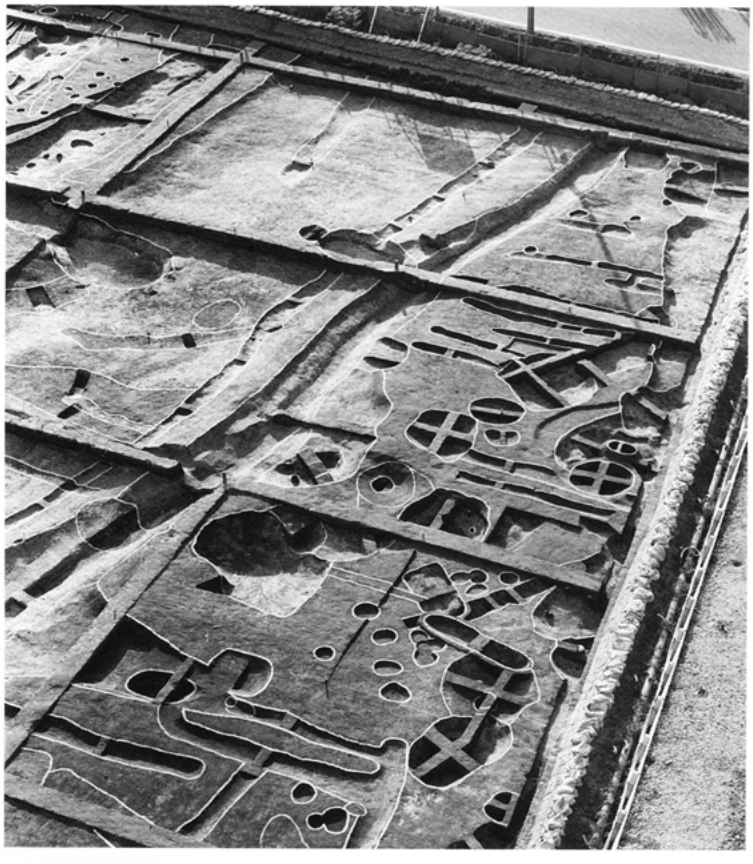
９４Ｃ区

（１）土坑

ＳＫ01：不整形な舟形プランで、検出時の深さは約5cmであった。弥生中期初頭に属す土器や石器片が比較的まとまって出土した。

ＳＫ02はプランが舟形を呈する土坑で検出時の深さは約40cmであった。下部には炭化物を含む灰白色砂質シルトがラミナを形成し、上部は黒色シルトが堆積。弥生中期初頭に属す土器や石器が比較的まとまって出土した。

図３・１　94Ca区北西部石器集中地区の近景（北東から）



９５Ａ区

（１）溝

ＳＤ01・02：ＳＤ01は攪乱坑下から検出されたために、本来の形状は不明。ＳＤ02とは接続せず、陸橋部を残す。環濠に類似した形態を呈するが、詳細は不明である。

ＳＸＩ：確実に溝状を呈するのは９５Ａ区西端のＳＤ03および９５Ｂ区のＳＤ01～ＳＤ05である。しかしその間には溝の走向に一致するかのように土坑が点在する。また溝中にも深くなって土坑状を呈する部分がいくつかみられることから、これらが一連のものである可能性が高いと考えた。実際のところ、調査時には黒色シルト上面での確認はできず、その下部での検出であったので、黒色シルト層中では溝として連結していた可能性もあり、個

図３・２　94C 区弥生時代の遺構（1/500）

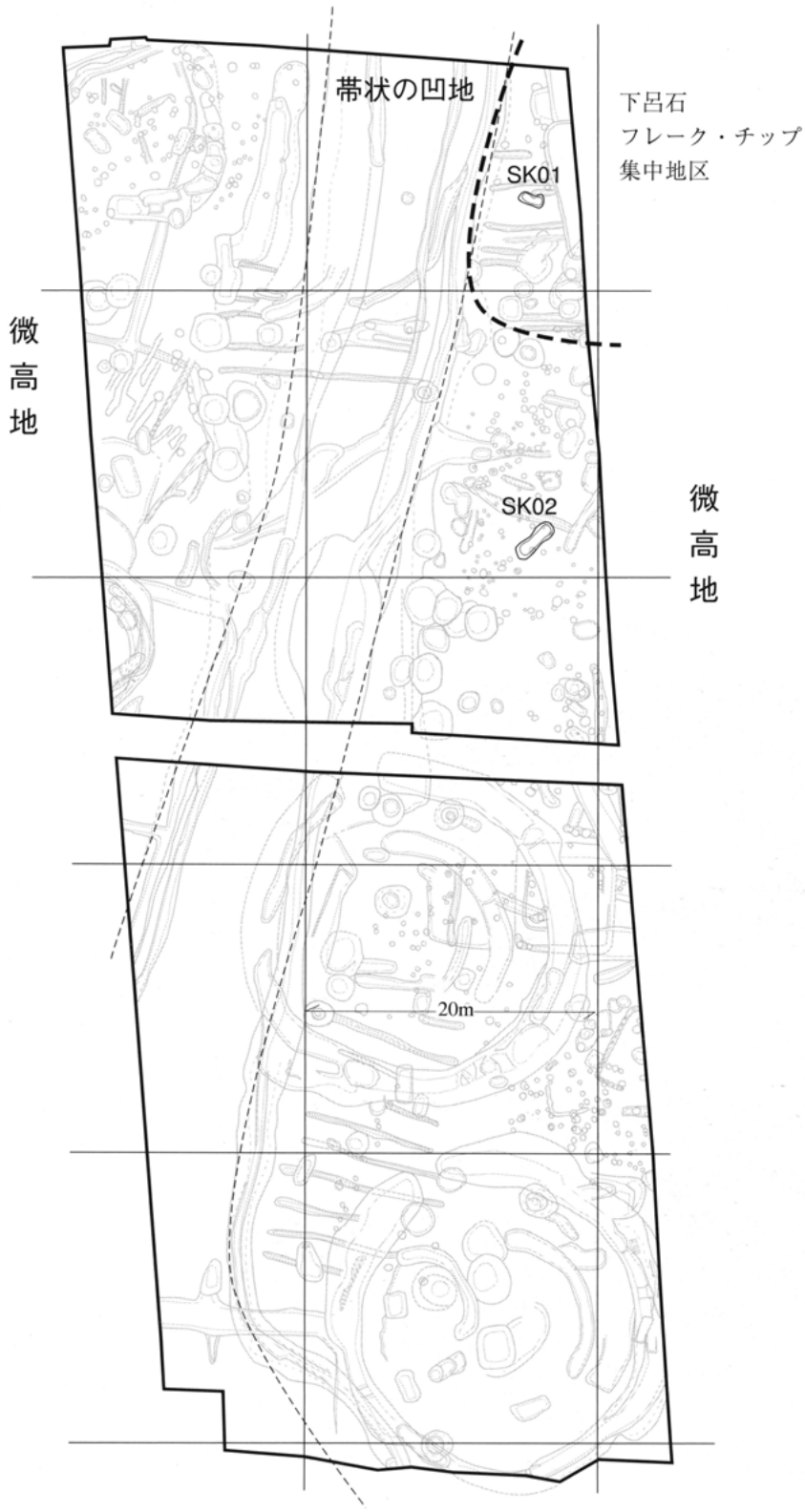
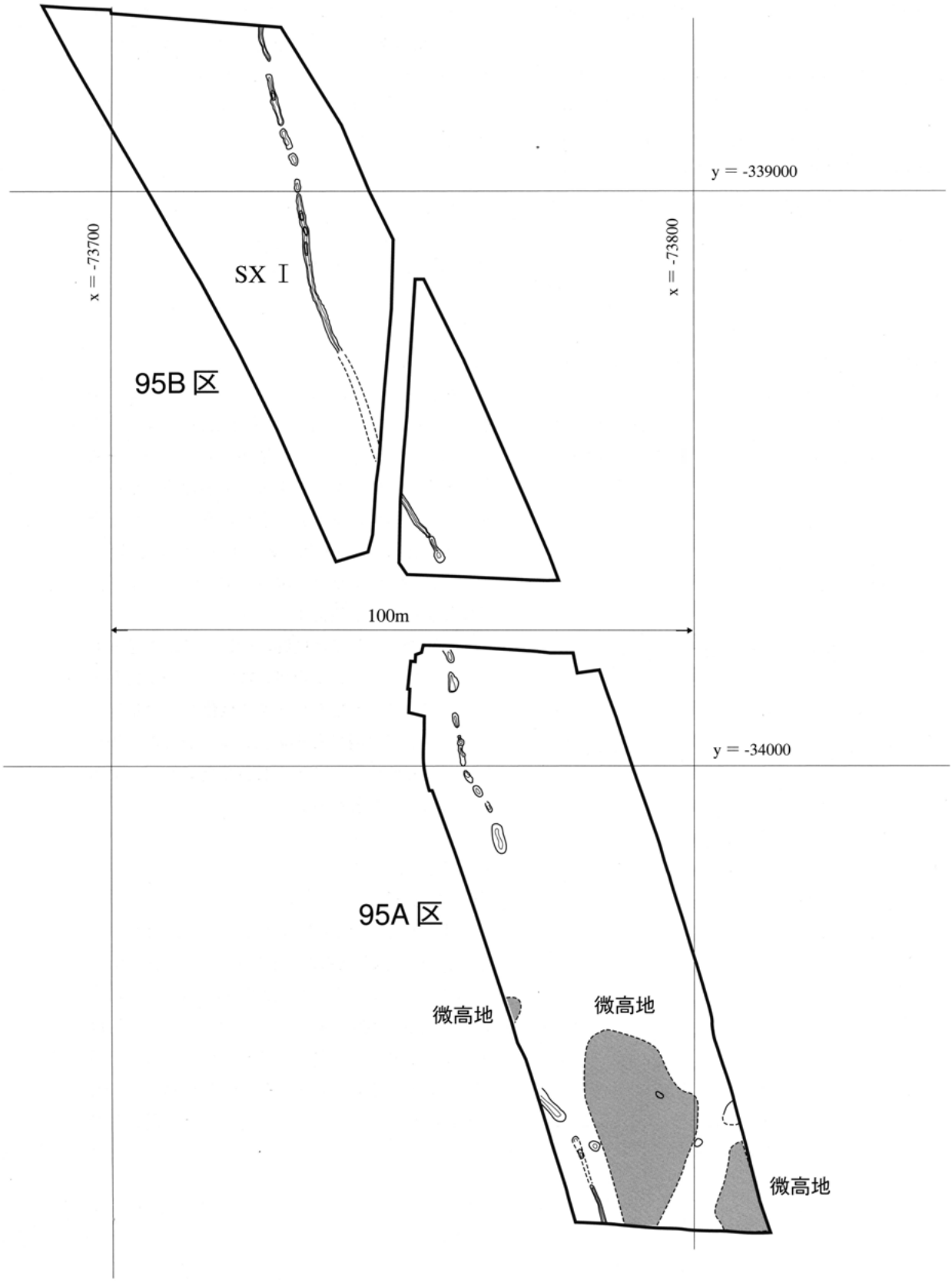


図３・３　弥生Ⅳ期の遺構（1/1000）



別名称とは別に全体として遺構名を付すことにした。

年代については、古墳時代前期の大畦畔と微妙に重複していることから時期が下がる可能性も考えられたが、検出された古墳時代の溝にまったく共通したものが無いこと、弥生Ⅳ期の壺や組成剥片石器が出土したことから、弥生時代の遺構と認定した。

（1）土坑

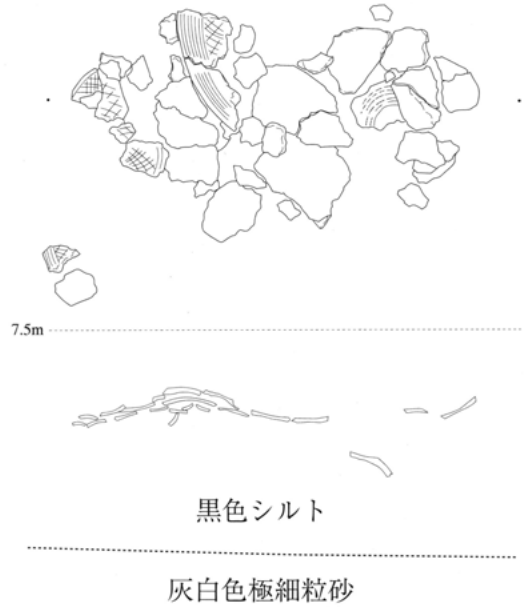
ＳＫ01：ＳＸＩを構成する土坑に類似しているが、想定される軸線からはずれている。2段掘りで、深さは90cmと深い。

ＳＫ02：検出時の深さは約15cmで、小規模で浅い土坑である。弥生Ⅱ期の土器や石器が出土した。

９５Ｂ区

（1）溝

図３・４　95A区弥生土器出土状態



ＳＸＩ：ＳＤ01は西端で大型の土坑状を呈する。ＳＤ02は安定した溝状を呈し、規模は幅60cm、深さ20cmほどである。この形状を基本形として、東部では土坑が複合する。９５Ａ区ではこの部分をつかめなかったのであろう。

９５Ｃ区

遺構は検出されなかったが、下呂石の剥片や粗製剥片石器が出土している。

９５Ｄ区

（1）谷地形

埋積谷Ⅰ：西北西から東南東に走る谷で、幅約９ｍ、深さ約２ｍ、底面標高は5.6ｍを測る。遺物の出土はなく、流木の堆積が認められた。堆積層は大きく２層に区分できる。上部は黒色から暗灰色を呈するシルトの薄い層が累重し、炭化物層を３層ほど挟む。下部は粗砂、摩滅した植物遺体・木片、シルトブロックの混ざりで、流水による活発な侵食と堆積が窺える。

炭化物層は下部では植物の形質が確認できるものの、上部にいくにしたがい粒状化・細粒化が進み、最終的には黒色シルト層に変化している。

遺跡周辺基盤層である黒色シルト層との関係も考えられるが、そうであるなら黒色シルトの成因は人為的なものとなる。

９５Ｅ区

（1）谷地形

埋積谷Ⅱ：北東から南東に走る谷で、幅7.5ｍ、深さ1.5ｍ、底面標高6.0ｍを測る。９５Ｅ区北壁東部では、さらに下部に底面標高が5.8ｍ以下にまで下る埋積谷の存在を認めた。埋積谷の堆積層は３層に分かれる。上層は黒色有機質（いわゆる泥炭）シルト層で炭化物を含み、中層は植物遺体層、下部は粗砂と拳大のシルトブロックとの混ざりで

流木を含む。そして、中層からは弥生Ⅲ期後半に属す三河系（瓜郷式）壺の下部が出土した。

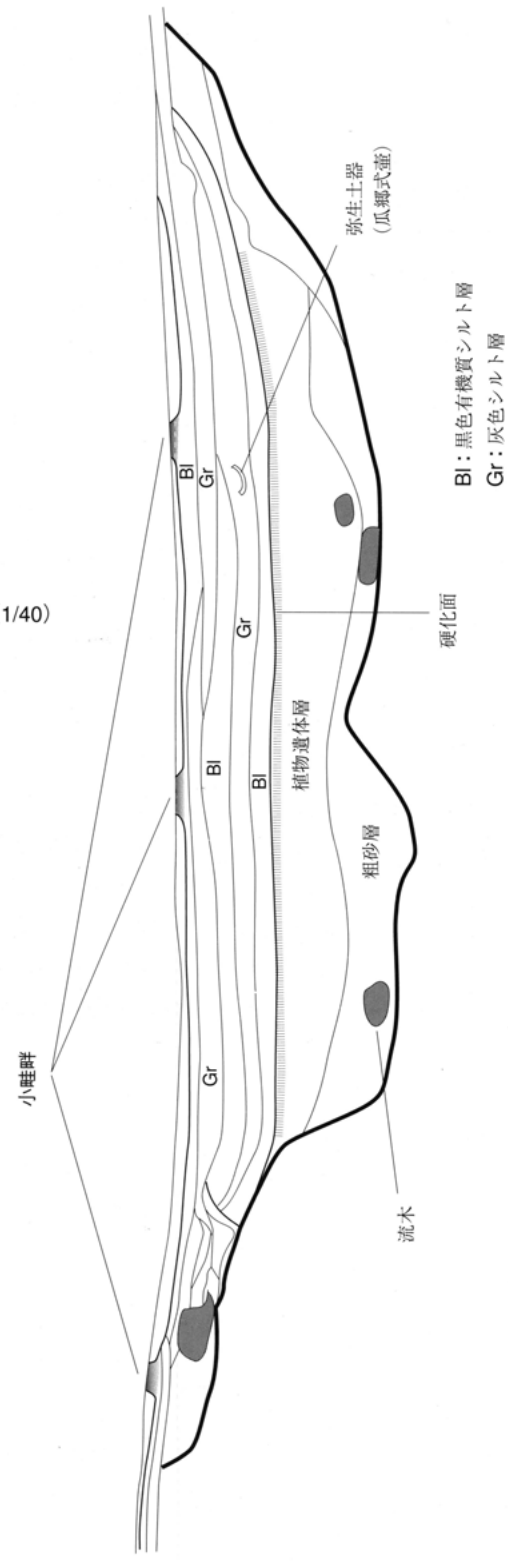


図3・5　埋積谷Ⅱ
土層セクション（1/40）

B．古墳時代

概観

古墳時代の区分には、２期区分、３期区分などいくつかの区分法があるが、本書では遺構の記載に際しては、須恵器及び宇田形甕の出現・盛行を指標に、Ⅰ期とⅡ期に２分する。

Ⅰ期については次のように５区分する。

x期：在地甕を主とする。
a期：Ｓ字甕Ａ類を主とする。
b期：Ｓ字甕Ｂ類を主とする。
c期：Ｓ字甕Ｃ類を主とする。
d期：Ｓ字甕Ｄ類を主とする。

Ⅱ期については次のように２分する。

a期：宇田甕を中心として、須恵器が出現していない段階。
b期：須恵器および口縁端部つまみ上げ丸底甕が出現する段階。

いうまでもないことであるが、土器を指標にしているとはいえ、上記の区分はあくまで遺構の記載に関係するものであり、土器の年代区分と単純に一致するものではない。その点については後論を参照。

遺構・遺物の展開では、Ⅰ期は'94調査区がおおむね集落の時期と言え、とりわけ９４Ｃ区への集中度が高い。それは極めて明確な輪郭をもち、ある意味で特異であるとさえ言えよう。同時期に'95調査区はほぼ全域が水田域となっている。

Ⅱ期は、'94調査区で生活感が喪失し、墳墓の様相が強まる。しかし、一般的な集落ではないものの、掘立柱建物・井戸の展開や鍛冶関係関連遺物の出土が認められるというように、特殊な居住区といった様相も窺われる。'95調査区はⅡ期には竪穴建物が散在し、同時期の確実な水田跡は未確認だが、上層水田の終末がかかる可能性もあり、水田地帯に点在する居住区といった感じであろうか。

いずれにしても、９４Ｄ区東端から９４Ｃ区西半部への遺構・遺物の集中度が極めて高いことは、相対的というより絶対的でさえあり、後にまた論じることになろう。

Ⅰ期

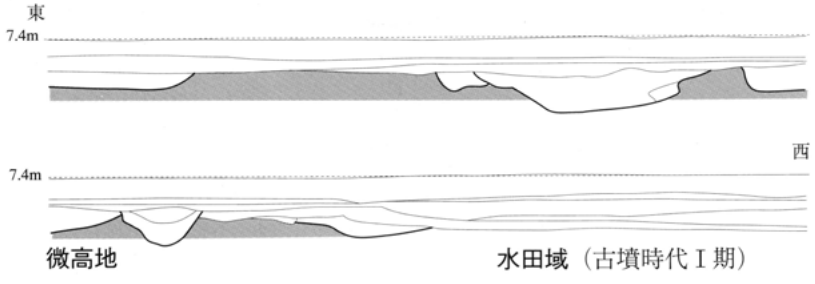
９４Ｄ区

概観　古墳時代の遺構は、調査区東端付近の微高地上で溝や土坑が、西に広がる低地部で水田跡の一部がそれぞれ検出された。前者は９４Ｃ区から続く集落関係の遺構と考えられるが、何分にもほんの一部がかかったのみで、遺構の性格を決定付ける資料には欠ける。

（１）溝

ＳＤ01：ＳＤ02と重複する。鍵の手状に屈折し、一見前方後方形を呈するが方形周溝墓であるとの確証は得られていない。むしろ建物を区画す

図３・６　94D区南壁東部土層セクション（1/80）



る溝の可能性が高い。c期。

ＳＤ02:円弧をなし微高地の上部をめぐる。c期。

ＳＤ03:微高地の裾をめぐる幅約60cmの浅い溝で、層位的にはＳＤ18より古い。水田関係である可能性が考えられる。b期以前。

（2）土坑

ＳＫ01：一見大型の土坑状であるが、堆積層はラミナが発達し砂層もかむことから、９４Ｃ区から続くＳＤＩの一部である可能性も高い。

（3）水田

微高地西端の軸線に一致した方位で、長方形の小区画が展開する。大畦畔は検出されていない。

９４Ｃ区

概観

古墳時代前半期を主とする集落の中心部分で、用水で区分された西半部への集中度がきわめて高かった。地形的には、南北の微高地と間の窪地部分に大別できる。

（1）竪穴建物

ＳＢ01：９４Ｃ区南西隅に位置する。西辺と南辺の周溝、主柱穴を４本検出した。北辺と東辺はＳＸ01・02に区画されている。x期？。

ＳＢ02：９４Ｃ区西部に位置する。西辺で掘形の一部、北・東・南の各辺で周溝を検出したが主柱穴は確定しない。北西隅では床面下で幅広の周溝状掘形を検出した。c期。

ＳＢ03：ＳＢ02の真南に位置する。東・南辺の掘形下部を検出し、方位はＳＢ02に一致し、ほぼ正方形のプランを呈する。主柱穴は２間×２間の８本。東西の中央柱は近接棟持柱風に軸線よりわずかに外に位置している。竪穴建物ではなく平地式であった可能性がある。c期。

ＳＢ04：ＳＢ02の東に位置し、軸線は異なる。南・東の周溝および、礎板をもつ柱穴を検出した。c期。

ＳＢ05：ＳＢ04と重複するが、先後関係は不明。北・東・南の各辺と西辺の一部で周溝を検出した。主柱穴は不確定。c期。

（2）掘立柱建物

ＳＢ06：ＳＢ01の北に隣接する。主柱穴は２間×２間の８本で、南に庇をもつ。南辺中央の柱は軸線から南にずれている。c期。

ＳＢ07：ＳＢ13と重複。主柱穴は１間×３間の８本で、やや台形状の配置である。東西が梁間とするとかなり間があく。

ＳＢ08：ＳＢ07の東に位置する。近接棟持柱をもつ２間×３間。

ＳＢ09：主柱穴は１間×２間の６本。無理やり認定した感もある。d期。

ＳＢ10：ＳＢ04に近接する。プランはＳＢ07と同様で、主柱穴は１間×３間の８本。

ＳＢ11：ＳＢ05と重複。主柱穴は１間×１間の４本。柱配置がやや長方形であり、竪穴建物の痕跡の可能性もある。

ＳＢ12：９４Ｃ区では唯一柱痕が残存。主柱穴は１間×１間の４本で、配置は正方形である。c期か。

（3）柵

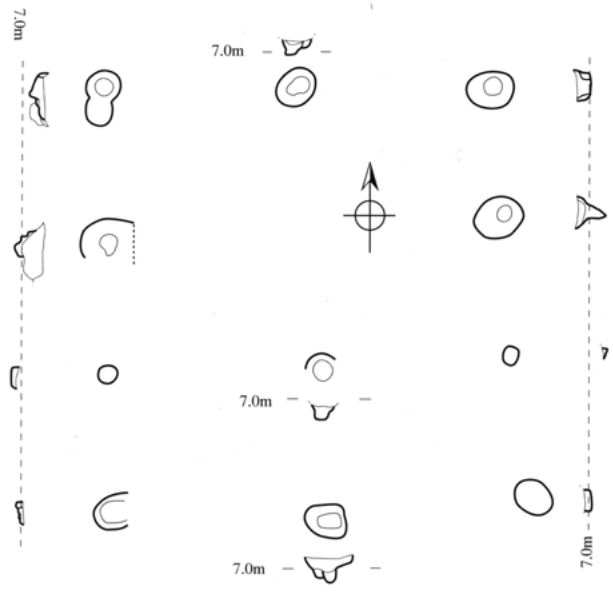
ＳＡ01：９４Ｃ区で１例検出した。畝状の溝群と重複するが、先後関係は不明。検出順序から言えば先行することになるが。方位からいえば、b期以前ということになろう。

（4）井戸

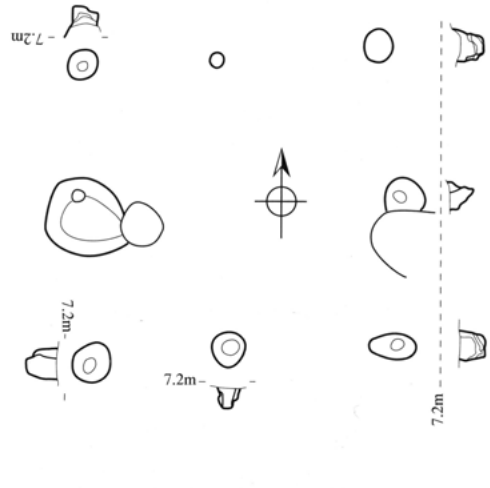
本遺跡では、開口部上端の径が1m以上で、断

図３・７　94C 区掘立柱建物プラン・セクション

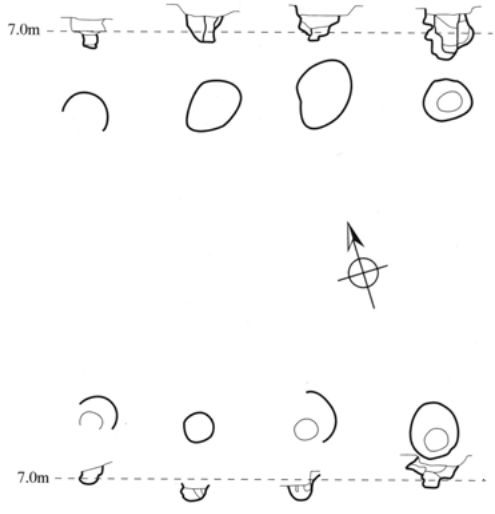
SB06　1/80



SB03　1/80



SB07　1/80



SB12　1/40

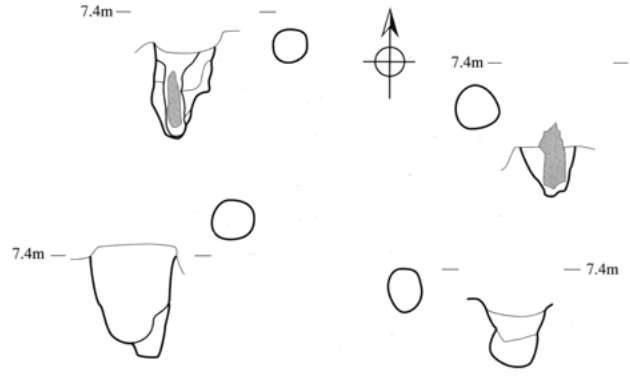
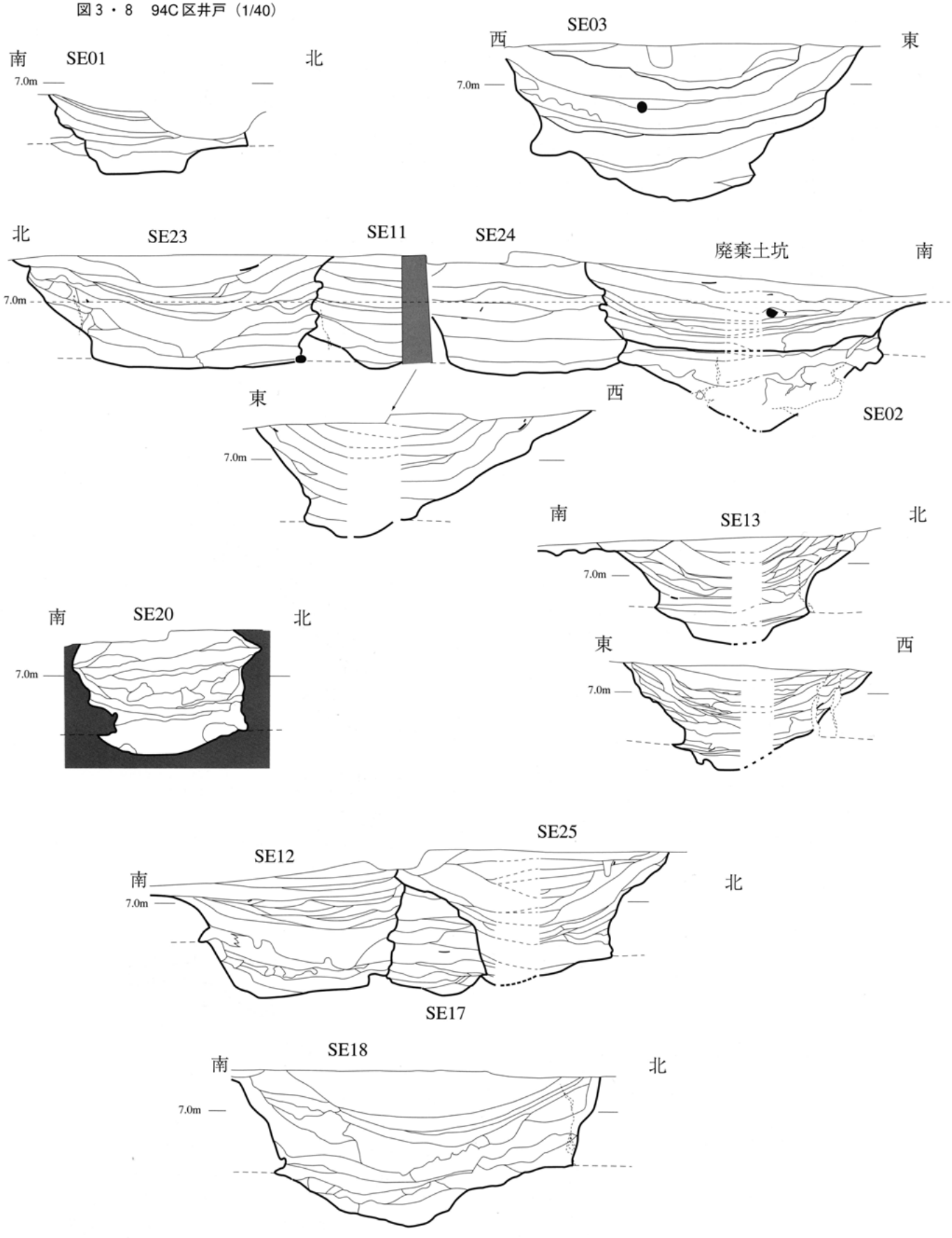


図３・８　94C区井戸（1/40）

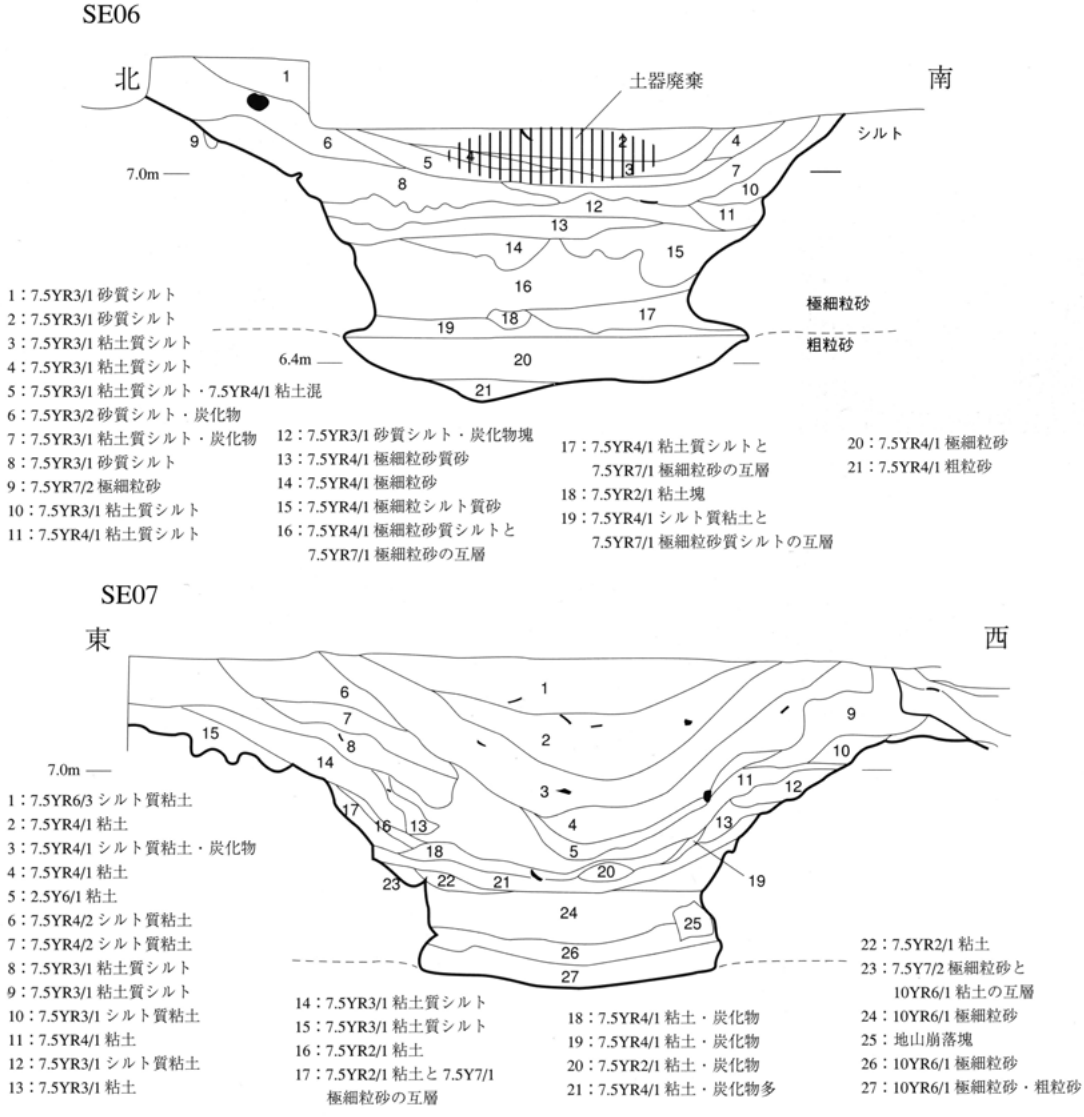


面をみると上部が擂鉢状もしくは逆台形、そして下部が円筒状、あるいはより典型的にはロート状をなし、そして深さのある大型円形土坑が多数検出されている。それらについては調査時には井戸の疑いを持ちつつも土坑として扱った。しかし、そのなかで唯一井筒を遺存した例（ＳＥ10）があり、それを検出した段階で疑いは決定的となった。

すなわち、その掘形の属性を検討すると、底面標高が6.5m以下で、基盤下部の粗砂層に達するまで掘り抜かれていること、壁面が粗砂層付近では下部の粗砂層側が大きく抉れて上部のシルト層がオーバーハングするなどしているものがあること、下部壁面は垂直に近いことなどの共通性がみられた。とりあえず井戸としての機能、つまり湧水層にまで掘り抜かれている点を共通項として、土坑底が6.5m以下のものを本来は構造物を有した井戸跡であると認定することにした。

しかし、そのいっぽうで、径が1m以下で円筒形を呈するものがあり、しかも底面が粗砂層にまで達している例もある。はたしてそれらが素掘り井戸でなかったとは断定できないが、記載上は土坑に含めることにする。

図３・９　94Ｃ区井戸（1/20）



ＳＥ01：ＳＤ01の下から検出された。ほとんど遺物は出土しなかった。袋状土坑として弥生時代に遡る可能性もある。粗製剥片石器が出土している。x期以前。

ＳＥ02：断面は逆台形を呈する。上部にはｄ期に属す堆積層があり、廃棄土坑に伴うものであろう。そのためにかなり破壊されている。

井戸に関連するのは下部で、ａ期からｂ期にまたがる。堆積層は噴砂によって大きく乱されている。ＳＥ24に切られるが、上部はＳＥ06を切りこんでおり、土層断面はいささか複雑である。

ＳＥ03：底面中央が擂鉢状に窪む逆台形を呈する。完掘状態では２段掘りの掘形で、井戸として掘り直しを受けているようであるが、詳細は不明。ａ期からｂ期。

ＳＥ04：底部は皿状でとりわけ深いわけではないが、規模が他のものと同等であることから井戸と認定した。ａ期。

ＳＥ06：断面逆台形で、上部は廃棄土坑となっているが、下部と上部に大きな時期差はなさそうだ。下部は壁面が粗砂層との境界付近で大きく抉りこまれており、また堆積層に水平葉理が観察されることから一時期開口していた可能性も高い。つまり、抜き取り後に、埋没までの空白期間が存在したということであるが、その期間に使用されていなかったのかどうか、問題ではある。上部には廃棄が行われ、良好な一括資料が得られた。x期

ＳＥ07：断面ロート状を呈する典型。とくに下部には抉り込みもなく、円筒状に遺存している。上部では堆積層の不整合面が抜き取り痕のように観察される。ａ期。

ＳＥ08：断面逆台形で、下部にはラミナが観察された。ａ期。

ＳＥ09：上部は擂鉢状をなし、下部は粗砂層との境界付近で大きく抉れている。上部には遺物がほとんど含まれていなかった。一部に斑土の堆積が認められた。隣接するＳＤ16とは切り合い関係にあるが、それも堆積層上部でのことであり、井戸機能時には並存していた可能性もある。ｂ期。

ＳＥ10：広葉樹材の刳り抜きの井筒が残存。２段確認でき、最下段は良好に遺存していた。井筒は内径約51cm、高さ45cm、最大厚約４cmを測る。上部にいくにしたがい薄くなっているが、腐食のためであろう。井筒内面下部には突帯が作り出してある。

下から２段目は最下部がわずかに遺存。これが抜き取り時に残った断片なのか、上部が腐食してしまったのかははっきりしない。ただ、抜き取りのために裏込め土を抉り取った形跡は最上部に認められる（１層）だけで、下部には井筒状の土層断面がきれいに認められるいことから言えば、丁寧に抜き取ったということか。

１層が抜き取り作業の痕跡であるとするなら、少なくとも３段程度は組まれていたと考えられる。旧地表面標高から推定しても３段程度は組まれていた可能性がある。

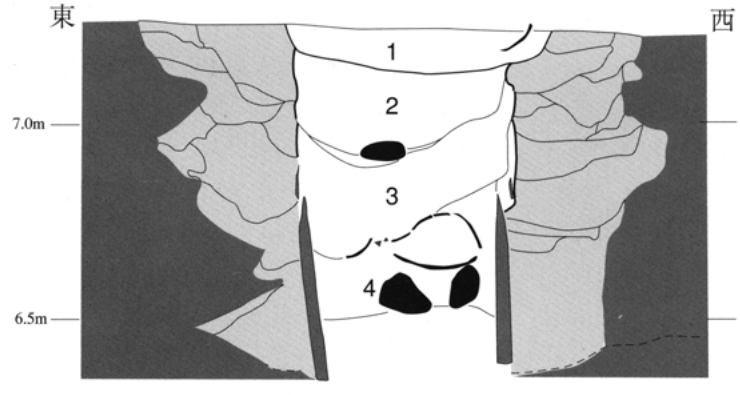


図３・１０
SE10　セクション
（1/20）

井筒内部からは赤彩で鋸歯紋を描いた壷やＳ字甕Ｂ類が出土した。また最下部には円礫が密着していたが、砂留めといえる程密ではなかった。ｂ期。

ＳＥ11：ＳＥ23とＳＥ24に挟まり両者に切られているために、一部を検出したにとどまる。上部は断面逆台形で、下部に円筒状部分がわずかに残存する。堆積層は自然堆積のようで乱れもない。ｂ期。

ＳＥ12：断面逆台形で、土層観察ベルトによれば北側にもう一基存在し、それを切り込んでいるようだ。ｂ期。

ＳＥ13：ＳＢ09の南に位置し、ＳＤ01の肩にかかる。断面はロート状で、上部は廃棄土坑になっている。下部は円筒形で、粗砂層との境界付近の壁面は大きく抉れている。底面中央は１段落ち込み、そこに黒褐色シルトが堆積していた。おそらくは構造物の痕跡と思われる。こうした形状は構造物抜き取り後の状態を示したものと考えられ、以下で記載する井戸の多くも同様の形状を見せる。ｃ期。

ＳＥ15：上部は擂鉢状で下部はわずかに円筒形部分が残存している。壁面は粗砂層との境界で少し抉れ、底面は中央が窪んでいる。ｃ期。

ＳＥ16：下部の壁面は良好に遺存し、底部は擂鉢状に深くなっている。上部には地山ブロックの流入があり、遺物の出土もあまりなかったことから、人為的に埋め立てられた可能性がある。ｃ期。

ＳＥ17：南北方向の断面は比較的良好なロート状をなすが、東西方向は東部のみ典型的なシルエットをみせる。ｄ期。

ＳＥ18：中央に抜き取り痕のような堆積が認められるけれども、確証はない。やはり、粗砂層との境界で壁面が若干抉られている。ｄ期。

ＳＥ19：底面は皿状で、粗砂層との境界でも壁面に抉り込みは認められないが、位置関係と規模から井戸と認定した。ｄ期。

ＳＥ21：２段掘りで中央が一段深くなる。ｄ期。

ＳＥ22：２段掘りで中央が１段深くなる。抜き穴であろうか。

（４）溝

調査区西半部では幅が30cm～50cmで、断面が逆台形かゆるいＵ字形を呈するそれほど深くない溝が縦横に掘削されている。時期によって方位は変化するが、同時期のものはおおむね共通した方位をとる傾向が認められる。したがって、無遺物でも大体の時期を推定することができる。複数条が平行する場合には畝状遺構ということになるが、単独の場合には区画溝と認定可能な場合もあると考える。

ＳＤＩ：微高地に沿って掘削されている。複数回にわたって改修されたようで、最終的に埋没するのがｄ期である。調査区東部でやや南に折れ、その先は９４Ｂ区につながる。

Ｃａ区東端では膨らむように急激に幅が広くなる。この部分には砂層や流木が大量に堆積して、溝底面も粗砂層に達していた。堰などの構築物は遺存していなかった。何らかの理由で水流に変化が生じ、下部を抉り込むことになったのであろう。東端付近では北東にＳ字状にカーブする。埋土上部の黄灰色シルト層を中心とする洪水層下部では土器の出土量も多く、拡幅部分以東ではとりわけ多量の廃棄が行われていた。

ＳＤ01：遺構の切り合い関係ではＳＸ01にも切られており最古段階に位置し、出土土器もⅤ期に限定される。微高地の縁辺ラインに平行して掘削されている。

９４Ｃ区では全体に南部でⅤ期相当の土器が目立って出土しており、調査区以南に当該期の遺構・

遺物が展開する可能性が高いようだ。

ＳＤ02：９４Ｃ区西半部調査区の北東端で検出した。壁面はほぼ垂直に立ちあがり、断面は箱型である。底面には径30～40cmのピットが規則的に並ぶ。埋土は黒色砂質シルトで斑状ではなく、つき固められた状況も認められなかったが、柵などの基礎部分である可能性が高い。ｘ期～ａ期。

ＳＤ05～15：長さ約10m、幅20～30cm、深さは検出時で20cm程度、土層断面の観察でも40cmほどの溝である。埋土は黒色砂質シルトの単一層で、ほとんど遺物は含まない。いわゆる畝状遺構に含まれると考える。ａ期からｂ期。

ＳＤ16：断面逆台形で、平面形は弓なりに湾曲する。隣接するＳＥ09上部堆積層に切られるが、全く別時期であるかどうかわからない。

ＳＤ17：北側は微高地縁辺ラインに沿っており、掘形にシャープさはない。いっぽう、南側は掘形も鋭く、一見前方後方形を窺わせるラインをみせる。南側が一段深くなっており、また東部では土坑状の掘形を呈する。Ⅰ期の土器群がまとまって出土した。

ＳＤ18：断面逆台形で、弧状プランを呈する。竪穴建物の周溝状でもあるが、北側はｃ期の遺構に切られており、本来の形状は不明。ＳＸ03に類似した円形壇状遺構の一部か。遺物の出土はなかったが、ａ期に属すと推測する。

ＳＤ19：断面箱型で、底面は深さが一定しない。ＳＸ02に接する。ｂ期。

ＳＤ23：ＳＤⅠに平行する。ＳＤⅠとの間は土手状に盛土されている。南に屈曲するあたりからプランが不明瞭になる。途切れるのかＳＤ29に接続するのかわからない。ｃ期。

ＳＤ24：ＳＤ23とクロスしてＳＤⅠに合流する。

ＳＤ25：南北に直線的に伸びる細長い溝で、線刻土器が出土した。ｃ期。

図３・１１　ＳＤ17遺物出土状態（西から）



ＳＤ26･27：周辺にはほぼ同時期の平行する溝が多数存在する。畝状遺構の類か。

ＳＤ28～30：低地の軸線に一致して掘削されたＳＤ29に直交してＳＤ28･30が掘られているといったところであるが、ＳＤ26も含めれば、一連の地割に関係する溝ということになろう。ｃ期。

ＳＤ31：断面逆台形の深い溝。遺物や炭化物・灰などを多く含む。

ＳＤ33～41：平行して掘削されている溝で、一連のなかでは最も新しい時期に属す。ｄ期。

（５）土坑

ＳＫ09：断面は円筒形で底部は若干窪む。炭化物を含む層がほぼ水平に累重している。底面は粗砂層まで達している。井戸の可能性無きにしもあらず。ａ期。

ＳＫ12：断面が円筒形で、下部から赤彩壷が口縁部を下にした斜位で出土した。ｘ期。

ＳＫ13：ＳＥ04・15･19が重複している。このうちＳＥ04とは同時期と考えられる。埋没はｄ期である。

ＳＫ16：ＳＤ02の延長である可能性が高いと考えている。ほぼ完全な形の高杯が出土した。ａ期。

ＳＫ19：断面は、壁面がやや外傾する箱型で、底面は粗砂層まで達している。下部は砂混じりの黒色シルトで、上部は有機分の濃い黒色シルトで炭化物も多く含まれていた。その粘つくような黒色シルトは他ではあまり認められなかった。ａ期。

（６）不明遺構

ＳＸ01：ＳＢ01を囲むように掘削されている土坑の連結したもの。調査当初は溝とも考えたが、下部の堆積層が不安定なことから縦断セクションを観察した結果、複数の土坑が重複していることが明らかになった。したがって、上部は溝状であり、下部は土坑の複合したものということになろう。

埋土は全体に灰白色細粒砂を基調として、そこに炭化物が薄層をなして含まれていることが特徴的だが、南端のみは炭化物を多く含む埋土であった。いわゆる廃棄土坑であろうが、遺物の含み具合はそれほど多量ということでもなかった。

ＳＸ02：斑土が堆積し、ＳＸ01とは異なるが、位置関係からみて、一連のものであろう。

ＳＸ03：円形周溝が２条重複している。推定径は内径で８ｍ。

円形周溝墓に類似しているが周溝からまとまった遺物の出土もなく詳細は不明。

ＳＸ04：西をＳＤ32に画され、東がＳＥ06あたりで南に屈曲するまでの、南側の低地部に面して段をつくって区画されていると推定される部分。井戸が集中することから注目した区画である。東側は区画の存在も不明瞭だが、ＳＤ16に東接するピット列が北へのびるちょうど南に屈曲部分がくることを重視するなら、一定の軸線の存在も窺える。つまり、ＳＤ09も含めて、井戸が集中する特別な区域という理解が可能となる。

９４Ａ・Ｂ区

（１）溝

ＳＤＩ：ＳＤ01との重複部分に中世の土坑が重複しているために確認不能であったが、ちょうど交差部分の前後で角度を変えており、近い時期であろう。調査区東北端で南東に向きを変えて９４Ａ区につづく。

ＳＤ01：断面逆台形の溝で、ＳＤＩと交差している。交差部分に中世土坑が重複しているために先後関係は不明。土層観察によれば複数回の改修が認められる。また、溝底には掘削作業の痕跡と思われる半月形の小ピットが列状に観察された。恐らくはスキ先痕であろう。

ＳＤ02：断面逆台形の浅い溝。ＳＤ01から分岐するように見えるが、伸びる方向はＳＤＩに平行しており無関係とは思われない。「道」に関係するのかもしれない。ＳＤ01最終段階には埋没している。

ＳＤ03：壁面が急傾斜で断面は箱型に近い。埋土が黒色シルトからなり、改修の認められない一時期だけの溝である。ａ期。

ＳＤ04・05：断面逆台形の溝で平行して掘削されている。南に屈折してＳＤＩと離れるあたりで赤彩広口壷の破片が出土した。両溝とも複数回の改修が認められる。「道」に関係する溝と考えられる。

ＳＤ06：ＳＤ05から分岐する、ひとまわり規模の小さい溝。Ⅱ期に改修されているためにＩ期に属す部分はＳＤ05に最も近い部分だけであった。

ＳＤ07：ＳＤ06に平行して掘削されている、さらに規模の小さな溝。途中で途切れているが、さらに続いていた可能性もある。ＳＤ06と平行して掘削されている点がＳＤ04･05と類似しており、本例も「道」に関係する可能性がある。

ＳＤ08：断面逆台形で、調査時の印象は方形周溝墓の周溝に近似したというものであった。有機分の強い黒色シルトが堆積していた。

（２）不明遺構

ＳＸ01：調査区の南端で検出した、斜面が急で自然地形とは考えられない落ち込みである。プラント・オパール分析ではイネ科植物の機動細胞が下部堆積層に量的に安定して含まれていることが判明した。

よって、水田跡である可能性が極めて高いと考える。

９５Ａ区

（１）溝

ＳＤ03：断面は皿型で浅い。東側は高く大畔の可能性がある。西側は水田畦畔で区画されている。調査区南端ではプランが不明瞭で確実ではない。

（２）水田

水田の区画を大畦畔による区画だけでなく、小区画水田の軸線の変化に注目して中区画を推定し分類単位とする。

なお、以下では記載の必要上、大畦畔について水路に併設されるものを付属大畦畔、独立して設けられているものを独立大畦畔と呼び分ける。

Ａ群：ＳＴ01～03。

Ｂ群：小畦畔の軸線から、さらに下位の中区画に区分可能である。すなわちＳＴ04～14をＢ１群、ＳＴ15～23をＢ２群とする。Ｂ１群のＳＴ04･06は微高地に接する水田で、微高地側に明瞭な段差をもつ。長方形プランを確保するために微高地縁辺を削り込む、地山整形を行っている。Ｂ２群のＳＴ15は並びからいえば二つに分かれそうであるが、調査所見では不明である。

Ｃ群：いちおう独立したグループにしたが、畦畔の形状も不確定で、大畦畔による区画以上は言及不可能である。

Ｄ群：独立大畦畔１と独立大畦畔２に画される。ＳＴ26～39。小畦畔は良好に検出でき、水口も確度が高い。

独立大畦畔１：Ｄ群の北を画す。水田検出面とは明瞭な段差をもつ。北側は古代の遺構群が濃密に展開し、そのため水田があったのかどうかははっきりしない。全体に斑土状の堆積層が広がり、畦畔の検出はできなかった。

独立大畦畔２：Ｃ群とＤ群を画す。水田検出面との比高は最大で15cm。北端は途切れている。

（2）不明遺構

ＳＸ02：北西方向にのびる帯状の低地。自然地形か。

ＳＸ03：北西方向に下降する帯状の低地。自然地形か。

ＳＸ04：水田検出面と比高がほとんどなく、畦畔の検出につとめたが、認定するには至らなかった。ＳＴ05の北側小畦畔がカーブして南に折れる点を重視するなら、東方に水田区画が並ぶ可能性は低いだろう。あるいは休耕地か。

９５Ｂ区

（1）水田

Ｅ群：独立大畦畔１と独立大畦畔２に画される。小畦畔は不明瞭で検出にてまどった。ＳＴ43～55。

Ｆ群：確度の高い検出ができたグループである。一部小畦畔が重複し、ａ～ｅの不定形な小区画が存在した。いずれも小畦畔の作り替えで、ＳＴ22・26・32が拡幅されている。ｄ・ｅについては上面遺構による攪乱もあって拡幅の痕跡を確認することはできなかったが、同様のものと考えて差し支えないであろうＳＴ36～38は縮小された側の水田区画であろう。

ところで、独立大畦畔１はＳＴ55より西で大きく湾曲しているが、本来は直線的に伸びていたであろう。つまり、ＳＴ19～21の北側ラインがちょうど相当すると考えられるが、そうすると先の小畦畔の作り替え部分が中区画の境界をなす可能性が高くなる。つまり、ＳＴ19～ＳＴ35をひとつの中区画単位と認めよう。

Ｇ群：こちらも独立大畦畔５が大きく湾曲している。小区画はＳＴ118～125が独立大畦畔に沿って設けられており不整形となっているほか、ＳＴ106の並びも不整形になっている。こうした状況をふまえ中区画の可能性を考えると、ＳＴ67・72・77・81東側ラインが軸線の変換に対応していると考えられる。

ＳＴ126は水田番号を付けたが、独立大畦畔６に沿って帯状に設けられている点は独立大畦畔４際のＳＴ36～38も同様で、独立大畦畔、あるいは小区画水田の配列とどのような関係があるのであろうか。

Ｈ群：水田は東部での検出にとどまった。

独立大畦畔：上面調査段階でその存在が窺えたほど安定した高さを有し、例えば独立大畦畔１は水田検出面との比高は約30cmを測った。このうち独立大畦畔５は他と異なり、両側に溝状の掘り込みが伴っていた。

独立大畦畔の修復の際に裾の土を掻き上げた痕跡である可能性もあるが、同様のものは他の独立大畦畔には見られず特異である。

（2）溝

ＳＤ07：断面逆台形で、最下部と上部に斑土が堆積し、中部は自然埋没となっている。改修の跡が見られないこと、堆積層の共通性からみて、ＳＤ08の最初の溝と時間的には平行し、改修時に埋没したということであろうか。ｃ期掘削でｄ期には埋没か。

ＳＤ08：断面逆台形で、ＳＤ07の倍ほどの規模を有し、また改修も行われている。最初の溝は下部に斑土が堆積し埋めたてられた可能性がある。２度目は自然埋没を基本とするが、上部には斑土が堆積し整地されたようだ。最後は粗砂層を含む溝が上部に重なっている。掘削は恐らくｃ期で、埋没がⅡ期まで下がる可能性がある。

９５Ｃ区

（1）溝

ＳＤ01：調査区を北東から南西に突き抜ける溝で、両側が付属大畦畔になっている。断面皿形

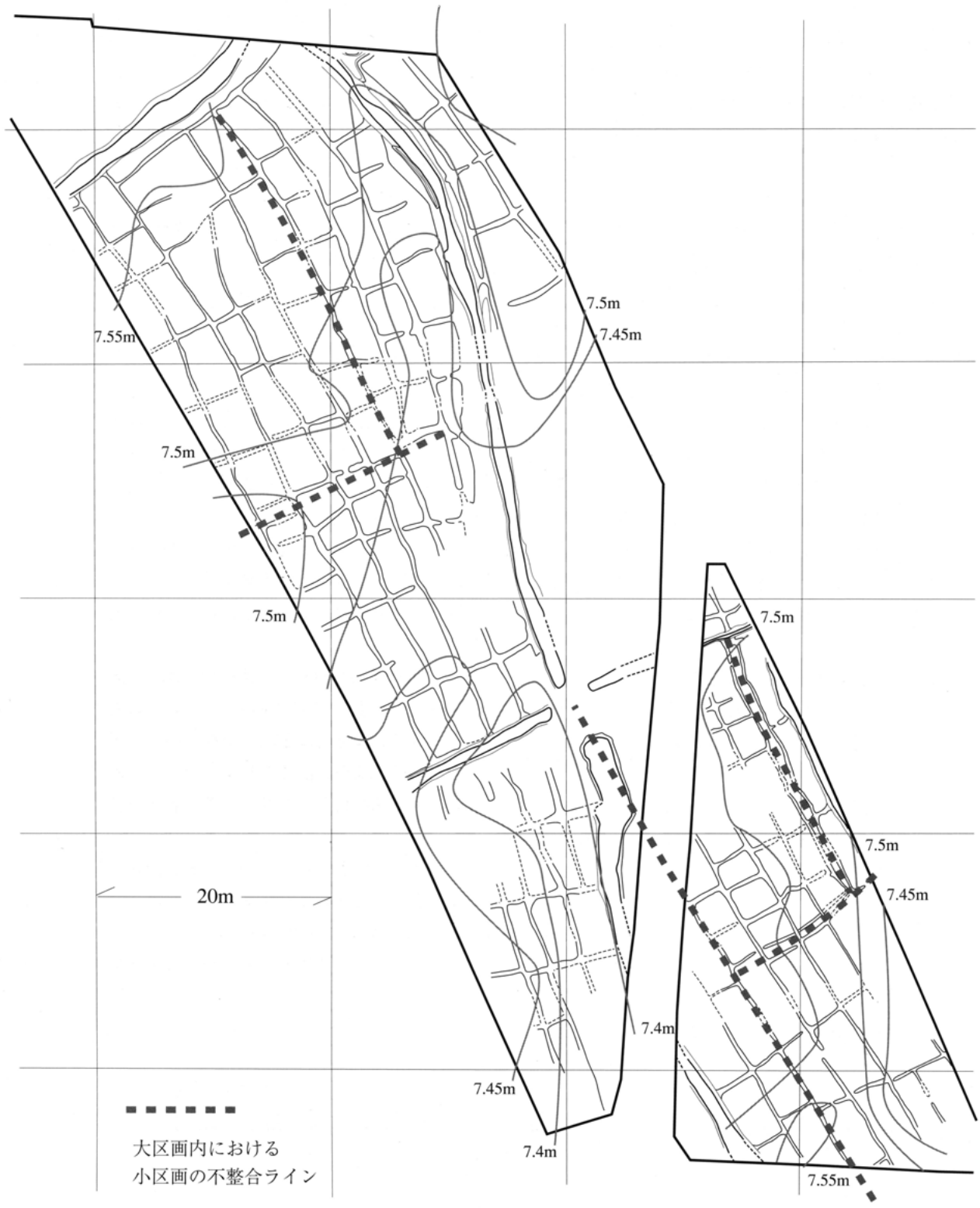


図３・１２　95B区　水田（1/500）

の浅い溝である。

ＳＤ02：ＳＤ01とは完全に接続しないが、溝肩が完全に遺存していたわけではないので、いちおう分岐すると考える。

（2）水田

水田は中区画をＩ～Ｎの６群検出したが、唯一Ｉ群で良好に検出しえたのみで、Ｎ群に至っては小畦畔をほとんど確認することができなかった。また、Ｌ群やM群でも検出はできたものの、小畦畔の方向が乱雑で、果たして小畦畔と認定し得るのかどうか問題がある。この点に関係して水田検出面自体に畦畔の方向とは無関係な起伏が見られ、このことから果たしてこれらがとても同一水田面とは思われないほどであった、という事実と関係しているのかもしれない。これは調査方法において、上面調査後に機械掘削で水田検出面まで掘り下げたことが、重機の重量が水田面以下の堆積層に圧力をくわえ、沈下を引き起こした可能性を示している。

このように小区画の検出は不完全ではあったが、それでもいくつか中区画の存在は十分に窺うことができる。その一部は独立大畦畔の痕跡のようであった。

付属大畦畔：ＳＤ01の両側に沿って設けられている。上部は盛土であるが、それほど厚いわけではない。

９５Ｄ区

（1）溝

ＳＤ01：水田小畦畔下層から検出された。断面は箱型で、埋土は黒色シルトの単一層からなるという特徴がある。ＳＤ05にほぼ平行しており、水田造成初期の溝と考えられる。

ＳＤ02:小畦畔に挟まれた断面がＵ字形で、幅の狭い溝。両側の小畦畔はところどころ水口状に切れている個所がある。ＳＤ03から分岐していると考えられる。

ＳＤ03：両側に付属大畦畔をもつ断面逆台形の溝。

ＳＤ04：断面逆台形の溝で、南側は大畦畔状に幅広の土手になっている。その延長はＳＤ05西側で一部検出された大畦畔に接続する可能性が高く、ＳＤ05とは接続しない。

ＳＤ05：ほぼ直進する溝で、複数回の改修が認められる。先ほどのＳＤ01との関係から、最初期から機能している水路であろう。東側に付属大畦畔をもつ。

ＳＤ06：ＳＤ05に平行して直進する溝で、東側には水田が展開する。深さ15cmほどの幅広の浅い溝で、掘形輪郭はそれほど明瞭でもない。土層観察では一時期で改修は認められない。しかし、西側のＳＤ05との間の付属大畦畔には造り替えが認められる。

ＳＤ07：他の溝と重複しているために全容は不明。切り合い関係から先行すると考えられ、ＳＤ04に近い時期である可能性が高い。

ＳＤ08：ＳＤ04より新しいと思われるが詳細

図３・１３　95C区北壁セクション（1/80）

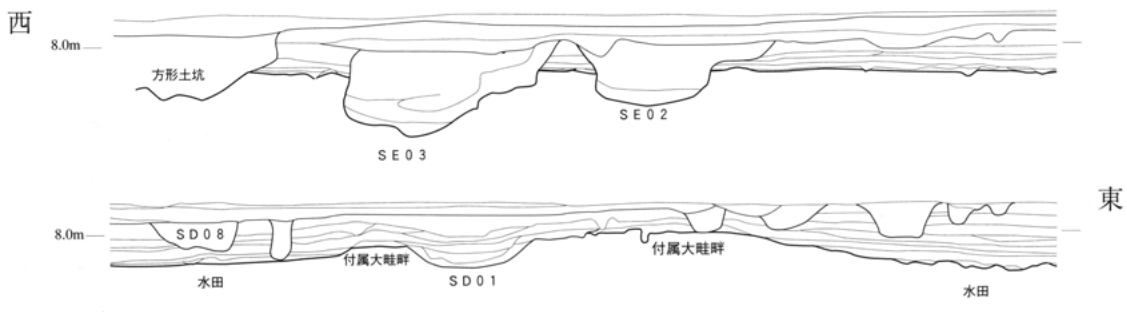




図３・１４　95Da 区水田初期の遺構（1/200）

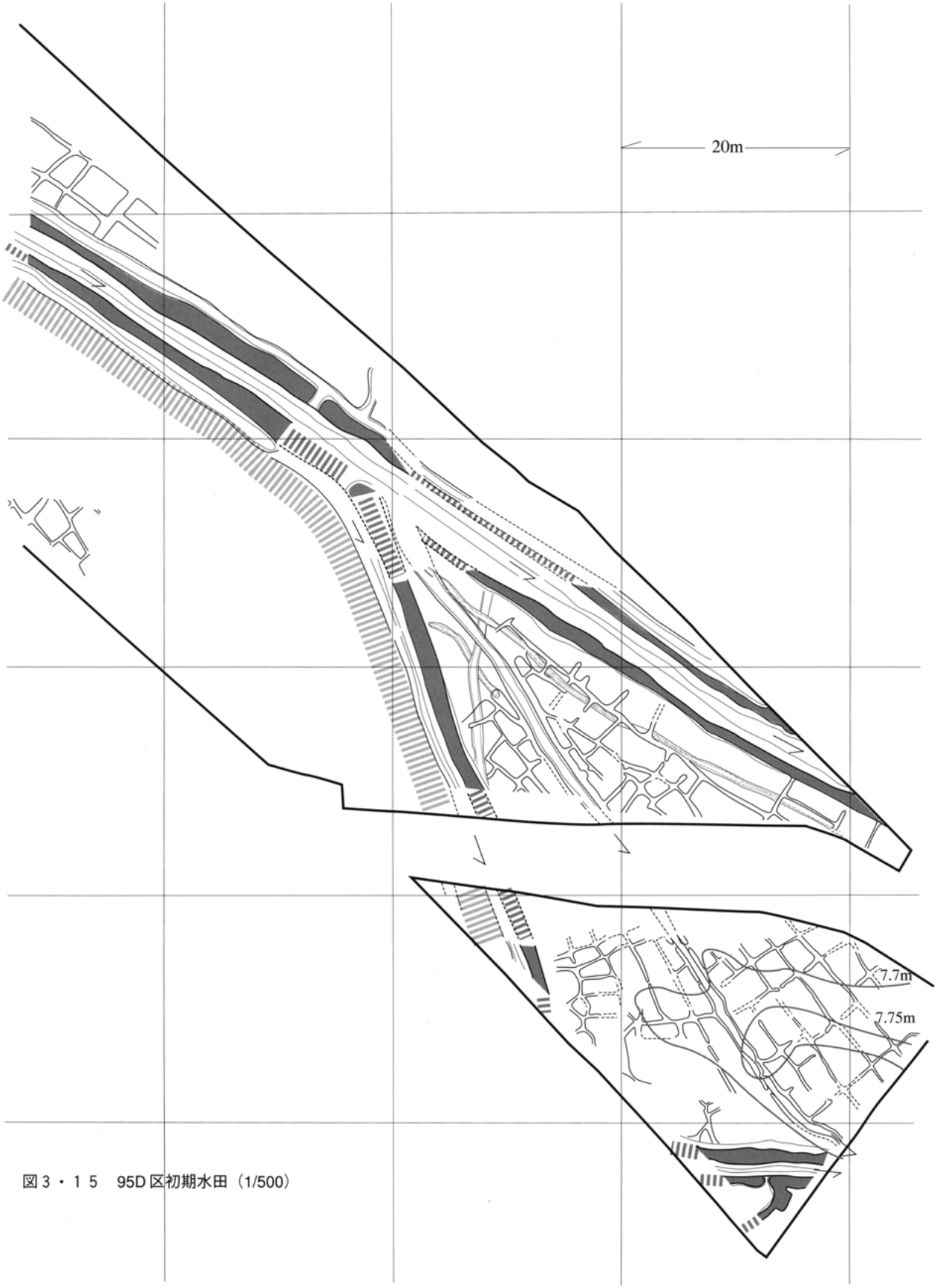


図３・１５　95D 区初期水田（1/500）

は不明である。

ＳＤ09：屈曲する溝で、ＳＤ07に重複して掘削されているようである。

ＳＤ10：重複関係にある溝のなかでは最も新しい。

ＳＤ11：わずかに検出できたに留まる。ＳＤ07とつながる可能性が高い。

ＳＤ12：断面逆台形の安定した溝だが、先行きは不明。

（２）水田

Ｏ～Ｒの４群を検出した。Ｏ群は小畦畔の配列が比較的良好に検出でき、ＳＴ01～06がＳＤ02の付け替えを示している可能性がある。しかし東側調査区では小畦畔の配列が乱れ、状況は良くない。Ｒ群はその逆に西側調査区での検出状況が良くなく、詳細は不明である。このほかＱ群は別にしてＲ群もほんの一部を検出し得たのみである。

上記水田は大毛池田遺跡との対応関係から「下層水田」と記載されるものである。同様に、当調査区にも「上層水田」が存在したのかどうか微妙だが、ＳＤ05付属大畦畔の作り替えをみると、さらに上に一面存在した可能性が高い。

９５Ｅ区

西部調査区では溝の重複関係もそれほどなく検出および同定は比較的容易であったが、東部では重複関係が付け替えに伴うものであるために、同定に困難を伴った。また、検出方法において上面の古代･中世遺構調査後に機械掘削で掘り下げ、その際に水田検出面までいっきに下げたため、重要な点を見失った可能性もある。

（１）溝

ＳＤ01：直線的に伸びる溝で、95D区ＳＤ01に類似している。

ＳＤ02：ＳＸ01直前で屈曲する。同時期であろう。

ＳＤ03：９５Ｄ区ＳＤ05に接続すると考えられる。

ＳＤ04：９５Ｄ区ＳＤ06に接続すると考えられる。

ＳＤ05：ＳＤ02から分岐して微高地の裾を巡り、途中で微高地を深く切り込み横断して掘削されている。微高地側の斜面では数点であるがＳ字状口縁甕Ｃ類の破片が原位置で出土した。

これらは微高地上から転落した状況を示してお

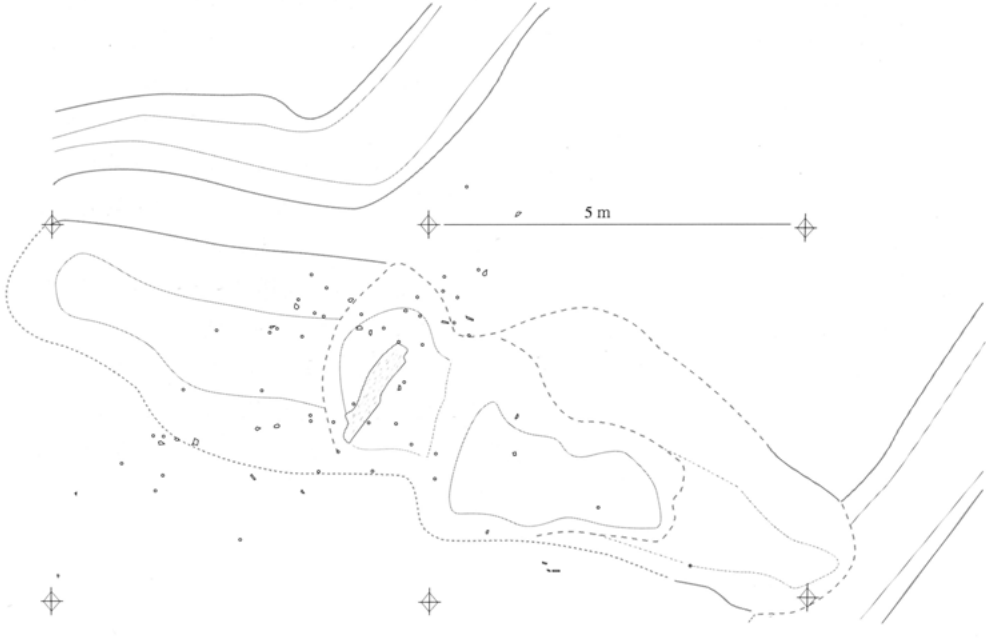


図３・１６　95Ea区　杭群（1/100）

り、微高地上での使用を示している。それが日常的な行為に伴ったものであったのかそうでなかったのかどうかは明らかでない。

（2）水田

調査区南部では９５Ｄ区から続くＱ群の一部を、そして北部でＴ群を検出した。Ｔ群は弥生時代の埋積谷の上部窪地に造成されたもので、上下２面あり、後者が古墳時代Ｉ期に属す。上面は水田区画が大きくなっているようだが、十分に詳しく検出することはできなかった。小区画水田は等高線に沿うように整然と配列されていた。

大畦畔１は独立大畦畔で、Ｉ期に属すものであろう。しかし周辺で小畦畔を確認することはできなかった。

自然河道の右岸らしき落ち込みが調査区東壁土層断面に認められていることから、河道との関係による可能性がある。

（3）不明遺構

ＳＸ01：溝群に直交して、二つの不整形な土坑が重複したような不確かな輪郭を呈する溝状の落ち込みが存在し、周囲には丸木杭が多数打ち込まれていた。この溝状部分が単独で機能するのか、杭群と関連するのか明確ではない。

Ⅱ期

９４Ｄ区

（1）溝

ＳＤ05：年代や方向から９４Ｃ区のＳＤ33に接続する可能性もある。

ＳＫ06・07：ＳＸ02の南に位置する。孤立して検出されたが、上部に当該期の遺構がなかっとも言えない。

９４Ｃ区

（1）井戸

ＳＥ23：断面は逆台形を呈する。底面は粗砂層まで達したところで平坦になっている。上部は廃棄土坑で須恵器がまとまって出土した。

ＳＥ26：最下部を残してかなり大きく掘りこまれて廃棄土坑が設けられているために、本来の形状はわずかに窺えるのみである。最下部では壁面の立ちあがりが認められ、粗砂層との境界にも抉り込みがあった。堆積土の最上部では西側から流入する堆積層に炭化物や焼土ブロックが含まれ、またフイゴの羽口も出土した。

ＳＥ28：断面はいささか形容しがたいが、中央が一段深くなって構造物が埋置されていた痕跡を示す。上部は壁面の崩落によって複雑な堆積層を形成している。抜き取り後に開口していたことを示すのであろう。

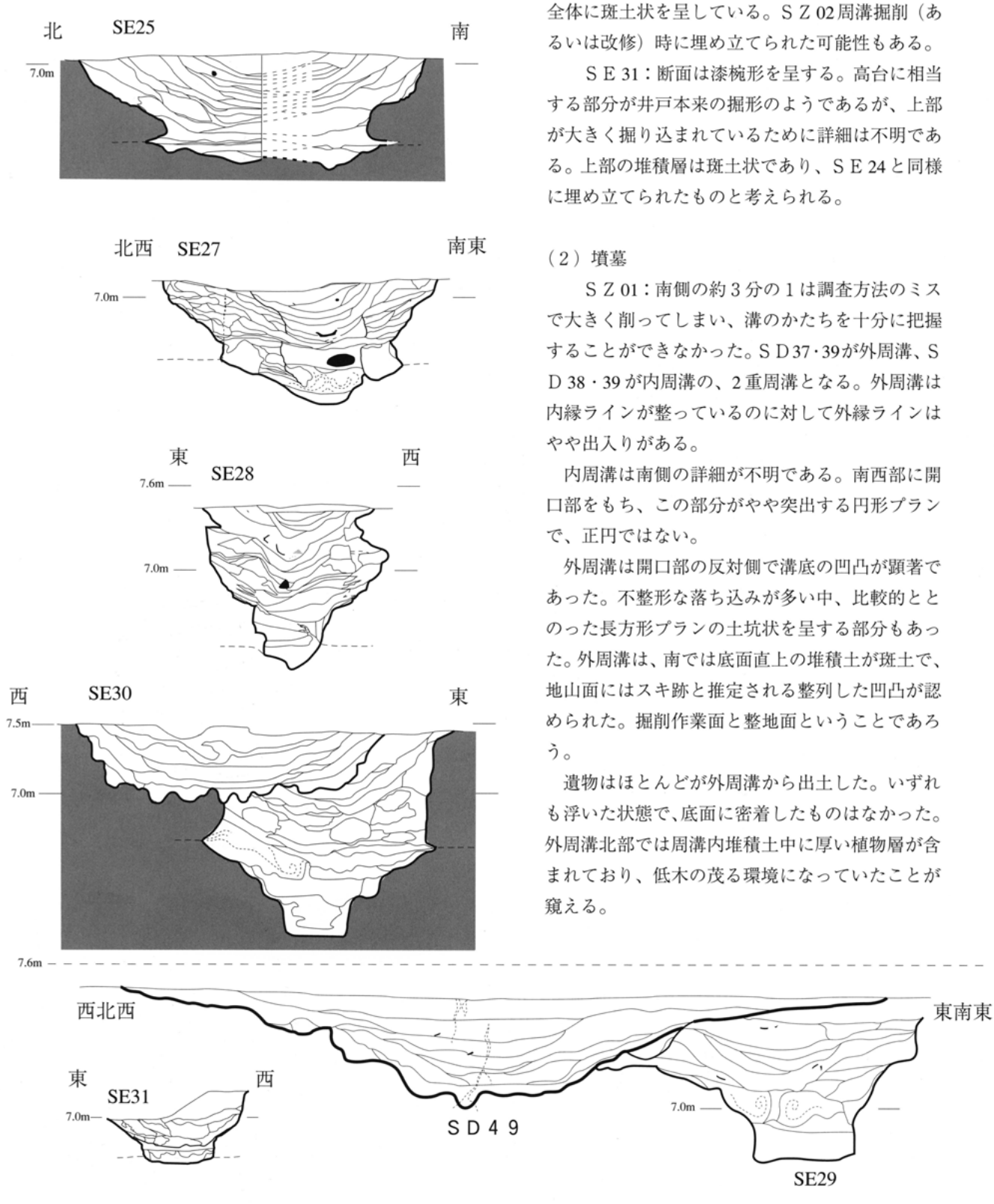
ＳＥ27：下部に地山の崩落土があることや最下部の堆積層が液状化を起こしていることなどから、抜き取り後に層位が乱れた可能性もあるが、しかし抜き取り痕が中世の井戸のように明瞭であることを見ると、上部の堆積層はほぼ裏込め土の状態を保っていると思われる。

抜き取り穴はほぼ円筒形で、径は約50cmであり、数値的にはＳＥ03の刳り抜きの井筒に近い。変形を考慮してもまずまずの数値であろう。なお、抜き取り穴下部には円礫が遺存していた。

ＳＥ29：ＳＺ02外周溝との先後関係では古くなるが、周溝の改修を考慮すればほぼ同時期と言える。断面はロート状に近く、上部は廃棄土坑で須恵器類がまとまって出土した。

ＳＥ30：ＳＥ29と同様にＳＺ02外周溝と先後関係を有する。断面はロート状というよりナット状に近い。上部は大きく掘りこまれ、粗砂層との境界で壁面の抉り込みが認められるけれども、下部深くに井戸の痕跡が観察される。底面標高は

図３・１７　94C区井戸セクション（1/40）



井戸のなかでもっとも深く、5.99ｍを測る。

上部の堆積層には人頭大のブロックが含まれ、全体に斑土状を呈している。ＳＺ02周溝掘削（あるいは改修）時に埋め立てられた可能性もある。

ＳＥ31：断面は漆椀形を呈する。高台に相当する部分が井戸本来の掘形のようであるが、上部が大きく掘り込まれているために詳細は不明である。上部の堆積層は斑土状であり、ＳＥ24と同様に埋め立てられたものと考えられる。

（２）墳墓

ＳＺ01：南側の約３分の１は調査方法のミスで大きく削ってしまい、溝のかたちを十分に把握することができなかった。ＳＤ37･39が外周溝、ＳＤ38・39が内周溝の、２重周溝となる。外周溝は内縁ラインが整っているのに対して外縁ラインはやや出入りがある。

内周溝は南側の詳細が不明である。南西部に開口部をもち、この部分がやや突出する円形プランで、正円ではない。

外周溝は開口部の反対側で溝底の凹凸が顕著であった。不整形な落ち込みが多い中、比較的ととのった長方形プランの土坑状を呈する部分もあった。外周溝は、南では底面直上の堆積土が斑土で、地山面にはスキ跡と推定される整列した凹凸が認められた。掘削作業面と整地面ということであろう。

遺物はほとんどが外周溝から出土した。いずれも浮いた状態で、底面に密着したものはなかった。外周溝北部では周溝内堆積土中に厚い植物層が含まれており、低木の茂る環境になっていたことが窺える。

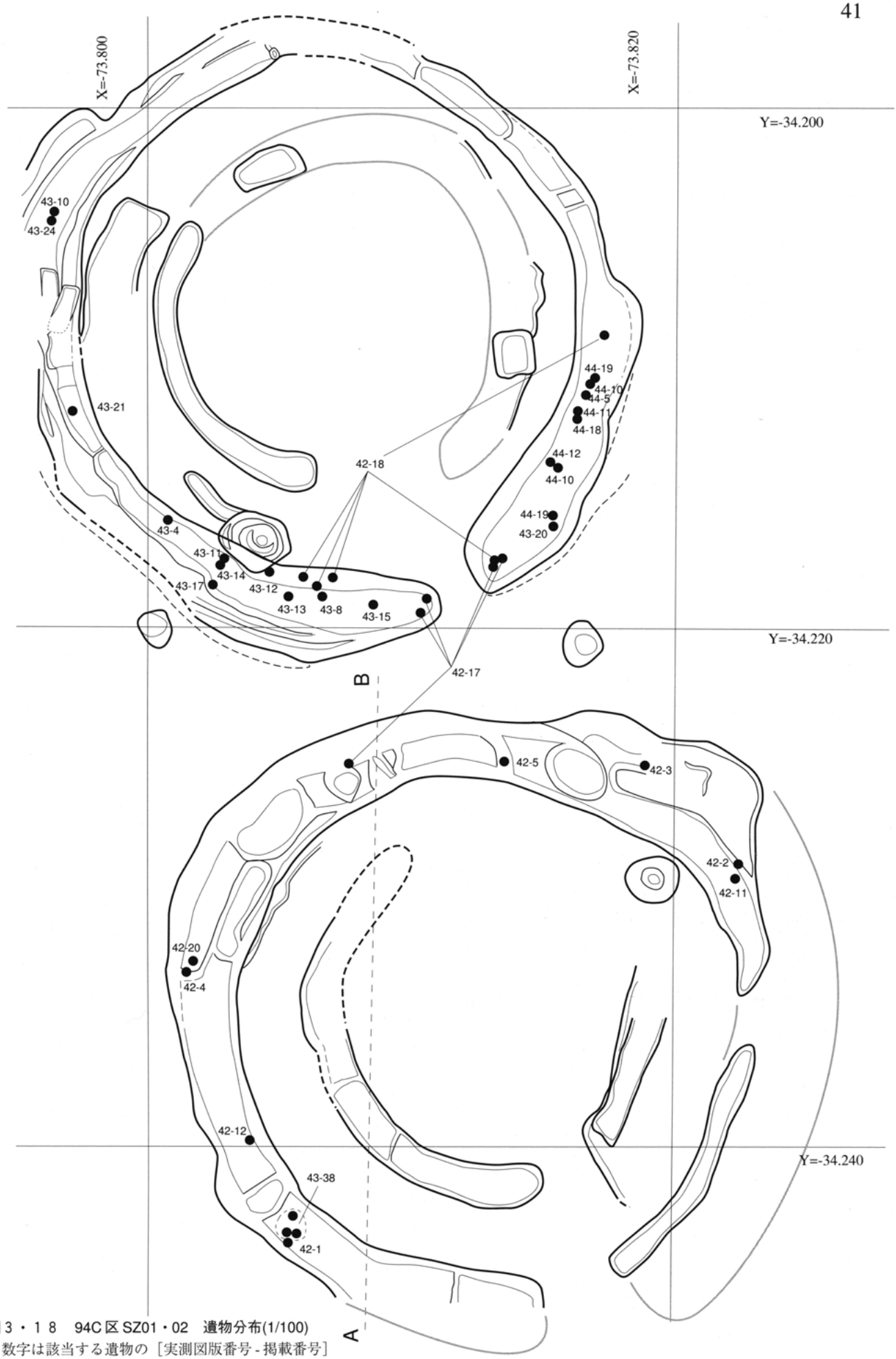


図３・１８　94C区SZ01・02　遺物分布(1/100)
※数字は該当する遺物の［実測図版番号-掲載番号］

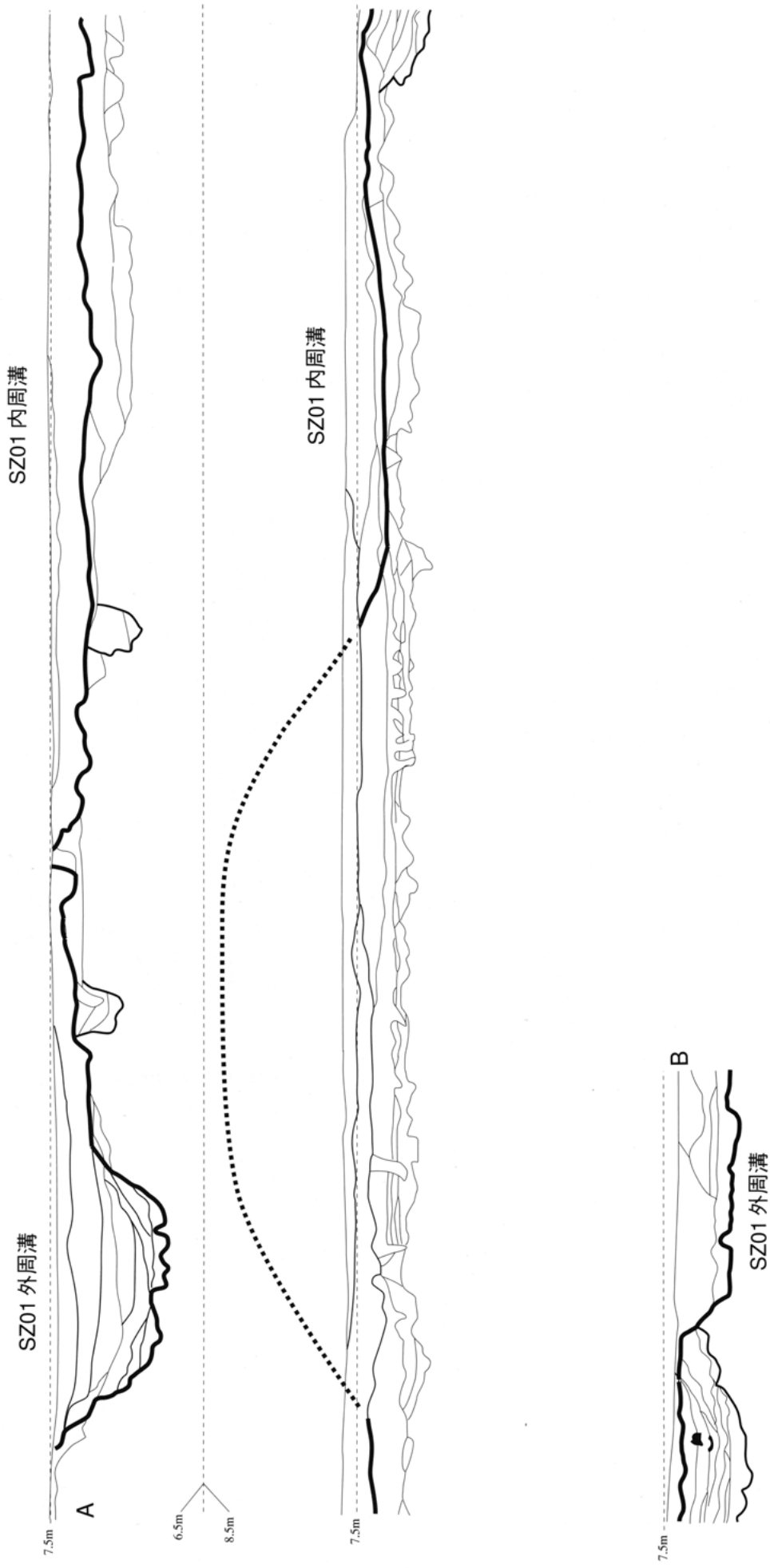


図３・１９　94C 区 SZ01 セクション（1/40）

ＳＺ02：ＳＤ40・43が外周溝、ＳＤ42が内周溝となる。ほかにＳＫ42、ＳＫ43付近の帯状の落ち込みも内周溝の一部（底面か）と考えられる。ＳＫ40・41は外周溝と内周溝の間に位置するが、これらは周溝とは異なる。とくにＳＫ41は底面に凹凸があり、人為的に掘り窪められてはいるが、遺構の輪郭としては不明瞭である。

外周溝はＳＺ01と同じ方位で開口部をもち、その付近が最も深く幅広となっている。そして開口部南側では三叉スキや多量の削り屑が出土した。削り屑の一部には焼け焦げも認められた。これに関係して、ＳＤ36寄りでは長さ420cm、幅60cmの針葉樹の板材とそれを取り囲むように各種須恵器が出土した（ＳＸ06）。須恵器の多くは板材よりも出土レベルが高かったが、一部は板材側に傾斜して出土した。土層断面で確認することはできなかったが、この部分が土坑状を呈し、板材が蓋であった可能性を示していた。

開口部の北側では丸太材やホゾ穴のある板材がまとまって出土した。組まれていたものが崩れたような状況にもみえたが、腐食が進んでおり詳細は不明である。

外周溝北部では溝底が面として一定せず、明確な土坑状を呈する部分（ＳＸ07・08）もあった。また、体部に打ち欠きによる穿孔が加えられた長胴甕も出土し、原位置であったのかどうかはわからないが、墓葬に関係するものと思われる。

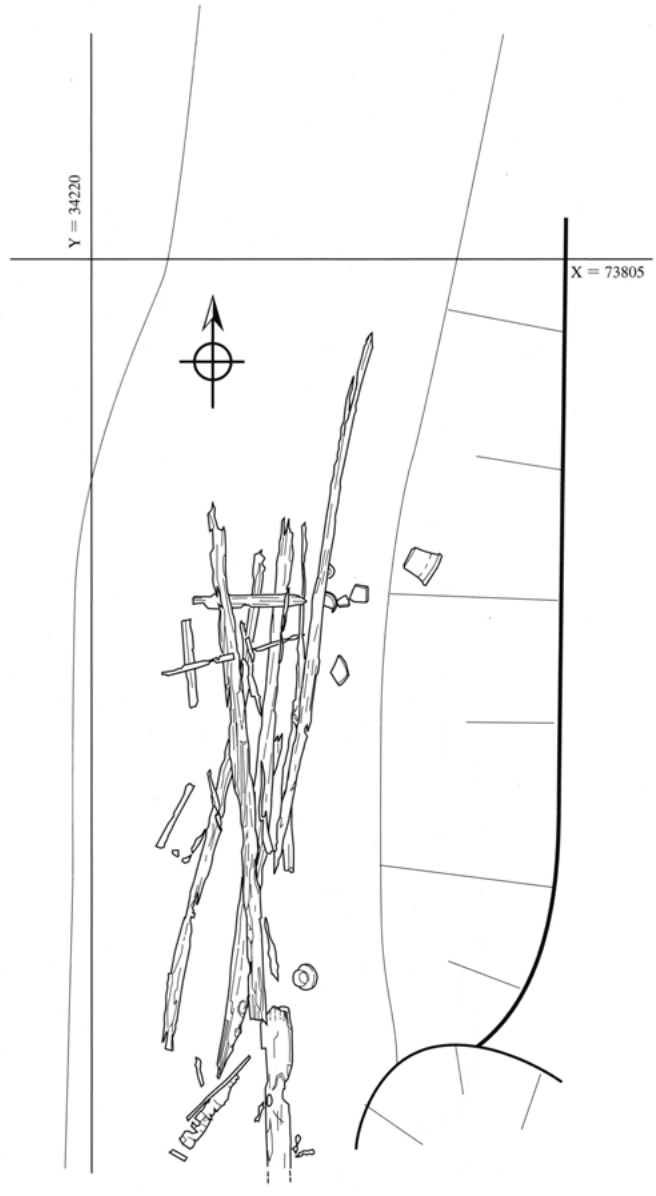


図３・２０　94C区SZ02木材出土状態（1/40）

図３・２１　94C区SZ02スキ出土状態（1/4）

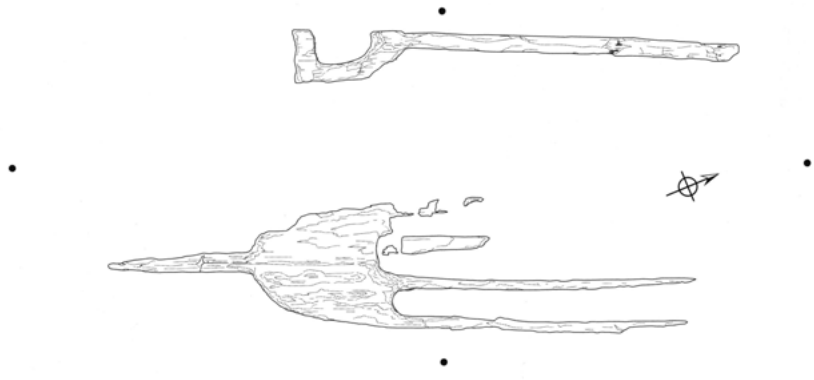
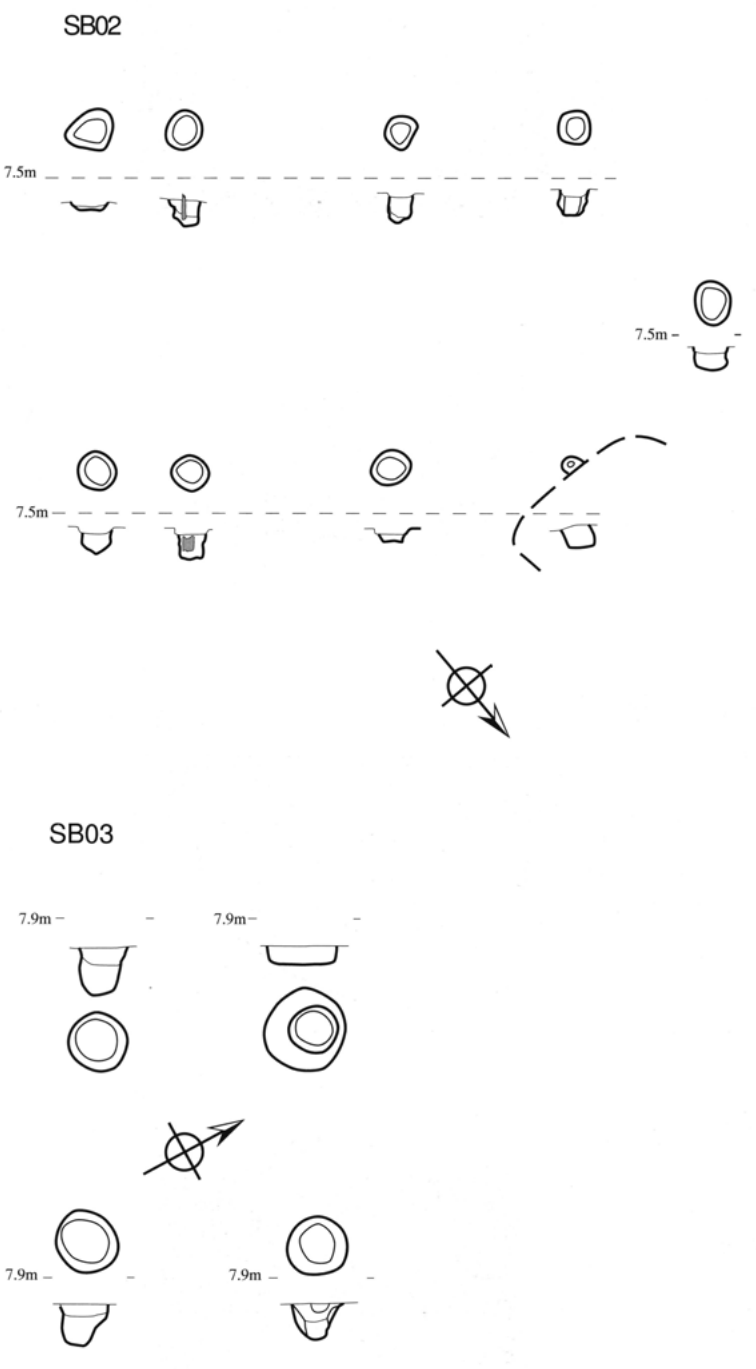


図３・２２　94A・B区SB02・03（1/80）



（３）溝

ＳＤ33：帯状の窪地がかなり埋積してから掘削されている。平面的には連続して検出できなかったが、土層セクションによって一連のものと認定した。井戸群の南では土坑状を呈し、流木なども出土し滞留していることが窺えた。この部分でかなり腐食した状態で板作りの琴が出土した。

ＳＤ34：果たして溝といえるのかどうかわからない。上部に粘土が堆積していたことから溝としたが、竪穴建物の一部である可能性もある。

ＳＤ36：ＳＤ43から続く溝で、方向的にはＳＤ33に接続する可能性も考えられる。

（４）不明遺構

ＳＸ05：柱の抜き穴を３本確認。しかし、柱配置がかなり長方形となるので、１間×２間の可能性を考慮し柱穴を精査したが検出できなかった。Ｐ02は抜き取り後に廃棄土坑に転用されたようで、抜き穴は検出できなかった。Ｐ01は大形の円形土坑の中央に設けられており、他とは異なる。下部の円形土坑が堀形であるとすると特異である。Ｐ01からは須恵器や宇田形甕が出土した。

ＳＸ06：ＳＺ02の外周溝ＳＤ43で検出した。腐食した大きな針葉樹の板材を取り巻くように須恵器が出土し、何らかの遺構の存在を窺わしめた。木蓋土壙墓の可能性もある。

ＳＸ07･08：ＳＺ02外周溝ＳＤ40北部で検出した。長方形の整った土坑で、土壙墓の可能性を推定した。土壌を脂肪酸分析にかけた結果、ヒトが関わっている可能

性が高いことが明らかになった。

ＳＸ09：円形周溝状遺構である。周溝内には土坑状の落ち込みが見られた他、円弧内部に断面円筒形の土坑が２基（ＳＫ35･36）掘り込まれていた。

９４Ａ・Ｂ区

（１）掘立柱建物

ＳＢ01：調査区の北西隅で検出した。梁間は１間で、桁行は２間以上である。

ＳＢ02：主柱穴は１間×２間で、隅柱が深くなっている。南東の２本は廂かテラスに関連するものであろう。柱根が遺存していた。

ＳＢ03：１間×１間の４本柱。北西のＰ01では抜き取り跡に丸底甕が埋置してあった。検出段階ですでに口縁部は欠けていたが、中世の削平によるものであろう。

（２）井戸

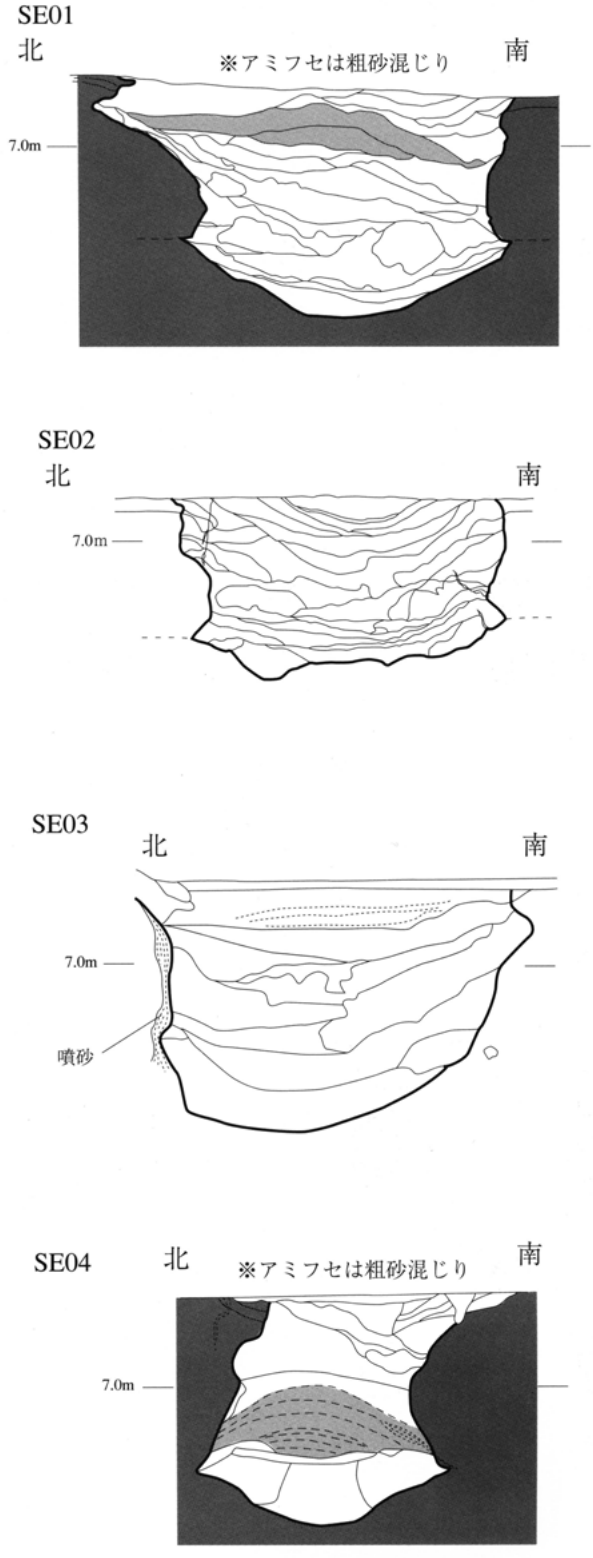
ＳＥ01：断面は本来は円筒形であったようだが、壁面の崩落で変形している。境界付近壁面は下部の粗砂層との境界付近で大きく抉れている。

埋土は大きく上下に分かれ、下部は壁面の崩落土を含み斑状を呈する。上部はいちおう成層的であるが、粗砂、粘土ブロック、シルトなどが小ブロック状をなして、中央部が高くなるような堆積状況、言い換えれば中央部で上から土がふりかけられたような印象を与える土層断面をしている。上部では目立って多いわけではないが炭化物を含んでいる。

ＳＥ02：断面は円筒形を呈する。下部は壁面の崩落土で埋まり、斑状を呈している。裏込め土という感じではない。

上部は成層的で、下部ではウリの種がまとまって出土した。全体に炭化物を含み、廃棄土坑に利用されている。最上部は粗砂層で洪水によって完

図３・２３　94A・Ｂ区井戸（1/40）



全に埋没したようだ。

ＳＥ03：断面は円筒形に近い。下部は成層的である。

ＳＥ04：壁面の中位が狭く下部と上部が広い。最下部には抜き取り痕のような断面が認められる。中位ではＳＥ01と同様に中央部が高くなる互層で、中央部で上から土がふりかけられたような印象を与える。しかし炭化物は含まれていない。

（３）墳墓

ＳＺ01：内径が13m程の円墳の残欠である。南南東に開口部をもつ。周溝内には長方形プランの土坑があり、埋葬施設であった可能性は否定できない。

開口部の西側では須恵器（甕・提瓶）が、東側では土師器（高杯）が出土した。

ＳＺ02：プランは方形気味の楕円形で、6.6×6.2mほどである。周溝からの遺物の出土は無い。中央部に土坑があり、主体部と考えられるが、そのほかに周溝内にも土坑が認められた。

（４）溝

ＳＤⅡ：北東から南西に向けて調査区を貫く。北東部はＳＤ05の再掘削であり、重複関係にある。上部には灰白色シルトが堆積している。遺物は９４Ａ・Ｂ両調査区の境で宇田形甕が若干出土したにとどまる。

ＳＤ09：ＳＤⅡに平行して掘削されている。

ＳＤ10：北ではＳＤⅠを切り込み、南ではＳＤⅡに合流する。中央は土坑状を呈している。上部には灰白色シルトが堆積している。

ＳＤ11：ＳＤ10から分岐する。ＳＸ04と重複するあたりで溝としての形状は不明確になる。９４Ａ区では延長上で多数の溝に分かれるが、自然流路の底部といった印象を与える。

ＳＤ12：ＳＤ05およびＳＤ06の再掘削である。灰白色シルトが堆積していた。ＳＺ02に切られる。

（５）不明遺構

ＳＸ02：灰白色シルトが周溝状に堆積し、中央の円形部分も自然堆積の様相を呈している。倒木痕であろう。

ＳＸ03：焼土粒が堆積していた。炭化物はあまり含まれていない。

ＳＸ04：方形土坑と重複し、輪郭は不明瞭である。自然堆積の状況で埋土には植物遺体も含まれていた。鉄滓がまとまって出土した。

９５Ａ区

（１）竪穴建物

ＳＢ01：正方形プランで主柱穴４本は明確に検出できた。周壁溝がめぐる。北辺に焼土の堆積が見られた。分布範囲が広かったこと、粘土塊を含まなかったという２点からカマドとは認定しなかった。

（２）掘立柱建物

ＳＢ02：１間×２間の６本柱である。

ＳＢ03：３間×３間で北辺がやや開きわずかに逆台形をなす。

ＳＢ04：西辺は３間、南北辺は４間だが、東辺は柱の並びと本数が異なる。

（３）井戸

いずれも構造物は存在せず、断面が円筒形を呈していることから井戸と認定した。しかし、壁面の崩落土が目立つことからいえば、内部構造を有した井戸ではなく、素掘り、もしくは抜き取り後に埋め戻されることなく、そのまま捨て置かれていたのかもしれない。

また、下部に砂層が堆積し、しかもそれが多量

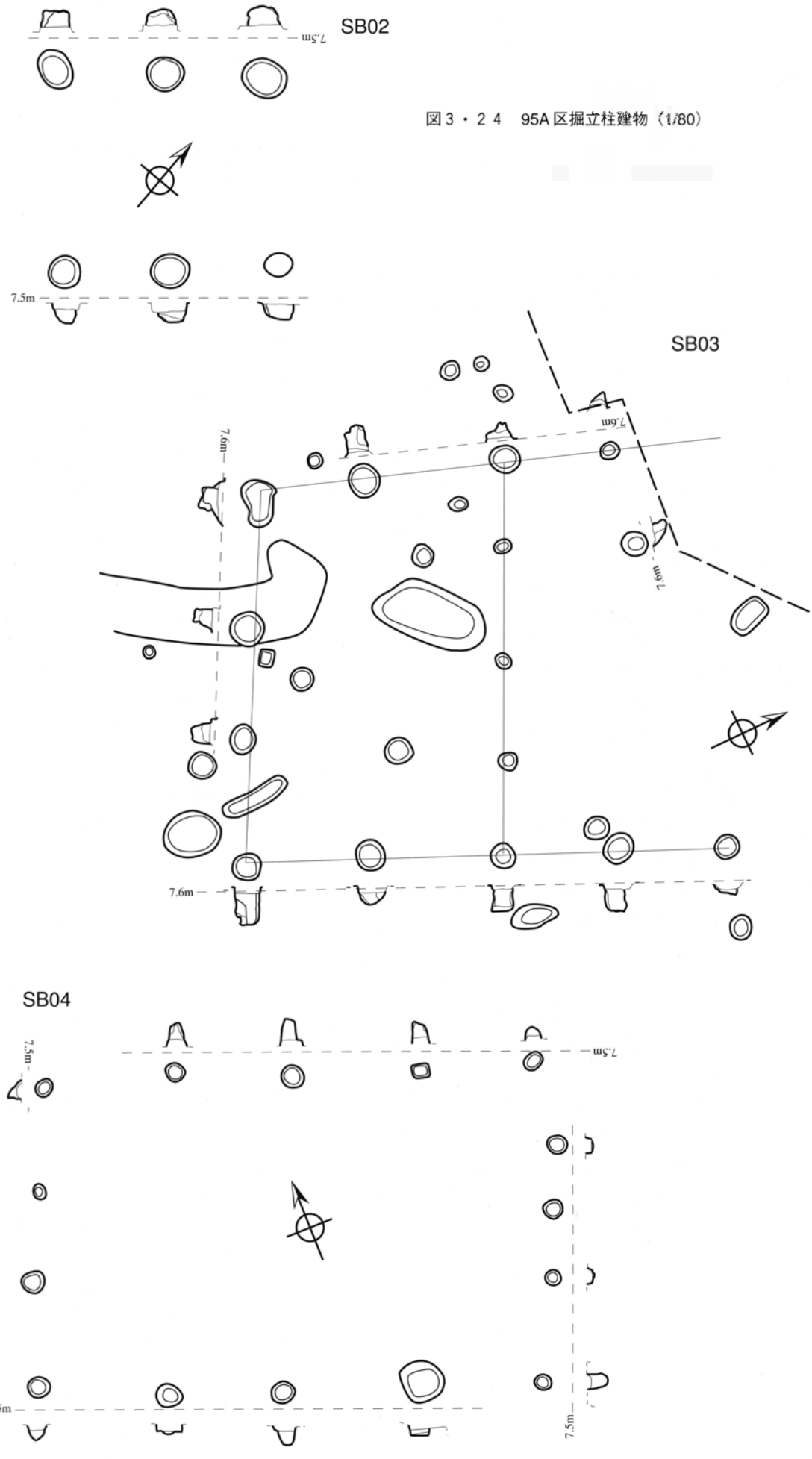
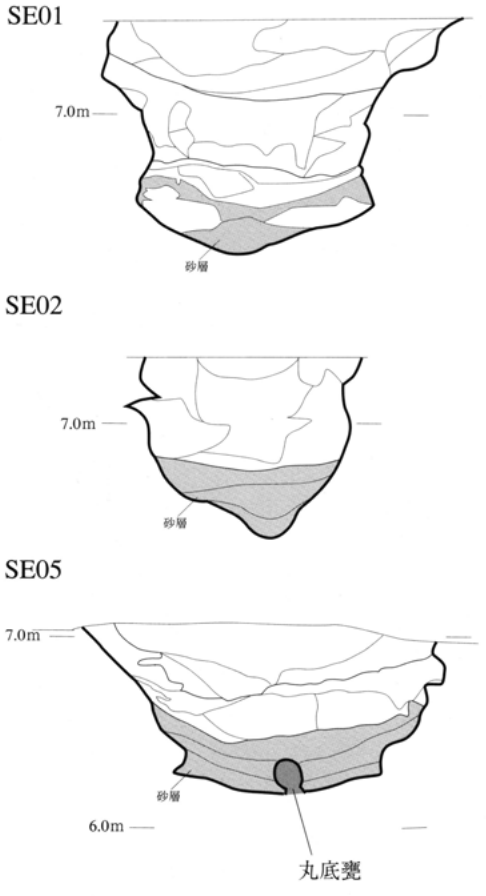


図３・２４　95A区掘立柱建物（1/80）

図３・２５　95A区井戸（1/40）



であることはこれまでの例とは異なっている点である。その理由について明確に判断する材料を持っていないが、可能性としては水位が高かったために壁面が侵食され、それが水平堆積したのだと考えることもできる。

ただし、この場合地下水位が高いのではなく、当該遺構が機能している期間内に水位が上昇したと考える必要が生じる。

ＳＥ01：下部から中部にかけては壁面の崩落土などが堆積し斑状を呈する。上部は粗砂を含む堆積土で、洪水の影響を受けた可能性がある。

ＳＥ02:下部の堆積層にはラミナが観察され、しかも水平堆積であることから水漬き状態であった可能性がある。

ＳＥ05：底面につまみ上げ口縁丸底甕が伏せた状態で遺存していた。埋土は、下部は砂層、中部は斑土、上部は砂を含む斑土であった。

（４）溝

ＳＤ05：北西から南西にのびる自然の窪地を掘り込んで設けられている。ＳＥ01付近では幅広くなっている。

ＳＤ06･07：ＳＢ02を囲むように掘削されている。

ＳＤ09：ＳＥ09に直接つながり、南へ湾曲してのびる。まるでＳＥ09が自噴井戸であるかのようだ。

９５Ｄ区

（１）自然流路

ＮＲ01：北北西から南南西に向かう。Ⅰ期の遺構のうち、とりわけ溝を大きく削り込んでいるために、古代の遺構によって切断されてわかりにくくなっている部分をさらに不明確にした。

（２）溝

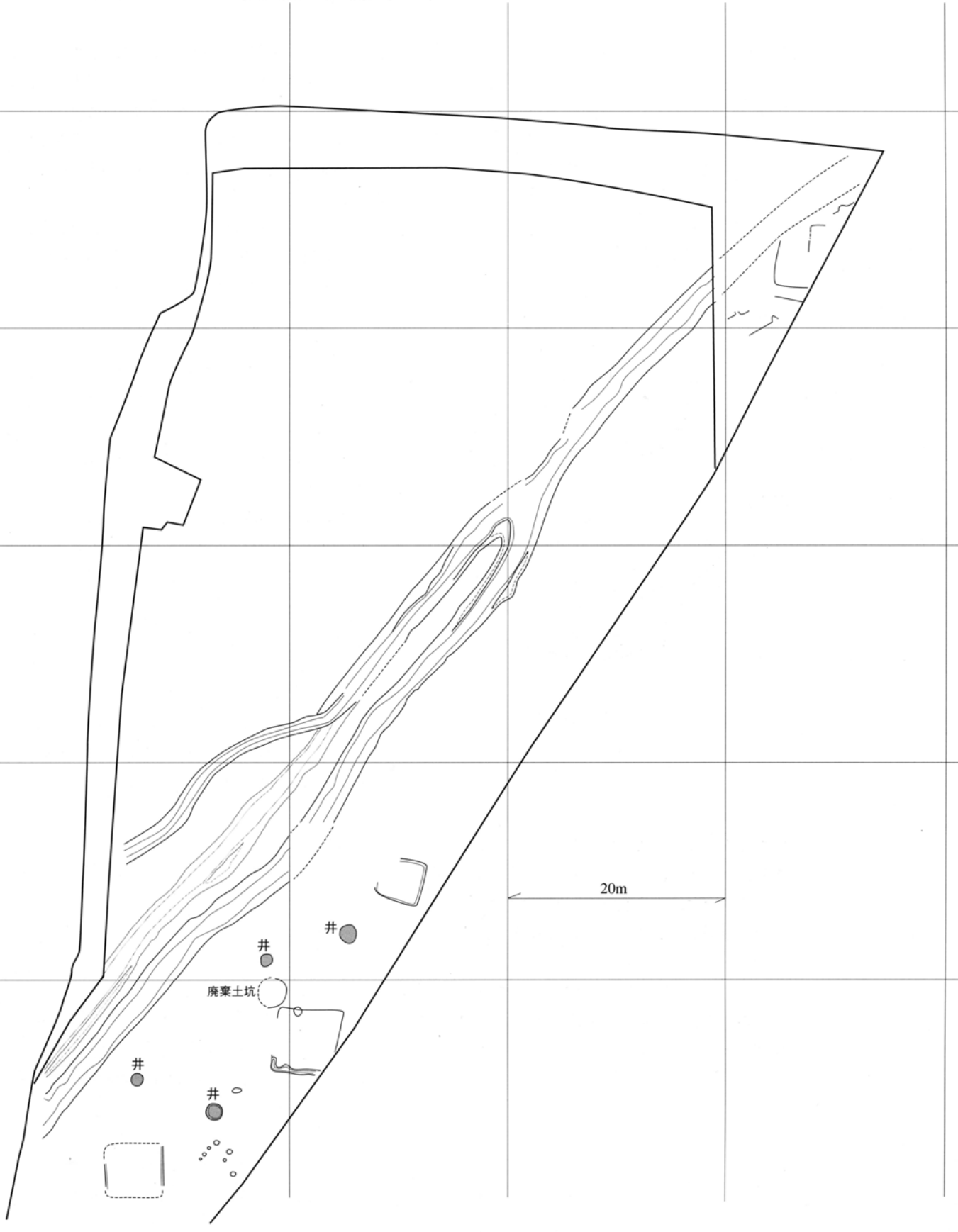
ＳＤ13：ＮＲ01に合流する。断面が箱型の溝である。

ＳＤ14：ＮＲ01に合流する溝であろう。

９５Ｅ区

調査時には竪穴建物や柱穴なども検出したが、溝や井戸以外は遺構としての認定が極めて難しく、包含層の性格についても大毛池田遺跡との整合性

図３・２６　95Eb区古墳時代Ⅱ期遺構群（1/500）



を確保することが困難となっている。時期は古墳時代の土器区分ではⅤ期に限定される。

（1）竪穴建物

ＳＢ01：炭化物層の薄い層を床面と認定して検出に努めたが、住居跡であるかどうかは確証はない。しかし、土器や石製品が出土しており、存在した可能性は高いだろう。

ＳＢ02：輪郭を検出し得たのみで主柱穴を確認するには至らなかったが、竪穴建物としての確証は高いと思う。

ＳＢ04：調査区の北東隅で検出した。まず、サブトレンチにおける土層セクションの観察で炭化物や焼土の薄い層を確認した。同レベルで土器群の出土をみたので竪穴建物（焼失家屋）の存在を予想し、面的な検出に変更し調査を進めた。その結果、土手状の高まりを検出した。これについては大畦畔の可能性もあったが、竪穴建物の周壁および周堤の可能性を支持し、竪穴建物と認定した。調査段階では複数の輪郭が認められたために竪穴建物の同定に苦慮した。ただ仮に複数棟が重複していたとしても、出土土器に時期幅はほとんどなく、竪穴建物の存在を否定するものでは無いと結論した。

（2）土坑

ＳＫ01：断面が擂鉢状の浅い土坑で、土器廃棄が見られた。埋土は薄い層の累重で、炭化物が多く含まれていた。

（3）井戸

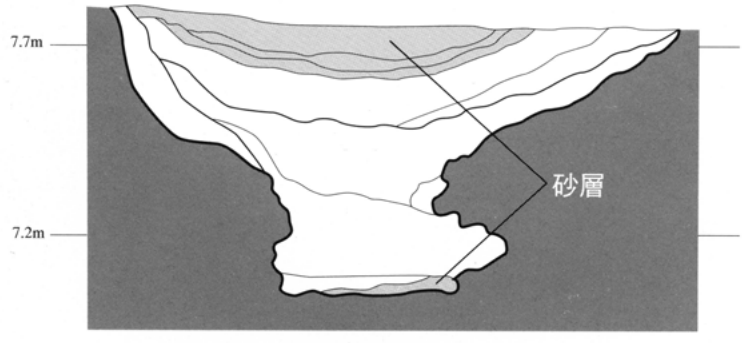
ＳＥ01：下部は円筒形で上部に椀状の土坑が重複する断面で、典型的である。

ＳＥ04：下部はフラスコ状、上部は椀状を呈する。

（4）溝

ＳＤ03：最終段階がこの時期である。この溝より西には当該期の遺構は展開しない。かえって東側への展開が予想される。なお、遺物はほかの溝からも出土しているが、おそらく埋没の最終段階に流入したもので、遺構として機能していたわけではなかろう。

図３・２７　95E区SE04（1/20）



C．古　代

古代は、８世紀代までの前半期と９世紀以降の後半期に大別でき、さらに前者は溝の展開状況から２時期に分かれる。つまり、前者を古代Ⅰ期、Ⅱ期、後者を古代Ⅲ期とする。

'94調査区はⅢ期が中心で、'95調査区はⅠ期・Ⅱ期とも比較的密度の高い分布を示す。しかしその性格をみると、集落が広範囲に展開するのはⅠ期のみで、Ⅱ期は居住地区が狭く限定されるようになる。もちろんこのことは調査区に限定してのことであるが、Ⅰ期とⅡ期の変化を大規模なものと見ることは可能である。そして、９５Ｄ区以北では各種規模の溝群が展開し、大毛池田遺跡との連続性が明瞭になる。

Ⅰ期・Ⅱ期

９５Ａ区

調査区の東部に集中して検出された。６世紀代が西部に集中していたのとは対照的であり、地表面標高の逆転現象が背景にあるのであろう。

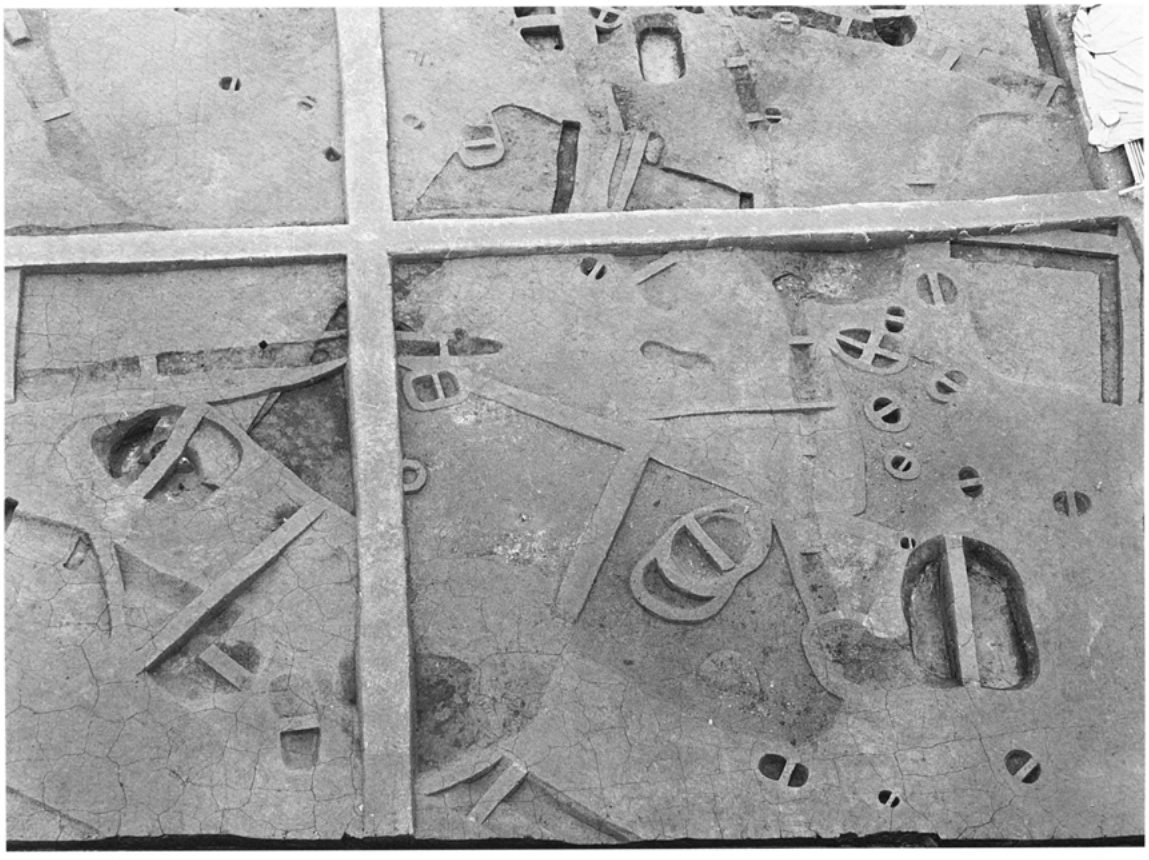
遺構は各種検出されているが、中世および近世段階での削平が著しいために、残存部分は掘形の下部がわずかに確認できたのみである。本来なら竪穴建物に伴うべきカマドさえ検出できていない状況にそれが反映されている。

（１）竪穴建物

ＳＢ05：深さ約５cmほどの掘形が検出できたに過ぎない。主柱穴は４本である。

ＳＢ06･07：重複して検出された。いちおうＳＢ06が新しいようであるが、この場合も掘形がわ

図３・２８　95A区北東部における遺構掘削状況（東から）



ずかに確認できたのみである。ＳＢ07は西辺で辛うじて炭化物の集中箇所が認められ、カマドと認定した。

ＳＢ08：掘形下部がわずかに検出できた。主柱穴は４本である。カマドの有無は不明。

（２）掘立柱建物

ＳＢ09：1間×2間だが、南辺の柱のとおりが悪い。

（３）溝

ＳＤ10：検出された掘形は深さ約５cmで、本来は南にのびていた可能性が高い。

ＳＤ11：ＳＤ10に平行している。検出状況は同様である。

ＳＤ12：ＳＢ08を切りこんでいる。ＳＢ05との先後関係は不明である。二又に分岐してＳＢ06・07を囲むように位置している。建物周囲の排水溝の可能性もあるが、南への延長は検出されておらず、詳細は不明である。

ＳＤ13：居住域の南限を画すると思われる溝である。

９５Ｂ区

やはり削平が著しいために建物遺構は掘形下部をわずかに検出しえたに過ぎない。居住域であることから柱穴の検出に努めたが、上面での検出は容易でなく、結局は下面での検出となった。したがって、こうした方法で確認できたのはあくまで掘立柱建物であり、竪穴建物の柱穴についてはわからない点が多い。

（１）竪穴建物

ＳＢ01：掘形・柱穴ともに比較的良好に検出できた。カマドは炭化物の分布が濃い部分をそれと認定したもので、粘土などの基礎構造を確認したわけではない。厳密にはカマドではない。

ＳＢ02：炭化物の薄い層の広がりを追跡してプランを認定した。

ＳＢ03：掘形の深さは約10cmで、当調査区においては良好な状態であった。北辺にカマドが設けられていたが、中世の溝によって切断されていた。カマドは北辺から突き出すことはないが、18cm離れて長さ100cmの炭化物の充満した溝があり、煙道であった可能性がある。

ＳＢ06：北辺にカマドが設けられ、壁溝がめぐる。カマドの周囲には灰（藁灰か）が堆積層をなしていた。

ＳＢ07：ＳＢ06に切られている。北辺にカマドが設けられている。

ＳＢ08：北辺にカマドが設けられている。

（２）掘立柱建物

ＳＢ10：下面で検出した。1間×４間である。

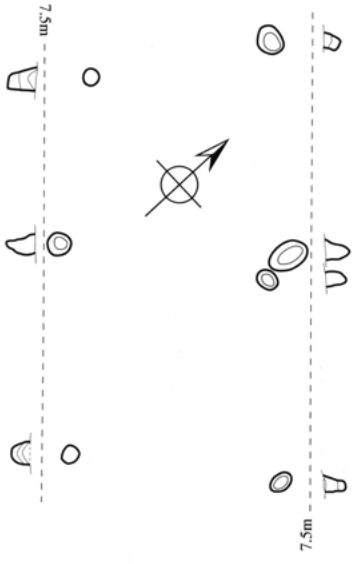
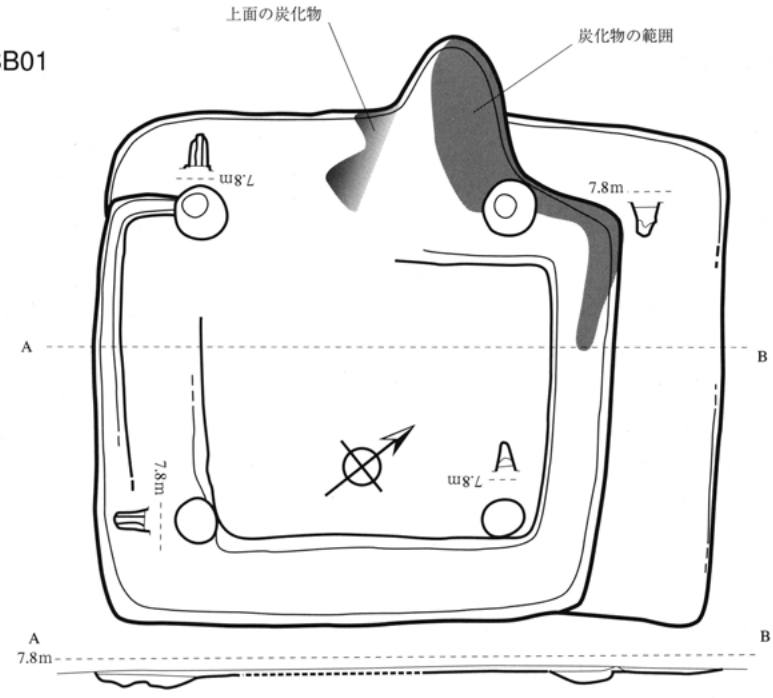


図３・２９　95A区SB09（1/80）

図３・３０　95B区SB01・03（1/80）



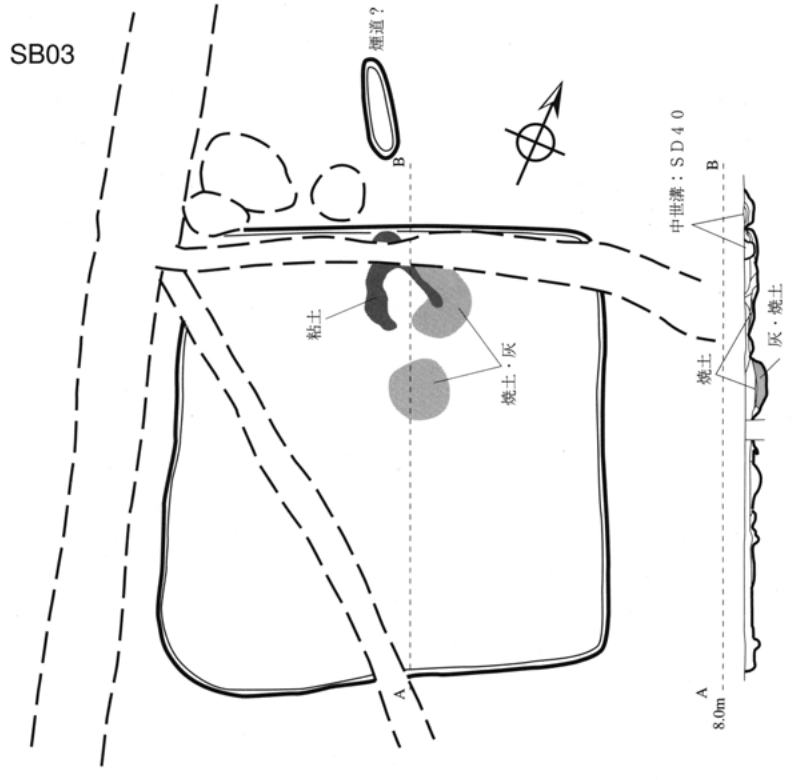


図３・３１　95B区SB06・07（1/40）

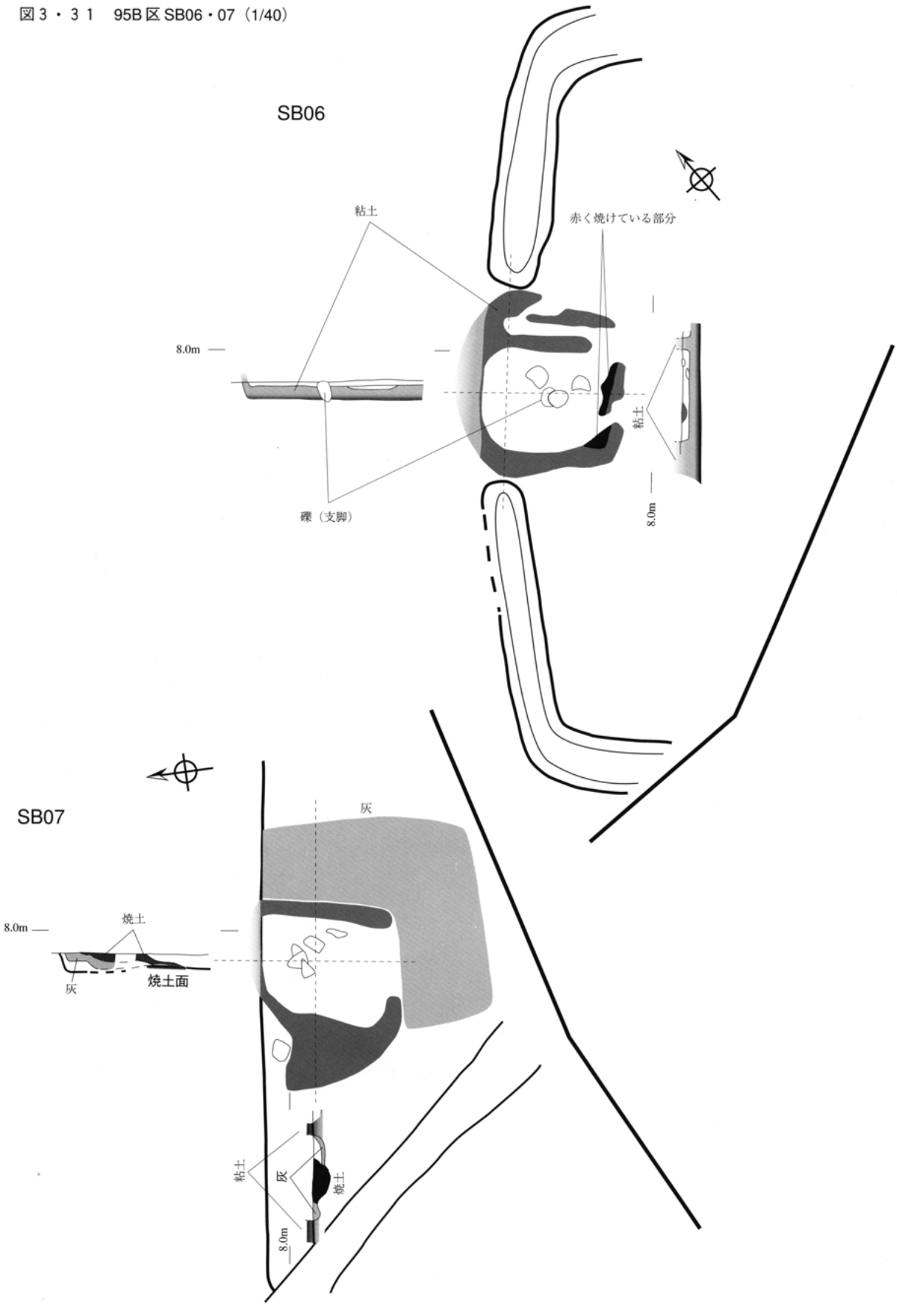
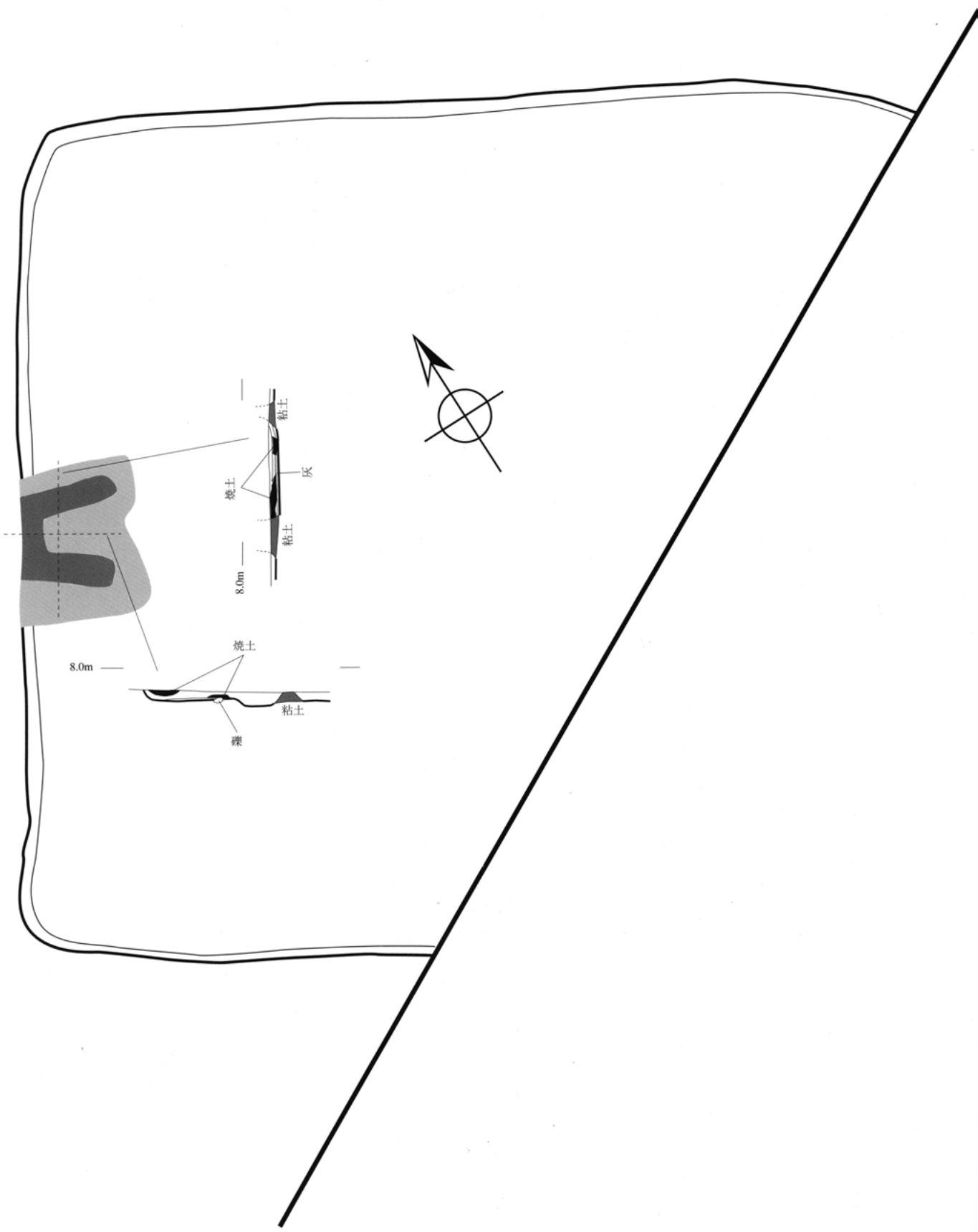


図３・３２　95B区SB08（プラン1/80, セクション1/40）



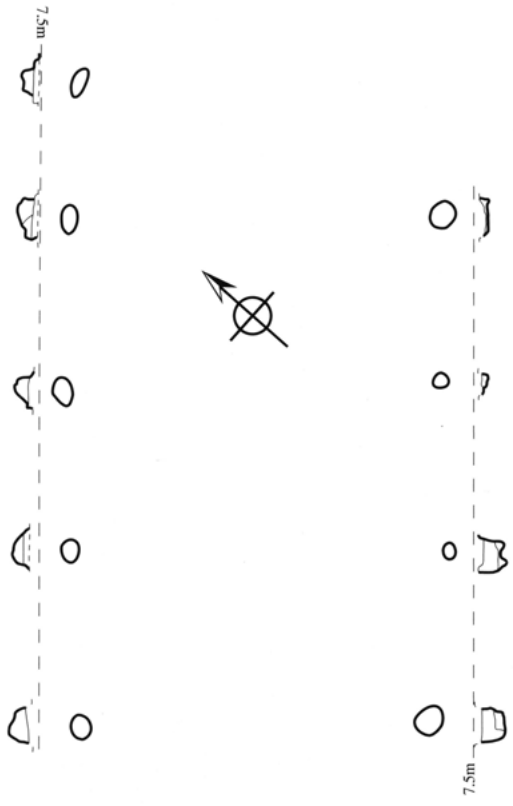


図３・３３　95B区SB10（1/80）

ＳＢ11：竪穴掘形は検出できなかったので掘立柱建物と認定した。

ＳＢ12：竪穴掘形は検出できなかったので掘立柱建物と認定した。

（３）溝

ＳＤ07：断面は壁面傾斜のゆるいＵ字形である。ＳＤ11・13との関係は不明だが、後者とは軸線を共有し、基本的区画に関係すると考えられる。

ＳＤ08：ＳＤ07に接続する。断面逆台形のしっかりした溝。

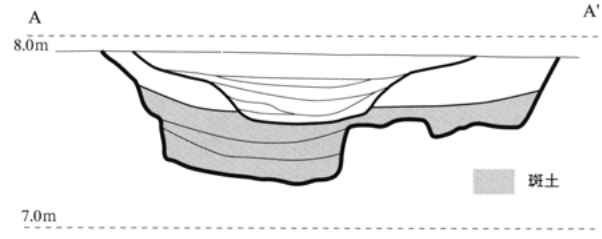
ＳＤ09：北から伸びるＳＤ11・15と北東から伸びるＳＤ10が重複して切り合い関係を有する。

ＳＤ11・15：一連と考えられる。断面逆台形で、上部には粗砂層・細粒砂層が堆積している。ＳＤ10より新しい。

ＳＤ10・14：一連と考えられる。ＳＤ23との連続は明確ではない。土層観察では斑土を切り込む逆台形の溝が確認でき、整地後に再掘削されているようだ。この溝にも下部に斑土が堆積している。

ＳＤ13：壁面はゆるいＵ字形で、自然埋没のようだ。

SD23



SD14

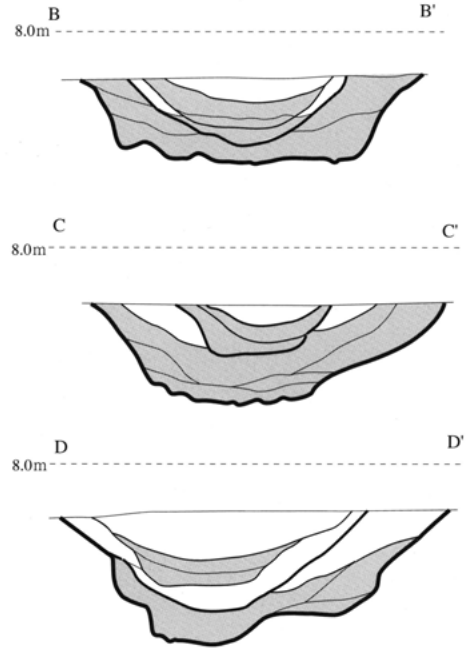


図３・３４　95B区古代溝セクション
※セクション位置は図３・35に表示。

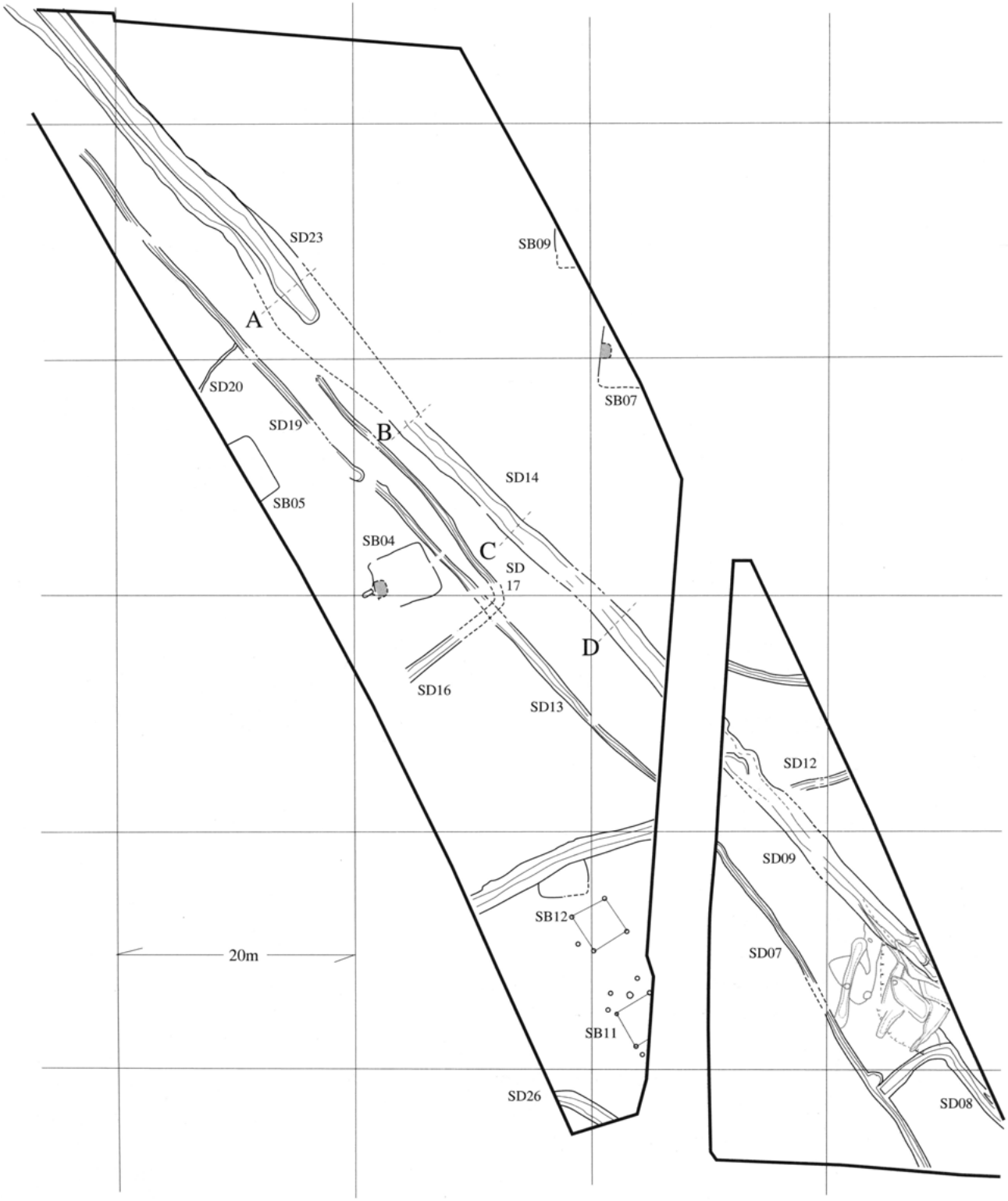


図３・３５　95B区古代Ⅰｂ期遺構配置図（1/500）

ＳＤ16：中世の土坑に切られており、ＳＤ13との接続は不明。斑土が堆積しており、整地された可能性が高い。

ＳＤ18：ＳＢ03より新しい。ＳＤ14との接続部分は一段落ち込み、土坑状を呈する。

ＳＤ19：下部に斑土が堆積し、上部は自然埋没のようだ。

ＳＤ21：ＳＤ19より新しい。南西端でＳＤ22に接続するあたりでは斑土が堆積している。

ＳＤ22：ＳＤ21に直交する溝として検出したが、付近の層位は複雑で、本来はＳＸ01に接続するのかもしれない。

ＳＤ23:北側にテラスをもつ複合した溝で、下部には斑土が堆積している。最終段階は上部に重複してＳＤ10･14で確認した断面逆台形の溝が連続するようだが、斑土の堆積は認められない。

下部の溝はＳＤ22付近で収束し、陸橋部ではないものの浅くなる可能性がある。

ＳＤ24･25：ＳＤ22と軸線を共有する。

ＳＤ26：断面逆台形の溝で、上部には古代Ⅱ期の溝が重複している。

９５Ｃ区

調査区北東部では中世の遺構、とりわけ柱穴群が濃密で、古代の柱穴との識別は至難であった。そのため一面下げて検出に努めたが、古代の柱穴であるという確証をえることはできず、かえって中世の遺構である可能性を高めた。そこで、ここでも上面での検出を断念し、下面での柱穴検出に切り替えた。しかし、竪穴建物は中世遺構検出面よりは下であったがそれほど下げることなく検出ができ、９５Ａ区や９５Ｂ区に比較して遺存状態は良好といえる。

図３・３７　95C区出土
美濃刻印須恵器

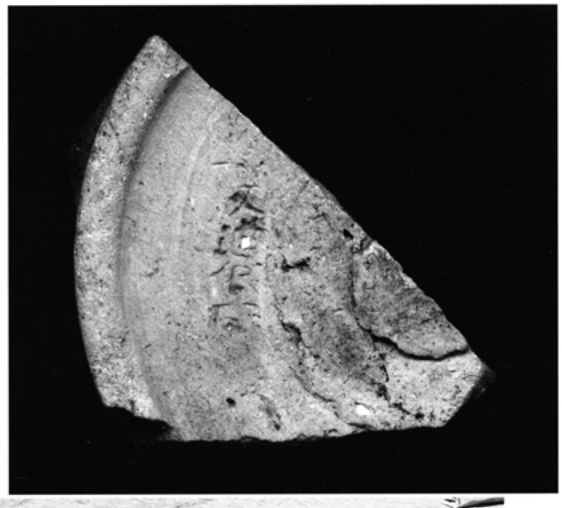
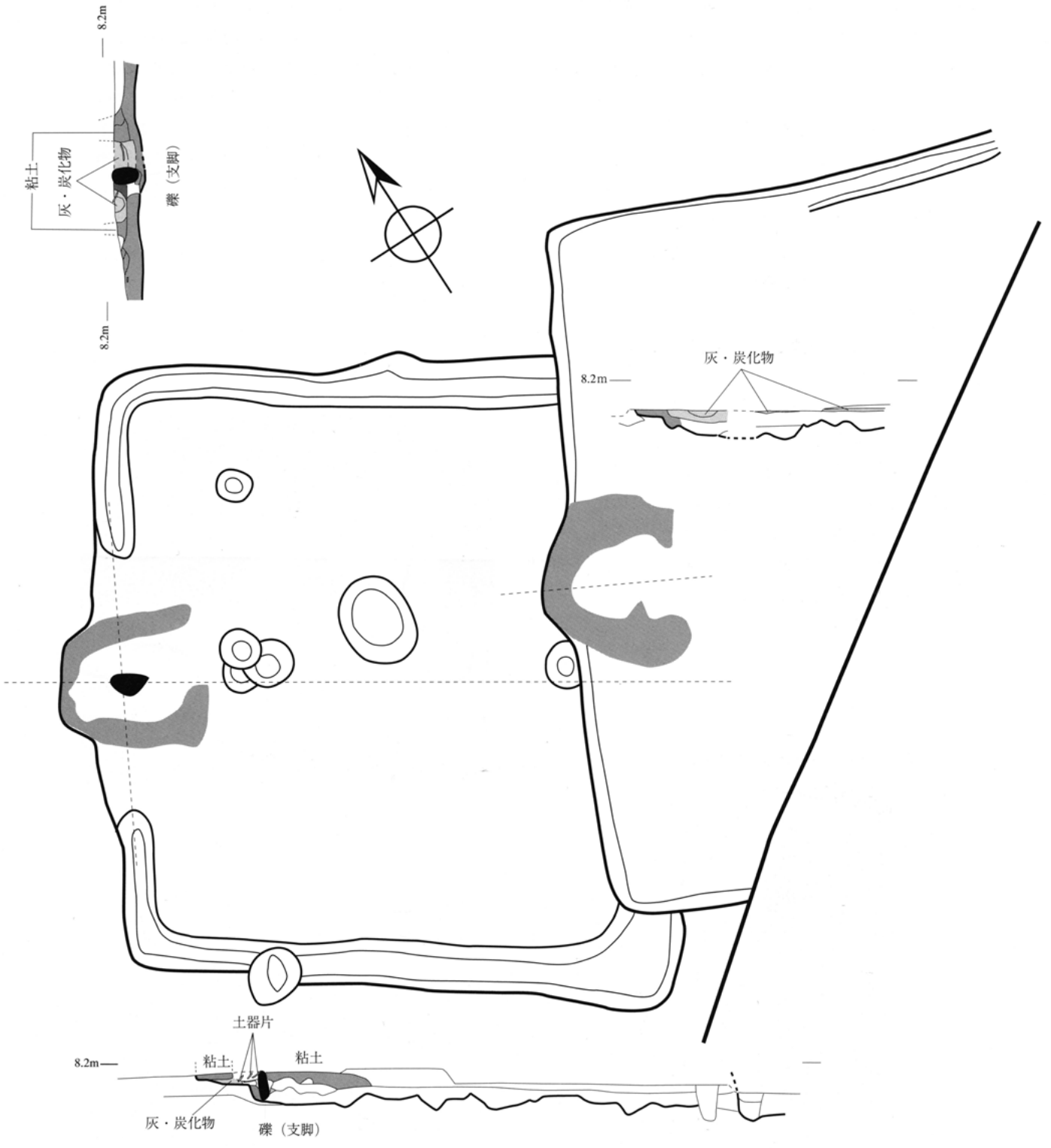


図３・３６　95C区SB08（南東から）



図３・３８　95C区SB02・03（1/40）



（1）竪穴建物

ＳＢ01：調査区南東壁際で検出した。炭化物の薄層を指標にプランを追跡した。

ＳＢ02：西北辺にカマドを設け、壁溝がめぐる。

ＳＢ03：ＳＢ02に重複し新しい。西北辺にカマドが設けられている。

ＳＢ06：北辺東寄りににカマドが設けられている。カマドの輪郭は不明瞭である。カマド部分からは製塩土器杯部口縁部片が出土した。ＳＢ07に切られる。

ＳＢ07：北辺東寄りにカマドが設けられているがカマドの輪郭は不明瞭。製塩土器杯部口縁部片が出土した。

（2）掘立柱建物

ＳＢ08：２間×２間の総柱建物である。

ＳＢ09：柱のとおりが悪く、このように復元できるかどうかは確証がない。

ＳＢ10：１間×１間の４本柱で、上面で検出できなかった竪穴建物の柱穴の可能性もある。

（3）溝

ＳＤ01：９５Ｂ区ＳＤ23の延長部と考えられる。

９５Ｄ区

古代の遺構検出に際しては、中世遺構検出面より少し下位に検出面を設定した。水路を挟んだ南西部と北西部の小調査区では様相が異なる。北西部では古代Ⅱ期の溝を中心に検出され、そのほか確実な遺構を検出できなかったのに対し、南西部では現代の攪乱による破壊が著しいことと竪穴建物の重複が激しいことから、遺構の検出・認定に手間取った。したがって、南西部調査区での遺構認定には限界があり、記述も概略するにとどめる。

（1）竪穴建物

竪穴建物の掘形輪郭は複雑に配置し、１棟と

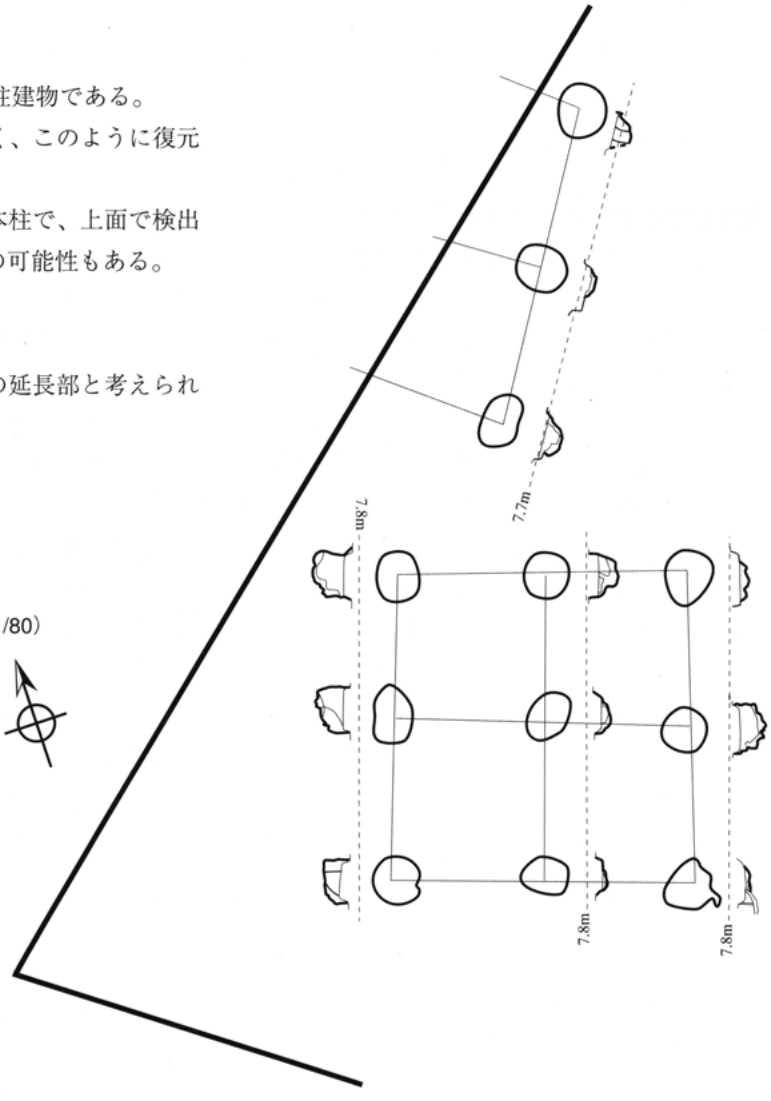


図３・３９　95Ｄ区SB09・10（1/80）

してのまとまりを認定するのは容易ではない。カマドの検出数が少ないことから言えば、果たしてすべてを竪穴建物にしてよいのか躊躇する。柱穴もほとんど検出できなかった。

（2）掘立柱建物

ＳＢ09：２間×２間の総柱建物である。

ＳＢ10：調査区西壁際での検出であったので、柱穴が一部検出できたにとどまる。

（3）溝

ＳＤ15･16:それぞれ分離して検出されたが本来は一連であったろう。竪穴建物とは重複関係をもつが、掘立柱建物とは距離があり、時期差があることを示している。

ＳＤ18：ＳＤ15･16に接続する可能性がある。

ＳＤ21：北東から南西にむけてゆるやかに蛇行しながら続く。

ＳＤ23：上部には中世の溝（ＳＤ37・38）が重複し完全に残っていたわけではない。

下部は断面箱型を呈し、溝底部幅で3.6ｍを測る。上部では幅が8～9ｍ程度あったものと思われる。埋土はほとんどが砂層で、上部には粗砂層が堆積しており活発な水流のあったことが窺える。

ＳＤ24：断面が箱型を呈する、幅約6mの溝である。上部には粗砂層が堆積し、下部にはシルト層が堆積していた。南部では下部に焼土や炭化物が多量に堆積し、その由来が問題となる。

ＳＤ26：断面逆台形を呈する幅約10mの大溝である。埋土はほとんどが粗砂層で流木や木葉なども多量に含まれ、一見自然河川のようであった。

ＳＤ27：輪郭不明な溝で、ＳＤ26から分岐する。埋土はシルトで、ＳＤ26が活発な流路となっていた時期には分離していたと考えられる。

ＳＤ28：断面Ｕ字形で、ＳＤ26埋没後に掘削されている。ＳＤ26の走向に一致していることから、ＳＤ26上部が完全に埋没していない段階で掘削されたものであろう。埋土には粗砂が含まれ、水流のあったことが伺える。

（4）焼土遺構

竪穴建物の存在が明確ではなくカマドとは認定できない焼土面が複数検出されている。

９５Ｅ区

水路を挟んで二つの小調査区に分かれる。南西部は９５Ｄ区の続きで溝が多数検出され、竪穴建物はそれに寸断された状況である。北東部は竪穴建物が集中し、輪郭が不確定でカマドのみ検出できたものも複数あった。

（1）竪穴建物

竪穴建物は、掘形については調査区北東部で良好に検出し得たものの、柱穴は容易に見つけ出せなかった。また、これまでの調査区とは異なり下面との高度差も大きいために掘立柱建物も未検出である。

ＳＢ05：カマドが調査区北西壁内で検出された。一回り小規模なＳＢ06が重複していた。

ＳＢ12～14：３棟が重複して検出された。このうちカマドが確認できたのはＳＢ13である。

ＳＢ18：プランを確認することはできなかったが、カマドが良好な状態で検出できた。カマドは馬蹄形に粘土が置かれ、中央に美濃系平底甕下半に粘土を充填したものを倒立して支脚としていた。

ＳＢ32：小規模な竪穴建物である。カマドははっきりしなかったが、西辺に炭化物や灰の堆積した溝状部分が取り付いており、煙道の可能性が考えられた。ただ、レベルが床面とほとんど同一であり、確証はない。

図３・４０　95E 区竪穴建物１（1/80）

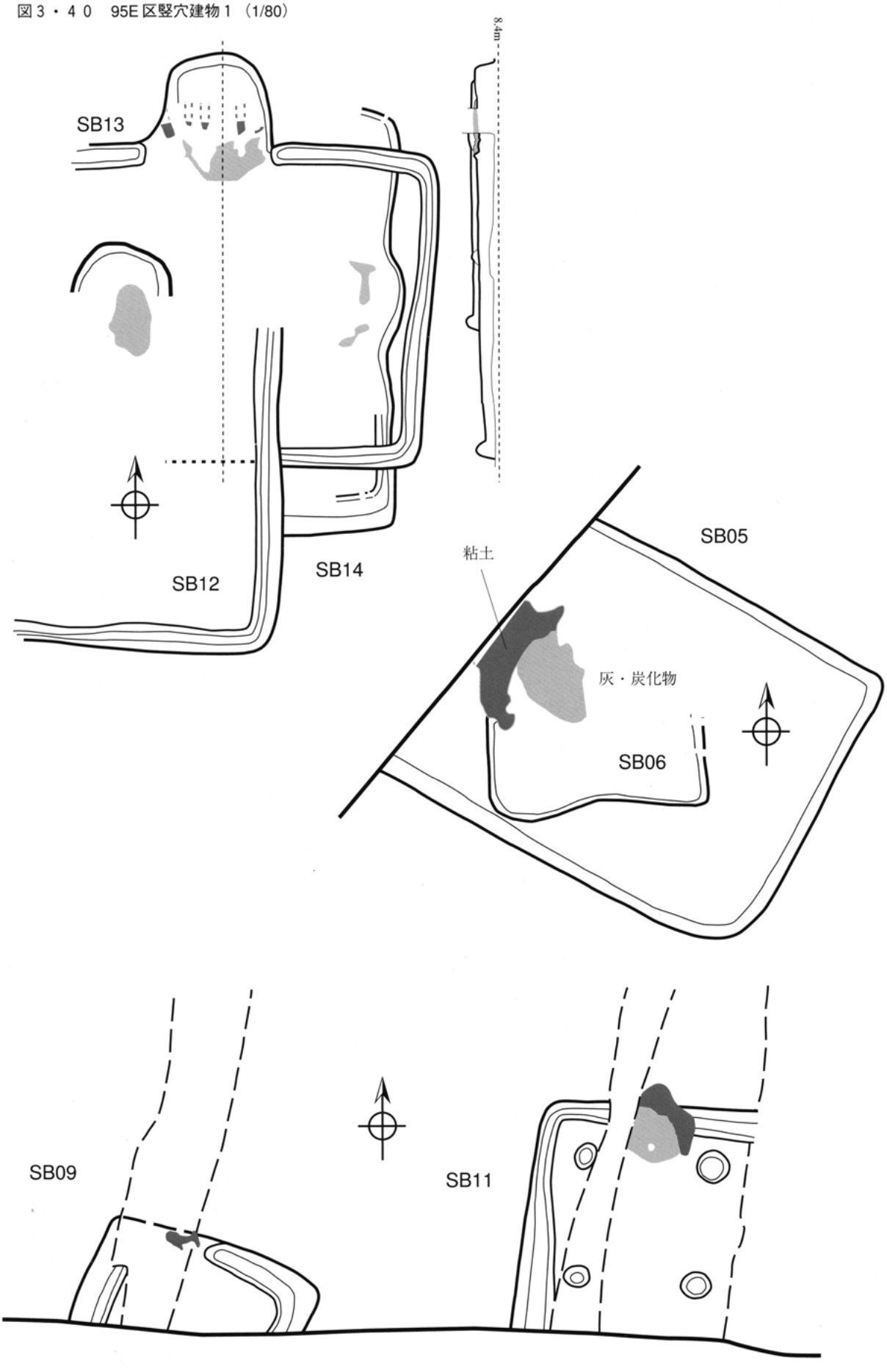


図３・４１　95E 区竪穴建物２（1/80）

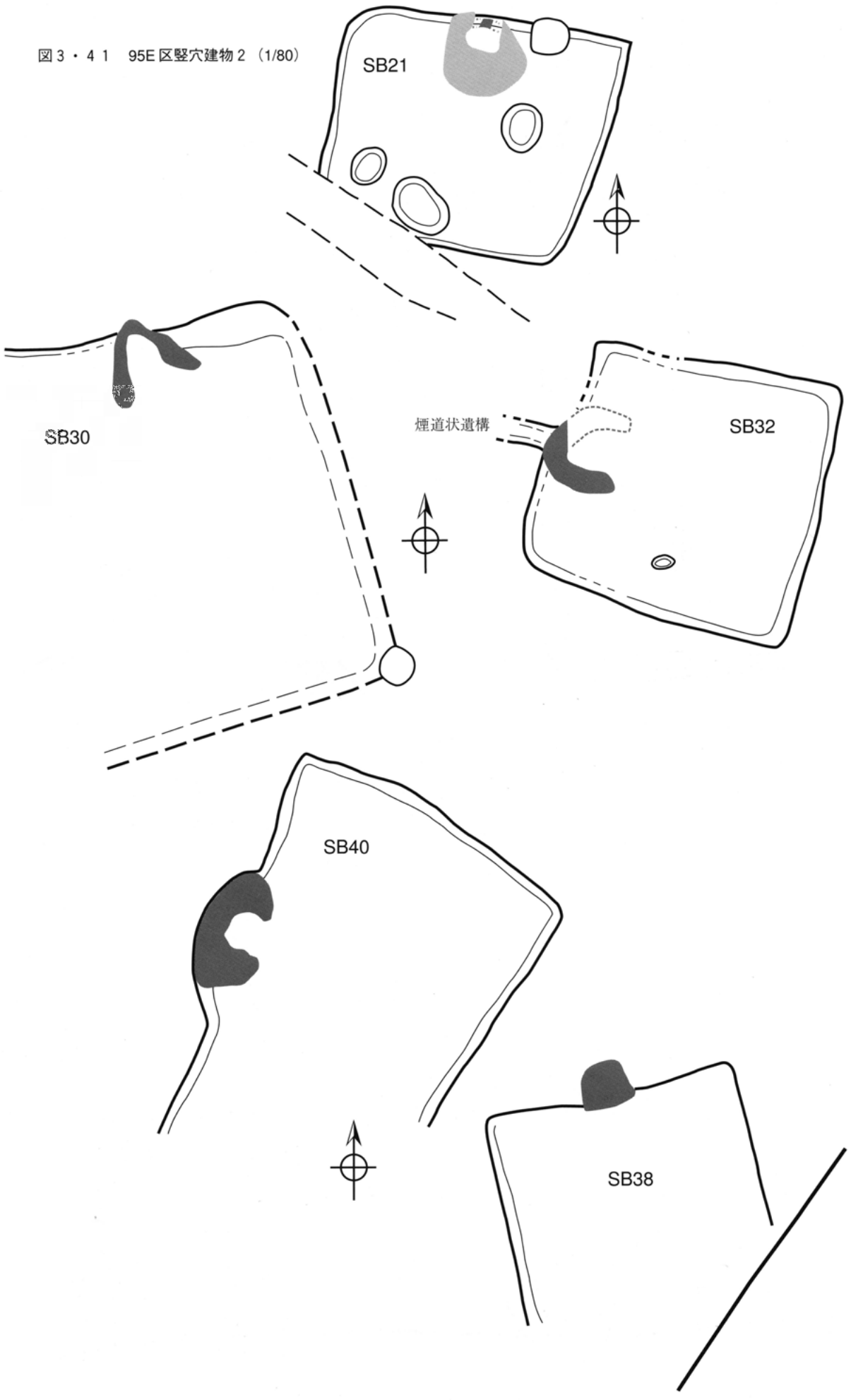


図３・４２　95E 区竪穴建物３（1/80）

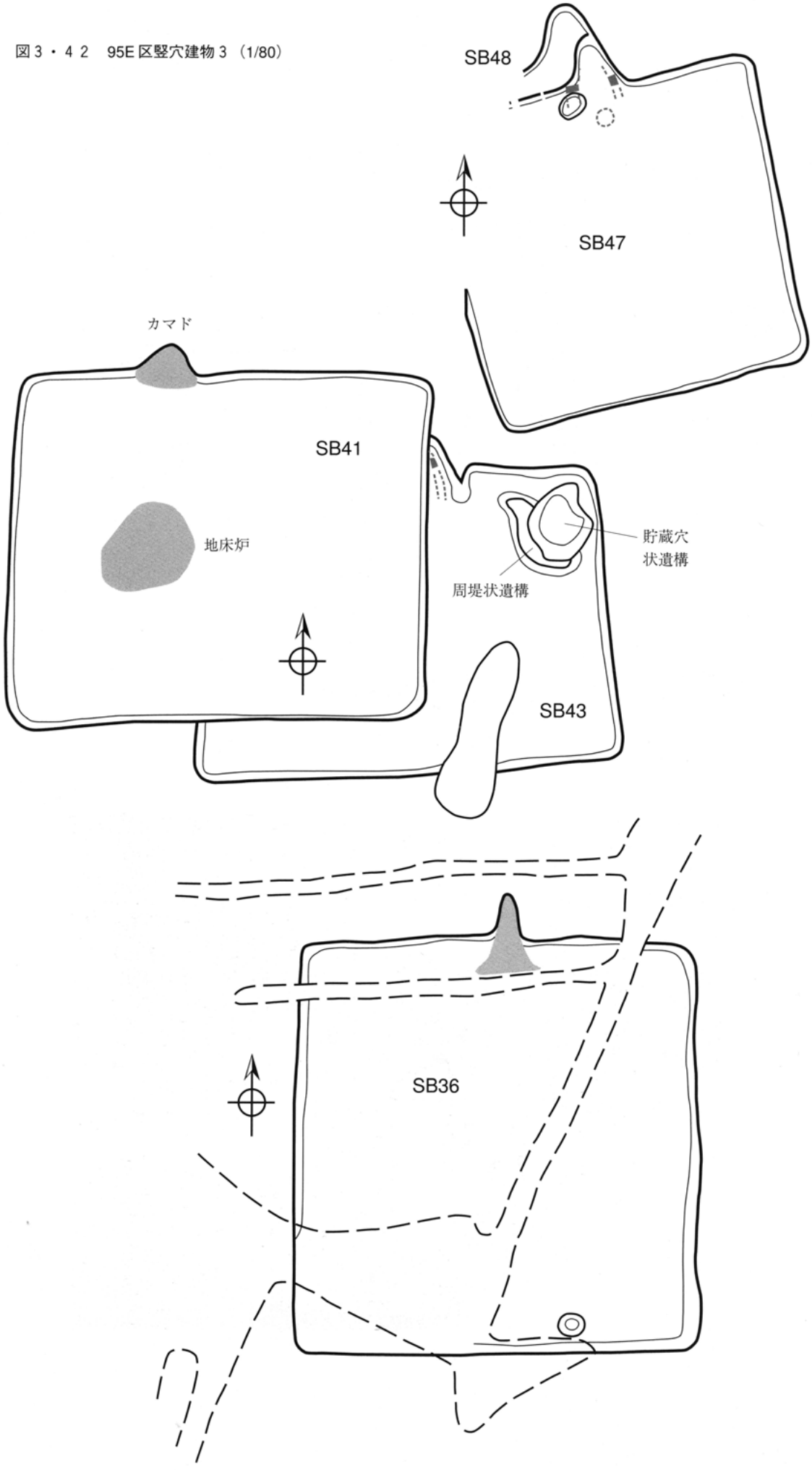


図３・４３　SB18カマド（1/20）

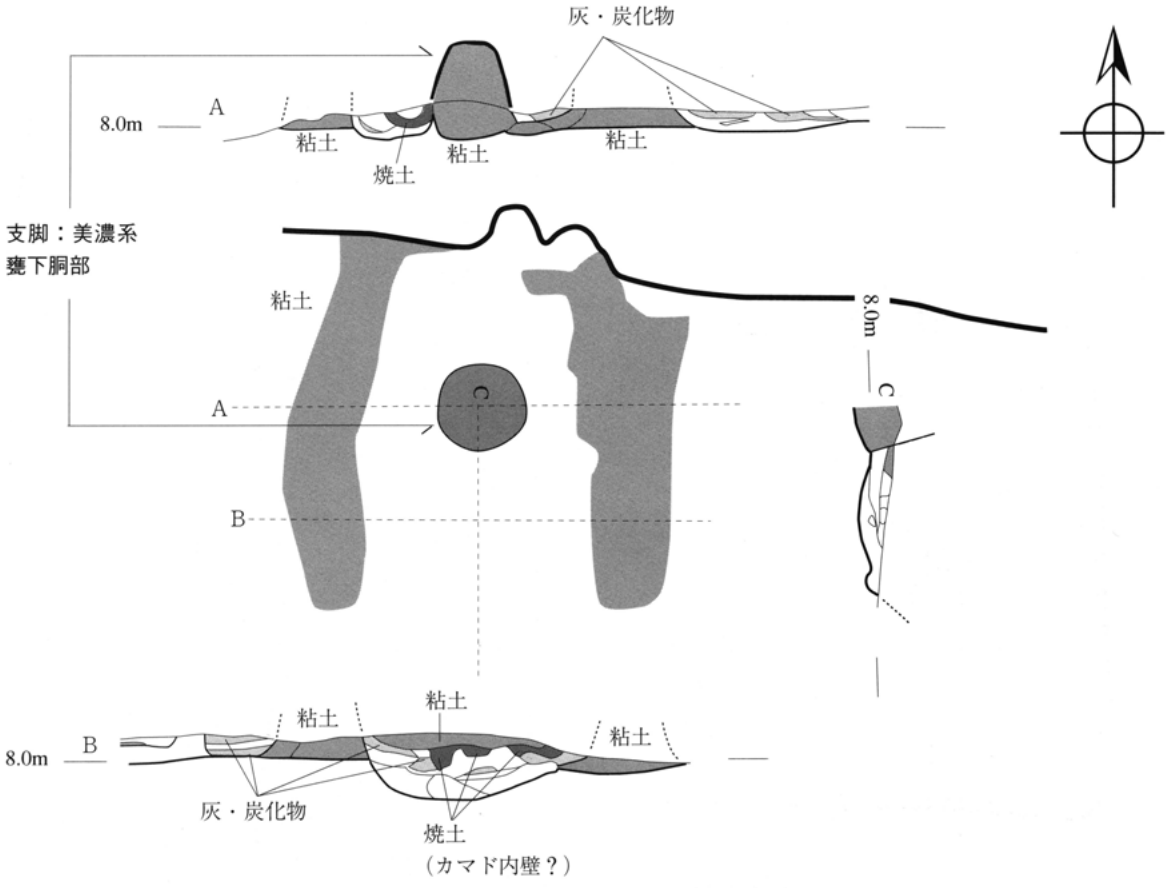


図３・４４　SB17カマド（東から）



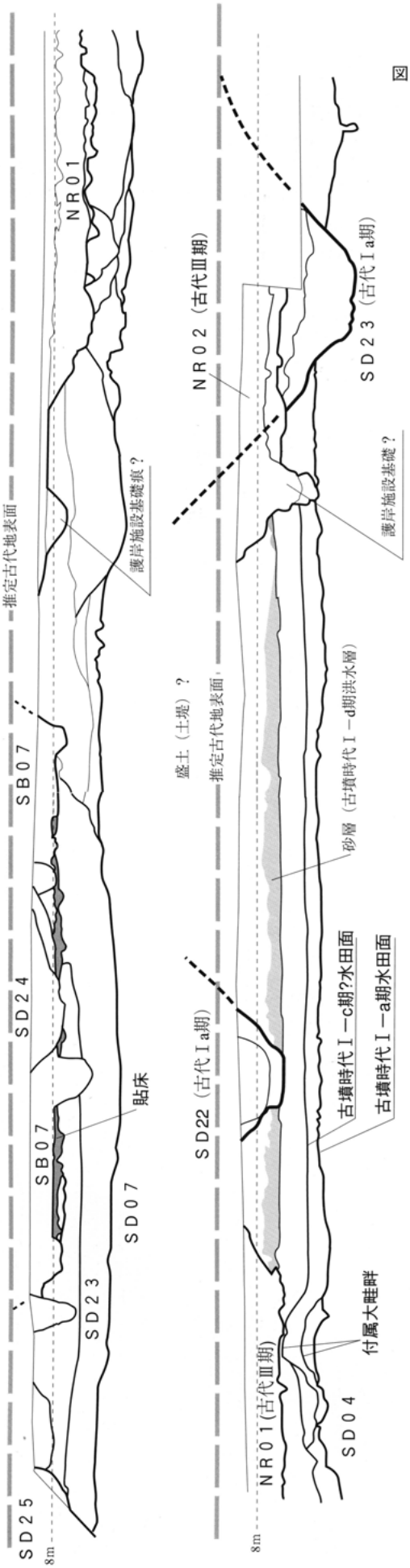


図３・４５ 95Ea区東西セクション（1/40）

（２）溝

ＳＤ15：複雑な掘形であるが、基盤の崩壊によるもののようで、埋土には地山ブロックが多く含まれていた。

ＳＤ16：斑土が堆積した断面が幅広で浅い皿型を呈する。一部しか検出できなかったが、土層セクションの追跡でＳＤ15にほぼ平行して掘削されていることを確認した。

ＳＤ17･18：平行する断面逆台形の溝である。前者は調査区南東壁よりで複数の溝が重複する様子であるが、基本的には平行する２条を単位とする。「道」の側溝と考えられる。竪穴建物と重複して先後し、存続期間は短かったと考える。

ＳＤ20：大毛池田遺跡から続く当遺跡群を代表する大溝である。ＳＤ15と同様に基盤崩壊が認められるが、これは水流による侵食の結果であろう。西部小調査区では水流の攻撃面に相当する部分で皿状、土坑状の凹部が多数検出され、これなども水流による侵食の結果を示すものと考える。

図３・４６　SB26遺物出土状態（東から）



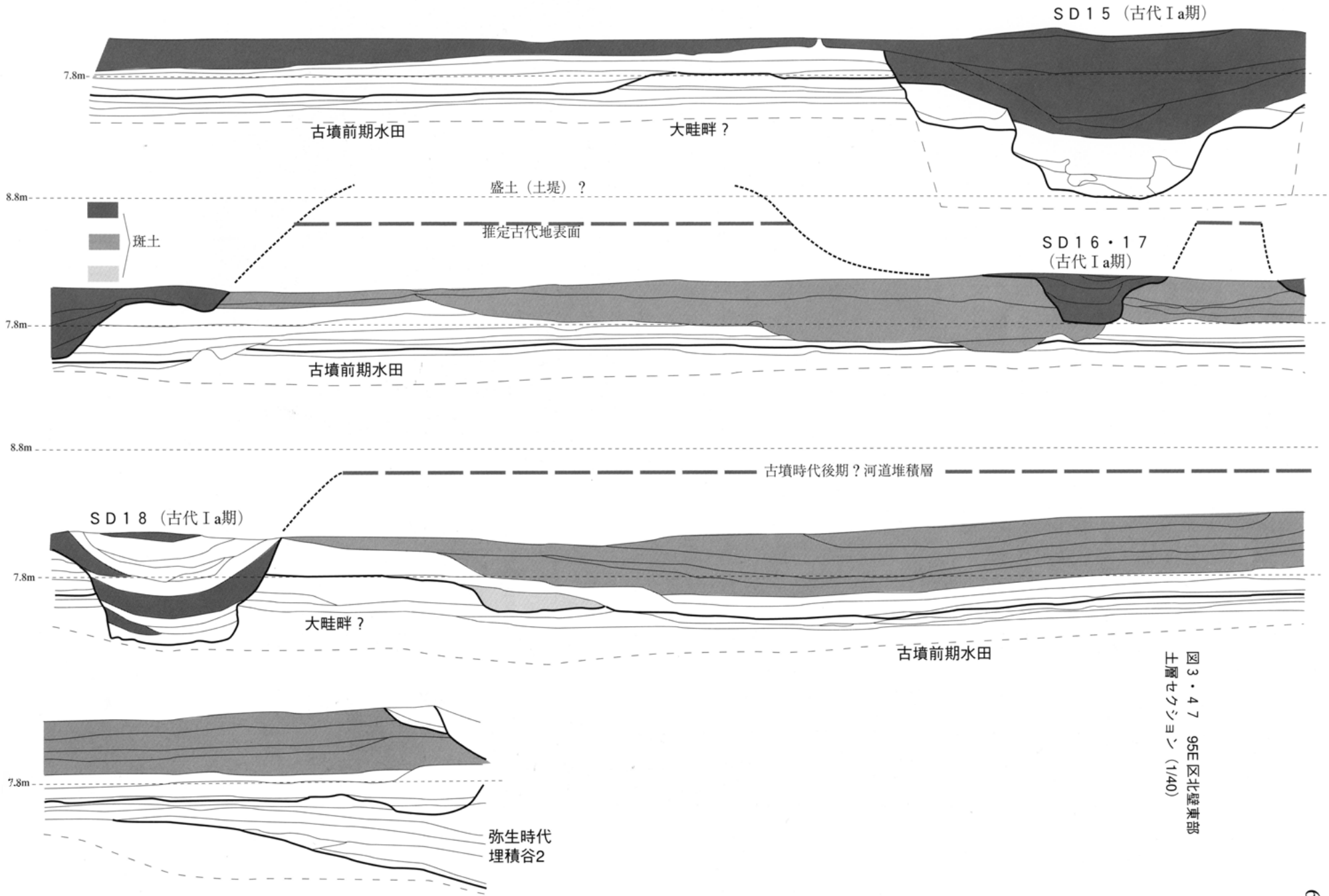


図３・４７　95E区北壁東部土層セクション（1/40）

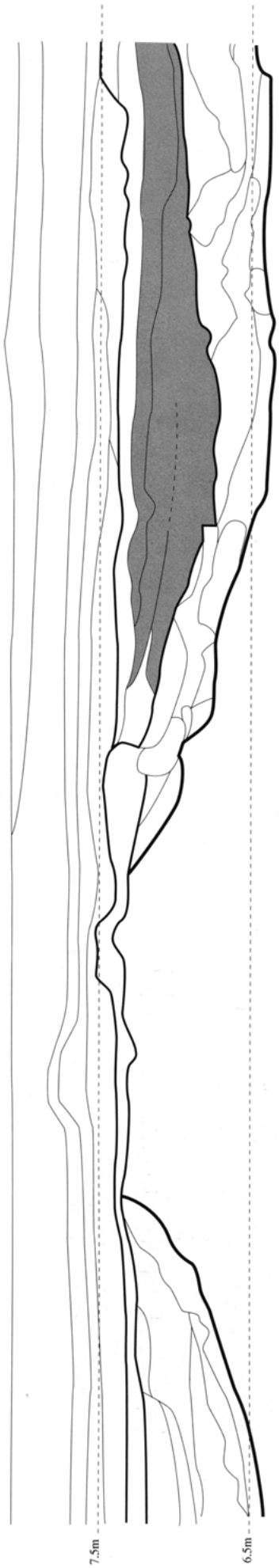
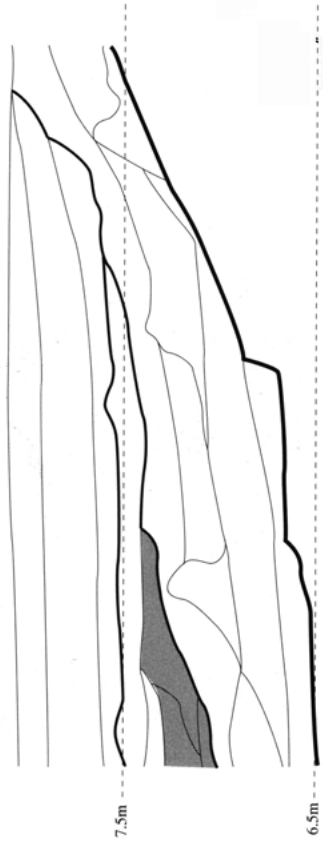


図３・４８　95E 区北壁西部
土層セクション（1/40）



そして調査区南端では滞留が認められ、自然流路との合流点が近いことが窺える。

ＳＤ21：断面逆台形の安定した形状を示すが、堆積層は非常に乱れ、一部液状化している。

ＳＤ22：断面逆台形の溝で掘り直しが一度認められる。

Ⅲ期

９４Ｄ区

大規模な落ち込みが３ヶ所検出されているほかに特に目立った遺構は検出されていない。遺構検出面が低すぎた可能性もある。

（１）不明遺構

ＳＸ01：緩やかに落ち込む窪地で、下部は二つ程度の土坑が連結した状況を呈する。

ＳＸ02：下部は長楕円形の土坑状で、上部は不整形な落ち込みが取り巻く。墨書陶器が出土している。

ＳＸ03：下部は楕円形の土坑で、上部は不整形な落ち込みが取り巻く。

９４Ｃ区

溝が１条検出されている他にこれも目立った遺構は検出されていない。中世の削平が著しいためであろう。

９４Ａ・Ｂ区

古代の遺構は検出されていない。

９５Ａ区

調査区東部でⅠ期の遺構に重複して検出された。粗砂層によって被覆されているのが通常で、９５Ｄ区・Ｅ区での自然流路の展開と無関係ではないと考えられる。

（１）掘立柱建物

ＳＢ10：中世の遺構と重複しているために、柱穴に不明なものがある。柱穴の深さは４隅が深くなっている。２間×３間。

（２）井戸

図３・４９　95A区SK14遺物出土状況



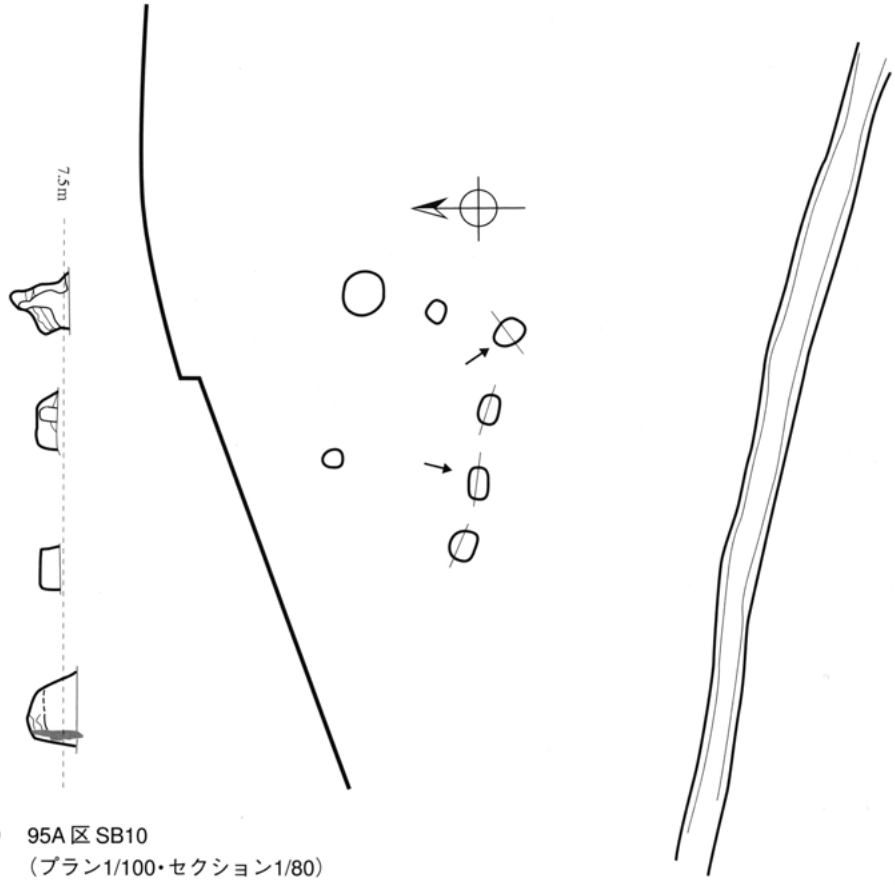


図３・５０　95A区SB10
（プラン1/100・セクション1/80）

ＳＥ06：一見したところは四本隅柱の横板組であるが、実は隅柱は打ち込みで、正しくは丸太杭であり、また横板も支柱にホゾで組み合わせるのではなく、杭外側に積み上げる格好になっている。

そして、下部では外側から押さえとして短い杭が打ちこまれている。つまり、基本的には中世とかわらない。

内部には隅円長方形の曲物が井筒として底部中央に置かれていた。曲物外面には線刻が施されている。

ＳＥ07：角材の隅柱（杭か）が２本、横桟の板と縦板の一部、そして下部に曲物が遺存していた。曲物上部にはヒョウタンがあり、さらにその上から折敷の底板が出土した。

（２）溝

ＳＤ14：断面箱形で、居住域の南限を画する溝と考えられる。

（３）土坑

ＳＫ14：廃棄土坑である。

（４）不明遺構

図3・51　95A区SE06（1/40）

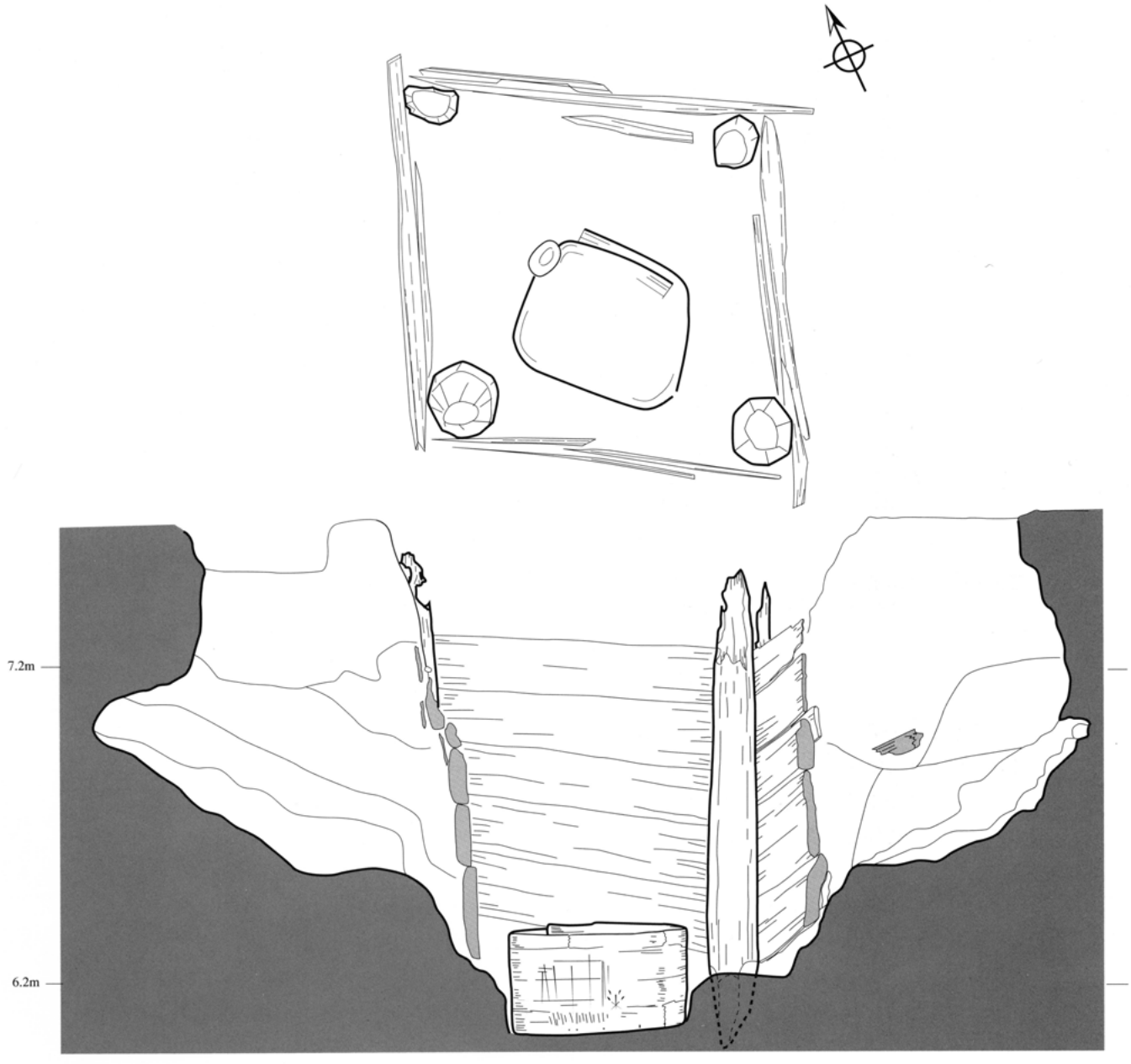
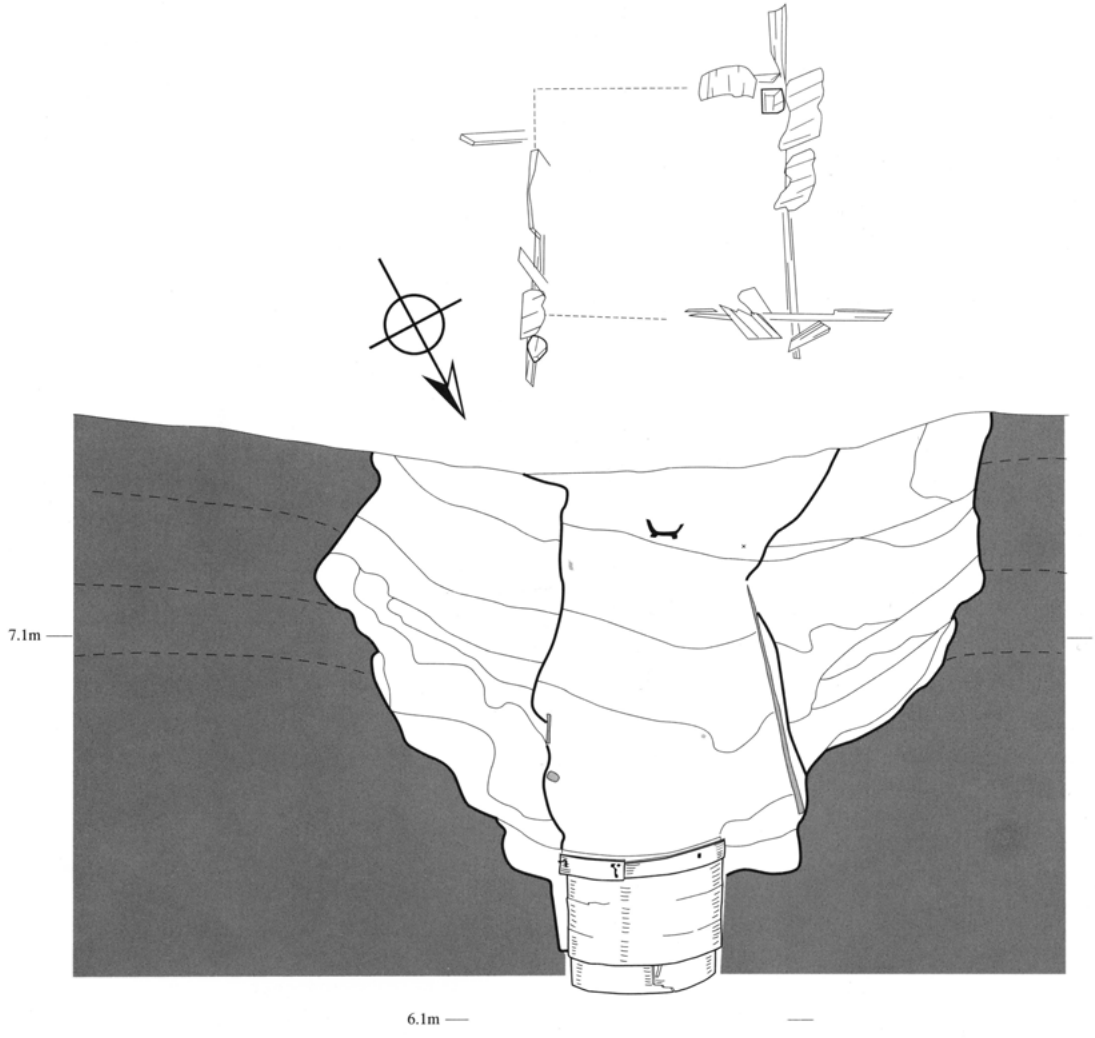


図３・５２　95A区ＳＥ07（1/40）



ＳＸ05：井戸や土坑を含む落ち込みで、輪郭は不明確である。自然堆積で、流路の痕跡のようである。９５Ｂ区ＳＸ03と接続すると考えられる。

９５Ｂ区

（１）掘立柱建物

ＳＢ13：２間×２間の総柱建物である。堀形上部は大きく削平されている。

ＳＢ14：２間×２間の総柱建物である。上部が大きく削平されている。いくつかの柱穴に抜穴らしき痕跡が認められる。

（２）溝

ＳＤ29：断面逆台形の溝で、中央に土坑が掘り込まれている。ＳＸ03と合流する部分で不明瞭となる。

ＳＤ30：ＳＢ13を取り巻いて掘削されている。

ＳＤ32～36：いわゆる畝状遺構である。溝内

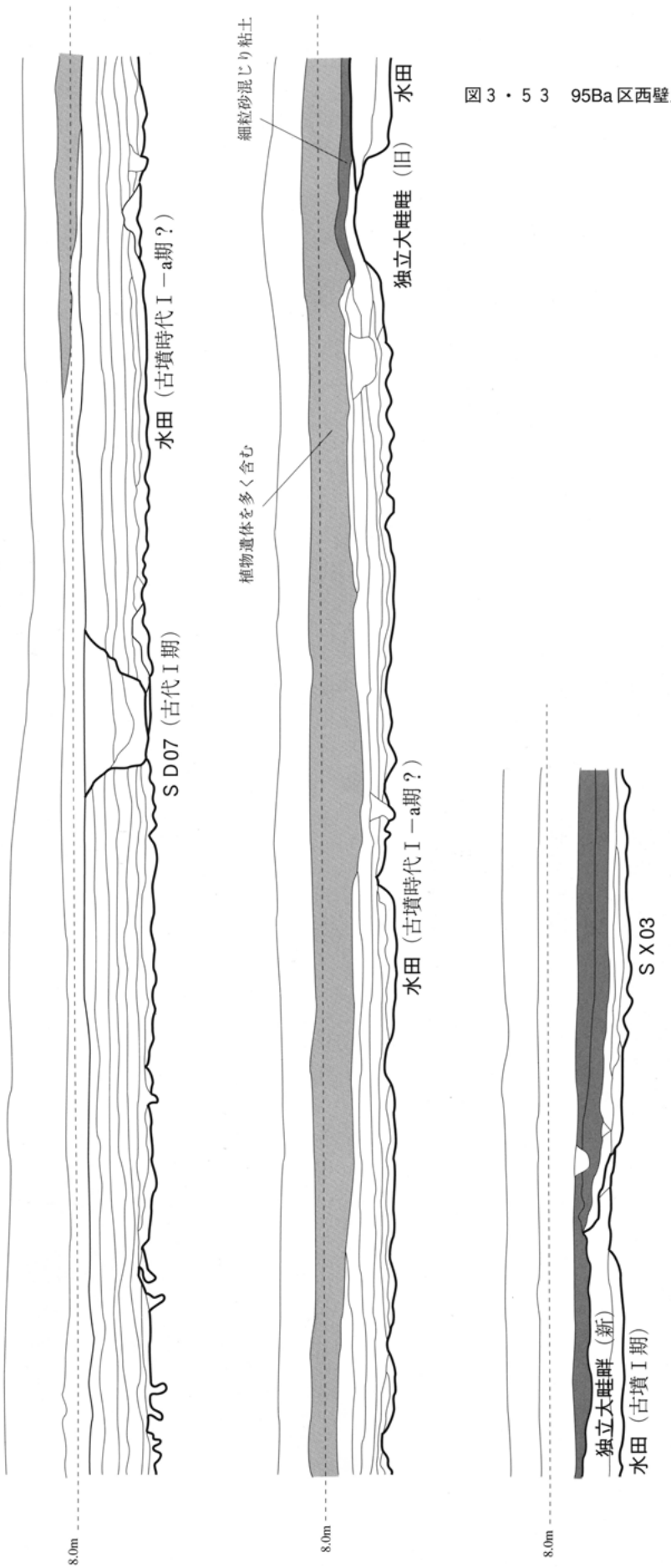


図３・５３　95Ba区西壁土層セクション（1/40）

には砂混じり灰色粘土が堆積していた。

（3）土坑

ＳＫ06：断面は下部が尖り、古墳時代の井戸に似ていなくも無い。構造物の遺存が全く伺えないので土坑とした。

（4）不明遺構

ＳＸ03：輪郭が不明瞭な落ち込みで、粗砂を含む粘土層が堆積している。９５Ａ区ＳＸ05に接続する可能性が高い。

この部分の上部は植物遺体を含む層で、自然堆積である。同様の土層は９５Ａ区南壁でも確認しており、自然流路が貫流していた可能性が高い。

９５Ｃ区

（1）溝

ＳＤ05：粗砂の混じる灰色粘土が堆積している。

９５Ｄ区

（1）ピット列

ＳＡ01：ほぼ等間隔でピットが並ぶ。掘込み面は確認できなかったが、中世面では未確認で、ゆえに中世以前の可能性が高いのでこの時期に含めた。

軸線はわずかにジグザグ状で、ＮＲ02に平行していることを重視するなら、柵列ではなく、自然流路に対応したか、もしくは堤防構築に関連した基礎構造物であった可能性も考えられる。

（3）溝

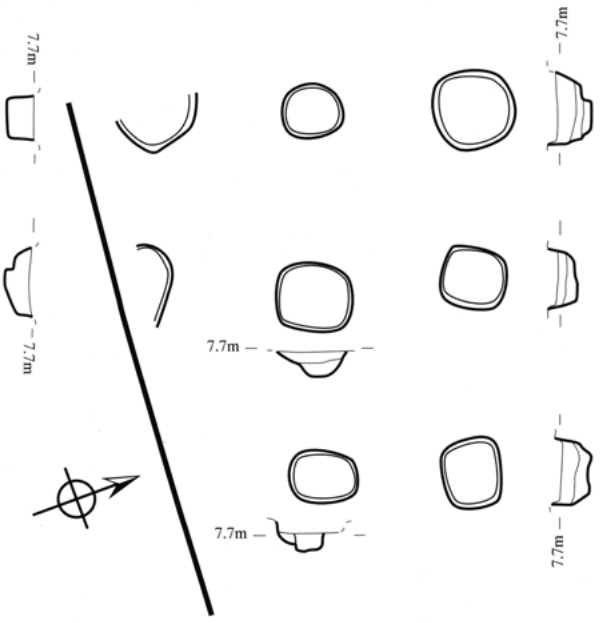
ＳＤ28：確実にこの時期に掘削されたといえる溝は９５Ｄｂ区のＳＤ28である。ＳＤ26に重複して掘削されており、その範囲からずれることはない。おそらく、ＳＤ26は完全に埋没することなく一定期間窪地状をなしており、その最低面に掘削されたものと思われる。ただ、その機能が排水であっ

図３・５４　95B区ＳＸ03（南西から）

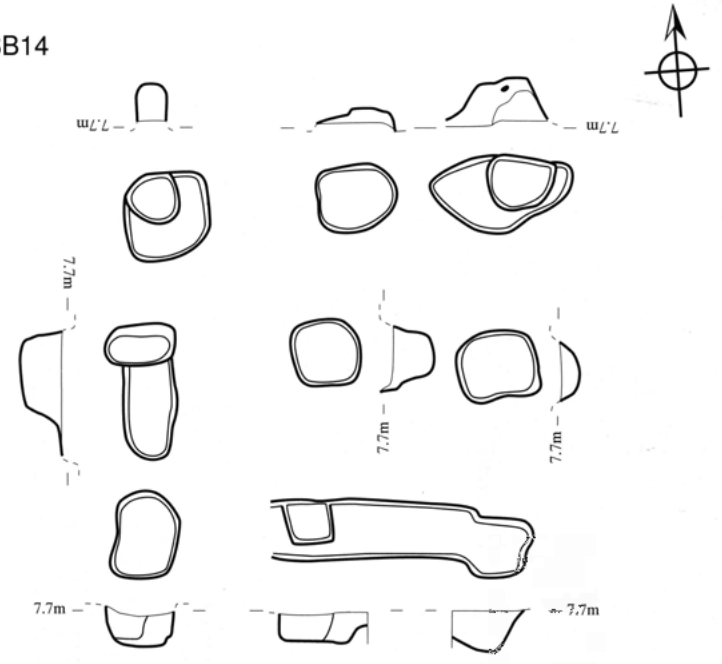


図３・５５　95B区掘立柱建物

SB13



SB14



たのか堤防の区画であったのかは直接判断する材料がない。

（４）自然流路

ＮＲ02:浅い窪地で上部には粗砂層が堆積していた。底面は平坦で、直上に灰色シルト層がラミナを形成して堆積していた。

９５Ｅ区

（１）自然流路

古代Ｉ期の大溝が埋没しきらないで、上部が自然流路と化していた形跡が認められる。遺物はほとんど含まないが、わずかに灰釉陶器が出土した。

ただ、大溝が埋没しきらないために自然流路になっていたとばかりは言えない。少なくとも自然流路の範囲が並列する大溝の範囲からはみ出さない点を重視するならば、むしろ大溝にともなう堤防状の高まりの存在を考慮すべきであろう。もともと流れやすい状態におかれていたが故に継続的に流路が形成されたと考えられる。おそらく河道につながっていたのであろう。

D．中　世

９４D区

走向が一定しない溝群と方形土坑群が展開する。両者には時期差があり、この点は全調査区にわたって共通する。

９４C区

９４Dに比べて溝の走向は一定し、方形土坑との重複関係もほとんど見られないので、両者の時期は近接していると考えられる。溝には区画を構成するものがあり、それについてはＳＸとして記号をふった。

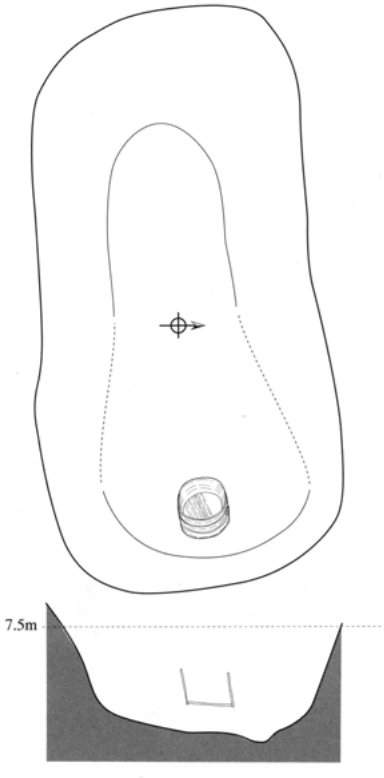


図３・５６　95 A区 SK27（1/40）

（１）溝

ＳＤ61～66：ＳＤ66はＣａ区東端に位置し、浅い土坑が連結したような形状を示す。これに直交して溝が掘削され、ＳＤ61～65は方形区画を形成している。

ＳＤ67：断面箱形の溝で、長方形にめぐる。北辺東部では円礫が集中し、ＳＺ02との関連で注意を引いた。

ＳＤ71：ＳＤ67の西辺と重複している。近世の溝と重複し、連綿として区画としての意味を有していたようだ。

９４Ａ・Ｂ区

９４Ａ区では調査区の南西側で平行する多数の溝が検出された。これらは断続しながら続くもので、ＳＤ21以外は不規則である。また、削平が著しく溝肩が検出できなかった部分ではピット列状をなしていた。単なる掘削痕とも思えず、その性格が問題である。

方形土坑と溝との関係ではＳＤ14～17に土坑との重複関係があり、先行する。ただ、方形土坑の配置を見ると、ＳＫ13～18が列状をなし、またＳＫ06～26が溝と軸線を共有するかのように並んでおり、溝そのものも方形土坑と関連を有する可能性がある。この点で、ＳＫ41・42の軸線が溝の走向に一致するように変化していることは重視してよいだろう。

このほか、ＳＤ18・19はその延長が９４Ｃ区ＳＤ59に近似しており、無関係ではないだろう。

９５Ａ区

９５Ａ区では宅地、あるいは屋敷地の可能性が高い区画を検出した。また方形土坑のような斑土を埋土とはしているが、はるかに規模の大きな例を確認した。

（1）井戸

ＳＥ08：構造物は抜かれており、曲物のみが遺存していた。

ＳＥ09：構造物は抜かれており、曲物のみが遺存していた。

（2）溝

ＳＤ15：断面逆台形の輪郭がしっかりした溝で、内部には炭化物や焼土が堆積していた。

ＳＤ16：溝の特徴はＳＤ15に共通している。

ＳＤ17：幅が狭く浅い溝で、底面には小ピットが認められたが、杭が打ち込まれた感じではない。

ＳＤ18：輪郭がいささか不明瞭な底面の平坦な溝で、東壁際が一段落ちてさらに一条の溝を形成する。

ＳＤ19・20：同規模の平行する溝。北端でやや湾曲する。

ＳＤ21～25：ＳＤ15に平行するが、時期的には新しい。

ＳＤ28：溝の底面を検出したに過ぎない。底面はアバタ状をなすが、掘削痕の集積であろう。

ＳＤ29：ＳＤ26の西に折れた先の軸線に一致し無関係とは思われない。

ＳＤ30・31：ＳＫ31に切られているが一連であろう。

ＳＤ32：幅広で底面が平坦な溝。

ＳＤ33：ＳＤ32と重複関係にあり、新しいと考えられる。

（3）不明遺構

ＳＸ06：土坑内に礫と曲物が置かれ、内部から灰釉系椀と小皿が出土した。礫に

図３・５７　95Ａ区井戸（1/80）

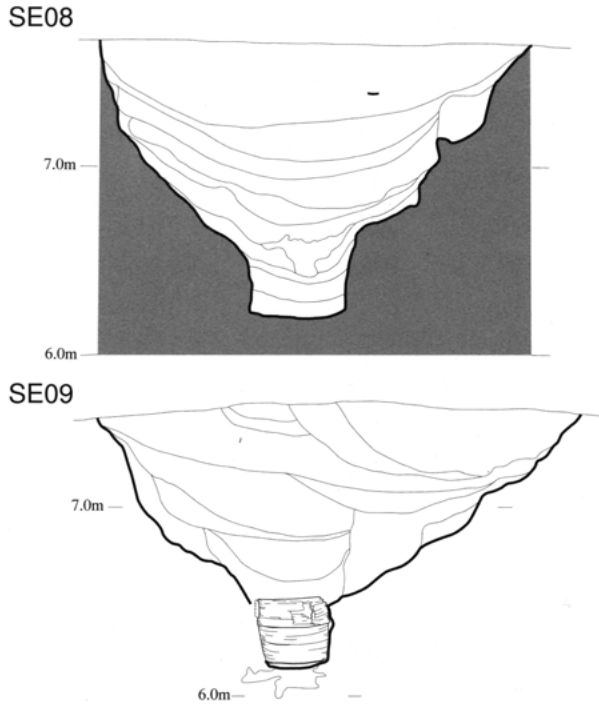


図３・５８　95Ａ区SX09（1/40）

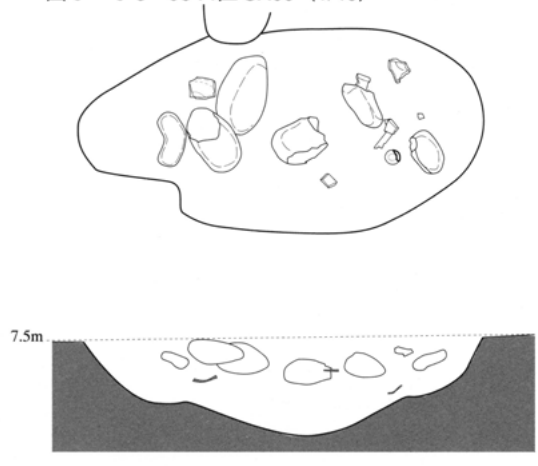
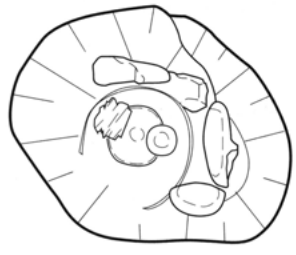


図３・５９　95Ａ区SX08（1/20）



は焼けたものが見られた。

ＳＸ08～11：方形土坑と同様に斑土を埋土とはするものの、規模に大きな差がある。他の調査区では検出されておらず、地区的特性に関係するようだ。

９５Ｂ区

平行する溝とそれに重複する土坑という関係が明確に検出できた。調査区東部ではピット群が検出されたが、建物に関係するものではなさそうである。

ＳＫ17は中世Ⅰ期に属し最古段階の遺構である。井戸の可能性もあるが確証は無い。

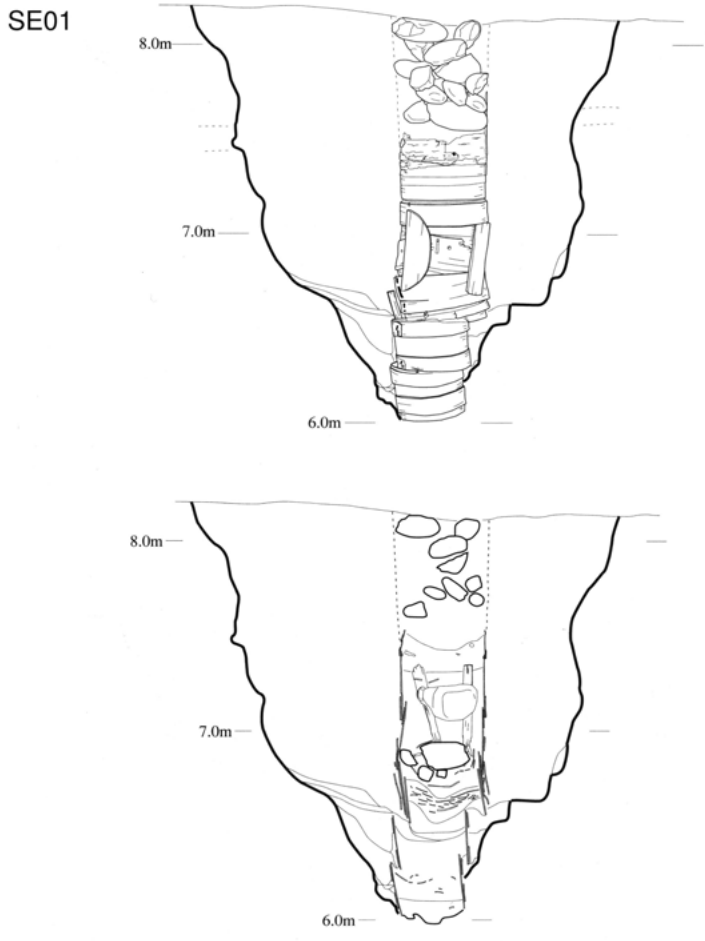
９５Ｃ区

井戸が集中することやピット群の存在から屋敷地の可能性が高いことは明らかだが、膨大な数のピットが検出されたわりには並びが悪く建物を復元するには至っていない。

（１）井戸

ＳＥ01：上部は抜かれていたが、下部には曲物が６段遺存していた。抜き取り痕は円筒形で、曲物のみを抜き取り、後には円礫を積めこんでいた。礫は下部からも出土したが、その下には曲物片が密集していた。曲物は下部２段と上の３段目以上とがずれており、掘形も異なることから造り替えが考えられる。したがって、当初は構造物を

図３・６０　95C区中世井戸１（1/40）



有した可能性もある。

ＳＥ02：ＳＥ03の設置作業で大きく破壊されている。曲物が１段のみ遺存していた。

ＳＥ03：曲物は３段遺存していた。最下段は円筒形に掘られた掘形にぴったりと据えられていた。

ＳＥ04：ＳＤ21に切られている。構造物は抜き取られて、曲物が最下段の１段のみ遺存していた。

ＳＥ05：ＳＥ04に隣接する。曲物は遺存していなかったが、抜き取り穴が小さいことから、当初から構造物はなく、曲物のみの井戸であった可能性が高い。

ＳＥ06：土層断面はＳＥ05に類似しているが、抜き取り痕は明瞭ではない。

ＳＥ07：断面はロート状を呈し、抜き取り痕も認められることから、これも曲物のみであった可能性が高い。

（２）溝

ＳＤ13：掘り直しのために底面は一定ではない。

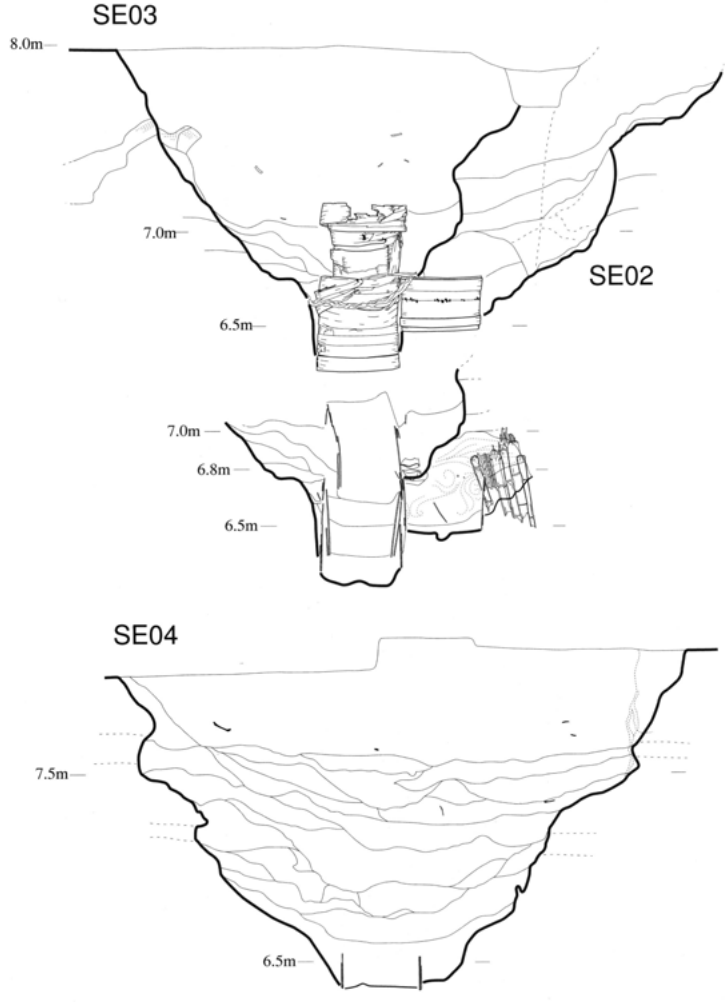
ＳＤ14・15：断面はＶ字形に近いところもある。１度改修されているが、ＳＤ14はＳＸ01付近で位置がずれている。

ＳＤ16：形状はＳＤ15と同じである。

ＳＤ17：断面皿型の溝。

ＳＤ22：調査区北部を東西に貫通する。断面

図３・６１　95Ｃ区中世井戸２（1/40）



は逆台形を呈するＳＥ04より新しい。

ＳＤ23：ＳＥ04には重複せず、つながらない。複数回の掘り直しが行われたようで、掘形には段が形成されている。

ＳＤ30：重複関係がある遺構のなかで最も先行する。ＳＤ32に続くと考えられる。

ＳＤ31：ＳＤ30を切り込んで掘削されている。北側のＳＤ30との境にはは斑土が堆積し、ＳＤ31掘削の際に整地された可能性が高い。

（３）不明遺構

ＳＸ01：土坑内には長楕円形の川原石３コが長軸を土坑の短軸方向にあわせるようにして据えられ、周囲には炭化物や焼土が散布していた。ＳＤ12がこの部分で弧状に屈曲すること、しかも付け替えに際して半径が小さくなっていることをみると、この部分が塚状に土盛りされていた可能性が高いと考える。

ＳＸ02～05：集石である。川原石を中心とした礫と陶器片が出土した。骨片などは認められなかった。

９５Ｄ区

全体として遺構は散漫だが、とりわけ方形土坑の数が激減する点は特徴的である。また軸線が北へいくほど東へ傾くようになる。これには古代の地形が大きく左右していると考えられる。

（１）掘立柱建物

ＳＢ01：２間×４間で近接棟持柱を有する。

（２）井戸

ＳＥ01：最下段の曲物が遺存していた。底面の標高は7.3ｍあり、これまでに検出された井戸の中ではもっとも高い。

ＳＥ02：素掘りの土坑状で、曲物の遺存はない。

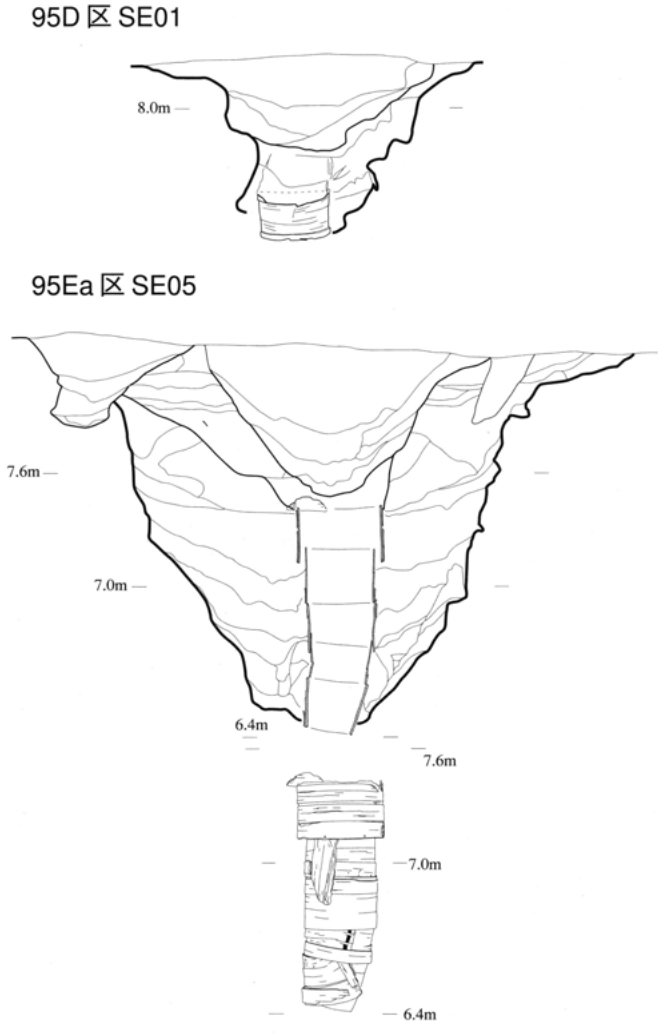
ＳＥ03：素掘りの土坑状である。埋土は斑土を主とし、一部液状化していた。

（３）溝

ＳＤ30：南部で鍵の手状に折れる。

ＳＤ32～38：平行して重複する溝群で、ＳＤ35･36とＳＤ38の間は現状で2.5ｍ～３ｍの間隔が

図３・６２　中世井戸（1/40）



ある。当時の地表面はさらに高かったはずであるから、両者の間隔ももともとは狭かったであろう。それでも1間ぐらいはあったろうか。つまり、「道」の可能性が考えられるのである。

９５Ｅ区

遺構の軸線は全体に東への傾きがさらに強くなる。

（1）掘立柱建物

ＳＢ49：一部を検出した。1間×2間以上の建物である。

ＳＢ50：1間×2間の不整形なプランを呈す。

（2）井戸

ＳＥ05：曲物が5段残存していた。上部には抜き取り用の穴が大きく掘り込まれていた。

ＳＥ06～08：曲物は遺存せず、掘形のみ確認した。

（3）溝

ＳＤ33：鍵の手状に2ヶ所折れて東にのびる。９５Ｅｂ区最南部のピット群の様子から見ると屋敷の区画溝のようでもある。

（4）不明遺構

ＳＸ03～05：小溝が重複して窪地を形成している。

ＳＸ06：ＳＤ33が屈曲するあたりに土坑があり、内部から口縁部を欠いた壷が横位で出土した。ほかに人頭大かそれ以上の大きさの礫も出土した。

ＳＸ07：輪郭が不整形でかつ不明瞭な落ち込み。

ＳＸ08：小溝が集中する部分で、ちょうど南東側が一段低くなっている。水田の可能性がある。

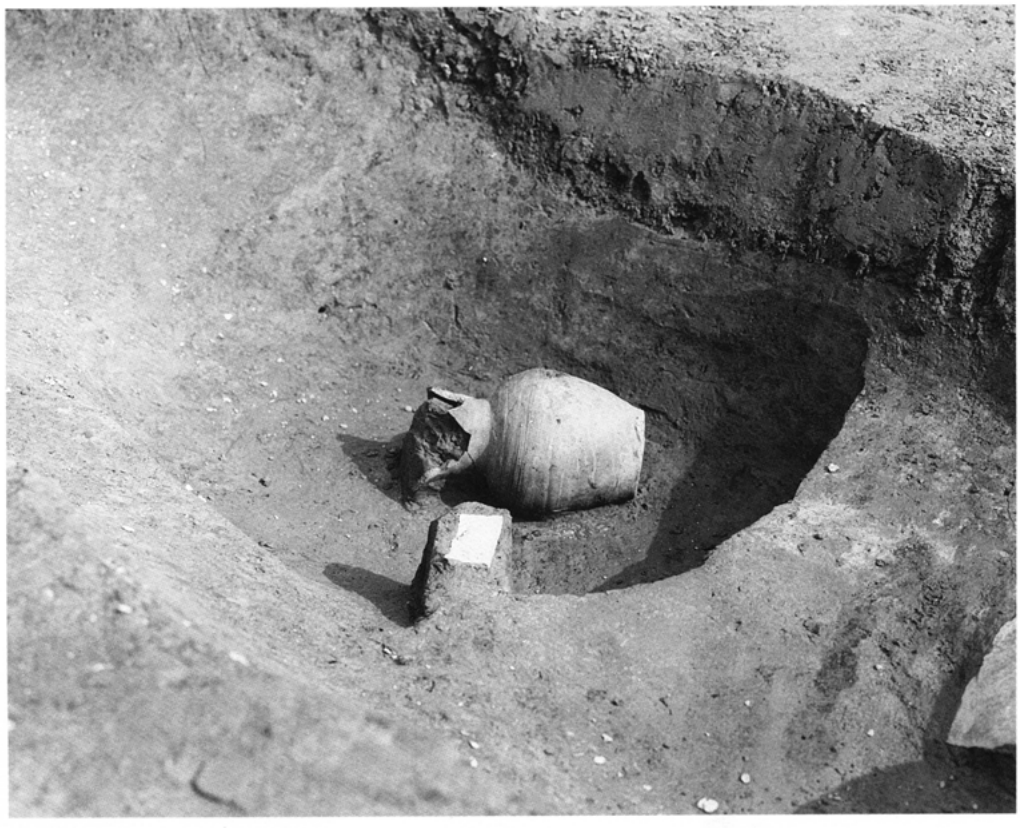


図3・63　95E区SX06（西から）

2．遺　物

A．弥生時代

（1）土器（図版1・2）

概観

門間沼遺跡出土の弥生土器は、5期区分ではⅠ期、Ⅱ期、Ⅳ期、Ⅴ期に対応する。既設の型式名では遠賀川式、水神平式、朝日式、岩滑式、高蔵式、山中式となる。

弥生Ⅰ期

1･1～1･5、2･10は遠賀川系土器B系統。2･10は典型的だが、1･4は口縁部が小さく、1･5は刻みも施されていない。

1･6は削痕系。口縁端部には指頭圧痕が施されている。

1･7は波状口縁の沈線紋系土器。

1･8～1･12は条痕紋系土器。1･8は刻み突帯が省略されている。1･9は口縁端部に条痕が施されている。いずれも二枚貝条痕。

1･14～1･16は1･5の平行線紋を省略した趣で、時期差と考えられる。これまで類例のなかった資料で、遠賀川系土器最終段階と思われていた山中遺跡でも類例はなく、さらに後続する資料と考えられる。つまり、遠賀川系B系統甕と朝日形甕をつなぐもの。あるいは後者そのものといった方がよいかもしれない。

以上、1･6を除いてほぼ終末期に相当する。

弥生Ⅱ期

1･17～1･19は94C区SK01出土である。1･17、1･18は条痕紋系壷。1･17の口縁部内面にはミガキ調整が認められる。刻み突帯は棒状工具で刻まれている。1･19はハケ甕の底部。

1･20～1･24は壷。1･20はハネアゲ紋がくずれている。1･21は横位条痕直線紋に沈線波状紋が付加されている。1･22は口縁部内面に直線紋がめぐる。1･23は口縁端部下端に指圧痕が施されている。1･24は袋状口縁ほど口縁部が内湾していない。口縁端部には押圧条痕が施され、口縁部が細波状を呈している。

1･25は平行線紋が施された壷。直線紋の下には同じく平行線による連続した連弧紋（波状紋ではない）が施されている。1･26は二枚貝背面の擬縄紋が施された壷の体部片。

1･27～1･41は深鉢。口縁部の仕上げ方に変異が多い。1･27～1･31、1･33の体部外面はおそらく縦位羽状条痕。1･31は波状口縁であろう。1･32は口縁端部に1･24に類似した押圧条痕が施されている。

1･40は内傾口縁土器。まだ厚口鉢にはなっていない。

1･42は沈線紋系深鉢。口縁部に上下に相対した連弧紋が施されている。

2･1～6、2･11、2･12、2･16、2･17はいわゆる朝日式に属す。2･4は縦ハケの後に二枚貝条痕が施されている。

2･7、2･8は94C区SK02から出土。体部の調整は櫛条痕であるが、2･8の口縁端部、2･7の突帯上の刻みには二枚貝が用いられており、二枚貝条痕系と全く無関係ではない。2･9の調整も櫛。底部には布目痕が認められる。ⅡN系の祖型である。

2･11～2･15は95A区SK03出土。2･13はハケ甕で、口縁部内面にはハケ波状紋が施され、口縁端部付近はヨコナデされている。

2･18は口縁部に二枚貝背面圧痕が5ヶ所施されている。2･20はⅢ期長頸壷の原型になるもので、



図3・64　94C区包含層出土

頚部には二又工具による直線と押し引きによる横帯、切り込みの鋭い斜格子紋帯が施されている。体部の調整は二枚貝によって行われている。

2･21～2･25は沈線紋系深鉢。一般的に壺と呼ばれるが、こうした資料のほとんどには煮沸痕が観察される。2･23と2･24には充填縄紋が施されている。

弥生Ⅳ期

3･1は９４Ｃ区出土。丸窓付壷の口縁部。3･2は櫛条痕の深鉢。3･3および3･4は９５Ｂ区の断続溝から出土した細頚壷。

弥生Ⅴ期

3･5～3･6は９４Ｃ区ＳＤ01から出土。９４Ｃ区では調査区の南寄りからこの時期の土器が目立って出土しており、南に居住域が存在するかもしれない。

（２）石器（図版80～99）

９４Ｃ区からまとまって出土した。下呂石の石核や剥片は調査区北西隅付近で集中的に出土した。なお、下呂石の剥片そのものは９５Ｃ区まで出土しており、散漫な分布状態ながら広範囲に散布している。また、粗製剥片石器は'95調査区においても出土しており、遺構の希薄な区域において出土する傾向が確認できた。

円礫の凹石や敲石・磨石は弥生時代に属すものと認定したが、棒状礫については確証はなくいちおう除外した。

９４Ｃ区

石鏃

下呂石製１８点、サヌカイト製２点、チャート製１点であり、下呂石の頻度が高い。形態は有茎と無茎を基本として凹基から凸基まで各種あるが、1･8のような中間的なものもある。これはおそらく弥生Ⅰ期からⅡ期初頭にかけてのものであろう。

その他の石鏃も弥生Ⅱ期を下ることはないと考える。

石錐

80･23に使用痕らしきものが観察される。

スクレーパー

サヌカイト製で、弥生Ⅰ期からⅡ期初頭のものであろう。

打製石斧

81･1は９４Ｃ区ＳＫ01から出土したもので、下半を欠損している。

粗製剥片石器

円礫から打ち剥がした貝殻状剥片の鋭い刃縁を機能部としている石器で、刃部周辺には光沢が認められるものがある。使用痕については原田の報告を参照。

81･3、81･4は敲打痕やくぼみ部分が認められるので、敲石を母岩としたものであろう。81･5は刃部に二次的剥離が認められる。83･1は抉りが大きい凸形で、弥生Ⅳ期に属す可能性が高い。82･2、82･3も凸形傾向が窺える。82･1や82･4は両端の抉りも小さく、弥生Ⅱ期からⅢ期の所産であろう。81･3～81･5もほぼ同様の時期であろう。

両刃石斧

83･3は身がやや扁平で、平面図は左主面の可能性がある。

扁平片刃石斧

83･4は基部、刃部ともに欠損している。

83･5は整形時の剥離痕が顕著で、身は厚く、側

面観も整っていない。刃部は斜めで、扁平片刃石斧としては非定型である。

凹石

９４Ｃ区からまとまって出土しており、弥生時代に属すと思われる。円形の凹部が形成されているものは少なく、溝状あるいはアバタ状の凹部が多い。打製石器製作、もしくは剥片製作にかかわるものであろう。

９４Ａ・Ｂ区

石鏃

80･30がチャート製、他は下呂石製である。

スクレーパー

80･32は珍しく下呂石製のスクレーパーで、下部刃部に両面剥離が認められる。

粗製剥片石器

85･1は刃部が大きく欠損し、刃縁に二次的剥離が認められる。

９５Ａ区

石鏃

84･3は逆刺部が側方に突出することから弥生Ⅳ期に属す可能性が高い。

中型尖頭器

84･4、84･5は整形途中の可能性もある。

打製石斧

84･9は円礫から打ち剥がされた剥片を撥形に整形している。

粗製剥片石器

85･5は９５Ａ区ＳＫ03出土で、弥生Ⅱ期に属す。85･2は凸形傾向が強く、弥生Ⅳ期に下るかもしれない。

その他の調査区

図示していないが、９５Ｂ区ＳＤ03で光沢を持つ粗製剥片石器が１点出土している。また、風化が著しいが凸形傾向の強いものが９５Ｃ区でも１点出土している。

84･10は両面剥離の剥片を用いている。凸形に含めることができるもので、刃縁には光沢が認められる。

９５Ｅ区では石鏃84･7、84･8、粗製剥片石器84･12が出土している。弥生時代関係の遺構は埋積谷以外まったく存在しない地区である。

Ｂ．古墳時代

（１）土器・須恵器

古墳時代の土器は７区分した。

Ⅰ期、Ⅳ期、Ⅴ期、Ⅵ期はそれぞれ遺構単位で比較的良好な資料を得ることができた。しかし、古墳時代前半期の肝心なⅡ期については資料の欠落がある。この点は単独期の遺構もわずかであった点が大きく関係する。またⅢ期も、遺構は比較的存在したものの、遺物は他時期と混在する例が多く、調査方法に問題があったかもしれない。

ここではすべての資料に触れるのではなく、土器編年上基準となる資料に焦点を絞って解説する。

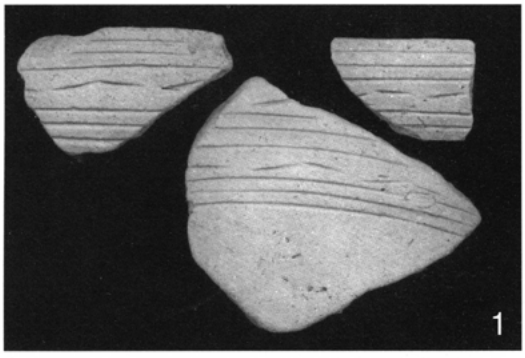
古墳Ⅰ期

Ｓ字状口縁甕Ａ類を中心とする時期。

資料的にまとまるのは井戸で、多少後続時期との混在もあったが、いくつか基準資料も得ることができた。

Ⅰ期－１段階

９４Ｃ区ＳＸ01：複雑に切り合う土坑が溝状



2



図３・６５　94C 区 SD17 出土加飾高杯

に連結したものである。遺物の取り上げ方法は十分なものとは言えなかったが、いちおう遺物の集合単位ごとに取り上げた資料である。

このうちグループ・ク［図版5：18（下層として取り上げた一群）～図版６：9）］が資料的に充実している。

濃尾平野南部地域との併行関係を推定する上で指標になるのは高杯（図版5：20）である。口縁端部がわずかに屈曲し丁寧な磨きで仕上げられた杯部の深い高杯である。

甕には口縁部形態がいわゆるく字状を呈するものと受口状になるものがある。そして今回注意したいのが図版5：22のような頚部の屈曲が弱いもので、台付甕ではない可能性もある。

地域的特徴を示す資料としては加飾高杯Ｄ（図版６：5・15）がある。口縁部端面や杯部内外面に直線紋をめぐらすもので、濃尾平野北部から琵琶湖地方北部にかけて分布の中心があるものである。杯部外面は多重沈線と刺突紋、口縁部端面は櫛描紋、内面は沈線もしくは櫛描紋で、直線紋も加飾部位、紋要素の構成によって工具が使い分けられている。

Ⅰ期－２段階

９４Ｃ区ＳＥ06：高坏を中心に出土したため器種に偏りもあるが、屈折低脚や高杯杯部の口縁端面に直線紋が施されたものが目立つという特徴がある。

Ⅰ期－３・４段階

９４Ｃ区ＳＤ17：比較的器種が揃う。とりわけＳ字状口縁甕Ａ類がまとまって出土した。高杯類も加飾法に特徴があり、時期的な基準になると

図３・６６　94C 区出土古墳Ⅰ期の土器

（1：1/3、2～4：1/4）

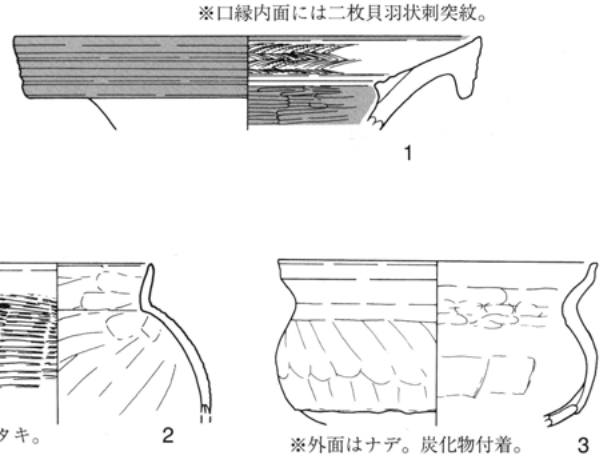
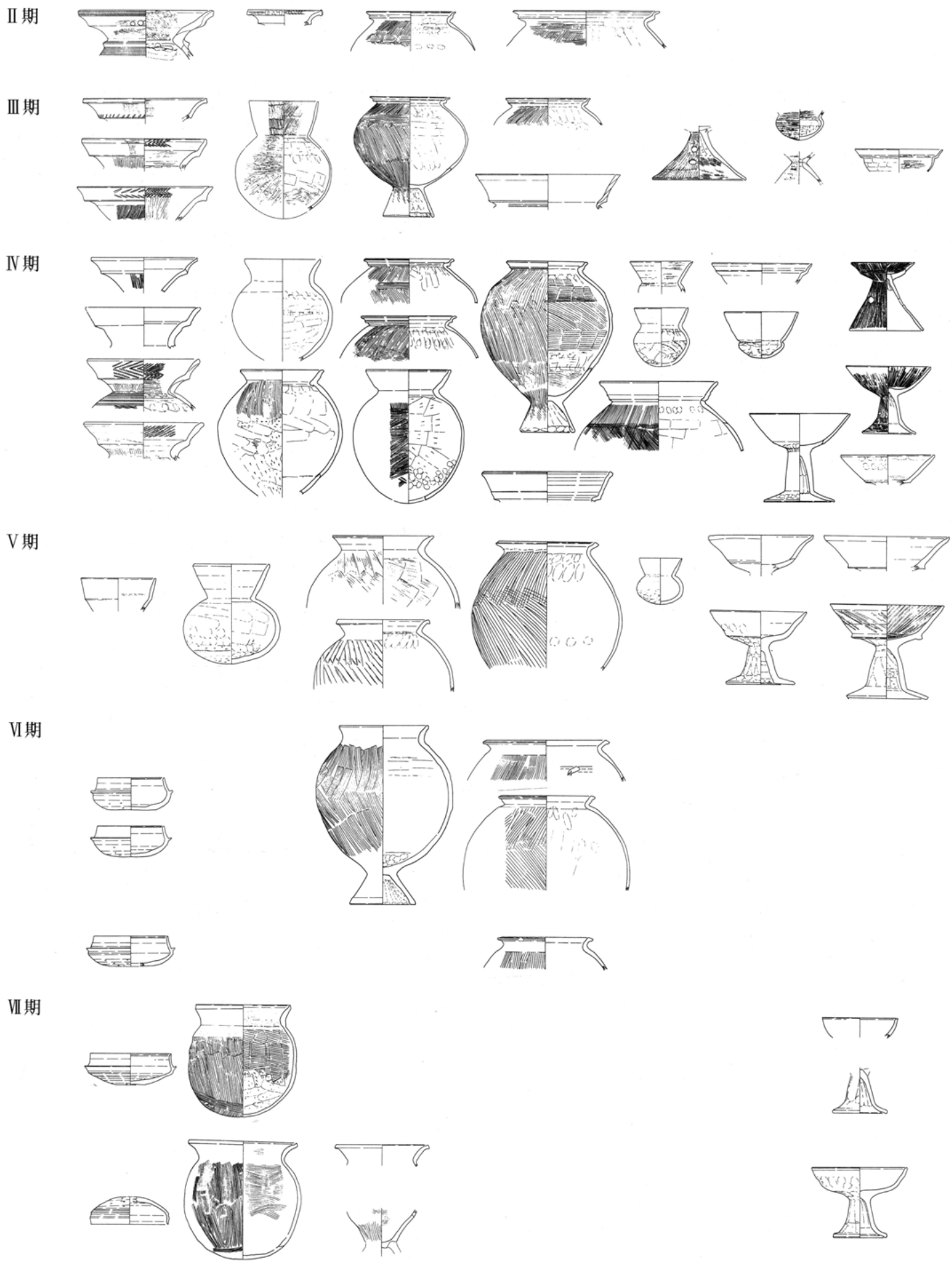


図３・６７　古墳時代土器の区分



考える。

古墳Ⅱ期

S字状口縁甕B類が主体になる土器群はわずかしか存在しない。94C区SE10からはS字状口縁甕B類と赤彩山形紋が施された壷が出土した。

古墳Ⅲ期

S字状口縁甕C類を主とする時期で、94C区SK26、同SK27、SD31以外は、他の時期資料と混ざっており、良好ではない。SK26・SK27は隣接する遺構で、後者にはS字状口縁甕D類や山陰系口縁が伴っている。

古墳Ⅳ期

S字状口縁甕D類を中心とする時期で、SDIからまとまって出土した。その他SE17、SE21、SE22など94Cb区を中心にまとまって出土した。掲載資料以外にも出土量は多く安定している。

古墳Ⅴ期

宇田甕を中心とする時期だが、単純資料は95E区に限定される。95Cから95A区にかけてでも出土しているが、須恵器との関係が微妙である。

古墳Ⅵ期

宇田甕に須恵器が伴う時期で、'94調査区でまとまって出土した。しかし、宇田甕とつまみ上げ口縁丸底甕が共存する頻度は低い。

古墳Ⅶ期

宇田甕が衰退し、つまみ上げ口縁丸底甕が主要煮沸具となる。しかし、外底面に煤が付かない点をみると、カマドの出現にはまだ間があるようだ。

（3）金属器

銅鏃

3点出土し、全形のわかるものは1点のみである。いずれも腐食が著しい。

C．古　代

概観

遺物はほとんどが須恵器や土師器に限られ、それ意外の素材では鉄製品や石製品が若干存在する。比較的遺構出土例に恵まれた。以下はもっぱら須恵器・灰釉陶器についての説明である。

詳しくは「Ⅳ分析」の統計的報告を参照。

古代Ⅰ期

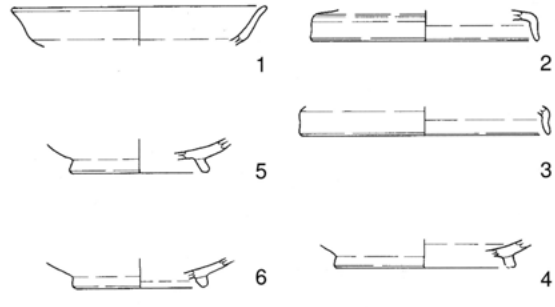
須恵器は杯H蓋身、無蓋高杯、台付椀、横瓶、堤瓶、平瓶、甕などから構成される。

土師器は甕がほとんどで甑は目立たない。把手付き鍋も若干ある。両者とも全形のわかるものが少ない。甕は、口縁端部をつまみ上げ、底部は丸底、内面はケズリを施す。

年代的にはH50窯式を中心とし、遺構によっては一部H44窯式を含む。

この時期は'94調査区が空白であるのに対し、'95調査区では多少の濃淡はあってもほとんどすべての調査区に分布する。門間沼遺跡におけるピークのひとつである。

図3・68　緑釉陶器（1/4）



古代Ⅱ期

須恵器は、古墳時代系の杯Hに加えて杯A、杯B、かえりをもつ蓋などが出現する。１１７号窯式を中心とする時期である。量比は前者が多いが、共伴関係として積極的に評価できるのか、混入であったのかについては、主要な遺構が溝であるために判断がむつかしい。そのほかにはかえりの無い蓋、無蓋高杯、長頸瓶、甕などがある。

産地別では美濃須衛産が高頻度で伴う。

土師器は甕の口縁端部の仕上げにシャープさがなくなる。

分布は９５Ｃ区北東部から９５Ｅ区にかけてが中心となる。竪穴建物からの出土が若干認められることは、居住域として存続していることを示している。

製塩土器は'95調査区で安定して出土しているが、このうち、９５Ｃ区では口縁部片がＳＢ06のカマド付近から出土し、注目される。

古代Ⅲ期

９５Ａ区東半分から９５Ｂ区西端にかけては居住域に伴う。９５Ｅ区では古代Ⅱ期の溝に重複する自然流路を中心に出土している。９４Ｄ区では大きな窪地状遺構から墨書陶器が出土しているが、性格は不明である。位置的に上面に遺構が展開していたとは考えられない。

須恵器は杯A、杯B、椀A、椀B、長頸瓶、壷Gなどがある。

灰釉陶器には、椀B、三足盤、皿などがある。緑釉陶器には椀、皿がある。

墨書陶器が非常に目立ち、それがこの時期の特徴ともなっている。

D．中　世

全般に居住域が薄いためか、ほとんどが灰釉系陶器の椀・皿類で、供膳具に限られる。椀の内面の擦り痕は高頻度で、未使用と推定されるものは少ないようである。調理具は鉢、伊勢系鍋がわずかに出土しているのみである。

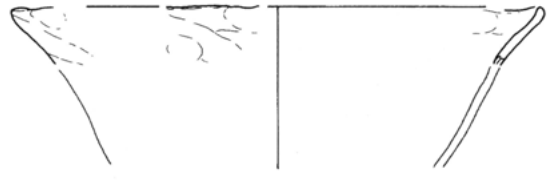
土師皿は若干出土している。

藤澤編年の第４型式を中心とする時期、第６型式・第７型式を中心とする時期に分かれる。最終段階は遺構では設定可能であるが遺物はほとんど出土していない。

詳しくは「Ⅳ分析」の統計的報告を参照。

（石黒立人）

図３・６９　95C区SB06出土製塩土器（1/3）



E．その他

（1）金属製品

金属製品を鉄製品、銅製品、鉛製品に分けて報告する。

鉄製品（図版100）

斧、ヤリガンナ、U字状鍬先、鏃、鎌、刀子、鑿、釘などがある。

100:1は古墳時代の袋状鉄斧と思われるもので、柄の差し込み部分は断面方形で、鍛折した様子がみられる。100：2は刃部の先端部分と思われるもので、刃の湾曲度からヤリガンナと考えた。100:3・100：4・100：14・100：15は鉄鏃で、100：3・100：4は刃部の平面形態が十分に残っていないが、柳葉形の形状をもつものと思われる。100：14・100：15は長茎鉄鏃の茎部と思われる。100：5・100：6も鉄鏃の可能性があるもので、100：5は鏃の基部と思われるもの。100：7～100：9は鉄鎌で、刃部柄側の折り返し方から100：7・100：9は柄が刃に対して直角に装着されるタイプ、100：8は鈍角に装着されるタイプのものである。最も大きく残る100:9は曲刃鎌になる。100:10～100:13・100:16・100：17は刀子で、100：10・100：11は刀子の刃部先端の部分、100:12は刃部から柄部にいたる部分、100：13はやや大型の刀子で、刃部の最大幅が2.2㎝、厚み0.4㎝あり、刃部の中程から先端にいたる部分である。100：16・100：17は現状の断面形からは分からないが、内部に残存する鉄の痕跡から刀子と判断した。100:18は大型の鑿と思われるもので、頭部が幅2.0㎝、厚み1.0㎝の長方形状に加工されている、針部も幅1.3㎝、厚み0.5㎝の長方形状で、針部の長さは12㎝以上になる。100：19は断面形態からU字状鍬先と考えられる。100：20は鑿状の製品で、幅0.9㎝、厚み0.2㎝程の細長い板の両端を同方向に曲げたもので、両端は三角形状になっている。100：21～100：25は鉄釘で全て頭部・針部を長方形から方形に加工している。100：21・100：23・100：24は頭部を作り出しているような形態、100：22・100：25は頭部を折り曲げただけのものである。100：23・100：25は100：21・100：22・100：24に比べてやや短い釘である。

銅製品（図3・70：1～4）

飾り金具、キセル吸口などがある。

1・2は飾り金具で、1は三角形状に尖る袋状の製品、2は四葉の花弁を菱形に成形した飾り金具で、文様面側に内反りする形状である。中央に径0.5㎝の孔があり、その孔に釘などを打ち込み固定し装飾したようである。3・4はキセル吸口。

鉛製品（図3：5・6）

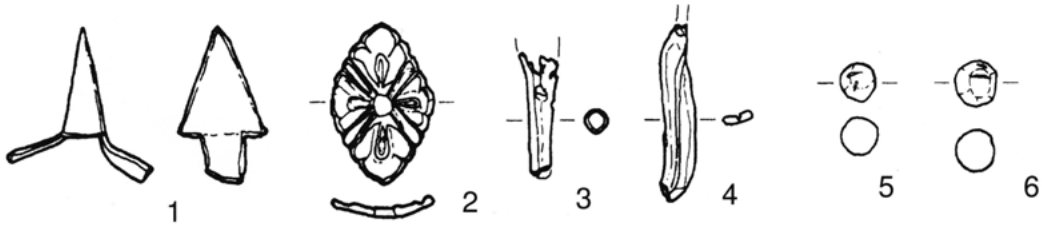
鉛玉が2個検出された。径は1.0㎝～1.1㎝のもの。

鉄資料

●鉄資料の分類

遺跡から出土する鉄資料には、製鉄する前の鉄鉱石・砂鉄、製鉄・鍛冶といった鉄加工に伴って生成される鉄滓（金糞）、遺構の一部である炉壁・羽口、鉄加工に必要な溶媒材や燃料、各工程で使われる道具類、鍛冶の段階で出される未製品・

図3・70　銅製品ほか（1/2）



製品がある。

今回検討を行った鉄資料には製鉄の段階に関するものはなく、鍛冶に伴う鉄滓、鉄製の製品・未製品、炉壁、羽口があり、その大部分は鉄滓と鉄製の製品・未製品である。鉄加工に使ったと思われる道具類は出土していない。

ここでは門間沼遺跡から出土した鉄資料の**肉眼的観察と簡易な検査**を行い、一覧表を作成した。今回の観察では『平成８年度年報』(鈴木・蔭山 1997)で実施した方法を基礎にしているが、ａ・種別、ｇ・金属反応、の項目については基準を変更している。また、**代表的類例**については実測図を作成しその特徴を述べる。

● 鉄資料の分類と肉眼的観察、簡易検査の方法

鉄資料について以下の１３項目の調査を実施し、一覧表を作成した。

ａ・種別

表面観察による形状分析を基本に一部ｆ・着磁度反応とｇ・金属反応の分析を利用して以下のように種別を分けて表記した。

形状から鉄滓を椀型滓・流動滓・再結合滓、鉄塊系遺物、含鉄遺物に分けられる。また、ｆ・着磁力反応、ｇ・金属反応から反応のある含鉄鉄滓とない普通の鉄滓とに区分した。形態的に釘と分かるもののみ釘と記載した。

ここで種別したものについて示す。

鉄滓…製鉄・鍛冶の鉄加工の各段階で原料及び半加工品・廃棄物を炉の中で溶融させた際に生じる非鉄成分が多い滓部分。

椀型滓…鍛冶の段階に炉の底の部分に生まれる鉄滓、炉の底の形を反映した平面円形断面椀型の形になる。大部分のものが２分の１、４分の１、８分の１に破割りされている。鉄分を含んだ含鉄椀型滓と含まない普通の椀型滓がある。また今回は表面の観察（表面の色調・付着物の有無、質感、大きさ、厚さ）より主に４分の１分割椀型滓より大きな資料を椀型滓Ａ～椀型滓Ｉに分類した。

椀型滓Ａ…色調は灰色、質感は軽い。

椀型滓Ｂ…色調は黒色から黒褐色、質感は重い、大型（長径7.0㎝以上の）で厚みが厚いもの（厚さ2.0㎝以上）。

椀型滓Ｃ…色調は黒色から黒褐色、質感は重い、中型（長径4.0㎝以上6.9㎝以下）で厚みが厚いもの（厚さ2.0㎝以上）。上面の盛り上がるものが多い。

椀型滓Ｄ…色調は黒色から黒褐色、質感は軽い、大型（長径7.0㎝以上）のもの。

椀型滓Ｅ…色調は黒色から黒褐色、質感は軽い、中型（長径4.0㎝以上6.9㎝以下）で厚みが厚いもの（厚さ2.0㎝以上）。

椀型滓Ｆ…色調は黒色から黒褐色、質感は軽い、中型（長径4.0㎝以上6.9㎝以下）で厚みは薄いもの（厚さ1.9㎝以下）。

椀型滓Ｇ…色調は黒色から黒褐色、質感は軽い、小型（長径3.9㎝以下）で、厚みは薄いもの（厚さ1.9㎝以下）。

椀型滓Ｈ…表面に流動滓Ｂ（色調は黒色から緑黒色のもの）が付着しており、質感は軽い、中型（長径4.0㎝以上6.9㎝以下）で、厚みは厚いもの（厚さ2.0㎝以上）。気泡が大きく多い。

椀型滓Ｉ…表面に流動滓Ｂ（色調は緑黒色から暗緑色、赤褐色のもの）が付着しており、質感は軽い、中型（長径4.0㎝以上6.9㎝以下）で、厚みは薄い（厚さ1.9㎝以下）。

流動滓…一般には流動状の鉄滓で、製鉄炉・鍛冶炉の内外で生成された鉄滓をいうが、今回は椀型滓・再結合滓以外の鉄滓を全て含んだものをいっており、ｂ・形状には偏平・礫状・棒状のものがある。椀型滓に比べて小型である。ｍ・ガラス質の様子でガラス質１の流動滓Ａとガラス質２の流動滓Ｂの２種に分けている。

再結合滓…鉄滓や鉄製品・半製品、小石粒等が熱の他に水分や土圧等で再び付着した鉄滓状のもので、椀型滓や流動滓のように構造的形態をしていない。鉄製品・半鉄製品等の鉄分を含んだものを含鉄再結合滓とした。

鉄塊系遺物…いわゆる鉄塊で、表面観察では鉄分の錆膨れによる表面のひび割れが特徴で、整理後分裂しているものもある。ｆ・着磁度反応の強いものが多く、ｇ・金属反応のあるものがある。

含鉄遺物…鉄製品・半製品の錆膨れした鉄滓状のもので、そのほとんどが刀子・釘・鉄片の錆膨れしたものと思われる。高師小僧も含まれる。ｂ・形状から偏平・礫状・棒状のものがあり、ｇ・金属反応を残すものもあるが、相対的にｆ・着磁度反応は弱い。

ｂ・形状

資料の形状を礫状・偏平・棒状に区分して表記した。

ｃ・完欠

資料の遺存状況を示した。椀型滓はほとんどが割られた状態で出土しているため欠となっている。

ｄ・重量

資料の全重量を0.1ｇ単位で計測した。

ｅ・法量

資料の長径・短径・厚さを0.1㎝の単位で測定した。

ｆ・着磁度

直径30㎜・1300ガウス（0.13テスラ）のリング状フェライト磁石を用いて、着磁反応を示す距離を測定し、０から５までの６段階に着磁度を区分して表示した。

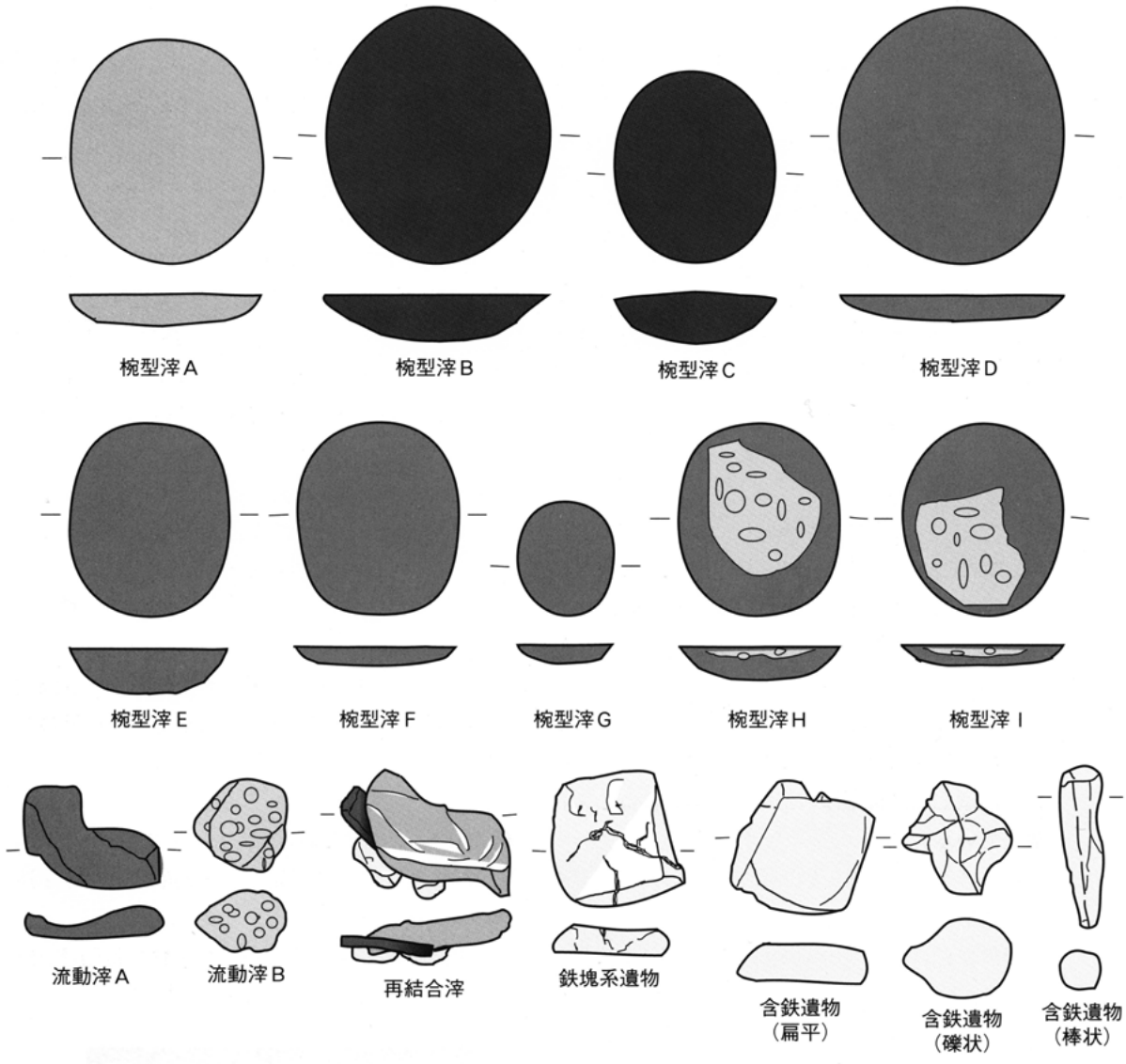
０…全く反応しないもの
１…0㎝～１㎝の範囲で着磁反応するもの
２…1㎝～２㎝の範囲で着磁反応するもの
３…2㎝～３㎝の範囲で着磁反応するもの
４…3㎝～４㎝の範囲で着磁反応するもの
５…4㎝～５㎝の範囲で着磁反応するもの

ｇ・金属反応

簡易な金属反応器（①松下電工、壁うらセンサー、プロ用、ＥＺ３８０Ｂ・②京都度器株式会社、ＫＤＳメタルチェッカー、ＭＲ－５０・③特殊金属探知機メタルチェッカー、穴澤仕様(1)）３体をもちいて金属分の残存状況を測定した。反応があったものを以下の通りに分けて表記した。

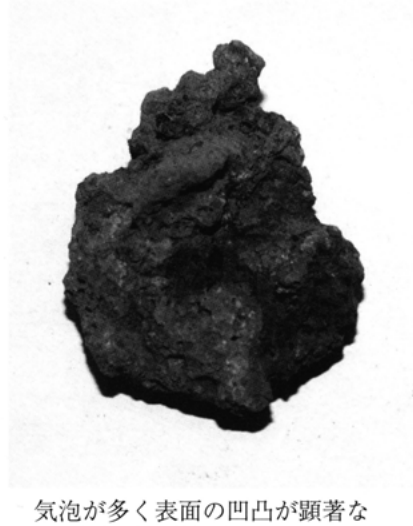
①松下電工、壁うらセンサー、プロ用、ＥＺ３８０Ｂ
０…全く反応しないもの
１…反応するもの
②京都度器株式会社、ＫＤＳメタルチェッカー、ＭＲ－５０
０…全く反応しないもの
１…弱く反応するもの
２…強く反応するもの
③特殊金属探知機メタルチェッカー、穴澤仕様
０…全く反応しないもの
１…弱く反応するもの
２…反応するもの

図３・７１　鉄資料分類図





気泡が少なく表面の滑らかな
33上面（椀型滓Ｂ）



気泡が多く表面の凹凸が顕著な
35上面（椀型滓Ｄ）

3…強く反応するもの

ただし、金属反応では資料の表面に付着する錆などがある場合はほとんど反応しないし、①・②の段階区分は任意によるものであり、明瞭な科学的基準がない。

h・発泡

資料中の気泡の痕跡が存在するものに○を記載した。鉄滓のここでいうm・ガラス質部分によく見られる。内部にあるガス分が抜け出た痕跡である。

i・小石粒

資料中に炉材とは異なる小石粒を包含するものに○を記載した。椀型滓の上面・下面に付着するものがあり、今回確認した中では、チャートの0.5㎝～1.0㎝のものがあった。

j・植物残痕

資料中に植物繊維状の圧痕等が残存するものに○を記載した。椀型滓の上面や再結合滓などに付着している。

k・木炭

資料中に炭粒を包含するものに○を記載した。

l・炉材

資料表面に炉材の一部と思われる粘土・石材が付着するものに○を記載した。椀型滓の下面や流動滓の一部に付着しているものがあった。

m・ガラス質

資料中にスラグ状の部分を包含するものをその重みと表面観察から3段階に分けて表記した。

0…ガラス質がないもの、不明瞭なもの

1…ガラス質を包含し、そのガラス質が重く、色調が黒色から黒褐色で、比較的気泡が小さく少ないもの

2…ガラス質を包含し、そのガラス質が軽く、色調が灰色がかった黒色から暗灰色で、比較的気泡が大きく多いもの

n・備考

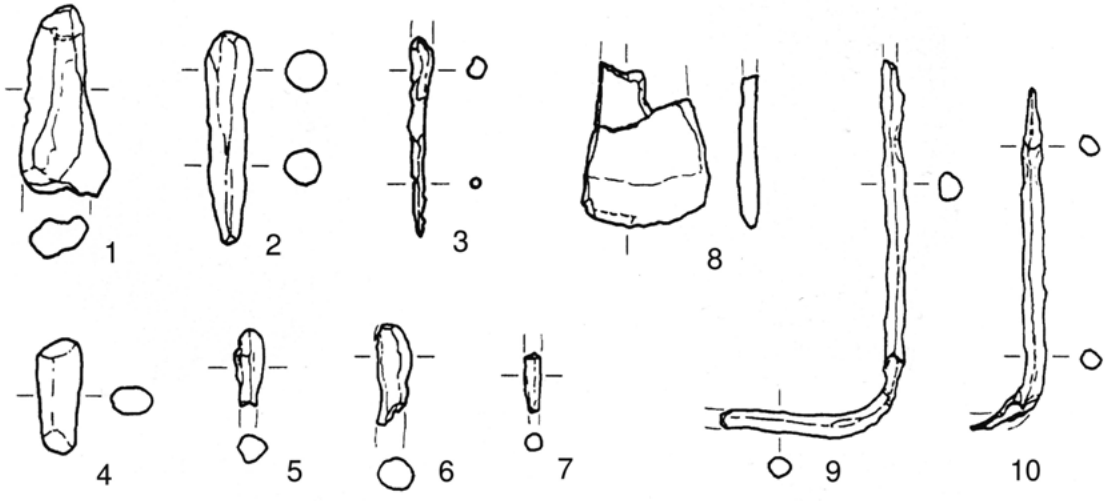
資料表面の付着物・固着（粘土等と共に水酸化鉄が固着した現象を指す）の有無等の特記事項を記載した。

●鉄資料の分析（図版101、図3・72）

ここでは分類した種別の代表的類例の特徴を述べる。

図版101：1～9は椀型滓、10～13は流動滓、14

図3・72　鉄製品（1/2）



は鞴の羽口、15は炉壁、図３・７２：1～9は含鉄遺物に分類される。

図版101：3は椀型滓Ａ、1は椀型滓Ｂ、2は椀型滓Ｃ、4は椀型滓Ｄ、5は椀型滓Ｅ、6は椀型滓Ｆ、7は椀型滓Ｇ、8は椀型滓Ｈ、9は椀型滓Ｉに分類されるもので、各左図が椀型滓の上面、右図が椀型滓の下面と考えられるものである。

ここでは分類基準以外の特徴を述べると、上面の凹凸が顕著なのは4・7、下面の凹凸が顕著なのは3・8・9で、凹凸が顕著なものほど気泡が大きく多くなる傾向がある。逆に1・2のような質感の重い椀型滓は表面の凹凸が少なく、気泡は小さく少ない傾向がある。2のような上面に盛り上がりがあるのは今回分類した椀型滓Ｃの特徴の一つである。8の上面が盛り上がるのは、流動性の高い流動滓Ｂが上面にふくらんで固着しているためである。3下面で植物質痕、5下面で炭粒が見られるが、門間沼遺跡出土の椀型滓では少ない。1下面で石材、8下面で土器片をかみ込む。1・4の下面では炉材と思われる土が付着する。

椀型滓Ｉとした9などの例は、表面に付着する流動性の高い滓の特徴から、近世以後の比較的新しい時代の資料である可能性が高いものである。

10・11は流動滓Ａで、10は棒状紐の形態で椀型滓とは区別できる、表面には径0.5㎝までの気泡が散在し、凹凸がある。12は礫状の小型のもので、他の鉄滓などから割れた破片の可能性もある。

12・13は流動滓Ｂで、表面により流動性の高い滓の固着している部分を上面に図化を行っている。12は左図（上面）の右から左に流動滓が流れた痕跡を残す資料で、13もそれに類似する小片と思われる。12の下面で径1.0㎝をこえる大きな気泡が見られるように気泡が全面に見られるのが特徴である。流動滓Ｂは外見からも流動滓Ａより気密が薄く、質感が軽い。

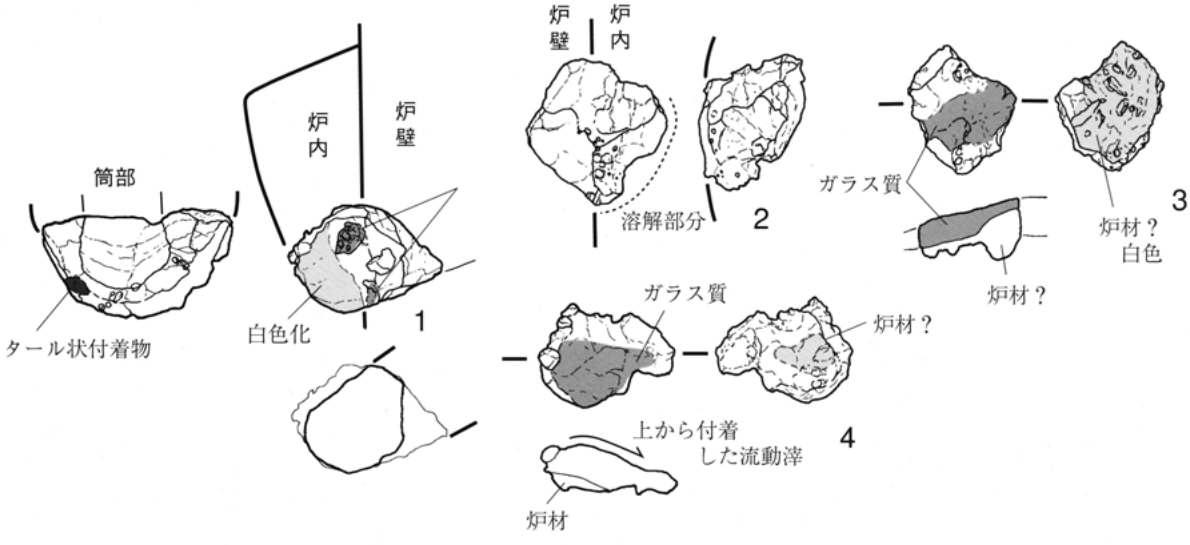
14は鞴羽口の先端部分で、表面の痕跡から14左図のような装着角度が想定される、鞴羽口の大きさは外径6～7㎝、内径・通風孔径2㎝のものが推定される、羽口先端は流動滓Ｂの気泡が多く見られるものに類似する。15は炉壁の可能性のあるもので、石材状のものをかみ込む、より気泡が多い流動滓Ｂに近い部分のものである。

図３・７２：1～7・9は棒状の含鉄遺物、8は偏平の含鉄遺物と分類したもので、棒状の含鉄遺物としたものの断面形態は、円形から長楕円形をしている。55は製品の一部かもしれない。54は鉄斧の可能性があるものである。

図３・７３：1・2は鞴の羽口先端部分で、1の送風管内部径は約3.0㎝、装着角度は約35°である。3・4は質感の軽い流動滓Ｂで、気泡を多く含むようである。

（鈴木正貴・藤山誠一）

図３・７３　94B・C区出土の羽口、流動滓Ｂ　(2/3)



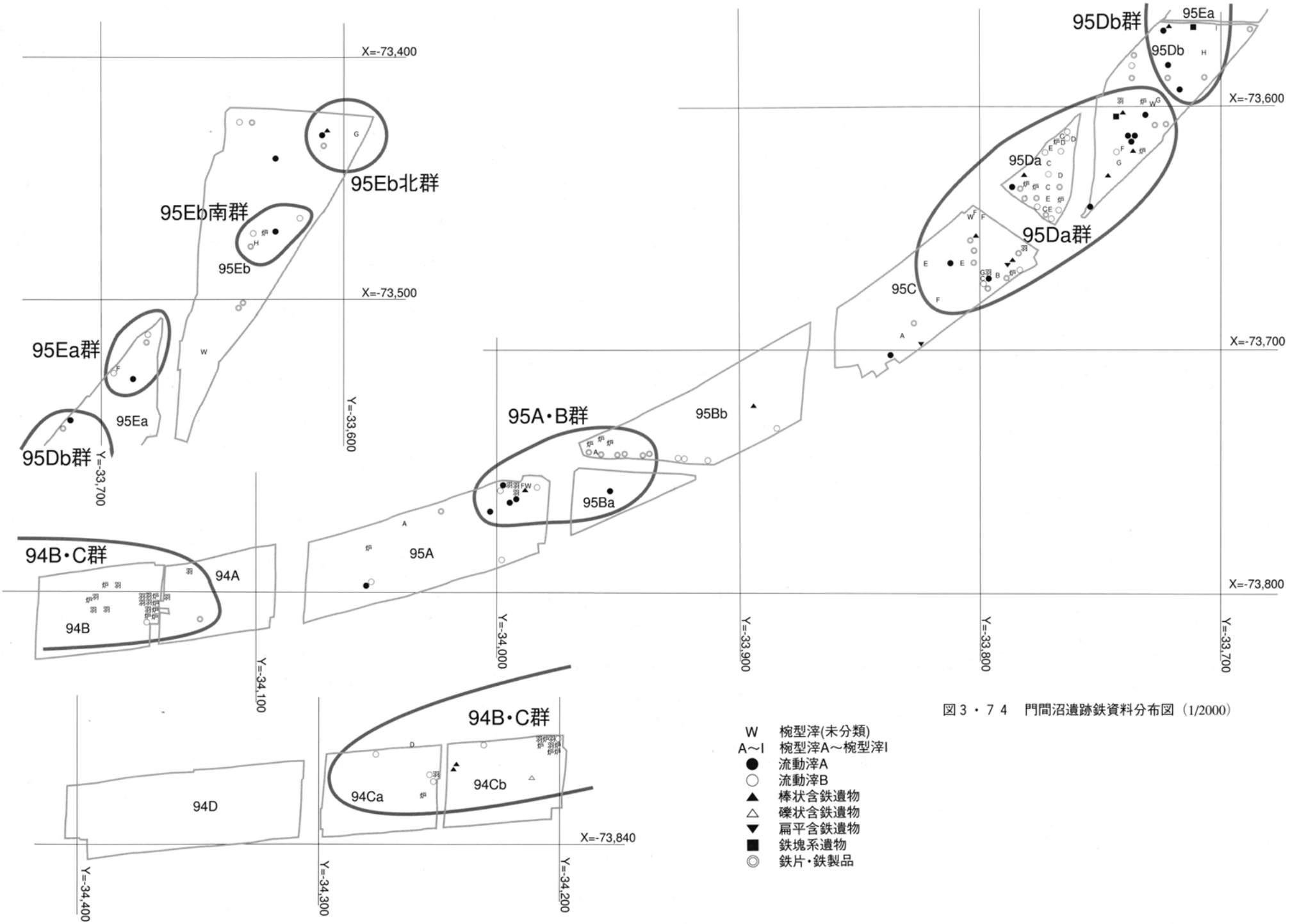


図３・７４　門間沼遺跡鉄資料分布図（1/2000）

（2）石製品

玉類

勾玉が5点、臼玉は1点出土した。

管玉・管玉未製品

製品は2点。未製品は1点で、表面が多角柱状を呈し、未穿孔である。

紡錘車（図版99）

6点出土し、いずれも滑石製である。1～5が古代Ⅰ期、6は古墳Ⅴ期である。

1･2は、下面に2重同心円を孔の周りに施し、周囲に五星を斜格子紋のネガで描いている。上面は八星か。

6は古墳Ⅴ期の遺物とともに出土したもので、精巧なつくりである。

敲石・磨石

棒状礫の両端か一方に敲打痕もしくは擦痕、側面に擦痕か線条痕をもつものがある。また敲打痕が集中して凹部を形成するものもある。多くは弥生時代に属すと思われるが、古墳時代に再利用された可能性もあり、確証はない。古墳時代Ⅰ期の遺構から出土したものにはベンガラ精製用が含まれている可能性を考えたが、その場合には明瞭な光沢を伴うことが通例のようであるのに対し残念ながらそのような痕跡は認められない。

硯　中世の土坑ＳＸ09から小形の硯が出土した。泥岩製で、砥石を加工して作ったものである可能性もある。

錘

平面と側面に紐掛け用と思われる溝が十字に彫られている。古代か。

（3）土製品・陶製品

錘

土製・陶製合わせて１５０点出土している。各類別の分布を示す。

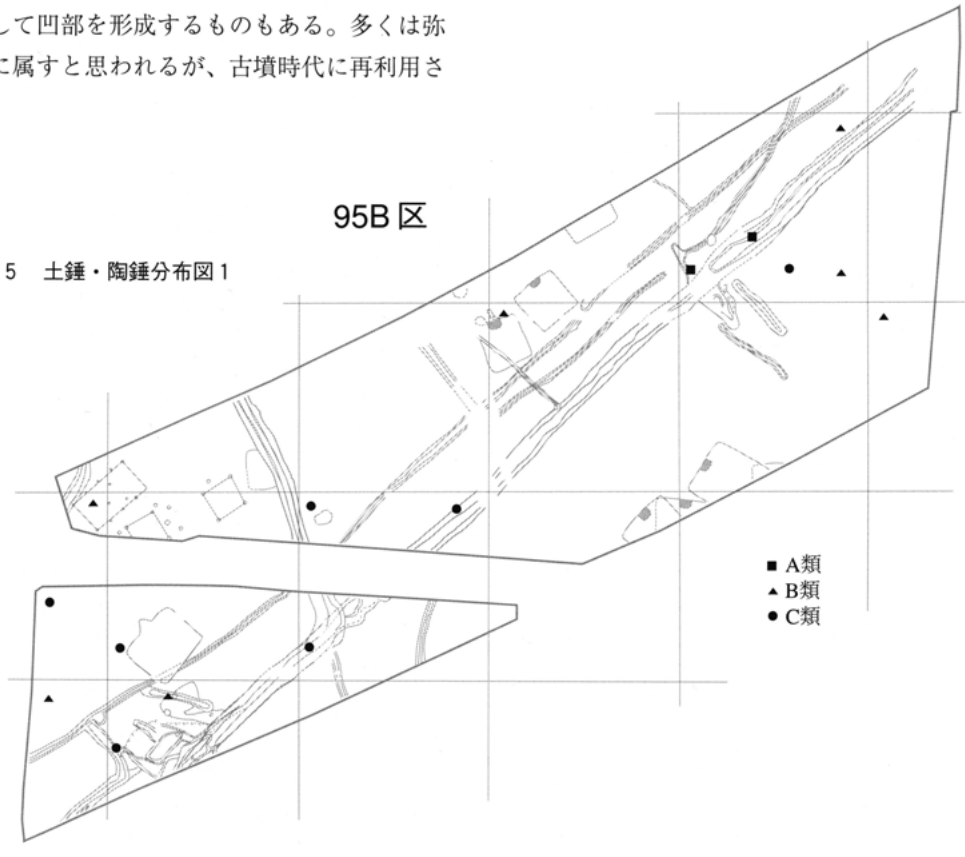
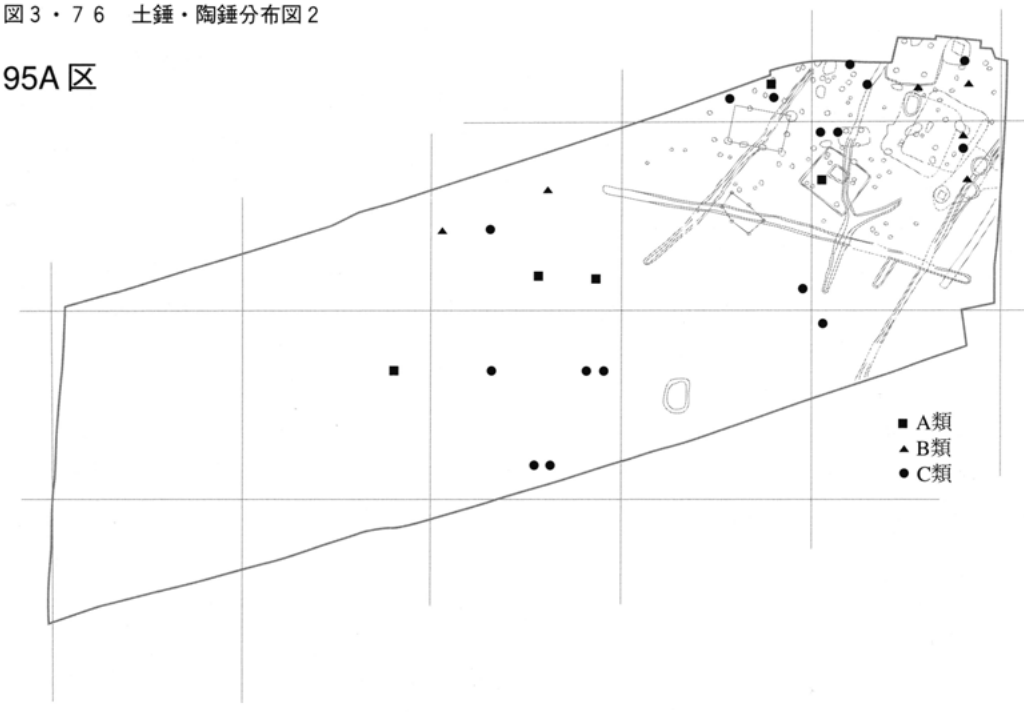


図3・75　土錘・陶錘分布図1

図３・７６　土錘・陶錘分布図２

95A 区



95C 区

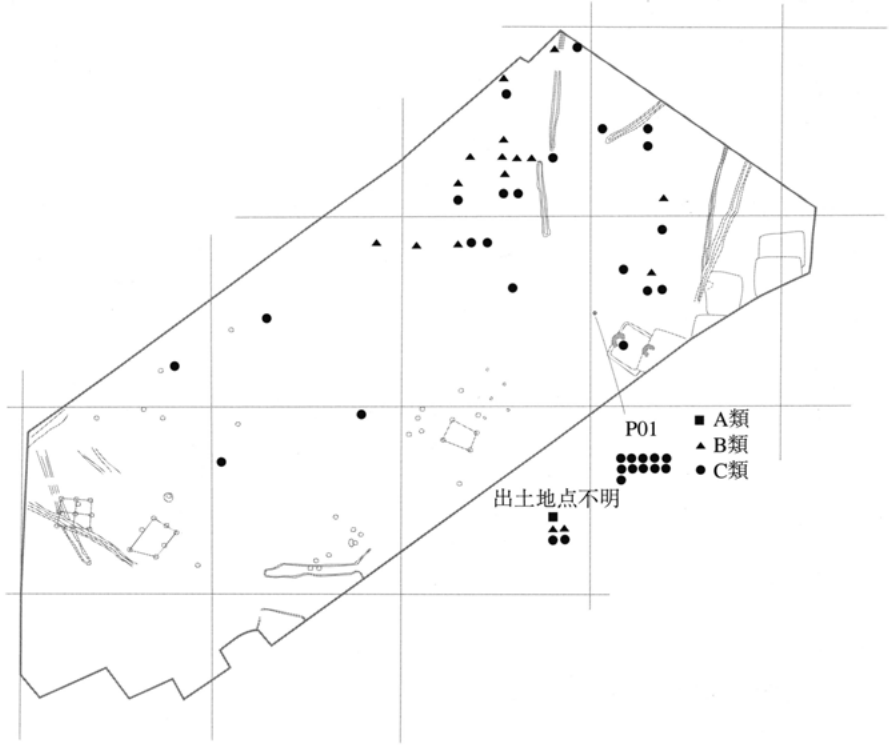


図３・７７　土錘・陶錘分布図３

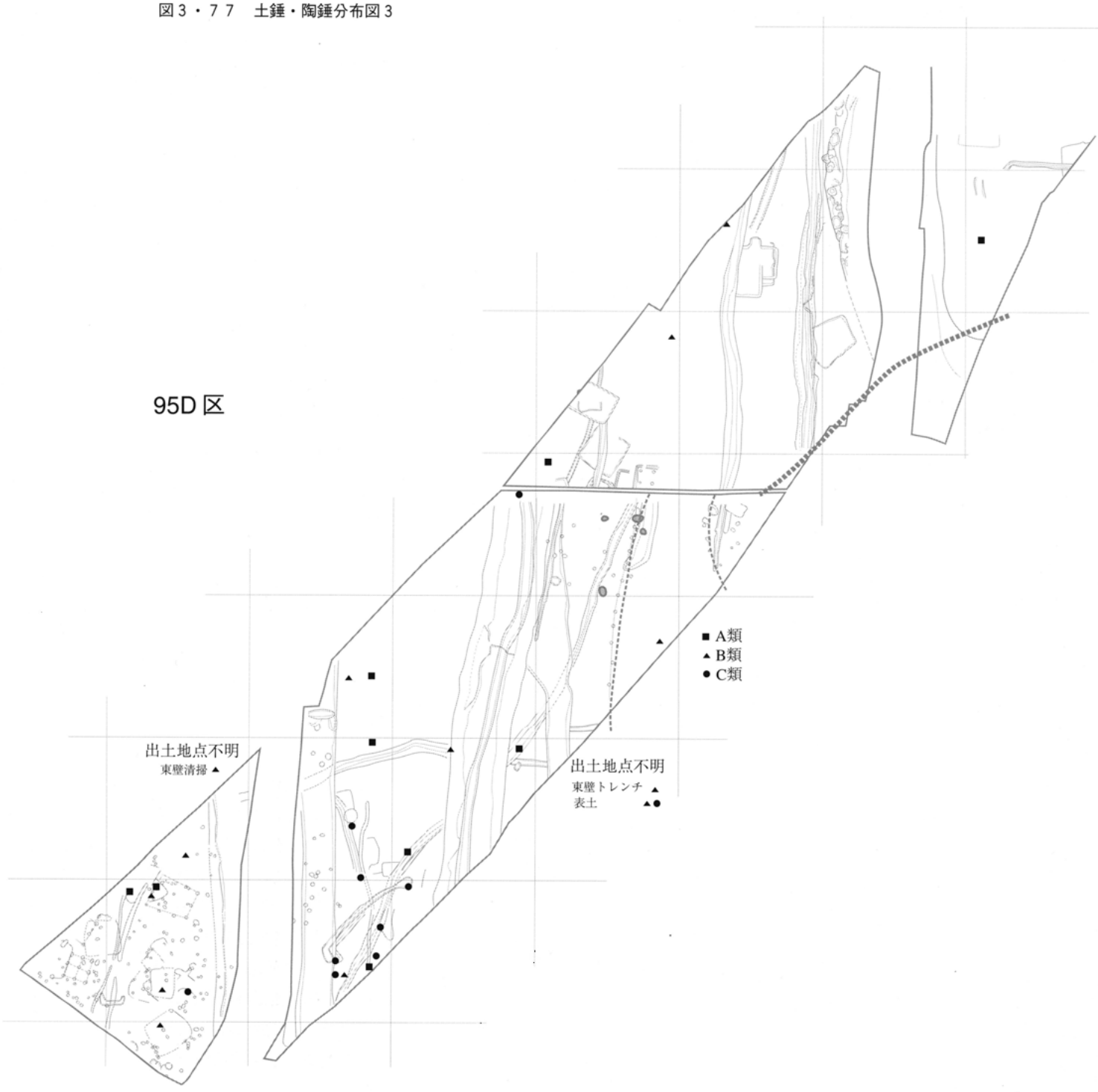


図３・７８　土錘・陶錘分布図４



加工円盤・陶丸

陶丸は加工円盤に比べて出土量がはるかに少ない。

また加工円盤は素材の時期と製作時期が異なっているようで、遺構外出土例は確実な時期決定の難しいものがある。また、加工の程度によっては人為・自然の境界線上のものもあり、再検討を要する。

図３・７９　加工円盤・陶丸分布図１

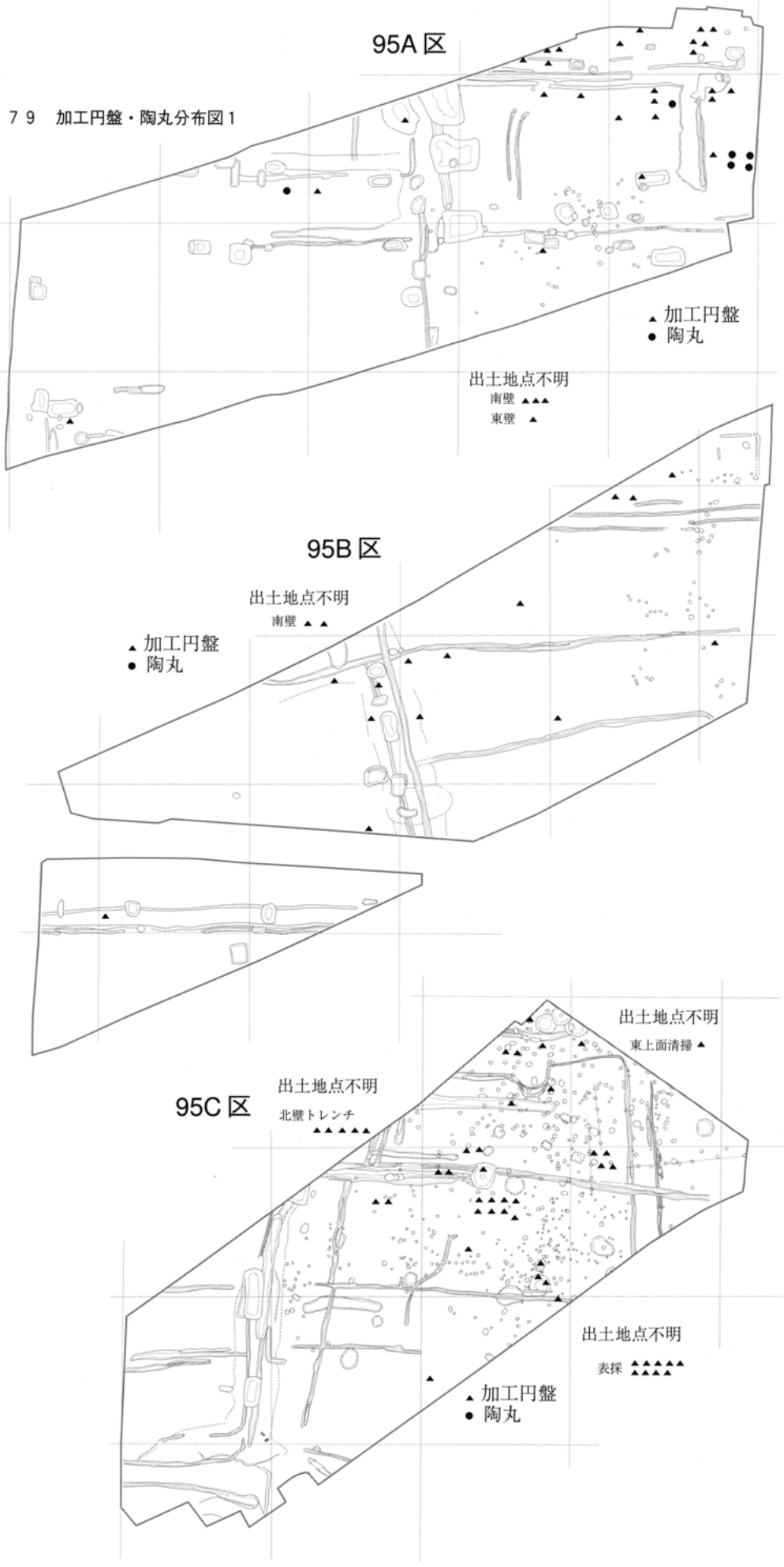


図３・８０　加工円盤・陶丸分布図２

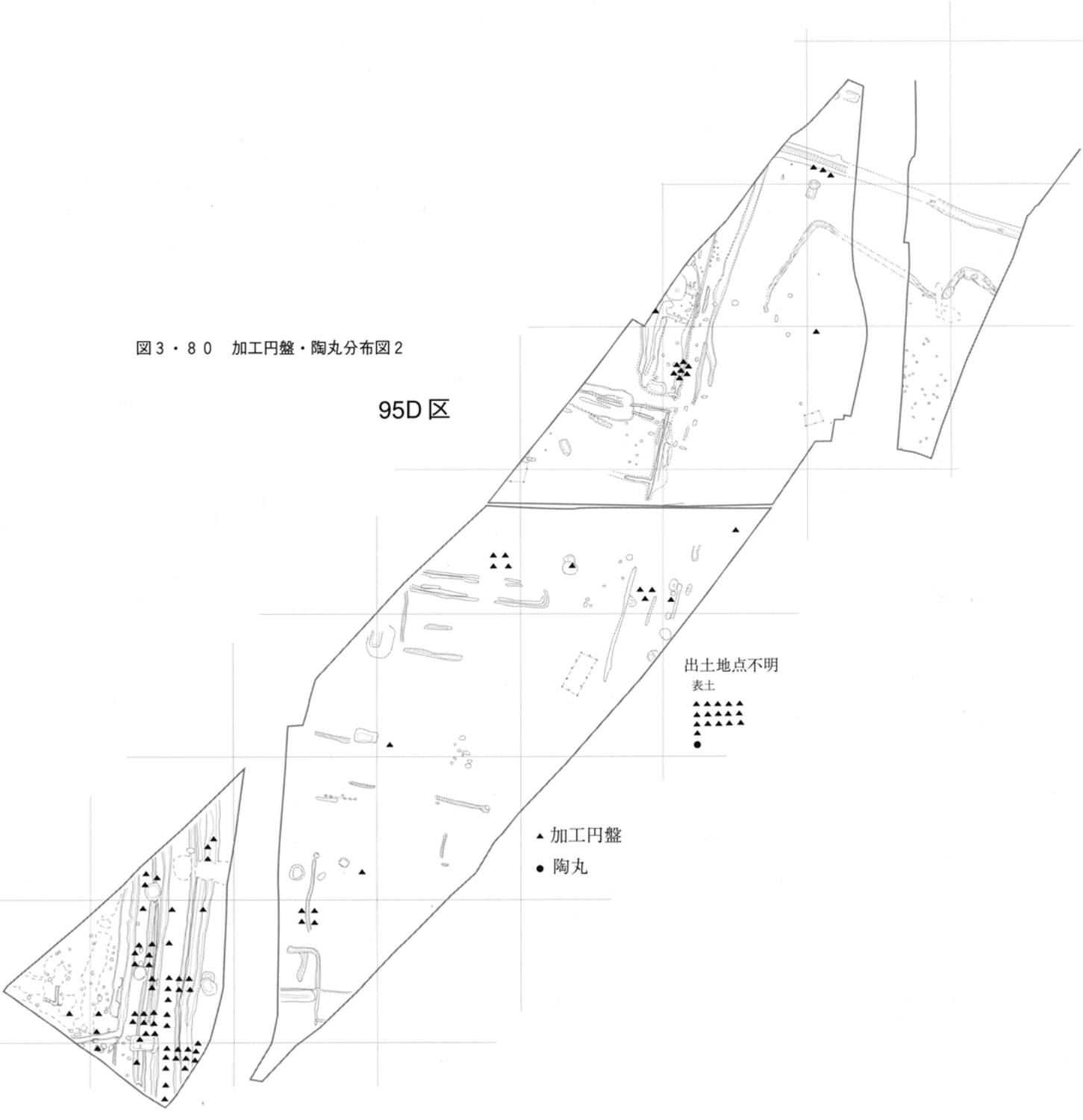
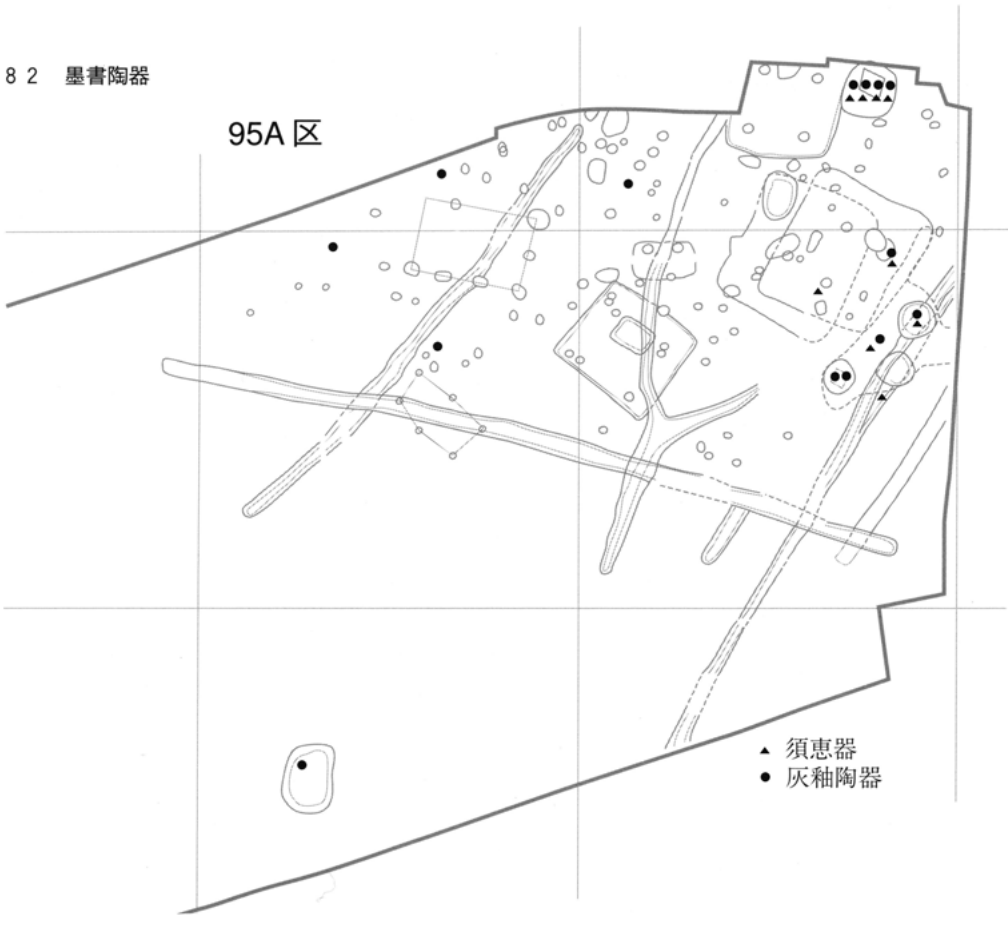


図３・８１　加工円盤・陶丸分布図３



図３・８２　墨書陶器



墨書陶器

古代の墨書陶器は特定地区に集中する傾向が見られた。９５Ａ区および９５Ｂ区での出土がめだった。これら以外は頻度が低い。

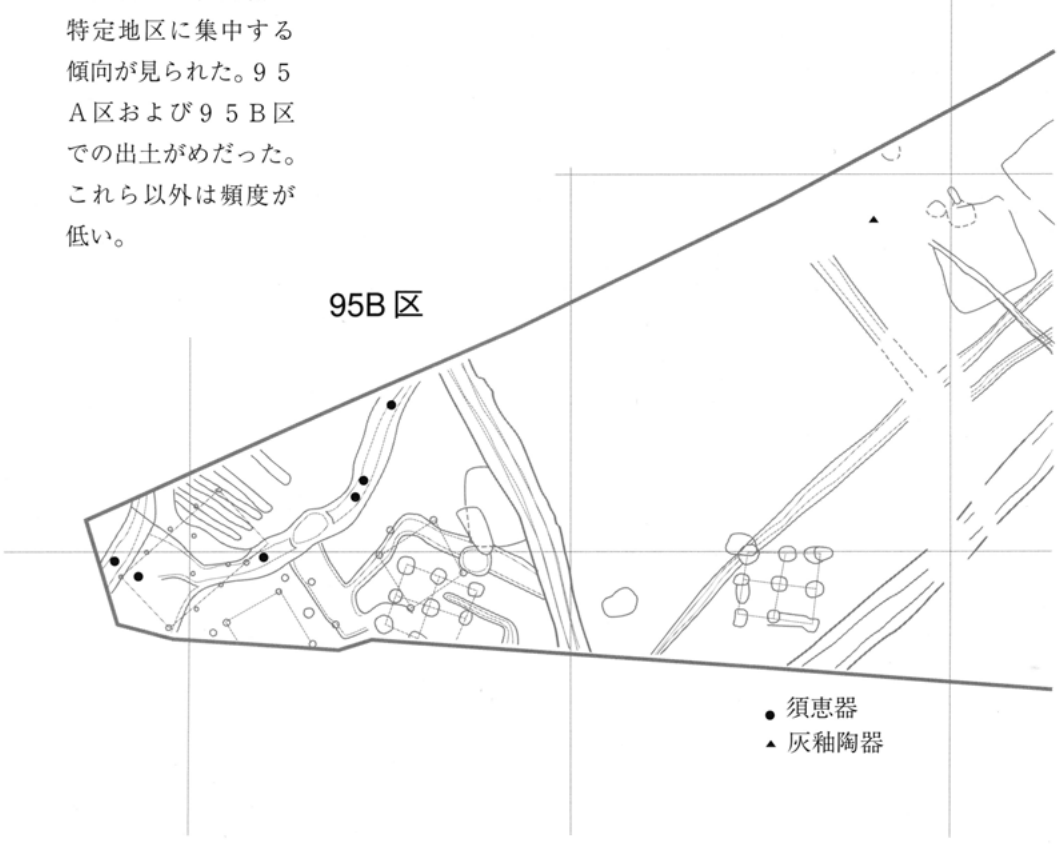
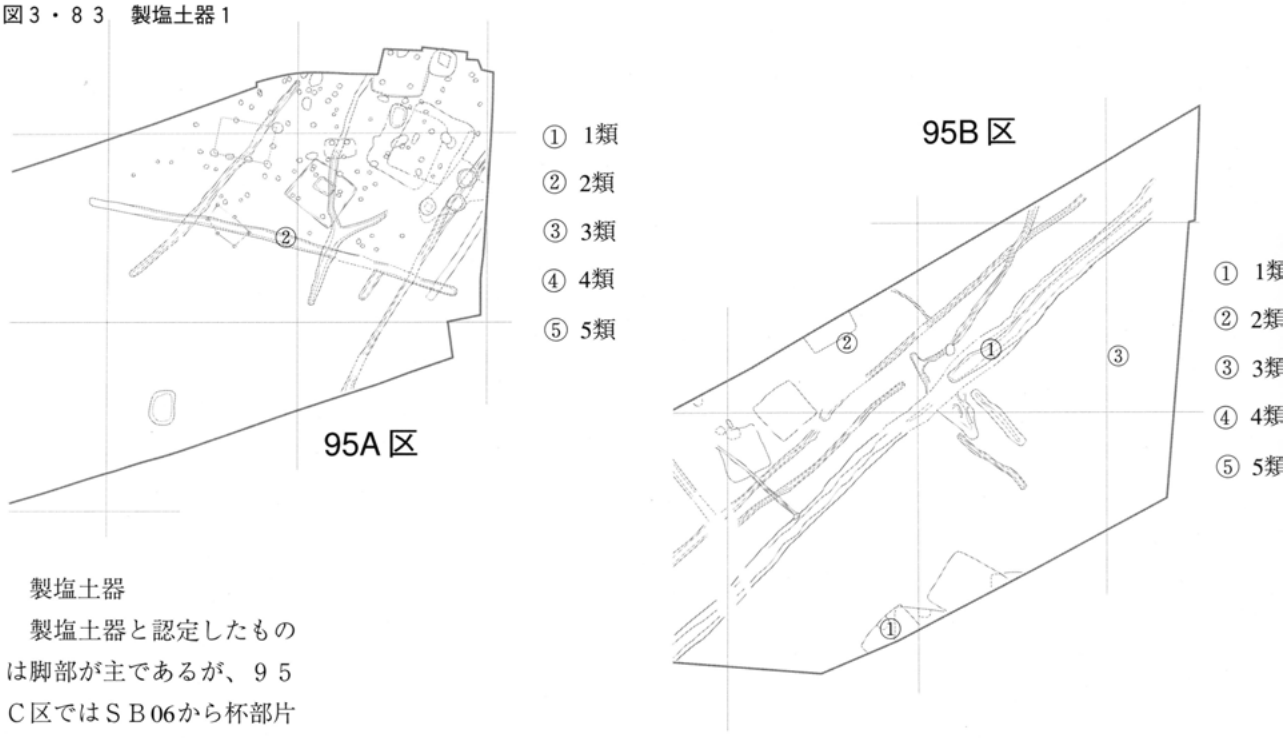


図３・８３　製塩土器１



製塩土器

製塩土器と認定したものは脚部が主であるが、９５Ｃ区ではＳＢ06から杯部片が出土し、包含層からも出土している。他の調査区に比較して頻度が高い。

各類別の分布を示す。

（石黒立人・小川芳範）

図３・８４　製塩土器２





図３・８５　門間沼遺跡の現況（南から）



Ⅳ

分　析

1．水田遺構について

時　期

水田遺構の調査において遺物の出土はほとんどなかった。したがって、直接時期を推定しえる根拠はないが、北に接する大毛池田遺跡の調査成果を考慮すれば、古墳時代前期、門間沼遺跡の遺構区分ではⅠ－a期～Ⅰ－b期、土器区分では古墳Ⅰ期からⅡ期に属すと考えられる。そして９５Ｂ区でⅠ－c期の溝に切られ、しかもそれ以前に自然埋没していたことから、埋没年代をもっとも下げてもそれより下ることはあるまい。

開田年代については、遺跡の開始期まで上がると考えている。その時期はいちおう弥生Ⅴ期末である。

ただし、遺構として継続はしないものの、耕作地としての開始期はそれよりさかのぼる可能性もある。それは弥生時代Ⅳ期で、光沢のある粗製剥片石器が出土していることを根拠とする。ただし、注意が必要なのは、たしかに弥生Ⅳ期に遺跡数が増加し、その背景には耕作地の拡大が考えられるわけだが、稲沢市一色青海遺跡のように畑作に強く傾斜した遺跡が存在することを考慮すれば、なんらかの耕作が行われた可能性は否定できないにしても、それが即水田であったというには、なお検討が必要かもしれない。

現状では、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて広範囲に開田され、いったんはⅠ－c期以前に埋没した。その後の再開発については、大毛池田遺跡では確認されたが、門間沼遺跡周辺では調査上の不備もあって確認できなかった、ということになる。

区　画

門間沼遺跡で検出された古墳時代前期の水田は、独立大畦畔および付属大畦畔によって区画されている。これを大区画として、小畦畔の配列の様相から中区画を推定することができる。

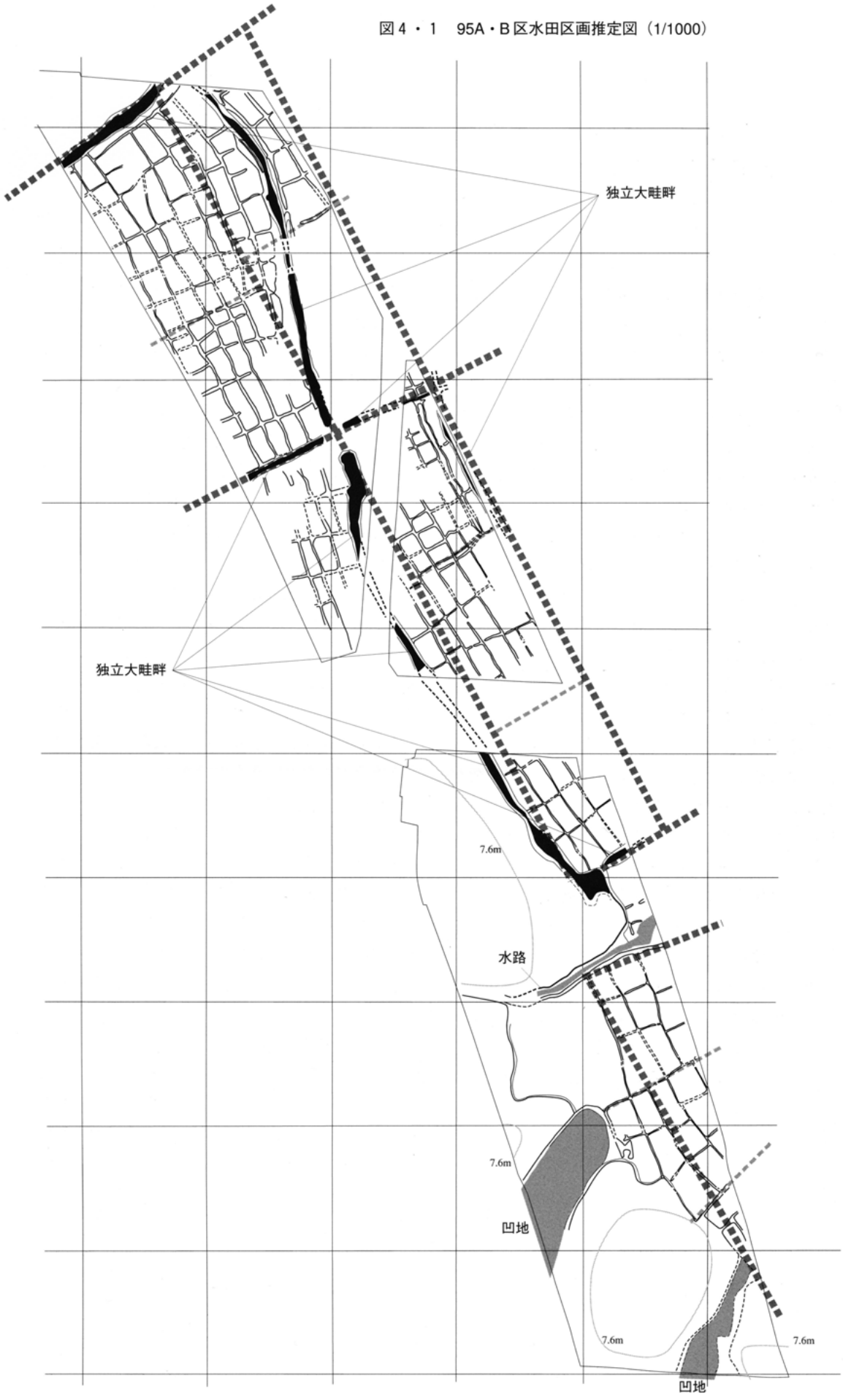
本来水田は、一定期間耕作されたものが何らかの原因によって遺棄、埋没したものであり、開田当初の形態がそのまま遺存しているわけではない。それは９５Ｄａ区の調査において検出した水田の下で発見された最初期に掘削された溝の存在からもいえることである。

この基本的視点において、門間沼遺跡で検出された水田をながめると、図4・1のような大区画の配列が読み取れる。ほぼ長方形の大区画が整然と並ぶものであるが、こうした様相は土地利用における個別性をある程度排除したものとかんがえることができよう。つまり水田の管理・運営が中心的位置を占めたというものである。

門間沼遺跡に北接する大毛池田遺跡では、地表面の傾斜が緩い平坦部で一辺100ｍに近い方形区画群が展開する様相がわずかに伺えたが、それは単に平坦な地形に適合した形態である以上に、水田を耕作の便宜意外の理由で区画しようとする意志が現れたものと考えたい。だからこそ、同じ条件にない門間沼遺跡でも大区画が整然と行われたということではないか。

門間沼遺跡ではおそらく谷が近い位置にあり、その緩斜面に開田した結果、等高線に沿うように長方形大区画が配列されることになったのであろう。それが経年耕作される中で、徐々に形態を変化させていったものと考える。

図４・１　95A・B区水田区画推定図（1/1000）



2．弥生時代中期前葉の土器群をめぐって

（1） はじめに

今回の門間沼遺跡の調査では、遠賀川系土器と朝日式をつなぐ甕形土器の出土をみた。そこで、ここでは弥生前期から中期への変遷を整理しておきたい。

（2） 資料の特徴

関連資料の特徴は次のようなものである。

様相1

ア．上記資料と共通するが、頚部下に平行線紋が施されることから遠賀川B系統とした資料である

様相2

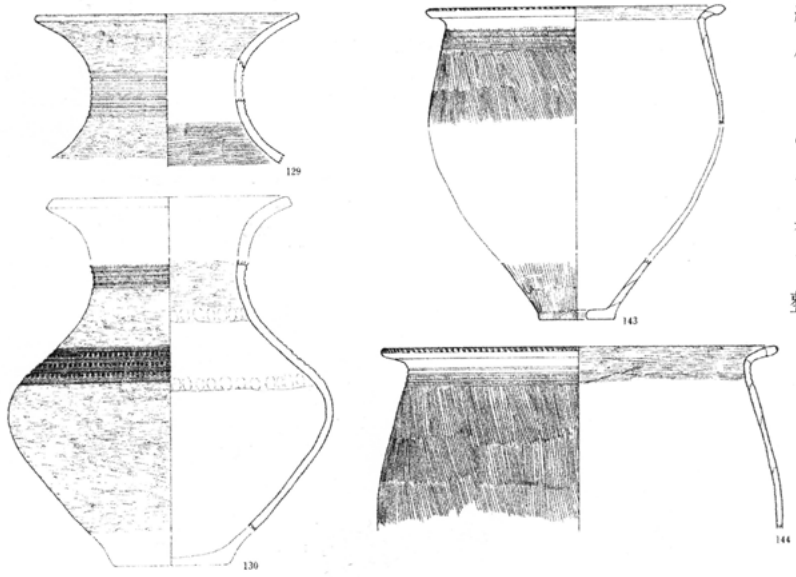
ア．口縁部が短く外折し、内面に弱い稜線をつくる。

イ．口縁端部は尖り気味に丸く仕上げられ、ハケメ刻みが施される。

ウ．口縁部内面にはミガキ調整が施される。

エ．以上は体部最上部が無紋であることから遠賀川系B系統と区別されるものである。

図4・2
山中遺跡
出土土器



（3） 比較資料の概要

上記資料の位置付けを考える前に、弥生時代前期末葉および中期前葉の土器群について概観しておこう。

●弥生前期末葉の土器群

山中類型：環濠ＳＤ01上層や方形周溝墓出土土器が遠賀川系土器の新しい段階の資料である。遠賀川系土器にはＡ・Ｂ２系統あり、組成比率は壺についてはＡ＞Ｂ、甕はＡ＜Ｂとなっている。しかもＢ系統の約半数は在地品となっている。この点が重要である。ほかに条痕紋系土器や沈線紋系土器が出土している。

●弥生中期前葉の土器群

朝日類型

以下の様相から構成される。

様相ａ：いわゆる朝日式の中心をなす一群である。

壺には太頚壺、広口壺、細頚壺などがある。施紋は二枚貝直線紋によって特徴づけられる。わずかながら多重沈線紋もある。近畿地方第Ⅱ様式土器と紋様が類似していることから両者の関係を伺うことができる。

甕は、調整手法や形態に多様性が認められるが、いちおう粗ハケ調整、ハケ→斜位二枚貝調整、ナデ調整などを典型例と考えることができる。このうち、朝日形甕と呼んだものは“ハケ調整→斜位二枚貝調整”甕のことである。

本例は二枚貝によって最終調整が施されるが、条痕紋系土器に属すわけではない。

朝日遺跡以外で類例を確認していないが、広口壺には口縁部内面に段を形成するものがある。これは山口県地方の高槻式に類似するものであるが、距離が離れすぎており、両者の関係を考えるには難しい資料である。しかし、型式変化は認められるので、ひとつの範型として存在していることは重視してよいだろう。

ほかに無頸壺、鉢、台付鉢、把手付鉢などがある。

様相ｂ：条痕紋系土器であり、岩滑式と共通する部分をもつ。太頸壺は口縁部内面に隆帯を貼り付け、これが拡張されると受口となる。壺の頸部紋様では波状紋からハネアゲ紋への移行が急激に行われたためか、前者が単独出土することはない。、頻度は後者が圧倒的である。

甕は体部の張らない深鉢形が基本で、口縁端部に押し引き紋が施される。押し引き紋には２種類あり、前期以来の端面に直交するものと、上端に施すものとがある。

厚口鉢が組成する。

様相ｃ：壺は様相ａと様相ｂの折衷である。甕は口縁端部に二枚貝条痕を施し、体部外面も二枚貝による斜位調整である。口縁端部が薄く尖るものと、面を持つものがある。後者については帰属判定がむつかしい。

このほか、沈線紋系土器、縄文施紋の一群などもあるが、ここでは除外する。

（４）検　討

門間沼遺跡における様相１と様相２の違いは、甕の頸部下に平行線紋が施されるか否かの１点である。型式学的には系列をなすとみなされるものであるが、はたして実際にそれが時期差であるのか、または変異であるのかということは未解決である。

様相１については、同類がすでに一宮市史収載の一宮市萩原中学校河田遺跡出土資料中に掲載されており、しばしば注意にのぼってきた。ようや

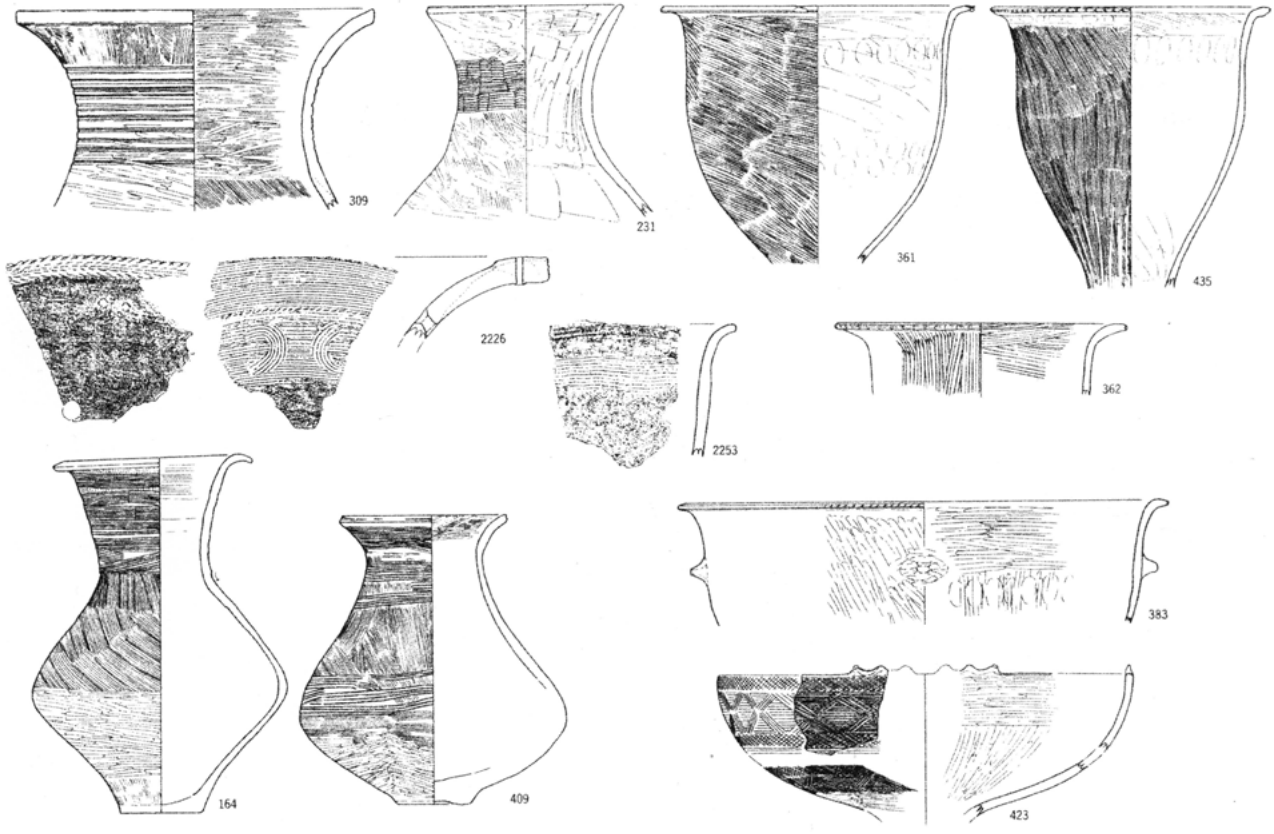


図４・３　朝日類型様相ａ

く、今回の調査で少ないながらも出土したことにより、それが単なる変異ではないと確信をもつにいたった。

しかし、問題は様相２である。これが変異ではないという確証は今のところ無い。いっぽう、これが遠賀川系土器に伴うという確証もない。まさにどっちつかずとなってしまうのであるが、ここではこれを中期前葉に含めておくことにする。そして、朝日類型様相ａの中心的な器種である朝日形甕の祖型に位置づける。

（５） 弥生中期前葉の土器群の成立

Ａ．特徴

いわゆる朝日式（朝日類型様相ａ）の成立をめぐってはわからない点も多々あるが、内容構成に関してはいちおう次のように整理できる。

●壷

ア．頚部が筒状に伸びる広口壷が基本で、これに無頚壷が加わる。頚部が細い細頚壷は後出である。

イ．伊勢湾西岸部では普遍的に、東岸部では尾張平野南部を中心に分布している。

ウ．施紋は二枚貝を工具に用いるのが典型的であるが、ほかに遠賀川系土器風の多重沈線紋、鋸歯紋などもある。当初は直線紋帯が主で、後に波状紋が加わる。

櫛工具による施紋については時期的に後出すると考えている。壷の形態にも異なるものがあり、朝日遺跡報告ではⅢ期として独立させた。

エ．三角形刺突紋や口縁部内面に瘤状突起を付設するものは後出である。ウの櫛描紋の展開と関連する可能性が高い。

オ．頚部紋様帯直下の段は時期差にはならない。

カ．成形法は粘土紐外傾接合が通常のようである。

●甕

ア．伊勢湾西岸部では粗ハケ甕が主体をなし、朝日形甕は客体である。したがって単純性が特徴となる。

イ．尾張平野南部では朝日形甕を主体として、これに朝日類型様相ｃ構成甕との影響関係による変異が加わる。朝日遺跡では細密ハケ甕の頻度も高く、朝日形甕が圧倒的というわけではない。複数の形式が存在しているしているということである。したがって、多様性が特徴になる。

Ｂ．成立

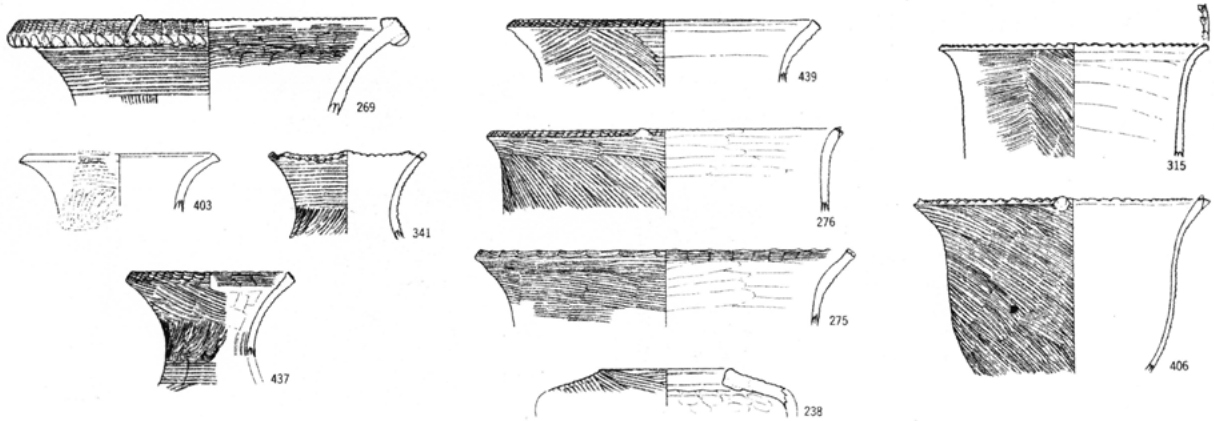
これまで朝日式を考える場合、資料の充実している朝日遺跡を典型に考えてきたが、朝日遺跡における多様さが問題を複雑にしていたようにも思える。つまり、朝日式を考えるのに朝日遺跡を基準にしたために隠されてしまった部分があるのではということである。このことは他の時期についてもあてはまる。

少なくとも朝日遺跡の多様さはそこで何かが生まれる予感を与えはするが、生まれたものが複雑であるために見えにくくなっている。いっぽう、伊勢湾西岸部では単純であるがゆえに、生まれたものを受容したに過ぎないという印象を与える。

このように考えると、いったいどこで成立したのであろうかということになるが、第３の地域を想定したい。

それは、伊勢湾西岸部でも北部地域である。

図４・４　朝日類型様相ｂ



この地域で報告された資料は十分ではないが、鈴鹿市上箕田遺跡の様相をみると朝日類型様相ａとの共通性が高いようであり、朝日遺跡で典型的に見られるような多様性がもう少し整理圧縮されている印象がある。つまり、朝日遺跡における条痕紋系土器要素を整理したのが上箕田遺跡の様相ということになる。そこで、上箕田類型を設定したい。

この点で、中村友博氏が伊勢湾地方の弥生中期前葉を考えるに際して上箕田遺跡の資料に注目されたことも、この点で言えばもっともなことだったというふうに思える。

伊勢湾西岸部では雲出川下流域を中心にして壷を共有しつつも異なる様相（類型）が展開する。伊勢湾東岸部では朝日遺跡や西志賀遺跡などにおいて条痕紋系土器との影響関係で独自の土器群（朝日類型様相ｂ）が生まれる。その東は岩滑遺跡を典型とする［二枚貝］条痕紋系土器群（朝日類型様相ｃに類似）が矢作川流域まで展開する。主要河川中流域の内陸山間部では、たとえば美濃加茂盆地周辺では独自な条痕紋系土器群が展開する。いちおうそれを牧野小山類型様相１と名付けておく。これらは内傾口縁土器や厚口鉢を欠落させるだけでなく、縄文を紋様素に含み、後に［櫛］条痕紋系土器に転換して条痕紋形土器の分岐を生じる。

いわゆる朝日式に相当する土器群は、伊勢湾最奥部から尾張地方南部にかけての東岸部海岸よりの地域から鈴鹿川流域以北の伊勢地方北部の海岸よりの地域で成立した可能性が高い。

そして、その周辺では受容の仕方からより単純化した様相（類型）と在来土器群との関係から変異を生じてより複雑化した様相（類型）の二者が生まれた。前者が伊勢地方中南部、後者が尾張地方内陸部である。

朝日遺跡の中期前葉土器群が複雑化した背景は、朝日遺跡における生産場面での情報交錯が考えられるわけであるが、それが朝日式の認識をも複雑なものにしたのである。

朝日式の根幹は壷・甕とも遠賀川系Ｂ系統を基盤に成立したと考えるのが妥当であろう。上記地域はまさにそれに相応しい地域である。

今後、上箕田遺跡あるいはより良好な内容をもつ資料の蓄積が望まれる。それらによって基幹器種群があきらかになるであろうし、新たな様相（類型）が設定されることであろう。

（６）　今後の課題

以上のように複雑な土器群の動態を駆け足で概観してきた。それを旧来のままに朝日式と名付けることがもはや不適切であることは明らかだ。この際、それが型式であるのか様式であるのかも重要な問題ではない。重要なのは、基幹器種群の認定、また共有器種や専有器種に焦点を絞って時間的、空間的様相の整理を進めることである。

そしてそれらがどのように構成されているのか、どのような類型として設定可能かを見極めることである。

共有器種や専有器種は単に分類上の細分単位として存在するのではなく、有機的な関係性をもった土器群全体（類型もしくは様相）と緊密な関係を有する構造単位として存在するのであり、その水準こそが吟味されねばならない。そしてその上で、普遍的な時間軸における変遷を検討して、構造が持続されているのか、新たな構造に変換したのかを明らかにする必要がある。

土器分類が即年代区分になるというようなこれまでの両義的分類系は弊害でこそあれ、けっして有効性は無いと考える。

（石黒立人）

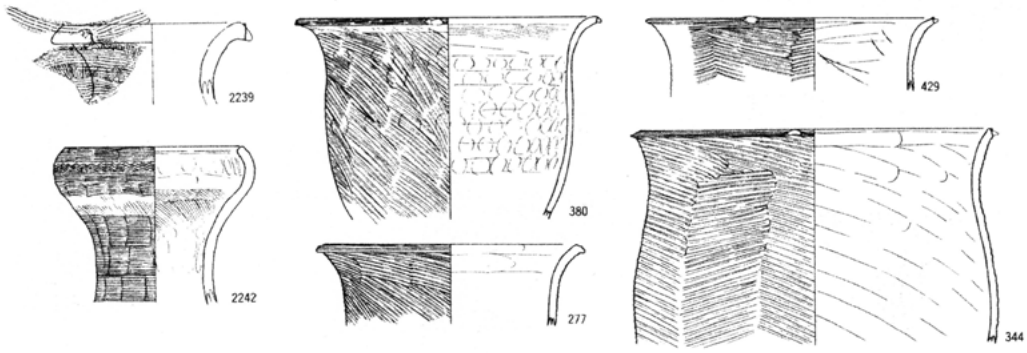


図４・５
朝日類型
様相ｃ

3．門間沼遺跡から出土した古墳時代初頭の土器について

（1）はじめに

●分類とは

分類には形態を対象にするものと機能を対象にするものとがある。どちらも重要で、どちらかが本質的ということではない。この点を承知しつつもここでは土器の形態を中心に考え、機能については別の機会に譲る。

分類の方法には次のような種別が考えられる。

・Ⅰ：階層的分類

A：形容詞と種・類の組み合わせ…つまり伝統的分類。

イメージ喚起的であり、ある意味でわかりやすいが、形態表記にも限界がある。ステレオタイプの表記が認識を拘束しかねないこと、また厳密な基準の設定がむつかしいなどの問題もある。

B：個体全体の構造

理想的ではあるが、遺跡から出土する資料の多くが破片である現状では十分に現実的であるとは言えない。この場合もステレオタイプ化しやすい。

・Ⅱ：非階層的分類

A：並列的…機械的で断片的。

分類単位が構造化されていないために、単位数が多くなり煩瑣になりやすい。分類当事者もどれだけ先を見通しているのか疑問である場合も少なくない。第3者にはわかりにくい場合が多い。

いずれにしても分類は、対象を把握する為の予備作業であり、目的ではない。分類がかえって対象を難解にするのでは、なんら目的を達成したことにはならない。また、分類は厳密であるべきとの信念のもとで、あらゆる対象を網羅した統一的なものでなければならないという理念の提示も、傲慢以外のなにものでもない。

分類は対象の数だけ、また分類者の数だけ存在してもかまわないと思う。要はそれぞれの異同をめぐって議論が行われさえすれば良いと思う。考古学的に正しい分類・正しい結論を求めてもそれはある意味で＜神＞を求めることに等しいと言えるのであり、その先には教義をめぐる正統派論争が待っているだけであろう。それはかえって研究を不活性化させる。むしろ、コミュニケーションを成り立たせること、そして議論すること、さらにそこで生き残ることが最重要であると考える。

●＜様式＞から＜様相＞へ

型式と様式

＜様式＞とは、定量的であり、かつ精緻な分析を経た上で再構成されたものを指すのなら、あるものを＜様式＞を冠して提示する場合には厳密な手続きを踏まなければならないのは至極当然のこととなる。しかし、＜様式＞をめぐる認識がもしこのようなものであるなら、わたしにとって＜様式＞を介して個々の遺跡から空間的個性を把握することは極めて困難となるだけでなく、時間的区分も決して自由ではない。＜様式＞は到底わたしの能力を超える、近づきがたいものとなってしまう。

この点で、わたしが考えていた＜様式＞とは、まず複数器種の組み合わせの規則的反復（＜組み合わ

せ〉という相における斉一性）として現れる何かであった。ここでの規則性は当然のことながら同時性に基づくものであり、その点で「一括資料」が重要な地位を占める。そして、その規則性が内的には当該資料の属す文化・社会の一部とパラレルなものとなり、外的にはわれわれが年代区分、空間区分を読み込む対象となる。ここで言う文化・社会の一部とは、一括資料の廃棄単位としての水準を意味する。そして規則性の水準は、ある遺跡における廃絶竪穴建物や土坑などの最小水準に始まり、一つの遺跡、一地域、一地方というように重層的である。こうしたいくつかの水準において＜様式＞が存在するのである。わたしにとって＜様式＞とは、そのような複数の側面を有するものであった。

ところが、現在は＜様式＞がただ年代と同義になり、しかも細分作業がなかば自動化し、様式差を時間差に置換する思考が強固なものとなっている。わたしには、今そこにおいてあえて立ち止まる見識が求められているように思えてならない*。

型式差は時間差である。だが実は、それは事実ではなく解釈であり、“変化はあくまでスムーズに”というスローガンのもと滑らかな組列を希求する研究者の思いの発露にしか過ぎないのでは、という疑いをわたしは持つ。はたして変化の内情はスムーズな差異の連続なのであろうか。持続の間に差異があるなら、差異はどこまでいっても不連続であり、滑らかな系列など幻想に過ぎない、ということになってしまうのに。

「型式分類」という幻想に浸り、「様式」という幻影を築き上げ、そして共有する共同体の歴史。いささか乱暴な表現だが、小林行雄氏の周辺、あくまで周辺で生起した「様式」をめぐる研究史の実態をそのように形容できるなら、そしてその中で土器研究者のステレオタイプが単調に生産されてきたとするなら、いまは疑いも無く＜新しい個の出現＞が、しかも新たな座標系と共に求められているのではないのか。

研究史が緻密に継承するためにではなく乗り越えるべき対象としてあるのなら、複製ではなくオリジナルを生み出してこそ乗り越えることができる、と考える。それはけっして学問的暗黒ではないだろう。研究史との共犯関係の再生産こそが暗黒なのであって、それでは考古学はまさに考古学の対象となってしまう。

土器研究が経てきた歴史はそれとして尊重されねばならないけれども、自ら思考する道も残さなければならないのでは。より積極的には、みずから創ること。

かつて引用の連鎖は研究ではないと言われたが、新たな座標系で組み上げるならばその限りではないであろう。新しいものが初めのうちは古い表現方法を纏うしかないことは歴史が示している。新しい表現方法を自ら獲得することは決して容易ではないのだから。ピジンからクレオールへ、少しづつ進むほかはないだろう。

様相と類型

さて、本書ではあえて直感的な把握を優先させて、少数の指標で「様相」を把握することにし、最終的に様式設定は行わない。

「様相」とは、有るか・無いかの可能性（有るかもしれない・無いかもしれない）も含めて対象を特徴付けるものであり、有る・無いという事実を出発点にして議論するものではない。事実は出発点であり、保証ではない。

こうした認識は、厳密主義者には粗雑に映っていささか不満の残るものとなろうが、中立主義・厳密主義を持ちこむこと自体が時代錯誤であることから言えば、十分に許されると考える。

様式設定の代わりに、当該土器群を「様相」によって時間的、空間的に編成する。そして全体を

＊こうした問題の解決に、一部の研究者が試みているような原典の読み直しが益するところは少ないと考える。それは現在の問題であって、過去の問題ではないからだ。むしろ、現在に引き付けた読み換えが必要であろう。

表現するものを「類型」とし、代表的な遺跡名を冠して呼称する。形や組み合わせの共通性、そして同時性もけっして基準にはならない。あくまで指標としての意味をもつに過ぎない。現状の様式においても型式学的類似性や組み合わせの共通性が基準であったことはない。類似性の過大評価と差異性の等閑視が常態となった昨今の土器研究において、＜様式＞はすでに空洞化しているとさえ言える。今はただ空白を埋め続けているだけであり、枠組みが問題になることもほとんどない*。

今後は類型の内容の吟味が課題となる。要は、仮説の仮設ということである。したがって「類型」には定義が無い。どれだけ現実の資料を特徴づけているかが重要であり、その都度吟味されるべきものである。必要なのは議論である。決断ではない。

●本書における記述の方針

焦点の設定

対象の注目すべき点を次のように整理する。

A：形質的属性…形態と技術

B：表現的属性…形態と紋様

基本的には従来の私の立場を踏襲しており、なんら目新しいものではない。

A：形質的属性は過去・現在において外部的には見えない属性であり、過去・現在ともに、概念的に構成される必要がある。技術的には統合性が保持されている部分である。

B：表現的属性は過去・現在においても外部的に観察可能であり、調整痕や成形痕も外部的に観察される限りで、かつパターン化していれば表現的といえるものとなる。技術的には断片化、あるいは置換が行われ易い部分である。いわゆる模倣土器、折衷型土器はBの領域に含まれる。また、Bはこれまでの古式土師器研究では一部の特徴的な器種を除いて、往々にして等閑に付されてきた。すべて技術・技法論で説明できるという信念のもと、表現的属性として注目されることは少なかったといえる。

ここで注意が必要なのは、A・Bを統合した統一分類の設定が課題としてあるということではなく、分類系としてそのまま2分してあえて手をつけずにおくということである。なぜなら、形態にも形質的かつ表現的という2側面があり、ほぼあらゆる属性にわたって両者は明確に分離できないからである。つまり、対象の属す＜場＞－これは過去・現在を問わない－しだいでどのようにもなるということである。したがって、それぞれを独自に検討することができる基盤の確保が必要なのである。

本書では種々の問題を認めつつも階層的分類を採用し、全体から部分、部分から全体という思考の流れを考慮する。しかし、その場合の基準は門間沼遺跡出土資料であり、同時代と推定される資料のすべてを対象とはしない。遺跡理解に向けての内的分類を優先させ、地域的な様相の把握に向けては別の機会を用意したいと考えている。少なくとも、報告書において第一に考慮されるべきは当該遺跡の再構成であって、時代・文化・社会ではないのだから。

もちろん、その遺跡が属す時代・文化・社会においてどのように位置付けられるのかをめぐって考察をめぐらすことを必ずしも否定はしないし、むしろそれは積極的に行うべきであるとも思うが、残念ながらそれはすでに報告者の能力を超えている。

（2）出土土器の分類

●分類の実際

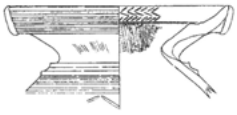
資料の特徴

主要な器種を図4・6、図4・7のように分類した。

これまで出土した濃尾平野の資料に比べてやや

＊同時性にもとづく器種の組み合わせが〈様式〉なのではなく、その規則的な反復（組み合わせの相における斉一性）を「様式」と名づけているのである。したがって、斉一性の質が問われねばならない。

図４・６　古墳Ⅰ期主要器種分類図（1）



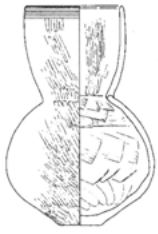
赤彩広口壷

いわゆるパレス壷。口縁部は内面に面をつくり、羽状紋が加飾される。



広口壷

ラッパ状に開く口縁部をもつ。口縁端部に櫛描紋を加飾するものもある。



長頸壷

口頸部は内彎して立ち上がる。口縁部外面に直線紋を加飾するものが多い。また口頸部外面に多重沈線紋と櫛歯刺突紋を施すものもある。



直口壷

内彎して他立ち上がる口頸部をもつ。口縁部外面に直線紋を加飾するものが多い。



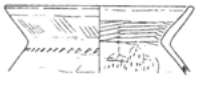
く字状口縁甕Ａ

山中式系の甕。



く字状口縁甕Ｂ

口縁部はヨコナデで仕上げられ、端部の面取りは弱い。



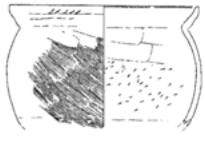
長頸傾向く字状口縁甕

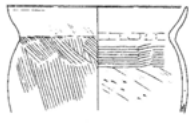
口頸部が長い。



内彎口縁甕

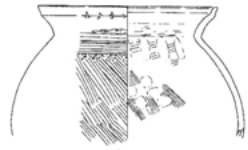
口縁部がゆるく内彎する甕。屈曲部に刺突紋が施されるものは受口状口縁甕に近い。





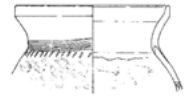
長頸傾向内彎口縁甕

口頸部が長い。



受口状口縁甕

口縁部が屈曲して立ち上がる。屈曲部外面の稜線には刻みが施される。体部にも直線紋や刺突紋を加えるものが多い。



長頸傾向受口状口縁甕

頚部が長い。



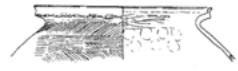


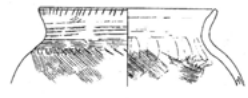


Ｓ字状口縁甕Ａ類

屈曲して立ち上がる口縁部は上端に面をもち、外面には櫛工具で押し引きが施される。体部上半にはハケメ工具で直線紋が施される。体部のハケメは左上がりと羽状になるものがある。

口頸部は短く屈曲するものと、気持ち長いものとがある。後者には頚部が厚手で立ち上がり部分が薄く小さく取り付くものが含まれ、く字状口縁甕との関連を伺わせる。





その他

頚部の屈曲がゆるく、あまりみない特徴である。



小形台付甕

体部が扁平で、容量の小さな甕。口縁部形状は各種ある。



図4・7　古墳Ⅰ期主要器種分類図（2）



高杯A

側面観が逆台形を呈する深い杯部をもつ。口縁端部はわずかに屈曲し面をもつ。ミガキは幅狭く丁寧である。



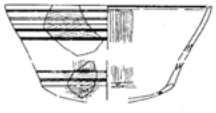
高杯B

椀状の杯部をもつ。門間沼遺跡ではほとんど出土していない。



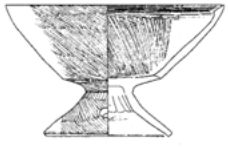
高杯C

側面観が逆台形の杯部をもつ。



加飾高杯A

杯部の形態は高杯Aと共通する。口縁端部に直線紋、杯部外面に多重沈線紋と櫛歯刺突紋が施される。



加飾高杯B

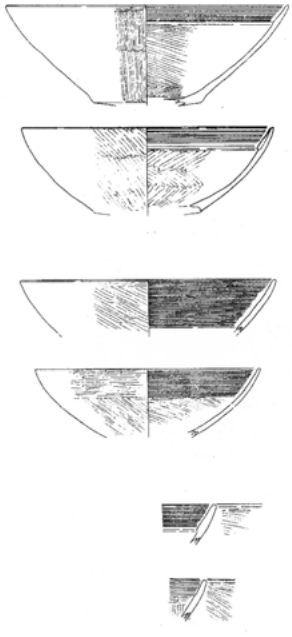
側面観が逆台形を呈する杯部をもち、口縁端部は内傾して面をもつ。端面には直線紋が櫛やヘラによって施される。

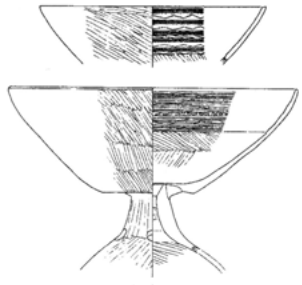
杯部のミガキは内外面とも斜位が基本で、内面ミガキは後に羽状化する。

脚部は屈折して開脚しあまり内彎しない。下端は斜めに面取りされ、接地面は小さい。脚高は低いものと高いものがある。屈折部分以下の外面ミガキは斜位が基本。

口縁部上端の紋様部は、当初は斜めに傾斜するだけであったのが肥厚して下端に断をもつようになる。時間とともに多条幅広化し、下端の段を持たないものも現れる。直線紋は櫛もしくはヘラによって施されるが、新しいものは櫛が主になる。少条のものは櫛で直線を施した後にさらにヘラを重ねるものがある。

口縁部上端は尖るもの、丸いもの、外傾して面をもつものに変化する。

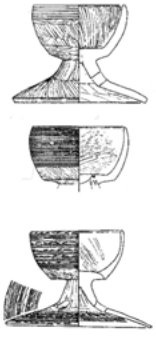




加飾高杯C

杯部内面に多重沈線と刺突紋を施す。また、杯部は傾斜が大きい。

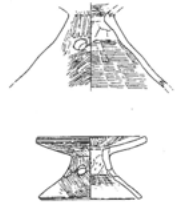
刺突紋はミシン目状の細密な櫛歯によるものから板の小口によるものまであり、時期差と考えられる。



加飾高杯D

椀状の小さな杯部に、低く開脚する脚部をもつ。

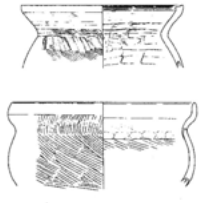
典型例は杯部、脚部とも多重沈線と二枚貝刺突紋で飾られるが、初期には加飾の程度も低いようだ。



器台

脚部は内彎しないものが基本のようだ。

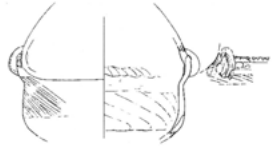
小振りなものも同様で、下端は斜めに面取りされる。



鍋

口縁部は受口状をなすものが基本であるが、内彎気味にのびて端部に面をもち直線紋を施すものがある。

煤が付着するものが多く、煮沸に使用されている。



手焙形土器

鍋に覆いをつけたもの。

偏りがある傾向も認められるが、壷、甕、高杯を中心に区分することができた。しかし、破片がほとんどで、部分を対象とする分類にならざるを得ない、という弱点がある。

・壷

赤彩広口壷（いわゆるパレス壷）には口縁部内面の傾斜が大きいものが多く、頸部の立ち上がりの急なものがほとんど見られない点が特徴となっている。この点は年代差に関係するという指摘も予想されるが、それだけではない可能性もある。口縁部内面紋様では、二枚貝羽状紋や櫛歯羽状紋、ハケメ羽状紋などがあり、この順序で変遷すると考えられる。

赤彩広口壷や直口壷、長頸壷を除くと、壷はそれほど目立たない存在で、広口壷の頻度も低い。出土地区の性格に関係するのであろう。

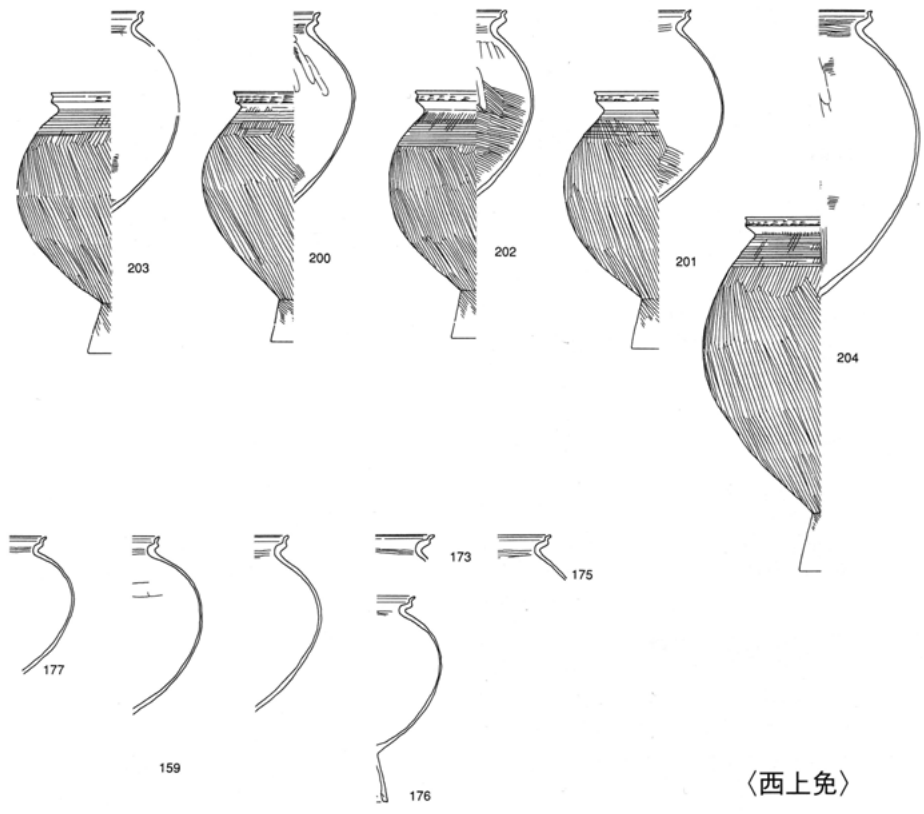
口縁部外面に櫛描紋や多重沈線紋、刺突紋を施すものがあり、特徴になっている。

・甕

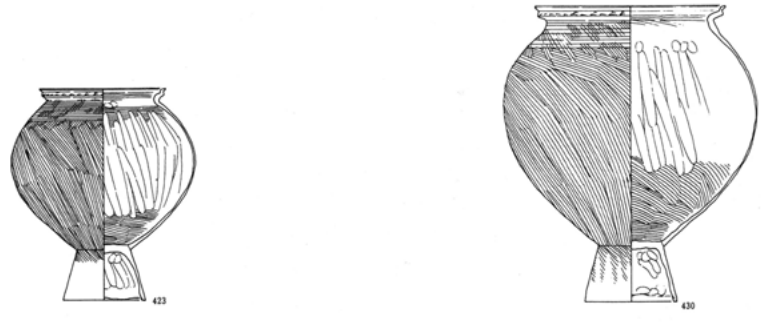
残念ながら完全な形になるものが少なく、すべてを台付甕としてよいのか、問題もある。とりわけ、最近美濃地方で平底甕の存在が明らかになったのを見ると、口縁部のみの分類も限界であるという思いがつのる。

今回、新たに付け加えたものとして、「長頸傾向」という特徴がある。内彎や受口という形態的特徴の存在は従来どおりだが、口縁部が長く伸びるものがある点をとくに今回注意した。もともと鍋の口縁部が異様に伸びることは承知していたが、甕にも同様の例があることにはこれまで十分に気づいていなかった。

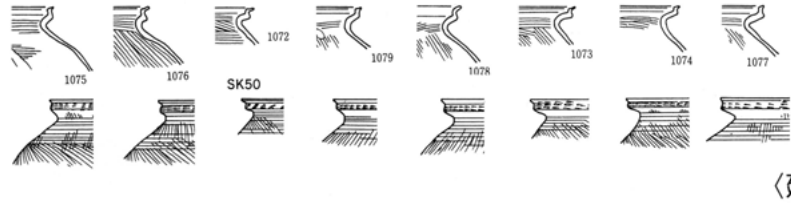
図４・８　S字状口縁甕口縁部比較図



〈西上免〉



〈山中〉



〈廻間〉

さらに、S字状口縁甕の口縁部にも長く伸びるものがあり、それがA類だけではなくB類にも存在することは、口縁形態が時期的個性だけでなく、地域的（技術的）個性をも含んでいることを示していると考えられる。

この点に注目して他遺跡の資料を少し眺めてみよう。

図4・8上段の尾西市西上免遺跡ではS字状口縁甕のA類・B類ともに口縁部の長いものがある。長短は相対的でもあるが、短いものから順に配列して並べてみると、両端資料の違いは明確である。A類では201が頚部下左上がりのハケメでタイプ的に古相を示しているが、204は羽状ハケメになっている。

中段は山中遺跡である。430は口縁部が長い資料である。

下段は廻間遺跡SK50である。やはり西上免遺跡と同様の配列である。

このように見てくると、確かにA類には口縁部の伸びるものに頚部下に左上がりハケメが施されるものが含まれており、その点で古相を呈していると評価できるものの、それがS字状口縁甕B類にも認められることは、S字状口縁甕A類のある段階からタイプ差ではなく形式差の段階に移行していることを示している。つまり、少なくとも二つの系列が存在しているということである。

したがって、問題はこれらが地域差なのか、単にバリアントなのかという点であろう。しかし、どうも濃尾平野北部域でこうした例が目立つことは地域差になっている可能性を窺わせる。今後の課題である。

・鍋

残念ながら全形のわかる資料は無い。しかし、体部片や長く伸びる口縁部の特徴からそれとして認定したものがある。明確に受口状口縁を呈するものはないが、口縁部端面に直線紋を加飾した例などに濃尾平野北部域としての特徴が窺える。

・高杯

本書では加飾高杯と通常の高杯という区分を行った。「加飾」という点についてはその指標を何にするのか、という問題もあるが、本書では紋様を少し重視してみようという姿勢を取ることにした。口縁部加飾という点では、門間沼遺跡資料における加飾頻度は極めて高く、加飾群が主体であるといえる。それは形態的特徴としても表れており、とりわけ高杯の脚や円孔の位置に特徴がある。

従来の年代観では脚高が低く強く屈折するタイプは新しく、高く屈折しないものが古いタイプであるされ、それについて大方の合意も形成されていた。この観点から門間沼遺跡の資料を観察すれば、後者のタイプが極めて低率で前者が主になっている点で、年代的には後出の資料であるという結論が導かれることになる。しかし、今回はその点について多少の疑問を提出することになった。つまり、屈折低脚を一つの系列として認定した。

脚台の円孔については、低脚高杯では円周等分3孔や円周等分4孔といった例が少なく、無頚壷の紐穴のように4孔が2コ一対で近接して穿孔される偏分4孔例が主になっている。この点も地域差である可能性が高い。

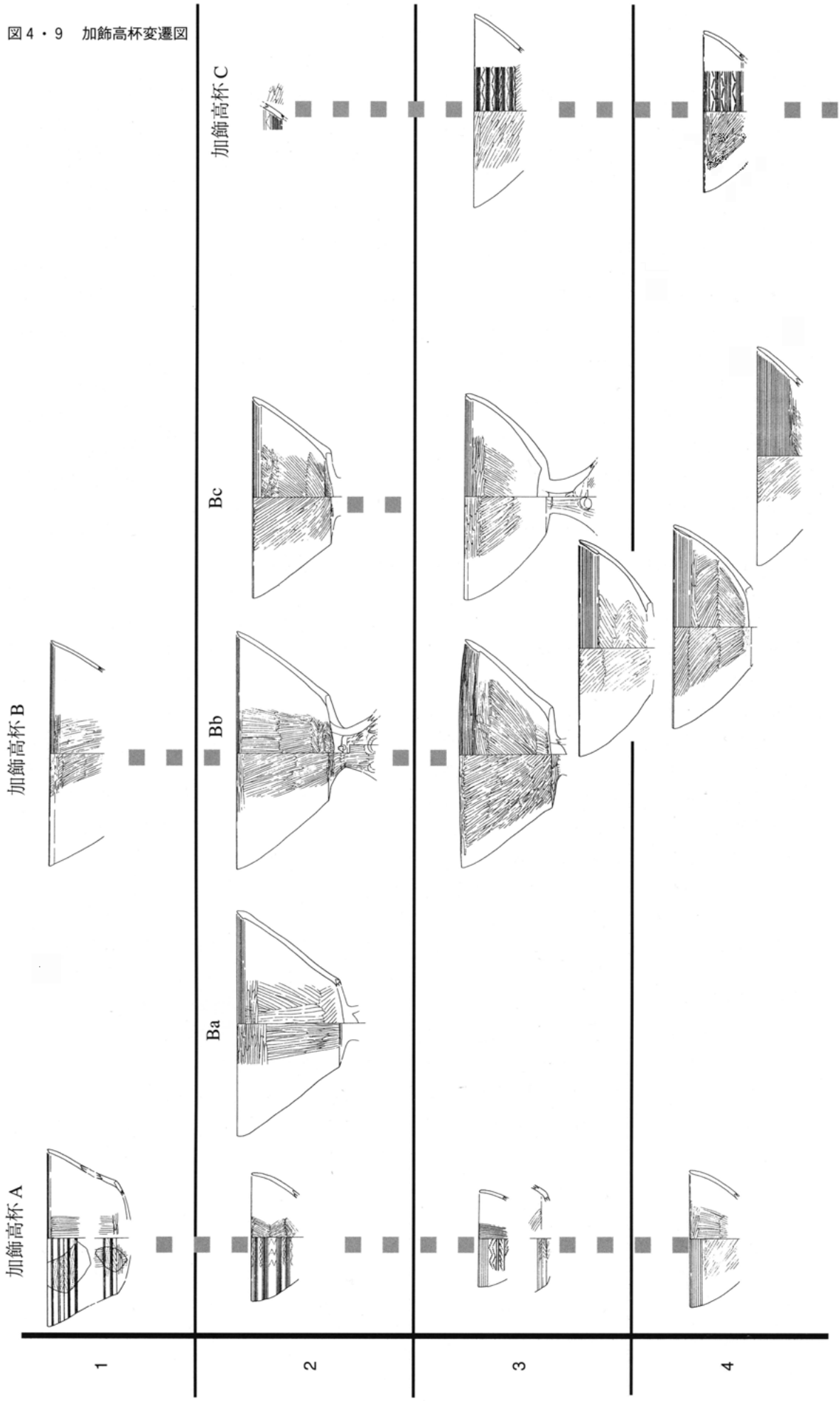
高杯の杯部や脚台について、北道手遺跡では朧気であった地域差がより明瞭になってきたといえる。

加飾法への注目

加飾法における中心軸のひとつとして挙げられるのは、いわゆるヘラによる多重沈線かクシによる直線紋である。そしてこれらを基礎に刺突紋が加わるが、刺突紋と組み合わされる頻度が高いのは多重沈線である。つまり、長頚壷の加飾法が採用されているのである。

多重沈線に用いられる工具の特徴は明確でない

図4・9　加飾高杯変遷図



が、いずれも浅い条線で、光沢をもちミガキのような効果を有するものもある。櫛描紋の場合には直線紋のみで、ほかの紋様と組み合わない独立した用法が目立つ。この違いは、刺突紋が紋様の精緻化において重要な要素となっていることを示すものであろう。

なぜなら、刺突紋には工具が二枚貝、先の鋭いクシでミシン目のような列点をつけるもの、先の太いクシ状のものもしくはハケメ工具、という3種に大別でき、そのなかでは前二者が用いられることが多く、太いクシは単独使用の場合がほとんどだからである。

そしてこのうちで二枚貝がもっともグレードが高い。また、直線紋の精緻さにおけるグレードも、多重沈線と櫛描紋では前者が上位であることは十分考えられることだろう。

さらに、紋様の粗雑化という点では、大きくは二枚貝、細密な櫛、粗い櫛もしくはハケメ工具という順序での変遷も伺える。

したがって、このように考えると、加飾法によってまとまりを設定することも可能になってくる。*すなわち、壷や高杯のうちで加飾された一群について、それが従属的な分類単位というのではなく、独立した主となる分類単位としての地位を確保する、という視点の可能性である。

壷では、広口壷はよくわからないが、直口壷や長頸壷には口縁部に直線紋、直線紋＋刺突紋という例がある。

高杯ではすでに述べたように分類単位の設定が可能である。高杯で加飾される部位には、杯部外面、口縁端部、杯部内面、脚上部、脚外面下位から裾部、などがある。このうち、脚部への加飾は加飾高杯Aにおいてはほとんどなく、時期差に関係している可能性が高い。加飾高杯Dではとりわけ目立つが、それが器種としての特徴ともなっている。

主体をなす加飾高杯Bでは、口縁端部のみに櫛描紋や多重沈線紋が施されるけれども、この部位が中心となって固有の変化系列を形成する。

直線紋には、ア：櫛描紋、イ：櫛描紋に沈線を重ねて整えるもの、ウ：多重沈線の3者があり、ア・イにおける櫛描紋工具は断面が円くなる太いクシである。イは櫛描によって施された条線それぞれに沈線を重ねるもので、さらに面的にミガキを加えて条線間を平端にしているものもある。ウは沈線のみの加飾であるが、イに付加される沈線が強い場合には識別できない。

直線紋が部分加飾にとどまらないで面的に幅広くなり帯化したものは櫛描紋である例が大半で付加沈線もほとんど認められない。多重沈線の場合には刺突紋と複合する加飾高杯Cであることが多いようだ。したがって、両者は系列を異にすると考える。

加飾高杯Cは杯部内面に直線紋と刺突紋による紋様帯が構成される。刺突紋は鋸歯紋が基本となっているが、二枚貝刺突紋が原型であるならば、連弧紋が本来の紋様といえる。長頸壷のなかに、口頸部外面紋様に、わずかに彎曲した櫛歯を組み合わせて連弧紋を構成しているものがあることからも言えることである。このことは加飾高杯Aも同様と考えるが、これらは当初から幅広で構成され、加飾高杯Bのように紋様帯化への変化は内在しない。逆に幅広化が加飾高杯Bの影響であることは、杯部の形態変化の方向からも言えるだろう。

ただし、全形がわかる状態での出土点数が少なく、詳細は不明である。また加飾高杯Cは杯部の傾斜が強くタイプ的に新しい様相をもつが、この形態そのものは独立した系列として年代的に遡るという指摘もある。*

甕は難しいが、受口状口縁甕の一部を含むことができるかもしれない。鍋では口縁端部に直線紋を施すものがある。など、加飾法による集合の構

＊桑原久男氏が近畿地方の凹線紋系土器群について、下位分類群として「櫛描紋型器種」を設定したことが参考になる。それは一つの「様式」である。

＊原田　幹氏の教示。

図４・１０　門間沼遺跡古墳Ⅰ期主要器種変遷図（1）

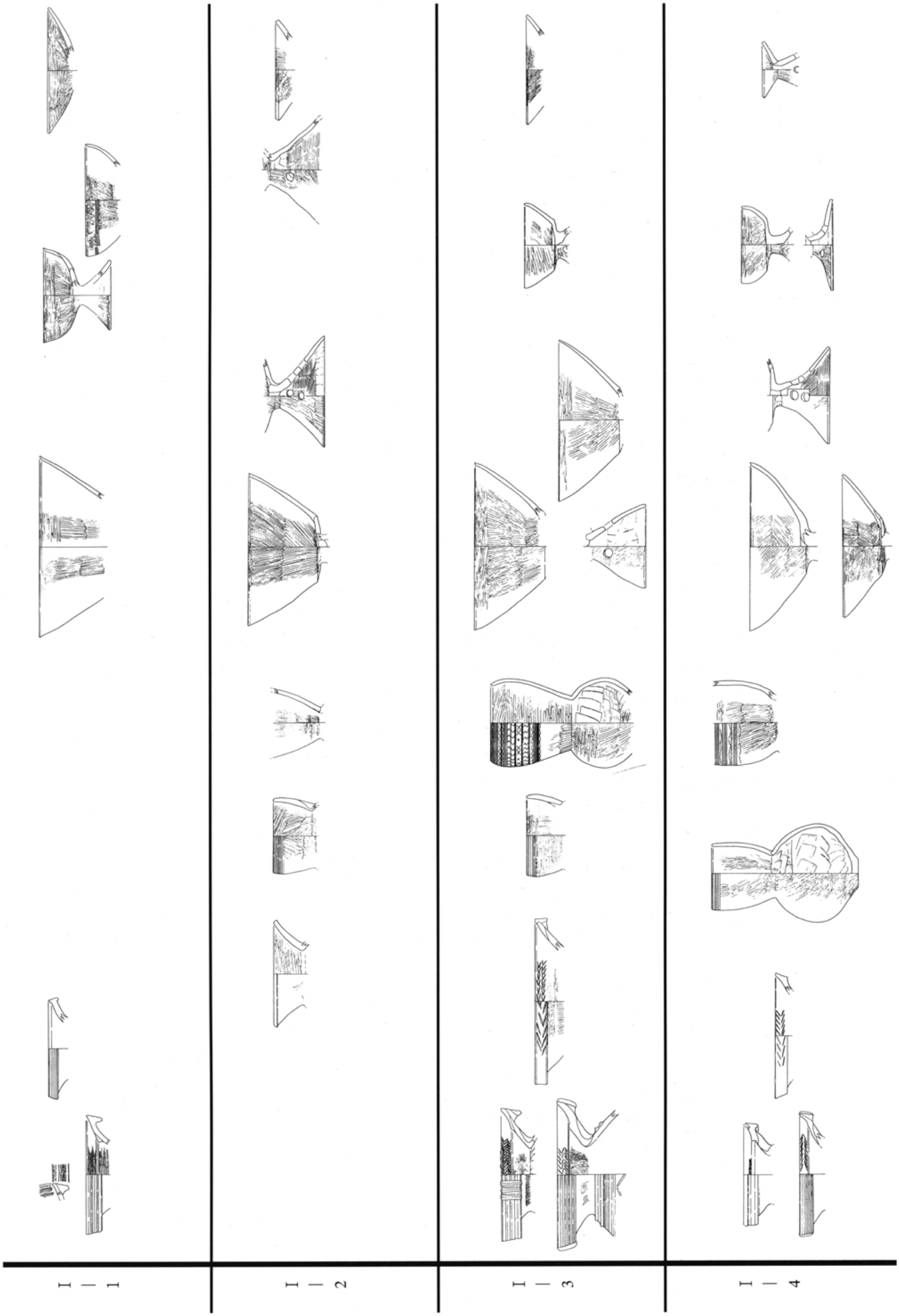


図４・１１　門間沼遺跡古墳Ⅰ期主要器種変遷図（２）

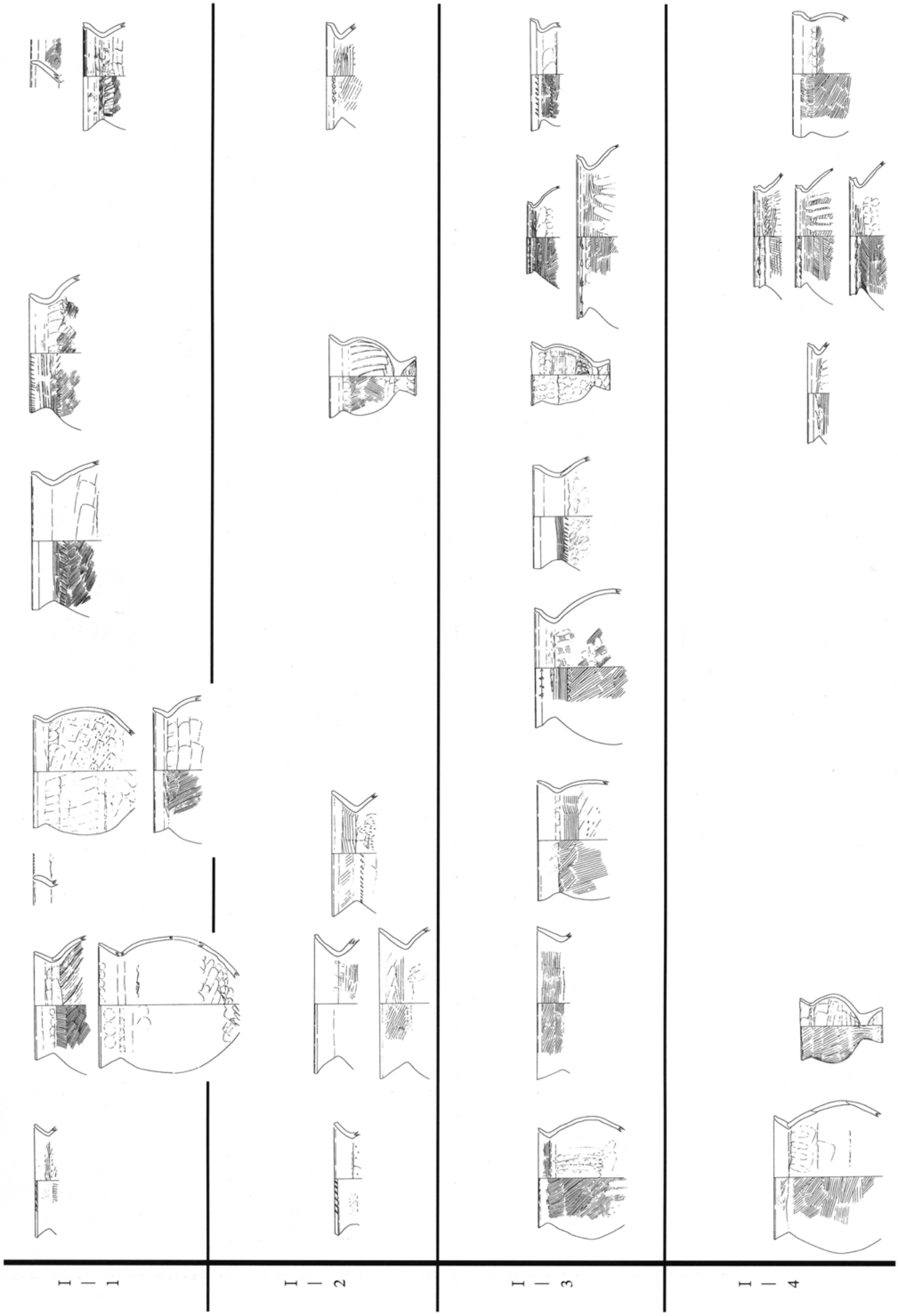
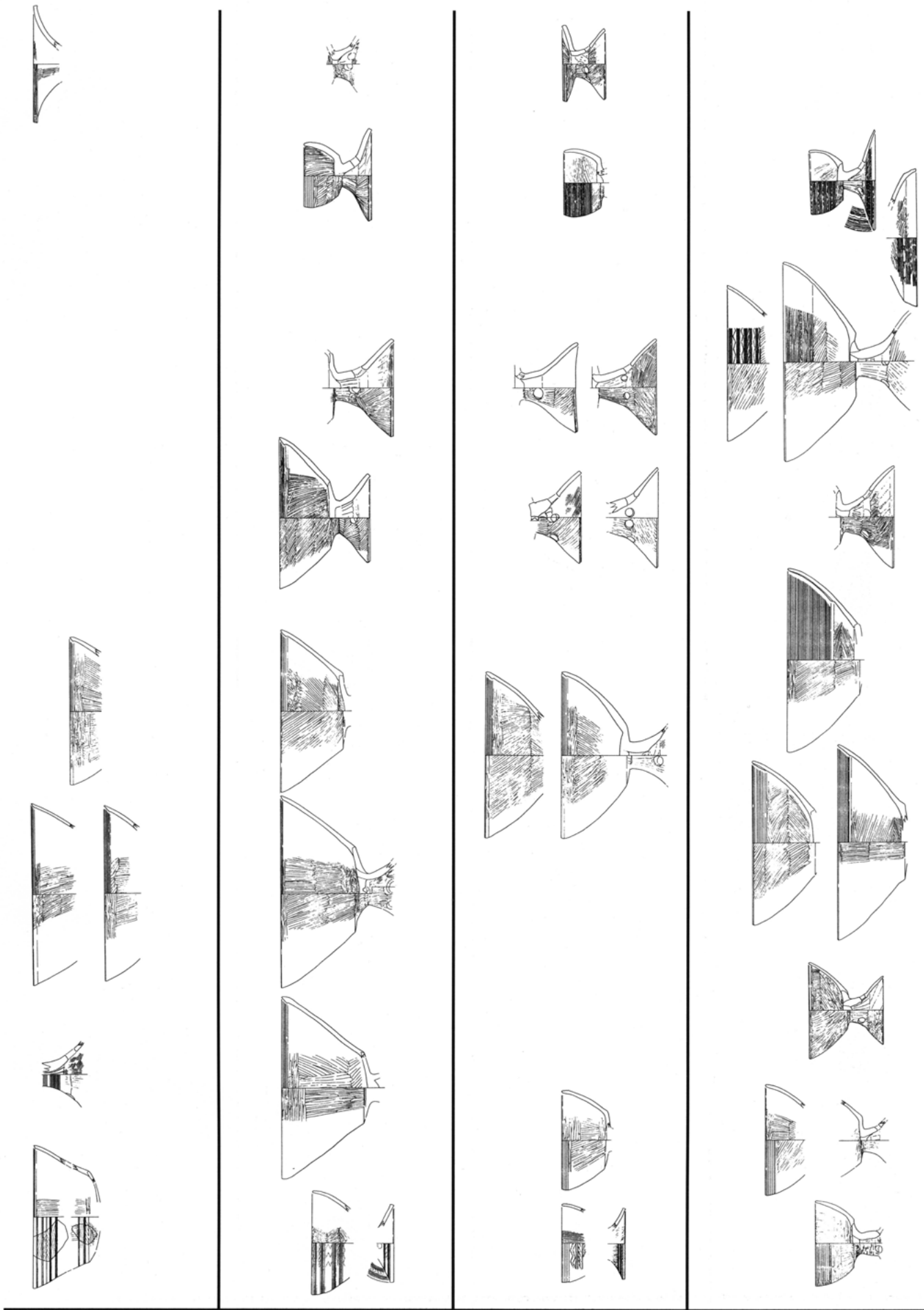


図４・１２　門間沼遺跡古墳Ⅰ期主要器種変遷図（3）



成は可能である。

このように赤彩広口壷を除く主要な器種について境界設定が可能であることは、それが生産において一定の境界条件を共有していることを示していると考えられる。

●年代区分

年代区分の方法は、型式分類を徹底し、それを再構成して形式・様式とする、という手順を踏むことが現在では一般的であり、また正しい手続きであるとされている。ところが、型式分類、というより細別分類の徹底は、遺跡間の差を、とりわけ地域差を時間差にする可能性が高い。現行の型式分類の徹底が時間的区分を目指したものである以上、型式組列のスムーズさを求めるあまり、空間的差異を不問に付していると言っても過言ではないであろう。したがって、本書では細分について、空間差を埋没させない限りでの可能な時間的区分を行う。また、細別を大別に統合する必要性もとりあえずは認めないことにする。大別に関わる議論が時代区分と同様に普遍化の陥穽に落ち込んでいる現状をみると、あえて従来型の大別にこだわる必要はないと考える。

単位の設定

基本的には遺構出土資料の様相を整理し、それを類型化することになるが、その場合に変異の多い高杯を指標とするのが現実的であると考える。高杯のうち加飾グループは、口縁部形状の変異と加飾法の変異が同期しているのは明らかで、問題はそれが時間的変化になるのかどうかという点である。それぞれが純粋に遺構を違えて分離出土したわけではないが、口縁部の変異が一定のまとまりをもっていることは、掘削深度別（層位別ではない）の取り上げ資料のあり方から伺えた。

しかし、今回問題になったのが、脚の形状である。杯部の深さに比べて短く屈曲する形態（屈折低脚・高杯）は、従来の編年観では新しい要素とされ、わたしもこれまでそのように資料に接してきた。しかし、今回検討する中で注意を引いたのが、短く屈曲する形態は同じでも、脚端が斜めで面をもち、接地面がわずかなものと、脚端が薄くなって端面がほとんど接地するものという差異である。もともと後者は濃尾平野南部では通有の特徴であり、それに対して前者は違和感があり、まず地域差の可能性が高いという印象をもったが、その後９４Ｃ区ＳＥ06の資料を基準として時期的に限定できるのではという感触をえるに至った。つまり、ひとつの定点として９４Ｃ区ＳＥ06を置くことにした。

したがって、残る課題はその前後の設定となる。そこで、遺構の時間的先後関係が明確な９４Ｃ区ＳＸ01と９４Ｃ区ＳＤ17を定点として、それが９４Ｃ区ＳＥ06とどのような時間的関係にあるのかを検討した。そこで指標になったのが高杯の口縁部加飾である。９４Ｃ区ＳＸ01では口縁部の加飾が、口縁端部の形状そのままに加飾されて条線数が３条程度の少条に限定され、しかも明らかに古い5･20が伴うことから濃尾平野南部の初期段階に該当するものであると推定した。いっぽう、９４Ｃ区ＳＤ17ではＳ字状口縁甕Ａ類が安定して出土していること、加飾高杯の口縁端部の多条化が認められ、それが杯部内面にもおよんで直線紋帯化しているものも見られることから９４Ｃ区ＳＥ06に後続する資料であると推定した。

つまり、ＳＸ01→ＳＥ06→ＳＤ17という区分を、おおむね山中式以後からＳ字状口縁甕Ａ類が主となる段階における基本的区分単位と認定した。しかし、ここに問題があった。上述したように赤彩広口壷や高杯脚部に古い様相を見せるものがほとんど出土していない点、そしてＳ字状口縁甕の出土状況が決して安定していないことである。従

来の年代観との対比では前者は山中式期との間を考える上で致命的であるような印象も受ける。後者についても、ＳＸ01・ＳＥ06ではＳ字状口縁甕が出土していないのに対してＳＤ17で急激に頻度を上げていることや、ＳＤ17でＳ字状口縁甕Ｂ類が出土していることによる下限の評価をどうするのかという課題がある。

本書では上記の諸点について課題としつつも、次のように設定した。

ＳＸ01は門間沼遺跡における初期段階としてⅠ－１期。ＳＥ06をⅠ－２期。ＳＤ17は幅が認められるので、Ⅰ－３期・Ⅰ－４期に区分した。

そして、以後の諸期にⅡ期以降を割り振ることにしたが、細分可能な時期は少なく本書での検討は行わない。

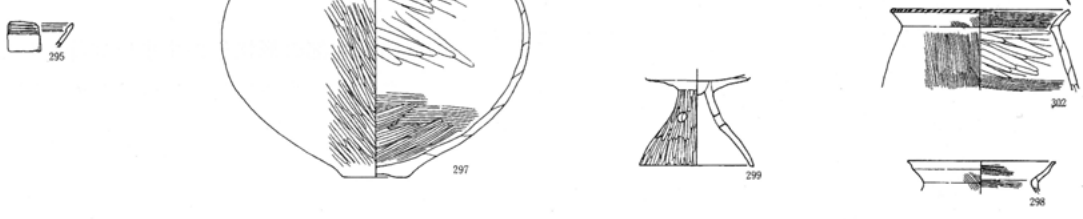
他遺跡との併行関係

ここでは廻間遺跡との対比を行っておこう。

本書での区分を廻間遺跡出土資料と比較する場合、重視したいのがＳＢ03とＳＫ50である。報告者の赤塚次郎氏はＳＢ03出土資料を廻間遺跡区分Ⅰ式２段階からⅠ式４段階に分解しているが、わたしは同一時期で良いと考えている。つまり、少なくとも屈折低脚高杯を時期的に後出なものと見なさないでおきたい。それらの変異は時期差を示しているのではなく、地域差を示していると、そ

図４・１３
廻間遺跡参考資料

廻間遺跡
SB23



廻間遺跡
SB03

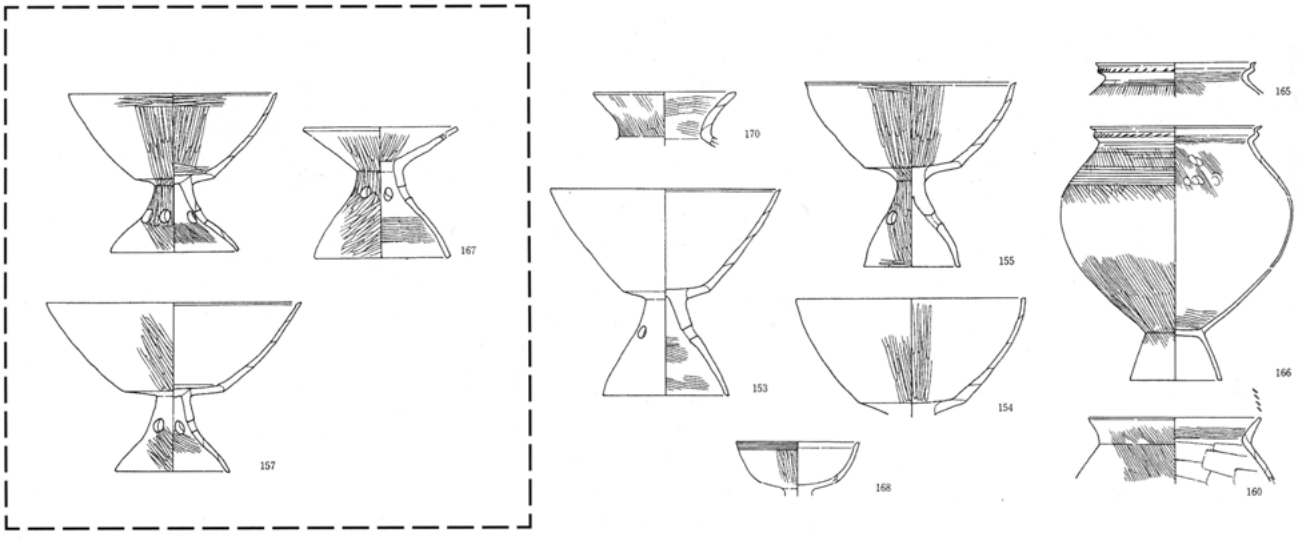


表４・１　区分対照表

門間沼区分	廻間区分	他遺跡
Ⅰ—１期	Ⅰ式２段階	能田旭遺跡溝・朝日遺跡環濠埋没
Ⅰ－２期	Ⅰ式３段階	
Ⅰ－３期	Ⅰ式４段階	西上免前方後方墳
Ⅰ－４期	Ⅱ式１段階	
Ⅱ期		

のように考える。

そうすると、門間沼遺跡区分Ⅰ－２期をほぼ廻間遺跡区分３段階にあてることができる。そしてⅠ－３期を廻間遺跡ＳＫ50に、すなわち４段階に相当させることができよう。ただ問題は装飾化の進んだ加飾高杯Ｄ（図版17・17）の出現が確実にＳ字状口縁甕Ｂ類以前と確定できないので、Ⅰ－４期は廻間遺跡Ⅱ式－１段階に接点を持つ可能性がある。事実、門間沼区分Ⅰ－３期・Ⅰ－４期の指標とした９４Ｃ区ＳＤ17ではＳ字状口縁甕Ｂ類も出土しており、後出的といえるだろう。

上記を整理すると、表4・1のような対照表が作成できる。

●類型設定

鴨田・門間沼類型の可能性

滋賀県長浜市鴨田遺跡はこれまで複数次にわたる調査が行われてきたが、なお実態は明確ではない。しかし、あえてここで取り上げたのは、すでに述べたような加飾法における刺突紋構成が極めて類似する資料が出土していること、屈折低脚高杯や台付甕分布圏の内部に属していると考えられるからである。とくに両遺跡を強く結びつけるのがＸ字状単位やジグザグ状単位で、鴨田遺跡でも全く同様の例が出土していることを確認できたことも理由である。

これまで、伝統的に滋賀県では濃尾地方と共通する要素、伊勢湾地方と共通する要素を「東海的」と呼びならわしてきた経緯がある。いっぽう、伊勢湾地方でも琵琶湖周辺地方と共通する要素を「近江的」あるいは「近江系」と呼んできた。しかし、そうした認識的枠組みについて、わたしは妥当性を欠いているものとして疑問を投げかけたことがある。当時の情況はいまなお継続してなんら変わっていないが、今回このような形でとりあげるのもそのような経緯があってのことである。

なお、鴨田遺跡と門間沼遺跡の間には伊勢湾最奥部地域が広がっている。これらの地域に分布する資料の内容が類型設定に大きく影響してくるわけだが、その点については別の機会に触れることにしたい*。　（石黒立人）

＊滋賀県文化財保護協会・伊庭 功氏には資料見学にあたって便宜をはかって頂き、あわせて貴重な助言も頂いた。

参考文献

愛知県埋蔵文化財センター　1990　『廻間遺跡』。
愛知県埋蔵文化財センター　1995　『朝日遺跡Ⅴ』。
愛知県埋蔵文化財センター　1996　『北道手遺跡』。
愛知県埋蔵文化財センター　1997　『西上免遺跡』。

4．統計的報告－古代・中世－

（1）はじめに

●遺物整理の方針

今回の調査で出土した古代・中世の遺物は27リットルコンテナで約400箱である。これを報告するについては、先学諸氏*の例に倣い出土遺物の分類・出土量の提示を試みることにした。そして、古代の様相をより明確に把握するために、隣接する大毛池田遺跡の資料も併せて資料化の対象とした。今回の分析に使用した資料は以下のものである。

門間沼遺跡９５Ａ区～Ｅ区古代遺構資料
門間沼遺跡９５Ａ区～Ｅ区中世遺構資料
門間沼遺跡９５Ａ区～Ｅ区包含層（検出表記）中世資料
大毛池田遺跡古代の溝Ａ～Ｆ資料。

また、古代遺構埋土の大半が後世の削平を受けており、古代の遺物が包含層（検出Ｉ～）中から目立って出土した門間沼９５Ａ～Ｄ区の古代資料を参考資料として付け加えた。

まず、分析を実施するに当たり、遺物整理には以下のような手順を踏んだ。

①遺物を材質で選別する（今回の分析は、土器・陶磁器の分析を目的としており、出土遺物を土器・陶磁器、石製品、金属製品、木製品、自然遺体等に区分した）。

②土器・陶磁器を大まかな時期に（弥生時代以前・古墳時代前期・古代・中世・近世以降）に選別する。

③古代・中世の土器・陶磁器について、あらかじめ設定した分類別にカウントする。

④カウントと同時に、一括性の高い遺構資料を優先的に抽出し、図化する。

⑤また、④以外の遺物のなかで資料的に特殊なものを抽出し、図化する。

これらにより得られた成果をもとに地点別の遺物組成の問題について、出土量を把握し遺跡の様相を本報告とする。

●遺物のカウント

今回実施した遺物のカウントは地点別等の遺跡の様相を明確にするために実施している。従って、今回の分析は、遺物の出土数自体よりも他との比較にある。土器・陶磁器のカウント（以下、遺物のカウント）は、破片数（接合前）と口縁残存率（12分の1単位）を求めることとした。遺物カウントの手順は以下のように実施した。

①データの収集

分類案をもとに主に整理補助員がデータをカウント記録用紙に記入した。データ収集についての基本方針は以下の通りである。

・遺物収納袋（遺構等・グリッド別）毎に接合作業を実施した後、口縁部の有無でデータ収集の対象を区分。

・口縁部の有するものは、接合後の１個体につき口縁残存率１データを記入した。但し、同時に接合前の破片数のカウントも実施しそのデータもあわせて記入。

・口縁部を持たないものも、破片１点につき１データを記入。

・長辺が1㎝以下の小破片は、原則としてカウント対象から除外。

②データの入力

パーソナルコンピュータを用いて表計算ソフト

＊鈴木正貴　1994『清洲城下町Ⅳ』（財）愛知県埋蔵文化財センター。

に入力。入力と同時に記録の不備等のデータが存在したため、再度カウントし直した。カウントデータは、古代と中世それぞれ調査区毎にファイルを作成し入力の後、校正・点検も実施。

③データの集計

入力したデータを用紙に打ち出して再度校正を実施した後、設定した集計項目によりパーソナルコンピュータによる集計作業を実施した。これらのデータを集積し編集。

収集したデータの内容は以下の通りである。

調査区、グリッド、遺構番号・検出、材質・産地、器類・器種、器形（口縁部・体部・底部）、破片数（接合前の破片総数）、口縁部残存率、備考（特記事項を言葉で記入）

上記のデータのなかで、口縁部残存率については、12分の1切り上げ法を採っている。計測に際しては、直径を1㎝単位ずつ拡大した同心円とその中心から放射状に12等分した直線（角度は30度づつ）を、用紙に印刷したものを計測器として使用した。

計測方法は、接合作業を実施した後の口縁部資料を1点ずつ上記の用紙に口縁部を当てて、口縁部の曲線と同心円の曲線が重なる部分を捜す。また、丁度重ならない場合は近似した曲線を求め、ゆがみのあるものの場合は、無かった場合を想定して値を求めた。このようにして口縁部の長さが、その口径の位置で放射状に12等分された区画の幾つ分に相当するかを切り上げて算定すると、口縁部残存率の値となる。

●遺物カウント分析の問題

①発掘調査時のサンプリングエラーの問題

遺物カウントの対象から長辺1㎝以下の小破片を除いたのは、調査時点で遺物カウントを前提として採集していない点を考慮したものである。

②遺物の選別・識別の問題

器種・器類分類等は、その目的、作業担当者の技量に大きく左右される。分類の統一性を如何に高めるかが遺物カウント作業の第一関門であった。誰にでも分かる分類の基準を示すことが不可欠と考える。

③遺構時期以前の出土遺物の取り扱いの問題

遺跡の様相を探る目的で出土遺物の組成を用いるならば、出土した全ての遺物を取り扱うのが本来（理想）である。つまり、古代の出土遺物組成を分析するのであれば、中世以降の遺構出土の古代の遺物も分析対象資料に含めなくてはならないと考える。今回の分析からは、この資料も含め表採及び調査区周辺トレンチ資料は除外した。

④計測方法の信憑性

今回の遺物整理には、口縁部残存率と破片数をカウントする方法を用いた。計測方法が異なれば数値は変動するといわれる。破片数については、口縁部・体部・底部のように個々でのカウントを試みている。遺物カウントで得られた数値には、全ての調査区に同様な誤差等が存在するものと考え、あくまで相対的な数値と心得たうえで遺跡の様相を検討したい。

（2）分　析

●古代の土器分類

今回の発掘調査で出土した古代の遺物は、須恵器を中心として、灰釉陶器、土師器などが出土している。また、少量であるが製塩土器も出土している。時期は、7世紀代と8世紀から10世紀代

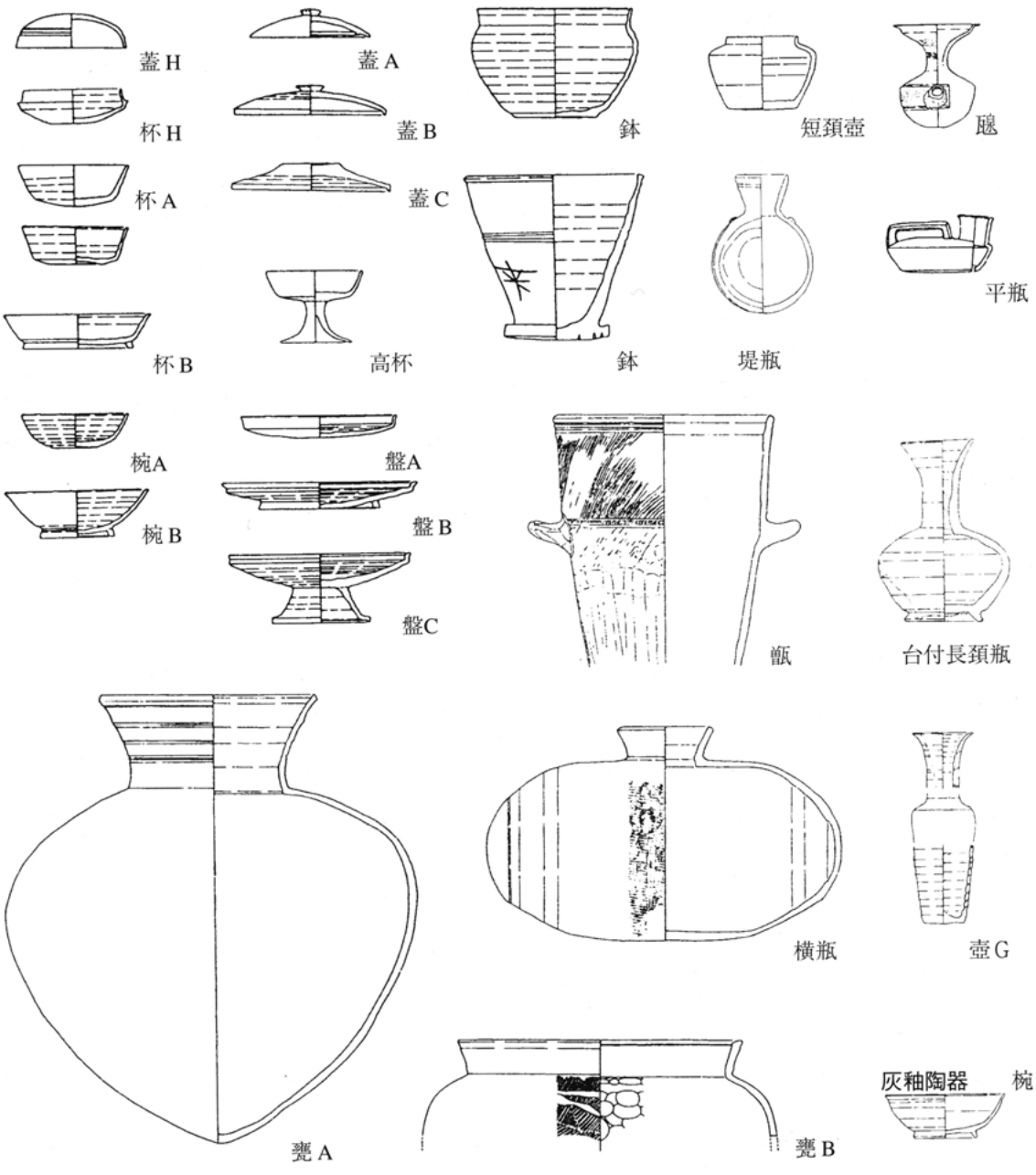
表4・2　凡例

区　グリッド	遺構・検出	材質・産地	器類・器種	器形・破片数・口縁部残存率	備考
A　Ⅶ E14p	SD06	須恵器	蓋A	※口 1(2, 3/12), 体 2	
			杯H	口 3(10,1/12,2/12,3/12)	ヘラ描き有

※口縁部1個体2破片12分の3，体部破片2を表している。

図 4・14　古代の土器分類図

須恵器



に区分できる。古代の出土遺物の中で特筆すべきこととして、隣接する大毛池田・沖遺跡同様に墨書土器をはじめ文字資料に恵まれたことである。

今回の遺物カウントについての器種分類等は、須恵器は城ヶ谷分類*、土師器（甕・鍋）は永井分類**を基本的に踏襲する。

須恵器

杯…杯H（口縁端部にかえりの付くもの）
杯蓋H（杯Hの蓋）、杯A（無台杯）、杯B（有台杯）など

蓋…蓋A（口縁端部にかえりの付くもの）、蓋B（かえりがなくつまみのあるもの）、蓋C（つまみのないもの）など

椀…椀A（無台椀）、椀B（有台椀）など

高杯…高杯・高杯蓋

盤…盤A（無台盤）、盤B（有台盤）、盤C（脚付盤）など

甑、鉢

壷・瓶…短頸壷、𤭯、提瓶、平瓶、横瓶、台付長頸瓶などの他、都城関連遺跡で出土する壷Gがある。

甕…甕A（口頸部が大きく外反するもの）、甕B（口頸部のたちあがりが大きくないもの）、この他に把手付甕がある。

灰釉陶器

椀・段皿・三足盤・壷などがある。

土師器

土師器の出土器種は、ほとんどが煮沸具（鍋・甕）である。甕は基本的には以下の分類基準を 用いている。

甕A（伊勢地方産と考えられている口縁端部摘み上げタイプ。口径15㎝程の小型品。）

甕B（同上タイプ、口径18㎝前後の中型品）

甕C（同上タイプ、口径23㎝以上の大型品）

甕不明（同上タイプ、口径不明品）

把手付鍋（同上タイプ）

甕D（濃尾地方産と考えられている外面に荒々しいハケ調整が施されるタイプで、口縁の外反が比較的大きいもの）

甕E（同上タイプ、口縁の外反が比較的小さいもの）

甕その他（上記のタイプに当てはまらないタイプ、又は該当不明のもの）

他に、伊勢型鍋の祖型と思われる甕などがある。

その他

緑釉素地の椀などや、大毛池田遺跡の資料に畿内産土師器・緑釉陶器の椀・黒色土器などがある。

（3）古代の須恵器・陶器・土器の統計

●はじめに

今回の発掘調査によって尾張平野部での様相が不明瞭であった7世紀代の集落が広域に確認できたことは、この時期の景観を復元する上で重要であると考える。以下では隣接する大毛池田遺跡で確認された大溝群の遺物組成分析も併せて実施し、より広域的に出土遺物の統計資料を作成し遺跡の様相に迫ってみたい。

●統計資料

９５A区～E区の古代遺構及び大毛池田遺跡大溝群溝A～溝Fの出土遺物より収集した資料は以下の通りである。

①口縁部計測法による個体数資料

②破片数資料（口縁部・体部・底部）

また、包含層（検出Ⅰ～）より良好な遺物が出土した９５A区・B区・C区・D区の包含層（検出Ⅰ～）資料を参考資料として付け加えた。これらの出土資料から収集した資料は以下の通りである。

①破片数資料（口縁部・体部・底部）

②須恵器杯H・土師器甕の口縁部計測法による個体数資料

＊　城ヶ谷和広　1993「尾張における7世紀から9世紀半ばの須恵器～猿投窯とその周辺」『古代の土器研究』。

＊＊永井宏幸　1996『大毛沖遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター。

●分析の視点

'95調査区A区～E区で確認された遺構を分析すると、A区～B区の西（竪穴建物）群、C区～D区の中央（竪穴建物）群、E区の北（竪穴建物）群、及びB区～E区の溝1（95B区SD11・12・16・25）、溝2（95D区SD23）、溝3（95D区SD24）、溝4（95D区SD26）、溝5（95E区SD21）、溝6（95E区SD20）に大別できる。

そこで、収集した資料を以下のように加工した。遺構資料は、西群・中央群・北群に区分し、それぞれ全遺構と全竪穴建物資料の組成を分析した。また、須恵器については用途別（供膳具・調理具・貯蔵具）の頻度、須恵器杯や杯蓋の分類別頻度、土師器甕の分類別頻度等の資料を分析した。また、分析には口縁部個体数資料と口縁部破片数資料を採用した（中世の部分でも触れるが、遺物カウント作業を進めていく中で資料のより正確度を求めるならば、破片数の中では口縁部が最も適当と判断した）。

●分析

①居住域の分析

全体の様相

第一に、居住域ごとの出土遺物を比較すると奈良・平安時代の遺構が密に確認された西群では他の居住域よりも灰釉陶器の頻度が高くなっている。但し、遺跡全体の遺物の中にあっては非常に少量であり、古代遺構の展開していた時期の中心が灰釉陶器以前の段階と言えよう。また、古墳時代宇田式の時期と飛鳥時代に居住域の営まれた北群の須恵器と土師器の比率は6：4となっている（この比率には宇田式の遺物は含まれない）。

第二に、須恵器における用途別頻度についてみる。口縁部個体数資料では供膳具が約8割を占め、

表4・3　類別統計

全遺構口縁個体数頻度　単位％

	須恵器	灰釉陶器	土師器
西　群	69.5	4.0	26.6
中央群	66.2	0.5	33.4
北　群	55.7	0.0	44.3

全遺構口縁破片数頻度　単位％

	須恵器	灰釉陶器	土師器
西　群	71.9	3.1	25.0
中央群	60.0	2.4	37.6
北　群	56.7	0.0	43.3

表4・4　用途別統計

全遺構須恵器口縁個体数用途別頻度　単位％

	供膳具	調理具	貯蔵具	不明
西　群	84.7	1.9	12.3	1.2
中央群	75.5	3.0	21.0	0.6
北　群	81.3	0.0	11.1	7.5

全遺構須恵器口縁破片数用途別頻度　単位％

	供膳具	調理具	貯蔵具	不明
西　群	69.2	1.7	9.7	19.4
中央群	60.1	3.5	14.9	21.5
北　群	50.8	0.0	7.5	41.7

表4・5　種別統計

全遺構須恵器杯口縁個体数器種別頻度　単位％

	H	A	B	C	不明
西　群	58.7	16.2	3.5	1.2	20.4
中央群	54.3	37.0	4.7	0.0	4.0
北　群	78.6	15.5	0.0	0.0	5.8

全遺構須恵器杯口縁破片数器種別頻度　単位％

	H	A	B	C	不明
西　群	49.8	17.3	5.6	1.2	26.0
中央群	62.8	28.0	2.9	0.0	6.3
北　群	82.6	8.7	0.0	0.0	8.7

全遺構須恵器蓋口縁個体数器種別頻度　単位％

	A	B	C	不明	H	H不明
西　群	0.0	21.3	2.7	1.1	73.9	1.1
中央群	13.6	11.0	0.8	2.5	72.0	0.0
北　群	0.0	0.0	0.0	1.0	99.0	0.0

全遺構須恵器蓋口縁破片数器種別頻度　単位％

	A	B	C	不明	H	H不明
西　群	0.0	29.8	3.5	0.7	64.5	1.4
中央群	11.3	7.5	1.3	2.5	77.5	0.0
北　群	0.0	1.5	0.0	1.5	97.1	0.0

中央群では貯蔵具の頻度が西・北群のそれよりも高くなっている。

第三に須恵器杯の類別頻度について触れる。

前述したことと重複するが、古代の居住域が営まれていた時期が飛鳥時代までの北群では、杯Bがなく杯H・A併せて90%を越している。また、西群・中央群では杯Bが、西群では杯Cも少量ではあるが存在する。

第四に蓋についてみると、杯と同様な傾向を北群では示し蓋Hがほとんどを占めている。西群では蓋Bの頻度が2～3割を占めるが、蓋Aの存在が認められない。これは西群の居住域が飛鳥時代の後に再度営まれていたことを裏付けている。さらに、中央群では蓋Hが主体を占めるが蓋A・B共10%前後存在することから、飛鳥時代に居住域が営まれていた西群・北群と併せて較べるとこの時期の最後まで営まれた居住域であったと考える。

最後に土師器甕の類別頻度についてみる。どの居住域も基本的には摘み上げ口縁を有するいわゆる伊勢系甕がほとんどを占める。そのような中で、西群・中央群には体部に荒いハケ調整が施されているいわゆる濃尾系甕（D類・E類）が微量ながら存在する。全SBの土師器甕の資料を併せてみると、飛鳥時代のSB出土の土師器甕はほとんど全て伊勢系甕である。

竪穴建物の様相

第一に竪穴建物の資料では、この遺構の時期が灰釉陶器の時代に存在していないことを示す。また、これら居住域における須恵器と土師器の比率はほぼ6：4を示している。

表4・6　種別統計

全遺構土師器甕口縁個体数類別頻度　単位%

	A	B	C	不明	把手	D	E
西　群	17.0	54.4	10.5	11.6	3.1	1.0	2.4
中央群	12.1	48.0	9.8	25.3	0.5	0.5	2.0
北　群	21.3	45.7	10.6	20.9	0.0	0.0	1.6

全遺構土師器甕口縁破片数類別頻度　単位%

	A	B	C	不明	把手	DE	他
西　群	13.7	44.8	14.1	13.3	9.7	2.0	2.4
中央群	11.0	44.1	10.1	29.6	2.6	0.6	2.0
北　群	12.6	53.1	8.7	24.5	0.0	0.0	1.1

第二に須恵器の用途別頻度についてみる。供膳具の頻度は、西群では個体数・破片数資料とも8割を超えている。しかし、中央群・北群では個体数資料が7割を超えるが、破片数資料では不明が占める割合が高くそれぞれ6割・4割に留まっている。但し、北群の資料は細片が多く、口縁部破片にしても不明が半数を占めている。

第三に須恵器杯の類別頻度についてみる。どの居住域においても杯Hを主体にAを伴っている。この中では北群の杯Aの頻度が西群・中央群に較べて高く15%前後占める。杯の頻度傾向からすれば、北群の展開時期が若干下るのだろうか。

蓋についてみると、西群・北群ではほとんどが蓋Hである。これに較べ、中央群では蓋Hが60%と主体ではあるが蓋A・Bも伴っている。

以上のことから、居住域における変遷過程が浮かんでくる。門間沼遺跡において、7世紀代に最初に居住域が営まれるのが西群で、続いて北群、最後に中央群と想定できる（但し、収集された資料だけをみると疑問点も残る。例えば、北群において須恵器杯Aが存在するにもかかわらず、蓋はHのみという結果がでている）。

②居住域に伴う溝の分析

ここでは、居住域西群に伴う溝1と居住域北群

表4・7　類別統計

全竪穴建物口縁個体数頻度　単位%

	須恵器	灰釉陶器	土師器
西　群	53.6	0.0	46.4
中央群	65.5	0.0	34.5
北　群	54.7	0.0	45.3

全竪穴建物口縁破片数頻度　単位%

	須恵器	灰釉陶器	土師器
西　群	60.0	0.0	40.0
中央群	57.3	0.0	42.7
北　群	57.5	0.0	42.5

表4・8　用途別統計

全竪穴建物須恵器口縁個体数用途別頻度　単位%

	供膳具	調理具	貯蔵具	不明
西　群	81.4	0.0	18.6	0.0
中央群	70.4	0.9	28.7	0.0
北　群	74.1	0.0	15.7	10.2

表４・９　用途別統計

全竪穴建物須恵器口縁破片数用途別頻度　単位％

	供膳具	調理具	貯蔵具	不明
西　群	85.0	0.0	6.7	8.3
中央群	62.0	2.8	8.5	26.8
北　群	43.5	0.0	6.7	49.8

表４・10　種別統計

全竪穴建物須恵器杯口縁個体数器種別頻度　単位％

	H	A	B	C	不明
西　群	90.0	5.0	0.0	0.0	5.0
中央群	93.8	6.3	0.0	0.0	0.0
北　群	80.4	15.7	0.0	0.0	3.9

全竪穴建物須恵器蓋口縁個体数器種別頻度　単位％

	A	B	C	不明	H	H不明
西　群	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
中央群	24.0	20.0	0.0	0.0	56.0	0.0
北　群	0.0	0.0	0.0	1.5	98.5	0.0

全竪穴建物須恵器杯口縁破片数器種別頻度　単位％

	H	A	B	C	不明
西　群	90.3	6.5	0.0	0.0	3.2
中央群	88.0	12.0	0.0	0.0	5.6
北　群	80.6	13.9	0.0	0.0	5.6

全竪穴建物須恵器蓋口縁破片数器種別頻度　単位％

	A	B	C	不明	H	H不明
西　群	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
中央群	35.3	5.9	0.0	0.0	58.8	0.0
北　群	0.0	0.0	0.0	2.2	95.7	2.2

全竪穴建物土師器甕口縁個体数類別頻度　単位％

	A	B	C	不明	把手	DE	他
西　群	17.4	43.5	21.7	17.4	0.0	0.0	0.0
中央群	29.8	21.1	21.1	26.3	0.0	0.0	1.8
北　群	24.5	47.8	4.4	23.3	0.0	0.0	0.0

全竪穴建物土師器甕口縁破片数類別頻度　単位％

	A	B	C	不明	把手	DE	他
西　群	22.2	30.6	25.0	22.2	0.0	0.0	0.0
中央群	34.0	17.0	22.6	24.5	1.9	0.0	0.0
北　群	14.2	55.2	3.8	26.8	0.0	0.0	0.0

に伴う溝５を分析する。さらに、これら溝の規模・断面形状・埋土・遺物出土状態等が類似する大毛池田遺跡溝Ａ・Ｂについても検討する。

溝１・溝５の様相

第一に、溝１・５共に出土遺物に灰釉陶器は含まない。溝１の須恵器と土師器の比率は６：４である。これは西（竪穴建物）群・北（竪穴建物）群

表４・11　類別統計

大溝群出土頻度　単位％

溝１	須恵器	灰釉陶器	土師器
口縁個体数	63.1	0.0	36.9
口縁破片数	57.8	0.0	41.9
溝５	須恵器	灰釉陶器	土師器
口縁個体数	34.0	0.0	66.0
口縁破片数	30.3	0.0	69.7

表４・12　用途別統計

大溝群須恵器用途別頻度　単位％

溝１	供膳	調理	貯蔵	不明
口縁個体数	84.2	2.8	13.0	0.0
口縁破片数	67.2	3.2	18.3	11.3
溝５	供膳	調理	貯蔵	不明
口縁個体数	97.2	0.0	0.0	2.8
口縁破片数	83.3	0.0	0.0	16.7

表４・13　種別統計

大溝群須恵器杯類別頻度　単位％

溝１	H	A	B	C	不明
口縁個体数	95.3	2.7	0.0	0.0	2.0
口縁破片数	93.9	2.4	0.0	0.0	3.7
溝５	H	A	B	C	不明
口縁個体数	100	0.0	0.0	0.0	0.0
口縁破片数	100	0.0	0.0	0.0	0.0

大溝群須恵器蓋器種別頻度　単位％

溝１	A	B	C	不明	H	H不
個体	0.0	0.0	0.0	0.0	98.8	1.2
破片	0.0	0.0	0.0	0.0	97.1	2.9
溝５	A	B	C	不明	H	H不
個体	0.0	0.0	0.0	0.0	100	0.0
破片	0.0	0.0	0.0	0.0	100	0.0

表４・14　種別統計

大溝群土師器甕類別頻度　単位％

溝１	A	B	C	不明	把手	D E	他
個体	15.1	63.9	8.4	7.2	5.4	0.0	0.0
破片	11.2	53.0	9.7	8.2	17.9	0.0	0.0
溝５	A	B	C	不明	把手	D E	他
個体	14.7	51.5	26.5	7.4	0.0	0.0	0.0
破片	8.8	57.4	23.5	10.3	0.0	0.0	0.0

と較べて若干須恵器の頻度が高い。しかし、溝５では逆に３：７を示している。

須恵器の用途別頻度では、溝１には西（竪穴建物）群にはない調理具が少量出土している。また、北（竪穴建物）群には調理具はないが、溝５では調理具・貯蔵具共に出土していない。

第二に、須恵器の杯の類別頻度についてみる。溝１と西群SBを較べると杯の出土傾向は類似しており、杯Hは90％以上を示す。また溝５と北群SBを較べると、北群が杯H 80％を主体に杯A 15％前後に対し、溝５は杯Hが100％である。

さらに、須恵器の蓋についてみる。溝１と西群SBを較べると共にほとんど100％蓋Hである。また、溝５と北群SBを較べると同様にほとんど100％が蓋Hである。

最後に土師器甕の類別頻度についてみてみる。溝１と溝５は西群SB・北群SB同様にすべて伊勢系甕が占めている。但し、類別頻度については若干の相違は指摘できるが基本的にはB類が主体である。溝１と溝５の相違点として、A類はどちらも10％～15％であるが、溝５ではC類がほぼ25％も占める。但し、この口径大型のC類に把手付甕が含まれているとすれば、この２つの溝出土の土師器甕はほぼ同様の様相といえる。（把手付甕の判別は口縁のみでの判別は難しく把手が伴っているものがたまたま出土していない等と考えればこの数値の一部が把手付甕へと考えることもできる。）

大毛池田遺跡溝Ａ・溝Ｂの様相

ここでは大毛池田遺跡の居住域に伴うと考える溝資料を検討する（７世紀代の居住域ははっきりしないが、遺構の展開から考えると、この溝Ａ・溝Ｂは門間沼遺跡溝１・溝５同様居住域に伴う溝と想定できる）。

第一に溝Ａ・溝Ｂ共、出土遺物には灰釉陶器は含まれていない。須恵器と土師器の比率は溝Ａが8.5：1.5、溝Ｂがほぼ4：6である。これは、門間沼遺跡の溝１が須恵器の頻度が高く、溝５が土師器の頻度が高かったことと類似する。

須恵器の用途別頻度では、溝Ａ・溝Ｂ共に供膳具と貯蔵具でほぼ占められており調理具が出土していない。供膳具の頻度は溝Ａは９割程度を占めるが、溝Ｂでは個体数資料と破片数資料に開きが生じており、個体数の72.9％に対して破片数45.6％である。この他、溝Ｂでは貯蔵具の頻度が個体数の27.1％、破片数の47.6％と高い数値を示している。

第二に須恵器の杯の類別頻度についてみる。溝Ａは杯Hがほぼ９割に杯Aが伴うのに対して、溝Ｂは全て杯Hが占めている。これは、門間沼遺跡の溝１と溝５に類似している。

一方、須恵器の蓋では、溝Ａは蓋Hを主体に蓋Ａ・蓋Ｂを伴っている。この様相は門間沼遺跡の

表４・15　類別統計

大毛池田遺跡大溝群出土頻度　単位％

池田溝Ａ	須恵器	灰釉陶器	土師器
口縁個体数	85.0	0.0	15.0
口縁破片数	84.1	0.0	15.9
池田溝Ｂ	須恵器	灰釉陶器	土師器
口縁個体数	48.9	0.0	51.1
口縁破片数	33.6	0.0	66.4

表４・16　用途別統計

大毛池田遺跡須恵器用途別頻度　単位％

池田溝Ａ	供膳	調理	貯蔵	不明
口縁個体数	92.9	0.0	5.9	1.2
口縁破片数	73.6	0.0	11.3	15.1
池田溝Ｂ	供膳	調理	貯蔵	不明
口縁個体数	72.9	0.0	27.1	0.0
口縁破片数	45.6	0.0	47.6	6.8

溝１・溝５にはみられない。また、溝Ｂでは門間沼遺跡の溝同様全て蓋Ｈが占めている。

大毛池田遺跡の居住域がこの溝Ａと溝Ｂに伴うものとするならば、須恵器の杯と蓋の類別頻度から考えると杯Ｈのみの溝Ｂが溝Ａに先行する形で居住域に伴ったと考えることができる。

最後に土師器甕の類別頻度についてみると、Ｂ類の頻度が溝Ａでは50％程度に対し、溝Ｂでは90％近くを占める。また、把手付甕が溝Ａには10％程度みられるが、溝Ｂにはみられない。これらから、溝Ａの把手付甕の存在がある以外は甕はほぼＢ類が占めていると言えよう。詳細部での相違点はあるものの、大毛池田遺跡の溝Ａ・溝Ｂの遺物の様相は門間沼遺跡の溝１・溝５とほぼ同様であり、遺跡の中心部である自然堤防上をほぼ等高線沿いに門間沼遺跡に続くものと考える。

③大溝群の分析

溝６と溝Ｄ及びＣの様相

ここでは門間沼遺跡と大毛池田遺跡の接していた地点（門間沼95Eb区と大毛池田94KL区）において、同一遺構と確認できている門間沼遺跡溝６と大毛池田遺跡溝Ｄについて分析し、また大毛池田遺跡では溝Ｄと併行して続いており、この２遺跡の接地点より調査範囲外に抜け、その遺構様相から門間沼遺跡の大溝群に該当するものが見あたらない大毛池田溝Ｃも併せて検討する。

第一に、３つの溝はともに須恵器と土師器で占められ、この比率は６：４である。須恵器の用途別頻度をみてみると、溝６では溝Ｄ・溝Ｃと較べて、供膳具の頻度が高く貯蔵具の頻度が低くなっているのが特徴である。

第二に、須恵器の杯の類別頻度についてみる。溝６は杯Ｈで100％占められ、溝Ｄは杯Ｈが主体ながらも杯Ａが12％程度含まれる。また、溝Ｃは杯Ｈ

表４・17　種別統計

大毛池田遺跡須恵器杯類別頻度　単位％

溝Ａ	Ｈ	Ａ	Ｂ	Ｃ	不明
口縁個体数	92.3	5.1	0.0	0.0	2.6
口縁破片数	87.5	6.3	0.0	0.0	6.3
溝Ｂ	Ｈ	Ａ	Ｂ	Ｃ	不明
口縁個体数	100	0.0	0.0	0.0	0.0
口縁破片数	100	0.0	0.0	0.0	0.0

大毛池田遺跡須恵器蓋器種別頻度　単位％

溝Ａ	Ａ	Ｂ	Ｃ	不明	Ｈ	Ｈ不
個体	15.0	15.6	0.0	0.0	68.8	0.0
破片	10.5	15.8	0.0	0.0	73.7	0.0
溝Ｂ	Ａ	Ｂ	Ｃ	不明	Ｈ	Ｈ不
個体	0.0	0.0	0.0	0.0	100	0.0
破片	0.0	0.0	0.0	0.0	100	0.0

大毛池田遺跡土師器甕類別頻度　単位％

溝Ａ	Ａ	Ｂ	Ｃ	不明	把手	ＤＥ	他
個体	0.0	53.8	0.0	15.4	15.4	0.0	15.4
破片	0.0	55.6	0.0	22.2	11.1	0.0	11.1
溝Ｂ	Ａ	Ｂ	Ｃ	不明	把手	ＤＥ	他
個体	4.4	85.9	7.4	0.7	0.0	0.0	1.5
破片	0.7	94.8	3.4	0.0	0.0	0.0	1.0

表４・18　類別統計

大溝群比較出土頻度　単位％

門間溝６	須恵器	灰釉陶器	土師器
口縁個体数	64.3	0.0	35.7
口縁破片数	58.3	0.0	41.7
池田溝Ｄ	須恵器	灰釉陶器	土師器
口縁個体数	61.8	0.0	38.2
口縁破片数	63.8	0.0	36.2
池田溝Ｃ	須恵器	灰釉陶器	土師器
口縁個体数	54.9	0.0	45.1
口縁破片数	62.1	0.1	37.8

表４・19　用途別統計

大溝比較須恵器用途別頻度　単位％

門間溝６	供膳	調理	貯蔵	不明
口縁個体数	96.3	0.0	3.7	0.0
口縁破片数	76.2	0.0	9.5	14.3
池田溝Ｄ	供膳	調理	貯蔵	不明
口縁個体数	83.0	6.4	10.2	0.4
口縁破片数	74.1	2.5	7.4	16.0
池田溝Ｃ	供膳	調理	貯蔵	不明
口縁個体数	86.5	0.5	11.5	1.5
口縁破片数	63.1	0.4	6.2	30.2

が主体でごく少量杯Aを伴っている。

さらに、須恵器の蓋についてみる。溝6は蓋Hで100%占められ、溝Dは蓋Hが主体で少量蓋Bを伴っている。また、溝Cは、蓋Hが主体ながらも蓋A・蓋Bを伴っている。

最後に、土師器の甕の類別頻度についてみてみる。3つの溝とも基本的には伊勢系甕のB類が主体を占めている。但し、溝Cは若干B類の頻度が低く、濃尾系甕も少量ではあるが伴っている。

門間沼遺跡と大毛池田遺跡の大溝群の中で唯一同一遺構と確認されているものが溝6と溝Dである。遺構の時期の問題は、門間沼遺跡の居住域北群を削平して溝6が掘削されている点から考えなければならない。また溝の出土遺物は、削平を受けた居住域に存在した遺物が混入したものと考えている。

溝4・溝E・溝F・溝2・溝3の様相

門間沼遺跡では、大毛池田遺跡同様に幅5～8mの大溝（溝2・3・4）が確認されている。これら大溝は、遺構の部に述べられているが規模・埋土・遺物出土状況等の様相が極めて類似している。ここでは、大溝群の中で後世に再掘削されて最終的には平安時代まで存続していた溝の様相を検討する。

第一に、出土遺物の構成は須恵器・灰釉陶器・土師器でほぼ占められている。なかでも溝Eの灰釉陶器の頻度が他と較べて高くなっている。再掘削が確認できることから遺構埋土の状況は、下層部分ではほぼ全体が細流砂であり、再掘削後の上層部分は砂質シルトまたはシルト質の細流砂が堆積する。この上層部分から灰釉陶器の時期の遺物が出土している。なお、大毛池田遺跡の溝E・溝Fは美濃刻印須恵器の出土している溝である。

第二に須恵器の用途別頻度についてみる。供膳具の頻度はいずれも高い。この頻度によって溝E・溝F・溝3と溝2・溝4に区分でき、後者では、貯蔵具の頻度が他の溝より高くなっている。

第三に須恵器の杯の類別頻度についてみる。溝3は杯Hと杯Aが共に50%程度占め他の溝には無い様相を示す。また、溝2は、杯Aを主体として杯H・杯Bを伴っている。この様相に類似しているものが、溝Eで不明の頻度が高いが杯Aを主体に杯H・杯Bを伴っている。溝4も杯H・杯A・杯

表4・20　種別統計

大溝比較須恵器杯類別頻度　単位%

門間溝6	H	A	B	C	不明
口縁個体数	100	0.0	0.0	0.0	0.0
口縁破片数	100	0.0	0.0	0.0	0.0
池田溝D	H	A	B	C	不明
口縁個体数	77.5	12.4	0.0	0.0	10.1
口縁破片数	76.1	12.5	0.0	0.0	11.4
池田溝C	H	A	B	C	不明
口縁個体数	91.4	0.5	0.0	0.0	8.1
口縁破片数	90.3	0.6	0.0	0.0	9.1

大溝比較須恵器蓋器種別頻度　単位%

溝6	A	B	C	不明	H	H不
個体	0.0	0.0	0.0	0.0	100	0.0
破片	0.0	0.0	0.0	0.0	100	0.0
溝D	A	B	C	不明	H	H不
個体	0.0	3.5	0.0	0.0	96.5	0.0
破片	0.0	4.2	0.0	0.0	95.8	0.0
溝C	A	B	C	不明	H	H不
個体	2.6	6.0	0.0	0.0	90.6	0.0
破片	3.4	8.0	0.0	0.0	85.2	3.4

大溝比較土師器甕類別頻度　単位%

溝6	A	B	C	不明	把手	DE	他
個体	25.0	33.3	16.7	25.0	0.0	0.0	0.0
破片	16.7	50.0	8.3	25.0	0.0	0.0	0.0
溝D	A	B	C	不明	把手	DE	他
個体	24.5	46.6	12.9	4.3	0.0	0.0	11.7
破片	19.7	48.9	13.9	5.1	0.0	0.0	12.4
溝C	A	B	C	不明	把手	DE	他
個体	10.9	40.6	12.2	16.3	0.0	1.9	18.1
破片	8.1	38.1	13.5	20.4	0.0	1.9	18.1

Bが存在するが主体が杯Hで50%以上占める。最後に、溝Fはこれらの杯に加えて杯Cも個体数資料では18.2%を占める。他の溝とは様相を異にしている。

第四に須恵器の蓋の類別頻度についてみる。溝E・溝Fは蓋Bが主体を占め80%と頻度が高い。また、溝4・溝2・溝3は杯Hが主体をを占め70%前後と高い頻度を示し、杯Aまたは杯Bをともなっている。

最後に土師器甕の類別頻度をみてみる。ここからの特徴は、ここまでの分析資料の中で頻度の極めて低かった甕D・甕Eが、溝E・溝Fでは20%～30%を占めていることである。甕D・甕Eと分

表4・21　類別統計

大溝群比較出土頻度　単位%

門間溝4	須恵器	灰釉陶器	土師器
口縁個体数	69.7	0.6	29.8
口縁破片数	64.2	1.9	33.9
池田溝E	須恵器	灰釉陶器	土師器
口縁個体数	69.6	16.5	13.9
口縁破片数	67.0	19.2	13.8
池田溝F	須恵器	灰釉陶器	土師器
口縁個体数	68.5	2.8	28.7
口縁破片数	59.1	5.2	35.8
門間溝2	須恵器	灰釉陶器	土師器
口縁個体数	82.8	1.0	16.3
口縁破片数	78.7	0.8	20.5
門間溝3	須恵器	灰釉陶器	土師器
口縁個体数	60.5	1.2	38.4
口縁破片数	57.1	2.9	40.0

表4・22　用途別統計

大溝比較須恵器用途別頻度　単位%

門間溝4	供膳	調理	貯蔵	不明
口縁個体数	73.4	3.8	21.2	1.6
口縁破片数	58.6	4.6	15.1	21.8
池田溝E	供膳	調理	貯蔵	不明
口縁個体数	88.5	2.9	8.3	0.3
口縁破片数	75.0	2.4	5.1	17.4
池田溝F	供膳	調理	貯蔵	不明
口縁個体数	80.8	1.7	17.4	0.0
口縁破片数	74.6	2.6	7.9	14.9
門間溝2	供膳	調理	貯蔵	不明
口縁個体数	76.9	4.0	19.1	0.0
口縁破片数	59.0	3.0	20.0	18.0
門間溝3	供膳	調理	貯蔵	不明
口縁個体数	92.3	0.0	5.8	1.9
口縁破片数	80.0	0.0	5.0	15.0

表4・23　種別統計

大溝比較須恵器杯類別頻度　単位%

門間溝4	H	A	B	C	不明
口縁個体数	55.6	29.6	8.5	0.0	6.3
口縁破片数	67.9	19.2.	2.6	0.0	10.3
池田溝E	H	A	B	C	不明
口縁個体数	8.6	39.1	5.8	0.0	46.5
口縁破片数	13.1	20.5	4.3	0.0	62.1
池田溝F	H	A	B	C	不明
口縁個体数	14.3	36.4	24.7	18.2	6.5
口縁破片数	26.5	35.3	14.7	8.8	14.7
門間溝2	H	A	B	C	不明
口縁個体数	12.0	83.0	4.0	0.0	1.0
口縁破片数	20.9	67.4	9.3	0.0	2.3
門間溝3	H	A	B	C	不明
口縁個体数	41.7	52.8	0.0	0.0	5.6
口縁破片数	45.5	45.5	0.0	0.0	9.1

大溝比較須恵器蓋類別頻度　単位%

溝4	A	B	C	不明	H	H不
個体	19.4	2.8	2.8	2.8	72.2	0.0
破片	8.0	4.0	4.0	4.0	80.0	0.0
溝E	A	B	C	不明	H	H不
個体	0.8	80.5	4.6	3.5	10.4	0.8
破片	0.6	79.2	3.1	1.6	8.4	6.8
溝F	A	B	C	不明	H	H不
個体	0.0	85.0	0.0	0.0	15.0	0.0
破片	0.0	84.4	0.0	0.0	15.6	0.0
溝2	A	B	C	不明	H	H不
個体	0.0	33.3	0.0	0.0	66.7	0.0
破片	0.0	30.8	0.0	0.0	69.2	0.0
溝3	A	B	C	不明	H	H不
個体	30.0	0.0	0.0	0.0	70.0	0.0
破片	12.5	0.0	0.0	0.0	87.5	0.0

表4・24　種別統計

大溝比較土師器甕類別頻度　単位%

溝4	A	B	C	不明	把手	DE	他
個体	10.6	47.7	11.3	23.8	3.3	0.0	3.3
破片	9.3	41.5	12.7	30.5	2.5	0.0	3.4
溝E	A	B	C	不明	把手	DE	他
個体	12.1	28.2	7.4	6.4	0.0	34.6	11.4
破片	10.0	25.9	8.6	8.6	0.0	33.6	13.2
溝F	A	B	C	不明	把手	DE	他
個体	3.4	57.6	10.2	1.7	3.4	23.7	0.0
破片	1.8	62.5	10.7	0.0	0.0	25.0	0.0
溝2	A	B	C	不明	把手	DE	他
個体	14.7	61.8	0.0	23.5	0.0	0.0	0.0
破片	7.7	61.5	30.8	0.0	0.0	0.0	0.0
溝3	A	B	C	不明	把手	DE	他
個体	30.3	36.4	12.1	6.1	0.0	6.1	9.1
破片	25.0	32.1	10.7	14.3	0.0	7.1	10.7

類しているこの濃尾系甕は7世紀後半から存在はしているが、門間沼遺跡の居住域からの出土量が少ない（特に竪穴建物からは出土していない）。このことから、奈良時代以降の居住域の中心が溝E・溝Fの存在する大毛池田遺跡の北西部へ移動したと考えられる。

このように隣接する大毛池田遺跡の大溝と門間沼遺跡の大溝を出土遺物の組成を分析したが、出土遺物が溝の機能していた時期とは必ずしも一致しない点などもあり、これらの溝の同定は難しそうである。

（4）古代の文字資料

①墨書土器

全37点が主に'95調査区より出土している。

器類別の頻度は、須恵器が62.2%、灰釉陶器が29.7%、緑釉陶器素地が8.1%である。器種別頻度は、須恵器では杯類73.9%、灰釉陶器は椀が90.9%を占めている。また、判読不明であるが緑釉陶器素地のものが3点出土している。

墨書土器の時期は、8世紀の末から9世紀前葉のものと9世紀後葉～10世紀前半のものとに大別できる。

墨書の内容について特筆すべきものとして、95A区SE04出土の灰釉陶器椀2点に書かれた則天文字風文字があげられる。この文字は一般的には、則天文字の「天」の崩れたものと考えられている。これまで千葉県をはじめ東日本に類例があるが、東海地方では初例となる。この他、全体の43.2%に「田」または「大田」などのように"田"の字が書かれており、門間沼遺跡の特徴の1つと言える。

②刻印土器・刻書土器

「美濃」刻印須恵器が1点95C区から出土している。分類*ではA—Ⅱ—2類に該当する。時期は8世紀第1四半期に比定されている。「美濃」刻印須恵器は、これまでに生産窯の老洞窯（岐阜市芥見）も含めて全国59ヶ所1376点出土している。愛知県内からは美濃国との国境に位置する一宮市や江南市など11ヶ所15点が存在する。門間沼遺跡に隣接する大毛池田遺跡でも古代の大溝から2点出土している。

また、「山寸」刻書文字の須恵器が1点95C区から出土している。、無台杯の底部外面に刻まれている。生産窯が尾北窯（小牧市篠岡78号窯、以下S-78窯）であり、時期は7世紀後葉から末に比定されている。「山寸」刻書須恵器は、これまでにS-78窯3点の他、飛鳥石神遺跡2点・三重県四日市市西ヶ広1点遺跡・犬山市大縣神社所蔵品1点が知られている。また、「山寸」の読みについて諸説があるが、平城木簡に村を寸と表記した例があることからも「山寸」は「山村」であり、地名か人名と考えられる。さらに、尾張国の春部郡には山村郷があることから「山寸」が地名に察せられよう。

＊高木　洋　1981『老洞古窯跡群発掘調査報告書』岐阜市教育委員会。

（5）中　世

●中世土器・陶器の分類と統計

土器・陶器の分類基準

今回の発掘調査で出土した中世の遺物は、灰釉系陶器を中心として、土師器、施釉陶器（古瀬戸等）、焼締陶器（常滑等）、貿易陶磁、加工円盤、陶丸、土錘等が出土している。この他に少量ではあるが、石製品、銭貨等の出土もある。時期は、１３世紀～１４世紀代が中心となる。

今回の遺物カウントに際しては分類の統一性を高めることがまず第一であったので、以下のように器種分類をした。なお、用途別遺物の分析のためには、供膳具を灰釉系陶器の椀・皿と土師器の皿に、調理具を灰釉系陶器の鉢、土師器の鍋・釜と常滑産等の鉢に、貯蔵具を常滑産等の壷・甕に、その他を古瀬戸などの施釉陶器、貿易陶磁、加工円盤などに区分して分析した。

灰釉系陶器

灰釉系陶器は、中世期の東海地方の窯で焼成された無釉の陶器をいうが、ここではいわゆる「山茶碗」を示し、本遺跡では「北部系」の椀・皿、胎土に砂粒を多く含む「南部系」の椀・皿・鉢がある。

焼締陶器

常滑焼系統の甕・壷・羽釜がある。

施釉陶器

いわゆる「古瀬戸」とよばれている土器とその系統の土器。本遺跡では壷・擂鉢・卸皿などがある。

土師器

土師器は、主に皿と煮沸具（鍋・釜）がある。煮沸具には、内耳鍋・羽付鍋（羽釜）・伊勢型鍋がある。

貿易陶磁

青磁、白磁等の皿・椀がある。

その他

加工円盤、陶丸、土錘がある*。

●中世土器・陶磁器の統計

統計資料

９５Ａ区～Ｅ区の包含層（検出Ｉ～）及び中世遺構の出土遺物より収集した資料は以下の通りである。

①破片数（口縁部・体部・底部）

②灰釉系陶器の口縁部計測法による個体数

分析の視点

収集した資料を以下のように加工した。

・包含層（検出Ｉ～）資料は、屋敷地内と屋敷地外に区分した。つまり、９５Ａ区資料は屋敷地内と屋敷地外、９５Ｂ区資料は屋敷地外、９５Ｃ区は屋敷地内と屋敷地外、９５Ｄ区は屋敷地内と屋敷地外、９５Ｅ区は屋敷地内と屋敷地外に区分している。

・遺構資料は、屋敷区画溝のみ、屋敷区画内遺構のみ、屋敷区画内遺構＋屋敷区画溝、屋敷区画外遺構とに区分している。

採用資料

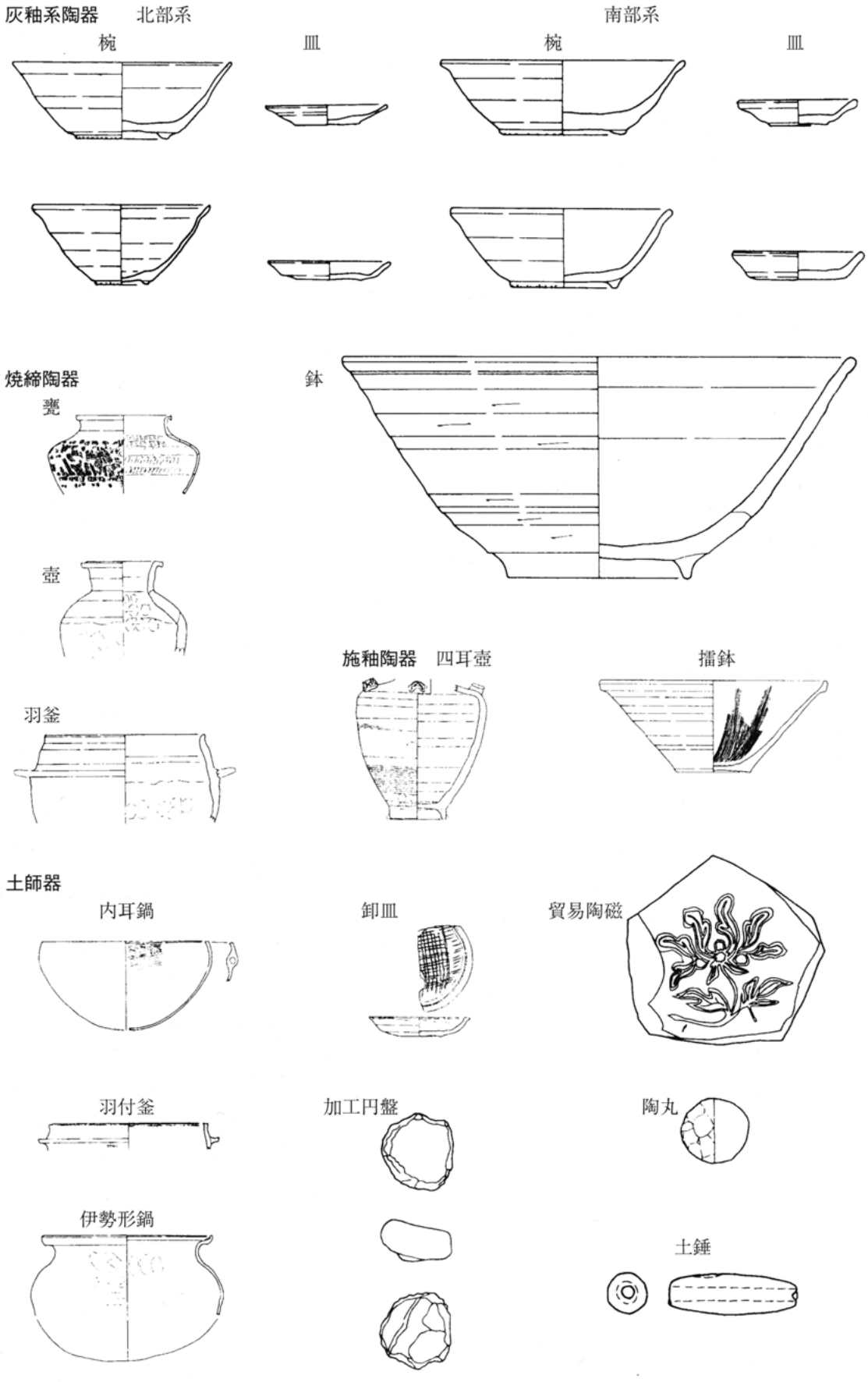
遺物整理作業の進行を観察していると、資料の信憑性についてはより正確度を求めるならば口縁部存在の資料が一番と感じられた。また、灰釉系陶器については口縁部計測法による個体数資料も収集しており、今回の分析については口縁部破片数による分析を行い、口縁部計測法による個体数資料を補助的資料として採用することとした。（但し、遺跡全体の資料として総破片数による資料も付け加えている。）

●分析

遺構出土の数値を分析すると、'95年度調査区で確認された屋敷地１（Ａ区）・屋敷地２（Ｃ・Ｄ区）・屋敷地３（Ｅ区）において、区画内及び区画溝の

＊分類について、加工円盤は『大毛池田遺跡』1997、陶丸は『松河戸遺跡』1994、土錘は『大渕遺跡』1991に準じた。いずれも当センター刊行の報告書。

図 4・15　中世の土器分類図



方が区画外より灰釉系陶器の出土比率は高い。しかし、屋敷地３は調査区内に一部分が確認されただけのものでありこの資料が屋敷地３全体の様相を示しているとは言い難い。但し、区画内では、96.9%が灰釉系陶器でしめられており、このことからは他の屋敷地同様の傾向を示していると言える。この結果は、検出遺物の分析結果とも一致してくる。Ａ区区屋敷地内99.1%に対しＡ区屋敷外84.7%、Ｃ区屋敷地内97.9 %に対しＣ区屋敷外69.5%、Ｄ区屋敷地内94.9%に対しＤ区屋敷外82.9%である。

遺構資料と比べて検出資料の方に灰釉系陶器出土頻度の結果が顕著に現れている。このように屋敷地の特徴を希薄にしている原因は、遺構そのものが後世に削平を受けており、現実に今存在する遺構資料は本来の遺構資料のごく一面のみを表したものと考えられよう。

表４・25　地区別統計

遺構口縁破片数灰釉系陶器出土頻度　単位：%

	Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	Ｅ区
区画溝	93.3	——	91.0	91.7	66.7
区画内	96.0	——	91.6	——	96.9
区画全	95.8	——	91.6	91.7	84.9
区画外	93.8	84.8	89.5	86.6	89.3

検出口縁破片数灰釉系陶器出土頻度　単位：%

	Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	Ｅ区
屋敷内	99.1	——	97.9	94.9	100.0
屋敷外	84.8	83.3	69.5	83.0	78.2

遺構口縁破片数供膳具出土頻度　単位：%

	Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	Ｅ区
区画溝	100.0	——	92.0	97.2	61.9
区画内	93.2	——	94.4	——	96.9
区画全	93.8	——	94.1	97.2	83.0
区画外	96.7	100.0	93.6	92.8	93.6

検出口縁破片数供膳具出土頻度　単位：%

	Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	Ｅ区
屋敷内	97.5	——	97.7	94.9	97.1
屋敷外	89.8	91.9	77.6	83.3	87.8

用途別の分析結果では、出土比率において供膳具が調理具・貯蔵具を大きく上回っている。この傾向は、屋敷地の区画内外にみられ区画内ほどその比率は高い傾向にある。

検出遺物の分析結果はさらにこの傾向が顕著にみられ、Ａ区・Ｃ区・Ｄ区内で確認された屋敷地内の供膳具の出土比率が高く、例外としてＥ区で確認された屋敷地内は他の区画にはみられない貯蔵具が高い出土比率（19.0%）を示している。

次に灰釉系陶器の分析結果に着目してみる。ここでは、北部系と南部系の出土頻度に調査区毎(屋敷地毎)に顕著な特徴がみられる。遺構破片数資料において北部系灰釉陶器の出土頻度に着目すると、屋敷地１のＡ区では区画内外とも90%程度を占める。これと同様ものは、80%以上を北部系灰釉系陶器で占める屋敷地２の区画溝を含んでいるＤ区の資料である。これに対して、屋敷地２のＣ区では区画溝からは73.6%を占めているが、区画内遺構では38.6%、区画溝を含めた区画内遺構全体では43.2%、区画外遺構では48.4%にすぎない。さら

表４・26　種別統計

遺構口縁破片数灰釉系陶器器種別頻度　単位 %

		Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	Ｅ区
区画溝	北椀	85.7	—	67.0	66.7	14.3
	南椀	14.3	—	19.8	18.2	42.9
	北皿	0.0	—	6.6	15.2	7.1
	南皿	0.0	—	3.3	0.0	28.6
区画内	北椀	75.9	—	32.0	—	32.3
	南椀	1.8	—	52.9	—	61.3
	北皿	15.9	—	6.6	—	3.2
	南皿	2.4	—	8.1	—	3.2
区画全	北椀	76.6	—	36.6	66.7	26.7
	南椀	2.7	—	48.6	18.2	55.6
	北皿	14.7	—	6.6	15.2	4.4
	南皿	2.2	—	7.5	0.0	1 1.1
区画外	北椀	80.8	67.9	38.6	74.7	27.2
	南椀	5.1	21.4	40.5	17.0	62.4
	北皿	11.6	0.0	9.8	4.7	4.8
	南皿	1.0	10.7	8.5	2.2	5.6

に、屋敷地３のＥ区では、区画溝からは21.4%、区画内遺構では35.5%、区画溝を含めた区画内遺構全体では31.1%、区画外遺構では32.0%にすぎない。

検出破片数資料を分析すると、屋敷地１のＡ区では遺構資料同様北部系灰釉系陶器の出土頻度が高く、屋敷地内96.3%、屋敷地外91.5%を占めている。しかし、屋敷地２のＣ区では屋敷地内67.7%、屋敷地外61.4%、同地のＤ区では屋敷地内75.0%、屋敷地外78.1%、屋敷地３のＥ区では屋敷地外55.8%、屋敷地外64.3%を占めており、遺構破片数資料で示される特徴とは異なる結果となっている。

遺構口縁個体数資料も基本的には、同口縁破片数資料の傾向とほぼ同じ傾向がみられる。但し、屋敷地２のＣ区の区画外遺構における北部系灰釉系陶器の頻度は、口縁破片数資料の48.4%に対して口縁個体数資料は62.5%と高い数値を示している。

また、検出口縁個体数資料も同口縁破片数資料とほぼ同じ傾向を示している。

次に灰釉系陶器の椀と皿の比率についてみる。遺構口縁破片数資料では、Ａ区～Ｅ区の区画内全遺構平均値は5.4：1に対し、同区画外平均値は8.3：1である。また、遺構口縁個体数資料ではＡ区～Ｅ区の区画内全遺構平均値は2.0：1に対し、同区画外平均値は3.3：1である。

検出口縁破片数資料では、Ａ区～Ｅ区の屋敷地内平均値15.2：1に対し、同屋敷地外平均値は2.6：1である。また、検出口縁個体数資料ではＡ区～Ｅ区の屋敷地内平均値6.1：1に対し、同屋敷地外平

表４・27　種別統計

検出口縁破片数灰釉系陶器器種別頻度　単位 %

		Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	Ｅ区
屋敷地内	北椀	86.6	—	63.2	73.2	53.5
	南椀	2.0	—	28.5	23.2	39.5
	北皿	9.7	—	4.5	1.8	2.3
	南皿	0.1	—	3.5	1.8	4.7
屋敷地外	北椀	67.4	61.3	39.7	56.7	45.5
	南椀	6.2	9.4	32.3	15.6	26.9
	北皿	24.1	26.3	21.7	21.4	18.5
	南皿	0.4	2.2	3.7	4.3	7.7

遺構口縁個体数灰釉系陶器器種別頻度　単位 %

		Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	Ｅ区
区画溝	北椀	74.0	—	67.6	48.1	4.5
	南椀	3.7	—	15.7	11.1	15.9
	北皿	0.0	—	10.8	40.7	13.6
	南皿	22.2	—	2.9	0.0	63.6
区画内	北椀	64.3	—	28.5	—	50.0
	南椀	1.8	—	44.1	—	40.5
	北皿	30.4	—	8.1	—	2.4
	南皿	0.9	—	19.1	—	7.1
区画全	北椀	65.3	—	33.0	48.1	26.7
	南椀	2.0	—	40.8	11.1	27.9
	北皿	27.1	—	8.4	40.7	8.1
	南皿	3.2	—	17.2	0.0	36.0
区画外	北椀	71.5	26.4	33.3	67.0	22.8
	南椀	4.1	37.5	26.3	17.0	58.6
	北皿	21.5	1.4	29.2	6.5	4.8
	南皿	1.1	34.7	9.6	8.4	13.8

検出口縁個体数灰釉系陶器器種別頻度　単位 %

		Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	Ｅ区
屋敷地内	北椀	83.1	—	55.1	66.7	60.5
	南椀	1.9	—	26.9	23.1	21.1
	北皿	12.5	—	11.9	9.3	7.9
	南皿	0.2	—	5.8	0.9	10.5
屋敷地外	北椀	64.1	59.5	38.6	55.8	43.4
	南椀	5.7	8.5	30.2	13.8	25.3
	北皿	27.8	29.5	23.8	24.0	22.0
	南皿	0.5	2.0	5.0	4.6	8.2

表４・28　器種比率統計

遺構口縁破片数出土頻度比　椀／皿

	Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	Ｅ区
区画全	4.7/1	——	6.0/1	5.6/1	5.3/1
区画外	6.8/1	8.3/1	4.3/1	13.3/1	8.6/1

検出口縁破片数出土頻度比　椀／皿

	Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	Ｅ区
屋敷内	9.0/1	——	11.5/1	26.8/1	13.3/1
屋敷外	3.0/1	2.5/1	2.8/1	2.8/1	2.8/1

均値は2.4：1である。

上記の結果は、遺構資料と検出資料が相反する傾向を示している。つまり、遺構資料では区画内・屋敷内よりも区画外・屋敷外の方が椀の頻度が高いのに対して、検出資料では区画内・屋敷内の方が椀の頻度が高い傾向を示している。

■中世の墨書土器

'95調査区からは全１４４点が出土している。全て灰釉系陶器で、主に底部外面に文字・花押風？文字・記号等が書かれている。

中世の出土遺物分析からみると、95Ａ区・Ｂ区・Ｄ区では北部系灰釉系陶器が南部系灰釉系陶器より出土頻度で大きく上回り、95Ｃ区・Ｅ区では南部系灰釉系陶器の頻度が他の調査区に比べて高くなっている。この傾向が墨書土器の出土頻度にも反映、北部系灰釉系陶器の墨書土器の出土頻度も高く（94.9％が北部系）、北部系灰釉系陶器の出土頻度の高い調査区Ａ区・Ｂ区では墨書土器の出土頻度も（Ａ区・Ｂ区併せて64.6％）高くなっている。門間沼遺跡'95調査区では南部系の灰釉陶器は藤沢編年４～７型式*に該当し、北部系灰釉系陶器は７～１０型式に該当している。このことと墨書土器の出土傾向と併せて考えると、中世門間沼遺跡を営む集団に識字者層の拡がる時期は１３世紀半ば以降になると察せられる。この時期的な傾向は隣接する大毛池田・大毛沖遺跡も類似していると思われる。さらに、墨書土器の４割が９５Ａ区から出土している。さらにこの調査区からは小型の石製硯の出土もみられることからも、文字を常用していた階層の人々が９５Ａ区の屋敷地１には存在していたことを窺わせる。

■加工円盤・陶丸

'95調査区からは、加工円盤が217点と陶丸８点出土している。加工円盤の分類は大毛池田分類を踏襲しておりこの分類は以下の通りである。

Ａ類（灰釉系陶器）
Ｂ類（須恵器・灰釉陶器）
Ｃ類（中世常滑焼）
Ｄ類（施釉陶器）
Ｅ類（その他）

加工円盤は、Ａ類が全体の51.2％、Ｂ類が30.9％、Ｄ類12.9％を占めている。この出土頻度は隣接する大毛池田遺跡の出土頻度と比較すると、Ａ類の頻度が低くなっているのに対して、Ｂ類・Ｄ類の頻度が高くなっている。

Ｂ類の高頻度の要因の１つとして、大毛池田遺跡には古代の居住域が希薄であったのに対して、門間沼遺跡では居住域が濃密に展開しており、特にＡ区・Ｄ（Ｄａ）区においてＢ類の出土が多いことから、古代居住域を削平して中世屋敷地が営まれた部分では加工円盤の材に古代遺物が利用された頻度が高かったと考える。

出土地点の頻度をみてみると、屋敷地２のＤ区の区画溝周辺からの出土が群を抜いている。その他、屋敷地の区画溝あるいはその周囲で出土が多くみられる。陶丸８点は松河戸分類の中に当たり、平均重量10.05gである。うち６点がＡ区から出土している。（小川芳範）

表４・29 墨書陶器統計

'95調査区別墨書土器出土点数

	Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	Ｅ区	合計	%
北椀	34	10	9	18	8	79	54.9
北皿	25	23	7	1	1	57	39.6
南椀	1	0	2	0	3	6	4.2
南皿	0	0	1	0	1	2	1.4
合計	60	33	19	19	13	144	100
%	41.7	22.9	13.2	13.2	9.0	100	

＊藤澤良祐　1997「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター

表４・30 加工円盤出土統計

'95調査区加工円盤出土数

	95A	95B	95C	95D	95E	合計	%
Ａ類	7	4	32	42	26	111	51.2
Ｂ類	19	8	8	29	3	67	30.9
Ｃ類	0	2	2	4	0	8	3.7
Ｄ類	5	2	5	12	4	28	12.9
Ｅ類	0	0	0	1	2	3	1.4
合計	31	16	47	88	35	217	100.0
%	14.3	7.4	21.7	40.6	16.1	100.	

5．門間沼遺跡出土の土師器把手に関する若干の考察

（1）はじめに

今回の門間沼遺跡の調査では、土師器の把手付甕・鍋及び甑が若干出土している。また、それらに装着された把手のみも一定量出土している。

そこで今回、門間沼遺跡出土の把手を中心に若干の考察を行い、把手の形態や装着方法の違いから何か読み取ることができるか見てみたい。

（2）資料の検討

本遺跡からは器種が判明する個体として、甕及び鍋６個体・甑１個体が出土しており、他に把手のみ１７点が出土している。

これら把手を、装着方法・把手中央部の断面形・把手の屈曲度合いを元に次のように分類し、各把手を見ていきたい。

●分類

Ⅰ　把手の装着方法が差し込みによるもの

Ⅱ　把手の装着方法が貼り付けによるもの

　A　把手中央部で屈曲するもの

　B　把手中央部で屈曲しないもの

　　a　把手中央部の断面形が上面が凹む隅丸方形のもの

　　b　把手中央部の断面形が隅丸方形のもの

　　c　把手中央部の断面形が円形のもの

　　d　把手中央部の断面形が楕円形のもの

●解説

ⅠＡａ類：７点確認できる。

1は把手付鍋で、断面形は不明だが破損状態から把手の差し込み方・原形・補強の粘土の継ぎ足しの方法がわかる好資料である。これによると把手本来の形は、断面は扁平で付け根部分がすぼまった形をして、屈曲部上面が大きく凹んだ形をしている。そして、把手中央付近で強く屈曲しており、補強用の粘土の継ぎ足しは把手が屈曲する部分から付け根まで施されていて、先端部は扁平である。

2も把手付き鍋で1同様内面が大きく凹み先端扁平で強く屈曲している。しかし粘土の継ぎ足しは屈曲部のやや手前までしか施されておらず、補強用粘土の厚みも１より薄い。また、2では体部内面の粘土継ぎ足しが剥離した部分にもハケが施されている。このことから把手の装着は、製作の最終段階で行われたことが確認できる。4も同様な特徴を有しているが、粘土継ぎ足しの範囲や厚みには若干のばらつきが見られる。他に体部内面の把手部分を覆うよう継ぎ足された粘土が確認できるものがある。この例から、他の把手でも同様な措置がなされていたが剥離してしまったものがあると思われる。

ⅠＡｂ類

3は、断面上面が強く指で押さえられているが凹みは見られず、上面は平坦である。それ以外ではⅠＡａ類との違いは見られない。

ⅠＡｄ類：把手のみ３点出土している。

7は、把手下半部の補強用の粘土にかなりの厚みがあるため、断面が隅丸方形では無く楕円をなしている。１点は粘土の補強が見られず、楕円をなす断面は把手本来の形を残している。もう１点は把手中央の屈曲が他の把手より弱く明確な屈曲は見られず、短小な印象を受ける。また、補強の粘土が継ぎ足された屈曲部のあたりまでハケが施されるといった他とは異なった特徴を有している。

ⅠＢｃ類：類例は甑であるが装着方法は不明である。いずれも胎土が非常に緻密で硬質である。ま

た、粘土の補強は見られず、断面形も円形であり、中央付近から屈曲するのでは無く、付け根部分から緩やかに上方に彎曲している。

ⅡＡｂ類：１点のみ出土している。

6は先端が扁平で、付け根が細く粘土の継ぎ足しが若干見られる他、断面が隅丸方形であるといったＩＡｂ類と似た特徴を有するが、体部内面に当たる部分が未調整であることからⅡ類と判断した。

ⅡＡｄ類

１点は体部内面が平らで先端は丸く太い円錐状で、付け根部分は細く、粘土の継ぎ足しは見られない。屈曲は弱い。もう１点は先端が太く丸い円錐状で付け根まで同じ太さで続いている。屈曲は非常に弱く内面は未調整である。

●比較

次に他遺跡出土の土師器把手との比較を試みる。

当遺跡に隣接する大毛池田遺跡から、６世紀の把手の付く伊勢系鍋８（172）が出土している。この伊勢系鍋の把手は、報告書からは断面形は確認出来ないがⅡＡ類に分類でき、装着方法は貼り付けだが、それ以外では屈曲が弱く、把手中央付近までハケが施されるといった特徴を有している。

北野遺跡からは、第５次調査SF185より７世紀の把手付鍋9・10（45・46）が出土している。9の装着方法は不明だが、10の把手は差し込み式で内側から差し込まれている。その形態から、9はＡａ類、10はＩＡａ類に分類できる。この２点は、門間沼遺跡ＩＡａ類と同じ特徴を有する一方で、把手中央から先端よりで非常に強く屈曲しており、又、粘土の継ぎ足しが見られないといった異なった特徴も有している。

（3）まとめ

今回の考察では、Ｉ類とした差し込み式の把手については４分類した。

ＩＡ類は、体部内面が大きく凹むことを特徴とすることができる。断面形では、ｄ類としたものは粘土継ぎ足しが少なく、ａ・ｂ類では多いことから粘土の使用量が断面形に関係していると思われる。断面上部の凹みに関しては、ｂ類が強く抑えているにもかかわらず凹まないように調整している。北野遺跡9・10では、粘土継ぎ足しが見られないのに上面が凹んでいることから、技法上の問題のみでは考えられない。

ＩＢｃ類の把手は、同じ形態のものが須恵器の甑に認められることから、甑の把手と考えられる。

Ⅱ類の把手は、点数が少なく明確にはできなかったが、小さく、屈曲が弱く、粘土の継ぎ足しも施されないか僅かに施されているだけでＩ類とは明らかに異なった形態をなしている。

これらＩＡ類・ⅡＡ類の把手が装着された甕・鍋の口径を見てみると、ＩＡ類では、4が約20ｃｍである他は、26～30ｃｍと大型であるのに対し、ⅡＡ類では、大毛池田遺跡８（172）１例のみであるが約22cmと小型であった。この違いは、甕・鍋の大型化に伴う強度不足を解消するために大型の甕・鍋にはＩＡ類の把手を使用したと考えられる。しかし小型である4の把手がＩＡ類であり、ⅡＡ類の把手が小型で形態も異なること、又、ＩＢｃ類が須恵器を模していることから、製作工人の違いによる製作技法の差も考える必要があると思われる。又、当遺跡と大毛池田遺跡の間で６世紀の把手には把手中央部付近までハケが施され、屈曲が弱いのに対し、７世紀の把手では把手部分にハケが施されなくなり、屈曲が強くなる。

北野遺跡との間では、当遺跡出土の把手より屈曲が強く、補強用の粘土継ぎ足しが見られないと言った違いが見られたが、他遺跡の様相を確認することが出来なかったのでこれらが時期差・地域差を表しているかどうかは今後の課題としたい。

（田口雄一）

引用文献

竹田憲治他　1996『北野遺跡（第５次）発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター。

愛知県埋蔵文化財センター　1997『大毛池田遺跡』。

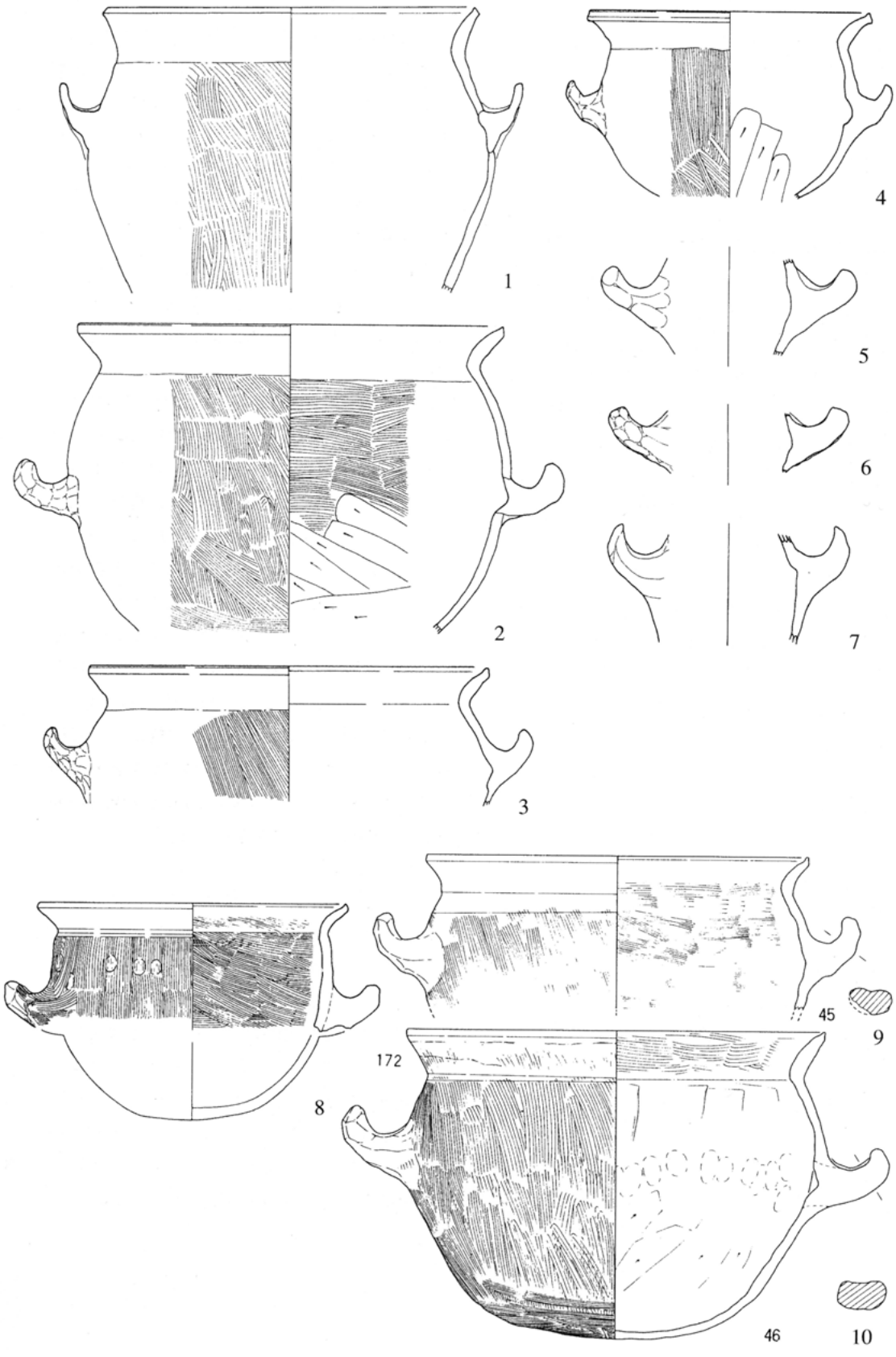


図４・１６　把手付土師器

１～７：門間沼、８：大毛池田、９・１０：三重県北野

6 .門間沼遺跡の微化石分析

はじめに

愛知県葉栗郡木曽川町に位置する門間沼遺跡は、町の東南部に広がる門間遺跡の北西部に位置し、調査区は木曽川によって形成された標高８～９ｍの自然堤防上に立地する。遺跡の周辺には大毛沖遺跡や、古墳時代の水田遺構が検出された大毛池田遺跡などの低湿地遺跡が存在する。発掘調査によって確認された遺構・遺物は、弥生時代中期、古墳時代、古代～中世の大きく３時期に区分されるが、その中でも古墳時代のものが中心となっている。

今回、当時の古環境と古植生を復元するにあたり、古墳時代を中心とする遺構を中心に、珪藻、花粉、植物珪酸体の微化石分析を実施した。特に水田層に関しては、植物珪酸体分析を平面的に行うなどして、水田の容態や景観に関する情報を得るよう努めた。

（１）試料

各調査区において47地点から試料を採取した。それらのうち、分析を行った遺構は30以上にも及ぶ。分析を行った遺構やその時代性に関しては表4･31にまとめた。今回は全ての地点の分析層位を掲載することはできなかったが、一部の地点に関しては、各分析結果の項に層位分布図として表した。

（２）分析方法

珪藻分析

試料を湿重で７ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、K. Krammer and Lange-Bertalot（1986･1988･1991a･1991b）、K. Krammer（1992）などを用いる。

同定結果は、海水～汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出した化石が現地性か異地性かを判断する目安として完形殻の出現率を求め考察の際に考慮した。堆積環境の解析にあたって、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理･化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出

表4・31　分析地点一覧

種別	調査区	地点名など	時代性	分析項目		
				珪藻	花粉	植珪
柱状	IKN94A	SK02	中世	○	○	
	IKN94B	南壁落ち込み	3世紀後半			○
	IKN94Ca	SD11	6世紀前半	○	○	
	IKN94Ca	SD31	4世紀	○	○	
	IKN94Ca	SD71	4世紀後半	○	○	
	IKN94Ca	SD72下層東	4世紀後半	○	○	
	IKN94Ca	SD72下層西	4世紀後半	○	○	
	IKN94Ca	SK114C	紀元前3世紀後半		○	
	IKN94Ca	SK25	3世紀前半	○	○	
	IKN94Ca	SK40	3世紀後半	○	○	
	IKN94Ca	SK42	4世紀後半	○	○	
	IKN94Ca	SK45	3～6世紀	○	○	
	IKN94Ca	SK61	4世紀後半	○	○	
	IKN94Ca	SK64	4世紀後半	○	○	
	IKN94Ca	SK67	4世紀	○	○	
	IKN94Ca	東ベルト2	4～6世紀	○	○	
	IKN94Cb	SK45	6世紀前半	○	○	
	IKN94Cb	SK62	6世紀後半	○	○	
	IKN94D	南壁IX	3世紀	○	○	
	IKN95A	水田排水路東	3～4世紀	○	○	○
	IKN95Bb	SD24	7世紀	○	○	
	IKN95C	大畦畔断面	4世紀		○	○
	IKN95C	大畦畔に伴う溝断面	4世紀	○	○	○
	IKN95Ca	弥生中期-A	紀元前3世紀後半	○	○	○
	IKN95Ca	弥生中期-B	紀元前3世紀後半			○
平面	IKN95A	水田平面	3世紀			○
	IKN95Bb	水田平面	3世紀			○
	IKN95Bc	水田平面	3世紀			○
	IKN95C	水田平面	3世紀			○
	IKN95Da	水田平面	3世紀			○
	IKN95Db	水田平面	3世紀			○

現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250KHz，1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。一部の試料にあたっては、土壌1gあたりの珪酸体量を求めるために、分析重量、乾燥重量、分析残渣量、プレパラート作成量などを計量した。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や稲作について検討するために、植物珪酸体組成図を作成した。組成は計数結果をもとに、土壌1gあたりの個数に換算して図示した。

（3）結果

珪藻化石

珪藻分析を行った地点は多く、局地性を反映する珪藻化石の性格上、まとめて記載することは難しい。各地点の結果を詳細に述べると分量が膨大になることから、ここでは95Eb区で確認された河川堆積物の垂直試料と、同時に行なった昆虫遺体分析と同試料の分析結果のみを以下に記す。また、他の試料の分析結果のうち、珪藻化石群集の層位分布に関して代表的と思われる地点を選択し、図4・28までに示す。

●95Eb区東側壁面

95Eb区調査区東側壁面において垂直的に採取した13試料からは22属47種（3変種を含む）の珪藻化石が出現する。結果を図4・17に示す。試料番号1、6～8、10～13では群集組成解析に必要な200個体以上の珪藻化石が出現したが、それ以外の試料では200個体に満たないものがある。珪藻の群集組成と出現頻度の特徴から、分析結果は下位より4つの珪藻帯に区分される。以下に珪藻の群集組成の特徴を各帯ごとに記す。

Ⅰ帯（試料11～13）での出現種数は18属50種（3変種を含む）である。群集組成の特徴として付着性種が64.5～94%と多産するのが特徴である。試料1から2にかけて好酸性種と嫌塩性種が増加傾向を示す。特徴種として酸性・付着生種の*Eunotia pectinalis* var. *undulata*、アルカリ性・付着生種の*Cymbella aspera*、*Fragilaria ulna*、流水性・付着生種の*Cymbella turgidula*が挙げられる。

Ⅱ帯（試料10～7）での出現種数は21属46種（2変種を含む）である。群集組成では底生種の増加が特徴的であり、Ⅰ帯で6～29.5%であったものが、本帯では52.5～70%になる。これは底生種の*Pinnularia viridis*、*P. gibba*といった*Pinnularia*属の増加に起因する。pH・水流性・塩分に対する適応性では不定性種が大半を占める。

Ⅲ帯（試料6～3）での出現種数は23属58種（3変種を含む）である。出現する珪藻殻数は上位層に向けて減少傾向を示す。Ⅱ帯に比べ、好流水性種や付着性種が増加傾向を示す。これは*Fragilaria ulna*、*Cymbella turgidula*などの付着生種の増加による。

*Ⅳ*帯（試料2～1）での出現種数は22属47種（3変種を含む）である。Ⅲ帯で増加傾向を示した付着生種が減少し、代わって底生種が59～74.5%と増加傾向を示すようになる。*Pinnularia viridis*、*P. microstauron*、*Gyrosigma acuminatum*などの多産に起因する。

●昆虫遺体分析と同試料（94D区SX03、95A区SE02、95Db区黒色腐植土層、95Eb区北壁試料）

94D区SX03から出現した珪藻化石は17属34種（2変種を含む）であった。結果を図4・17に示す。群集組成の特徴はpHについて不定性種が44%、酸性種が40%を占める。流水生および塩分に対する適応性では、ともに不定性種が優占する。生態性については付着生種が75.5%と大半を占め、ついで底生種が23%を占める。多産した種として*Actinella brasiliensis*、*Gomphonema acuminatum*、*G. angur*、*G. gracile*が挙げられる。全体に*Gomphonema*属が32.5%を占め特徴種となっている。

95A区SE02内の曲物内の堆積物は、曲物の出土状態から上段試料と下段試料とに分けられる。上段試料から出現した珪藻化石は17属36種（3変種を含む）である（図4・17）。群集組成の特徴として、pHでは不定性種が40.5%と多産するものの、好アルカリ性種（33%）、好酸性種（25.5%）も似た出現率を示す。流水性と塩分に対する適応性は、ともに不定性種が65.5～83%と多い。生態性については底生種が56.5%、付着生種が42%であり、ほとんど底生種と付着生種で構成される。多産した種として*Pinnularia subcapitata*、*P. gibba*、

表４・３２　花粉化石の産状

調査区	地点名など	時代性	
IKN94A	SK02	中世	上・下部検出されない。シダ類多く保存悪い。モミ属・ツガ属・マツ属多い。一部ヤナギ属とカシが多い試料がある。草本少ない。水生植物が若干検出される。
IKN94B	南側落ち込み		保存悪く木本ほとんどなし。シダ類胞子非常に多い。木本類ではコナラ亜属が多い。
IKN94Ca	SD11	6 世紀前半	全体的に保存悪いが、下部で特に悪い。１層でマツ属とイネ科が多い。それ以外は針葉樹（モミ属・ツガ属・マツ属など）中心。上部でソバ属みられる。
IKN94Ca	SD31	4 世紀	下部では保存悪くほとんど検出されない。木本と草本の比率はほぼ同数。木本はマツ属、草本はイネ科が多い。上部でソバ属みられる。
IKN94Ca	SD71	4 世紀後半	全体的に保存状態悪い。上部で草本多く、特にイネ科が高い。木本ではマツ属多く、ハンノキ属・ブナ属・コナラ亜属・アカガシ亜属など見られる。上部でソバ属見られる。
IKN94Ca	SD72 下層東	4 世紀後半	保存悪く木本花粉ほとんどなし。シダ類胞子が多い。草本はイネ科・ヨモギ属が多少みられる程度。
KN94Ca	SD72 下層西	4 世紀後半	全体的に保存悪い。木本と草本類の比率はほぼ同数。木本はマツ属、草本はイネ科が多い。
IKN94Ca	SK114C	紀元前３世紀後半	保存悪く、ほとんど検出されない。
IKN94Ca	SK25	3 世紀前半	保存悪く木本ほとんどなし。シダ類胞子非常に多い。草本はイネ科・ヨモギ属多い。上部でソバが若干検出される程度。
IKN94Ca	SK40	3 世紀後半	保存悪く花粉少ない。シダ類胞子多い。草本はイネ科・ヨモギ属、木本はマツ属が若干多い。
IKN94Ca	SK42	4 世紀後半	保存悪く木本ほとんどなし。シダ類胞子非常に多い。草本はイネ科・ヨモギ属多い。ソバ若干検出される。
IKN94Ca	SK45	3 ～ 6 世紀	全体的に保存悪く、多く検出される試料少ない。マツ属など針葉樹中心。アカガシ亜属、シイノキ属、ニレ属－ケヤキ属多い層準あり。草本花粉はイネ科、ヨモギ属が多産。突発的にツリフネソウ属が増加。
IKN94Ca	SK61	4 世紀後半	木本はマツ属とアカガシ亜属が多く、スギ属、コウヤマキ属、モミ属、ツガ属などやや多い。草本はイネ科多い。水生植物の種類が多い。ソバ属、ユウガオ属など栽培種がみられる。シダ類胞子が多産。
IKN94Ca	SK64	4 世紀後半	保存全体的悪く、中部でやや多い程度。草本は多くイネ科が優占する。木本はスギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ブナ属が検出される。その他、ウコギ科、ナデシコ科、バラ科、ヨモギ属が一部で多産する。水生植物が比較的多い。
IKN94Ca	SK67	4 世紀	シダ類がやや多く、花粉はほとんどみられない。
IKN94Ca	東ベルト２	4 ～ 6 世紀	保存やや悪く、シダ類が多い。木本花粉と草本花粉の比率はほぼ同じ。木本はモミ属、ツガ属、マツ属、コウヤマキ属、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属などが検出されるが、際だったものはない。ブドウ属、イボタノキ属、スイカズラが一部で多産する。草本類はイネ科とヨモギ属。
IKN94Cb	SK45	6 世紀前半	保存非常に悪い。木本類はマツ属、スギ属、アカガシ亜属、草本類はイネ科が多い。
IKN94Cb	SK62	6 世紀後半	保存非常に悪い。木本類はマツ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、エノキ属－ムクノキ属多い。草本の割合が高く、イネ科、ヨモギ属などが検出される。
IKN94D	南壁 IX	3 世紀	下部（２層より下）ではシダ類胞子多い。木本はマツ属、スギ属、ハンノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、草本はイネ科多い。１層は草本の方が多く、草本はイネ科が、木本はマツ属が優占。水生植物は下部で多い。
IKN95A	水田排水路東	3 ～ 4 世紀	シダ類胞子が極端に多く、花粉はイネ科、マツ属が若干みられる程度。
IKN95Bb	SD24	7 世紀	シダ類胞子が多く、花粉は最下部でみられる程度。
IKN95C	大畦畔断面	4 世紀	シダ類胞子が極端に多く、花粉はイネ科、ヨモギ属が若干みられる程度。
IKN95C	大畦畔に伴う溝断面	4 世紀	シダ類胞子が極端に多く、花粉はイネ科が若干みられる程度。
IKN95Ca	弥生中期 -A	紀元前３世紀後半	下部では保存が悪く、イネ科がやや多く検出される程度。上部（１層）では草本花粉の割合が高く、イネ科が多くみられる。水生植物の種類多く、ソバ属も検出される。

Gomphonema parvulum があげられる。特に底生種の *Pinnularia* 属が全体の30% を占める。また、*Pinnularia subcapitata*、*Hantzschia amphioxys* といった陸生珪藻が全体の15.5% を占める。下段試料からは18属46種（1変種を含む）の珪藻化石が出現する（図4・17）。群集組成の特徴は上段試料の結果とほぼ同じであり、pH・流水生・塩分に対する適応性とも不定性種が優占する。また、pHの真・好アルカリ性種と好酸性種、流水性の真・好流水性種と真・好止水性種といった相反する種群がほぼ同率でみられる。生態性については底生種が56.5%、付着生種が43.5% みられる。多産した種も上段試料と同様に *Pinnularia subcapitata*、*P. gibba*、*Gomphonema parvulum* である。全体の特徴として *Nitzschia obtusa*、*N. palea*、*N. amphibia* といった汚濁性種が6% 出現する。また、*Pinnularia subcapitata*、*Hantzschia amphioxys* の陸生珪藻も12% みられる。

95Db区の黒色腐植土層から出現した珪藻化石は17属21種（2変種を含む）である（図4・18）。群集組成の特徴として真・好止水性種が84%、浮遊生種が81%と、試料の大部分を示す。pHおよび塩分に対する適応性はともに不定性種が90% 近い値を示す。多産した種は止水性・浮遊生種の *Aulacoseira ambigua* で、本種のみで全体の80.5% を占める。緑色腐植土層からは13属31種（2変種を含む）の珪藻化石がみつかる（図4・18）。pH、流水性および塩分に対する適応性では不定性種が多いものの、生態性では付着生種が全体の81% を占める。多産した種としては好酸性種・付着生種・嫌塩性種の *Eunotia pectinalis* とその変種である *E. pectinalis* var. *minor*、*E. pectinalis* var. *undulata* といった *Eunotia* 属が全体の20.5% を占める。また、付着生種の *Gomphonema acuminatum* などの *Gomphonema* 属も全体の29% を占め、*Eunotia* 属と *Gomphonema* 属で全体の半分程度を占める。

95Eb区北壁試料では群集組成解析に必要な200個体に満たなかったが、15属17種の珪藻化石が確認される（図4・18）。好止水生種が63%、浮遊性種が58% 確認されるのが特徴である。多産した種は好止水性種・浮遊性種の *Aulacoseira ambigua* で、全体の55.7% と本種が試料全体の半分以上を占めている。

花粉化石

花粉分析を行った地点は多岐にわたるため、その傾向を表4・32に示した。また、花粉化石群集の出現傾向ならびに遺構の時代性を考慮し、大きく4つ（P－1～4）に区分した（表4・34）。各地点の区分に関しては、表4・33にまとめてある。また代表的な地点として94Ca区SK61と94D区南壁IXの2点をあげ、花粉化石層位分布図を示した（図4・29）。以下に各区分の特徴を示す。

●P－1帯

94B区の南側落ち込み、94Ca区SD31、SD71、SD72、SK114C、SK25、SK40、SK42、SK67、9、落ち込み、94Ca区SD31、SD71、SD72、SK114C、SK25、SK40、SK42、SK67、94D区南壁IX、95A区水田排水路東、95C区大畦畔断面ならびに大畦畔に伴う溝断面、95Ca区の弥生時代中期Aに存在する。花粉化石の保存が悪く、ほとんど検出されない。シダ類胞子がやや多くみられるが、表面に風化の痕跡が認められるものがほとんどである。今回行った分析成果をみると、花粉化石の保存が全体的に悪く、ほとんど検出されない地点が多い。その中でも、4世紀以前の遺構覆土の底面や水田耕土では、全ての試料において検出されない。このことから、この傾向が4世紀以前の花粉化石群集を指標するものと考えP－1帯とした。

●P－2帯

94Ca区SK45、SK61、SK64、東ベルト2、94D区南壁IXに存在する。木本花粉はマツ属、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属などの針葉樹や、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属、エ

表4・33　花粉化石による分帯

調査区	地点名など	遺構の時代性	花粉分帯（数字は各地点の層名） P－1 花粉がほとんどない。シダ類胞子多産。	P－2 ナラ・カシと温帯針葉樹。際だって多い種類なし。水生植物めだつ。	P－3 マツ属がやや増える。	P－4 マツ属とイネ科の多産。	備　考
			～4世紀	4世紀～6世紀	中世	近世～	
IKN94A	SK02	中世			3		他の層位は保存が悪い（たぶんP－3）
IKN94B	南側落ち込み	3世紀後半	2,3,4,5				
IKN94Ca	SD11	6世紀前半			3	2,1	
IKN94Ca	SD31	4世紀	2,3			1	
IKN94Ca	SD71	4世紀後半	2,3,4,5,6,7			1	
IKN94Ca	SD72下層東	4世紀後半	1,2,3				
IKN94Ca	SD72下層西	4世紀後半	2,3,4			1	
IKN94Ca	SK114C	紀元前3世紀後半	1,2				
IKN94Ca	SK25	3世紀前半	1,2,3				
IKN94Ca	SK40	3世紀後半	1-12				
IKN94Ca	SK42	4世紀後半	1,2,3,4				
IKN94Ca	SK45	3～6世紀		1,2,3			
IKN94Ca	SK61	4世紀後半		1-16			
IKN94Ca	SK64	4世紀後半		3,4,5,6			他の層位は保存が悪い（たぶんP－2）
IKN94Ca	SK67	4世紀	1,2,3,4,5				
IKN94Ca	東ベルト2	4～6世紀		1-13			
IKN94Cb	SK45	6世紀前半					花粉の保存が悪い（たぶんP－2）
IKN94Cb	SK62	6世紀後半					花粉の保存が悪い（たぶんP－2）
IKN94D	南壁IX	3世紀	5,6	3,4	2	1	
IKN95A	水田排水路東	3～4世紀	1-6				
IKN95Bb	SD24	7世紀		4			他の層位は保存が悪い（たぶんP－2）
IKN95C	大畦畔断面	4世紀	1-6				
IKN95C	大畦畔に伴う溝断面	4世紀		1-5			
IKN95Ca	弥生中期-A	紀元前3世紀後半	2,3			1	

ノキ属－ムクノキ属、ハンノキ属などの広葉樹が検出されるが、際だって多い種類がみられないのが特徴である。ただし、一部の試料ではウコギ科、ブドウ属、イボタノキ属、スイカズラ属が多産するが、突発的に増加しすぐ減少する。草本類は比較的多く、イネ科やヨモギ属が多産するほか、水生植物の種類数、個体数ともに増加している。時代的には、4世紀～6世紀頃にあたると思われる。なお、SK45とSK62は時代的にはP－2帯にあたると思われるが、花粉化石の保存が悪く、同様な傾向がみられない。

●P－3帯

94Ca区SK02、SD11、94D区南壁IXに存在する。傾向はP－2帯に似るが、マツ属の割合がやや高くなるのが特徴である。中世頃にあたると思われる。

●P－4帯

木本ではマツ属、草本ではイネ科が多産し、他の種類数・出現率が減少する。また、草本類の割合が高くなる。94Ca区のSD31、SD71、SD72、94D区の南壁IX、95Ca区の弥生中期Aの最上部層でみられる。近世以降にあたると思われる。

植物珪酸体

植物珪酸体分析は、主として水田層を中心に分析を実施している。特に古墳時代の水田層に関しては、各調査区とも平面的に採取し分析した。今回は、その中でも各水田区画内でのイネ属、ウシクサ族、ヨシ属の産状に着目して平面に図示する（図4・22～図4・27）。

古墳時代の水田遺構に伴う水路や大畦畔の分析結果をみると、イネ属の状況は1gあたりの個数に換算して1000個未満、出現率にして10％未満のものがほとんどである。95Ca区の「弥生時代中期」を

みると、最上部でイネ属検出量が多い（短細胞、機動細胞ともに5000個／g以上）が、この層位は花粉化石の方で近世以降に比定される。一方、水田面が2枚確認されている94D南壁IXでは、下位の水田層ではイネ属が少ないものの、上位の水田層では機動細胞で50%程度と高率に出現する。他の種類としては、ヨシ属やウシクサ族（ススキ属など）が多くみられ、タケ亜科等も検出される。

古墳時代の水田層に関しては、各水田区画毎に試料を採取し、堆積物乾燥重量1gあたりの個数に換算して求める。イネ属珪酸体に着目すると、短細胞には地域的変化は見られず、個数が多い区画が無ち秩序に存在する。一方、機動細胞珪酸体では、95A区、95Bb区で少なく、95Bc区、95C区、95Da区と大毛池田遺跡に近づくにつれて多くなる傾向にある。特にDa区からDb区にかけてと、Bc区付近に機動細胞が多い領域がみられる。このように機動細胞と短細胞珪酸体には明瞭な相関関係はみあたらない。イネ属以外の植物珪酸体としては、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属など）、タケ亜科などが検出される。この中でもヨシ属の短細胞および機動細胞珪酸体、ススキ属の短細胞珪酸体、ウシクサ族の機動細胞珪酸体の産出がめだつため、平面分布を示した。イネ属以外の珪酸体に関しても同じ分類群（あるいは同じ分類群を含む種類）間での機動細胞珪酸体と短細胞珪酸体の相関は薄い。しかし、短細胞、機動細胞内での相関は強く、ヨシ属が多産する試料では、ススキ属やタケ亜科も増えている。なお、イネ属以外の種類についても平面的な傾向はあまり認められず、個数が多い区画は存在するが、無秩序である。

（4）花粉帯と森林植生

花粉化石の傾向から、P－1～4の花粉帯を区分した。これに基づいて、各時期の森林植生変遷を述べる。

P－1帯は、4世紀以前に相当する。この層位は、大毛池田遺跡の下面水田に相当すると考えられている。土壌理化学分析の結果から、下面水田は乾田であった可能性が示唆されており（鬼頭，1997）、乾いていた状況が考えられる。また、今回の珪藻分析の成果から、当時の遺構内覆土の由来として、乾いた場所（当時の地表面？）からの土壌の混入が指摘されており、調和的である。この時期の花粉化石は保存が悪く、針葉樹花粉やシダ類胞子などが見られる程度である。これらは花粉・胞子化石の中でも風化に強い種類であることから（徳永・山内，1971）、好気的環境下により化石の風化が進んだことが推測される。なお、弥生時代から古墳時代初頭にかけての古植生は、朝日遺跡（吉野・萬谷，1992）や松河戸遺跡（堀木ほか，1994）などで行われており、いずれもナラ・カシ類を基調とした森林が推定されている。本遺跡は、これらの遺跡とは違い、広大な集水域を持つ木曽川の氾濫源に位置するため、花粉化石はより広範囲の植生を反映していると考えられる。そのため、P－2帯の木本花粉組成では、局地的と思われる種類を除き際だって多い種類がみられない。朝日遺跡などで推定されている森林植生は、より丘陵地に近い場所の古植生であると推定され、遺跡周辺の森林植生に関しては、P－2帯と同様な状況であったと考えられる。

P－2帯で検出される主な種類は、モミ属、ツガ属、スギ属、コウヤマキ属などの温帯性針葉樹、マツ属、ハンノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属、クリ属－シイノキ属などがみられる。温帯針葉樹林の増加は、気候の冷涼・湿潤化に伴うもので、関東平野や大阪平野などの花粉分析結果でも現れており、丘陵上を中心に分布していたものと思われる。また、先述した朝日遺跡などの結果などを考慮す

れば、カシ類、シイ類、ナラ類、マツなども丘陵や山地に分布していたものと考えられる。また、クルミ属、クマシデ属、ハンノキ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属などは、河畔林や湿地林の構成要素として、低地に生育していたと考えられる。今回、古代に関しては分析を実施していないが、近隣遺跡の結果などを考慮すれば、このような状況は古代まで続いていたものと考えられる。

Ｐ－３帯は中世に相当し、Ｐ－２帯と基本的には変わっていないが、マツ属の割合がやや増加する。マツ属の増加は人為的な植生改変によるマツの二次林や植林の増加によるものと考えられ、日本各地で普遍的にみられる傾向である。増加の時期は地域によって差があるが、今回の結果から、本遺跡では中世から増加を開始していることが明らかとなった。

Ｐ－４帯は近世にあたり、マツ属・イネ科の増加と、他の種類の種類数・出現率の減少によって特徴づけられる。植生改変がさらに進んで、森林植生の種類構成が単調となり、マツ林がさらに増加したものと考えられる。また、イネ科の多産は草地の拡大を意味していると思われる。

（５）遺跡内の古植生と土地利用

古墳時代には、大毛沖遺跡では旧河川の影響が残り河道が形成されていたが、大毛池田遺跡と門間沼遺跡では水田層が２枚見つかっており、それぞれが対比されている。下面の水田層と上面の水田層を比較すると、２枚の水田面が確認される94D区南壁IXでは、上面の水田の方が下面の水田よりもイネ属珪酸体が明らかに多いが、下面の水田を面的に分析している地点をみると、かなり高い試料も見られる。したがって、両者の生産量あるいは耕作期間の違いを検討することは難しい。しかし、水田雑草に着目すると、下面の水田は花粉化石の保存が悪いのに対し、上面の水田は多くの水田雑草由来の植物が検出される。このことから上面の水田は下面の水田より、湿潤的な環境下で営まれていたことが示唆される。ただし、植物珪酸体ではヨシ属が双方の水田から検出されていることから、下位の水田が乾燥状態にあったわけではない。これは、大毛池田遺跡の珪藻分析結果をみると、両者とも湿潤で水深が浅い環境が推定されていることからも追証される（鬼頭ほか，1997a）。なお、上面の水田ではスギ属やハンノキ

表４・３４　各時代の古環境変遷

時代性	遺構の状況				門間沼遺跡の古環境変遷			
	門間沼		大毛池田	大毛沖	花粉帯	森林植生	居住域周辺の植生	水田・畑の植生・容態
	微高地	低地						
近世					Ｐ－４	人為的な植生破壊によりマツ林が急増	イネ科など草地の拡大	ソバの栽培
中世II	墓域		区画溝、屋敷地	居住域、畑、井戸、区画溝	Ｐ－３	人為的な植生破壊によりマツ植林・二次林が増加		
中世I	集落、畑、道路		集落・溝					
古代Ｉ	集落、溝（大毛池田に続く）			居住域・畑		河川沿いには、ケヤキ、ニレ属、エノキ、ムクノキ、クルミ、シデ類、ナラ類、ハンノキ、スギなどが生育。丘陵上には、モミ、ツガ、コウヤマキ、スギ、ブナ、カシ類、シイ類、ナラ類などが生育		
古墳時代前期～中期	円墳群（５～６世紀）			流路（あるいは流路によって破壊）	Ｐ－２		ススキ属、タケ亜科などのイネ科やヨモギ属などの草地が中心。ブドウ属、スイカズラ属、イボタノキ属などの低木類も近くに生育。ソバ、ヒョウタン類の栽培	
	集落（３～６ｃ）	水田（５世紀前半）	上面水田					下位水田に比べて湿潤的。水生・湿生植物（ミズアオイ属、オモダカ科、ミズワラビ属、ツリフネソウ属）が周辺や水田雑草として生育。タデ属、ヨモギ属など人里植物の生育
		水田（４世紀前半）	下面水田		Ｐ－１			乾田型の水田。畦等にはススキ属、ヨシ属などの雑草類。生産の中心は大毛池田遺跡方向か？

属など低地に生育する樹木も多産している。このことから、上面水田の湿潤化は地域的な事象であり、流路の変更などにより、周辺域での湿地化が進んだ可能性がある。このような周辺環境の変化に対応するために、水田が作り替えられた可能性がある。

下面水田の植物珪酸体の傾向をみると、機動細胞においては大毛池田遺跡に向かって増加している。大毛池田遺跡の結果をみると、今回の検出量を上回る最大2万個/g以上の機動細胞珪酸体が検出されており、平均的にみても95Da区よりも多く検出されている（鬼頭ほか，1997a）。これは生産の中心が門間沼遺跡から見て北東側にあった可能性を示しており、大毛池田遺跡では、生産量あるいは耕作期間が長かったと推定される。その他の植物珪酸体では、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属など）、タケ亜科などが検出される。部分的に高い領域も存在するが、イネ属の間には相関関係はない。これらの植物は畦畔に生育していたりあるいは水田雑草として水田内に生育していたものと考えられる。なお、水田層から直接検出されたものではないが、古墳時代の堆積物からソバ属の花粉が検出されている。一昔前の農村では、畦にソバや穀類などの救荒作物を植える習慣があったという。このような習慣が古墳時代までさかのぼれるかは疑問だが、当時栽培されていたソバの生産地として、大畦畔の上が可能性のひとつとして考えられる。

また、P－2帯では、ウコギ科、ブドウ属、スイカズラ属、イボタノキ属などの低木類や蔓性植物の花粉化石が多産している地点がある。これらは局地的なものと考えられ、遺跡内にこれらの植物が生育していたものと考えられる。

中世頃には、イネ科をはじめとする草本類が増加し、近世にはさらに顕著になる。これに伴ってマツ属以外の木本類が種類数・出現率ともに減少する。これは、生活域・生産域を広げるなどの理由により、これまで河畔などに生育していた林が切り開かれたりして、草地が拡大したためと考えられる。この傾向は近世になると特に顕著になるが、これは近世以降の大規模な治水工事による生産域の拡大などが関わっていると思われる。

（6）堆積環境変遷

分析を行った地点の詳しい堆積環境変遷は、図50に示した通りである。ここでは、それらを遺構の性格毎に整理しまとめて述べる。

a）溝

4世紀の溝では、SD31、SD71、SD72下層東、SD72下層西の4地点について調査を行った。その結果、その埋積過程は概ね近似していたと考えられる。即ち、構築当初はどの溝も中～下流性河川指標種群など流水指標種が種数割合とも高かったことから流水が流れる溝であったと考えられる。しかし、その上の堆積層になると乾いた環境を指標する陸生珪藻と水生珪藻とが高い割合で混在するようになる。このような複数の環境を指標する珪藻化石が混在する堆積物は、洪水などに伴う一過性の堆積物中の珪藻化石群集（堀内ほか，1996）によく認められるものである。また、混合群集となる試料は層相的にもシルトブロックを含んだり、黒褐色粘土、砂混じりシルトなど層相も様々である。よって、河川の氾濫や洪水などにより周囲に分布する後背湿地構成層や自然堤防構成層、それに陸生珪藻を多く含む陸上の乾いた場所に堆積した堆積層などが削剥され、溝が急速に埋め立てられたと考えられる。そして、埋没後半になるとSD31やSD71で認められるように、*Fragilaria construens*、*F. construens fo.venter*などの富栄養種や*Rhopalodia gibberula*などの広域塩性種などが多産するようになることから溝内は再度水が停滞する

ようになり、水質的にも富栄養化したことが考えられる。

6世紀前半の溝もSD11の結果に基づくと、構築当初は砂が堆積することから水が流れていたことが予想される。その後、陸生珪藻を混在するなど混合群集の特徴が認められるようになり、層相的にも砂ブロックを混入することから、洪水などによって周囲から土壌が溝内に二次的に流れ込むことや人為的埋積などがあったことが考えられる。中～上部になると*Aulacoseira italica*などの偶来性浮遊性種を多産する好止水性種や*Eunotia pectinalis* var.*undulata*などの沼沢湿地指標種群を含む流水不定性種が多産することから、溝内は池沼～沼沢地のような状況を呈し、停滞水で満たされるようになったと考えられる。そして、最終的には広域塩性種、好汚濁性種が多産することから、富栄養沼沢地～湿地となったと考えられる。

7世紀の溝では、SD24の結果に基づくと全般的に化石の保存が悪く、垂直的な群集変化も乏しい。また、種構成も流水性種や陸生珪藻など複数の環境を指標する種が混在する混合群集の特徴が認められる。よって覆土の由来としては、洪水などによって遺跡周辺に分布する後背湿地構成層や自然堤防構成層などが削剥されたものが考えられる。

b）井戸

井戸としては3世紀前半のSK25、3世紀後半のSK40、4世紀後半のSK42、3世紀～6世紀のSK45、4世紀のSK67、4世紀後半のSK61、SK64、6世紀前半のSK45、6世紀後半のSK62、そして中世のSK02について分析を行った。その結果、珪藻化石群集の特徴は井戸遺構の位置や時代性に関係なく、1次堆積したものと混合群集（生育環境を異にする水生珪藻と陸生珪藻とが高い割合で混在する）とが交互に現れるものと、混合群集だけから構成されるものとに分けられる。前者の特徴が見られる遺構は、SK25、SK40、SK61、SK64、SK62、SK02の6遺構、後者の特徴が見られる遺構はSK42、SK42、SK45（IKN94Ca区）、SK67、SK45（IKN94Cb区）の4遺構である。

1次堆積したものと混合群集とが交互に現れる例として、SK40遺構の珪藻化石群集を掲載している。その特徴を述べると、11層～8層では、*Cymbella turgidula*などの中～下流性河川指標種群の一種や*Gomphonema sumatorense*などの上流性河川指標種群の一種を含む流水性種が優占することから、これらの層は流水域で堆積したと考えられる。7層になると、流水性種は減少し陸生珪藻が約40%と多産するようになることから混合群集の特徴が見られ、井戸壁の崩落、洪水などによる流れ込みなどによって急速に堆積したと考えられる。6層になると陸生珪藻は減少し、*Pinnularia gibba*、*P. gibba* var.*linearis*、*Cymbella naviculiformis*などの沼沢湿地指標種群が優占することから沼沢地～湿地のような比較的に安定した環境で堆積したと考えられる。5層～1層になると再度水生珪藻と陸生珪藻とが混在することから、前記したように崩落、流れ込みなどの影響を受けて急速に堆積したと考えられる。

混合群集のみから構成される例として、SK42の珪藻化石群集を掲載している。下部の4層～上位の2層まで*Gomphonema parvulum*、*Navicula elginensis*などの水生珪藻と*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*などの陸生珪藻がほぼ半々づつ産出する。このような特徴を示す堆積物は、洪水などによって急速に堆積したと考えられる。なお、特記事項として2層中に海藻に一般的に付着生育する*Grammatophora oceanica*、*Cocconeis scutellum*などの海水生種や海水～汽水生種が産出することから、古い時代の海成層をも削剥して堆積していると思われる。

c）水田に関連した遺構

水田遺構に関連したものとしては、3世紀の南

壁Ⅸ、3世紀～4世紀の水田排水路東、4世紀の大畦畔断面が挙げられる。

水田層を含む南壁Ⅸ地点では、3回の堆積環境変遷が認められる。水田層（5層）直下の6層からは沼沢湿地指標種群の一種である *Cymbella subaequalis* が優占することから、沼沢～湿地のような水域環境が推定され、そのような湿潤な場所を選択して水田耕作が行われたことが示唆される。しかし、水田層からは珪藻化石の産出は少なかったことから水田の水域環境については良く分からない。ただし、本遺跡に隣接する大毛池田遺跡の水田層の珪藻分析では、ｐＨではアルカリ性の水質で水深の浅い富栄養の沼沢～湿地の水域として現された（鬼頭ほか，1997a）。水田層から産出する珪藻化石の大部分が溶解していることを考慮すると、何らかの影響で溶解してしまった可能性が考えられる。2層は、水田耕作との関係については不明であるが、広域塩性種の *Rhopalodia gibberula* が多産することから塩類の集積が示唆される。1層になると好止水性の *Fragilaria construens*、*F. construens fo.venter* が優占することで特徴付けられる。これらの種は、湖沼～池沼沿岸部で水深1ｍ以浅の浅い場所で水草などに付着生育する種とされ、水質的にも富栄養な所を好む種とされる。よって、1層、2層堆積時には流水の影響の少ない止水域で富栄養な水質の存在が推定される。この水域環境は、前記した水田層の特徴にも近い。

水田排水路東地区では、5層・4層から珪藻化石が認められた。群集的には、中～下流性河川指標種群や上流性河川指標種群を含む流水性種が多産することから流水域で堆積したと考えられる。大畦畔断面では、前述した遺構覆土で認められたような水生珪藻と陸生珪藻とが高い割合で混在する混合群集の特徴が認められた。これは、畦畔構築の際に使われた土壌の由来が、洪水堆積物などを使用したためと考えられる。

以上述べたように、遺構から産出する珪藻化石は1次堆積したものは非常に少なく、その産出層位もごく限られていた。そして、産出種の多くは河川の氾濫の影響を受けて遺構内に二次的に堆積した異地生種から構成されることが明らかとなった。このような混合群集の特徴を示す遺構堆積物は、田所遺跡の大溝覆土でも認められている（鬼頭ほか，1997b）。このような群集組成となった理由としては、遺跡が立地する地形的要因に大きく左右されていると考えられる。即ち、本遺跡が犬山市付近を扇頂部とする木曽川扇状地西側端部に位置し、しかも扇状地帯から自然堤防地帯の漸移部に位置している（鬼頭ほか，1996；鬼頭，1997b）ことから、自然堤防や後背湿地が複雑に入り組んだ複雑な地形を呈している。このため遺跡が存続した古墳時代～中世の頃は、扇状地部を流れ下った河川の影響をまともに被る極めて不安定な場所に位置していたことは想像に難くない。このような地形・立地の特質のため遺構を埋積する堆積物も、人為的搬入のほかに度重なる河川の氾濫の影響を受けて後背湿地構成層や自然堤防構成層などの様々な環境に堆積した堆積物が混在したのであろう。

文献

安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 東北地理, 42, 73-88.

Asai, K. and Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35-47.

掘木真美子・吉野道彦・萬谷さつき, 1994, 愛知県松河戸遺跡における縄文時代後・晩期の花粉化石,「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第48集 松河戸遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター, 55-59.

堀内誠示・高橋敦・橋本真紀夫, 1996, 珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推推定について－混合群集の認定と堆積環境の解釈－, 日本文化財科学会, 第13回大会研究発表要旨集, 62-63.

伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用, 珪藻学会誌, 6, 23-45.

鬼頭 剛・堀木真美子・尾崎和美, 1996, 生活環境「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第66集, 大毛沖遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター, 160-184,

鬼頭 剛・堀木真美子・尾崎和美, 1997a, 花粉・珪藻・プラント・オパールからみた古環境,「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第72集 大毛池田遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター, 116-120.

鬼頭 剛・堀木真美子・尾崎和美, 1997b, 花粉、珪藻、プラント・オパールからみた古環境,「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第71集 田所遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター,135-147.

鬼頭 剛, 1997a, 大毛池田遺跡93Ab区で認められた水田土壌の理化学分析,「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第72集 大毛池田遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター, 144-150.

鬼頭 剛, 1997b, 位置と地理的環境,「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第72集 大毛池田遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター, 2-3.

近藤錬三・佐瀬 隆, 1986, 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, 31-64.

Krammer,K. and Lange-Bertalot,H., 1986, Bacillariophyceae,Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 876p.

Krammer,K. and Lange-Bertalot,H., 1988, Bacillariophyceae,Teil 2,Epithemiaceae, Bacillariaceae,Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 536p.

Krammer,K. and Lange-Bertalot,H., 1991a, Bacillariophyceae,Teil 3,Centrales, Fragilariaceae,Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 230p.

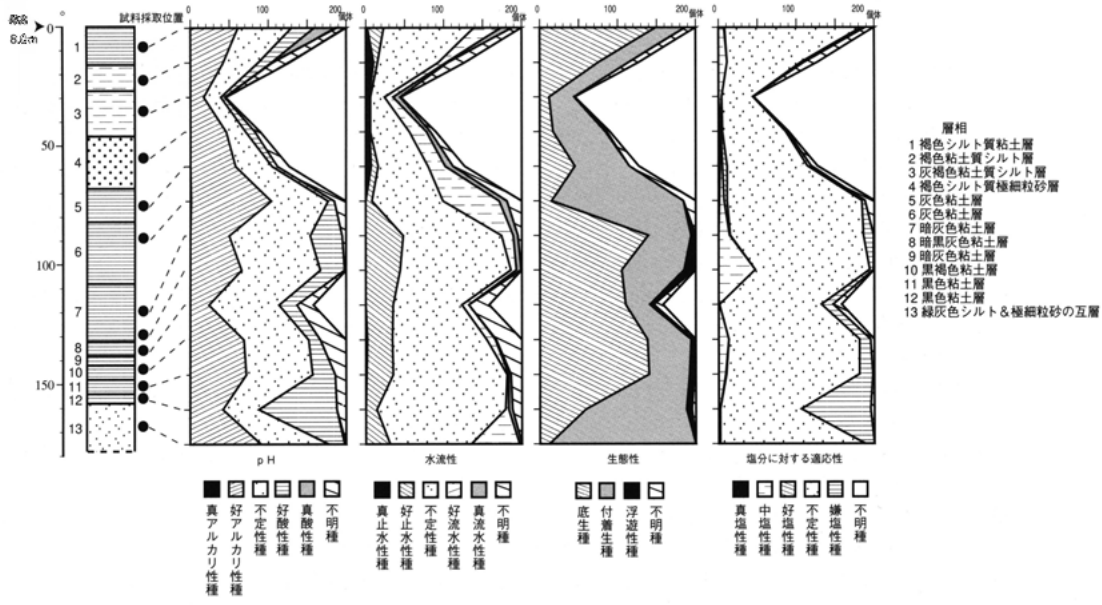
Krammer,K. and Lange-Bertalot,H., 1991b, Bacillariophyceae,Teil 4,Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 248p.

Krammer,K., 1992, PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26, BERLIN・STUTTGART, 1-353.

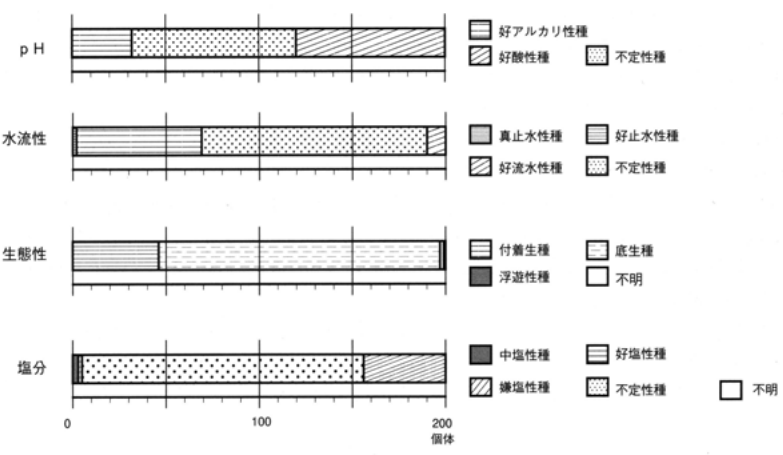
徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・胞子.「化石の研究法」, 化石研究会編, p.50-73, 化石研究会編, 共立出版, 50-73,.

吉野道彦・萬谷さつき, 1992, 花粉化石からみた朝日遺跡,「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第31集 朝日遺跡II（自然科学編）」,p.59-70,（財）愛知県埋蔵文化財センター

95Eb区東側壁面



94D区　SX03



95A区 SE02 曲物内埋土

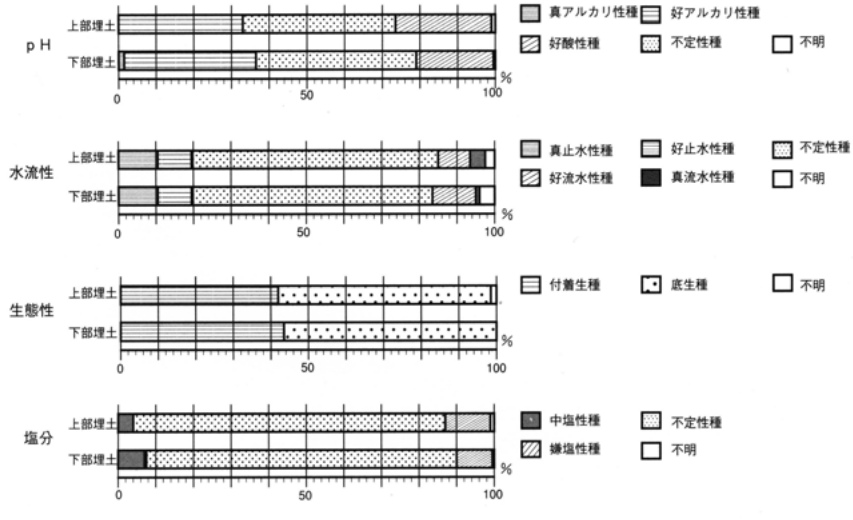
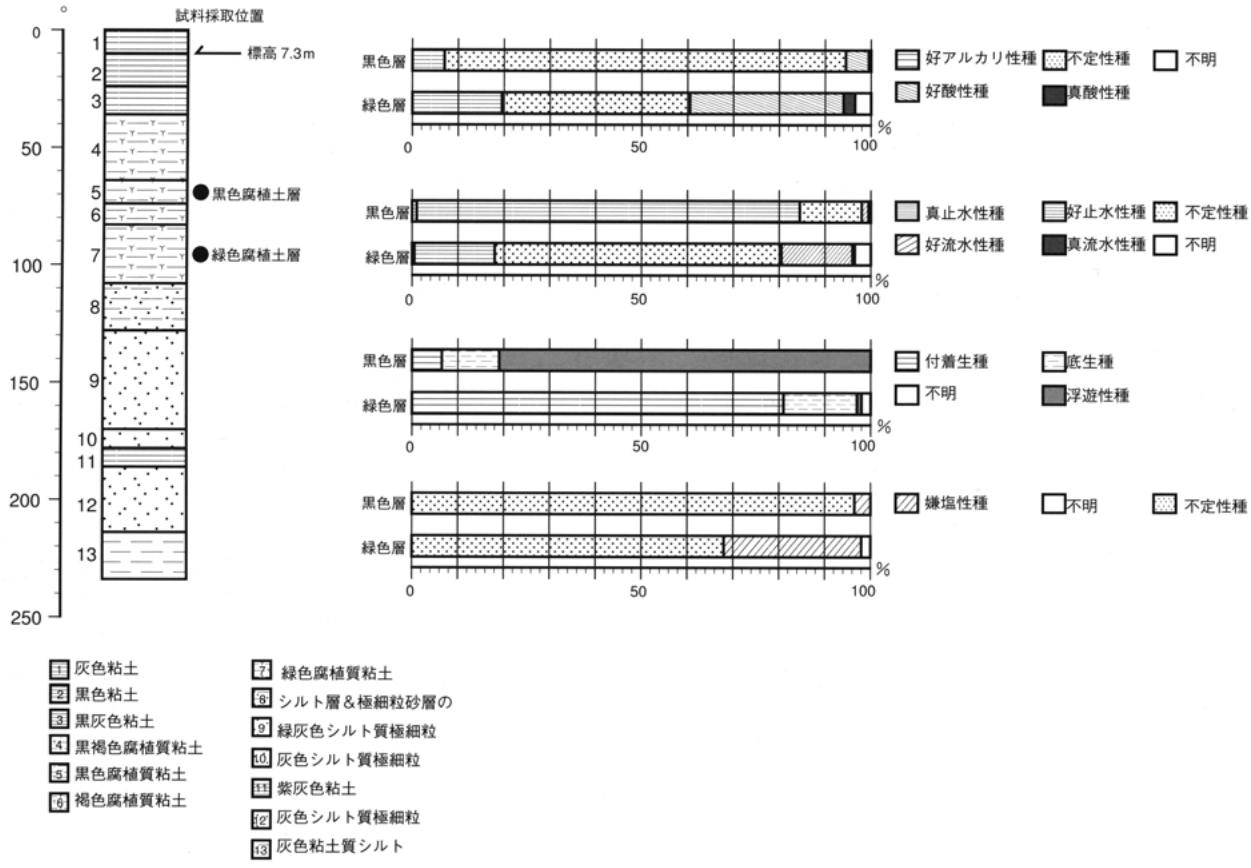


図４・１７　珪藻分析１

95Db区　黒色腐植土層および緑色腐植土層



95Eb区 北壁試料

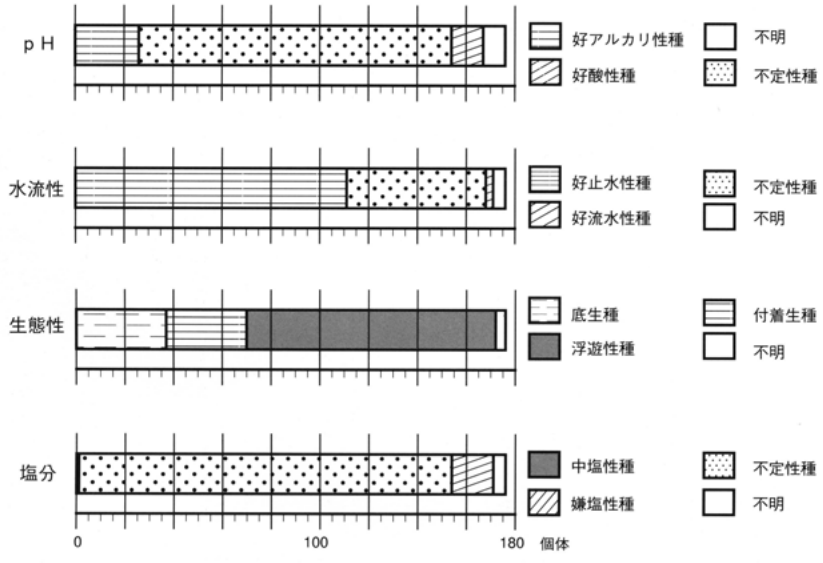
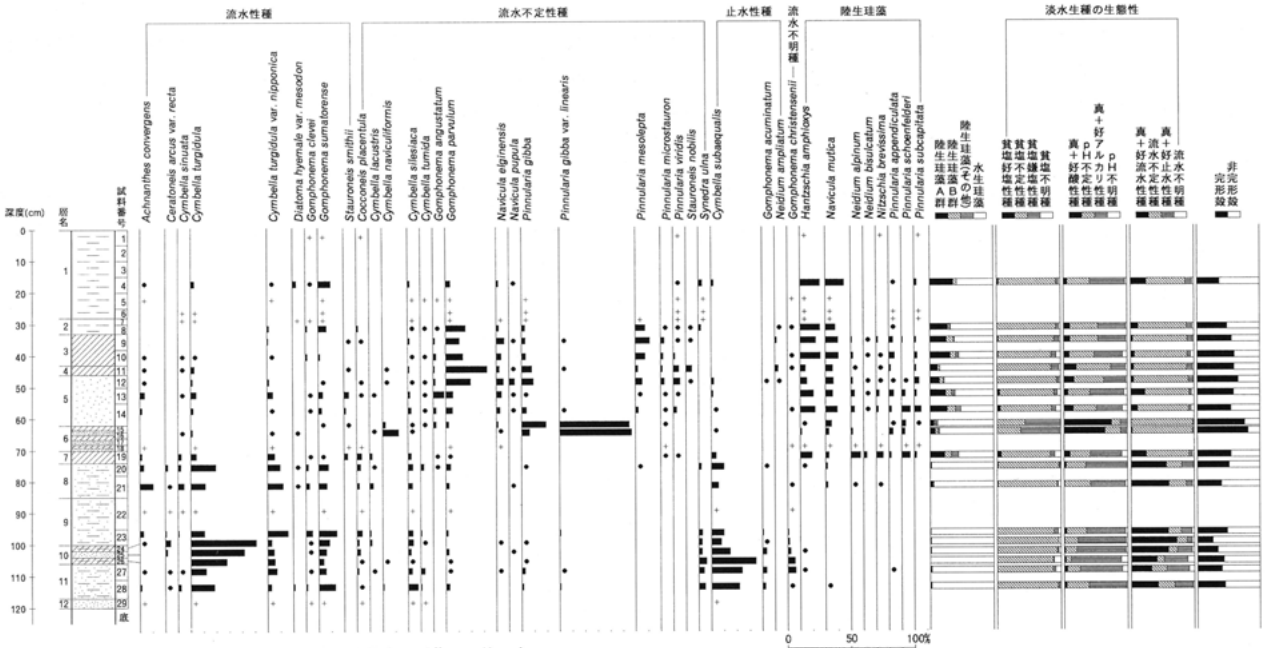
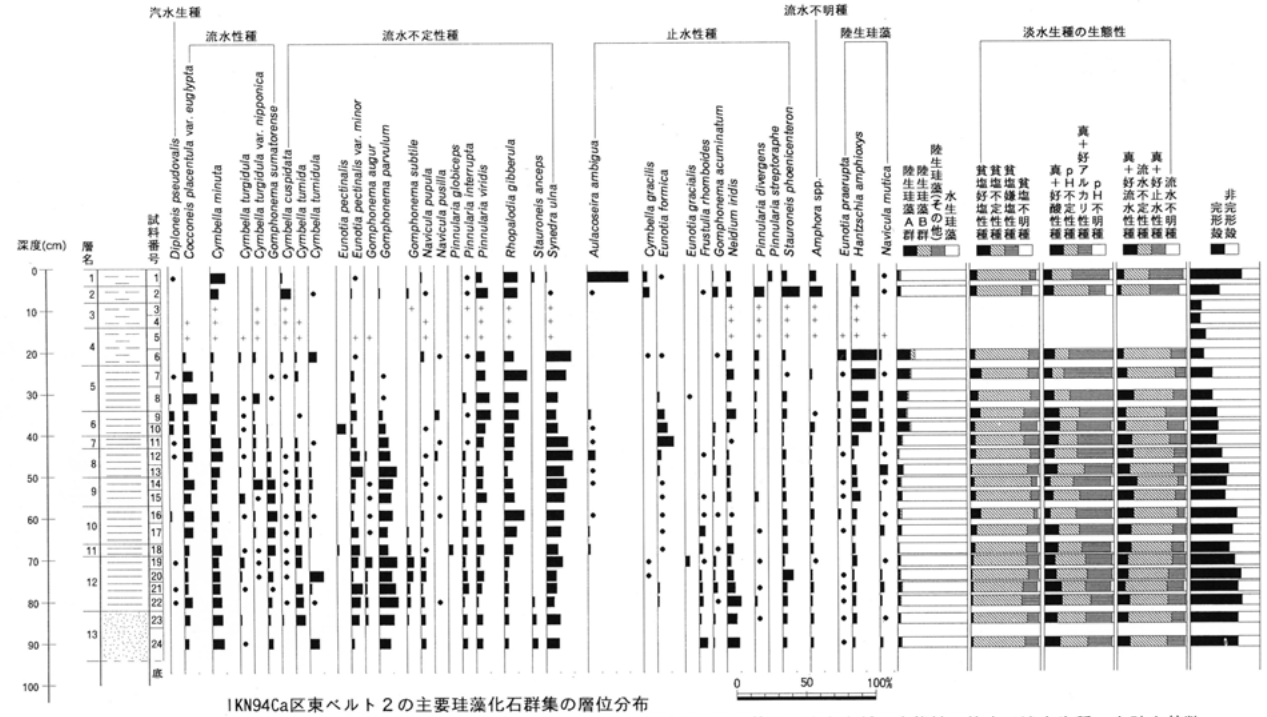


図4・18　珪藻分析2



IKN94Ca区SK40の主要珪藻化石群集の層位分布

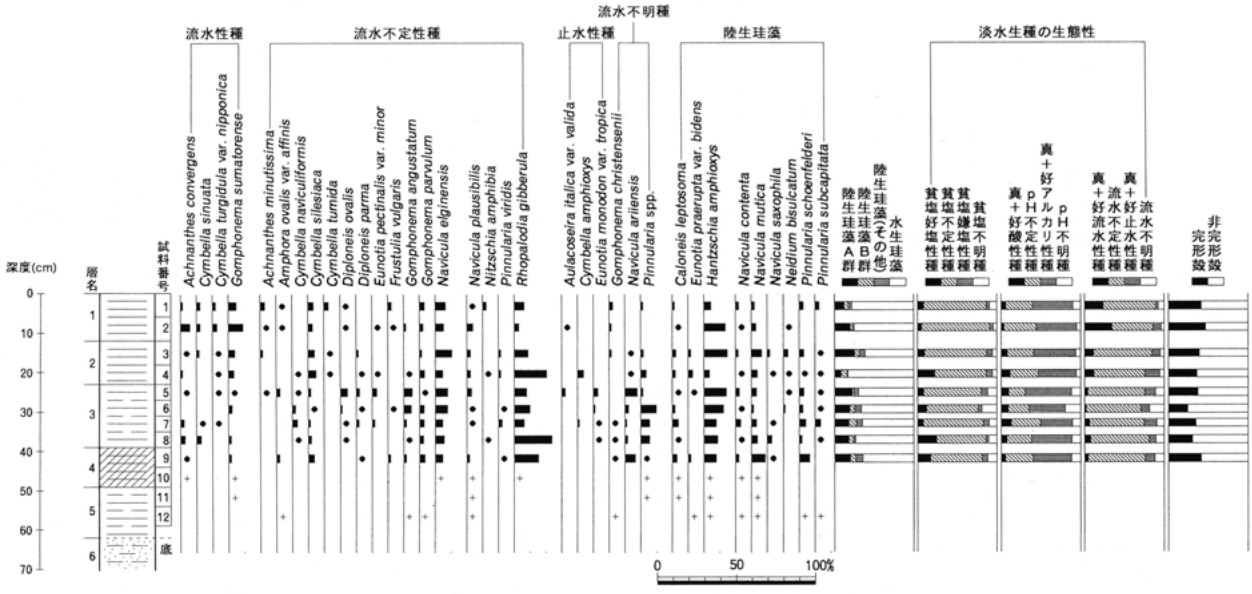
淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は１％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。



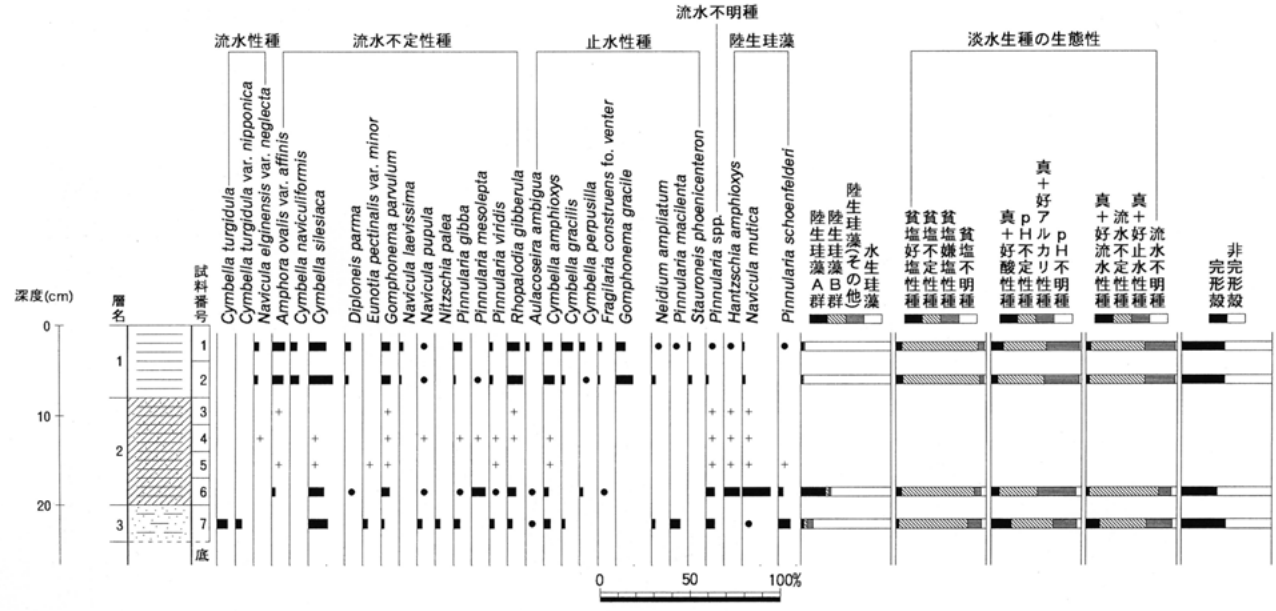
IKN94Ca区東ベルト２の主要珪藻化石群集の層位分布

海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は１％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

図４・１９　珪藻分析３

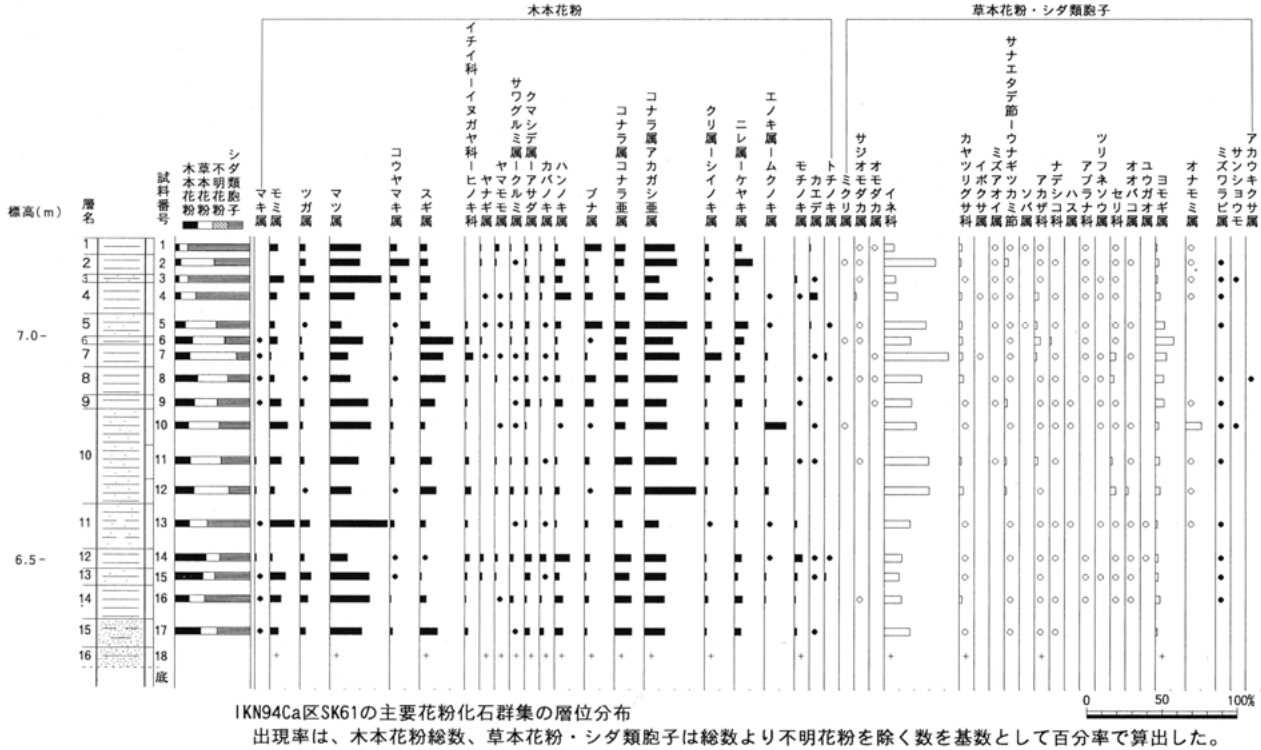


IKN95C区大畦畔に伴う溝断面の主要珪藻化石群集の層位分布
　淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は１％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

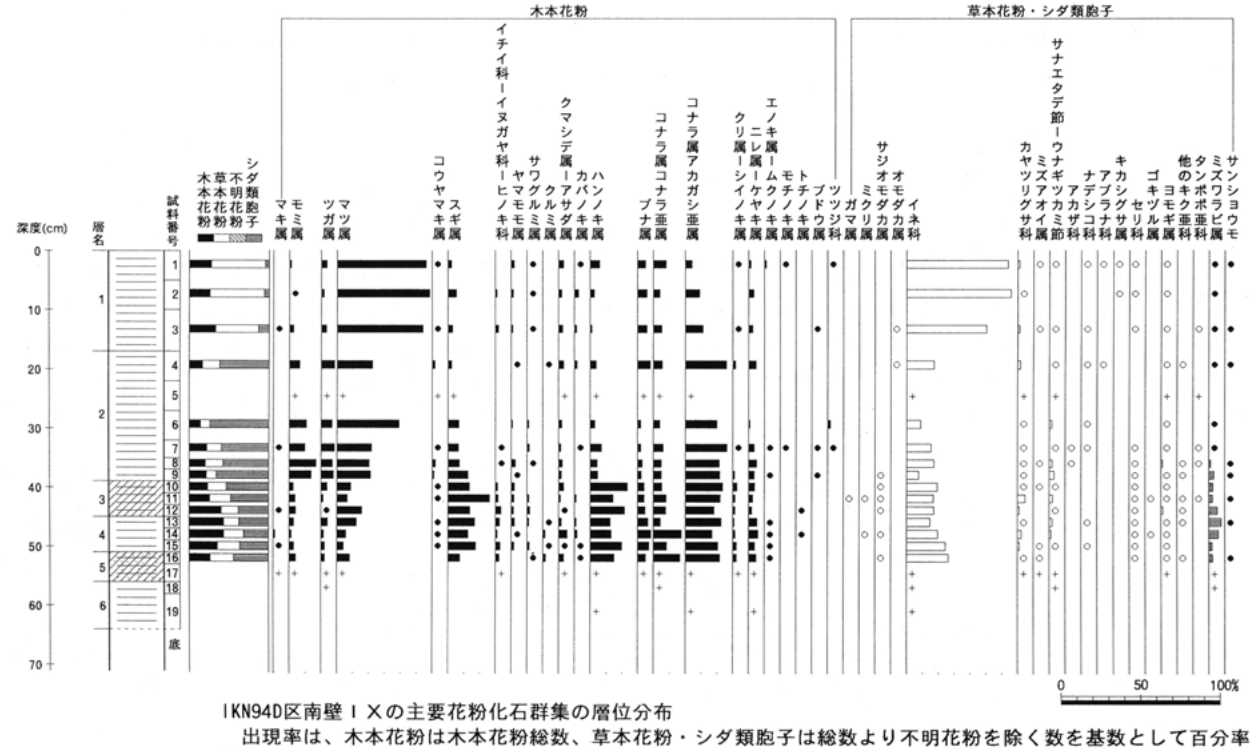


IKN95Ca区弥生中期-Aの主要珪藻化石群集の層位分布
　淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は１％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

図４・２０　珪藻分析４



IKN94Ca区SK61の主要花粉化石群集の層位分布
出現率は、木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。
なお、○●は１％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。



IKN94D区南壁ＩＸの主要花粉化石群集の層位分布
出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で産出した。なお、○●は１％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

図４・２１　花粉分析

イネ属短細胞植物珪酸体



ヨシ属短細胞植物珪酸体



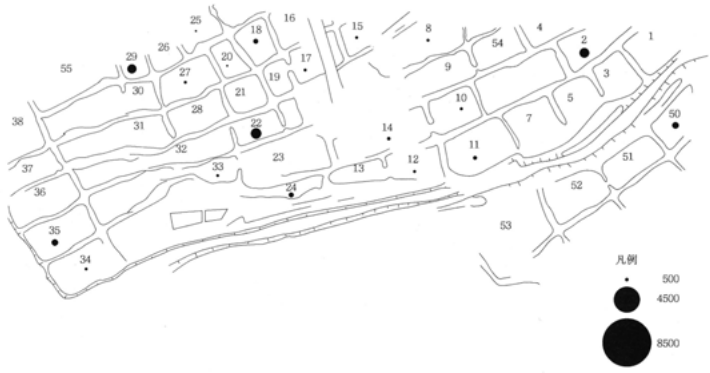
ススキ属短細胞植物珪酸体



凡例は乾燥重量1gあたりの個数を円の直径に換算したもの

図4・22　95A区 主な植物珪酸体水平分布図

イネ属短細胞植物珪酸体



ヨシ属短細胞植物珪酸体



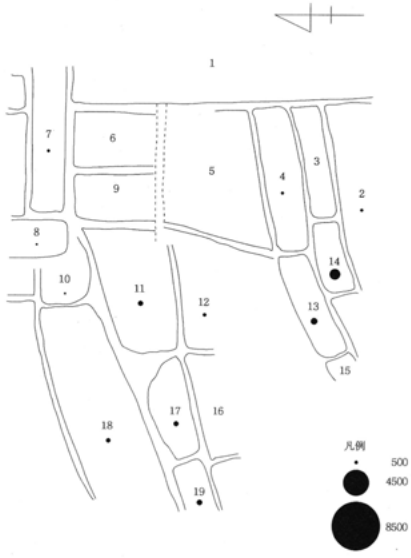
ススキ属短細胞植物珪酸体



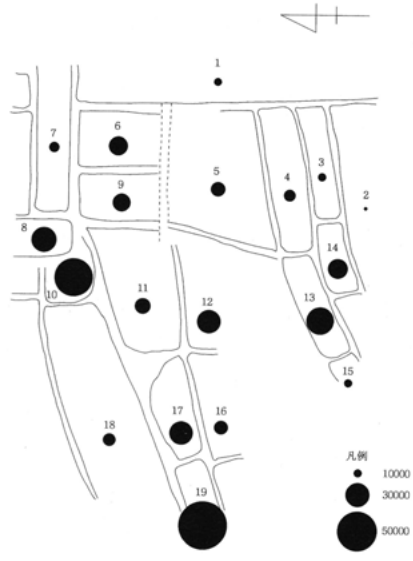
凡例は乾燥重量1gあたりの個数を円の直径に換算したもの

図4・23　95Bb区 主な植物珪酸体水平分布図

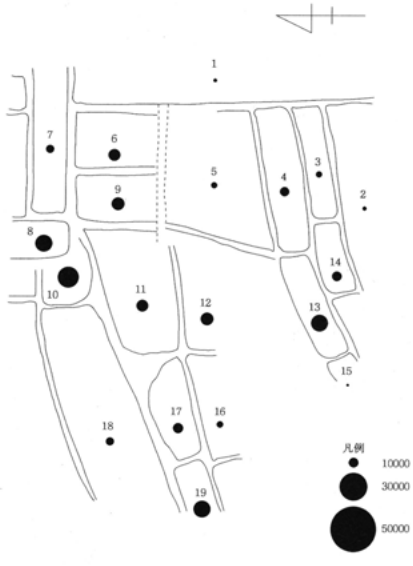
イネ属短細胞植物珪酸体



ヨシ属短細胞植物珪酸体



ススキ属短細胞植物珪酸体



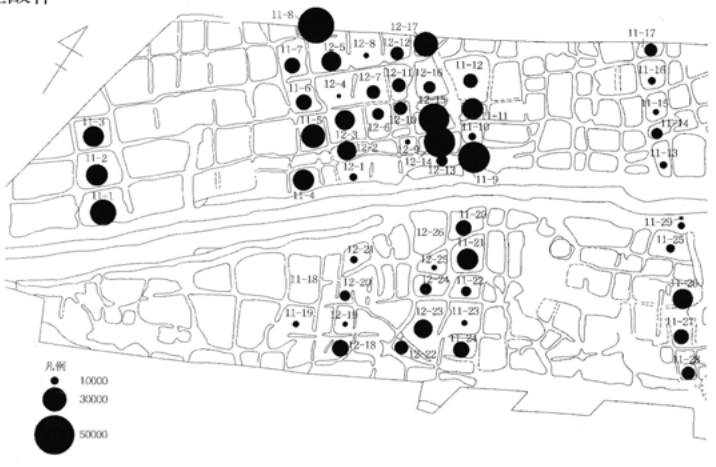
凡例は乾燥重量1gあたりの個数を円の直径に換算したもの

図4・24　95Bc区 主な植物珪酸体水平分布図

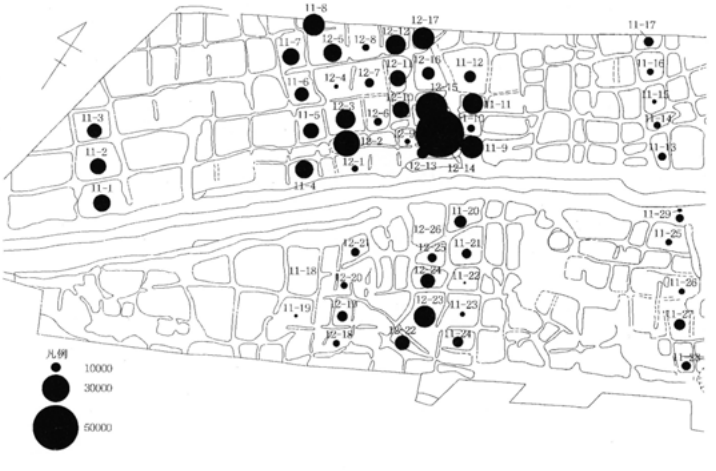
イネ属短細胞植物珪酸体



ヨシ属短細胞植物珪酸体



ススキ属短細胞植物珪酸体



凡例は乾燥重量1gあたりの個数を円の直径に換算したもの

図4・25　95C区 主な植物珪酸体水平分布図

イネ属短細胞植物珪酸体



ヨシ属短細胞植物珪酸体



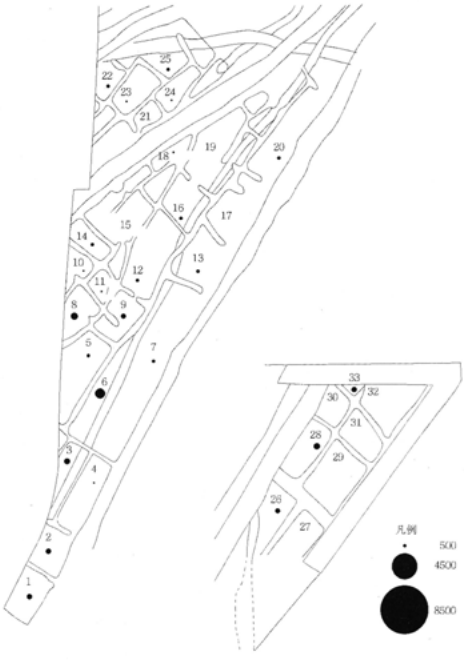
ススキ属短細胞植物珪酸体



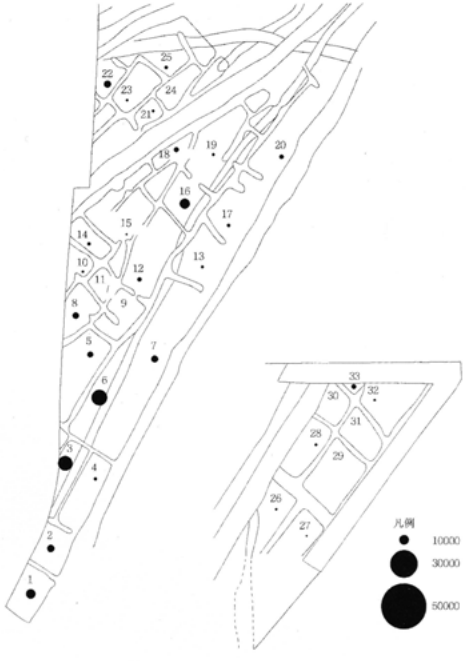
凡例は乾燥重量1gあたりの個数を円の直径に換算したもの

図４・２６　95Da区 主な植物珪酸体水平分布図

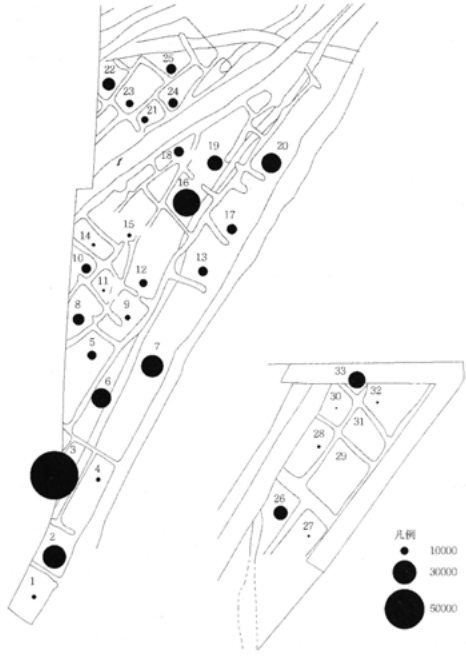
イネ属短細胞植物珪酸体



ススキ属短細胞植物珪酸体



ヨシ属短細胞植物珪酸体



凡例は乾燥重量1gあたりの個数を円の直径に換算したもの

図4・27　95Db区 主な植物珪酸体水平分布図

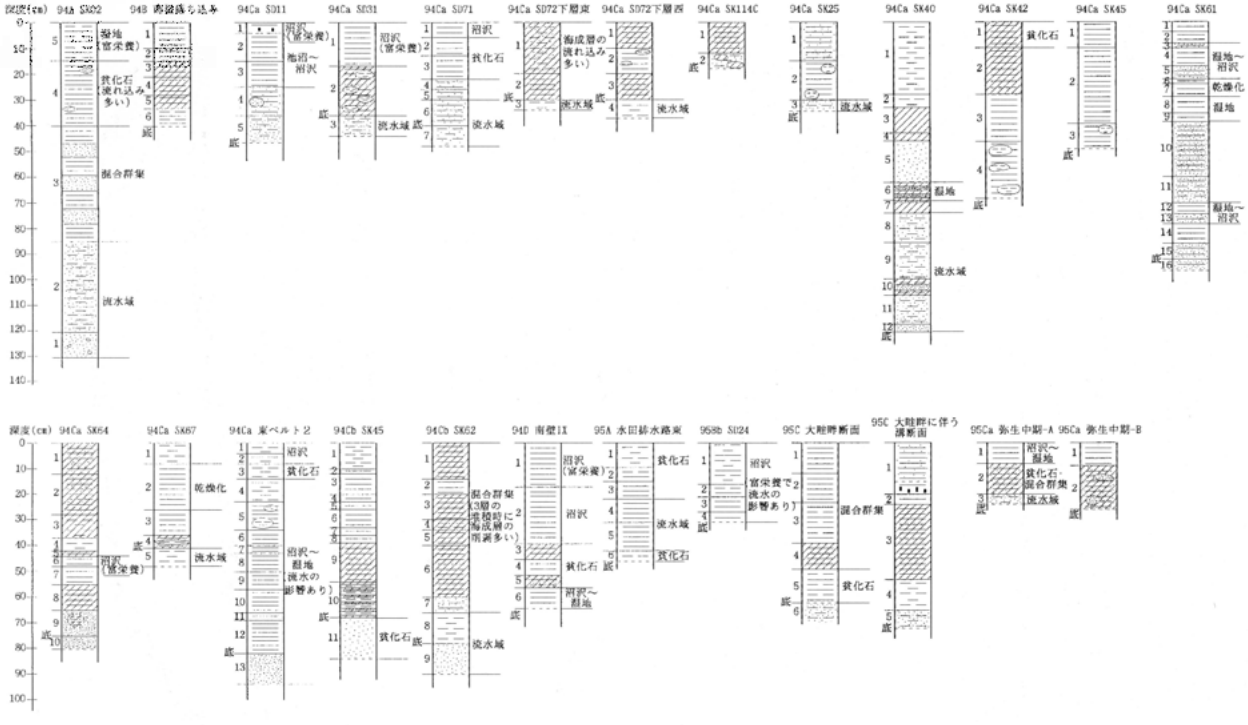


図４・２８　珪藻化石からみた各地点の堆積環境

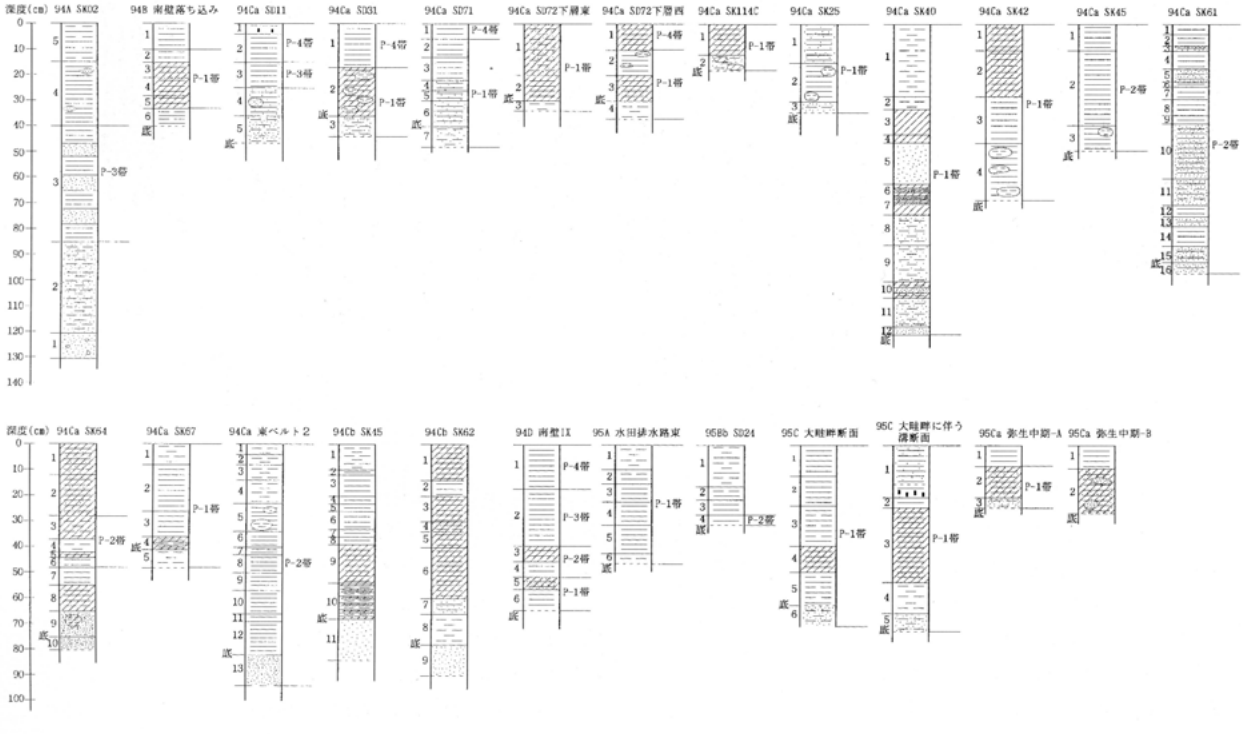
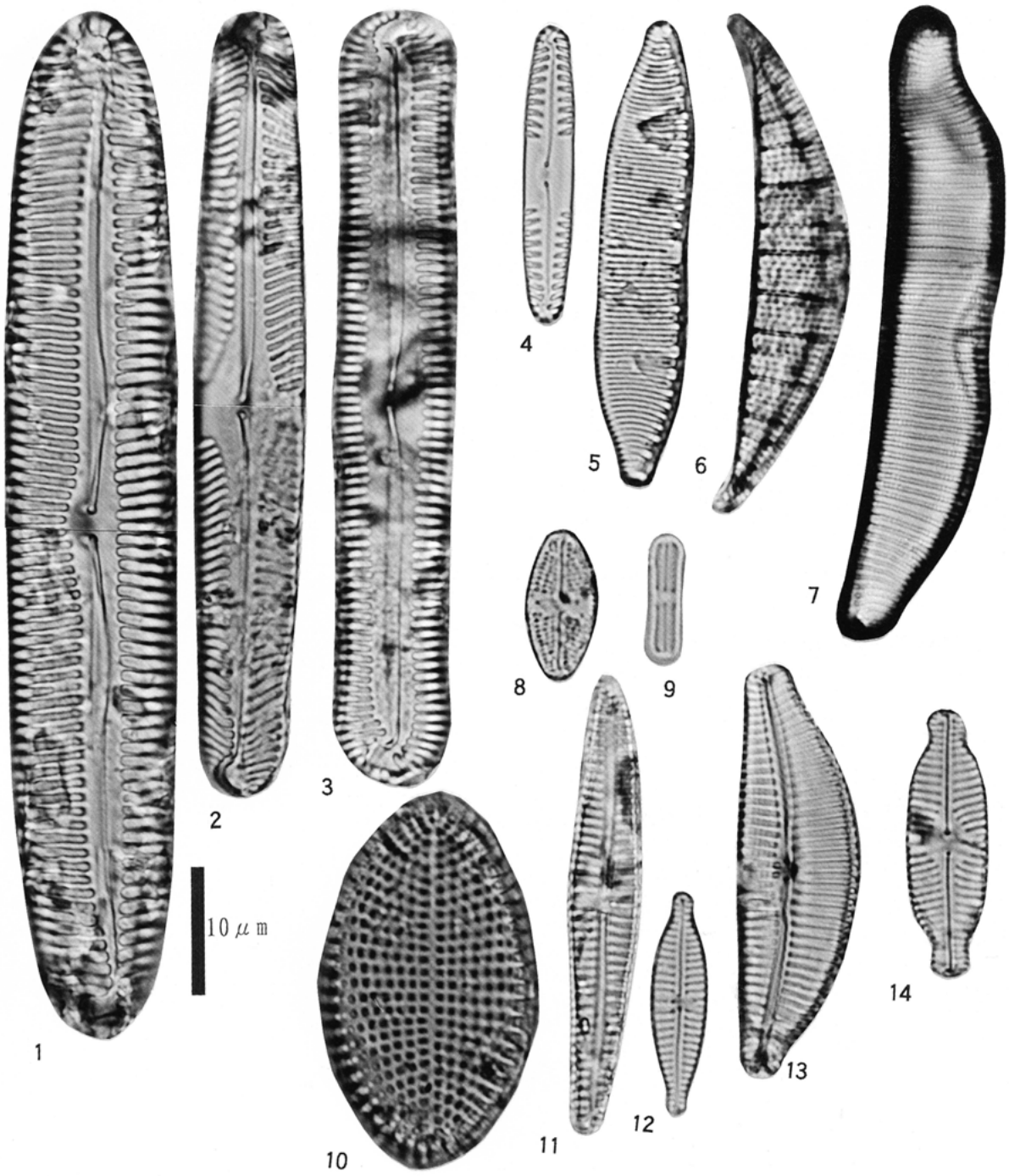
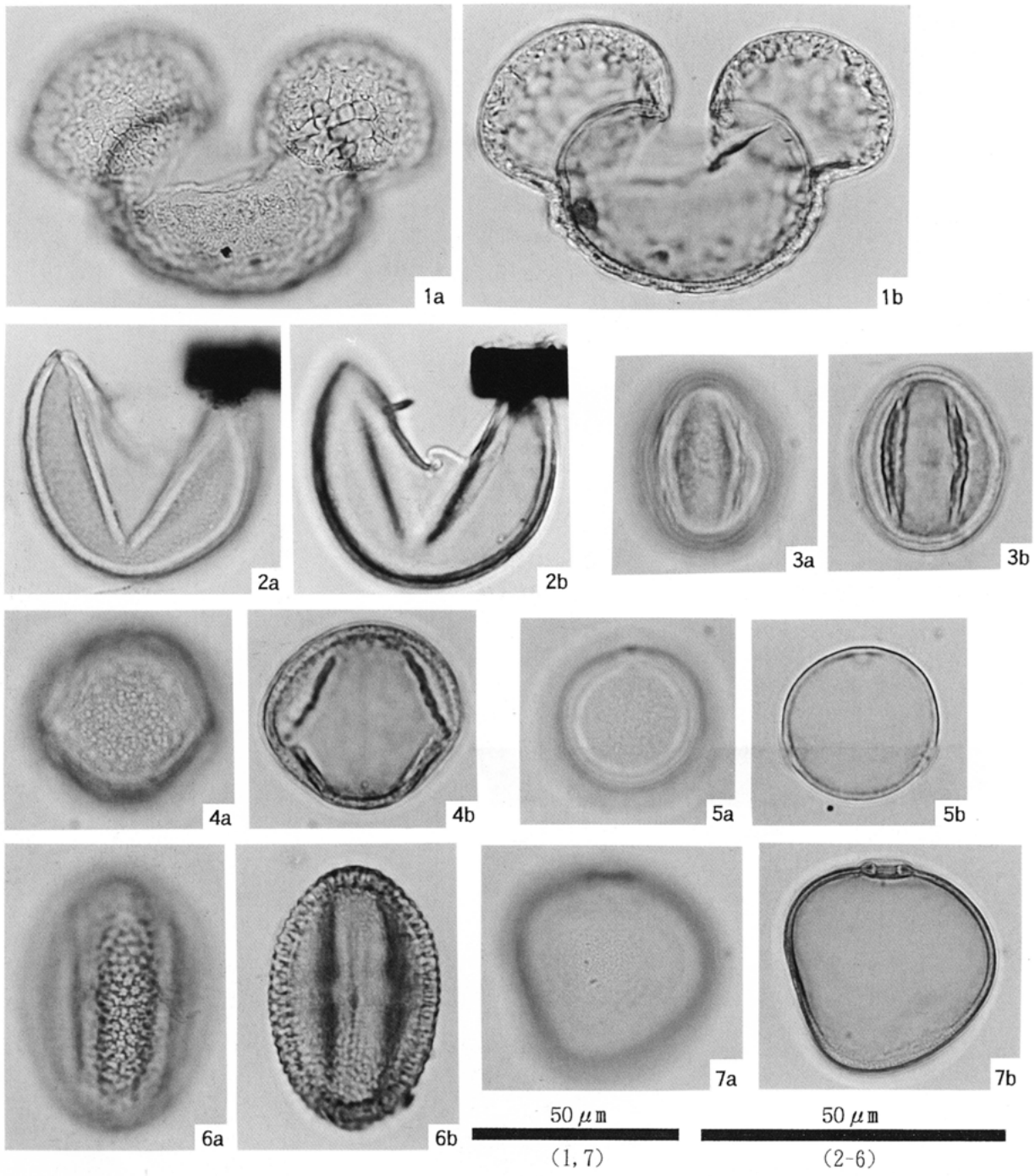


図４・２９　花粉化石からみた各地点の堆積環境



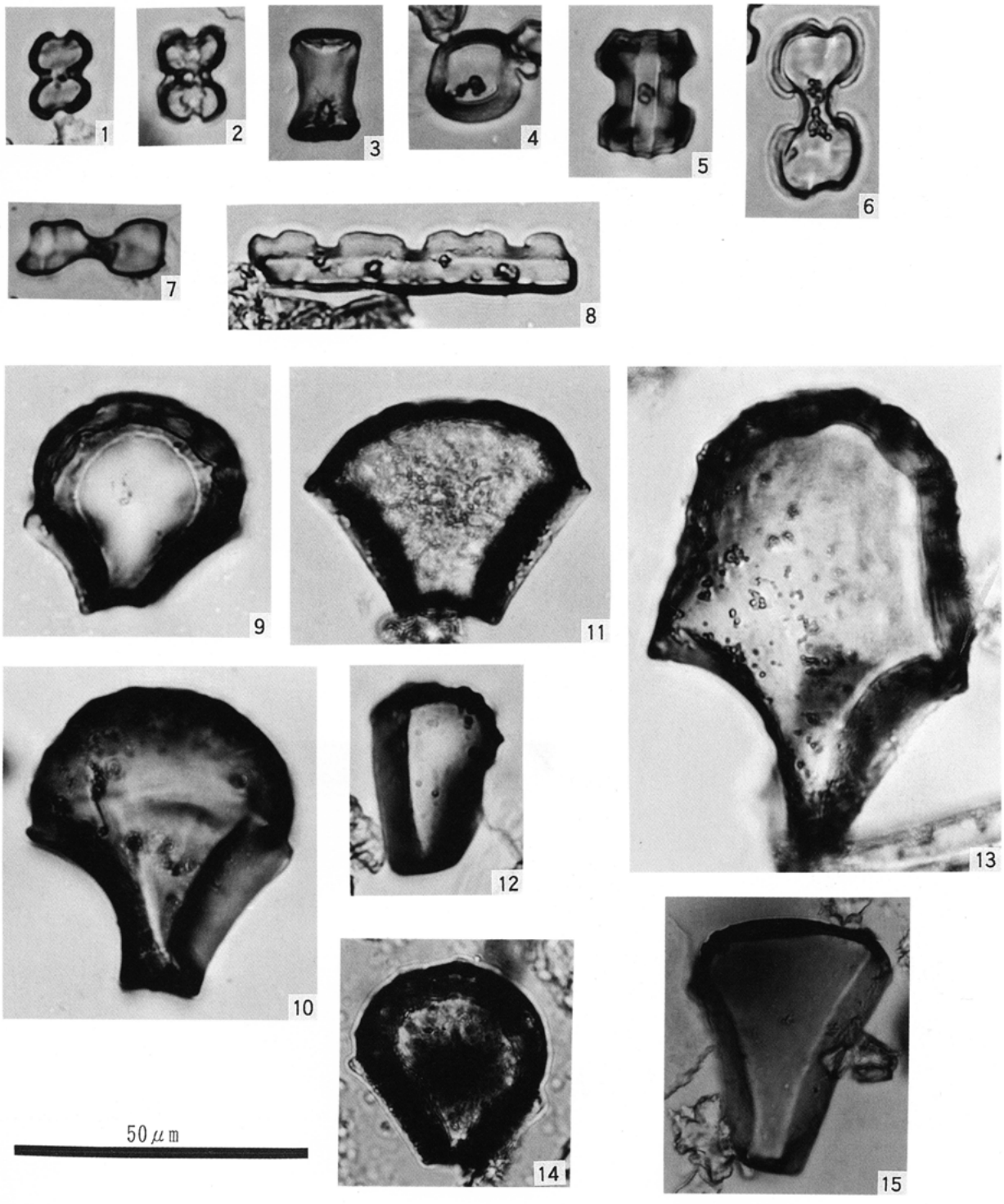
1. *Pinnularia viridiformis* Krammer
2. *Pinnularia gibba* Ehrenberg
3. *Pinnularia acrosphaeria* W.Smith
4. *Pinnularia subcapitata* Gregory
5. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow
6. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O.Muller
7. *Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow
8. *Navicula mutica* Kuetzing
9. *Navicula contenta* Grunow
10. *Cocconeis scutellum* Ehrenberg
11. *Gomphonema gracile* Ehrenberg
12. *Gomphonema parvulum* Kuetzing
13. *Cymbella turgidula* Grunow
14. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs

図4・30　珪藻化石



1. マツ属　2. スギ属　3. コナラ属アカガシ亜属　4. コナラ属コナラ亜属
5. クワ科　6. ソバ属　7. イネ科

図4・31　花粉化石



1. イネ属　短細胞珪酸体
2. イネ属　短細胞珪酸体
3. タケ亜科　短細胞珪酸体
4. ヨシ属　短細胞珪酸体
5. コブナグサ属　短細胞珪酸体
6. キビ族　短細胞珪酸体
7. ススキ属　短細胞珪酸体
8. イチゴツナギ亜科　短細胞珪酸体
9. イネ属　機動細胞珪酸体
10. イネ属　機動細胞珪酸体
11. タケ亜科　機動細胞珪酸体
12. ウシクサ族　機動細胞珪酸体
13. ヨシ属　機動細胞珪酸体
14. イネ属　機動細胞珪酸体
15. ウシクサ族　機動細胞珪酸体

図4・32　植物珪酸体

7．門間沼遺跡における花粉分析

はじめに

門間沼遺跡では古墳時代～中世における方形周溝墓や水田跡などが多く検出されている。そこで、今回は95Eb区東壁から採取した連続サンプルを用いて、古環境の変遷を推定するのを目的に花粉分析を行った。

分析方法

約25 gの試料を1昼夜10%KOH溶液処理を行う。その後60メッシュの篩に通し粗粒物質を除去する。水洗の後、10%KOH溶液を加え4分間湯煎を行う。傾斜方により細粒物質を除去する。$ZnCl_2$溶液による比重分離（1500dpi)の遠心分離を2回繰り返す。HF溶液処理(1昼夜)において鉱物片を除去する。水洗の後、アセトリシス処理(30秒)をおこない、再度水洗を行う。試料はグリセリンゼリーで封入した。

検鏡は400倍で、木本花粉が200個体以上に達するまで行った。ただし、試料3および5以外のものについてはプレパラートの全面を検鏡しても木本花粉が200個体に達しなかったので、木本花粉が200個未満であっても検鏡を打ち切った。

出現率の算出は、木本花粉については木本花粉の総数を基数とし、草本花粉については総木本花粉と総草本花粉の和を基数として計算した。

分析結果

分析結果を図4・33に示す。

分析を行った試料のうち試料番号1～7については、出現する花粉の量が少なくダイアグラムをかくに至らなかった。試料番号8～13の分析結果について以下に概要を示す。木本花粉では、*Lepidobalanus-Cyclobalanopsis*が優勢に出現する。試料番号8～11では*Alnus*がそれに次いで多く、12では*Pinus*や*Cryptomeria*が、13では*Corylus*や*Alnus*が出現している。草本花粉では全ての試料において、Gramineaeが優勢に出現しているが、特に試料番号8～1では30%以上と高率になっている。他の草本花粉では*Typha*やCyperaceaeなどが出現している。

考察

今回の試料では、木本花粉の総数が200個体を越えて出現した試料が6試料しかなく、古環境を復元することはできなかった。今回顕鏡を行った試料のうち試料番号11,12は弥生時代中期に属する地層とされている。この2試料の花粉組成を比べると、*Cryptomeria*や*Alnus*,Carduoideae,*Typha*などの出現率に違いが見られる。*Alnus*やTyphaなどは、水辺に多く生えている植物であることから、局地的な植生の違いを反映したと考えられる。

また試料番号8～11においては、下位の12,13に比べGramineaeの出現率が大きく変化していることから、門間沼遺跡における稲作の開始時期を反映しているとも考えられる。

参考文献
中村純(1980)日本産花粉の標徴I･II. 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第12集.

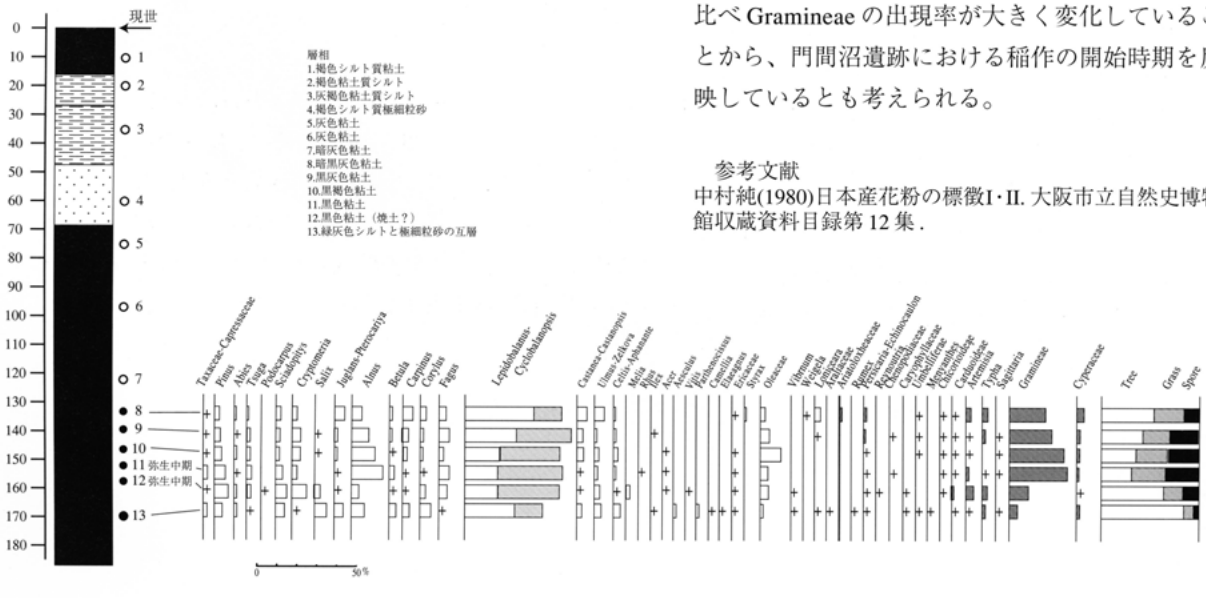


図4・33 門間沼遺跡　95Eb　東壁垂直サンプル　花粉ダイアグラム

8．愛知県門間沼遺跡から産出した昆虫化石群集と古環境

森　勇一*

（1）はじめに

昆虫の外骨格はキチン質で構成されていて、土中に埋もれてからも長い間保存される。昆虫の生息環境が多岐にわたり、かつ食性がきわめて多様であることから、遺跡中より発見された昆虫化石の種レベルの同定が進めば、そこから得られる情報はすこぶる多い。筆者は、これまで先史～歴史時代の地層中に含有される昆虫化石を抽出・分析することにより、植生や水域環境・農耕・人為による土地改変の様子・気候変動など、人々を取りまく古環境についての情報を多数蓄積してきた（森、1994a、1994b、1996a、1997、1999）。

本論では、愛知県葉栗郡木曽川町に所在する門間沼遺跡の弥生時代中期から中世にかけての遺物包含層より発見された昆虫化石群集と、それらから導かれた古環境について述べる。

（2）試料および分析方法

門間沼遺跡は、濃尾平野北西部の木曽川扇状地の扇端部から氾濫平野域への変換点付近に位置しており、弥生時代中期、古墳時代、および古代末から中世の主に3時期にわたる複合遺跡である。

分析試料は計8層準8試料よりなり、それらは遺跡の変遷を考えるうえで重要である弥生時代中期、古墳時代、および古代末から中世の3時期を含むものである。試料1は95Db区の緑灰色腐植質シルト層、試料2は95Eb区北壁の灰色シルト層から得られたものである。これらの試料の堆積年代は、出土遺物よりいずれも弥生時代中期初頭とされている。試料3は94Cb区SD18最下層、試料4は94Cb区SD01といわれる古墳の周溝内より得られたものである。両試料は、遺跡調査の結果および出土遺物から古墳時代中期～後期にかけての時期に堆積したものという。試料5は94D区のSX03といわれる遺構内より採取されたものであり、堆積年代は古代（平安時代）であると考えられている。試料6および試料7は、いずれも95A区SE02（井戸）内より採取されたものであり、試料6は井戸内堆積物下層、試料7は同じく上層より得られたものである。井戸の埋積された年代は挟在する考古遺物から鎌倉時代（12～13世紀）と推定されている。試料8は、94D区のSK03という遺構内堆積物より採取されたものである。考古学的な知見より、分析試料の堆積した時代は中世（鎌倉時代～室町時代）と考えられている。

昆虫分析試料は、愛知県埋蔵文化財センターのスタッフにより、遺跡を貫流する溝や河道内、古墳の周溝などより精力的に採取され、主にブロック割り法により抽出されたものである。その試料数は膨大なものになっており、本報告で述べるのはこの一部より得られた分析結果である。昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で1点ずつ比較のうえ実施した。なお、昆虫化石は、いずれも節片に分離した状態で検出されており、そのため、本論に記した産出点数は、昆虫の個体数を示したものではない。

（3）昆虫化石群集

昆虫分析試料より抽出された昆虫化石は、計1、168点であった（表4・35）。層準別では、弥生時代とされる試料1および試料2では115点と6点、古墳時代の試料3、4では、それぞれ271点と68点発見された。試料5（平安時代）では12点、鎌倉時代の遺物包含層である試料6、7ではそれぞれ

＊愛知県立明和高等学校

139点と527点、中世の試料8からは、計30点確認された。なお、産出昆虫の主なものについては、図版1および図版2に実体顕微鏡写真を掲げた。

昆虫化石群集は、陸生の食植性昆虫を主体に、主に乾燥した地表面上に多い地表性歩行虫で構成され、水生昆虫の出現率は全試料を通じ4.8%ときわめて低率であった。次に、それぞれの分析試料を便宜上、弥生時代中期（試料1～2）、古墳時代（試料3～4）、および古代末から中世（試料5～8）の3時期にまとめ、これらの試料中の化石群集の特徴について述べる。

試料1および2からは、計121点の昆虫化石が発見された。産出昆虫のうち、水生昆虫が22点（18.2%）、地表性歩行虫が34点（28.1%）であり、食糞ないし食屍性昆虫は1点も発見されなかった。陸生の食植性昆虫は36点（29.8%）検出された。試料3および4では、計339点の昆虫化石が発見され、内訳は水生昆虫がわずかに8点（2.4%）、地表性歩行虫が100点（29.5%）うち食糞ないし食屍性昆虫は12点（3.5%）であり、陸生の食植性昆虫は191点（56.3%）であった。また、試料5～8からは計708点の昆虫化石が見いだされた。このうち水生昆虫は27点（3.8%）、地表性歩行虫は277点（39.1%）うち食糞ないし食屍性昆虫は106点（15.0%）であり、陸生の食植生昆虫は321点（45.3%）であった。

種組成では、食植生昆虫のヒメコガネ *Anomala rufocuprea*が全試料を通じ多産した。とくに中世の試料で多産傾向が強く、試料6より38点、試料7より58点検出され、古墳時代の試料3および4からも33点と17点見いだされている。本種はダイズやカキ・ブドウをはじめ多くの畑作物を加害する食葉性昆虫として知られ、鎌倉時代（12～13世紀ころ）には、門間沼遺跡近傍の大毛沖遺跡・大毛池田遺跡・田所遺跡などで大発生したことが明らかになっている（森、1997）。本分類群は、濃尾平野周辺域はもとより、日本各地の中世（鎌倉および室町時代）から江戸時代にかけ、個体数を増加させたことが指摘されている（森、1994a、1997、1999）。食植性昆虫では、これにマメコガネ *Popillia japonica*（試料3より34点、試料4より4点など）やドウガネブイブイ *Anomala cuprea*（試料3より16点、試料7より4点など）、およびハムシ科 Chrysomelidae、ゾウムシ科 Curculionidae などが伴われた。なお、ハムシ科では、試料3よりルリハムシ *Linaeidea aenea*（1点）、クワハムシ *Fleutiauxia armata*（3点）、ウリハムシ *Aulacophora femoralis*（7点）など多くの種群が産出している。

地表性歩行虫では、中世の試料を中心に、人為度の高い裸地的環境下の人糞や獣糞に集まるコブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis*が多数検出され、これ以外におそらく同種かこの近縁種に同定されるエンマコガネ属 Onthophagus sp.が中世の試料より計32点確認された。その他の食糞性昆虫では、獣糞や人糞に多いマグソコガネ *Aphodius rectus*が20点、同種を含めマグソコガネ属 *Aphodius* spp. に同定される分類群が中世の試料より計28点発見された。

食糞性昆虫以外の地表性歩行虫では、属および種名が未同定のオサムシ科 Carabidaeが計131点産出した。とくに、試料7では本分類群が計70点も検出され、頭部（12点）をはじめ上翅（25点）・腹部腹板（21点）など、多数の部位が認められた。オサムシ科では、体節片のみによる種の同定は困難であり、これらから食性や生息環境などの詳細な情報を得ることはできない。このほか、攪乱地表面の指標種（石谷、1996）とされる食肉性のセアカヒラタゴミムシ *Dolichus halensis*が試料3より4点、試料4より3点、試料7より4点、試料8より1点発見された。畑作地に多い食肉性歩行虫のセアカオサムシ *Hemicarabus tuberculosus*が試料3より5点、乾燥地表面の存在を特徴づけるハンミョウ

Cicindela chinensis japonica が試料3より4点、試料7より3点見つかった。食肉性のオサムシ亜科 Caradinae が試料3で1点、試料7で1点確認され、同じく食肉性の地表性歩行虫として知られるアオゴミムシ属 *Claenius* sp. が試料1、試料3、試料6、試料8で、それぞれ1点ずつ、試料7で6点認められた。雑食性の地表性歩行虫では湿潤地表面上に多いツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp.が試料1で6点、試料3で2点、試料6で4点、試料7で8点検出され、ほぼ同様の環境下に生息するヒラタゴミムシ族 Platynini が試料3で1点、試料7で4点見いだされた。また、本来湿地や水辺などに多く、弥生時代以降水田地帯に進出した水田指標昆虫（森、1996a）であるヤマトトックリゴミムシ *Lachnocrepis japonica* が試料1で3点、試料3で2点、試料7で1点見いだされた。

水生昆虫は、全体を通じ産出点数が少なかった。キベリクロヒメゲンゴロウ *Ilybius apicalis* が試料5および7より各1点、オオミズスマシ *Dineutus orientalis* が試料1で1点、ミズスマシ *Gyrinus japonicus* が試料1と試料7で各1点発見された。これらはいずれも水たまりや水深の浅い止水域を特徴づける水生昆虫である。このほか、湿地や水たまりなどにも認められるが、これまで日本各地の水田層中より多数確認され、水田指標昆虫として知られるセマルガムシ *Coelostoma stultum*・ガムシ *Hydrophilus acuminatus*・コガムシ *Hydrochara affinis* などの食植性の水生昆虫が試料1から計11点、試料2から計3点、および試料7から計12点検出されている。

（4）昆虫相から推定される古環境

A．古環境復元の方法

遺跡を取りまく古環境復元に利用される古生物には、花粉および珪藻化石、材化石を含む大型植物遺体、および植物珪酸体などが知られる。このうち、花粉化石は古植生や古気候を復元するのに有効とされ、珪藻化石はそれらを含む地層を運搬した河川の水質や古水系を考察するうえで重要な資料を提供する。材化石・種実・植物珪酸体などは、主に農耕や森林開発など人間の生業を考える際に利用される。次に、これらの化石が地層中に取り込まれるメカニズムについてみると、花粉や珪藻化石は微化石なるがゆえに、遺跡の位置する場所から遠く離れたところから運ばれた異地性化石であったとしても、これを識別することは困難である。とくに、水中生活をする珪藻では、極端な場合、堆積物中に見いだされた珪藻化石はこれを挟在する地層の堆積地点を含め、それより上流のどこかにかつてこの珪藻の生活場所が存在したことを示しているに過ぎないと認識しておくべきだろう。

筆者は、日本各地の先史～歴史時代の昆虫化石の分析を通じ、地層中に含有される昆虫化石が大部分昆虫が生息していた場所からほとんど移動することなく検出された現地性化石であることを多くの実例により明らかにした（森、1994a、1999）。このため、昆虫化石は、遺跡周辺の狭い範囲の環境復元に大いに効力を発揮する。だが、昆虫化石は定量分析には必ずしも適しておらず、広域の生物相を復元するためには多くの試料を調査・分析しなければならない難点があるといえる。このように、より詳細な古環境復元には、それぞれの生物化石の持つ特性をよく理解し、相互に補完しながら研究を進めなければならない。

昆虫はあらゆる生物のなかで最も多くの種を有し、環境による棲み分けと種分化が顕著にみられる生物の一群である。なかでも鞘翅目はすべての目を通じて最多の種数を誇り、生息環境も多岐にわたっている。遺跡から発見される昆虫化石に鞘翅目の出現頻度が高いのは、こうした鞘翅目の種

数や個体数の多さ、その生活史上の特性に加え、鞘翅目特有の硬化した外骨格が土中に埋もれたのち残りやすく、かつまた発見されやすい理由の一つになっている。その結果、本論で扱った昆虫化石もその大部分が鞘翅目で占められた。

鞘翅目を生息環境によって分類すると、森林や草原内の樹葉・草本植生・朽ち木などの植生に依存するもの（好植性昆虫）、畑や砂地・腐植土中・動物の糞やその屍体などの地表面上に認められるもの（地表性歩行虫）、池沼や河川・水溜り・水田・湿地などの水中ないし水面上に生活するもの（水生昆虫・湿地性昆虫）などがあり、その生息地はきわめて変化に富んでいる。また、食性についても食植性から食肉性・雑食性・食糞性・腐食性・食菌性など多様な食物に依存して生活している。本論では、昆虫化石のこれらの特性をふまえ、各時代ごとの古環境について以下に略記する。

B．古環境変遷

弥生時代中期

この時代の地層からは、地表性歩行虫ではヤマトトックリゴミムシ・ツヤヒラタゴミムシ属・オオトックリゴミムシ *Oodes vicarius*・ミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp. を産出し、水生昆虫ではセマルガムシ・コガムシ・ガムシ・ゲンゴロウ科 Dytiscidae などが認められた。いずれも水田周辺や水田内に生息することが多い「水田指標昆虫」として知られるものである（森、1996a）。陸生の食植性昆虫は、少数のサクラコガネ属やアカアシクワガタ *Nipponodorcus rubrofemoratus*・ハムシ科・ゾウムシ科などを産出した。これらは水辺に生育するヤナギやハンノキなどの河畔林に由来するものであろう。

産出点数は必ずしも多くないが、昆虫相は明らかに時代性を反映しており、日本各地の同時代の地層中から産出した昆虫化石群集とよく一致している。この時期、遺跡周辺に水稲耕作地が存在したか、このような環境に類似した景観たとえば人為により改変された草地と水深の浅い止水域からなる生態系が門間沼遺跡一帯に展開していた可能性が考えられる。

古墳時代

古墳時代では、個々の分類群の出現率は高くないが、地表性歩行虫・食植性昆虫ともに多様な種が認められた。

地表性歩行虫では、湿地や農業用水路などの水辺に多いツヤヒラタゴミムシ属・ヒラタゴミムシ族・ナガゴミムシ属・ヤマトトックリゴミムシ・ヨツボシゴミムシ *Panagaeus japonicus*・アオバアリガタハネカクシ *Paederus fuscipes* などを産出し、一方、主に畑作地や乾燥地表面上に生息するマルガタゴミムシ *Amara chalcites*・セアカヒタラタゴミムシ・セアカオサムシ・ミカワオサムシ *Carabus arrowianus*・ハンミョウ・スジアオゴミムシ *Haplochlaenius costiger* などが検出されている。

食植性昆虫では、各種広葉樹を加害し、主に畑作地に多いヒメコガネ・マメコガネ・ドウガネブイブイのほか、マツやスギなどの針葉樹を食べるスジコガネ *Mimela testaceipes* やクロコガネ *Holotrichia kiotoensis*、種々の畑作物を加害することが多いルリハムシ・クワハムシ・ウリハムシ・ゾウムシ科などが認められた。人為汚染を示す食糞ないし食屍性昆虫の出現率はきわめて少なく、また水生昆虫もほとんど産出しなかった。

これらの昆虫化石群集は、古墳時代の門間沼遺跡周辺の古環境を推定するうえで興味深い。この時期、国内では水田開発が大規模に進められ、灌漑水を台地や平野のすみずみに供給するための効率的な水利システムが組織的に整備されたことが知られる。昆虫および珪藻化石群集はこのことを反映し、群馬県萩原団地遺跡、静岡県池ヶ谷遺跡・同上土遺跡、岐阜県米野遺跡、三重県六大A遺跡、

島根県姫原西遺跡などより、イネネクイハムシ *Donacia provosti*やイネノクロカメムシ *Scotinophara lurida*などの稲作害虫とともに多くの水田指標昆虫が検出され、また同時代の地層中から多くの水田指標珪藻が検出されている。弥生～古墳時代にかけ、わが国では水稲耕作地の拡大とともに、新しく出現した水田という人為度の高い水空間に適応・進出した年一化性の水田指標生物の増加により、生物相が一変したのである（森、1999）。

古墳時代の門間沼遺跡の昆虫化石群集は、乾燥した砂地盤よりなる氾濫平野域という立地環境の影響をたぶんに受けているものと思われるが、日本各地の同時代の昆虫化石群集と異なり、水稲耕作地よりむしろ畑作環境にシフトした群集組成を示しているといえる。このことは、昆虫が移動に適した３対の脚と飛翔用の２対のはねを有し、通常年一化ないし年二化のきわめて短いライフサイクルで世代交代を重ねていくという昆虫特有のフィットネスの高さに起因する可能性が考えられる。昆虫は体表を頑丈なキチン質で覆い、新しいニッチェに積極的に進出することができる、きわめてフロンティア精神に富む生物であるとされるが、門間沼遺跡から得られた古墳時代の昆虫群集は、時代を先取りし新しい生息環境に進出しつつあったヒメコガネ・マメコガネなどの「畑作指標昆虫」と、弥生～古墳時代に大増殖した水田指標昆虫との交代劇を示しているように思われる。

この時期、化石群集に食糞ないし食屍性昆虫を伴わないことから、昆虫化石を産出した区画溝や古墳の周溝付近には人の気配はなく、乾燥した地表空間が展開していたと考えられる。辺りに森林植生は繁茂しておらず、水田は存在したとしてもかなり遠方であったか、水稲耕作適地の状態を逸脱し乾陸化した地形面になっていたものと思われる。生物指標や農業水利のうえでは、そこはすでに水稲可耕地というより、むしろ畑作地に近い空間に移行していたと推定される。

古代～中世

古代の分析試料（試料５）では昆虫の産出点数が少なく、古環境の復元は困難である。鎌倉時代では、このころの井戸（SE02）の埋土とされる試料から、ヒメコガネ・アオドウガネ *Anomala albopilosa*・ドウガネブイブイ・サクラコガネ属をはじめ人里環境を特徴づける数多くの食植性昆虫と、複数種の食糞性昆虫、多数の食肉ないし雑食性の地表性歩行虫が見いだされた。

ヒメコガネなどの食葉性昆虫は日本各地の中世以降の地層中で顕著に増加することが知られている（森、1996a、1997）。また、食糞性昆虫や雑食性ないし食肉性のオサムシ科は、これまで弥生時代では人口集中度の高い大集落の環濠や溝堆積物中（森、1994b、1996b）、奈良・平安時代ではやはり人口密度が高かったと推定される官衙的な遺跡の井戸内堆積物（森、1994c、1996c）より多産している。このため、門間沼遺跡から発見された昆虫群集は、人間の居住に伴う周辺地域の人為的撹乱の影響を強く反映している可能性が考えられる。なお、分析試料中より産出したヒメコガネやサクラコガネ属・アオドウガネなどの食葉性昆虫からは、遺跡周辺に人間が植栽した畑作物やブドウ・カキ・クリなどの果樹等が生育していたことが推定される。

そして、コブマルエンマコガネ・エンマコガネ属・マグソコガネなどの食糞性昆虫やアオゴミムシ属・セアカヒラタゴミムシ・ナガゴミムシ属・エンマムシ科など、今日の人里周辺に普通に認められる食糞性ないし雑食性の地表性歩行虫が多数発見されたことにより、12世紀から13世紀にかけての頃、門間沼遺跡周辺では近現代の農村地帯に見られるような人家と畑作地が混在する人里生態系が展開していたと考えられる。この結果は、本遺跡近傍の大毛沖・大毛池田両遺跡などから得られた分析結果と共通するものであり、また日本各地の中世における昆虫分析結果とも符合しており、

この時期、人為による山林開発と人間の居住空間付近に畑作物が盛んに植栽された影響を受け、食葉性昆虫が大増殖したことをよく示している。

（5）まとめ

愛知県門間沼遺跡の弥生時代中期～中世にかけての主要3層準について昆虫化石を同定･分析し、その群集組成から当時の古環境を復元した。

弥生時代中期の昆虫群集は時代性を反映し、水田内や湿潤地表面上に生息する昆虫化石が多数認められた。この時期、遺跡の周りには水稲耕作地が存在したか、これに類する景観が門間沼遺跡一帯に展開していたと考えられる。

古墳時代では、地表性歩行虫に湿地性の種群とともに、乾燥した砂地盤や畑作地に生息する昆虫の両者が認められた。陸生の食植性昆虫にも、畑作物を加害することが多いコガネムシ科を産出し、また多様なハムシ類が認められた。生態系は明らかに水稲可耕地から乾陸化した砂地盤に移行しており、昆虫化石群集もこれを反映して逡巡し従来の生息環境に生息し続けるものと、新しい環境に進出しつつあるものの両者が認められた。

中世では、ヒメコガネ・ドウガネブイブイ・アオドウガネなどの畑作指標昆虫の大増殖が認められた。これに、コブマルエンマコガネやマグソコガネ・エンマムシ科などの食糞・食屍性昆虫が随伴し、門間沼遺跡一帯に人為度の高い畑作空間が展開していたことが推定される。

文　献

石谷正宇（1996）環境指標としてのゴミムシ類(甲虫目：オサムシ科、ホソクビゴミムシ科）に関する生態学的研究．比和科学博物館研究報告、34、1-110.

森　勇一（1994a）昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元．第四紀研究、33(5)、331-349.

森　勇一（1994b）都市型昆虫の起源－愛知県朝日遺跡における昆虫群集について．－特集・考古遺跡の昆虫遺体、昆虫と自然、29(8)、ニューサイエンス社、4-12.

森　勇一（1994c）石川県金沢市戸水Ｃ遺跡の井戸中から産した昆虫群集について．石川県立埋蔵文化財センター年報、14、石川県立埋蔵文化財センター、106-111.

森　勇一（1996a）稲作農耕と昆虫．季刊考古学第56号、特集・稲作の伝播と長江文明、雄山閣、59-63.

森　勇一（1996b）名古屋市西志賀遺跡より得られた昆虫群集について．西志賀遺跡－発掘調査の概要－、名古屋市見晴台考古資料館、22-27.

森　勇一（1996c）静岡県川合遺跡（八反田地区）より得られた昆虫群集について．静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書（第63集）川合遺跡（八反田地区Ⅱ）、静岡県埋蔵文化財調査研究所、327-329.

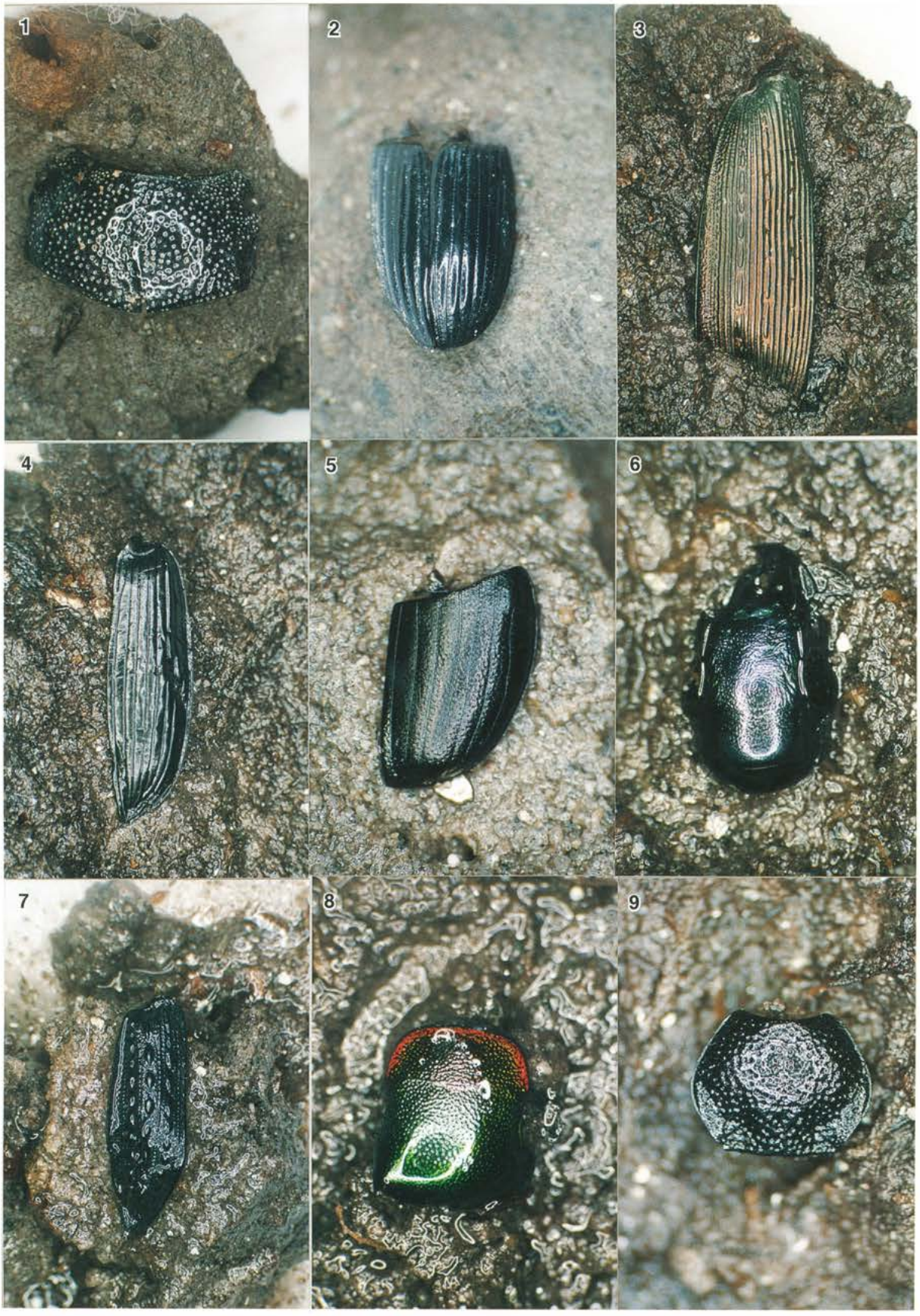
森　勇一（1997）虫が語る日本史－昆虫考古学の現場から．インセクタリウム、34(1)･34(2)、18-23、10-17.

森　勇一（1999）昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境変遷史．国立歴史民俗博物館研究報告第81集「歴博国際シンポジウム論文特集号」、311-342.

表４・３５　門間沼遺跡から産出した昆虫化石

生態		和名	学名	試料1	試料2	試料3	試料4	試料5	試料6	試料7	試料8	計
水生	肉食性	ｹﾝｺﾞﾛｳ科	Dytiscidae	W5	W1	W1.P1		L1		T1.W2		12
		ﾊｲｲﾛｹﾝｺﾞﾛｳ	*Eretes sticticus* (Linnaeus)							W2		2
		ｷﾍﾞﾘｸﾛﾋﾒｹﾝｺﾞﾛｳ	*Iybius apicalis* Sharp					W1		W1		2
		ﾋﾒｹﾝｺﾞﾛｳ亜科	*Colymbetinae*							P1.T1		2
		ﾋﾒｹﾝｺﾞﾛｳ	*Rhantus pulverosus* (Stephens)							W2		2
		ﾏﾒｹﾝｺﾞﾛｳ属	*Agabus* sp.			W1						1
		ﾐｽﾞｽﾏｼ	*Gyrinus japonicus* Sharp	W1						P1		2
		ｵｵﾐｽﾞｽﾏｼ	*Dineutus orientalis* Modeer	W1								1
		ｺｶﾞｼﾗﾐｽﾞﾑｼ	*Peltodytes intermedius* (Sharp)							W1		1
	食植性	ｶﾞﾑｼ科	Hydrophilidae	P2.W1			W1			H2.P1.A1		8
		ｶﾞﾑｼ	*Hydrophilus acuminatus* Motschulsky		W1	W1	P2		H1	H1		6
		ｺｶﾞﾑｼ	*Hydrochara affinis* (Sharp)	W2		L1						3
		ｾﾏﾙｶﾞﾑｼ	*Coelostoma stultum* (Walker)	W4.P2	W2				W1	P2.W5		16
		ﾏｸﾞｿｶﾞﾑｼ	*Pachystermum haemorrthoum* Motschulsky							W1		1
地表性	食糞・食屍性	ｴﾝﾏｺｶﾞﾈ属	*Onthophagus* sp.			W6.P4			P1.T1.A2.L3	P5.T6.A8.W4.L2		42
		ｺﾌﾞﾏﾙｴﾝﾏｺｶﾞﾈ	*Onthophagus atrippennis* Waterhouse						P2.A1.W1	H3.P19.T3.W9		41
		ｵｵﾏｸﾞｿｺｶﾞﾈ	*Aphodius haroldianus* Balthasar						P1.W1	H1.W2		5
		ｺﾏｸﾞｿｺｶﾞﾈ	*Aphodius pusillus* (Herbest)							W3		3
		ﾏｸﾞｿｺｶﾞﾈ	*Aphodius rectus* (Motschulsky)						P1.W1	H2.P5.W11		20
		ｴﾝﾏﾑｼ科	Histeridae			P1				H1.P4		6
		ﾙﾘｴﾝﾏﾑｼ	*Saprinus splendens* (Paykull)			P1				W1		2
		ｼﾃﾞﾑｼ科	Silphidae					P1		W1		2
	雑性	ｵｻﾑｼ科	Carabidae	P2.T1.A3.W3.L3	W1	W10.P6.A3.M2	W5.P4	A1	P1.T1.A3.W6.L1	H12.P4.T5.A21.W25.L3	H1.W4	131
		ﾂﾔﾋﾗﾀｺﾞﾐﾑｼ属	*Synuchus* sp.	W3.P3		W2			W4	W8		20
		ﾐｽﾞｷﾜｺﾞﾐﾑｼ属	*Bembidion* sp.	W2						P1.W1		4
	食	ﾋﾗﾀｺﾞﾐﾑｼ族	Platynini			W1				P4		5
		ﾅｶﾞｺﾞﾐﾑｼ属	*Pterostichus* sp.			W2			P1	P6		9
		ｵｵﾅｶﾞｺﾞﾐﾑｼ	*Pterostichus fortis* Morawitz			P1						1
		ﾖﾂﾎﾞｼｺﾞﾐﾑｼ	*Panagaeus japonicus* Chaudoir			P1						1
	肉	ﾏﾙｶﾞﾀｺﾞﾐﾑｼ	*Amara chalcites* Dejean			P2		W1		W1		4
		ｺﾞﾓｸﾑｼ亜科	Harpalinae			W1			P1			2
		ｱﾄｷﾘｺﾞﾐﾑｼ属	*Cymindis* sp.	W1								1
		ｱｵｺﾞﾐﾑｼ属	*Chlaenius* sp.	W1		W1			W1	H1.P1.W4	P1	10
		ｽｼﾞｱｵｺﾞﾐﾑｼ	*Haplochlaenius costiger* (Chaudoir)			W3				W2		5
		ﾄｯｸﾘｺﾞﾐﾑｼ属	*Lachnocrepis* sp.	W1						P1.W1		3
		ﾔﾏﾄﾄｯｸﾘｺﾞﾐﾑｼ	*Lachnocrepis japonica* Bates	W3		W2				W1		6
		ｵｵﾄｯｸﾘｺﾞﾐﾑｼ	*Oodes vicarius* Bates	P1								1
		ﾅｶﾞﾋｮｳﾀﾝｺﾞﾐﾑｼ	*Scarites terricola pacificus* Bates							W1		1
		ｾｱｶﾋﾗﾀｺﾞﾐﾑｼ	*Dolichus halensis* (Schaller)			W4	W3			W4	W1	12
		ｵｵﾋﾗﾀｺﾞﾐﾑｼ	*Platynus magnus* (Bates)								P1	1
		ｵｵｺﾞﾐﾑｼ	*Lesticus magnus* (Motschulsky)			W2				W1		3
	食	ｵｻﾑｼ亜科	Carabinae			W1				W1		2
		ｸﾛﾅｶﾞｵｻﾑｼ	*Leptocarabus procerulus* (Chaudoir)				W1			P1	W1	3
		ﾐｶﾜｵｻﾑｼ	*Carabus arrowianus* (Breuning)			W2					W2	4
		ｾｱｶｵｻﾑｼ	*Hemicarabus tuberculosus* (D. et B.)			W2.P3						5
	性	ﾏｲﾏｲｶﾌﾞﾘ属	*Damaster* sp.							H1		1
		ﾏｲﾏｲｶﾌﾞﾘ	*Damaster blaptoides* Kollar								P1	1
		ｷﾏﾜﾘ属	*Plesiophthalmus* sp.	W1					W1	W2		4
		ｺﾞﾐﾑｼﾀﾞﾏｼ科	Tenebrionidae			W1				P3.W2		6
		ﾊﾈｶｸｼ科	Staphylinidae	P4.W2		W4.P3.A3	W3.P4.A2	P1	P2.A2	P10.T1.W2	A1	44
		ｱｵﾊﾞｱﾘｶﾞﾀﾊﾈｶｸｼ	*Paederus fuscipes* (Curtis)			H1						1
		ﾊﾝﾐｮｳ	*Cicindela chinensis japonica* Thunberg			W4				H1.T1.A1		7
陸生	食植性	ｺｶﾞﾈﾑｼ科	Scarabaeidae	P1.W8.L4		W2.P1.L3	W2.P2	W1	A1.W1	P1.A1.W6.L3		35
		ｻｸﾗｺｶﾞﾈ属	*Anomala* sp.	P2.A1.W1.L1	W1	A2.L2	W4		P1.A5.W1.L5	P3.T3.A10.W5.L8		55
		ｻｸﾗｺｶﾞﾈ	*Anomala daimiana* Harold			W3				P2.W1		6
		ﾄﾞｳｶﾞﾈﾌﾞｲﾌﾞｲ	*Anomala cuprea* Hope	P1		W9.P4.H3	W1		A4	P1.W2.L1		26
		ｱｵﾄﾞｳｶﾞﾈ	*Anomala albopilosa* Hope						P3	H1.P3.A5.W1		26
		ﾋﾒｺｶﾞﾈ	*Anomala rufocuprea* Motschulsky	W2		W22.P10.L3.H3	W13.P4	W1	H4.P6.A4.W20.L4	H7.S1.P6.A2.W38.L4	W1	155
	食	ﾏﾒｺｶﾞﾈ	*Popillia japonica* Newmann			W16.P10.A8	W4		L3	T1.L1		43
		ｽｼﾞｺｶﾞﾈ	*Mimela testaceipes* Motschulsky			W1						1
		ｺｶﾞﾈﾑｼ	*Mimela splendens* Gyllenhal	W2		W8				L1	H1.P3.W10	25
		ｸﾛｺｶﾞﾈ	*Holotrichia kiotoensis* Brenske						H1.P3.A1.W1.L3	P3		12
		ﾋﾒｶﾝｼｮｺｶﾞﾈ	*Apogonia amida* Lewis				W1			W4		4
		ﾊﾅﾑｸﾘ亜科	Cetoniinae	P1.W1		P2						4
		ｶﾐｷﾘﾑｼ科	Cerambycidae				W2		L3	A1.W3.L3		10
		ｸﾛｶﾐｷﾘ	*Spondylis buprestoides* Linne			W1				P1		2
		ﾉｺｷﾞﾘｶﾐｷﾘ	*Prionus insularis* Motschulsky						W2.L3	W11.L1		17
		ｸﾜｶﾞﾀﾑｼ科	Lucanidae	S1				W2				3
		ｱｶｱｼｸﾜｶﾞﾀ	*Nipponodorcus rubrofemoratus* (S. Van Vollen.)	W3								3
		ｺﾒﾂｷﾑｼ科	Elateridae	P2		W3.P4			P2.W1	P3.W3	P1.W1	18
		ｱｶｱｼｵｵｸｼｺﾒﾂｷ	*Melanotus cete* Candeze							W1		1
	性	ｻﾋﾞｷｺﾘ	*Agryphus binodulus* (Motschulsky)			P1	P1.O1			P2.T1		6
		ﾊﾑｼ科	Chrysomelidae	P1.W8		W1	W3.P4		P1.W2.L1	P2.A1.W39.L2		61
		ﾙﾘﾊﾑｼ	*Linaeidea aenea* (Linne)			W1	W1					2
		ﾄﾞｳｶﾞﾈｻﾙﾊﾑｼ	*Scelodonta lewisii* Baly							W1		1
		ｸﾜﾊﾑｼ	*Fleutiauxia armata* (Baly)			W3						3
		ｳﾘﾊﾑｼ	*Aulacophora femoralis* (Motschulsky)			W7						7
		ﾔﾅｷﾞﾙﾘﾊﾑｼ	*Plagiodera versicolora* (Laicharting)							W8		8
		ｿﾞｳﾑｼ科	Curculionidae	W2		W11.P4				W1		18
		ﾂﾂｿﾞｳﾑｼ	*Carcilia strigicollis* Roelofs									10
	その他	ﾃﾝﾄｳﾑｼ科	Coccinellidae			W2		W1	W1			4
		不明甲虫	Coleptera	H1.S1.P1.W14.O4		O18		O1	A1.W1.L4.O4	H1.P2.A3.W29.L2.O17		104
		カメムシ目	Hemiptera	A2		P1	P1.O1		A1	A1		7
		アリ科	Formicidae			O1				H5.P3		9
		双翅目	Diptera							C6		6
Total				115	6	271	68	12	139	527	30	1168

（検出部位凡例）
H(Head):頭部　An(Antenna):触角　M(Mandible):大腮　S(Scutellum):小楯板　P(Pronotum):前胸背板　C(Chrysalis):囲蛹
E(Elytron):鞘翅　W(Wing):上翅　T(thorax):胸部　A(Abdome):腹部　L(Leg):　腿脛節　O(Others):その他



図版　昆虫化石

1. クロコガネ *Holotrichia kiotoensis* Brenske
　全胸背板　最大幅 7.8 mm　（試料 7;標本 9）
2. マグソコガネ *Aphodius rectus* (Motschulsky)
　左右上翅　長さ 3.2 mm　（試料 7;標本 21）
3. ミカワオサムシ *Carabus arrowianus* (Breuning)
　左上翅上半部　長さ 14.5 mm　（試料 8；標本 10）
4. セアカヒラタゴミムシ *Dolichus helensis* (Schaller)
　左上翅　長さ 11.0 mm　（試料 7 ;標本 32）
5. コブマルエンマコガネ　*Onthophagus atripennis* Waterhouse
　右上翅　長さ 4.6 mm　（試料 7 ;標本 100）
6. アオゴミムシ属　*Chlaenius* sp.
　頭部　長さ 4.4 mm　（試料 3;標本 9）
7. セアカオサムシ *Hemicarabus tuberculosus* (Dejean st Boisduval)
　左上翅　長さ 12.5 mm　（試料 3;標本 22）
8. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motshulsky
　頭部　長さ 2.6 mm　（試料 3;標本 54）
9 ヨツボシゴミムシ　*Panagaeus japonicus* Chaudoir
　全胸背板　最大幅 3.3 mm　（試料 3 ;標本 34）

図 4 ・ 3 4　昆虫化石の顕微鏡写真

9．門間沼遺跡における脂肪酸分析

門間沼遺跡では13個の土坑において、脂肪酸分析を実施した。分析は株式会社ズコーシャに依頼した。ここでは、特に6世紀末～7世紀初めのものと推定されている94Cb区の円墳4周溝SD18の結果について、ズコーシャの報告書に基づいた報告を行う。

（1）はじめに

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に棲んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子、約5千年前のハーゼルナッツ種子に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス(種)が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物は種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能となる。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて、門間沼遺跡から出土した古墳周溝および土坑の性格を解明しようとした。

（2）分析試料

門間沼遺跡から提出した土壌サンプル一覧を表4・36に示す。このうち94Cb区SD18No.A-1・B-1の試料は比較対照試料として遺構外の土壌、No.A-2～

	湿重量（g）	全脂質(mg)	抽出率(%)	コレステロール(%)	システロール(%)	コレステロール/システロール
A-1	772.0	5.1	0.0007	3.87	20.73	0.19
A-2	732.8	5.3	0.0007	3.7	20.18	0.18
A-3	720.9	4.2	0.0006	25.43	8.80	2.89
A-4	748.5	6.3	0.0008	6.7	17.76	0.38
A-5	739.6	3.5	0.0005	18.84	11.84	1.59
A-6	737.1	5.3	0.0007	5.35	18.43	0.29
A-7	658.6	8.1	0.0012	5.01	22.44	0.22
A-8	1181.9	10.7	0.0009	13.67	19.69	0.69
A-9	713.7	5.9	0.0008	8.13	18.85	0.43
A-10	853.1	22.0	0.0026	6.88	20.52	0.34
A-11	965.8	12.0	0.0012	10.15	12.28	0.83
A-12	894.3	13.2	0.0015	7.87	16.69	0.47
A-13	811.4	19.2	0.0024	4.51	17.67	0.26
A-14	769.7	28.0	0.0036	6.79	21.93	0.31
A-15	892.5	22.0	0.0025	8.47	24.03	0.35
B-1	769.0	1.3	0.0002	17.07	12.25	1.39
B-2	657.8	5.7	0.0009	11.73	21.11	0.56
B-3	621.4	7.0	0.0011	8.26	22.47	0.37
B-4	660.3	7.7	0.0012	17.34	14.60	1.19
B-5	670.4	5.0	0.0007	14.76	21.01	0.70
B-6	992.5	17.4	0.0018	8.64	22.90	0.38
B-7	893.6	37.8	0.0042	7.77	28.78	0.27
B-8	1061.5	12.7	0.0012	12.94	13.63	0.95
B-9	936.3	22.9	0.0024	8.31	15.63	0.53
B-10	890.9	16.8	0.0019	7.04	18.83	0.37

表4・36　試料一覧

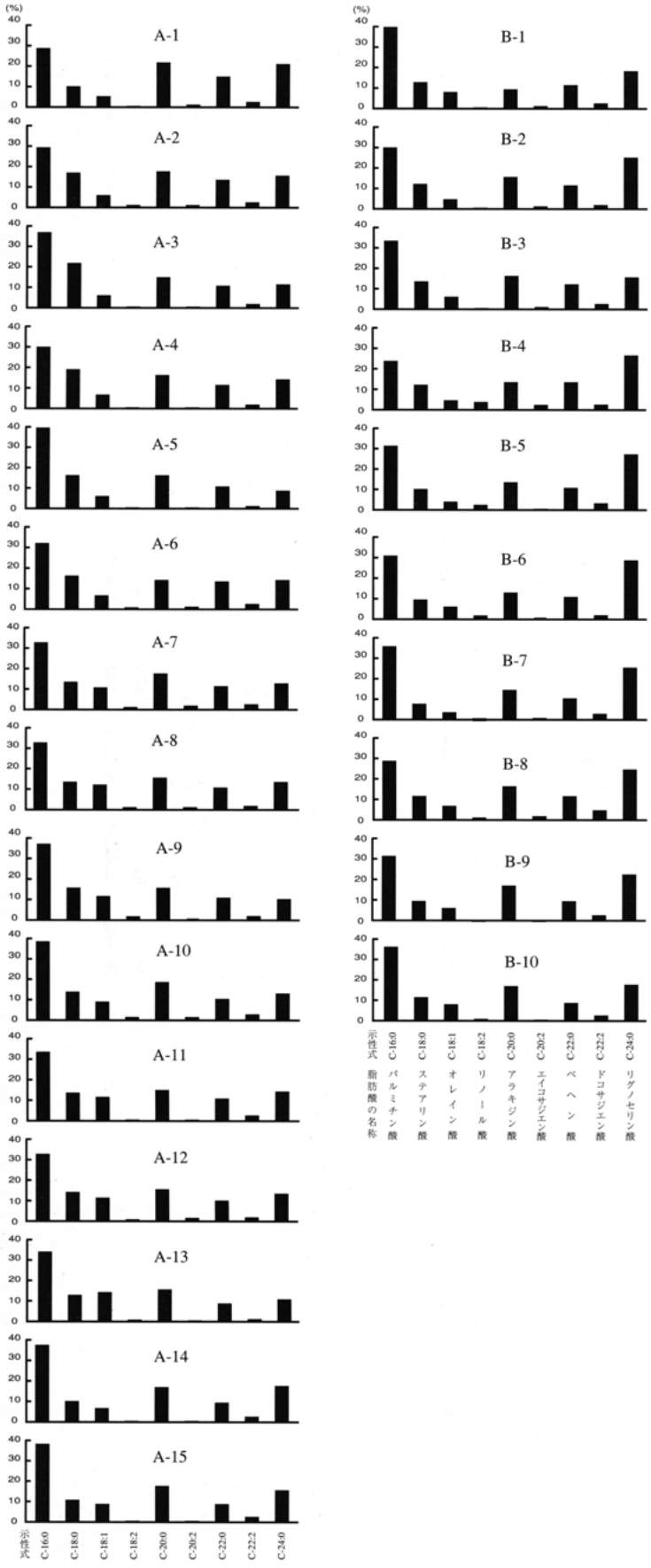


図4・35　脂肪酸組成

15、B-2～10については遺構内埋土である。

（3）残存脂肪の抽出

土壌試料621～1181 gに3倍量のクロロホルム－メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム－メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1％塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。残存脂肪の抽出量を表2に示す。抽出率は0.0007～0.0036％、平均0.0013％であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010～0.0100％の範囲内のものではあったが、低めであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール（トリグリセリド）、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

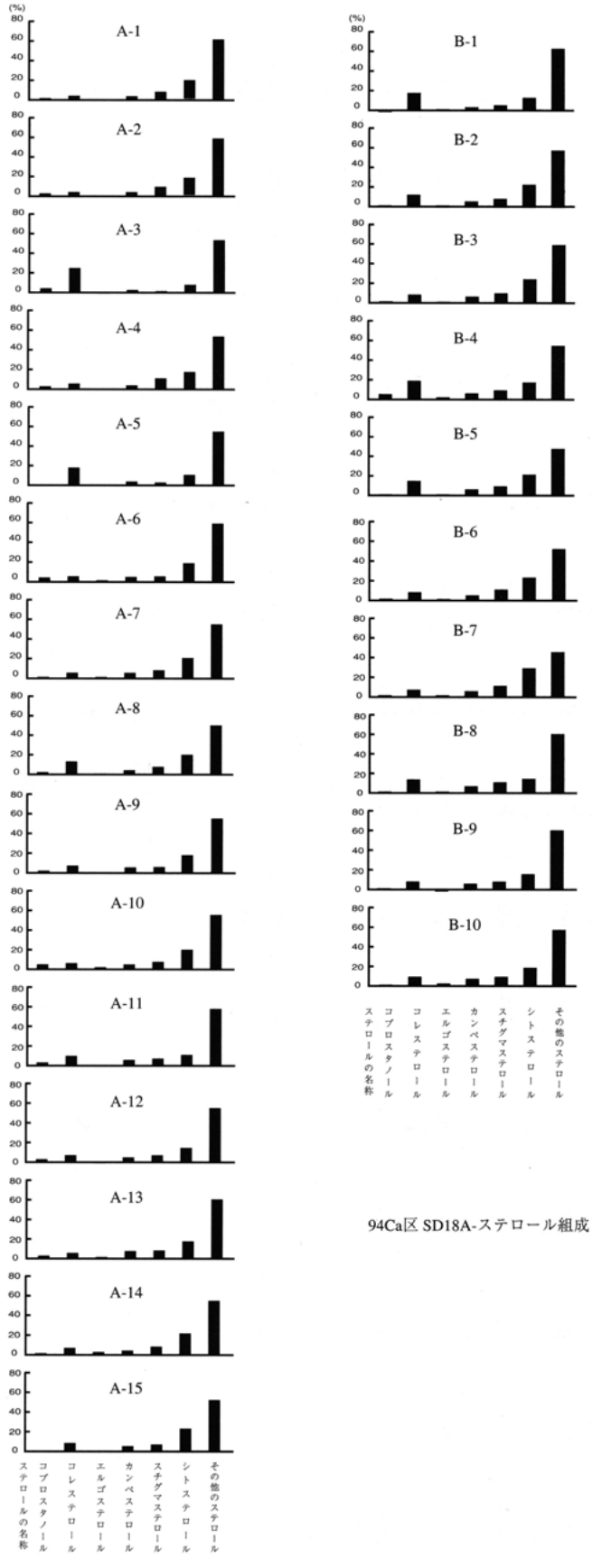
（4）残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに5％メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチルエステル化してから、ヘキサン－エチルエーテル－酢酸(80:30:1)またはヘキサン

ーエーテル(85:15)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。残存脂肪の脂肪酸組成を図4・35～4・36に示す。残存脂肪から9種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸(C16:0)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、ベベン酸(C22:0)、リグノセリン酸(C24:0)の7種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

各試料中での脂肪酸組成パターンを見ると、大きく2つのパターンに分かれた。1つは試料A-1～15、B-3のように、炭素数18までの中級脂肪酸と炭素数20以上の高級脂肪酸がそれぞれほぼ階段状に分布しているもので、他の1つは試料B-1～10(B-3を除く)のように、全脂肪酸が谷状に分布しているものである。

後者のような谷状の組成パターンは試料中に動物性脂肪が残存している場合に見られる典型的なものである。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸が生成するためで、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪は特に根、茎、種子に多く分布するが、動物性脂肪の方が分布割合は高い。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。一方高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸は、それら3つの合計含有率がすべての試料中で29～55%であった。通常の遺跡出土土壌中の高級脂肪酸含有率は約4～10%であるので、すべての試料中での高級脂肪酸含有量は非常に多いものであった。高級脂肪酸含有



94Ca区 SD18A-ステロール組成

図4・36　ステロール組成

量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成分が含まれている場合とがある。

（5）残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン－エチルエーテル－酢酸（80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン－無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてから、もう一度同じ展開溶媒で精製し、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図4・36に示す。残存脂肪から８～24種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど８種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

各試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料A-3に約25%、A-５、8、11、B-1、2、4、5、8に約10～19%、他のすべての試料中に約４～９%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは２～６%分布している。従って、試料A-3のコレステロール含有量は非常に多く、次いでA-５、8、11、B-1、2、4、5、8に多かった。しかし、他の試料中ではほぼ通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。

植物由来のシトステロールはすべての試料中に約６～29%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30～40%もしくはそれ以上に分布しているので、すべての試料中でのシトステロール含有量は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土中でよりも少なめであったクリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、すべての試料中にカンペステロールが約２～７%、スチグマステロールが約３～12%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは１～10%分布している。従って、試料中のカンペステロール、スチグマステロール含有量はすべてほぼ通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。

微生物由来のエルゴステロールは痕跡程度しか検出されない試料もあったが、検出されるものには約0.2～2.3%分布していた。これは単に土壌微生物が増殖したものと考えられる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、痕跡程度しか検出されない試料もあったが、検出されるものでは試料A-3、4、6、10～12、B-4に約３～５%、他のすべての試料中に約0.5～2.9%分布していた。コプロスタノールは一般的な遺跡出土土壌中では分布していても約１%くらいで、通常は殆ど検出されない。また、コプロスタノールの分布により試料中での哺乳動物の存在を確認することができる他に、通常コプロスタノールが10%以上含まれていると、コプロスタノールとコレステロールの分布比から試料（6）中に残存している脂肪の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合がある。今回のコプロスタノール含有量は分布比が算出できるほどの量ではなかったが、コプロスタノールが検出されたということは試料中に哺乳動物の腸もしくは糞便由来の脂肪が残存している可能性があることを示唆している。特に、円墳４周溝SD18では周溝底部の試料A-3、下層のA-6、上層のA-12でコプロスタノール含有量が多かった。これはA-3、6付近に哺乳動物の腹部に相当する動物遺体が存在していた可能性が高いことを示唆している。また、

周溝SD18の底部試料B-4でもコプロスタノール含有量が多かったが、この位置にも哺乳動物の腹部に相当する動物遺体が存在していたと推測される。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壙で0.6以上、土器・石器・石製品で0.8～23.5をとる。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表2に示す。表からわかるように、試料A-3、5、8、11、B-1、4、6、8は分布比が0.6以上、試料B-2、9、は0.6以下ではあるがほぼ0.6に近く、他のすべての試料は0.6以下を示した。従って、分布比が0.6以上または0.6に近い試料の採取地点付近には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存している可能性があり、それらの試料は各遺構にすべて存在するので、すべての遺構に動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していたことを示唆している。また遺構外の対照試料中においても、コレステロールやコプロスタノールが多く、コレステロールとシトステロールの分布比も0.6以上を示したのは、試料採取地点付近に動物由来の脂肪が残存していた可能性がある。

以上、門間沼遺跡の試料中に含まれている各種ステロール類は、動物由来のコレステロールがSD18のA-3に非常に多く、SD18の試料A-5、8、11、B-1、2、4、5、8に多く、哺乳動物の腸や糞便由来のコプロスタノールがSD18の試料A-3、4、6、10～12、B-4にやや多い他は、すべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめに含まれていることがわかった。また、コレステロールとシトステロールの分布比が0.6以上か0.6に近い値を示す試料がすべての遺構中に存在し、遺構内に動物遺体または動物由来の脂肪が残存していることを示していた。コレステロールとコプロスタノールの含有量を考え合わすと先の脂肪酸分析で多く含まれていた高級脂肪酸は、高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分に由来するものと、植物体の表面を覆うワックスの構成分に由来するものの両方があると考えられる。

（6）総括

門間沼遺跡から出土した古墳周溝および土坑の性格を判定するために、遺構内外の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、試料中の脂肪酸組成パターンはSD18の試料A-1～15とB-3のように炭素数18までの中級脂肪酸と炭素数20以上の高級脂肪酸がそれぞれほぼ階段状に分布しているものと、他のすべての試料のように全脂肪酸が谷状に分布しているものとがあることがわかった。高級脂肪酸もすべての試料中に非常に多く含まれていることもわかった。

残存するステロール分析の結果、門間沼遺跡の試料中に含まれている各種ステロール類は、動物由来のコレステロールがSD18の試料A-3に非常に多く、SD18の試料A-5、8、11、B-1、2、4、5、8に多く、哺乳動物の腸や糞便由来のコプロスタノールがSD18の試料a-3、4、6、10～12、B-4にやや多い他は、すべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みが少なめに含まれていることがわかった。従って、周溝SD18の試料A-3.6、B-4付近に哺乳動物の腹部に相当する動物遺体が存在していたと推測される。また、コレステロールとシトステロールの分布比が0.6以上か0.6に近い値を示す試料がすべての遺構中に存在し、遺構内に動物遺体または動物由来の脂肪が残存していることを示していた。コレステロールとコプロスタノールの含有量を考え合わすと脂肪酸分析で多く含まれていた高級脂肪酸は、高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分に由来するものと植物体の表面を覆うワックスの構成分に由来するものの両方があると考えられる。

以上の結果から、門間沼遺跡の円墳４の周溝SD18に残存する脂肪は、ヒト遺体を直接埋葬した場合の脂肪と類似していることがわかった。遺構外の対照試料中にも高等動物由来の脂肪が残存していたのは、対照試料採取地点付近にも他の動物由来の脂肪が残存していた可能性が考えられる。動物遺体の明確な確認のためには、抗原抗体反応による免疫学的手法を用いて試料を精査する必要がある。

参考文献

（１）R.C.A.Rottlander and H.Schlichtherle：「Food identification of samples from archaeological sites」、『Archaeo Physika』、10巻、1979、pp260。

（２）D.A.Priestley、W.C.Galinat and A.C.Leopold：「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」、『Nature』、292巻、1981、pp146。

（３）R.C.A.Rottlander and H.Schlichtherle：「Analyse fruhgeschichtlicher Gefas-inhalte 」、『Naturwissenschaften 』、70巻、1983、pp33。

（４）中野益男：「残存脂肪分析の現状」、『歴史公論』、第10巻（６）、1984、pp124。

（５）M.Nakano and W.Fischer:「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」、『Hoppe-Seyler Z.Physiol.Chem.』、358巻、1977、pp1439。

（６）中野益男：「残留脂肪酸による古代復元」、『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』、田中琢、佐原眞編、クバプロ、1995、pp148。

（７）中野益男、伊賀啓、根岸孝、安本教傳、畑宏明、矢吹俊男、佐原眞、田中琢:「古代遺跡に残存する脂質の分析」、『脂質生化学研究』、第26巻、1984、pp40。

（８）中野益男：「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」、『真脇遺跡－農村基盤総合設備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』、石川県鳳至郡能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団、1986、pp401。（９）中野益男、根岸孝、長田正宏、福島道広、中野寛子：「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」、『ヘロカルウス遺跡』、北海道文化財研究所調査報告書、第３集、1987、pp191。

（10）中野益男、中野寛子、長田正宏：「川地遺跡から出土した土壙に残存する脂肪の分析」、『未発表』、愛知県埋蔵文化財センター。

（11）中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男：「野毛大塚古墳から出土した遺構に残存する脂肪の分析」、『未発表』、東京都世田谷区教育委員会。

（12）中野益男、幅口剛、福島道広、中野寛子、長田正宏：「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」、『原川遺跡Ⅰ－昭和62年度袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』、第17集、財静岡県埋蔵文化財調査研究所、1988、pp79。

（13）中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男：「川久保遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」、『未発表』、静岡県引佐郡細江町教育委員会。

（14）福島道広、中野寛子、長田正宏、中野益男：「初音ケ原Ｂ遺跡の土坑に残存する脂肪の分析」、『未発表』、静岡県三島市教育委員会。

（15）中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男：「角江遺跡の土器棺および土壙に残存する脂肪の分析」、『未発表』、財静岡県埋蔵文化財調査研究所。

（16）中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男：「北落古墳群ほか遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析」、『北落古墳群Ⅰ－犬上郡甲良町北落』、滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会、1994、pp83。

（17）中野益男、中野寛子、福島道広、長田正宏：「寺田遺跡土壙墓状遺構に残存する脂肪の分析」、『未発表』、兵庫県芦屋市教育委員会。

（18）中野益男、中野寛子、長田正宏：「東武庫遺跡から出土した遺構に残存する脂肪の分析」、『東武庫遺跡』、兵庫県文化財調査報告第150冊、兵庫県教育委員会、1995、pp113。

（19）中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」、『未発表』、宮城県教育委員会。

（20）中野益男、中野寛子、長田正宏：「半田地区埋蔵文化財発掘調査に係る出土土器内土壌の残存脂肪分析及び解析」、『未発表』、静岡県浜松市埋蔵文化財調査事務所。

10. 門間沼遺跡出土土器（S字状口縁台付甕A類）の胎土分析

永草　康次*

表題の土器は、口縁の形状・紋様より、赤塚氏による分類のA類新段階に比定されるS字状口縁台付甕である（石黒立人氏教示）。S字状口縁台付甕は、形状・技法など、厳格な規格を守って製作される。土器材料である胎土の点でも、出土遺跡に関わらず、花崗岩質の砂礫を含むことが基本原則であり、その在地の土器とは異なる。この花崗岩質の砂礫は現時点では三重県中部（雲出川流域？）で採取されたものと考えられている（永草、1997）。特に古段階であるA類およびそれ以前では、筆者らがこれまでに分析したS字状口縁台付甕のすべてが花崗岩質の胎土で、尾張平野における在地の土器胎土とは明確に区別できるものであった。これがB類段階以降になって、消費量の増大にともなってか、在地型の胎土を用いた模造品ともいえるものが出現し、同時に他地域に広く拡散を開始する。つまりS字状口縁台付甕においては、器形の変化と在地型胎土の出現・他地域との関係の変化が、同時に進行したと考えられてきた（永草、1994a他）。

門間沼遺跡（一宮市）出土では、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土し、S字状口縁台付甕も数多く出土している。このうち表題の土器（図4・37）はA類に分類されるものでありながら、上記の傾向とは異なり、尾張平野の在地土器に類似する胎土である可能性が肉眼観察で認められ、胎土分析を行ったので、その結果について報告する。

分析は、実体顕微鏡による土器表面の観察と、偏光顕微鏡による土器のプレパラートの観察の2方法で行った。この方法は、筆者がこれまでに伊勢湾岸地域の弥生時代から古墳時代の土器を対象に行ってきた方法である。分析結果に加え、これまでに得られた結果とも比較し、検討を行う。

実体顕微鏡観察の結果と、この結果のうち無色鉱物（Qz+Fl）・雲母（Mica）・雲母以外の有色鉱物（Mf）を三成分とした三角ダイヤグラムを第1図に示す。実体顕微鏡観察では、普遍的に含まれる石英等の他に、岩片としてチャートが比較的多い。有色鉱物は若干量含まれ、雲母は少ない。偏光顕微鏡下ではチャートや火山岩片、有色鉱物として少量の斜方輝石が含まれていた。この特徴は、尾張平野在地の土器胎土に共通するもので、特にこれまでに筆者が分析を行った中では、朝日遺跡を代表とする尾張平野中央部の胎土に共通する。これまでに分析が行われているS字状口縁台付甕（A類）は、花崗岩の岩片や、有色鉱物に角閃石が多く含まれ、これとは共通しない。三角ダイヤグラム上でも、朝日・阿弥陀寺遺跡の領域内にあり、S字状口縁台付甕の領域からはややはずれる。

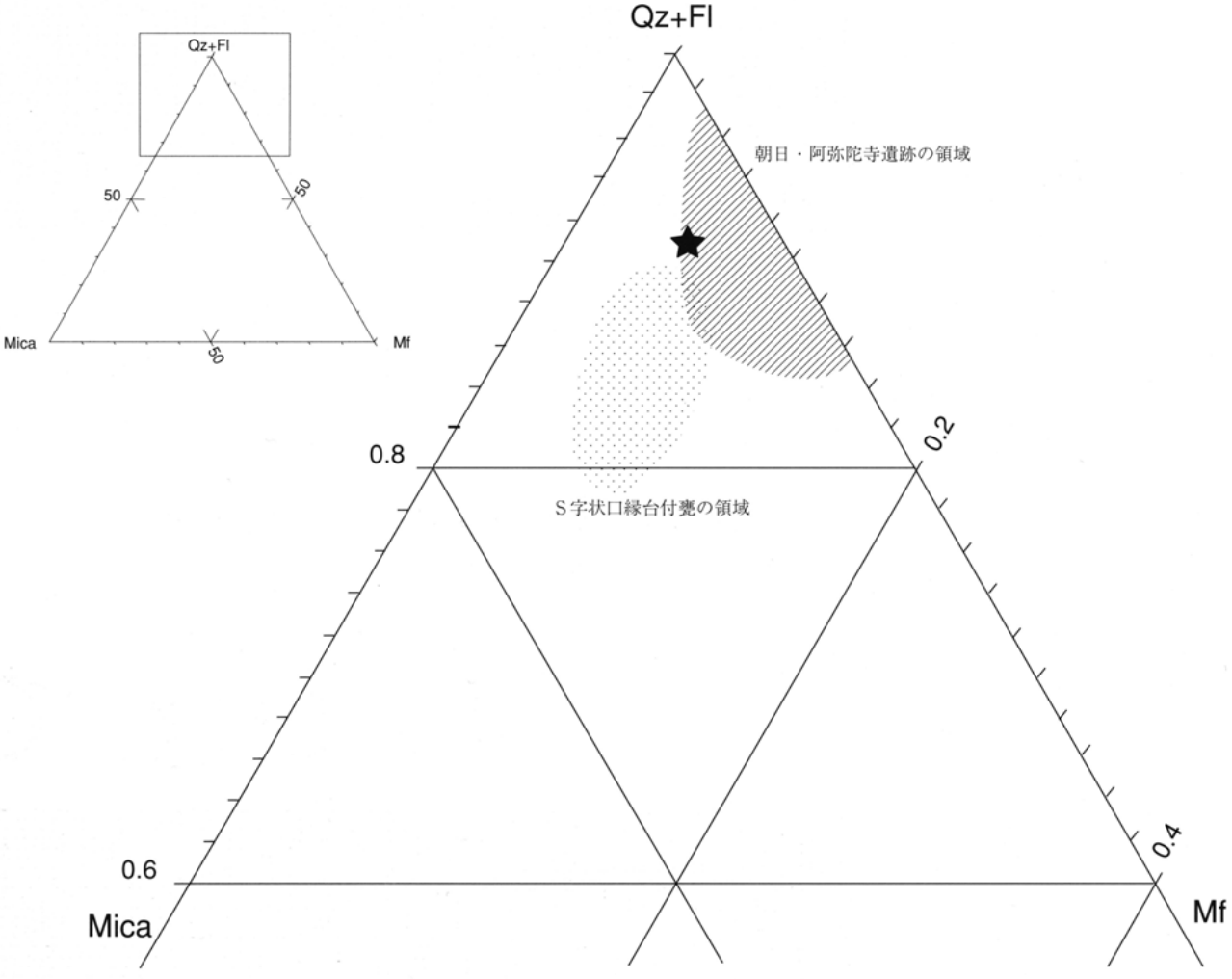
門間沼遺跡は、尾張平野の北部に位置し、ここでの在地の胎土が、朝日遺跡などと共通であるかは今のところ不明である。尾張平野内であり、距離の近接する遺跡同士であっても、胎土が異なることもあり（永草、1998）、門間沼遺跡の在地の土器胎土の特徴を明らかにし、これとの比較検討も必要である。

しかし、この土器がS字状口縁台付甕・A類でありながら、尾張平野在地の土器胎土に共通する特徴を示し、これまでにない結果となった。これまで、B類への器形の変化と在地型胎土の使用は、深い関わりがあったものと考えてきたが、この結果より、在地型胎土のS字状口縁台付甕の出現は、B類段階への器形変化に一部先行していたことが明らかとなった。

門間沼遺跡出土のS字状口縁台付甕に関しては、

＊有限会社　神墾

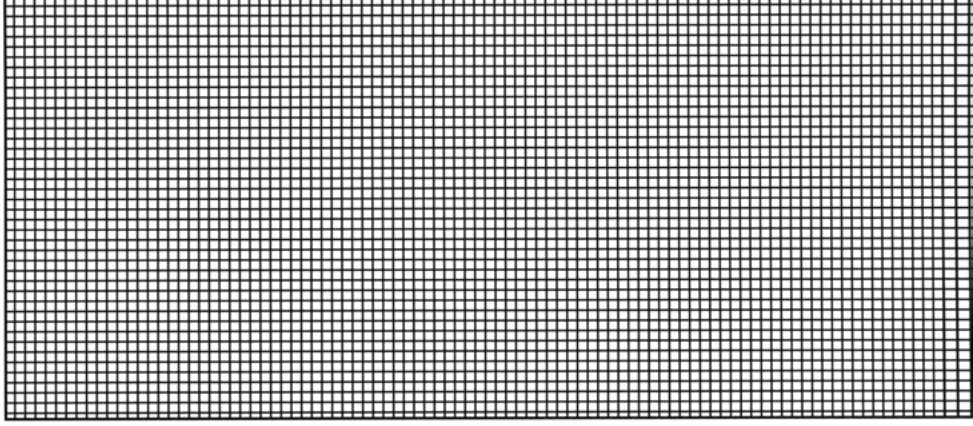
主要造岩鉱物の三角ダイアグラム



	石英			長石			黒雲母			白雲母			有色鉱物			チャート			火山ガラス			その他			合計	観察視野数	1視野の平均粒数
	L	M	S	L	M	S	L	M	S	L	M	S	L	M	S	L	M	S	L	M	S	L	M	S			
94Ca IXH5c SD09下層B群941004	5	32	128		1	7			3			2			9		3	3			5	1	1		200	12	16.67

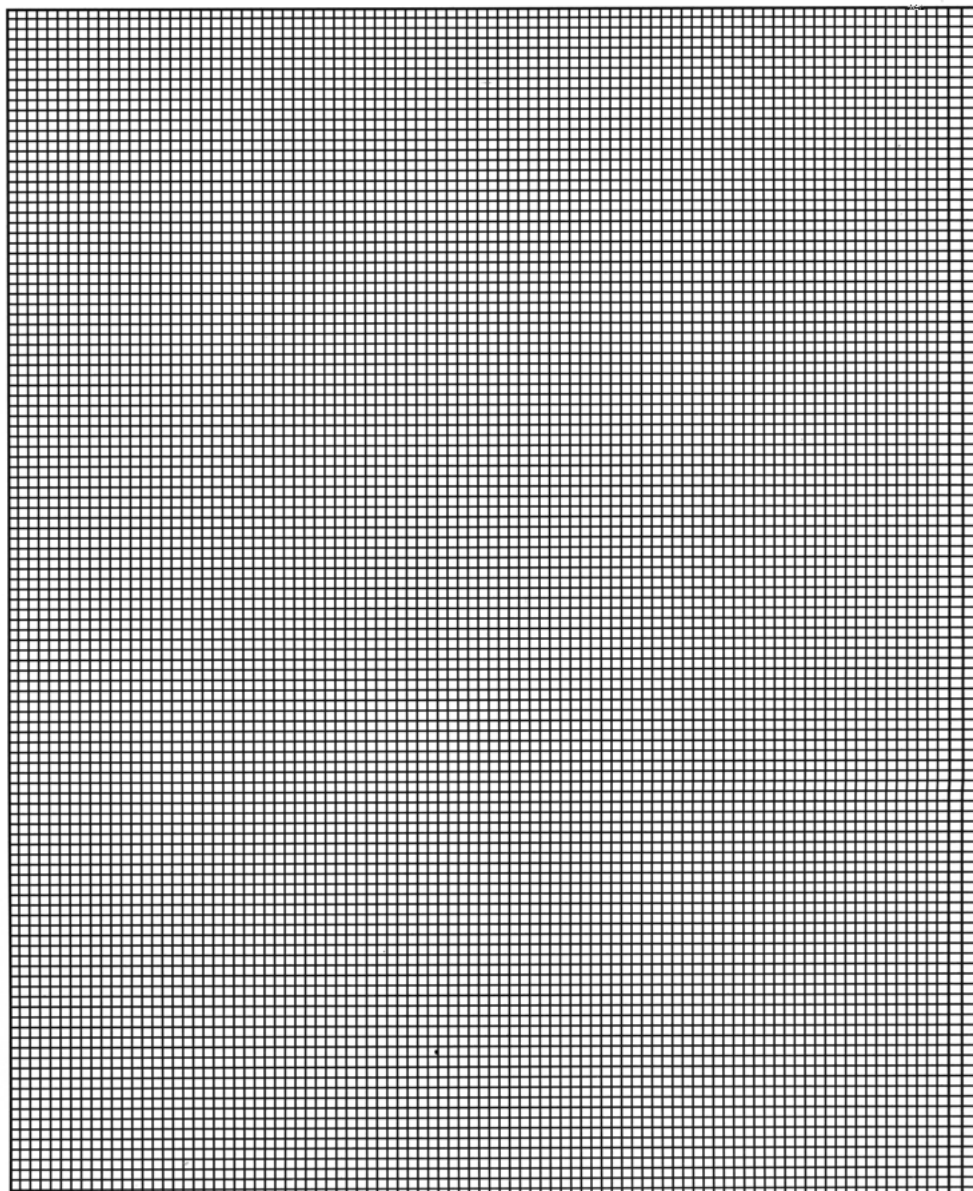
図4・37

肉眼観察ではあるがひとわたり見せていただいたが、他に在地型胎土のS字状口縁台付甕A類は存在しないようである。またこれまでの結果から考えても、尾張平野全体でも在地型胎土のA類が一定量を占める可能性は考えにくい。この1点のみが例外的に製作されたのか、あるいは少量ではあっても同様のものが存在するのかは、S字状口縁台付甕の出土重心となる地域を中心に詳細な調査が必要であろう。門間沼遺跡は尾張平野の北縁で、S字状口縁台付甕の出土重心からは若干距離をおく。また発掘調査の結果からもS字状口縁台付甕は甕類の主体となるものではない。その点も考え合わせ、S字状口縁台付甕の移動を再検討を要する。



V

まとめにかえて



1．古墳時代の様相

竪穴建物と掘立柱建物

濃尾平野において掘立柱建物を中心とする古墳時代の集落が存在するのかどうかについては、なお確定していない。そもそも掘立柱建物を伴う集落自体が見つかっていないのが現状であり、この点では門間沼遺跡において掘立柱建物群が検出されたことも、ある意味では特異といえるのかもしれない*。

門間沼遺跡で検出された掘立柱建物は、門間沼遺跡古墳時代Ⅰ－c期を初発とし、古墳時代Ⅱ期には広範囲に展開する。倉庫群は検出されていないが、住居関係の掘立柱建物は検出されている。独立棟持柱をもつ掘立柱建物は未検出だが、南面ひさしを有する建物は、94C区および94B区でそれぞれ1棟ずつ検出されている。

いっぽう、竪穴建物は確実そうであるといえるのは94Ca区SB02で、隣接するSB03は近接棟持柱をもち、竪穴建物ではなく平地式建物であった可能性が高い。はたして、門間沼遺跡の古墳時代Ⅰ期における建物形態は、竪穴建物が従で、掘立柱建物あるいは平地式が主たるものであったといえるのかどうか。いずれにしても調査地区の性格を見極めなければ結論はだせない。

このことに関しては、今回検出された建物が現状では時期幅に対して十分な棟数があるわけではないという点がある。一時期1棟というところで、とても集落といえる数量ではない。集落の縁辺に位置しているゆえの少なさなのか。

古墳時代Ⅱ期の掘立柱建物は、5世紀後半から6世紀代中頃に属すものが94C区から94A区にかけて（西群）、6世紀後半から7世紀初頭に属すものが95A区（東群）に展開している。この点で、年代的には微妙なところがある墓地との関係が問題となるが、大勢としては西群から東群へという居住域の移動を想定することができる。

古墳時代Ⅱ期の掘立柱建物群のうち、西群に関して、今回の調査では重要な発見があった。それは鉄の精錬および鍛練に関係する遺物が94C区から94B区にかけて出土したことで、その出土分布と掘立柱建物群の分布が重なる点である。遺物についての詳細は鈴木・蔭山報告に譲るが、尾張低地部で確実に古墳時代まで遡る資料として注目していよいだろう。

残念ながら肝心の工房は調査区外に存在すると考えられる。関連遺物の出土状況からみて94B区の北に焦点を結ぶようだが、母体となる集落の南西部に位置しているとするなら、風向きをめぐる弥生時代以来の規則性も伺うことができる。

井戸

94C区では古墳時代Ⅰ期に属す井戸が22基検出された。1基あたりの機能年数が興味深いところだが、ほぼ東西100mの範囲に収まる点は、それを集中と表現することを許すだろう。そして、井戸に限らずそれ以外の遺構・遺物もほぼ94C区に集中し、その外部との落差が大きい点は非常に印象深い。

井戸で特徴的なのは、上部が土坑状に改変されているにもかかわらず土器など無機物の廃棄が意外に少なかったこと、炭化物や灰などの廃棄もほとんど認められなかったことである。94C区では有機物や遺物を含む廃棄土坑は一応存在したし、溝などへの廃棄も行われていたから、もしそれを日常性と把握するなら、井戸には日常性が乏しいということになる。生活空間であれば日常生活から出る残滓を処分のために廃棄場所を設定することは所定の行為となるが、それも空間利用の方式と人口数によって変異を生じるのだとすれば、これら井戸群が接する、もしくは属する空間はどういった部分であったのか。

古墳時代Ⅰ期でも新しい例は95E区で4基検出された。対応する建物の検出は容易ではなかったけれども、居住域と井戸という組み合わせは確実である。大毛池田遺跡でも狭い居住区で井戸が伴っていた。

門間沼遺跡の古墳時代Ⅰ期の井戸と同時期の例としては、朝日遺跡で断面ロート状の土坑が検出され、それについては井戸の可能性を指摘したことがある。その後、月縄手遺跡でも同様の土坑が検出された。八王子遺跡では井泉が検出され、かつて調査された豊田市伊保遺跡の遺構が同類である可能性が高まった。また廻間遺跡でも実は井戸状の土坑が検出されていたということである*。

古墳時代Ⅱ期では、甚目寺町大渕遺跡で6世紀末から7世紀初頭に属す断面ロート状の典型例が複数検出されている。これら以外には知らないが、傾向としては古墳時代集落における井戸の検出は何ら珍しくはないという状況になってきていると言えるだろう。

しかし、ここで問題がある。井戸が果たして基本的生活施設であったかどうかという点である。廃棄の様

＊赤塚次郎氏のご教示。

相は別にして、はたして日常的な使用に供されていたかどうかである。少なくとも八王子遺跡の井泉は普通ではない。特別な用途が推定されるわけだが、その他の井戸についてはどうであろうか。

門間沼遺跡の古墳時代Ⅰ期の井戸については、設置場所が集中している点でいささか非日常的な雰囲気もあるが、水脈重視で設置されているのであれば、集中するからといってその点をことさら重大視するわけにもいかない。特定の場において特定の用途があったとは、きわめて魅力的な考え方ではあるがそこまで断言できるような資料はない。

いっぽう古墳時代Ⅱ期になると、掘立柱建物と必ずセットになるという状況であり、Ⅰ期のような集中傾向は認められず、個別分散化が進行しているといった感じである。94A・B区では2基一対であり、同時期かどうかは別にしても明らかに建物棟数より多いわけで、建物の機能年数が長いか、そうでなければ機能差ということになる。

井戸とは、もともと列島には存在しなかったものであり、その意味では外来文化である*。地下水を汲み上げて使う、という思想の源流は気になるところだが、濃尾平野における変遷は断続的であり、古墳時代、いや古代後半までは非日常性が強いと言わざるをえない。

畝状遺構

畝状遺構は、濃尾平野では土田遺跡で最初に発見された。次は廻間遺跡、月縄手遺跡、そして北道手、門間沼遺跡という順である。土田遺跡の畝状遺構は、廻間遺跡と土田遺跡の方形周溝墓がのる微高地の間に挟まれた別の微高地のほぼ全面にわたって検出された。北道手遺跡でも、詳しい時期の認定は多少問題があるにしても、広範囲に展開する。それに対して、廻間遺跡や門間沼遺跡の例は狭く限定されている。門間沼遺跡では3ケ所で検出され、ほぼⅠ期全般にわたっている可能性がある。

集落全体のなかでどのような場所を占めるのか、という点についてはわからないが、小規模なものが建物群に伴う傾向は伺える。

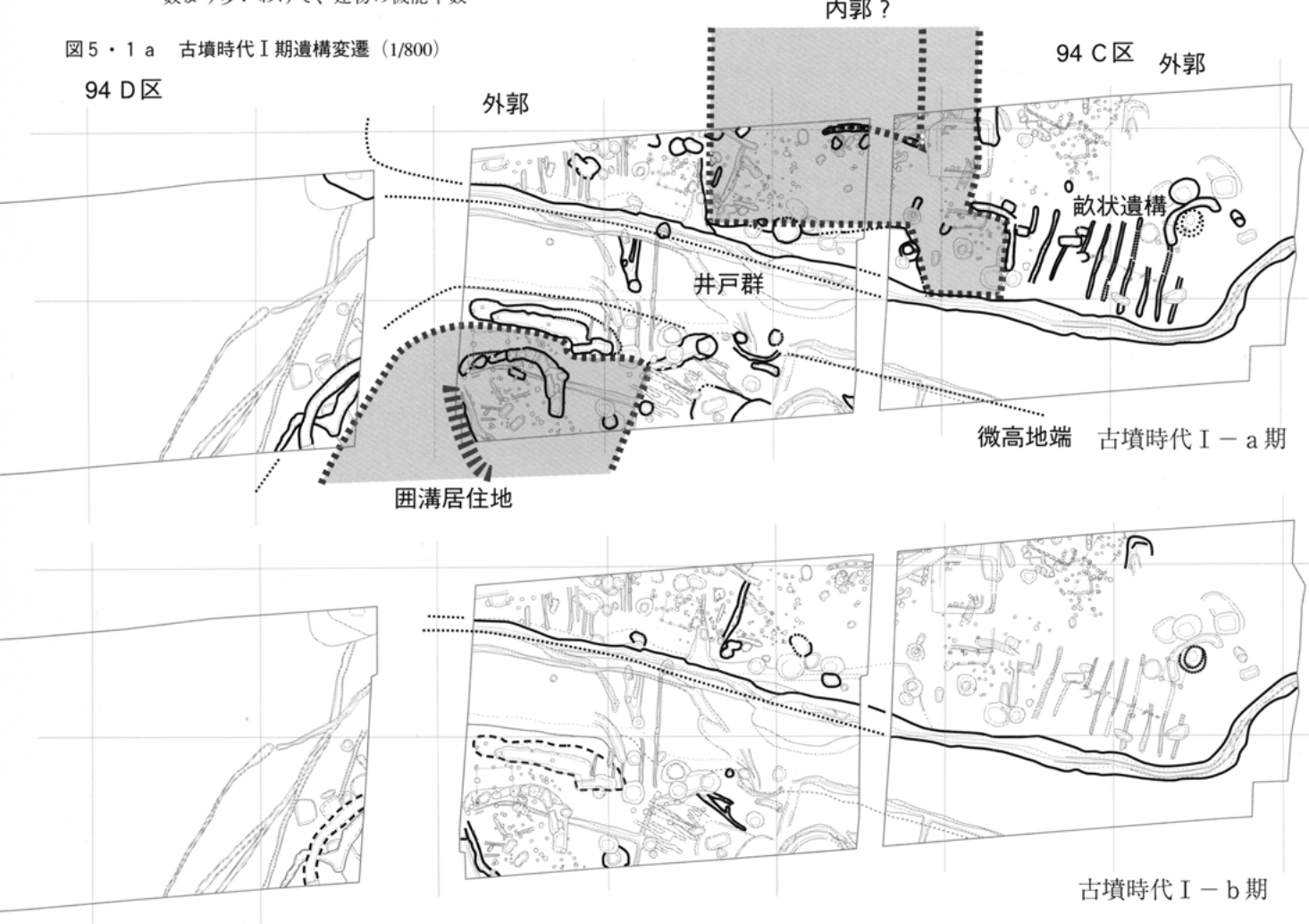
これらが菜園として営まれていたのかどうか、何が栽培されていたのかなどわからない点も多いが、古墳時代の集落には付き物である、ということだけは言えそうである。

大区画と小区画、あるいは居館と囲溝居住地

今回の調査で注目したいのが、まず北側の微高地を区画するＳＤⅠ、

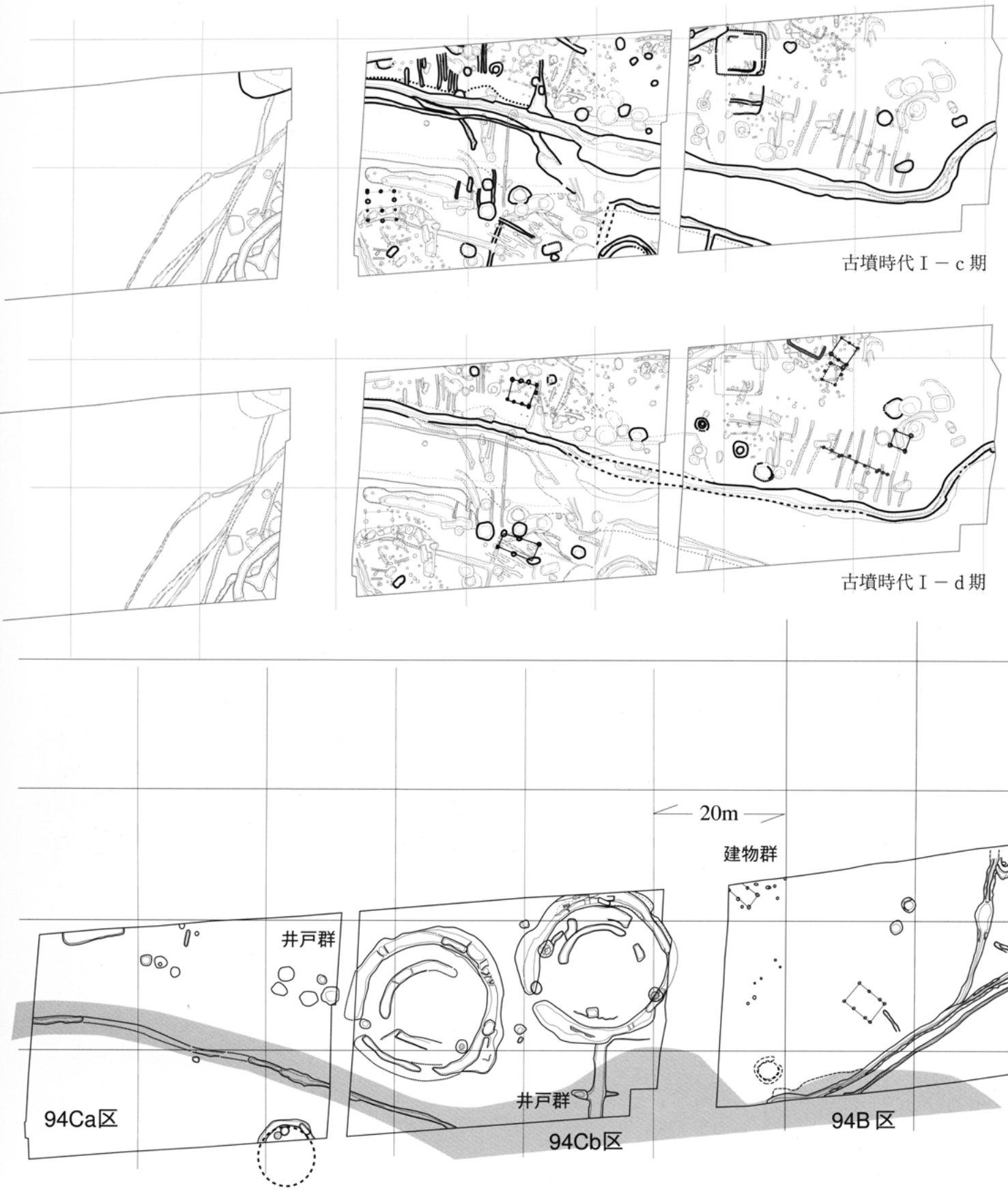
*濃尾平野において弥生時代の井戸はいまのところⅣ期を遡ることはなく、それ以前において基本的生活施設であったとは考えられない。また、Ⅳ期以降にもそのような性格を有した可能性も低い。

図5・1a　古墳時代Ⅰ期遺構変遷（1/800）



つぎに94C区SX01・SD17および94D区SD01・02である。前者はさらに内部にSX04という小区画をもち、外郭、内郭という区分ができそうである。後者は建物の周囲に巡らされて一定期間開口し、廃棄場所としても

図5・1b　古墳時代Ⅰ期遺構変遷（1/800）



利用されている。つまり、複数の建物群から構成される居住地の周りを区画する機能を有していたと考えられる。

前者は居館に対比できるだろうか。後者は北陸地方で類例の多い周溝をもつ住居との関連も見易いことだけれども、それに該当するのはSX01の方である。それに対してSD17は区画の意味が強いものであり、これを＜囲い地＞の一例と考えたい。少なくとも、区画の内部に1棟しか建たない周溝をもつ住居とは区別したい。ある意味ではコンパウンドに近いものといえようか。

今回これを囲溝居住地と呼んだ。その当否は別にして、今後も注目していきたい遺構である。

＊このような形態を弥生時代に求めるなら、東海地方では西部においては皆無である。東部では類似例がある。おそらく、地下水位の高い低湿地においては基本的な適応形態ではなかったか。

古墳時代Ⅱ期の景観を考える

古墳時代Ⅱ期とした時期は5世紀後半に始まり、6世紀代を中心として7世紀初頭に至るまでの長期間で、該当する遺構は94D区から95A区まで、濃淡を見せながら展開している。したがって、それを一時期に見たてるのはかなり無謀なように思えるが、瞬間的な景観をイメージすることの方がかえって難しいことからいえば、許されるだろう。

全体としては墳墓、建物群ともに集中することなく散漫に展開しており、井戸もしくは井戸状遺構は、建物群だけでなく墳墓にも伴うような様相を見せている点に注意が引かれた。とりわけ94C区ではそれ以前から井戸が集中する地区でもあったので、はたして墳墓と関連があるのかどうか、たんに連綿と井戸が設けられていただけではないかとも考えたが、同時期の遺構が墳墓しか見当たらないということから両者の関係を重視した。

墳墓は、94C区SZ02・03が2重周溝という珍しい形態で、二段築成の模倣のようである。上部が円丘、下部はテラスをもつ円台となるが、円丘は直径約8mと、規模が決して大きくない。94A・B区で検出された小規模墳と同程度の規模に過ぎない。したがって、埋葬施設があったとしても、横穴式石室であったとは考えられない。周溝内埋葬の痕跡が認められたことからも、円丘部分が継続利用される条件はなかったであろう。そのほかの小規模墳にも周溝内埋葬の痕跡があることから言えば、これらは弥生時代以来の低地の低墳丘墓となんら変わるところがないと言える。（石黒立人）

図5・2　古墳時代Ⅱ期遺配置図（1/1000）

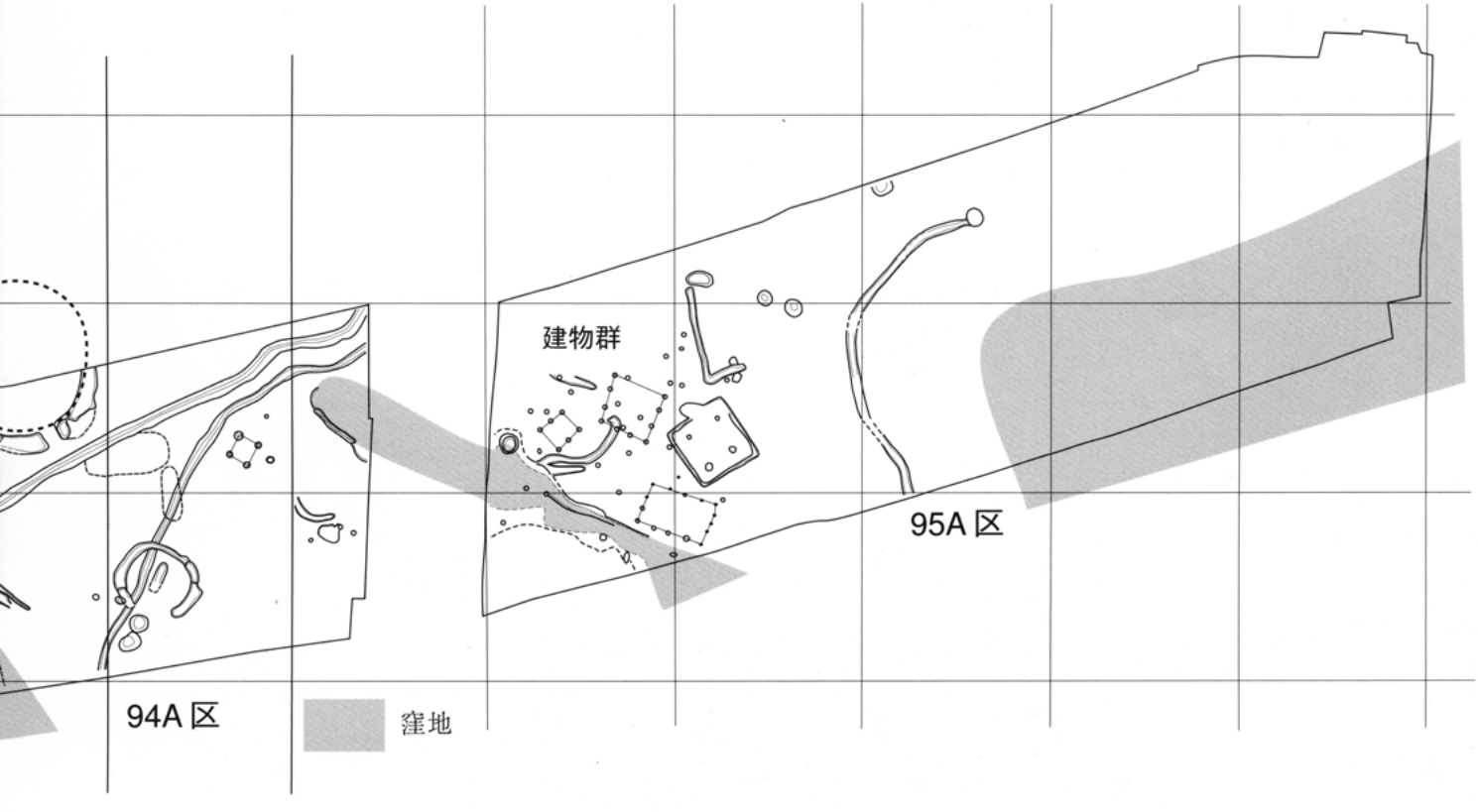
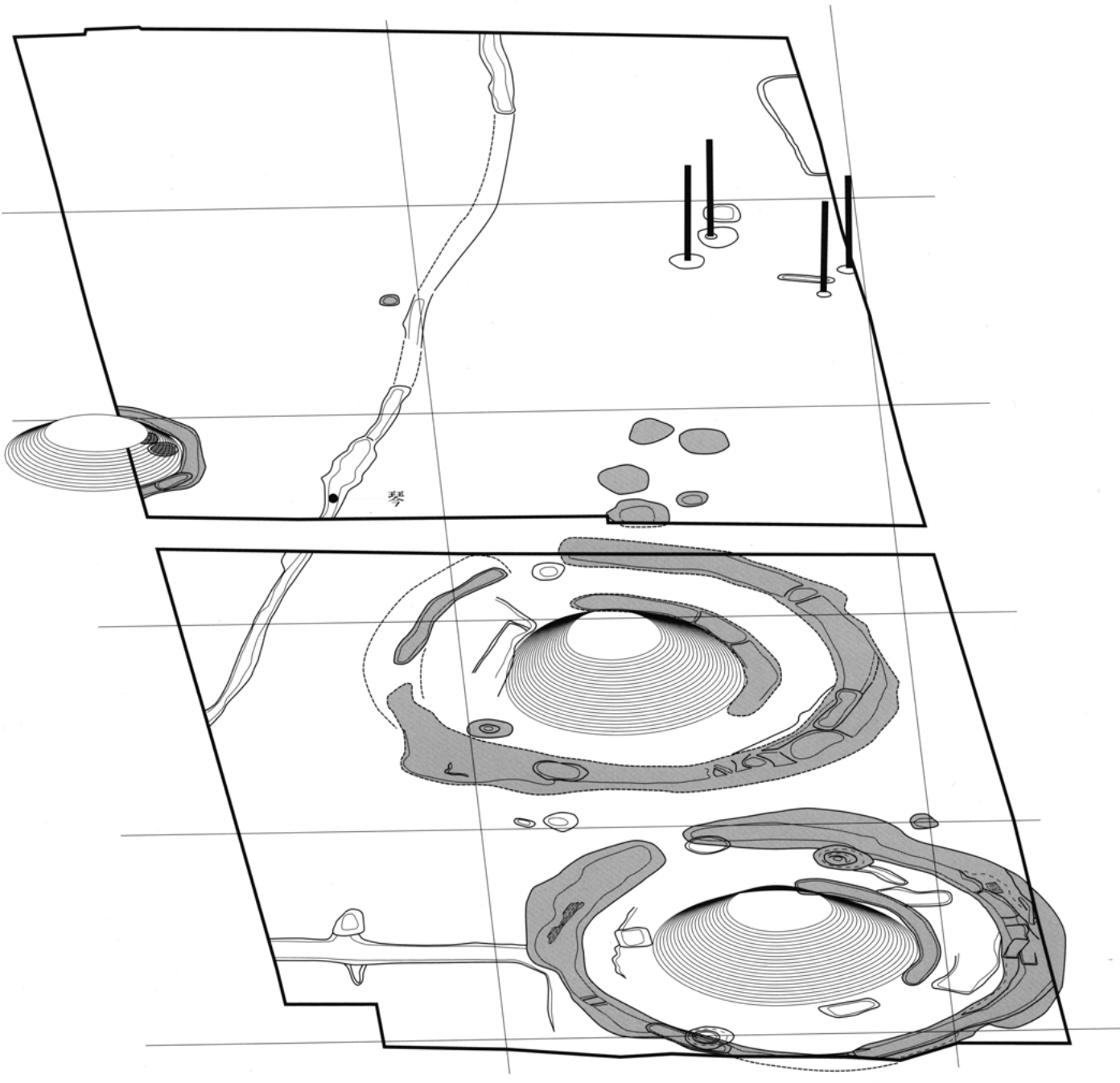


図５・３　古墳時代Ⅱ期イメージ



2．古代の様相

門間沼遺跡の古代集落については、大毛池田遺跡や大毛沖遺跡を抜きにしては語れない部分も多いが、まずは門間沼遺跡の調査成果から語ろうと思う。その上で、両遺跡も含めて概観することにしたい。

古代の変遷過程

古代の遺構は前半と後半に分かれ、前者を古代Ⅰ期・Ⅱ期、後者を古代Ⅲ期とした。古代前半には、遺構の検出状況において集落としてはいささか散漫な段階であると表現せざるを得ないⅠ期から、複数の大溝による区画の段階であるⅡ期への変化がある。その変化は暦年代上の位置しだいでは当地にとどまらず列島史上も非常に大きな意義を有するものとなるが、残念ながら不確定な部分が大きい。はたして７世紀代の前半なのか、あるいは後半なのか、結論が重大であるだけになおさら判断は難しいようだ。

後半のⅢ期には、集落の段階から全般的に埋積が進行する段階に移行する。つまり湿地化である。これは隣接する河道の状態だけでなく、井関弘太郎氏が説くように、濃尾平野全体の自然地形の変化にも連動している可能性が高い。少なくとも遺跡変遷上は空白期を迎えると表現せざるを得ないが、それが北部の田所遺跡、東部の大毛沖遺跡などとどのように関係づけられるのかが課題である。

古代Ⅰ期の景観

95A区東部から大毛池田遺跡、大毛沖遺跡までの範囲で古代関係の遺構が安定して検出され、７世紀代から１０世紀までの幅で変遷が推定できる。

７世紀代は集落が展開し、とくに95B区では基本軸となる溝とそれに並走する小溝と直交する小溝、竪穴建物群という構成で、中世のような景観を見せている。溝は地割に関係するような様相を見せてもいるが、排水機能も無視できない。

95E区では大毛池田遺跡から続く大溝が検出されたが、それに並走する土塁状の遺構が推定できた。それは大溝に並行して走る２条の溝が大溝の両側で対称的にみつかったこと、95E区で検出された集落内を通る２条の溝が北端で規制されているような状況を示していることから考え付いたもので、あたかも遠近法的描画のように“すべてが大溝を軸に展開していた”という一点を焦点にして像を結ぶ。

２条の溝は大溝に近いほうが規模も大きく、反対側、つまり外側のほうが小さい。その理由はわからないが、まず内側に大溝があり、それに接してテラスが形成され、その外側に溝が掘削され土盛が行われる、というものであったろう。土盛の外側にも溝が１条掘削されるが、それは規模が小さいことから区画と排水のためであろう。

古代Ⅲ期の景観

この時期はまさに河の時期といった趣である。大方の溝は砂で埋まり、さらに上部には溝の範囲を超えて自然流路が流れている。

95A区と95B区の境では不整形の落ち込みが（95A区SX05・95B区SX03）存在し、流路の痕跡であった可能性が高い。また95D区から95E区の溝群上部にも自然流路が形成され、いたるところ砂で埋まっている。

おそらく、古代から中世への移行に際し、川の氾濫が頻発したのであろう。しかし、それは川を制御しようとした人間に原因があったのであり、河はただ自然のままであろうとしただけのことかもしれない。

地割

95A区や95B区では溝による区画が行われていた。しかも溝は２条が平行して掘削され、「道」の存在を示唆していた。「道」に面して宅地があり、地割が行われているといった様相である。これは方格地割との関連を伺わせるものだが、この程度のことなら弥生時代にも認められた。問題は、もっとも溝の規模が大きい95D区SD26は除いて、SD23・24の位置付けである。先に「道」の可能性を指摘したが、この２条は断面が箱型で大規模であり、南北方向の基本的な軸線の存在を示唆すると考えられる。その方向は、北は白山神社（周辺に存在した何か）、南は神戸廃寺か。すなわち、「官道」に類するものではないかと推測する。

カマド

竪穴建物のカマドや廃棄物に含まれている炭化物は薪ではなく藁灰であったということ。

多分に感覚的だが、薪が燃料であったのではなくむしろ藁が主要な燃料であったのではという印象を強くもった。つまり、集落周辺には薪などを供給するような樹林はそれほど存在していなかったということではないか。もしくはカマドには強火力の燃料が適していたからであろうか。　この点に関係して、地床炉とカマドを併設するものが認められた。カマドが調理用であれば床面の火床は暖もしくは明かり取りということになるのだが。

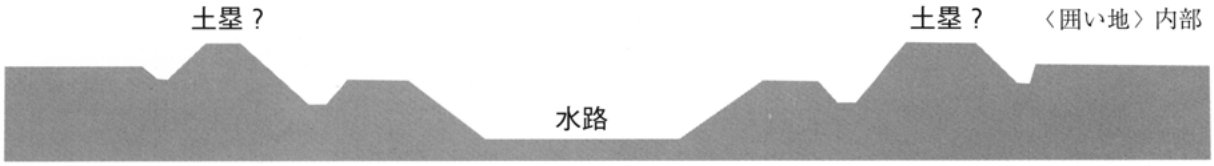
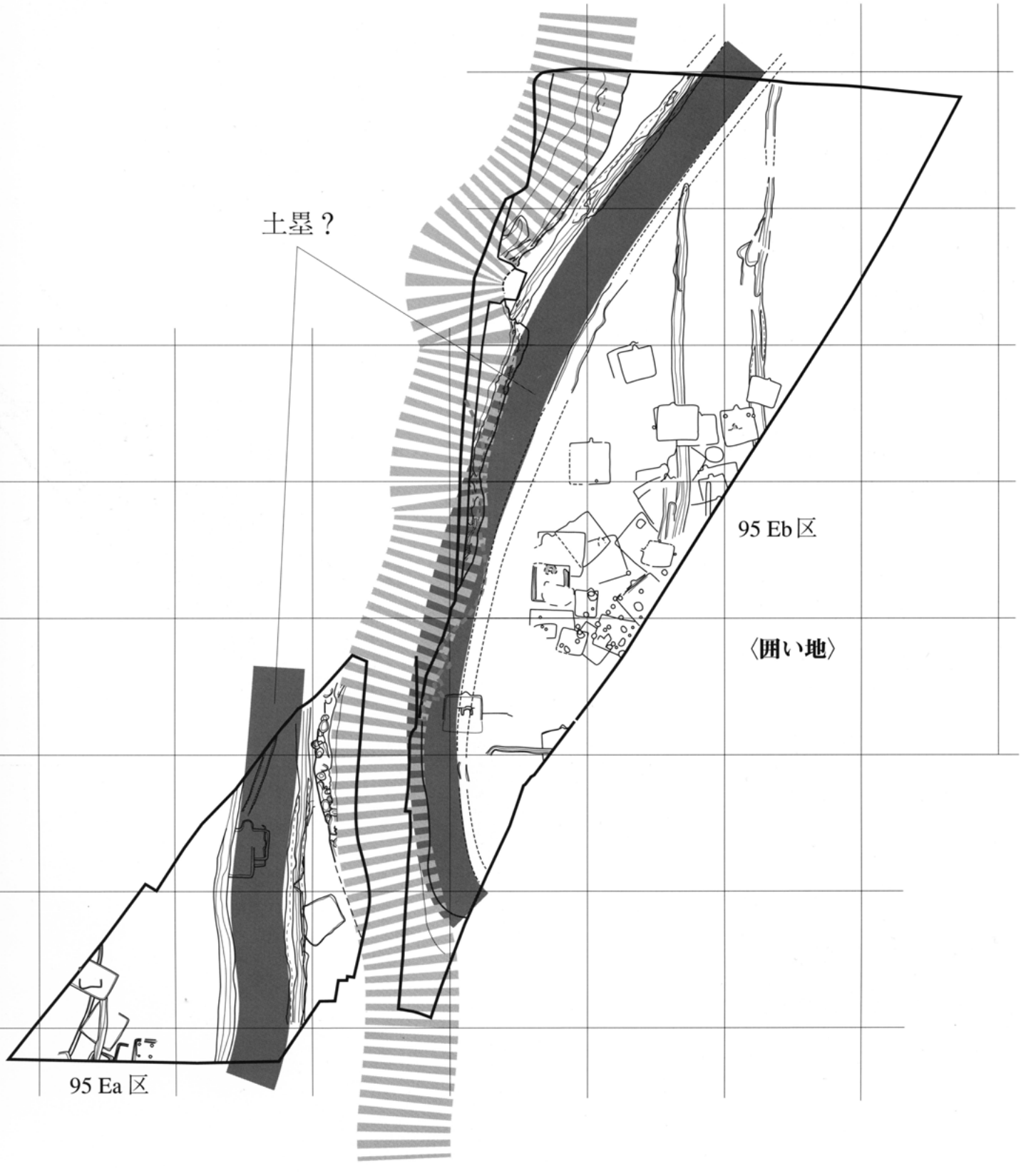


図５・４　95E 区古代土塁復元図（1/1000）



伊勢系鍋

土製鍋の多くは伊勢系で、至近の美濃からは入っていなかったこと。他方、陶器は美濃須衛産が4割程度を占めていた。流通に偏りがあったということか。縄文時代以来日常性の代名詞であった鍋が非日常、しかも国家を体現した唯一の時代であったということか。

井戸

古墳時代には井戸が普及していることを指摘したが、竪穴建物が広範囲に展開する古代Ⅰ期・Ⅱ期にはわずか1基も検出されていない。大毛池田遺跡を含めてもである。それに対して古代Ⅲ期には井戸が設置されている。この違いはいったい何に起因するのであろうか。こうした点は大渕遺跡でも同様である。なにゆえ古代前半には井戸は見られないのであろう。

大毛遺跡群との関係

次に大毛池田遺跡および大毛沖遺跡を含めて考えてみよう。

門間沼遺跡'95調査区は大毛池田遺跡と一体であり、変遷過程もパラレルである。いっぽう、大毛沖遺跡は古代Ⅰ期には調査区の主要な部分が氾濫原に相当し無住であったようだが、その後古代Ⅱ期になって建物が出現し、ようやく集落としての形が見え始める。古代Ⅲ期には大毛沖遺跡では遺構密度が上昇する。

こうした動きは近接する河道の状況と無関係ではないであろう。地籍図を参考にして考えてみよう。地籍図では河道と氾濫原が伺える。問題はそれがいつまで遡るかという点であるが、大毛沖遺跡との対応では中世までは有効なようである。しかし敢えてこれに大毛池田遺跡と門間沼遺跡の主要な遺構を合成してみた。

古代Ⅰa期・Ⅰb期。

大毛沖遺跡は氾濫原となっている。伊富利部神社古墳のあるあたりは完全に切り離されることもない中州状の高まり。河道の右岸は大きく抉りこみ大毛池田遺跡を侵食。しかし河岸はしだいに東方へ後退。

大毛池田遺跡から門間沼遺跡にかけて堤防と大溝が掘削され、河道との間に＜囲い地＞を形成？。大溝は河道に接続し水が流れる。

古代Ⅱ期には大毛沖遺跡で定住が開始される。同じく水路も掘削される。護岸施設はこの時期まで遡るか？。

大毛沖遺跡の護岸施設は両岸で検出されているので、水流を完全に固定しようという意志が伺える。護岸施設の位置は、現状では東から続く水路が南へカーブする部分に相当するが、東側で北へ折れるのか、その

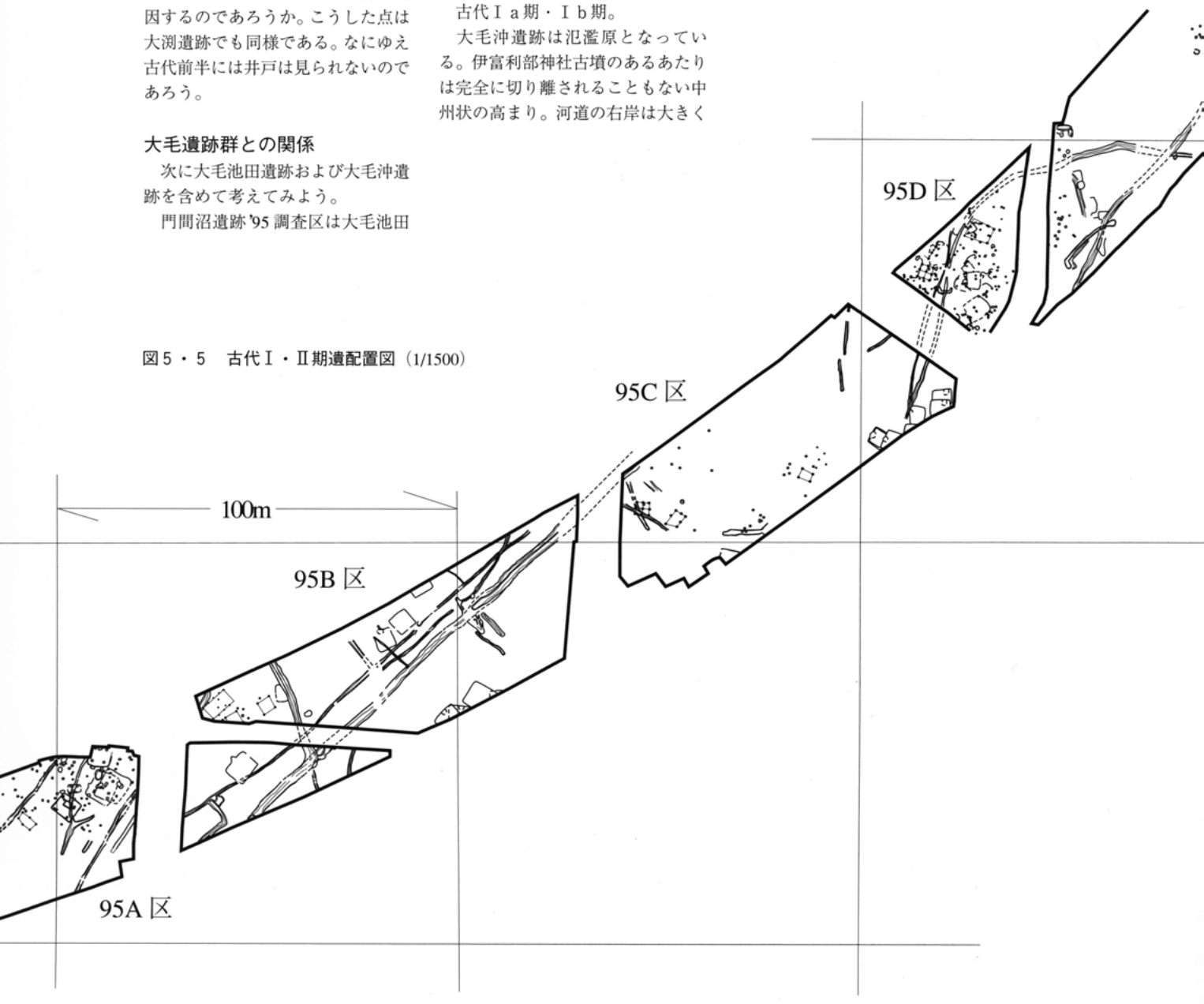


図5・5　古代Ⅰ・Ⅱ期遺配置図（1/1500）

ままっすぐのびるのかは明らかではない。

この時期、大毛池田遺跡から門間沼遺跡にかけてはさらに大きな囲い地が形成される。囲い地外縁の水路には活発な水流があり、砂による堆積が進行。

古代Ⅲ期

古代Ⅱ期までの居住地の大半が消滅。95D区SD25と95E区SD20に挟まれた部分のみに自然流路が形成される。自然流路は河道との接続が継続していることを示しているだけでなく、その部分が低いままであったことをも示している。すなわち、土塁で挟まれたままであったか、それ以外の場所の地表面が造成されて高くなったかのどちらかである。

当該地区周辺で古代Ⅲ期の遺構が見つからないのは、空白地になったからではなく、地表面の造成によって高くされたからであろうか。

95A区から95B区にかけての古代居住域は上部を砂混じりの粘土層で覆われていた。他の部分ではみられなかったから、この部分に流路が重なった可能性がある。居住域に自然流路が重なることは意外でもあるが、当時の地表面に起伏があり、さらに周辺に畑地が展開していたのならあり得たことであろう。

それ以後、門間沼遺跡は後背湿地化。

（石黒立人）

図5・6　古代Ⅲ期遺配置図（1/1000）

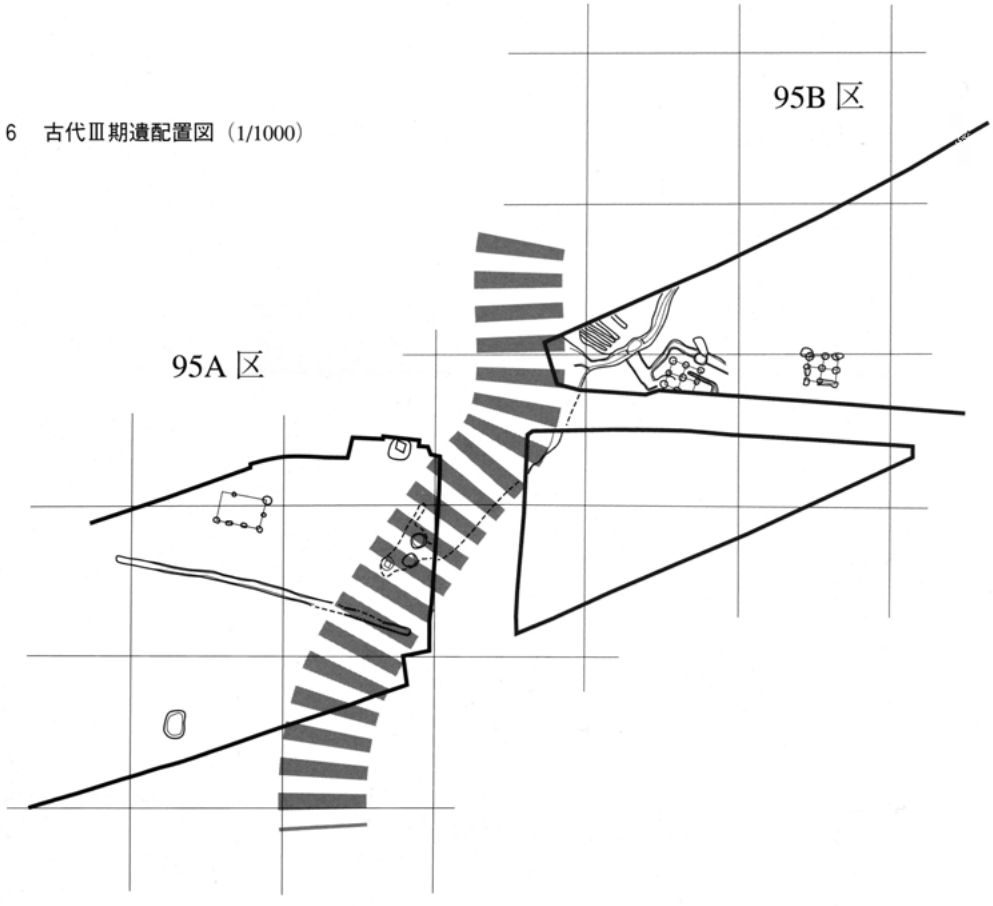


図５・７　遺跡周辺地籍合成図１（1/5000）

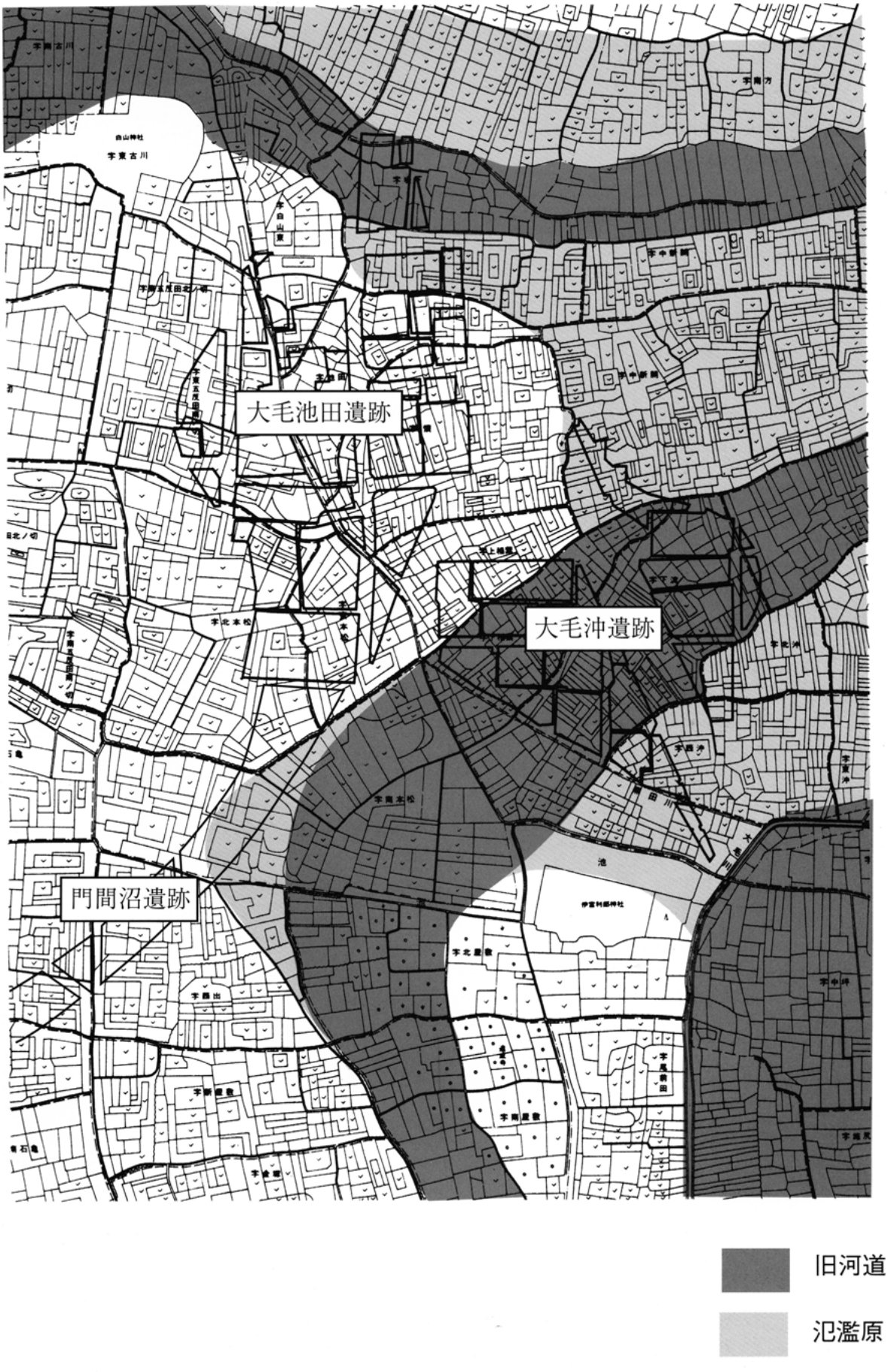


図５・８　遺跡周辺地籍合成図２
古代Ⅰ期（1/5000）

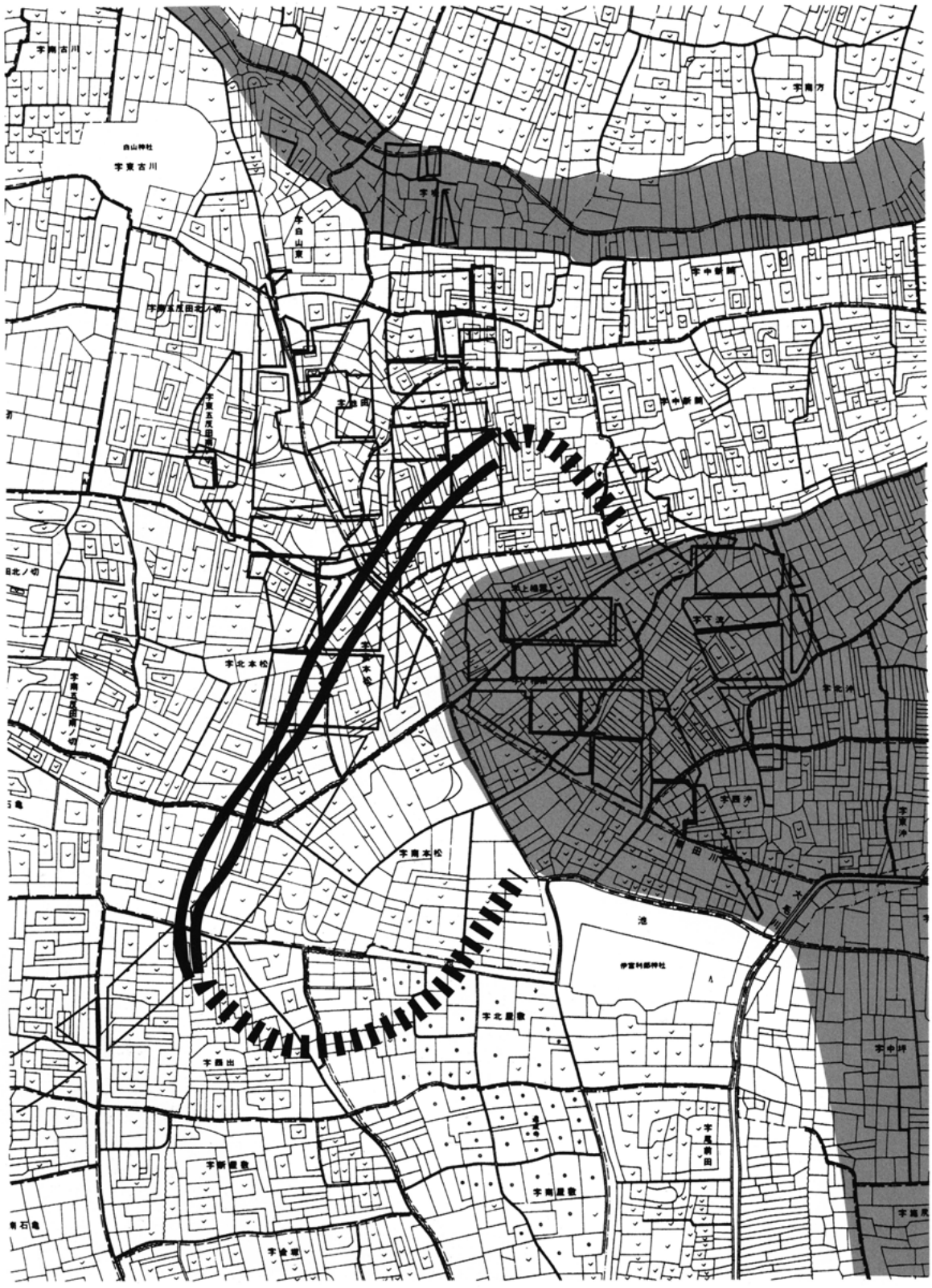


図５・９　遺跡周辺地籍合成図３
古代Ⅲ期（1/5000）

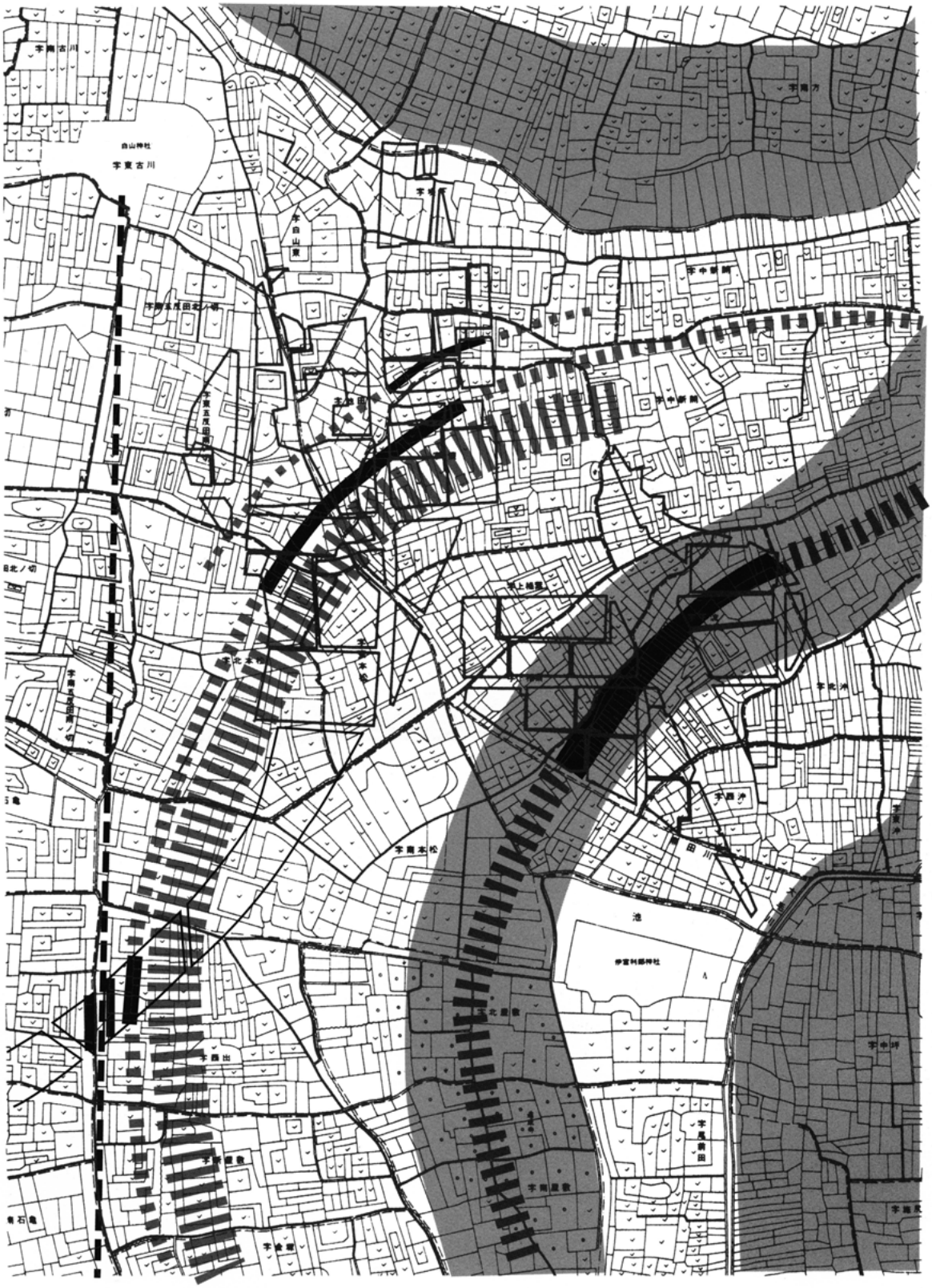


図５・10　主要遺構合成図１
古代Ⅰａ期（1/4000）

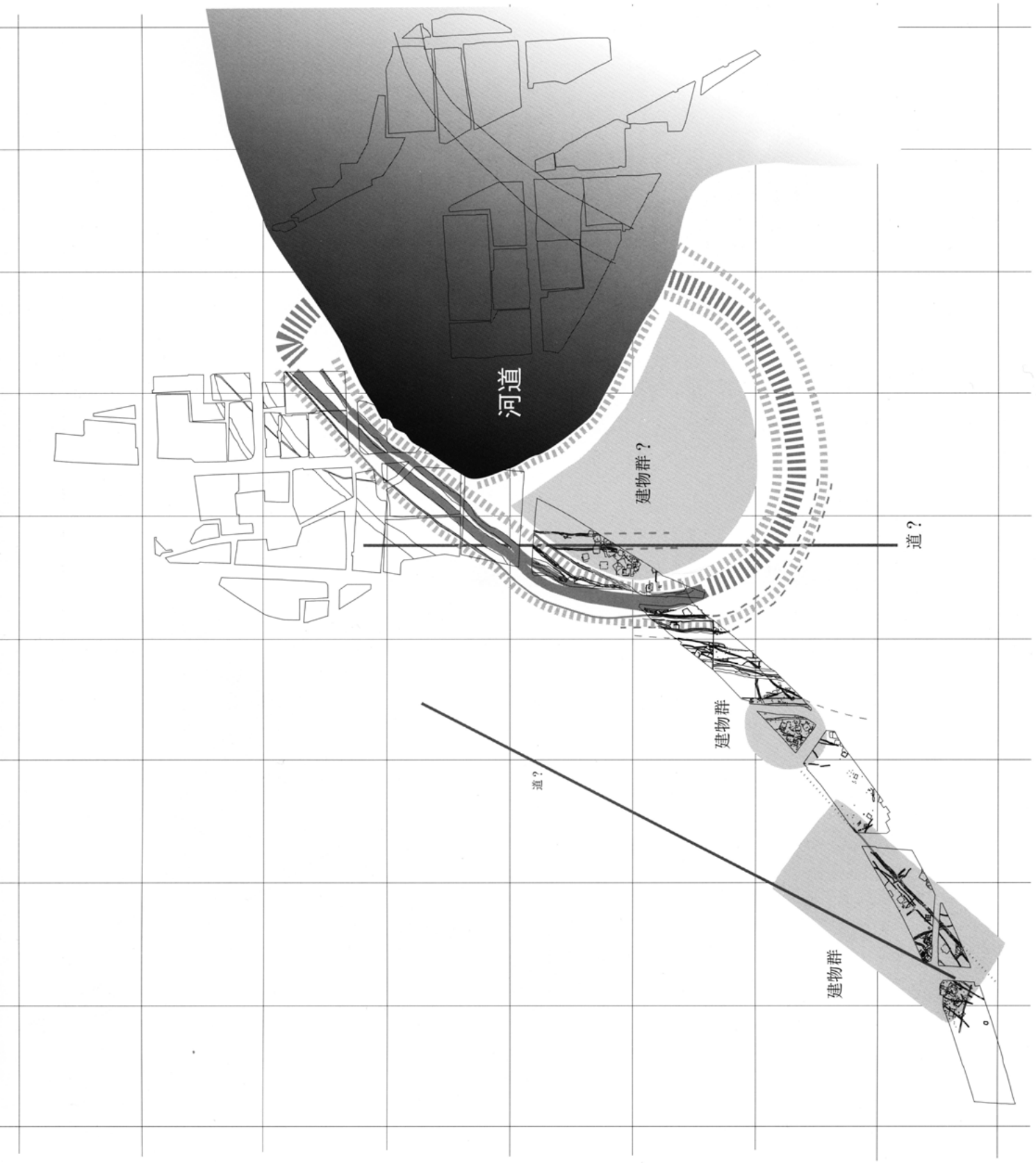


図５・11　主要遺構合成図２
古代Ⅰｂ期（1/4000）

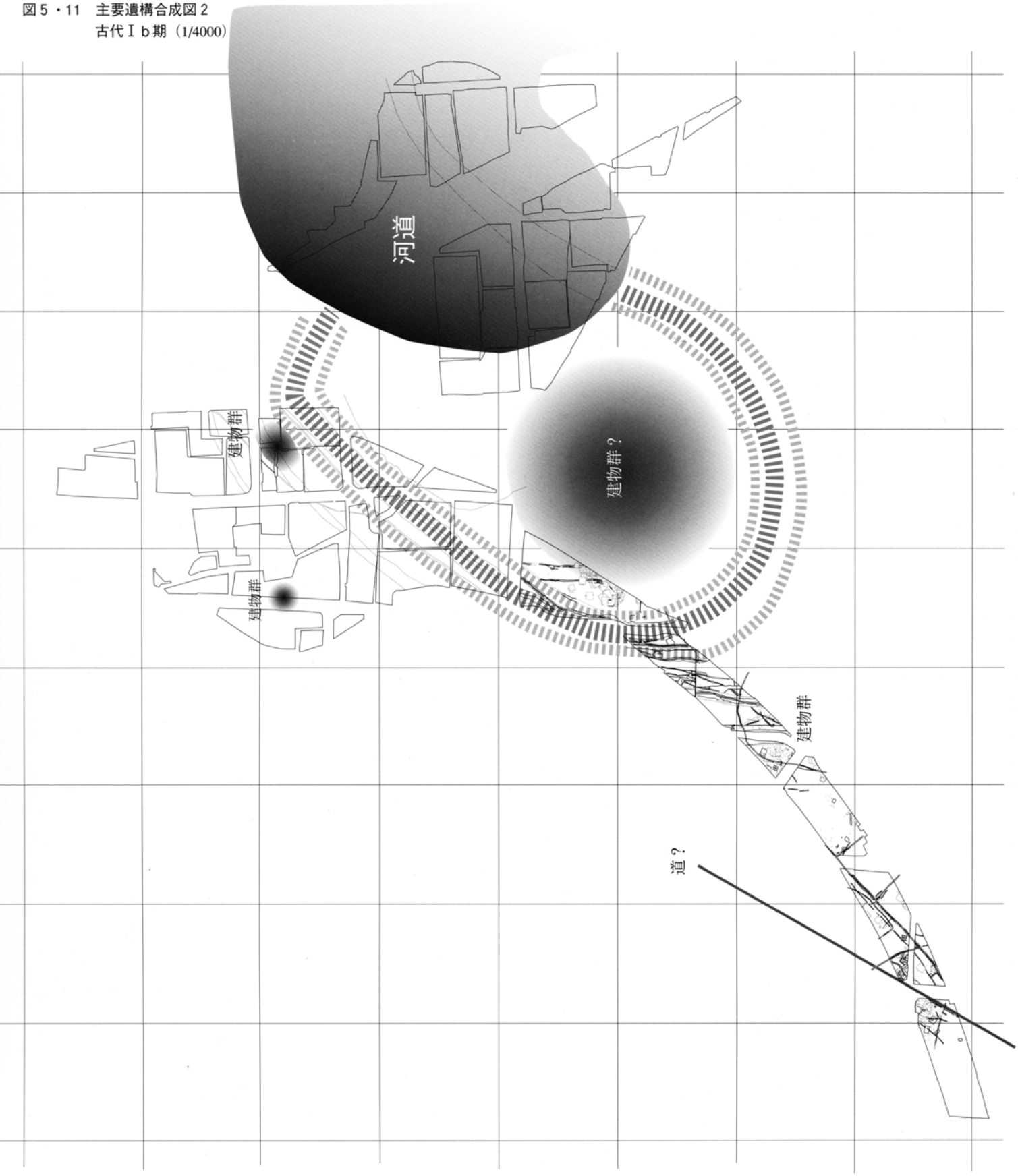


図5・12　主要遺構合成図3
古代Ⅱ期（1/4000）

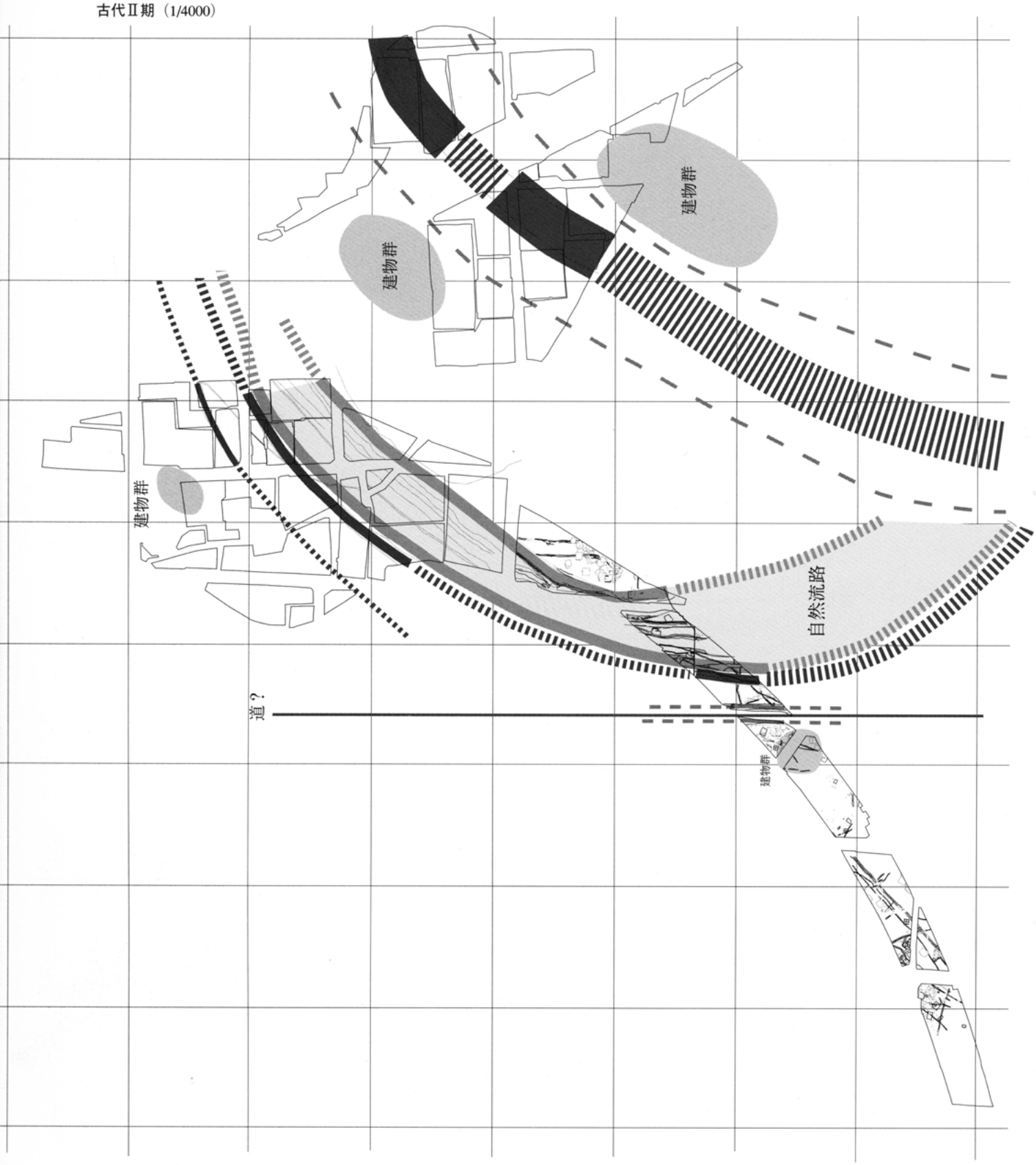


図5・13　主要遺構合成図4
古代Ⅲ期（1/4000）

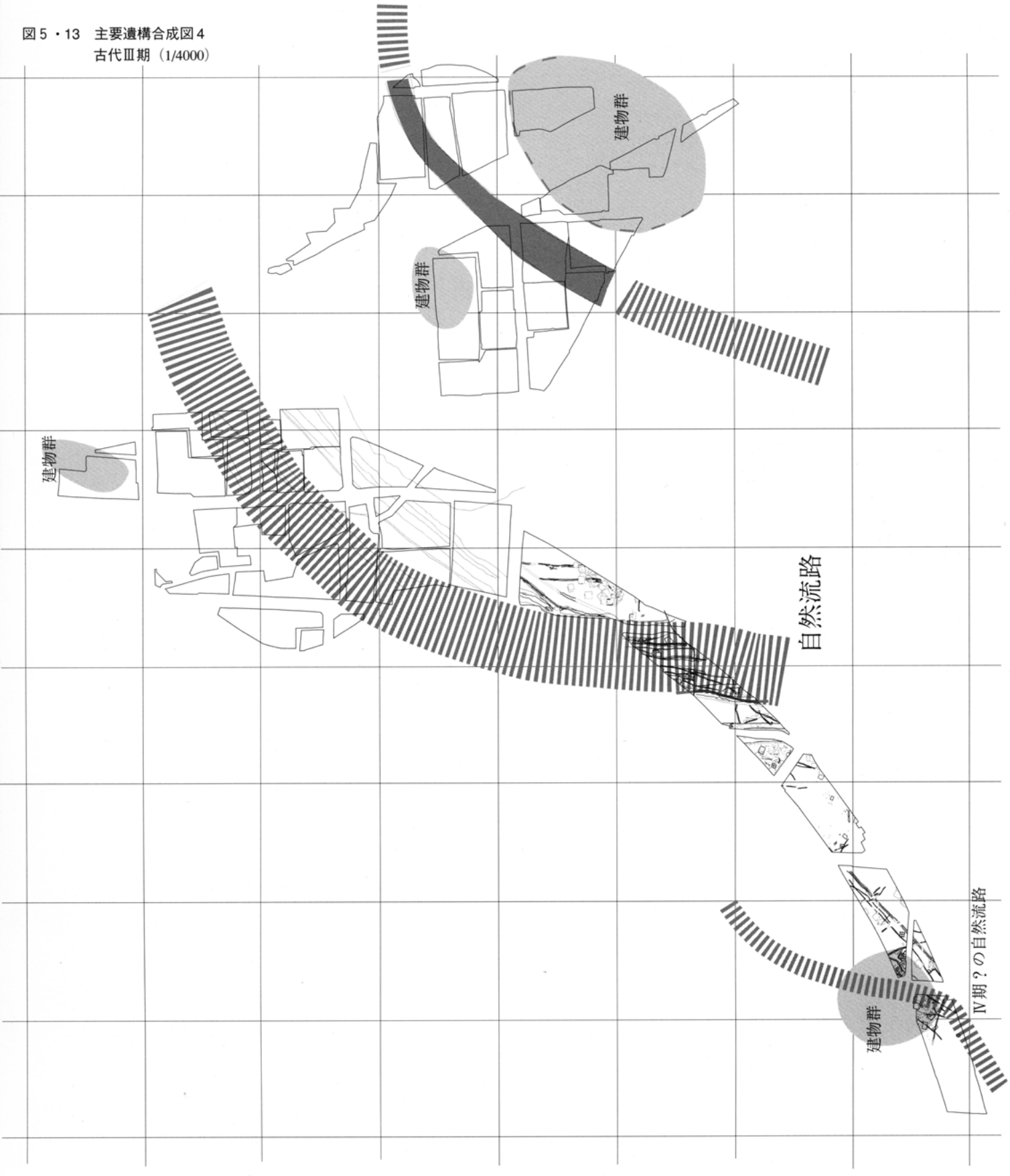


図５・14　周辺イメージ
古代Ⅰ期（1/25000）

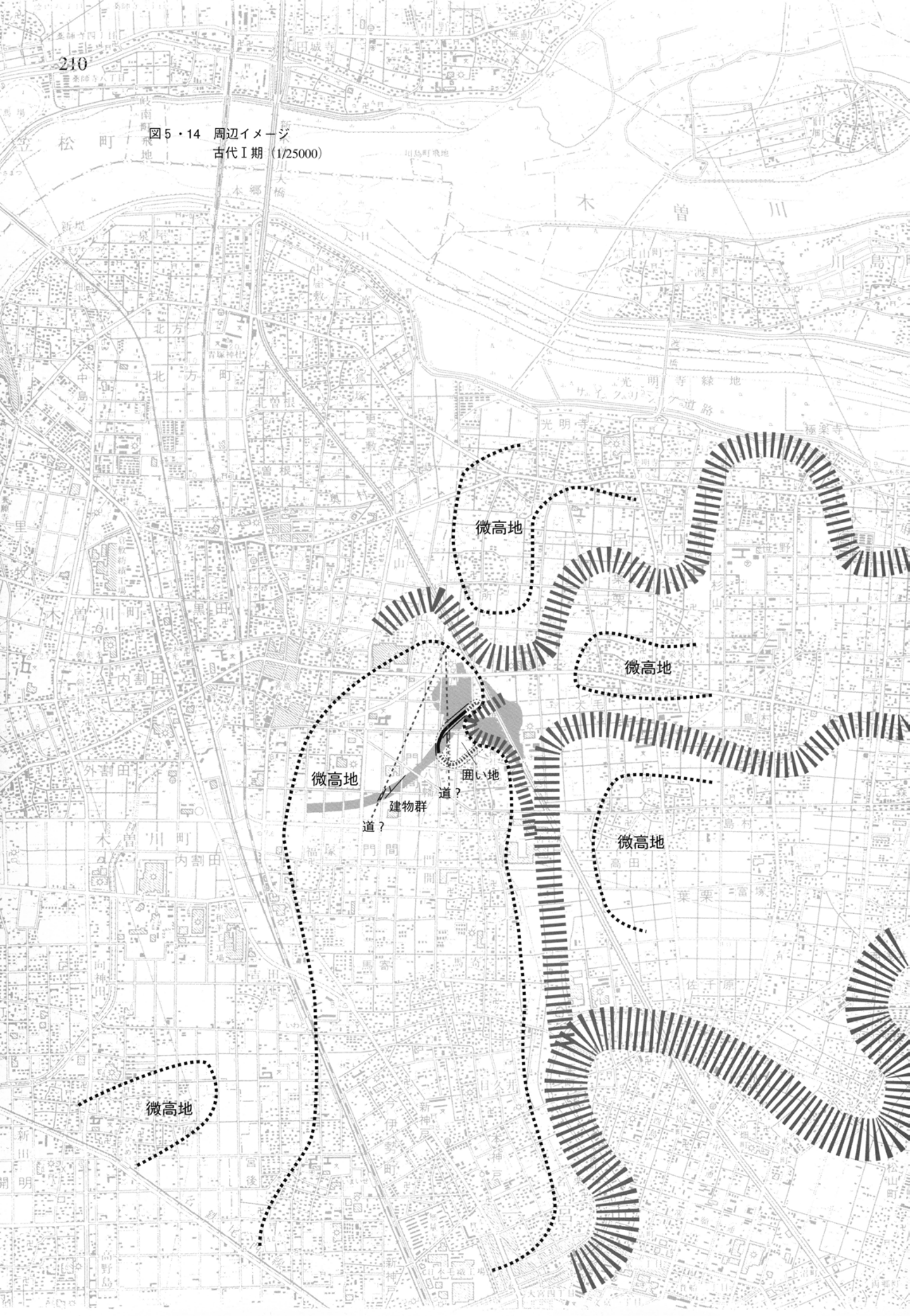
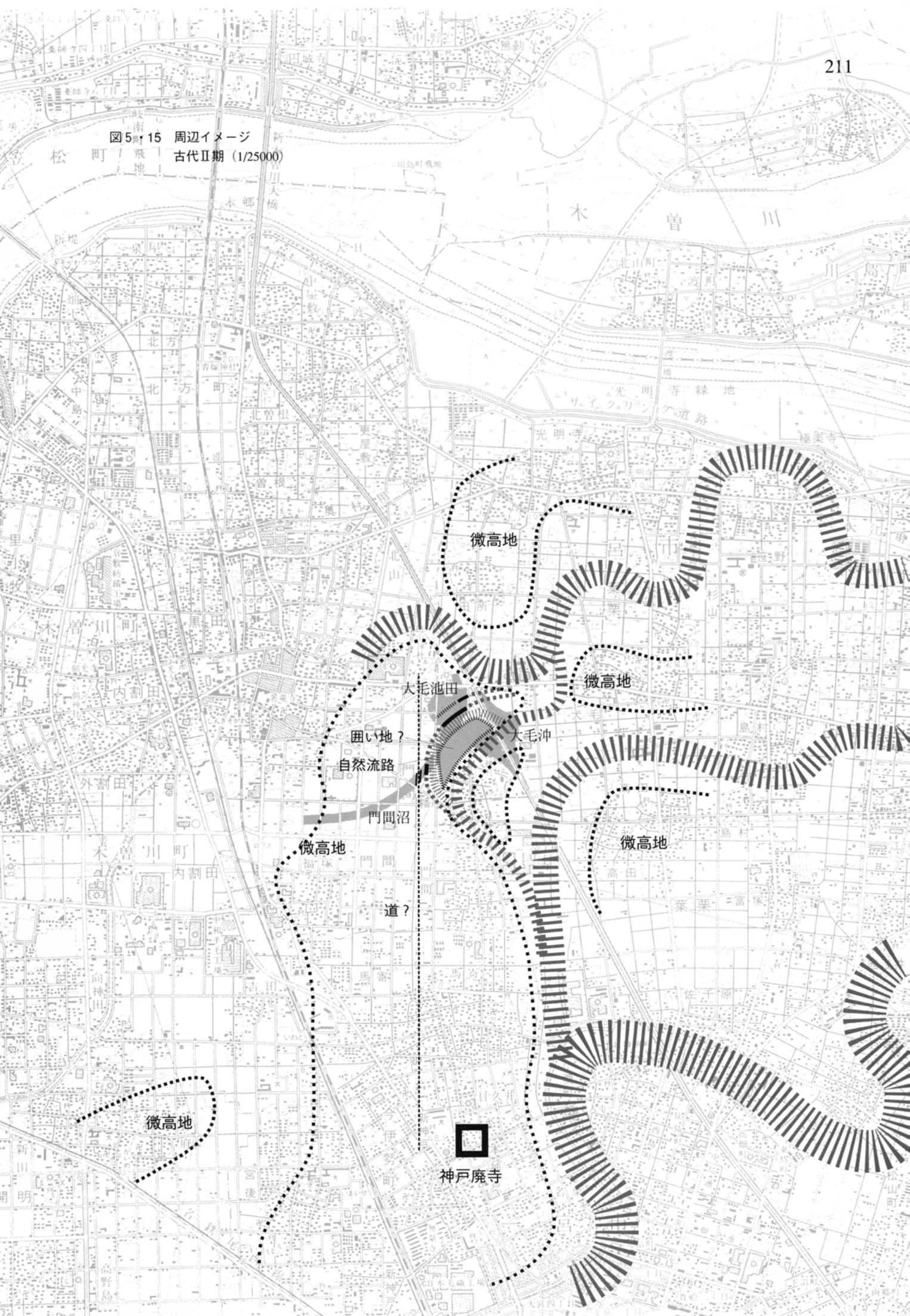


図5・15　周辺イメージ
古代Ⅱ期（1/25000）



3．中世の様相

中世は大きく3段階の変化が考えられた。

第1期

屋敷地が点在する段階。12世紀後半から13世紀前半。

95A区および95C区で建物が建ちそうな区画を検出した。実際に建物を推定することはできなかったが、95C区では膨大な柱穴群を検出した。

95Da区では平行する2条の溝に挟まれた「道」を検出した。この「道」の下には古代の「道」が埋もれていた。古代以来の基本的な地割に関係している可能性が高い。

第2期

複数の平行する幅の狭い小溝が一定の軸線をもって展開する段階。

95A区の区画はこの段階にも存続しているようであるが、95C区では東西に溝が掘削され、屋敷地区画としての性格を喪失した可能性が高い。小溝の性格はなお不明だが、少なくとも旧地表面がこの部分で低かったことは間違いなさそうである。調査所見でも、95B区や95C区では小溝群が位置する部分は帯状の窪地であったことがわかっている。つまり、高まりの裾に掘削された溝である。

まったくの想像になってしまうが、低いがゆえ小溝が残ったのだとすれば、上述した「道」とは違う意味で「道」であったかもしれない。とすれば、周囲の高まりは畠か。

第3期

方形土坑群や集落とは無関係な小区画が展開する段階。13世紀後半以後。

方形土坑群は'94調査区ではほぼ全域、'95調査区では95C区までは濃密だが、95D区からは急激に数を減らす。同時期の集落に近いからかもしれない。

95A区から95C区にかけてでは、第2段階の小溝と重複するものが多い。

94C区では小溝による区画が複数検出されている。方形土坑と重複しているものはわずかで、基本的には両者は選地を異にしている。区画が島畠の裾ラインであるならば、うなずけることではあるが。

方形土坑の検出状況が旧地表面の標高に左右されることは確実で、旧地表が高ければ方形土坑の深度は浅くなるわけであるし、場合によっては遺構として検出されないかもしれない。方形土坑の深度が一定であると仮定するならば、小溝群と重複する背景はその部分における旧地表面標高が低かったと結論付けるのが妥当であろう。

中世における遺構の展開は以上の段階を経ると考えているが、重要なのは遺構の空白部分で、第2段階からその部分には畠が強く関係してくるような印象をもっている。95D区からは空白部分も広くなるが、とくに北東から南西にのびる道の東側、かつて古代に大溝が掘削されていた部分以西は少し高まりになっていたようで、そのことは地籍図からも伺え、おそらく島畠が展開していたのであろう。95E区では道に直交して溝が何条も検出されており、畠の区画溝であった可能性が高い。

'94調査区は溝と方形土坑が展開するだけの生活の姿が殆ど見られない空間である。しかし、'95調査区も地割りは復元できるものの、屋敷地が整然と並ぶと言うには程遠い。屋敷地というよりは宅地と言うほうが適しているような建物配置の復元が難しい区画がいくつかある。

井戸は曲物を積み上げただけのものがほとんどで、板組みの井戸は検出されなかった。廃絶時に抜き取られたのではなく、もともとなかったようだ。

（石黒立人）

図5・16　95A区中世屋敷地1（1/400）

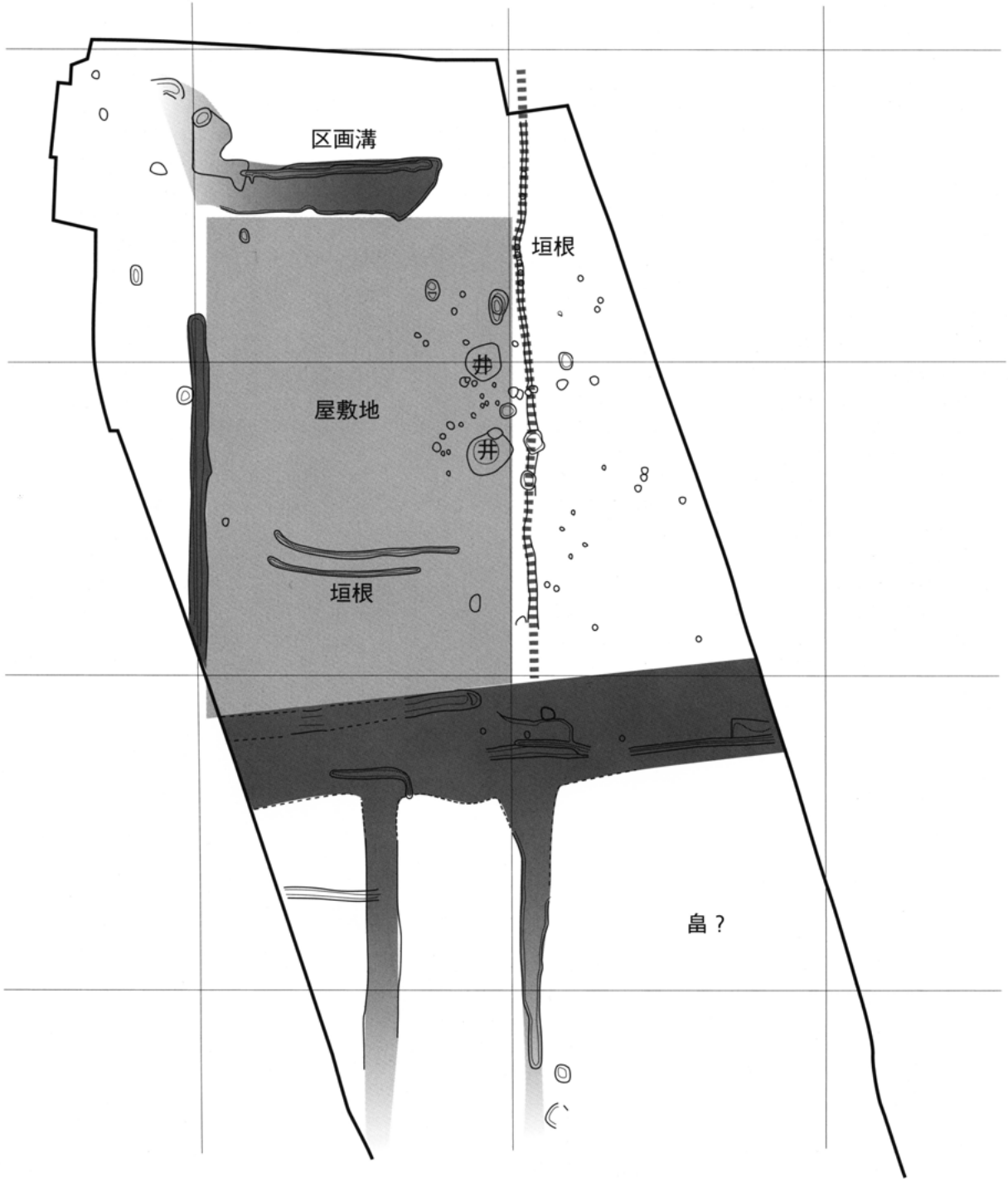
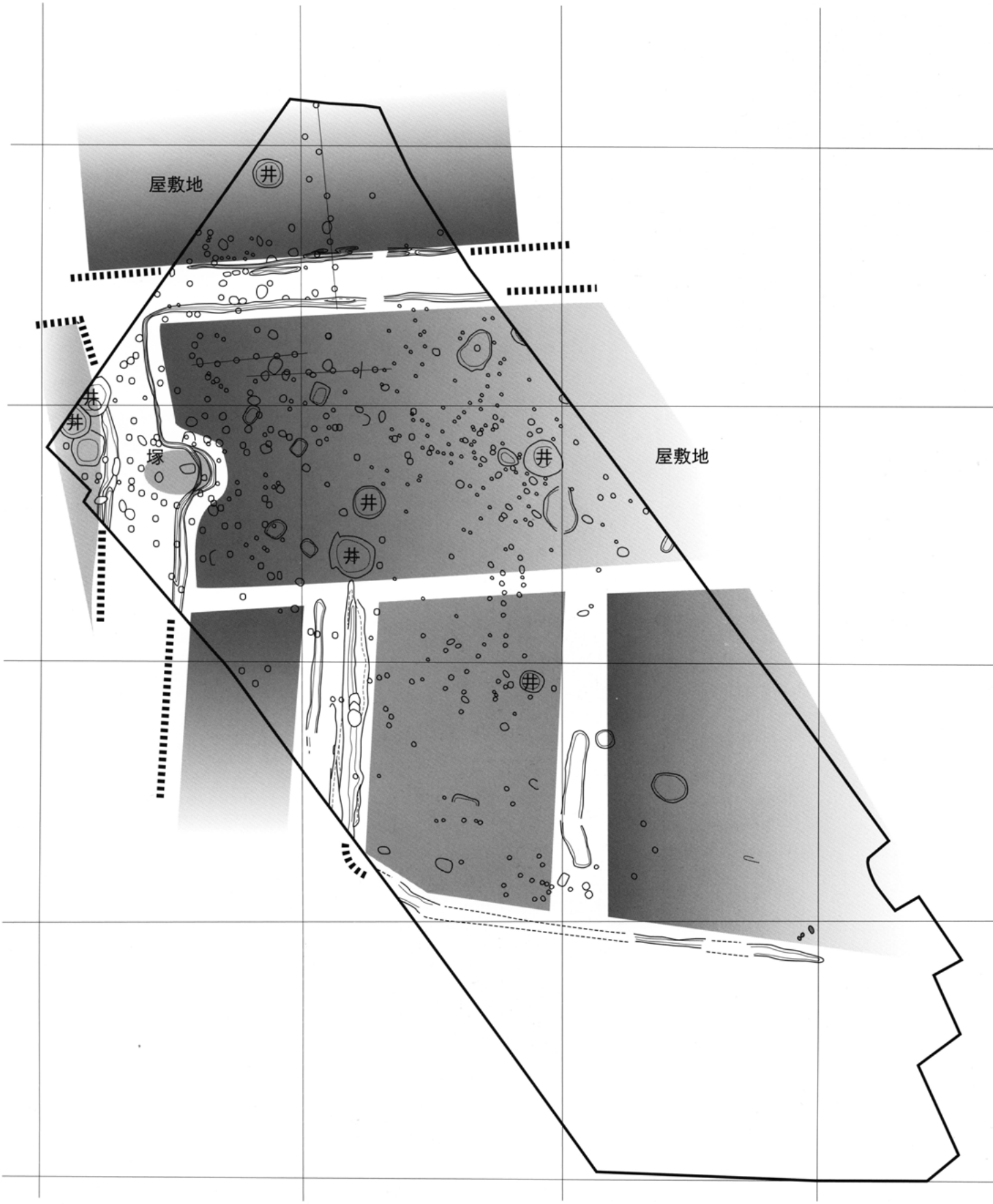


図5・17　95C区中世屋敷地2（1/400）



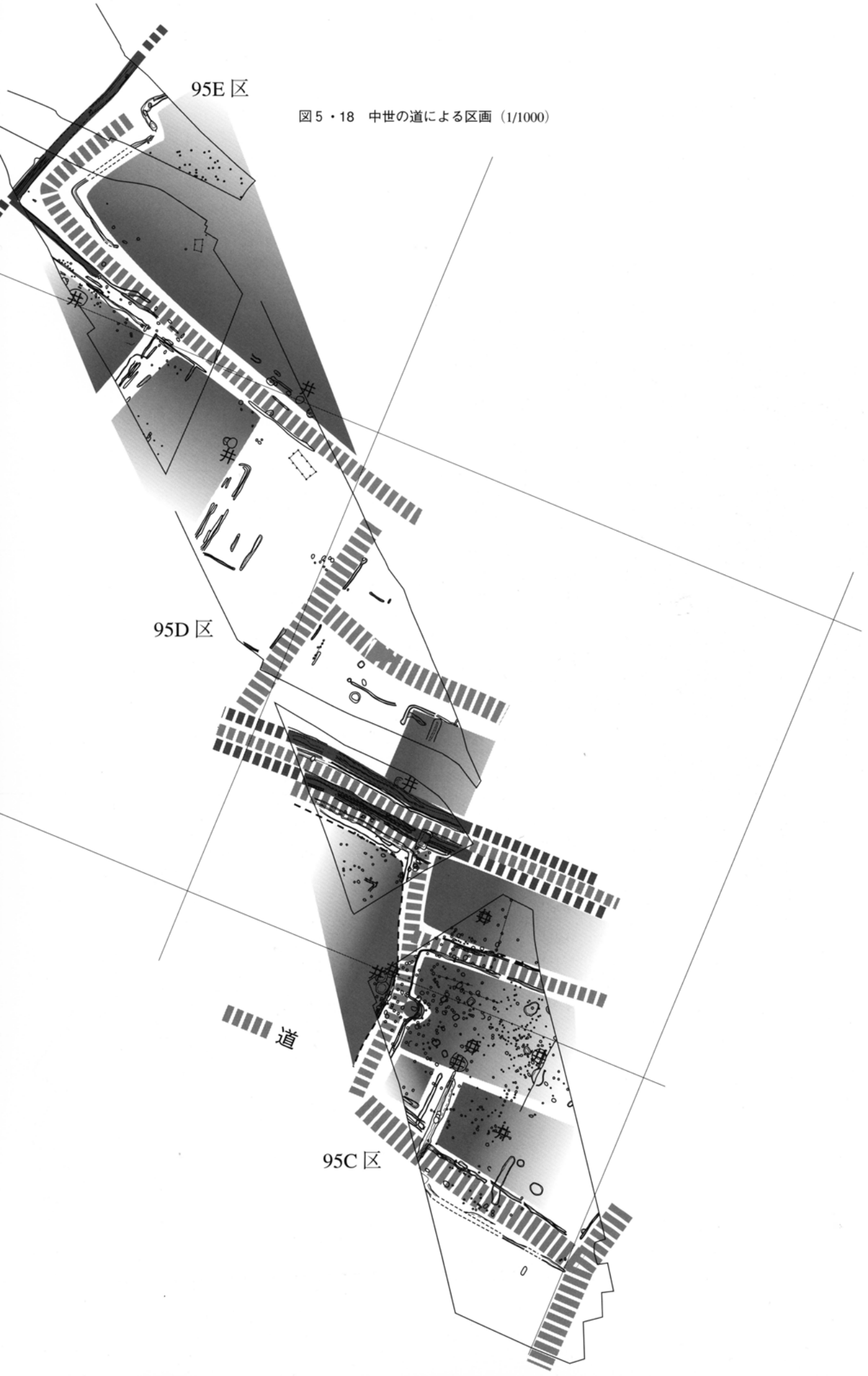


図5・18　中世の道による区画（1/1000）

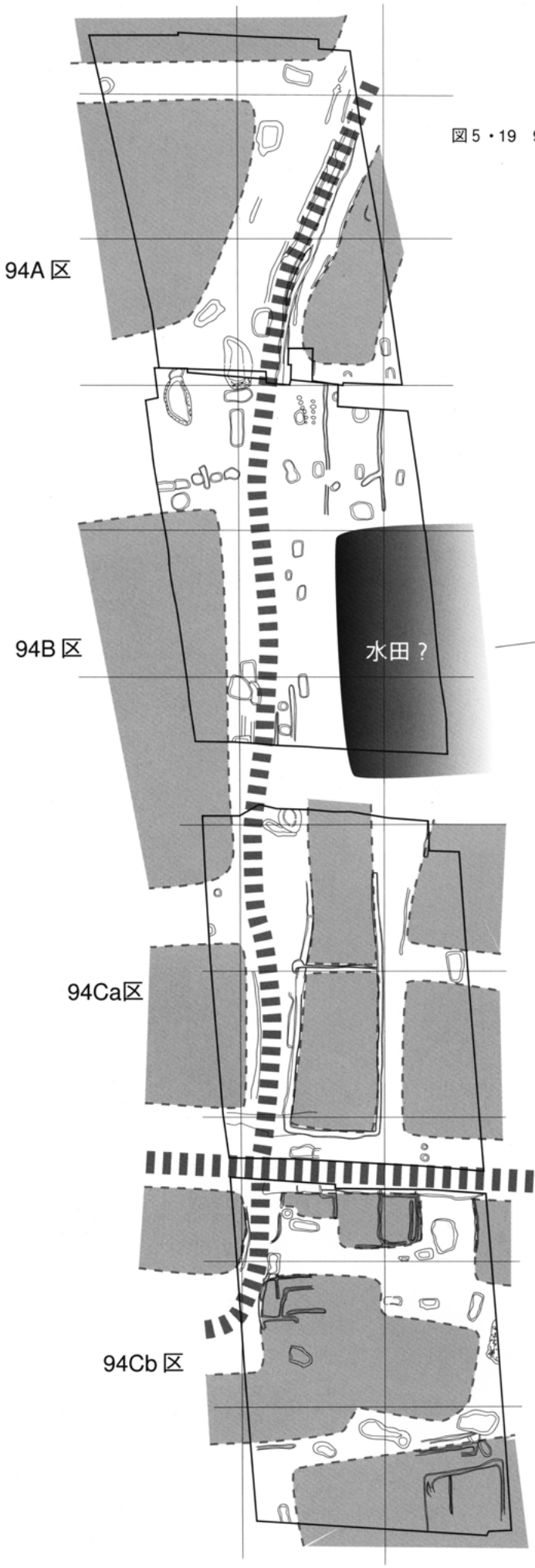


図５・19　94A・B・C区中世区画（1/800）

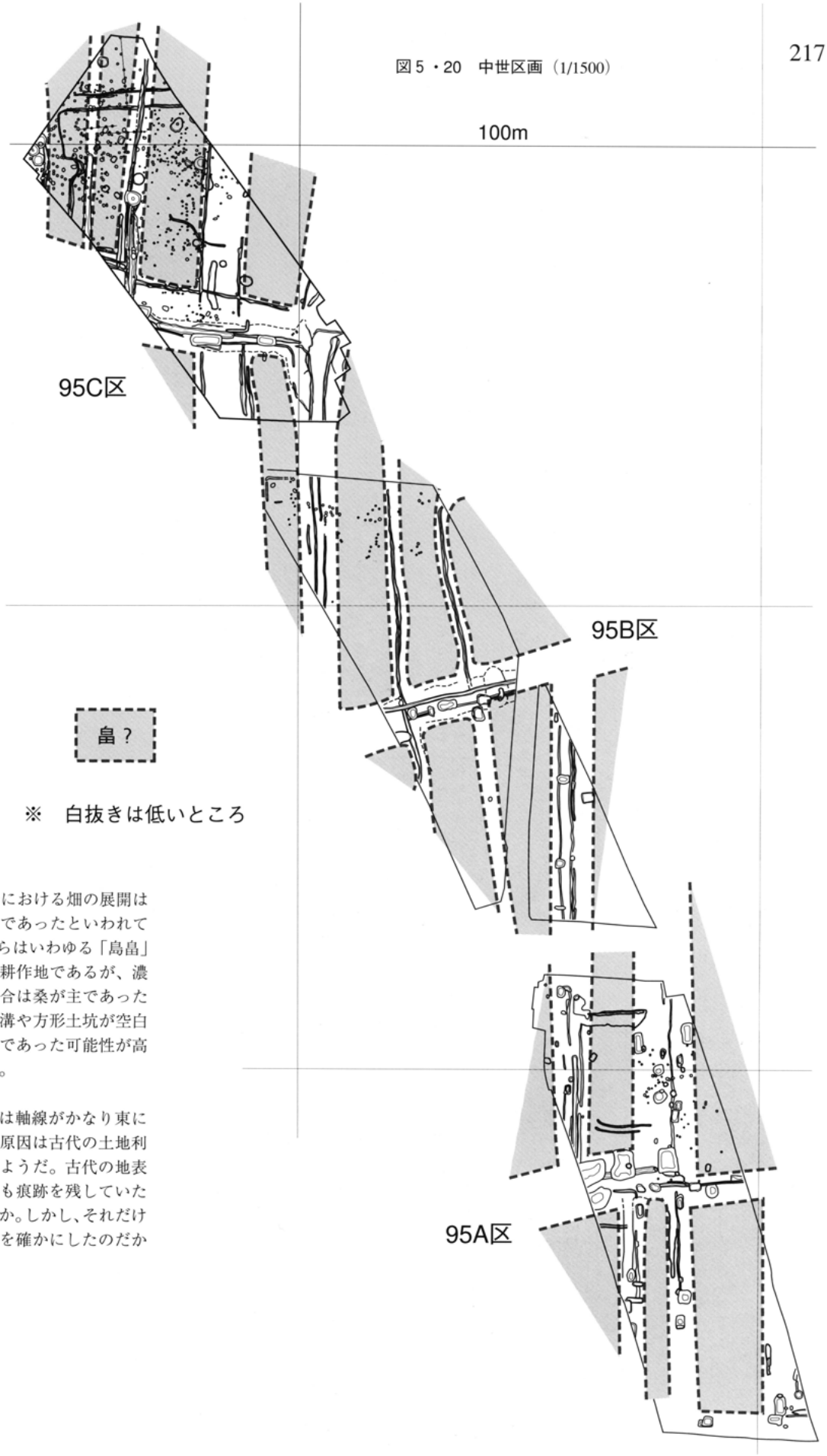
道

畠？

この部分を水田と推定したのは、土層断面の観察結果によれば低い平坦地となっていたこと、その範囲は方形土坑群が空白となっている点などによる。

方形土坑が空白である場合には、そこが高いか低いかのいずれかであるが、つながるべき溝が途切れていることから、さらに低い部分であると推定した。

図5・20　中世区画（1/1500）



濃尾平野における畑の展開はかなり濃密であったといわれている。それらはいわゆる「島畠」と呼ばれる耕作地であるが、濃尾平野の場合は桑が主であったらしい。小溝や方形土坑が空白の区域は畠であった可能性が高いと考えた。

95E区では軸線がかなり東に傾く。その原因は古代の土地利用にあったようだ。古代の地表面が中世にも痕跡を残していたと言うべきか。しかし、それだけの造成工事を確かにしたのだから。

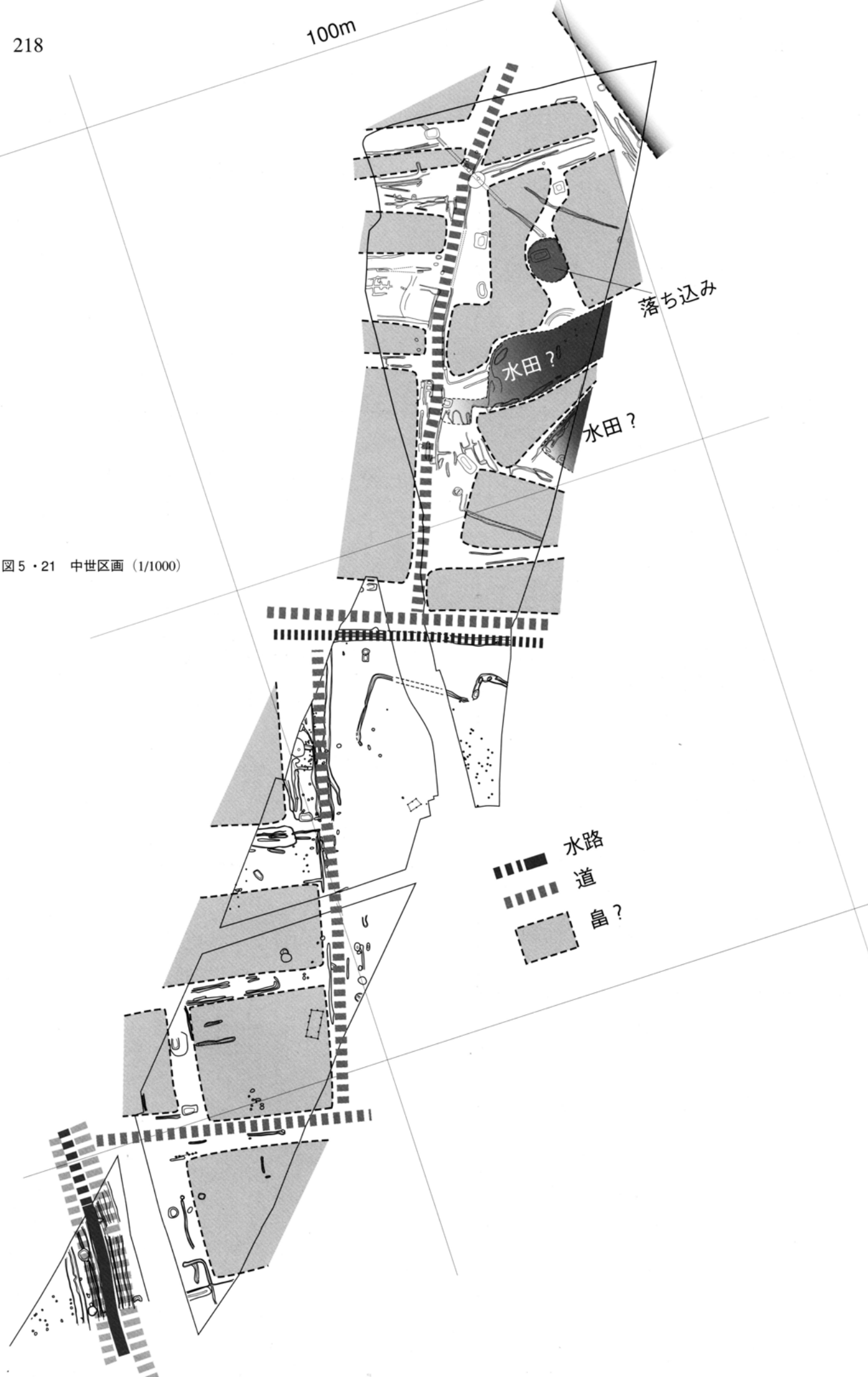
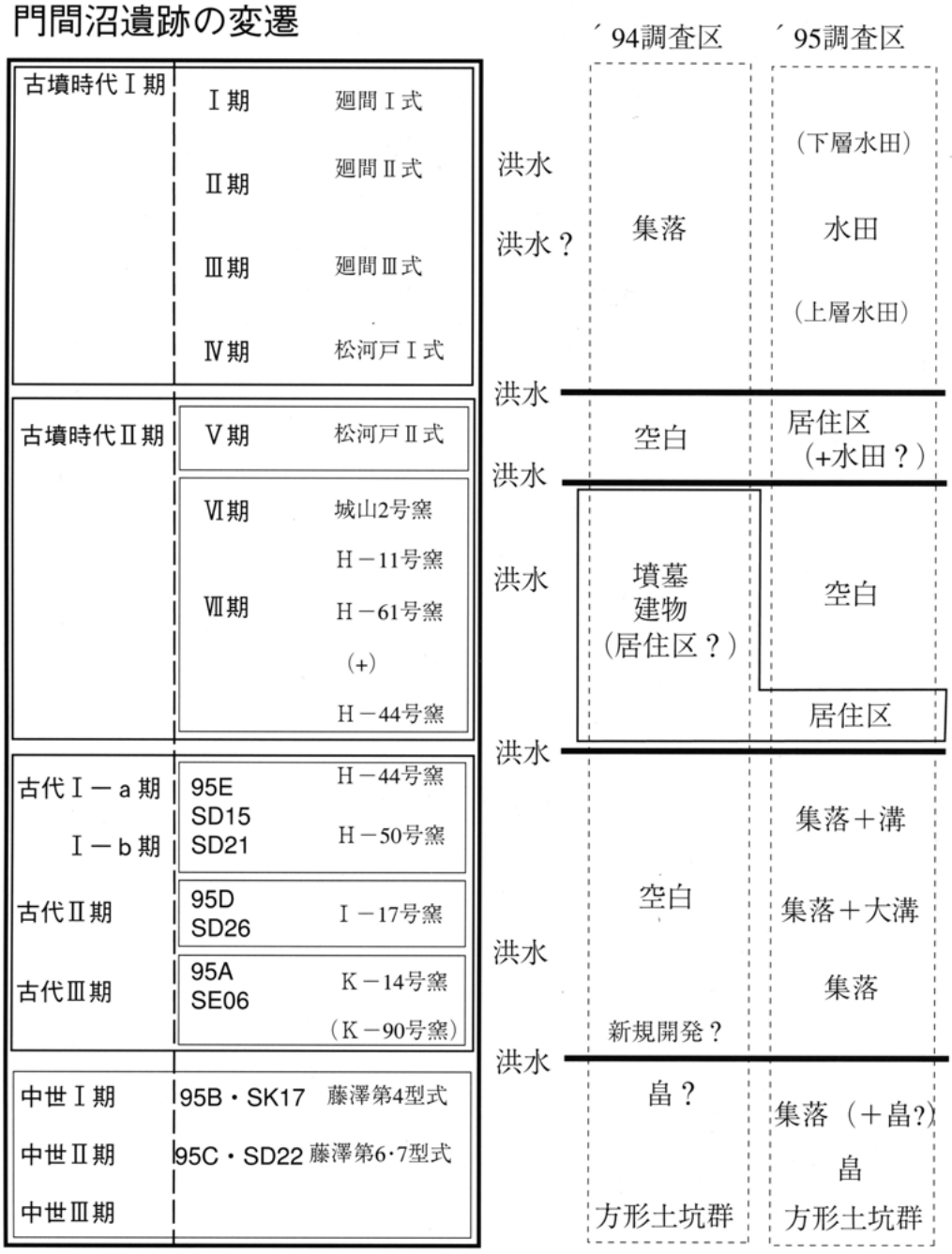


図5・21　中世区画（1/1000）

表５・１

門間沼遺跡の変遷



4．大毛沖と大毛池田、そして門間沼

田所、大毛沖、池田、そして門間沼遺跡、古代から中世にかけてこの4遺跡は木曽川によって形成された広大な沖積地に位置する。古代においてこれらの遺跡周辺には、網の目状に流れる無数の中小河川が存在していた。大地に刻まれた川筋は、時には河川交通の幹線として、時には大きな被害をもたらす洪水の源として、人々の生活に多大な影響を与える基層をなしていた。

木曽川の氾濫原に位置するこの地域は、カワを掌握することが生活の安定につながる。それは、ヒトが自然を支配することにも繋がるわけだが、時にはヒトの理解を超える自然の営みもある。ヒトはそれを自然災害と呼ぶ。かつて、この地域に居住したヒトは、この自然災害の猛威に苦慮しながら生活していた。カワを整備し、その安定を図った。しかし、ヒトによって手の加わったカワは、もはや自然流路ではない、人工水路である。護岸・築堤などあらゆる整備を行い、流路の安定を求めた。流路を固定することは自然地形を破壊することになる。したがって、ヒトはその破壊行為を継続することによって生活の安定を求めることになる。

＊

大毛沖遺跡は一部古墳時代の遺構を含むものの、概ね門間沼遺跡の古代Ⅱ期以降に遺跡が展開する。特にⅢ期以降の遺構・遺物が多い。ここでは、古代Ⅱ期以降を中心に古代・中世の大毛沖遺跡について概要を提示し、そのうえで門間沼をはじめ隣接遺跡との関連性を示したい。なお遺跡の時期区分は混乱を避けるため、門間沼の時期区分に従った。

古代Ⅱ期は遺構が極めて少ない。大毛沖93A区のみに確認できた。流路の左岸に相当する地区で、竪穴住居が重複して2棟、これらに隣接して畝状遺構と水路が展開する。実は、古代Ⅱ期とⅢ期には間層があり、層位的には上下関係が確認できている。この間層は洪水性の堆積と考えられ、流路が大きく北西から南東へと移動する時期であると想定しているので、Ⅱ期に居住域が認められるものの、その多くは流路の変更に伴う削剥が進行し滅失している可能性が強い。

古代Ⅲ期は窯式編年では岩崎41号窯期から高蔵寺2号窯期以降が相当する。大毛沖遺跡ではこの時期以降に微高地が安定する。流路に設置された護岸施設はその出土遺物から折戸10号窯期に比定したが、Ⅱ期とⅢ期の洪水性の堆積、Ⅲ期以降の微高地の安定、これら2点を優先させれば、護岸施設の時期はもう少し遡らせて考えてもよい。すなわち、護岸施設の設置が流路を固定させたと考えられる。

さて、大毛沖遺跡は護岸施設の設置以降に微高地が安定する。これにともなって居住域も拡がりをみる。ただ、竪穴住居を例にあげても、30棟に満たない。遺構が切り合う例もほとんどない。遺物により時期比定をすると2～3棟単位の住居が約3世紀にわたって連綿と継続する程度である。集住地区とは考えられない景観が浮かぶ。

＊＊

次に隣接する遺跡との関連性、特に大溝群と河道について考えてみよう。大毛池田から門間沼遺跡を縦断する大溝群は古代の各時期を通して存在する。その南東には古代Ⅲ期以降に流路が固定される大毛沖遺跡を縦断する河道がある。大溝がこの河道の放水路か河道につながる囲い地の溝であるかは判断できない。しかし、大溝群の西側に白山神社へ延びる道が注目できる。道の東に展開する大溝群や河道の安定は、そもそもこの道を整備する目的が考えられる。すなわち、尾張北西部を縦断する道の確保が見いだせるのではないか？さらに、陸路と水路を整備することにより、物資の運搬など水陸両用の道を確保する目的が想定できるのではないか？

中世の大毛沖遺跡は居住域・生産域・墓域といった区割が明確にできる。居住域は少なくとも2ヶ所あり、報告書では居住域Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの3地区を想定した。

居住域Ⅰは中世Ⅰ～Ⅱ期にまたがる区画溝および井戸などが確認された。この区画溝の西側に隣接して畝状遺構・昆虫土坑など畑地に関連する遺構も確認された。この居住域Ⅰは河道の左岸に位置し、河道と居住域の間には河道に沿って延びる道も検出できた。

居住域Ⅱ・Ⅲは河道を挟んで居住域Ⅰの対岸に位置する。居住域Ⅰと同様に、居住域と河道の間には河道に沿って延びる道も検出できた。居住域Ⅱ・Ⅲは各々中世Ⅱ期とⅢ期（大毛池田遺跡の居館区画6と同一時期）に比定でき、これらがほぼ重なって確認された。居住域Ⅱは河道に方形区画の軸線が規制されているのに対して、居住域Ⅲは大毛池田遺跡の居館区画6に方形区画の軸線が規制されている。

河道は中世に湿地化しており、時折流水性の堆積が見られるもののほぼ流路としての機能は認められない。そして、この地区には方形土坑がほぼ時期ごとにエリアをもつ。さらに、一見雑然と築かれてているようにみられる方形土坑も、長軸方向から方位をみた場合、河道に対して直交するか並行するかのいずれかの規則性が見られた。方形土坑は一般に墓坑として認識されている。これに対して、集石に区画溝を伴う墓域も検出された。居住域Ⅰの南西に位置するこの墓域からは骨片や骨壷に使用された古瀬戸などが見つかっている。

＊＊＊

ここでは門間沼遺跡から大毛池田遺跡にかけて確認されている推定鎌倉街道、そして大毛池田遺跡の居館区画6について、それぞれとの関連性を考えてみる。

中世Ⅰ～Ⅱ期にかけて見られる景観は河道に沿って延びる道に区割規制されて展開している。これは自然地形に規制されていると置き換えることもできる。その一方で河道に沿った道に視点を置くと、大毛沖遺跡をほぼ東西に縦断する道は、いずれも鎌倉街道へつながる。西は鎌倉街道、東は現在の嶋村を結ぶ道である。鎌倉街道が幹道だとすると、これらは枝道に当たる。

中世Ⅲ期は中世Ⅰ～Ⅱ期の区割規制が一変する。大毛池田遺跡の居館区画6によって区割規制が再構築される。この居館区画6は方一町の規模を有する居館で、この地を支配していた有力者の存在を想起させる発見となった。大毛沖遺跡の居住域Ⅲは唯一この時期の遺構・遺物が集中した地区で、異色な空間であった。区割規制も居館区画6と同一の軸線をもち、居館区画6の周辺をとりまく屋敷地としての性格が考えられよう。

（永井宏幸）



94Ca区
SD42
琴出土状態



94Cb区
SE28



94Ca区
SE10



94Cb区
SE28



94Ca区
SE01



94Cb区
SE30



94Cb区
SE16



94A・B区
SE02



94Cb区
SE07



94A・B区
SE03



94A・B区
SE04



95A区
SE05



95A区
SE01



95Ba区
水田



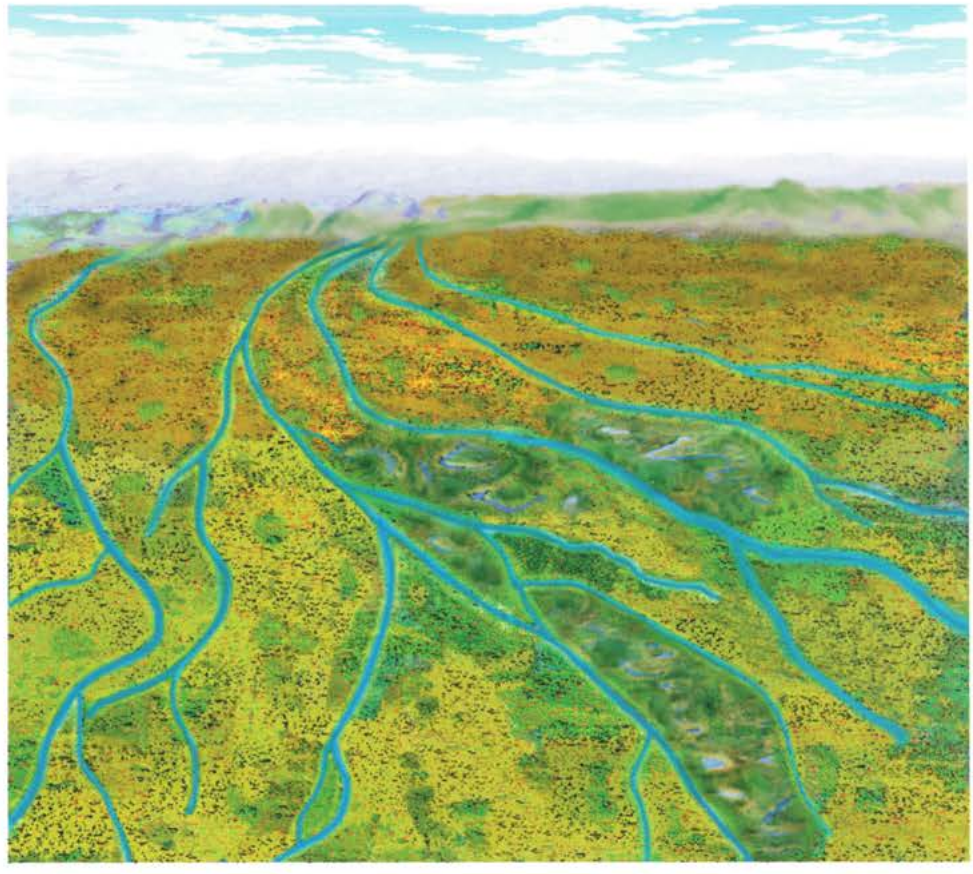
94A区
SE02



95Ba区
SB06
カマド







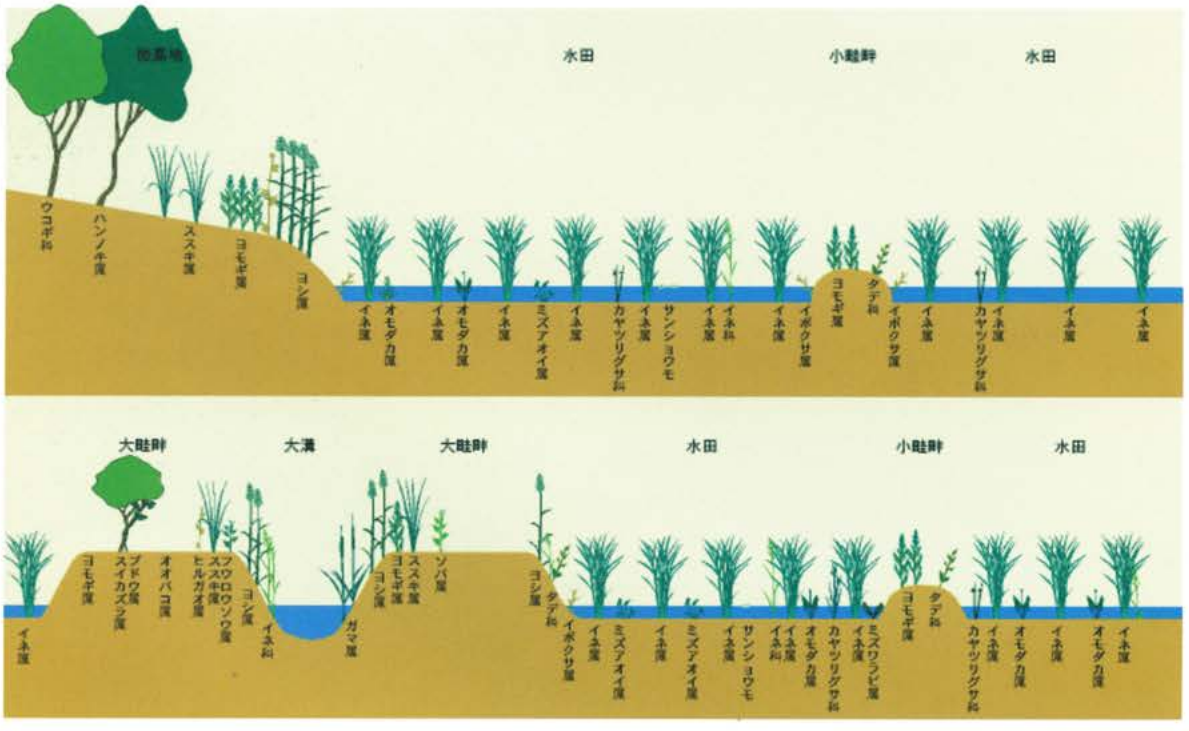
第1図　門間沼遺跡南西方向上空よりみる古墳時代前期頃の濃尾平野北西部



第2図　古墳時代前期の門間沼遺跡周辺
遺跡は画面中央を流下する古木曽川の西岸に分布、東岸は沼沢地が拡がる



第3図　古墳時代前期の水田景観



第4図　植物化石からみた微高地から水田にかけての植物の空間分布



古墳時代初頭の地域類型
石黒立人・・・226

粗製剥片石器の使用痕
原田　幹・・・235

門間沼遺跡における
古代・中世の鉄器生産を考える
蔭山誠一・鈴木正貴・・・248

尾張北部における
古代の開発をめぐる様相
小川芳範・・・256

土器からみた古墳時代初頭の地域類型

－器種組成を指標に－

石黒立人

Ⅰ．はじめに

われわれが器種の組み合わせを観るときに重要なのは、単に年代編成のための準共時的組成（いわゆる様式）ではなく、一般的には機能、理想的には社会的文脈に関係する部分としての組成である。この点で、単独での使用が推定される器種とは別に、他の器種と組み合わせて使用することが基本と見なされる器種に対する特別な配慮が必要となってくる。

こうした課題をめぐっては、すでに小竹森直子氏による先駆的論考が用意されている。本論ではその思考の道筋にしたがって考えてみる。

当該期に主要な地位を占める器種に器台がある。器台は単独使用されることがまず考えがたく、他の器種と組み合わせて使用することが基本であると考えられる。しかし、器台は歴史的な性格を有する器種である。器台がようやく組成の一角を占めるようになる弥生後期初頭段階では、現状において対応する器種は不確定である。次の山中式期以降では大形品を中心として長頸壺と組成することが複数の遺跡で確認されている。多くは方形周溝墓出土土器であり、一般的な使用ということではないが、そのことがまた器台の基本的性格を示しているとも考えられる。

問題は山中式期後半以降で、濃尾平野北部では器台と長頸壺との関係が薄れることに対応して鍋（浅鉢）が組成に占める頻度を高めており、この点が南部地区との相違である可能性がある。

濃尾平野に限定すれば概観としてはこのようなものであるが、後論でもう少し詳しく観ることにする。複数ある器種のうち、なぜ器台に焦点を絞るのかは以下の行論で明らかになるはずだ。議論の中心は器台と対関係を結ぶ器種であり、その空間的様相について考察を加える。そして、最終的には複数の器種の分布を重ね合わせて描くことができる地域区分について触れるつもりである。

Ⅱ．組み合わせについて

1．実態

山中式段階では以下のような組み合わせを考えることができる。

A類型：器台・壺
B類型：器台・鍋
C類型：器台・壺・鍋

●A類型には次のような遺跡がある。
朝日遺跡：方形周溝墓／器台・壷（長頸壺）
高蔵遺跡：方形周溝墓／器台・壷（長頸壺）
山中遺跡：墓？／器台・壺（長頸壺）
勝川遺跡：方形周溝墓／器台・壺（長頸壺）

上記は山中遺跡を除いて方形周溝墓からの出土で、いわゆる供献土器である。したがって組成は確かに明確だが、それで十分というわけではない。使い分けがなされていたのかどうかがはっきりしない。

●B類型には次の遺跡がある。
瑞龍寺山頂墓：器台・鍋
瑞龍寺山頂墓は採集資料であるが、あえて取り上げた。

●C類型には次の遺跡がある。
蕪池遺跡：墓？／器台・壷（長頸壺）・鍋
器台の対象が壷か鍋のどちらかに限定されない。器台そのものの属性から対応器種の使い分けがなされた可能性もあるが、現状では判断がむつかしい。ほかに北川田遺跡なども挙げられよう。濃尾平野中部域で認められる様相と言えようか。

廻間式もしくは欠山式段階では次のようになる。

●A類型には次の遺跡がある。
松が洞遺跡：集落？／器台・鍋
資料的には十分ではない。可能性としては濃尾平野最北部における類型である可能性がある。

●B類型には次の遺跡がある。
朝日遺跡：方形周溝墓／器台・ひさご壺
勝川遺跡：方形周溝墓／器台・長頸壺？
土田遺跡：方形周溝墓／器台・ひさご壷？
朝日遺跡では方形集周溝墓の供献土器として出土している。勝川遺跡も同様である。

●C類型には次の遺跡がある。
仁所野遺跡：方形周溝墓／器台・長頸壺・鍋
門間沼遺跡：集落／器台・長頸壷・鍋
高蔵遺跡：集落／器台・長頸壷・鍋
仁所野遺跡では方形周溝墓の供献土器。門間沼遺跡では通常の廃棄であると考えられる。高蔵遺跡も環濠周辺からの出土で、通常の廃棄である。

以上を整理する。方形周溝墓出土土器については、それが在地の組成を完全に表現しているとは限らないという不安もあるが、ここでは徴候として見ておこう。

図1　山中式期の組成

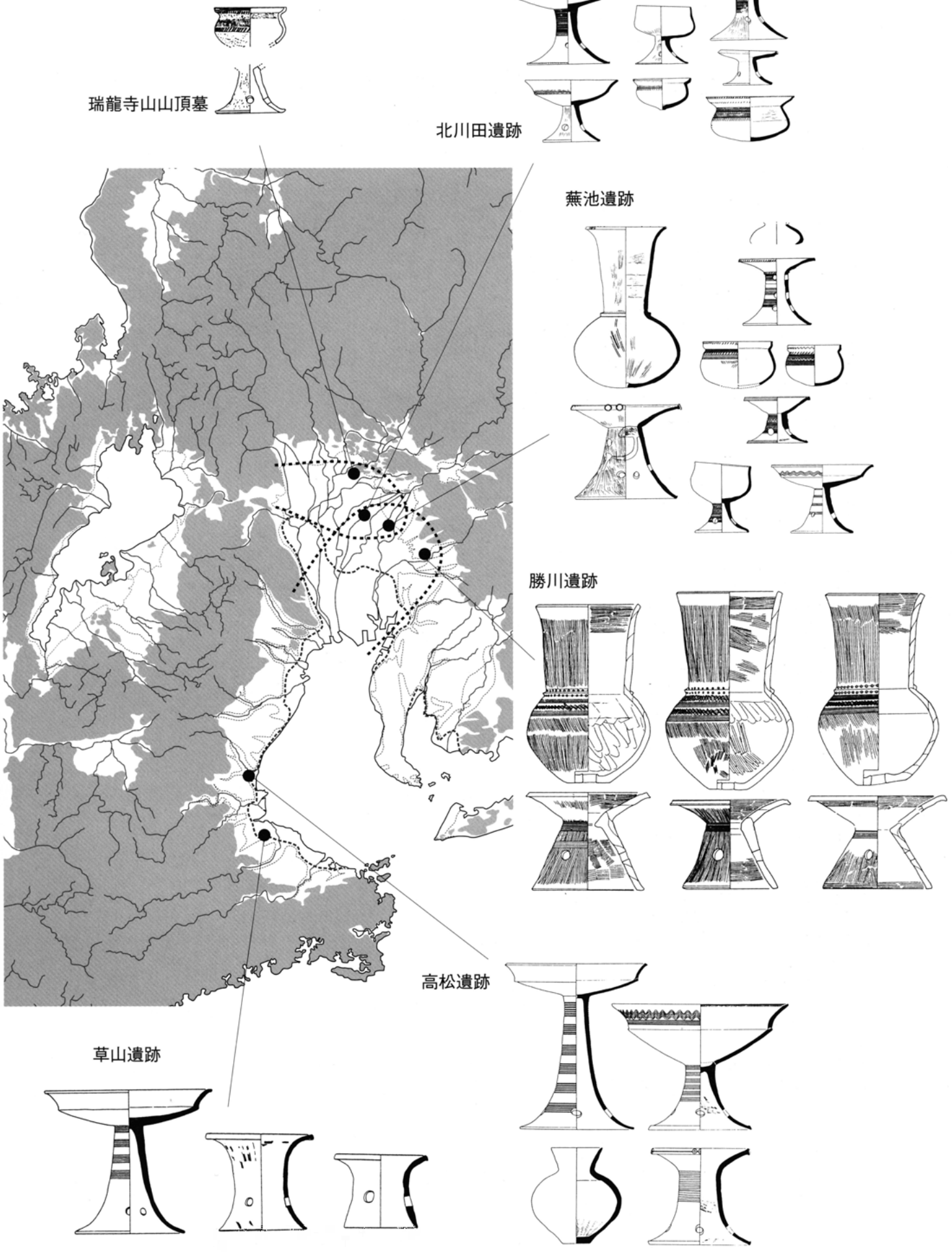
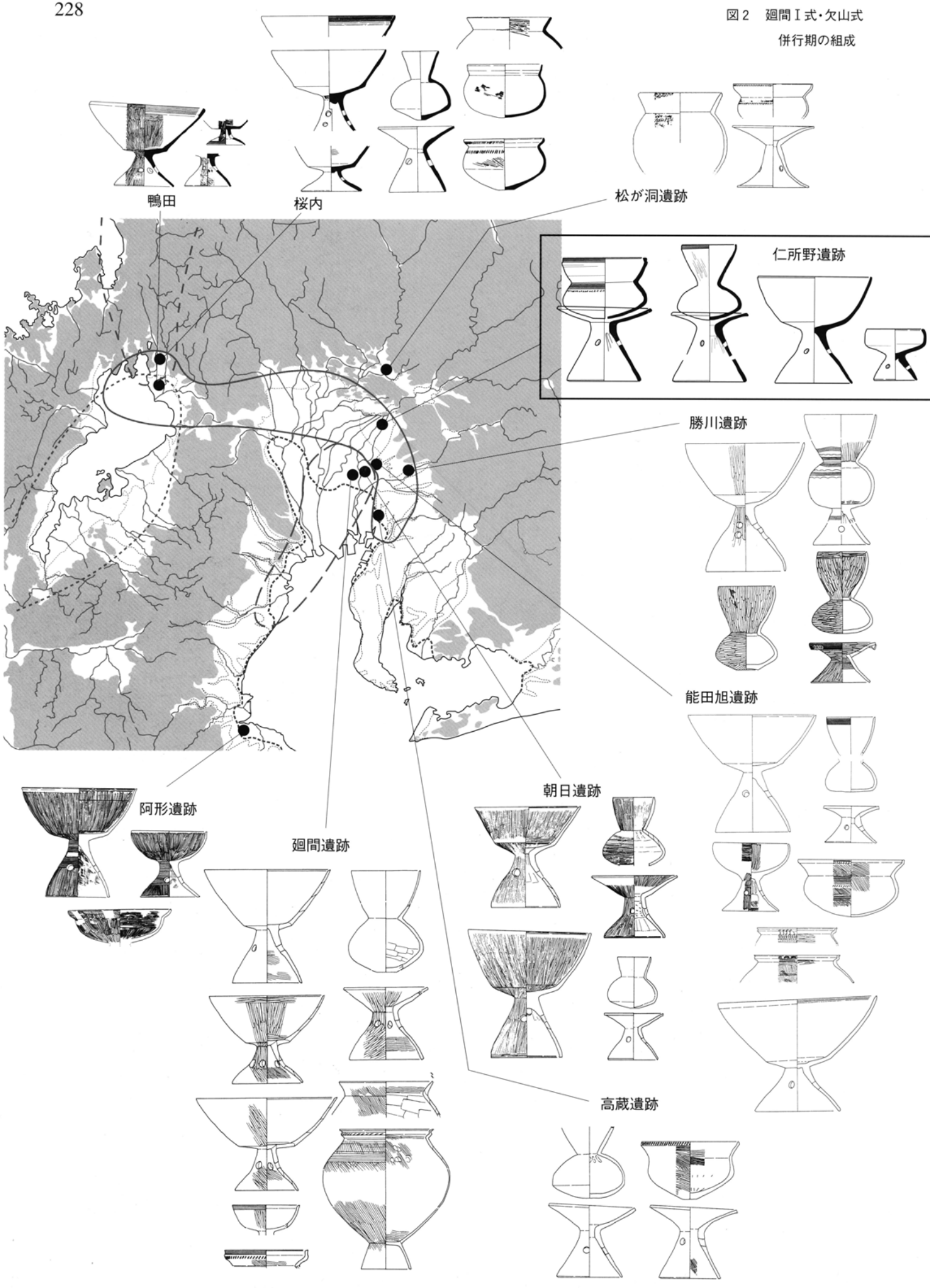


図2　廻間Ⅰ式・欠山式
併行期の組成



山中式段階では濃尾平野最北部がB類型、南部がA類型で、比較的領域ははっきりしている。そして鍋は組成に大きく食い込むことは無い。

次段階は鍋が普及してC類型の頻度が上昇するが、尾張低地部ではB類型が専らで、その東部周辺をC類型が占めるといった図式か。名古屋台地も実態は朧気であるが、高蔵遺跡で鍋が意外に出土しており、注目される。印象的にはS字状口縁甕と鍋は非親和的ということになるが、直接的にそうであったというよりは、単に分布傾向の違いということであろう。

2．組み合わせの形式化

ここで新たに1類型を加えたい。それは結合土器の一種である台付鍋である。しかし、これは弥生Ⅳ期以来の台付甕が変化したものではなく、鍋に高杯と同様の脚がついたもので、別物である。濃尾地方には類例がほとんど知られていない。琵琶湖地方でも少ない様だが南部で出土例がある。伊勢地方では雲出川下流域以南の遺跡で出土例がある。この器種も当初は煮沸に用いられ鍋としての用法が守られているが、ミガキ調整が加えられるなどして精製化すると煮沸には用いられなくなるようである。それとともに、無紋化して、原型からの逸脱が進行し、新たな器種となる。同様な変化をたどるものとして台付長頸壷がある。台付長頸壷は廻間・欠山式期には基本器種となるけれども、もともとは結合土器の一種であったものが一般化した可能性がある。山中式段階には台付壷もあるが、口縁部が短く別物である。こうした結合土器の出現する背景としては、製作者を含めた環境において、当該の土器両者が分離している状態との接触頻度が低いこと、実態とは離れた無関係な使用場面の視覚的形式化をその一因と考えることができる。つまり、主要な器種として分布する範囲外の現象であると、とりあえずは言えるだろう。

Ⅲ．その他の器種

1　加飾系器種群について

加飾系器種群として括る場合の指標としてまず挙げなければならないのは、口縁部の部位いずれかへの加飾である。加飾は直線紋を基調として、その表現手法として独立した条線を平行して施す多重沈線紋と櫛状の工具を用いて一度に多数の条線を施す櫛描紋があり、凹線紋はないが、また二枚貝直線紋もない。多重沈線紋は単独で構成されることはほとんどなく、二枚貝・クシ・板小口による刺突山形紋（もしくは連弧紋であるが、原型は連弧紋と考える）、羽状紋、雷紋などが組み合わされるのが普通であるようだ。これを加飾a類と呼び、直線紋のみを加飾b類と呼ぶ。

壷

長頸壷やヒサゴ形壷に加飾a類および加飾b類がある。体部への加飾がまずないことからいえば、口縁部の重心が高いということであろう。長頸壷には口頸部外面のかなりの範囲を加飾するものがある。

高杯

基本器種である側面観が逆台形を呈する深い杯部をもつ加飾高杯は、A：杯部外面加飾、B：口縁端部加飾、C：杯部内面加飾、の3系列に分かれ、A・Cが加飾a類で、Bが加飾b類である。

加飾高杯Bは、当初こそ内傾する口縁端部へ太いクシによる3条程度の直線紋を施すのみで加飾の程度も低いが、次第に加飾面を拡大し、杯部内面の3分の2ほども加飾するようになる。この過程で櫛描紋と多重沈線紋および両者の折衷施紋が併用される。初期には多重沈線が目立つが、次第に櫛描紋に代わる。

椀形の杯部を有する高杯Bは伝統的な器種であるが、門間沼遺跡では殆ど出土していない。仁所野遺跡や能田旭遺跡でも頻度は低そうだ。高杯Bは濃尾平野北部での出土頻度が低く、それに対応して加飾の頻度も低そうだ。加飾例は多くの場合加飾加飾b類である。朝日遺跡では出土総量が多いので目立つのかもしれないが、いちおうは安定して存在しているように見える。廻間遺跡でもそれなりに出土している。

口縁部は彎曲するが、杯部下部に稜線をもつ加飾高杯Cには高杯Aと同じ加飾a類が施されるものと、加飾b類が施されるものがある。しかし、施紋手法は多重沈線であり、櫛描紋が施されるものは少ないようだ。当器種は、杯部への加飾もさることながら、低く屈折して開脚する脚裾部外面への加飾が特徴的である。

ところで、加飾高杯の基本形態として問題になるのが、脚部である。濃尾平野北部では屈折して開く低脚が基本であり、南部地域とは異なる。杯部の加飾に注目するのみでは議論が十分ではなく、脚部についても議論を尽くす必要があるが、本論では十分になしえないので要点のみ触れよう。

濃尾平野南部で典型的な高脚形高杯の加飾は、加飾高杯Bと共通する口縁端部へ直線紋を施すことが基本で、それ以外はまずみられないことに注意が必要である。廻間遺跡や朝日遺跡の報告された資料を見る限りではそのように言える。つまり、加飾法と脚部の形態が対応関係にあるという点。そしてこれに基本斜位（そして斜位が複合した羽状）ミガキ手法が重なり、北部地域の独自性がさらに増す。

この点に関して高杯Bでも注意すべき点がある。脚部の形状が屈折して開脚する低脚形が一部に見られることで、時期的に後出であるなら後述するように北部地域との関連が考えられよう。

鍋

直線紋が口縁部外面に施されるものが仁所野遺跡や勝川遺跡で出土している。この場合には口縁部が明確に立ち上がり、その外面に加飾されることで、外的影響の可能性も考慮したい。このほか、高杯と同様に口縁端部に直線紋を施すものが、門間沼遺跡では少量認められる。岐阜市江東遺跡では目立つようだ。

2　甕について

伊勢湾地方に分布する古墳時代初頭の土器群は極めて多様であり、甕も別ではない。かえって山中式段階の斉一性が特異に映るほどである。それほど、当該期は個性がつかみにくい。だからこそ、受口状口縁平底甕やS字状口縁台付甕がひときわ輝くことになる。

さて、普通に考えてもS字状口縁台付甕がひとつの個性を代表していることは間違いない。しかし、その個性はどのレベルで表現されているのであろうか。［S字状口縁甕］対［非S字状口縁甕］なのであろうか。

S字状口縁台付甕は、その属性を分解して系譜を辿れば、口縁部の形状は受口状口縁に、体部外面の粗いハケメは琵琶湖地方の甕に、内面の調整も同様、脚台は濃尾地方南部というように分解する。したがって、固有の経緯を内在させない、言い換えれば連続した組列を成立直前までは持たない、歴史を持たないのがS字状口縁台付甕であると表現できるかもしれない。したがって、この意味では確かにS字状口縁台付甕はすべての非・S字状口縁台付甕に対立するといえるかもしれない。しかし、裏返せば、それはすべてとつながっているということでもあり、少なくとも、琵琶湖地方から伊勢湾地方にかけての区域と切り離すことはできない。個性が全く独立したものではなく、個別性を共有した、言い換えれば標準化したものとしてある点に、もう少し注意すべきであろう。

図4に示したように、周囲を平底甕圏に囲まれたこの地域において属性の分解と再構成が行われ、一見無関係にみえる要素の交錯によってS字状口縁台付甕が成立したということであるが、しかしそのこと自体が少なくとも地域に根ざしているということを強くあらわしている。広範な交通を基礎とした新たな個性の誕生である。この点は間違いがない。

Ⅳ　地域の設定

以上、簡単に検討してきたが、地域の設定とは地域区分の水準をどのようにするかということであり、区分された地域が問題なのではない。区分基準次第でどのようにも地域は設定されるのであるから、地域が実体として意味を持つなどということはないと考える。もし、あえてそこで地域を実体化するならば、自らが属す現代考古学者分布図と不可分の地域中心主義に陥るだけのことである。

地域をいかように切り取るのか、これは難しい問題である。地域論を半ば現在を投影するかたちで行われてきたこれまでの議論に中立であろうとするなら、なおさらである。この点についてはわたし自身が中立な立場を確保できるのかどうか些か心もとない。

これまでの議論を要約するなら、濃尾平野低地部では犬山扇状地の扇の中心線を境に、取り敢えず北西部～北部と南部を区分できそうである。これに名古屋台地周辺地域が加わり、尾張地区は大きく3地区に区分することになる。

そして、北西部地域は古墳時代初頭には琵琶湖地方北東部と加飾器種群において強い共通性があり、これを仮に《門間沼・鴨田類型》と呼称する。

上記地域のうちで主体的にS字状口縁甕A類が分布するのは南部地区でも西よりの地区であり、到底普遍性を有するものではないだろう。そして南西部地域がS字状口縁甕B類に転換した段階になってようやく北西部や名古屋台地周辺地域にS字状口縁甕A類が普及するのだろう。

さらに広域的に見てみよう。土器の分布圏として一つ明確な境界を有するのは、平底甕と台付甕であり、これは弥生中期後葉以来の変更の無い枠組みである。この上に、高杯以下の器種の様相を重ねることになるが、しかしすべての器種にわたって境界が一定するようなことはなく、それぞれの水準でズレを内包している。そして、ズレを内包しつつも、その外部とは境界を画すことができる最大の範囲は、西は琵琶湖地方南部、東は天竜川であると考える。

これまで滋賀県の当該期の土器についての言及はしばしば畿内第Ⅴ様式をメインテーマとする傾向にあり、琵琶湖周辺地方があたかも畿内第Ⅴ様式と直接しているかのような錯覚を覚えることもあった。小竹森氏の登場によってようやくバランス感覚を回復したかの感もあるが、なお不十分であるように思える。もう少し東に重心を移した議論が欲しいところである。

東は菊川式の西端までということになるが、久野正博氏によれば境界地帯である天竜川下流域は複雑なようである。

いずれにしても、このように言ってしまうとわたしの旧説となんら変わりなく、目新しさも無いのであるが、やはりそうとしか言いようが無い。次に展開すべき問題があるとすれば、この範囲が三遠式銅鐸の分布圏である点をどのように読み込むかということになるが、それはすでに土器論を超えている。

小論を成すにあたり、小竹森直子氏、伊庭 功氏、原田 幹氏から貴重なご教示を頂いた。謝意を表したい。

参考文献

小竹森直子　1989「近江の地域色の再検討2」『紀要』第2号　財団法人滋賀県文化財保護協会。

赤塚次郎　1992「Ⅴ考察」『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター。

引用文献

三重県埋蔵文化財センター　1992『阿形遺跡』。

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1992『鴨田遺跡発掘調査報告書Ⅲ』。

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1988『一般国道8号（長浜バイパス）関連遺跡ー狐塚・法勝寺遺跡』。

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1989『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅠー伊香郡余呉町桜内遺跡ー』。

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1991『六条遺跡発掘調査報告書』。

師勝町歴史民俗資料館　1991『研究紀要Ⅰ』。

財団法人愛知県教育サービスセンター　1984『勝川』。

財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1990『廻間遺跡』。

財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1994『朝日遺跡Ⅴ』。

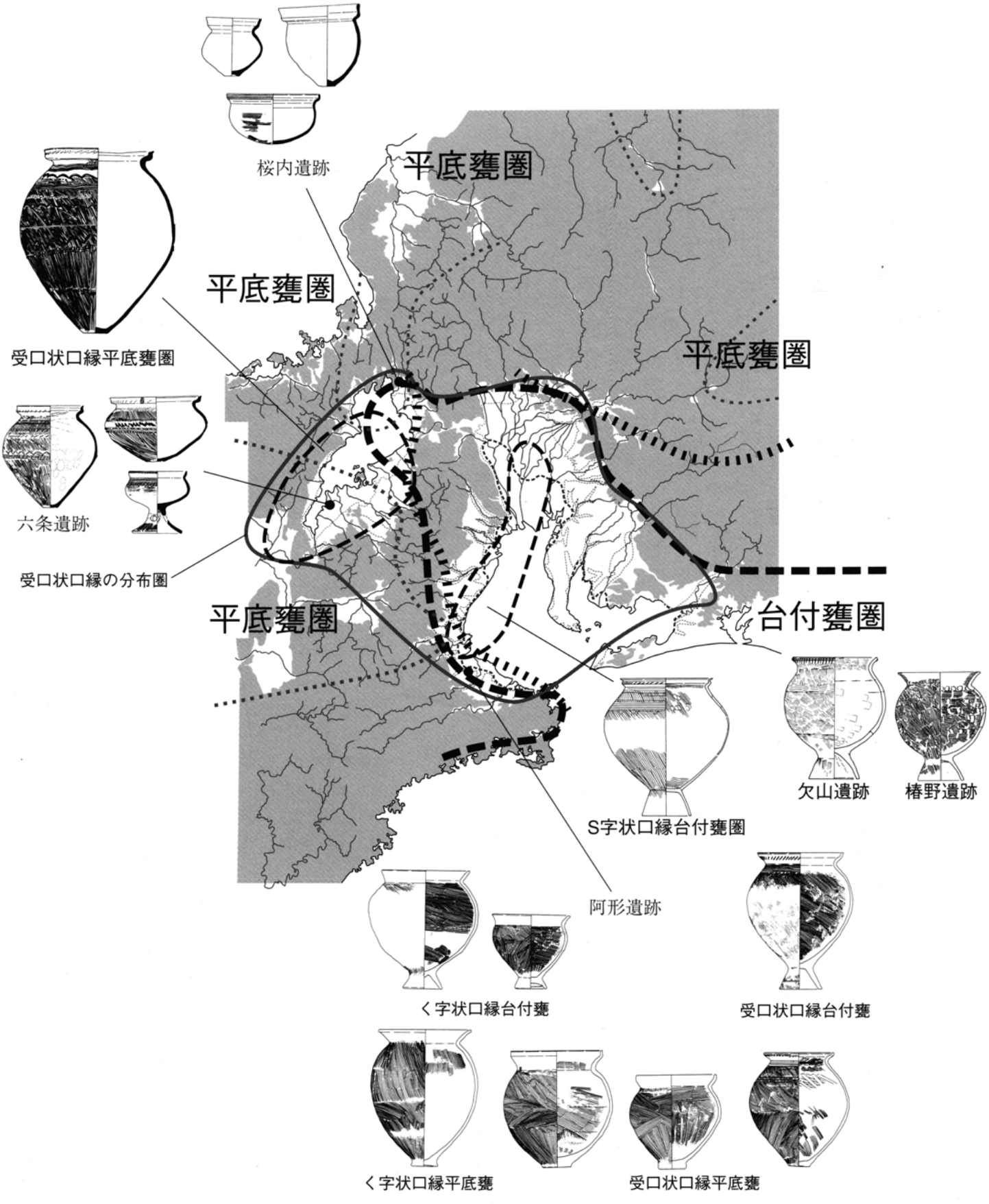
一宮市　1967『新編一宮市史2』。

※資料の出典は、上記報告書以外はすべて第3回東海埋蔵文化研究会　1986『欠山式土器とその前後』による。



図3　高杯形態比較

図4　甕の分布圏


桜内遺跡
平底甕圏
平底甕圏
平底甕圏
平底甕圏
受口状口縁平底甕圏
六条遺跡
受口状口縁の分布圏
台付甕圏
欠山遺跡
椿野遺跡
S字状口縁台付甕圏
阿形遺跡
く字状口縁台付甕
受口状口縁台付甕
く字状口縁平底甕
受口状口縁平底甕

様式を超えて　覚書'99

1．様式の限界

1－1・1　わたしはここ10数年というもの、土器を分析する際には必ずといってよいほど「様式」をめぐって考えてきたし、その都度意見表明もした。しかし、結局のところ「様式」が何なのかはわからなかった。というより、「様式」を実在と考えたのが間違いであったということなのかもしれない。考古学的巷に溢れている多くの編年表に記入されている「様式」は実在、つまり遺跡の実態とは無関係に普遍性を目指して構成されたものだったのである。

1－1・2　わたしにとってそれは、年代的区分として多少の有効性はあっても、空間的理解に向けては全く役立たずなものに過ぎなかった（もちろん、年代的区分として役立たないものも少なくはなかったのだが）。

それほど、「様式」における時間的側面は強固なのだと、わたしはそのような印象しか持つことができなかった。

1－2　かつて都出比呂志氏は、小林行雄氏の提唱した「様式」には時間的様式だけでなく地域的様式も含まれている、というようなことを述べた。しかし、わたしにはそれが小林行雄氏の本意であったようには思えない。小林行雄氏は地域的様式を正面から提案したことはなかった。であったはずだ。佐原 眞氏も時間重視の方向をより強固にこそすれ、地域的様式を正面から扱ったことは無いように思う。その後は「様式」の大別・細別、大・小の区分は、微妙な解釈の差を内包させつつなかば機械的に行われてきたように思う。

1－3　「様式」が近畿地方以外で積極的に語られたのは東海地方である。鈴木敏則氏は「山中式」「欠山式」を1980年代後半から「欠山様式」「山中様式」と言い始めた。それは周辺に蔓延し、いつしか「菊川様式」「瓜郷様式」「樫王様式」「水神平様式」等々となった。しかし、それで事態の何が変わったのであろうか。かえって問題を見え難くしただけではないのだろうか。

1－4　もちろん、「～式」では、それが「型式」なのか「様式」なのかわからないということもあるかもしれない。だがそんなことはたいした問題ではない。「様式」が語られる以前にそのような問題は存在しなかった。「様式」を語るためにラベル表記の変更が必要になったのであり、両者にたいした差異がなかったから、単に表示の反復を繰り返したということであろう。「様式を問う」というような根本的な問題を設定すべきであったのに、表層的な問題にすりかわってしまったのだ。

このように、現在の地点からみれば「何と些細な問題であろう」といえるのだが、しかしそれが重大問題になってしまった。問題設定を誤ったのだ。

1－5　「様式」が土器研究に有効である（この点をわたしは否定するつもりはない）というにとどまらず、土器研究の方法が様式論でなければならないという信念がある時期われわれ（とくにわたし）に植え付けられたような気がする。わたしが思うに、その先導は寺澤薫氏、加納俊介氏ではなかったか。かれらの厳密なスタイルがわれわれ（わたし）にある面では新鮮さと憧れを、反面では恐怖を与え、われわれ（わたし）をしてその学習に自らを駆り立てた。けっして強制されたのではなく、自らが選択し、積極的に受容したところに問題があった。しかも決して理解しないままに。中身ではなくして研究のかたちを学んだのだ。まるで受験生が「公式」を暗記するかのように。

研究方法の＜様式＞として（それこそがまさに様式の具現だ！）、それに従ったわたしたちの現在の姿とはどのようなものなのか。わたしの長期にわたる「様式」をめぐる彷徨 ― それがけっして無駄だったとは思いたくないが ― の始まりもそこにあった。

1－6・1　振り返ってみると、当地方に「様式」が導入された経緯をめぐっては、弥生時代後期から古墳時代にかけての資料を中心に研究していた一群の人達に積極的に受容されていった観がある。当該期の資料は、天竜川以東は別にして、より西方の地域では紋様が少ないかほとんど無い時代であり、このような資料群に対しては形態分類を中心とする型式・形式区分が比較的容易であり、こうした条件が「様式」の導入をより容易なものにしたということであろう。

1－6・2　したがって問題は、それ以外の資料、つまり形態の変化に加えて紋様の繁雑な資料群に対しても様式論が有効であるのかどうかである。

この点に関しては十分に検討の余地があると考える。東海地方にとどまらず近畿地方においても、弥生中期土器の地域差を考えるときにあくまで形態重視で紋様を補足的に扱う立場では、重要な点を見落とすことになると考える。たとえば大和地方や近江地方の様式区分のように。

1－6・3　このような経過にあって、中村友博氏のみ異彩を放っている。中村氏はかつて伊勢湾第Ⅱ様式の成立を考察する際に、諸属性間の関係を分析して有機的な単位を導き出すという手順を採用した。その当否は別にして、「様式」の名のもとに紋様系統論的なアプローチを行ったハイブリッドな思考法は特筆される。

1－7　本来、研究には複数の選択肢があってよいはずだ。複数の方法が競合関係にあるなかで、相互に洗練し合う形が最善なのでは、と思う。とすれば、現在の状況は、意識する・しない、意識的・無意識的かにかかわらず硬直した研究環境であり、また研究体制になってしまっているように思える。まさにトマス・クーンのいう通常科学の状態ではないか。

1－8　土器研究が「様式論」でなければならない、という思いはわれわれ自身のものである。先導者に責任は無い。したがって、それを捨てるのもわれわれの責任の内にある。

2．「系統」と「系統性」

2－1　ここでは仮に、因果系列を明確に名づけ得る線形表現可能な－明確な因果系列が窺える通時的および共時的連続体：たとえば系図のような－対象を「系譜」、そして同じく線形表現が可能ながらも因果系列の不明確な通時的および共時的連続体およびその断片－たとえば破れてずたずたになった系図のようなもの－を含めた全体を「系統」としておく。

2－2　換言すれば、あらゆる存在から特定の対象を限定し分かつ（すなわち分類する）に際して、そこで採用されるいくつかの表現形式のうちの或るものが「系統」であり、我々がそこで系統的

な視点に基づいて注目する対象の属性が「系統性」ということになる。したがって、それらは客観的に実在するものではない。我々がある対象について時空的連続性を問う、あるいは対象相互を関係付けるに際して、初めて浮上する極めて実践的な思考の枠組みといえる。

2－3　弥生土器における「系統」の最大は言うまでもなく《弥生系》《縄文系》《大陸（朝鮮）系》、最小は製作手法・施紋手法あるいは胎土の砂礫構成の傾向など、製作レベルにおける微細な水準に及ぶ。そして「系統性」は、対象全体を含む場合もあれば、対象のきわめて些細な一部分のみに過ぎない場合もある。このように「系統（性）」が一見曖昧としか言いようのないものであるのは、「我々がいったい何を問題とするのか」という点において初めて対象が確定するということ、つまり対象がそれとして自存しているわけではないことと深く関係する。けっして「系統（性）」概念が曖昧なのではなく、その射程が広く深いためにわれわれが十分に活用できていないだけに過ぎない。「系統（性）」概念を適用しようとする以前に、われわれが現実のあまりにも混沌とした資料にどっぷり漬かって身動きが取れないでいる、ただそれだけのことなのであろう。

2－4　系統は技術的側面：製作痕跡（対象そのもの）と機能的側面：使用痕跡（対象の属す時空的環境）から把握される。ここでは前者を技術系統、後者を機能系統と呼ぼう。両者は重層的であり、かつ両者の関係も截然としたものではない。

2－5　系統問題―仮にこうした問題があるとしてだが―それは技術的側面の理解においてはさほど困難を伴うことはない。しかし機能系統をめぐる議論においては、過去（擬似当時：廃棄・埋没時）および現在（調査・整理時）のコンテクストも絡んで錯綜したものとならざるをえない。

2－6・1　機能系統は出土状況に深く関わっている。この点で、いわゆる一括遺物は編年の為にあるのではなく機能系統を把握・理解する為にある。われわれの発掘時における事実認識が機能系統を考える上で重要な基礎をなす。

2－6・2　機能系統は技術系統に拘束されない。逆に技術系統を機能系統が規定する。例えば、貯蔵具、煮沸具などの機能系統は、壷、深鉢（甕）などの形態（技術系統）と完全に一致しない。形態の変異は機能の変異（機能の分離、機能の集約化、機能の変換など）に対応したものばかりではない。形態分類がわれわれの仮説であり、そこから機能分類に進む事が極めて困難である点にそれは示されている。この点で、煮沸具の容量などは技術系統と機能系統の関係を考える上で重要な対象である。

2－6・3　いわゆる痕跡器官は、機能系統と技術系統のズレを示すものである。ただし、それは技術系統の時空的変化に対する一定の強度を示してはいても、技術系統の機能系統に対する強度を示しているわけではなく、技術系統が機能系統を超えることはない。

2－7　機能系統は外部参照（社会）的である―ゆえにシンボリックなものも含む―のに対して、技術系統は自己参照（共同体）的なのであって、機能系統の許容範囲内において技術系統は存続しえる。もちろん技術系統に変容・変換はあるが、それは機能系統（時空的環境）からの圧力によって初めて生じるのであり、技術系統相互の関係のみから生じるものではない。

2－8　系統を包括的に捉えるのか、微視的に捉えるのか、あらゆるレベルを含むその中間で捉えるのか。いずれも可能であるが、重要なのは、それが統計的方法によって保証されるわけではないことである。肝心なのは、観察者・分析者の存在そのものが影響する内部観測の問題であるという点である。

2－9　さて、技術系統・機能系統をめぐる議論は、ともに幾分かは資料に即しているがゆえに客観性を有すると言える。しかし、文化や社会レベルでの「系統論」として踏み込んだ解釈を行う場合には、問題構成において主体が強く前面に出るために、いきおい立場の表明といった観を呈することになる。例えば、《弥生対縄文》という問題構成は、たとえ議論が＜技術・機能＞に始まろうとも、往々にして象徴レベルに至る。実在と平行的であろうと努めつつも、最後にはどうしても客観性を欠いた議論を招いてしまうことが多い。それは、＜弥生・縄文＞という区分そのものがもつ象徴性、そして帰属をいかに判断するのかが最終的に決断によっているからである。

2－9・1　弥生土器に限らずあらゆる人為物の技術系統の基礎には製作者がある。製作者は個人ではなく一定の集団を形成もしくは構成するから、正しくは製作者集団、言い換えれば《共同体》が系統の基盤をなすといえる。しかし、考古学的世界において製作者集団は直接に人間集団として現れることはなく、モノの形、その集合として間接的に現れるのみである。実はその点が意外に忘れられている。モノはそのままではヒトになることはなく、間接的に現れるという点も、われわれが出現させるのであって、自ずと現れるというわけではない。《共同体》も認識レベルにあって、実在ではない。

モノからヒトへ、そこでは当然、飛躍が伴うのである。

2－9・2　製作者集団は、交換システムが未発達かもしくは抑制された状況では、食糧生産部門を始めとする複数部門を複合させなければ存続することができない。ところが、交換システムが発達・安定すると、分業の展開によって製作者集団は専業集団への分岐・編成を促進させる。もしくは、社会的階層の分化にともない、特定の社会上層への帰属によって専業工人として編成されることになる。この点で、技術系統と直結する製作者集団という当初の意味も、歴史過程においてその属す環境の複雑化に伴い複数の意味をまとうことになる。

3．　様相と類型

3－1　弥生土器が実在する単位は、遺跡における埋没状況である。少なくとも、事実としてはそうである。それが有意であるか否かはわれわれの判断であり、資料の重要度として第一位に置かれる一括資料に内在するものではない。そこで問題になるのが、われわれの保有する先行的理解である。全くの白紙状態で資料を観察することはできないから、一定のフィルターをかぶせることになる。そしてフィルターを通過したものが資料として有意となる。

3－2　すでに述べてきたように「様

式」もフィルターの一種である。少なくとも対象を集合的に捉える姿勢は「様式」のなせるところである。したがって、一括資料重視も当然「様式」とセットである。もちろん、編年を多変量として構成するほうが有効性が増すから、基準資料が一括資料であることにこしたことはない。しかし、年代区分であれば、単体でも可能である。この点で「型式論」が集合に拘らないのはそれが「型式論」だからであり、いわば「様式論」と同様の環境にある。

3－3　一括資料は「様式」にとって基礎となるだけでなく、「様式」において存在意義があるという点で、相互依存的、つまり循環関係にある。一括資料は「様式」をけっして保証しないし、「様式」も一括資料を保証しない。一括資料は「様式」にとって別物ではないし、両者は同じコインの両面なのである。ただ、認識の手続き上分離しているだけであるが、それゆえに分離しているようにみえるだけに過ぎない。

3－4　一括資料はそれ自体に意味は無い。ほかの資料との比較において初めて意味をもつ。わたしにとっての他人のように。わたしがわたしであるのは他人と違うからである。一括資料が重要なのはそれが他と違うからである。時間的であろうと空間的であろうと、まずは差異の確認が第一である。解釈をより強く介在させる類似性（反復性）の認定は第二である。したがって、ここで類似性に重点のある「様式」は不必要である。実在と遊離するばかりか、実在を否定しかねないからだ。

3－5・1　時間的差異や空間的差異は、しかしけっして単純ではない。いったい何が時間差であり空間差であるのか。差異は分類の徹底によって明らかになるのであろうか。

3－5・2　差異、それは分類と別のことではない。分類が類似に基づいて行われるなどということが想像できようか。分類とは対象を分割することであり、差異を明確化することである。分類への志向が無ければ差異も無く、差異がなければ分類も無い。

3－6・1　このようになってくれば、客観的な基準を外部に求めることなど不可能だろうし、不必要でさえある。厳密な分類も同様である。つまり、分類によって生み出された単位の性格は、形式化されるものではないということだ。分類者に随伴する必ず曖昧な部分を内包するものであり、また一括資料がすべてでもない。

3－6・2　そのような曖昧な部分を含みつつも存在する一定の単位をここでは「様相」と呼ぼう。そのうちの小さな単位は多くの場合時間に関係するものであり、それらには数字表記を与えよう。いっぽう、時間的に併行する小さな単位を類似性の水準に基づいて連繋させたものが空間に関係するものとなるが、それには数字以外の記号表記をしよう。

たとえば前者を様相1、様相2、…様相n、後者は様相a、様相b…様相xというように。

3－7　分類された単位が相対的なものであれば、単位相互も離合集散するものとなる。もちろんそうさせるのはわれわれの意思であるが、そうなれば複合した単位群を表すのに様相を羅列するのでは非効率的となるので、新しい表記が必要になる。それをここでは「類型」としよう。

類型は、時間的にも空間的にも一定の幅、広がりを有するものである。そして理解の便宜のために中心的な役割を有する資料に対してはその遺跡名を冠することにしよう。

3－8・1　類型は経時系列単位（様相…n）と空間系列単位（様相…x）の両者を複合したものとなる。したがって問題は類型の消長を如何に表記するのかということになる。そのために、ここで扱うような資料とは独立した時間軸を設定する。それが、編年である。

個別の遺跡編年からは独立した、ある意味で普遍性を有する区分である。従来は様式区分と年代区分を同一に扱ったために混乱したのである。それが様式に普遍性が求められた所以でもあったが、それが誤りであったことは明白であろう。

3－8・2　様式が数字表記されるのは、普遍性があるというよりも、それが匿名的ということである。特定の遺跡・資料に拘束されない、絶対時間を表現するということなのであろう。しかし、それでは遺跡・地域の個性は見えてこない。個性は空間を前提にするのではなく、存在を前提にするのだから。わたしにとって、この個性ある存在の謂が様相であり類型である。

未完

※本稿は土器研究に関して最近考えたことを完全に整理できないままにあえて書き連ねたものである。

それは、これまで「様式」をめぐって迂回（わたしは「様式」を直接語ることができず、せいぜいその周りをめぐることが可能であったにすぎないから）しつつ考えてきたことが、その実なにか自分自身にはしっくりこないものであった、というそんな実感しかもてなかったことへの最終判断として、その乖離観が「様式」をメインテーマに据えたことにあったのではないか、という点を確認したかったからである。

「様式」に関してことさら注目することが何か重要なことでもあるというようなわたしの独りよがりな、そして硬直した思考が、ここに至って滑稽にさえ見えてきたことへの焦り、あるいは苛立ちでもある。まさに独相撲であったというべきであろうか。

現実を眺めてみると、だれもそんなところに問題を見ていなかったし、これからも見ないのでは、という諦めの気持ちがどうしようもなく湧いてくる。それは問題以前の問題ではなかったのかと。

本文中に幾人かのお名前を出させて頂いたが、わたしの思考の道行き（成り行き？）のなかで欠くことのできない方々である故である。決して他意はない。ご容赦を願うものである。

なお、様相と類型への置き換えについてはわたし自身いささか性急な感も禁じえないが、具体的作業は今後の報告書作成のなかで進めていきたいと考えている。あるいは行き詰まるかもしれないが、「様式」を相対化する上では必要だと考えている。

最後に、伊庭 功氏からは有益なご批判を頂いた。多謝。

門間沼遺跡出土
粗製剥片石器の使用痕分析

原田　幹*

1．はじめに

門間沼遺跡出土の粗製剥片石器23点について、金属顕微鏡を用いた使用光沢面（ポリッシュ）の観察を中心とする使用痕分析を実施した。粗製剥片石器の機能、用途については、これまでにも収穫具としての可能性が指摘されており、筆者自身も複数遺跡の資料の観察をとおして農具としての性格に言及してきた。本分析では使用痕の観察と使用実験の結果とを対比させより具体的な使用の実態を明らかにすることを目的としている。

2．資料の概要

門間沼遺跡の発掘調査では約２５点の粗製剥片石器が出土しており、今回分析対象としたのはある程度全体の形状が復元できる２３点の資料である（未掲載資料を含む）。石器の帰属時期は弥生中期初頭から後期までの各時期のものが含まれている。分析の報告に先立ち出土資料の形態、石材等について概要をまとめておきたい。（表1）

粗製剥片石器に用いられている石材は、砂岩、ホルンフェルス、安山岩等であり、主に砂岩が用いられている。石材の選択性については朝日遺跡等他の資料とほぼ同様な傾向をみることができる。素材となる剥片は片側に自然面をもつものが圧倒的に多く、母岩から得られる一次剥片を用いたものである。母岩は自然面の形状から復元すると扁平な円礫であったと推定され、円礫の側面に打撃を加え扁平な面から剥片を割り取っていたことが窺える。ほとんどが自然礫であったと推定されるが、資料３の自然面側に敲打による凹部、4の自然面側に磨面が観察される。3はおそら凹石、4は台石からの転用と推定される。

粗製剥片石器の形態分類については、以前別稿（原田1996）で述べているが本資料に関連するものについて記述しておきたい。

Ａ類　調整加工を行わず、素材剥片をそのまま用いるもの。
Ｂ類　剥片の背部に調整加工を施すもの。（該当資料無し）
Ｃ類　剥片の側面に敲打・剥離等の調整を施すもの。
Ｄ類　側面及び背部に調整を施すものである。

さらに以下の１～５類に分類する。

Ｃ１類・Ｄ１類　両側面に大きな抉りをいれるもの。
Ｃ２類・Ｄ２類　両側面上部に調整を施すが大きく抉れない。
Ｃ３類・Ｄ３類　両側面を直線的に削ぎ落とし、平面形が台形状、三角形状を呈するもの
Ｃ４類・Ｄ４類　両側面を直線的に削ぎ落とし、平面形が長方形状を呈する。
Ｃ５類・Ｄ５類　両側面にわずかに調整痕が認められる。

刃部に肉眼レベルで観察される使用痕には、剥離、小剥離、摩耗、磨面、折れ状の欠損、潰れ（敲打痕）、ロー状光沢等がある。本資料ではロー状光沢が観察されるものが多く７点で確認される。この他小剥離も普遍的に観察される。折れ状の欠損は16に顕著である。一方、磨面、潰れが観察される資料は確認できない。

3．使用痕の観察

使用痕の観察には落射照明付き金属顕微鏡（オリンパス製ＢＸ30Ｍ）を使用し、100倍、200倍と300倍（接眼レンズ15倍使用時）の各倍率で観察を行った。観察は主に使用光沢面（ポリッシュ）、線状痕について行った。観察資料について特に薬品等による処理は行っていないが、観察の前に手の油分、汚れ等を除去するためにエタノールを含ませた脱脂綿で軽くふき取っている。

各資料の観察にあたっては主に刃部を中心として光沢面の有無を確認し、光沢面の確認された資料についてその特徴、分布範囲、線状痕の有無と方向等必要な情報を記録し、写真撮影を行った。光沢面の分類については阿子島、梶原による分類（梶原・阿子島1981、阿子島1989）、御堂島による分類（御堂島1988）を参考にしている。線状痕には光沢面上に生じる線状痕、線状の光沢、石器原面に生じる線状痕等が想定されるが、今回観察したのは主に光沢面上に生じた線状痕である。また、使用光沢面が刃部から石器内側へ広い範囲で確認されたものについては、光沢面の強度分布図を作成している。光沢の強度は便宜的に弱、中、強の３段階に分けている。

4．観察結果の概要

分析の結果、２３点中１４点の資料に使用光沢面が観察された。使用痕の観察されなかった資料のうち３点は石器表面の風化したものであり、本来形成されていた使用光沢面が失われている可能性がある。なお、観察資料中風化の影響を強く受けていた石材はホルンフェルスであり、使用光沢面が確認された資料でも風化による剥落により石

＊愛知県教育委員会

表1　分析資料一覧

資料No.	図番号	登録番号	遺構等（旧番）	法量					石材	分類	備考
				長さ	幅	厚さ	刃部角	重さ			
1	84-10	95D-S-002	95D SD27	102	95	17	28	190	ホルンフェルス	C 1	
2	82-2	94C-S-323	94C SD58	(71)	118	19	33	(138)	砂岩	C 1	
3	81-4	94C-S-043	94C SD Ⅰ	122	94	25	42	388	砂岩	C 4	母岩は凹石
4	83-2	94C-S-138	94C SX06	90	90	32	45	318	砂岩		母岩は台石？
5	85-2	95A-S-009	95A	98	109	17	24	159	砂岩	D 1	
6	85-5	95A-S-006	95A SK03	(102)	75	19	34	198	ホルンフェルス	C 5	表面の風化剥落
7	82-3	94C-S-037	94C	(64)	(116)	15	28	(160)	濃飛流紋岩	D 1	
8	82-4	94C-S-139	94C SK46	112	106	30	32	435	砂岩	D 1	
9	85-4	94A-S-017	94A SK133	69	41	8	30	33	?	C 5	
10	85-1	94B-S-	94B SD20	(78)	(109)	19	25	(169)	砂岩	D 1	
11	81-3	94C-S-036	94C SX02	108	109	34	34	405	砂岩		
12	85-3	95A-S-007	95A	103	66	14	45	134	安山岩	A	表面やや風化
13	84-12	95E-S-003	95E SD123	118	87	20	50	261	安山岩	A	表面やや風化
14	81-5	94C-S-042	94C SD Ⅰ上層	146	99	27	69	451	ホルンフェルス	A	表面風化
15	84-11	95D-S-003	95D SD52	100	60	11	28	99	ホルンフェルス	C 5	表面風化剥落
16	82-1	94C S-361	94C SX04	158	130	28	—	656	濃飛流紋岩		刃部欠損
17	83-1	94C-S-140	94C	129	135	20	28	366	砂岩	C 1	
18		95C-S-001	95C	83	103	17	40	144	ホルンフェルス	C 1	表面風化剥落
19		95A-S-008	95A	(51)	73	13	26	(71)		A	表面やや風化
20		95B-S-001	95Bb SD30			13		(152)		A	刃部欠損
21		94C-S-041	94Ca SK98	101	69	17	57	147	砂岩	A	
22		94C-S-038	94Ca 検Ⅰ	(94)		17	32	(158)	砂岩		
23		94C-S-040	94Ca SK98	112	74	15	41	158		A	

器本来の原面が失われ、光沢の強度分布や分布範囲の観察が困難な資料が見られた。また、観察資料の自然面側では一様に広がるコントラストの弱い光沢が観察される。これは阿子島等によりYタイプとされた自然の研磨作用によって生じる光沢と考えられ、一覧表等の観察記述からは除外している。

観察された使用光沢面の特徴はいずれの資料も共通したものである。光沢面は非常に明るく平滑で光沢の縁辺はなめらかな丸味をもち、非光沢部とのコントラストがきわめて明瞭である。広い範囲に形成されており、微凸凹の高所から低所にかけて広がっている。発達部では平面的な外観の光沢が連接しつつ広がっており、ハケでなでたような特徴的な線状痕、ピットがみられる（写真10・11・15・22等）。なかにはきわめて流動的な形状を呈する光沢もみられるが、この場合線状痕、ピットはあまり明瞭ではない。これらの光沢はAタイプと分類される光沢に相当するとみられる。また、Bタイプに分類される水滴状を呈した丸味をもつ明るくなめらかな光沢も確認される。微凸凹の高所に形成され、線状痕、ピットはあまり発達していてない（写真12・21・23）。光沢面上に観察される線状痕は刃部と平行するものが支配的である。

光沢は刃部の広い範囲において観察される。石器刃部にどのように光沢が分布しているかを明らかにするために光沢強度分布図を作成した（図1・2）。強度は光沢の占める面積、光沢の発達の度合いを目安に、強、中、弱の3段階に区分している。強は最も光沢が発達した部分で、Aタイプ光沢を主に広い範囲が光沢に覆われる（写真10）。弱はBタイプ光沢を主に光沢部分が散在的に観察される部分である（写真13）。中は両者の中間的な部分でAタイプ光沢の連接度の弱い部分やBタイプ光沢が連接し平面的な広がりをみせる部分（写真12）が対応する。分布図を作成した石器の光沢分布はいずれも共通する特徴をもっている。光沢の発達が最も強いのは刃部中央部で刃部の左右、刃部の内側へいくにしたがって漸移的に弱くなっていく。このため光沢分布の範囲は緩やかな山形を呈する。また、各石器とも刃部の自然面、剥離面とも光沢が形成されており、光沢分布はほぼ表裏対称となっているケースが多い。

以上の使用光沢痕の観察は、石器の作業対象物、操作法を特定する上での重要な情報となる。粗製剥片石器の機能の推定については、次に記述する複製石器の使用実験の結果をあわせて考察する。

5．複製石器による使用実験

これまでに実施が行われている使用痕分析では、東北大学使用痕研究チームによる頁岩（梶原・阿子島1981）、御堂島による、サヌカイト、チャート、凝灰岩（御堂島1988）等の石材についての体系的な使用実験とポリッシュについての報告がある。これらの実験によ

り、光沢面の形成は基本的に石材をこえた共通性が認められることが明らかとなっており、石材による分布状態、形成速度等について異なる部分も指摘されている。砂岩については、御堂島（御堂島1988・1989）、山田しょう（山田1992）による実験がある。

粗製剥片石器に用いられる石材は、砂岩を主とし他にホルンフェルス、安山岩等多様な石材が用いられており、筆者自身は主要石材である砂岩製の複製石器による使用実験を進めている。その目的は、作業対象物と光沢面との関係、操作方法による光沢分布との関係に主眼をおいている。特にこれまでに推定してきたイネ科植物との関係において、どのような使用方法により出土石器にみられる光沢面が形成されるかは重要な課題だと考えている。本稿では継続中の実験の概要とこれまでに明らかになった点について若干記述しておきたい。

実験に使用する石器は岐阜県川島町の木曽川左岸の河原で採集した石材を用いた。人頭大の扁平な円礫を選び、台石（周辺の大きな岩）に側面がぶつかるように投げつけることで剥片を割り取っている。得られた剥片のうち縁辺が鋭く刃部として使用可能なものを選別し各実験に用いている。石器は全て手で持って作業を行っており、必要に応じて手で持ちやすいように背部及び側面に敲打等の調整を施した。刃部は剥片の縁辺をそのまま使用し、調整剥離は行っていない。

作業対象物については、これまでに推定してきたイネ科植物、特にイネの収穫に関わる作業との関連を想定した実験を行った。他に各作業対象物と光沢面との関係を検証するために、木、骨（ブタ）、鹿角、皮（エゾシカ）、石（砂岩）についても実験を行っている。

イネの収穫実験では弥生時代の収穫方法として想定される「穂摘み」、「穂刈り」、「根刈り」の3方法で行った*。穂摘みは主に磨製石庖丁の使用方法として推定されているもので、石器器面に稲穂を親指ではさみ手首の回転運動により切断する方法である。穂刈りは片手で稲穂をもち石器を刃部と平行に操作し切断する。根刈りは稲株の根本（地面から5cm程度）のところで根株を刈り取る作業を行った。イネ以外の対象物については御堂島の実験を参考にし、大きく4つの操作法に区分した。刃部に平行する1方向の運動（cut）、刃部に平行する前後2方向の運動（saw）、刃部に直交する運動で刃を立てて掻き取る方法（scrape）、刃部に直交する運動で刃をねかせ削る方法（whittle）である

表2　分析結果一覧

資料No.	光沢		光沢侵入度		光沢範囲長		線状痕	備　考
	A面	B面	A面	B面	A面	B面		
1	A B	A B	17	18	90	96	平行	
2	A B	A B	21	20	(66)	(69)	平行	
3	A B	A B	13	15	70	72	平行	
4	A B	A B	41	40	(82)	(90)	平行	
5	A B	A B	28	19	71	71	平行	
6	A B	A B	29	25	(74)	−	平行	
7	B A	B A	(15)	(9)	(35)	(42)	−	
8	A B	A B	19	20	70	62	平行	
9								
10								
11								
12								表面風化観察不能
13								表面風化観察不能
14								表面風化観察不能
15	−	A	−	−	−	−		表面風化剥落
16	A B	A B	(14)	(12)	(68)	(70)		刃部欠損
17	A B	A B	25	23	90	90	平行	
18	−	B	−	−	−	−	平行	表面風化、鉄分付着
19	B A	A B	(13)	(15)	−	−	平行	表面風化
20	A B	A B	(6)	(9)	(31)	(30)	平行	刃部欠損
21								
22								
23								

＊イネの収穫実験については、斎野裕彦（斎野1996）、沢田　敦（沢田1995）、御堂島　正（御堂島1989）等の一連の収穫実験を参考にして実施している。

表３　粗製剥片石器の使用実験と光沢面

実験No.	石器No.	被加工物	被加工物の状態	操作法	作業量	形成された光沢面	写真番号
1	S-4	イネ（根株）	生	根刈り(cut)	900株 1株3～4回	非常に明るく表面の滑らかな光沢、面的に発達するもの、流動的な外観を呈するものがある。ハケでなでたような線状痕、ピットがみられる。Aタイプ。刃縁の広い範囲に分布。	25
2	S-3	イネ（根株）	生	根刈り(cut)	160株 1株4～5回	明るく滑らかな光沢。水滴状を呈するものもある。線状痕は明瞭でない。Bタイプあるいは Aタイプの光沢に対応。刃縁の表裏面に形成。	26
3	S-1	イネ（穂首）	生	穂刈り(cut)	2200本	水滴状を呈する丸味を帯びた光沢で、光沢表面は滑らかである。線状痕は明瞭ではない。刃縁の限られた範囲で確認された。Bタイプ。	27
4	S-2	イネ（穂首）	生	穂摘み	2000本	水滴状を呈する丸味を帯びた光沢で、光沢表面は滑らかである。線状痕は明瞭ではない。使用面の刃縁の限られた範囲で確認された。Bタイプ。	28
5	S-6	木（広葉樹）	生　加水	saw	5000回	明るくやや丸味を帯びた光沢。Bタイプの光沢に対応。イネの場合のBタイプに比べ線状痕が明瞭。刃縁の表裏面に形成。	29
6	S-9	木（広葉樹）	水漬け	saw	5000回	明るくやや丸味を帯びた光沢。Bタイプの光沢に対応。イネの場合のBタイプに比べ線状痕が明瞭。刃縁の表裏面に形成。	30
7	S-5	骨（ブタ）	水漬け	whittle	5000回	明るく平坦で貼りついたよう。操作方向に沿った線状痕。使用面の刃縁に確認された。光沢の形成範囲は限定され局所的に発達。Dタイプの光沢。	31
8	S-5	骨（ブタ）	水漬け	saw	5000回	明るく平面的で、多数のピットと鋭い線状痕が特徴。D2タイプの光沢に対応。他に未分化な微小光沢が広がる。刃縁の表裏面に形成。	32
9	S-7	鹿角	水漬け	saw	3000回	広い範囲に微小光沢が分布し、操作方向に沿って発達する。発達部は平面的で、鋭い線状痕がみられる。網目状に光沢が広がる部分もある。Dタイプ、Cタイプの光沢に対応するとみられる。	33
10	S-8	石（砂岩礫）	加水	saw	2000回	刃部の凹凸がなくなり、刃部に磨面を形成。明確なポリッシュは形成されなかったが、一部に直線的な線状痕、光沢がみられる。	34
11	S-10	皮（エゾシカ）	半乾燥～乾燥	whittle	10000回	鈍い光沢で、表面に細かな凹凸やピットがみられ、やや荒れた外観を呈する。刃部接触面の限られた範囲に形成。Eタイプの光沢に対応。	35
12	S-10	皮（エゾシカ）	半乾燥～乾燥	cut	5000回	鈍い光沢で、表面に細かな凹凸やピットがみられ、やや荒れた外観を呈する。刃部表裏面の限られた範囲に形成。Eタイプの光沢に対応。	36

＊実験１～４は静岡市立登呂博物館の復元水田において実施した。
実験11・12は仙台市富沢遺跡保存館において実施した。

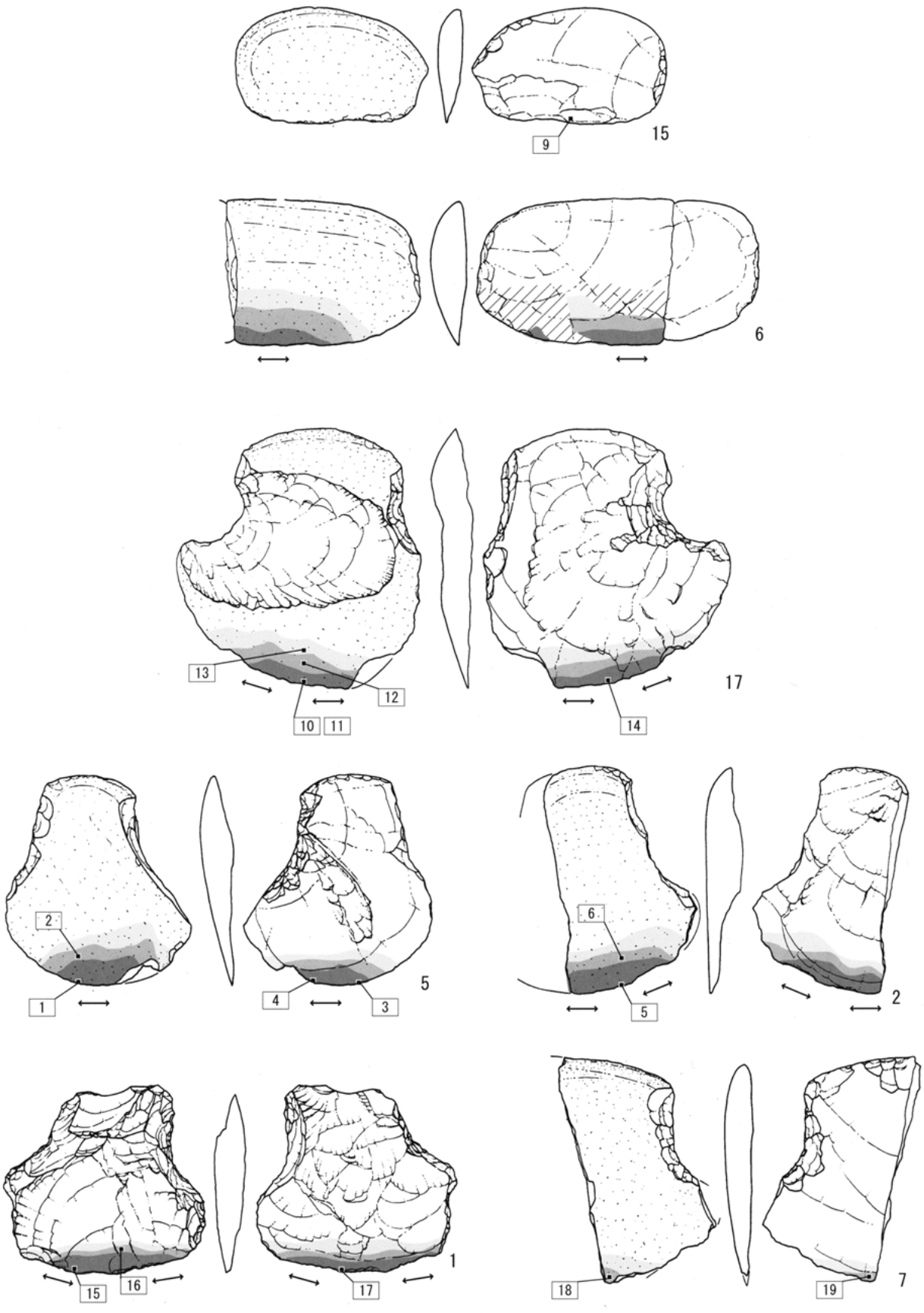
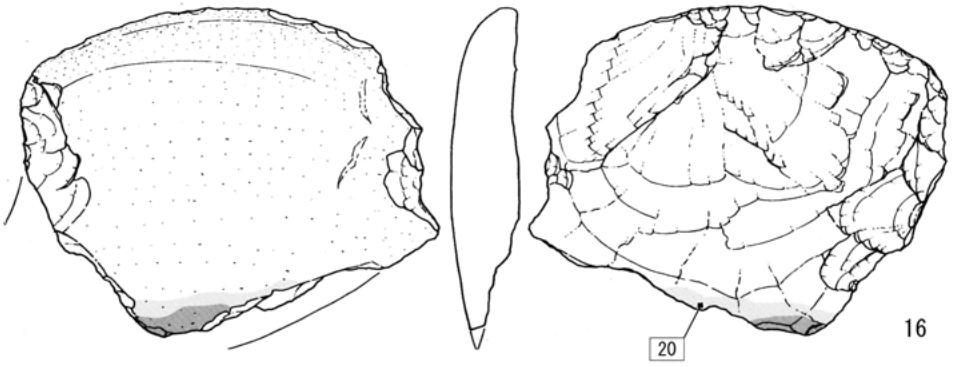
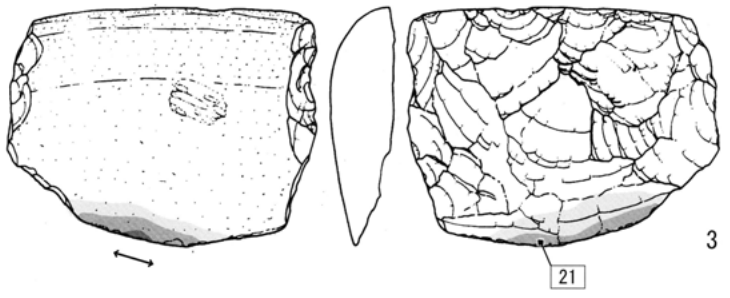
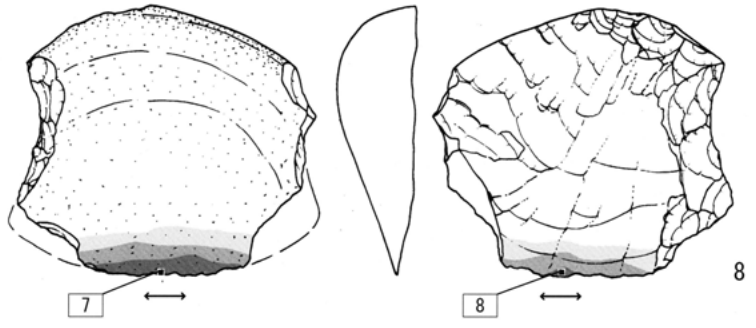
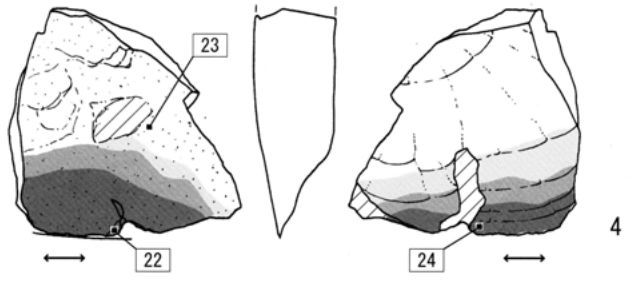


図1　光沢強度分布図（1）　1/3









弱　　強　　⟷ 線状痕の方向

中　　観察不能　　＊ 口番号は写真番号に対応

図2　光沢強度分布図（2） 1/3

(今回の実験ではscrapeは行っていない)。なお、イネ収穫実験の「穂刈り」、「根刈り」はcutに類別される。

実験結果の概要は第3表に示した通りである。作業対象物と光沢面との関係では、これまで他の石材で行われている実験結果、御堂島による硬砂岩での実験結果をほぼ追証することができたと思われる。ただ、梶原・阿子島分類と御堂島分類には若干分類基準に異なるものがあり、特に光沢として未分化なものについては今回積極的に分類に対応することをしなかった。また、各石器に表れる光沢面はその発達の度合いを含め多様な在り方をしている。今回提示した光沢は特徴的なものであることをことわっておきたい。

稲刈り実験では各作業においてAタイプ、Bタイプの光沢が形成された。Bタイプの光沢は木を対象とした場合にもみられる光沢であるが、今回の木の実験で生じた光沢は線状痕、ピットが多くややあれた外観を呈するものであり、生のイネのきわめて滑らかな光沢表面とは識別が可能であると思われる。各作業による光沢形成の違いについては、実験2～4ではBタイプが主であり、Aタイプが明瞭に確認されたのは実験1の根刈りである。これは各実験の作業量と関係している。特に穂摘み、穂刈りでは対象物との接触範囲がきわめて限定されるため、同一時間内での作業であっても光沢形成のスピードが根刈りに比べ遅いと考えられる。この点は同一の根刈り作業で作業量の違う実験1と実験2での光沢形成の違いが参考となろう。 また、光沢の分布範囲については根刈りの方が穂刈りに比べ刃部の広い範囲に光沢が形成されている。さらに作業量を増した時点での比較が必要であるが、対象物との接触範囲が広い根刈りの方がより広範囲に光沢が形成されると推定される。

6．粗製剥片石器の機能・用途

顕微鏡観察により確認された使用光沢面は、Aタイプ、Bタイプの光沢であり、いずれの資料もAタイプ光沢との強い相関関係がみられる。実験により形成された各対象物と光沢面との関係からみても、門間沼遺跡出土の粗製剥片石器の用いられた作業対象物はイネ科植物であったと推定される。光沢は刃部に沿った自然面、剥離面で表裏対称に形成されており、石器の表裏ともに対象物と接触する操作法が推定される。確認された線状痕が刃部に対し平行することをあわせれば、石器を刃部に平行に操作するイネ科植物の切断を機能と考えることができる。この分析結果は、筆者がこれまでに実施した清洲町他朝日遺跡、一宮市東新規道遺跡、稲沢市・平和町一色青海遺跡出土資料の分析結果と同様であり、粗製剥片石器の農具としての評価を裏付けるものと考えたい。

使用痕分析の結果想定されたイネ科植物の切断具としての機能はこれまでにも推定されてきた収穫具としての粗製剥片石器の評価と矛盾するものではないが、実際の使用方法については、直接の収穫作業としての「穂刈り」や「穂摘み」、穂首を収穫した後の稲藁利用のための根株刈り取り、あるいは耕作前の雑草の刈り取り等多様な見解がある。ここでは先の稲刈り実験によるデータの比較も含め若干の検討を加えておきたい。

稲の収穫実験では観察した出土資料ほどの光沢の発達、広がりは形成されていない。これは実験での作業量が出土石器の実際の作業量に及んでいないためと考えられる。出土石器にみられる強度の光沢の形成はかなりの量的、時間的な作業の蓄積によるものであり、一過性、便宜的な使用ではないことを示している。しかし、光沢の形成は常に作業対象物の接触によって生じるのであり、光沢の分布範囲は作業量に応じて際限なく拡大するものでもない。実験では作業時の記録としてイネの残留物の石器への付着範囲を記録しており(図3)、この付着物の範囲が石器とイネとの接触範囲を反映したものと考えられる。つまり、今後作業を継続した場合もこの範囲内において光沢分布が形成されていくと推定される。

実験4の「穂摘み」では使用面刃部及び裏面の刃部の一部と親指で稲穂をおさえつけた体部左半に付着物がみられる。これは磨製石庖丁等の使用実験(松山1992、御堂島1989)と整合するが、粗製剥片石器の光沢分布とは全く異なり今回の検討からは除外される。

実験1・2の「根刈り」ではほぼ刃部の全域に広がり、石器内側へ大きく侵入している(実験1：36㎜、実験2：45㎜)。

実験3「穂刈り」では刃部長に占める付着範囲は狭く侵入度も小さい(13㎜)。出土資料との比較では明らかに「根刈り」作業と類似した範囲を示している。粗製剥片石器の使用法としては、「穂刈り」のような作業よりも「根刈り」にちかい厚みのあるものを対象に用いられたと考えるのが妥当であろう。

7．粗製剥片石器をめぐる問題の所在

粗製剥片石器は弥生時代の尾張地域の石器組成を特色づける石製農具の一器種と考えられる。最後に粗製剥片石器及び尾張地域の石製農具についての若干の問題を記述しておきたい。

まず、農具としての粗製剥片石器の出現時期について。弥生期の粗製剥片石器の技術的な系譜は縄文時代以来存在する貝殻状を呈する自然面を残す剥片石器にあるが、尾張地域、特に低地部での縄文晩期遺跡出土資料は今のところ知られていない。弥生前期の資料は近年増加しつつあり、一宮市山中遺跡、同元屋敷遺跡*、同三ツ井遺跡出土資料がこの時期に属す資料と考えられる。形態的には、縄文のものに比べ大型化したものが目立つ点、側縁への敲打・剥離による二次加工を加えたものが出現し、以降の形態的なバリエーションが出揃っている。刃部にロー状光沢が認められるものが確実に存在し、法量、形態的な画期が農具としての性格の成立に対応するものと考えられる。これまでのところ不明である縄文晩期段階でこの種の石器が存在するのかは今後の課題となろう。

粗製剥片石器の石器組成上の評価としては、当地域において稀少器種である磨製石庖丁を代用する収穫具としての期待が大きい。磨製石庖丁を出土する遺跡は少なく、朝日遺跡等拠点的な集落をのぞけば、各遺跡とも数点、あるいは全く出土していない遺跡も多い。門間沼遺跡についても磨製石庖丁は出土しておらず、石器組成上収穫作業に関わる石器として想定可能なのは粗製

＊一宮市教育委員会による平成8年度の発掘調査では、前期弥生土器に伴って100点以上の粗製剥片石器が出土している。一宮市博物館において実見した際には多くの資料にロー状光沢が観察された。

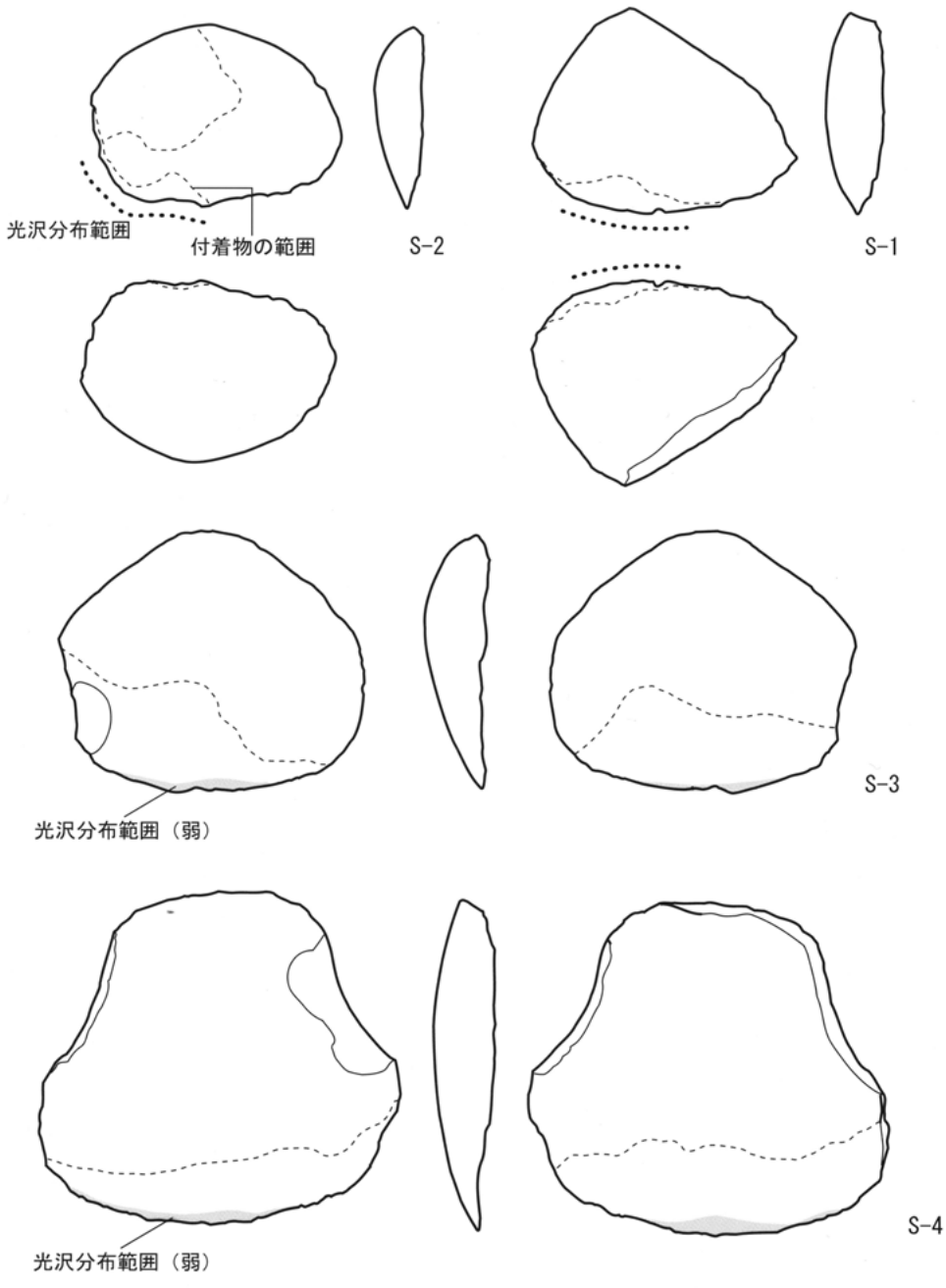


図３　実験石器模式図　1/3　　※付着物の範囲は各実験後に計測。

剥片石器だけである。しかし、本稿でもみてきたように、粗製剥片石器の機能は弥生時代の収穫法として想定されている穂首を刈り取るための道具ではなく、より厚みのある部分への使用が考えられ、むしろ根刈りのための鎌と考えるのが妥当である。使用痕からみた機能としてはむしろ大型磨製石庖丁に類似しており（原田1998）、大型磨製石庖丁と機能・用途を共有する石器として位置付けられる。このことは当地域における収穫形態の特色を反映したものであるのか、あるいは石器以外の道具を含め未知の収穫具の存在を想定すべきものであるか未解決の問題である。

引用・参考文献

愛知県埋蔵文化財センター　1999『三ツ井遺跡』。

阿子島香　1989『石器の使用痕』考古学ライブラリー56　ニュー・サイエンス社

梶原洋・阿子島香　1981「頁岩製石器の実験使用痕研究 ー ポリッシュを中心とした機能推定の試みー」『考古学雑誌』第67巻第1号　日本考古学会。

斎野裕彦1996「板状石器の形態と使用痕」『中在家南遺跡他』第2分冊　仙台市教育委員会。

斎野裕彦　1993・1994　弥生時代の大型直縁刃石器（上・下）」『大阪府立弥生文化博物館研究報告』第2集・第3集　大阪府立弥生文化博物館。

沢田敦　1995「下谷地遺跡出土「石庖丁」の使用痕分析『新潟港古』第6号。

原田幹　1997「粗製剥片石器研究ノート（Ⅰ）」『年報 平成8年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター。

原田幹　1998「東新規道遺跡出土粗製剥片石器の使用痕」『東新規道遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター。

原田幹　1998「朝日遺跡出土の石庖丁をめぐって ー 石器使用痕からみた尾張地域における石製収穫具の問題 ー」『貞末堯司先生古稀記念論集 文明の考古学』　貞末堯司先生古稀記念論集編集委員会。

町田勝則　1993「粗製剥片石器の使用痕について」『朝日遺跡』Ⅳ　(財)愛知県埋蔵文化財センター。

松山聡　1992「石庖丁の使用痕」『大阪文化財研究』第3号　(財)大阪文化財センター。

御堂島正　1988「使用痕と石材 ー チャート、サヌカイト、凝灰岩に形成されるポリッシュ ー」『考古学雑誌』第74巻第2号　日本考古学会。

御堂島正　1989「有肩扇状石器の使用痕分析」『古代文化』41-3　(財)古代学協会。

御堂島正　1989「『抉入打製石庖丁』の使用痕分析」『古代文化』41-6　(財)古代学協会

御堂島正　1991「磨製石庖丁の使用痕分析」『古代文化』43-11　(財)古代学協会。

山田しょう・山田成洋　1992「静岡県内出土の「石庖丁」の使用痕分析」『川合遺跡』遺物編2　(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所。



写真 1　200X

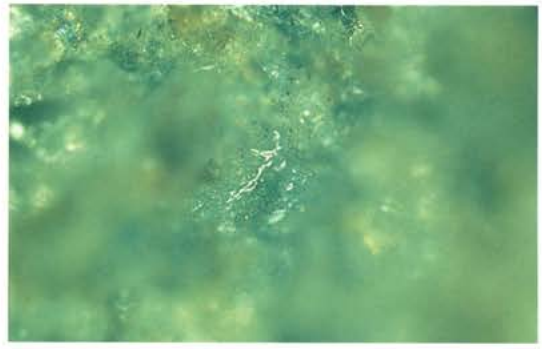


写真 2　200X

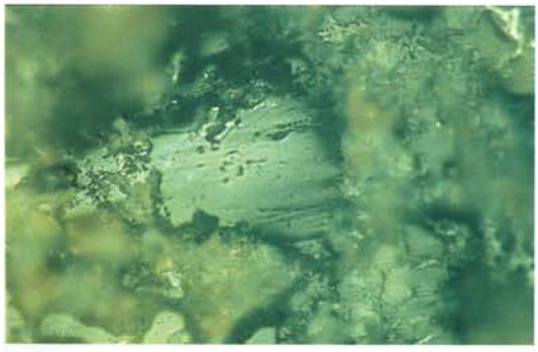


写真 3　200X

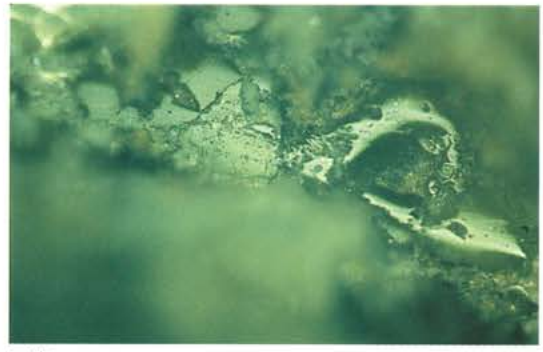


写真 4　200X

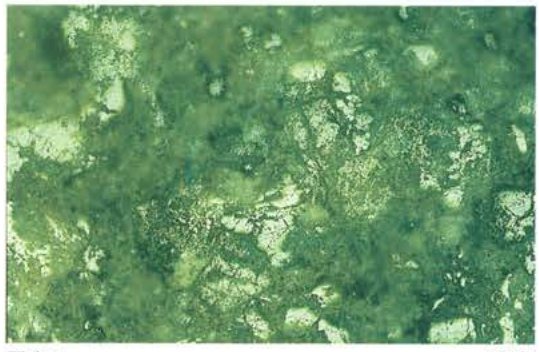


写真 5　100X

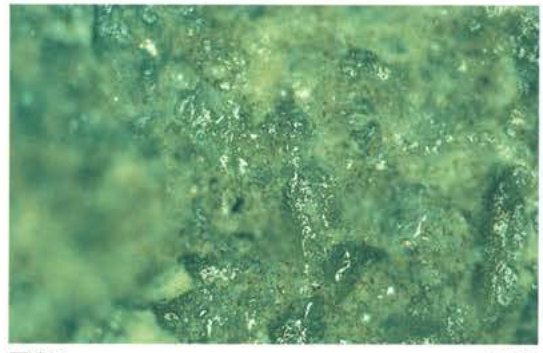


写真 6　100X

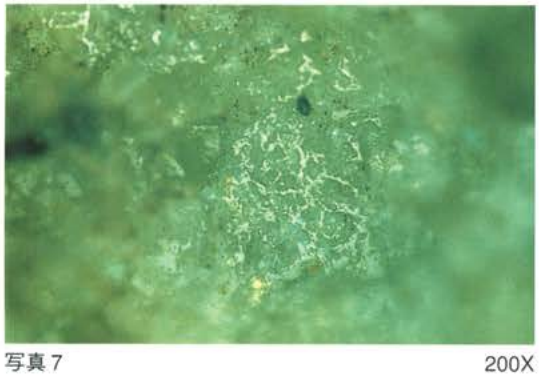


写真 7　200X

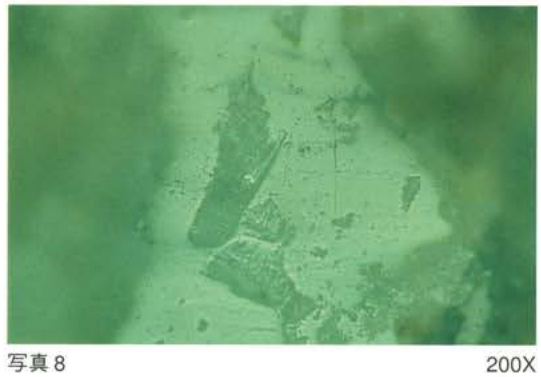


写真 8　200X

図 4　顕微鏡写真（1）

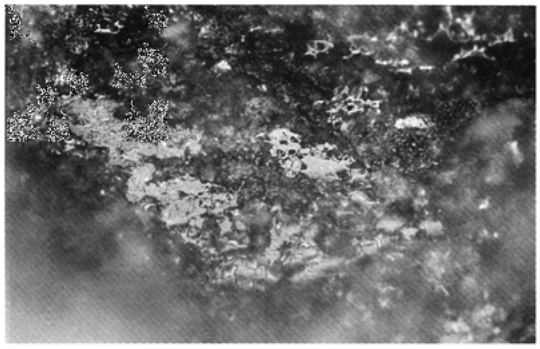


写真 9　200X



写真 10　100X

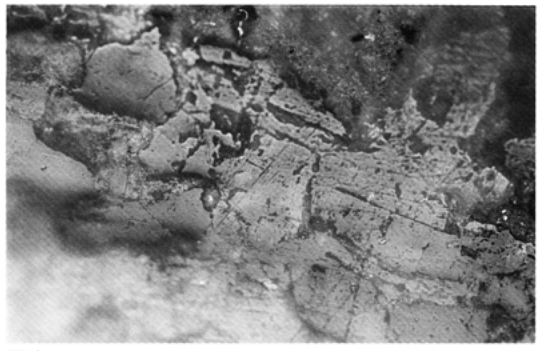


写真 11　200X

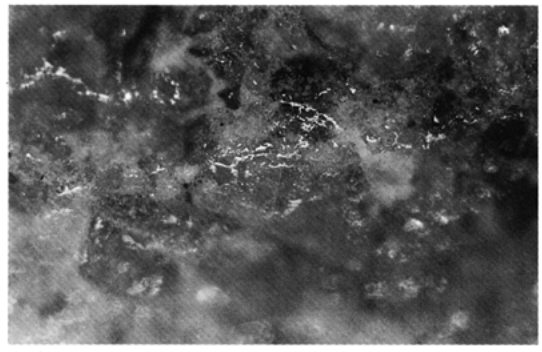


写真 12　100X

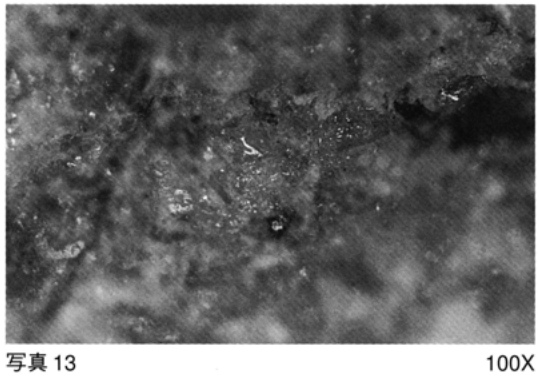


写真 13　100X

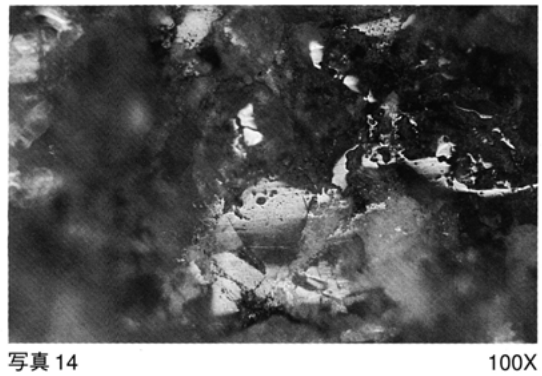


写真 14　100X



写真 15　200X

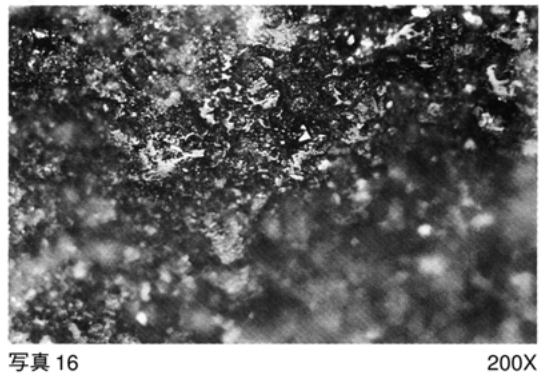


写真 16　200X

図 5　顕微鏡写真（2）

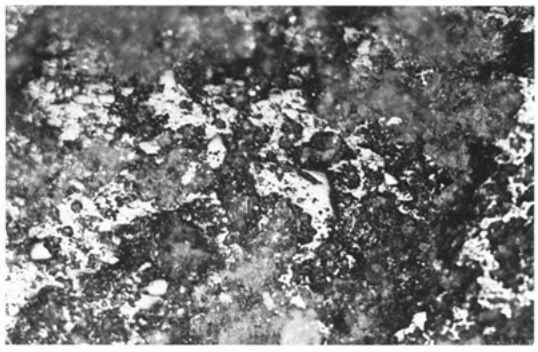


写真 17　100X

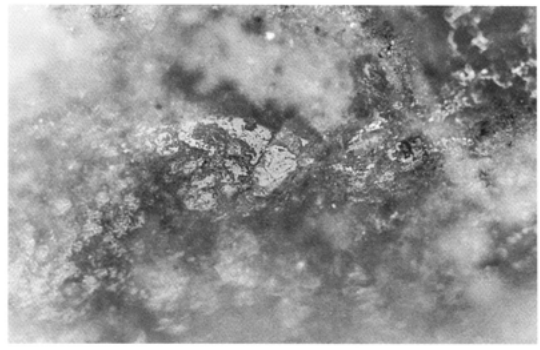


写真 18　200X

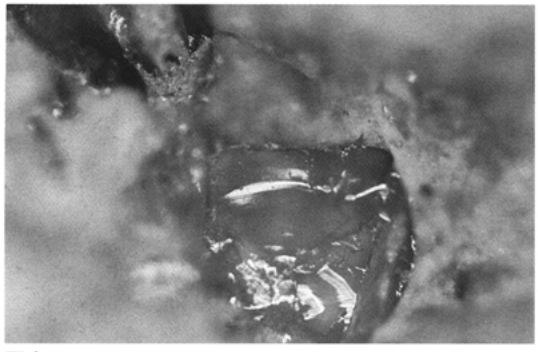


写真 19　100X

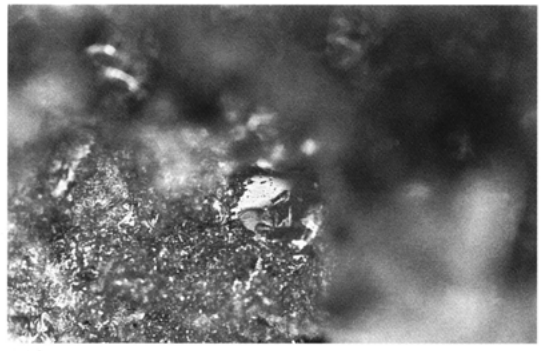


写真 20　200X

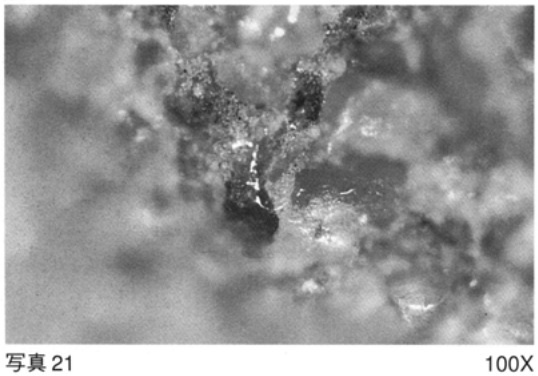


写真 21　100X

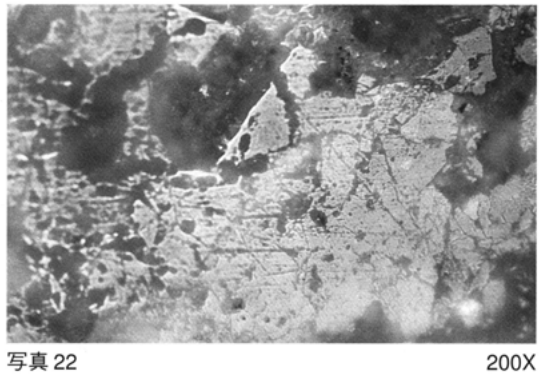


写真 22　200X

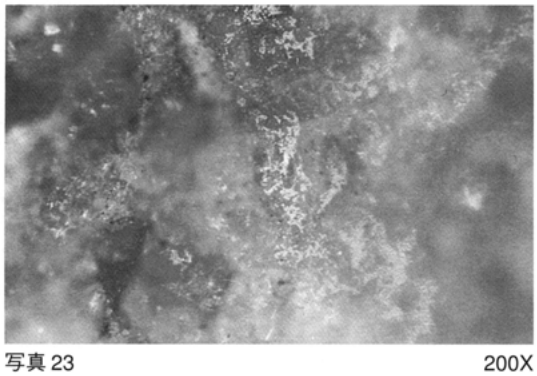


写真 23　200X

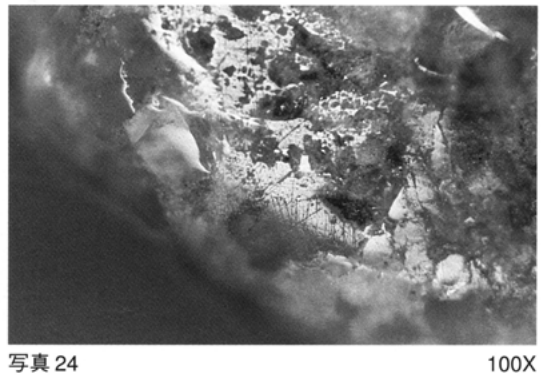


写真 24　100X

図 6　顕微鏡写真（3）

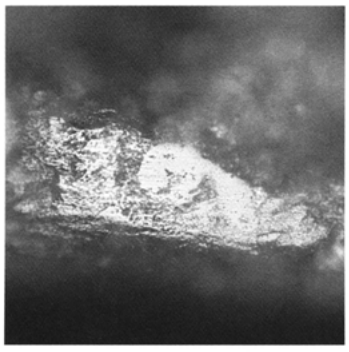


写真25　実験1（イネ根刈り）

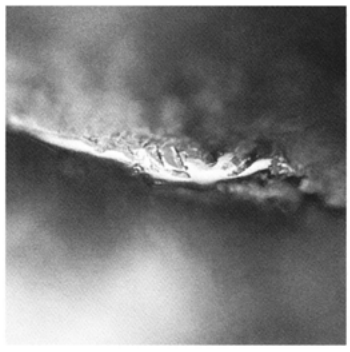


写真26　実験2（イネ根刈り）

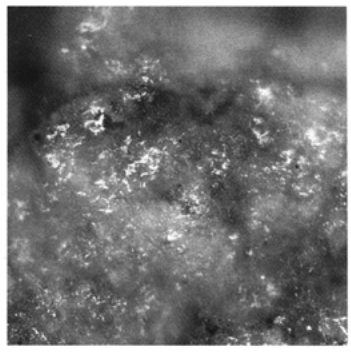


写真27　実験3（イネ穂刈り）

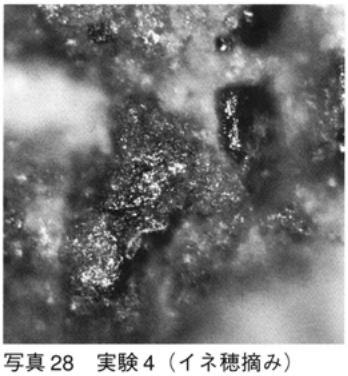


写真28　実験4（イネ穂摘み）

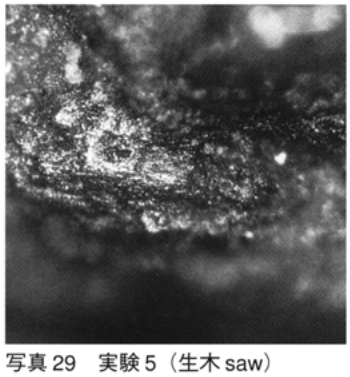


写真29　実験5（生木saw）

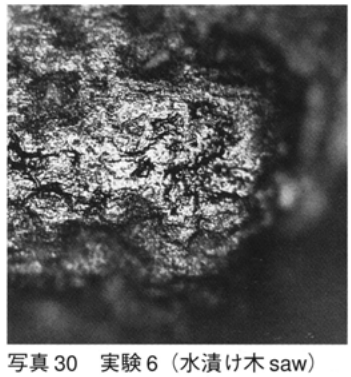


写真30　実験6（水漬け木saw）

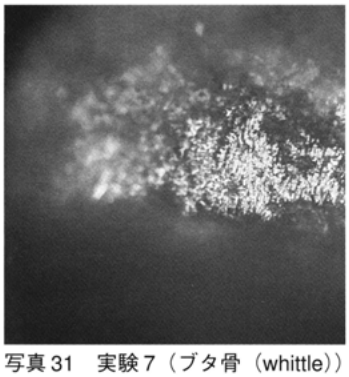


写真31　実験7（ブタ骨（whittle））

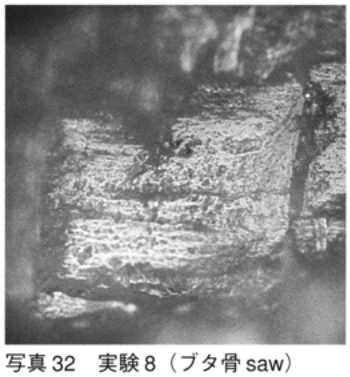


写真32　実験8（ブタ骨saw）

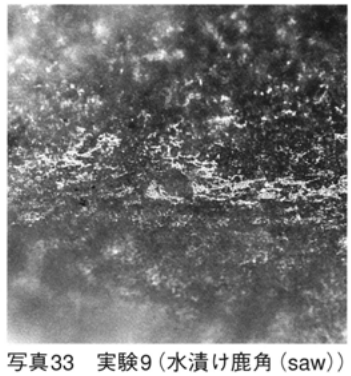


写真33　実験9（水漬け鹿角（saw））

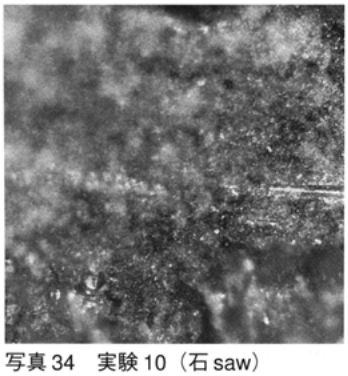


写真34　実験10（石saw）

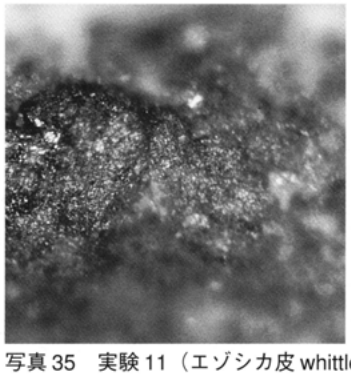


写真35　実験11（エゾシカ皮whittle）

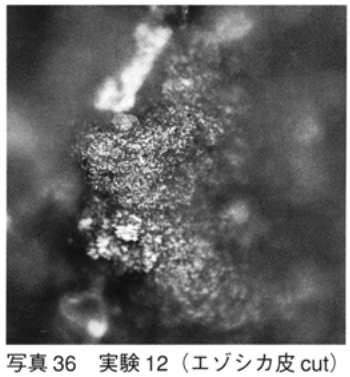


写真36　実験12（エゾシカ皮cut）

図7　実験石器顕微鏡写真　※写真25～36／200×

門間沼遺跡における古代・中世の鉄器生産を考える

蔭山誠一、鈴木正貴

1．はじめに

これまで「愛知県における古代・中世の鉄器生産」というテーマで稲沢市堀之内花ノ木遺跡・大縄遺跡・儀長正楽寺遺跡の３遺跡(鈴木・蔭山1997)、一宮市清郷遺跡・江森遺跡の２遺跡(鈴木・蔭山・天野1997)出土の鉄資料について整理・分析を行ってきた。稲沢市内の堀之内花ノ木遺跡・大縄遺跡・儀長正楽寺遺跡においては、鉄資料の出土分布から５つの群を見出し、分類した鉄資料の組成が何らかの有機的関係が存在するように思われ、同時に鍛冶工房の場所特定への分析が可能となった。鉄資料の組成においても椀型滓と含鉄遺物の比率より精練鍛冶から鍛造鍛冶の両工程の存在を踏まえつつ、精練鍛冶主体の遺跡と鍛練鍛冶主体の遺跡との区分を試みた。２つの工程において流動滓Ｂの存在も１つの特徴とされた。続いて分析した一宮市にある清郷遺跡・江森遺跡においては、一括性の高い資料群であることからより限定した鍛冶工程を検討した。しかし清郷遺跡では椀型滓に加えて流動滓、含鉄遺物が各々20％以上存在する点から稲沢市内の３遺跡の中間的組成となり鍛冶工程の限定はできなかった。江森遺跡においては多量に出土した椀型滓の量から新たな組成を設定することが可能になり、江森遺跡における組成から繰り返し操業されたかなり本格的な鉄器生産工程の存在と破割された椀型滓の量から精練鍛冶を主体とする工程を推定した。以上の２つの検討によって主に鍛冶工程の違いを推定する手掛かりは得られたものの現状でその区別は判然とせず、今後の課題として残った。

その後栃木県金山遺跡の鍛冶について椀型滓、鍛造剥片、粒状滓、鉄塊系遺物・未製品・製品・再生品の分類からその組成と各分類の量比によって精練鍛冶から鍛練鍛冶への工程を区分する研究(津野・本田1993、津野・亀田1994、津野・小筆1995、津野・吉田1996、津野1996)が行われているのを知った。鉄資料と鍛冶遺構、特に鍛冶炉との関係、分類した鉄資料相互の関係についての分析が中心に行われ、一定の方向性が示されていた。金山遺跡における研究では、さらに竪穴型の鍛冶遺構を中心とする鍛冶工房の素材の採取から、各鍛冶工程、廃滓などの廃棄に至る工程・経営といった工房のあり方に至る分析が行われた。また各鉄資料の分類で想定した工程を自然科学的分析(大澤1993～1996)によって裏付けていく作業が行われたことにより、他遺跡における分析にその要素を検討する上で有効な分類になったと思われる。

今回は金山遺跡における研究を参考に、これまでの方法に加えて椀型滓の分類、流動滓Ａ・Ｂの量比について新たに着目し、本報告による門間沼遺跡出土鉄資料の分析をまず行い、その後当センターにおいて調査された一宮市北部地域の４遺跡（北道手遺跡・田所遺跡・大毛沖遺跡・大毛池田遺跡）出土鉄資料についても比較検討する。

2．門間沼遺跡における鉄資料の組成

門間沼遺跡の概要については本報告に譲り、ここでは本書「金属製品と鉄資料」報告において行った鉄資料の分類にしたがって出土分布図を作成し、分布の密集する群を抽出し、各群の鉄資料の組成を分析する。

（１）鉄資料の出土分布とその組成

門間沼遺跡分類にしたがって鉄資料の分布を示したのが図１である。図１の椀型滓と流動滓Ａ・Ｂの出土分布から考えると、95A区東側から95B区西側に分布する95A･B群、95Da区を中心に95C区北東部から95Db区にかけて分布する95Da群の２つの大きなまとまりがある。また94Ca区北側･95Db区北側･95B区にかけて椀型滓と流動滓は少量で炉壁と羽口が多く分布する94B･C群も大きなまとまりとして区分することが可能である。さらに少数の椀型滓と流動滓の分布のまとまりを認めると、95Db区北側に分布する95Db群、95Ea区北側に分布する95Ea群、95Eb区南側に分布する95Eb南群、95Eb区北東側に分布する95Eb北群の４小群に分けることができる。

大群３つの鉄資料の組成を検討すると、椀型滓を主体とする95Da群と椀型滓を含むものの流動滓が主体である95A･B群、椀型滓と流動滓は少量で炉壁と羽口が多い94B･C群というそれぞれ特色が認められる。流動滓について注目すれば流動滓Ａが主体の95A･B群と流動滓Ｂが主体の95Da群・94B･C群という相違が存在する。

４つの小群は、椀型滓１～２個と少量(１～３個程度)の流動滓で構成され、それに少量の含鉄遺物や鉄片・鉄製品が伴う。流動滓について注目すれば流動滓Ａが主体の95Ea群と流動滓Ｂが主体の95Eb南群、95Eb北群に区分できる。

（２）椀型滓の出土傾向

各資料群における椀型滓の種別の組成を見ると、椀型滓を多数含む95Da群において多様な椀型滓があり、質感の重い椀型滓Ｂと質感の軽いその他の椀型滓の比率は５：15である。94B･C群、95Ea群、95Eb南群、95Eb北群も少数であるが質感の軽い椀型滓が主体である。

質感の重い椀型滓が主体である資料群はないが、95A・B群は両者の椀型滓が1点ずつ出土している。

（3）小結

椀型滓と流動滓、含鉄遺物などの組成を考えると、流動滓Bが多い資料群では質感の軽い椀型滓が多く伴い、流動滓Aが多い資料群では比較的質感の重い椀型滓も多く伴う傾向があり、95Da群では含鉄遺物や鉄片・鉄製品なども多く含む。94B・C群、95A・B群、95Da群では鞴の羽口も出土しており、鍛冶による鉄器生産が行われた可能性が高い。

また各資料群の時期であるが、95A・B群、95Da群の分布する区域では古墳時代～平安時代の遺構と中世の居住域に伴う遺構が重複しており、特定が難しい。95Da群は一部近世の溝出土資料があるものの、13世紀の溝・土坑から出土しているものが多いことから13世紀に、95A・B群は中世の居住域の中にありながらも古代（7世紀～10世紀）の溝出土資料があることから7世紀～10世紀の資料群と思われる。94B・C群は資料の組成が他の資料群とは異なり、また古代・中世の遺構群とも比較的重複しないこと、6世紀中葉（東山61号窯式）のSZ02北外周溝、SE26など遺構から羽口や炉壁と思われる破片が出土したことから6世紀前半のものである。95Ea群、95Eb南群は7世紀の竪穴住居出土資料から7世紀に属するものと思われる。他の資料群は時期が判明する遺構からの出土がないが、基本的に中世の居住域と重複することから、中世のものと考えられる。

3．周辺遺跡における鉄資料の組成

門間沼遺跡を含めて今回取り上げる4遺跡はすべて木曽川の左岸にあり、犬山扇状地帯の扇端部から沖積地帯に位置する遺跡群で、北から北道手遺跡、田所遺跡、大毛池田遺跡、大毛沖遺跡が位置する。ここでは各遺跡の概要をまず述べ、続いて鉄資料の分布と分布から認識できる資料群の組成を検討する。*

＊ここでの4遺跡において椀型滓B・椀型滓Cの厚みが薄い（厚さ1.90m以下）ものをそれぞれ椀型滓B'・椀型滓C'と区分しているが、椀型滓の集計では各々椀型滓Bと椀型滓Cに含めて考えている。

（1）北道手遺跡

概要　ほぼ南北に約100mの部分を93A区～93E区に分けて調査されている。遺跡は弥生時代中期中葉～鎌倉時代まで継続し、主に5期の変遷が推定されている。この中で古墳時代前期初頭とされる時期が遺構・遺物とも最も多く、全調査区において竪穴住居（1棟）、溝、土坑などの遺構が確認されている。奈良時代の遺構は遺跡南側の93C区から93D区にかけて土坑・溝などが散在的に確認されており、鎌倉時代の遺構も93B区・93C区・93D区の南側を中心に溝・土坑が散在して検出された。奈良時代・鎌倉時代の北道手遺跡は遺構・遺物とも希薄であり、居住域が広く展開する様子はうかがえない。

鉄資料の分布とその傾向

北道手遺跡で確認できた鉄資料は93A区において古墳時代前期の偏平含鉄遺物1点と時期不明の流動滓1点が確認されているのみで、遺跡調査区内において鉄器生産が行われた可能性は少ない。

（2）田所遺跡

概要　調査区は南北に約310mあり、92Aa区～95B区の大小27の調査区に分けて調査されている。遺跡は縄文時代晩期から近世にかけての複合遺跡で、水田跡や土坑がみつかった古墳時代中期、竪穴住居・土坑・溝が検出された奈良・平安時代、墳墓堂遺構とされる掘立柱建物と墳墓堂遺構に伴う区画溝、大溝や区画溝、井戸、土坑などが見つかった鎌倉時代の大きく4期に区分される。奈良・平安時代には92Ab区・92Aa区・95Aa区北側・93Hb区北側に居住域が形成され、竪穴住居の重複がみられる。鎌倉時代には墳墓堂遺構の存在する92Gb区とその南側に展開する墳墓堂遺構との関連を想定できる溝が展開し、93J区より南側には大溝とされる溝が掘られ、93G区・92H区には溝や井戸、土坑などからなる居住域が想定される。

鉄資料の分布とその傾向

墳墓堂遺構のある92Gb区を中心とする北の調査区において鉄資料は希薄で、92Aa区・92Ab区を中心とする92Ca区・92Cb区・95Aa区・95Ab区・93Hb区に分布が密集している。またそれより南の93Ha区南側・95B区・93G区・92H区においてもやや大きな分布の偏りがみられる。一方92E区南側・93K区南側・93F区においても小さくやや不明瞭な分布の偏りがみられる。これらの分布の偏りをそれぞれ92A群、93G群、92E・93F群と考えることができる。

各群の鉄資料の組成を見ると92A群は椀型滓が多いものの流動滓、含鉄遺物、鉄片・鉄製品、鉄塊系遺物も多く、流動滓では流動滓Bがあるものの流動滓Aが主体である。93G群も同様な組成である。92E・93F群は椀型滓1点、流動滓A1点、鉄塊系遺物3点、炉壁からなる分布で、門間沼遺跡における小群と同様な資料群といえる。92A群、93G群では鞴の羽口が出土している点からも鍛冶による鉄器生産が行われた可能性が高い。また92A群出土資料について自然科学的分析（科学成分分析・顕微鏡繊維分析・X線回析・電子線マイクロプローグX線アナライザー等）が行われ、精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の両方が確認されている（川崎テクノリサーチ1993）。

各群の時期であるが、92A群は奈良・平安時代の遺構が密集する区域と重複し、9世紀後半のSB22や11世紀のSB23において椀型滓が出土していることから9世紀後半以後の平安時代を、93G群は12世紀後半～13世紀後半の遺構が分布する区域と重複することから鎌倉時代に属するものと考える。92E・93F群は遺構の希薄な区域にあり、明確な時期を決めがたいが、遺構の変遷過程から鎌倉時代に属する可能性が高い。

（3）大毛沖遺跡

概要　南北約400m、東西約250mの範囲において、93A区～94H区の20調査区に分けて調査されている。遺跡は7世紀後半から16世紀前半までに及ぶ複合遺跡で、古代においては竪穴住居からなる集落が、中世には区画溝に囲まれる居住域が3ヶ所想定されている。

古代においては遺跡中央を北東から南西に流れる旧河道右岸の94I区、左岸の93B区・93A区・93F区・94F区・94C区に居住域が作られ、小規模ではあるが数棟の竪穴住居が連綿と営まれつづける。中世には湿地化した旧河道に道

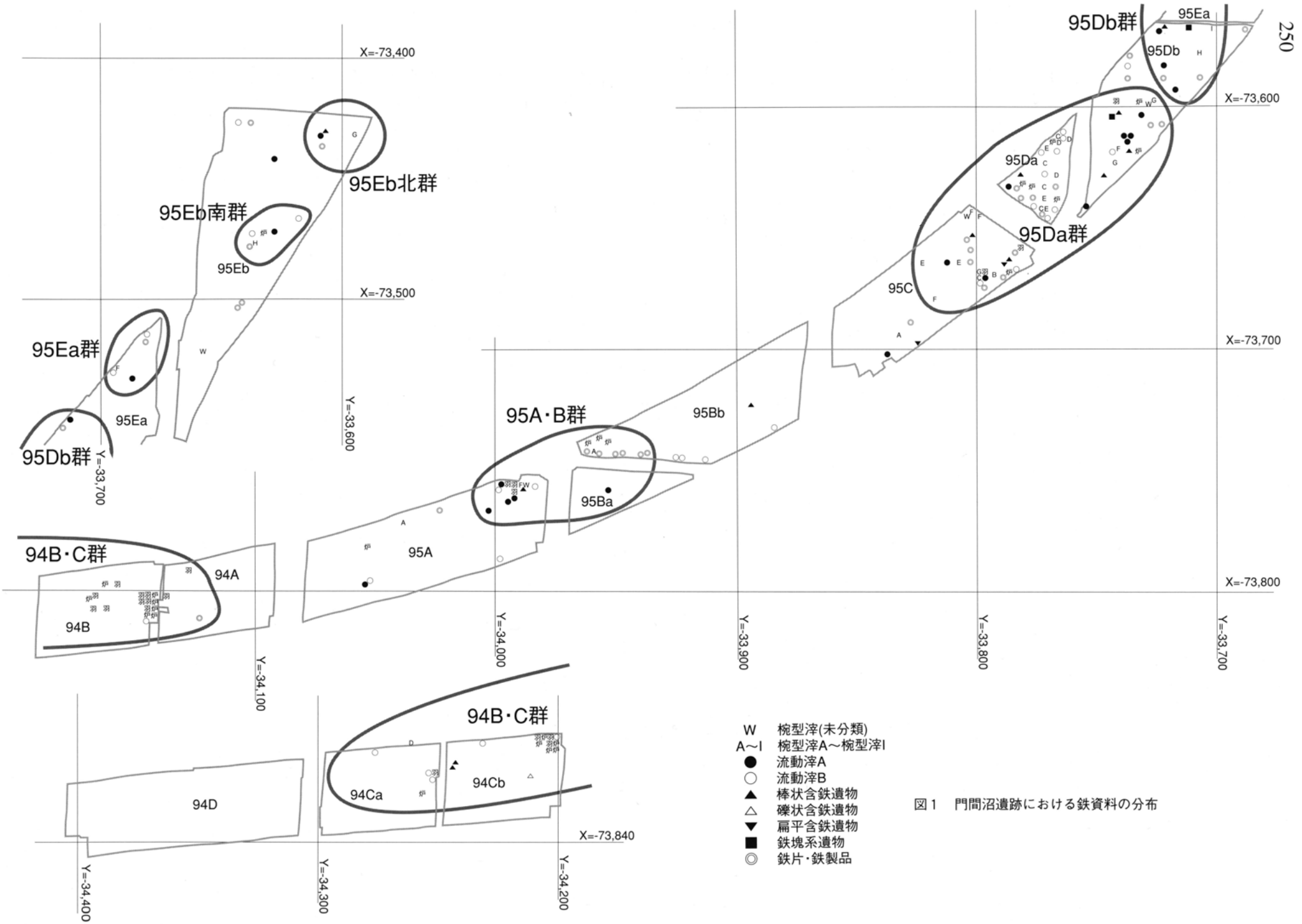


図1　門間沼遺跡における鉄資料の分布

が作られ、93A区・93B区・94H区・93I区において４つの居住域が１２世紀後半～１３世紀前半の時期を中心に営まれた。そしてその後は北西に隣接する大毛池田遺跡に集落が移動していったことが推定されている。94H区は１５世紀後半～１６世紀初頭においても居住域として機能したとされている。

鉄資料の分布とその傾向

鉄資料の明確な分布の偏りが94H区と94I区東側にあり、やや不明瞭な分布の偏りとして93F区・94F区と94I区西側から94A区北側、94B区東側・94E区に資料群を認識できる。それぞれ94H群、94I東群、94I西群、93F・94F群、94B群とする。

94H群の鉄資料の組成は椀型滓・流動滓が多く含鉄遺物などが３点と少なく、羽口が３点、炉壁が５点確認されているのが特徴である。94I東群は94H群と同様椀型滓・流動滓が多く、含鉄遺物・鉄片・鉄製品・鉄塊系遺物が合わせて７５点出土している点は注目される。他の３つの資料群では、椀型滓が１・２点で流動滓が少なく、含鉄遺物・鉄片・鉄製品・鉄塊系遺物が多数を占めるのが特徴である。94I東群、94I西群では流動滓Ａが主体であり、93F・94F群では流動滓Ａが１点のみ出土している。94H群は流動滓Ａと流動滓Ｂが同数あり、羽口が３点出土している。

各群の時期は94H群が１２世紀後半～１３世紀前半の居住域と重複することからその時期に、94I東群が古代の竪穴住居群と鎌倉時代の居住域と重複するが、鉄資料の多くが鎌倉時代の井戸・溝出土のものに限定される事から、１３世紀後半に属するものと思われる。94B群、94I西群は古代・中世の居住域とは外れているが、鉄資料の出土位置と中世の溝の分布との位置関係から１２世紀後半～１３世紀後半に属するものと考えられる。93F・94F群の時期は、古代には竪穴住居からなる居住域で、中世では墓域の可能性も指摘されているが、１３世紀～１４世紀の溝や土坑からの鉄資料の出土が見られることから、１３世紀～１４世紀の時期に考えておきたい。

（４）大毛池田遺跡

概要　南北約340ｍ、東西約100ｍの範囲で93A区～95G区の２４調査区に分けて調査されている。遺跡は古墳時代前期前半から室町時代後半まで続く複合遺跡で、大きく３時期に分かれる。水田が展開する古墳時代前期、遺跡を北東から南西にはしる大型の溝やその北側93Aa・C区・94F・Ma・Mb区・95C・D・G区に竪穴住居からなる居住域が形成される６世紀後半～９世紀前半の時期、井戸や土坑を伴う方形区画溝からなる居住域(屋敷地と思われ、全時期で８区画想定されている)が遺跡調査区西側の93B区・94Aa・Ab・C・D・E・F・J・Ma・Mb・N区と東側93C区・95C・D・G区で形成される平安時代末～室町時代前半の３時期がある。古代の大型溝は治水的機能や運河的機能をもつ広域な領域を管理するための計画的な水路と想定される。また１３世紀後葉～１５世紀後葉に営まれた区画６とされる屋敷地は１町四方の規模をもち、この地域を代表する居館跡の可能性が高い。地域の境界溝としての存在も推定される溝Ａは１３世紀後半～１５世紀前半まで継続して営まれる。

鉄資料の分布とその傾向

鉄資料の分布は明確な分布として95Ba区北側、95C・D区、95F区、94Ma・Mb区の４群があり、やや不明瞭な分布として94D区、94F区、94J区、95Aa・Ab区、95Ba区南側、の５群のまとまりがある。それぞれ95Ba北群、95C・D群、95F群、94M群、94D群、94F群、94J群、95A群、95Ba南群と名付けておく。

各資料群の組成は94J区資料に出土状況が不明瞭なものを多く含むため問題もあるが、95Ba北群、95F群では椀型滓と流動滓が多く、また流動滓Ｂが主体である点で類似する。95F群は含鉄遺物・鉄片・鉄製品・鉄塊系遺物の出土も多い。95C・D群、94M群は椀型滓を多く含み、流動滓Ａ・Ｂが各１点、含鉄遺物などが一定量出土している。94D群、94F群、95A群は椀型滓と含鉄遺物などからなり、流動滓がない点は１つの特徴を示す。94J群は椀型滓、流動滓、含鉄遺物などが一定量あり、95Ba北群の組成と類似するようであるが、流動滓Ａが主体である点で異なる。

各資料群の出土場所は、基本的には古代の遺構群と中世の遺構群が重複する区域からであり、特定し難い。95A群は１４世紀～１５世紀後半とされる溝出土資料が存在することから、大毛池田遺跡から黒田集落に続く道沿いに形成された居住域に伴うものである。95Ba北群は６世紀末から７世紀に流れた古代溝C・Dに伴うもの、95C・D群は区画７に伴う溝出土の資料から１２世紀～１５世紀後半のもの、95F群は古代溝Ｅからの出土した資料からみて８世紀後葉～９世紀の時期のもの、94D群は古代溝Ｆ出土資料から８世紀～９世紀のもの、94J群、94M群は区画１・２・３・４・６・７を区画する溝出土の資料から１２世紀後半～１３世紀後半を中心に１５世紀後半までのもの、94F群は区画５とその周辺から出土したことから１２世紀後半～１３世紀後半のものである。95Ba南群は少量であるが、羽口、流動滓Ｂが１３世紀後半～１５世紀前半に流れる溝Ａから出土している。

４．まとめ

以上各資料群の検討を行い、流動滓の量比によって流動滓Ａが主体の資料群（表１上部）・流動滓Ａと流動滓Ｂが同数または全く出土していない資料群（表１中部）・流動滓Ｂが主体の資料群（表１下部）の３つに分類した。ここでは（１）門間沼遺跡においてみられた椀型滓と流動滓Ａ・Ｂとの関係について他の４遺跡においてもみられることを明らかにし、（２）門間沼遺跡であまり出土していない含鉄遺物・鉄塊系遺物・鉄片・鉄製品の量比との関係を分析する。そして（３）最後に鉄資料の組成から見た鍛冶工程の想定とそのあり方を検討する。

（１）椀型滓と流動滓の関係

椀型滓と流動滓Ａ・Ｂの関係がある程度分かる資料群は門間沼遺跡を除いて１７群ある。流動滓Ａが主体の資料群は７群あり、椀型滓の中で質感の重い椀型滓Ｂ・Ｃが主体であるのは大毛沖94I東群、田所92E・93F群のみで、他は質感の軽い椀型滓が主体である。流動滓Ｂが主体の資料群は３群あり、質感の重い椀型滓Ｂ・Ｃが主体になるのは大毛池田95F群のみで、他の資料群は質感の軽い椀型滓が主体となる。流動滓Ａと流動滓Ｂが同数、あるいは全く出土していない資料群は７群あり、大毛池田95A群を除いて質感の軽い椀

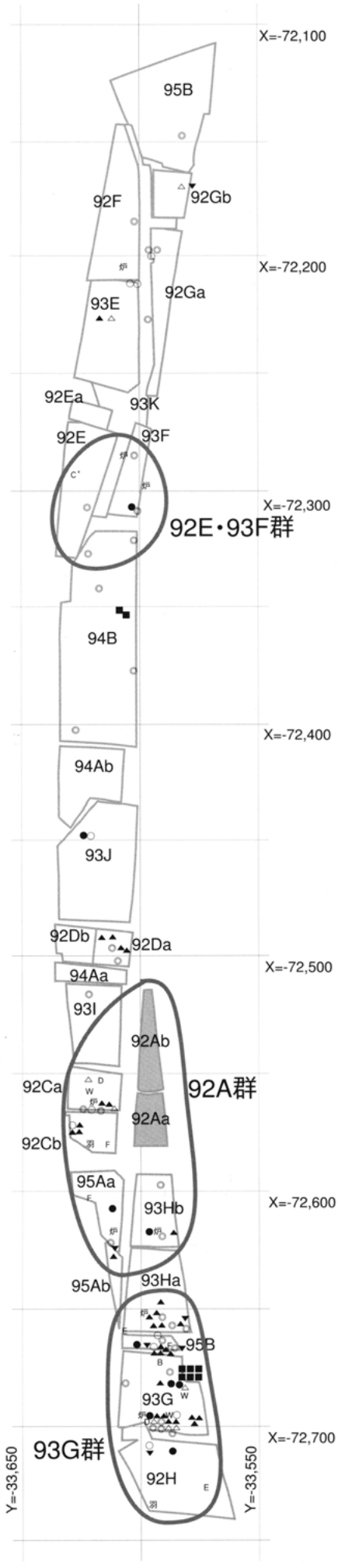


図２　田所遺跡における鉄資料の分布

W　椀型滓(未分類)
A～I　椀型滓A～椀型滓I
●　流動滓A
○　流動滓B
▲　棒状含鉄遺物
△　礫状含鉄遺物
▼　扁平含鉄遺物
■　鉄塊系遺物
◎　鉄片・鉄製品

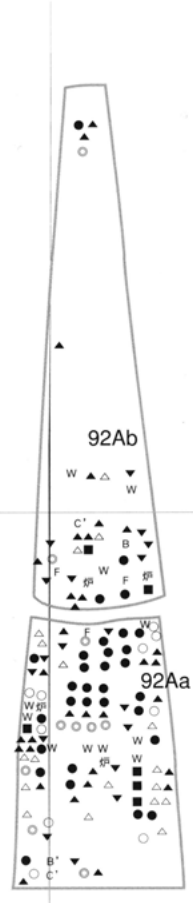
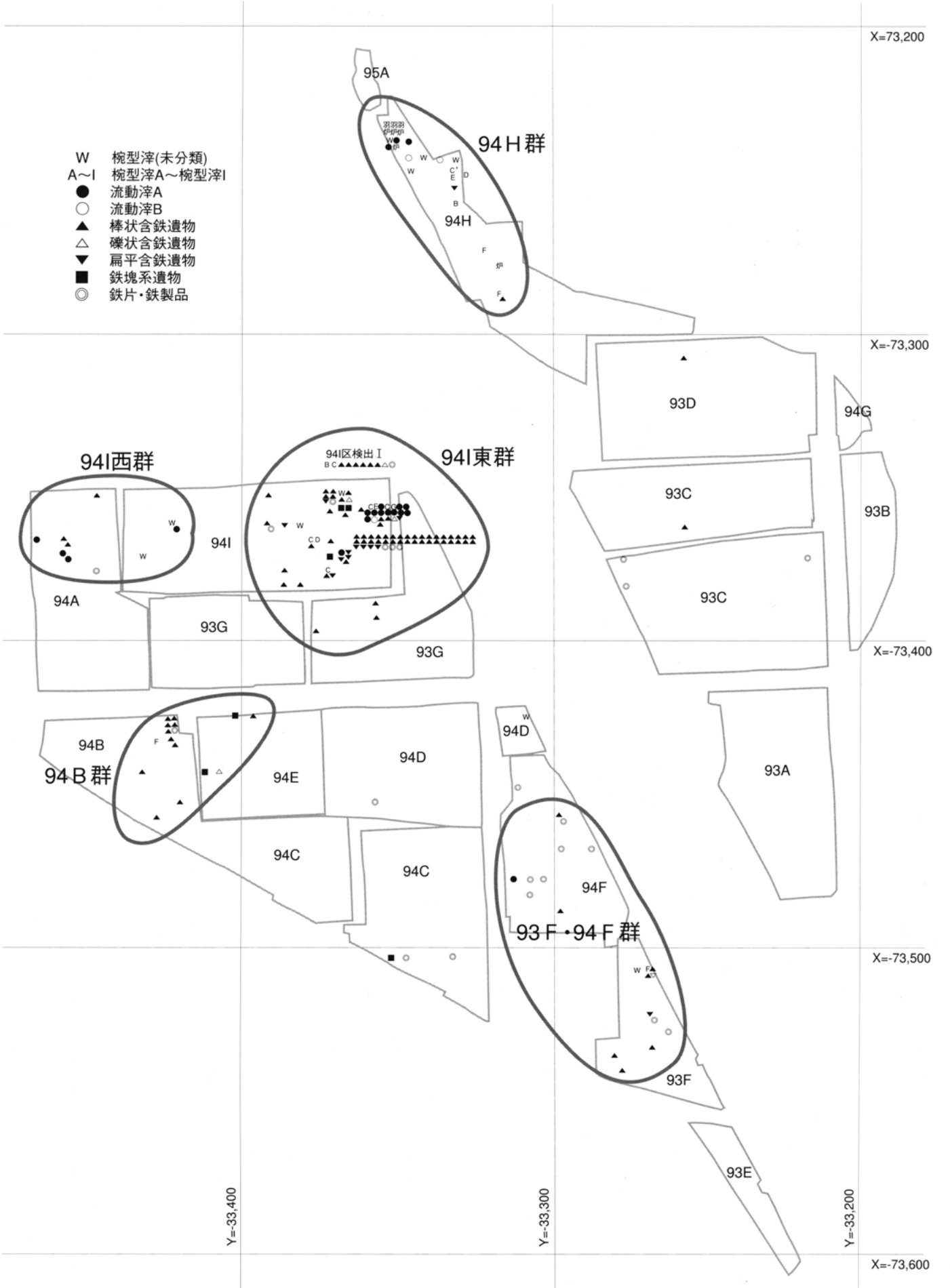


図３　大毛沖遺跡における鉄資料の分布



型滓が主体である。

椀型滓の中で質感の重い椀型滓B・Cの量比は全体的に低く、椀型滓B・Cが主体となる資料は2群のみである。しかし流動滓Aが比較的多い資料群中では椀型滓B・Cは主体にならないまでも一定量存在することがわかる。また流動滓Bが多い資料群では質感の軽い椀型滓が多いことがいえる。

（2）流動滓・椀型滓と含鉄遺物・鉄片・鉄製品・鉄塊系遺物の関係

流動滓と含鉄遺物・鉄塊系遺物・鉄片・鉄製品(以下「含鉄遺物など」とする)の関係については、流動滓Aが主体である資料群と流動滓Bが主体の資料群ではその量比が大きく異なり、流動滓Aが主体の資料群では含鉄遺物などが多く、流動滓Bが主体の資料群では少ない傾向がある。この中で例外的なものとして、流動滓Bが主体の資料群であるにもかかわらず含鉄遺物などが比較的多い大毛池田F群と門間沼95Da群は流動滓A・質感の重い椀型滓B・Cが多いことが分かる。また、流動滓Aと流動滓Bが同数出土、または全く出土していない資料群でも、質感の重い椀型滓B・Cが比較的多い大毛沖94B群、大毛池田95C・D群、大毛池田94M群の場合は、含鉄遺物などが多く出土している。流動滓A・椀型滓B・Cと含鉄遺物などとの関連性は高いと思われる。

（3）鉄資料の組成から見た鍛冶工程

発掘調査の段階、整理の段階におけるサンプルエラーの問題や鉄製品評価の問題があるが、含鉄遺物・鉄片・鉄製品・鉄塊系遺物の量は流動滓Aと流動滓Bの量比に対応して変化し、特に流動滓Aとの関係が深い傾向が伺える。また分類段階の問題があるが、流動滓Aと質感の重い椀型滓B・C、流動滓Bと質感の軽い椀型滓A・D～Iはより相対的ではあるが共伴して出土する傾向がある。

鉄滓と共伴して出土する含鉄遺物などを鍛錬鍛冶に伴う素材・加工未製品・製品・廃材と考える考古学的評価からいけば流動滓A・椀型滓B・Cの多い資料群・遺跡では、鍛練鍛冶を主体とした工程が行われていた可能性があるといえる。

また流動滓Bと椀型滓の関係では、必ずしも断定はできないが門間沼遺跡95Da群において椀型滓Dは流動滓Bと共伴して出土する可能性がある（図1）。

よって流動滓Bは流動滓Aとは反対に鍛練鍛冶でない工程、精練鍛冶に関わるものと想定でき、今回分類した椀型滓Dは精練鍛冶に伴って形成された滓である可能性がある。

このような想定が可能であれば、比較的鍛錬鍛冶主体と思われる門間沼95A・B群があるものの、古代における田所遺跡、大毛池田遺跡、門間沼遺跡では精錬鍛冶を含めた鍛錬鍛冶が行われた可能性が強く、中世の田所遺跡、大毛沖遺跡、大毛池田遺跡、門間沼遺跡では精錬鍛冶の工程を含みつつもより鍛錬鍛冶主体の工程が行われた可能性が高いものといえる。

今回の分析では鈴木と蔭山が鉄資料を分類・整理し打ち合わせた後、蔭山がまとめた。鍛冶工程の想定について一定の方向性を示せたようにも思えるが、椀型滓の分類など今後の検討が必要な点も多く、遺跡におけるあり方と合わせて今後の課題である。

最後に今回の分析に際し、貴重な御意見を頂き計測器を提供していただいた穴澤義功氏、文献を提供していただいた津野仁氏、資料分析に協力していただいた石黒立人氏、永井宏幸氏、武部真木氏に記して感謝の意としたい。

参考文献

鈴木正貴・蔭山誠一　1997「愛知県における古代・中世の鉄器生産　その1」『年報平成8年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター。

鈴木正貴・蔭山誠一・天野博之　1997「愛知県における古代・中世の鉄器生産その2」『考古学フォーラム9』。

津野仁・本多剛弘　1993「鍛冶遺構」『金山遺跡Ⅰ』『栃木県埋蔵文化財調査報告第135集』栃木県教育委員会。

津野仁・亀田幸久　1994「鍛冶遺構・鍛冶関連遺物」『金山遺跡Ⅱ』『栃木県埋蔵文化財調査報告第148集』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団。

津野仁・小筆一成　「鍛冶遺構」『金山遺跡Ⅲ』『栃木県埋蔵文化財調査報告第160集』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団。

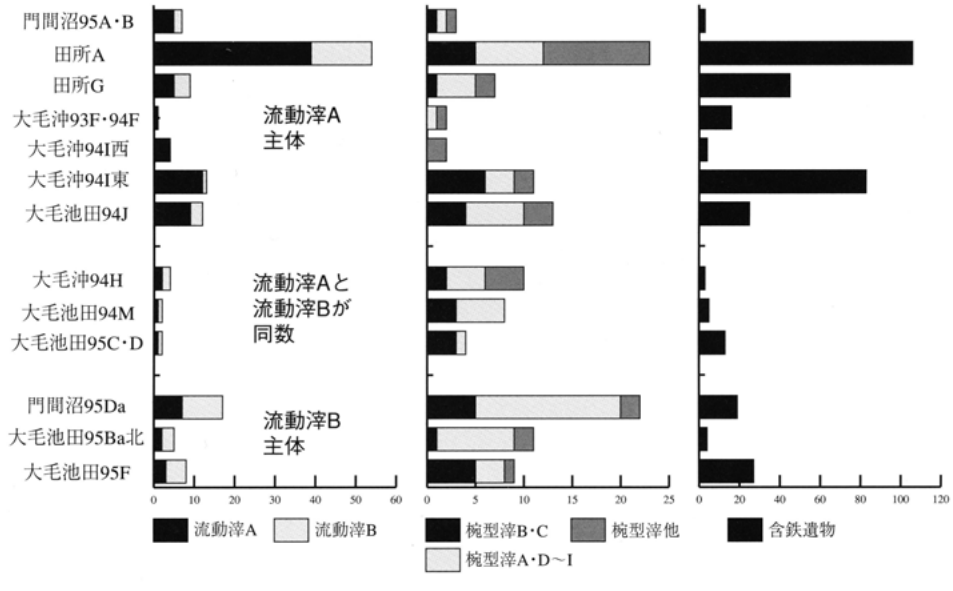
津野仁・吉田哲　1996「鍛冶遺構」『金山遺跡Ⅳ』『栃木県埋蔵文化財調査報告第179集』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団。

津野仁　1996「鍛冶遺構について」『金山遺跡Ⅳ』『栃木県埋蔵文化財調査報告第179集』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団。

大澤正己　1993「金山遺跡出土の鍛冶関連遺物の金属学的調査」『金山遺跡Ⅰ』『栃木県埋蔵文化財調査報告第135集』栃木県教育委員会。

大澤正己　1994「金山遺跡Ⅳ区SI－036鍛冶工房跡出土品の金属学的調査」『金山遺跡Ⅱ』『栃木県埋蔵文化財調査報告第148集』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団。

表1　鉄資料の組み合わせ



大澤正巳　1995　「金山遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査～Ⅴ区SI－010・025・004B・その他～」『金山遺跡Ⅲ』『栃木県埋蔵文化財調査報告第160集』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団。

大澤正巳　1996　「金山遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査～Ⅴ区SI－110B・128B・147、Ⅶ区SI－010・012・SK－231～」『金山遺跡Ⅳ』『栃木県埋蔵文化財調査報告第179集』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団。

他に今回扱った北道手遺跡、田所遺跡、大毛沖遺跡、大毛池田遺跡では各報告書が刊行されている。合わせて参照していただきたい。

永井宏幸編　1996　「大毛沖遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66集』財団法人愛知県埋蔵文化財センター。

高橋信明編　1996　「北道手遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第67集』財団法人愛知県埋蔵文化財センター。

小澤一弘編　1997　「田所遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第71集』財団法人愛知県埋蔵文化財センター。

武部真木編　1997　「大毛池田遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第72集』財団法人愛知県埋蔵文化財センター。

川崎テクノリサーチ株式会社総合検査・分析センター(千葉事務所)　1993　「愛知県田所遺跡出土鉄滓類の分析調査」。

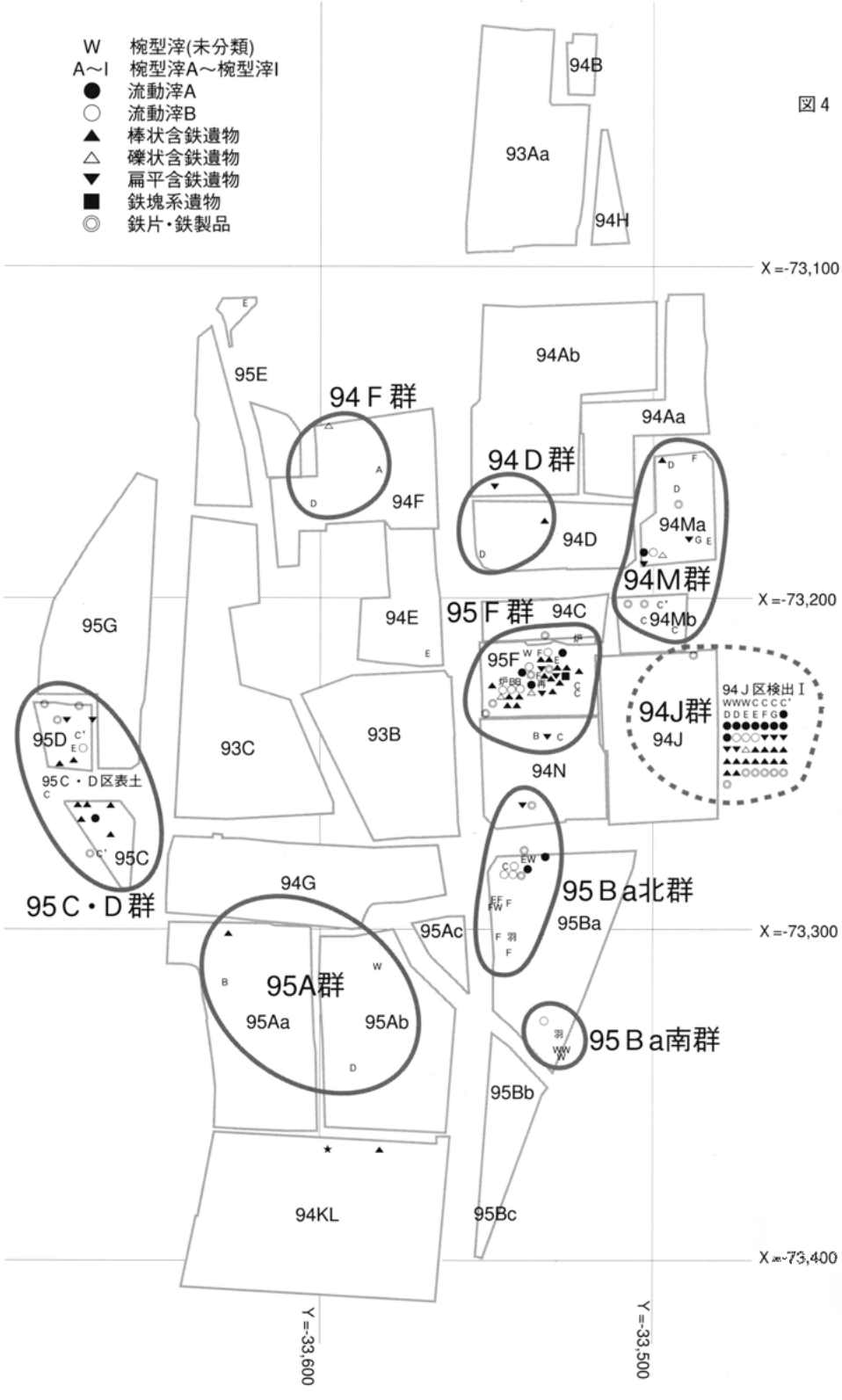


図4　大毛池田遺跡における鉄資料の分布

尾張北部における古代の開発をめぐる様相

—古代の門間沼遺跡と周辺—

小川芳範

1. はじめに

門間沼遺跡では南北に長いトレンチ状の調査であったが、弥生時代中期、古墳時代前期、同中期、古代（飛鳥時代を含む）、中世、近世の遺構・遺物が検出され、門間沼遺跡の北東方向への広がりが確認できた。古墳時代前期には、北東に位置する大毛池田遺跡へと続く水田の広がりが確認できた。さらに、古代では大毛池田遺跡に加えて大毛沖遺跡を併せた空間内での景観復元を可能にした。

門間沼遺跡周辺の微高地上には大毛池田遺跡・大毛沖遺跡の他に、北道手・田所遺跡、伊冨利部古墳、門間古墳、門間遺跡、瓦ヶ野遺跡、前田遺跡、福塚前遺跡、稲荷山古墳、石刀古墳、上町屋古墳、西宮社古墳、でんやま古墳、野見神社古墳、車塚古墳、神戸廃寺などが存在する。

門間沼遺跡周辺は、東海北陸自動車道の建設に伴う本センターの発掘調査により、古墳時代後期から飛鳥時代の墓域と集落が広範囲に確認された。また、飛鳥時代以降律令時代には、大毛池田遺跡から続くものと想定される大溝群が確認でき、周辺からは美濃刻印須恵器をはじめ良好な文字資料が得られた。

古代開発行為の様相に迫るには、まず遺物の出土を知ることと考える。本論は、門間沼遺跡等の成果から葉栗郡周辺における開発の様相を模索してみる。内容は二部構成とし、第一は、周辺地域の開発行為の証しとして、一宮市今伊勢町馬寄所在の石刀神社所蔵の古墳出土遺物*（石刀古墳・上町屋古墳・西宮社古墳）を検討し、古墳時代後期以降の開発行為の時期を考える。第二は、古代の文字資料**に焦点をあて、尾張北部出土の墨書土器を中心に資料の集成をした。遺跡は開発の証しとの考えにたって、本論はその時々の開発の様相に迫る。

2. 古代開発の画期

石刀古墳・上町屋古墳・西宮社古墳は一宮市今伊勢町馬寄に所在する後期古墳である。資料は伊勢湾台風等により遺物が露出した際等に発掘されたものである。

資料（図2）は僅か２０点であるが、今伊勢古墳群という地域の開発という視点で遺物を観察すると、大きく３つの画期の存在に気づく。まず５世紀末～６世紀初頭の第Ⅰ期、６世紀末～７世紀初頭の第Ⅱ期、７世紀後半～８世紀前半の第Ⅲ期である。また、古墳から古瀬戸の四耳壺の出土を見ると、各地に存在した中世の塚信仰が窺える。

門間沼遺跡周辺について論ずると、門間沼遺跡94調査区で確認された円墳群は、古くは５世紀代に遡るものもありまさに第Ⅰ期の開発行為である。５世紀後半から末にかけては、葉栗郡に凡海部・敢石部・石作部・穴太部・伊冨利部などの部が設置、尾張連が尾張国造に任ぜられた時期でもあり、この地域の開発行為に何らかの因果関係を思わせる。また、大毛池田遺跡でも確実なものは１基だが７世紀半ば頃の円墳が確認され、周辺に古墳の存在も想定できる。これは、第Ⅱ・Ⅲ期の開発に値する。古墳の築造という視点でみると、今伊勢古墳群、及びその北方に位置する門間沼遺跡周辺の開発には、同様の画期が存在するようである。

葉栗郡全体に視野を拡げると、第Ⅰ期に該当する時期には、浅井北古墳群の毛無塚古墳が造営される。第Ⅱ期には同古墳群の小塞神社古墳が、浅井南古墳群の塩竈神社古墳が造営されている。その後の第Ⅲ期には、爆発的に古墳が造営されて５０基ほど存在した。

第Ⅲ期の葉栗郡内は全国各地同様、古代寺院の建立も確認できる。壬申の乱による国家規模の大変革が生じた７世紀には、遺跡の様相が大きな転機を迎える。地方に焦点を絞れば、豪族主体の開発を含む経営体制から、プレ律令体制への転換である。古代寺院の建立と、この周辺に群衙並びに豪族等支配者層の居館を構えたものが一例といえる。葉栗郡も例外ではないと考えられるが、寺院周辺地域の様相は明確には把握できていない。ただ黒岩廃寺の周辺からは蹄脚硯が出土するなど官衙の存在を窺わせている。

７世紀代から奈良時代の建立とされる古代寺院は、一宮市浅井町の黒岩廃寺、江南市村久野の音楽寺、現岐阜県笠松町の東流廃寺が存在する。黒岩廃寺の建立者は、『塵袋』に収録されている葉栗臣人麿の建立した葉栗尼寺（光明寺）に比定する説と、村国氏とする説がある。出土している軒丸瓦は、外区に面違鋸歯文をもつ川原寺式の複弁蓮華文のものである。尾張には稀な川原寺式軒丸瓦をもつこの寺院の建立者は、美濃に川原寺式軒丸瓦をもつ寺院が多いことから考えて、美濃国により一層関わりを持つ人物の建立と考える。音楽寺は、壬申の乱で功績のあった村国氏の建立といわれている。村国男依は身毛君広（むげつきみひろ）・和珥部臣君手（わにべのおみきみて）とともに、壬申の乱で大海人皇子方で功績をあげた氏族の１つである。彼らは国家体制整備の一翼を担い、各地に本願地を構えたと思われる。美濃国各務郡村国郷を本願地とした村国氏は、木曽川を挟んで対岸の葉栗郡も管領下としていた。音楽寺建立に代表されるように、壬申の乱後経営基盤整備に一層取り組んだのであろう。また、現在は岐阜県笠松町であるが、当時は葉栗郡域とされる地に東流廃寺が存在する。採集されている重弧文軒平瓦や単弁軒丸瓦が、渡来系氏族寺院特有の軒丸瓦（湖東式）であり、渡来系氏族に関わる階層による建立の可能性がある。

＊　石刀神社所蔵遺物の時期・産地等については、渡辺博人氏（各務原市教育委員会）・藤澤良祐氏（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター）にご教示いただいた。

＊＊墨書土器をはじめ文字資料の判読については、平川南氏（国立歴史民族博物館）・早川万年氏（岐阜大学）にご教示いただいた。

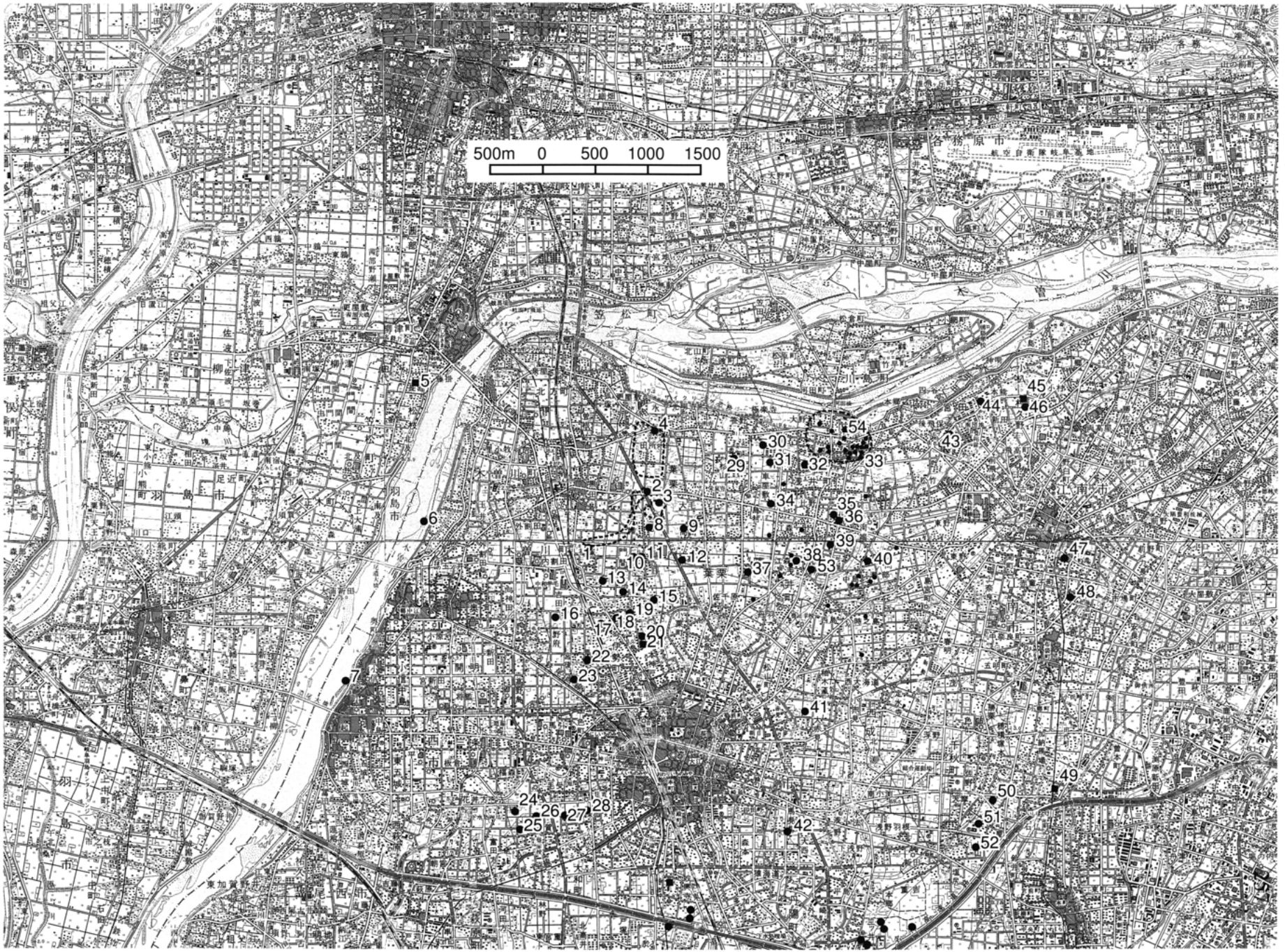


図1

古代関連遺跡

1. 門間沼遺跡　2. 大毛池田遺跡　3. 大毛沖遺跡　4. 北道手・田所遺跡　5. 東流廃寺　6. 玉の井先木曽川中州　7. 木曽川水没遺跡　8. 伊冨利部古墳　9. 瓦ヶ野遺跡　10. 門間古墳　11. 門間遺跡　12. 前田遺跡　13. 福塚前遺跡　14. 稲荷山古墳　15. 石刀古墳　16. 西上免遺跡　17. 中切遺跡　18. 上町屋古墳　19. 西宮社古墳　20. 車塚古墳　21. 神戸廃寺　22. でんやま古墳　23. 野見神社古墳　24. 伝治越遺跡　25. 薬師堂跡　26. 斉宮寺遺跡　27. 八王子遺跡　28. 田島遺跡　29. 氏神東遺跡　30. 東出野立遺跡　31. 東高見遺跡　32. 奥屋敷遺跡　33. 浅井北古墳群　34. 清郷遺跡　35. 大塚遺跡　36. 藤塚古墳　37. 富塚古墳　38. 浅井神社古墳　39. 宮前遺跡　40. 堂浦遺跡　41. 高畑遺跡　42. 馬見塚遺跡　43. 後飛保新開　44. 宮田貝売　45. 音楽寺　46. 村久野寺前　47. 桐野遺跡　48. 木賀東町新塚　49. 長福寺廃寺　50. 円長寺古墳　51. 一宮南高校平松遺跡　52. 鹿取遺跡　53. 塩竈神社古墳　54. 黒岩廃寺

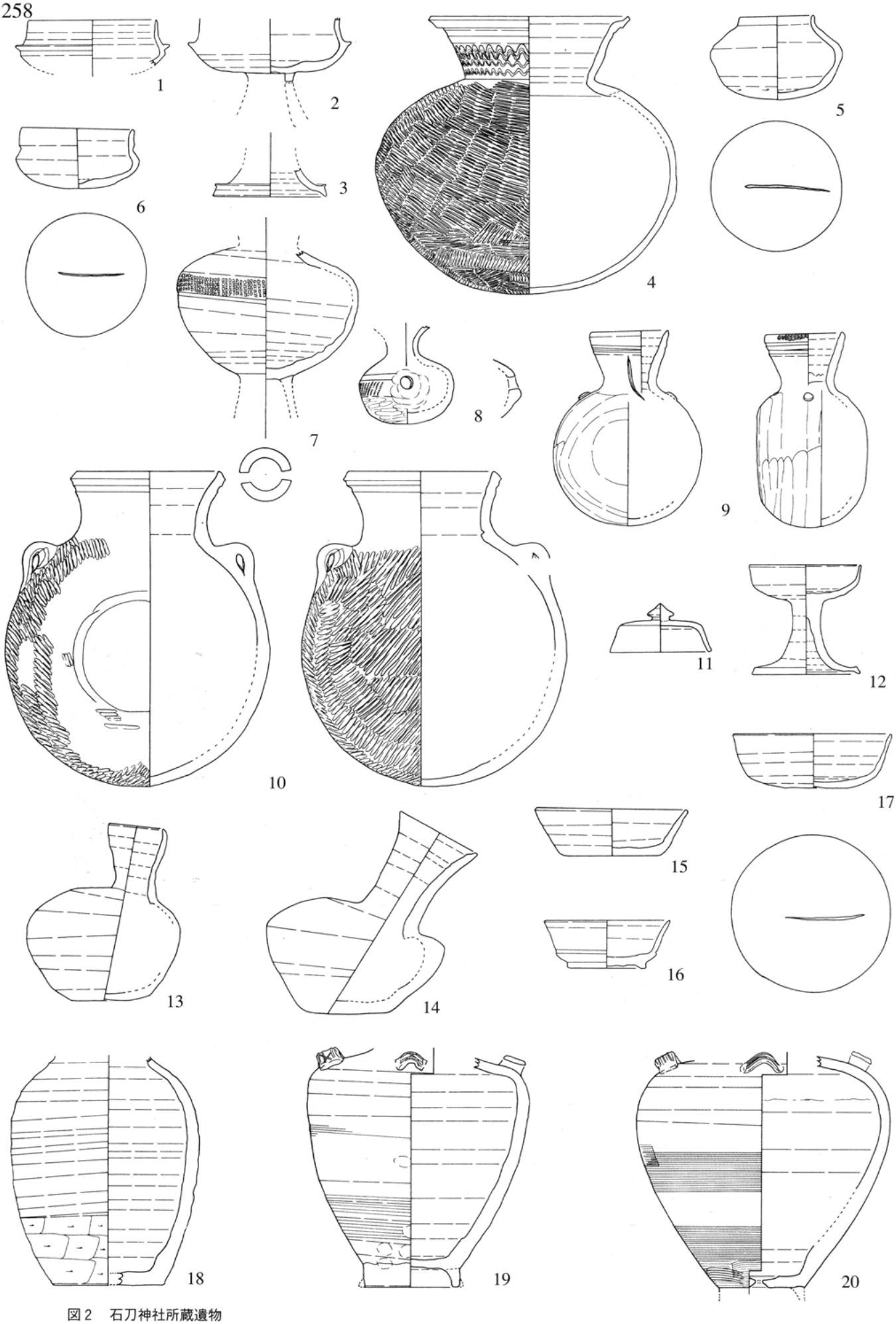


図２　石刀神社所蔵遺物

このように、地方において官衙的色彩を有するものは様相がある程度把握できるが、門間沼遺跡周辺から渡来系氏族が関わっていた等の証しは確認できていない。第Ⅲ期には居住域西群・中央群・北群が営まれ、大溝群が掘削される。この頃造営の盛期を迎える浅井北古墳群もまた、その墳墓構造等に渡来系氏族との関わりが指摘されていない。ただ、門間沼遺跡周辺だけでなく浅井北古墳群も含む葉栗郡をはじめ尾張北部全域が開発の第Ⅲ期を迎えていたことは間違いないだろう。

このような状況から、古墳時代後期から飛鳥時代の開発には３つの画期が存在する。その時々に何らかの国家的規制等が働き、開発推進に至ったと推察する。

3. 奈良・平安時代の様相

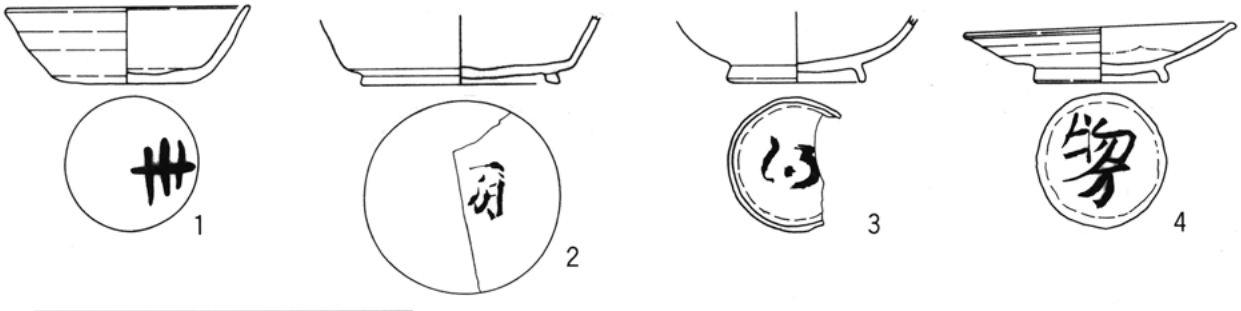
尾張北部出土の文字資料等の集成

大毛池田遺跡94A区・94C区の２条の大溝（溝Ｆ・溝Ｅ）から美濃刻印須恵器の出土をはじめ、門間沼遺跡周辺では墨書土器に恵まれた。そこで、各地で進行中の文字資料集成の一役でも担えたらとの思いで、尾張地方北部の資料を集成することとした。墨書土器等の研究は、今や各地で盛んに行われている。ところが、遺跡の性格や時期別さらに分布状態等の検討を経ることなく墨書内容の分類に力点が置かれすぎているとの反省*に従って、まずは文字資料の有無の調査から手懸けた。

愛知県埋蔵文化財センターが、調査

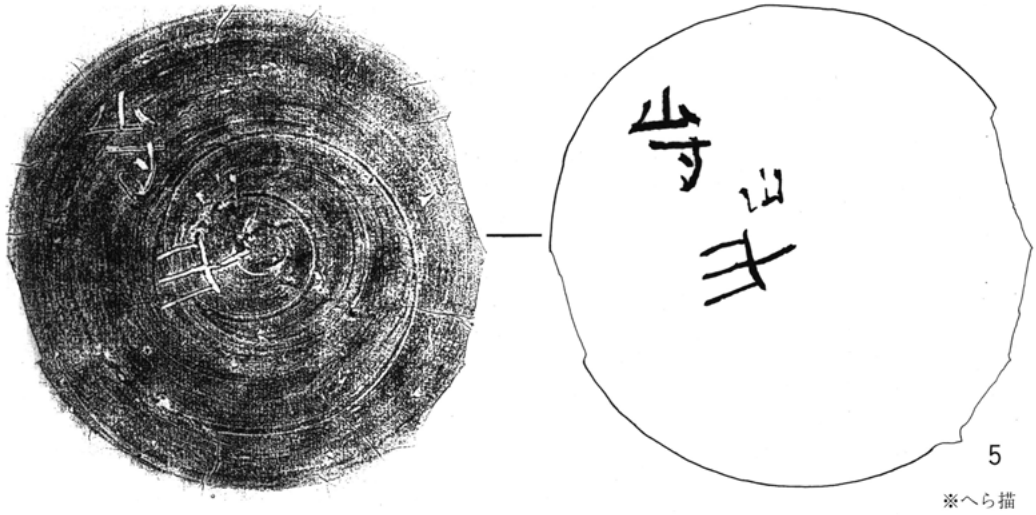
＊平川　南ほか　1989「古代集落と墨書土器―千葉県八千代市村上の内遺跡の場合」『国立歴史民俗博物館研究報告第22集』。

図３　各種墨書陶器（１：大毛池田、２～４：大毛沖、５：門間沼）









※へら描

を実施した古代葉栗郡域の５遺跡から墨書土器１０２点、刻印土器３点、刻書土器１点が出土している。墨書土器は、須恵器が主体の門間沼遺跡・大毛池田遺跡と灰釉陶器が主体の大毛沖遺跡と田所遺跡とに２分できる。また、器種別の頻度では門間沼・大毛池田遺跡では須恵器の杯42.1%、灰釉陶器椀26.3%が主体を占める。また、大毛沖・田所遺跡では灰釉陶器椀53.3%・同皿13.3%が主体を占める。墨書内容は数字も含めた文字が大半である。墨書内容では、門間沼遺跡の資料に多くの「田」の字が存在する。（全37点中16点）また墨書土器出土遺構では、平安時代の井戸からまとまって出土している。この中に、灰釉陶器椀の底部外面に則天文字“𠂤”が書かれたもの２点が出土している。さらに、緑釉陶器の素地と思われる椀等にも墨書が存在する。大毛沖遺跡の墨書内容には、「公」「金」の字が各々２割程度存在する。また、特筆すべきものに旧流路から灰釉陶器椀の墨書土器がある。これは、底部外面に中国居延漢簡の字体にある“(・)”が書かれている。“(・)”は人名か官署名を意味するものか。今後の課題となろう。これら墨書土器出現は大別して２時期あり、それは８世紀末～９世紀前葉と９世紀後葉～１０世紀前半である。

墨書土器は、木曽川町資料館と一宮博物館所蔵の資料も調査し、全３３点をまとめた。出土地域では、門間遺跡周辺が最も多く次いで浅井古墳群周辺である。器種別の頻度では、66.7%が灰釉陶器である。時期の中心は９世紀後葉～１０世紀代である。

以上のことから尾張北部における識字層の広がりは、第一波は８世紀末から９世紀前葉に訪れ、第二波は９世紀後葉から１０世紀代に訪れていることが判る。このような時期に集落（遺跡）の増加・拡大が進んだと考えられよう。

刻書土器についても門間沼遺跡と併せて、一宮博物館所蔵資料の調査を実施した。この資料の中に、一宮市史には判読の断定がされていない須恵器の小型高杯（図5・34）があり、脚部内面に「奈」と記されている。時期は７世紀末であり、文字の書体そのもののも奈の示の部分が突き抜ける形である。

門間沼遺跡の刻書土器では、須恵器無台杯（図3・5）の底部外面に「山寸」と書かれている。他にも山と書こうとして下に突き抜けたものか、記号か？*のものと山一字がかすれたような部分がある。この刻書「山寸」須恵器は生産窯が小牧市篠岡７８号窯であり、時期も７世紀後半から末に比定されている。この土器の出土した門間沼遺跡95Ｃ区では美濃刻印須恵器も併せて出土している。７世紀代までは須恵器の産地が尾張産と美濃須衛産の量的な差があまり感じないが、８世紀に入ると美濃須衛産が尾張産を圧倒する。律令体制整備に尽くした美濃国国司笠朝臣麻呂が、窯業生産を官営化し生産拡大を計ったため、周辺地域への流通量の増大につながったと言える。

村国氏の管領地に組み込まれるなど、美濃国と関係の深かった葉栗郡は８世紀に入ると、国家政策を地方政治に移した美濃国司笠朝臣麻呂の施策もあり、遺跡の様相に影響が現れる。開発の第Ⅲ期に当たる７世紀後半から８世紀前半の時期は、律令体制を整えるために国家あるいは地方が主導となって実行した施策の１つ１つが地域の開発に如実に現れていると言えよう。

最後に、門間沼遺跡と大毛池田遺跡で確認された大溝群は、開削は７世紀中葉と７世紀後葉～末に行われている。大土木工事である大溝群掘削の指導者は、如何なる人物であったろうか。渡来系氏族関係か、笠朝臣麻呂に代表される地方行政官か、いずれにせよ美濃国とは密接な関わりを持つ人物によって指揮された事業であろう。

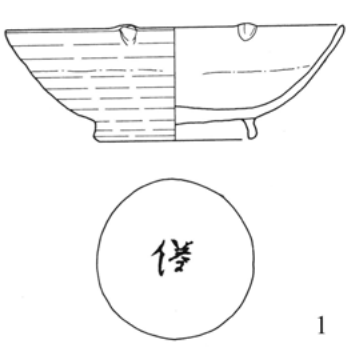
さらに、この大溝群と大毛沖遺跡で確認された旧流路の目的は何であったのだろうか。旧河道の東への退行は、大毛沖遺跡の旧流路開削に伴うものであり旧河道の水量調節と水利目的が考えられている。空撮写真（図6）の詳細を検討すると、大毛沖遺跡で確認された旧流路が、門間遺跡から今伊勢古墳群の縁を貫いていたことが観察できる。そして、大毛池田遺跡・門間沼遺跡に開削された大溝群は、自然堤防上に展開する７世紀代の居住域を等高線に沿うように貫通している。これらの大溝の開削は政治力の効いた施策である。そして、水源を河川又は旧流路に求め、灌漑等に利用したものと考えられはしないか。これら大溝開削という大土木工事は、葉栗郡の門間地区における官主導の事業が執行された事例と推察する。

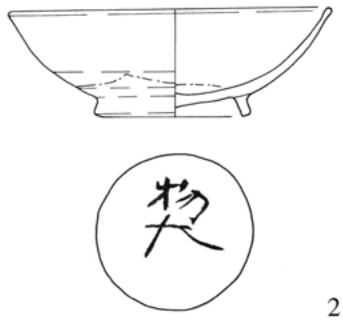
４．むすび

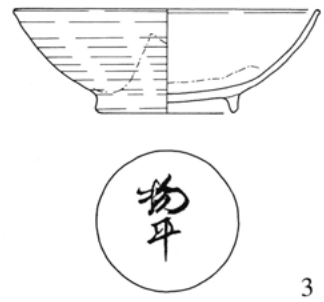
1994年７月に大毛池田遺跡の大溝で美濃刻印須恵器と出会ってはや５年の歳月が過ぎようとしている。以来、翌年の門間沼遺跡での刻書「山寸」、墨書「𠂤」さらに、再び美濃刻印須恵器の発見と良好な文字資料に触れることができた。古代遺跡の道標とも言える文字資料、今後も続くであろう開発に伴う発掘調査によって、益々これら古代の文字資料はその様相を明らかにしてくれることだろう。

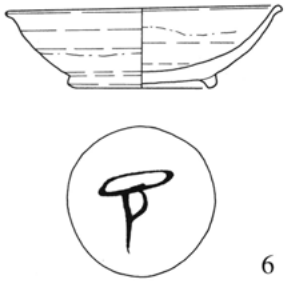
最後に、文字資料集成に対して東海学園大学岩野見司先生はじめ、一宮博物館土本典生氏、久保禎子氏には重ね重ねご理解・ご教示を頂いた。感謝の意を表す。また、所蔵遺物を調査させていただいた石刀神社の方々、一宮博物館へ遺物を提供して頂いた方々のお名前を記し謝辞とする。安藤正義、小川宣彦、木野茂、木全貢、木全修、栗本忠男、寺本光夫、森勝一（五十音順、敬称略）

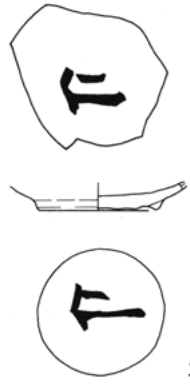
＊福岡　猛氏には、突き抜けているのは山ではなく、何か記号ではないかとのご教示を頂いている。

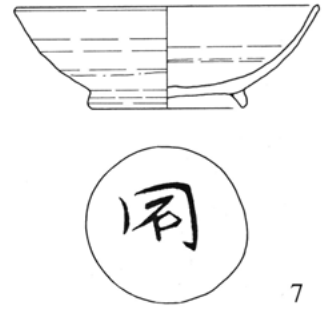

1

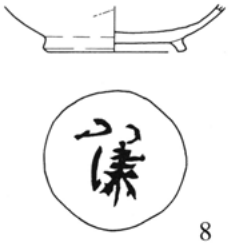

2

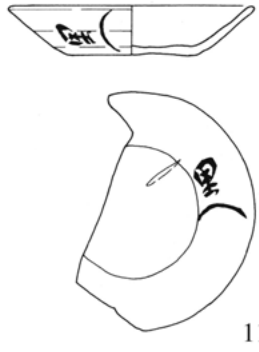

3

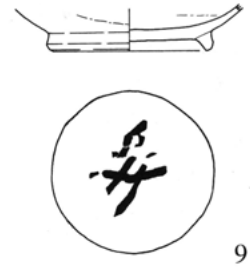

6


5

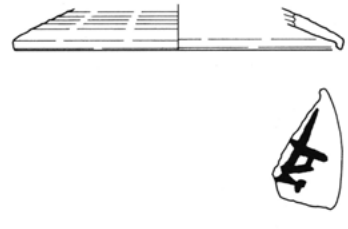

7

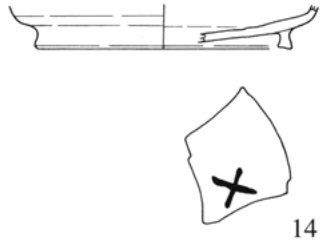

8

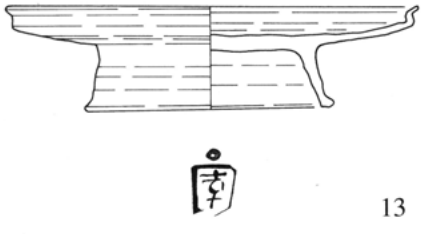

11


9


10


12


14


13

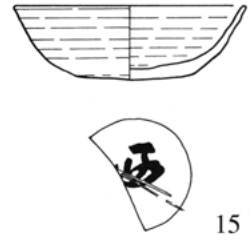

15

図4　一宮市博物館・木曾川町資料館所蔵資料1　1/4

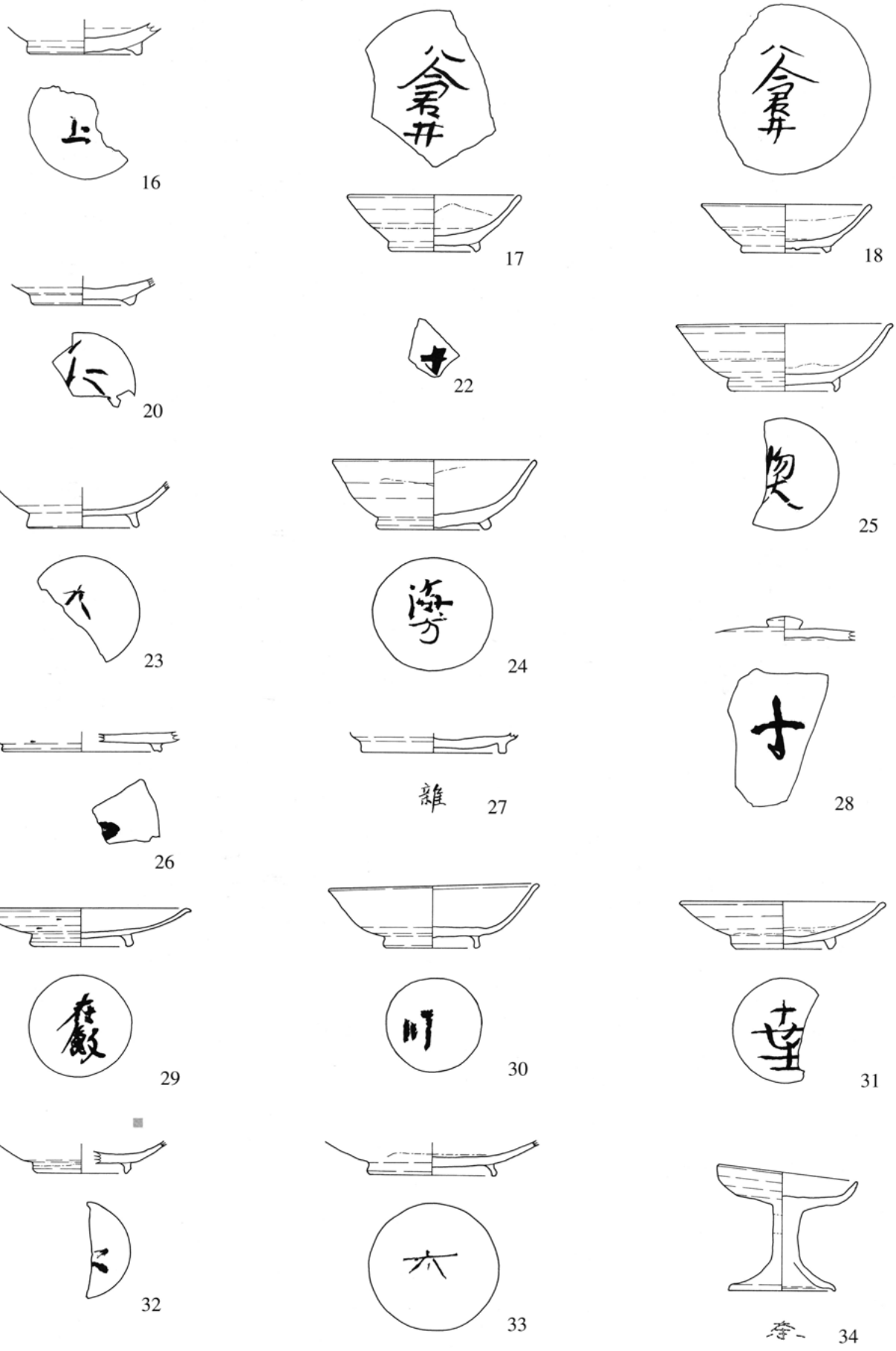
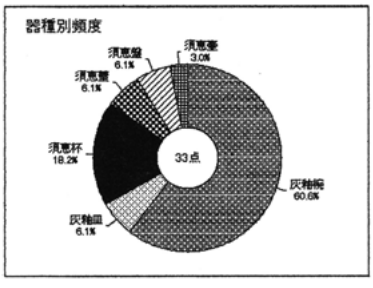


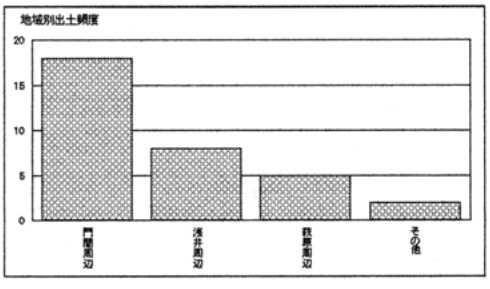
図5　一宮市博物館・木曾川町資料館所蔵資料2　1/4

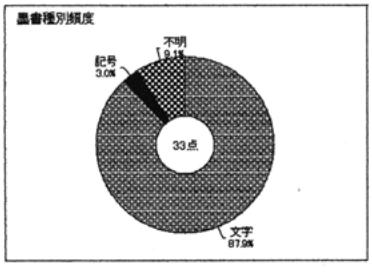
表１　一宮市博物館／木曾川町資料館所蔵資料一覧および統計グラフ

博物館所蔵墨書土器

NO.	出土地	遺跡名	器類	器種	時期	墨書位置	墨書	産地	備考	所蔵
1	一宮市大字高田字瓦ヶ野	瓦ヶ野遺跡	灰釉陶器	輪花椀	O-53	底部外面	僧	美濃須衛	S39.4	一宮市博物館
2	一宮市大字高田字瓦ヶ野	瓦ヶ野遺跡	灰釉陶器	椀	O-53	底部外面	物大	美濃須衛	S39.4	一宮市博物館
3	一宮市大字高田字瓦ヶ野	瓦ヶ野遺跡	灰釉陶器	椀	O-53	底部外面	物平	美濃須衛？	S39.4	一宮市博物館
4	一宮市大字高田字瓦ヶ野	瓦ヶ野遺跡	灰釉陶器	椀	O-53	底部外面	？	美濃須衛？	S39.4	一宮市博物館
5	一宮市浅井町大日比野字清郷	清郷遺跡	灰釉陶器	皿	H-72	底部内外面	仁、仁	美濃須衛	竪穴内	一宮市博物館
6	一宮市浅井町大日比野字清郷	清郷遺跡	灰釉陶器	椀	K-90～O-53	底部外面	宇	美濃須衛？	花押風墨書	一宮市博物館
7	一宮市浅井町大日比野字清郷	清郷遺跡	灰釉陶器	椀	O-53	底部外面	国	美濃須衛		一宮市博物館
8	一宮市浅井町尾関字奥屋敷	奥屋敷遺跡	灰釉陶器	椀	O-53	底部外面	？判読不可	美濃須衛	文字、620201	一宮市博物館
9	一宮市浅井町尾関字奥屋敷	奥屋敷遺跡	灰釉陶器	椀	K-90新	底部外面	？判読不可	美濃須衛	文字？、620201	一宮市博物館
10	一宮市浅井町尾関字奥屋敷	奥屋敷遺跡	灰釉陶器	椀	K-90新	底部外面	石？万口	美濃須衛	620201	一宮市博物館
11	一宮市浅井町尾関字奥屋敷	奥屋敷遺跡	須恵器	杯A	8C後半	体部外面	黒	美濃須衛？	篦書き有	一宮市博物館
12	一宮市今伊勢町馬寄字小坪		須恵器	蓋B	8C後半	体部内面	年	美濃須衛	890305	一宮市博物館
13	一宮市大字瀬部字堂裏	瀬部堂裏遺跡	須恵器	盤C	8C末～9C初	体部外面	国？	瀧投	文字？、一宮市史中盤	一宮市博物館
14	一宮市萩原町高木字苅屋		須恵器	杯B	O-10～IG78	底部外面	十	瀧投	611010	一宮市博物館
15	一宮市萩原町高木字苅屋、高木、中島中東沖		須恵器	杯A	I-25～KH32	底部外面	西	瀧投	内外面墨付着多、篦書き有	一宮市博物館
16	一宮市萩原町高木字苅屋、高木、中島中東沖		灰釉陶器	椀	H-72	底部外面	上	美濃須衛	内面墨付着多	一宮市博物館
17	一宮市萩原町中島字東明屋敷（椋ノ木）		灰釉陶器	椀	H-72	底部内面	八宮井	美濃須衛		一宮市博物館
18	一宮市萩原町中島字東明屋敷（椋ノ木）		灰釉陶器	椀	H-72	底部内面	八倉井	美濃須衛		一宮市博物館
19	一宮市丹陽町あずら		須恵器	杯A	8C	体部外面	黒刀		一宮市史掲載資料、未実見	個人蔵
20	出土地不明（一宮市内？）		灰釉陶器	椀	H-72	底部外面	kor仁？	美濃須衛		一宮市博物館
21	葉栗郡木曽川町門間字上新田	門間遺跡	須恵器	壺類？		底部内面	？		880306	一宮市博物館
22	葉栗郡木曽川町門間字沼	門間遺跡	須恵器	杯類		底部内面	十	尾張産	570420、転用硯	一宮市博物館
23	葉栗郡木曽川町門間字西出	門間遺跡	灰釉陶器	深椀	O-53新	底部外面	大口？	美濃須衛	580821	一宮市博物館
24	葉栗郡木曽川町門間字郎東	門間遺跡	灰釉陶器	椀	O-53新	底部外面	海万	美濃須衛	820801	一宮市博物館
25	葉栗郡木曽川町門間字東郎	門間遺跡	灰釉陶器	椀	K-90中～新	底部外面	物大	瀧投		一宮市博物館
26	葉栗郡木曽川町外割田字上割		須恵器	盤B	8C後半	底部外面	？	美濃須衛	880327	一宮市博物館
27	葉栗郡木曽川町内割田字曲葉		須恵器	杯B	8C末	底部外面	雑	美濃須衛		一宮市博物館
28	葉栗郡木曽川町門間	門間遺跡	須恵器	蓋B	8C末	体部内面	十	美濃須衛		木曽川町資料館
29	葉栗郡木曽川町門間	門間遺跡	灰釉陶器	椀	K-90	底部外面	在厨	瀧投		木曽川町資料館
30	葉栗郡木曽川町門間	門間遺跡	灰釉陶器	椀	K-90～O-53	底部外面	川	瀧投		木曽川町資料館
31	葉栗郡木曽川町門間	門間遺跡	灰釉陶器	椀	K-90	底部外面	世口？	瀧投		木曽川町資料館
32	葉栗郡木曽川町門間	門間遺跡	灰釉陶器	椀	K-90	底部外面	？	瀧投	文字	木曽川町資料館
33	葉栗郡木曽川町門間	門間遺跡	灰釉陶器	皿	K-90新	底部外面	大か？	瀧投or東濃		木曽川町資料館







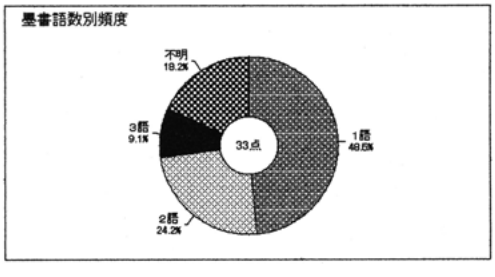
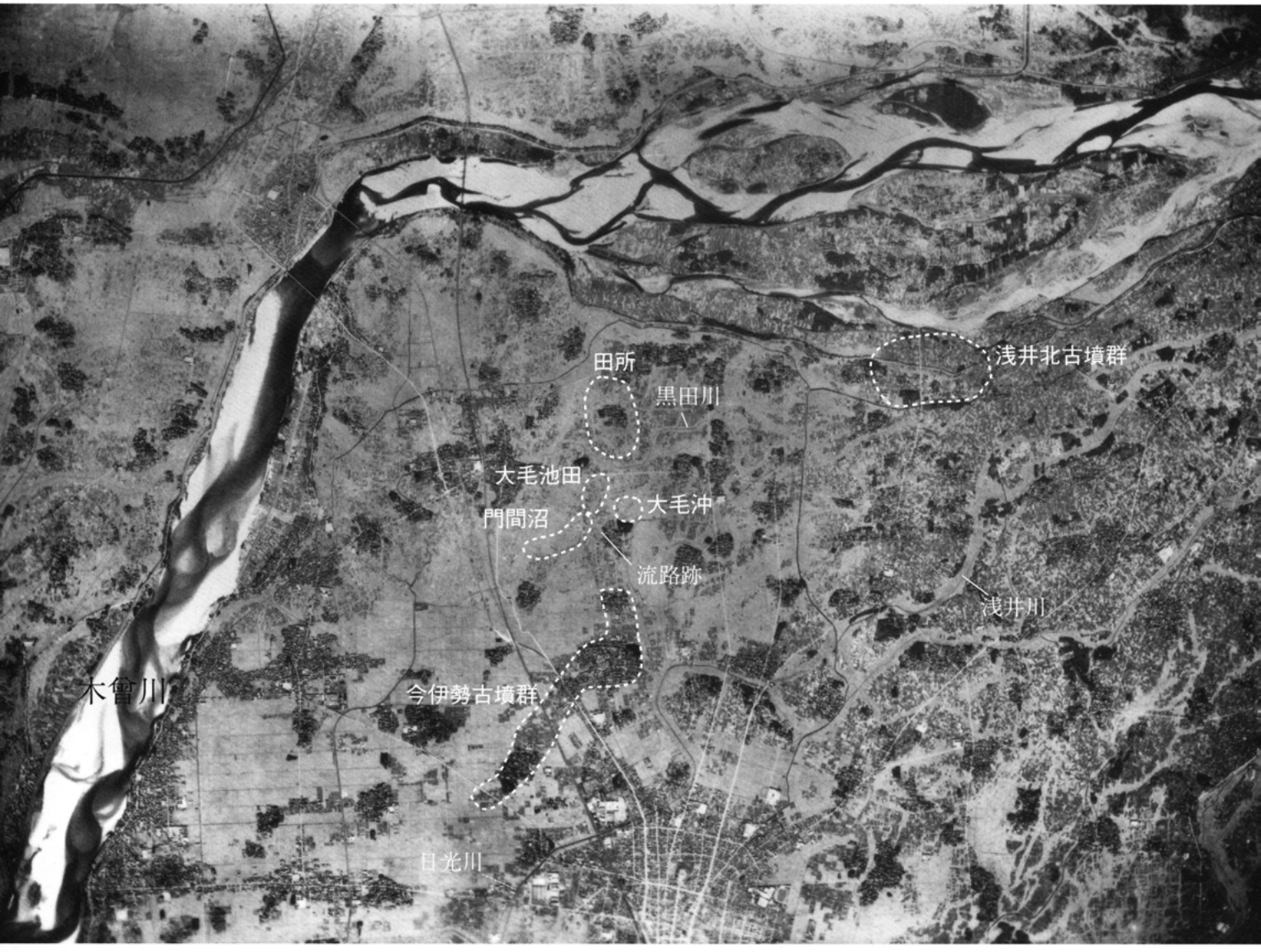


図6　濃尾平野北部の航空写真



図版

遺構平面図 1/400

土層断面図 1/40

遺構写真

遺物写真

凡例

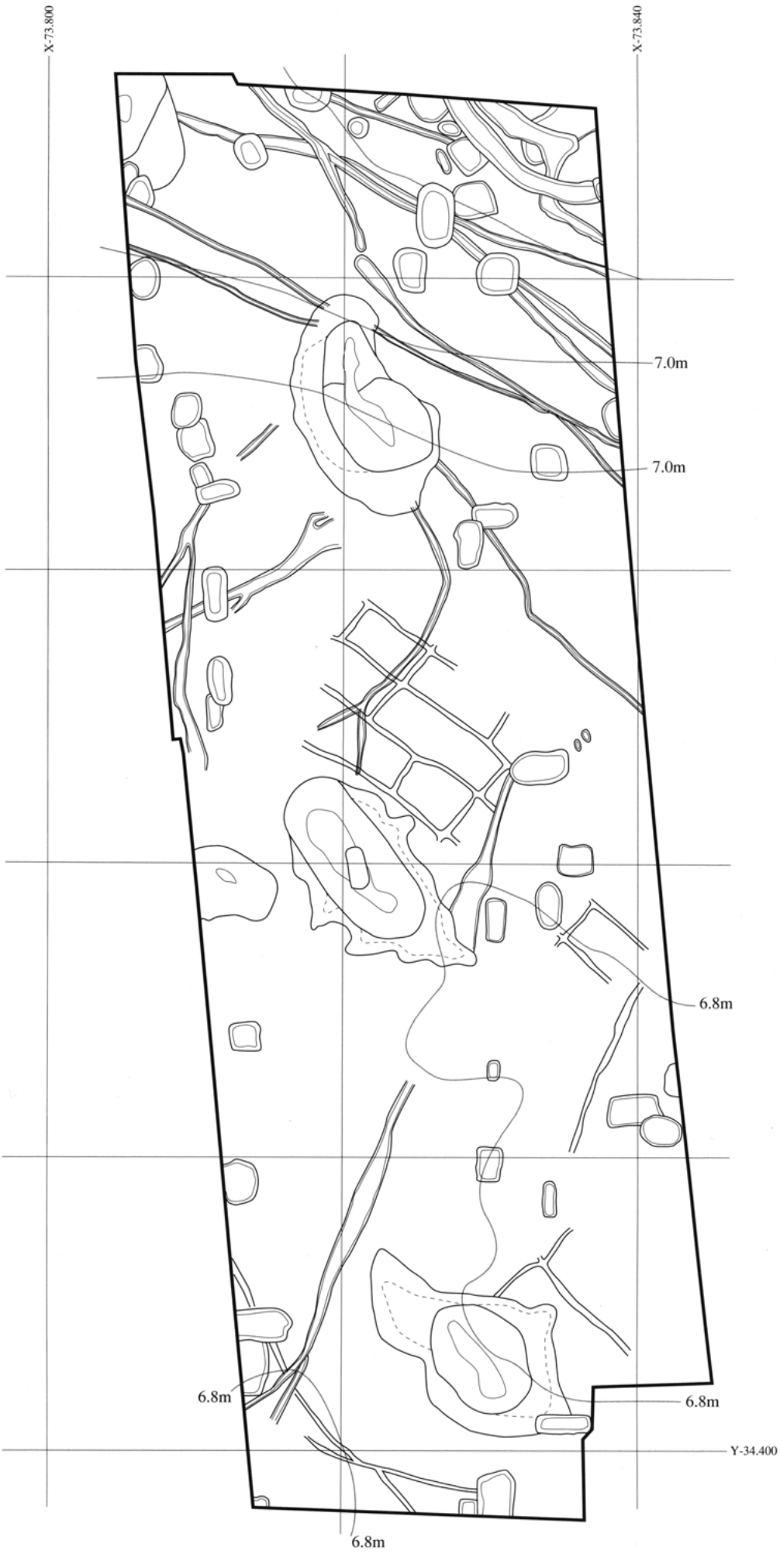
・平面図は太い線が上端、細い線が下端である。

・94A ～ 94D 区に記入してある等高線は黒色シルト上面の標高を計測した。

・土層断面図は遺構や層位の違いによって線の太さを変えている。

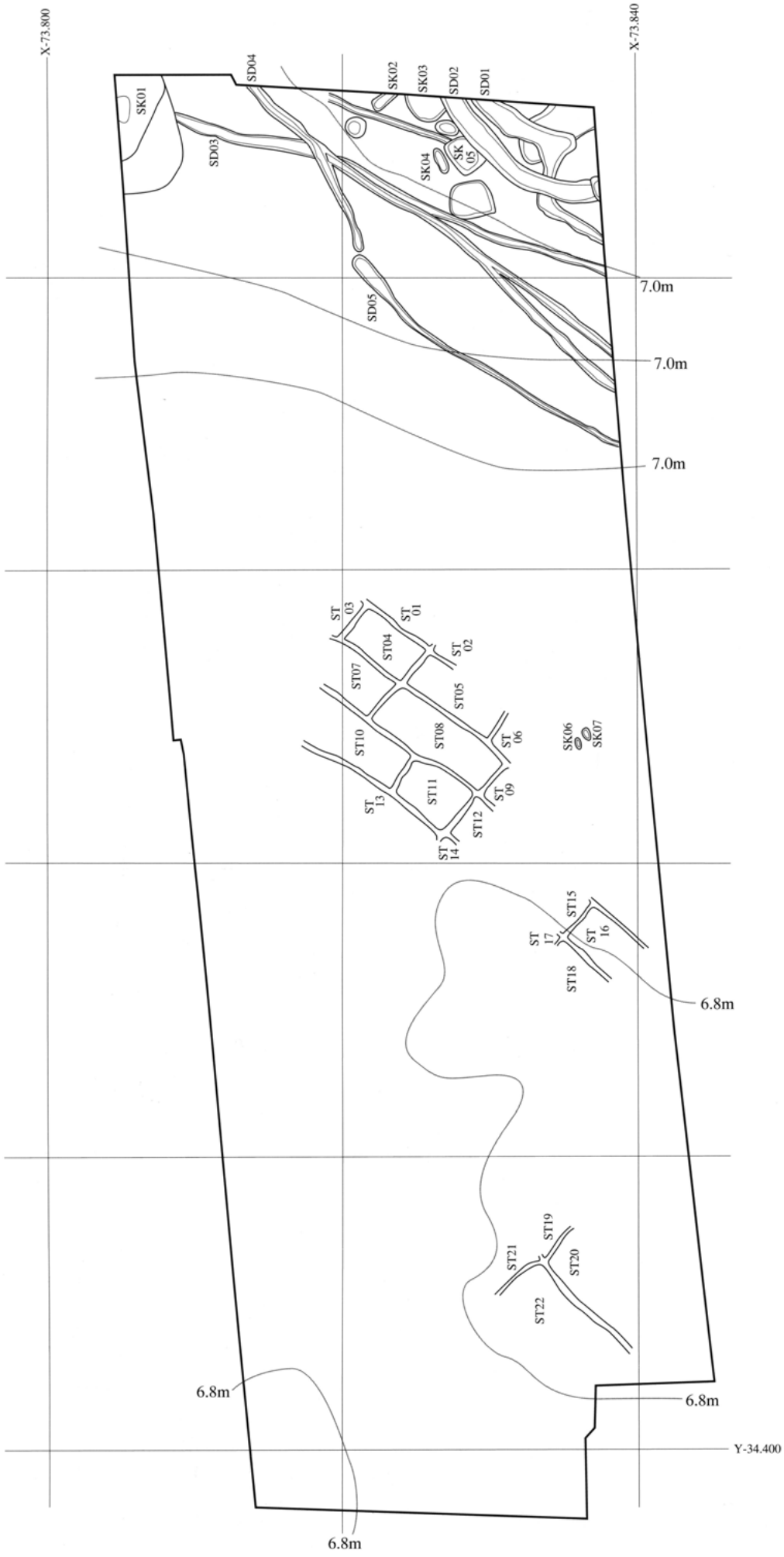
図版１

９４Ｄ区プラン全体



図版２

９４Ｄ区プラン古墳

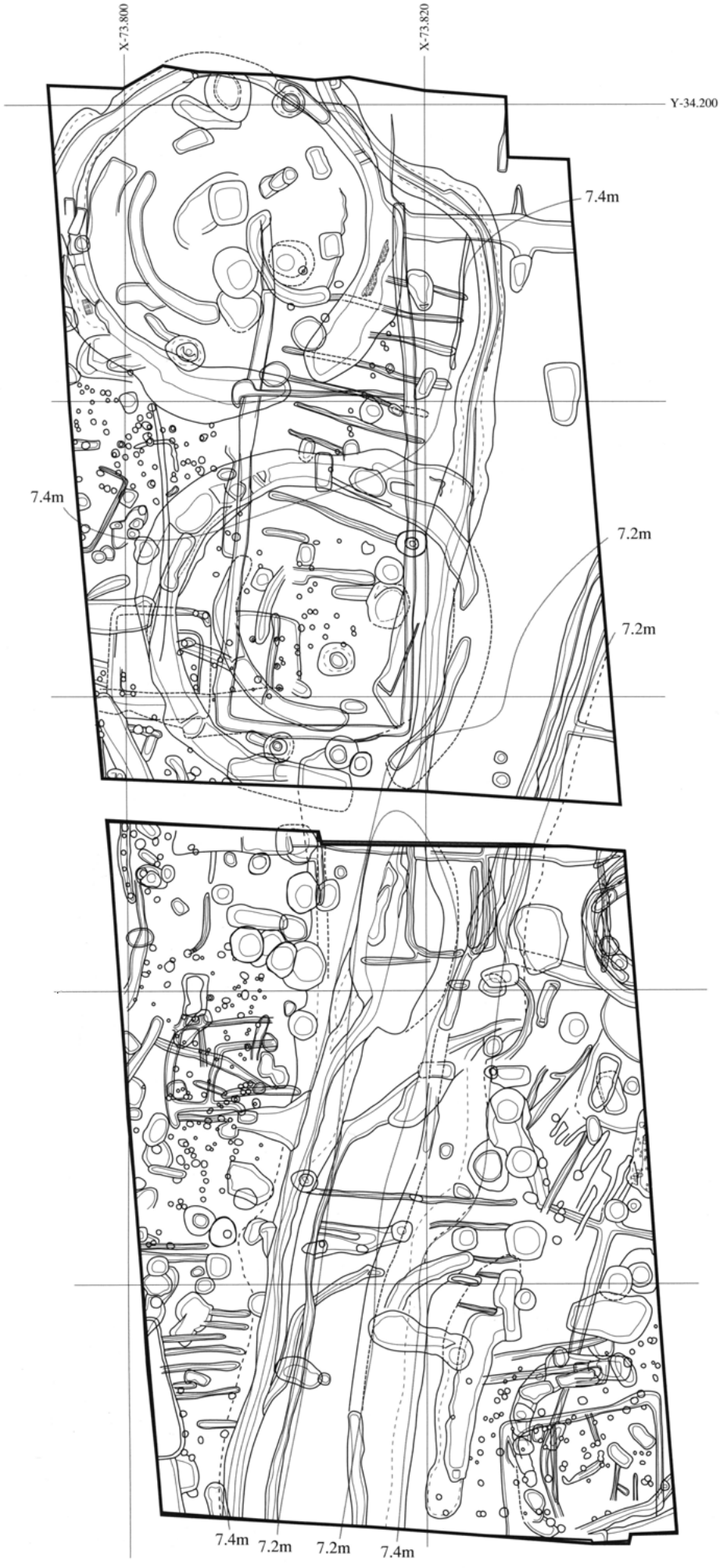


９４Ｄ区プラン古代・中世

図版３

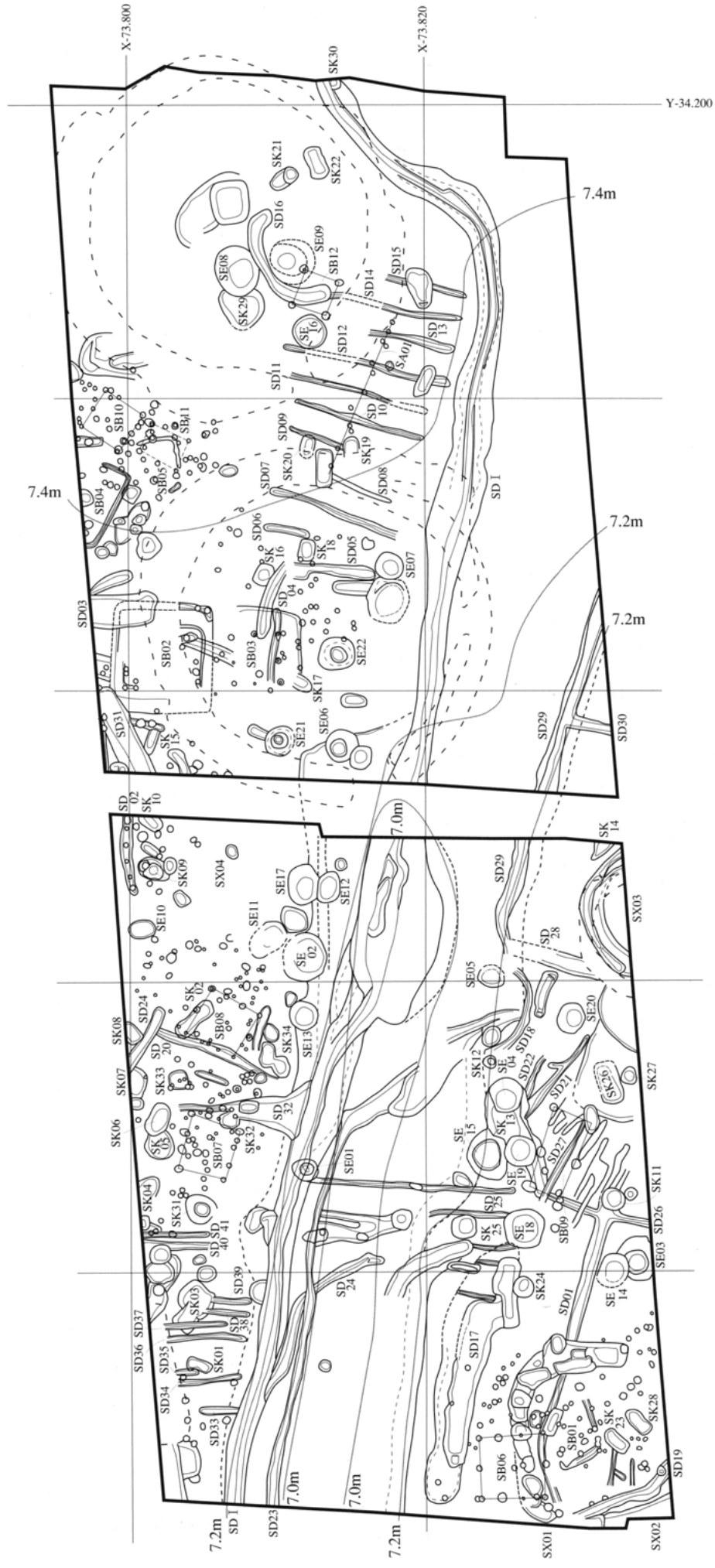
図版４

９４Ｃ区プラン全体



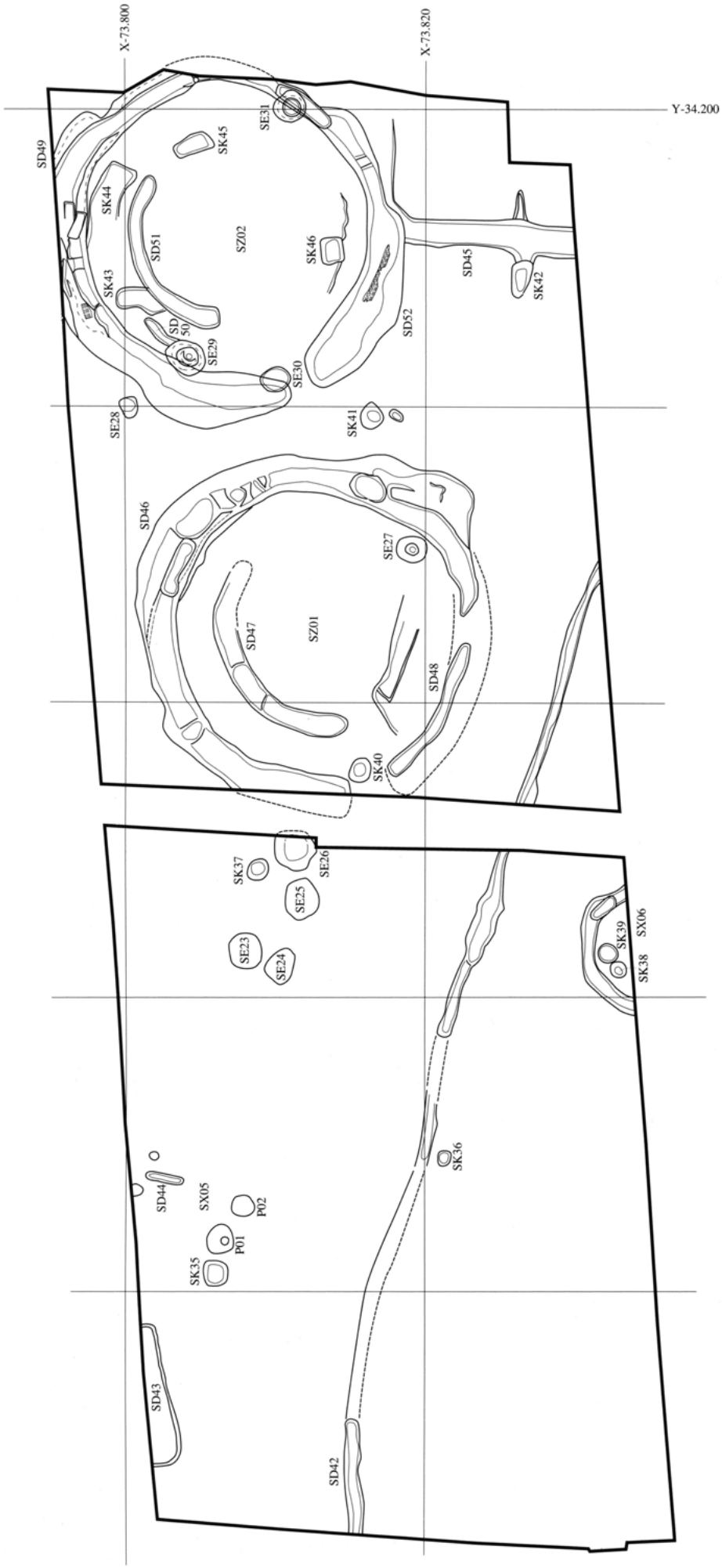
９４Ｃ区プラン古墳時代Ⅰ期

図版５



図版６

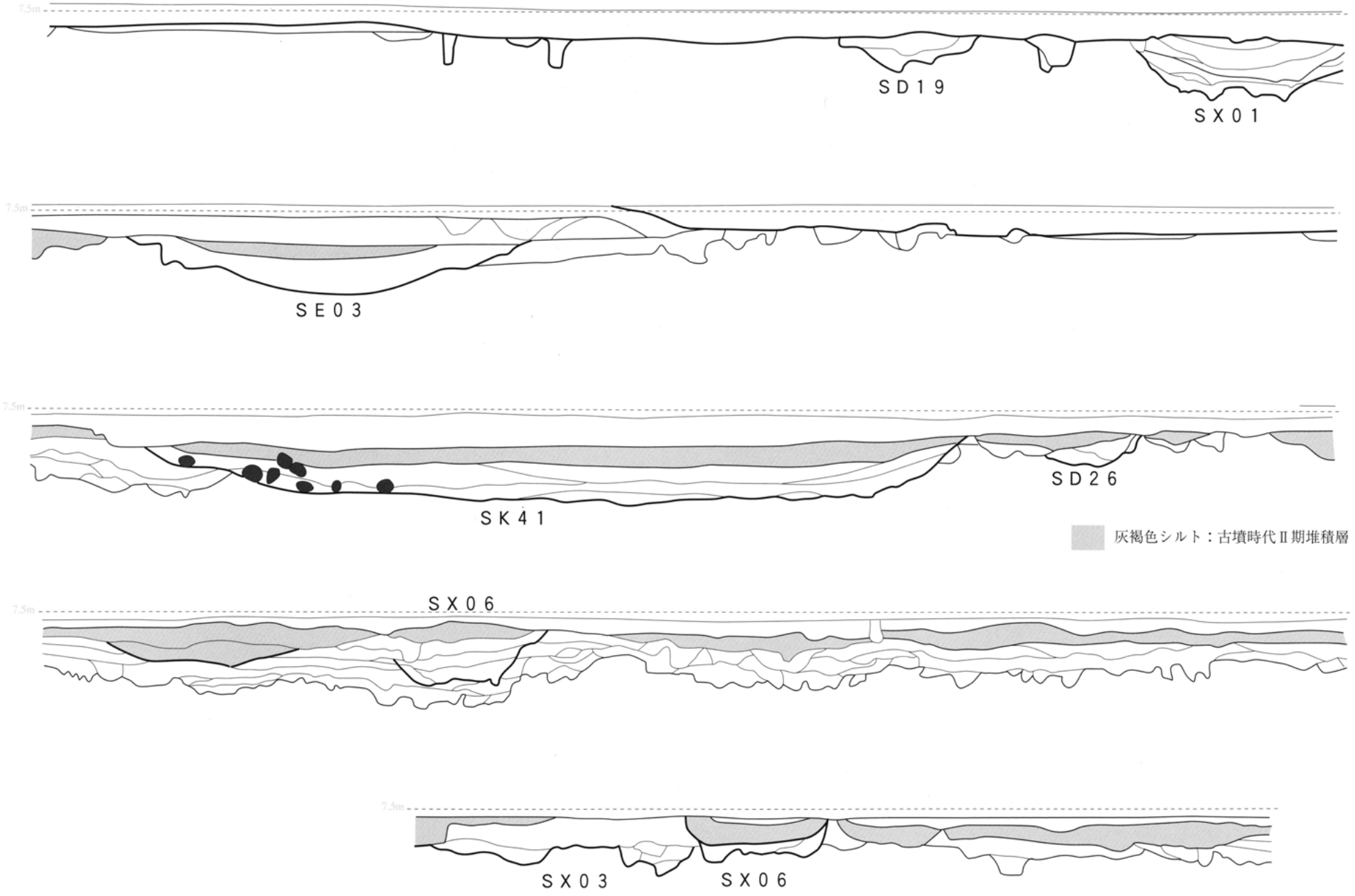
９４Ｃ区プラン古墳時代Ⅱ期



９４Ｃ区プラン古代・中世

図版７

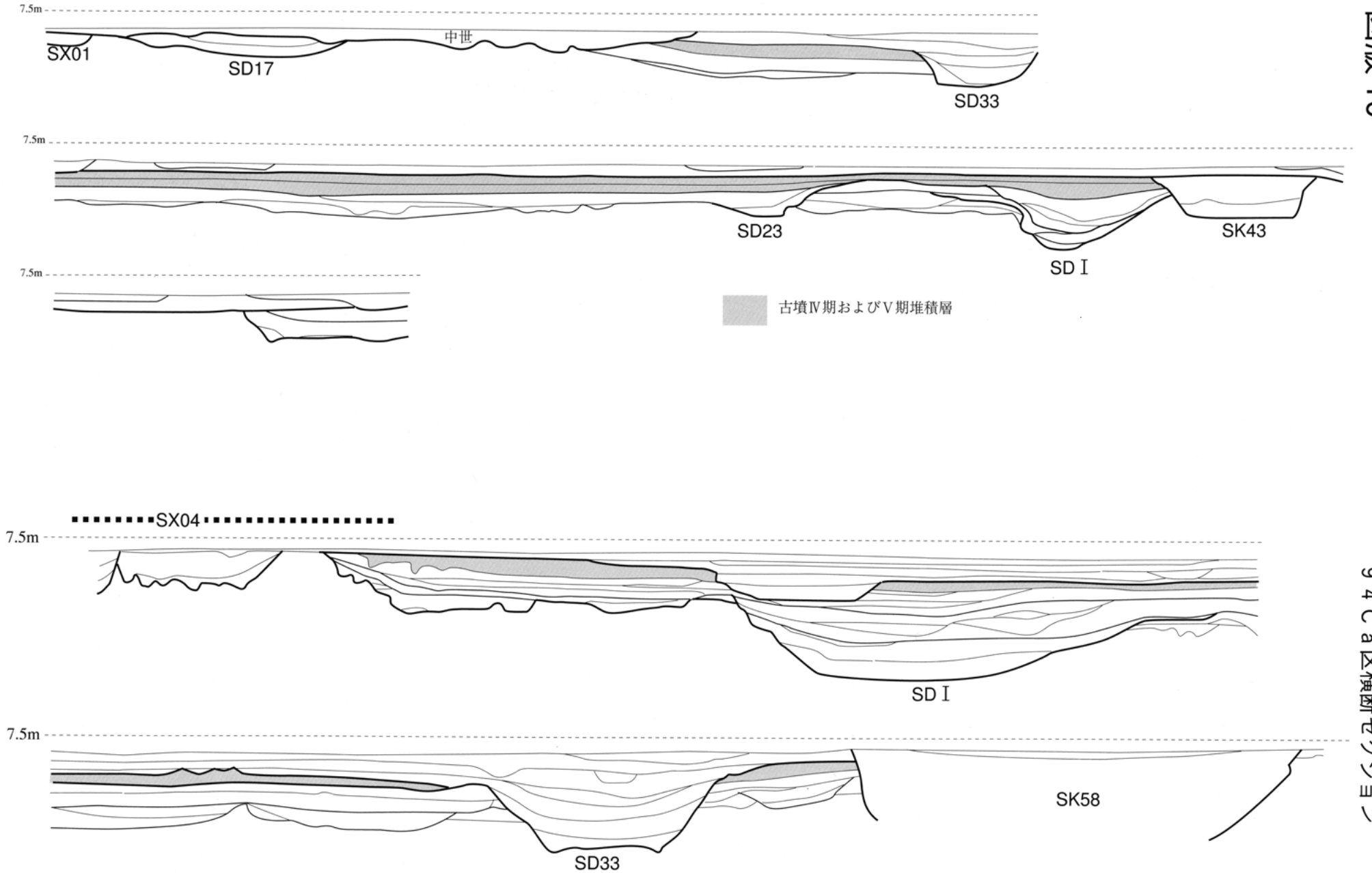
図版8



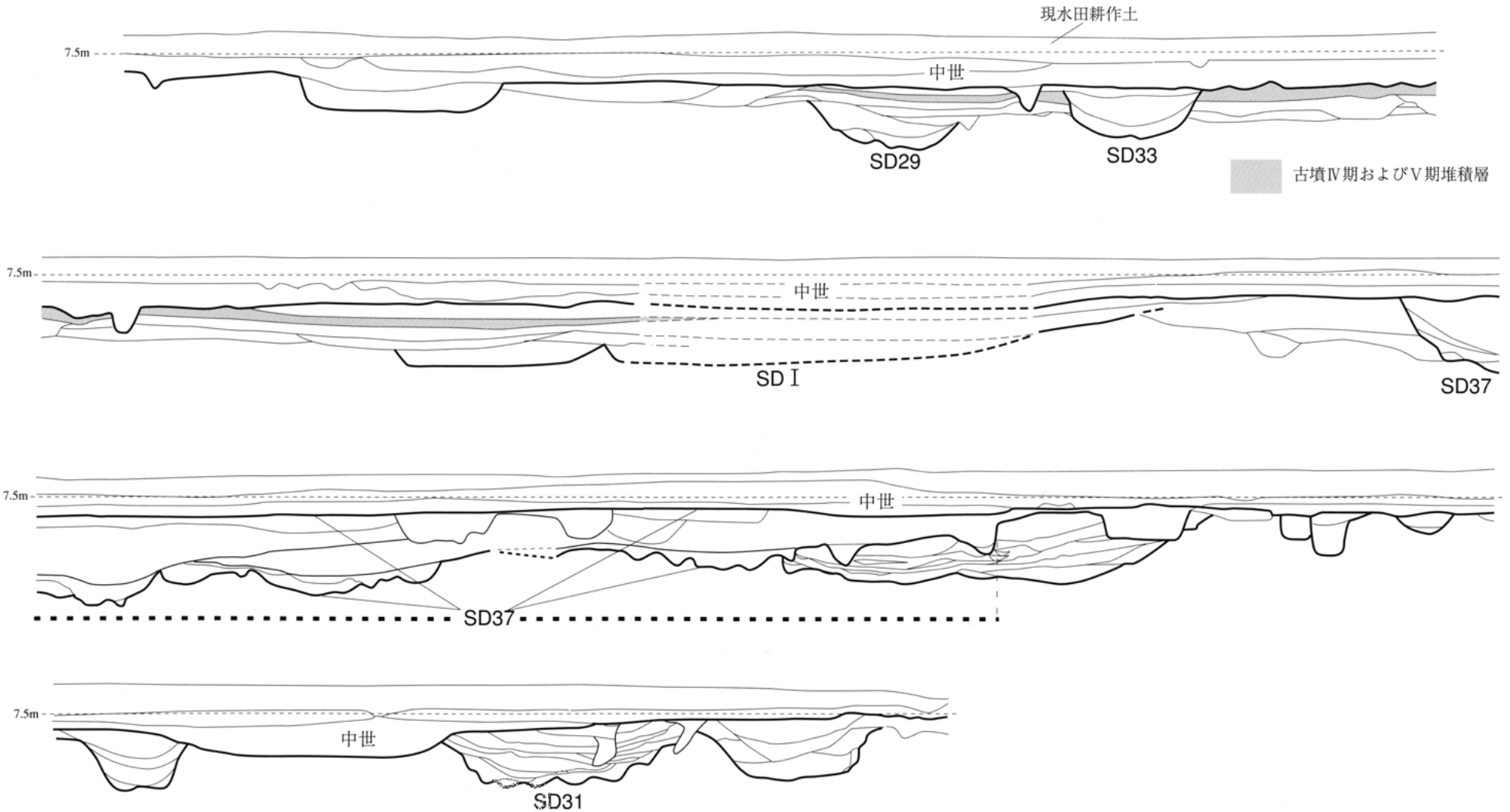
94Ca区南壁セクション

９４Ｃｂ区南壁セクション

図版10



94Ca区横断セクション

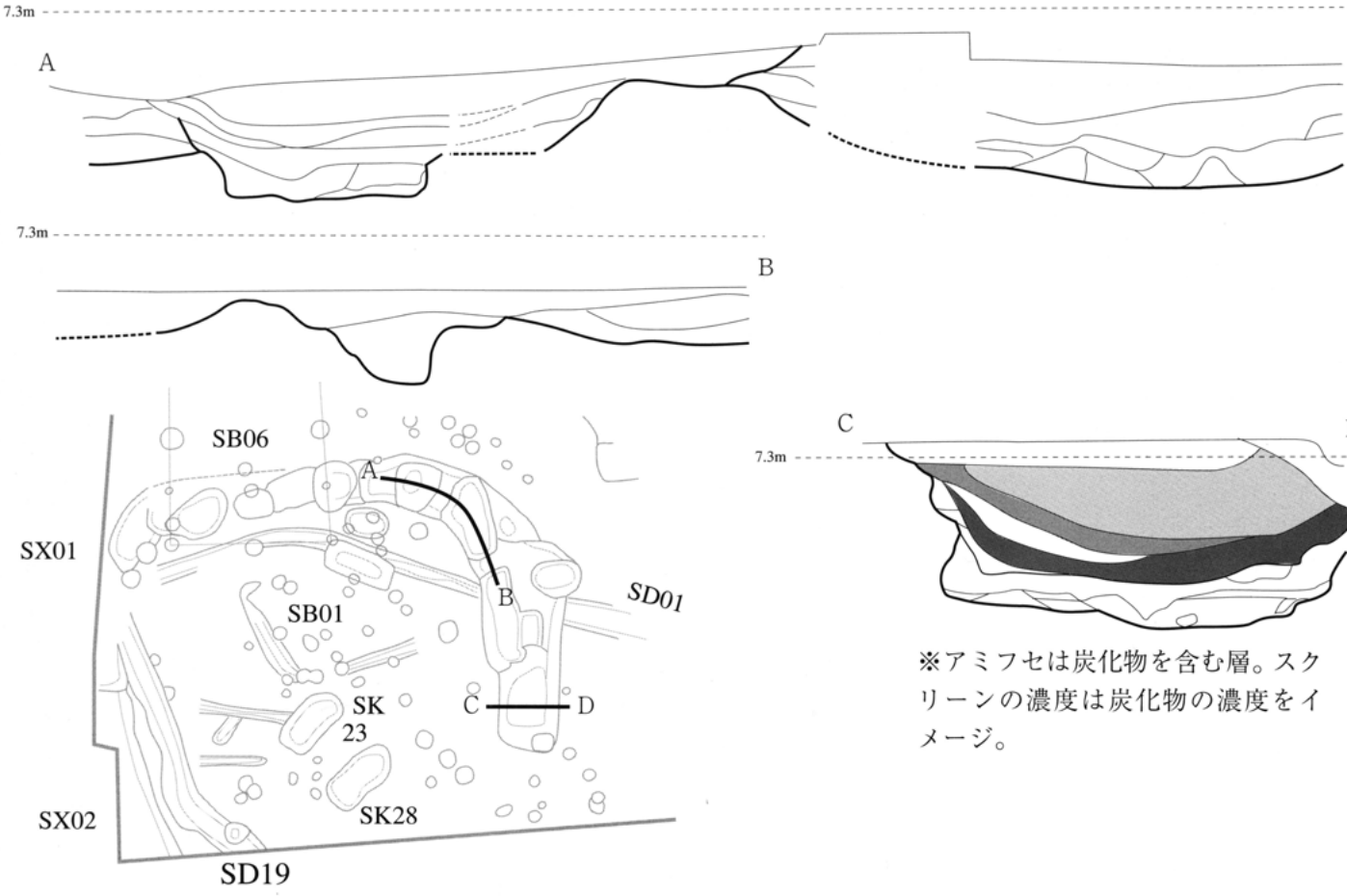


94Cb区西壁セクション

図版11

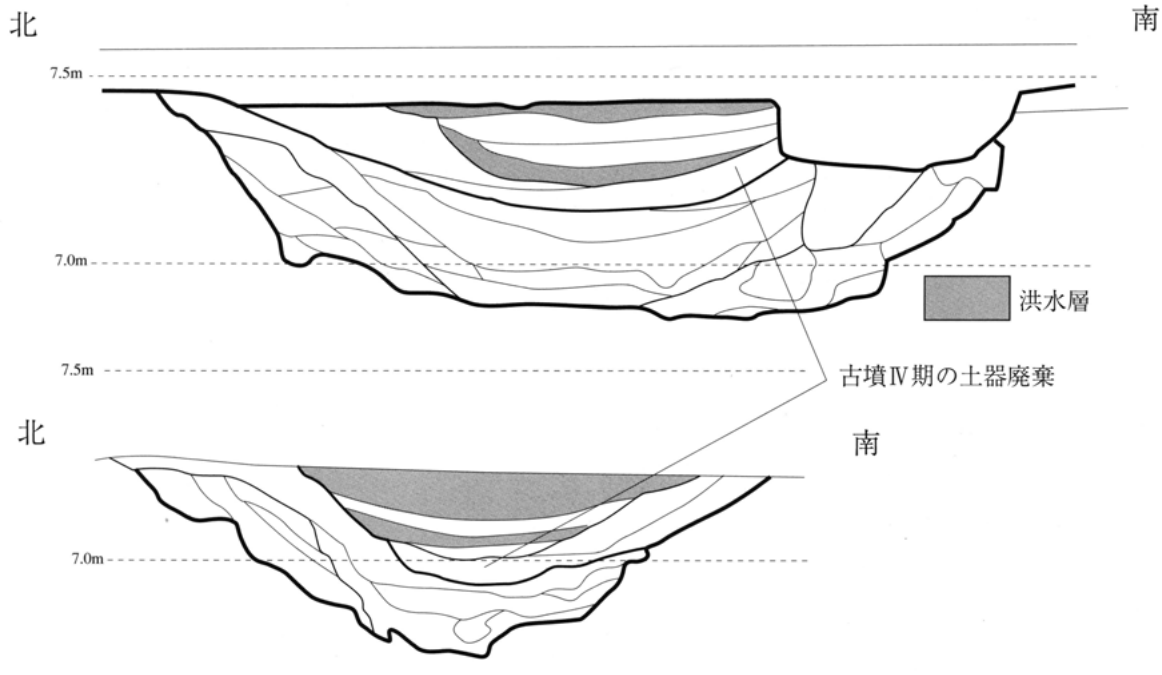
図版 12

ＳＸ０１土層セクション（1/20）

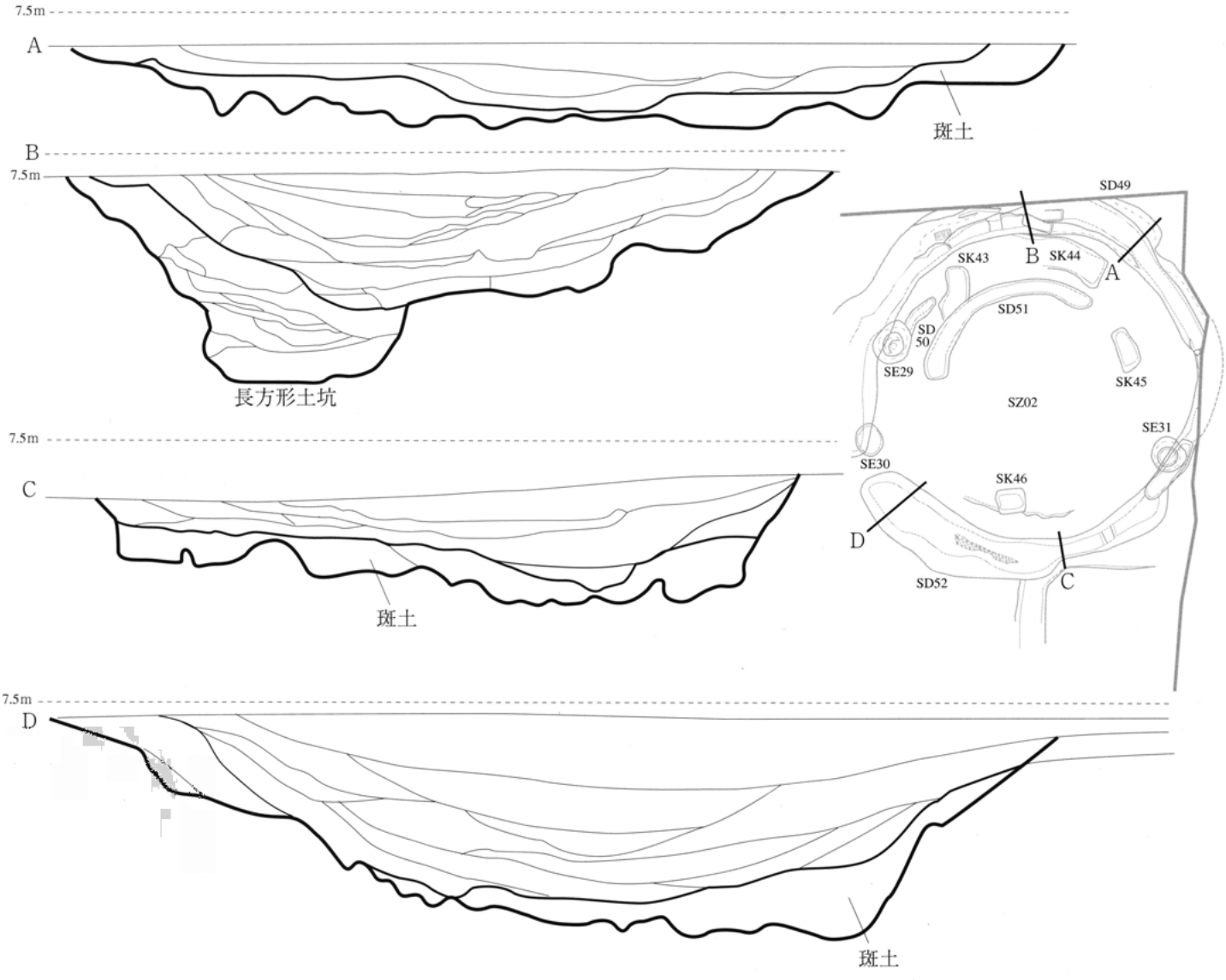


※アミフセは炭化物を含む層。スクリーンの濃度は炭化物の濃度をイメージ。

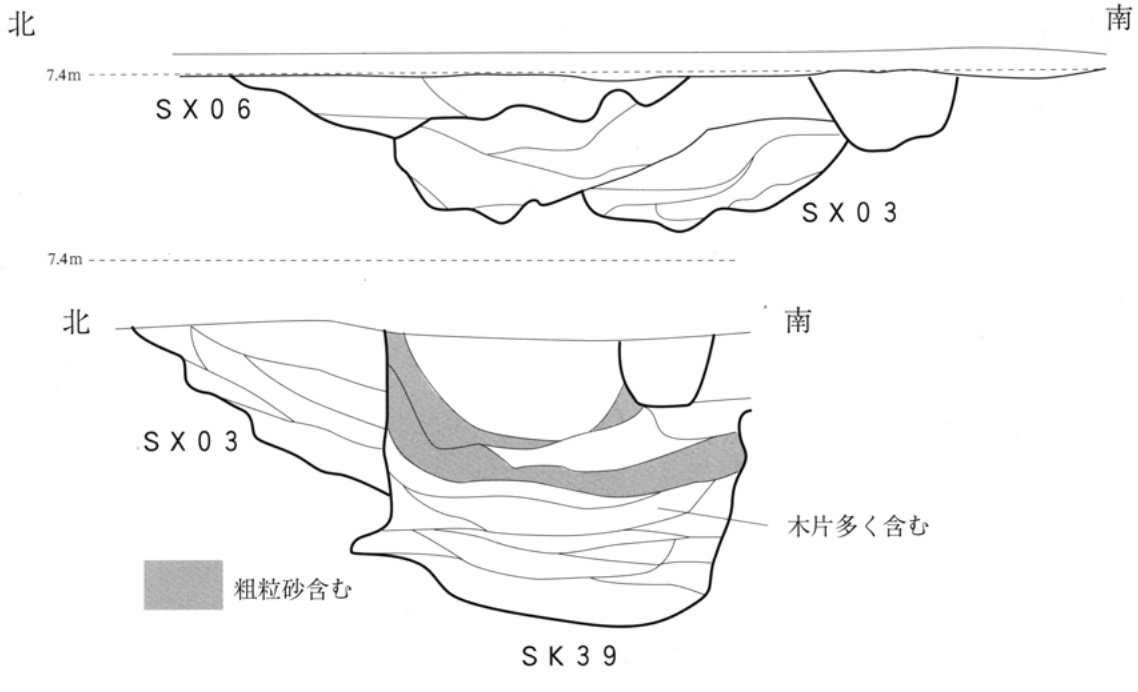
ＳＤⅠ土層セクション（1/20）



ＳＺ０２土層セクション（1/20）



ＳＸ０３・０６、ＳＫ３９土層セクション（1/20）

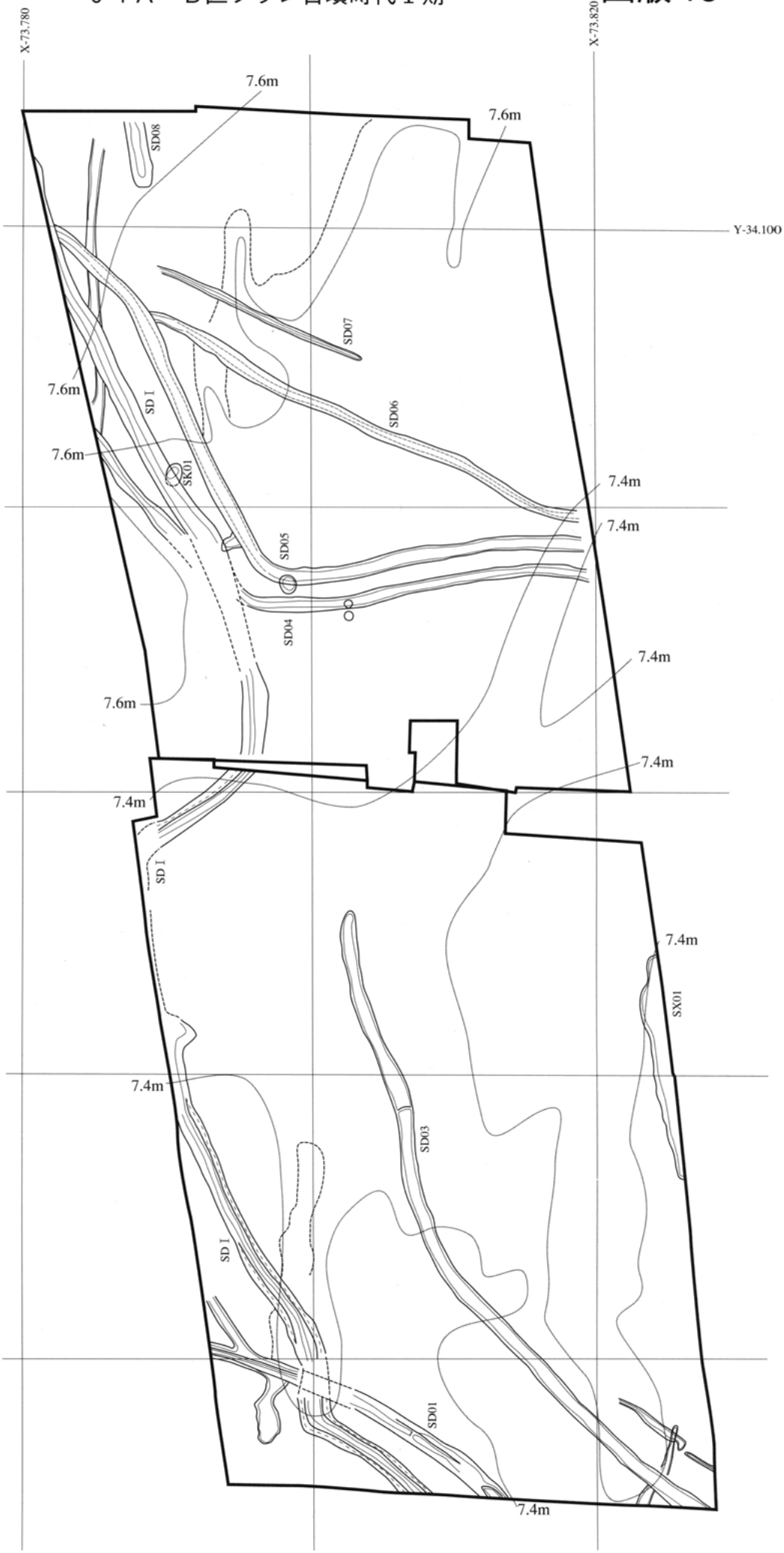


図版 14

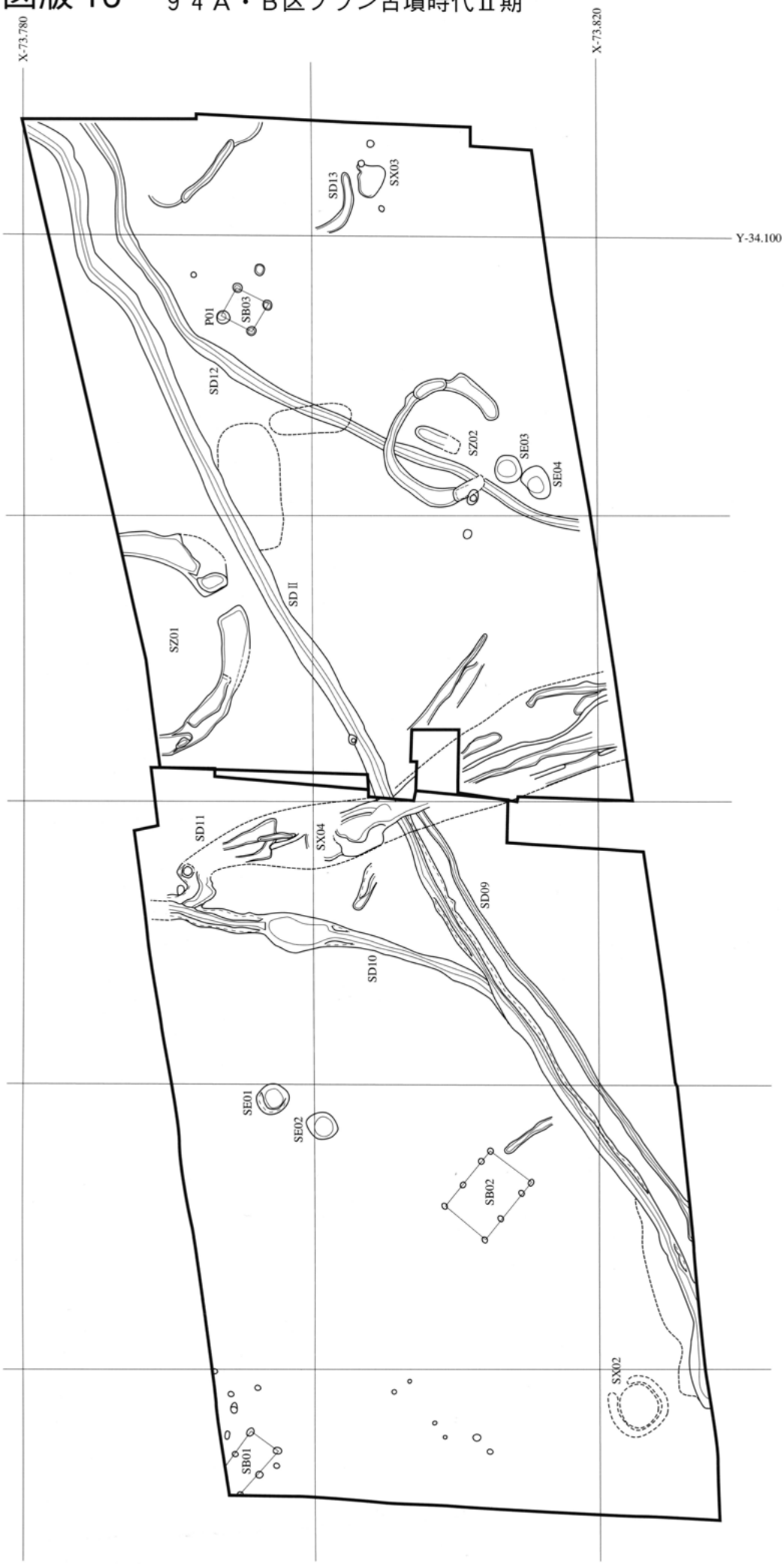
９４Ａ・Ｂ区プラン全体

９４Ａ・Ｂ区プラン古墳時代Ｉ期

図版 15

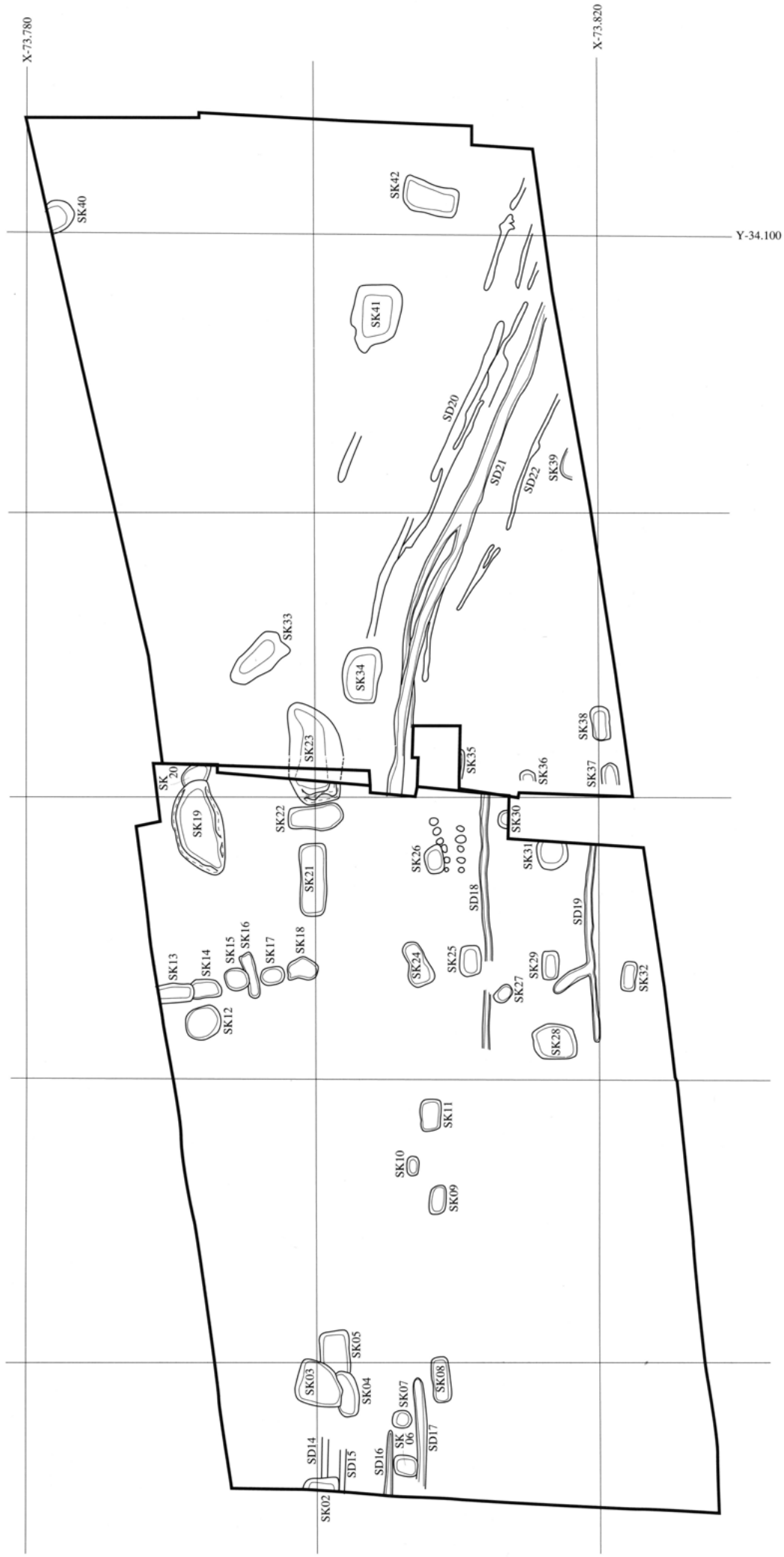


図版16　９４Ａ・Ｂ区プラン古墳時代Ⅱ期

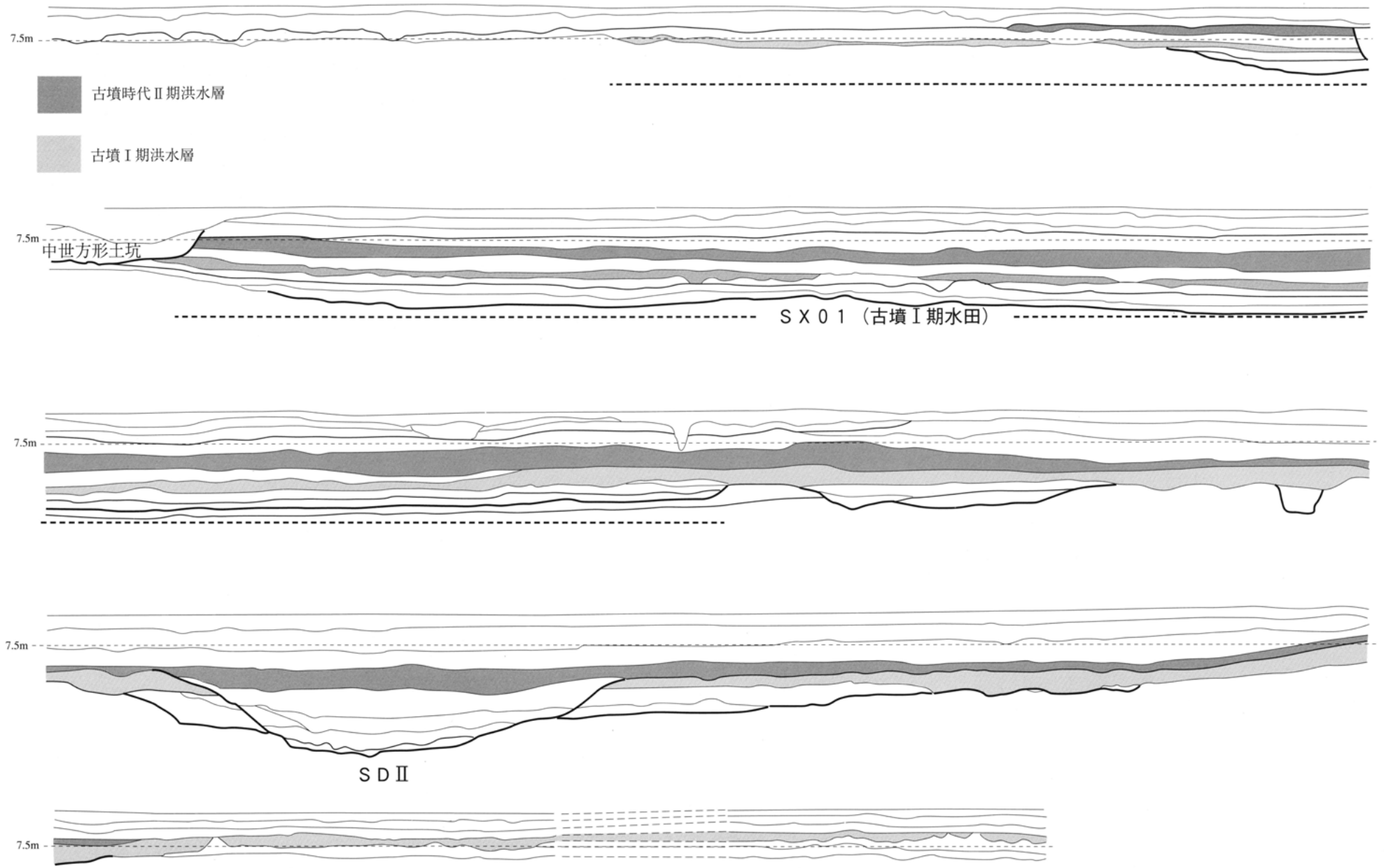


９４Ａ・Ｂ区プラン中世

図版 17



図版18

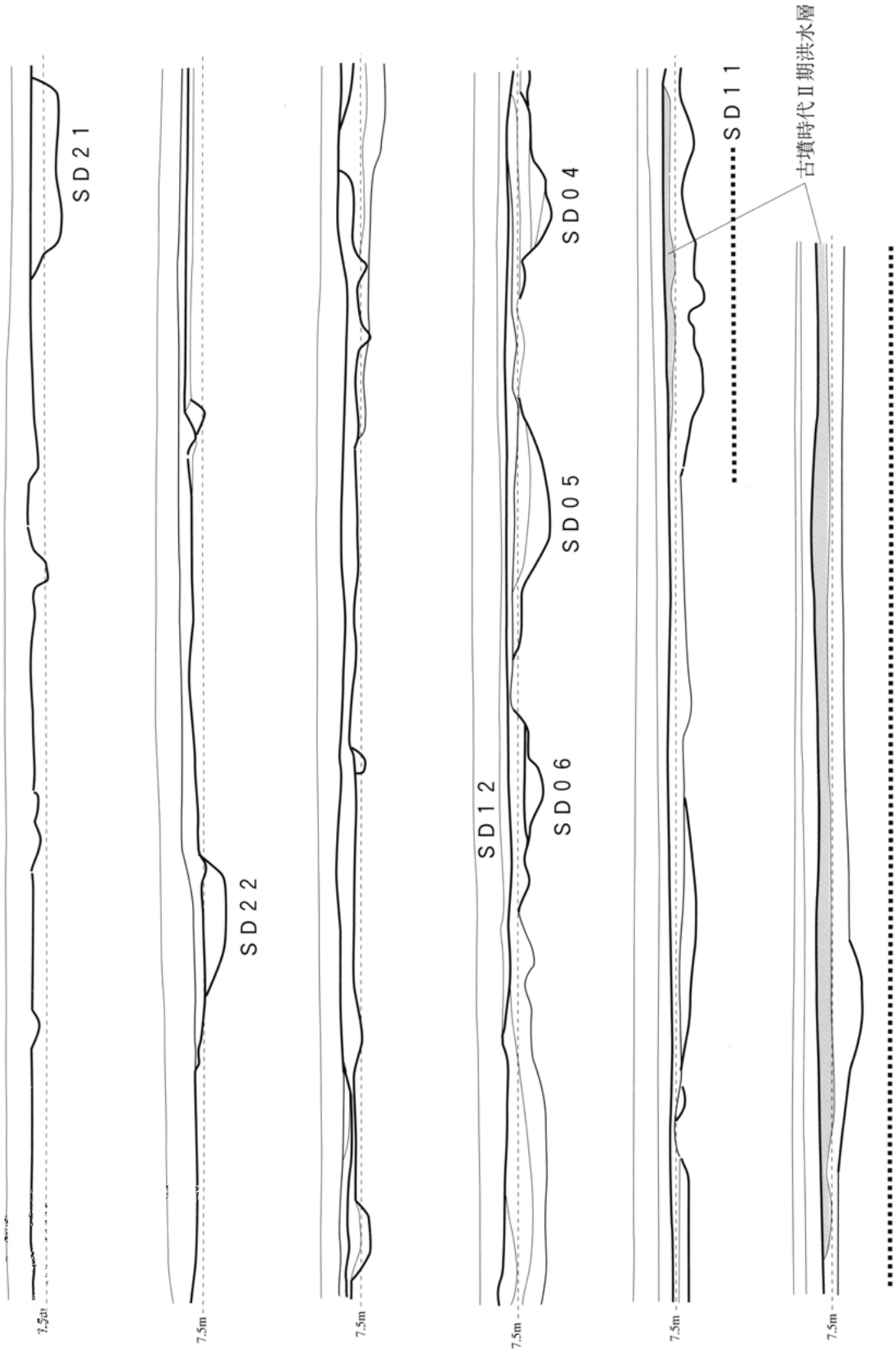


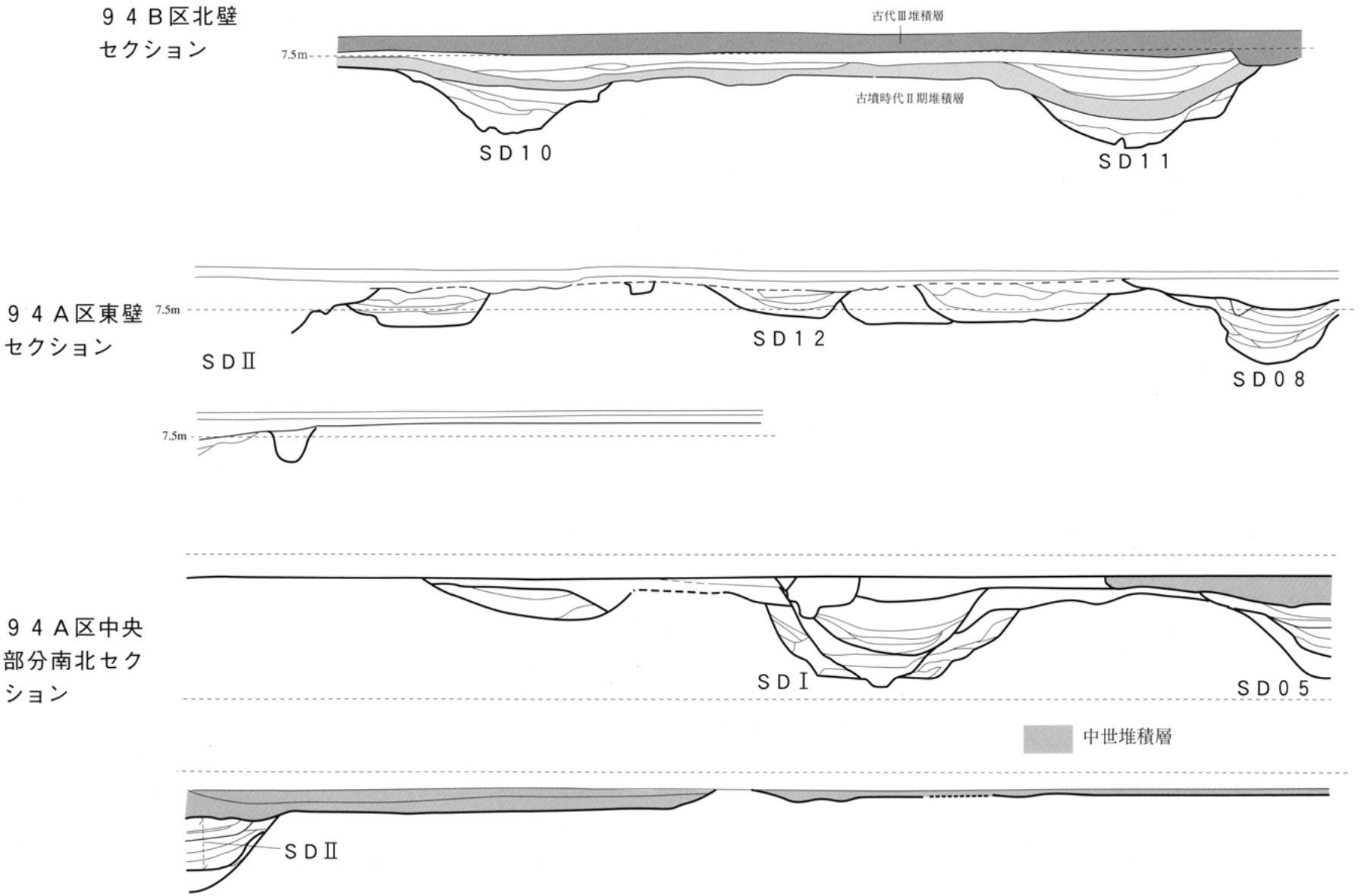
９４Ｂ区南壁セクション

９４Ｂ区西壁セクション

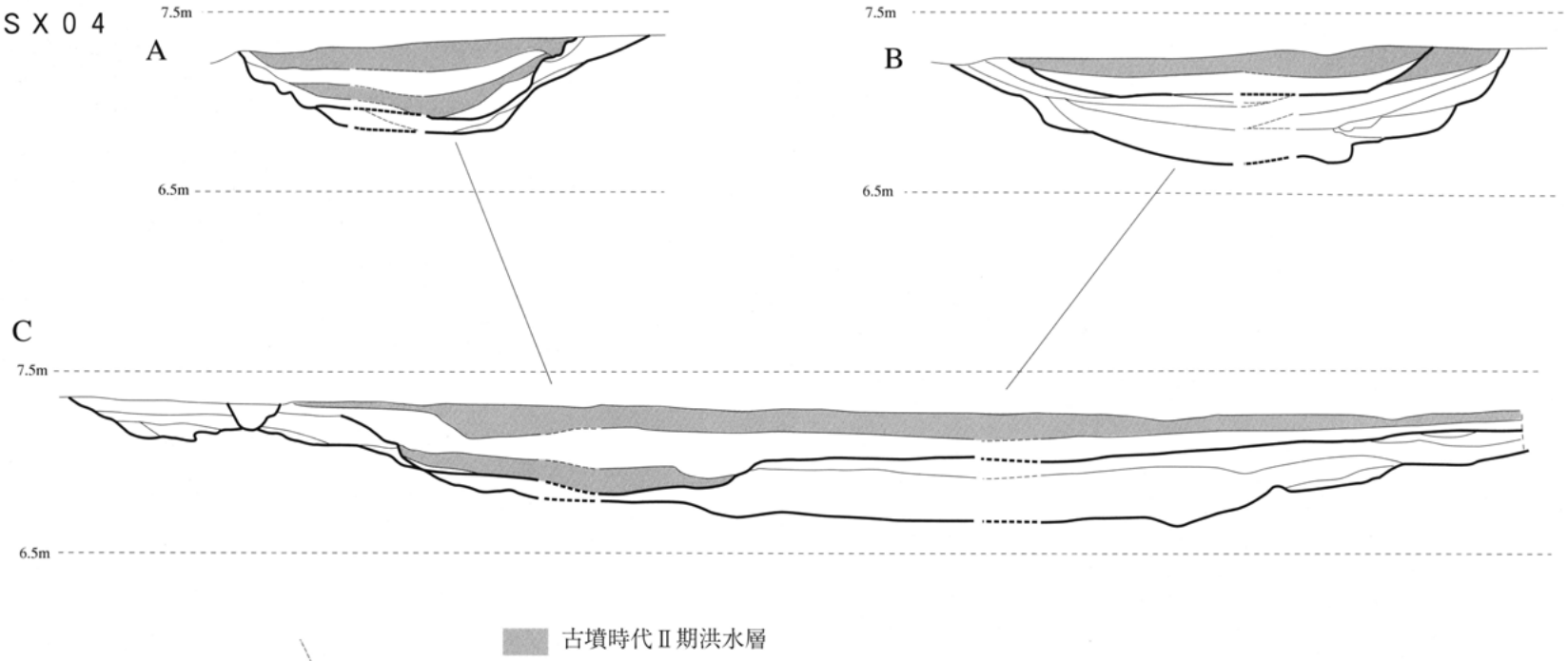
図版 20

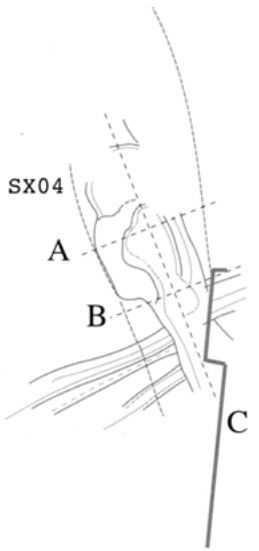
９４Ａ区南壁セクション




９４Ｂ区北壁
セクション
古代Ⅲ堆積層
7.5m
古墳時代Ⅱ期堆積層
ＳＤ１０
ＳＤ１１
９４Ａ区東壁
セクション
7.5m
ＳＤⅡ
ＳＤ１２
ＳＤ０８
7.5m
９４Ａ区中央
部分南北セク
ション
ＳＤⅠ
ＳＤ０５
中世堆積層
ＳＤⅡ

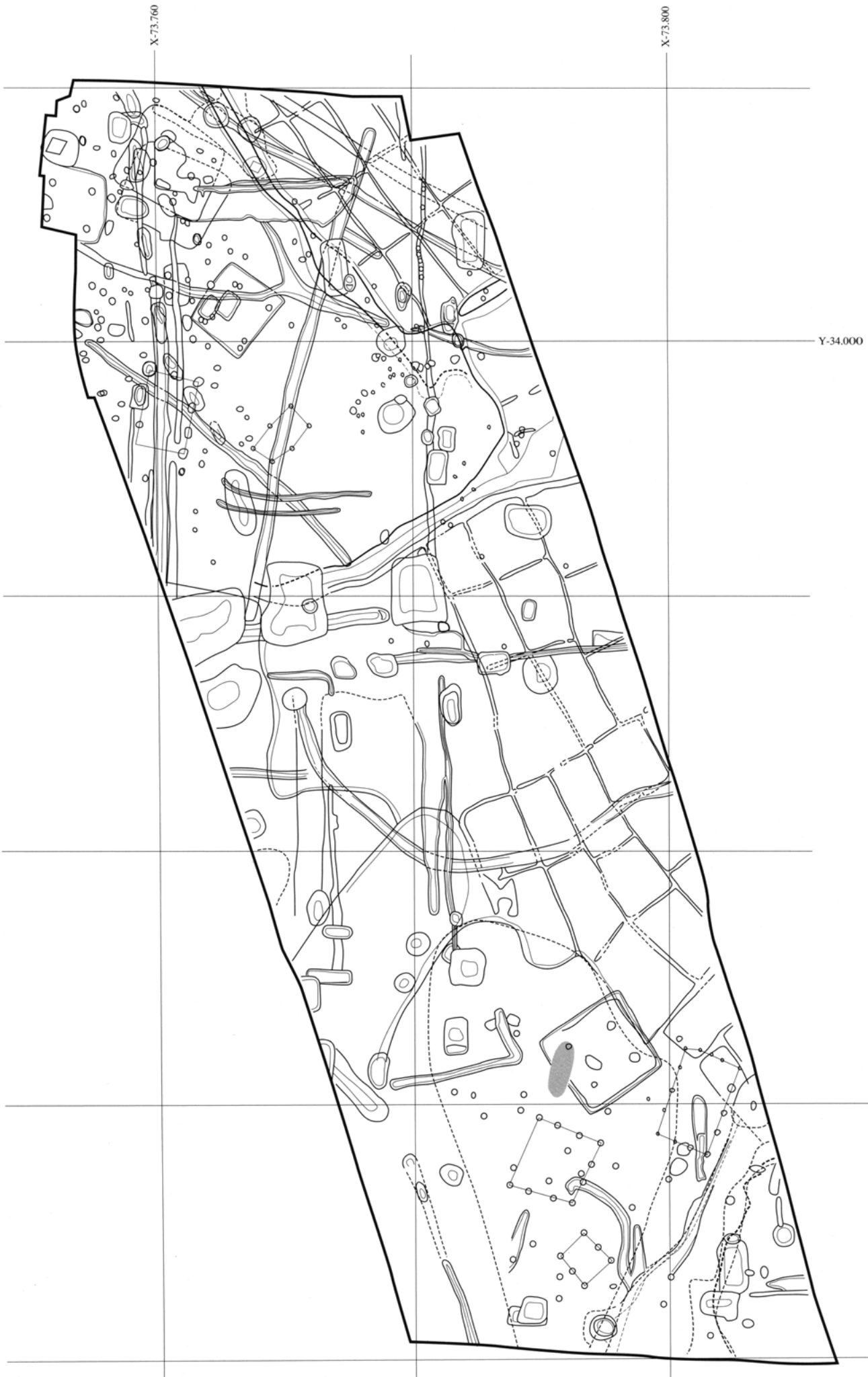
９４Ａ・Ｂ区ＳＸ０４セクション





図版 23

９５Ａ区上面



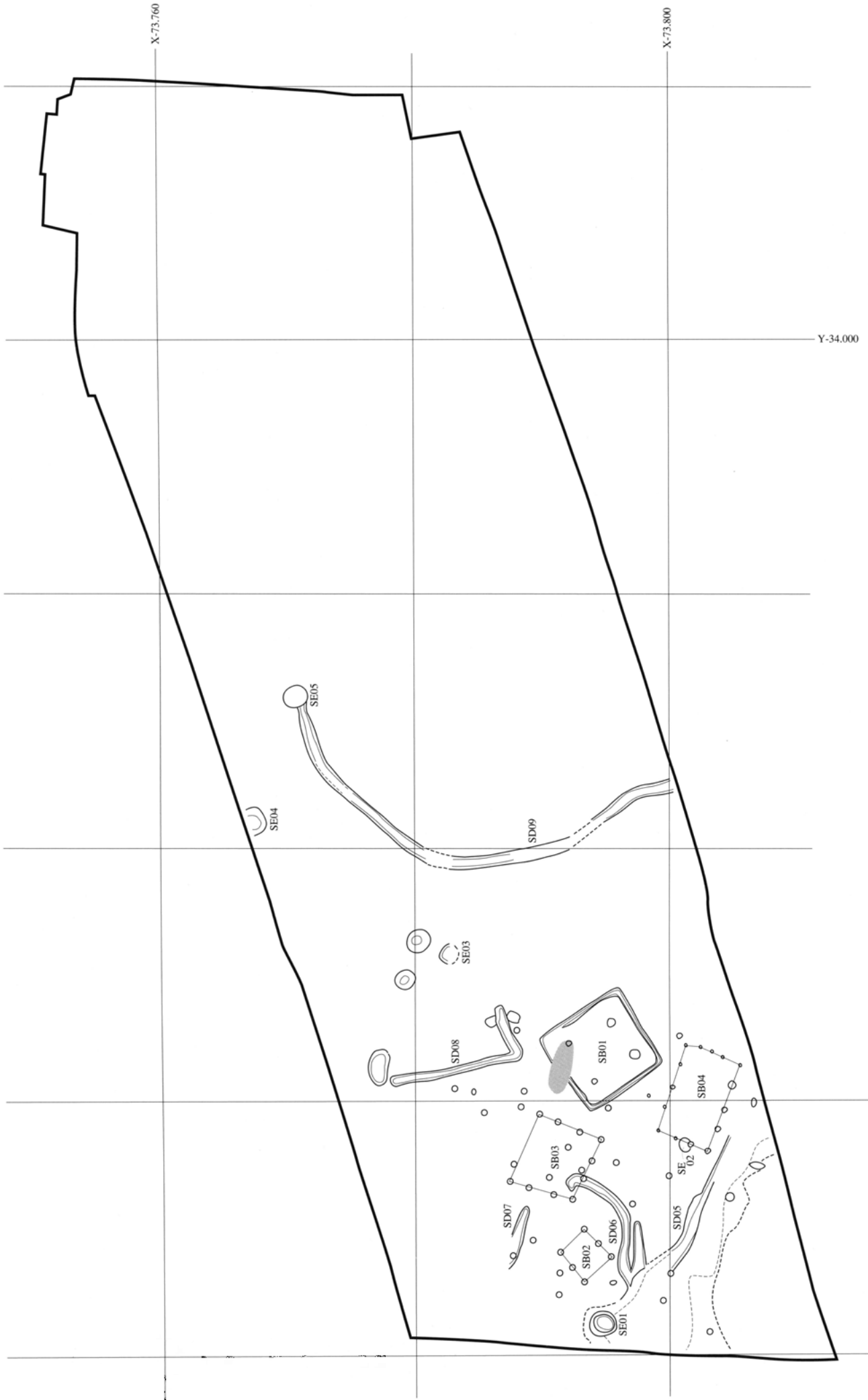
図版 24

９５Ａ区下面

X-73.760
X-73.800
Y-34.000
SK11
SK10
SK09
SK08
SK07
SK06
SK05
SK04
SK01
SK02
SK03
SD03
SD04
SD02
SD01
SX01
SX02
SX03
SX04
SXI
独立大畦畔1
独立大畦畔2
ST01
ST02
ST03
ST04
ST05
ST06
ST07
ST08
ST09
ST10
ST11
ST12
ST13
ST14
ST15
ST16
ST17
ST18
ST19
ST20
ST21
ST22
ST23
ST24
ST25
ST26
ST27
ST28
ST29
ST30
ST31
ST32
ST33
ST34
ST35
ST36
ST37
ST38
ST39
7.4m

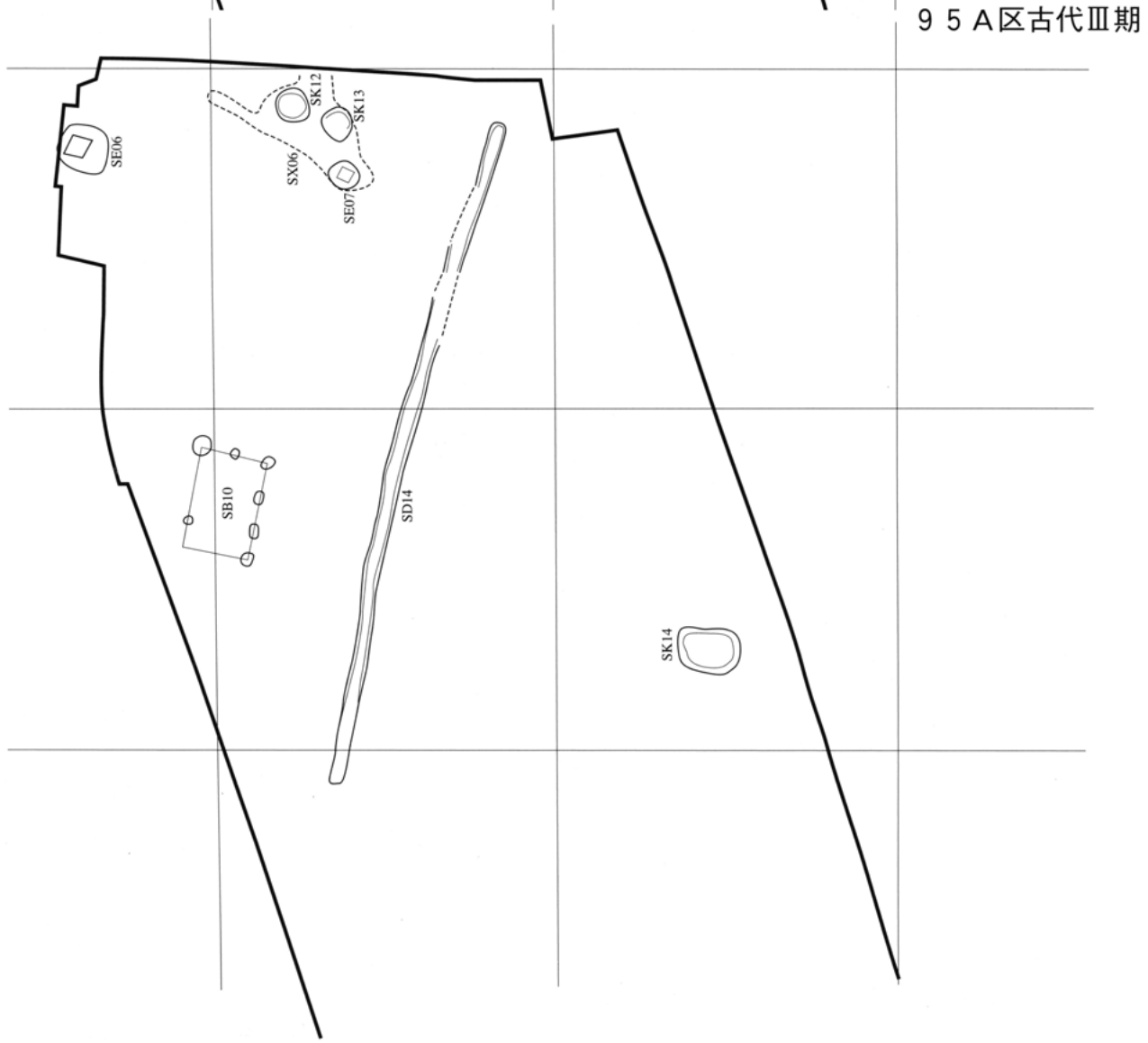
95A区古墳時代Ⅱ期

図版25

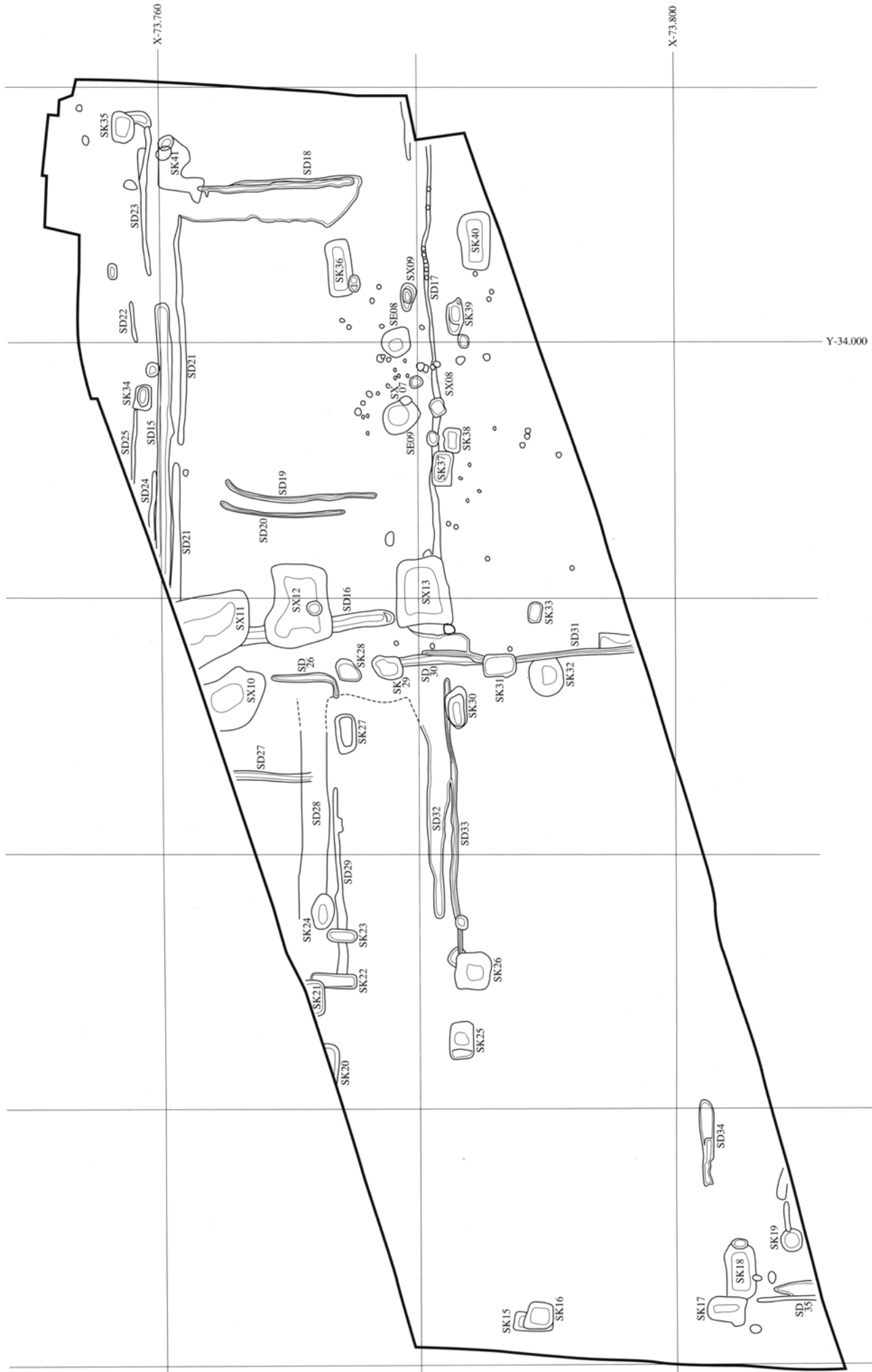


図版 26


９５Ａ区古代Ⅰ・Ⅱ期
X-73.760
X-73.800
Y-34.000
SB06
SB05
SB07
SD10
SD11
SD12
SX05
SB08
SB09
SD13

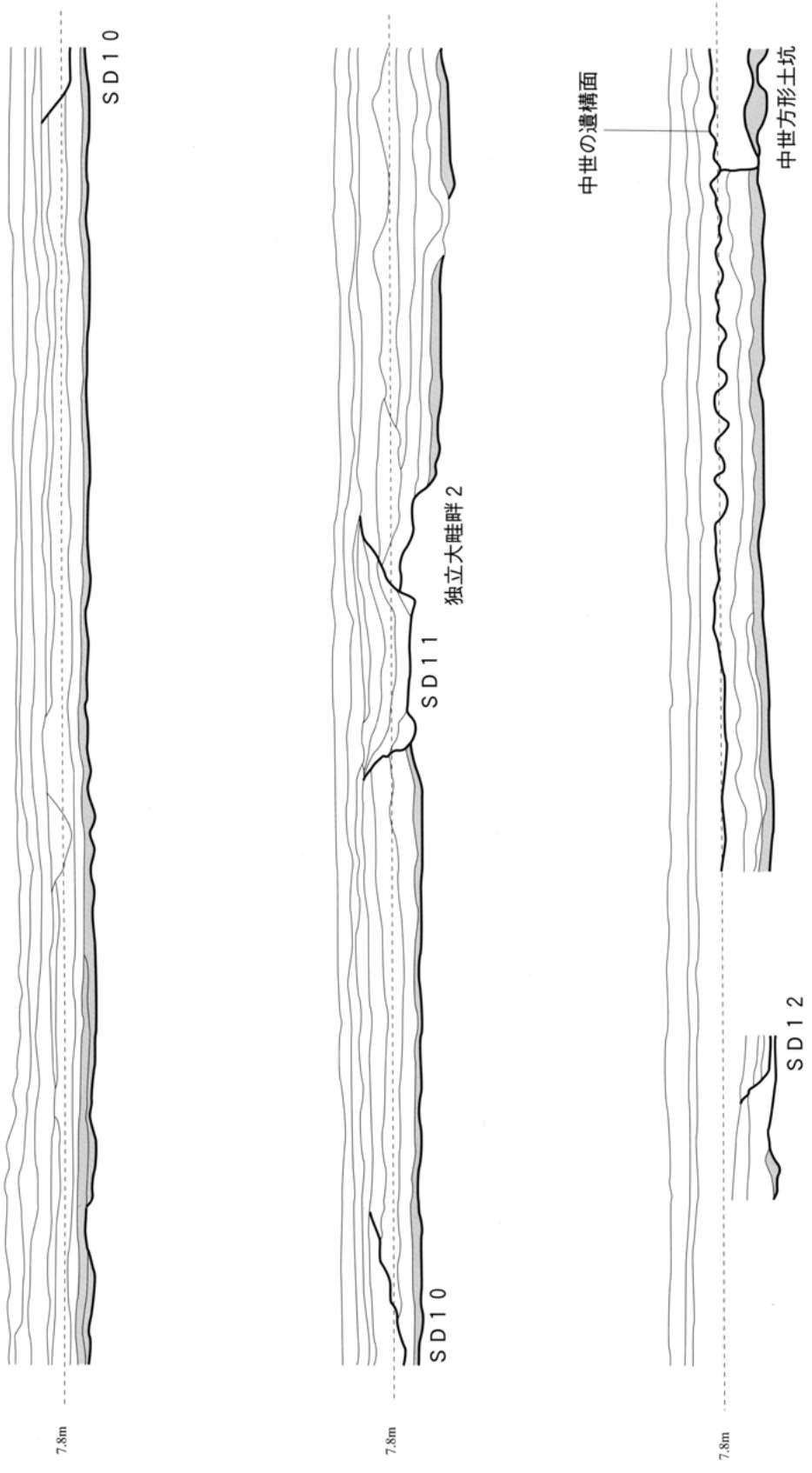

９５Ａ区古代Ⅲ期
SE06
SK12
SK13
SX06
SE07
SB10
SD14
SK14

図版 27

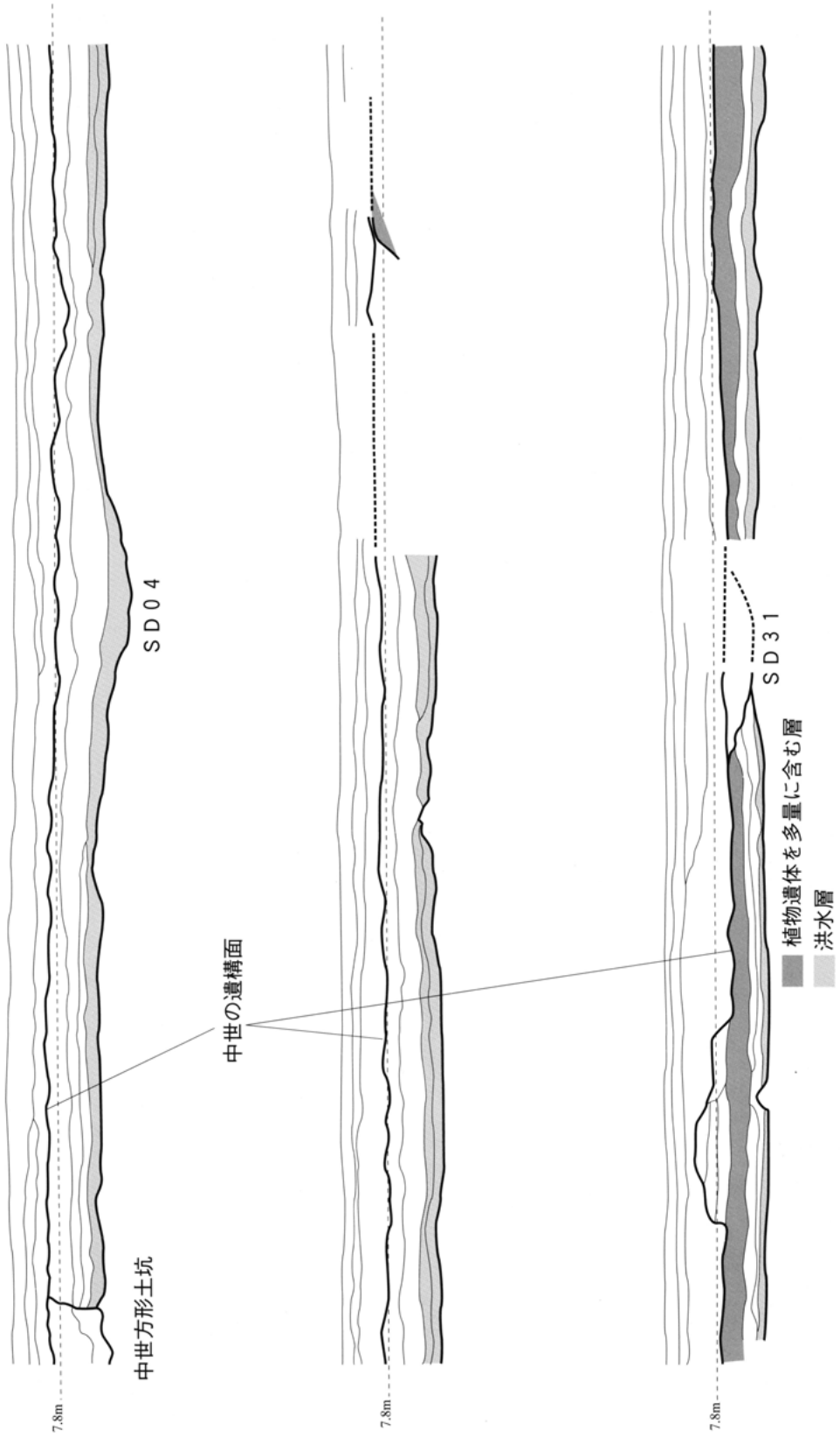

X-73.760
X-73.800
Y-34.000
SK35
SK41
SD18
SD23
SK36
SX09
SD17
SK40
SD22
SE08
SK39
SD21
SK34
SX07
SX08
SD25
SD15
SE09
SK38
SK37
SD24
SD19
SD20
SD21
SX12
SD16
SX13
SX11
SK33
SD31
SD 26
SK28
SK 29
SD 30
SK31
SK32
SX10
SK30
SK27
SD27
SD28
SD32
SD33
SD29
SK24
SK23
SK22
SK21
SK26
SK25
SK20
SD34
SK19
SK18
SK17
SD 35
SK15
SK16

図版 28

９５Ａ区南壁セクション

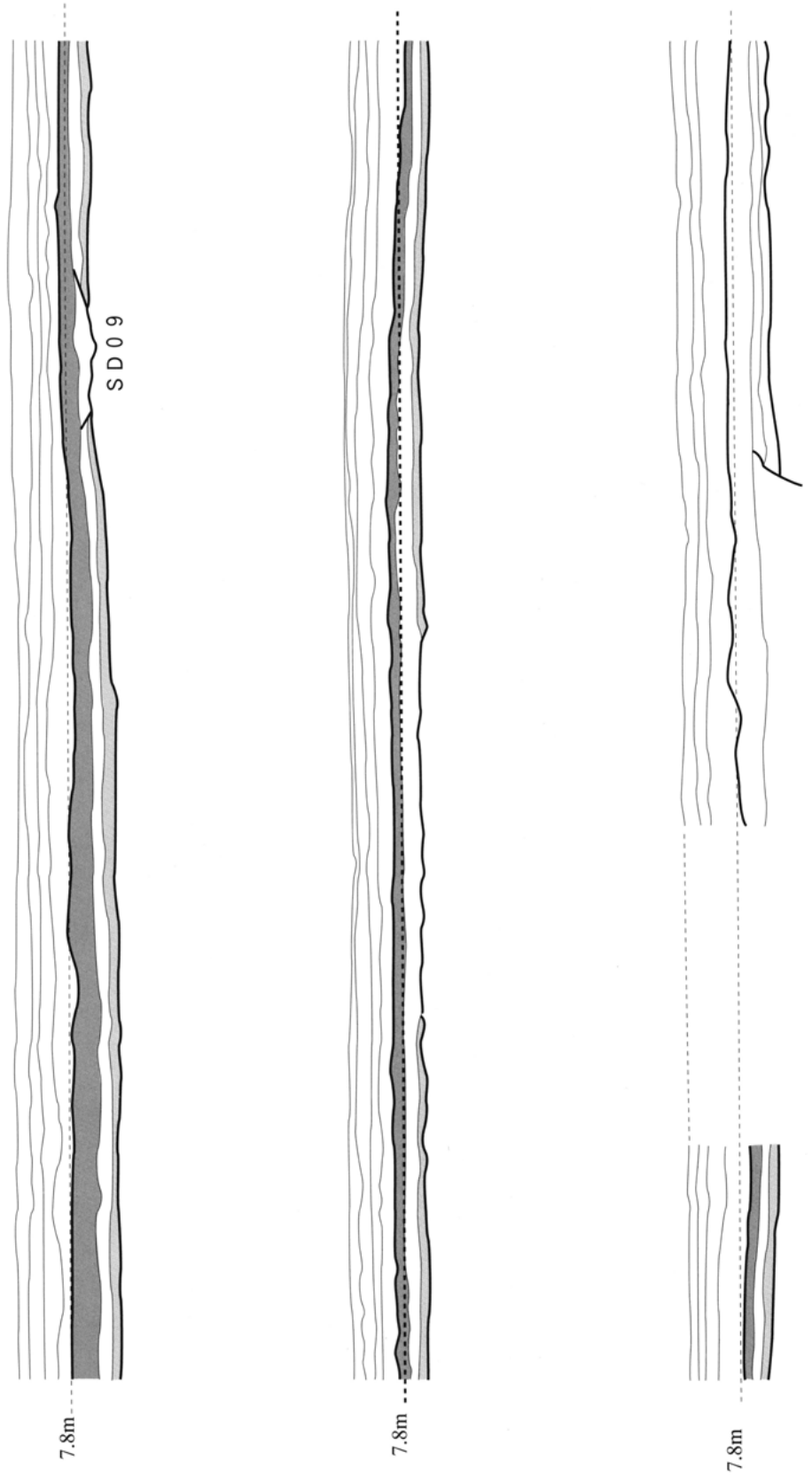


図版29

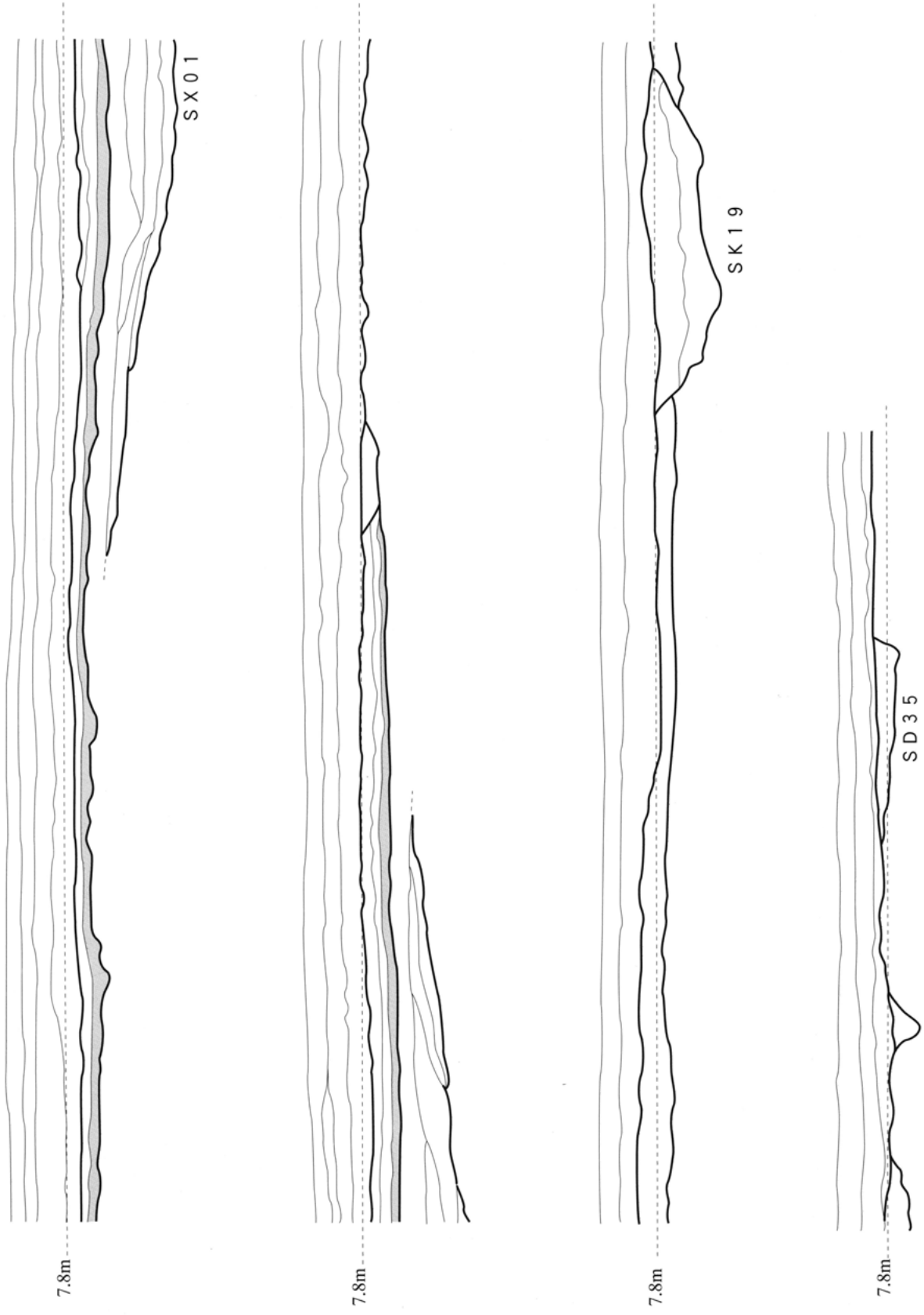


図版 30

９５Ａ区南壁セクション

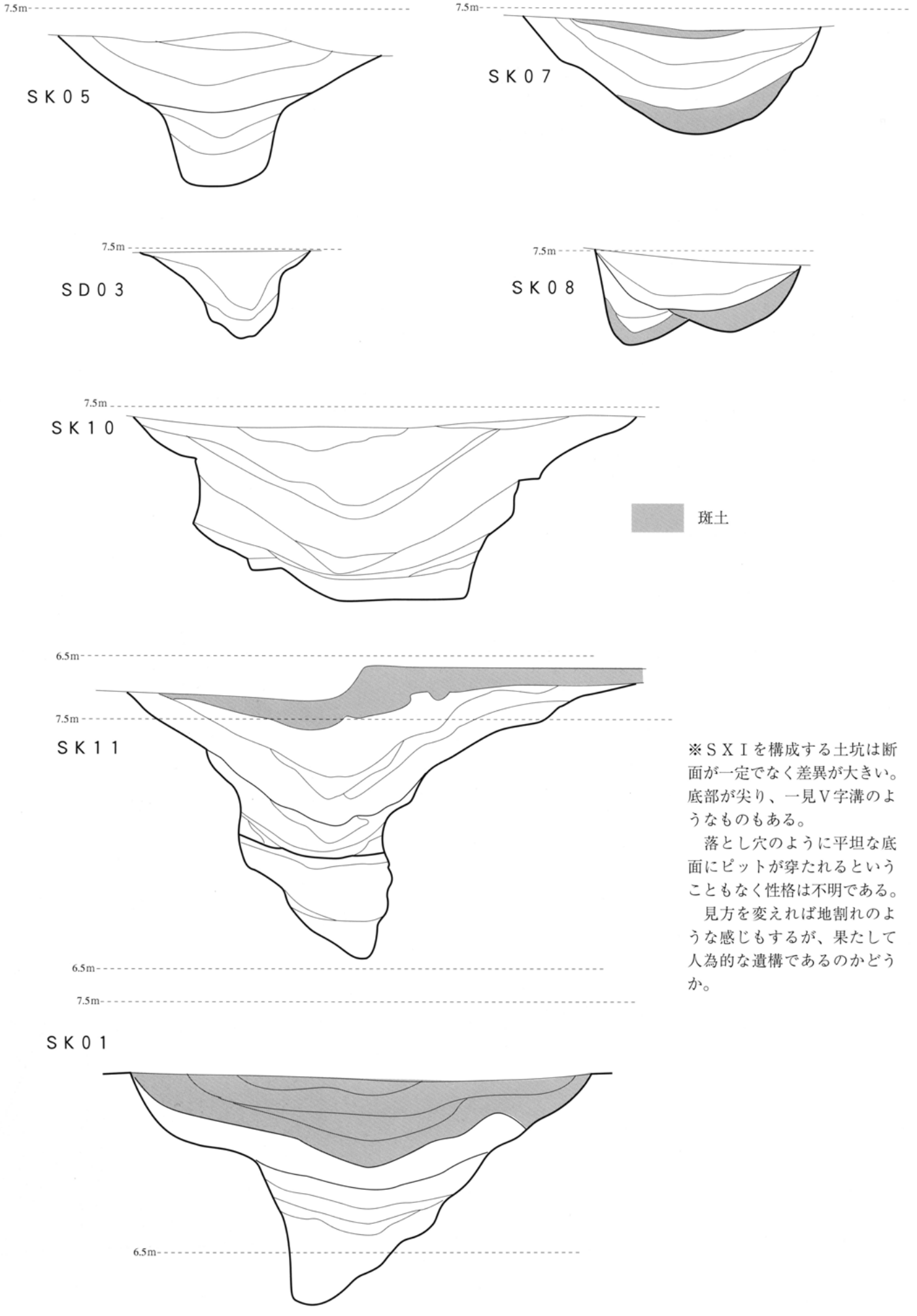


図版31



図版32

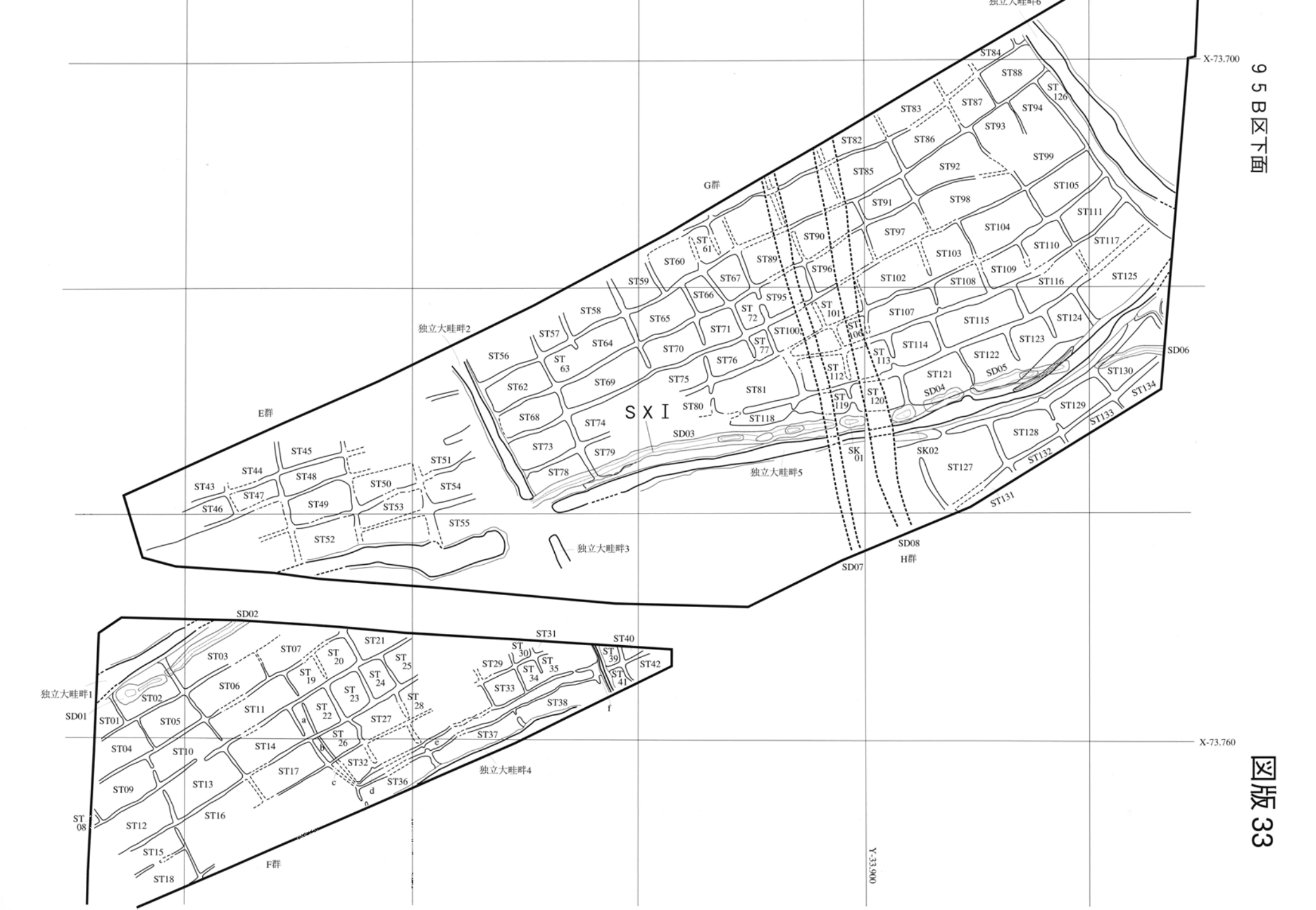
９５Ａ区ＳＸＩセクション（1/20）



※ＳＸＩを構成する土坑は断面が一定でなく差異が大きい。底部が尖り、一見Ｖ字溝のようなものもある。

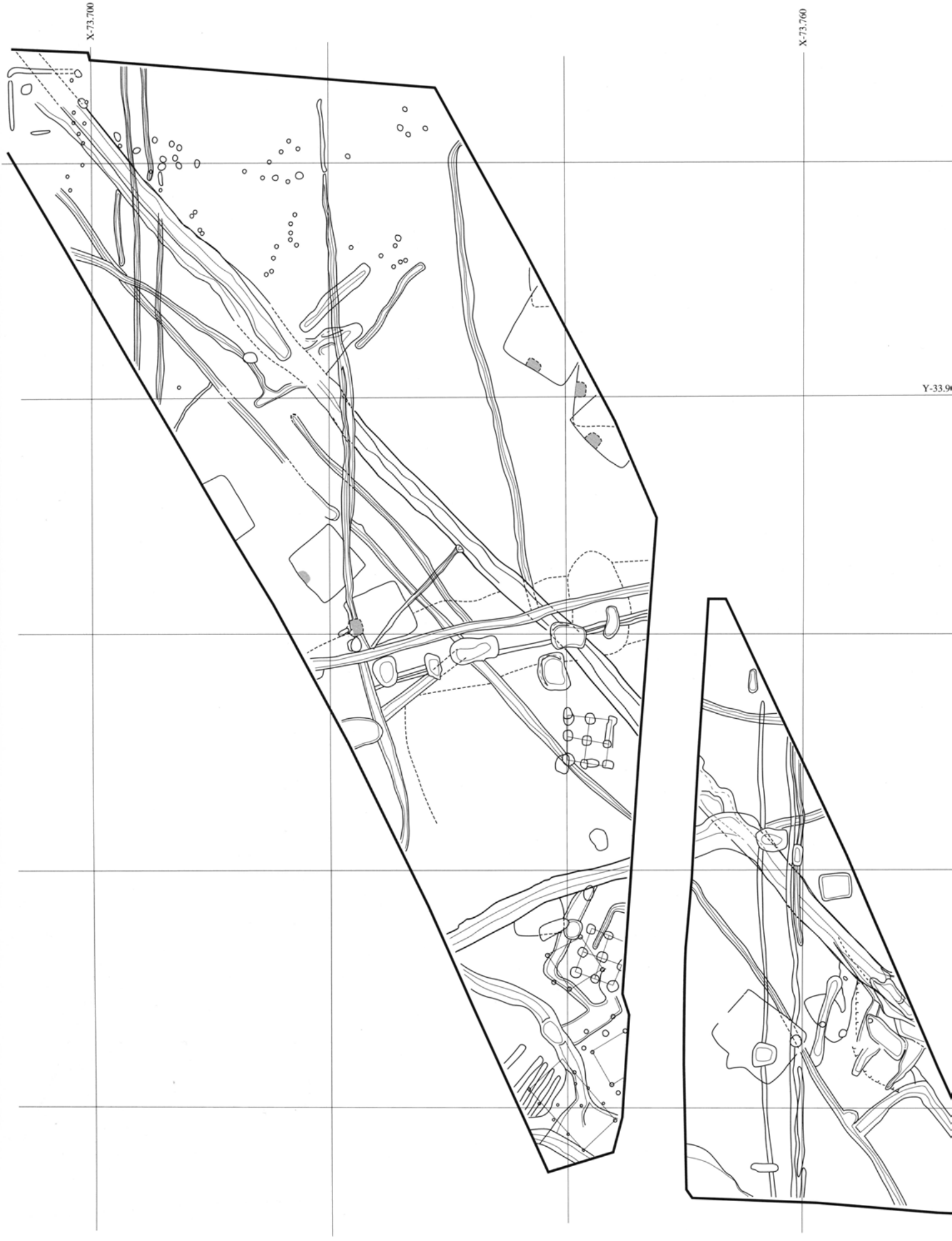
落とし穴のように平坦な底面にピットが穿たれるということもなく性格は不明である。

見方を変えれば地割れのような感じもするが、果たして人為的な遺構であるのかどうか。

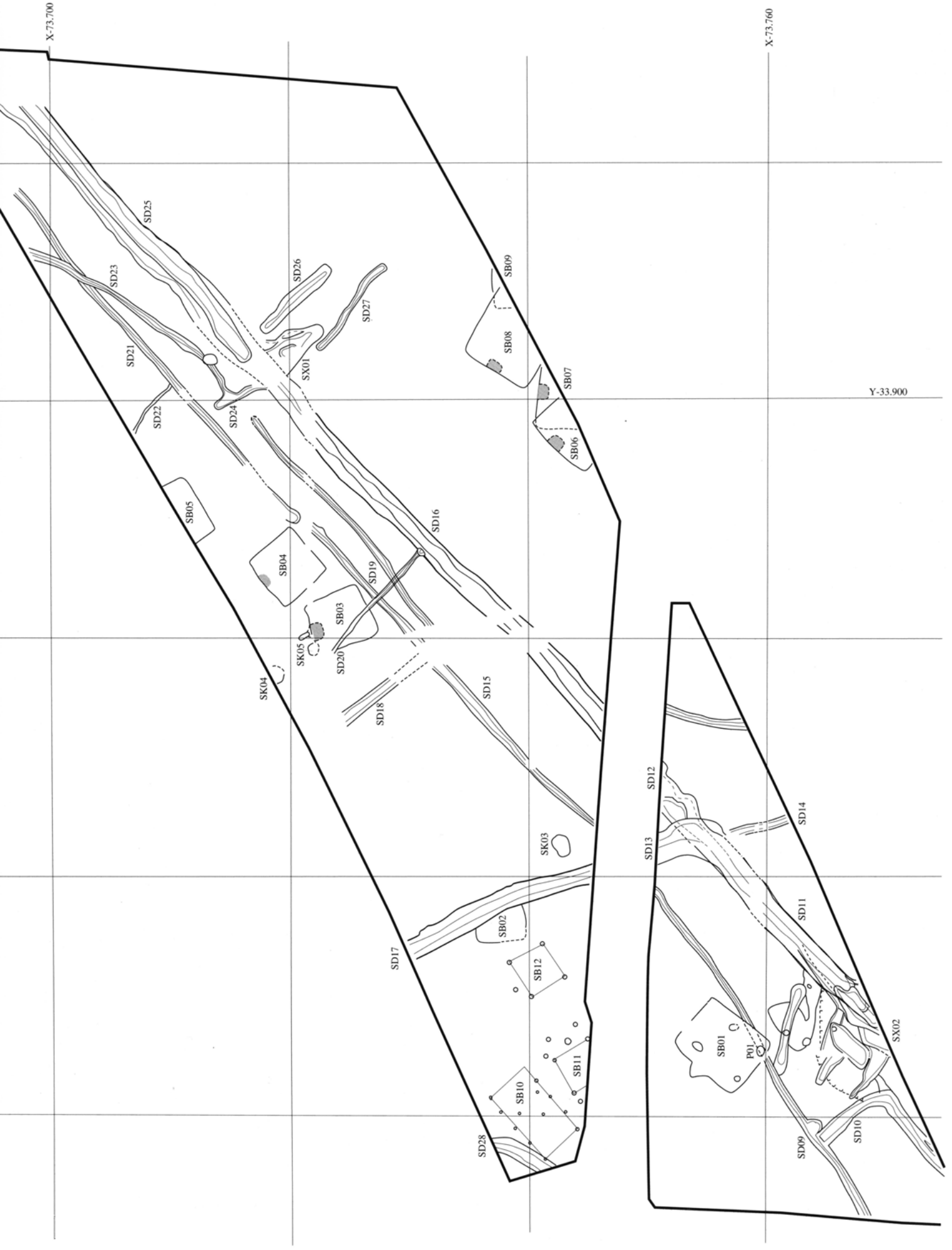

95B区下面
図版33
X-73.700
X-73.760
Y-33.900
独立大畦畔1
独立大畦畔2
独立大畦畔3
独立大畦畔4
独立大畦畔5
独立大畦畔6
E群
F群
G群
H群
SXI
SD01
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
SD07
SD08
SK01
SK02
ST01
ST02
ST03
ST04
ST05
ST06
ST07
ST08
ST09
ST10
ST11
ST12
ST13
ST14
ST15
ST16
ST17
ST18
ST19
ST20
ST21
ST22
ST23
ST24
ST25
ST26
ST27
ST28
ST29
ST30
ST31
ST32
ST33
ST34
ST35
ST36
ST37
ST38
ST39
ST40
ST41
ST42
ST43
ST44
ST45
ST46
ST47
ST48
ST49
ST50
ST51
ST52
ST53
ST54
ST55
ST56
ST57
ST58
ST59
ST60
ST61
ST62
ST63
ST64
ST65
ST66
ST67
ST68
ST69
ST70
ST71
ST72
ST73
ST74
ST75
ST76
ST77
ST78
ST79
ST80
ST81
ST82
ST83
ST84
ST85
ST86
ST87
ST88
ST89
ST90
ST91
ST92
ST93
ST94
ST95
ST96
ST97
ST98
ST99
ST100
ST101
ST102
ST103
ST104
ST105
ST106
ST107
ST108
ST109
ST110
ST111
ST112
ST113
ST114
ST115
ST116
ST117
ST118
ST119
ST120
ST121
ST122
ST123
ST124
ST125
ST126
ST127
ST128
ST129
ST130
ST131
ST132
ST133
ST134
a
b
c
d
e
f

図版 34

９５Ｂ区上面

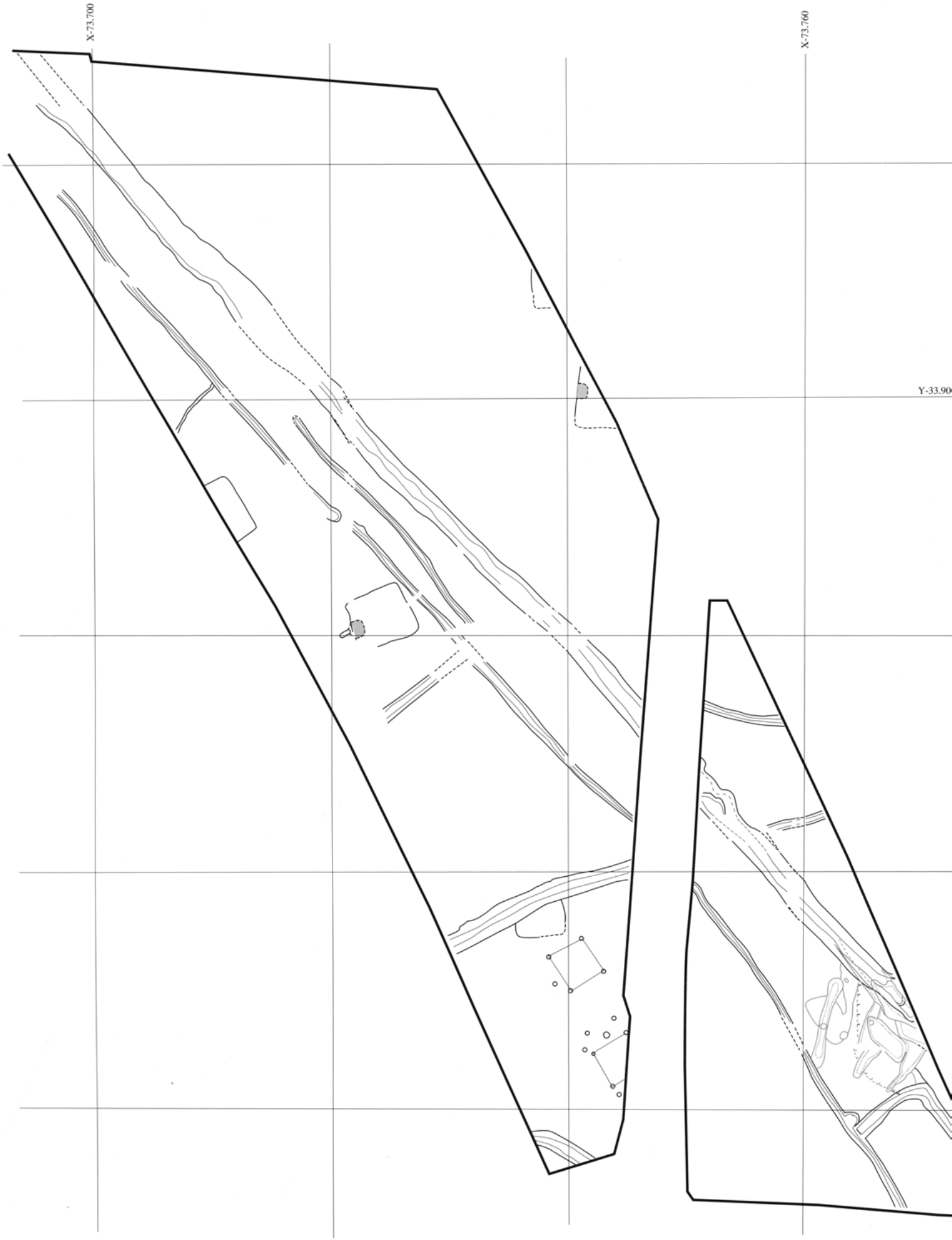


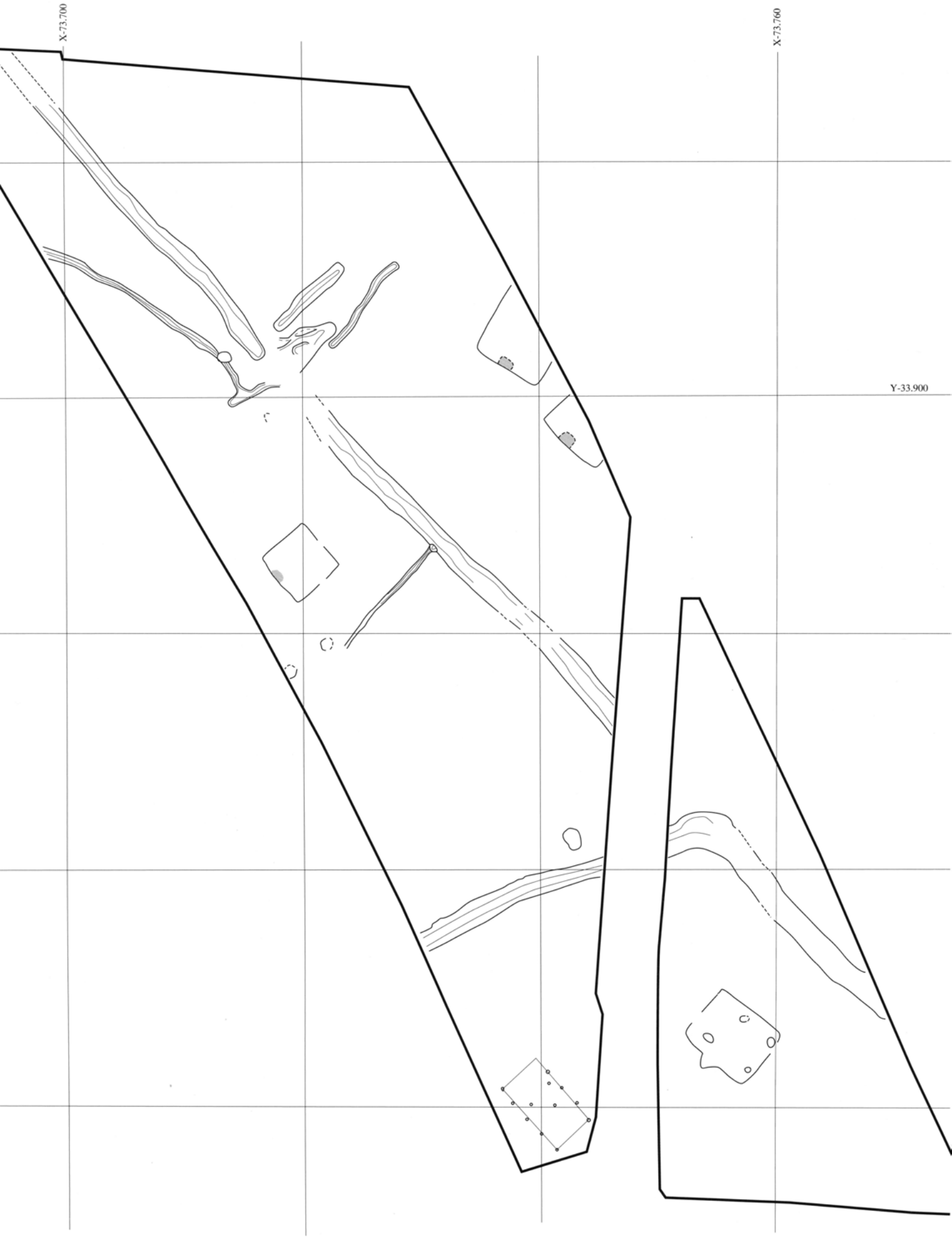
図版35


X-73.700
X-73.760
Y-33.900
SD25
SD23
SD21
SD22
SD24
SD26
SD27
SX01
SB09
SB08
SB07
SB06
SB05
SB04
SB03
SK05
SK04
SD20
SD19
SD16
SD18
SD15
SK03
SB02
SB12
SD17
SB11
SB10
SD28
SD12
SD13
SD14
SD11
SB01
P01
SX02
SD09
SD10

図版 36

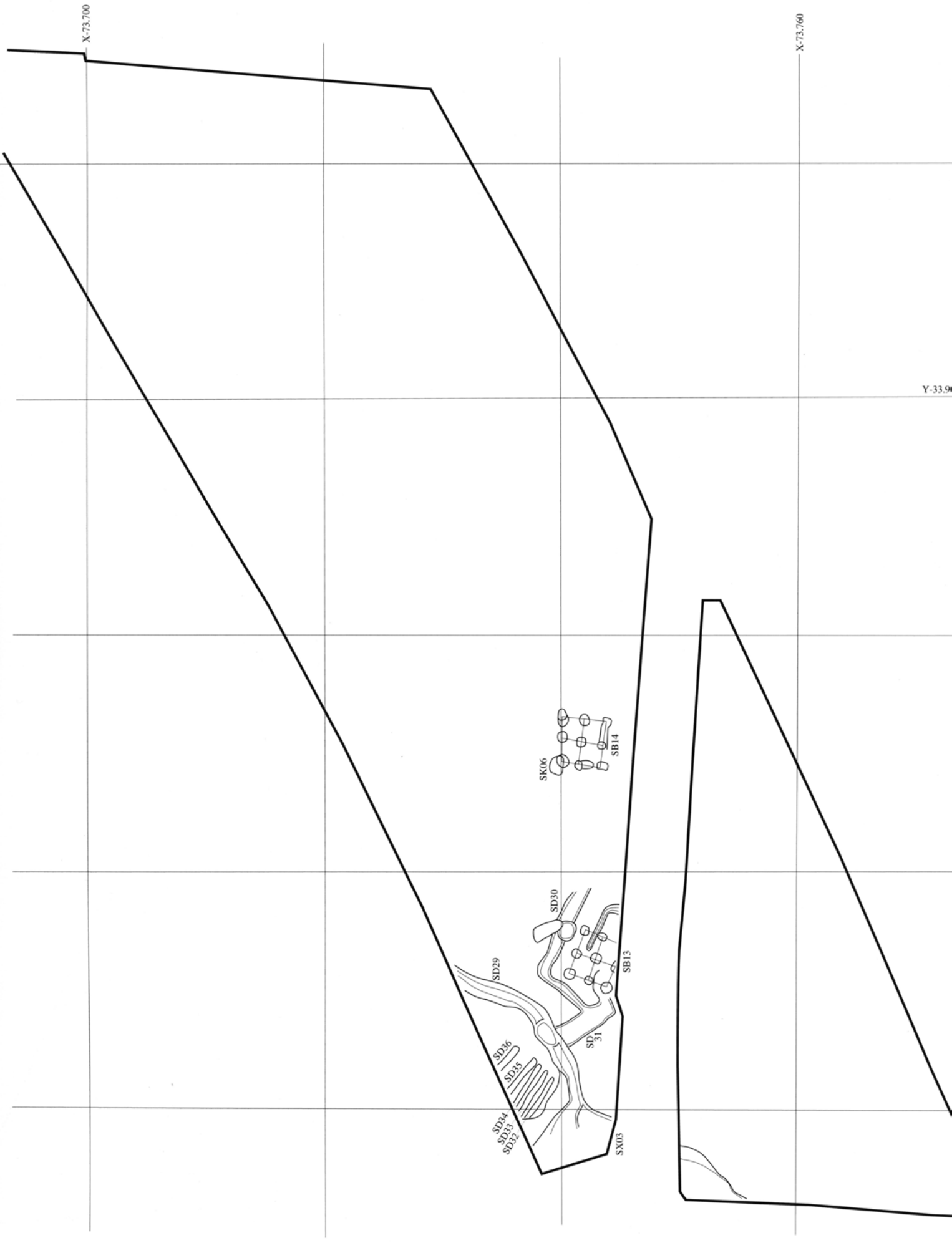
９５Ｂ区古代Ｉａ期



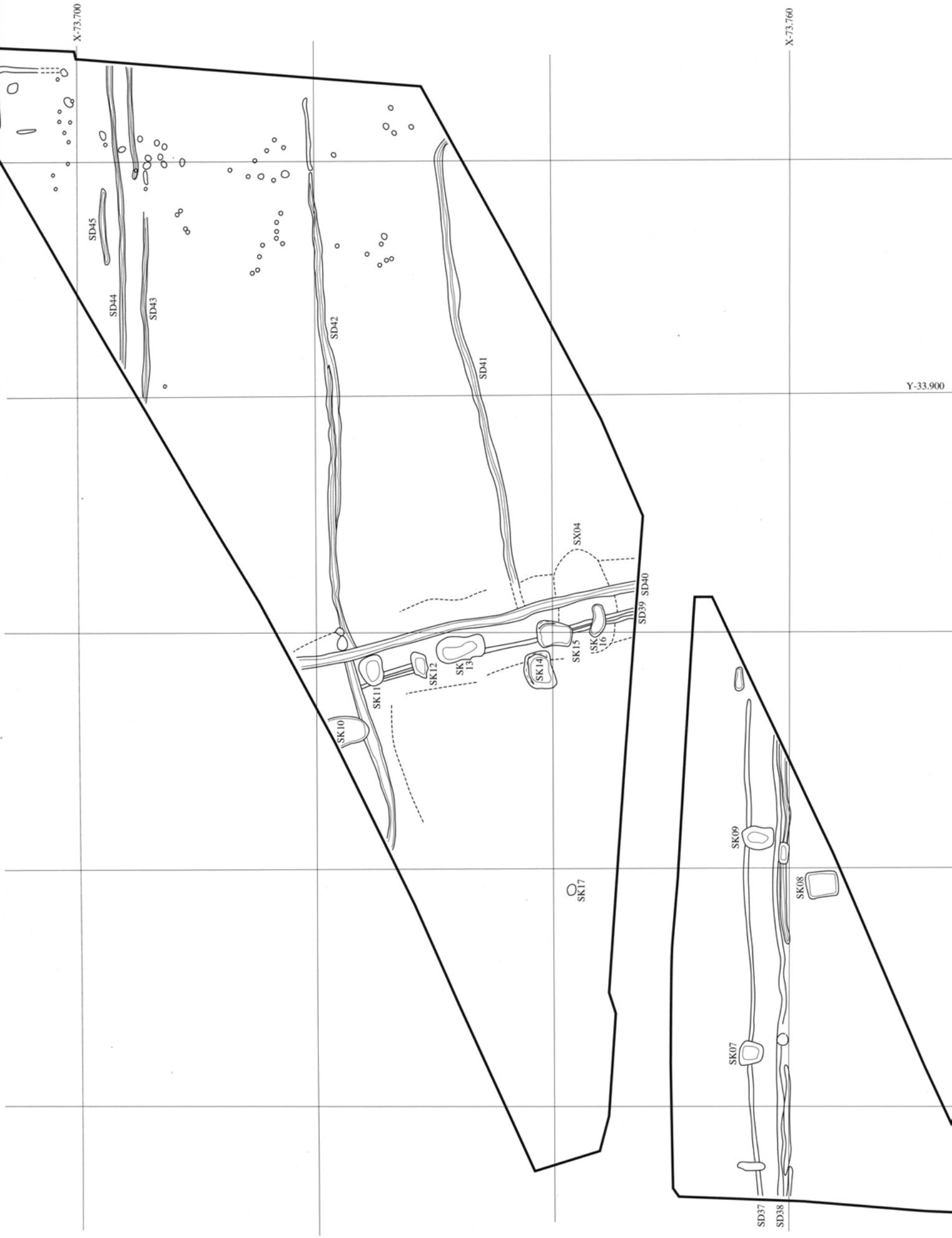

X-73.700
X-73.760
Y-33.900

図版 38

９５Ｂ区古代Ⅲ期

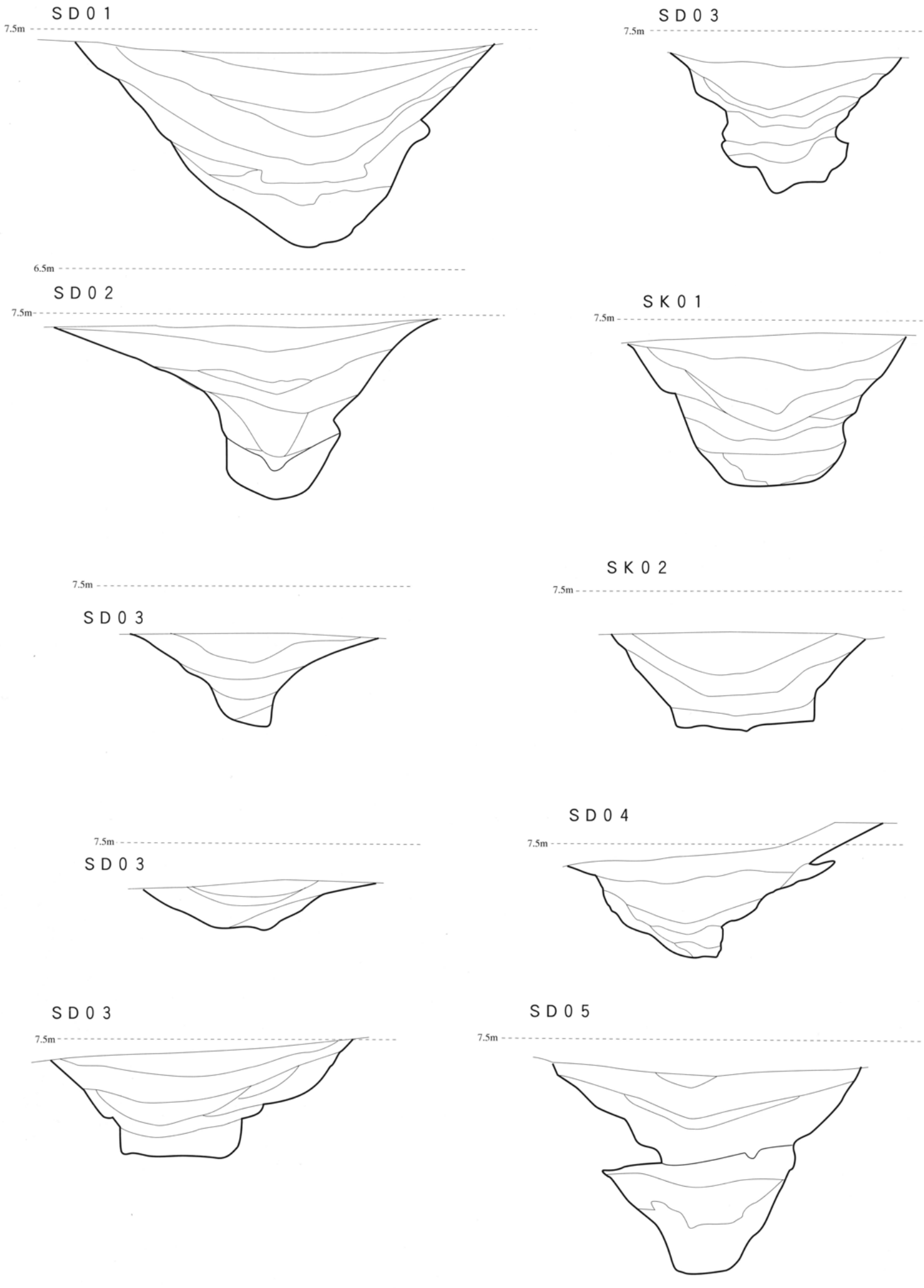


図版 39

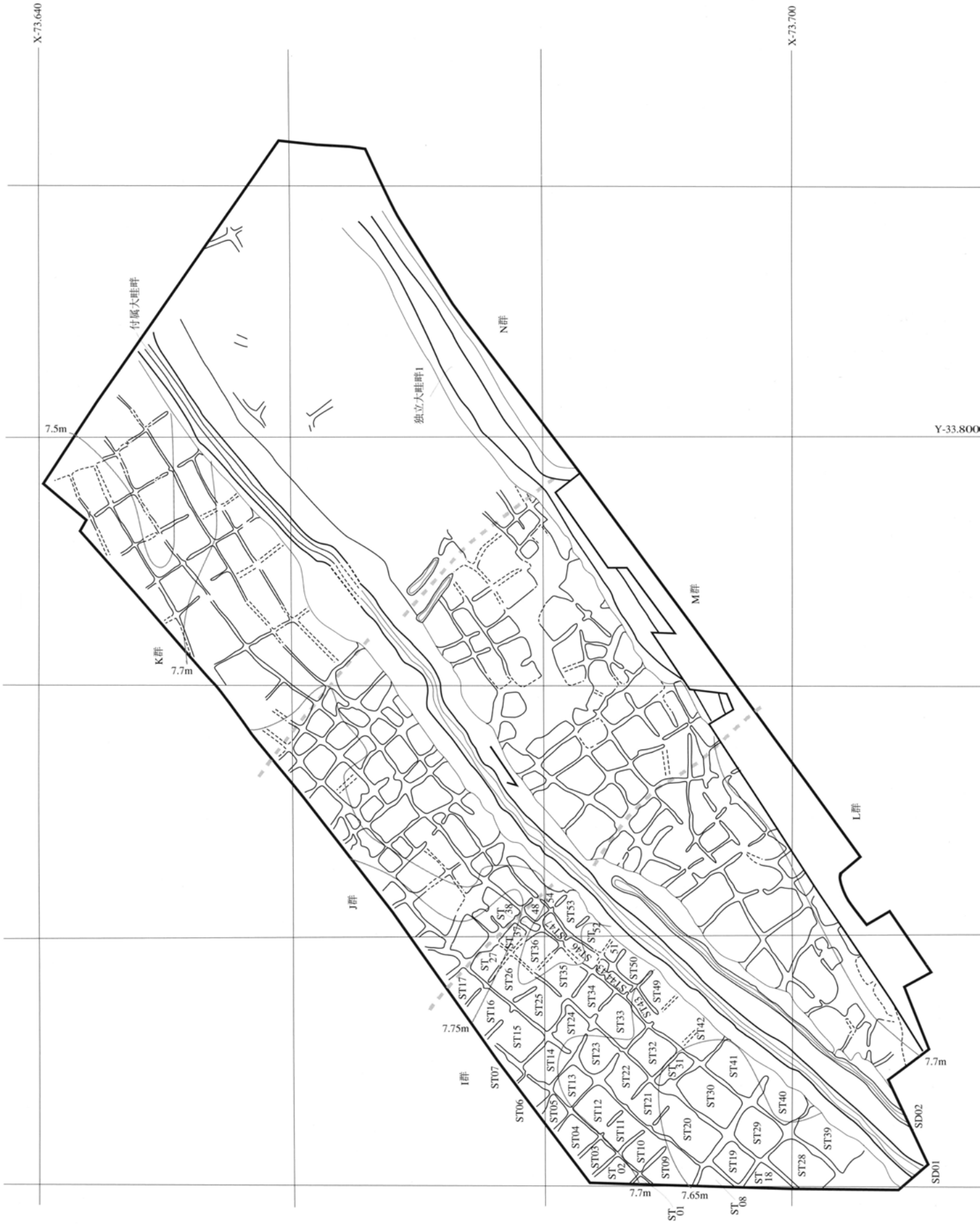

X-73.700
X-73.760
Y-33.900
SD45
SD44
SD43
SD42
SD41
SX04
SD40
SD39
SK10
SK11
SK12
SK 13
SK14
SK15
SK 16
SK17
SK09
SK08
SK07
SD37
SD38

図版 40

９５Ｂ区ＳＸＩセクション（1/20）

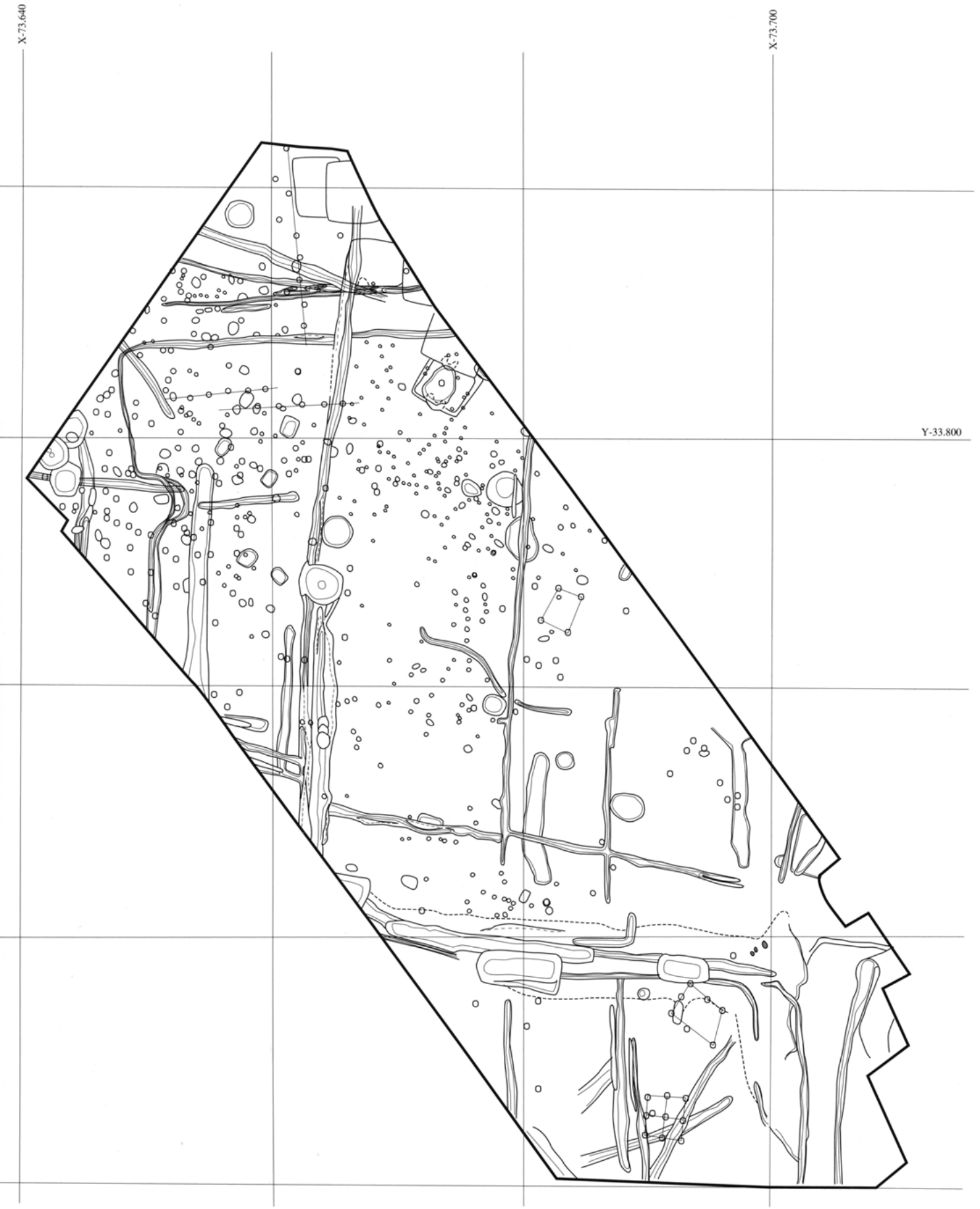


図版41

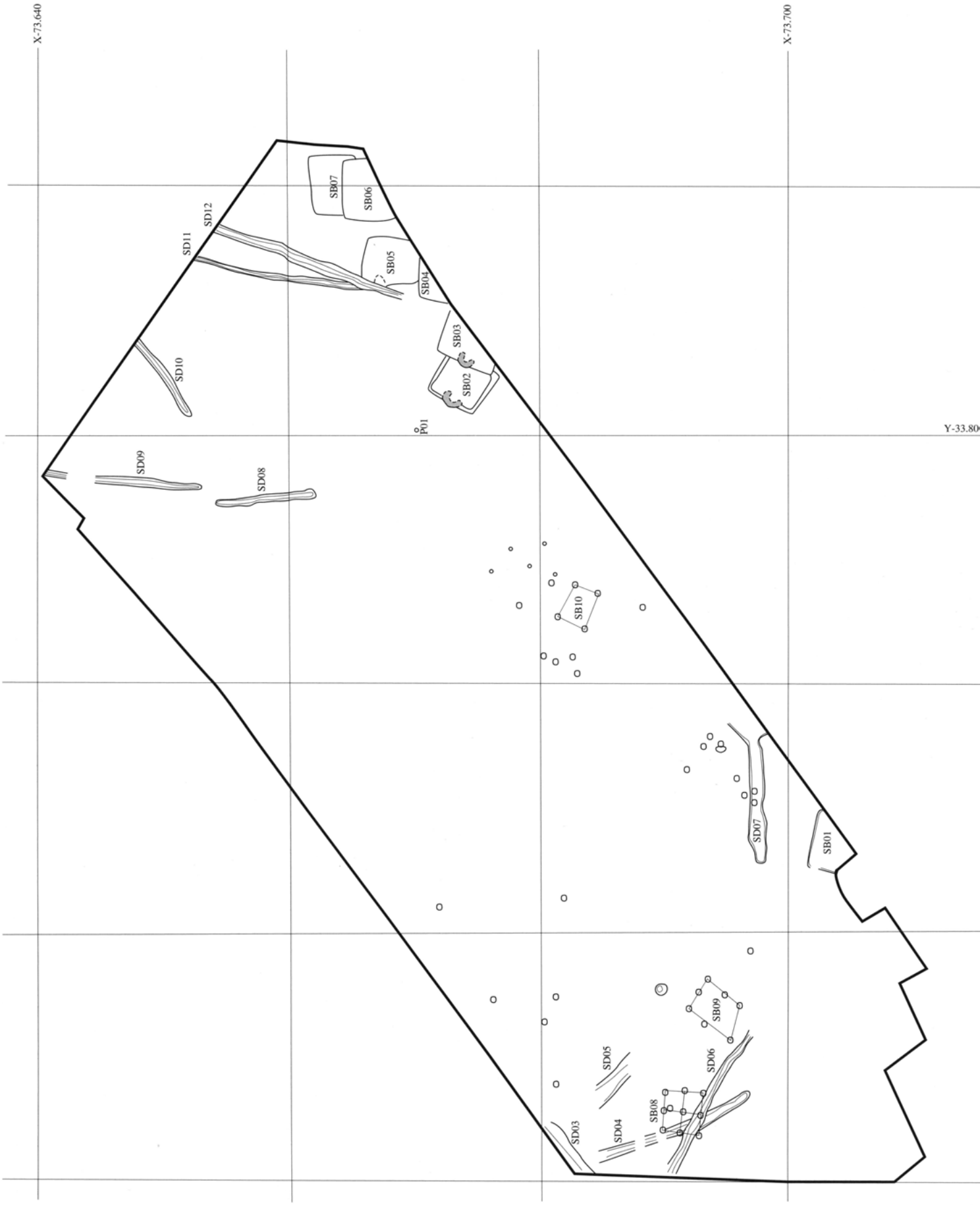

X-73.640
X-73.700
Y-33.800
7.5m
7.7m
7.75m
7.65m
付属大畦畔
独立大畦畔1
N群
M群
L群
K群
J群
I群
ST01
ST02
ST03
ST04
ST05
ST06
ST07
ST08
ST09
ST10
ST11
ST12
ST13
ST14
ST15
ST16
ST17
ST18
ST19
ST20
ST21
ST22
ST23
ST24
ST25
ST26
ST27
ST28
ST29
ST30
ST31
ST32
ST33
ST34
ST35
ST36
ST37
ST38
ST39
ST40
ST41
ST42
ST43
ST44
ST45
ST46
ST47
ST48
ST49
ST50
ST51
ST52
ST53
ST54
SD01
SD02

図版 42

９５Ｃ区上面



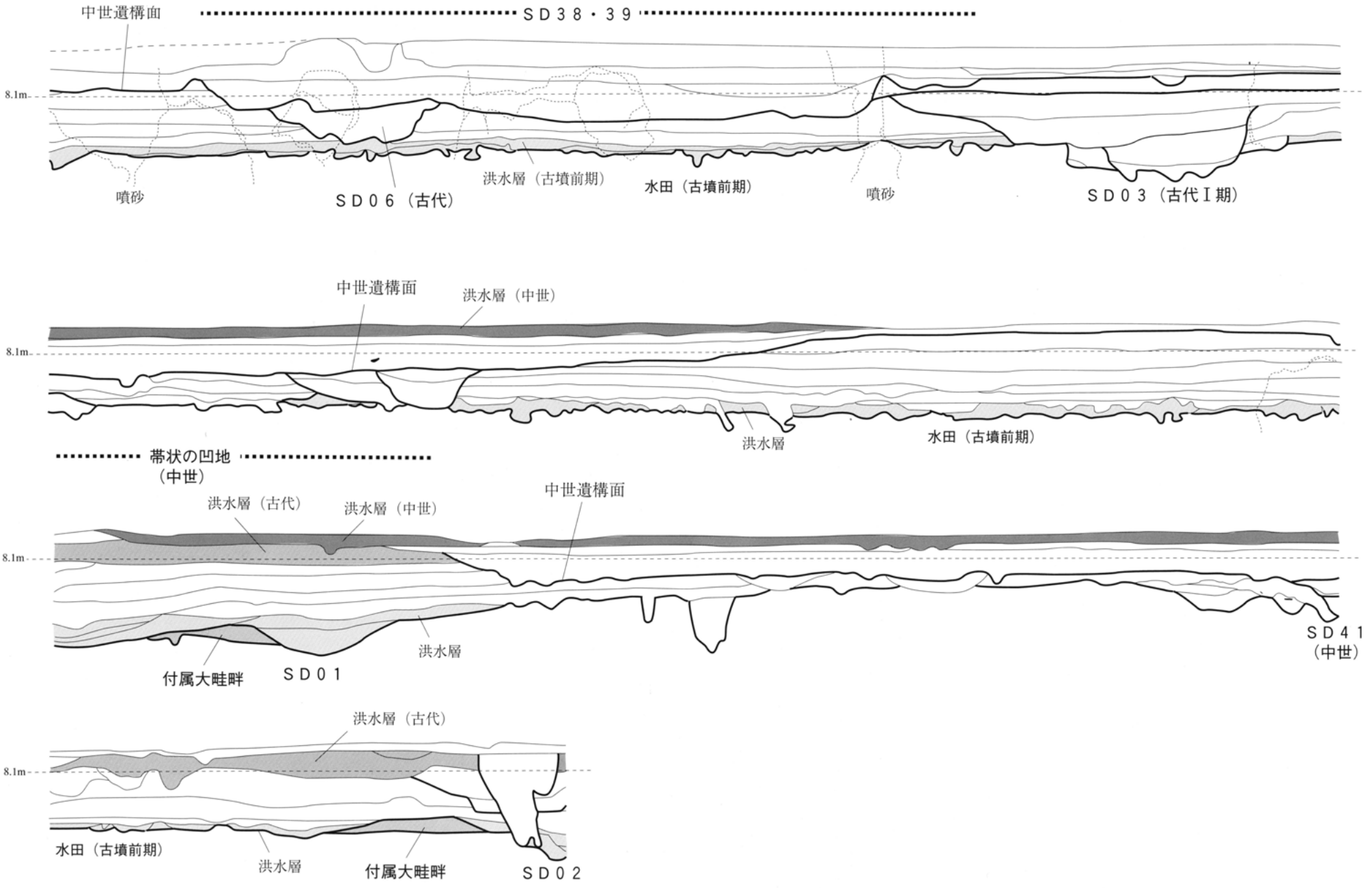
図版 43


X-73.640
X-73.700
Y-33.80
SB07
SB06
SD12
SD11
SB05
SB04
SB03
SB02
SD10
P01
SD09
SD08
SB10
SD07
SB01
SB09
SD05
SD06
SB08
SD03
SD04

図版 44

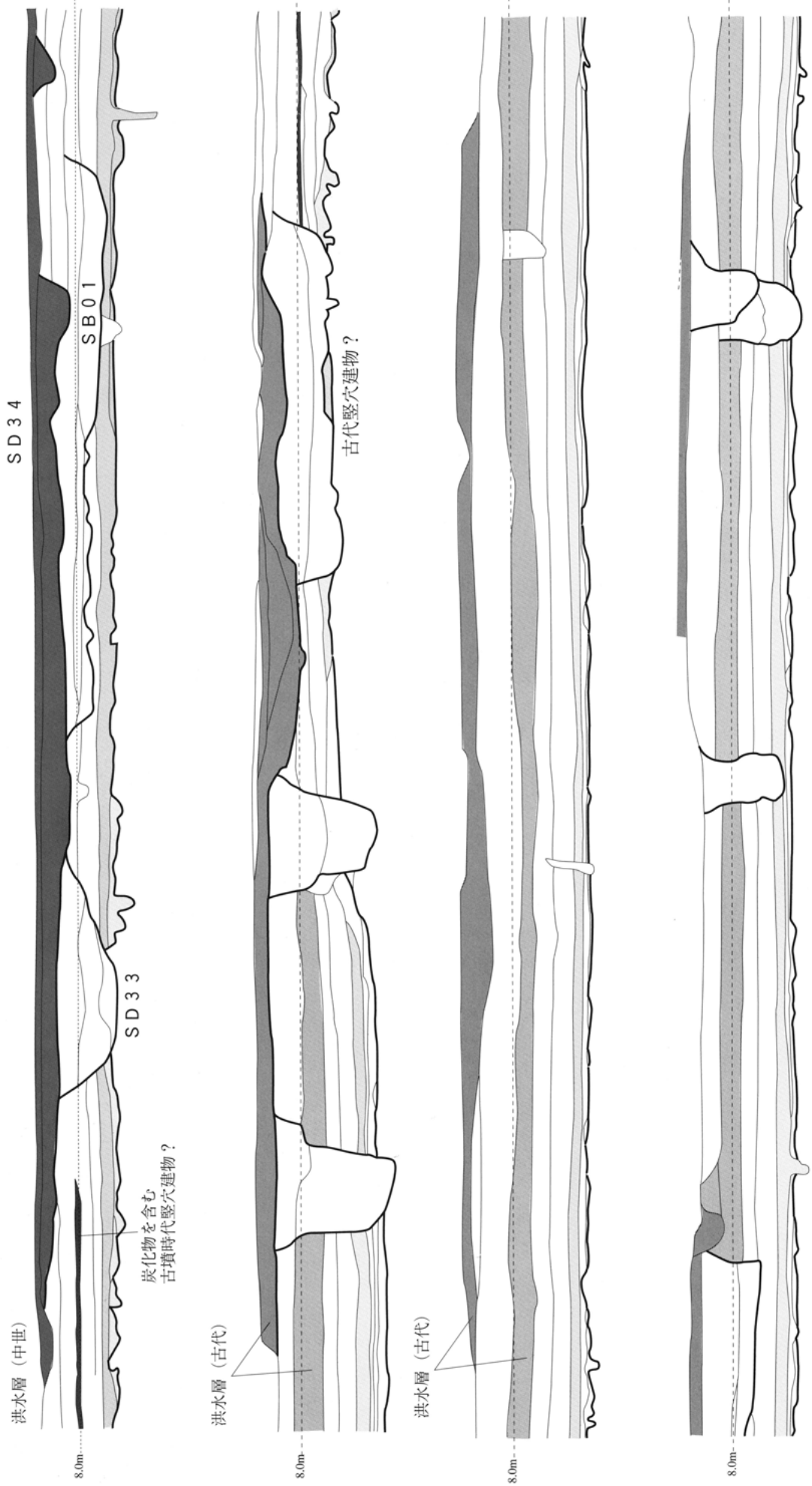
９５Ｃ区中世

X-73.640
X-73.700
Y-33.800
SE01
SE02
SE03
SK 01
SD 16A
SD 16
SD 15
SK02
SX01
SD22
SE05
SE04
SE06
SD13
SD14
SD17
SD18
SD25
SD26
SE07
SD19
SD20
SD21
SD23
SD24
SD27
SD29
SD28
SD34
SD35
SK03
SD 30
SX02
SD33
SX03
SX04
SX05
SD 36
SD31
SK 04
SD 32
SK 05
SD 38
SD 44
SD37
SD45
SD39
SD40
SD41
SD42
SD43
帯状の凹地
帯状の凹地


中世遺構面
SD38・39
8.1m
噴砂
SD06（古代）
洪水層（古墳前期）
水田（古墳前期）
噴砂
SD03（古代Ⅰ期）
中世遺構面
洪水層（中世）
8.1m
洪水層
水田（古墳前期）
帯状の凹地
（中世）
洪水層（古代）
洪水層（中世）
中世遺構面
8.1m
洪水層
SD41
（中世）
付属大畦畔
SD01
洪水層（古代）
8.1m
水田（古墳前期）
洪水層
付属大畦畔
SD02

図版 46

９５Ｃ区東壁セクション



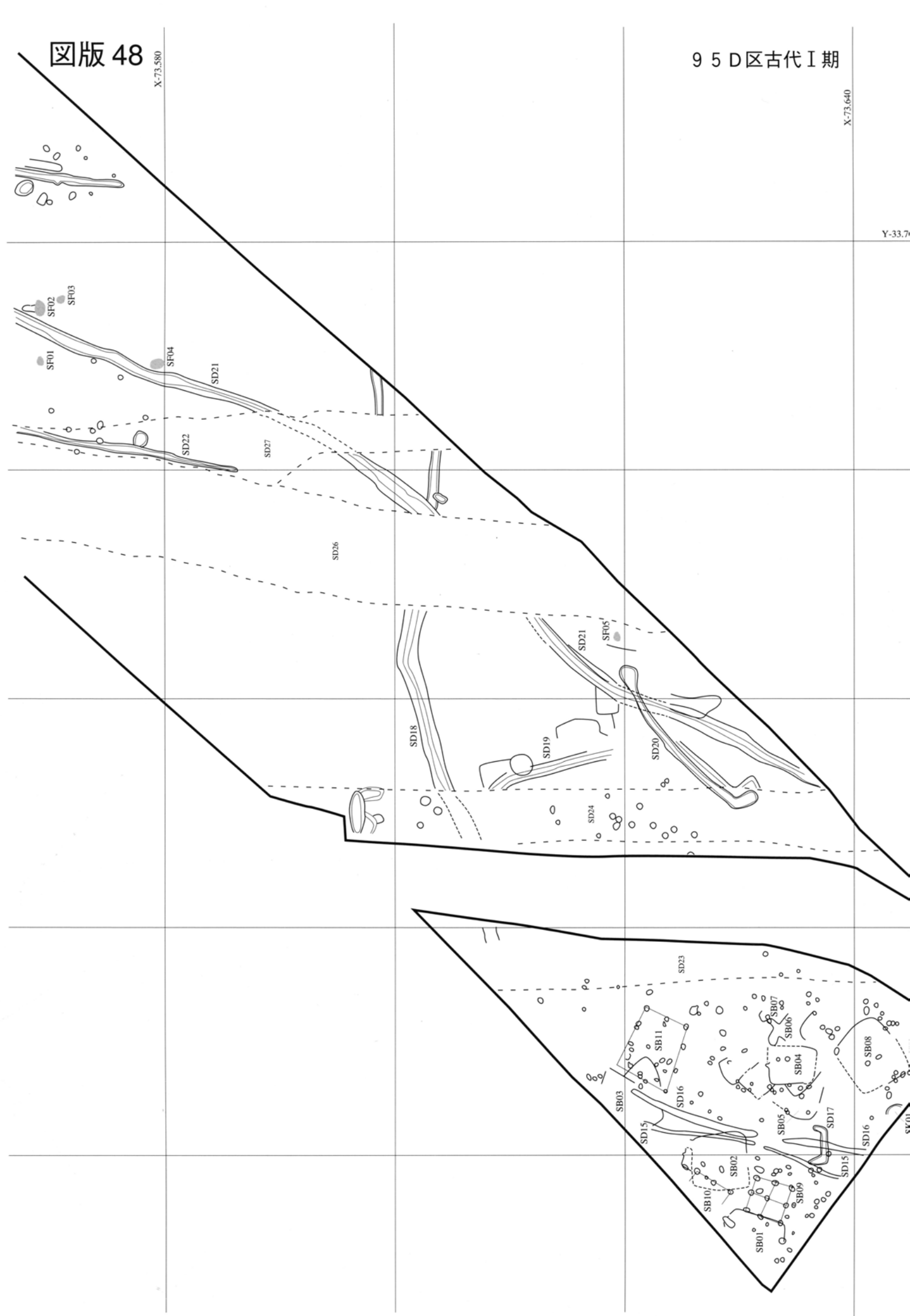
図版47

95D区下面

X-73.580
X-73.640
Y-33.700
Q群
R群
P群
O群
NR01
SD01
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
SD07
SD08
SD09
SD10
SD13
SD14
SD23
SD24
SD26
ST01
ST02
ST03
ST04
ST05
ST06
ST07
ST08
ST09
ST10
ST11
ST12
ST13
ST14
ST15
ST16
ST17
ST18
ST19
ST20
ST21
ST22
ST23
ST24
ST25
ST26
ST27

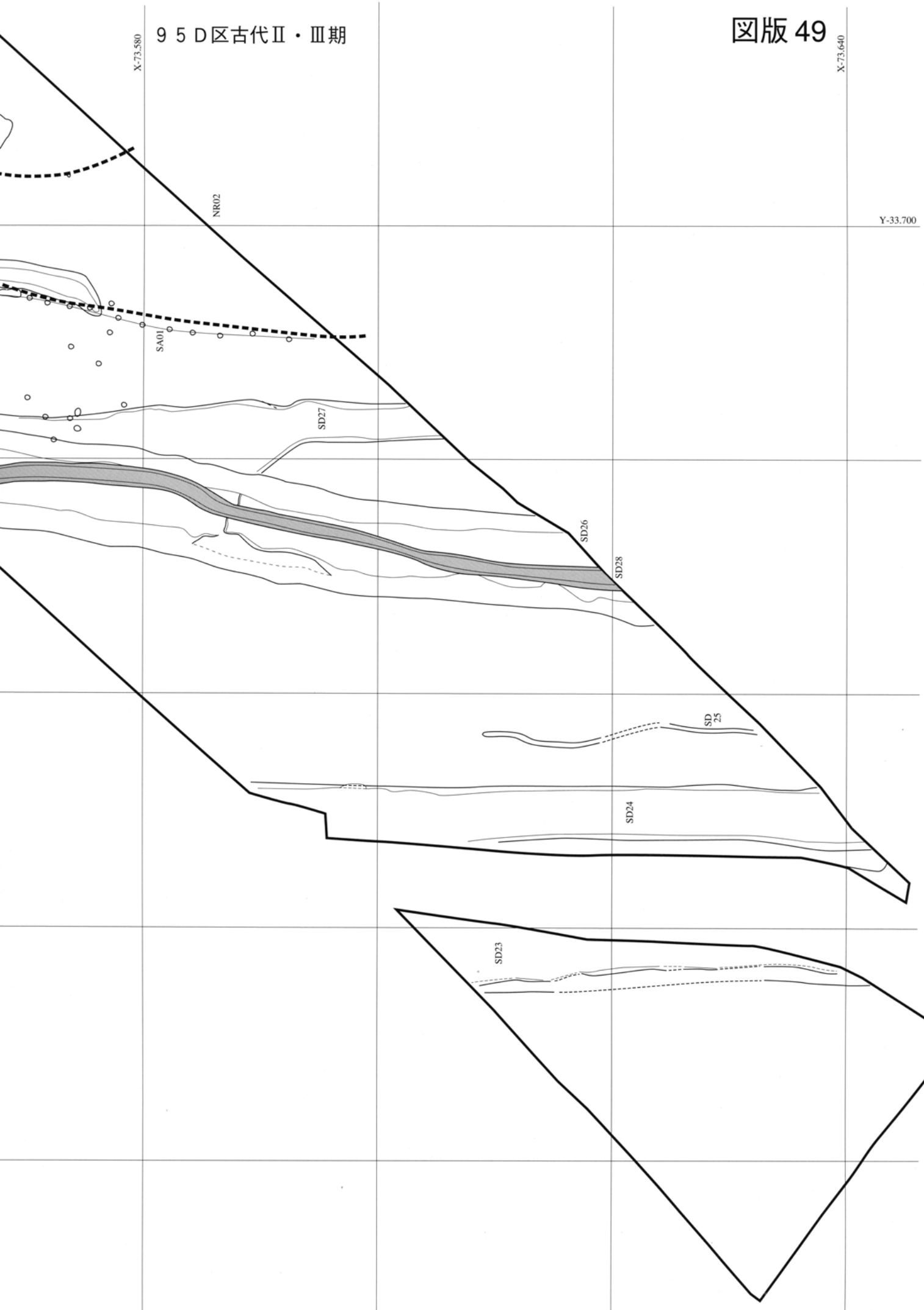
図版 48

９５Ｄ区古代Ⅰ期



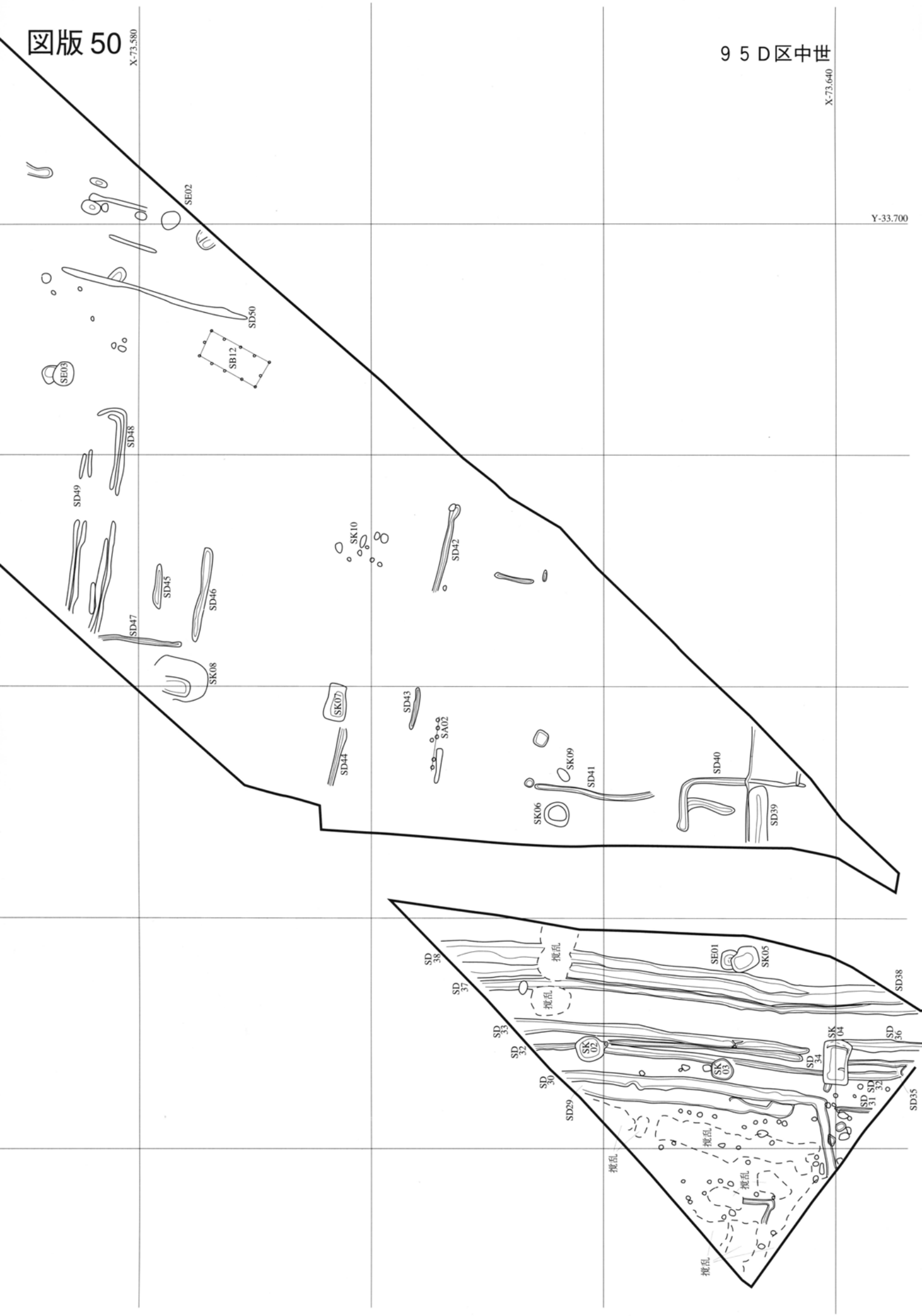
図版 49

９５Ｄ区古代Ⅱ・Ⅲ期

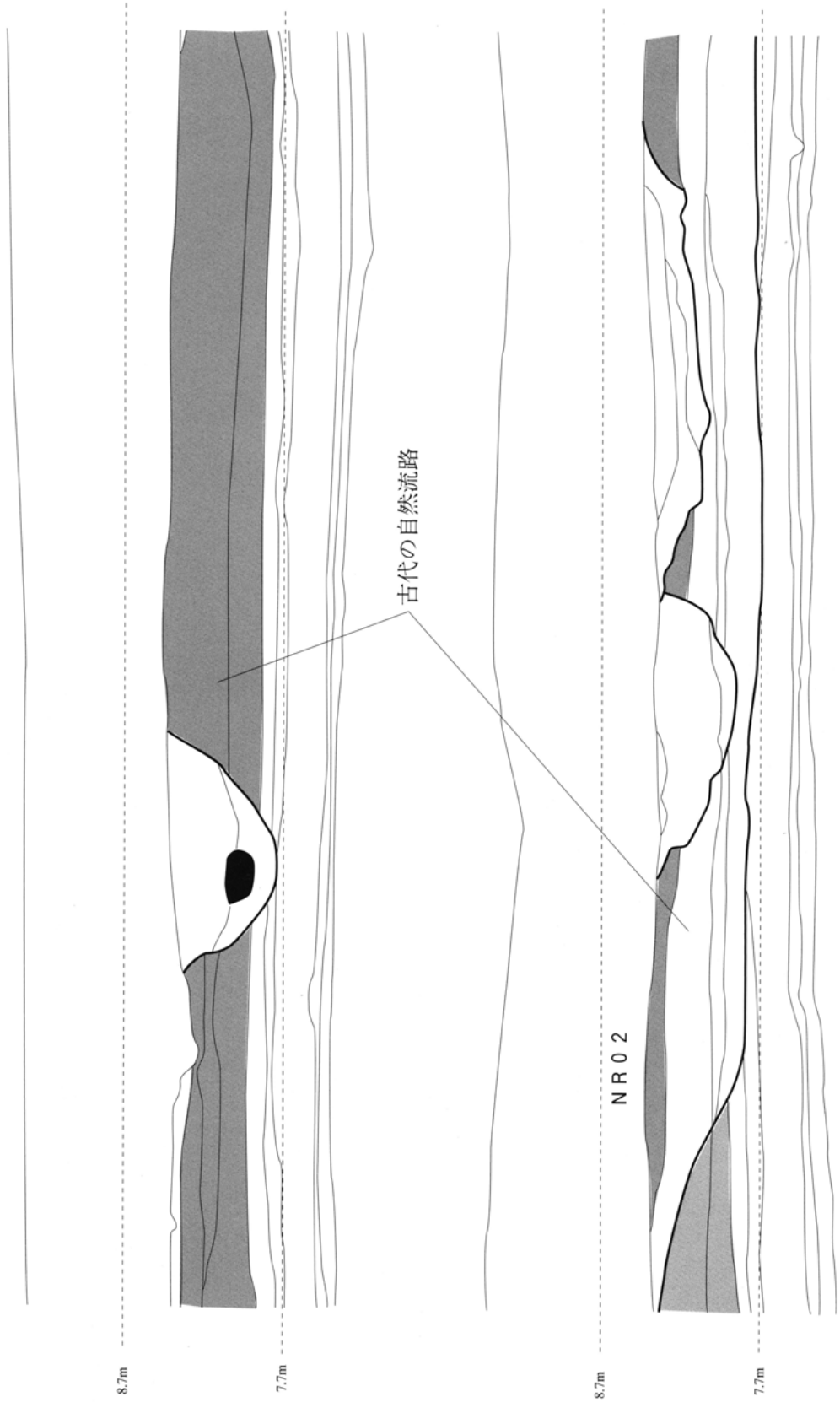


図版 50

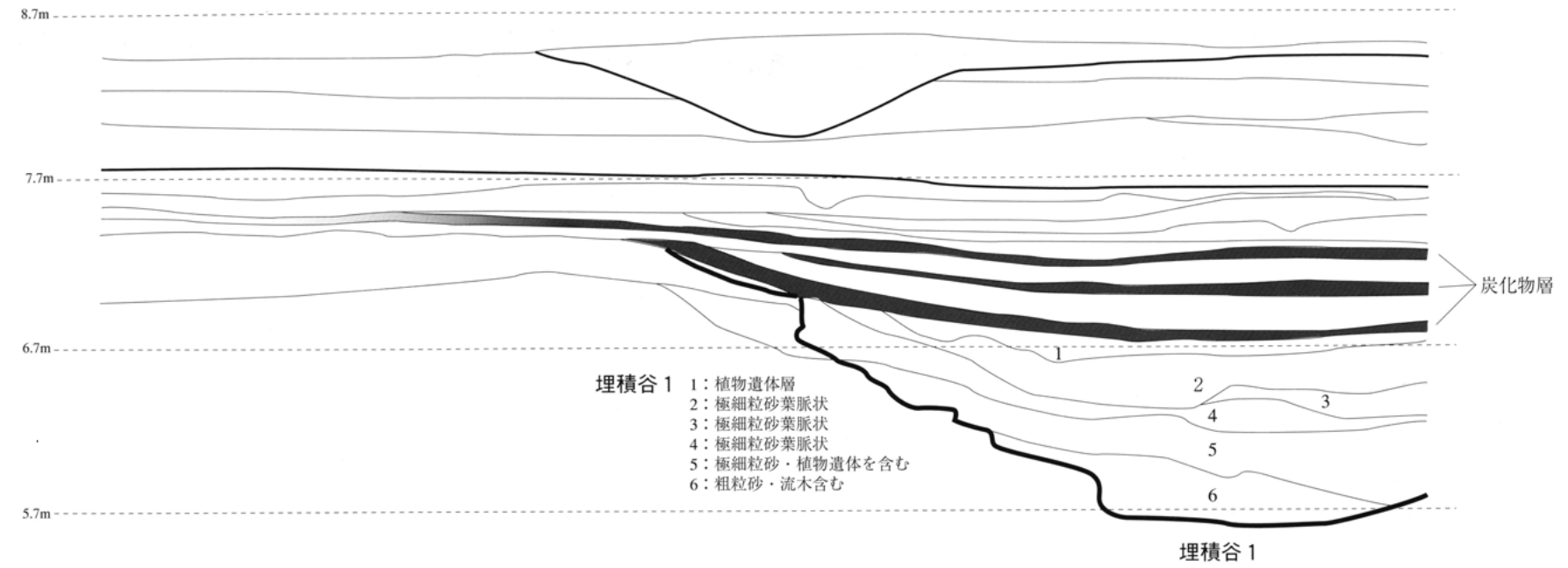
９５Ｄ区中世

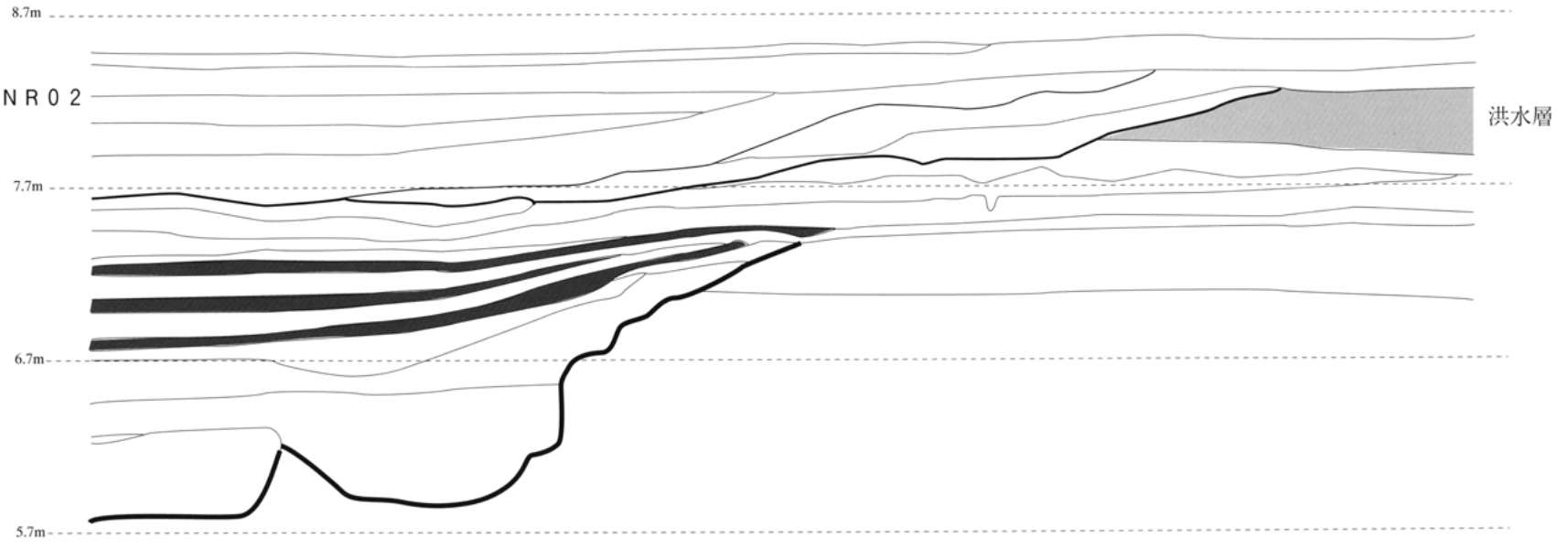

X-73.580
X-73.640
Y-33.700
SE02
SD50
SB12
SE03
SD48
SD49
SK10
SD42
SD45
SD46
SD47
SK08
SK07
SD43
SA02
SD44
SK09
SD41
SD40
SK06
SD39
SD 38
SD 37
SD 33
SD 32
SD 30
SD29
SE01
SK05
SD38
SK 02
SK 03
SK 04
SD 34
SD 36
SD 31
SD 32
SD35
撹乱

図版51



図版 52



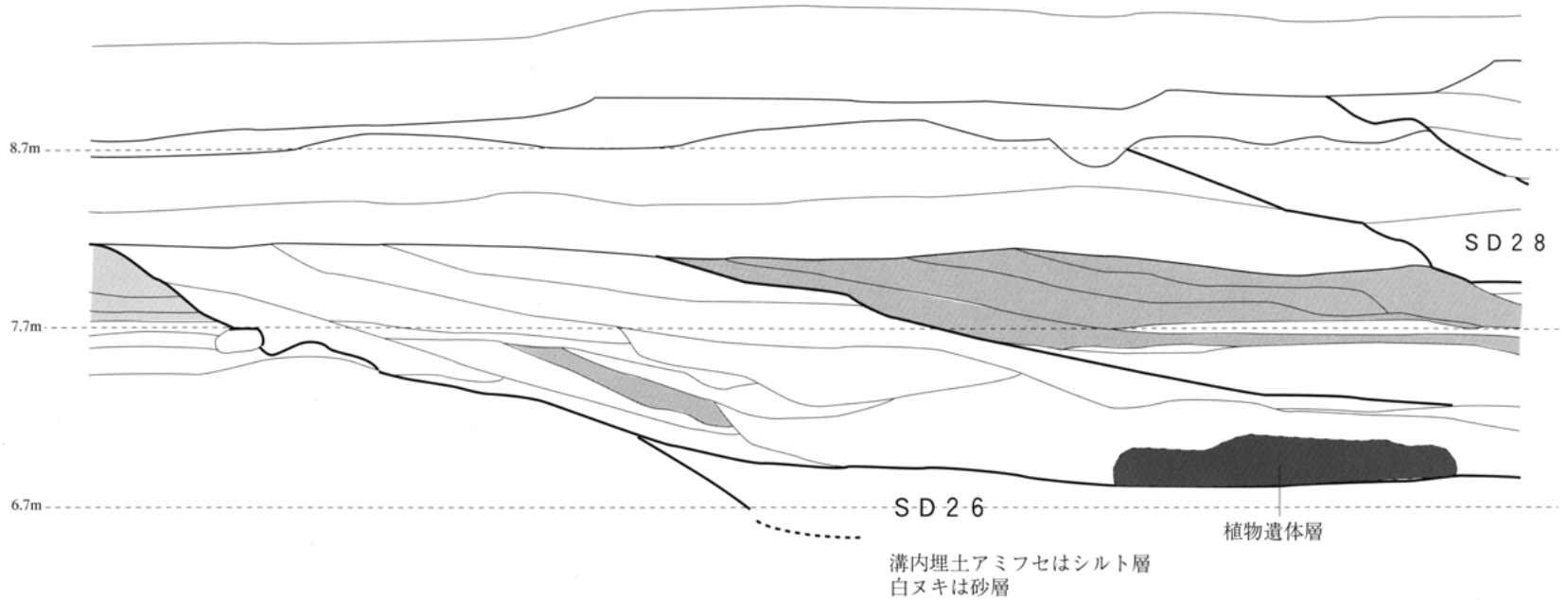


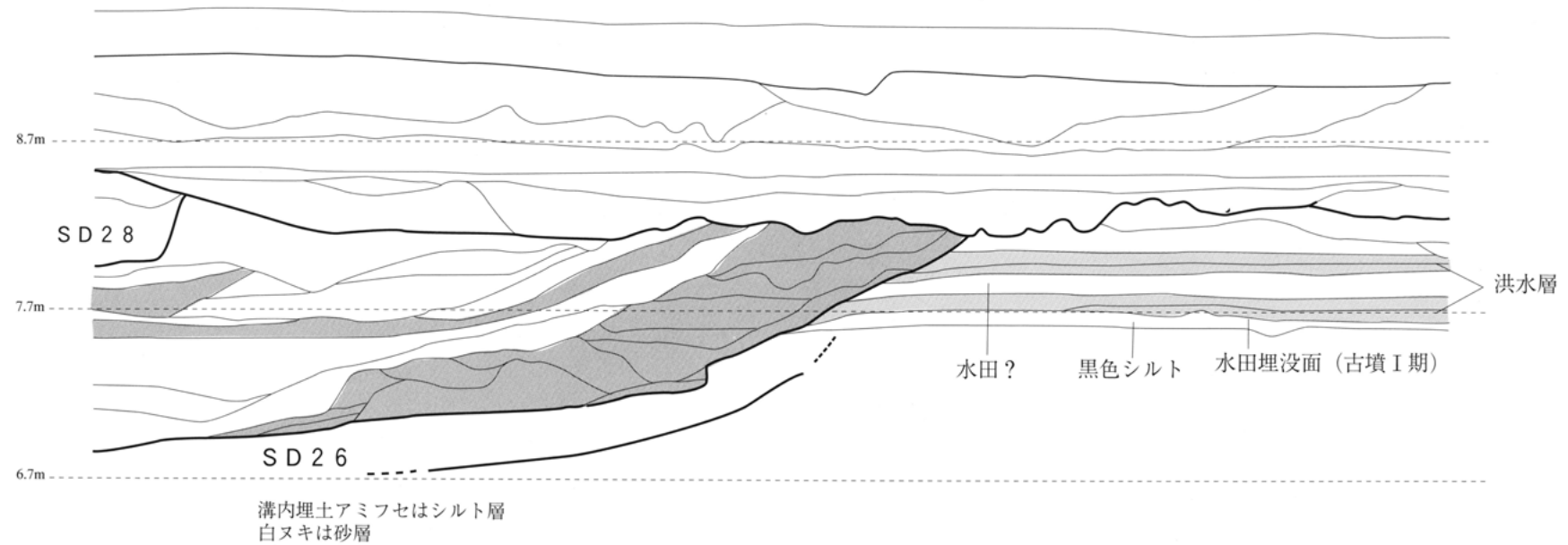
95D区東壁セクション

図版 53


洪水層
付属大畦畔
黒色シルト
SD14
自然流路（古墳中期）
水田？
黒色シルト
水田面？
8.7m
7.7m
8.7m
7.7m
8.7m
7.7m

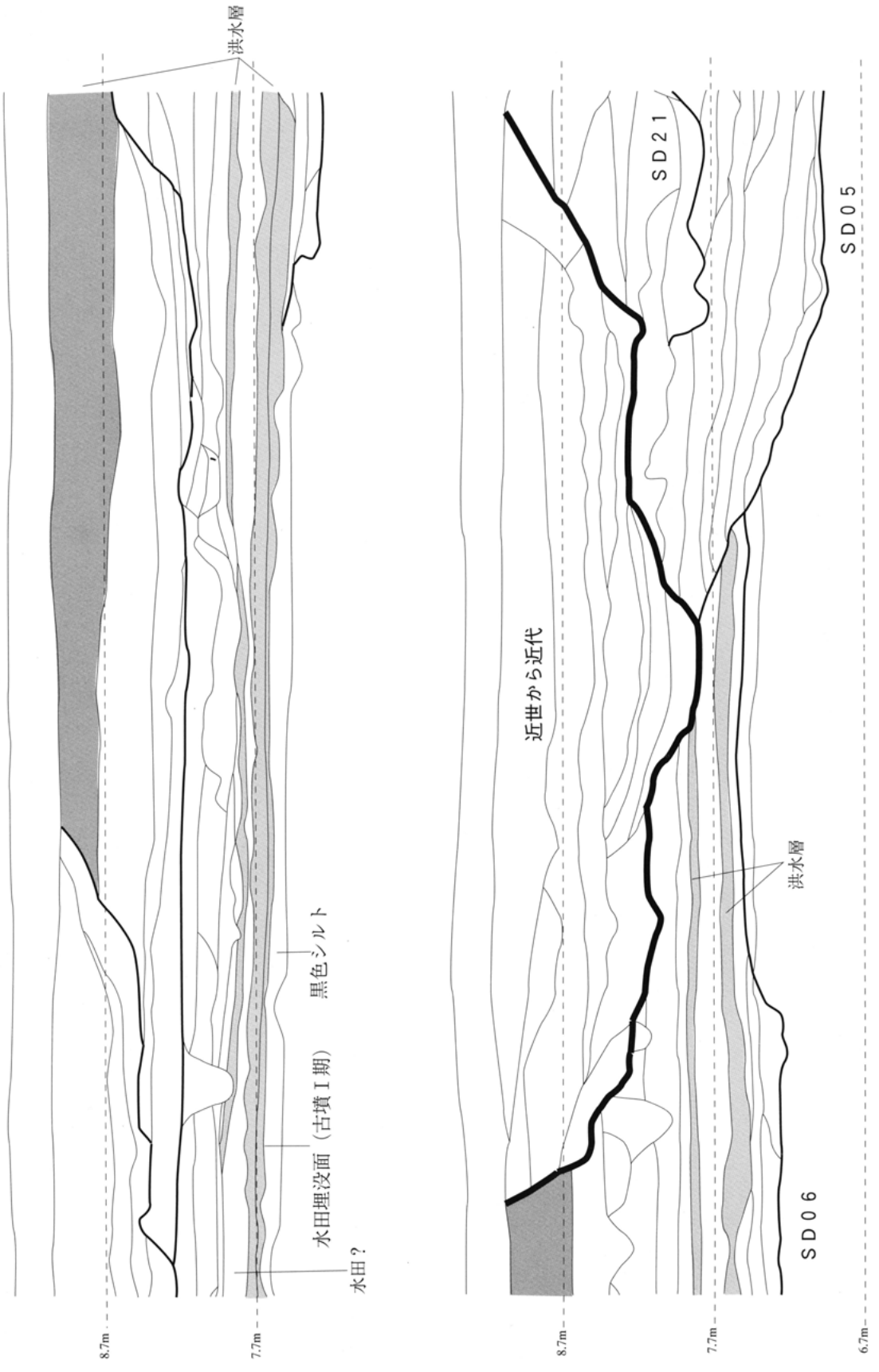
図版54





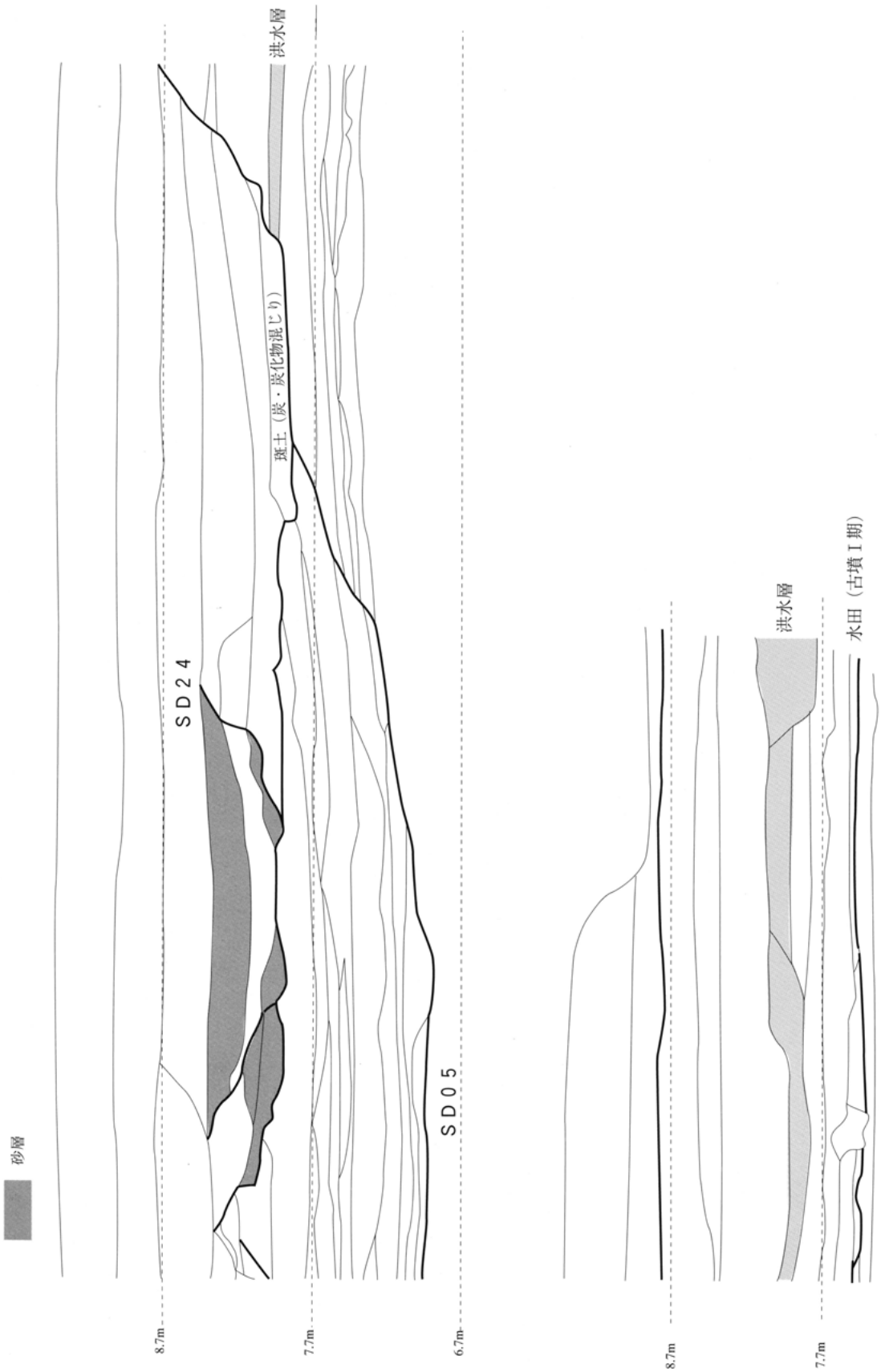
95D区東壁セクション

図版 55


洪水層
黒色シルト
水田埋没面（古墳Ⅰ期）
水田？
8.7m
7.7m
近世から近代
SD21
SD05
SD06
洪水層
8.7m
7.7m
6.7m

図版 56

９５Ｄ区東壁セクション



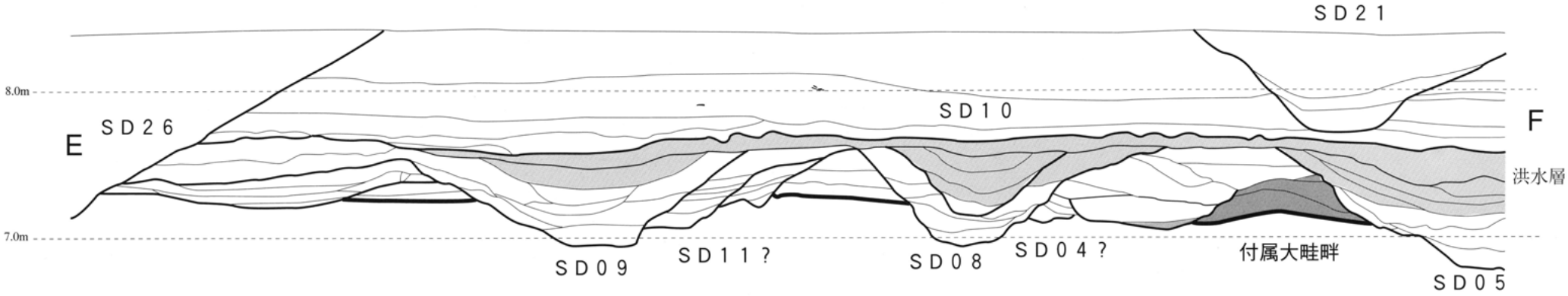
９５Ｄ区東西セクション

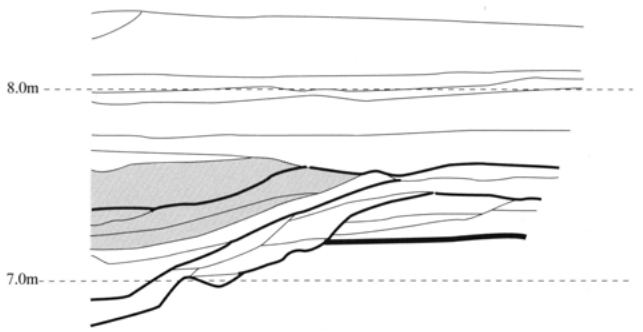
図版 58

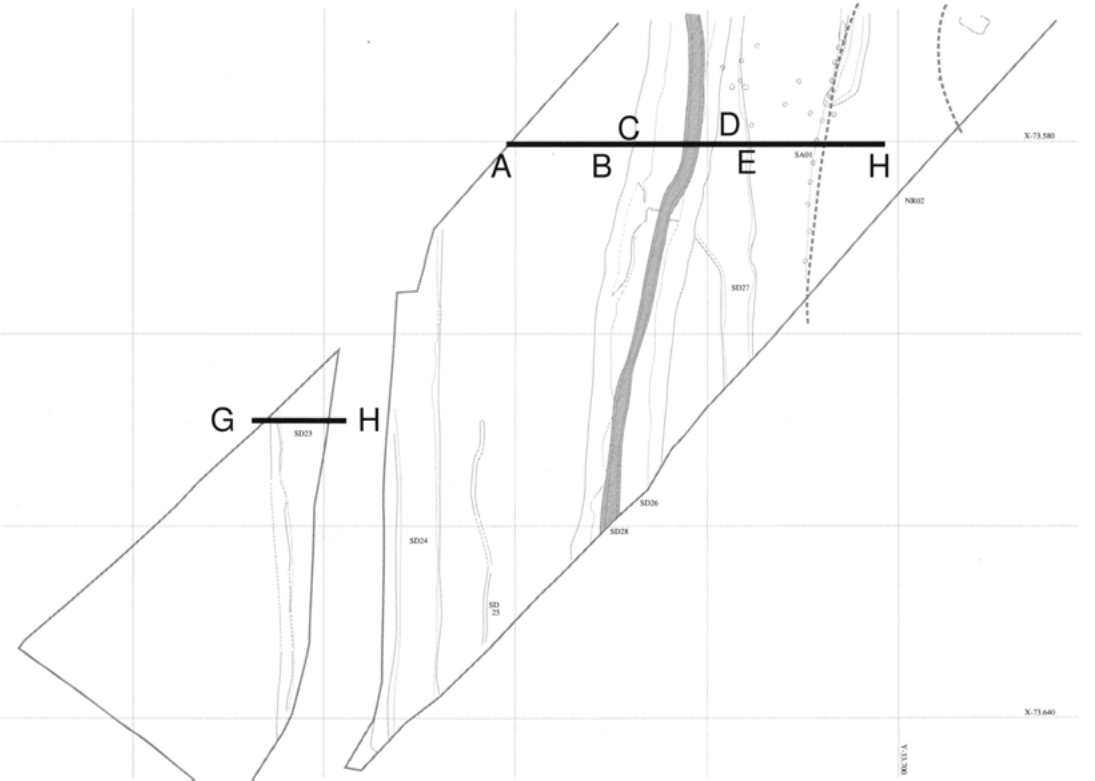
９５Ｄ区古代Ⅱ期溝セクション

図版59

95D区東西セクション







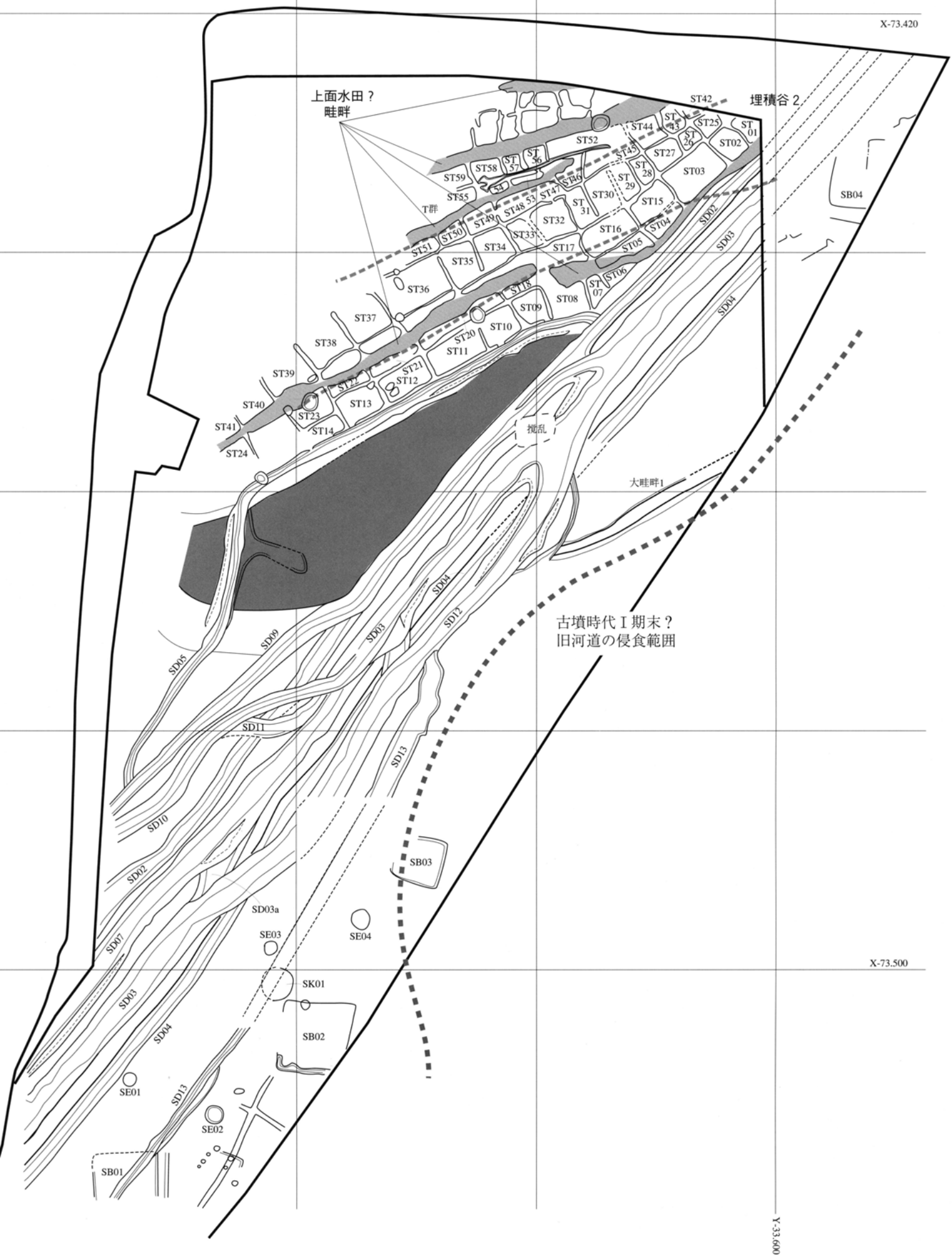
図版 60

９５Ｅ区南部下面



９５Ｅ区北部下面

図版 61



図版 62

９５Ｅ区南部上面



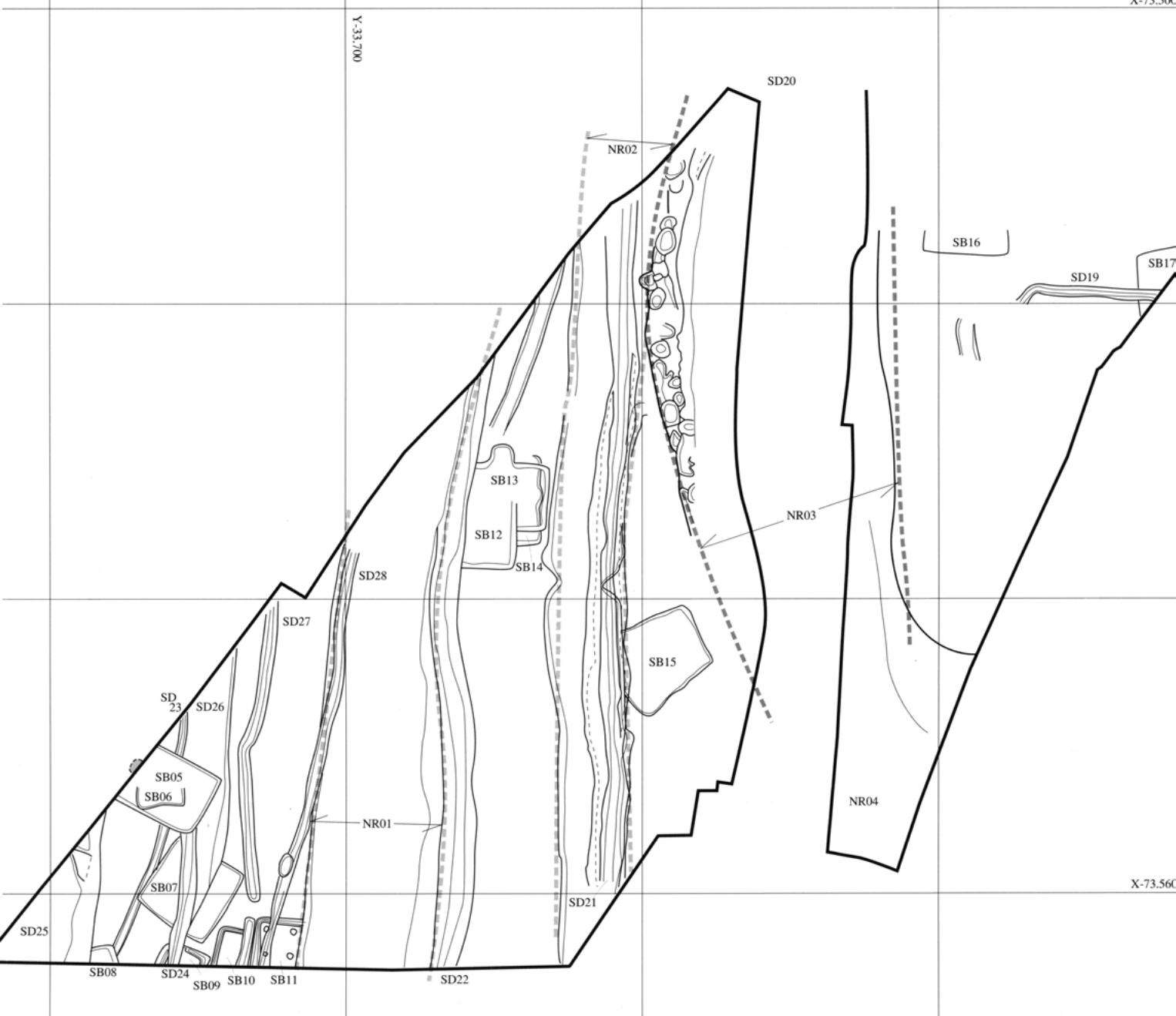
図版 63

９５Ｅ区北部下面



図版 64

９５Ｅ区南部古代



９５Ｅ区北部古代Ⅰ・Ⅱ期

図版 65



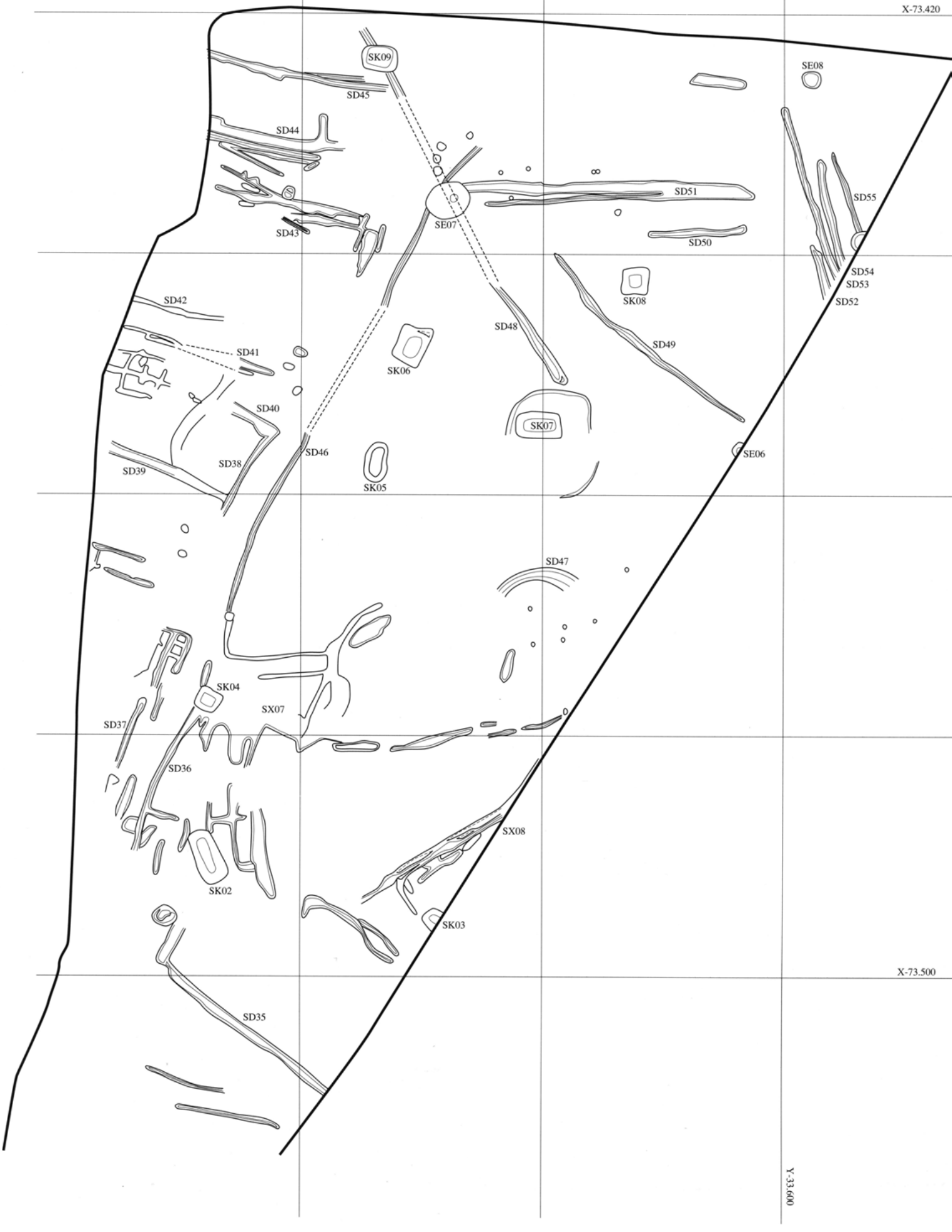
図版 66

９５Ｅ区南部中世

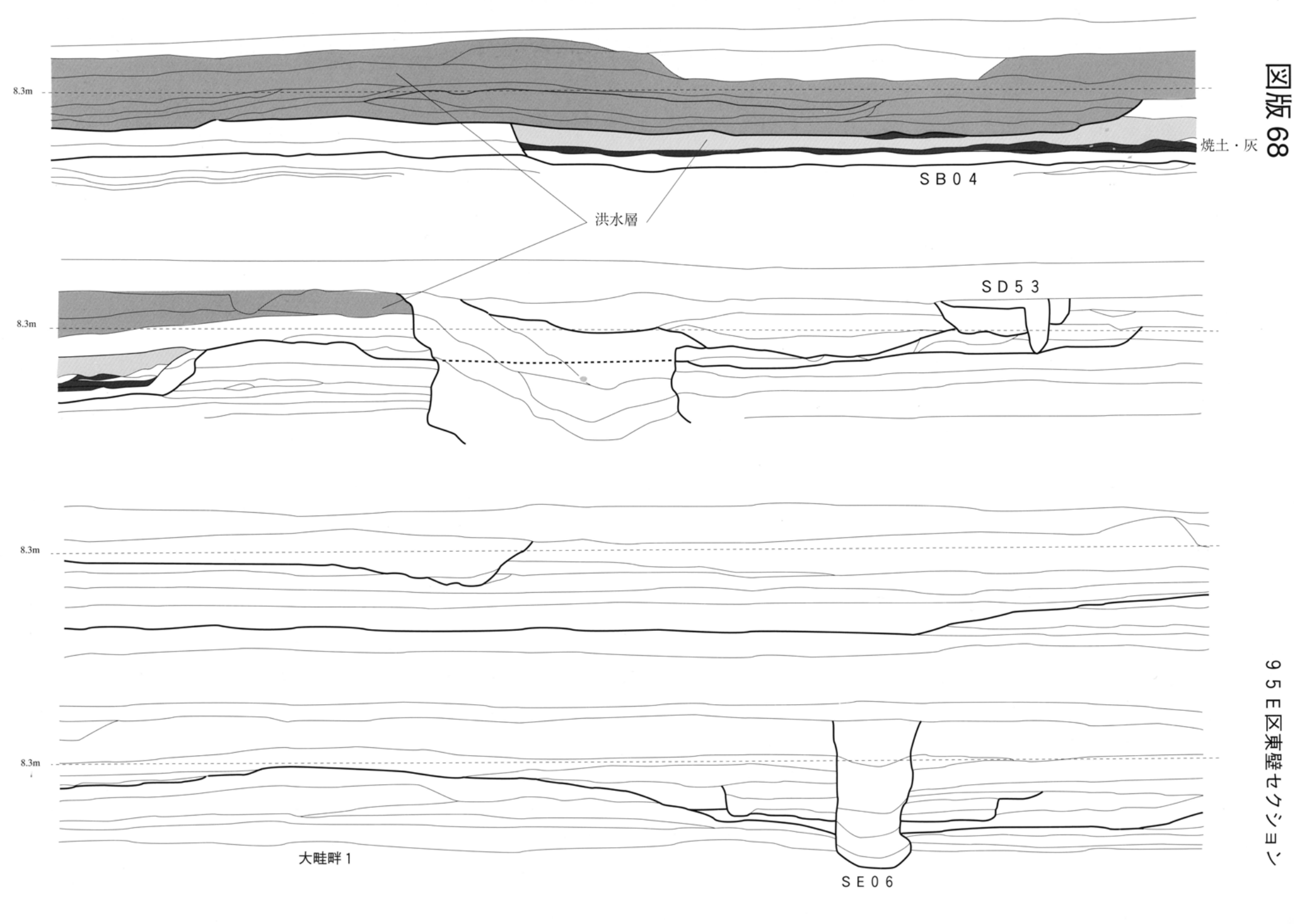


９５Ｅ区北部中世

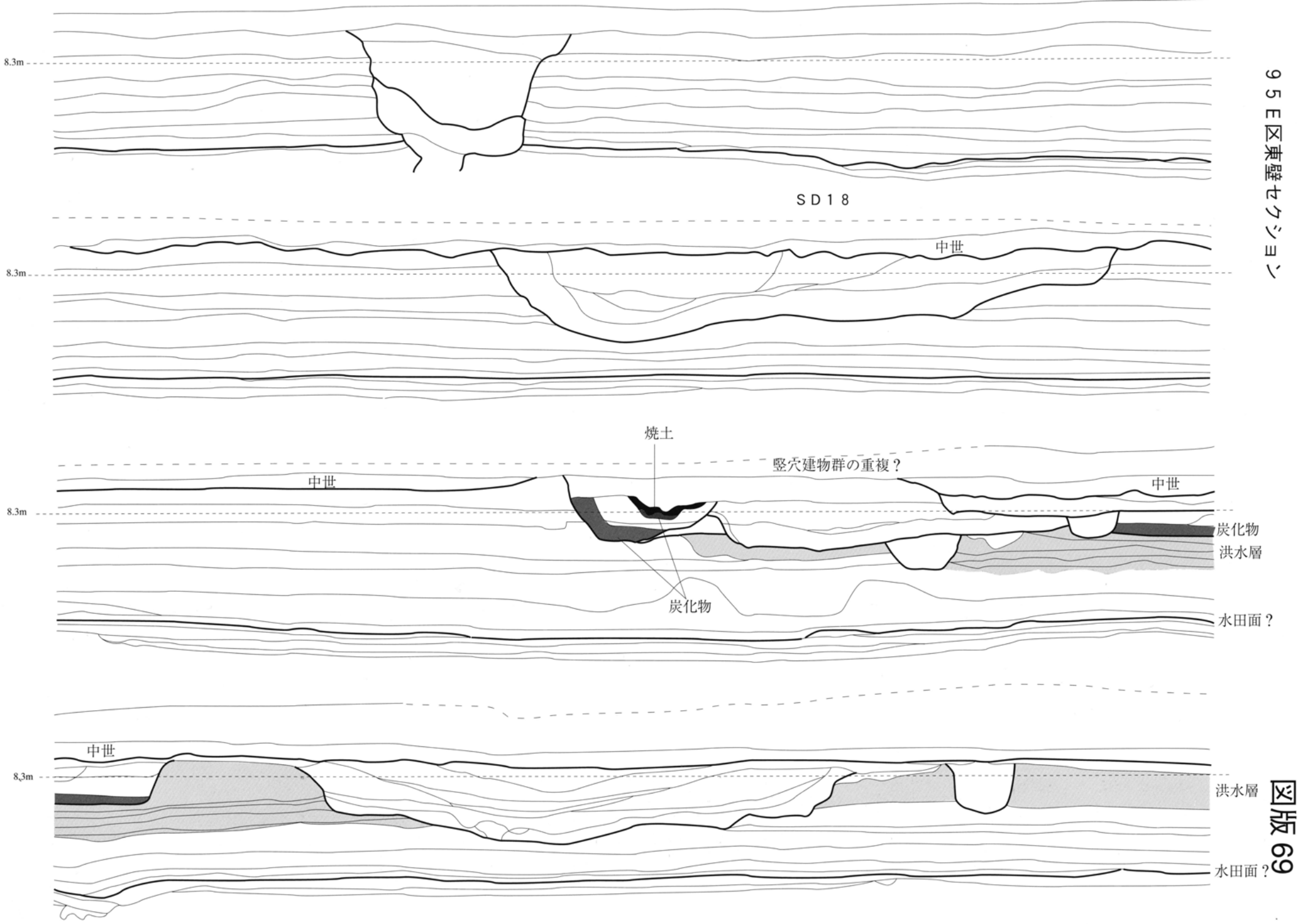
図版 67



図版68



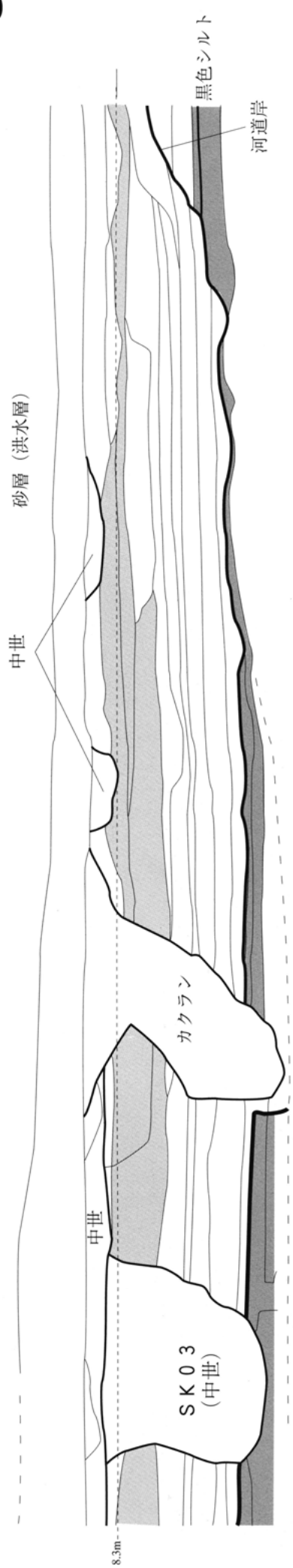
95E区東壁セクション

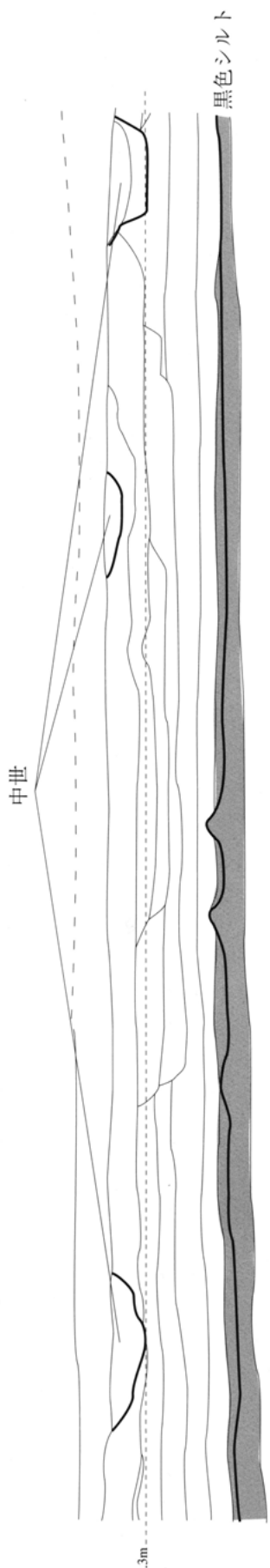

95E区東壁セクション
8.3m
SD18
中世
8.3m
焼土
竪穴建物群の重複？
中世
中世
8.3m
炭化物
洪水層
炭化物
水田面？
中世
8,3m
洪水層
水田面？

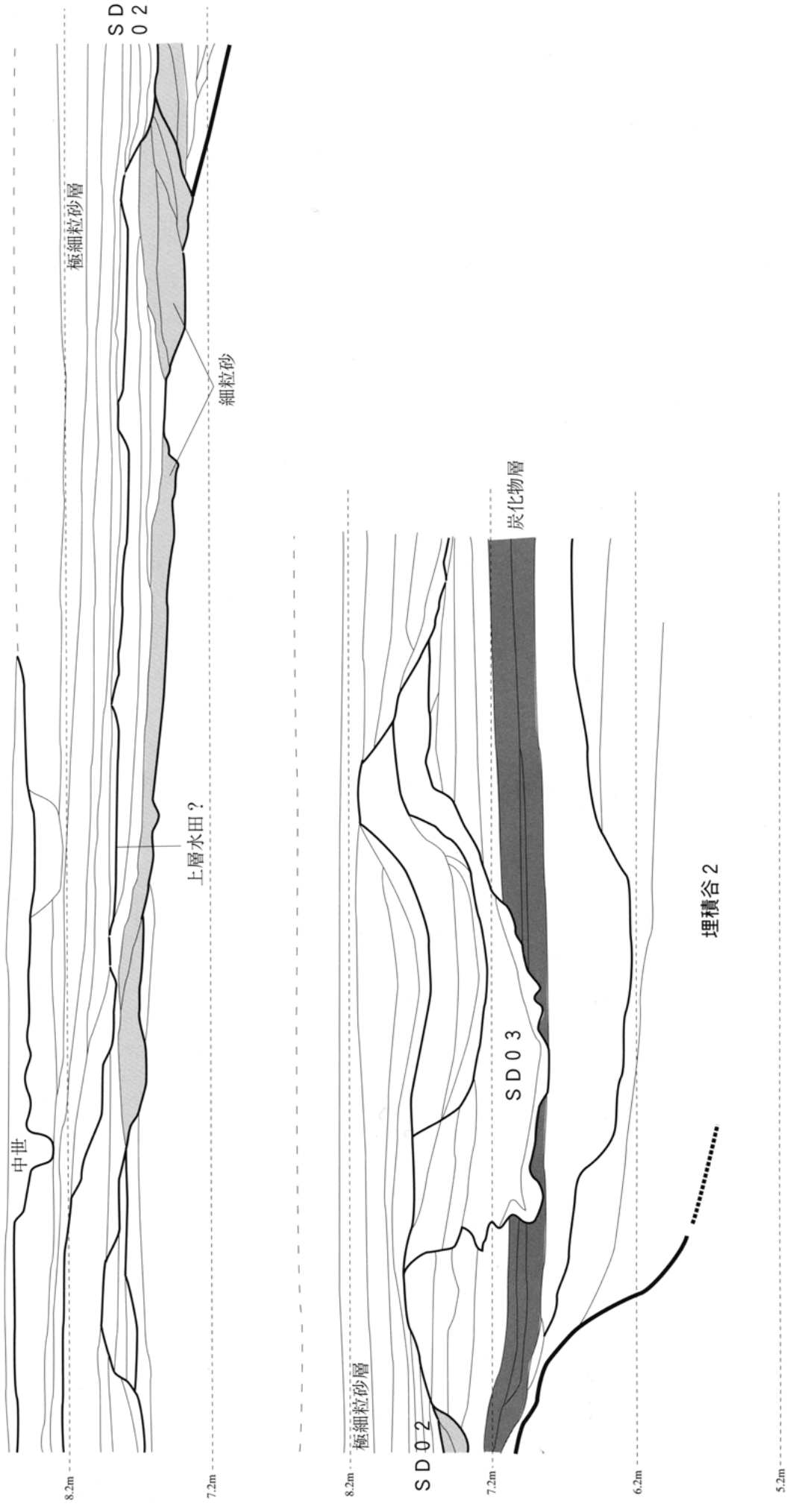
図版69

図版 70

９５Ｅ区東壁セクション

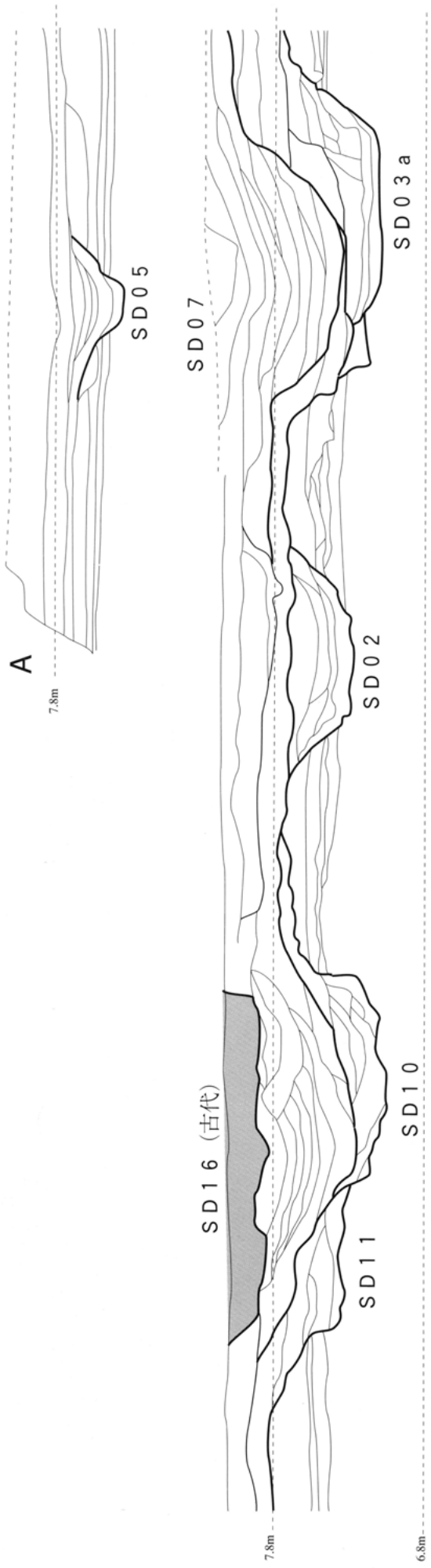


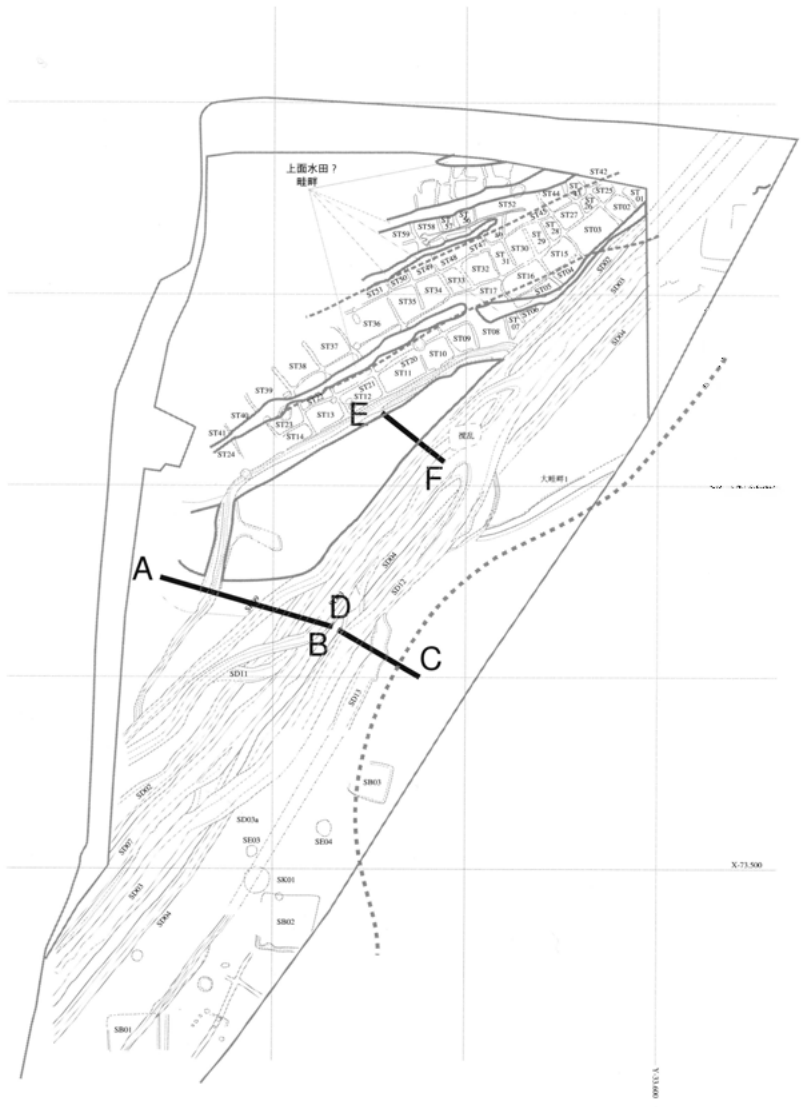


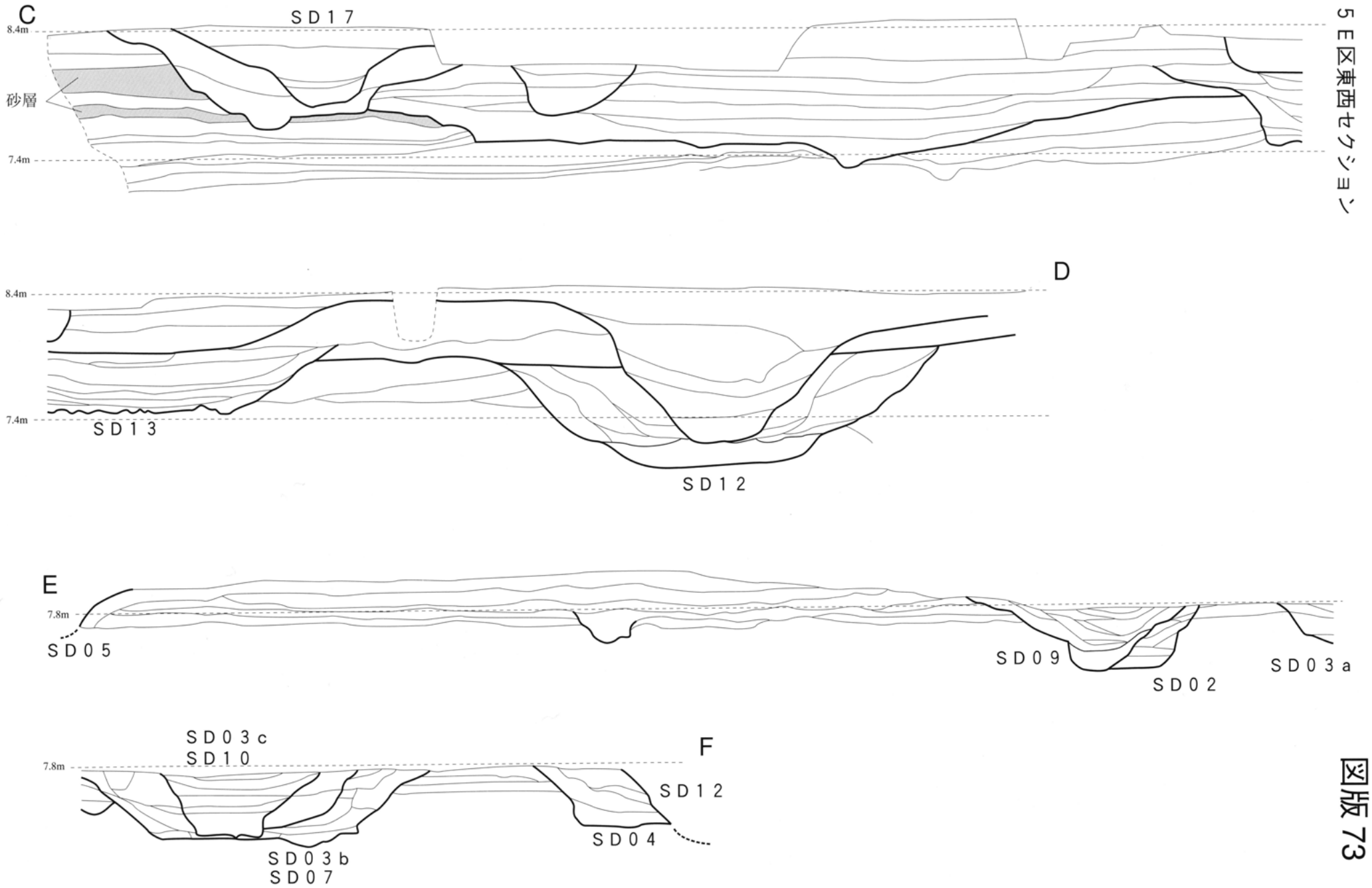

SD02
極細粒砂層
細粒砂
上層水田？
中世
8.2m
7.2m
炭化物層
SD03
埋積谷２
極細粒砂層
SD02
8.2m
7.2m
6.2m
5.2m

図版 72

９５Ｅ区東西セクション

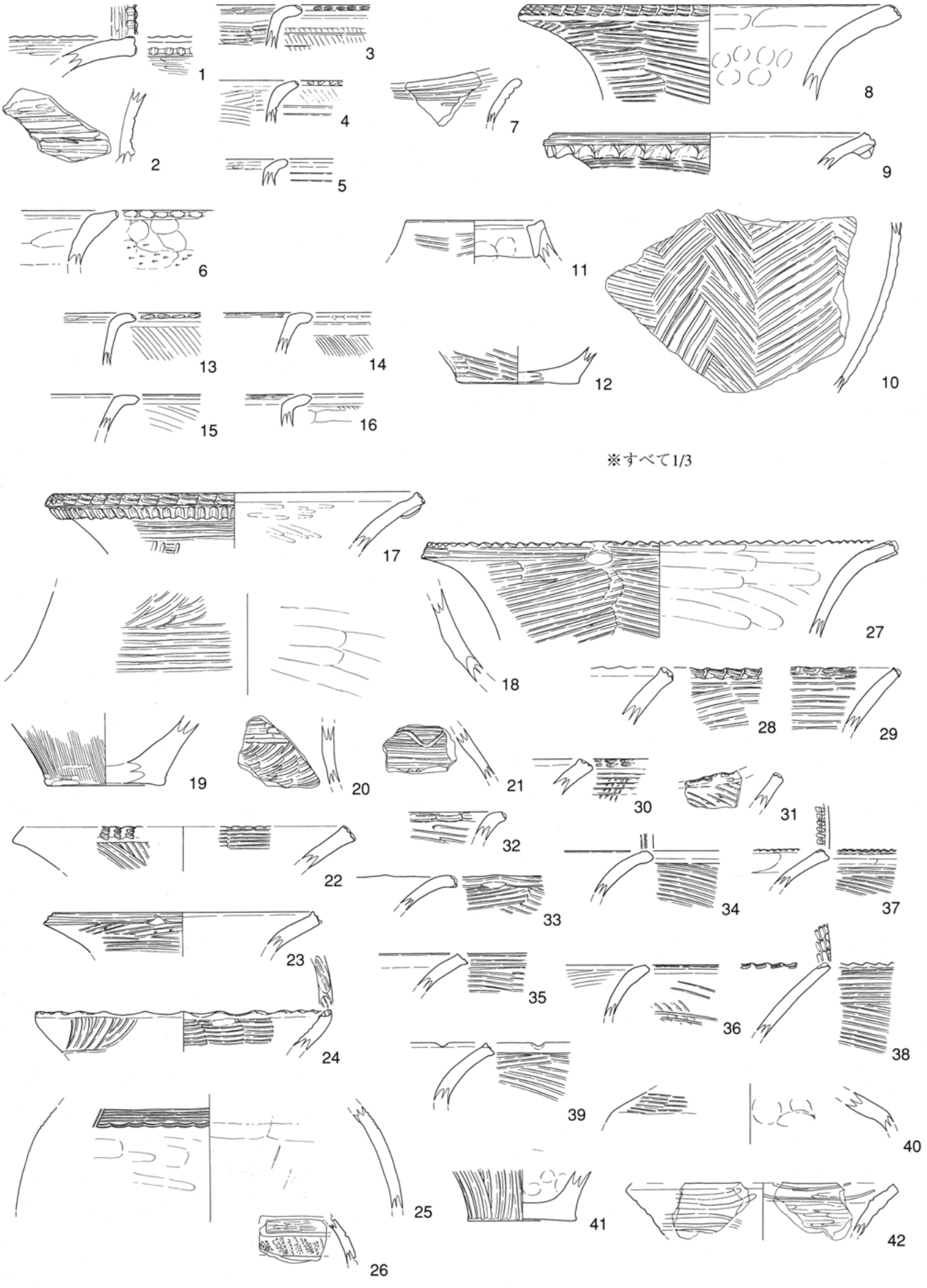






95E区東西セクション

図版73



※すべて1/3

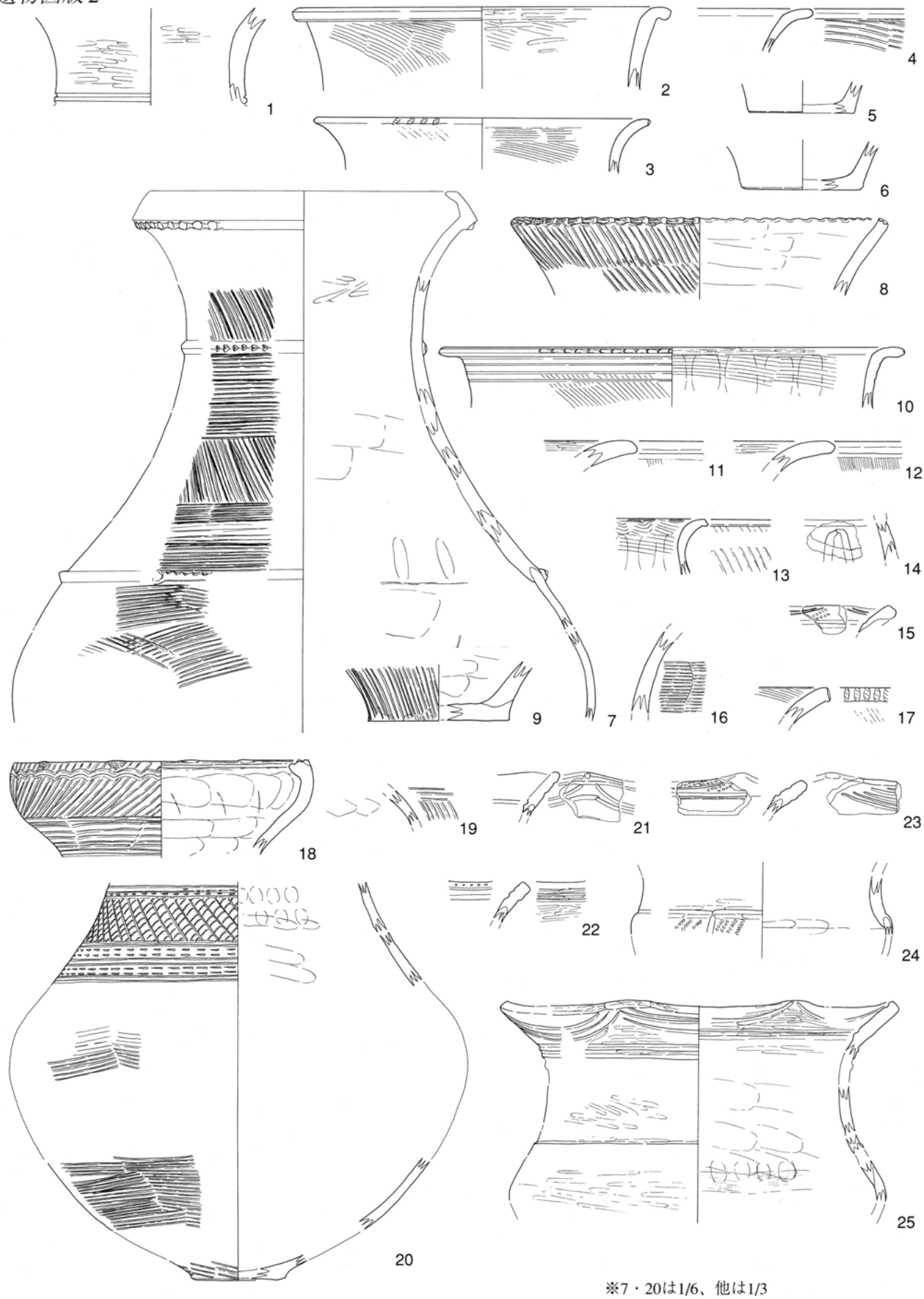
94Ca区　SK03（1、10、29）
94Ca区　SK01（5、17～19）
94Ca区　SD23（9）
94Ca区　SK10（16、34）
94Cb区　SD04（36）

94Ca区（2、12、32、42）
94Ca区　SD43（6）
94Ca区　SD17（11、13、40）
94Ca区　SE17（20、21、26、31）
94D区　SK01（28）

94Ca区　SD09（3）
94Ca区　SK48（7）
94Cb区　SK40（14）
94Ca区　SDI（22～24、30、33、35、38、39、41）
94Cb区（25）

94Ca区　SD01（4、37）
94Ca区　SK34（8）
94Cb区　SD29（15）
94Ca区　SX01（27）

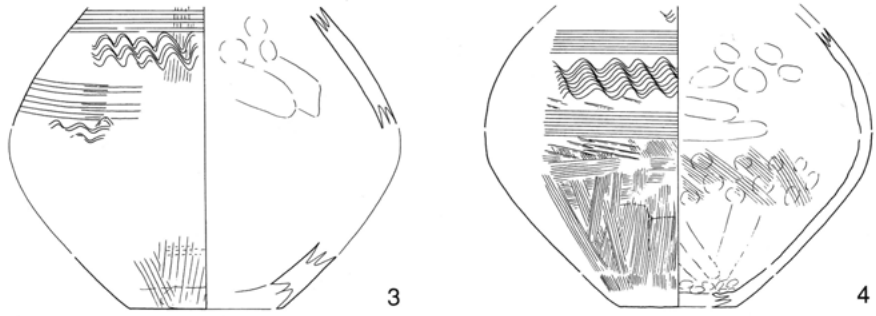
遺物図版2



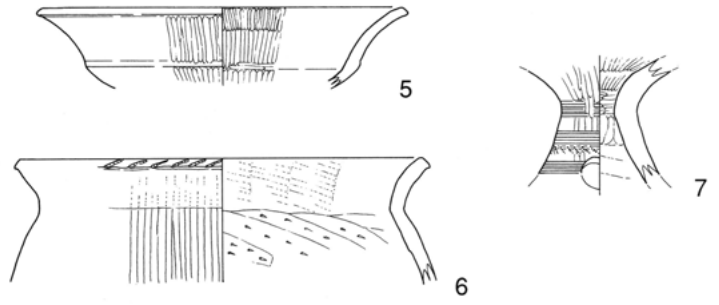
※7・20は1/6、他は1/3

94D区　SD08（1）　94Ca区　SE17（2、7、8）　94Ca区（3、24）　94Ca区　SDI（4～6、9）　95A区　SB01（10、20）
95A区　SK03（11～15）　95A区（16～19、21～23、25）

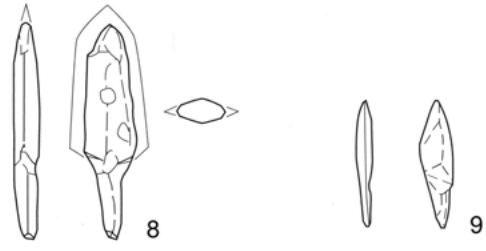




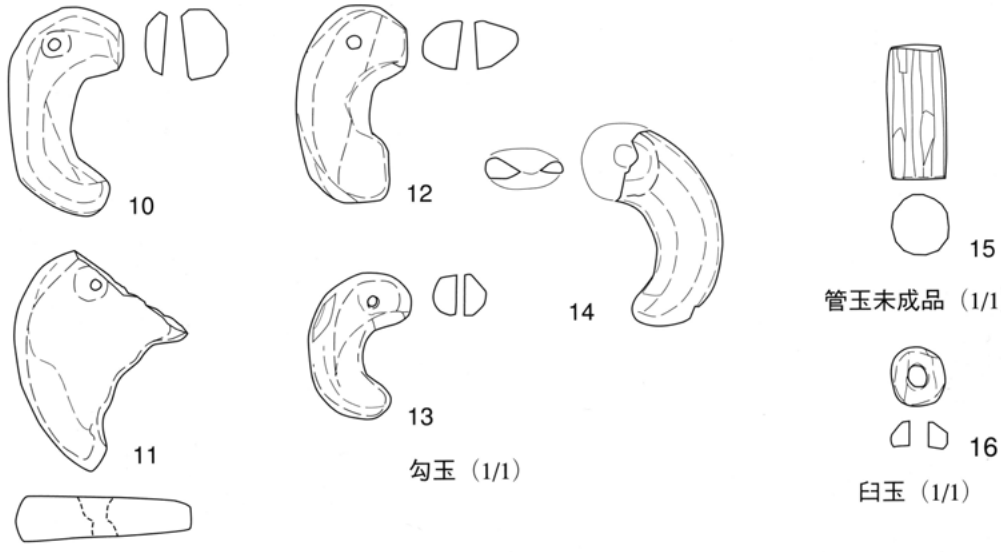
※以下すべて1/4（遺物図版75まで）。



94Ca区（1）　94Ca区　SD41（2）　95Ba区　SD02（3）　95Bb区　SD03（4）　94Ca区　SD01（5～7）



銅鏃（1/1）

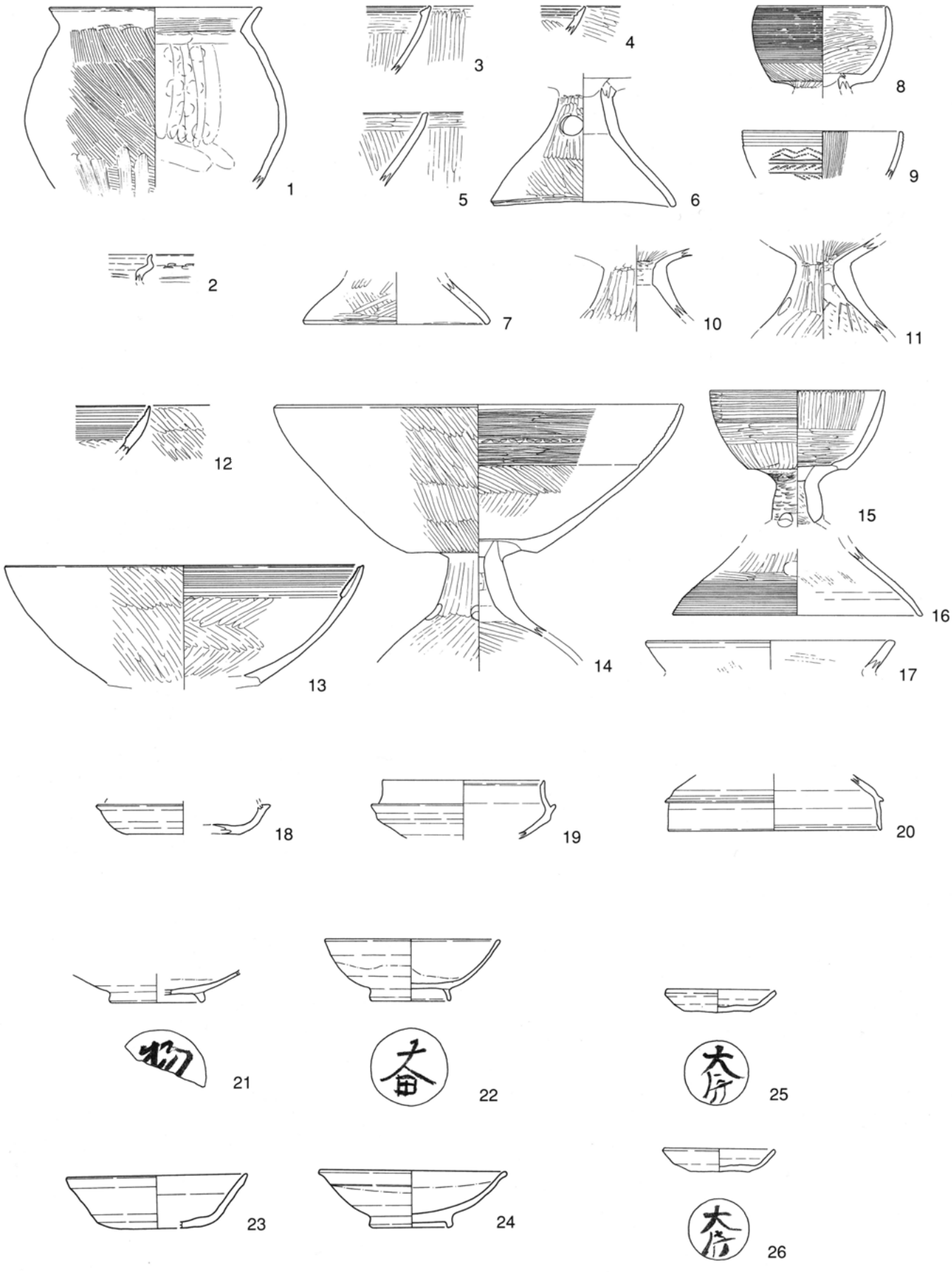


勾玉（1/1）

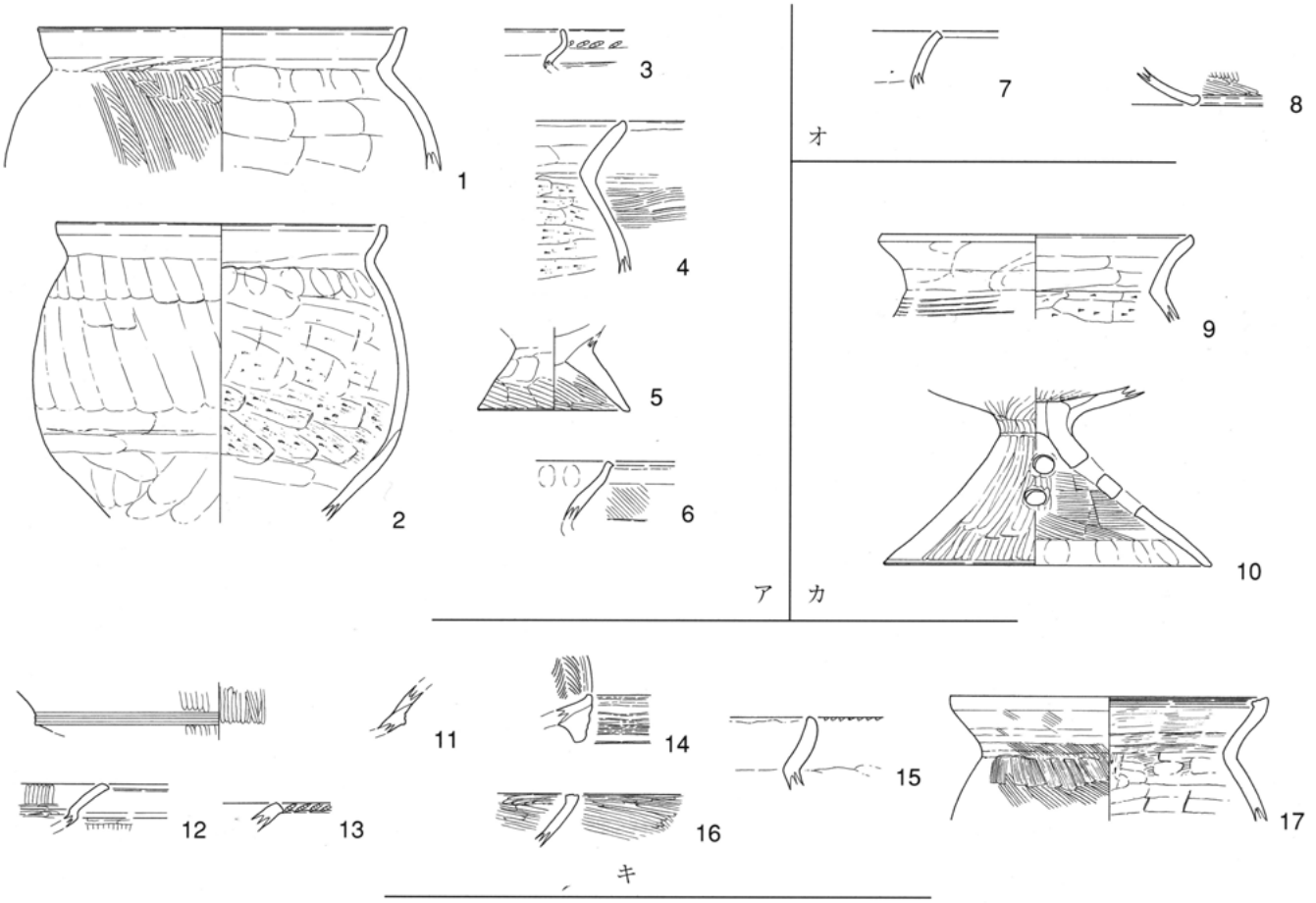
管玉未成品（1/1）

臼玉（1/1）

遺物図版4



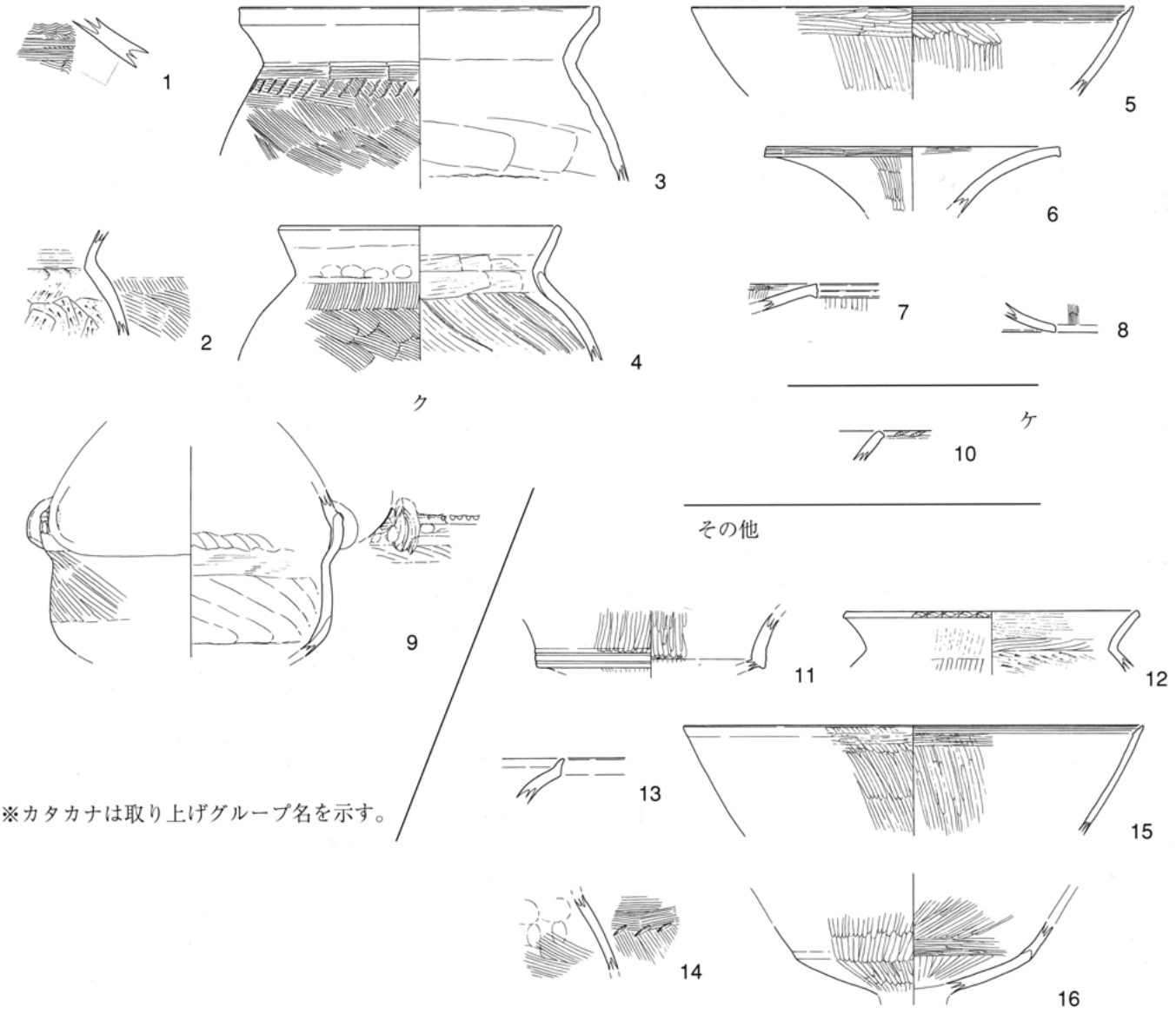
94D区　SK01（1～13）　94D区　SK02（14～17）　94D区　SK06（18、19）　94D区　SK07（20）　94D区　SX02（21～24）
94DE　SK42（25～26）



※カタカナは取り上げグループ名を示す。

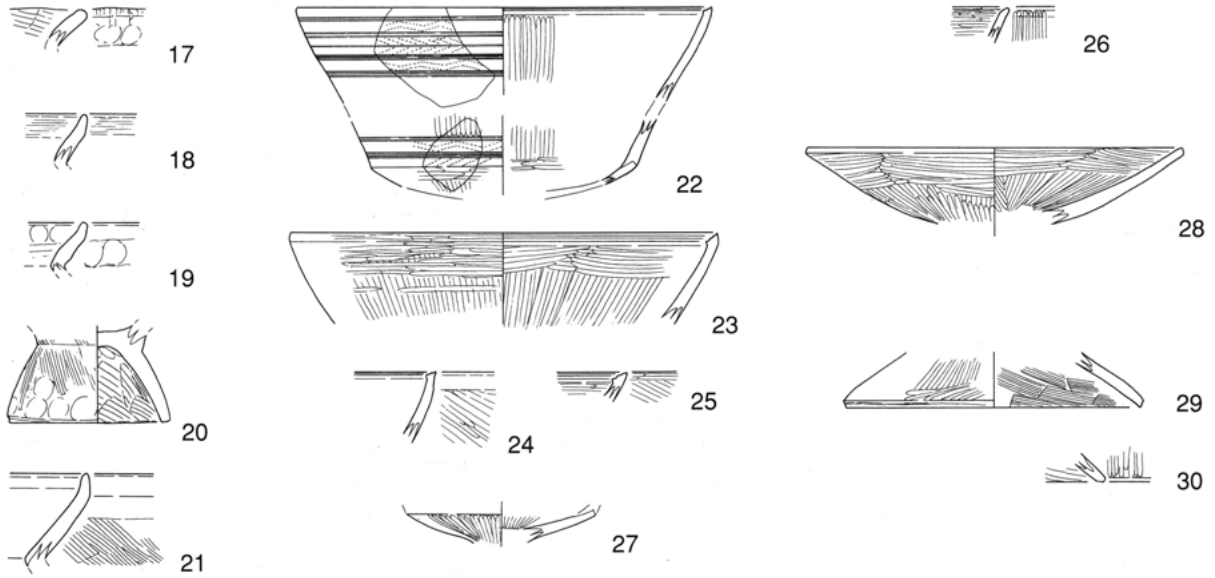
94Ca区　SX01（1～23）

遺物図版6



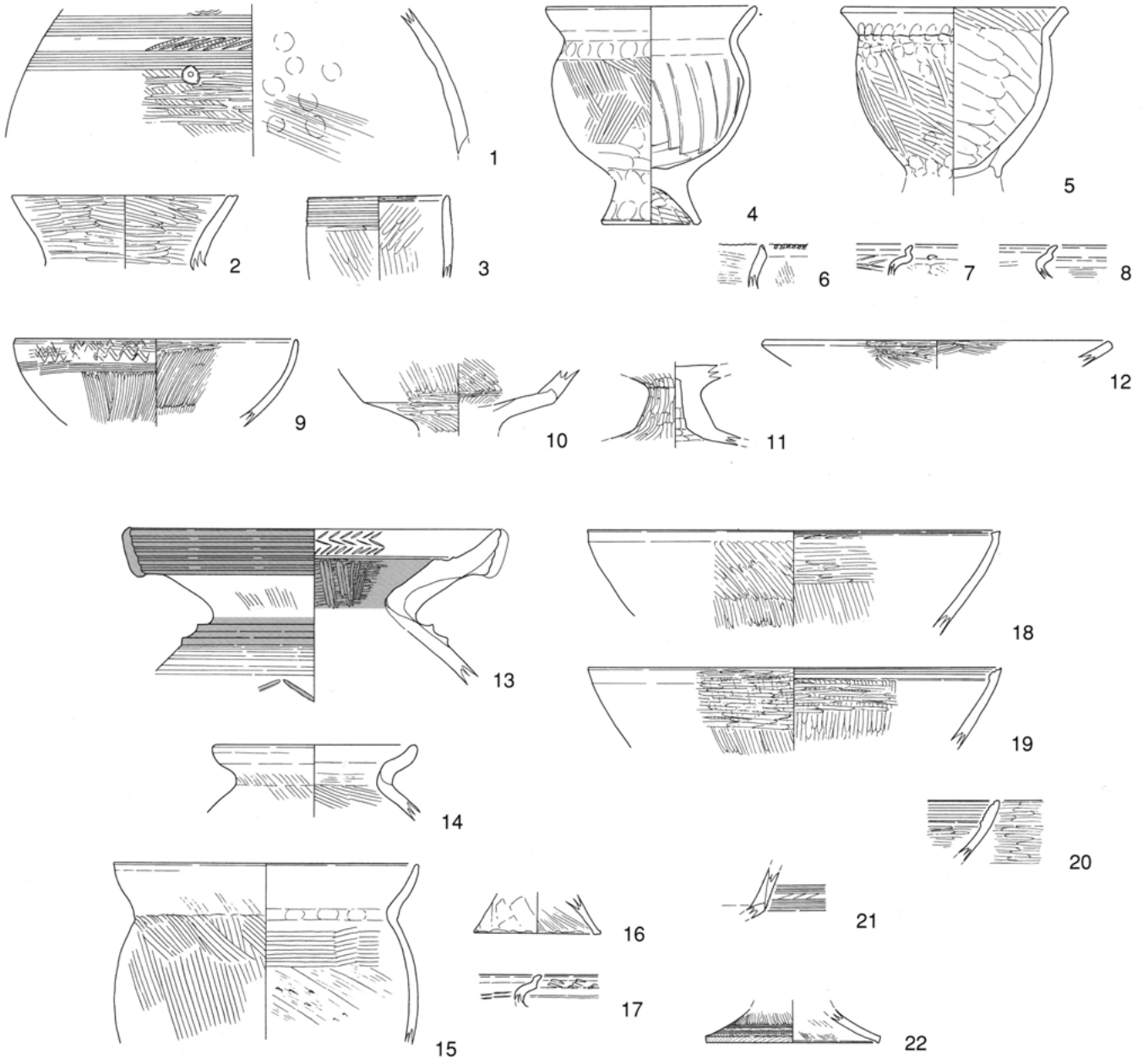
※カタカナは取り上げグループ名を示す。

SE04 下層

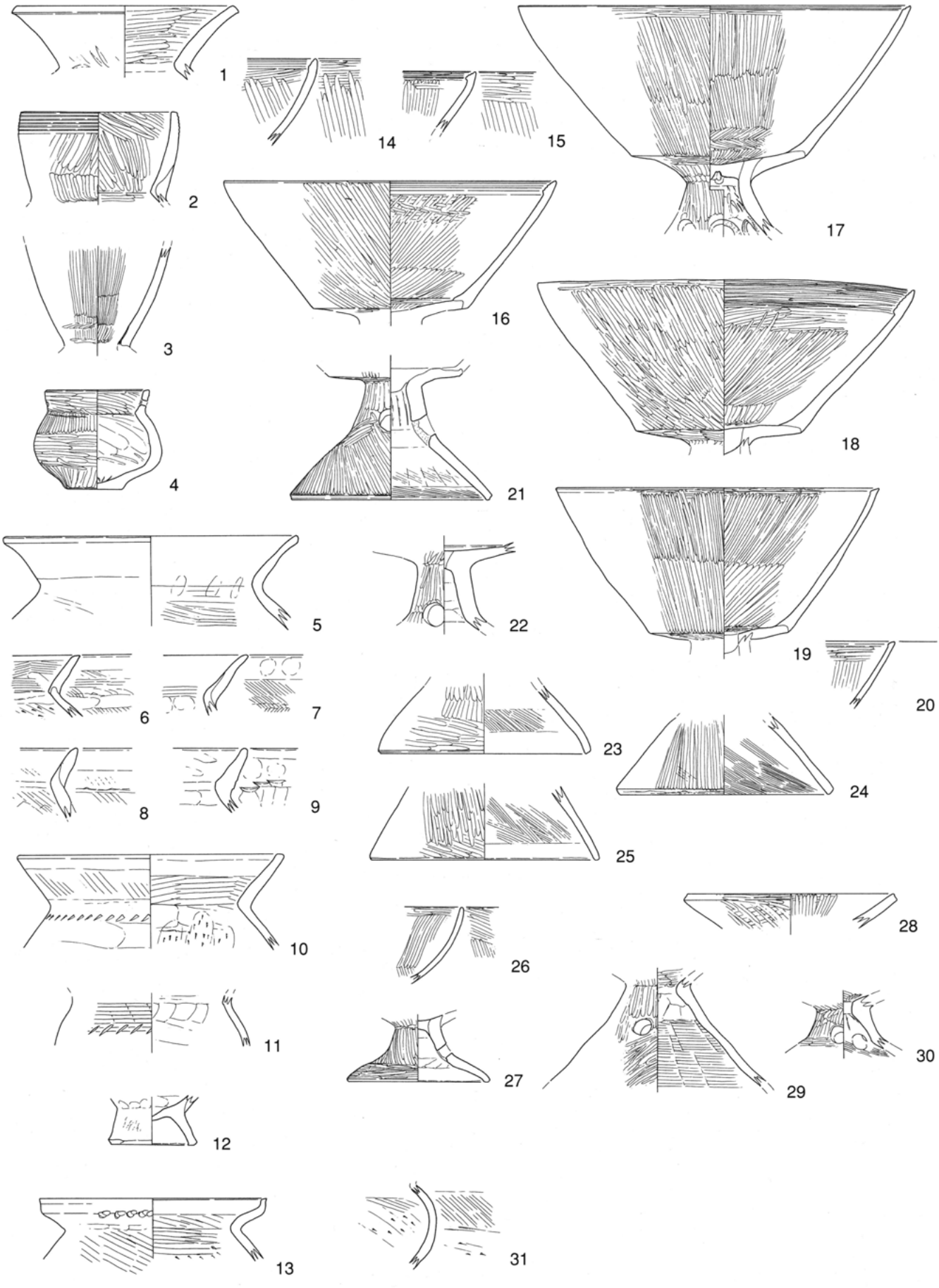


94Ca区　SX01（1～16）　94Ca区　SE04（17～30）

SE04 上層

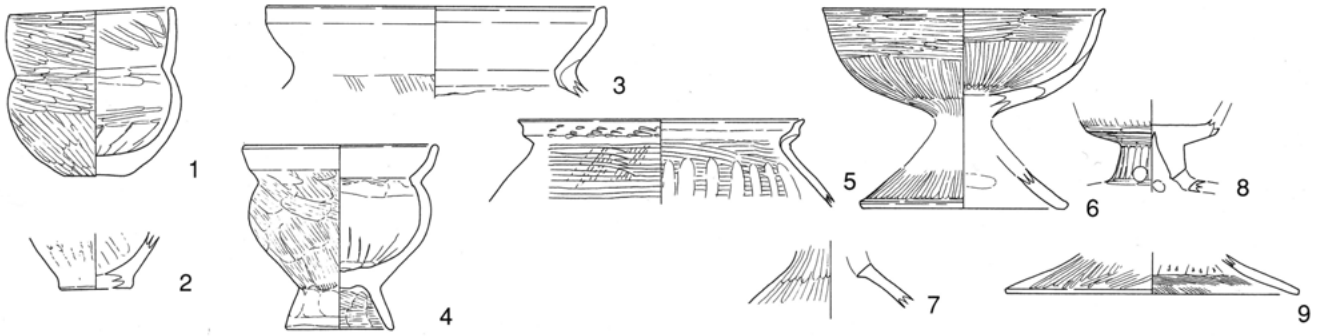


94Ca区　SE04（1～22）

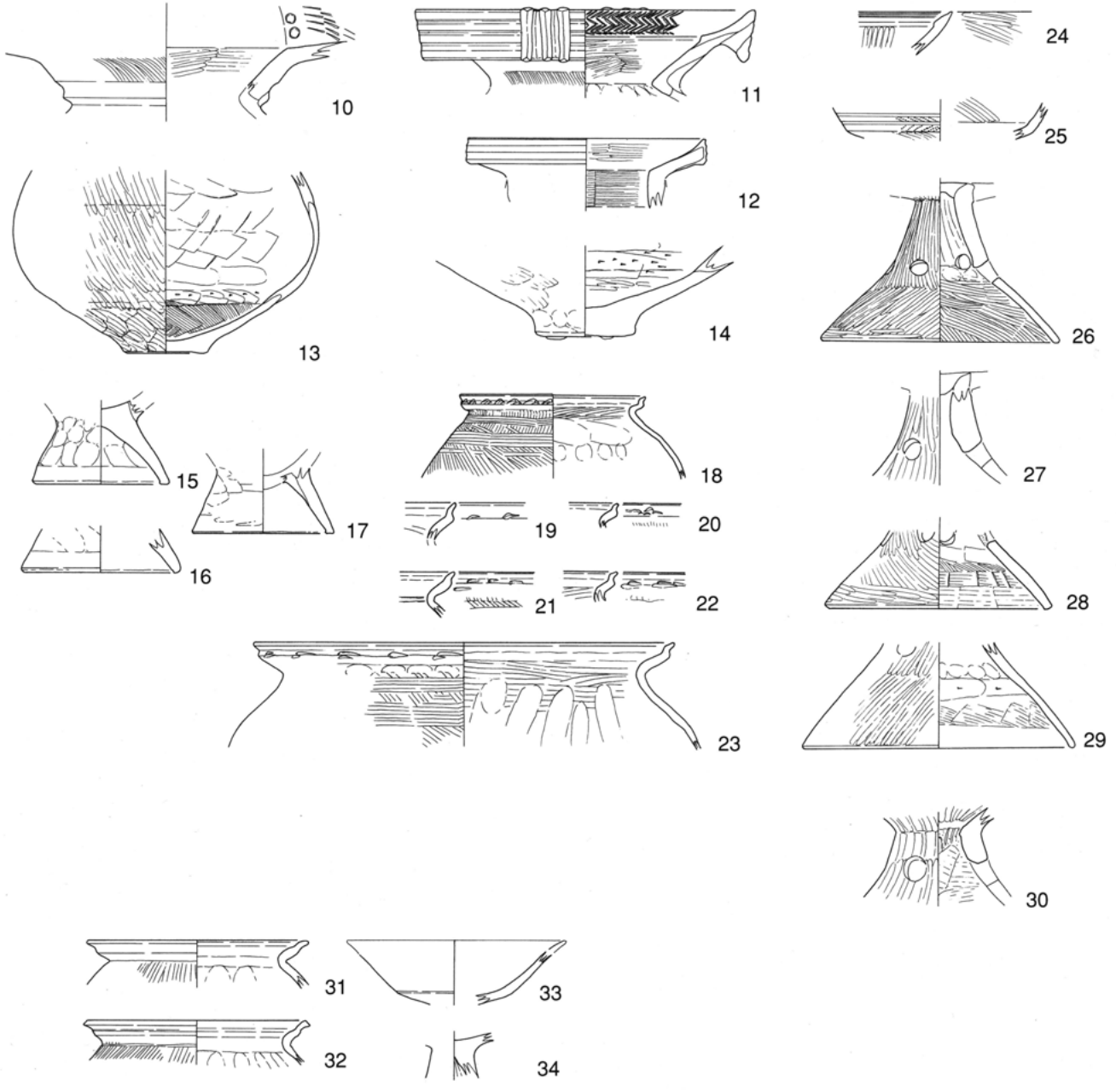


94Cb区　SE06（1～31）

SE02 下層

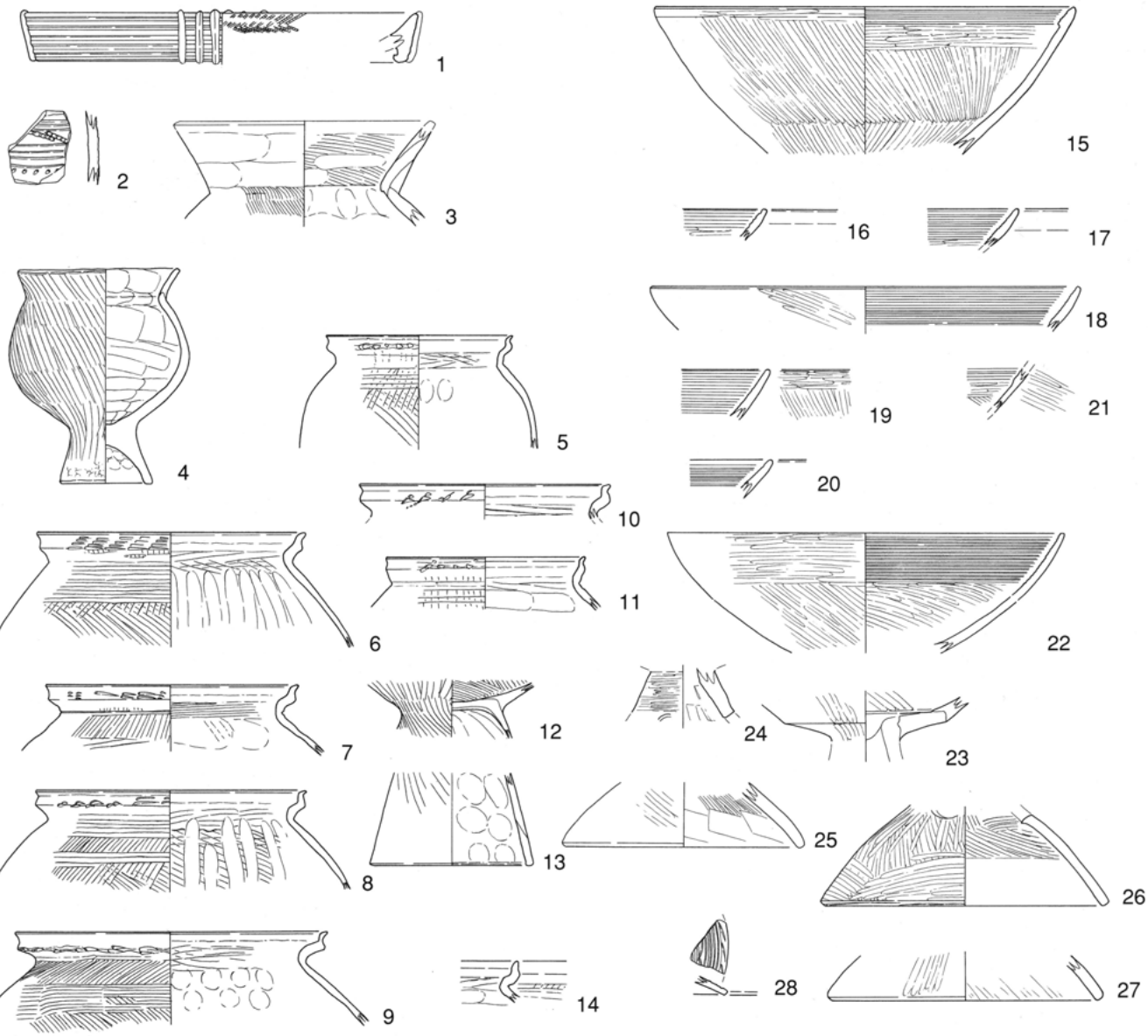


その他

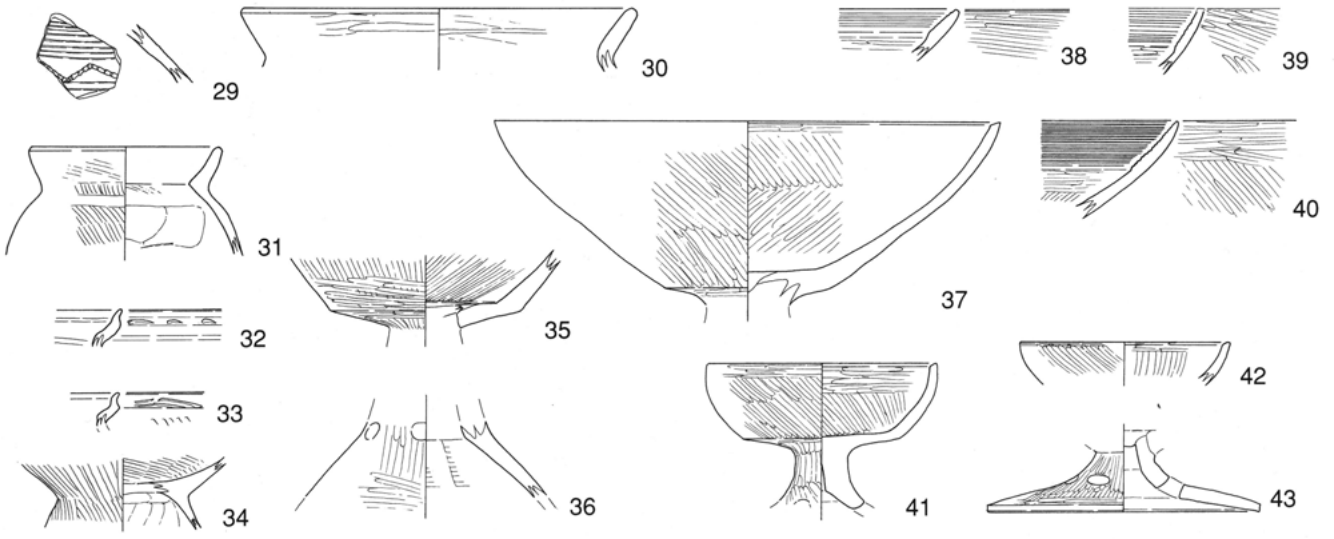


94Ca区　SE02（1～34）

SE02 中層

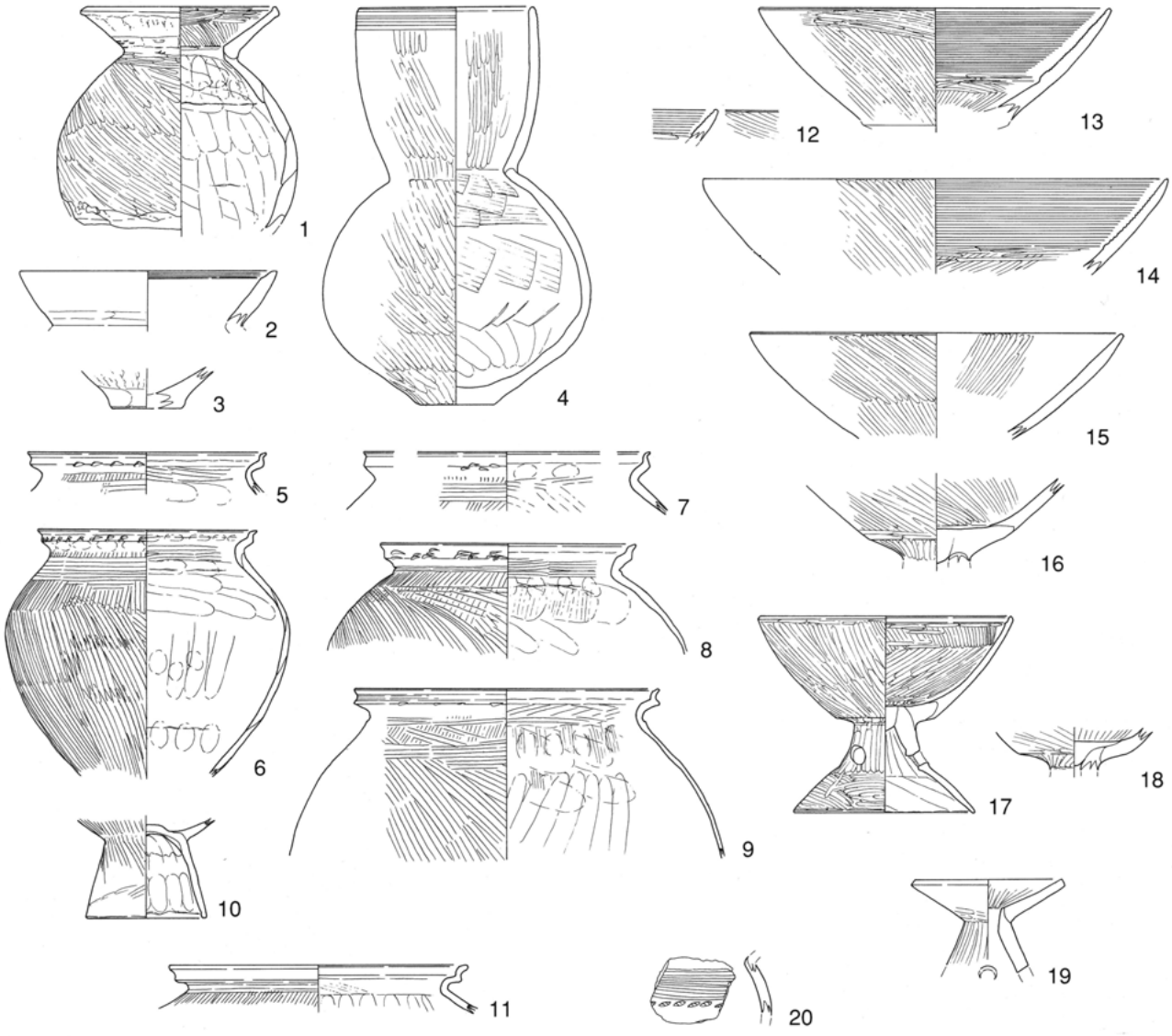


その他

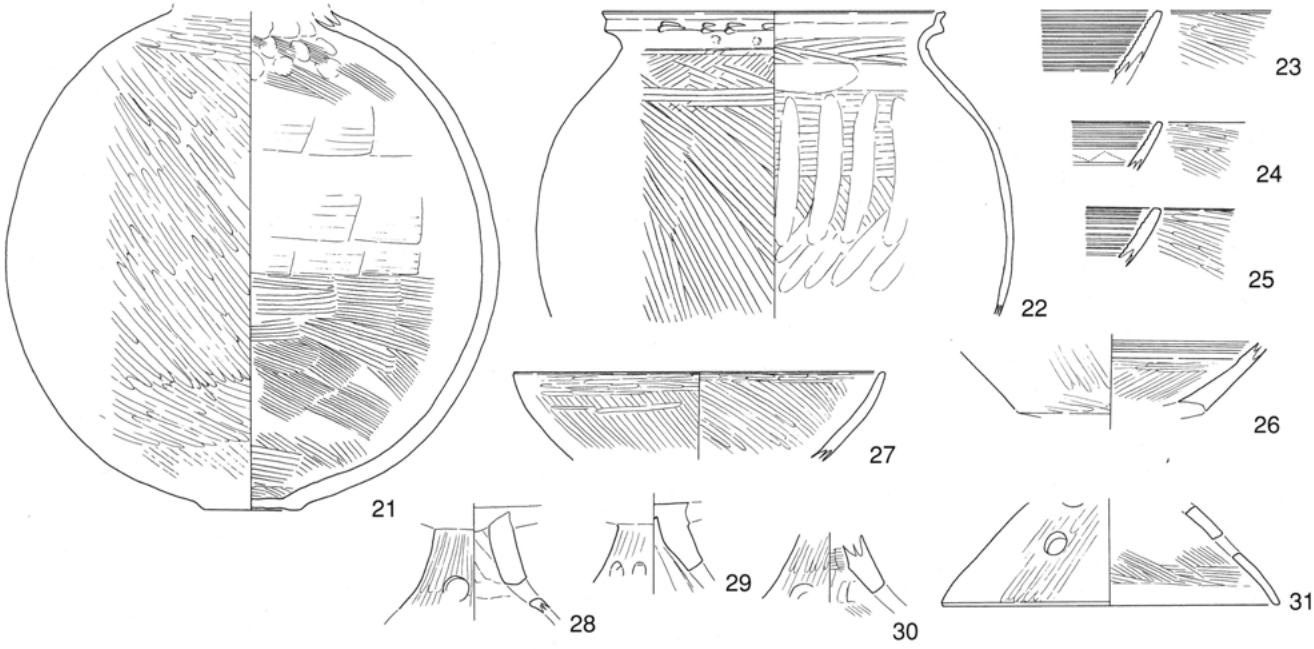


94Ca区　SE02（1～43）

SE02 上層

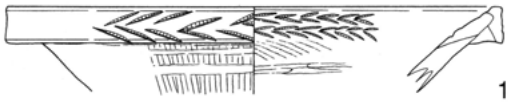


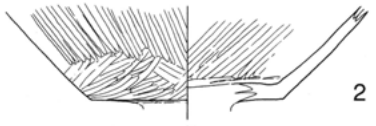
その他

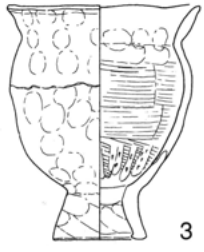


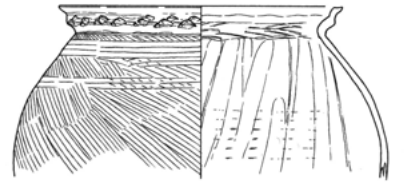
94Ca区　SE02（1～31）

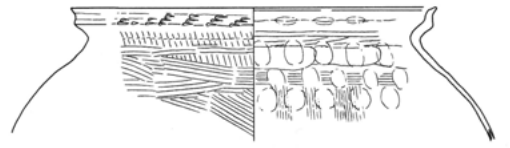
SK15 下層

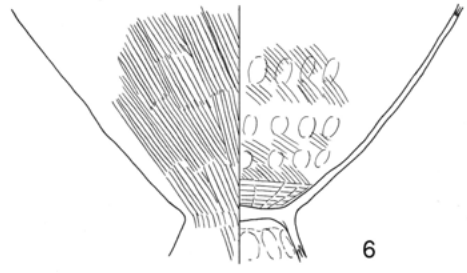

1


2


3

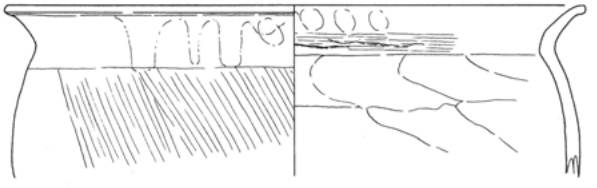

4

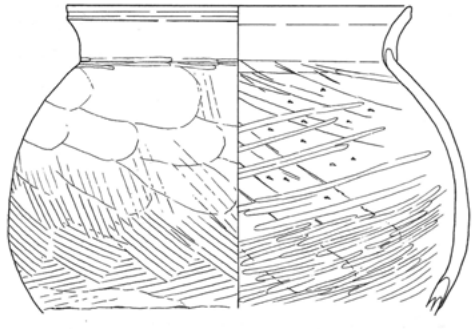

5

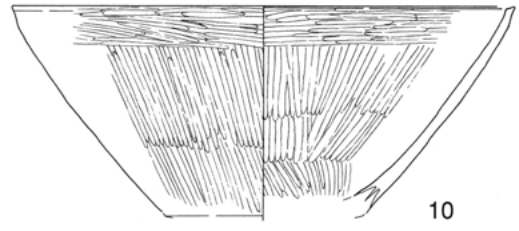

6

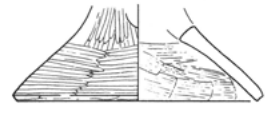
SK15 上層

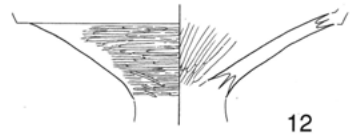

7


8


9

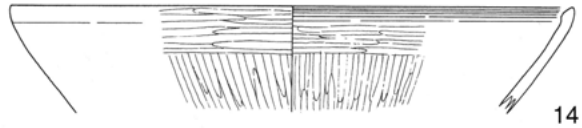

10


11

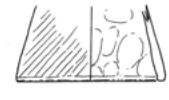

12

その他

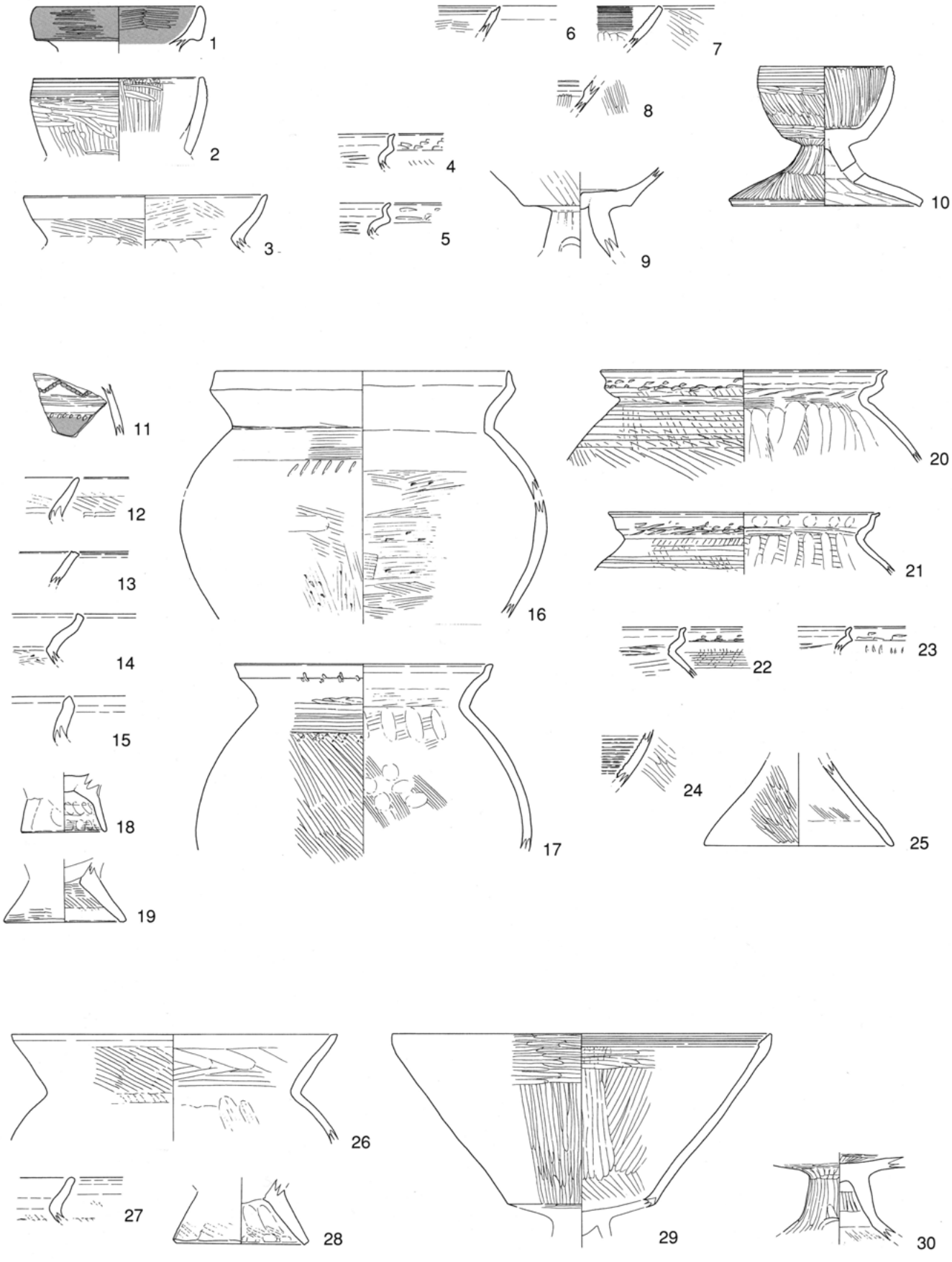

13


14


15

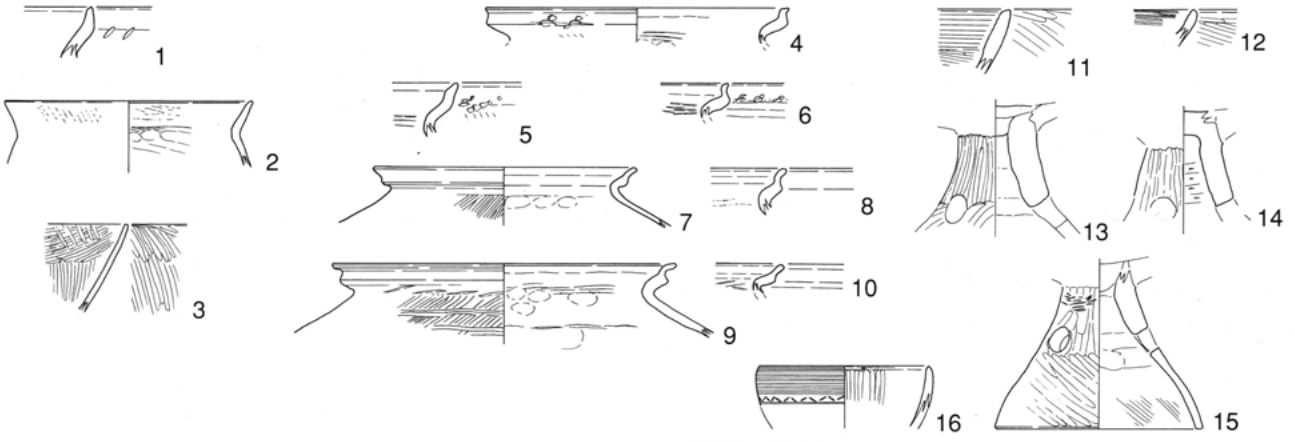

16

94Ca区　SK15（1～16）

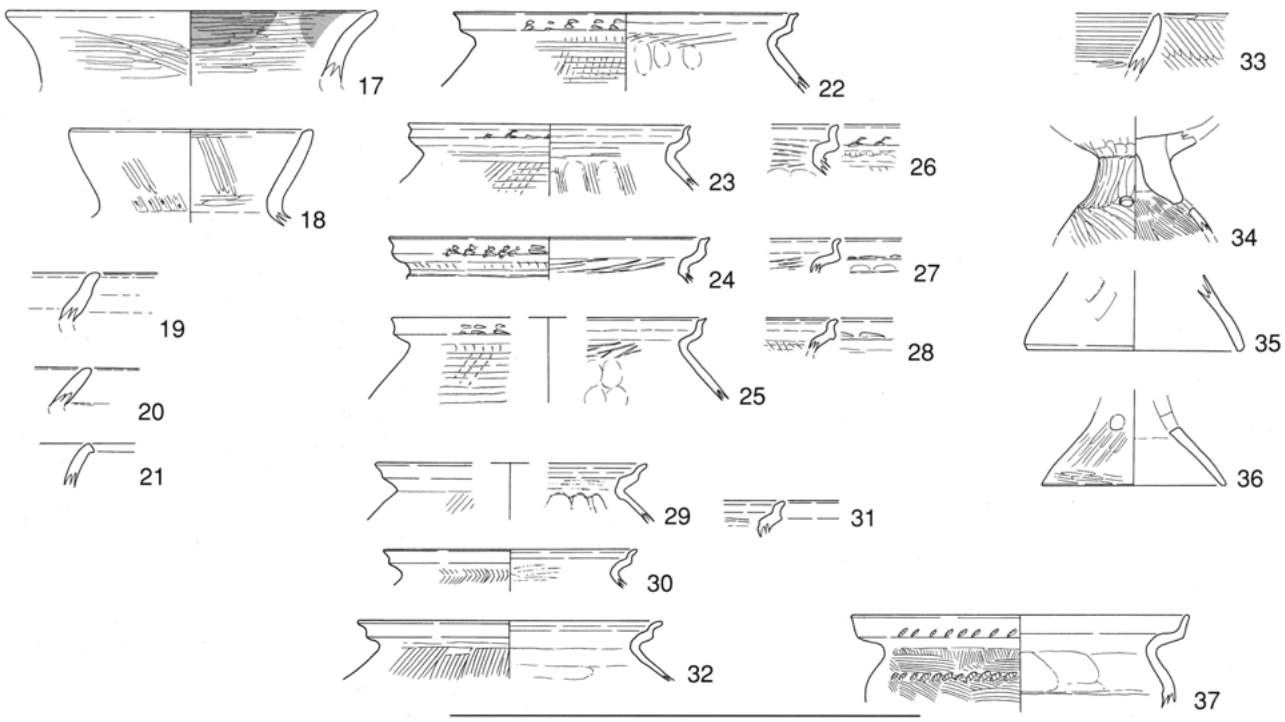


94Cb区　SK16（1～10）　94Cb区　SK18（11～25）　94Cb区　SK19（26～30）

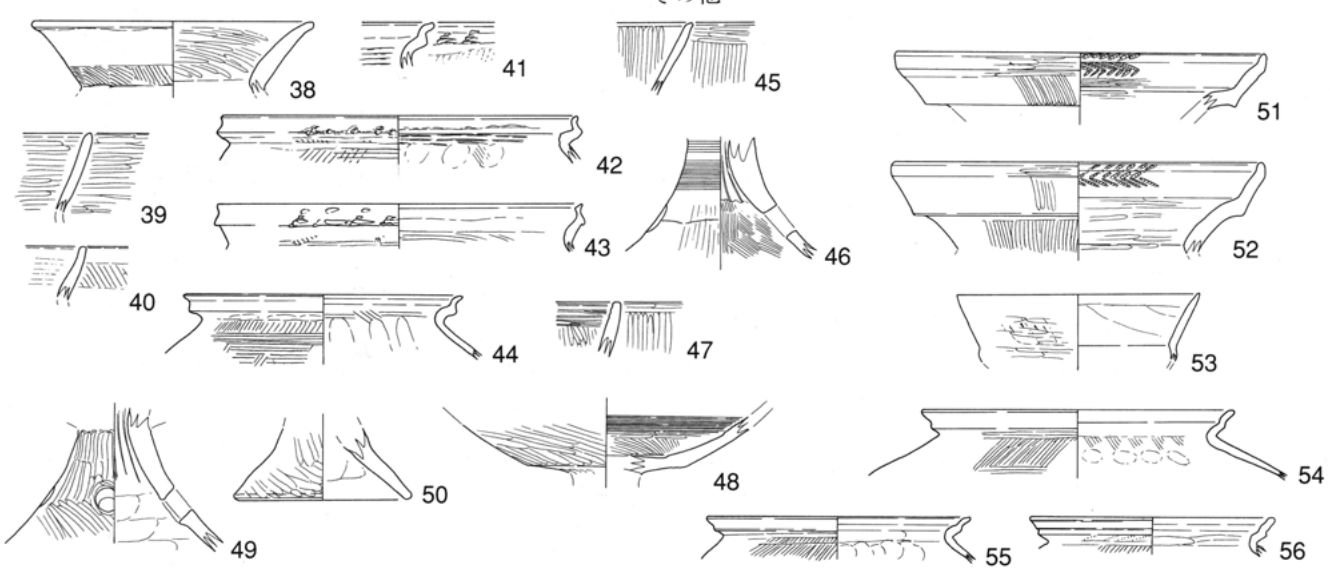
SD17 上層a



SD17 上層b

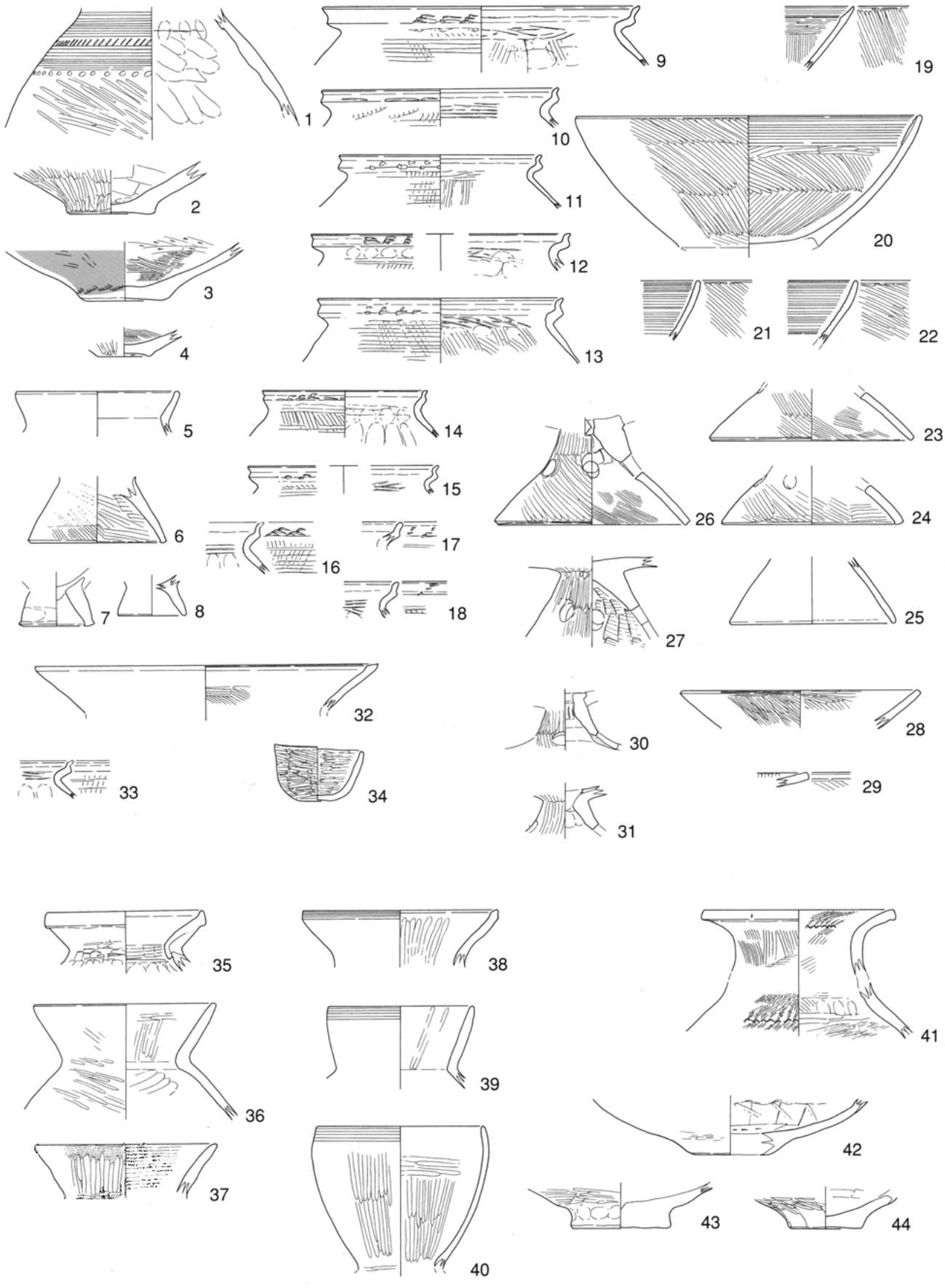


その他



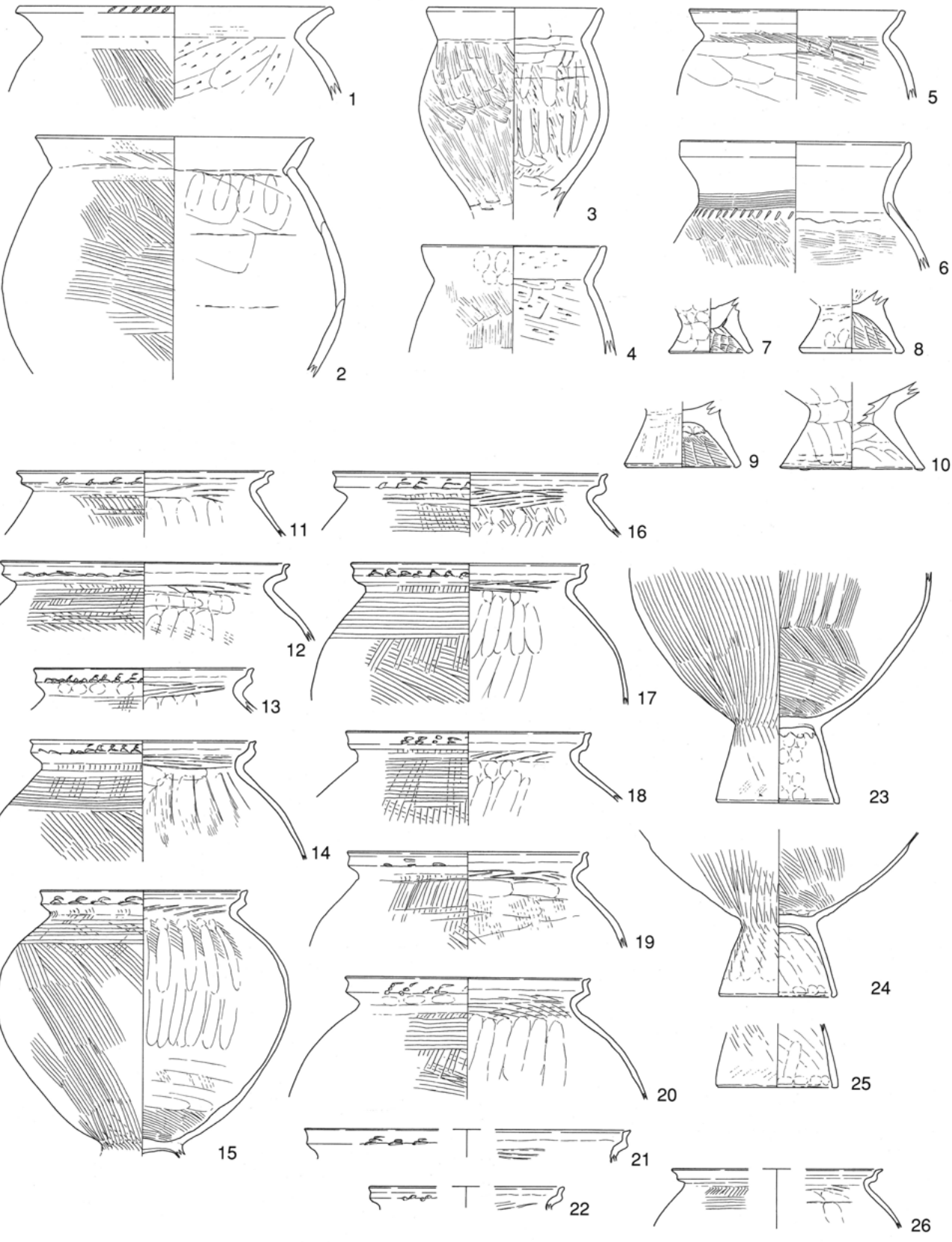
94Ca区　SD17（1～56）

SD17 下層



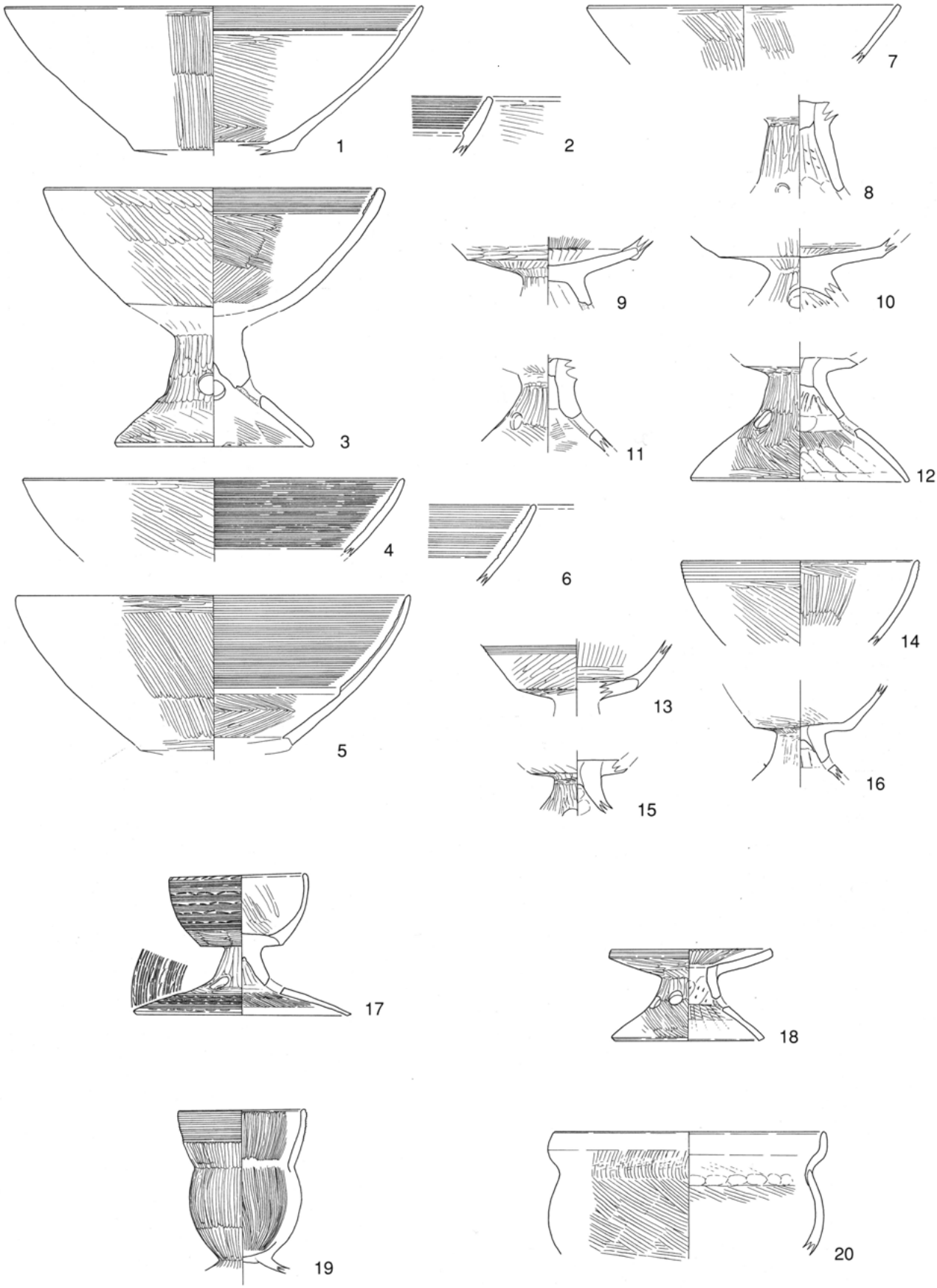
94Ca区　SD17〈1～44〉　※35～44は取り上げNo.あり。

SD17 下層

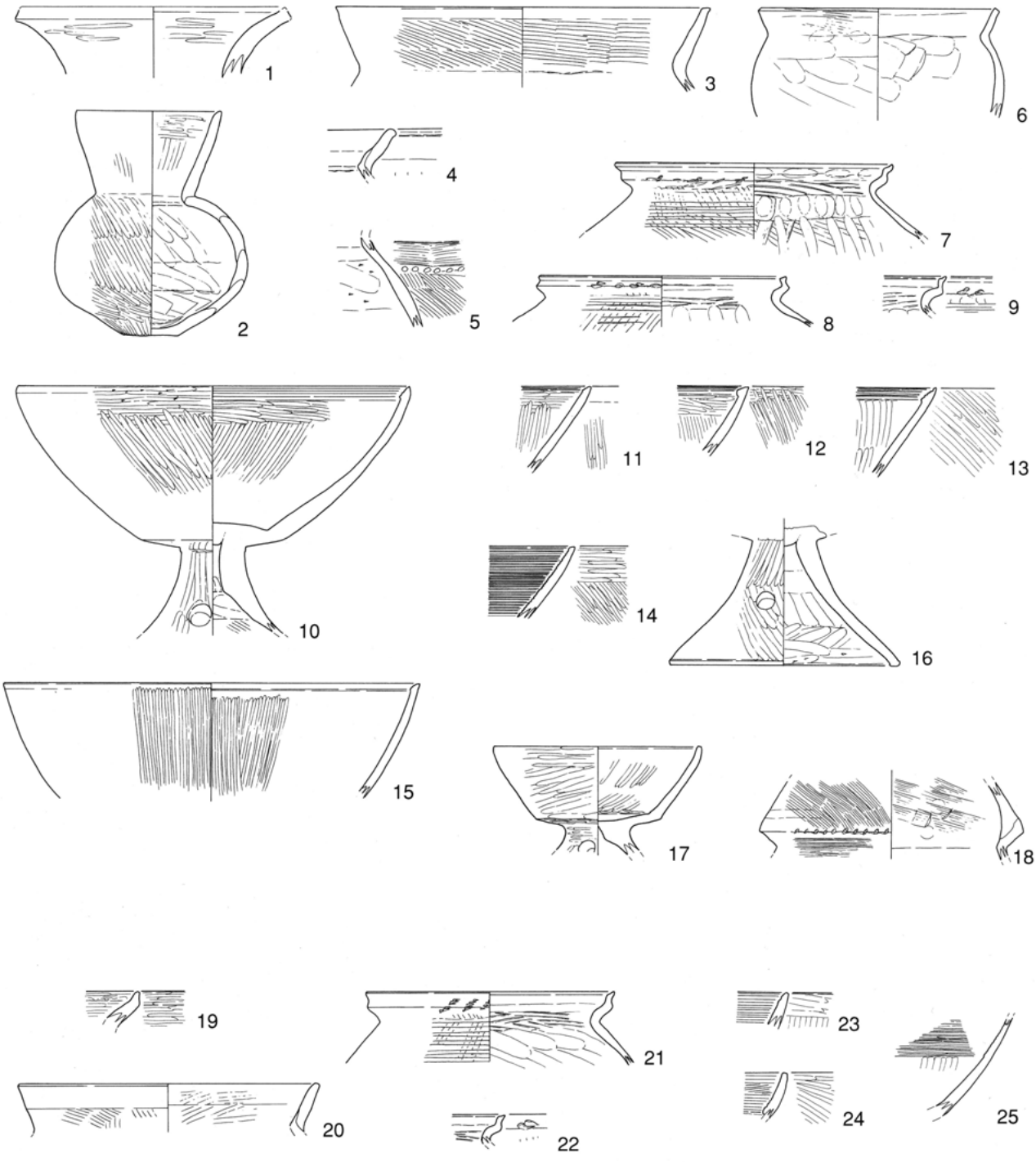


94Ca区　SD17（1～26）　※取り上げNo.あり。

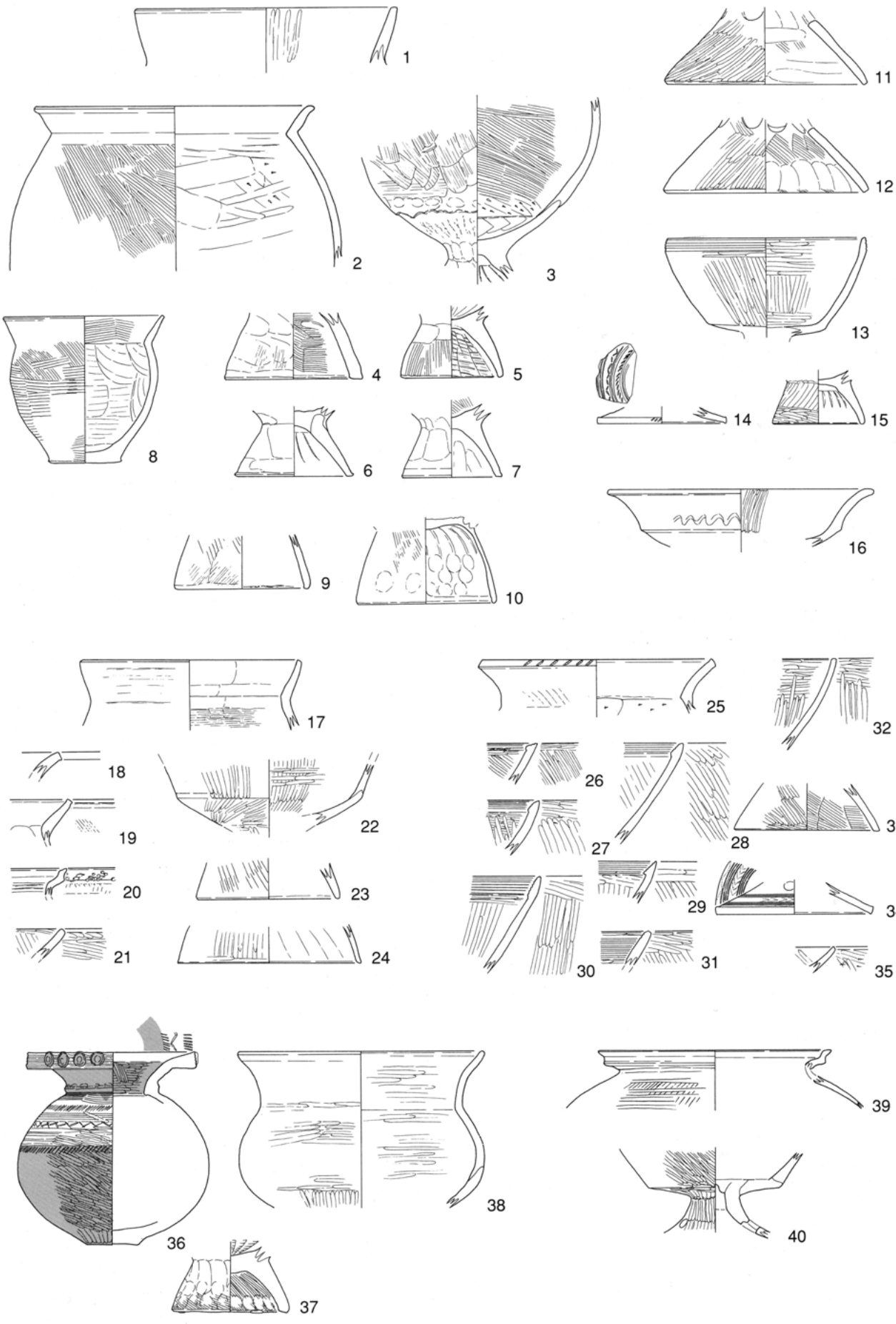
SD17 下層



94Ca区　SD17（1～20）　※取り上げNo.あり。

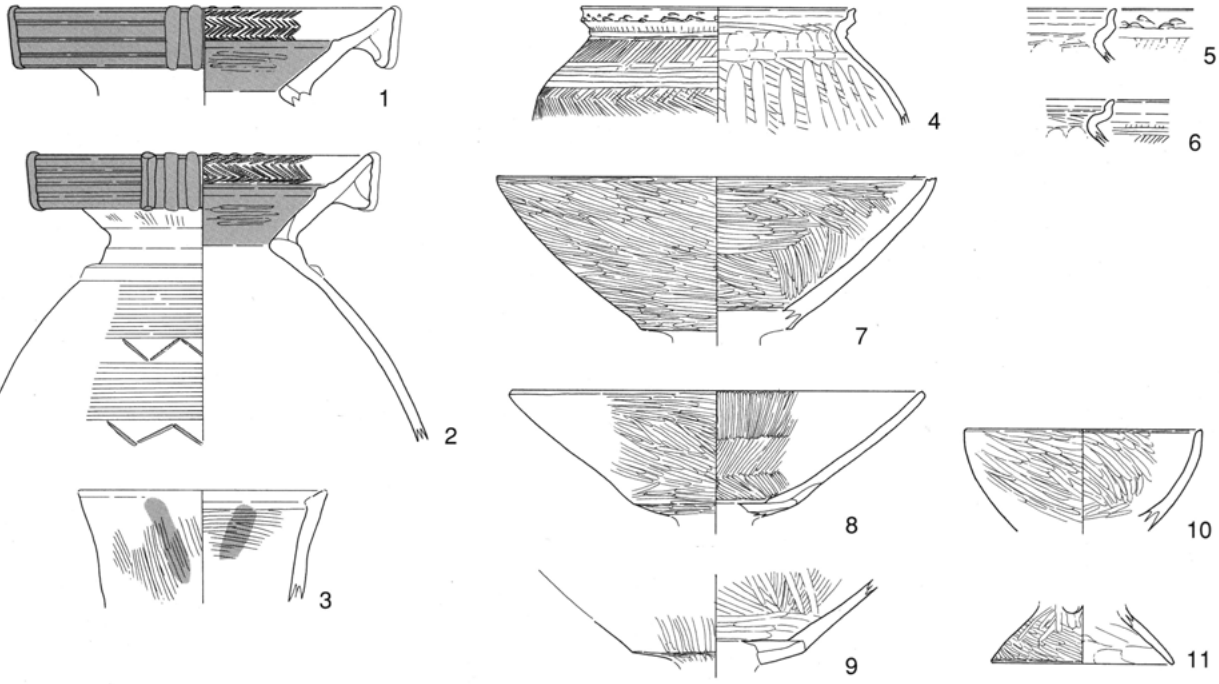


94Cb区　SD16（1～18）　94Cb区　SD04（19～25）

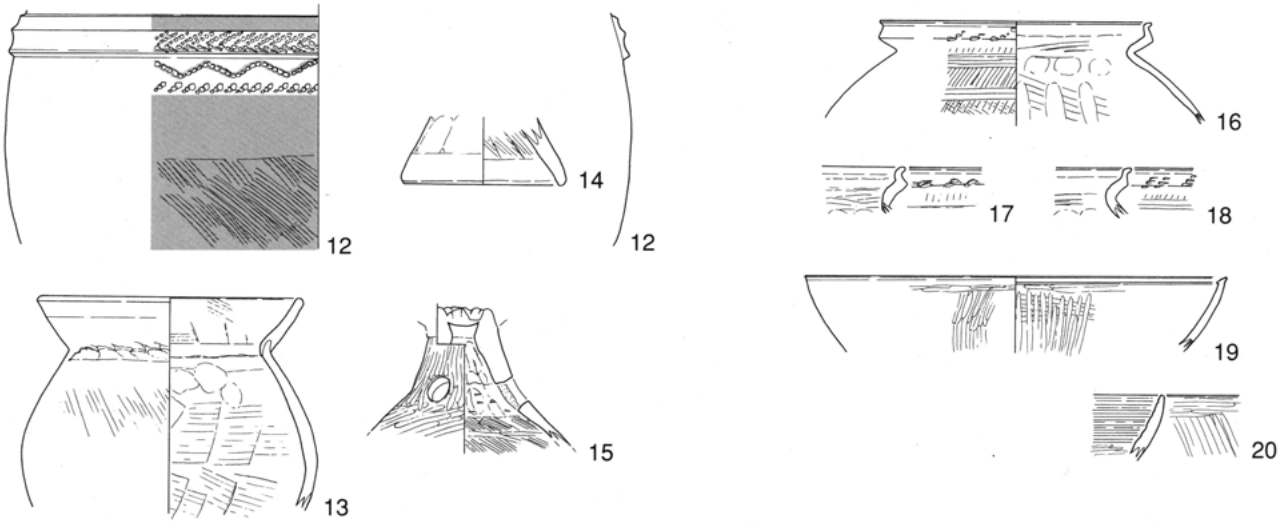


94Ca区（1～16）　94Ca区　SK05（17～24）　94Ca区　SE19（25～35）　94Ca区　SK12（36～40）

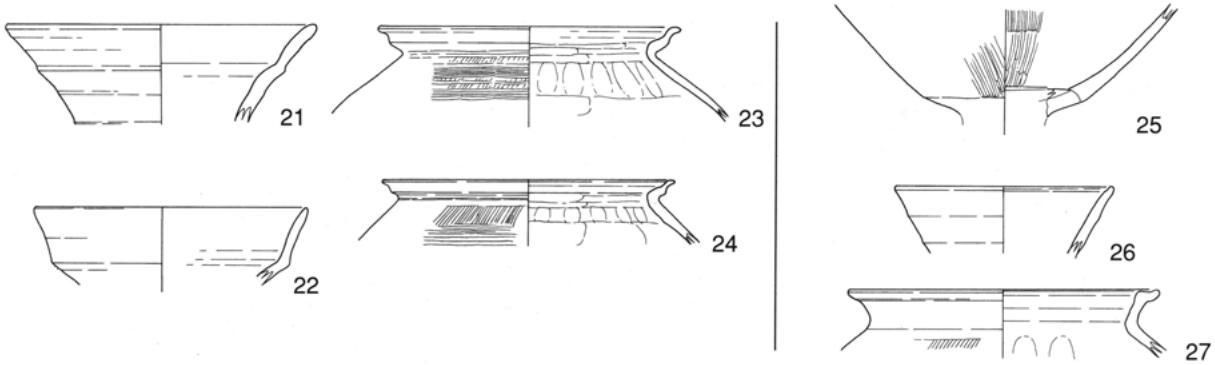
SE11 下層



SE11 中層

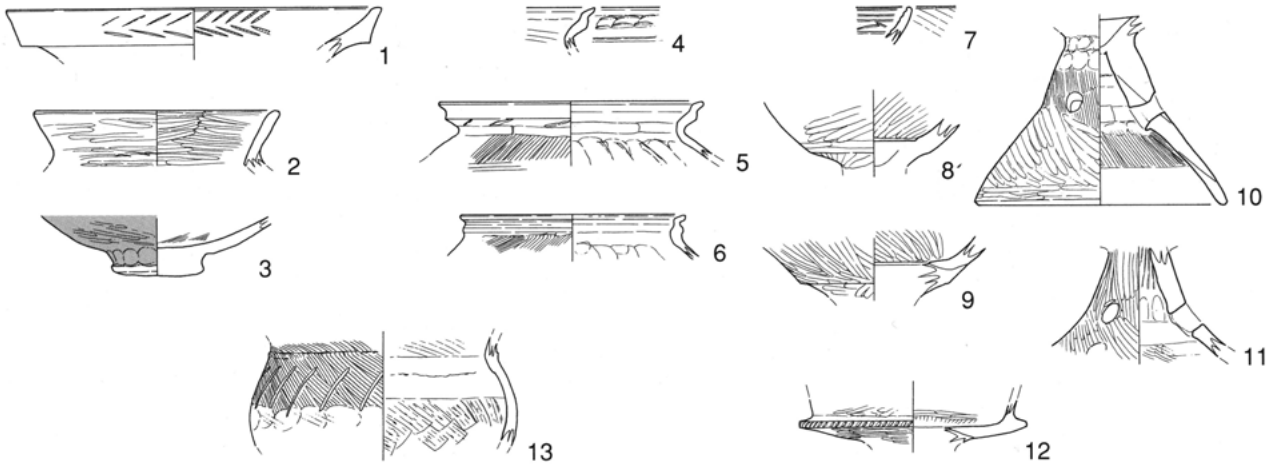


その他

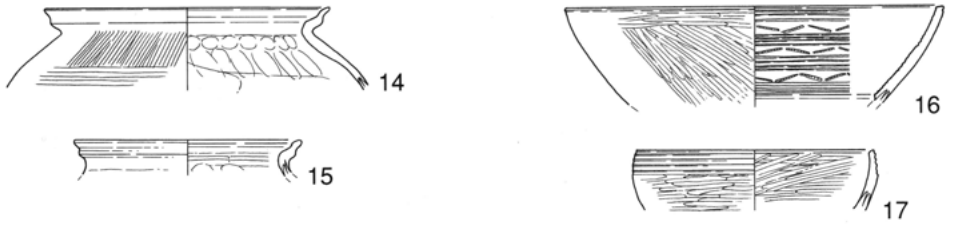


94Ca区　SE11（1～27）

SE14 上層



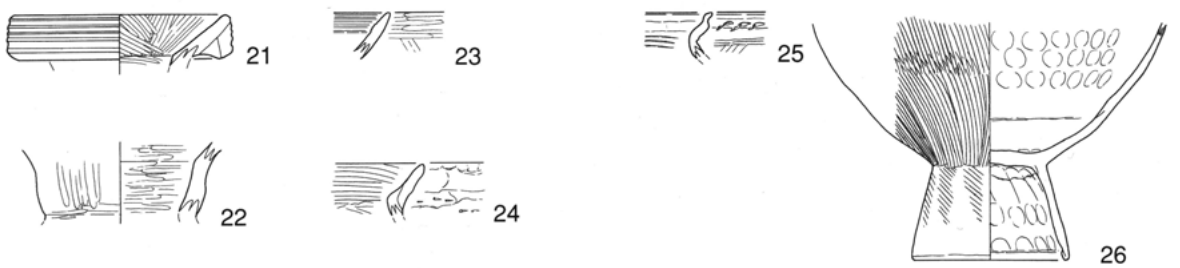
SE14 中層

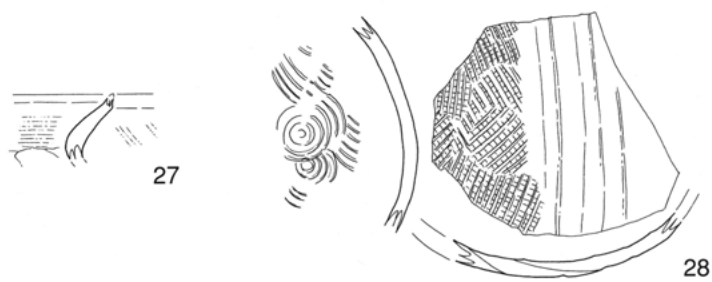


SE14 下層

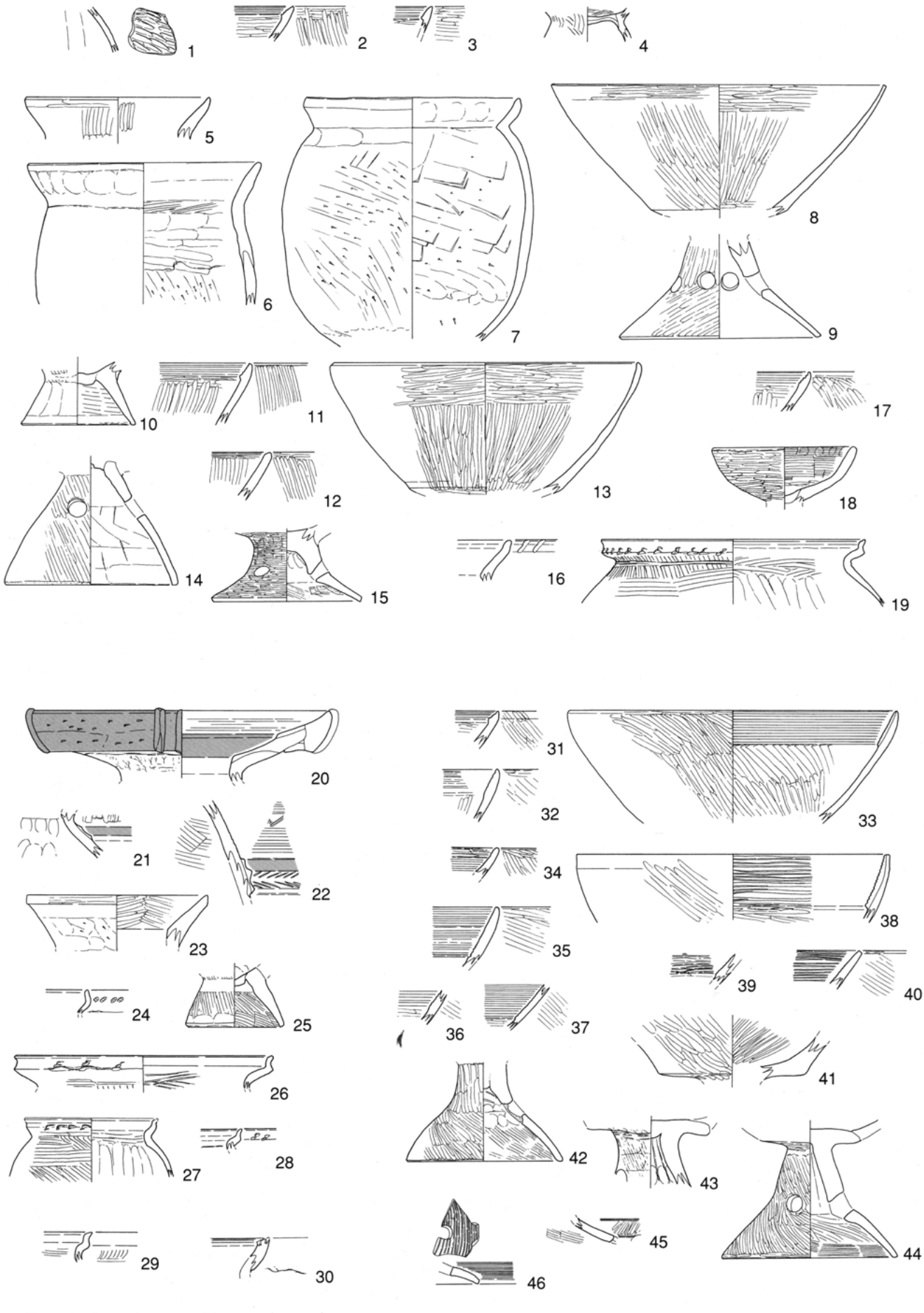


その他

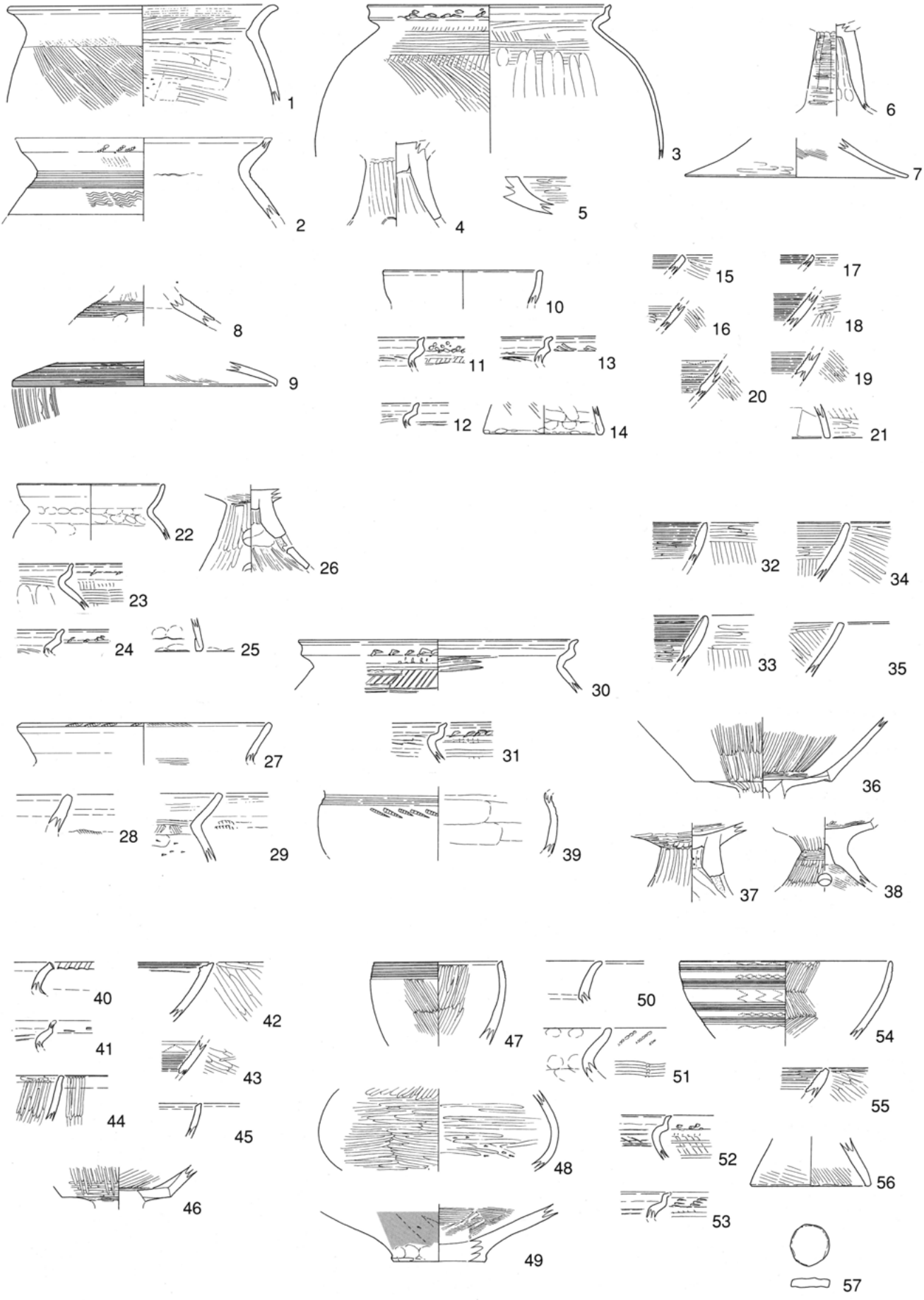




94Ca区　SE14（1～28）

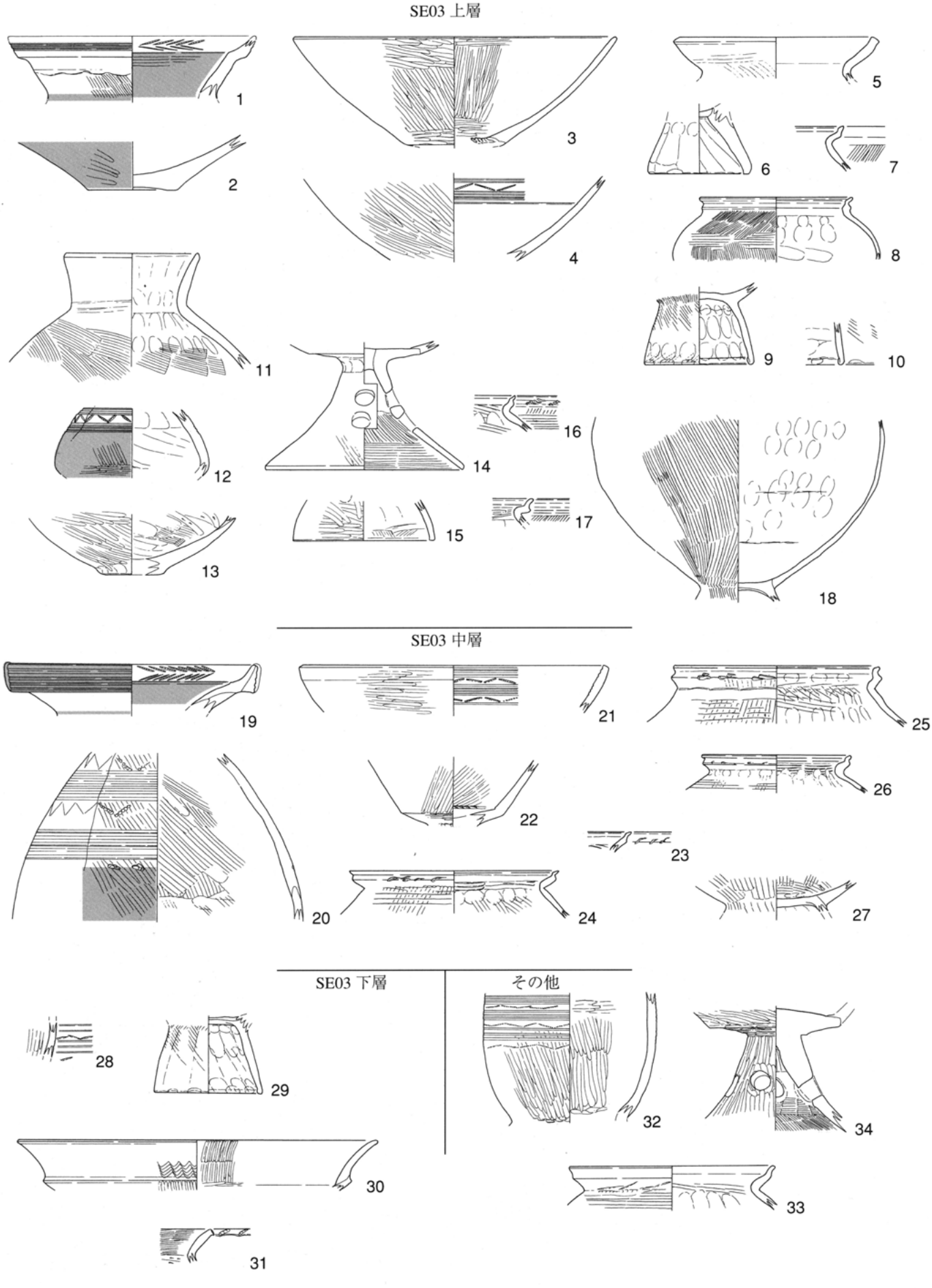


94Ca区　SK09（1～19）　94Ca区　SK34（20～46）

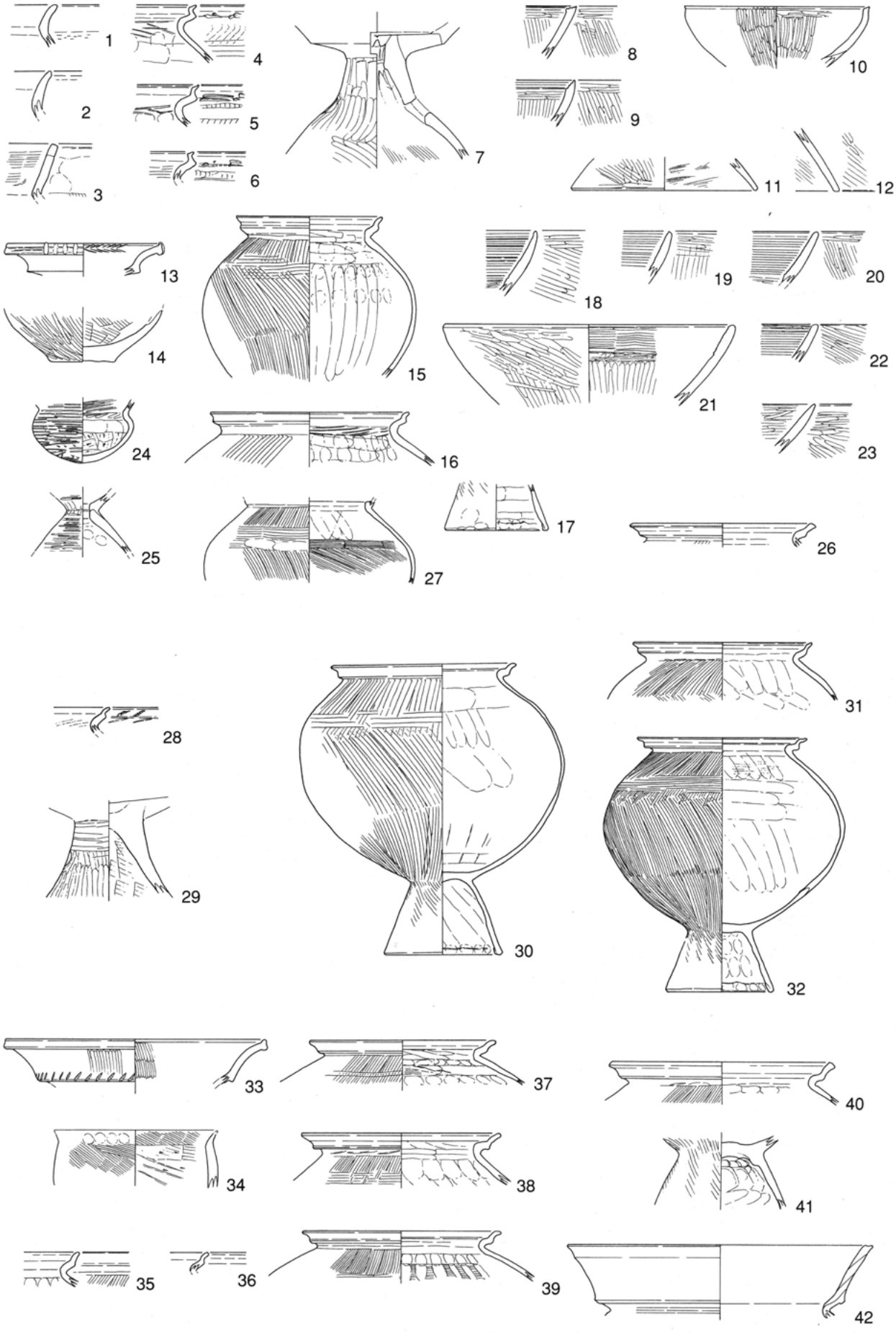


94Ca区　SK04（1～7）　94Ca区　SK32（8、9）　94Ca区　SK07（10～21）　94Ca区　SK08（22～26）　94Ca区　SE05（27～39）
94Ca区　SK34（40～46）　94Ca区　SX01（47～57）

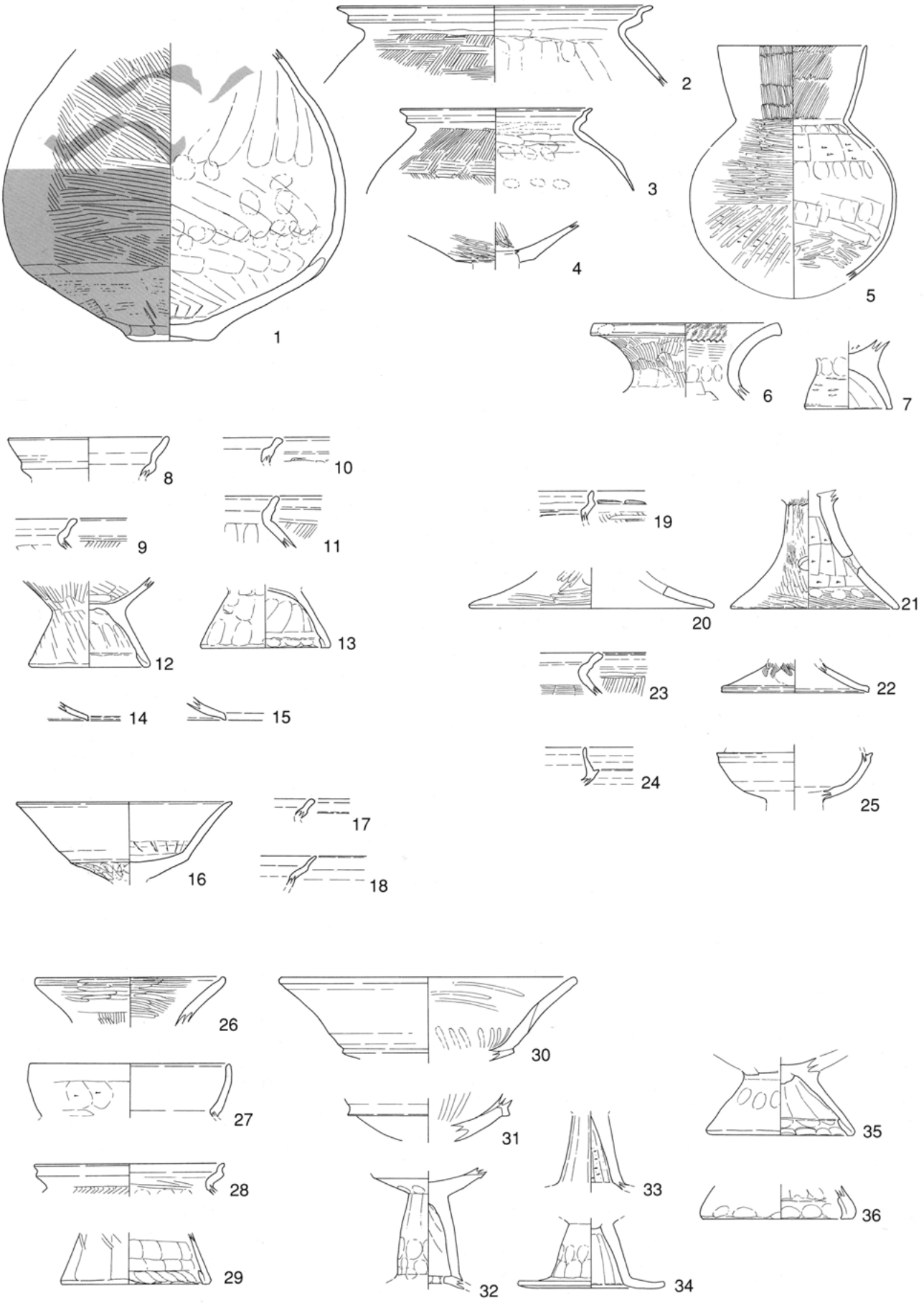
遺物図版 24



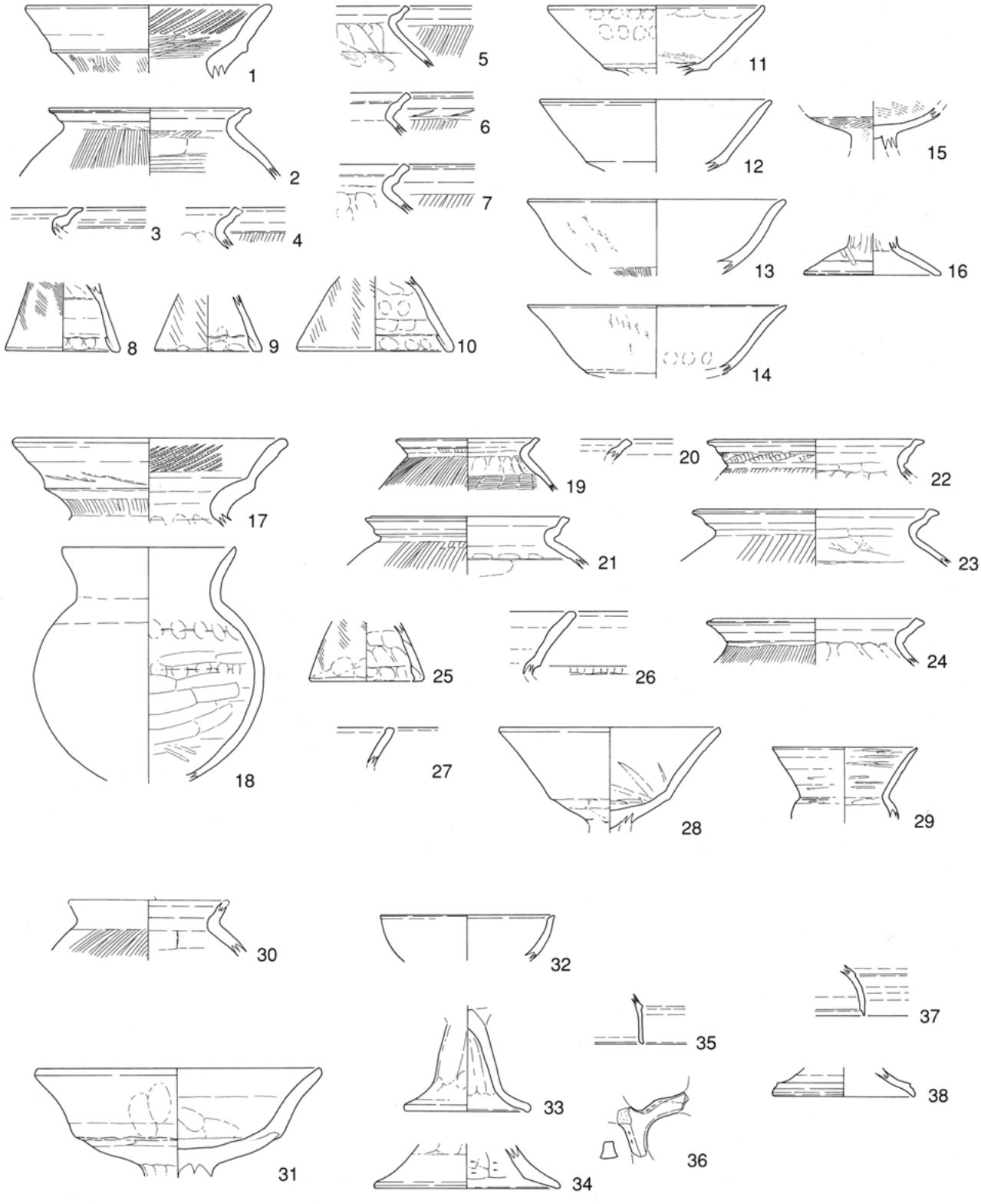
94Ca区　SE03（1～34）



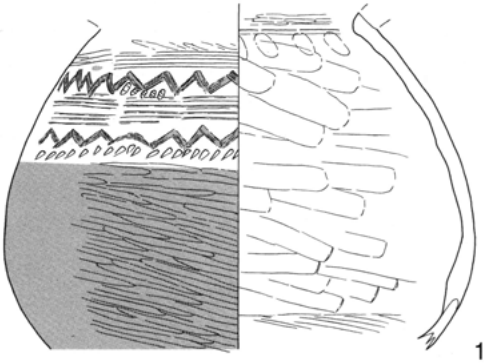
94Ca区　SE15（1～27）　94Ca区　SK26（28～32）　94Ca区　SK27（33～42）

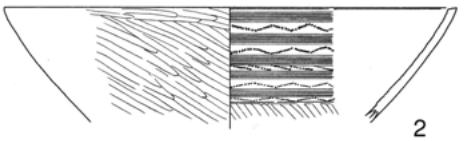


94Ca区　SE10（1～4）　94Ca区　SK24（5～7）　94Ca区　SK33（8～15）　94Ca区　SK31（16～18）　94Ca区　SE24（19～25）
94Ca区　SE19（26～36）

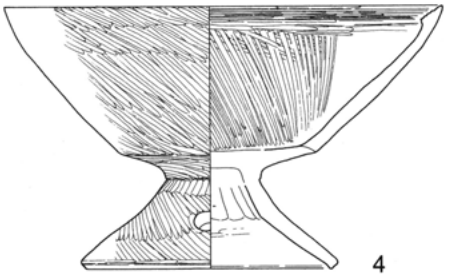


94Cb区　SE21（1～16）　94Cb区　SE22（17～29）　94Cb区　SE07（30）　94Cb区　SK47（31）　94Cb区　SK41（32～36）
94Cb区　SE30（37、38）

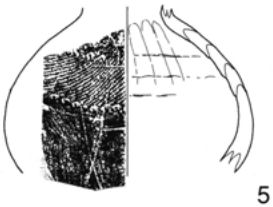

1


2

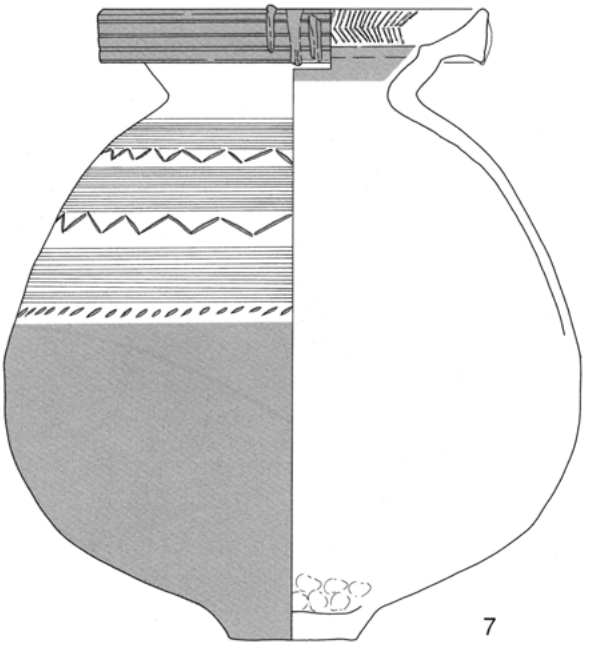

3


4

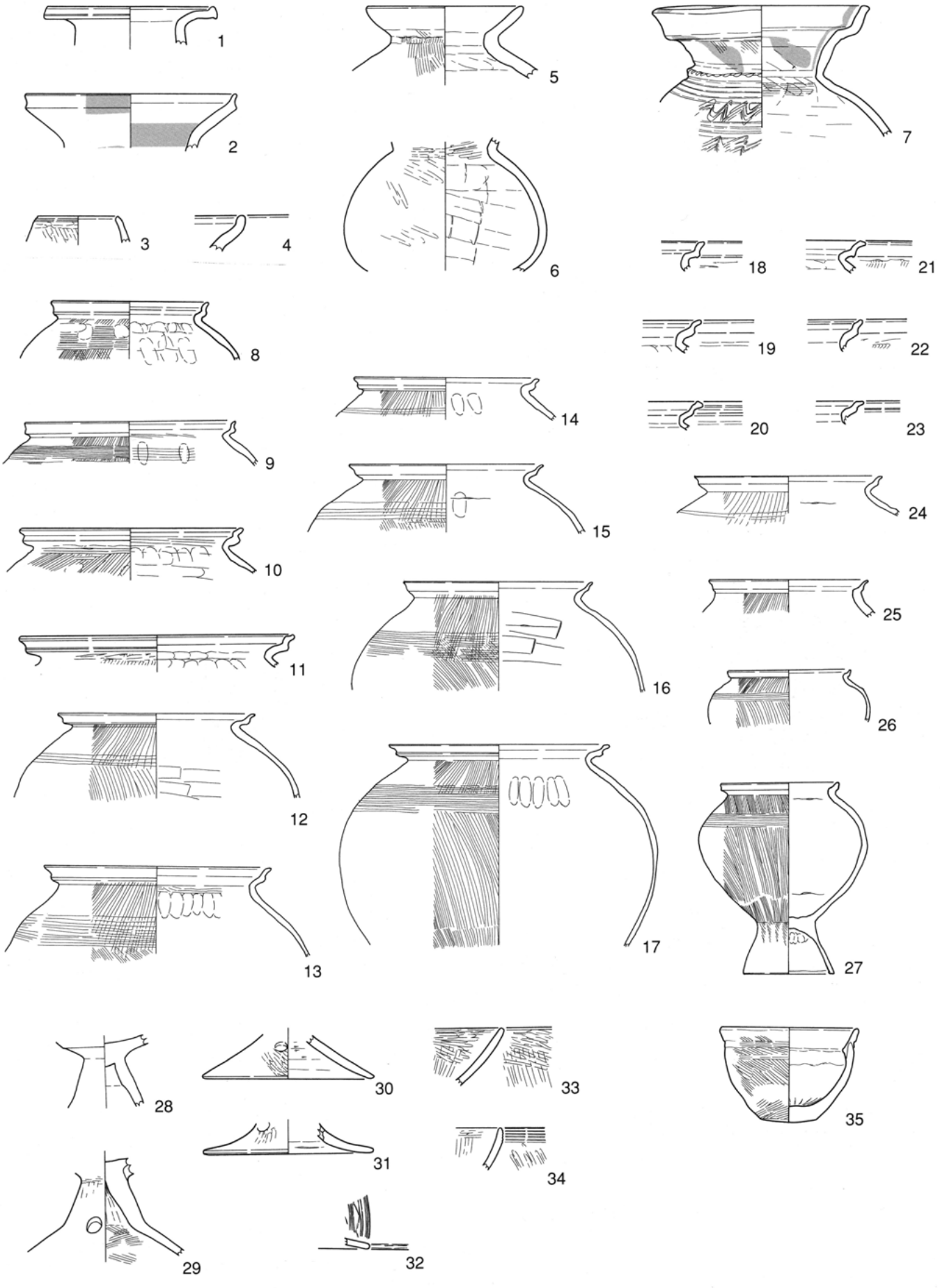



5

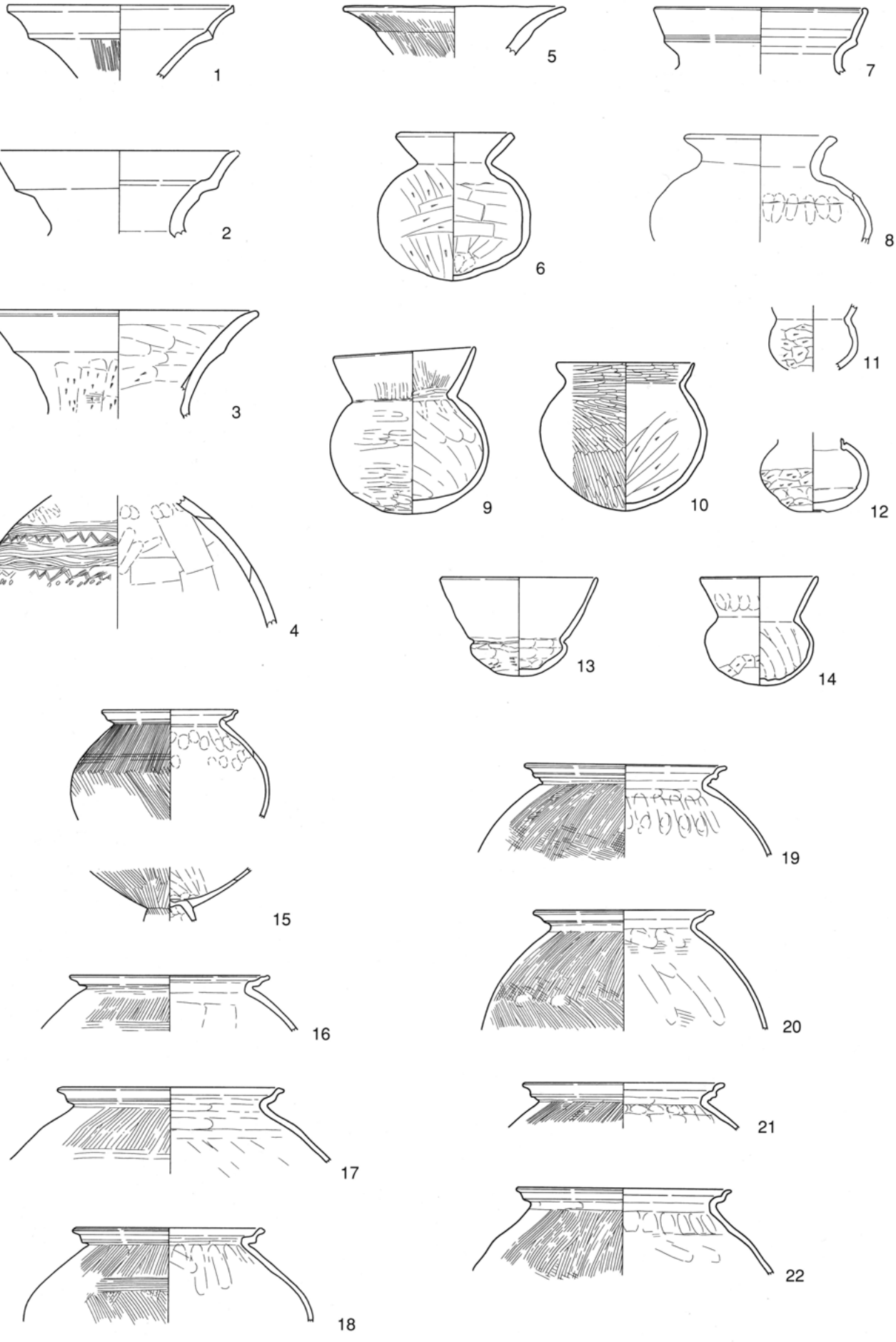

6


7

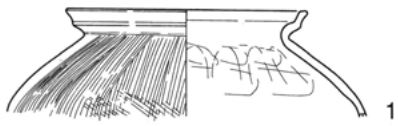
94Cb区　SE07（1～3）　94Cb区　SK15（4）　94Ca区　SK45（5）　94Ca区　SD25（6）　94Ca区（7）

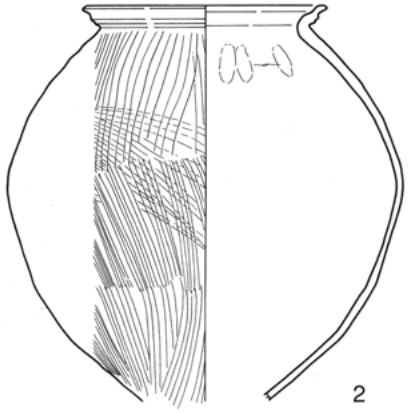


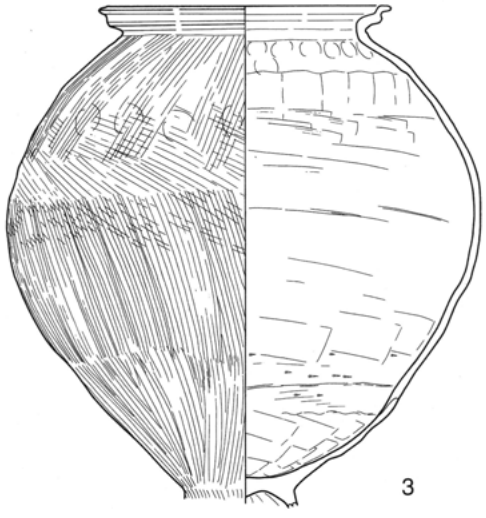
94Cb区　SD31（1～35）

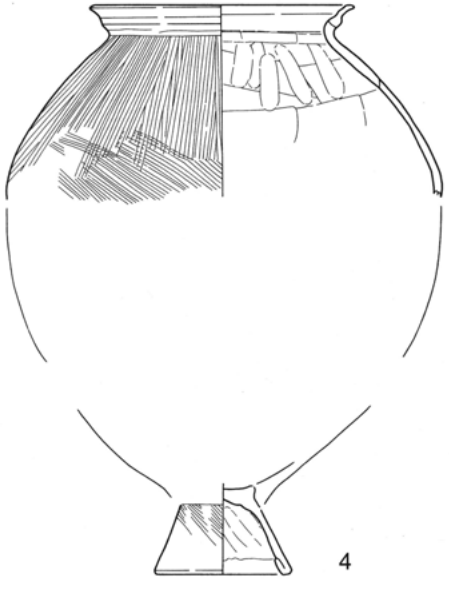


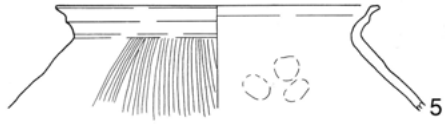
94Cb区　SDI（1～22）

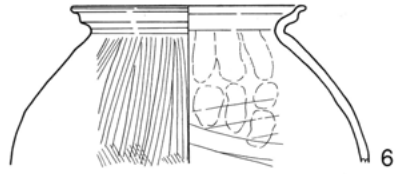

1

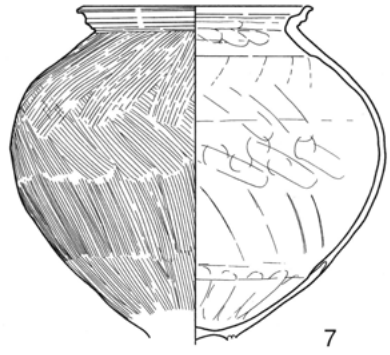

2

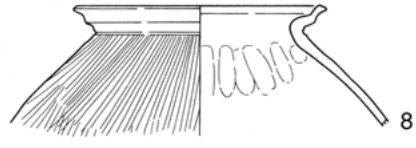

3

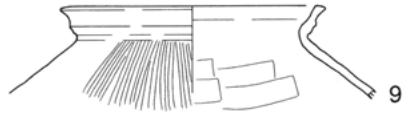

4


5


6

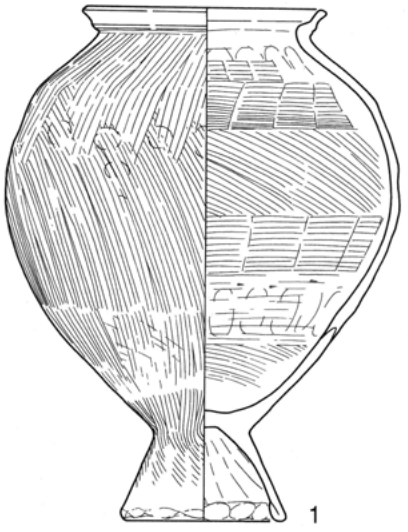

7


8


9

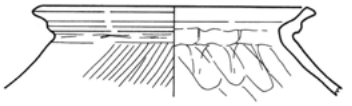

10

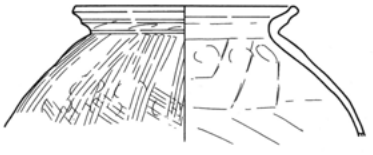
94Cb区　SDI（1～10）


1

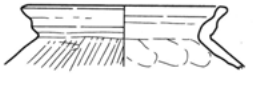

2

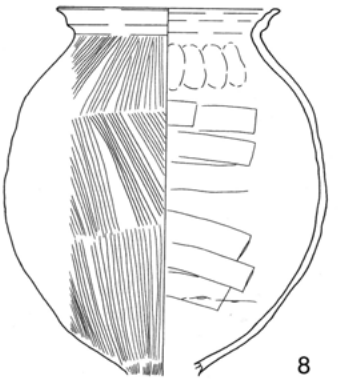

3

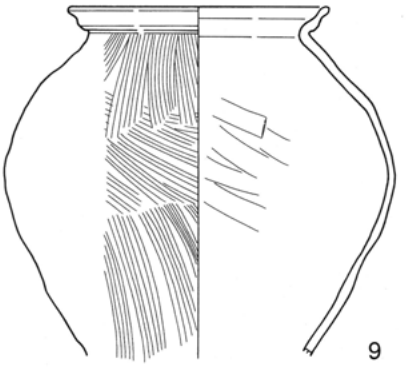

4

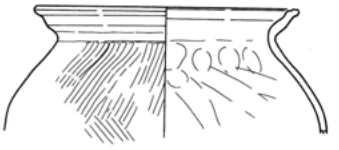

5

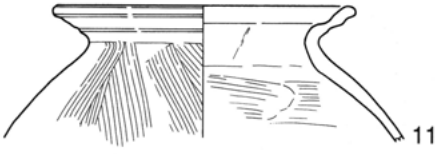

6

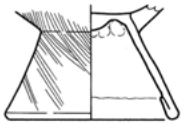

7


8

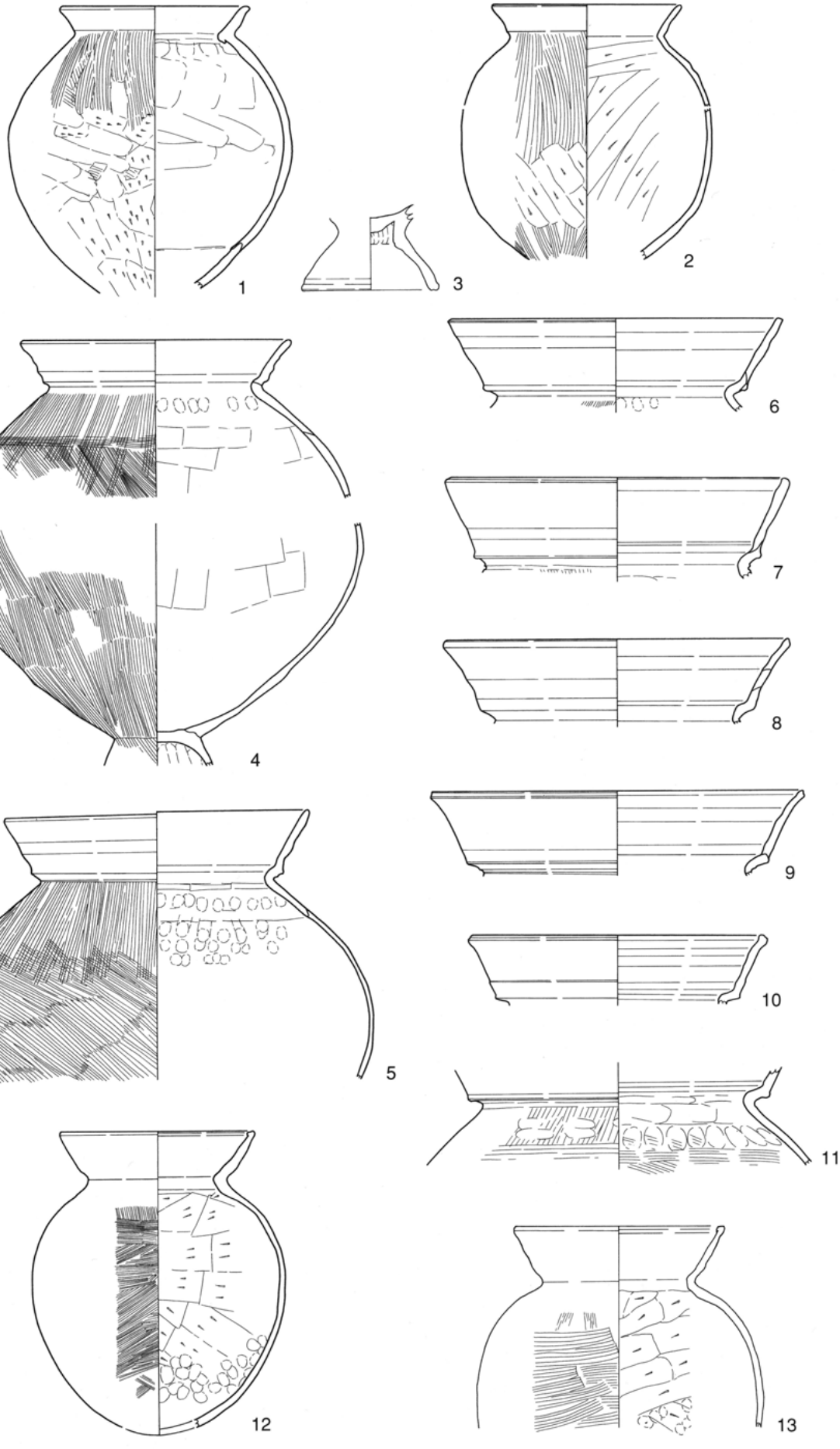

9


10

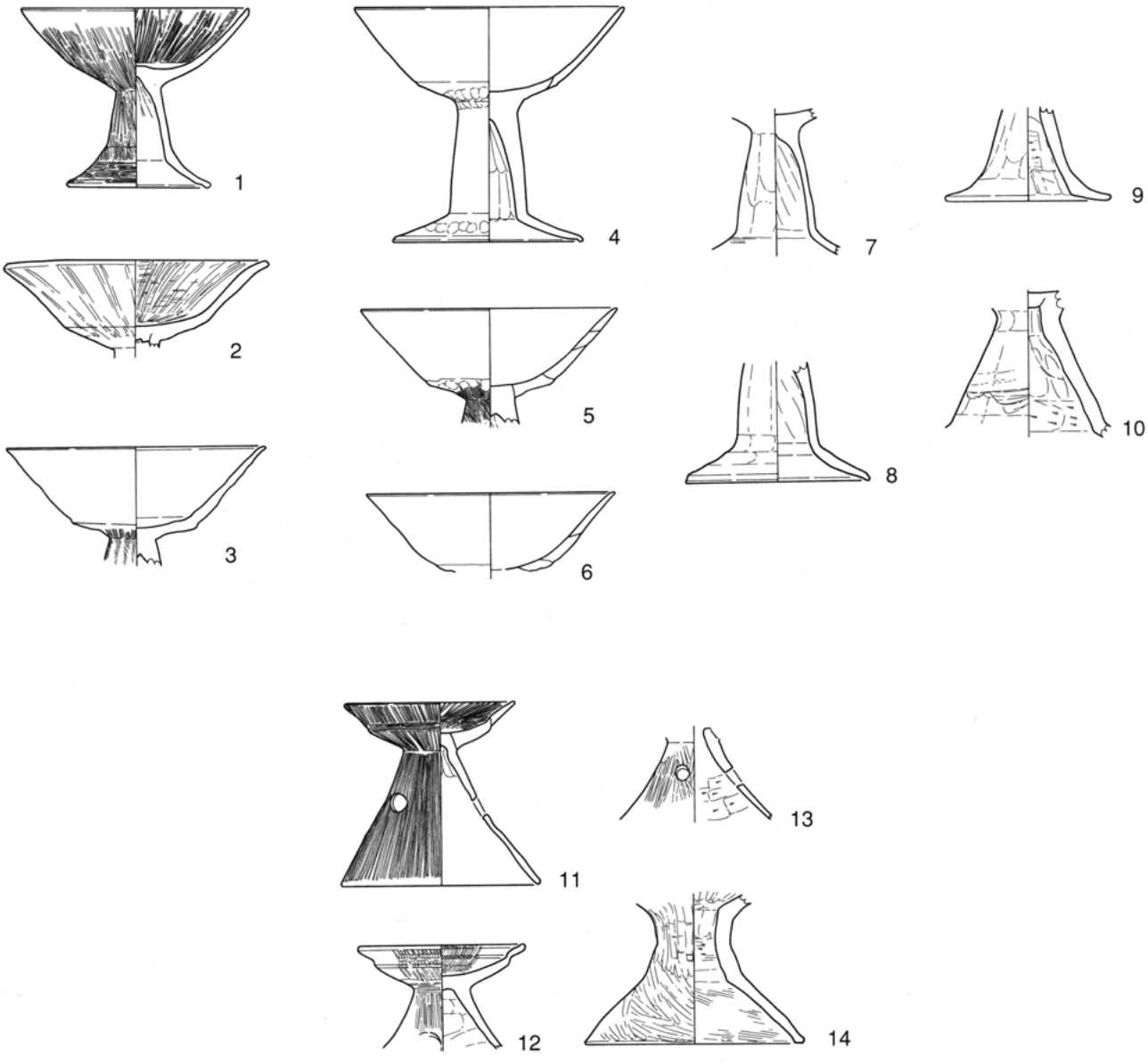

11


12

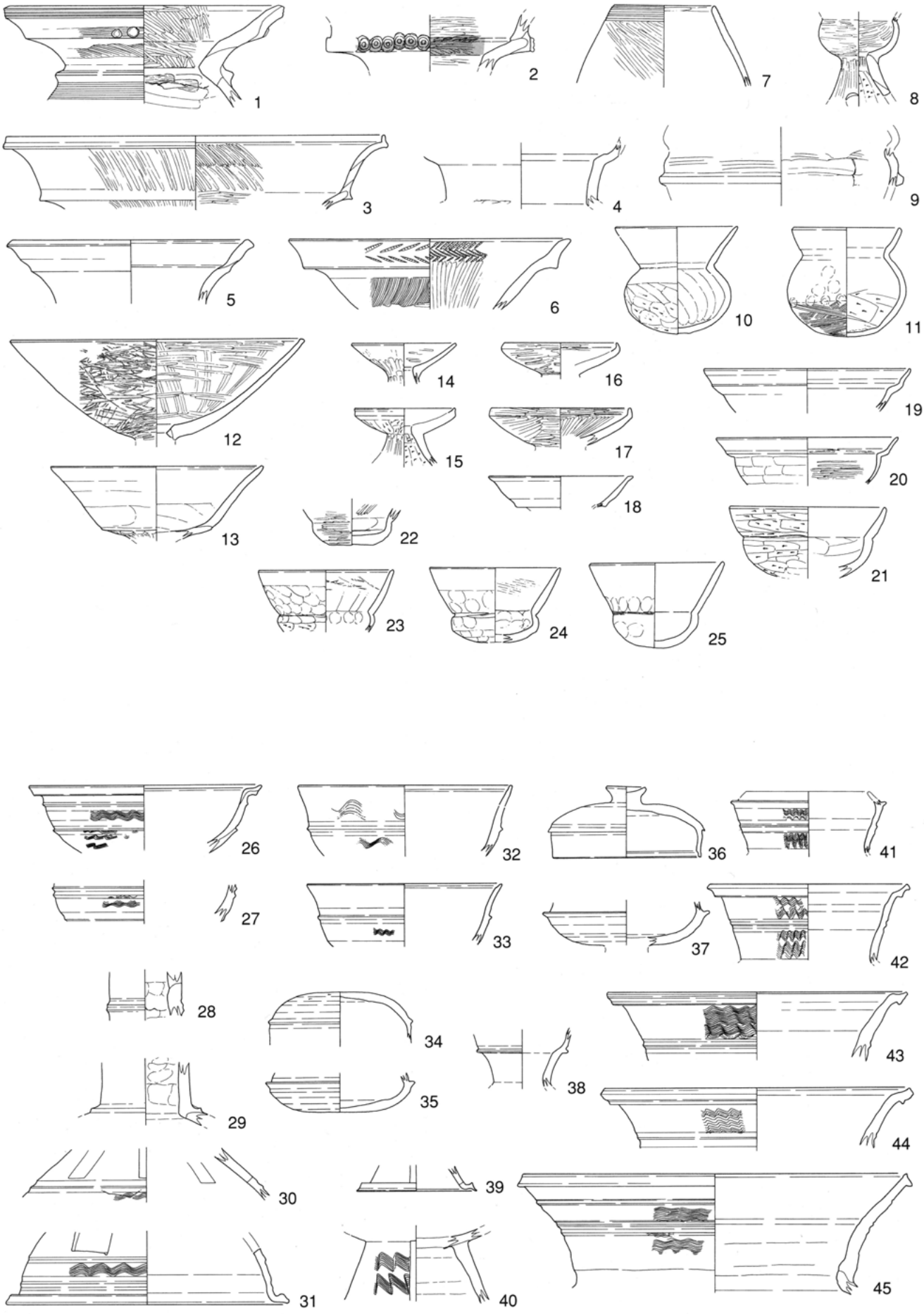
94Cb区　SDI（1～12）



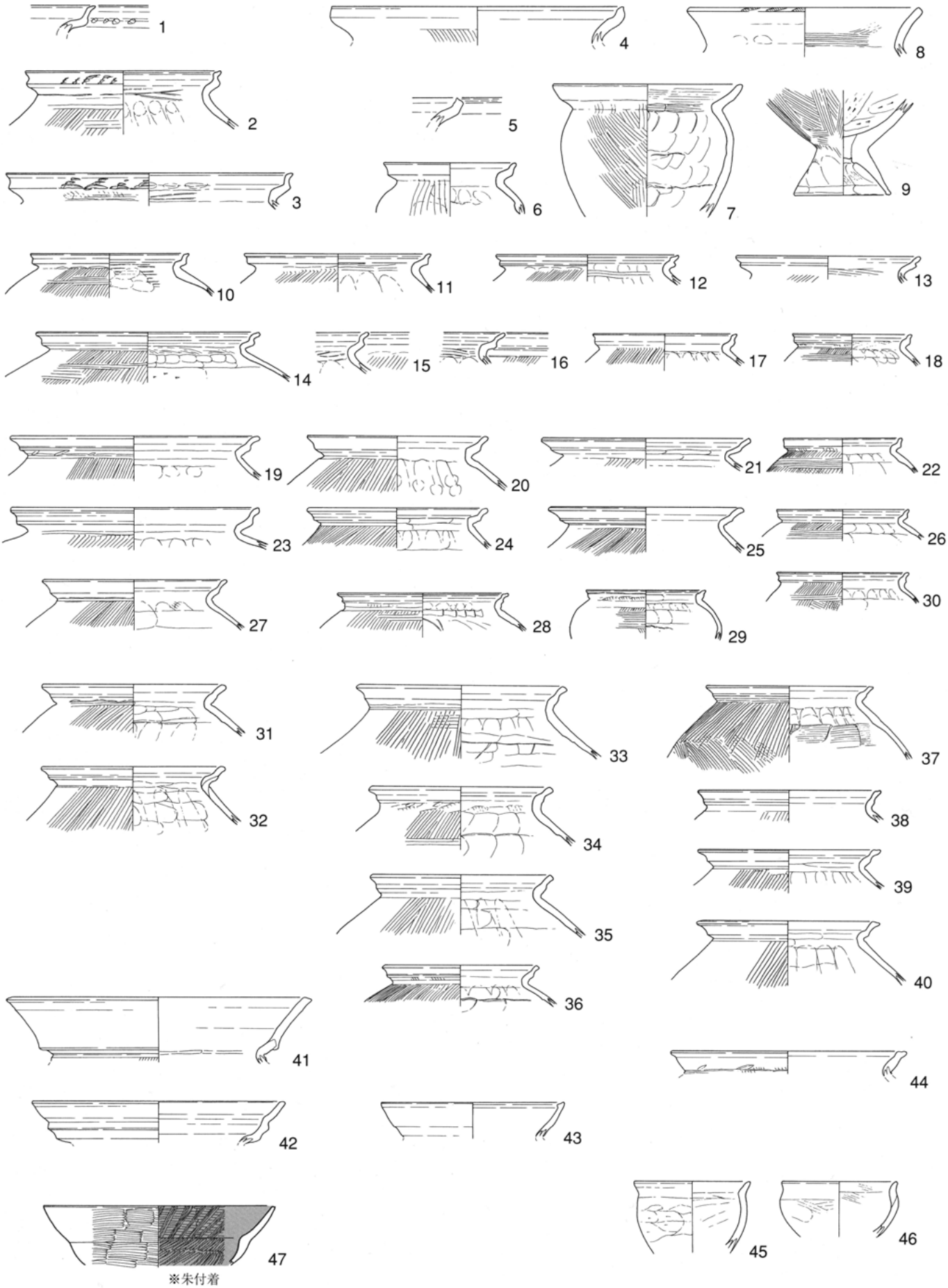
94Cb区　SDI（1～13）



94Cb区　SDI（1～14）

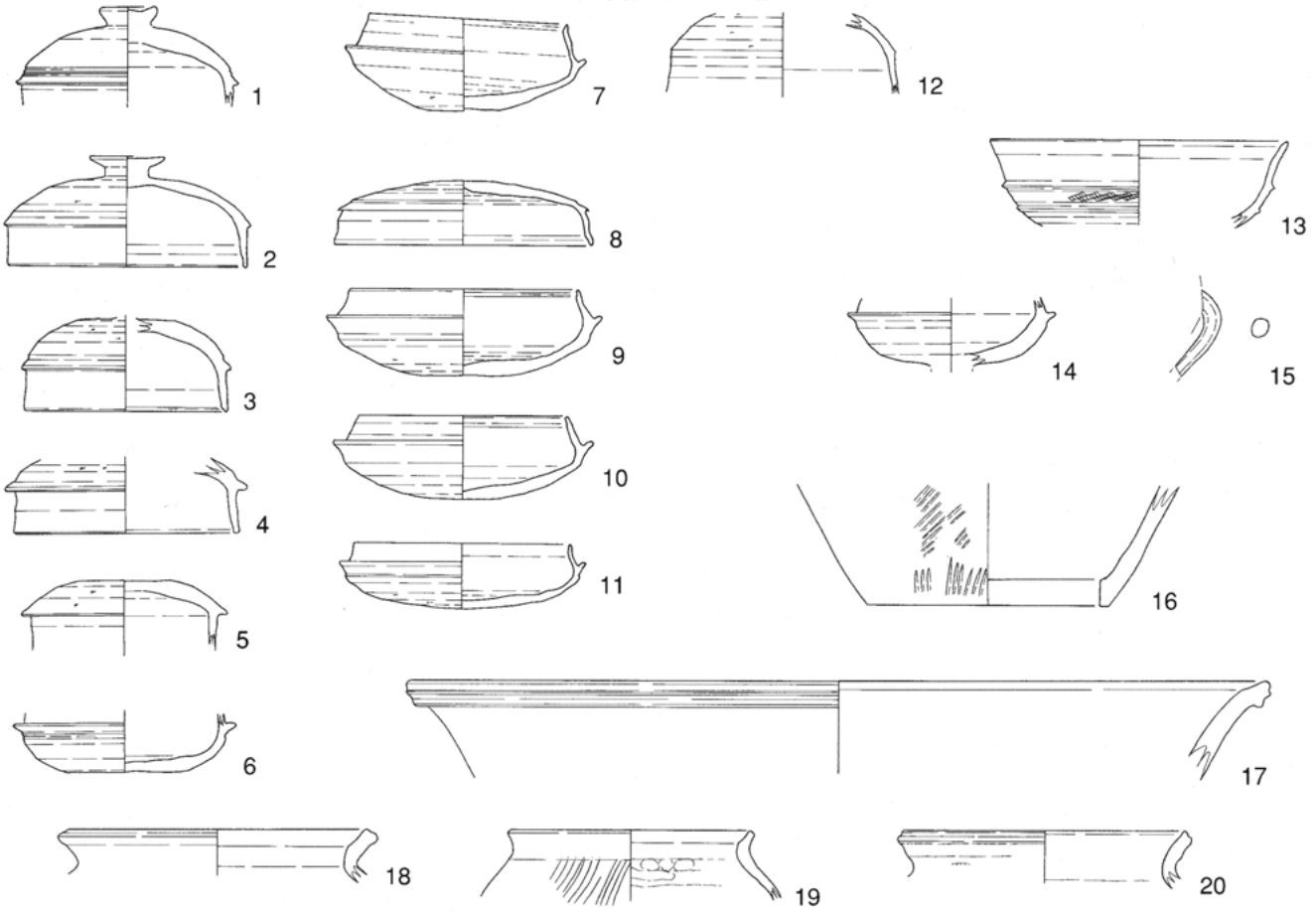


94Ca区　SDI（1～9、11～25）　94Ca区（10、26～45）

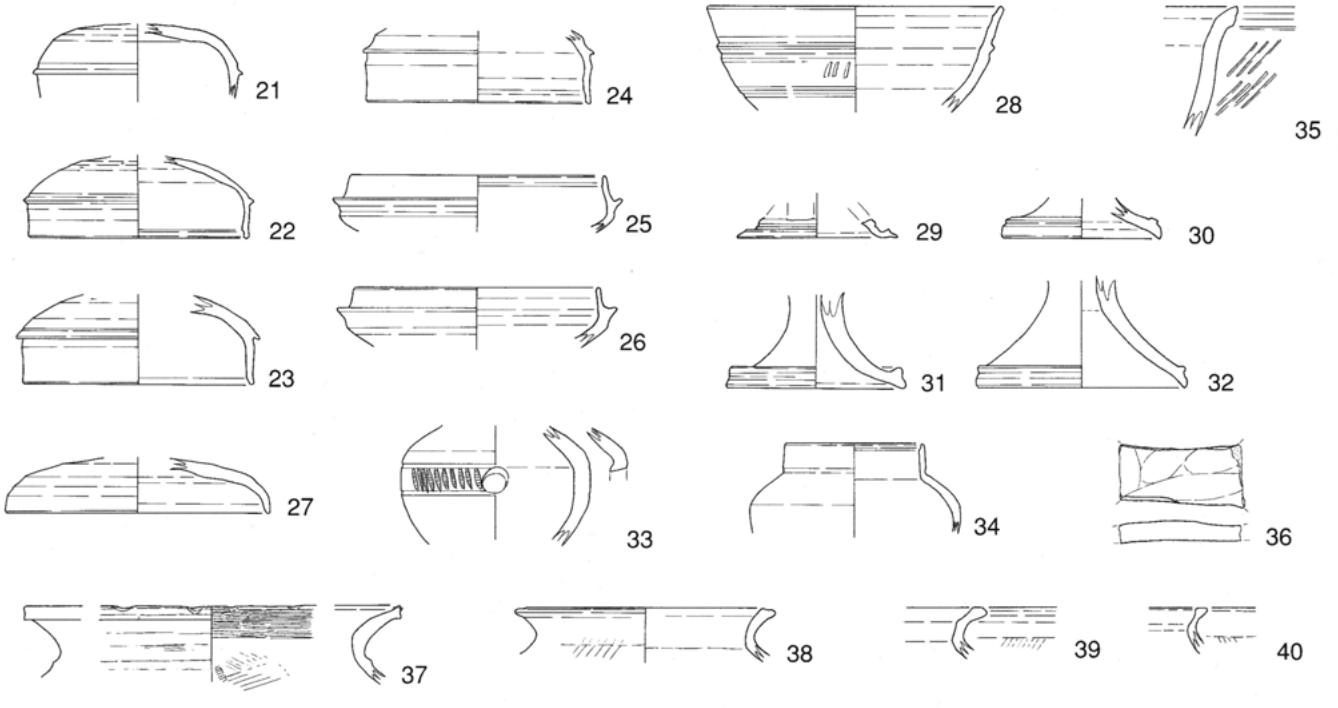


94Ca区　SDI（1～47）

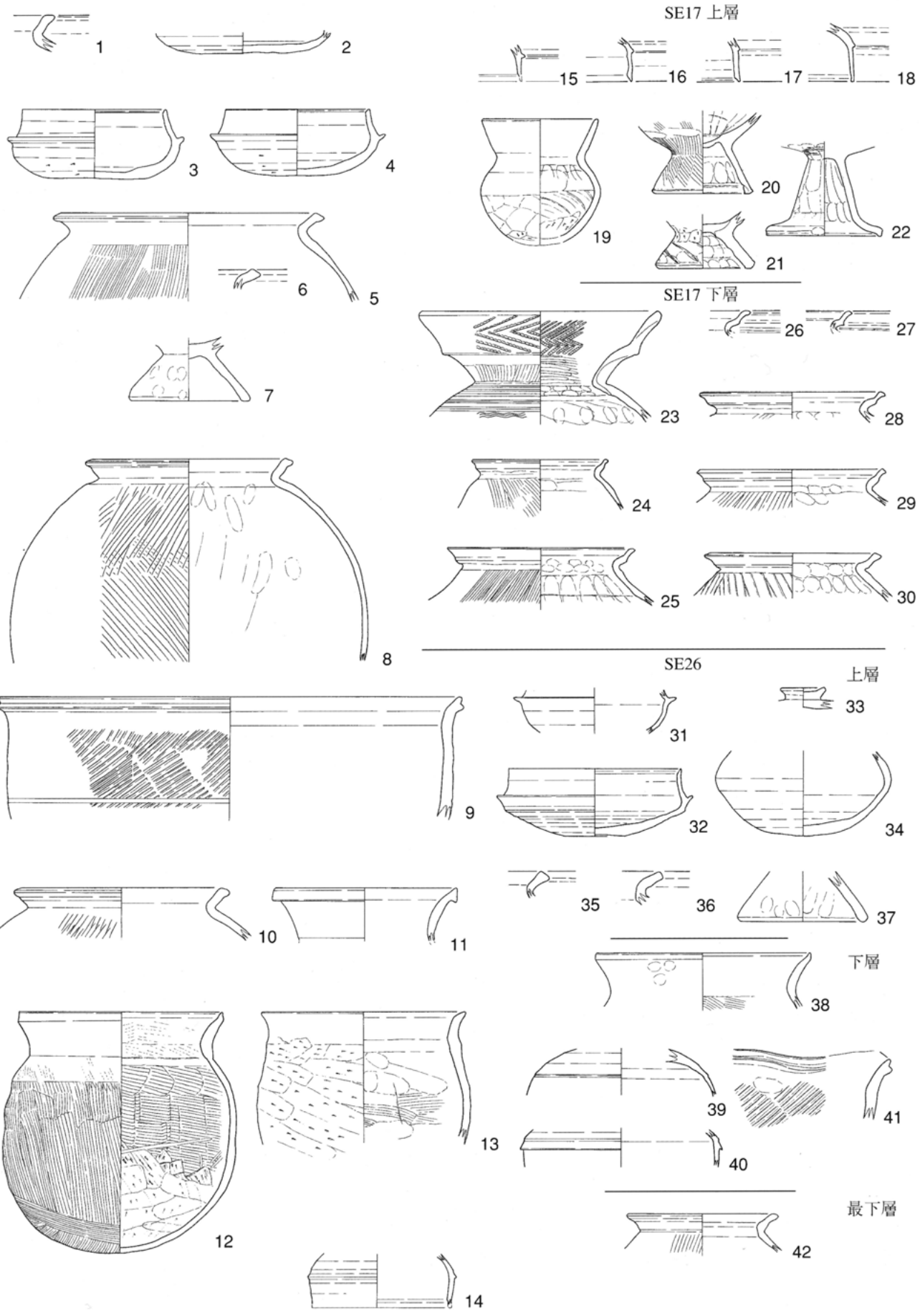
94Ca区 黄灰色シルト層



その他

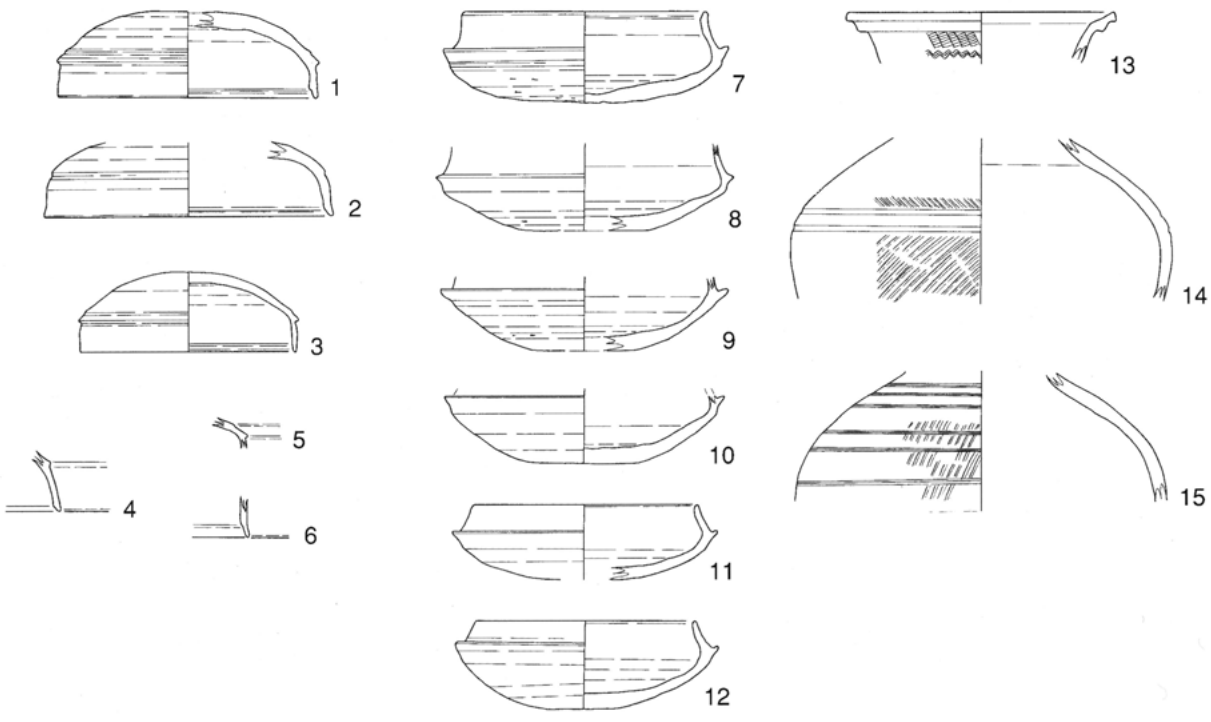


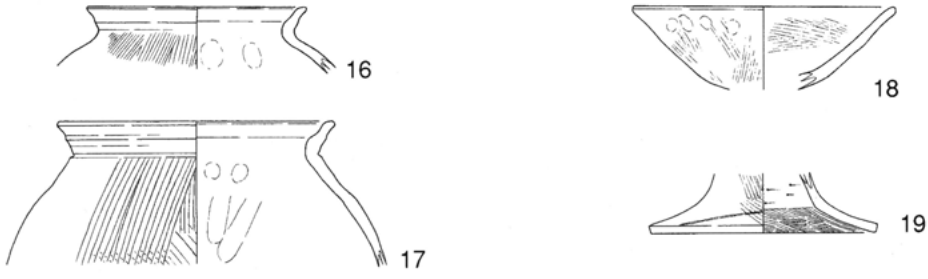
94Ca区（1～14、16～40）　94Ca区　SD65（15）



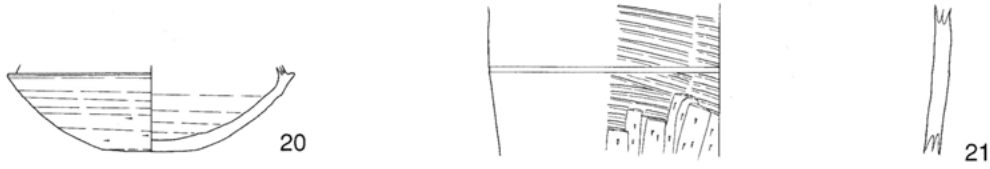
94Ca区　SD44（1、2）　94Ca区　SX05:P02（3～7）　94Ca区（8、9）　94Ca区　SX05:P01（10、11）　94Ca区　SK38（12、13）
94Ca区　SK39（14）　94Ca区　SE17（15～30）　94Ca区　SE26（31～42）

SE23 上層





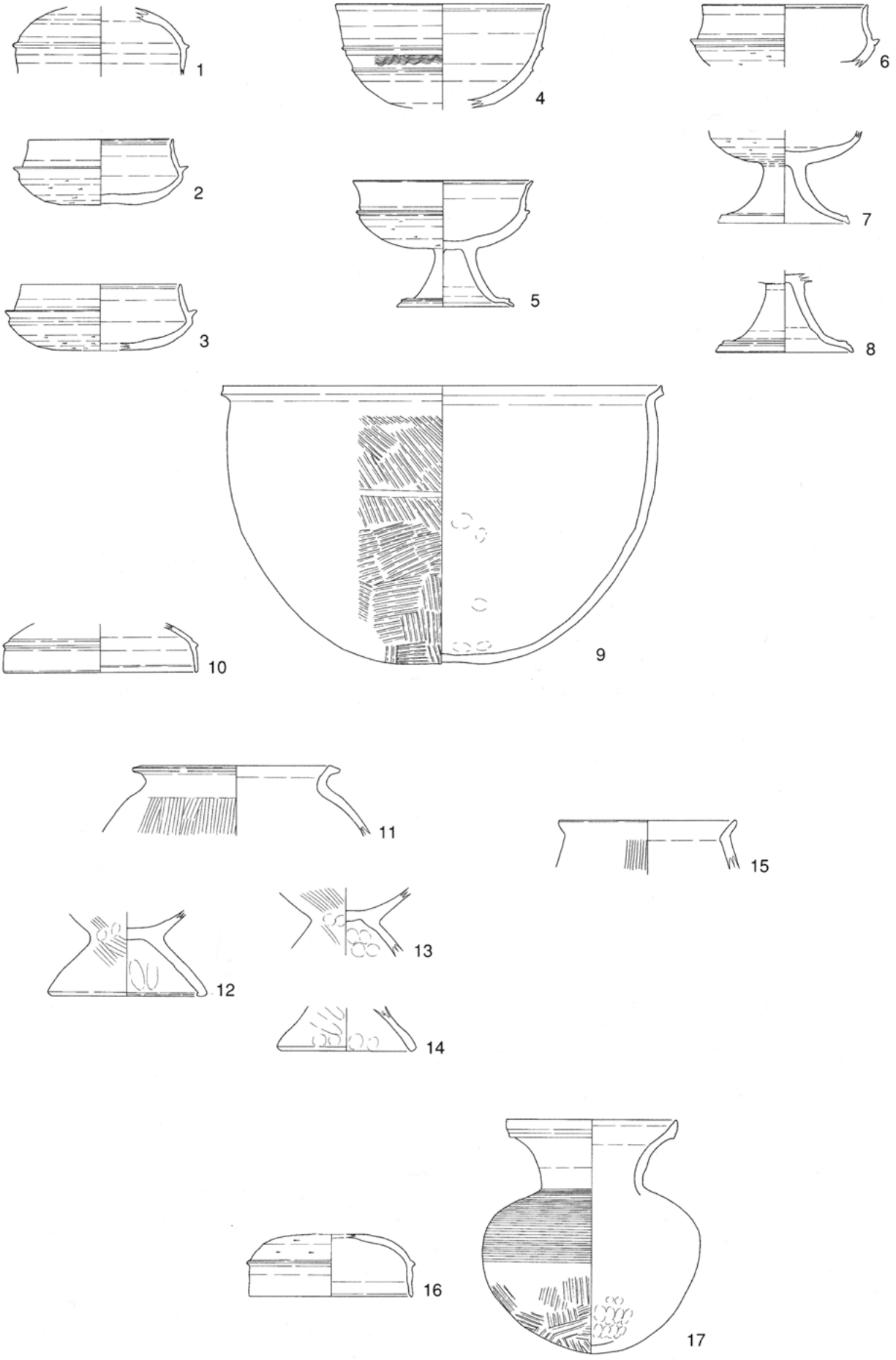
SE23 中層



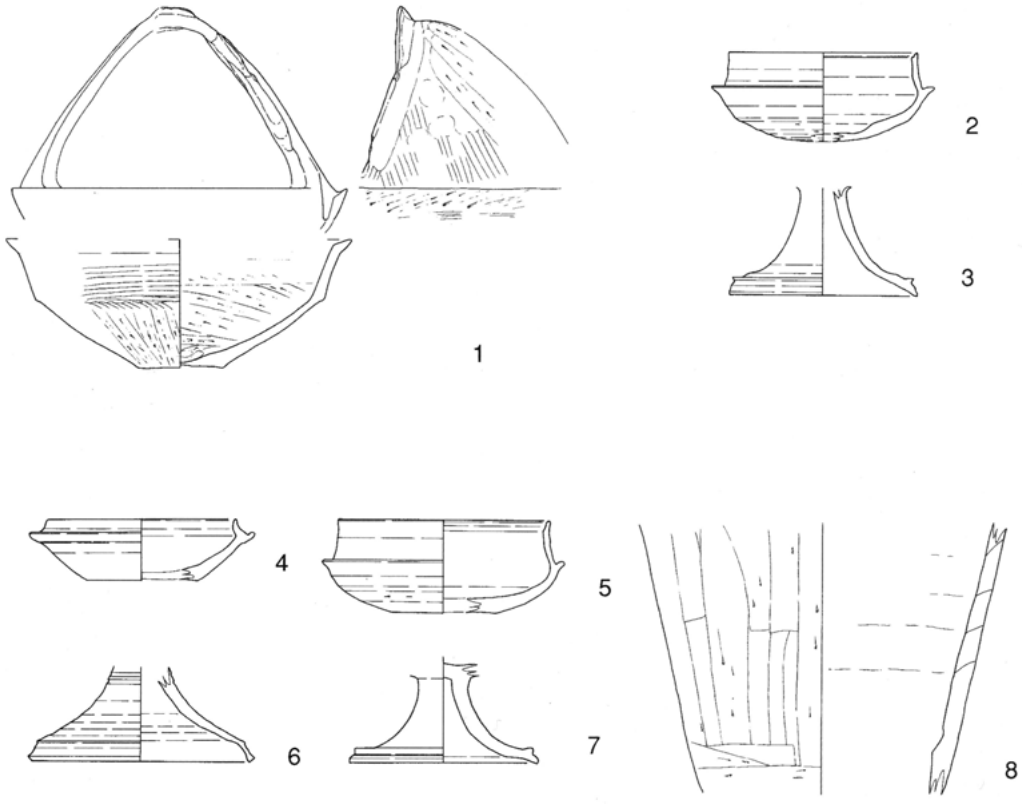
SE23 下層



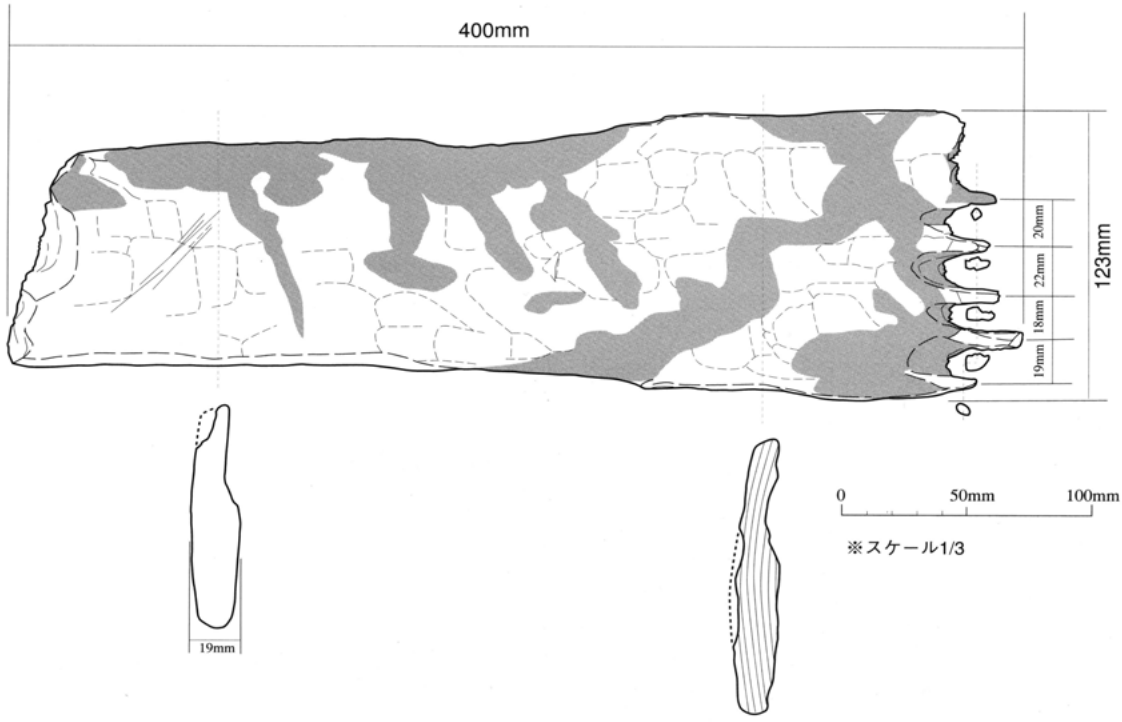
94Ca区　SE23（1～22）



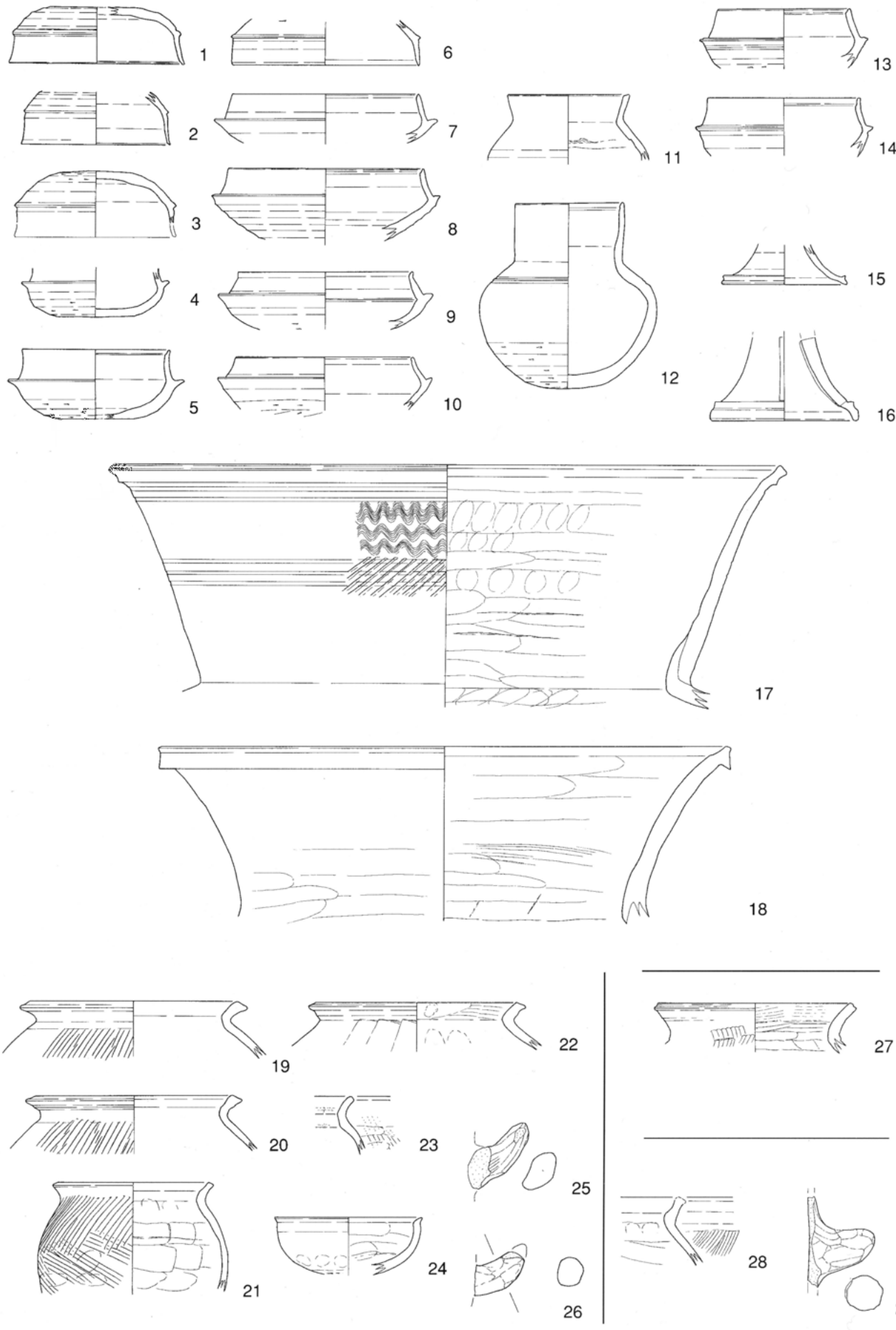
94Cb区　SE29（1～15）　94Cb区　SE28（16、17）



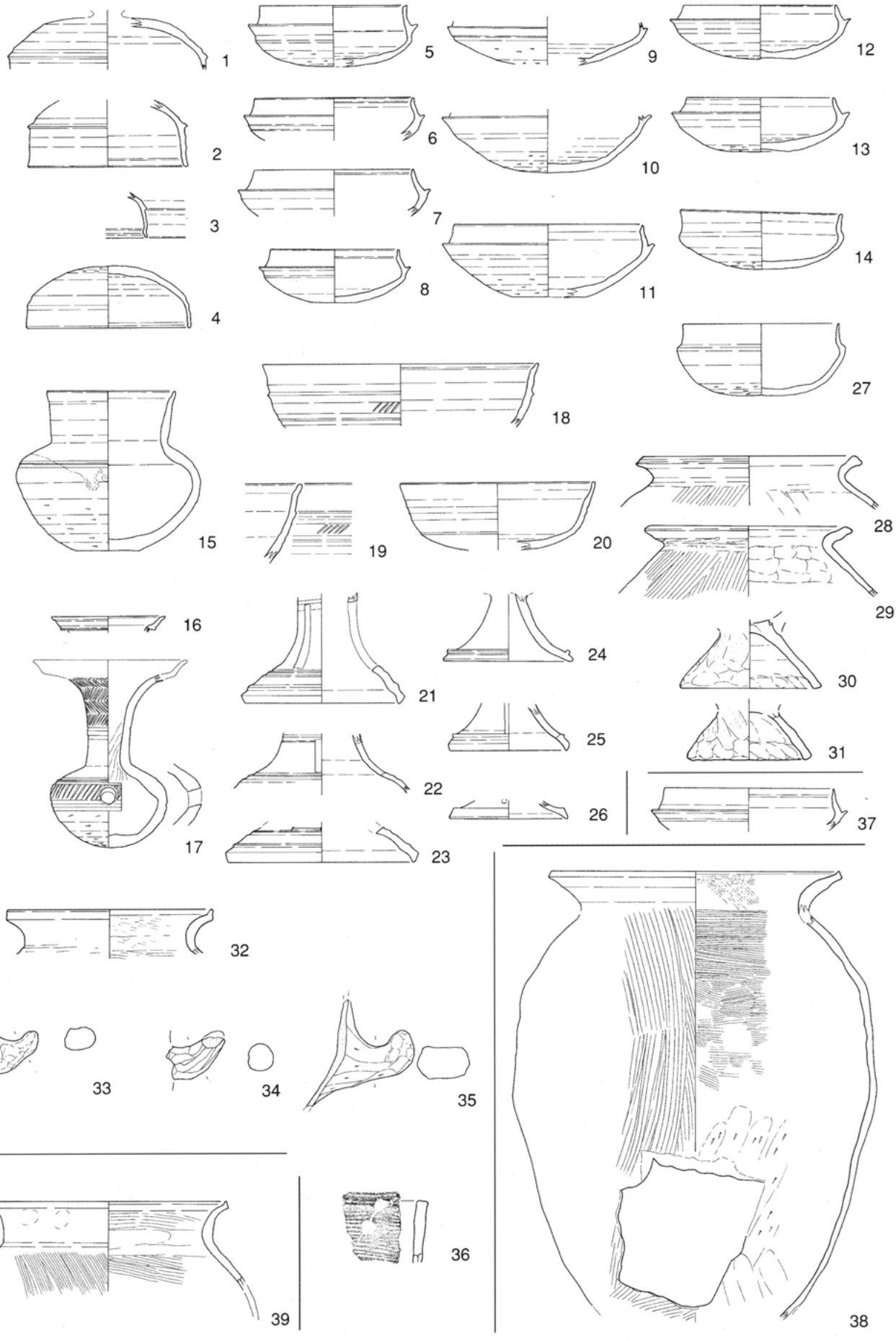
94Ca区　SD43（1～3）　94Ca区　SD42（4～8）　94Ca区　SD10（9）



SD42 出土　琴（1/3）

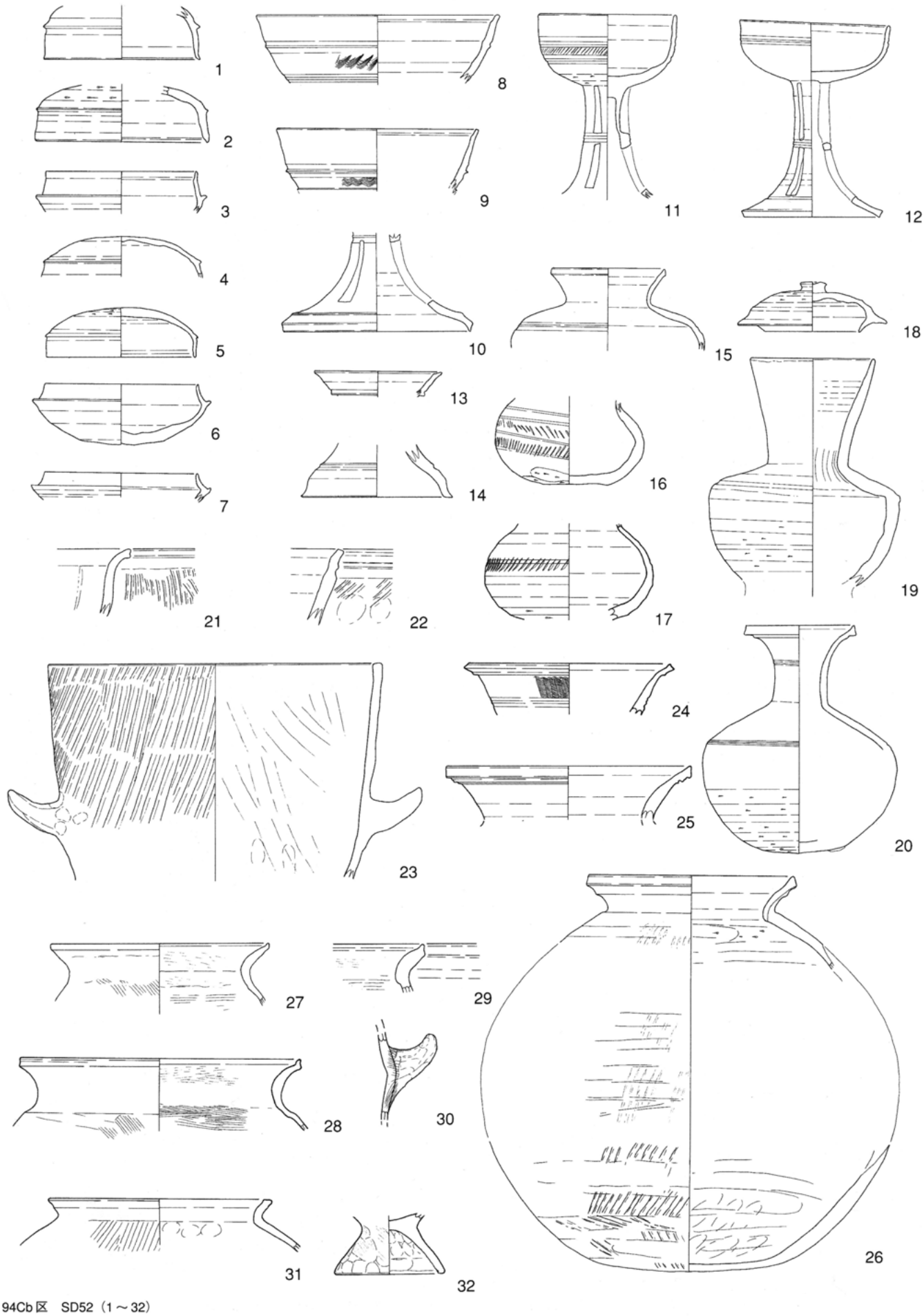


94Cb区　SD46（1～26）　94Cb区　SD47（27）　94Cb区　SD48（28、29）

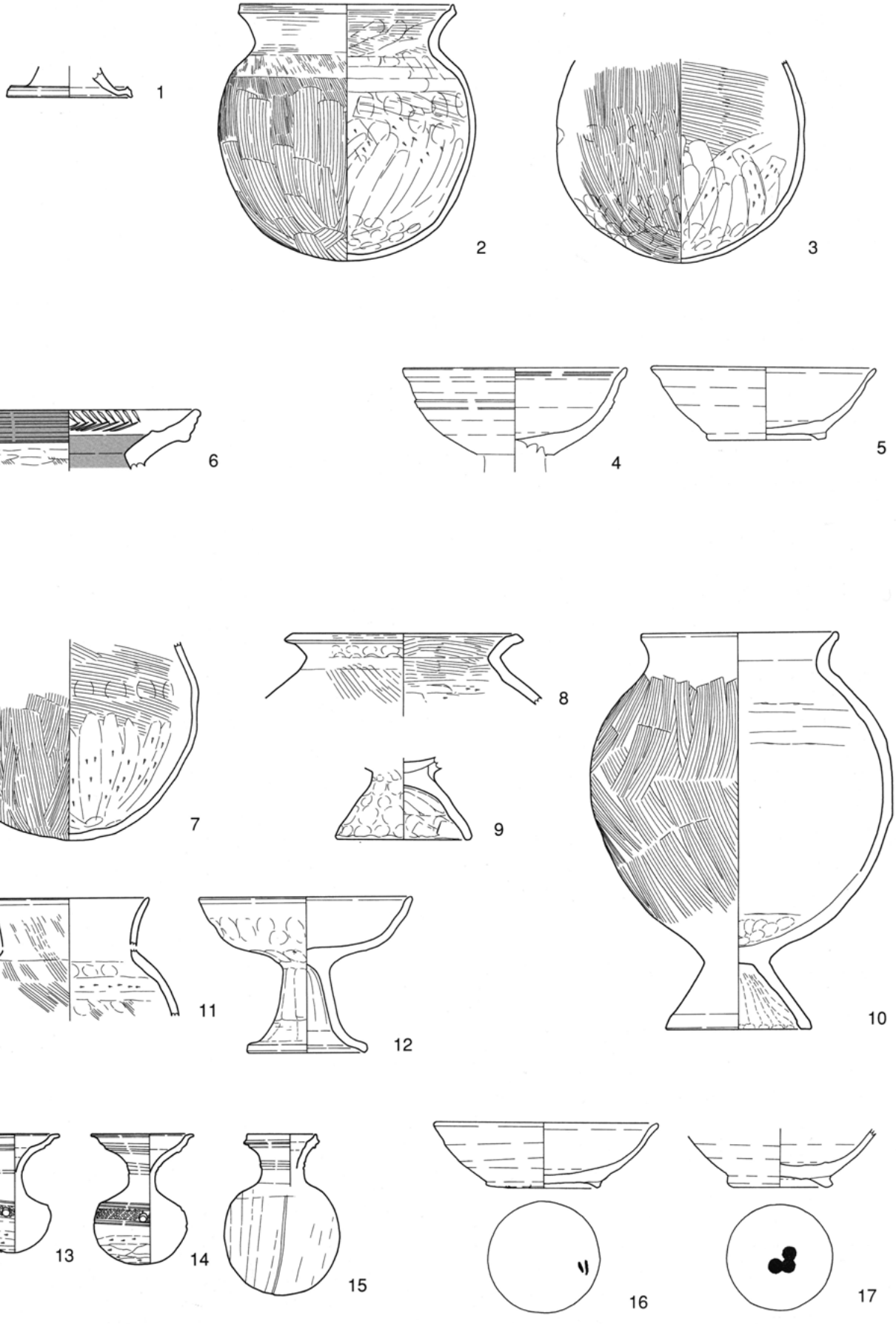


94Cb区　SD49（1～36）　94Cb区　SD51（37）　94Cb区　SD46（38）　94Cb区（39）

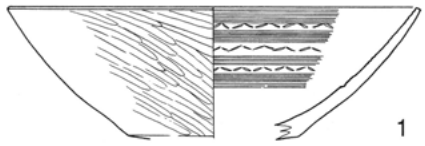
遺物図版 44

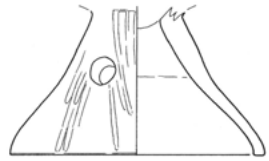


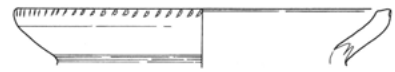
94Cb区　SD52（1～32）

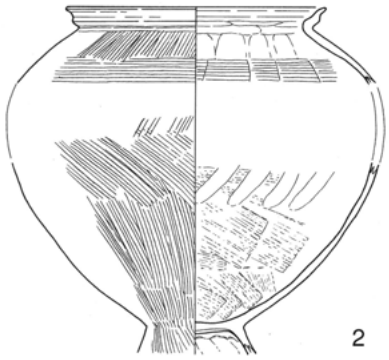


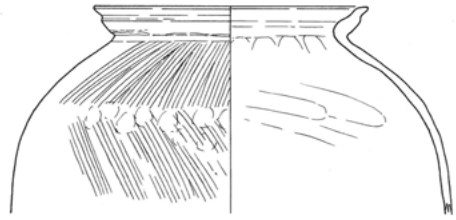
94B区　SE01（1）　94B区　SE02（2、3）　94A区　SD05（6）　94A区　SB03:P－4（7）　94A区　SD Ⅱ（8、9、10）
94A区　SZ01（11～15）　94B区（4、5）　94A区　SK41（16、17）

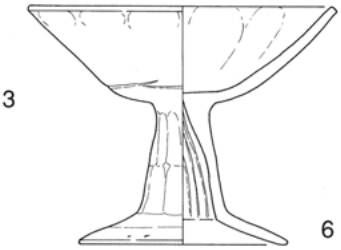

1

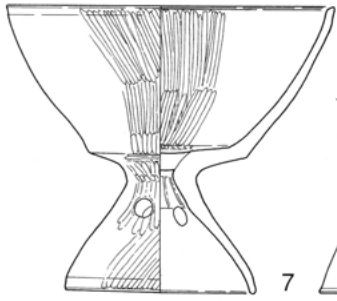

5


4

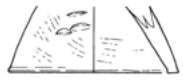

2

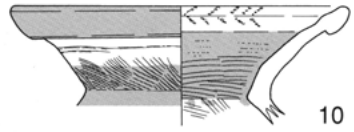

3


6

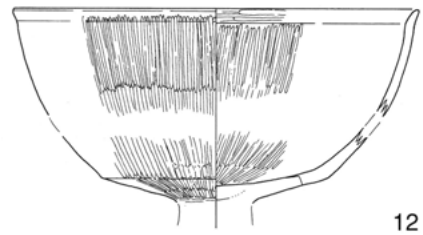

7

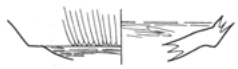

8


9

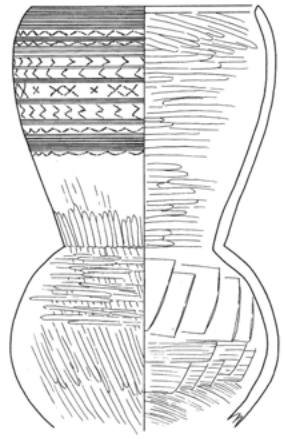

10


11

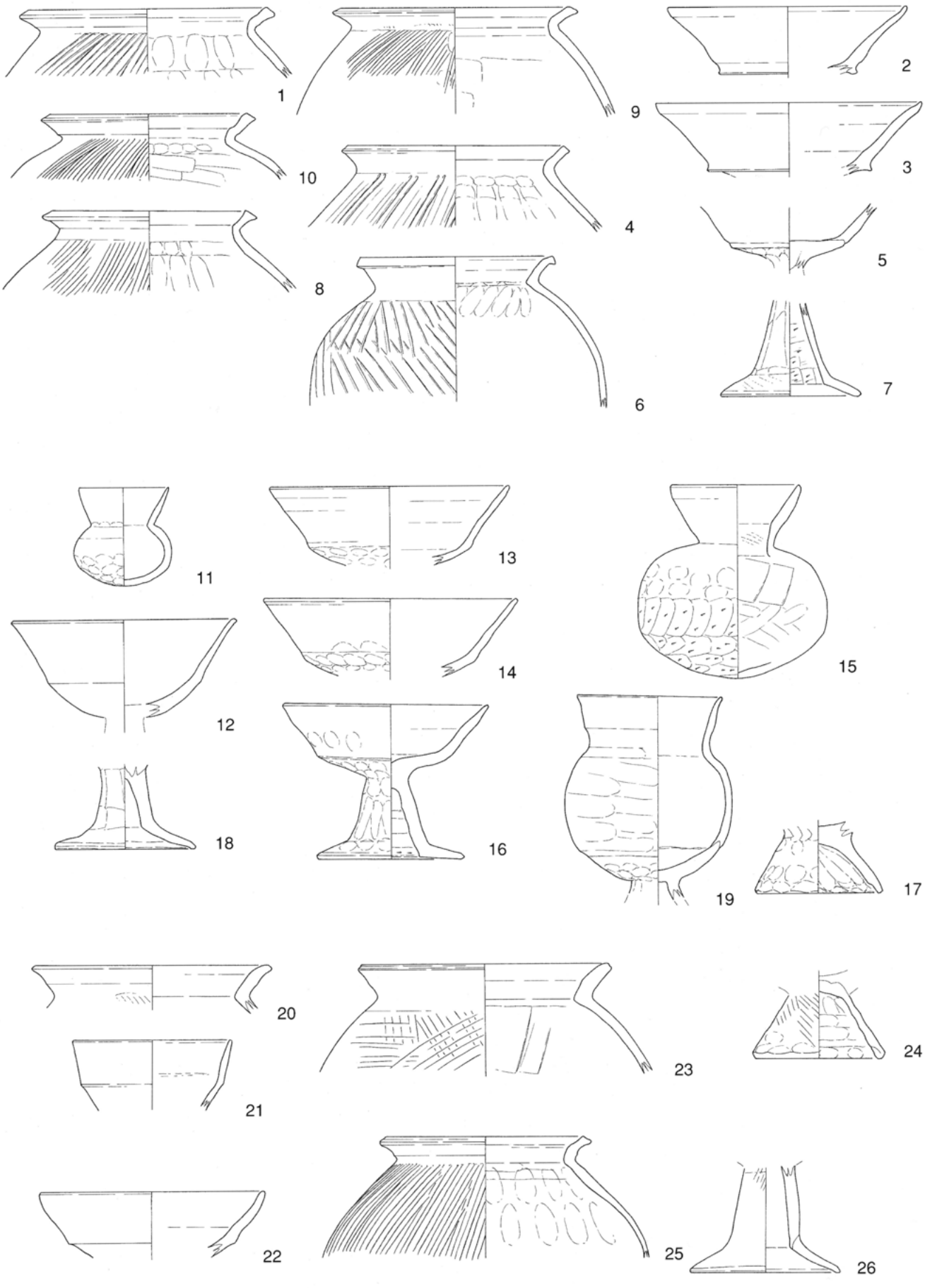

12


13

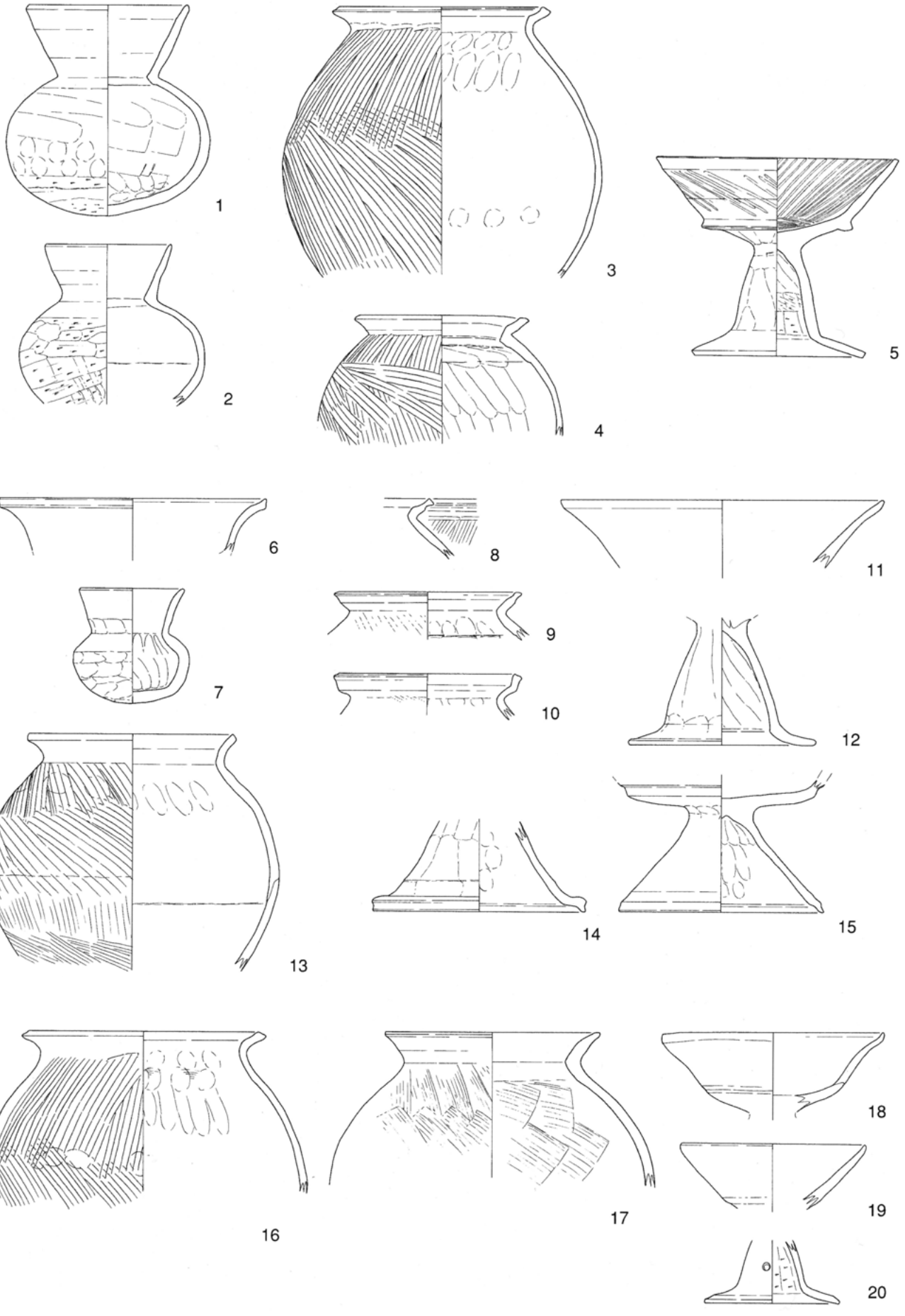

14


15

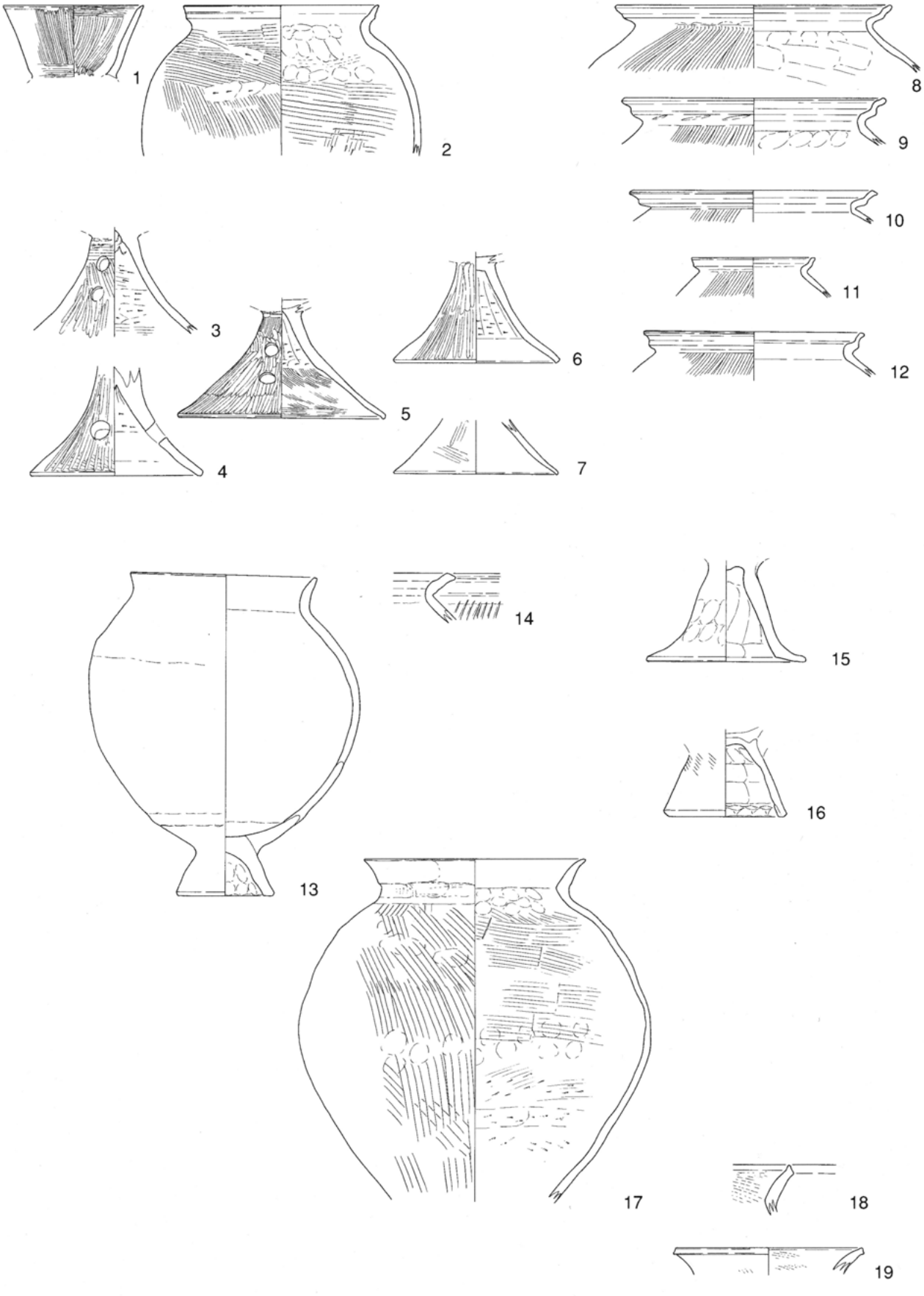
95A区　ST（1）
95Bb区　SD07（2）
95Bb区　SD08（3）
95Bb区　SD14（4、6）
95C区　大畦畔上（5）
95Ea区（7～9、13～15）
95Ea区　SD02（10）
95Ea区　SD03（11）
95Ea区　SD04（12）



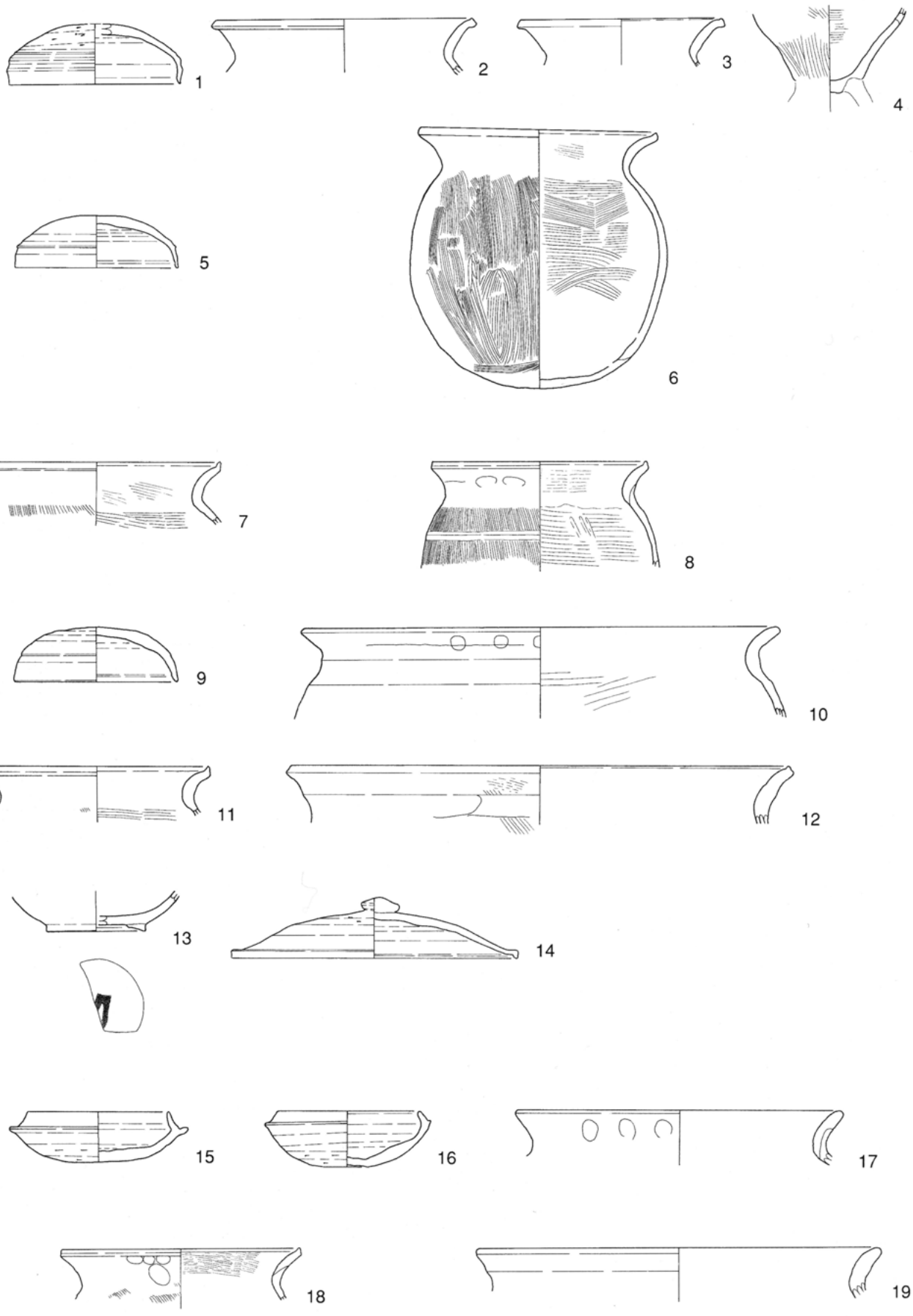
95Eb区　SB04（1～10）　95Eb区　SB01（11～17）　95Eb区　SB18（18、19）　95Eb区（20～24）　95Eb区　SB02（25、26）



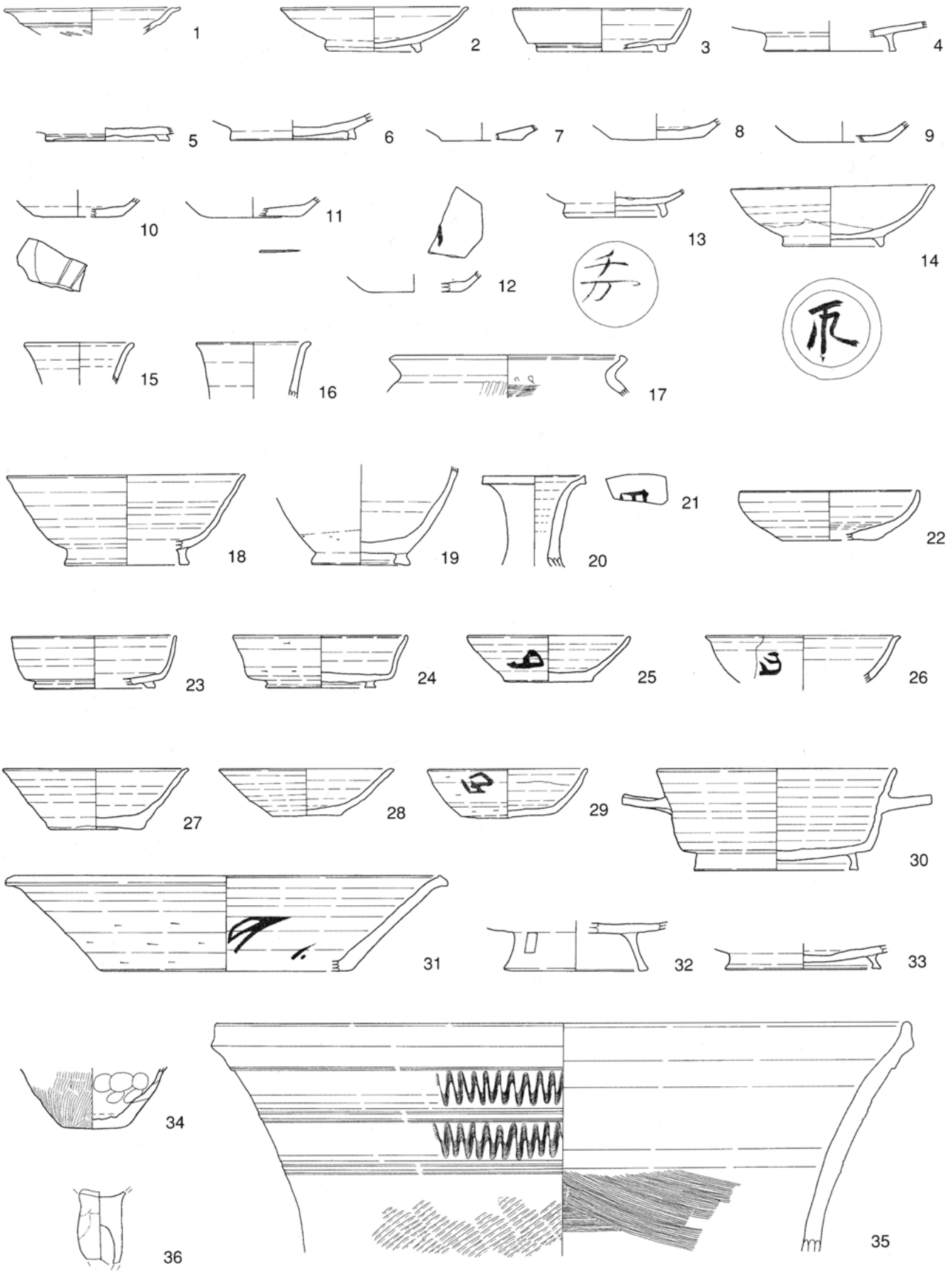
95Eb 区　SK01（1 ～ 5）　95Eb 区　SD03（6 ～ 15）　95Eb 区（16 ～ 20）



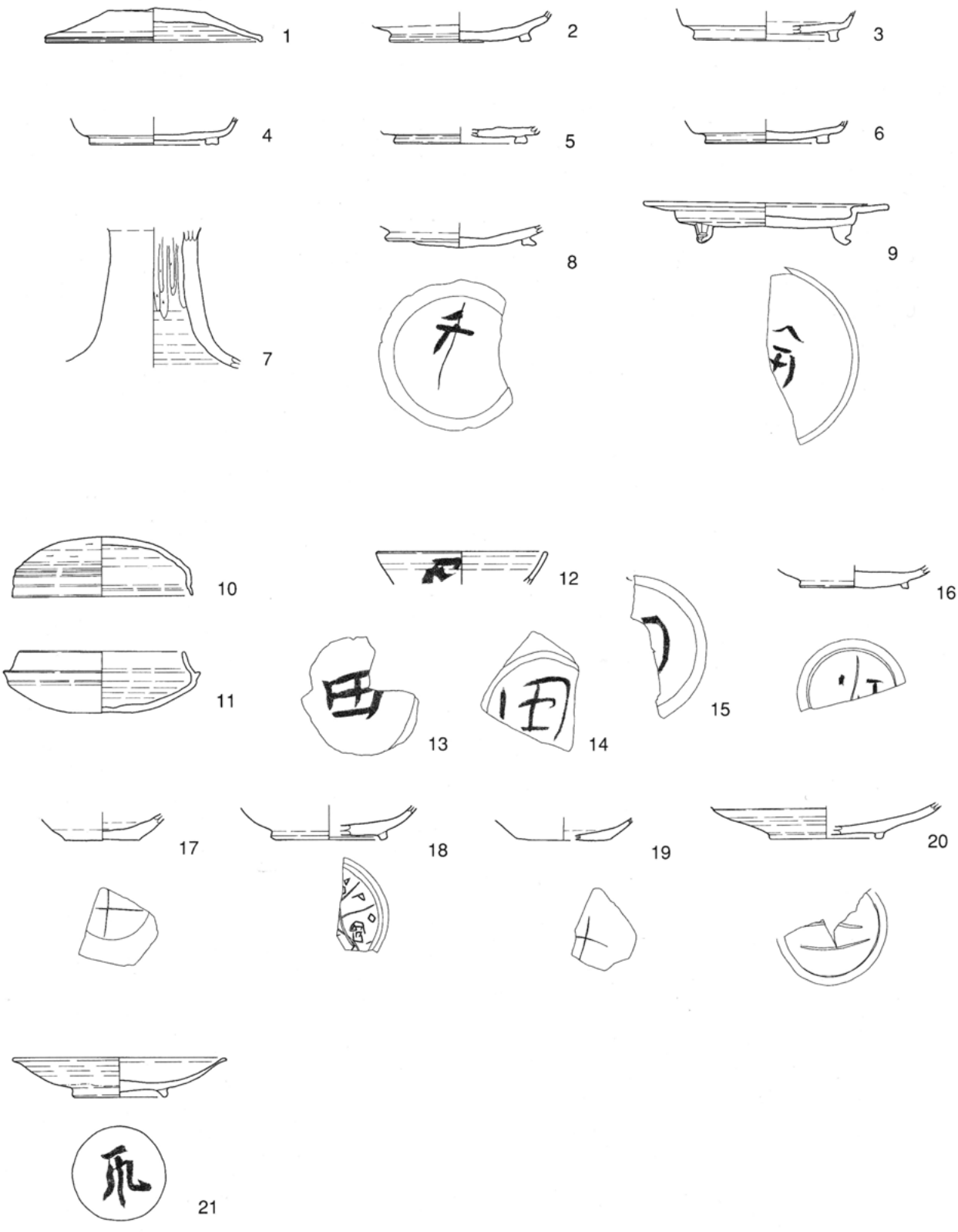
95Eb区　SD02（1～11）　95Eb区　SD05（12）　95Eb区　SD03（13、14）　95Eb区　SD04（15）　95Eb区　SD13（16）
95Ea区　SD03（17）　95Eb区　SD07（18、19）



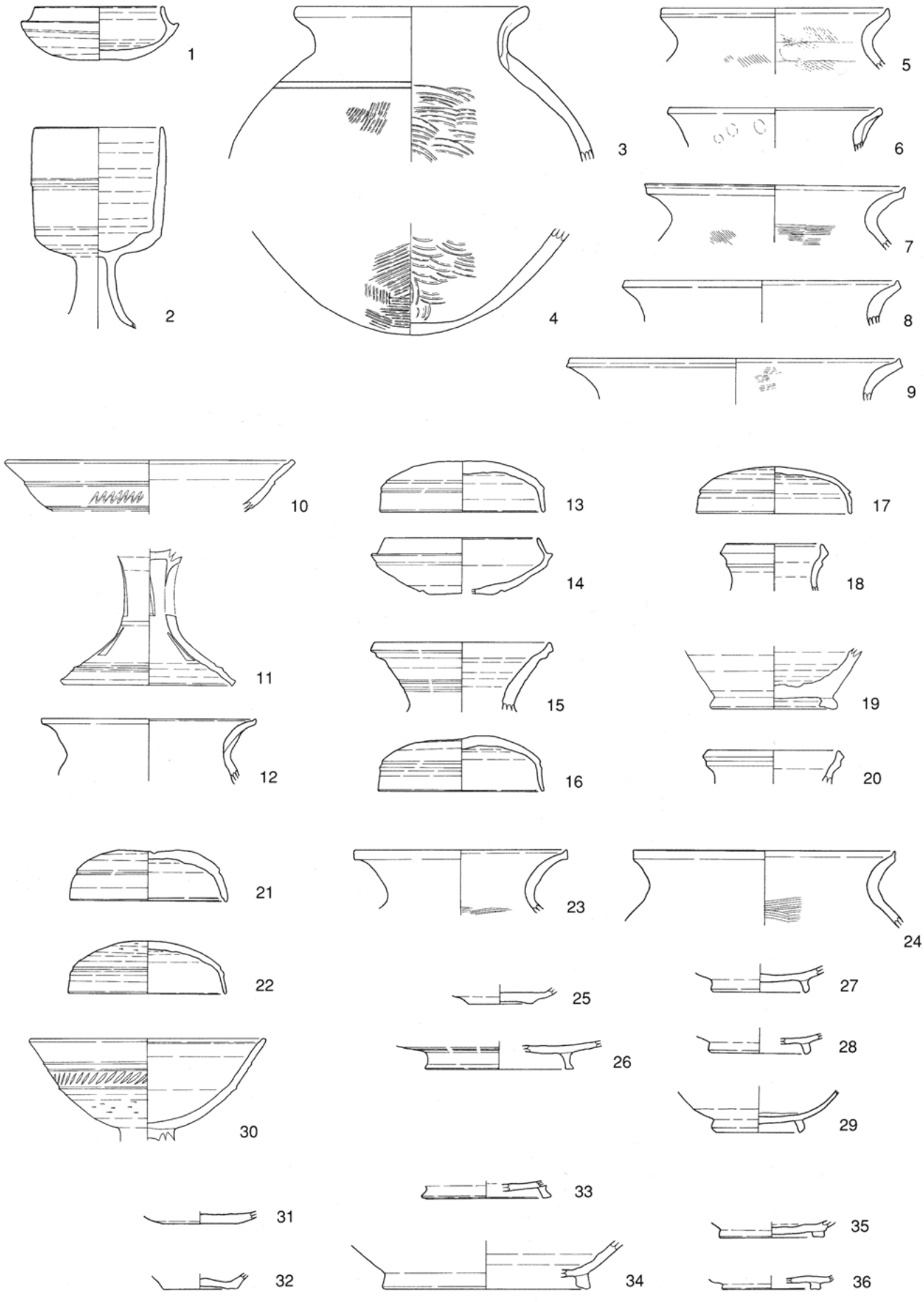
95A区　SB01（1～4）　95A区　SE02（5）　95A区　SE05（6）　95A区　SB05（7）　95A区　SB06（8）　95A区　SB08（9～12）
95A区　SD11（13、14）　95A区　SX05（15～19）



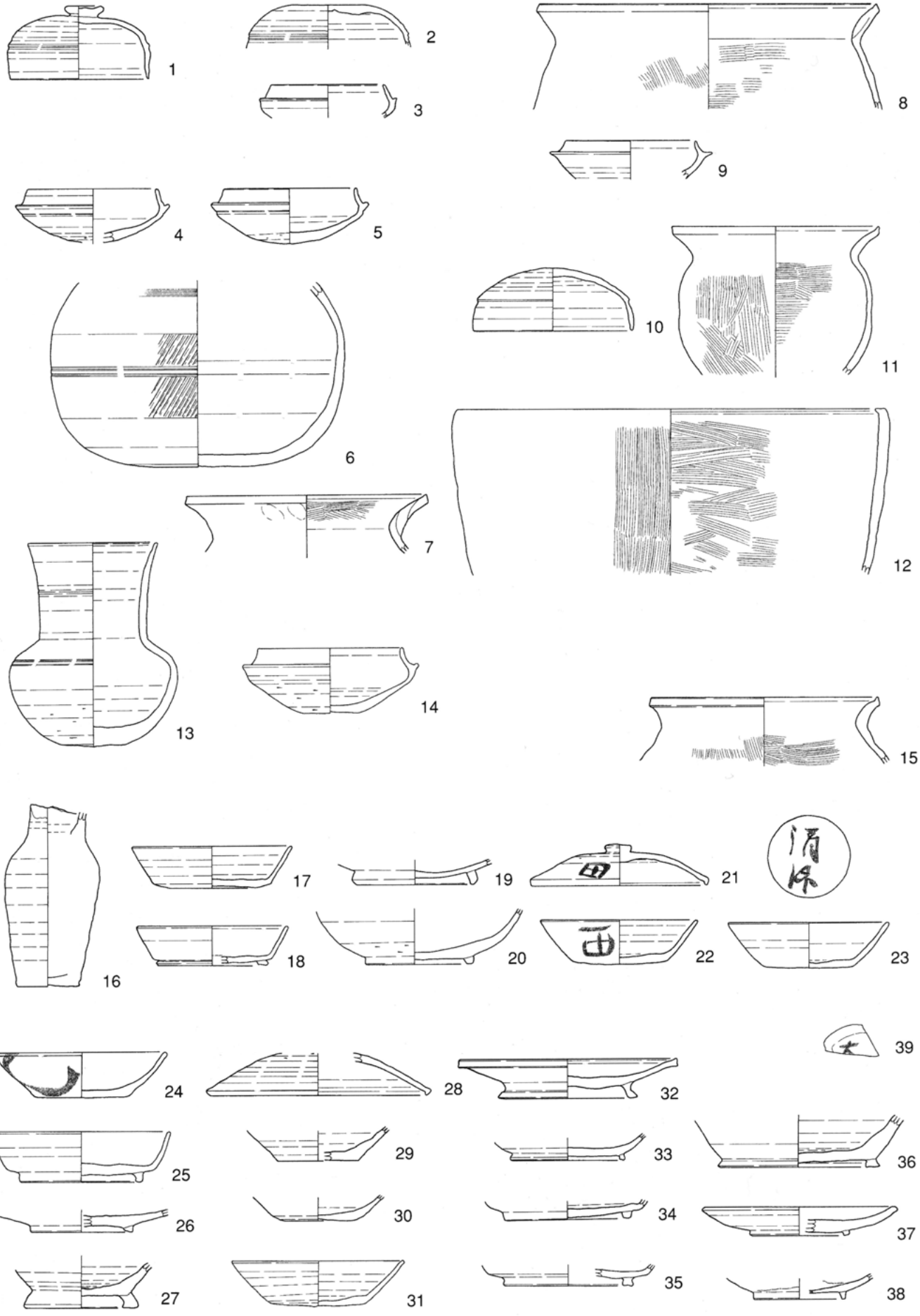
95A区　SB10（1）　95A区　SE06（2～17）　95A区　SE07（18～21）　95A区　SD14（22、36）　95A区　SK12（23～26）
95A区　SK14（27～35）



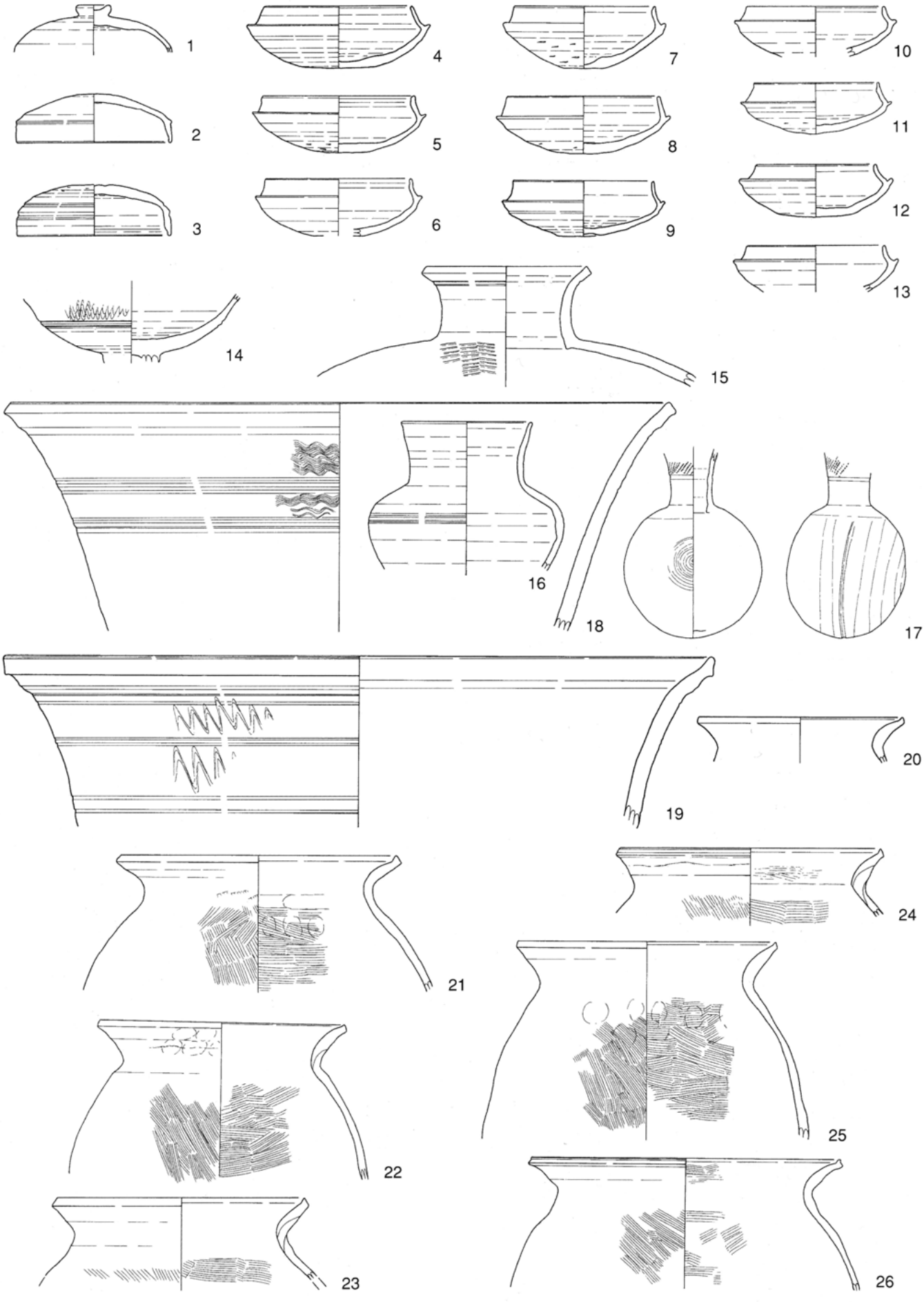
95A区　SX06（1～9）　95A区（10～20）　95A区　SE06（21）



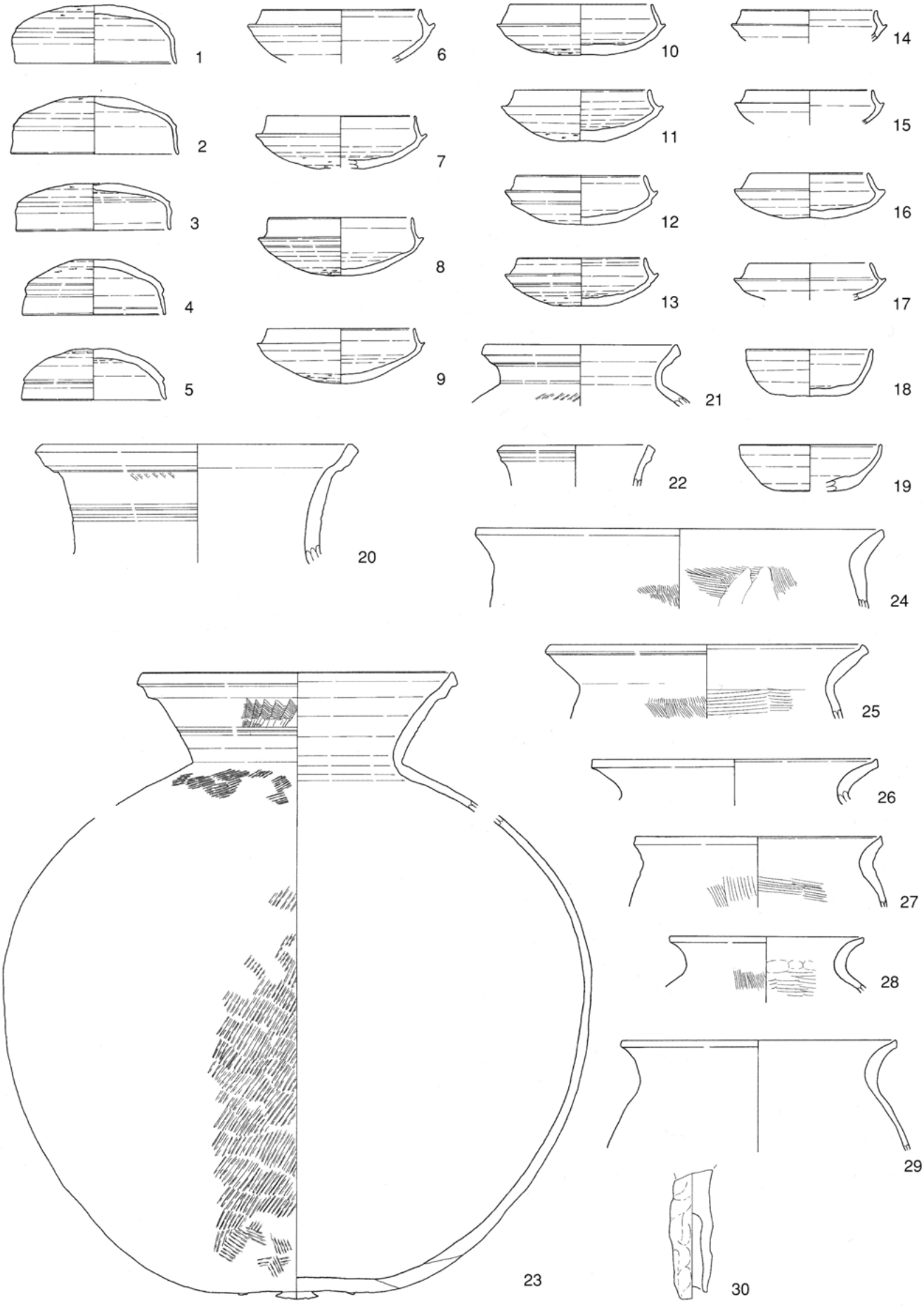
95Ba区　SX02（1、10～16）　95Ba区　SD09（2～9、20）　95Ba区　SB01（17、18）　95Ba区　SB01:P01（19）　95Ba区　SD08（21）
95Ba区　SD07（22）　95Ba区　SD10、11（23）　95Ba区（24、30）　95Ba区　SX03（25～29）　95Bb区　SX03（31～36）



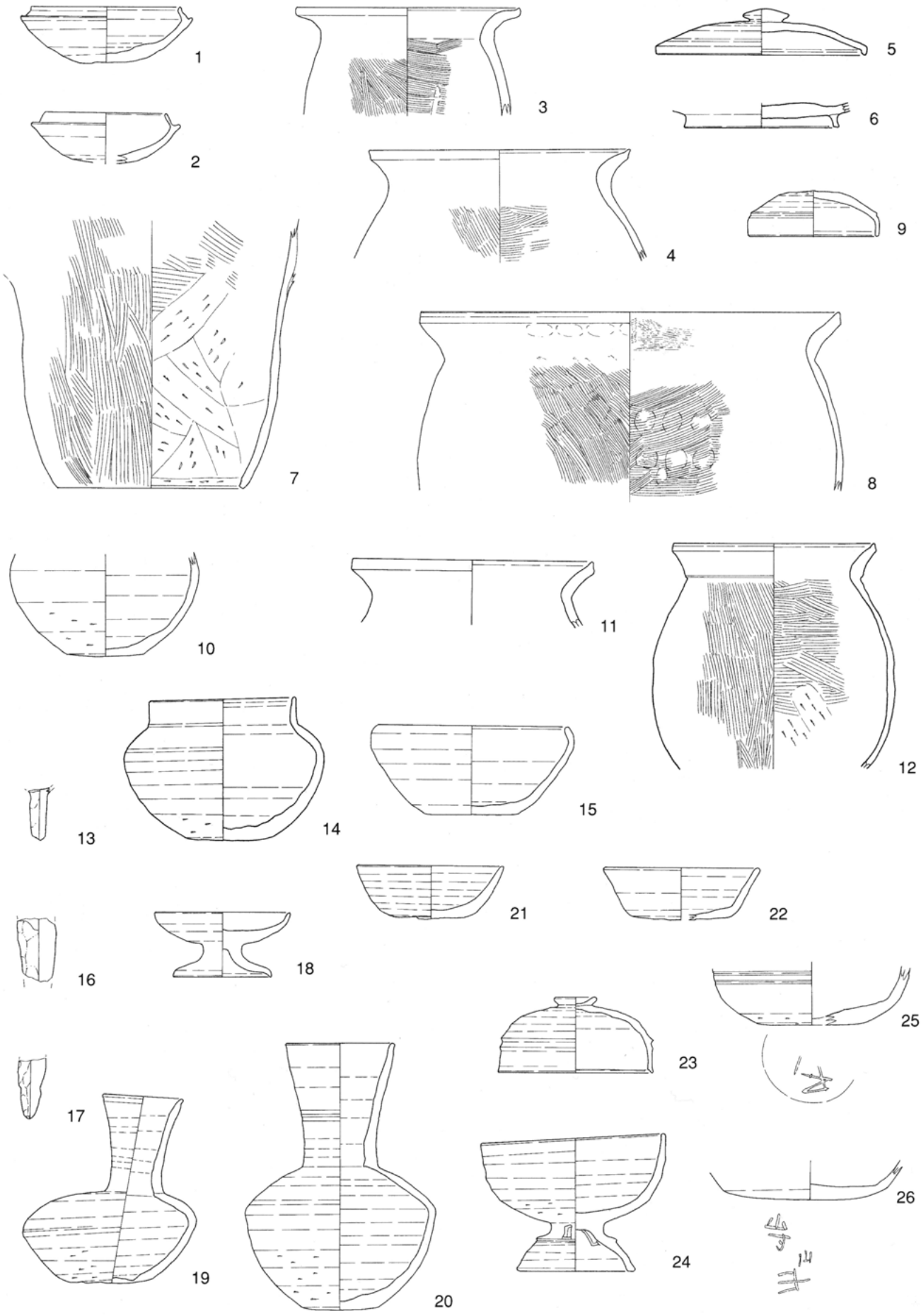
95Bb区　SB06（1）
95Bb区　SB03（2、3）
95Bb区　SD15（4～7）
95Bb区　SK05（8、9）
95Bb区　SK04（10～12）
95Bb区　SD17（13）
95Bb区　SD24（14）
95Bb区　SX01（15）
95Bb区　SD27（16～23）
95Bb区　SD37（24～27）
95Bb区　SX03（28～38）
95Bb区（39）



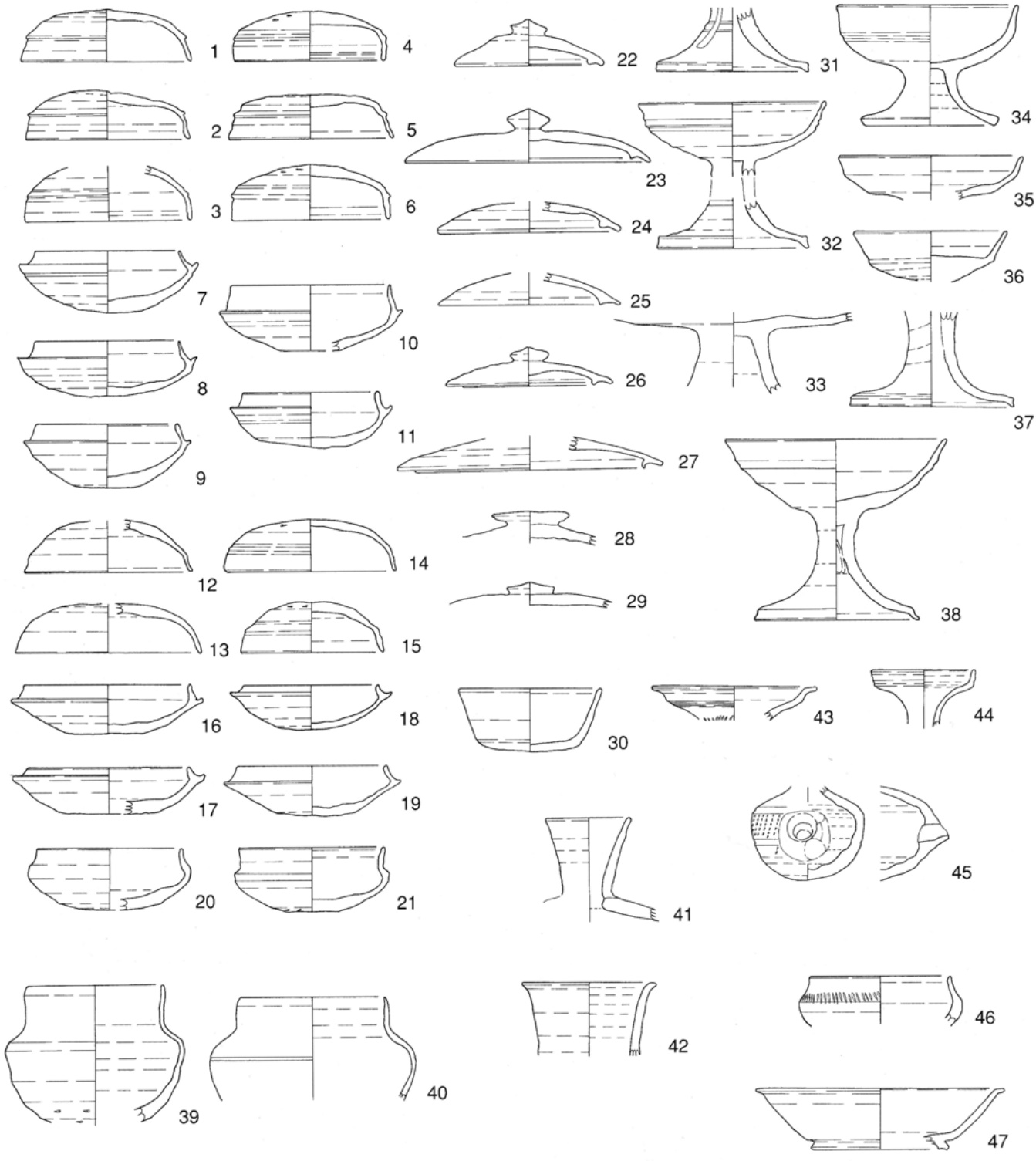
95Bb区　SD14（1～26）



95Bc区　SD23（1～30）

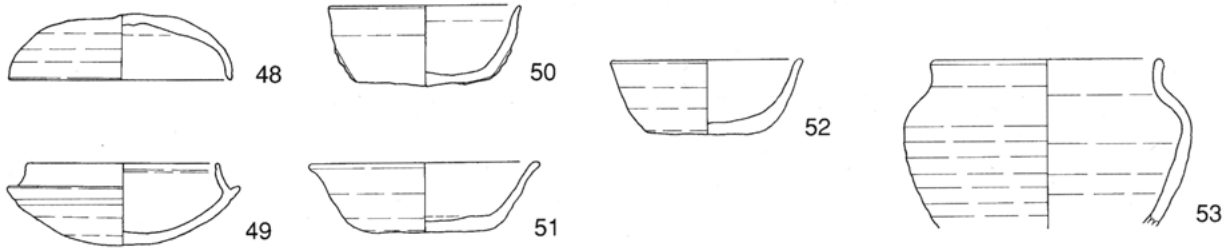


95C区　SB07（2～6）　95C区　SB06（7、8）　95C区　SB03（9）　95C区（1、10～12、15～26）　95C区　SD23（13）　95C区　SD03（14）

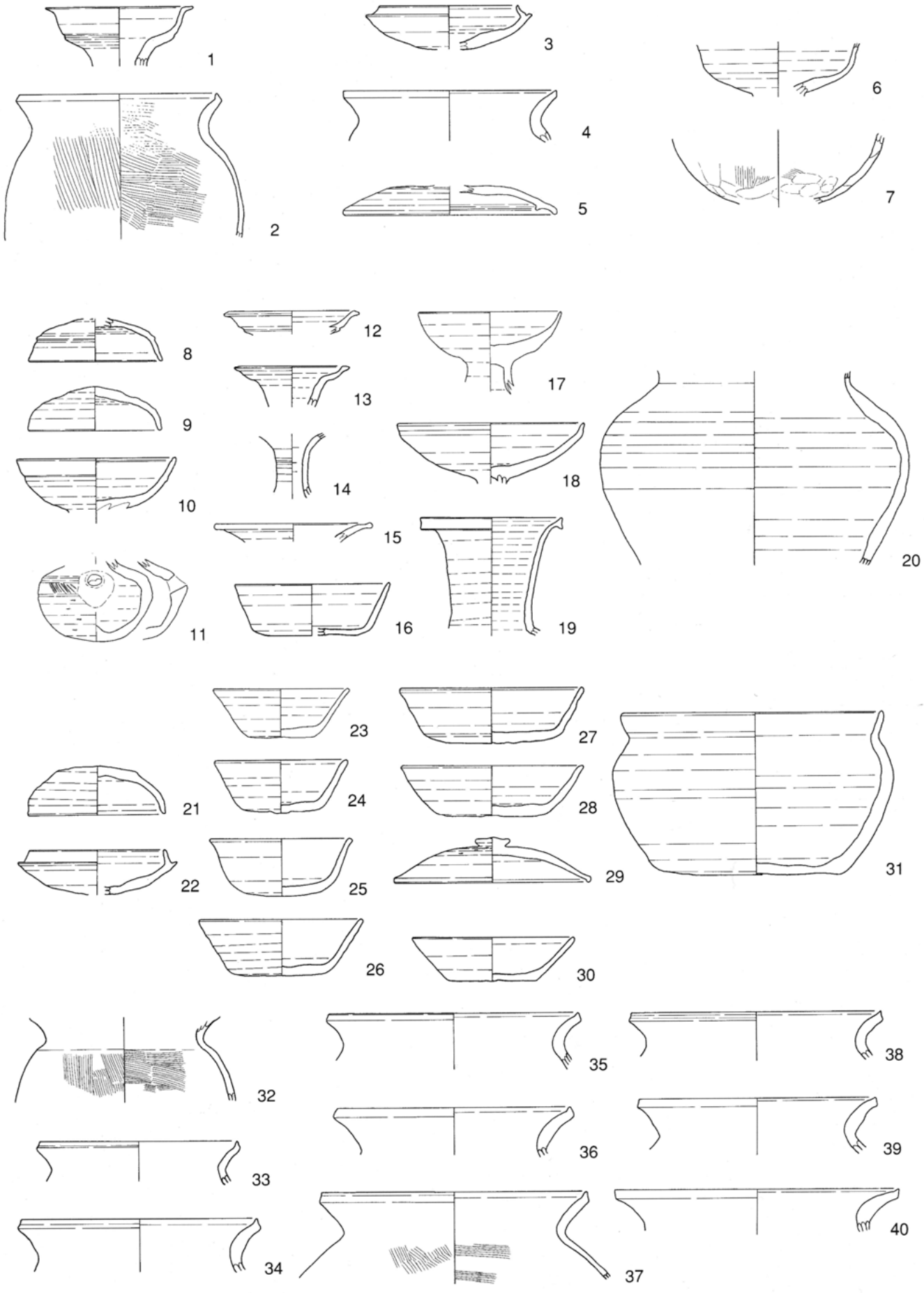


95C区

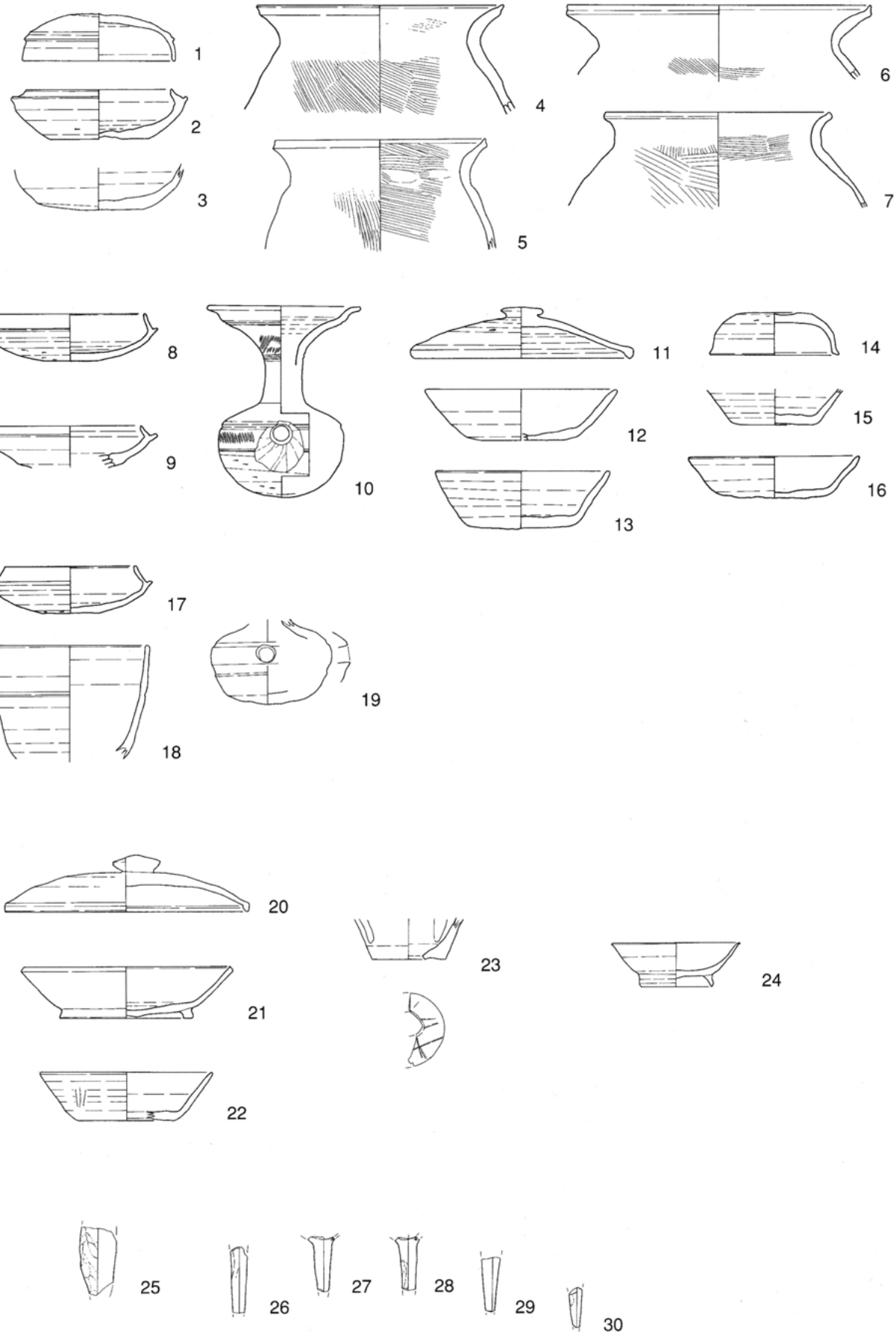
95D区



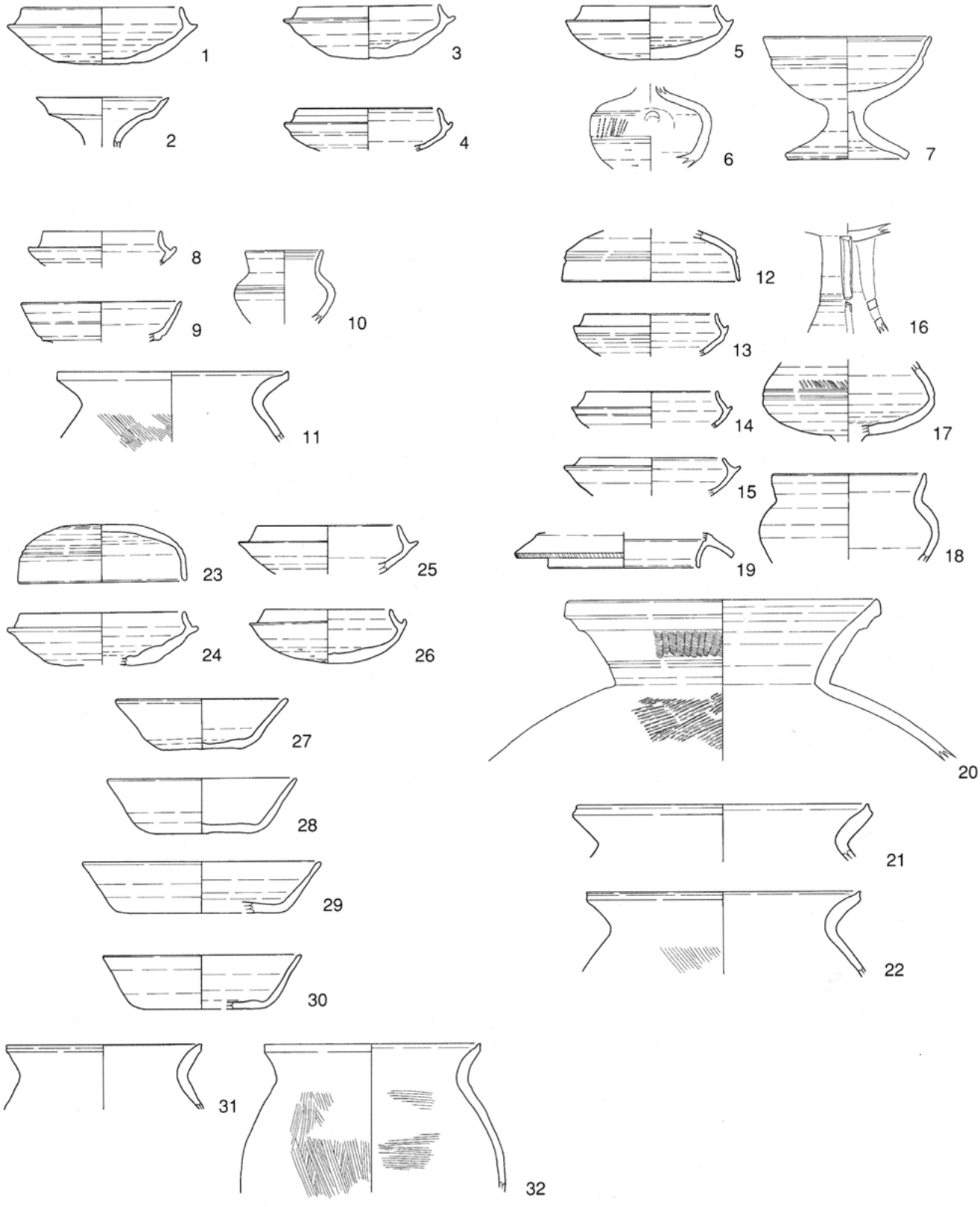
95C区　SD23（22・26）　95C区　SD15（29）　95C区　SD17（42）　95C区　SE05（41）　95Da区（48～53）



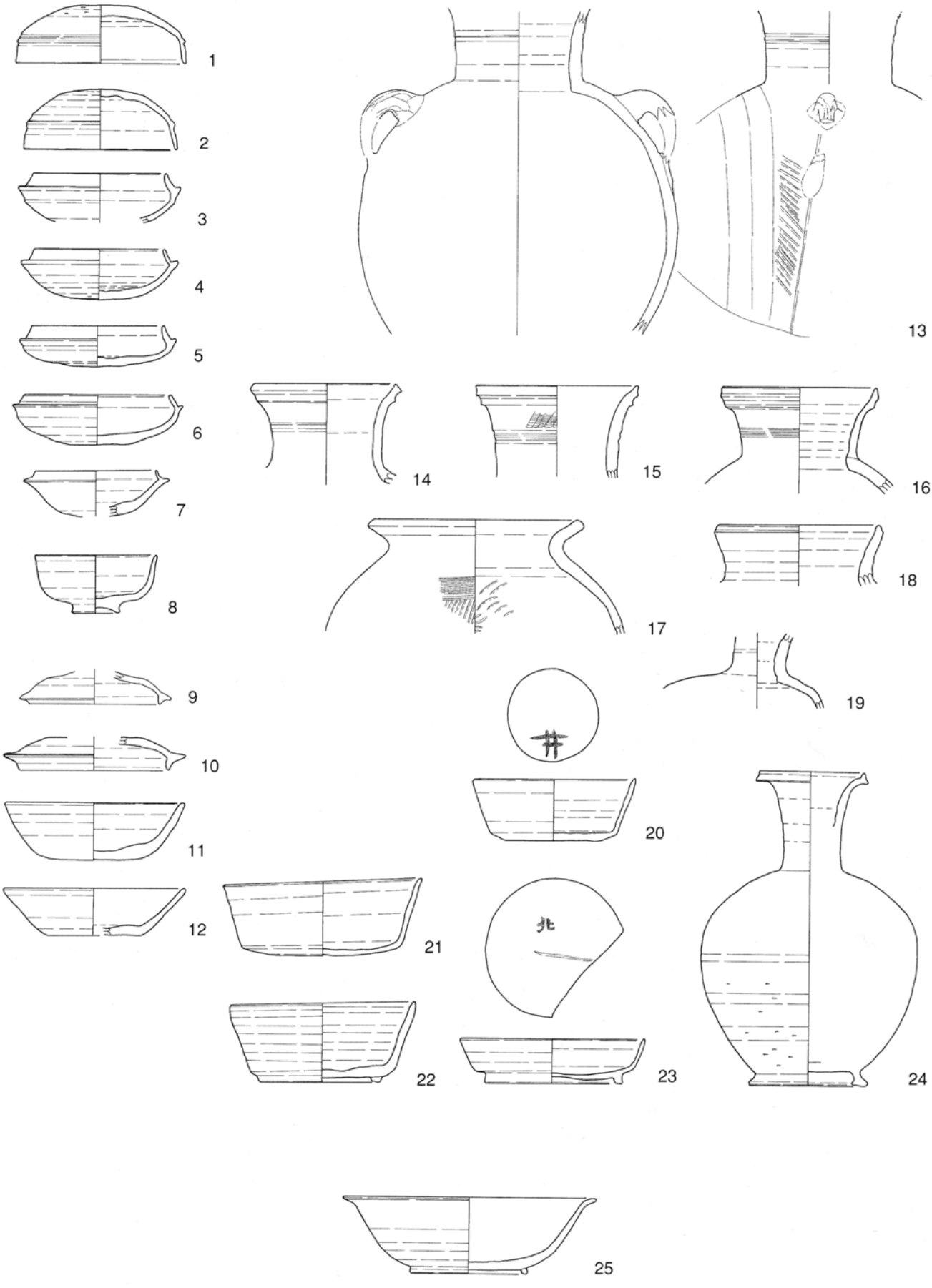
95Da区　SB06（1～3）　95Da区　SB04（4、5）　95Da区　SB11（6、7）　95Da区　SD27（8～40）



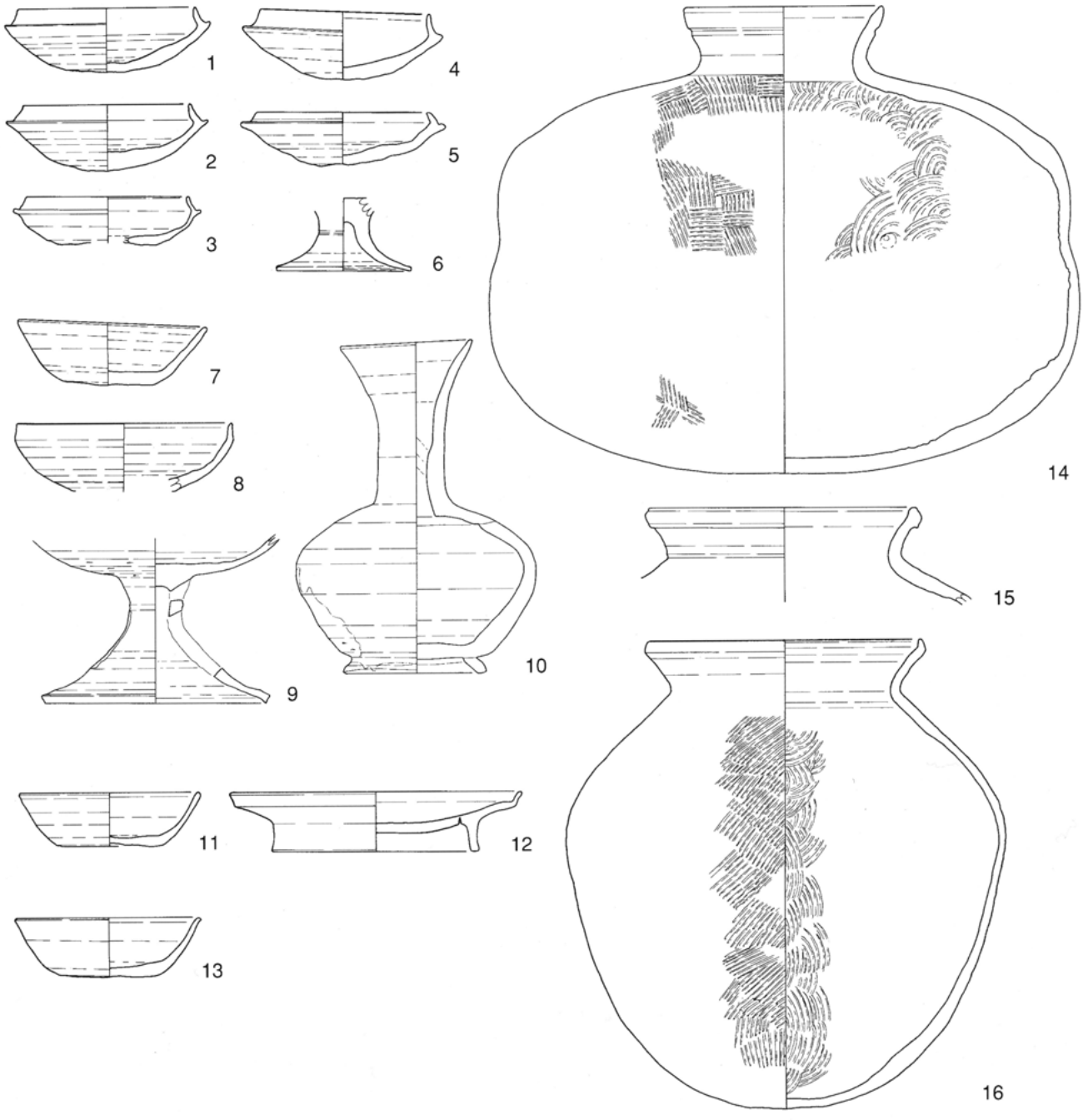
95Da区　SK01（1～7）　95Da区　SK165（8）　95Da区　SK123（9）　95Da区　SK138（10）　95Da区　SK74（11～13）
95Da区　SK98（14）　95Da区　SK80（15）　95Da区　SK143（16）　95Da区　SX01（17～19）　95Da区（20～23、25～30）
95Da区　SD25（24）



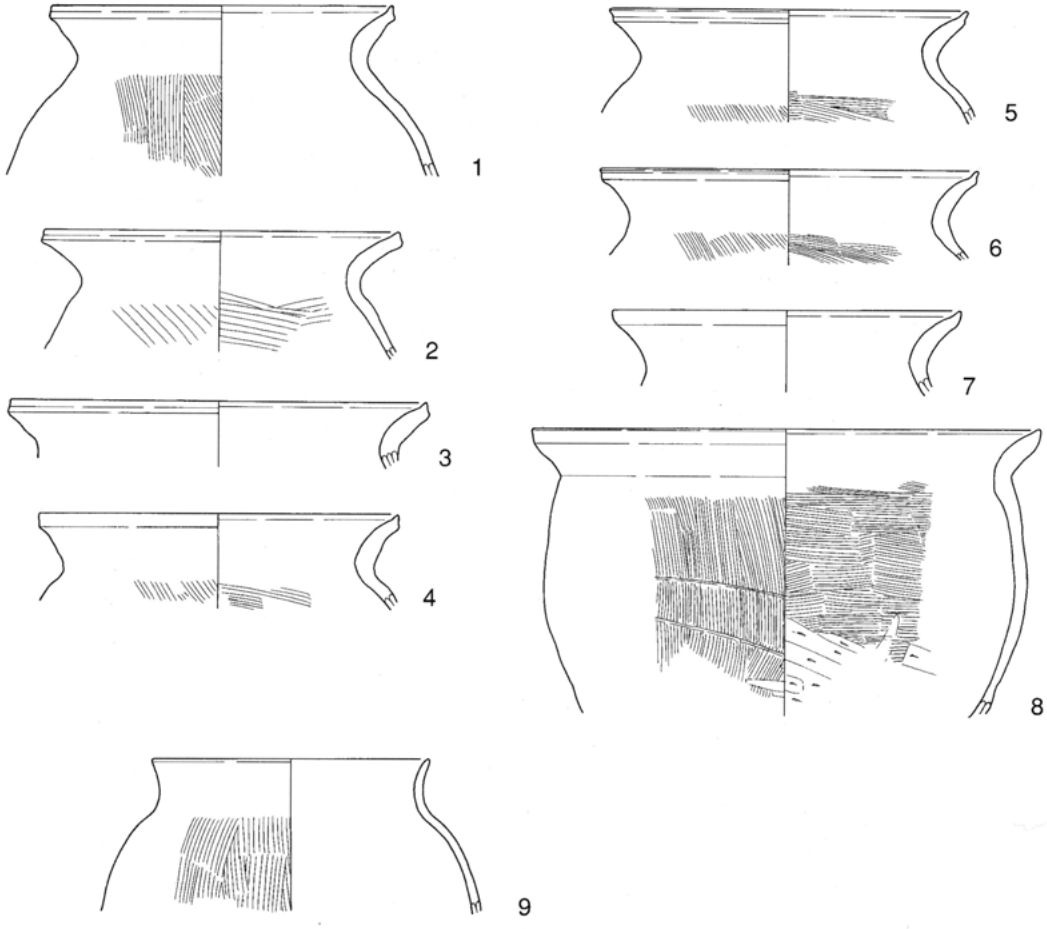
95Db区（1、2）　95Db区　SB03（3）　95Db区　SD20（4）　95Db区　SD21（5～11）　95Db区　SD27（12～22）　95Db区　SD24（23～32）

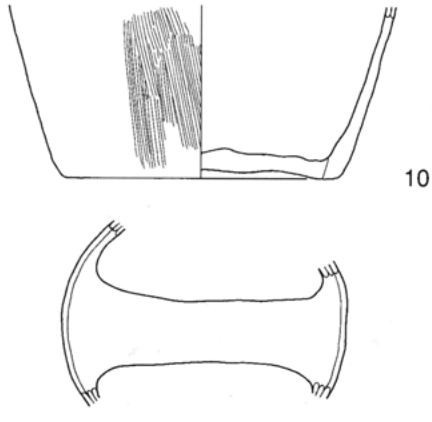


95Db区　SD26（1～24）　95Db区　SD28（25）

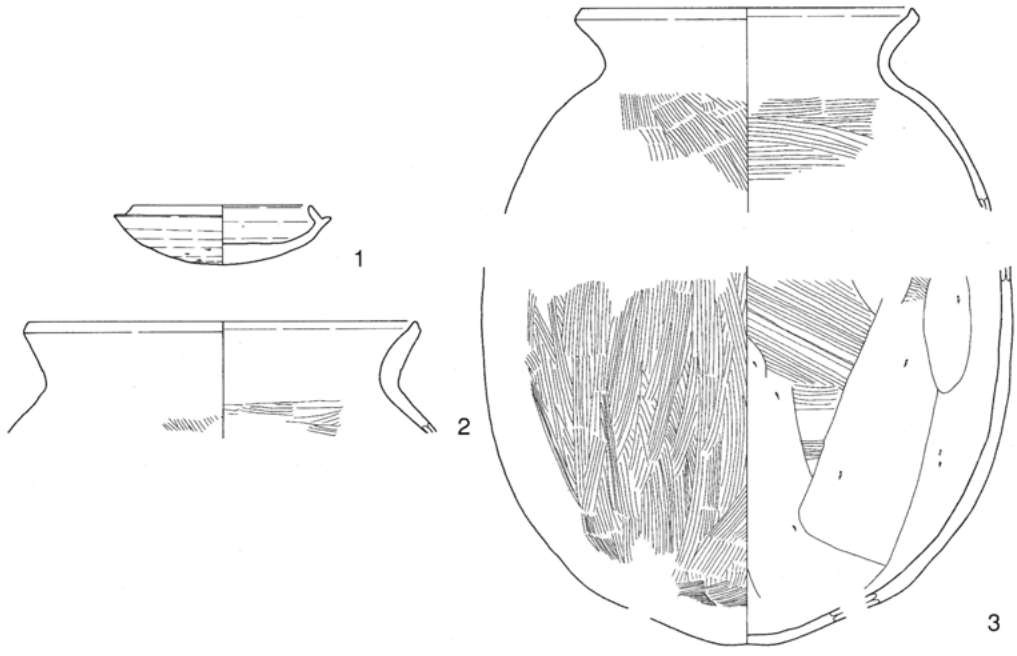


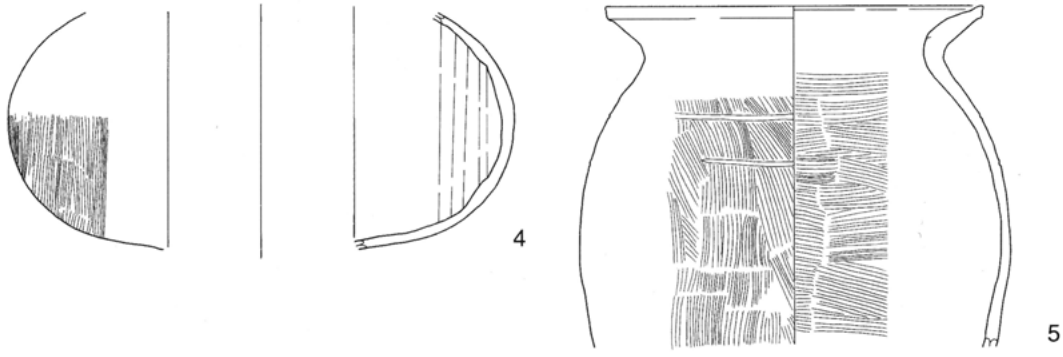
95Db区　SD26（1～16）

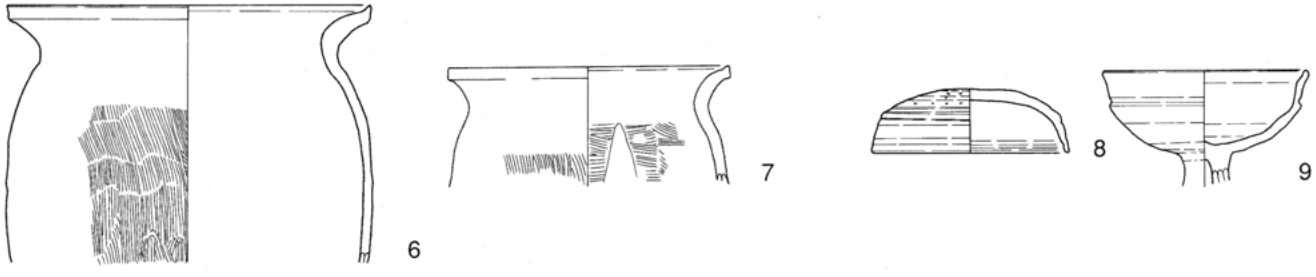


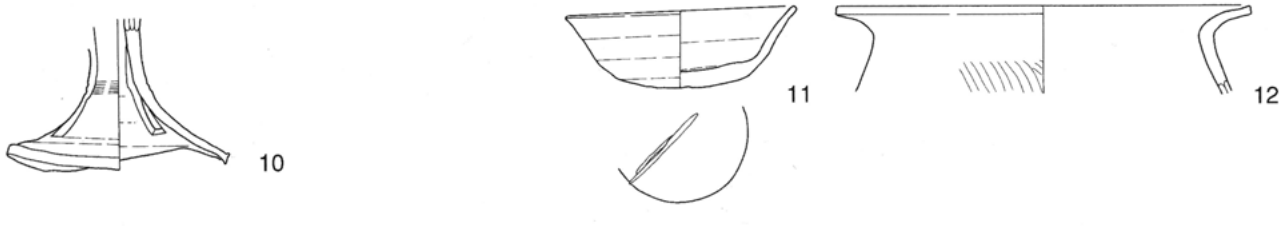


95Db区　SD26（1～10）



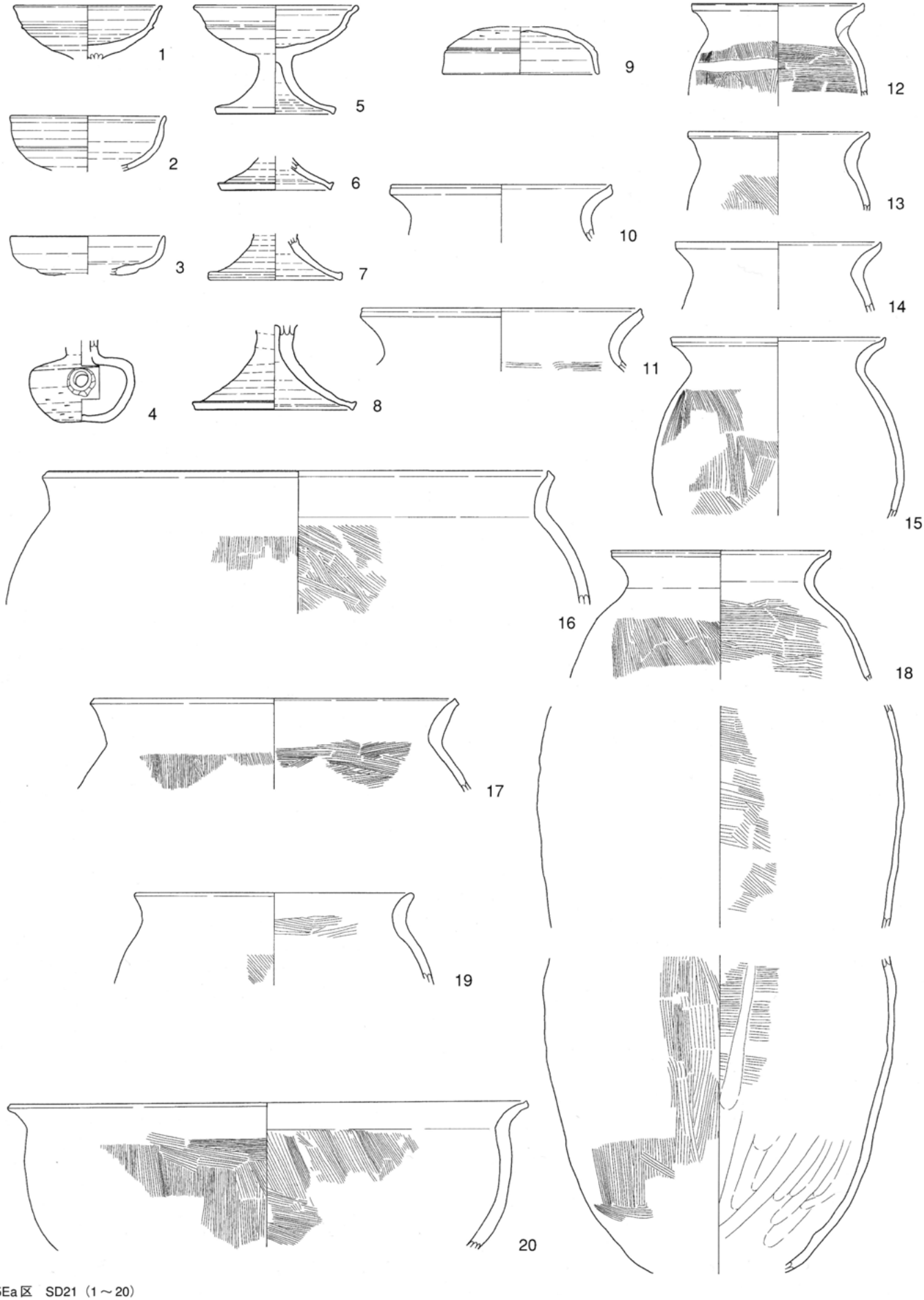




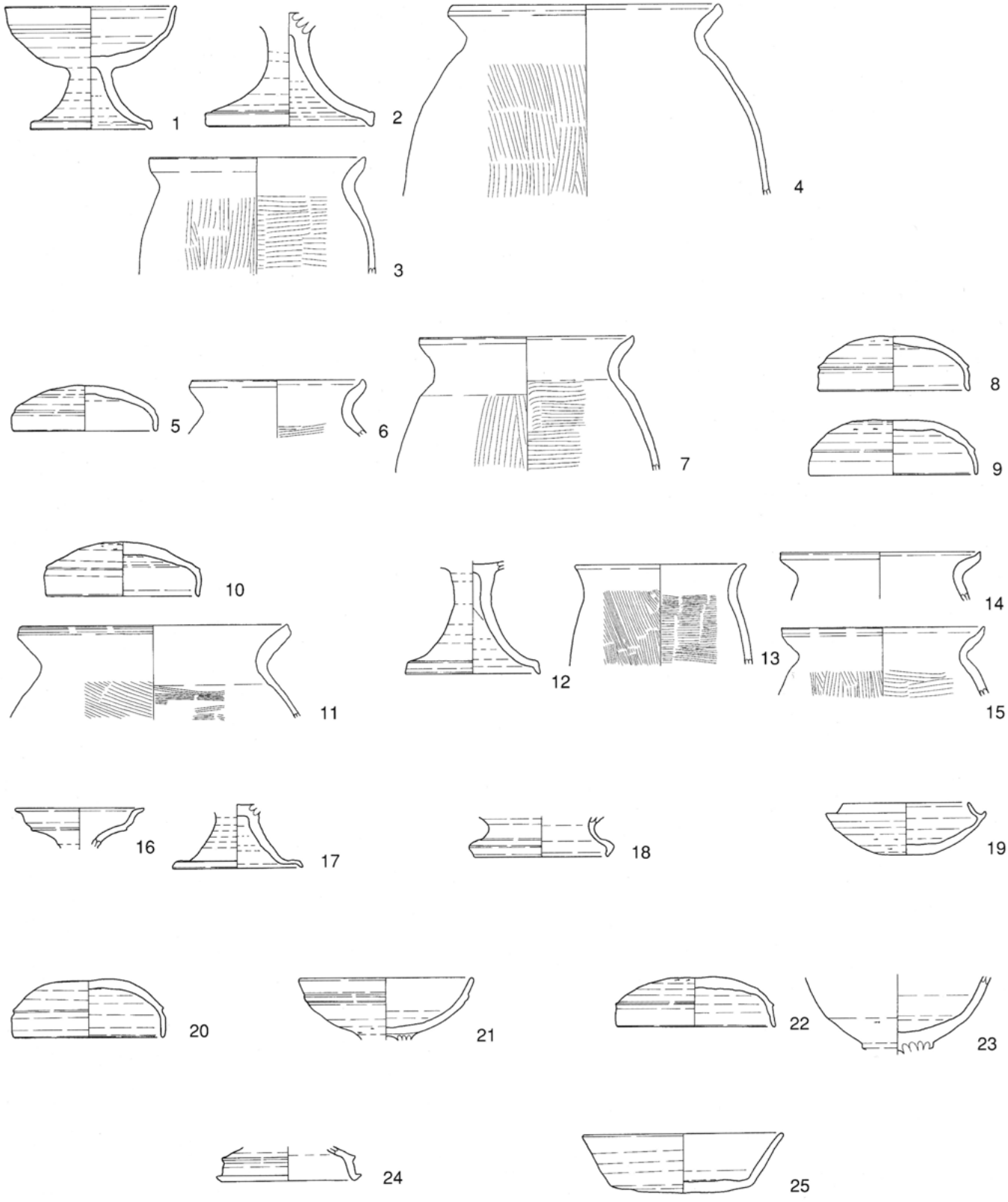




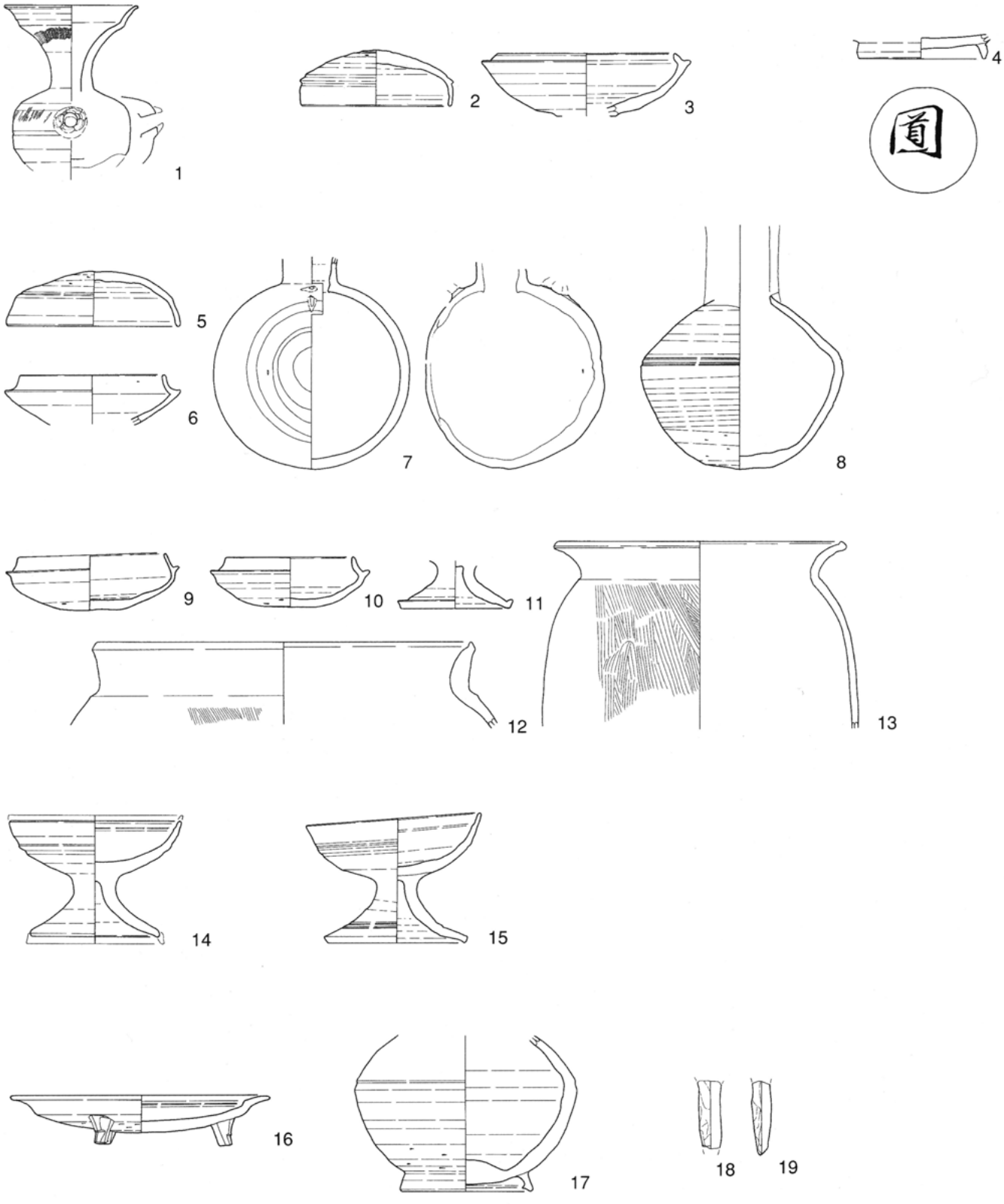
95Ea区　SB15（1～3）　95Ea区　SB08（4、5）　95Ea区　SB05、08（6）　95Ea区　SB06（7）　95Ea区　SB13（8、9）
95Ea区　SB14（10）　95Ea区　SD25（11、12）　95Ea区　SD24（13）　95Ea区　SD22（14）



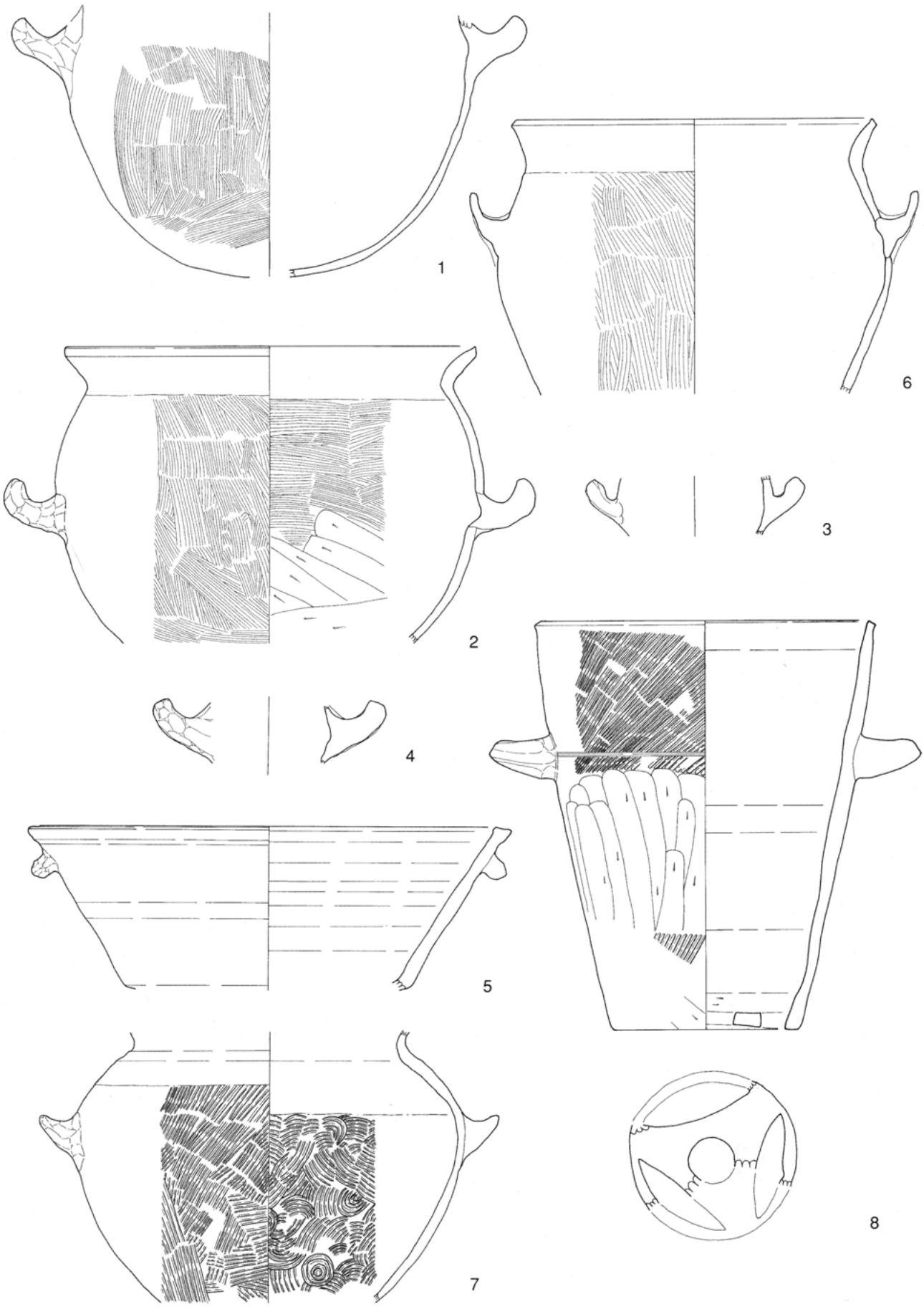
95Ea区　SD21（1～20）



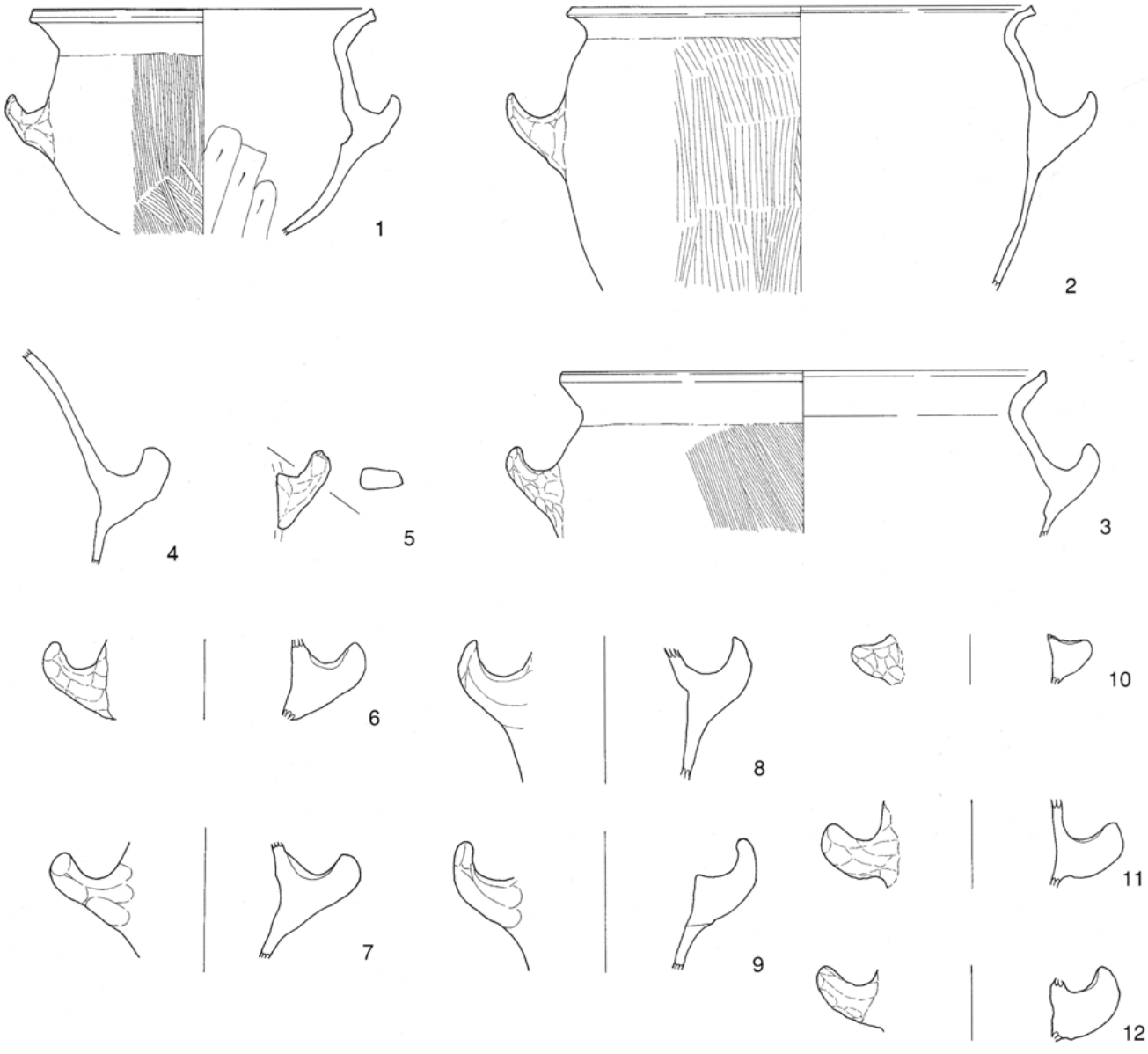
95Eb区　SB17（1～4）
95Eb区　SB43（16、17）
95Eb区　SB18（22、23）
95Eb区　SB22（5～7）
95Eb区　SB47（18）
95Eb区　SB40（24）
95Eb区　SB26（8、9）
95Eb区（19）
95Eb区　SB25カマド（25）
95Eb区　SB24（10、11）
95Eb区　SB16（20）
95Eb区　SB41（12～15）
95Eb区　SB30（21）



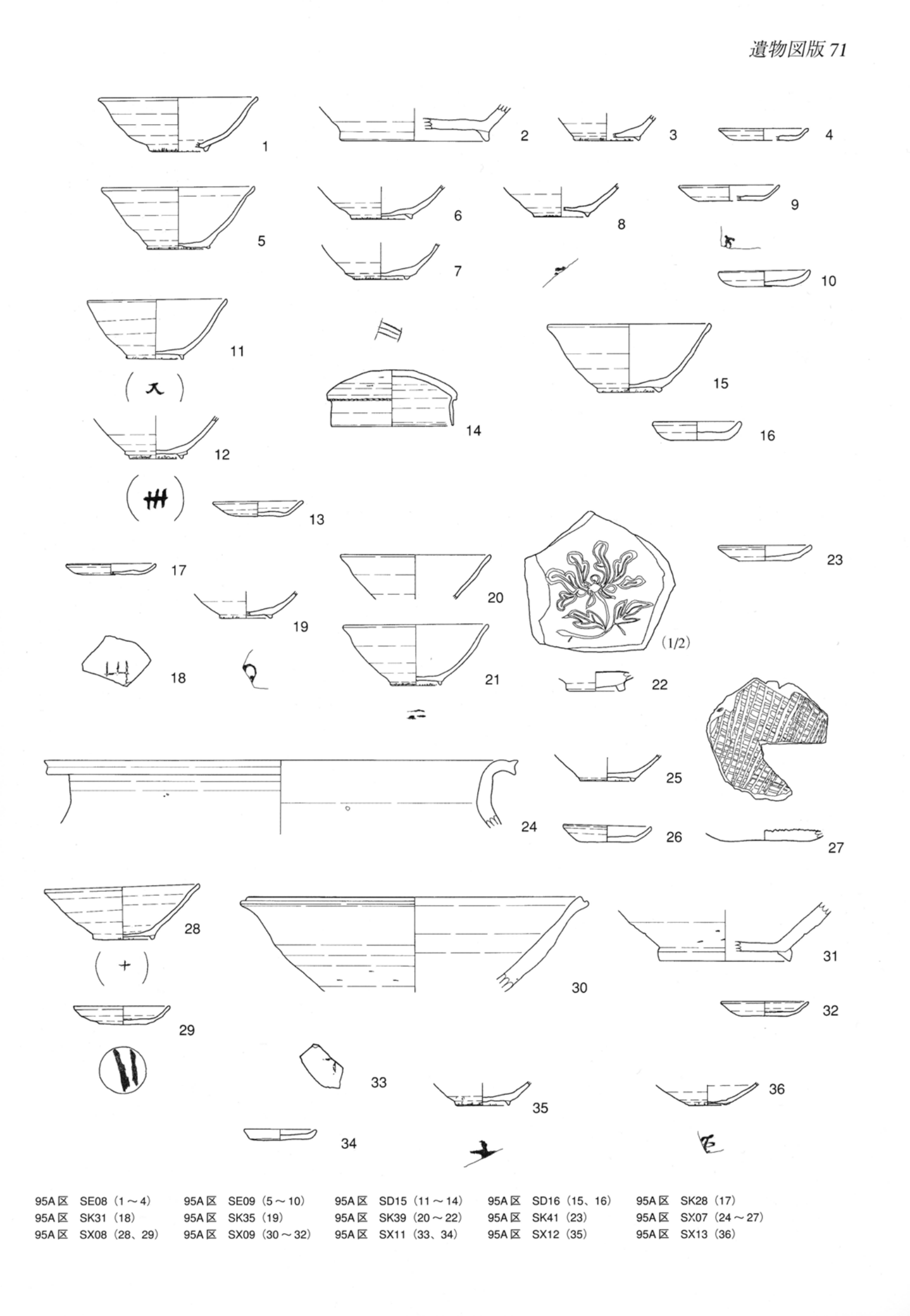
95Eb区　SD17（1）　95Eb区　SD18（2、3）　95Eb区　SD53（4）　95Eb区　SD15（5～8）　95Eb区　SD20（9～13）　95Eb区（14～19）



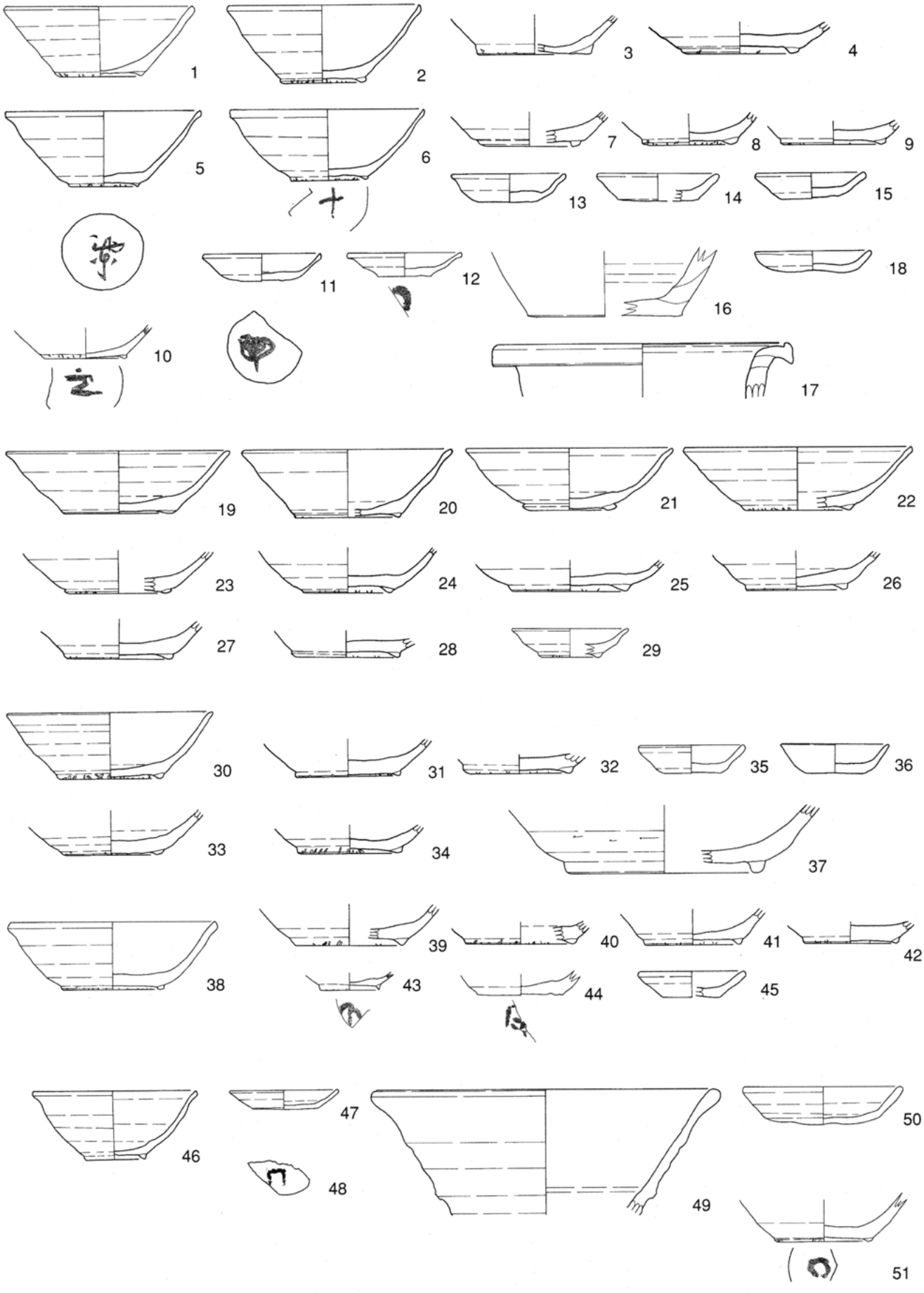
95A区　SB01（1）　95Bb区　SD16（2～4）　95Bb区　SX03（5）　95Bc区　SD25（6）　95Db区　SD26（7、8）



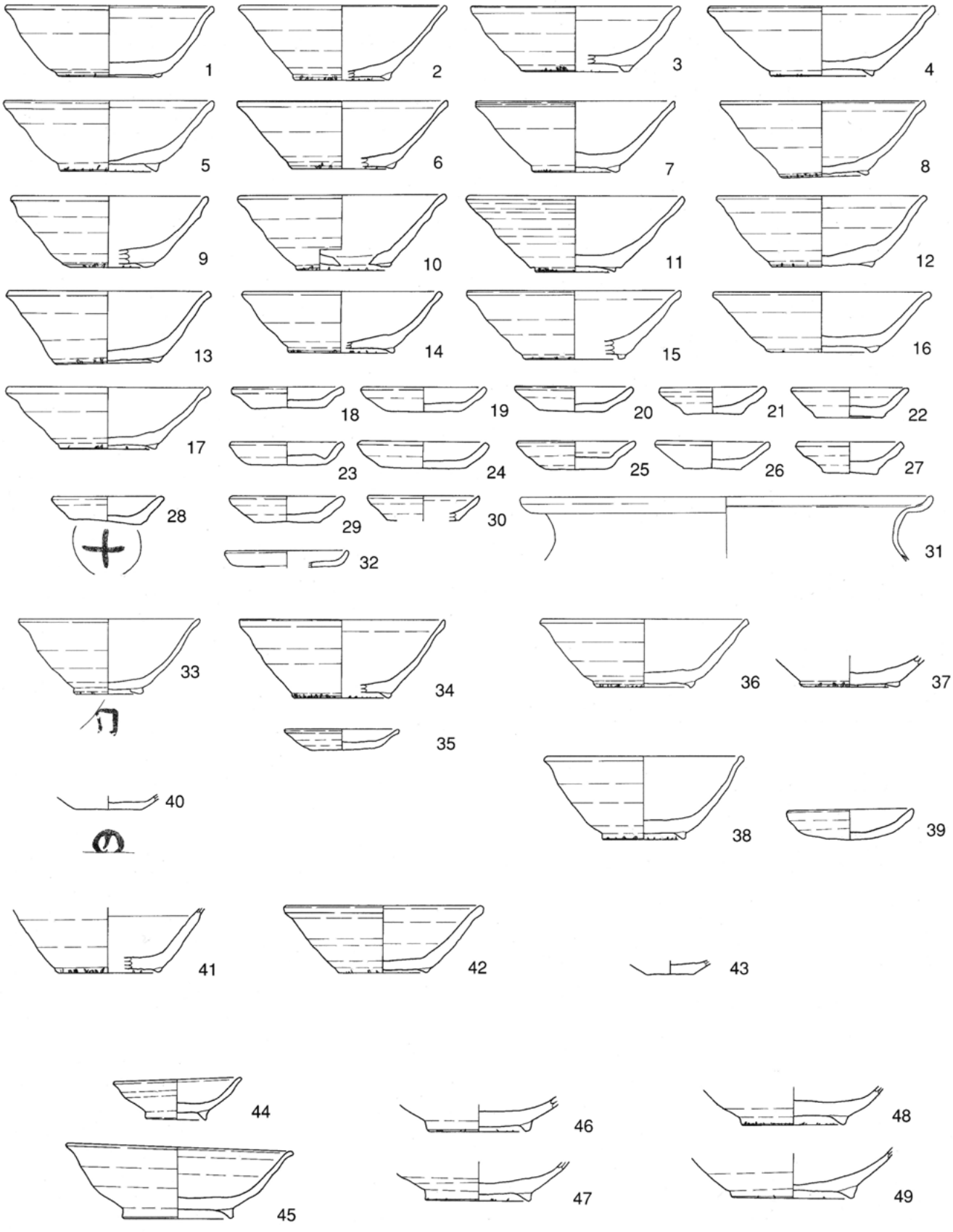
95Da区　SD37（1）　95Da区（10）　95Db区　SD26（2）　95Db区　SD27（3）　95C区　SB06（4）　95Eb区　SD07（5）
95Bc区　SD25（6～9）　95Ea区　SD21（11、12）



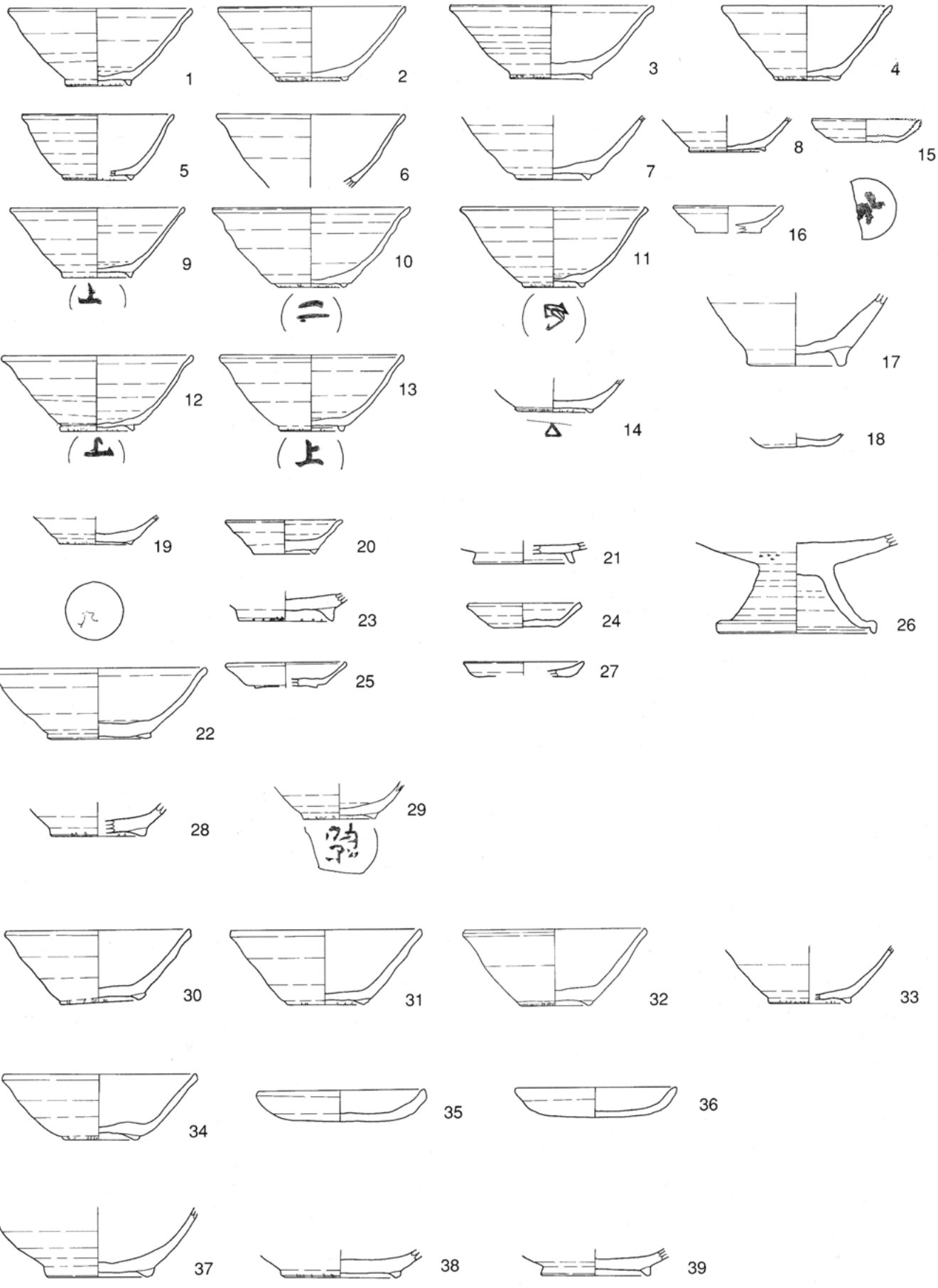
95A区 SE08（1～4） 95A区 SE09（5～10） 95A区 SD15（11～14） 95A区 SD16（15、16） 95A区 SK28（17）
95A区 SK31（18） 95A区 SK35（19） 95A区 SK39（20～22） 95A区 SK41（23） 95A区 SX07（24～27）
95A区 SX08（28、29） 95A区 SX09（30～32） 95A区 SX11（33、34） 95A区 SX12（35） 95A区 SX13（36）



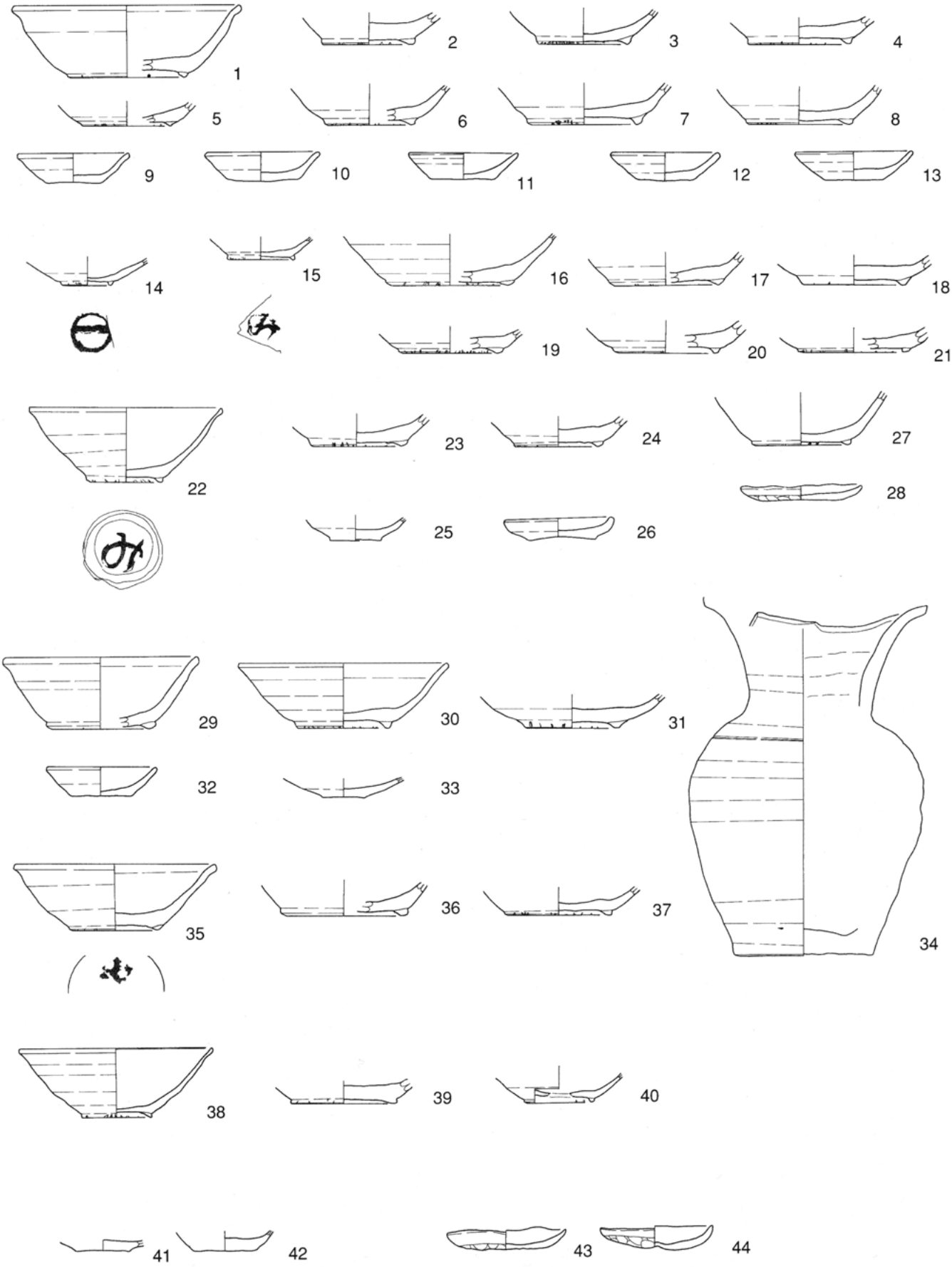
95C区　SE04（1～18）　95C区　SE06（19～37）　95C区　SE03（38～45）　95C区　SE01（46～50）　95C区　SE07（51）



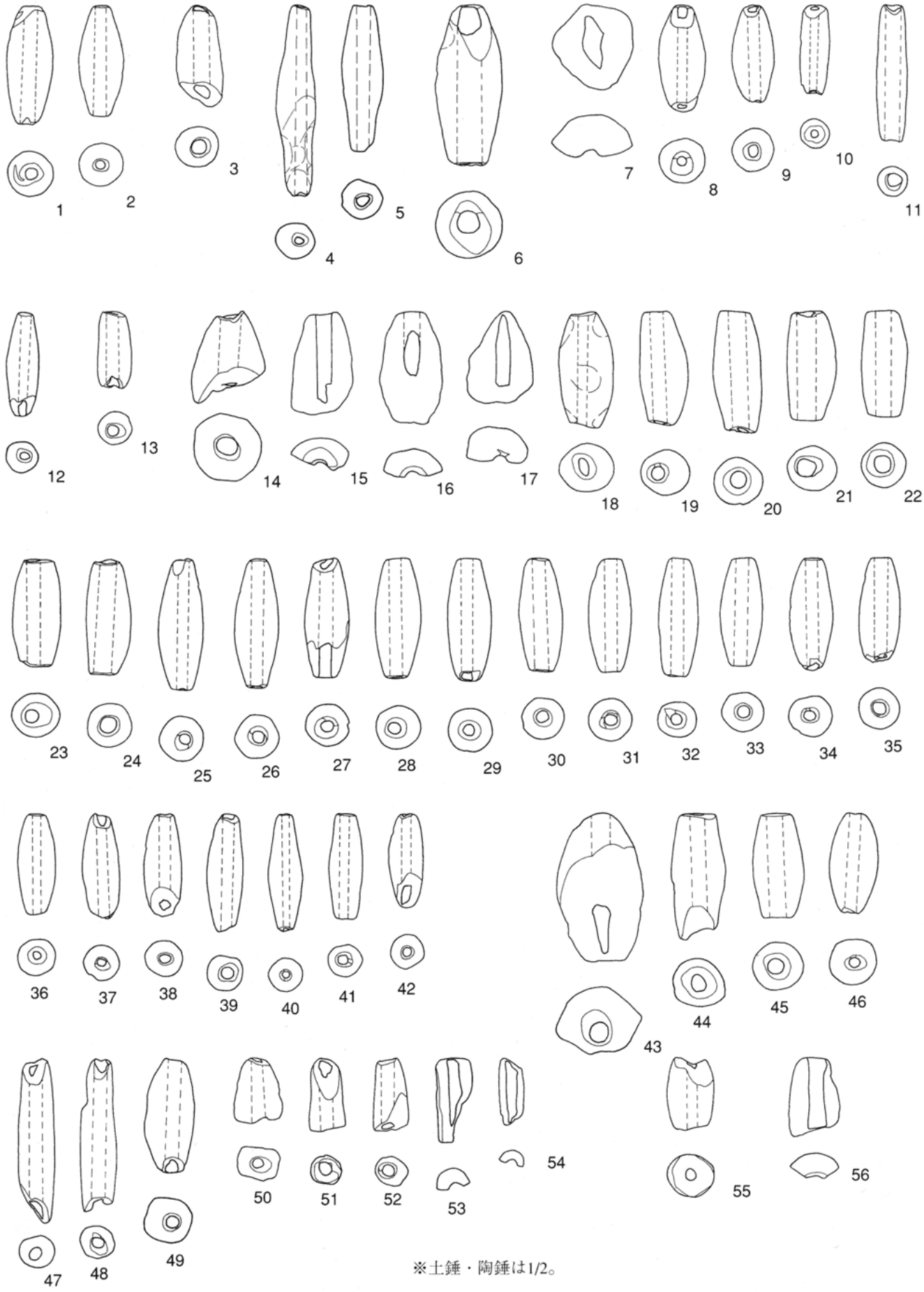
95C区　SD23（1～32）　95C区　SD166（33～35）　95C区　SD30（36、37）　95C区　SD22（38、39）　95C区　SD15（40）
95C区　SK01（41）　95C区　SK03（42）　95C区　SK04（43）　95Bb区　SE01（44～49）



95Da区　SD38（1～27）　95Da区　SD29（28）　95Da区　SD27（29）　95Db区　SK09（30～33）　95Db区　SK10（34～36）
95Db区　SE03（37～39）

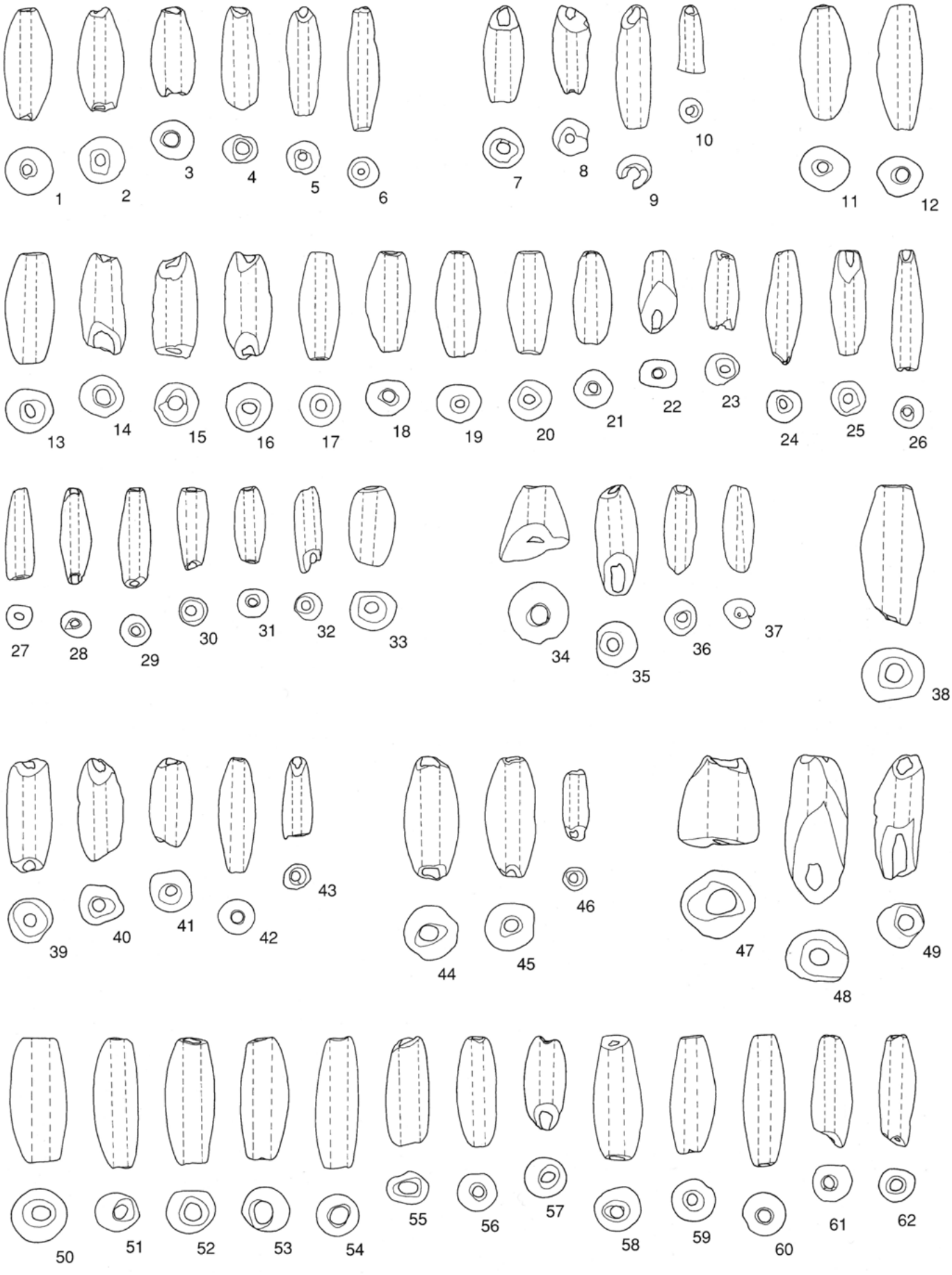


95Ea区（1～13、26～28）　95Ea区　SD34（14～21）　95Ea区　SD29（22）　95Ea区　SD33（23）　95Ea区　SD30（24）
95Ea区　SD31（25）　95Eb区　SD01（29～34）　95Eb区　SE07（35～37）　95Eb区　SK113（38）　95Eb区　SD46（39）
95Eb区（40）　95Eb区　SD34（41、42）　95Eb区　SK02（43、44）

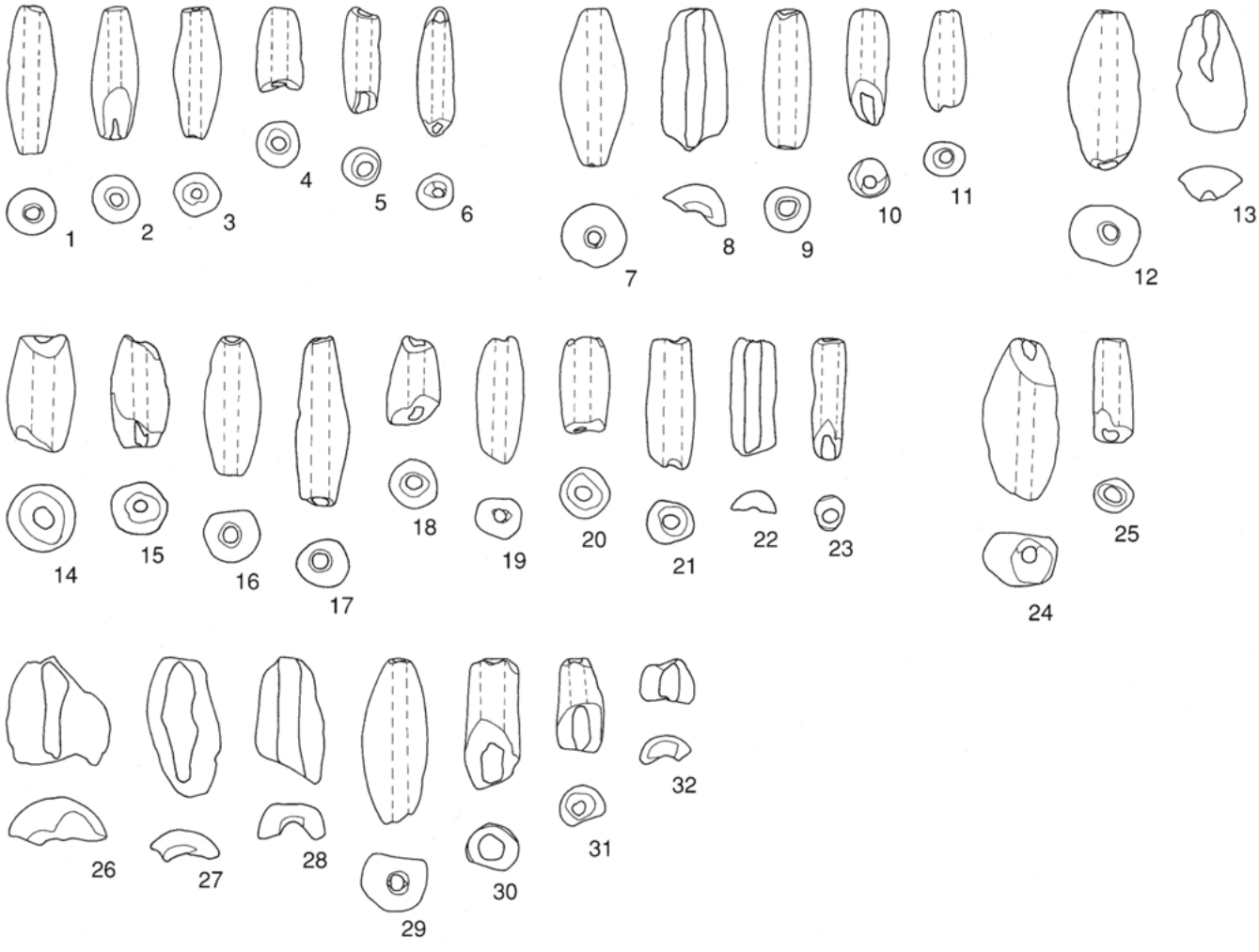


※土錘・陶錘は1/2。

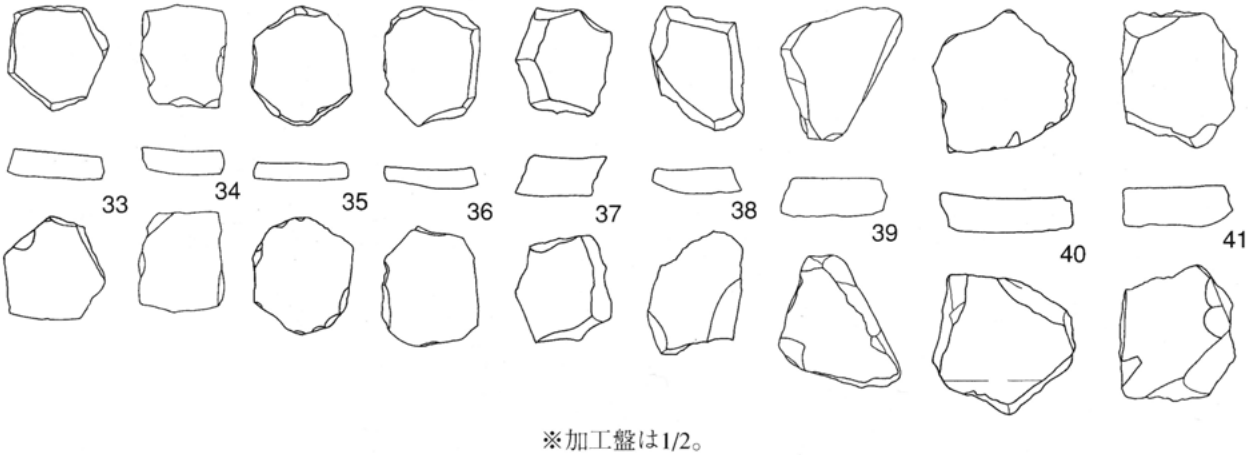
94D区　SK36（1）
94D区　SX01（2）
94Ca区　SDI（3）
94Cb区　SD52（4、5）
95A区　SE08（8）
95A区　SX10（9）
95A区　SD16（10）
95Ba区　SD08（11）
95Ba区　SX03（12）
95Bc区　SD23（13）
95C区　SD23（14、16、17、21、36、38、41）
95C区　SD15（15、42）
95C区　SD13（18）
95C区　SD17（19、20、23、24、39）
95C区　P－01（25～33、35、40）
95C区　SE03（34）
95C区　SK02（37）
95Da区　SD33（43）
95Da区　SD32（44）
95Da区　SK04（45）
95Da区　SD29（46）
95Db区　SD19（48）
95Db区　NR01（49）
95Db区　SD21（51）
95Db区　SD24（52）
95Db区　SD25（53）
95Ea区　SX04（55）
95Eb区　SD36（56）



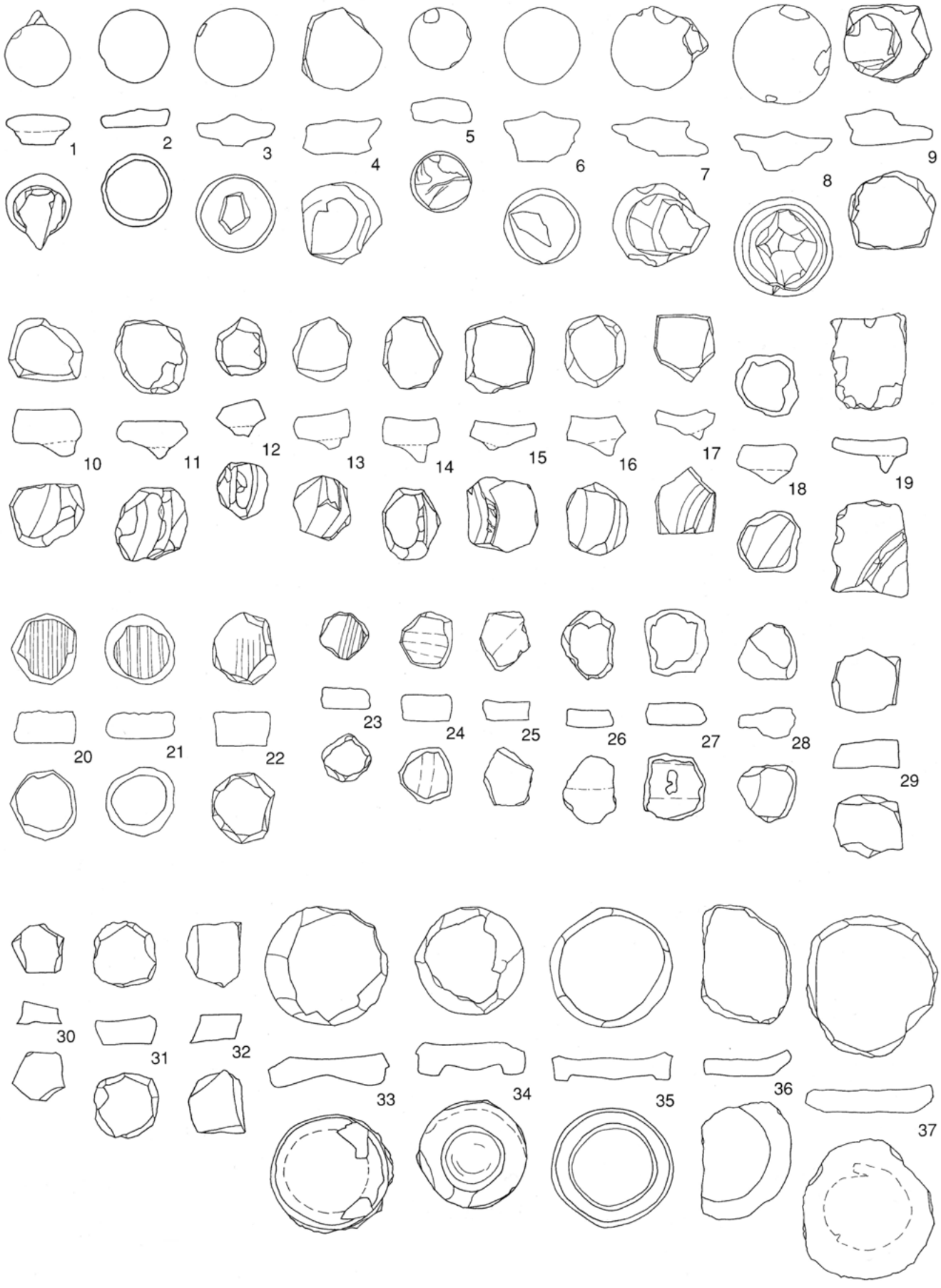
94Ca区 （1～6） 94A区 （7～10） 95A区 （11～33） 95Ba区 （34～37） 94Bb区 （38～43） 95Bc区 （44～46） 95C区 （47～62）

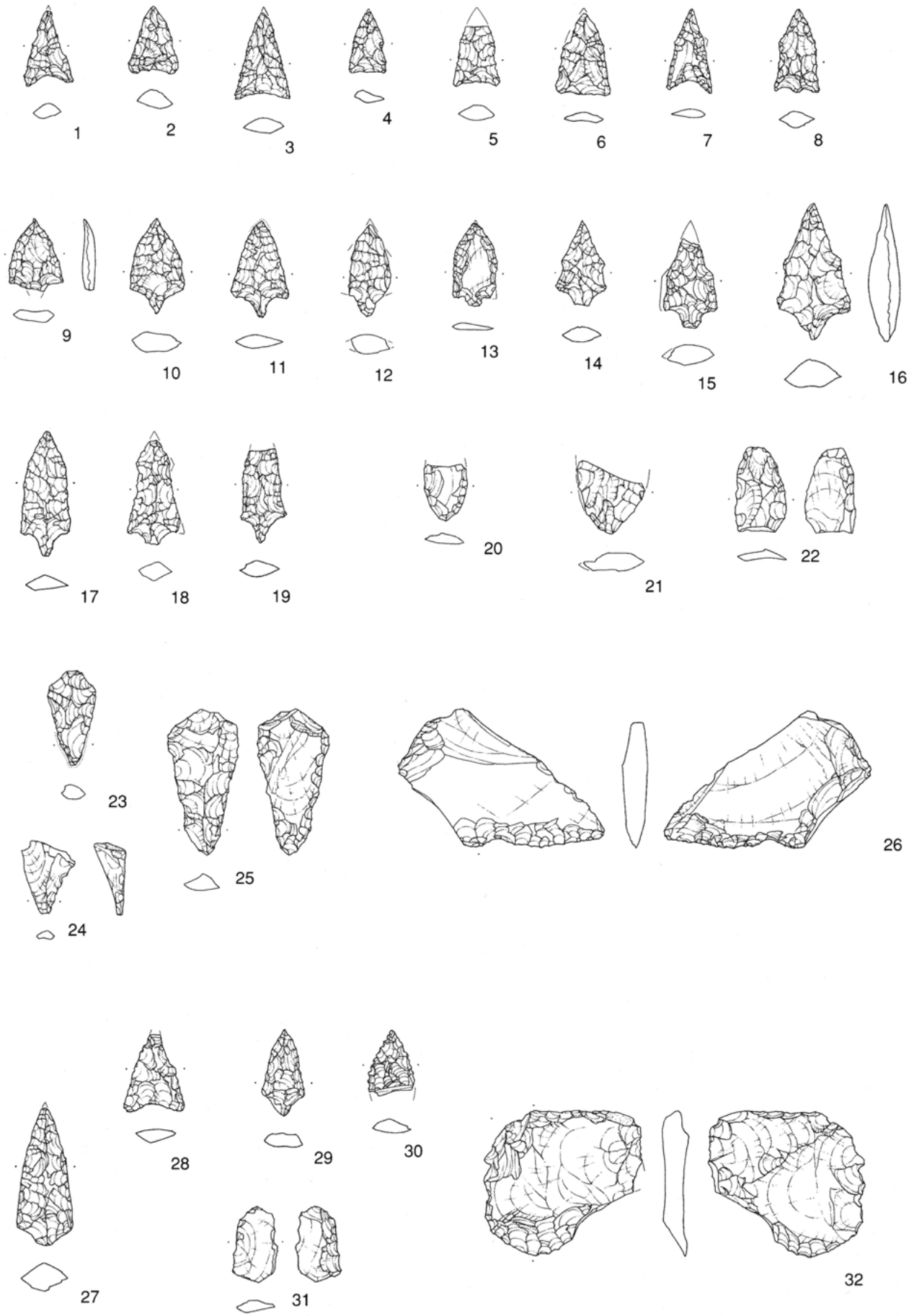


95C区 （1～6） 95Da区 （7～11） 95Db区 （12～23） 95Ea区 （24・25） 95Eb区 （26～32）

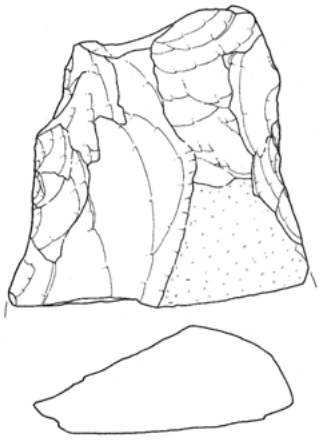


※加工盤は1/2。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37



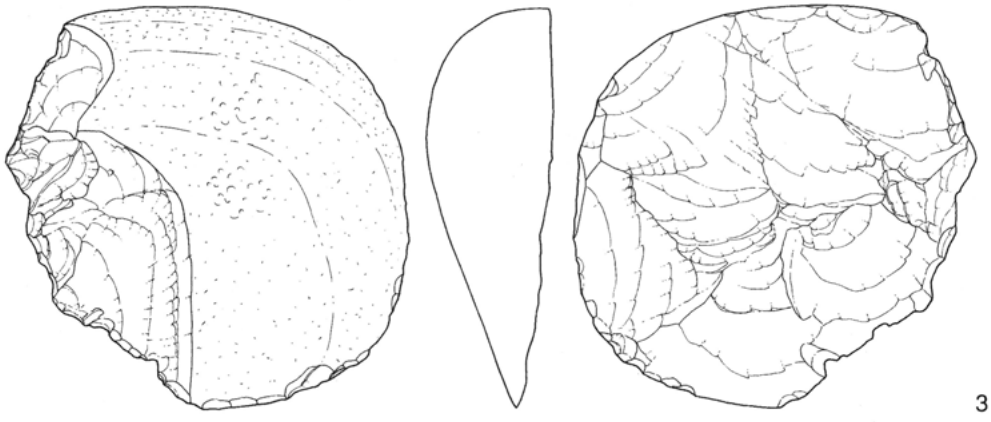
94Ca区（1～6、8～11、13～26）　94C区　SK69（7）　94C区　SE13（12）　94B区（27）　94A区（28、30～32）　94A区　SZ01（29）
※すべて 2/3。



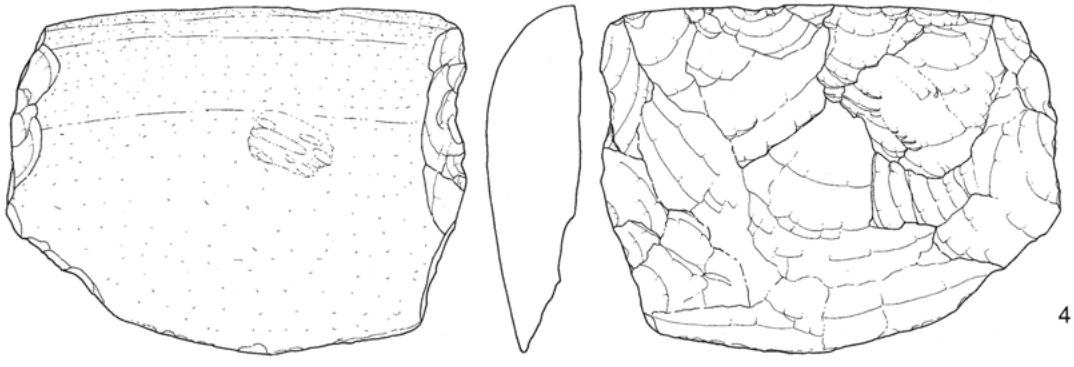
1



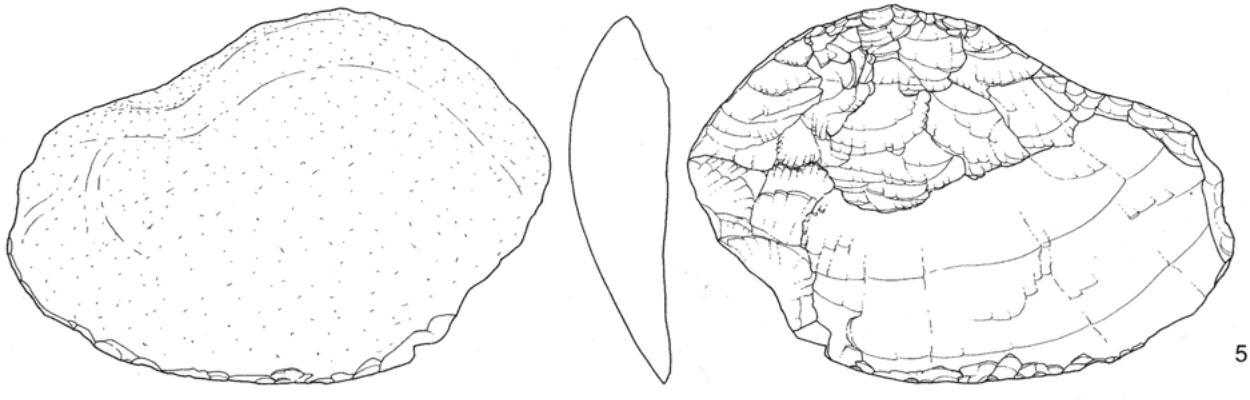
2



3

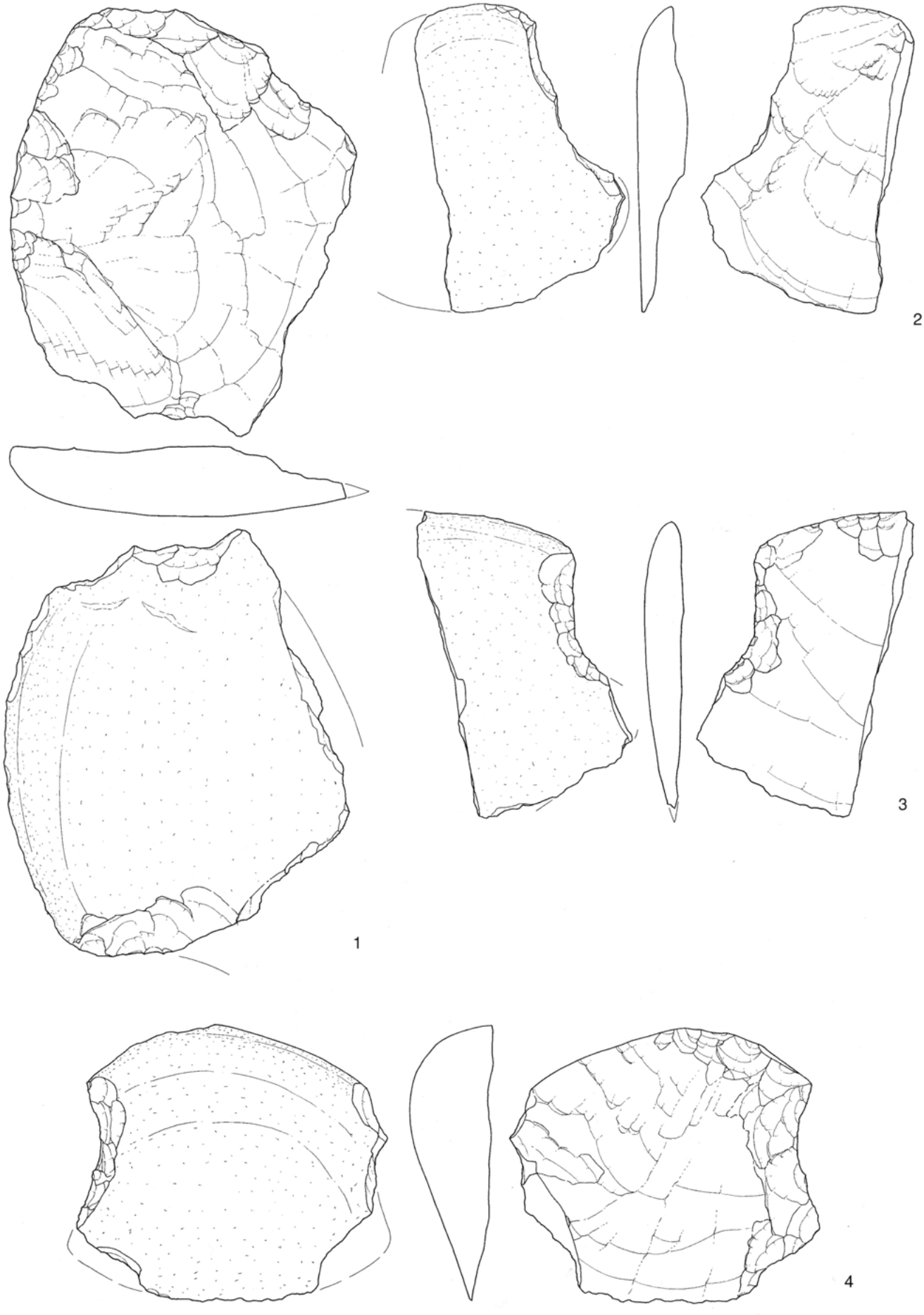


4

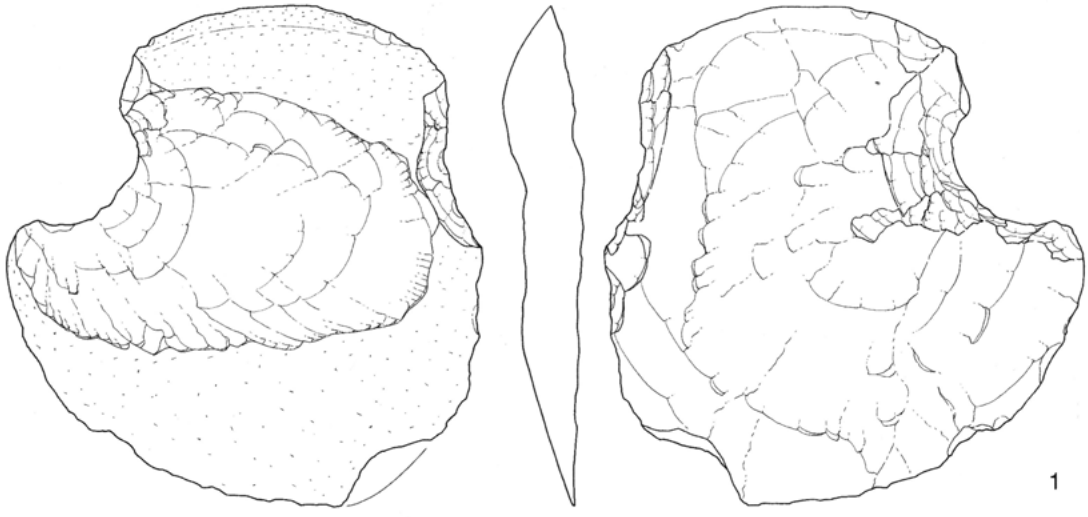


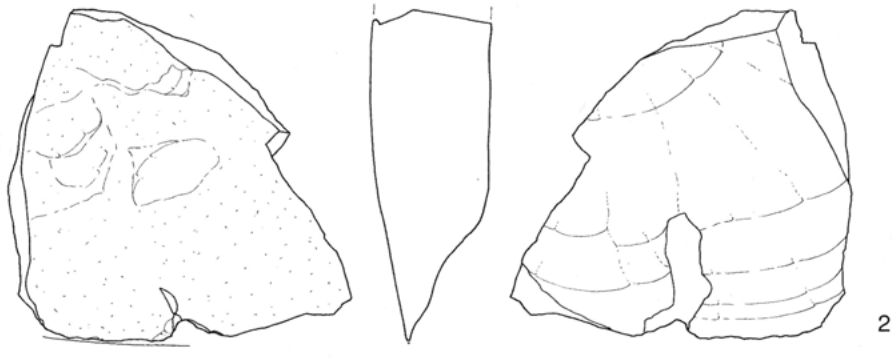
5

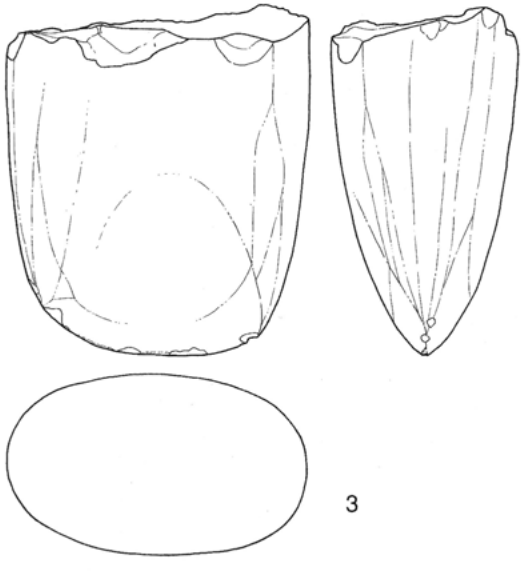
94C区　SK01（1）　94C区　SE29（2）　94C区　SZ01（3）　94Ca区（4、5）
※石器は以下すべて 1/2（遺物図版 98 まで）。



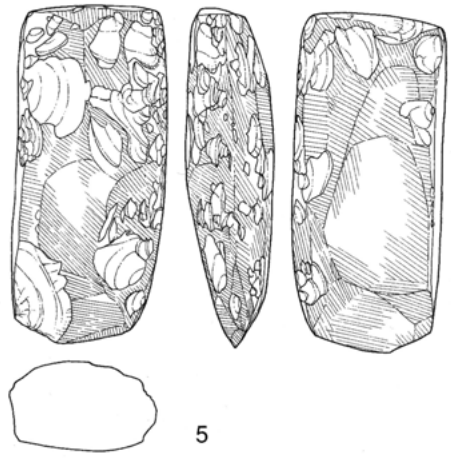
94C区　SD32（1）　94C区　SD01（2）　94Ca区（3）　94Cb区（4）



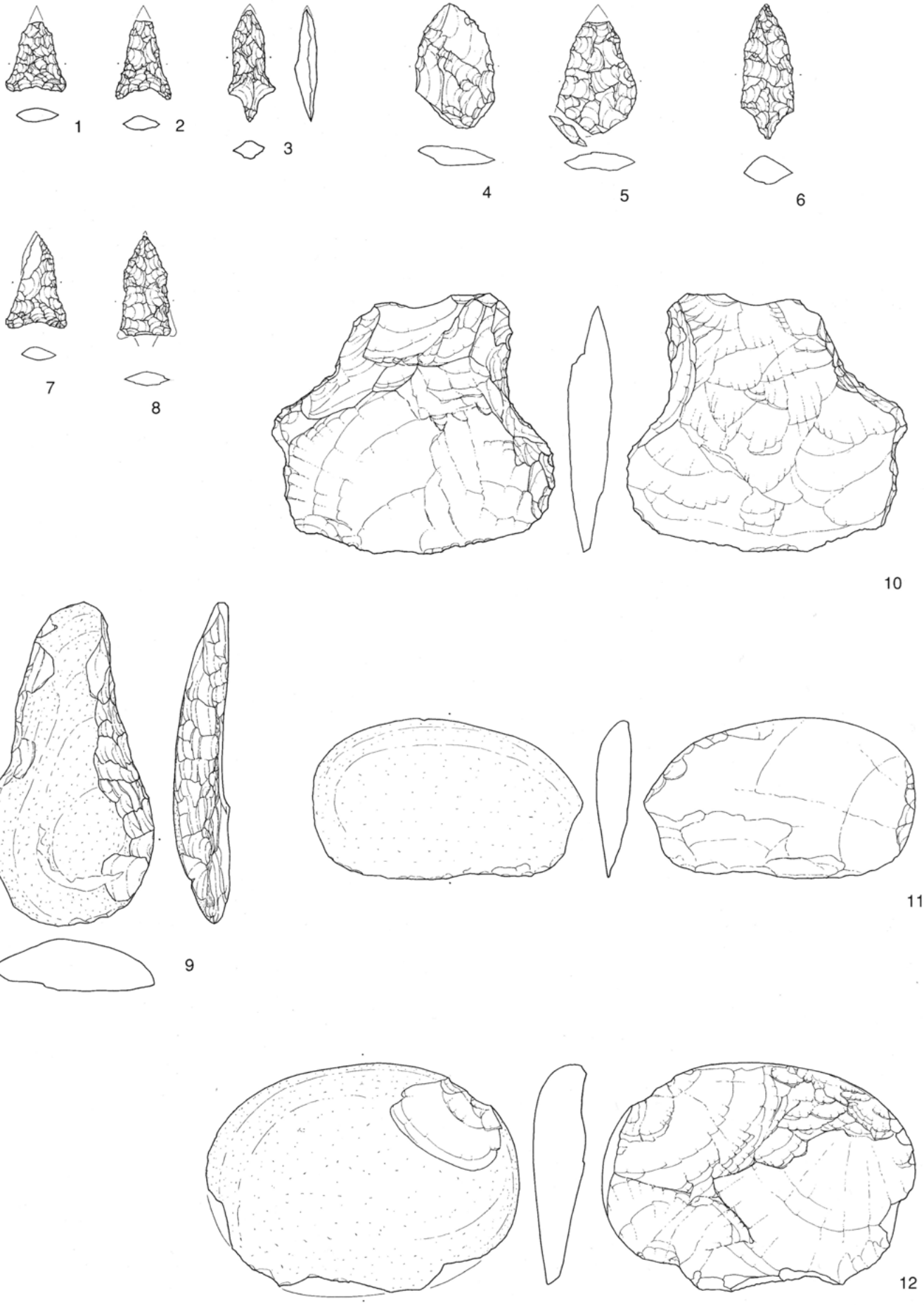




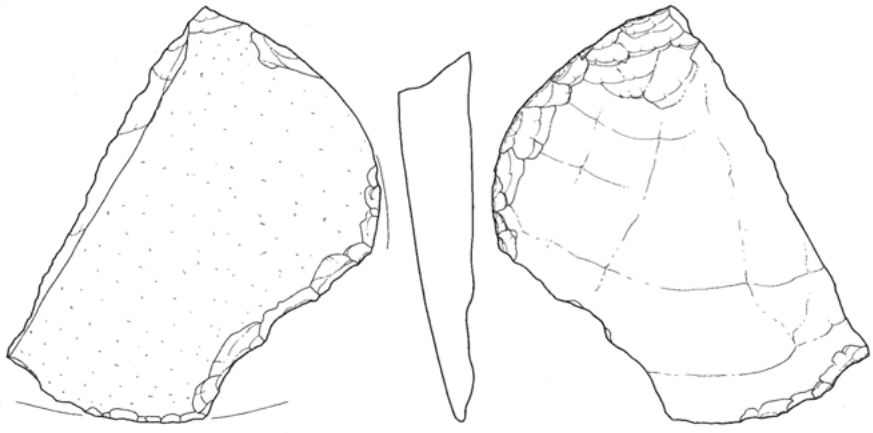




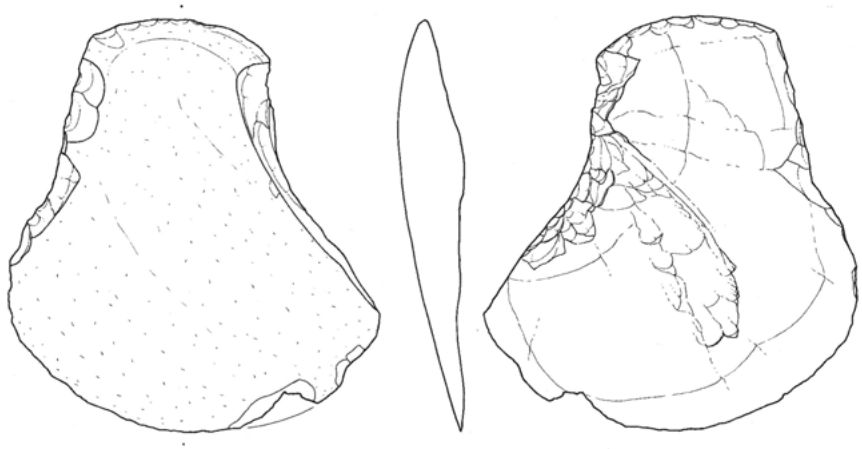
94Cb区（1、2）　94C区　SK03（3）　94Ca区（4、5）



95A区（1～4、9）　95A区　SK03（5）　95D区　SD26（6、11）　95Eb区（7、8）　95Da区（10）　95Eb区　SD20（12）



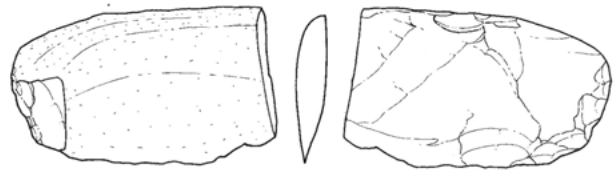
1



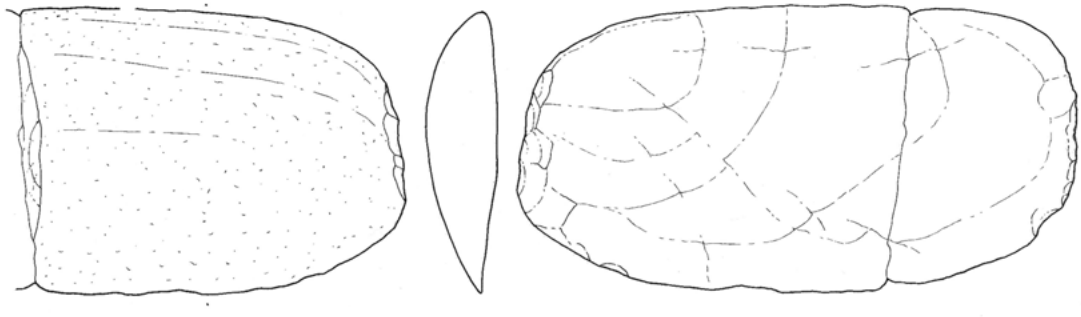
2



3

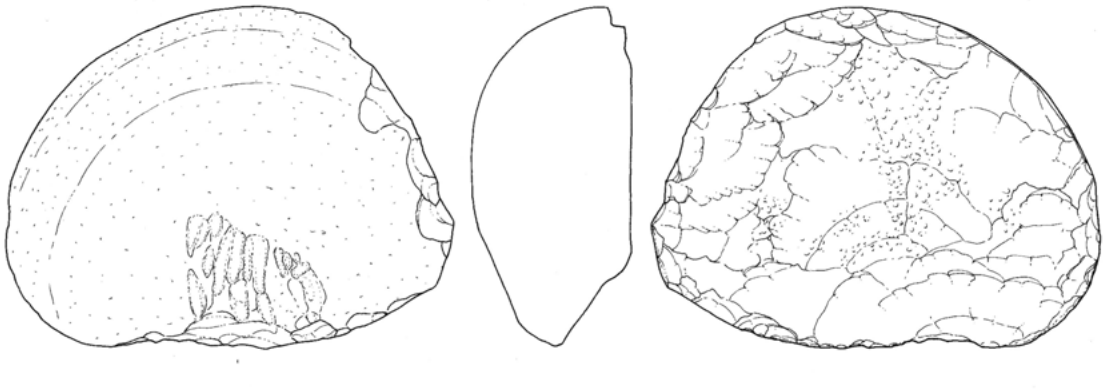


4

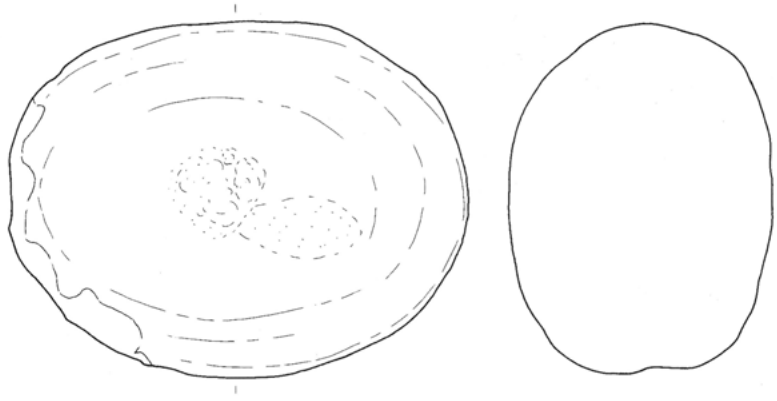


5

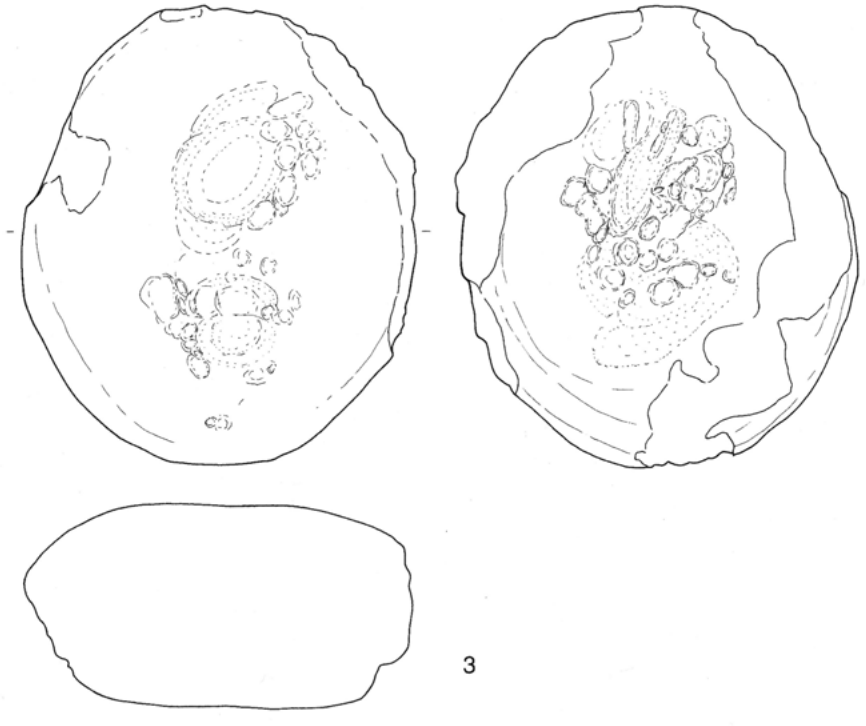
94B区　SD03（1）　95A区（2～4）　95A区　SK03（5）



1

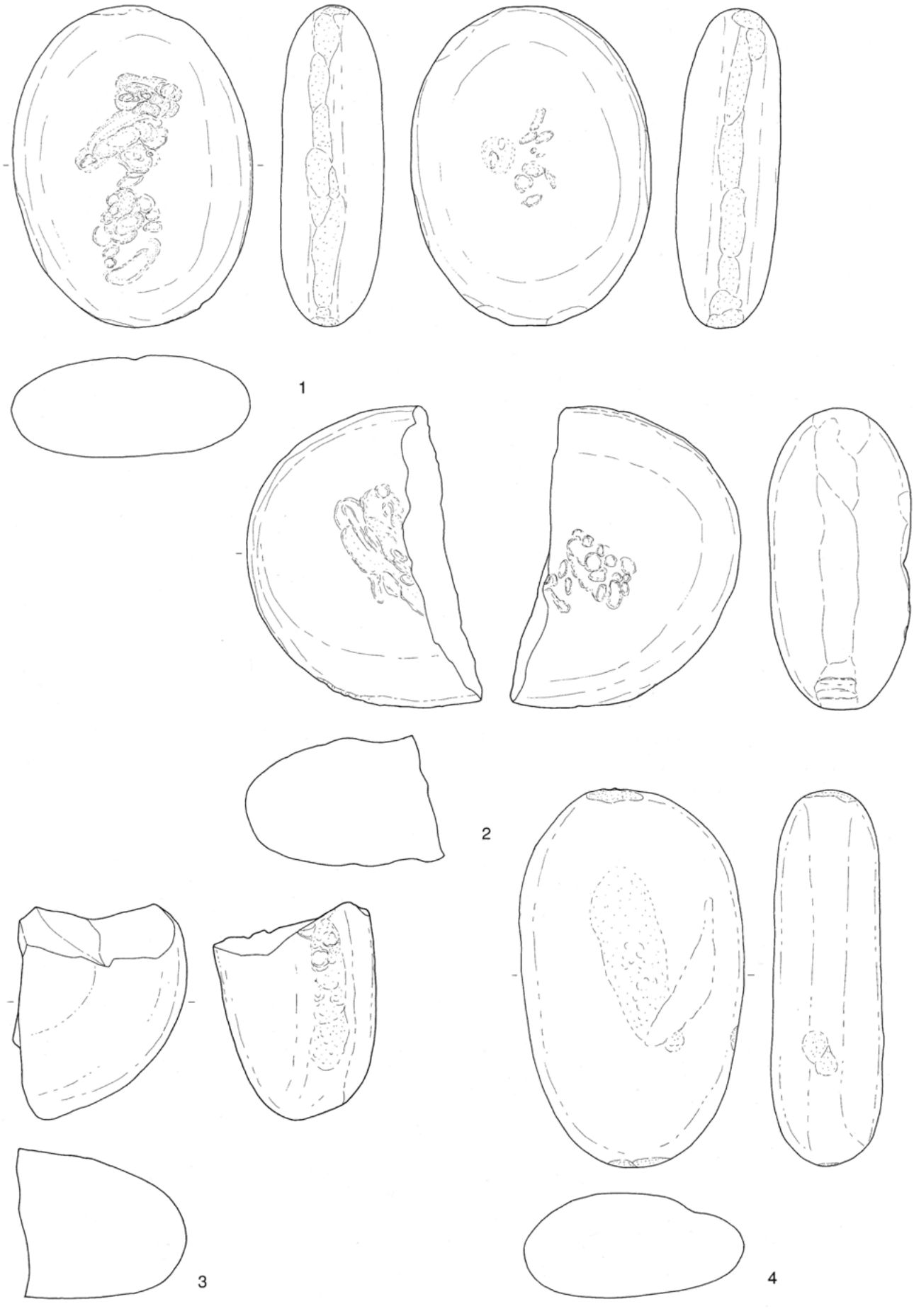


2

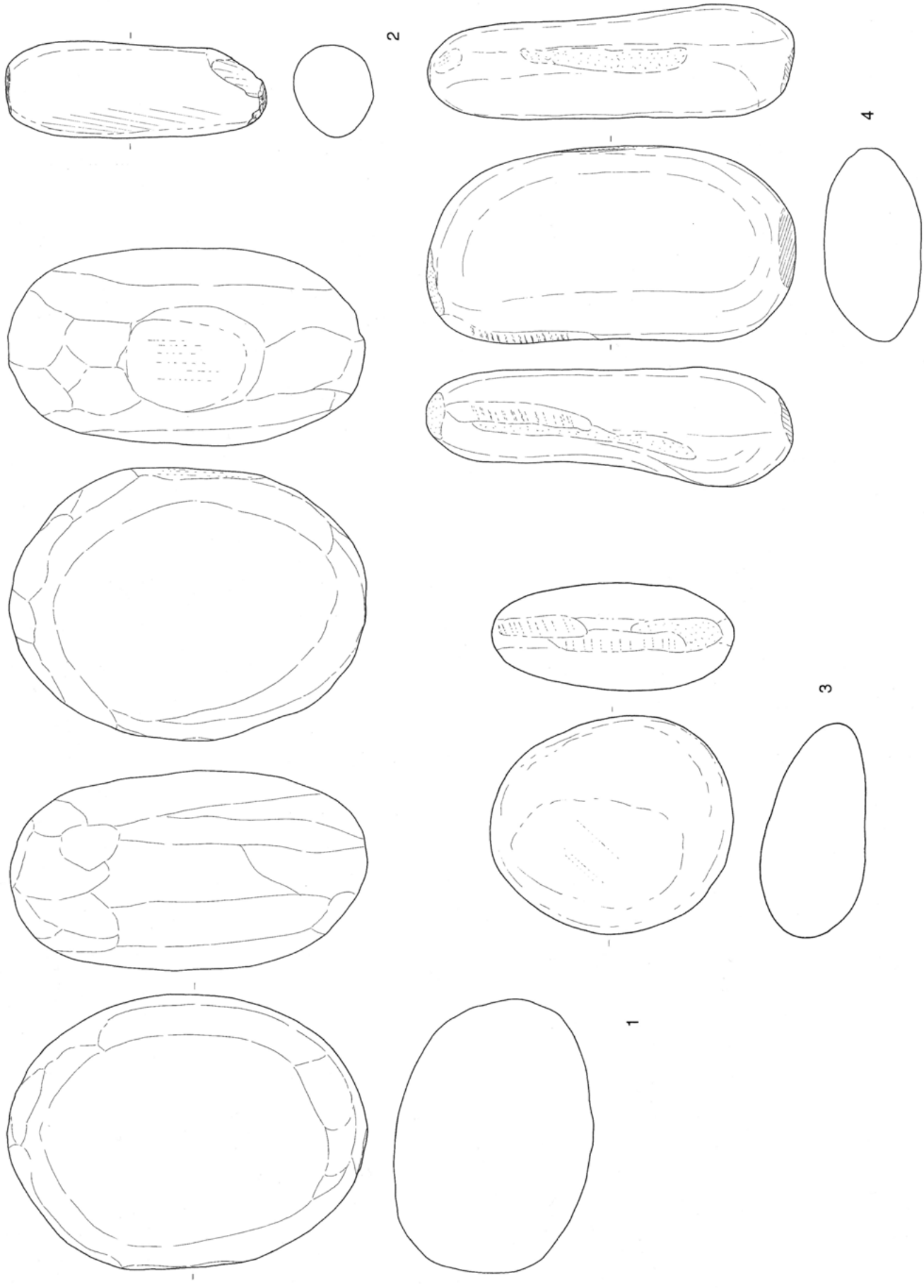


3

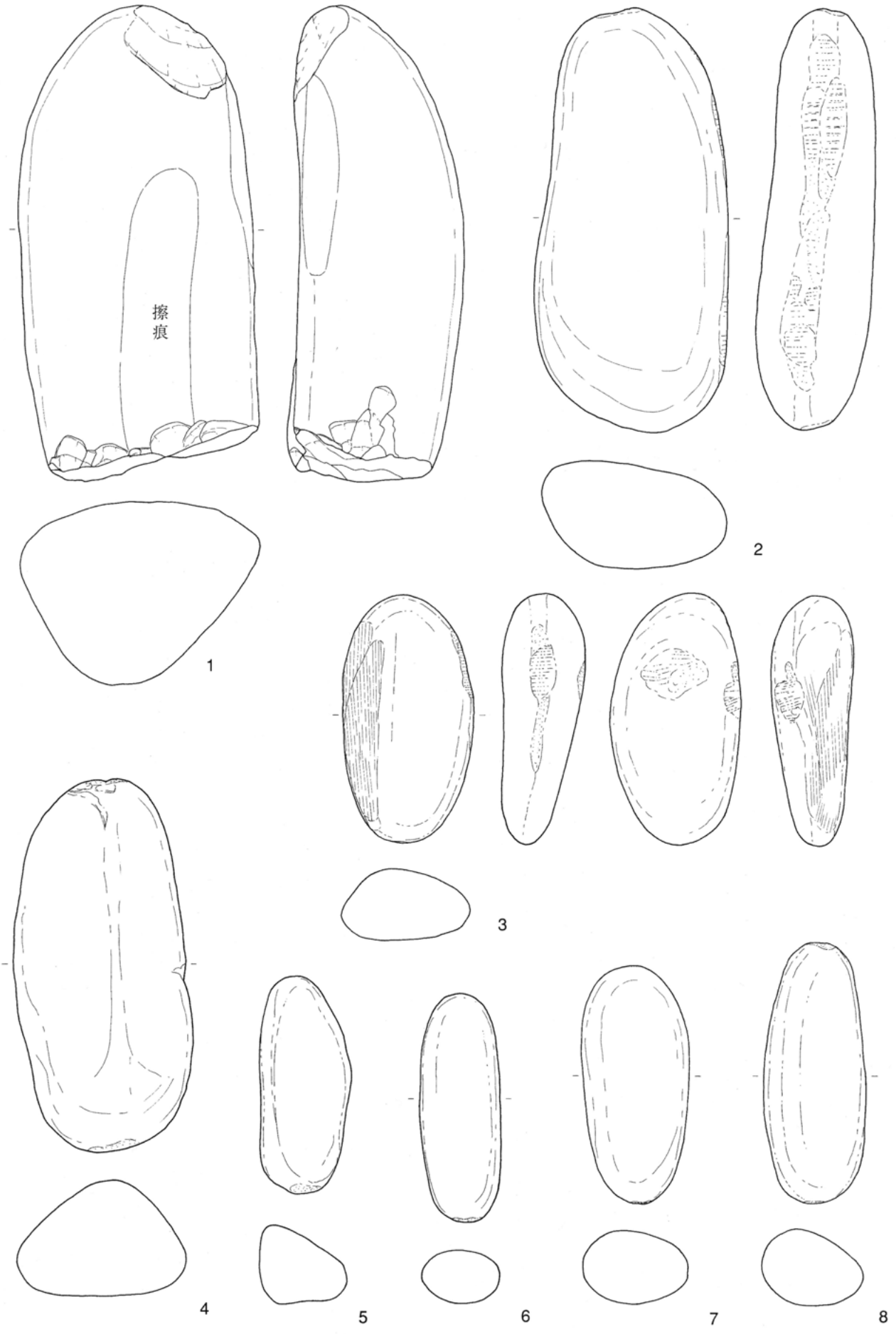
94C区　SK02（1、2）　94Ca区（3）



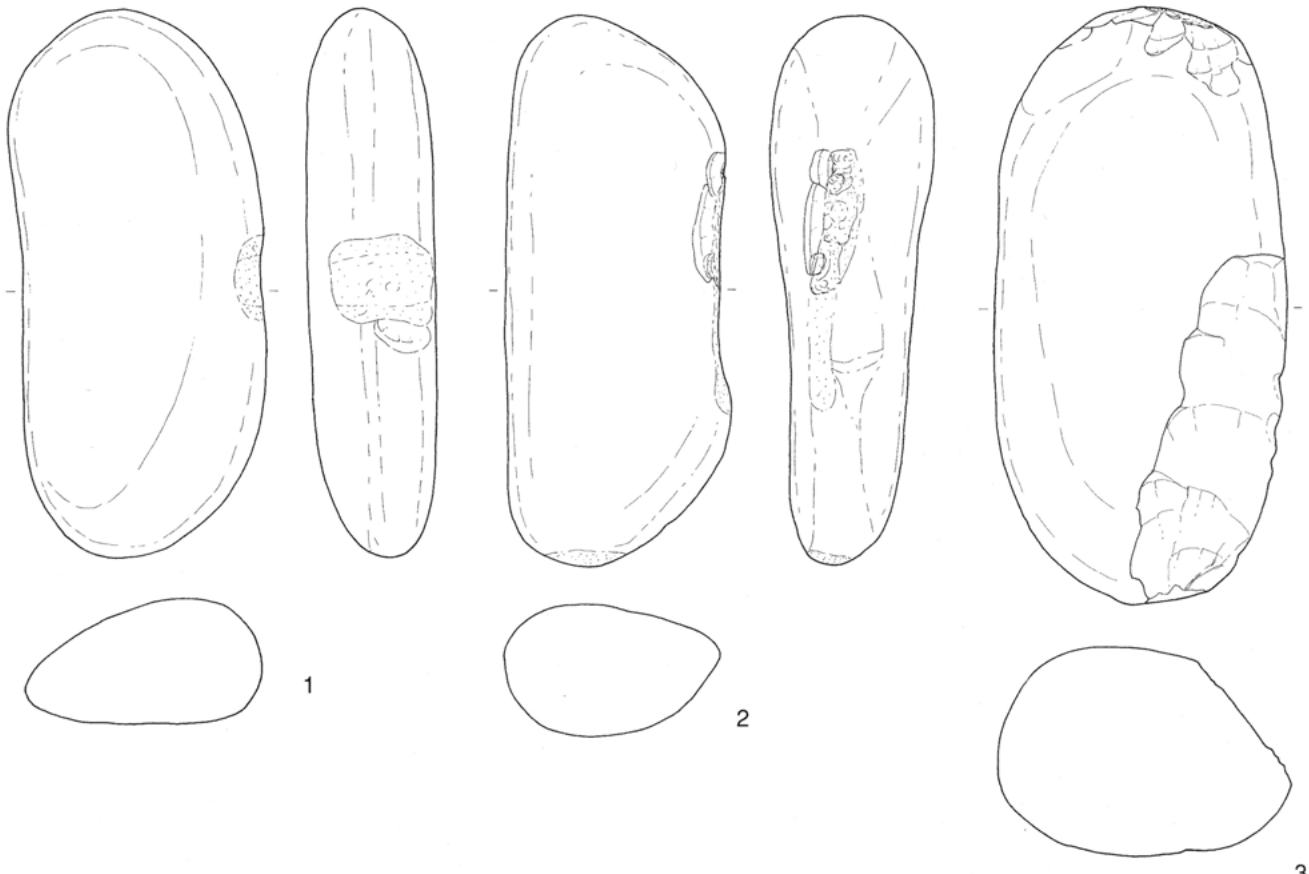
94Ca区（1、2、4）　94Cb区（3）

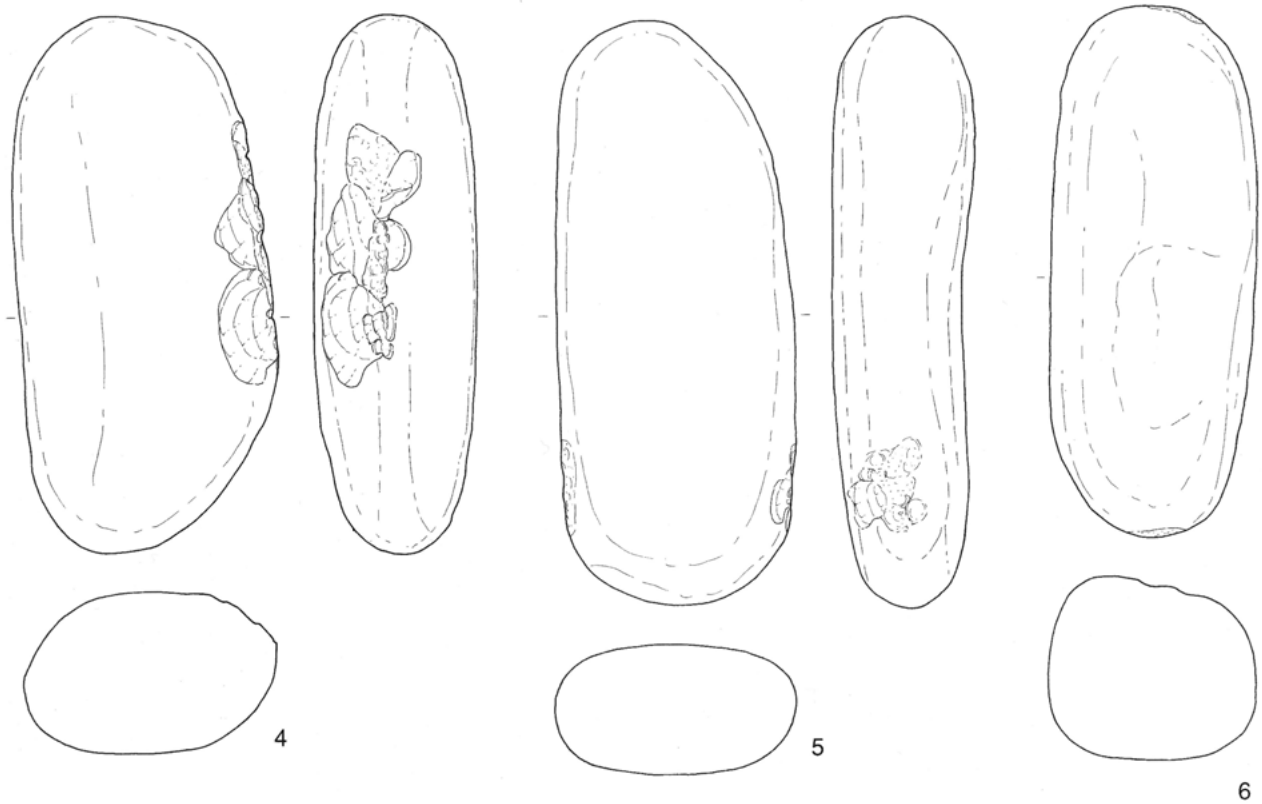


94Cb区（1、3）　94Ca区（2、4）

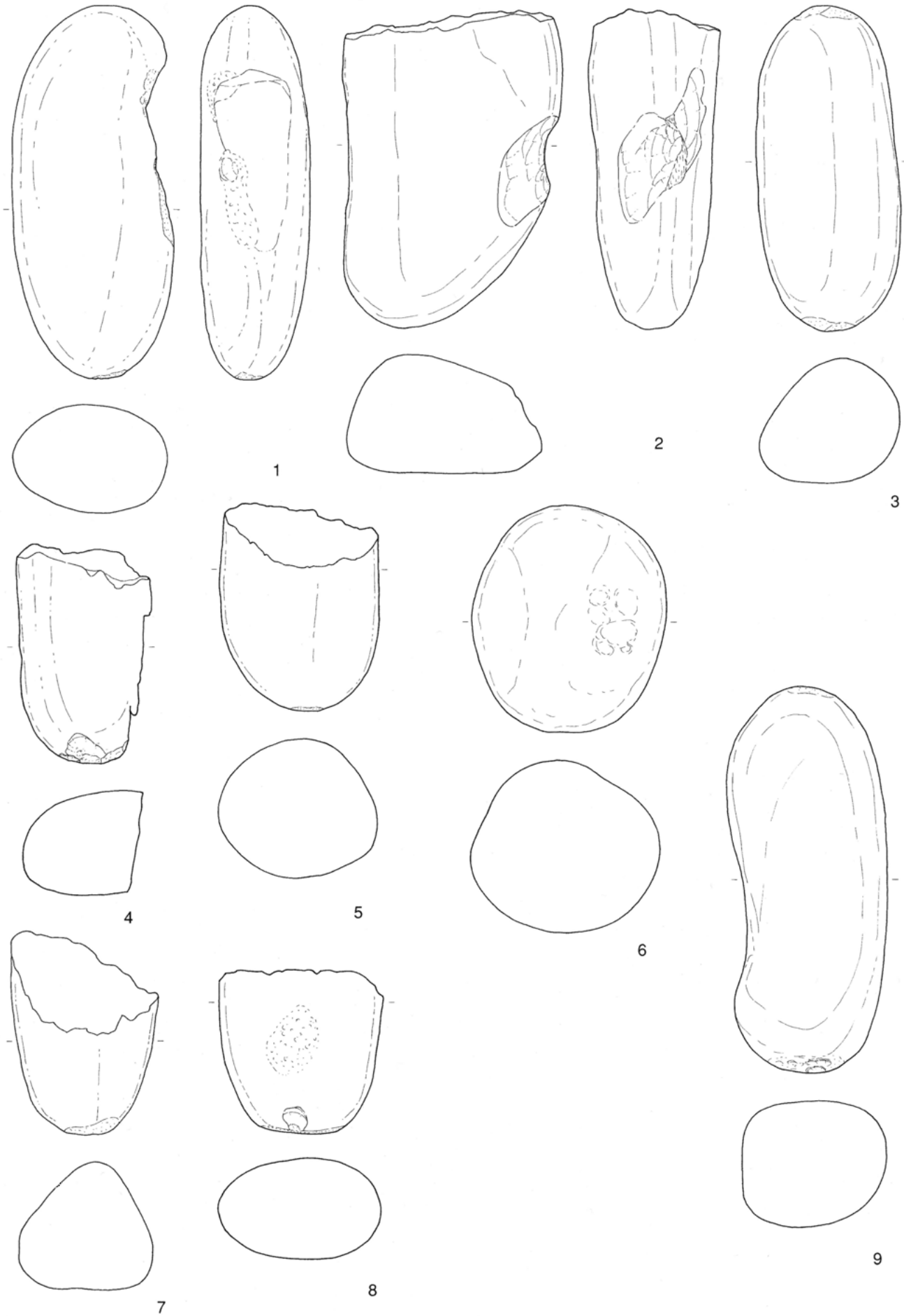


94C区　SD17（1）　94Cb区　（2、4、6）　94Ca区（3、8）　94C区　SD31（5）　94C区　SD42（7）

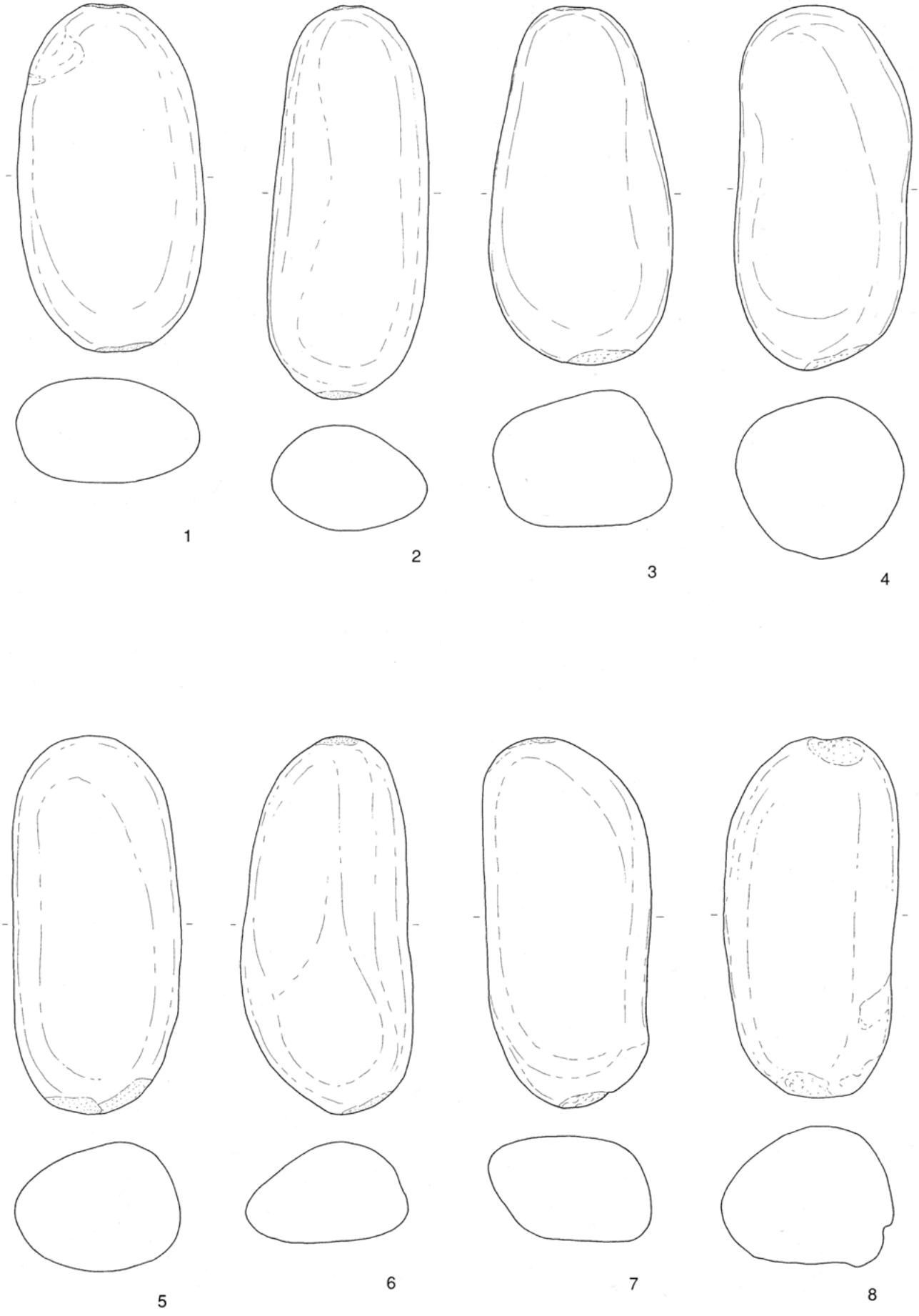




94Ca区（1、2、4、5）　94C区　SK08（3）　94Cb区（6）



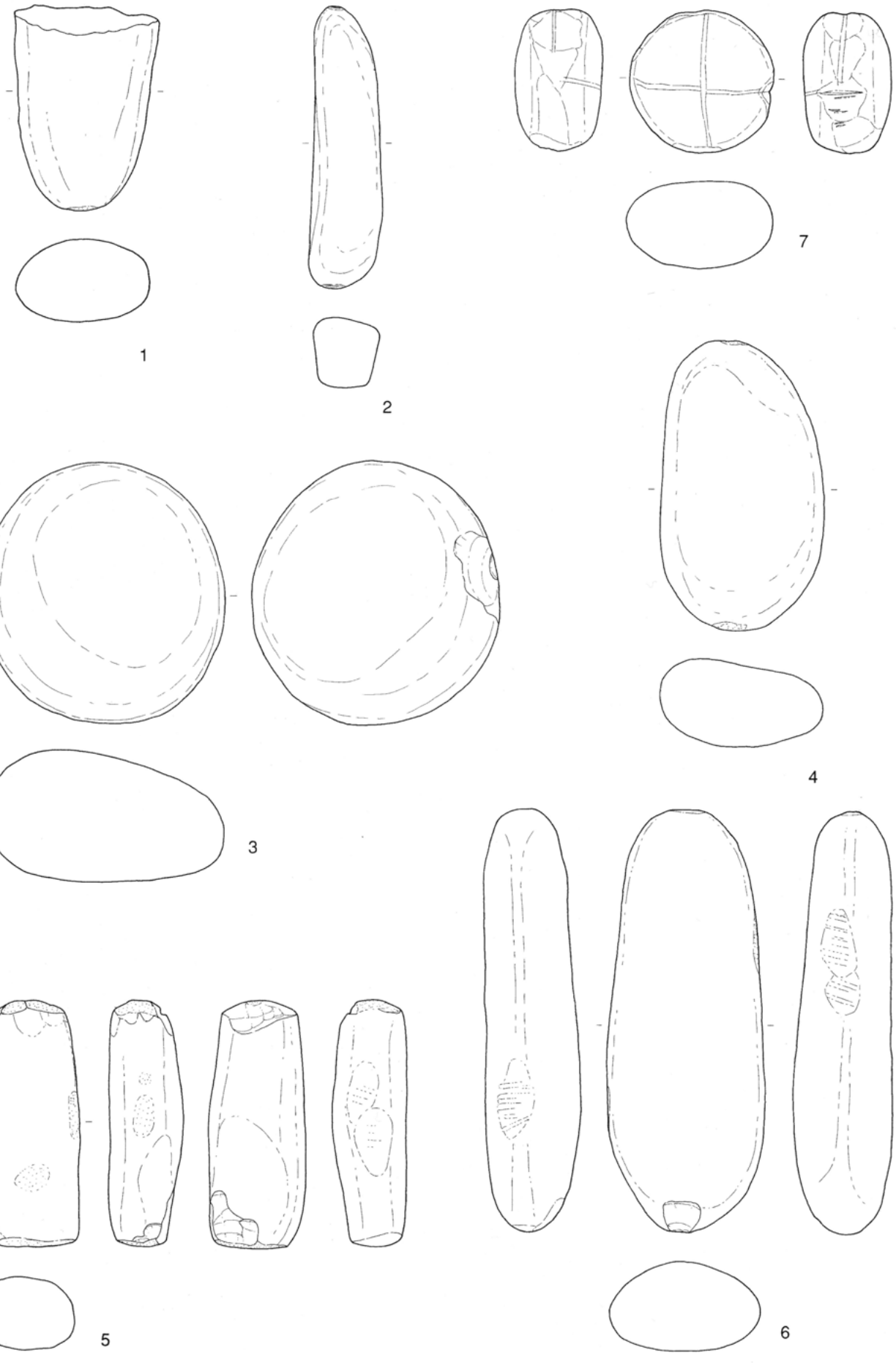
94Ca区（1～3、5、7～9）　94C区　SK08（4）　94CD区　（6）



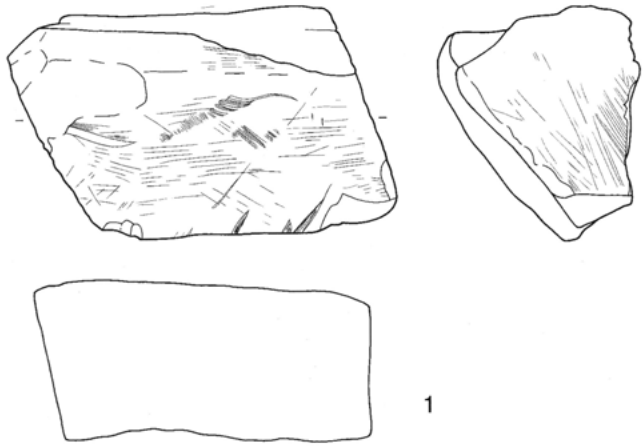
94Cd区（1）　94C区　SD43（3）　94C区　SE15（4）　94C区　SD49（5）　94Ca区（7、8）　94C区　SDI（2、6）



94Ca区（1、3、4）　94C区　SK08（2）　94B区　SK04（5）　94B区（6）　94A区　SK42（7、8）　94D区　SX03（9）



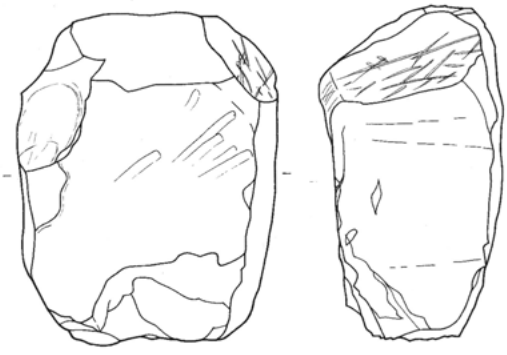
95Da区（1）　95B区　SD28（2）　95D区　SD24（03）　95A区（4）　95Ea区（5）　95B区　SD16（6）　95Ba区（7）



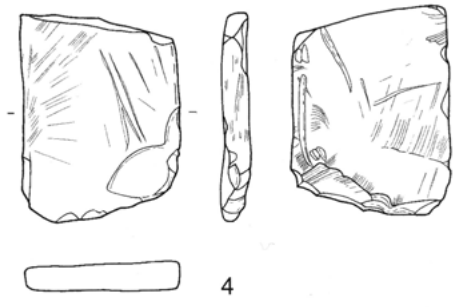
1



2



3

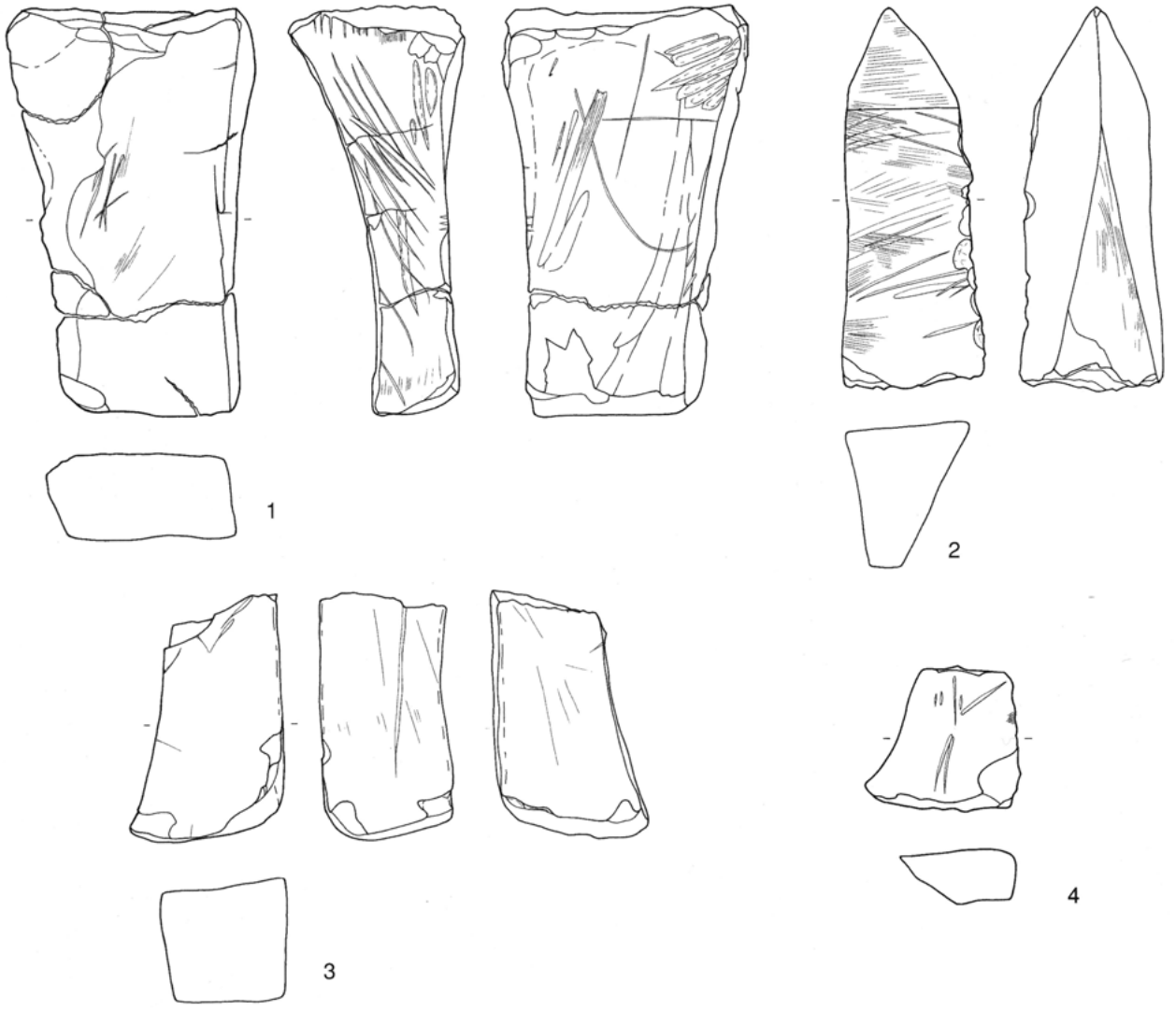


4

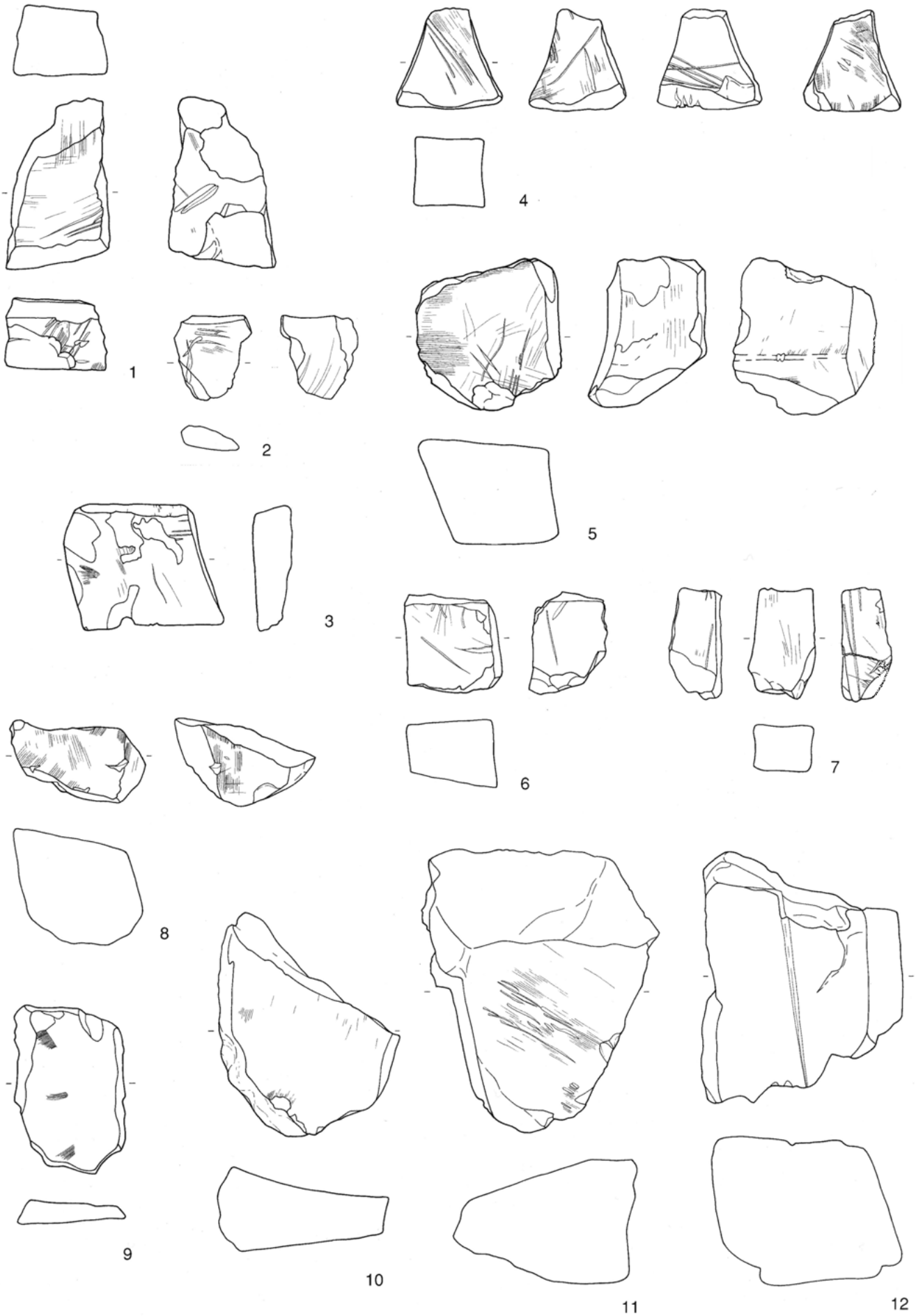
94C区　SD46（1、2）　94C区　SD49（3）　94C区　SE21（4）



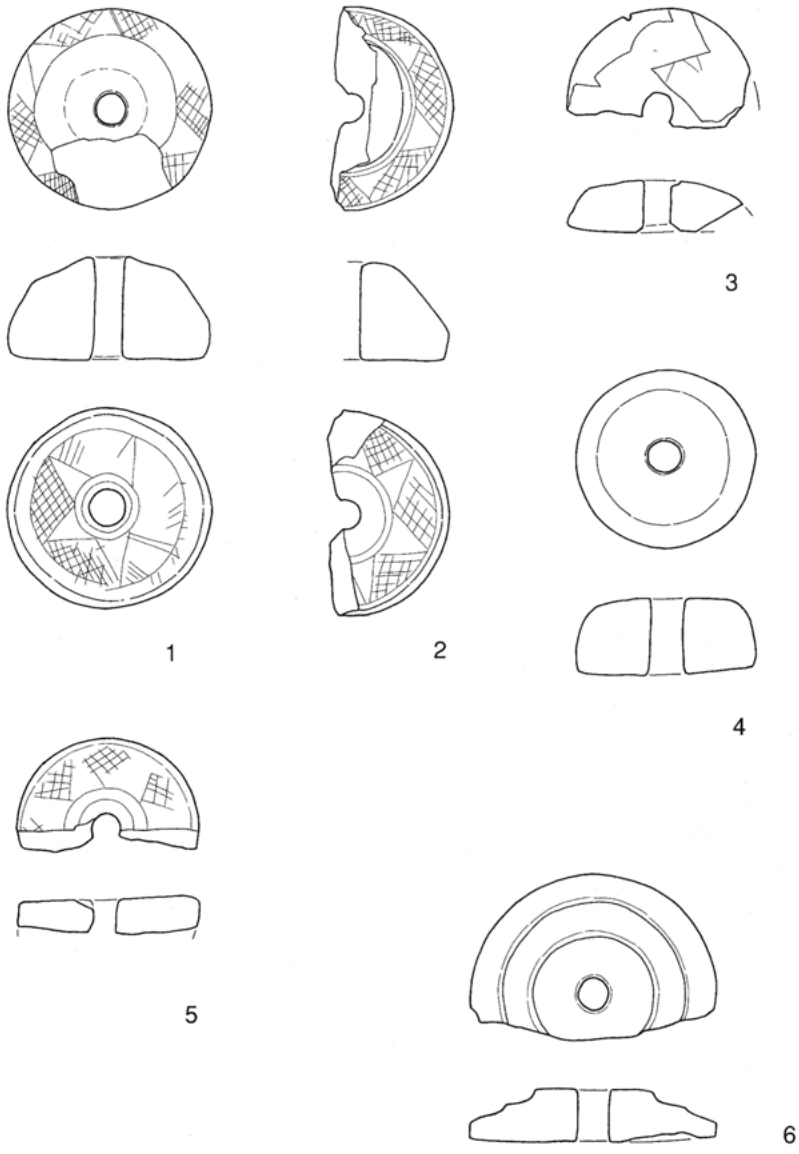
95A区　SX06（1）　95A区　SB01（2）　95B区　SD16（3、4）

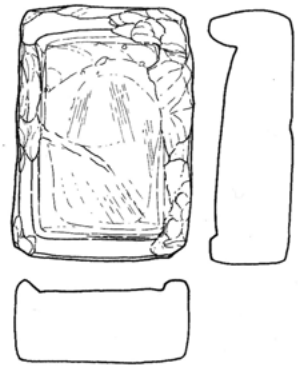


95BC区（1）　95B区　SD25（2）　95C区　SB03（3）　95C区　SE06（4）　95C区（5）

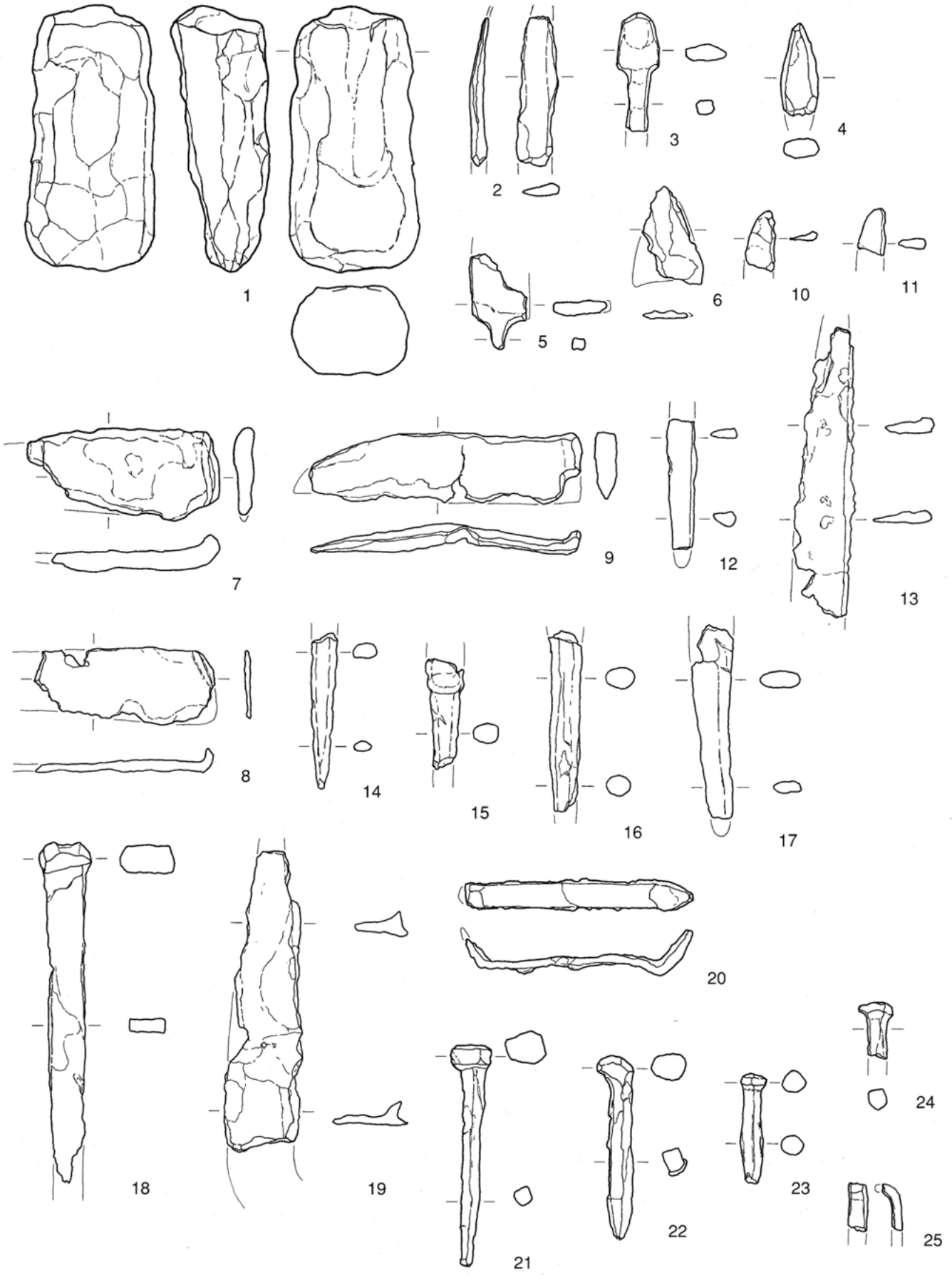


95D区　SD22（1）　95D区　SD26（2、3、5、6）　95Db区（4）　95Ea区（7）　95E区　SB24（8）　95Eb区（9、12）　95E区　SB31（10）
95E区　SB19（11）

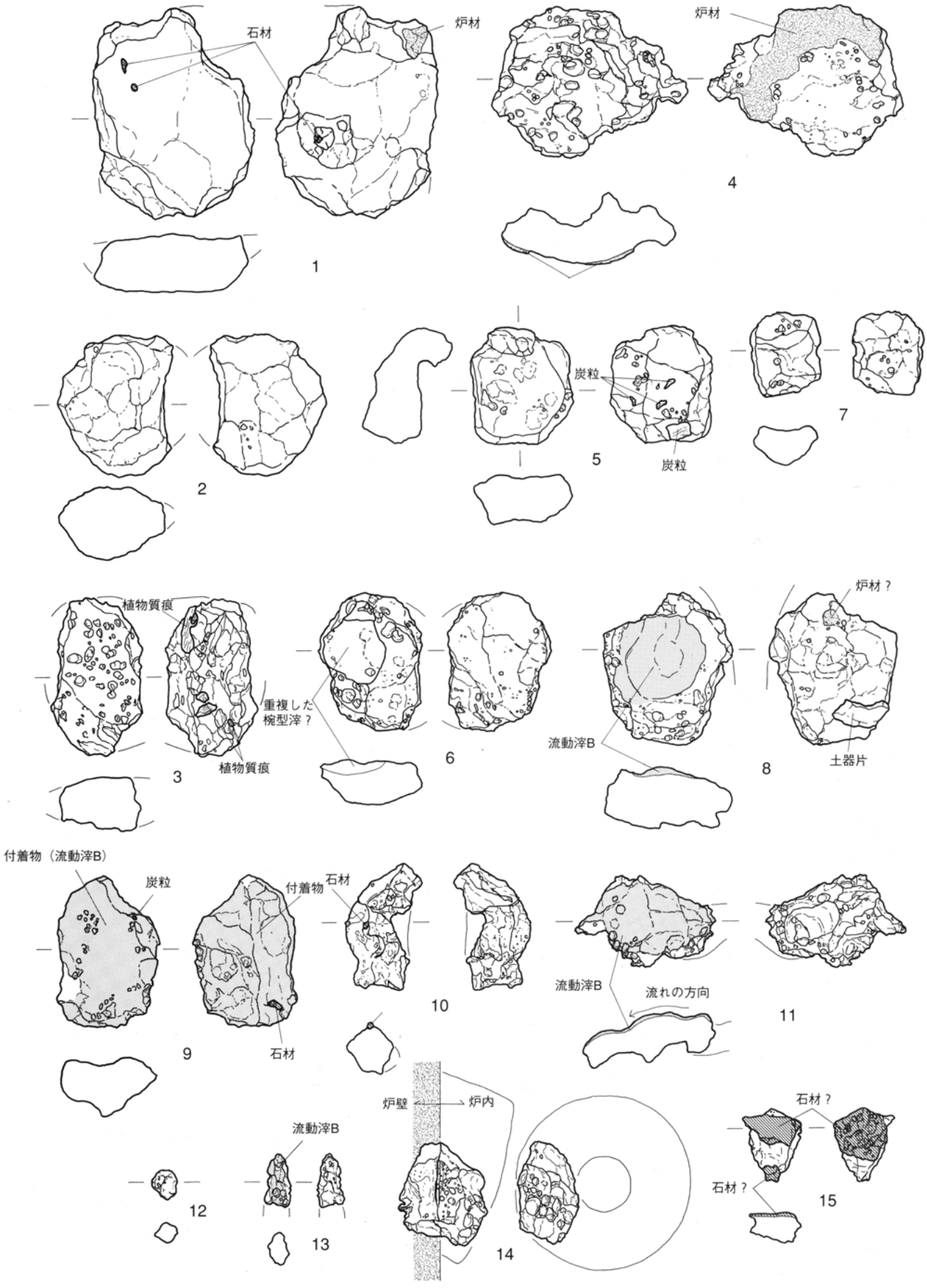




95B区　SD14（SK15とのベルトから）（1）　95B区　SD25（2）　95Da区（3）　95D区SD27（4）　95E区　SB34北東（5）　95Eb区（6）
95A区　SX09（7）
※すべて 2/3。



※すべて1/2。


石材
炉材
1
炉材
4
2
炭粒
炭粒
5
7
植物質痕
植物質痕
重複した
椀型滓？
3
6
流動滓B
炉材？
8
土器片
付着物（流動滓B）
炭粒
付着物
石材
9
石材
10
流動滓B
流れの方向
11
炉壁
炉内
流動滓B
12
13
14
石材？
石材？
15

※すべて1/2。



94D 区全景（西から）



94D 区全景（東から）



94D 区 SK02 土器出土状態



94Ca 区全景



94Ca 区西部（北東から）
中央の白い部分が帯状窪地



94Ca 区西部（北から）



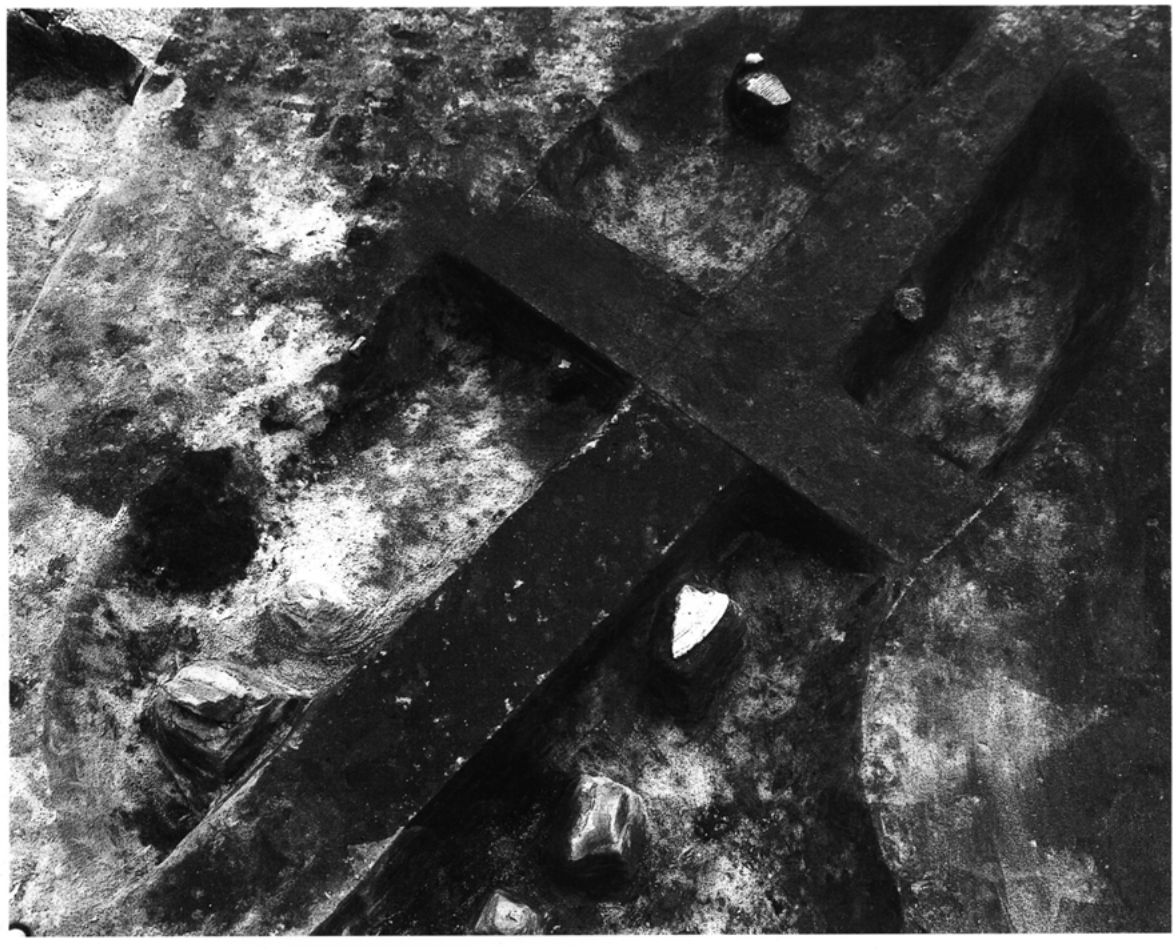
94Ca 区南西部近景（北から）
SX01 と SD17



94Ca 区南東部近景（北から）



94Ca 区北西部下呂石剥片出土状態（東から）



94Ca 区 SK01 遺物出土状態（東から）



94Ca 区 SK02
遺物出土状態
（東から）



94Ca 区 SE02
底面土器出土状態
（南から）



94Ca 区北東部井戸群（北西から）



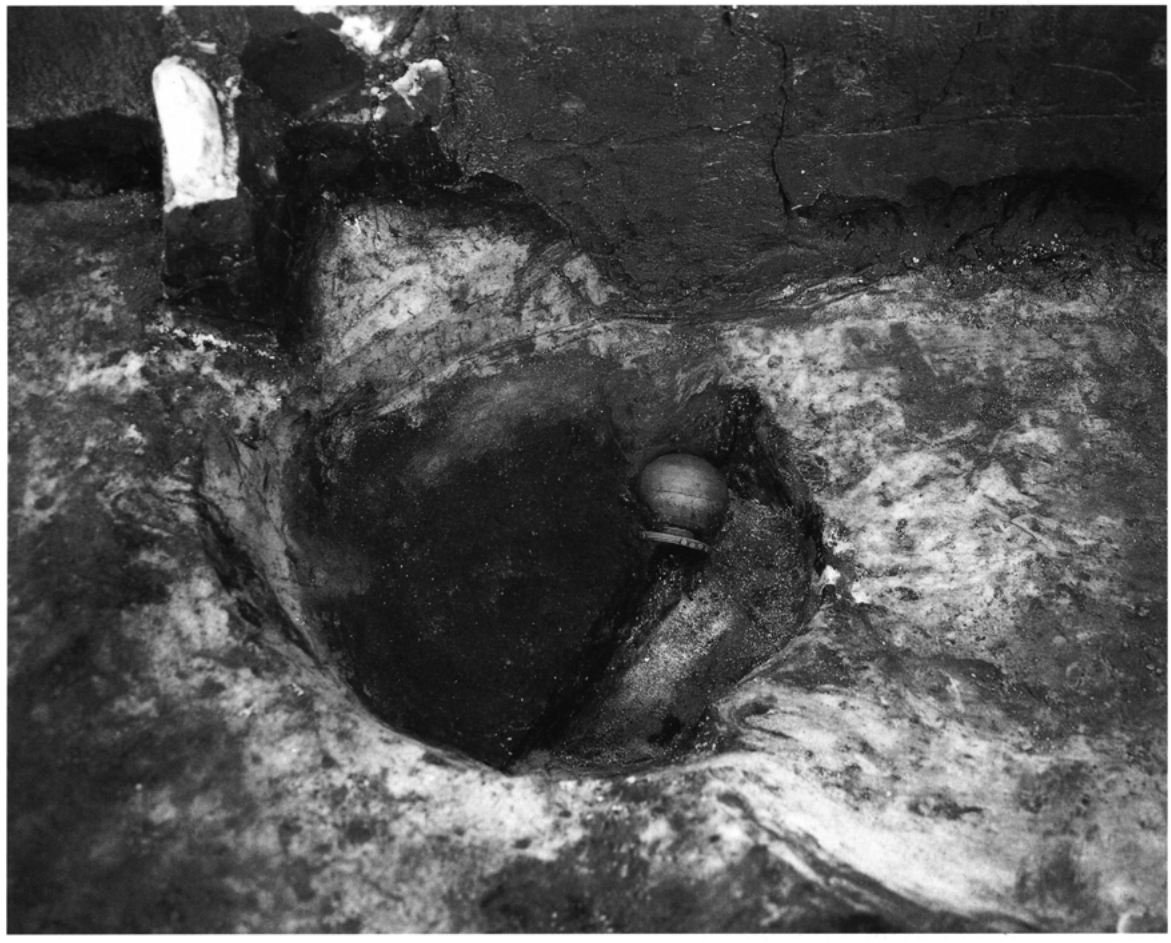
94Ca 区北東部井戸群近景（北西から）



94Ca 区 SD18（西から）



94Ca 区 SD Ⅰ（西から）



94Ca 区 SK12：赤彩壺出土状態（南から）





94Ca 区 SD12（東から）



（西から）

94Ca 区 SD17 遺物出土状態（東から）





遺物近景
加飾高杯 D

94Ca 区 SE10 一部掘り下げ（北から）

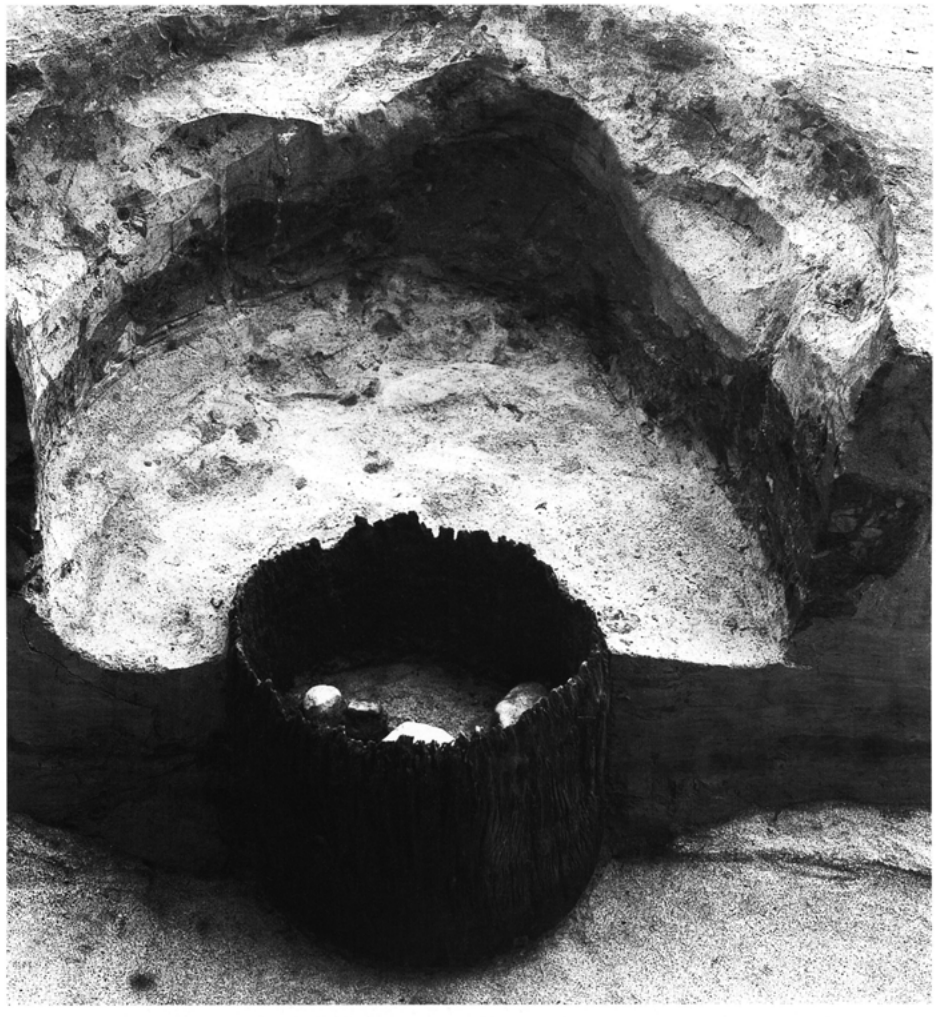


井筒内遺物出土状態

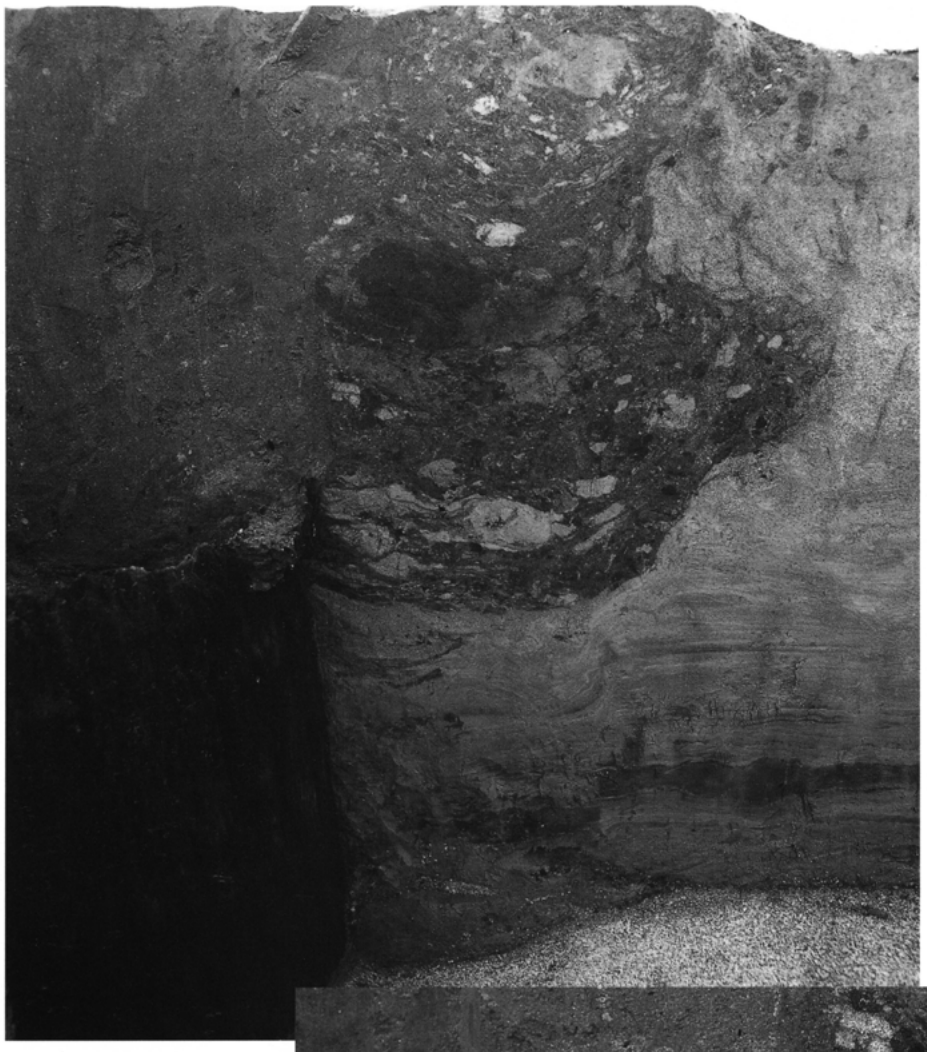


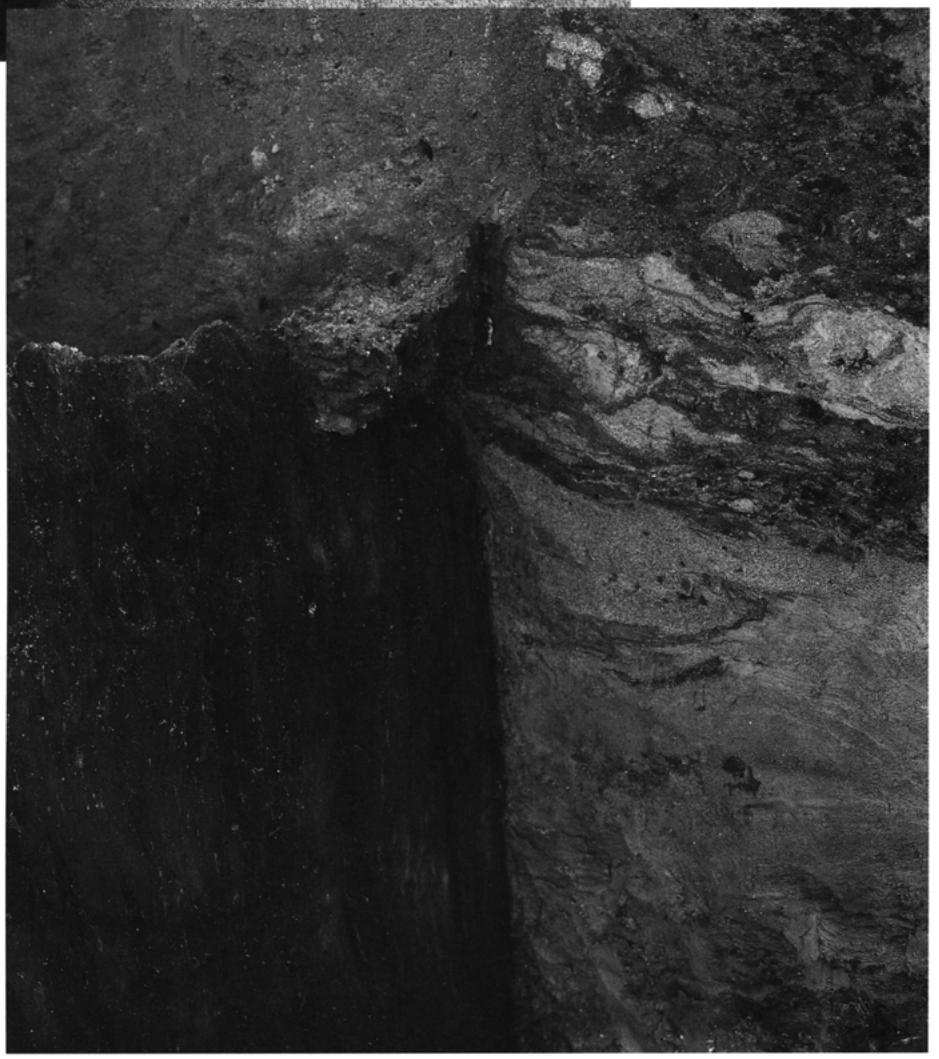
最下段井筒検出状態





掘形掘削状況





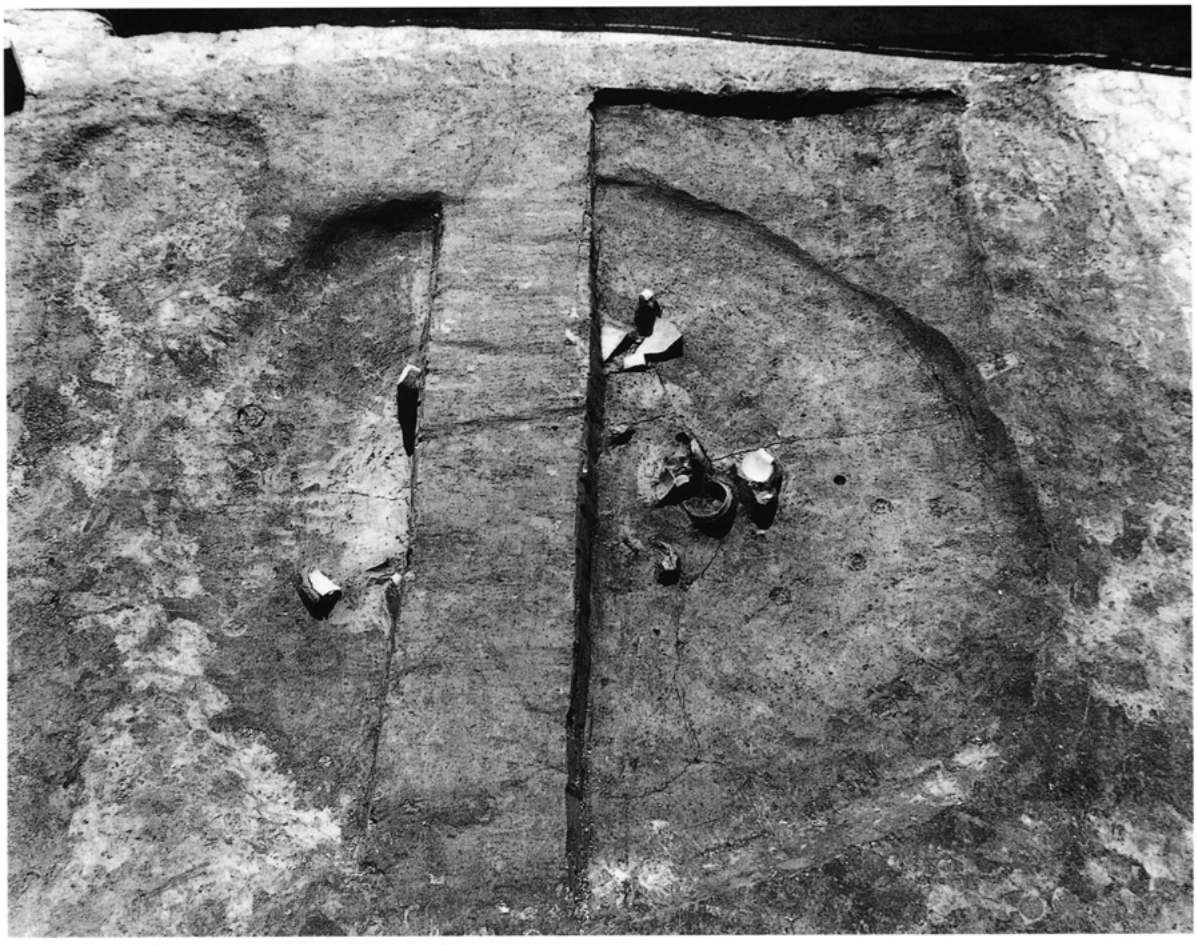
上段井筒痕検出状態





94Ca 区 SX03
（北東から）

（東から）



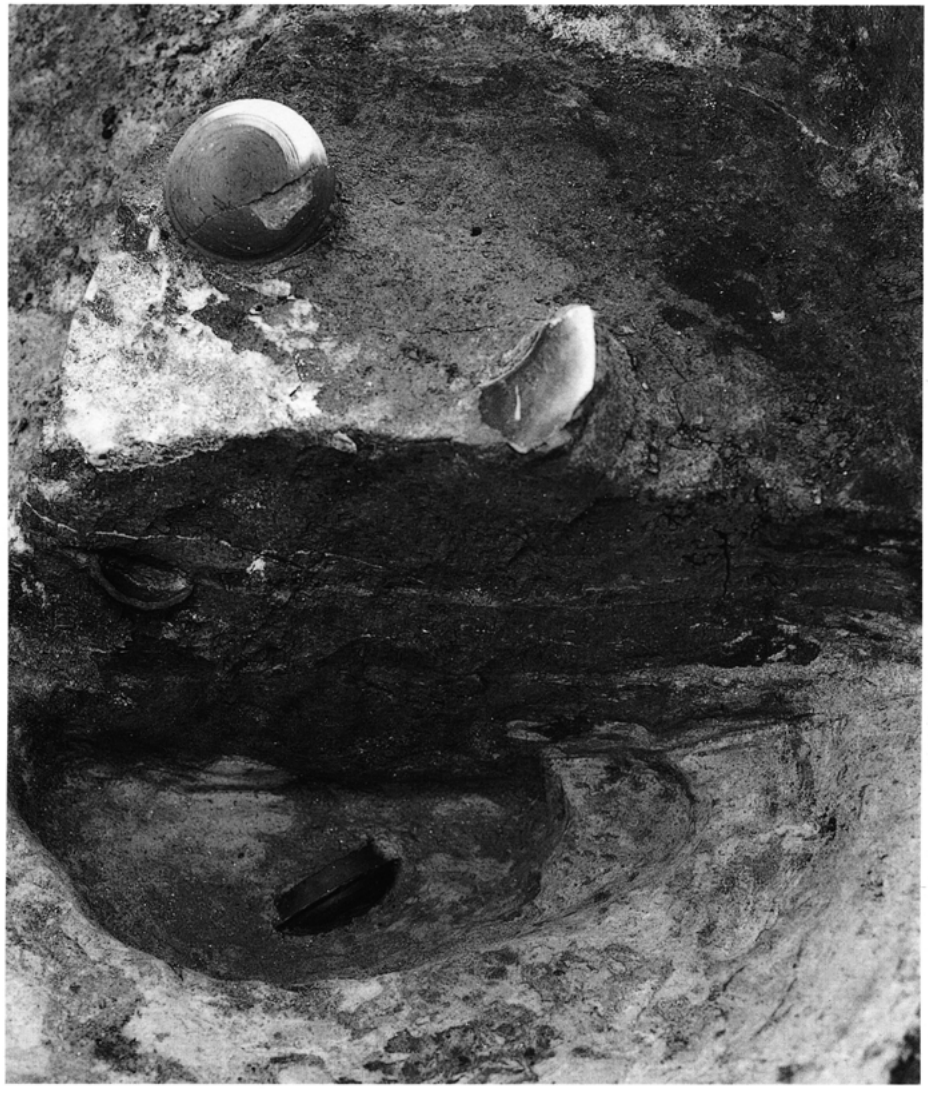
94Ca 区 SE23 上層遺物出土状態（北から）



94Ca 区 SK39（南西から））



94Ca 区 SX05
P01 内遺物
出土状態



P02 内遺物
出土状態



94C 区全景（東から）

手前が Cb 区、向こう側が Ca 区。古墳時代Ⅱ期に属す遺構を掘り下げた後に、一部古墳時代Ⅰ期の遺構を掘り下げ始めている状況。



94Cb 区全景（北東から）



94Cb 区 SD Ⅰ屈曲部および畝状遺構の周辺

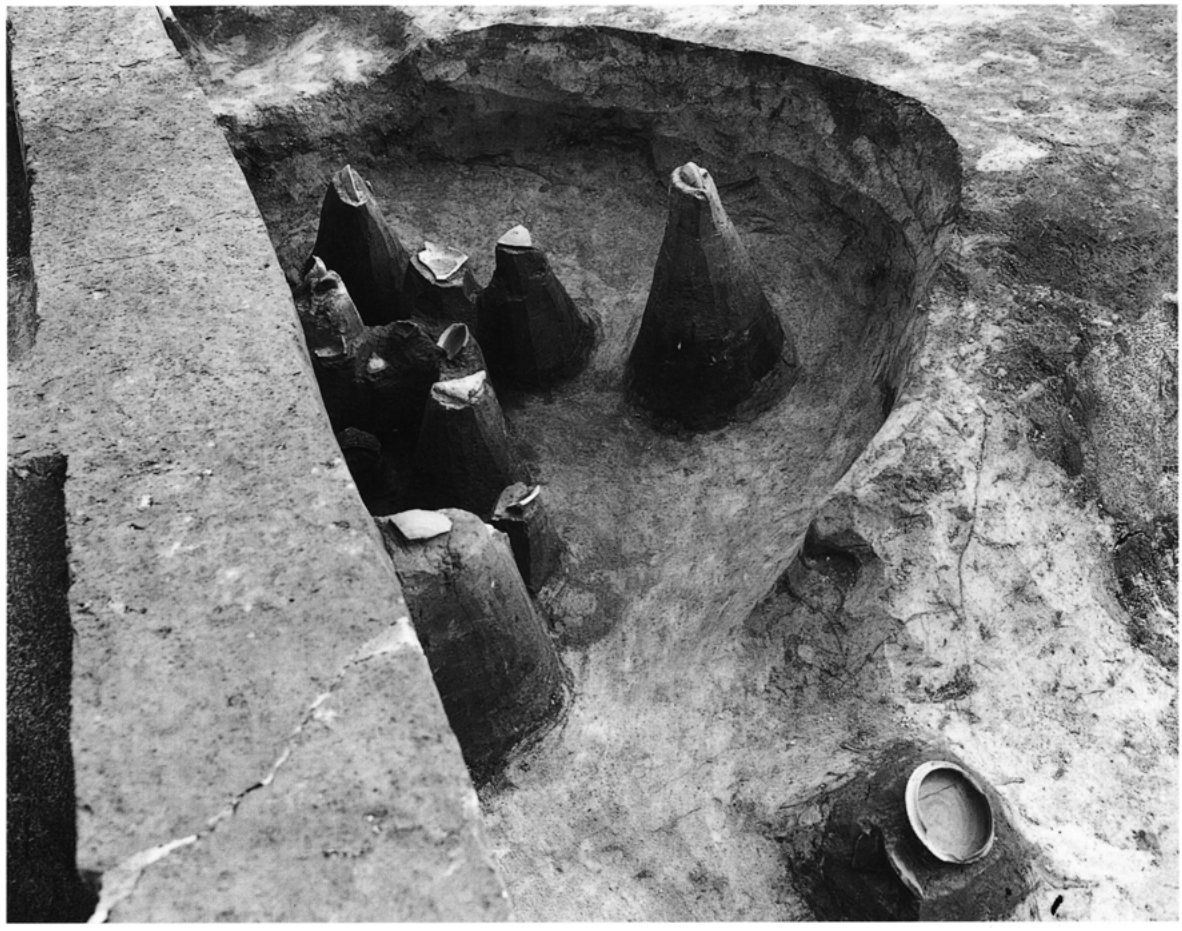


（北から）

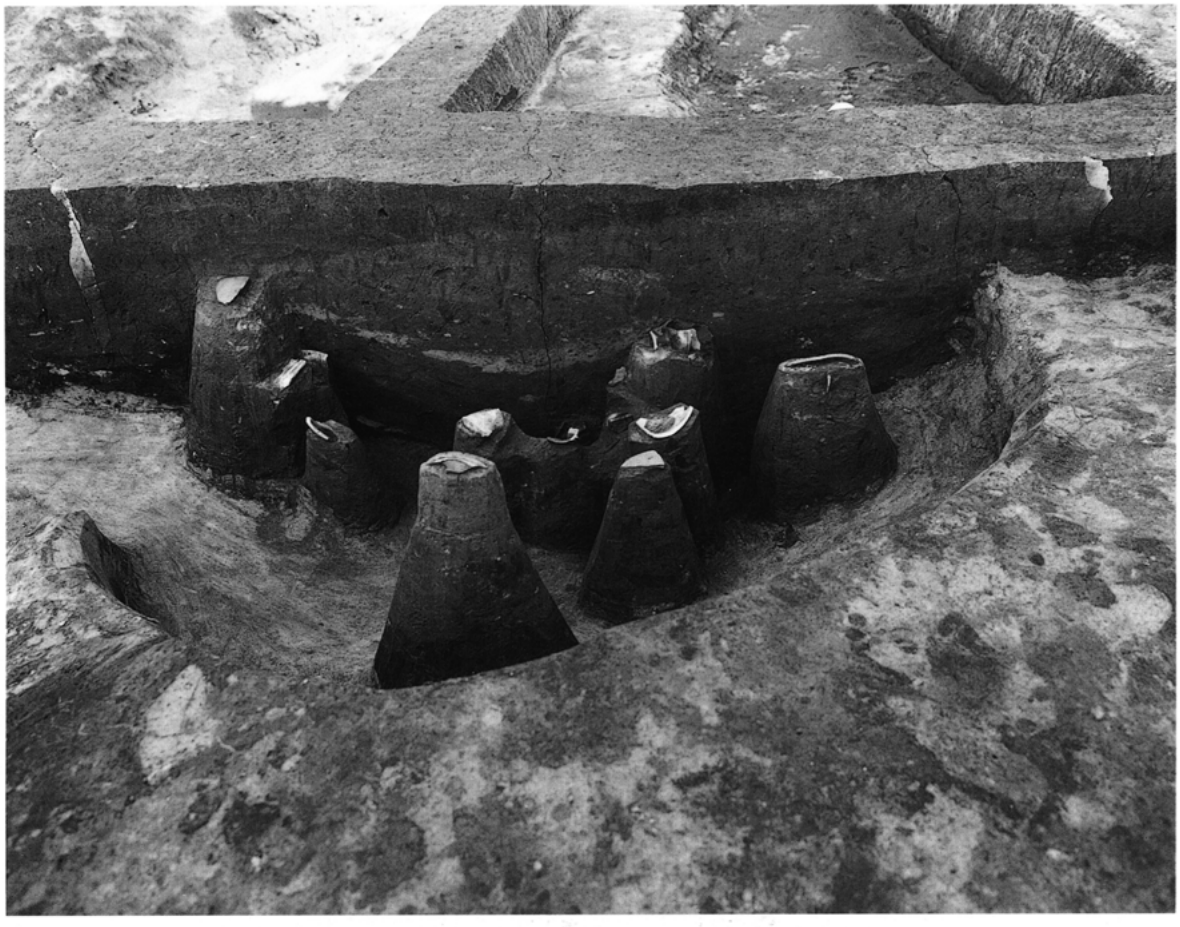
94Cb 区 SE06 遺物出土状態

（西から）





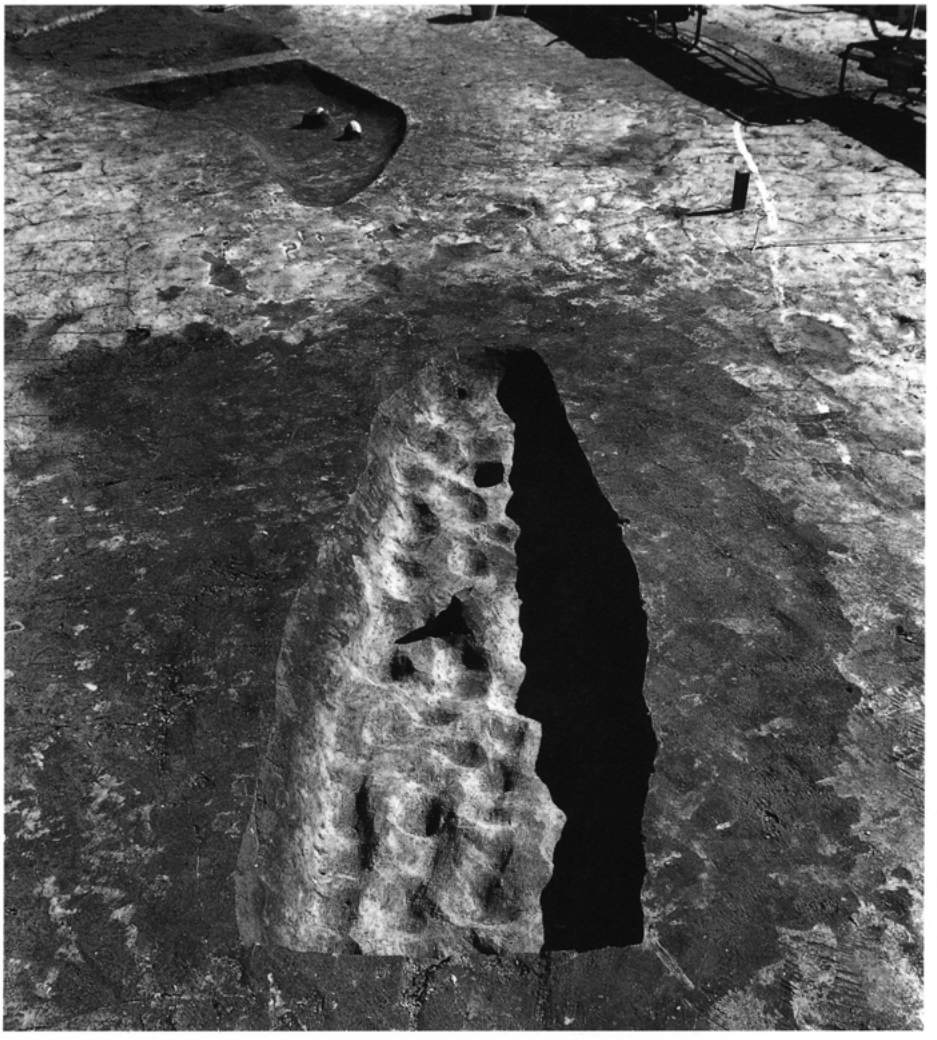
94Cb 区 SE29 遺物出土状態（西から）



（南から）



94Cb 区 SZ01 全景（北西から）



周溝加工面：アバタ状に見える凹凸はスキ先痕（西から）



94Cb 区 SZ02 全景（北東から）

SZ02 開口部付近（北から）





94Cb 区 SZ02
周溝南部遺物
出土状態全景



SZ02周溝開口
部付近近景
（西から）

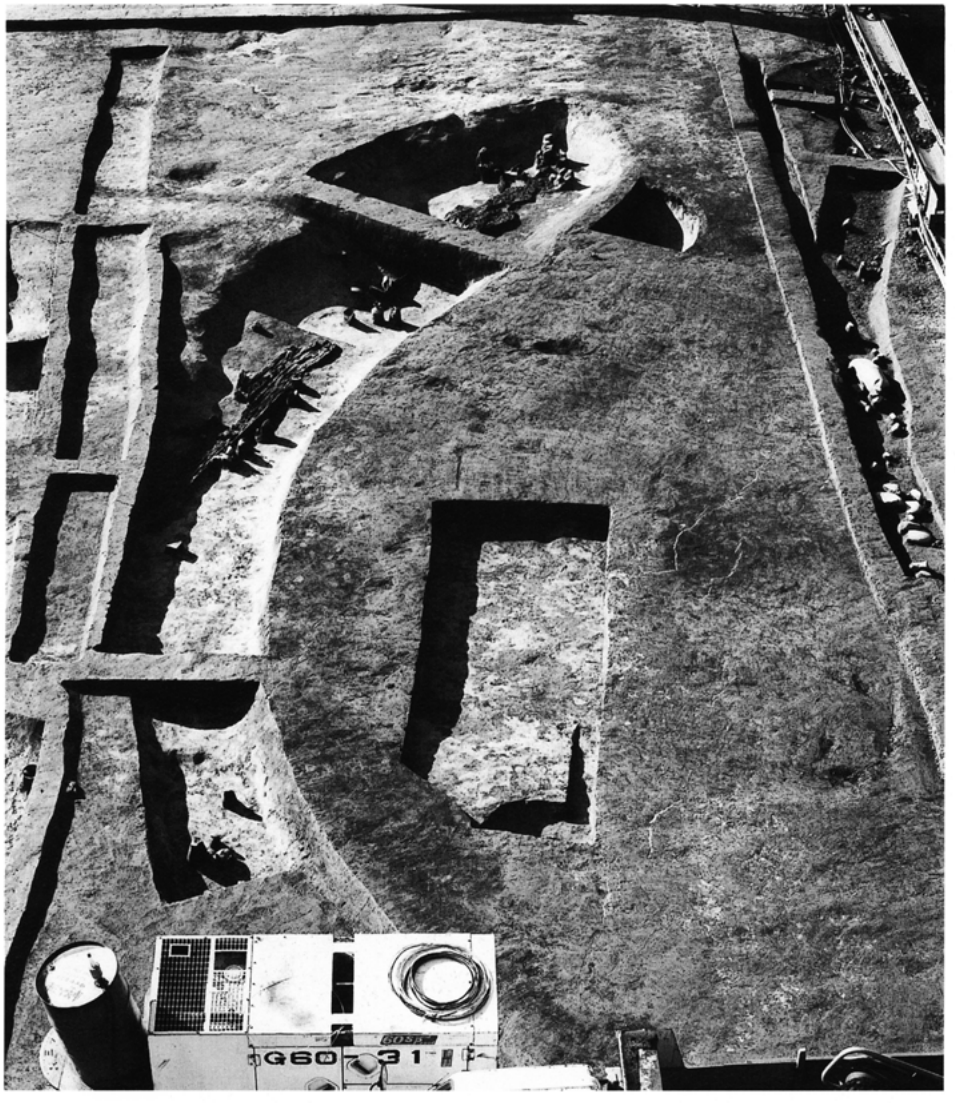
黒い部分は木材
の削り屑。



94Cb 区 SZ02 周溝西部出土木材（北から）



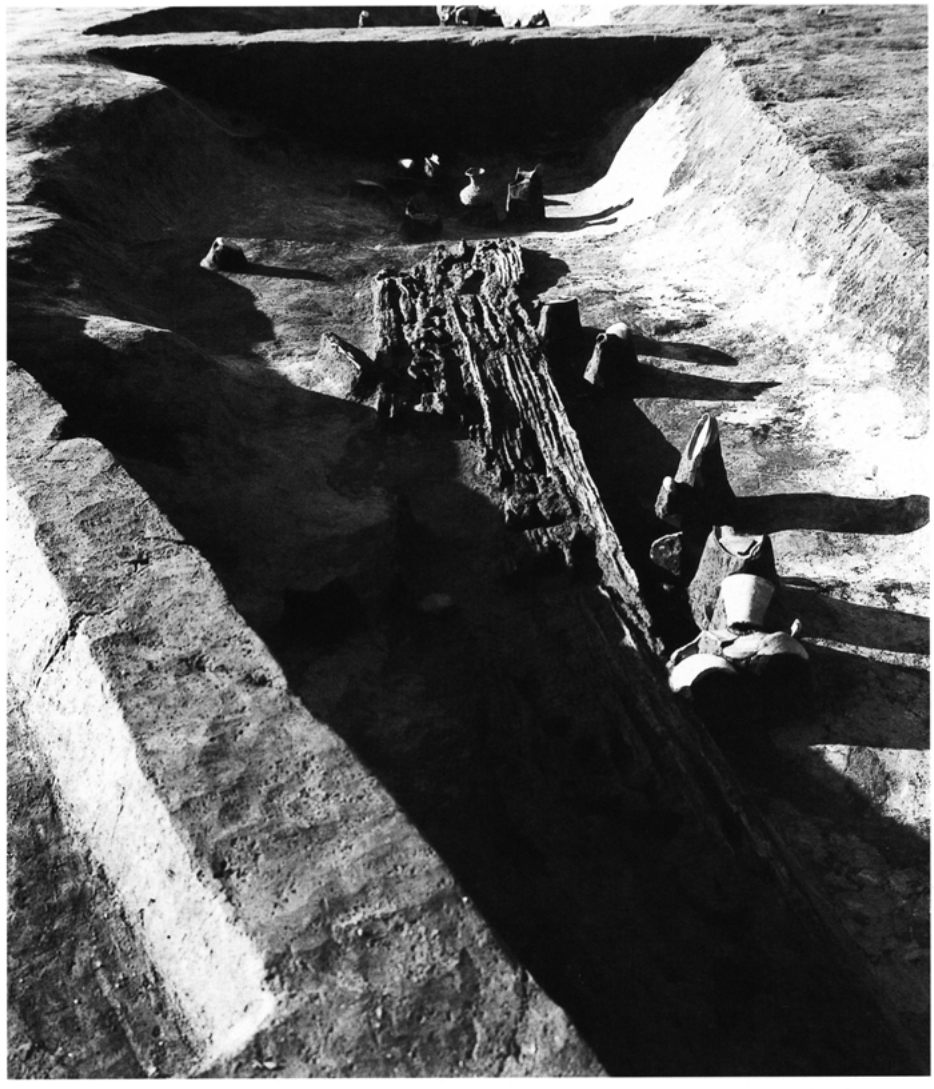
（南から）



94Cb 区 SZ02
周溝南部
遺物出土状態
（東から）



近景
（南西から）



（東から）

板材の北側の須恵器が並んでいるようにみえる。





94Cb 区 SZ02
周溝北部
溝内土坑
（東から）



溝内土坑近景
（東から）

周溝の軸線とはややずれて長方形土坑が掘り込まれている。





SZ02 周溝北部
板材出土状態
（南から）

棺材の一部かどうかわからないが、長方形の板材が出土した。

（西から）



94Ca 区 SZ01 周溝内丸底甕出土状態

94Cb 区 SZ02 周溝内丸底甕出土状態

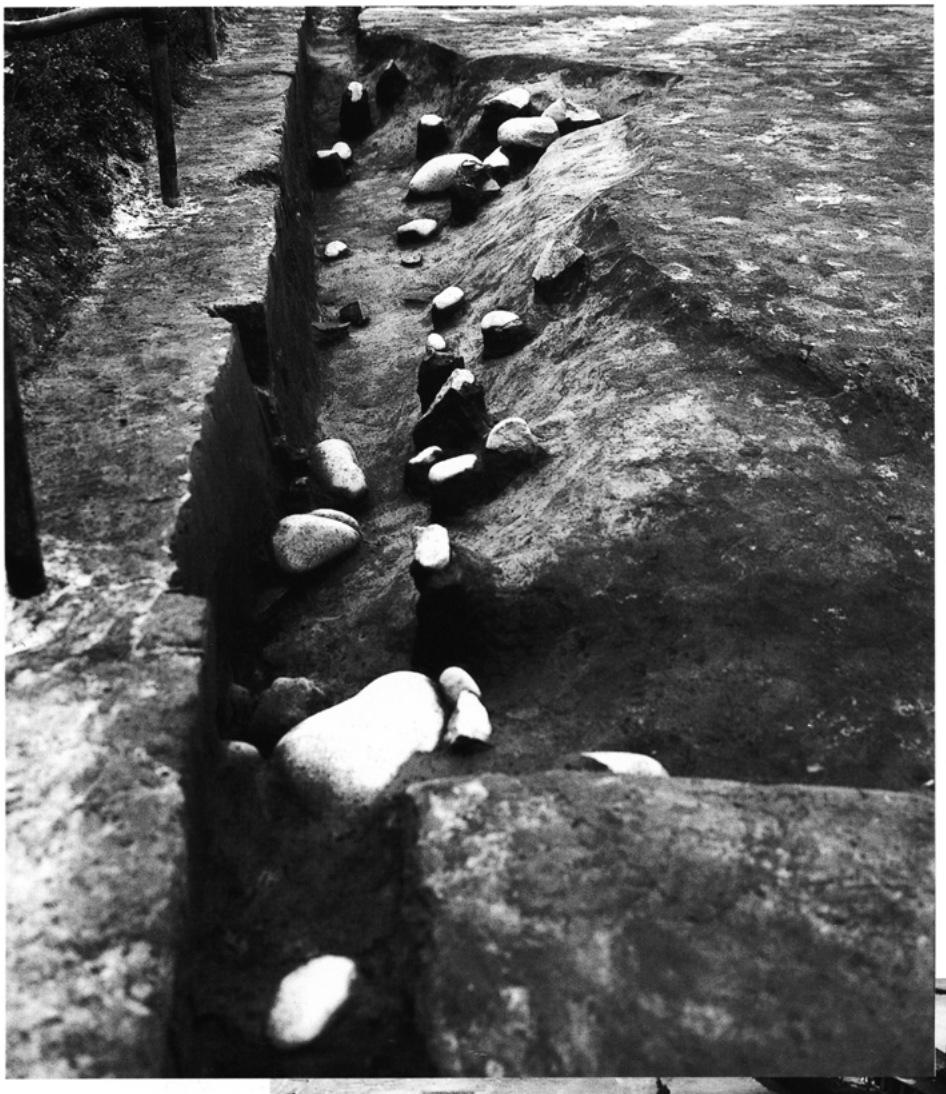




94Cb 区 SE28（東から）

半截状況（北から）





94Ca 区 SK59
（東から）

自然埋没の
大形土坑。



94Cb 区 SD67・SX11
（西から）



94B 区全景
（西から）



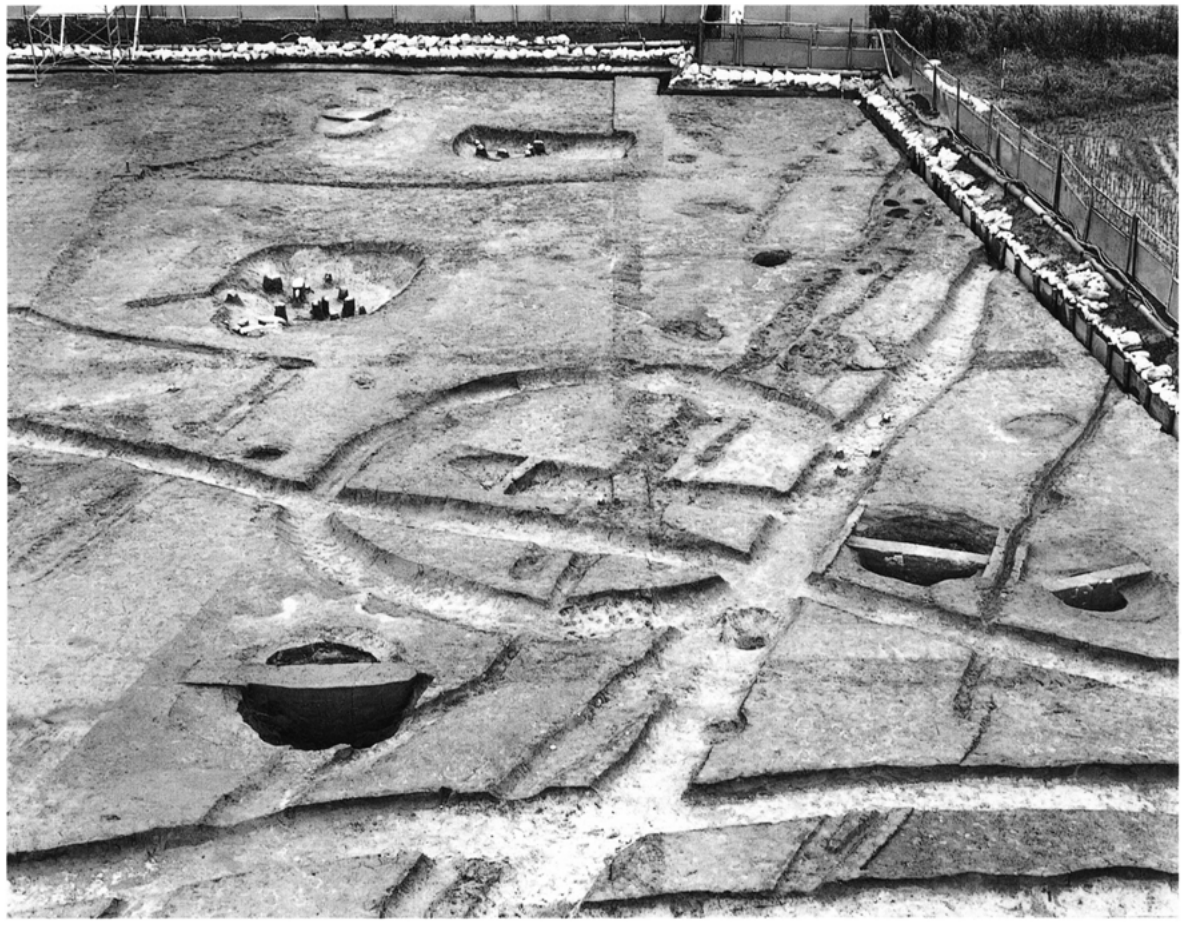
94B 区西部
（東から）



94B 区 SB02（北西から）

94A 区全景（西から）

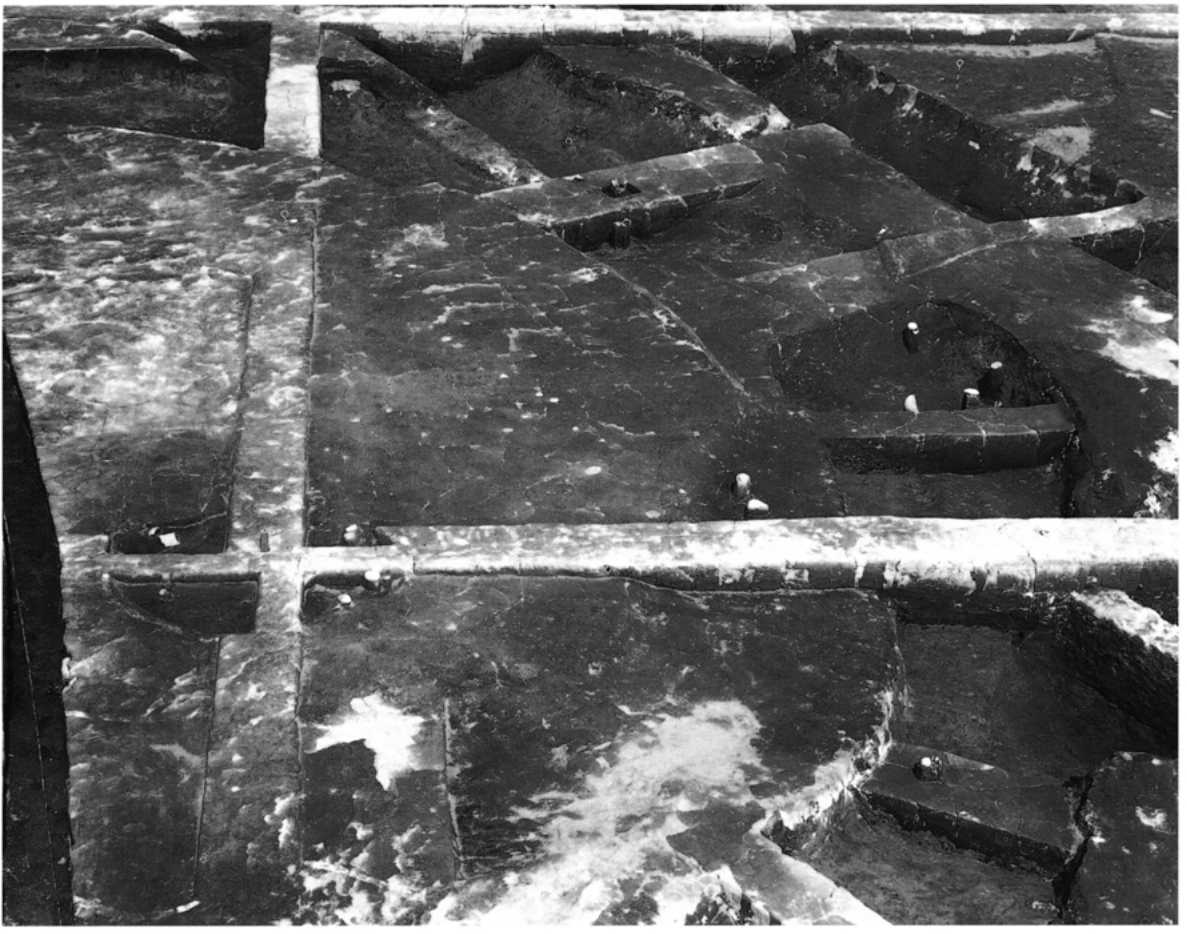




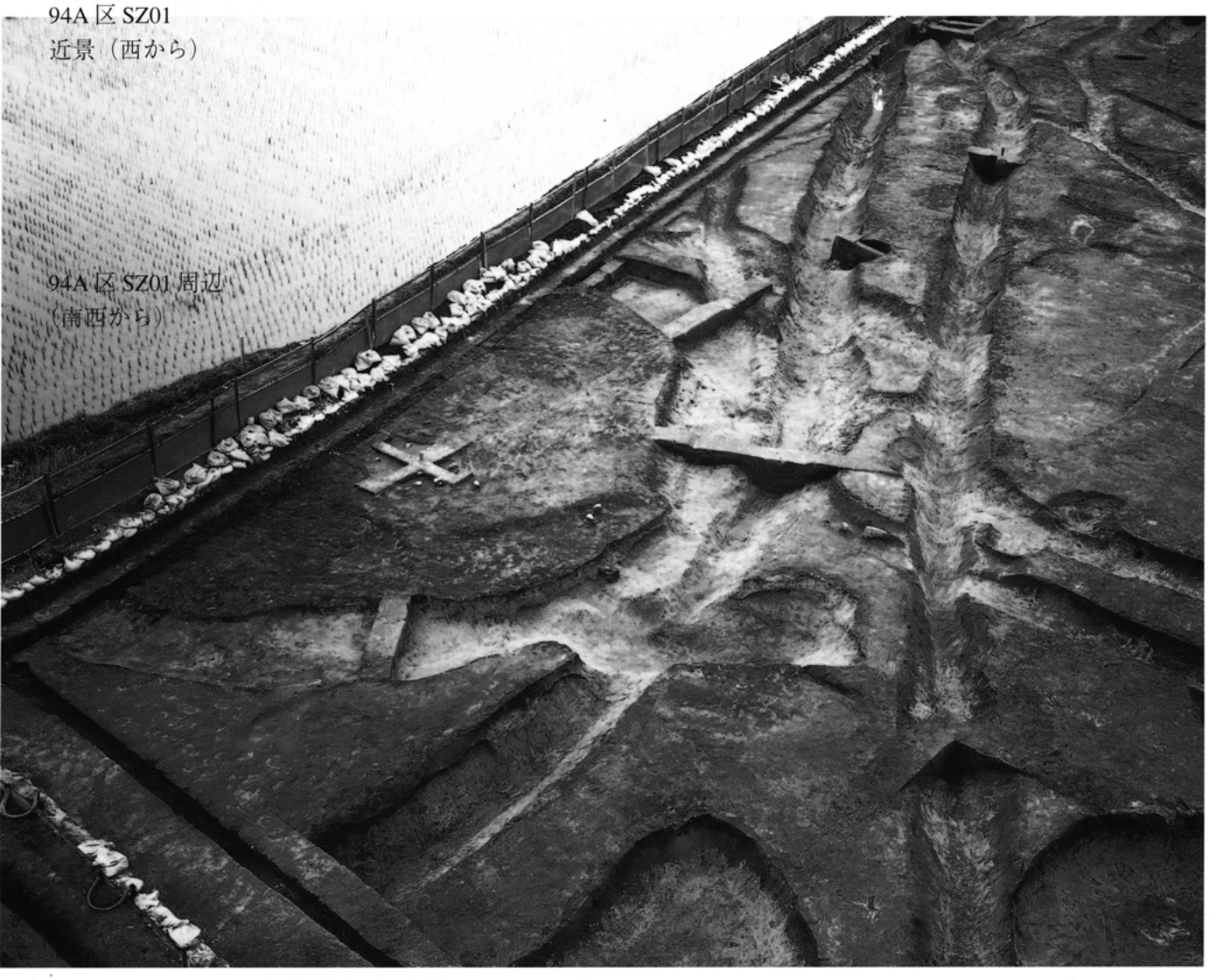
94A 区中景：中央は SZ02（西から）

94A 区北部（西から）

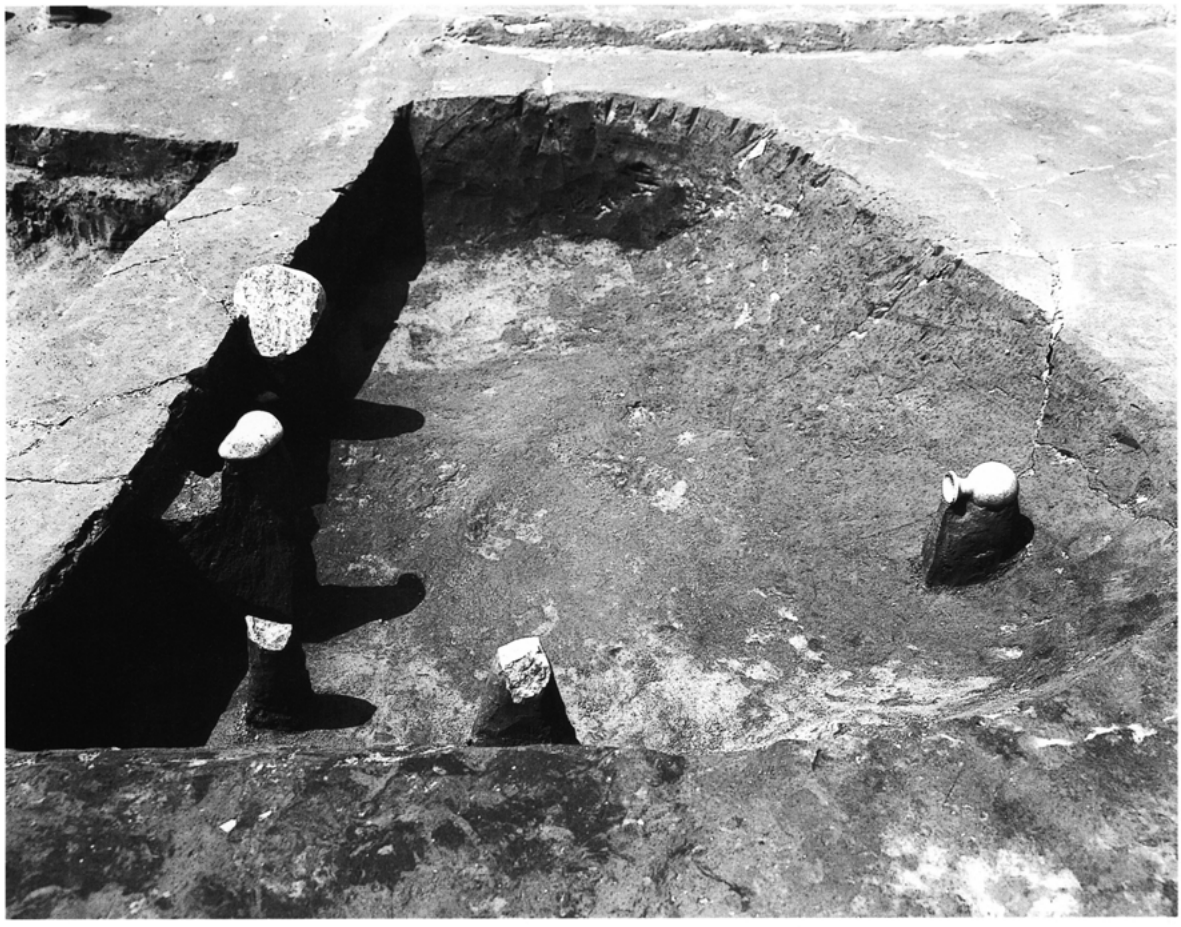




94A 区 SZ01
近景（西から）



94A 区 SZ01 周辺
（南西から）



94A 区 SZ01 開口部西側遺物出土状態（南から）



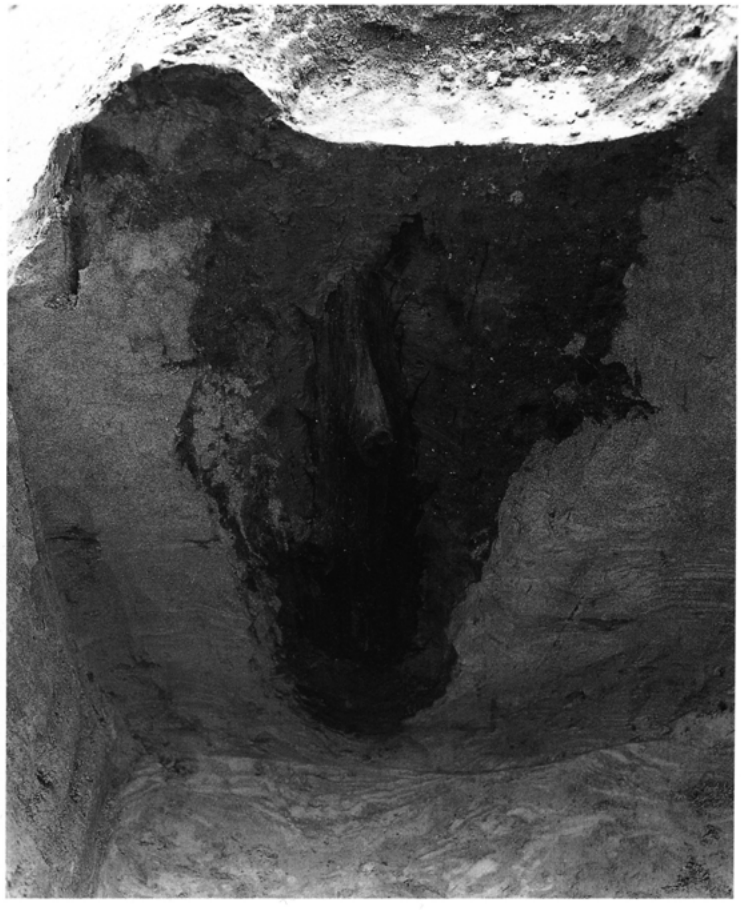
SZ01 周溝遺物出土状態（西から）

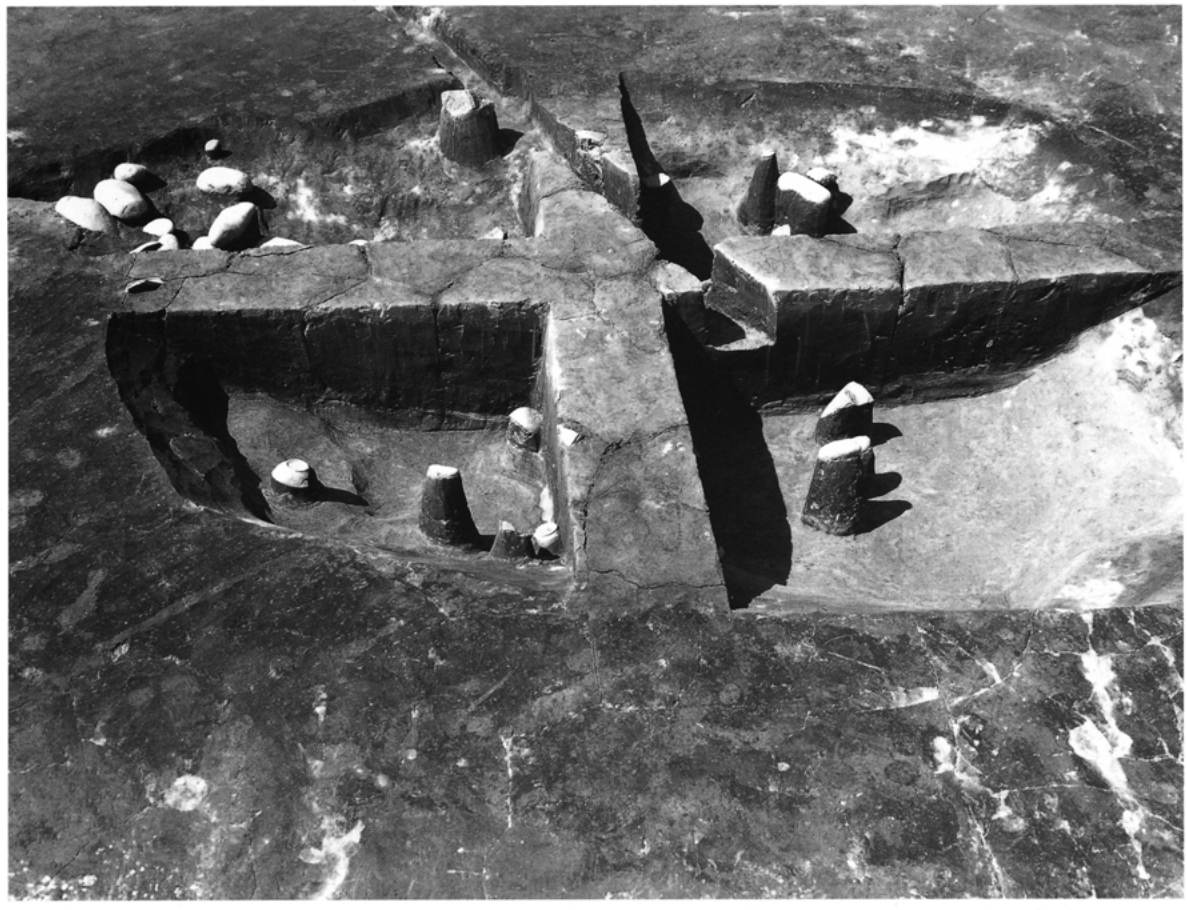


94A 区 SB03-P01 丸底甕出土状態（東から）

94B 区 SB02 柱痕

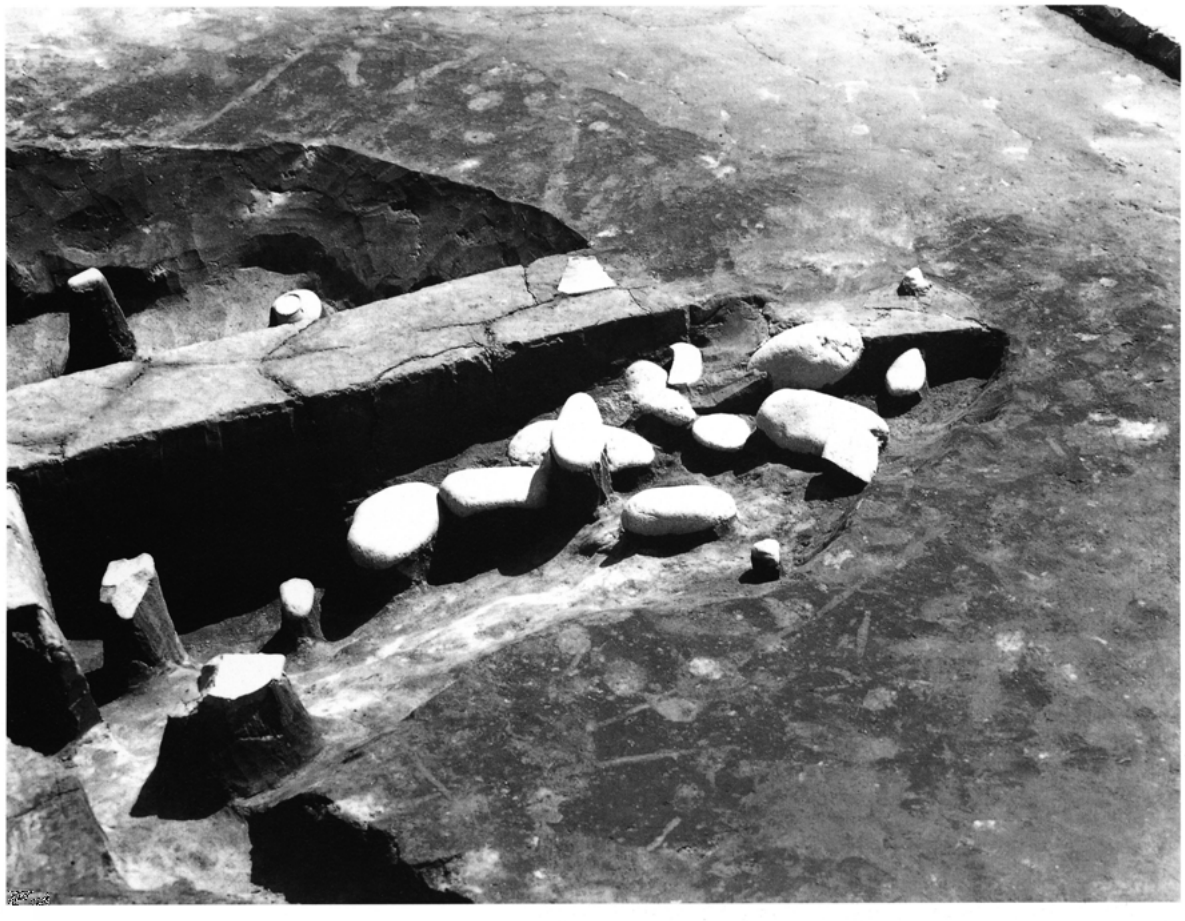






94A 区 SK41（南から）

（北から）





95A 区北西部弥生遺構（北から）



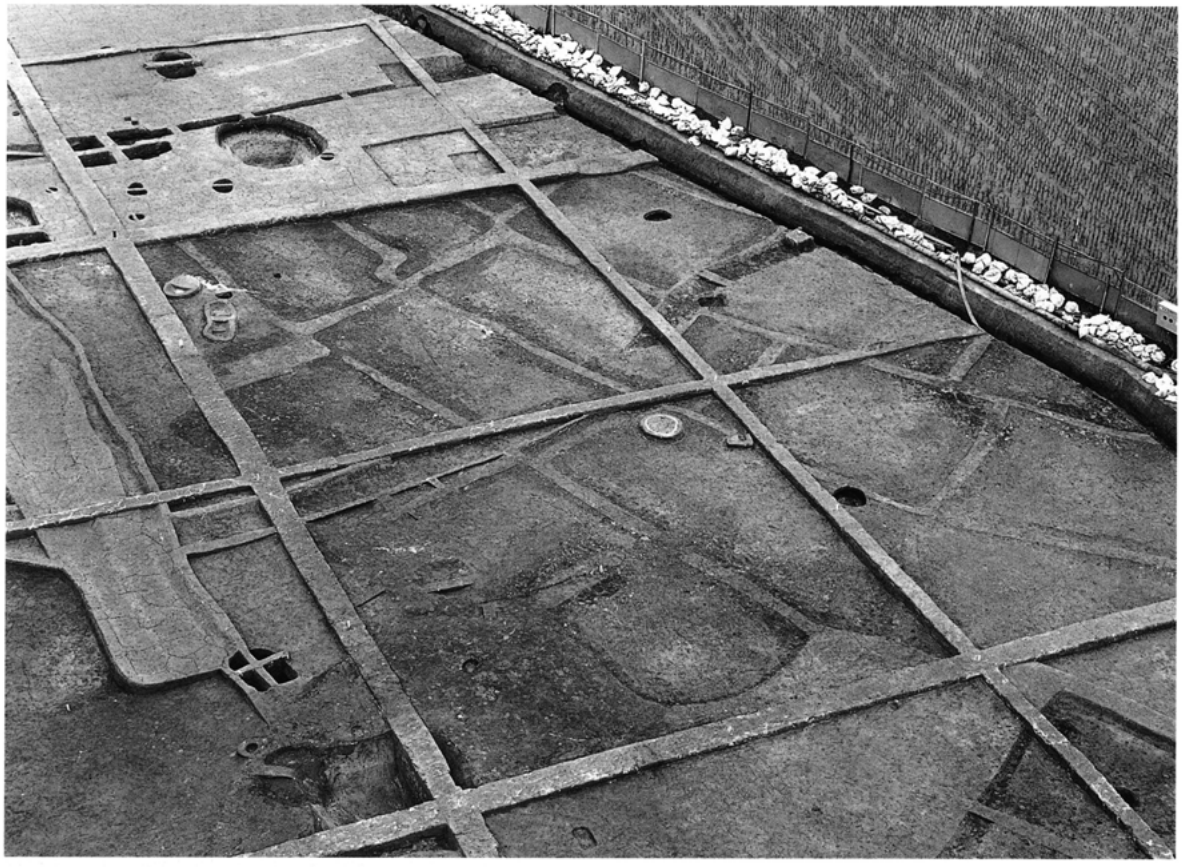
95A 区弥生土器出土状態（北から）



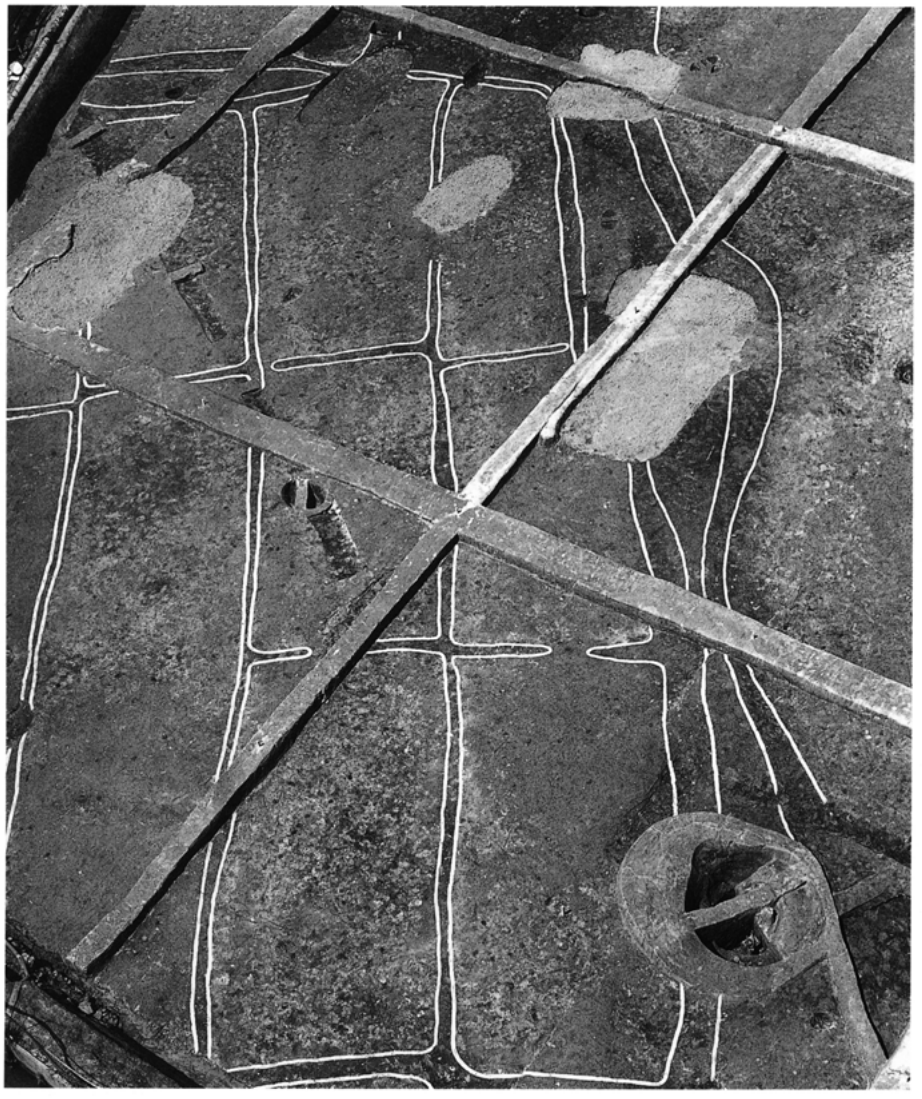
95A 区下面遺構群全景（東から）

95A 区水田跡（北西から）



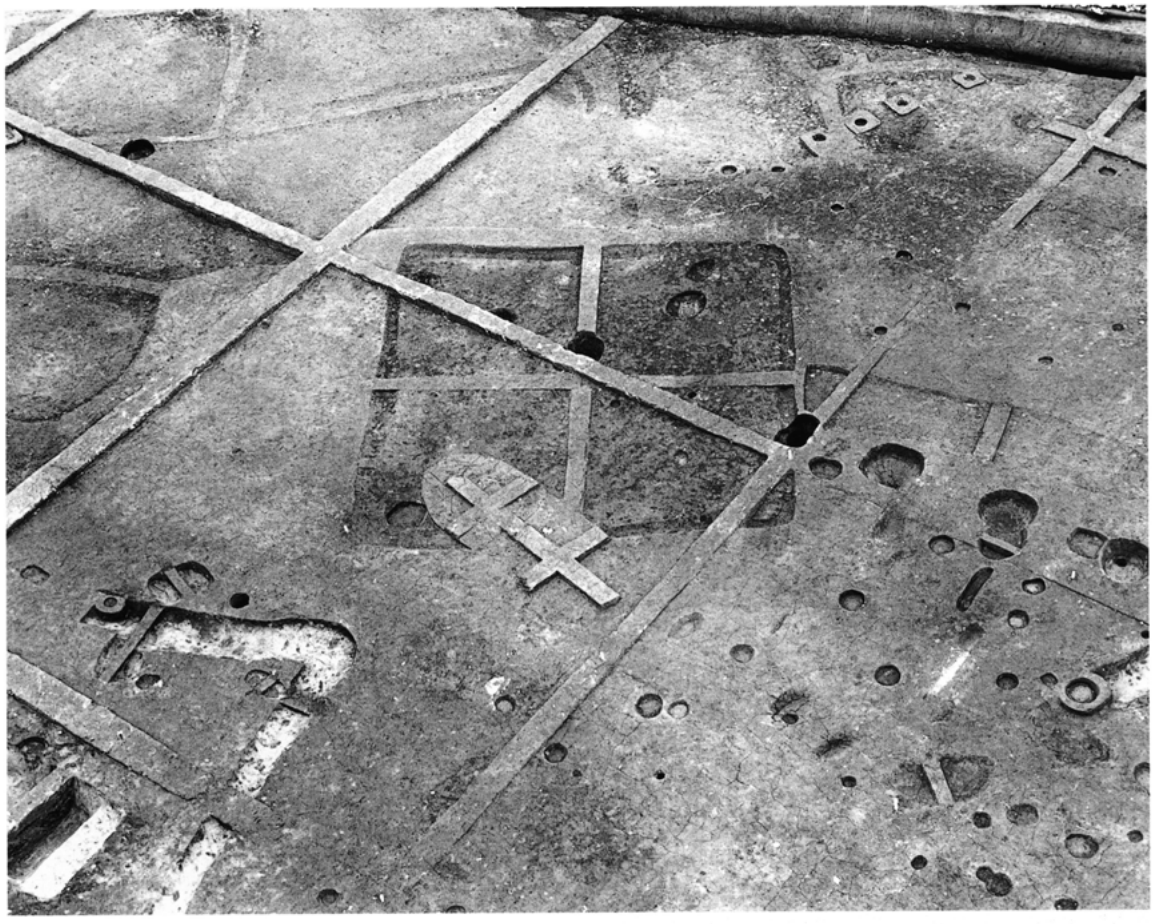


95A 区水田跡
検出状況
（西から）



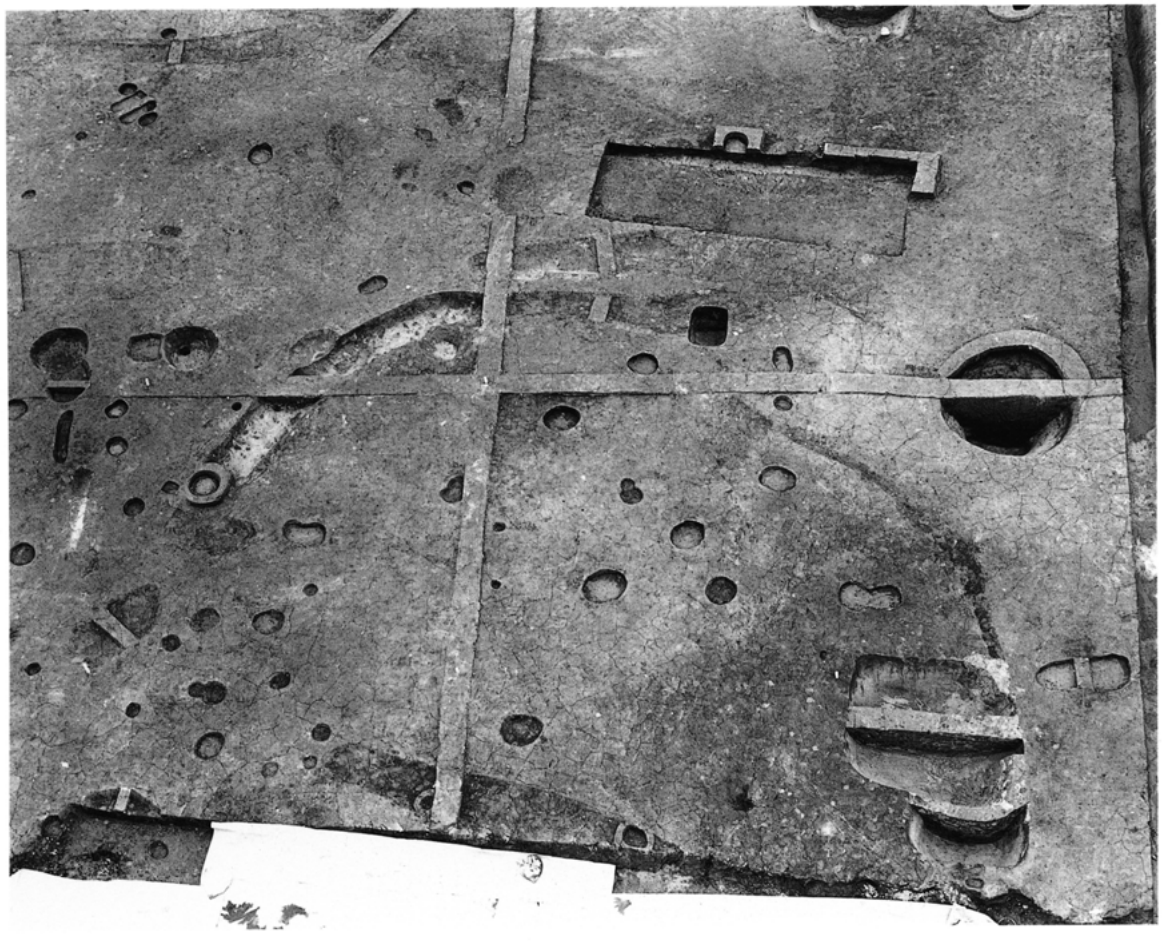
95A 区東部
水田跡
（東から）

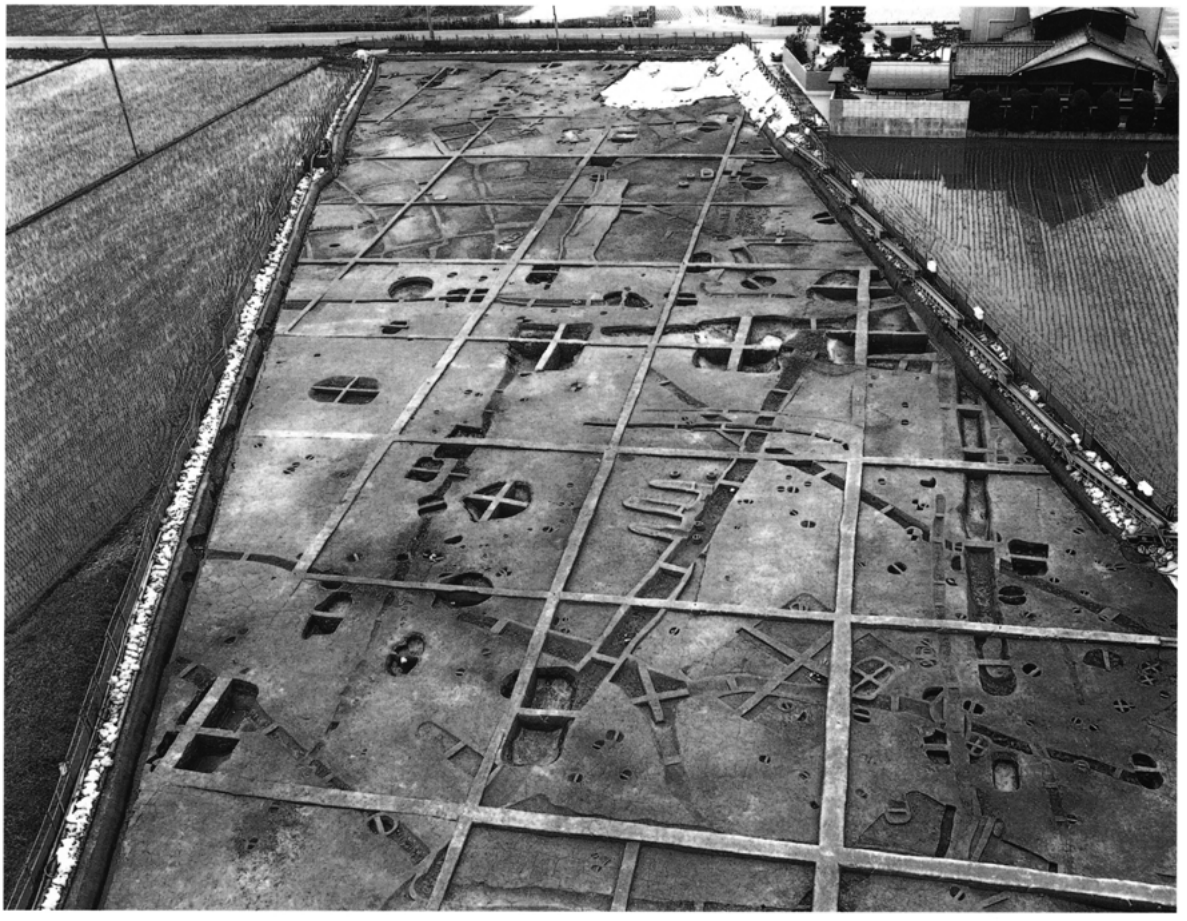
小区画と大畦畔



95A 区古墳時代Ⅱ期建物群（北西から）

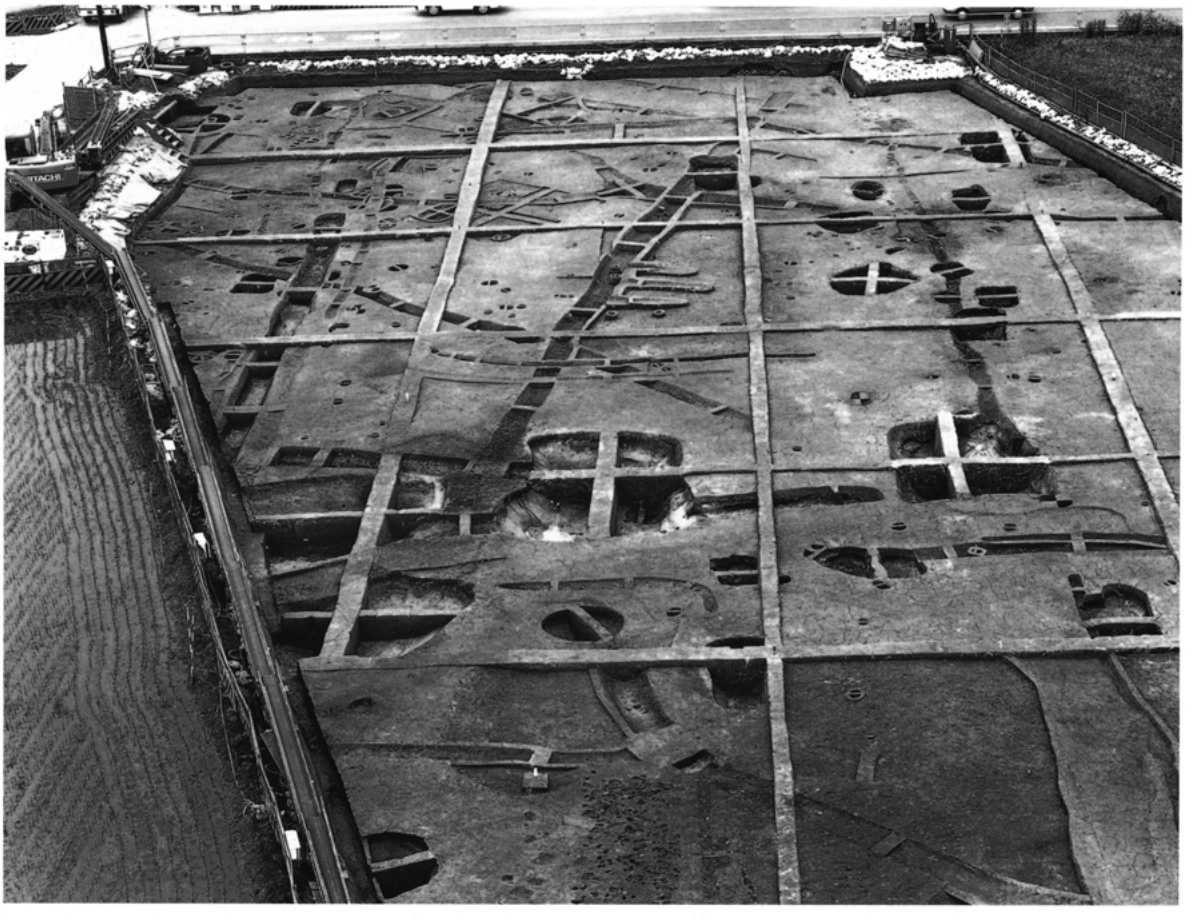
95A 区 SB02・03 周辺近景（北から）





95A 区中世・古代全景（東から）

同上（西から）





95A 区 SE06
（北から）

同上曲物と線刻（北から）

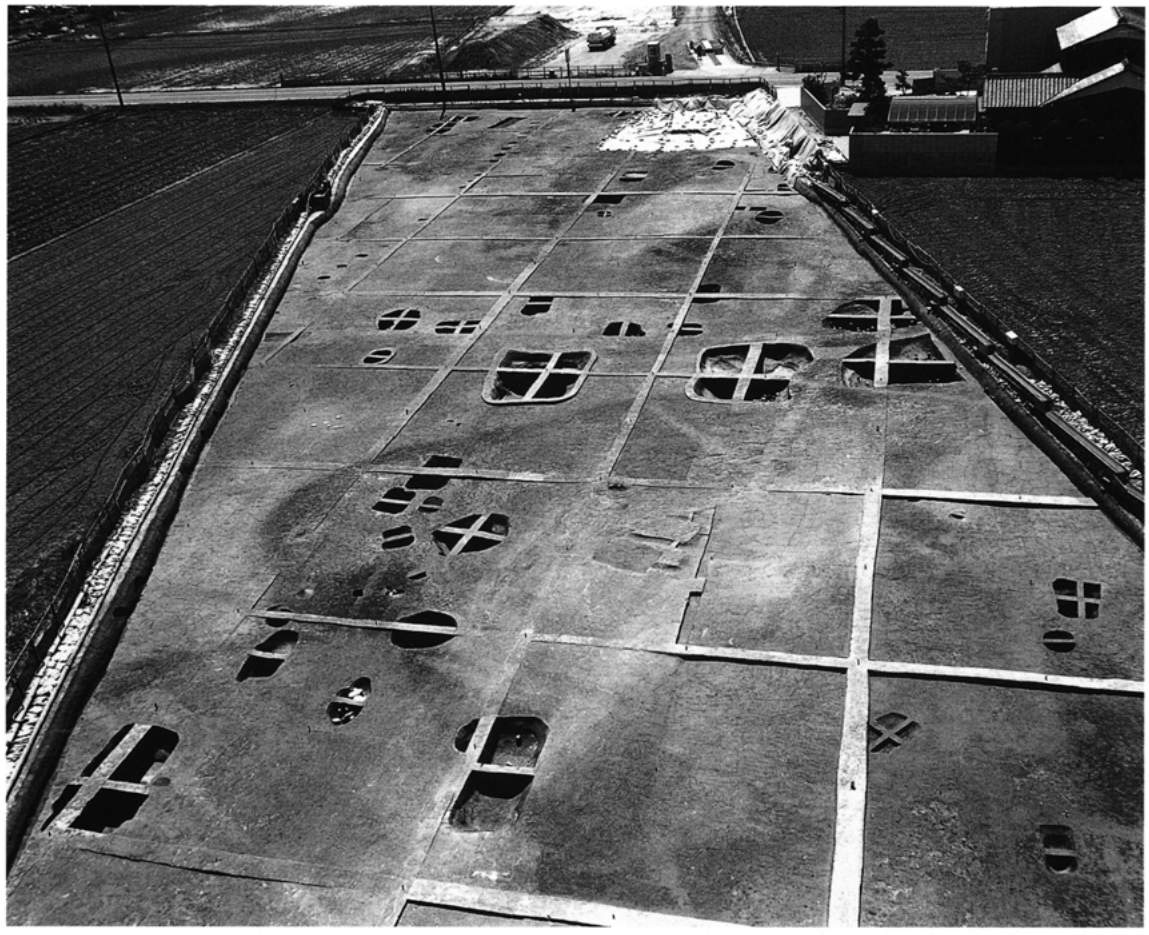




95A区SE07
（西から）



曲物とヒョウタン



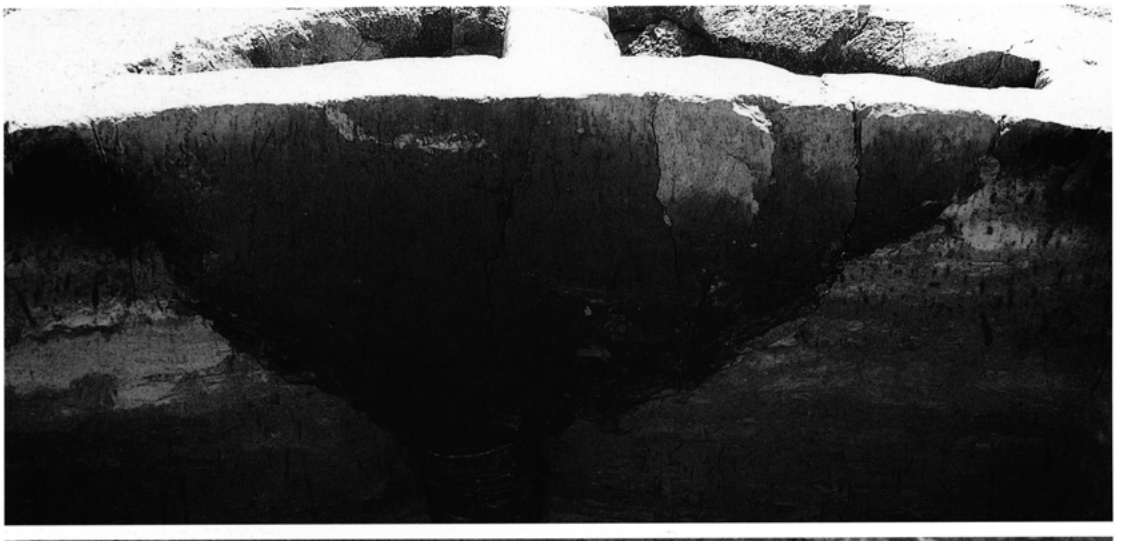
95A 区中世全景（東から）

95A 区 SK27 曲物出土状態（南東から）





95A 区 SE08
（北から）



同上断面
（西から）



同上
曲物近景



95Ba 区弥生遺構：SD01・02（北から）

同上断面

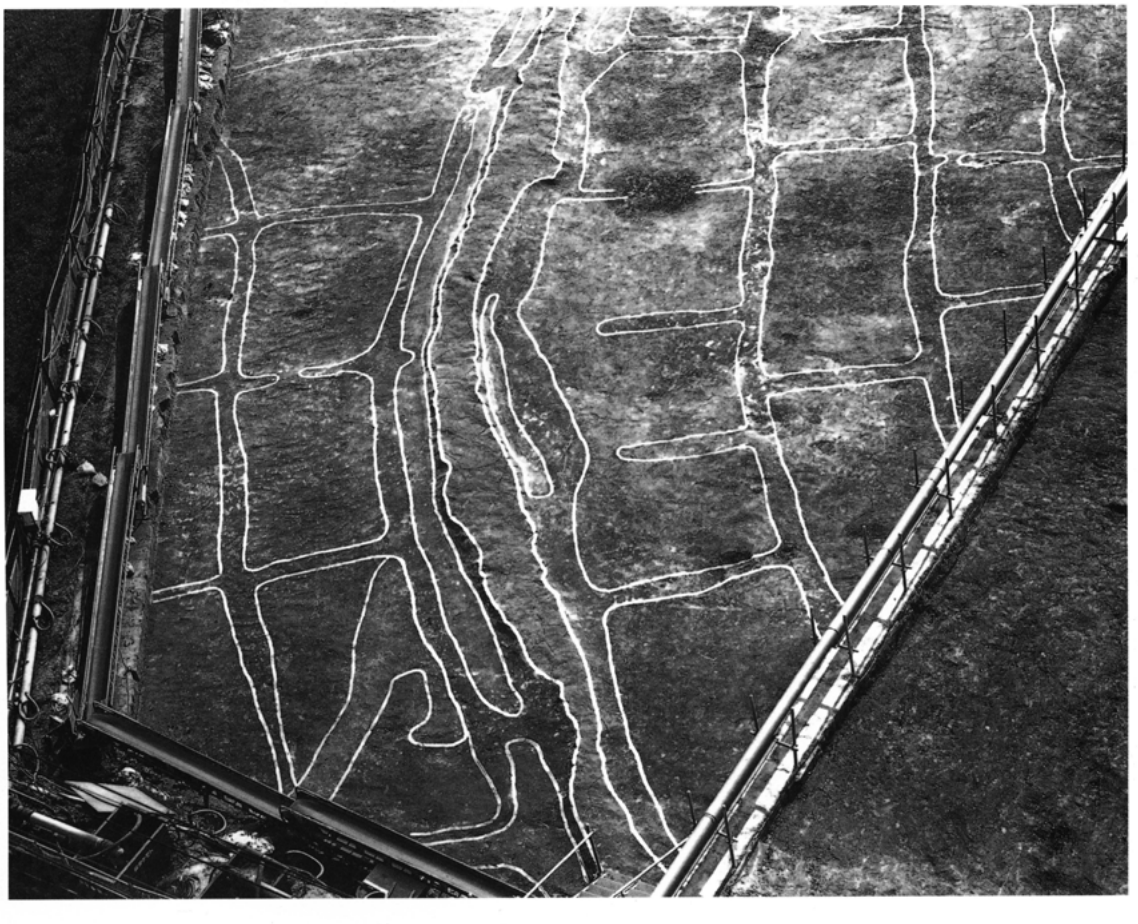




94B 区水田跡全景
（東から）

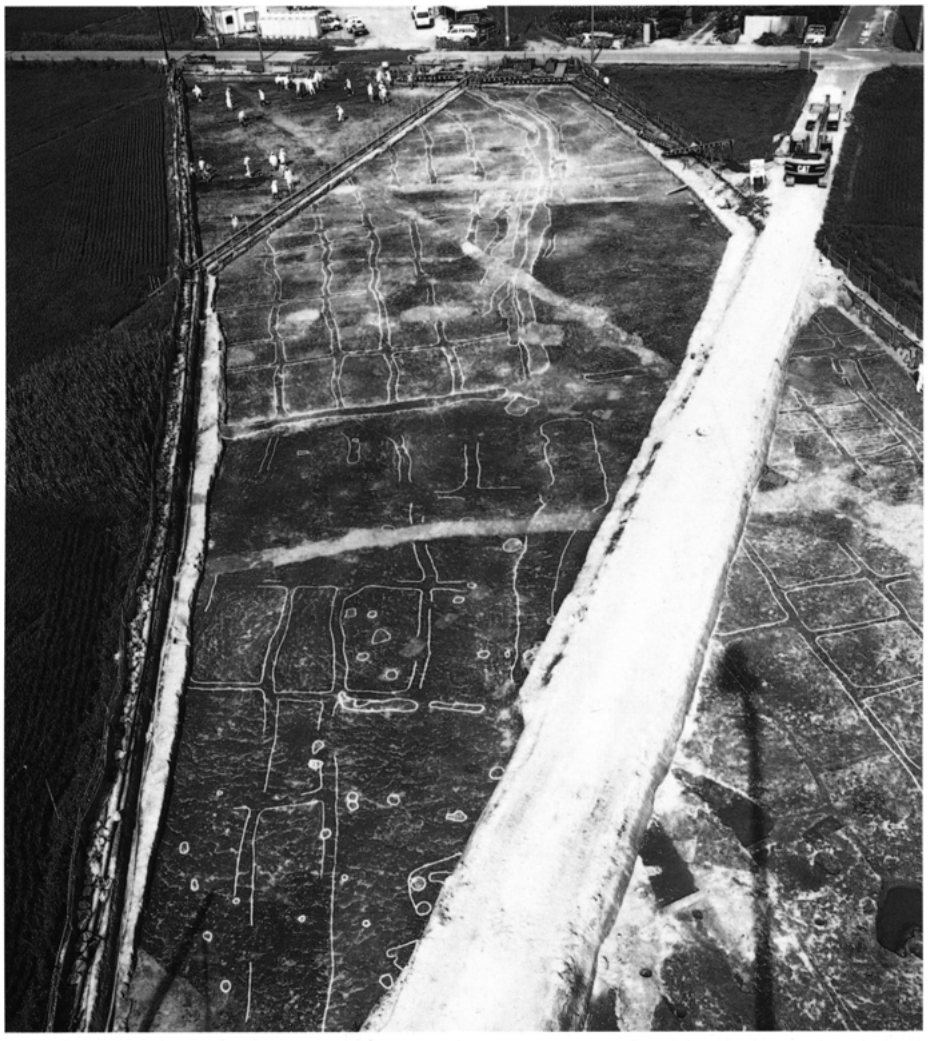
中央が大畦畔。

95B 区東部水田・大畦畔近景（東から）



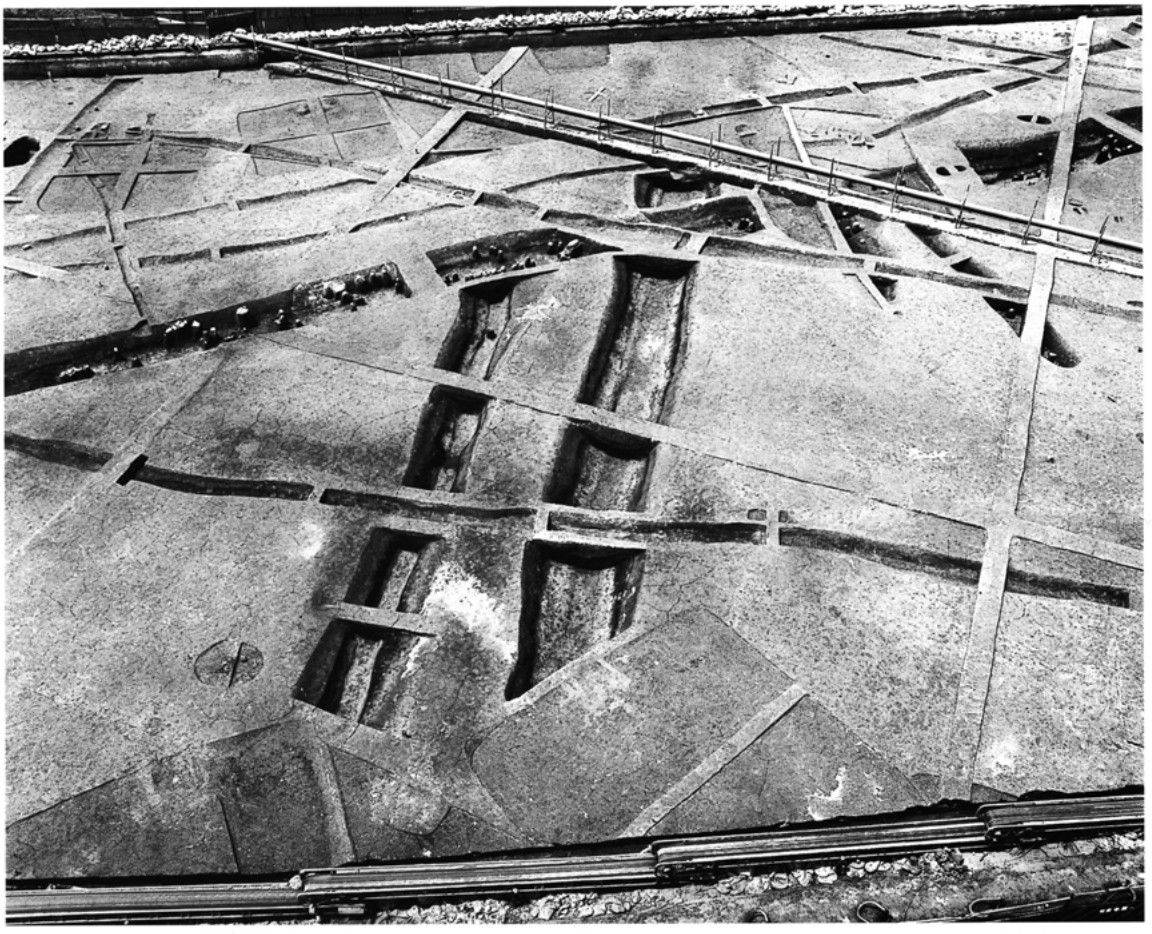


95Ba 区水田検出状況（西から）
洪水層を剥ぐと黒い帯が現れた。



95B 区水田跡（西から）

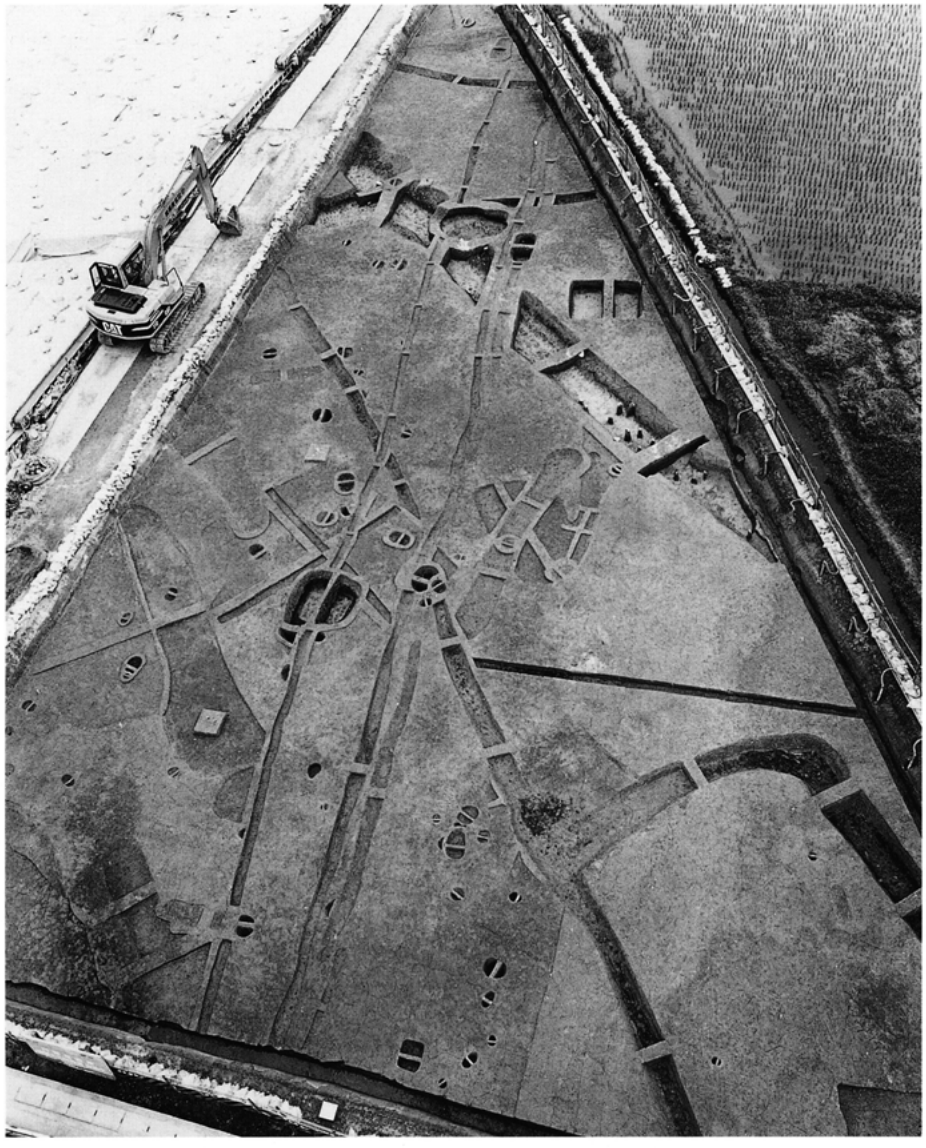
左手前の円は古代柱穴。



95Bb 区中央部古代・中世（南から）　中央の 2 条の溝は SD07･08。

95Bb 区 SB07 カマド付近（南から）　白く見える部分がカマドの粘土

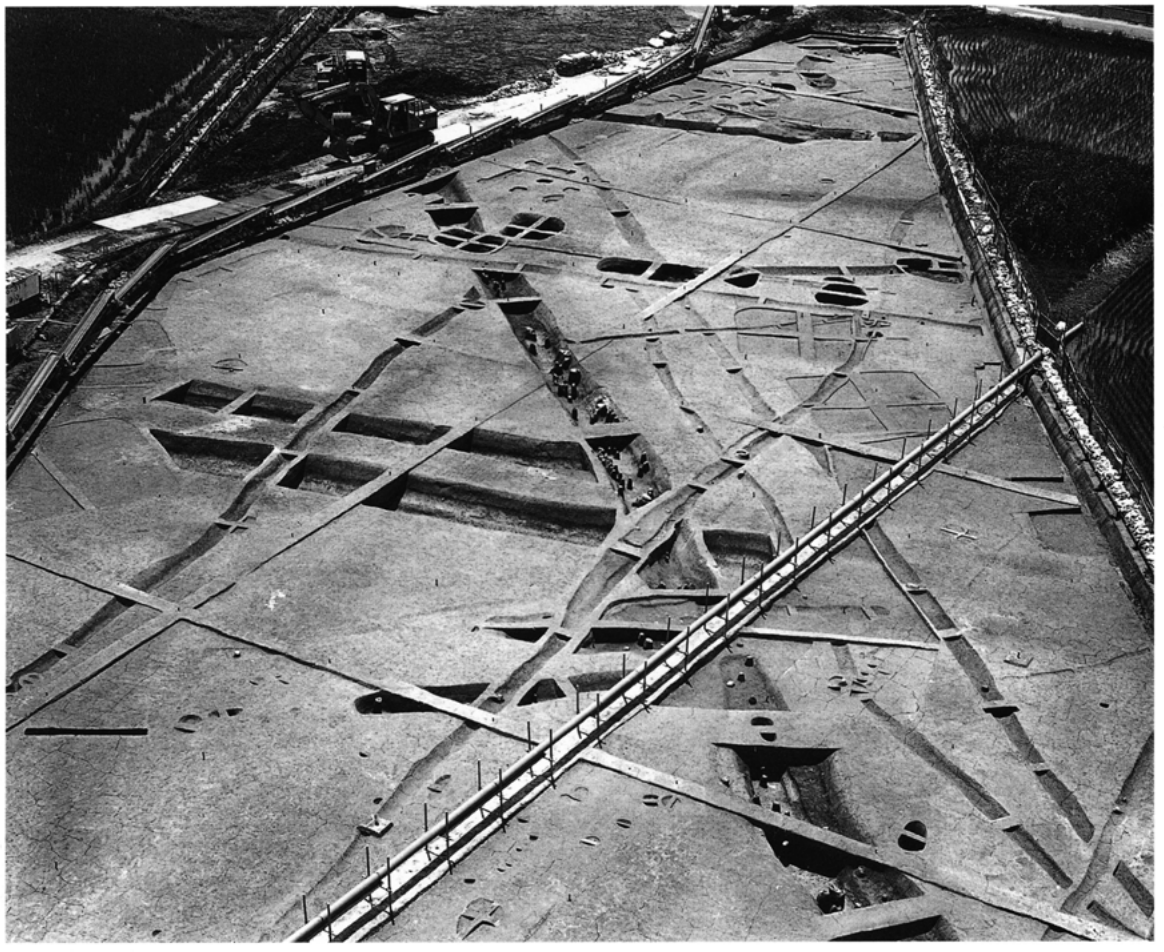




95Ba 区古代・中世



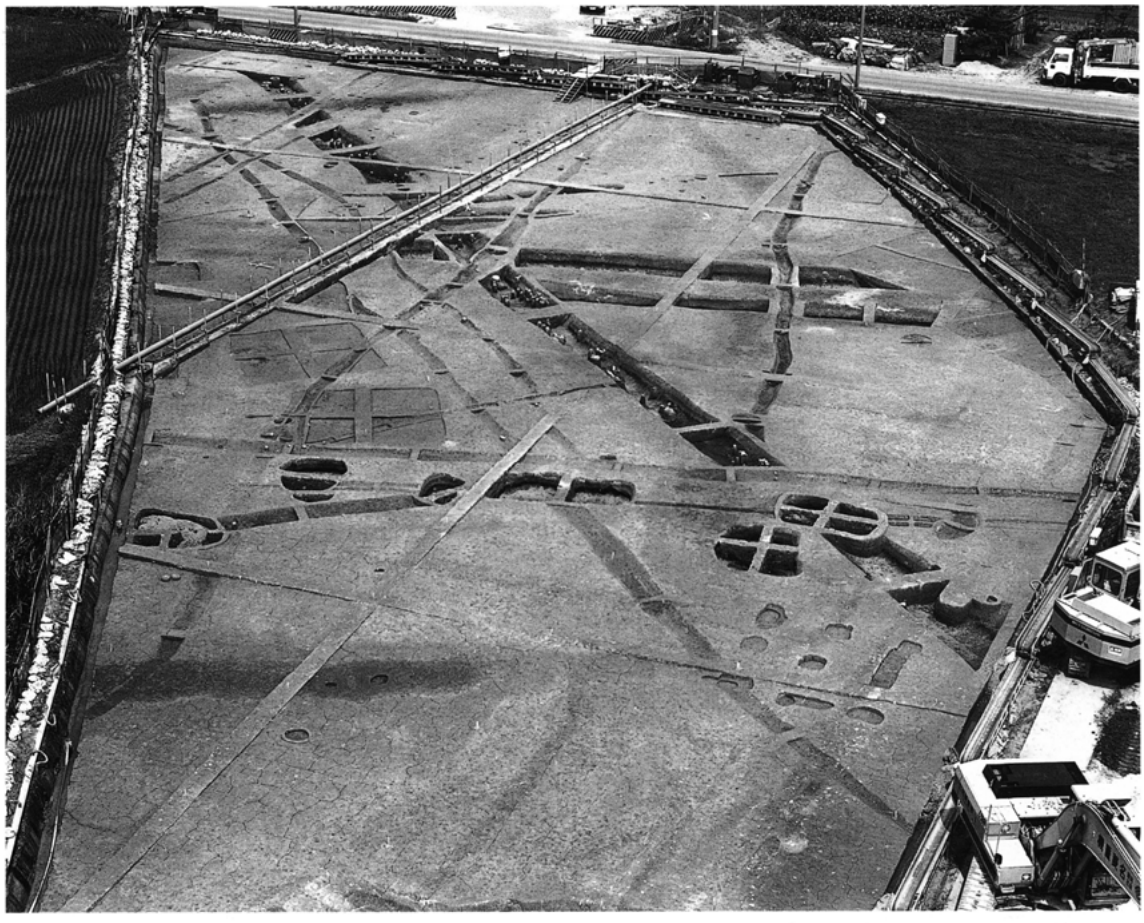
95Ba 区 SB01 近景（西から）
比較的良好な遺存状況でこの程度。



95Bc 区中世・古代（東北東から）

95Bb 区古代・中世（東から）





95B 区古代・中世（西から）

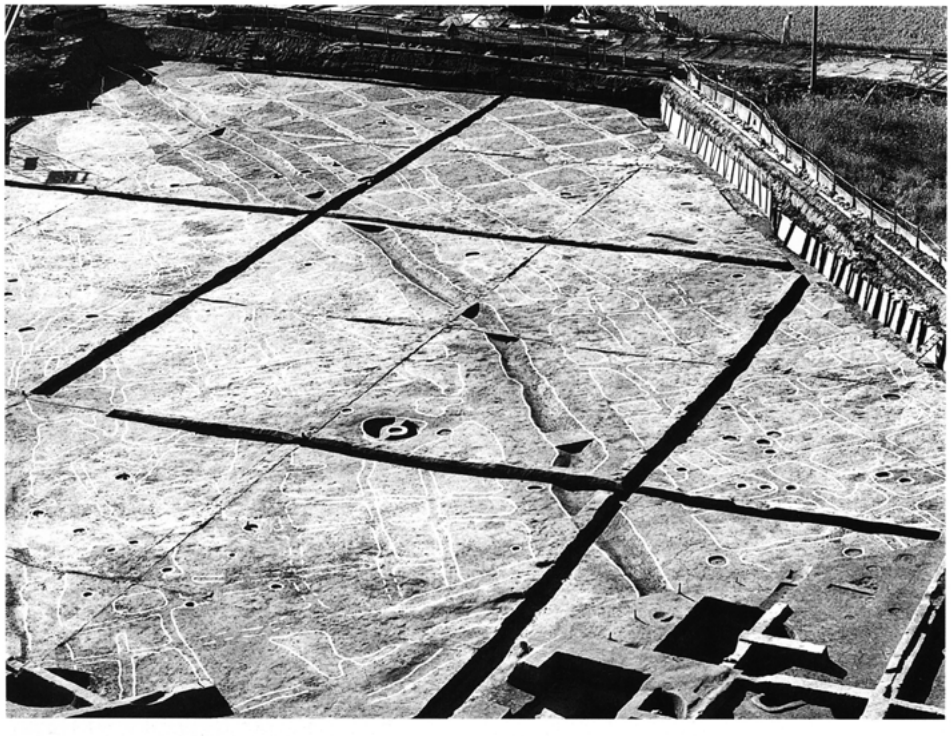
95B 区西部古代（西から）





95C 区水田跡（南西から）　水路と附属大畦畔

同上（北東から）





95C 区水田跡と古代柱穴（南西から）

95C 区大畦畔（南西から）





95C 区中世全景（北東から）

95C 区中世（西から）





95C 区中世中景（西）

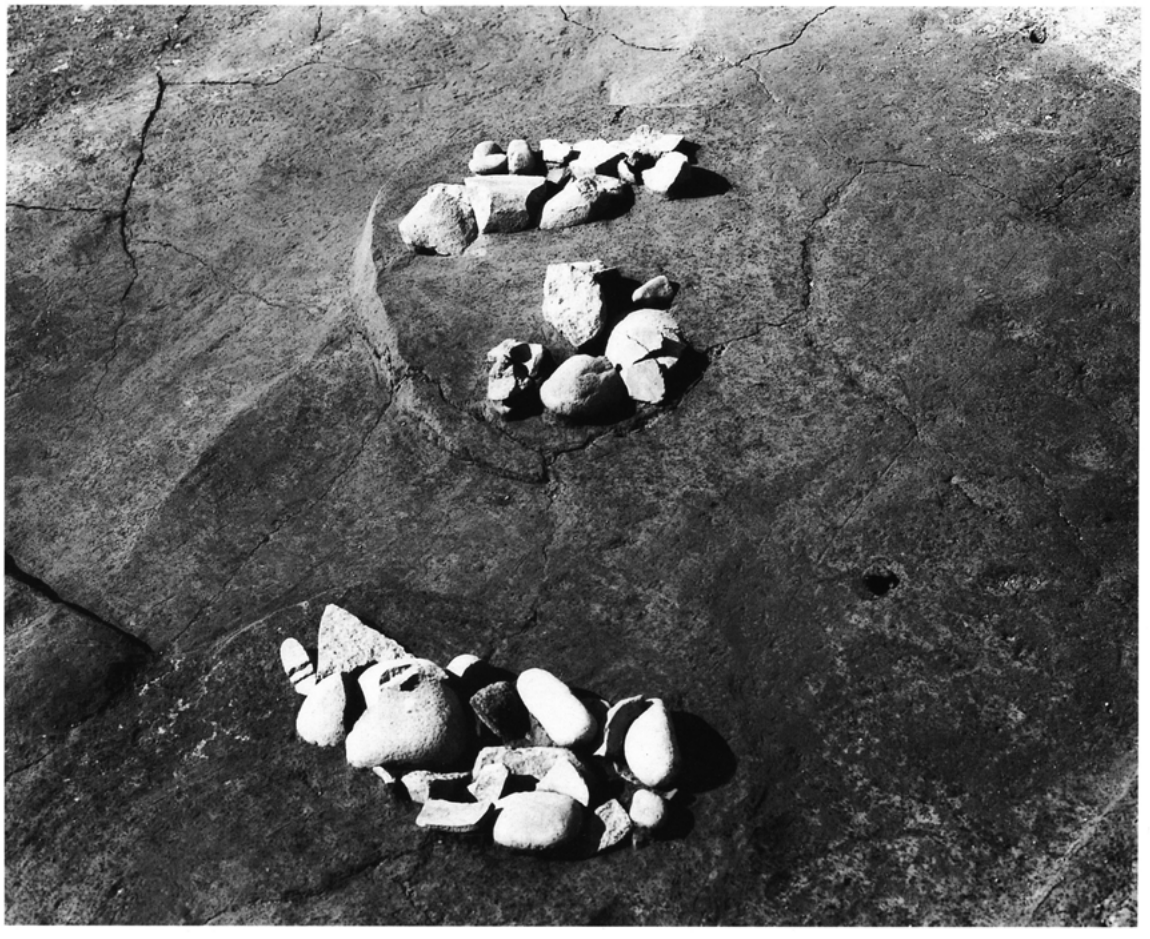
95C 区中世中景（北東から）





95C 区 SE02・03 断面（南から）

95C 区 SX03：手前·04：中·05：向こう（南東から）





95Db 区南部下面（北から）

95D 区下面全景（北東から）





95Da 区 SD23 断面（南から）　白く見えるのが砂層。



95D 区古代（北から）



95Da 区下面で検出された古代柱穴



95D区
古代
（北東から）



95Db区SD26
（北から）

溝幅約 10 m。



95Da 区中世（北から）



95Da 区古代（北から）



95E 区下面全景（北東から）



95Eb 区下面全景
（南から）

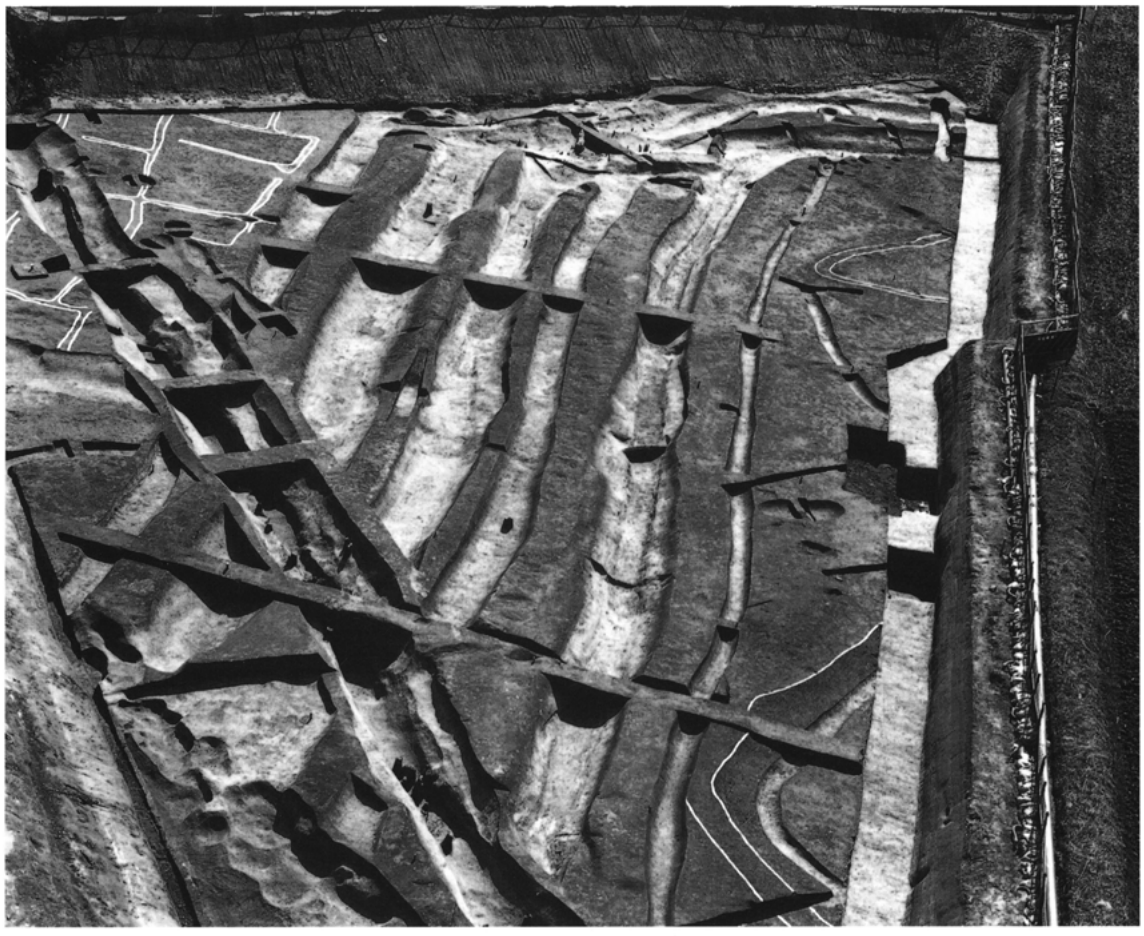
建設中の橋脚が大毛池田遺跡ＫＬ区。



95E 区北部下面（南から）

95E 区北部水田跡（西から）





95Ea 区下面（北から）

95Ea 区南部シガラミ断面（南から）

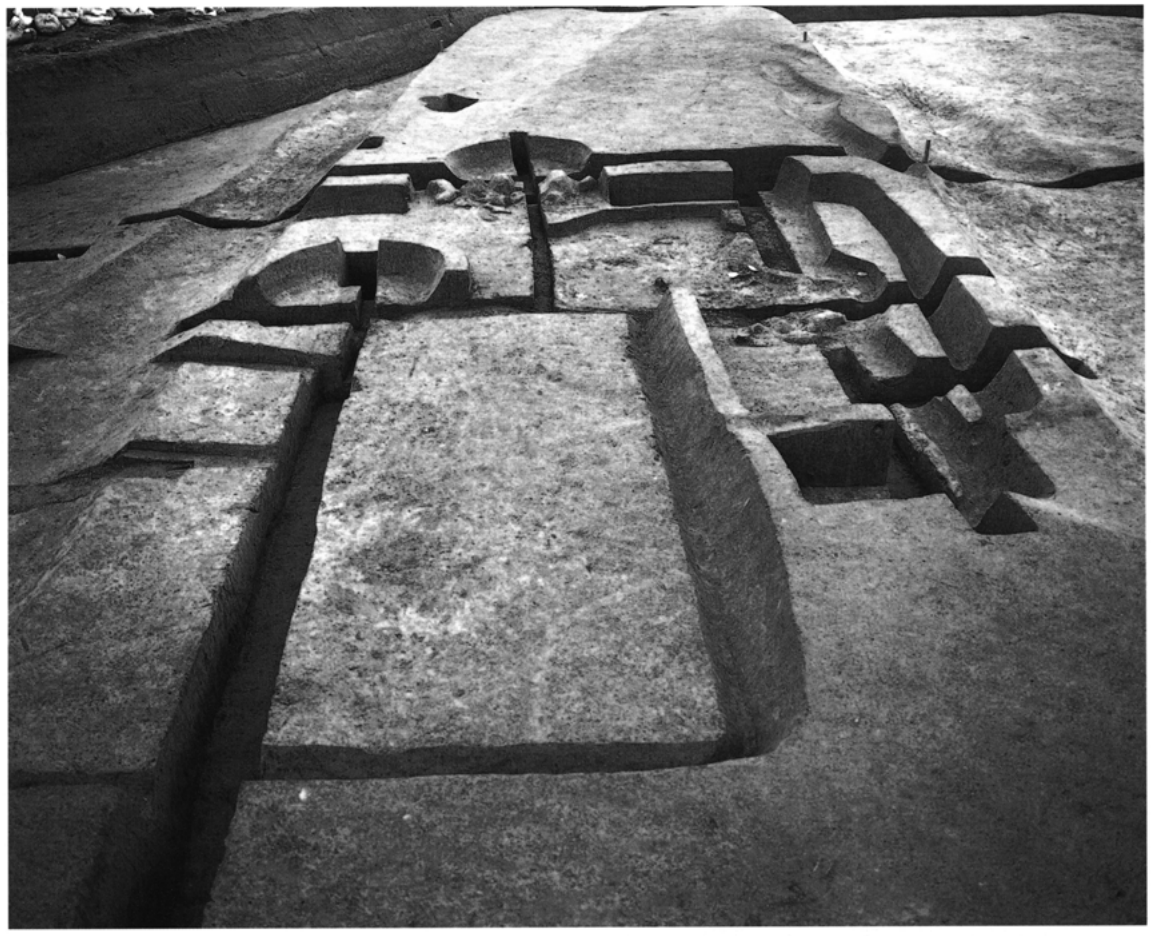




95Eb 区古代竪穴建物群（西から）

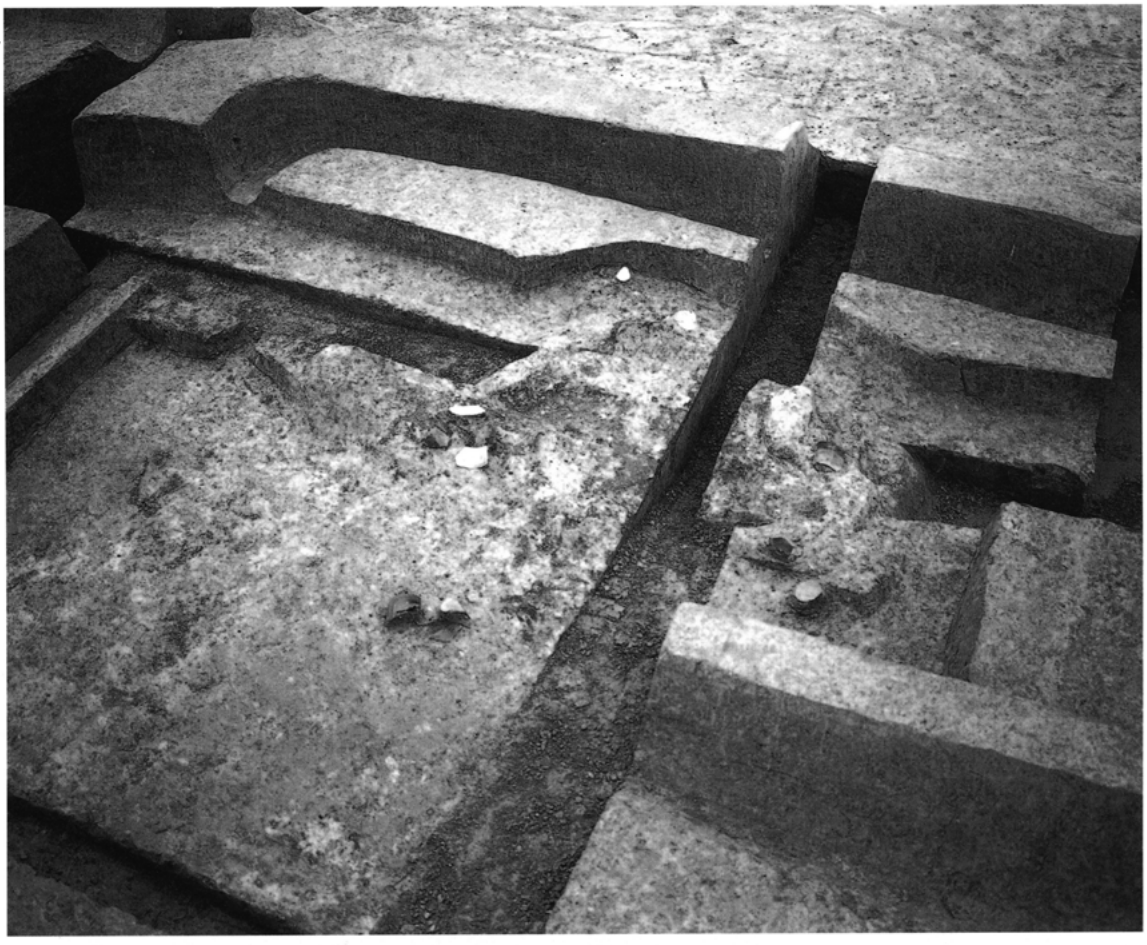
竪穴建物近景（西から）　竪穴建物の遺存状況は非常に悪い。





95Ea 区竪穴建物 SB12・13・14（南から）

SB13 カマド近景（南から）



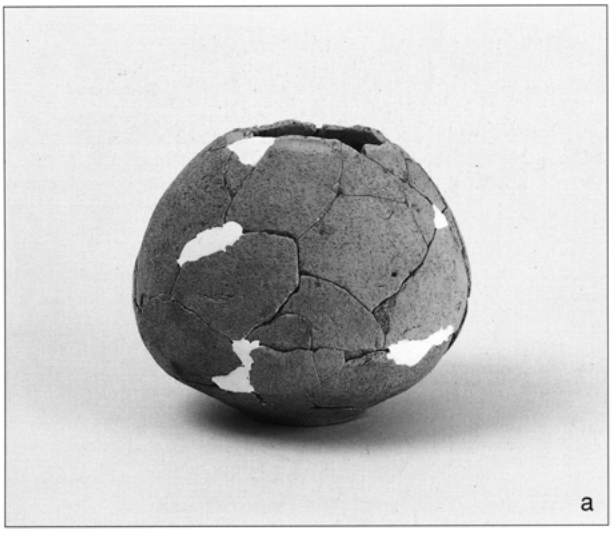


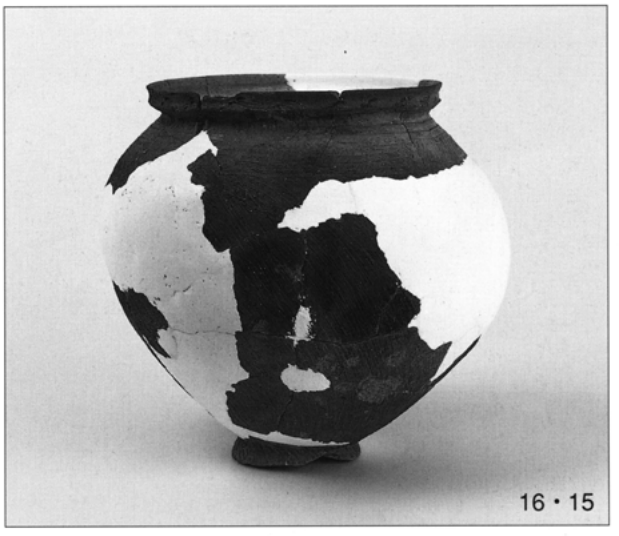
95Eb 区南部中世（北西から）

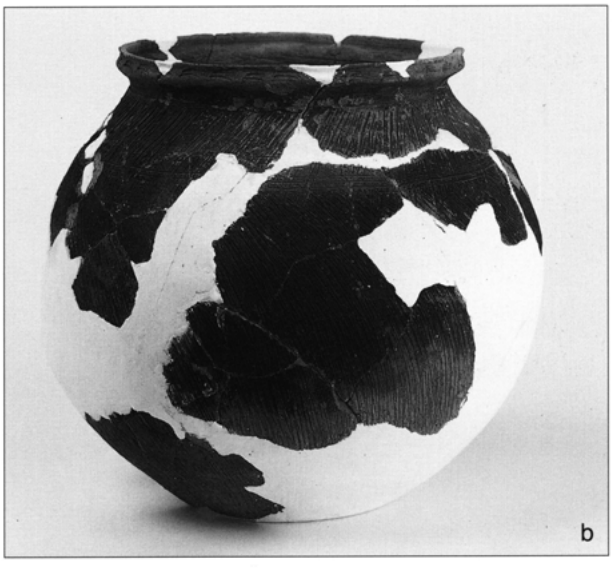
95Ea 区南部中世（東南東）



遺構は浅く、遺存状態が悪い。

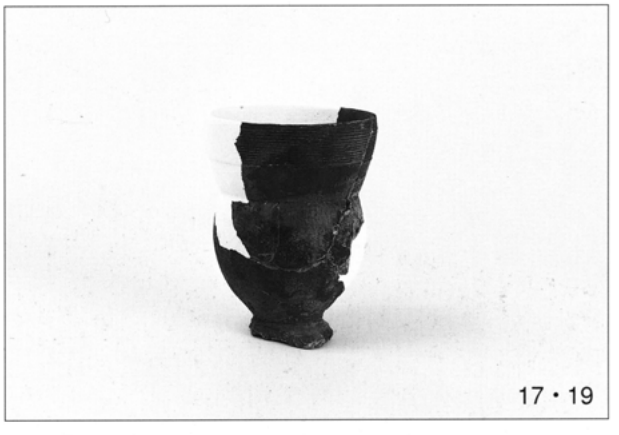

a

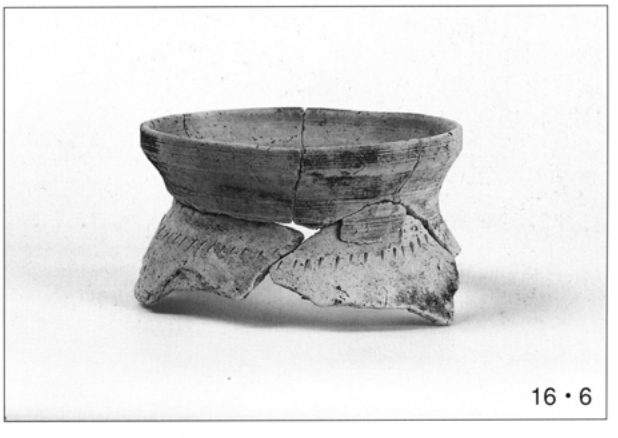

16・15


b


16・23


17・3

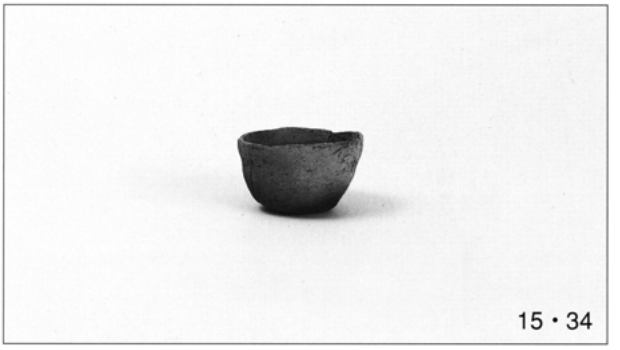

17・19

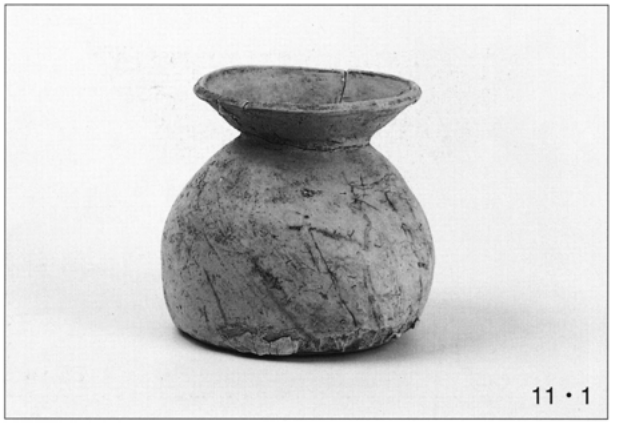

16・6

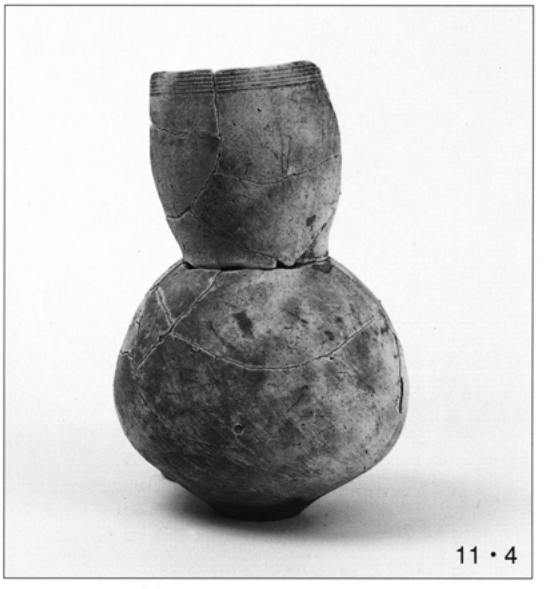

17・20


17・12


17・17

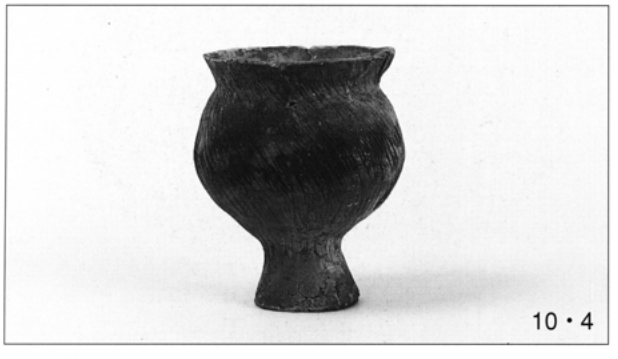

15・34


11・1


11・4


9・1

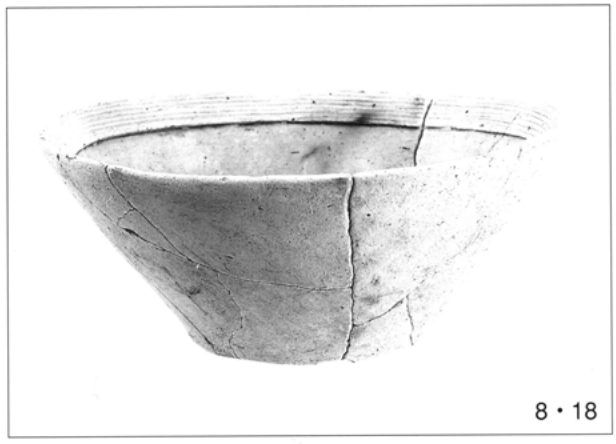

11・17


10・4





—8・10—



8・18



8・17



8・21



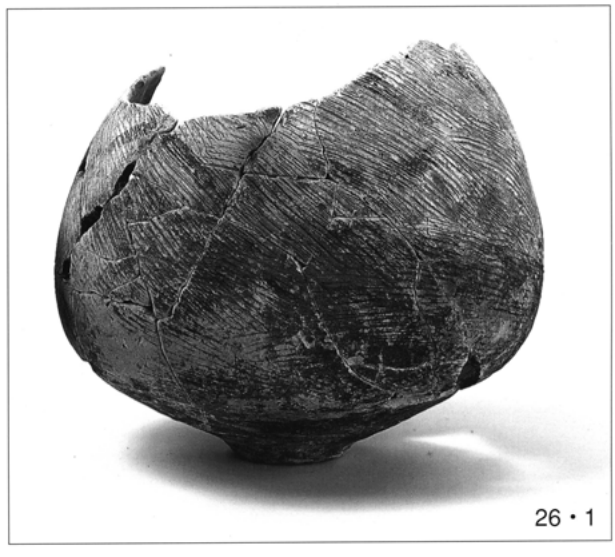
28・4



28・5

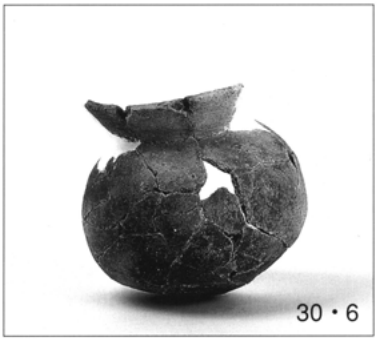


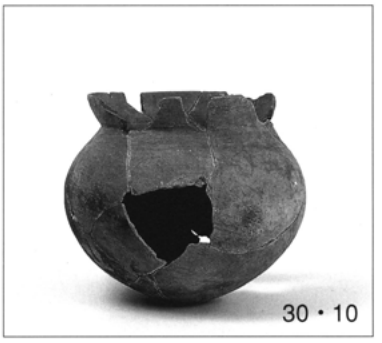
26・3



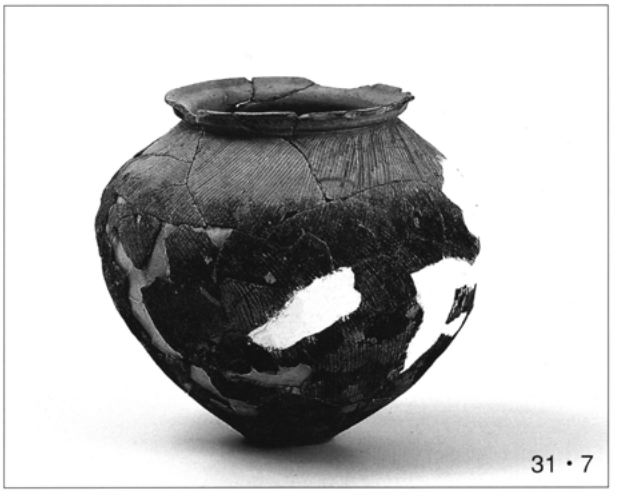
26・1




30・6

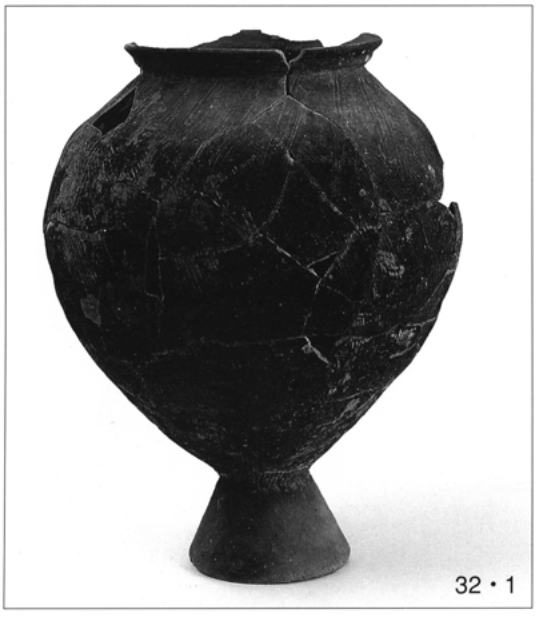

30・10


33・1


31・7


31・2

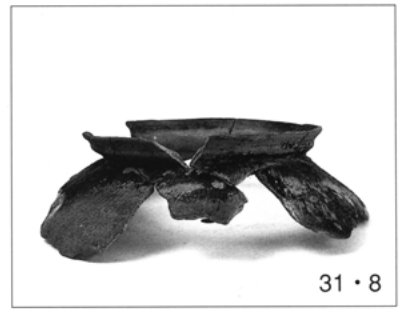

31・3

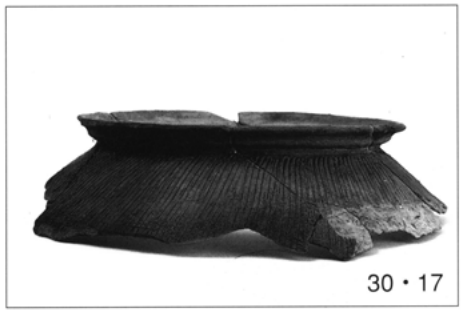

32・1


32・8

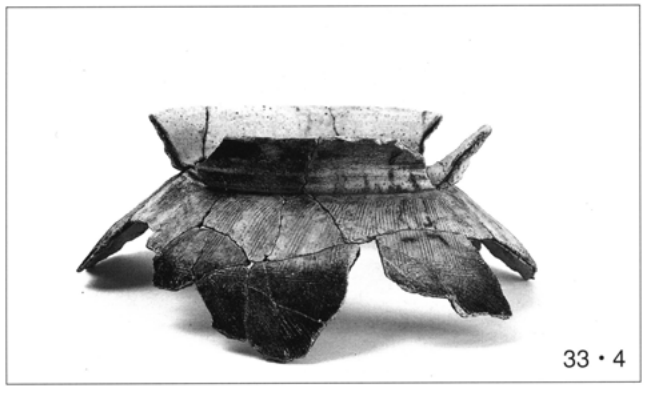

32・5

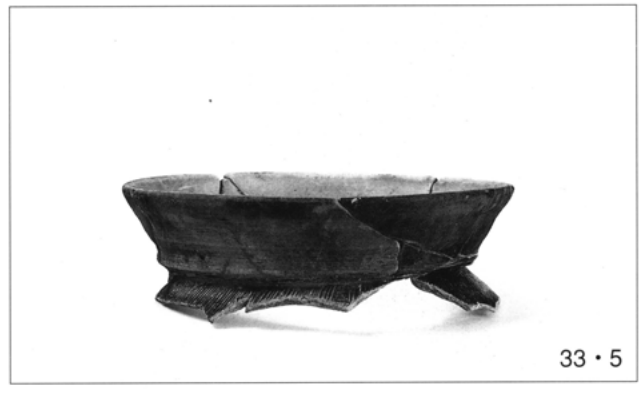

31・10


31・8


30・17


31・1


33・4


33・5


34・4


34・1


34・3


34・2


30・13


34・11



19・36



19・38

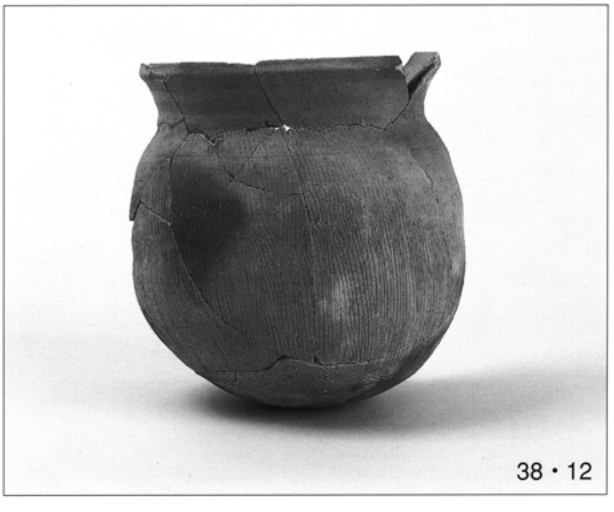




—25・30—



25・32



38・12



38・4



38・3


43・4


43・12


43・13


43・10


43・8


43・15

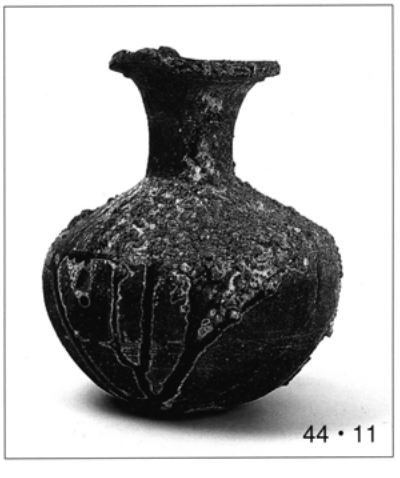

43・16

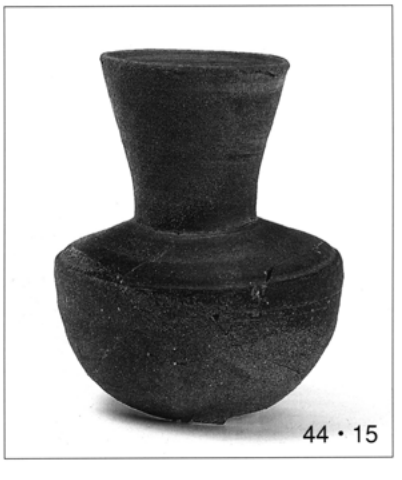

43・15

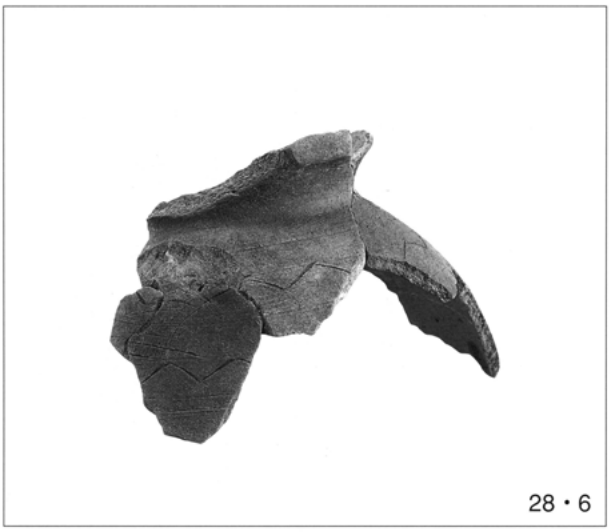

44・3


44・14


44・10


44・11


44・15


28・6

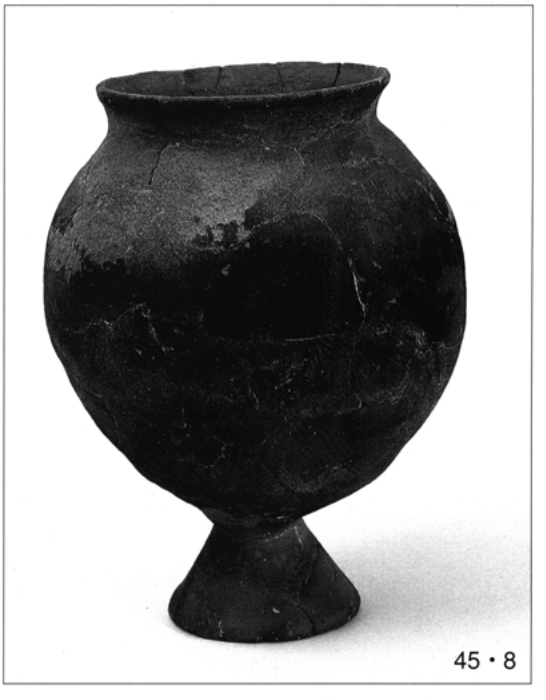

28・7

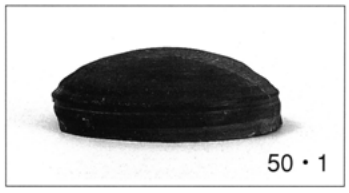

39・7


39・12

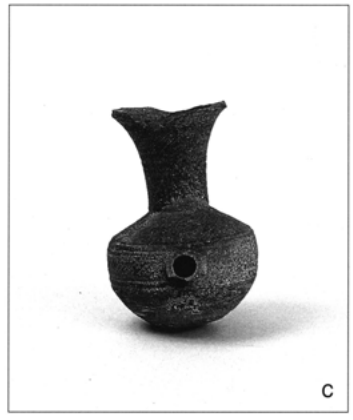

40・5

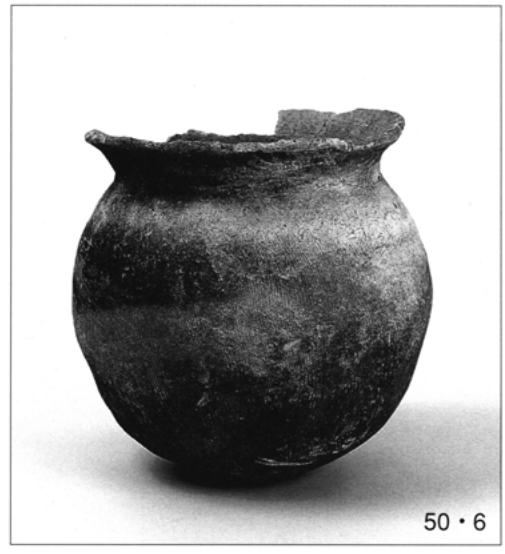

40・17


45・8

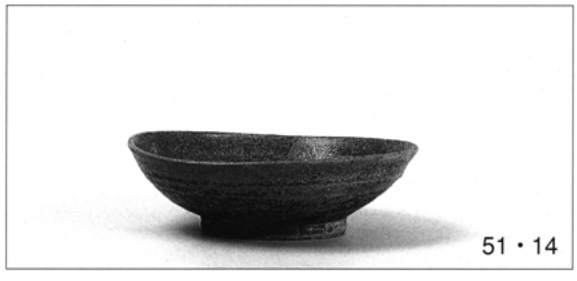

50・1

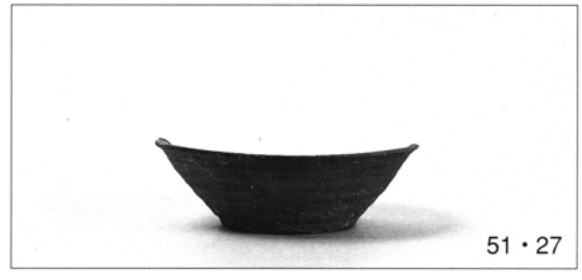

71・14


c


50・6

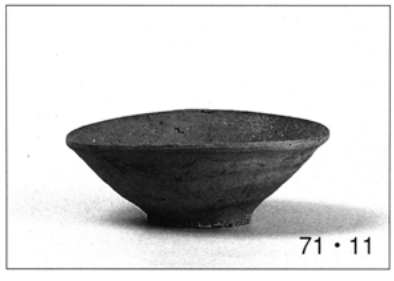

51・30


51・14


51・27


51・2


51・28


71・11

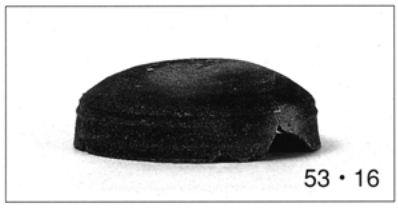

71・15

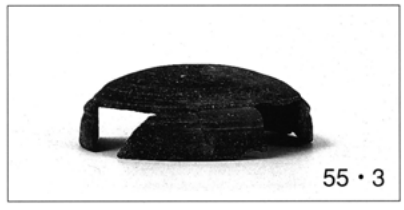

71・29


71・32


71・5


54・1

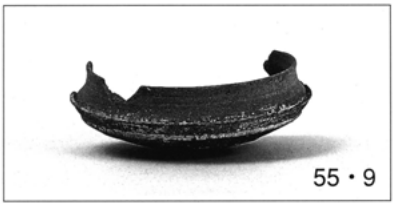

53・16

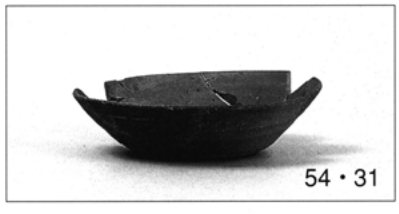

55・3


53・21


53・22


54・10

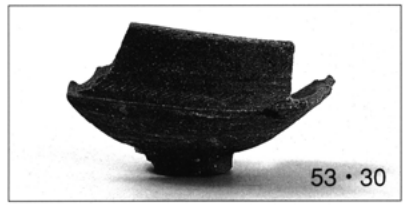

55・9


54・31


53・1


55・1


55・17


53・30


53・2


55・15

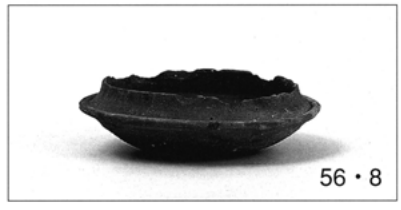

54・11


55・3


56・4


56・1


56・13

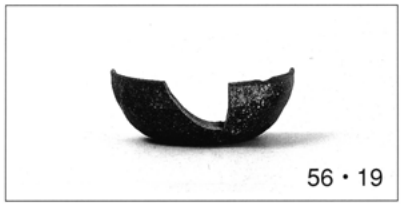

56・8

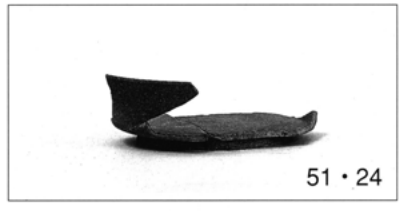

56・18


56・11


56・9


56・16


56・19


51・24

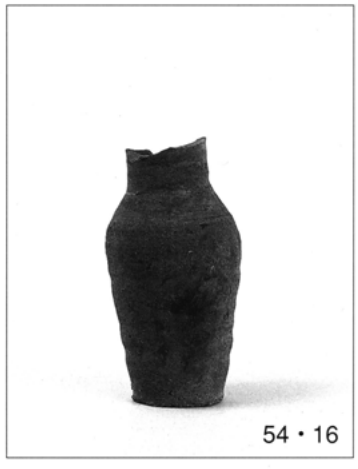

51・20

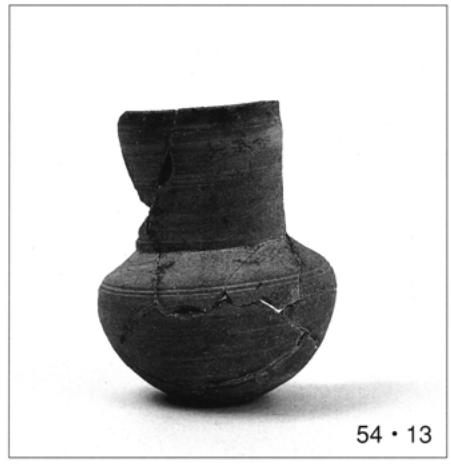

56・23


54・5

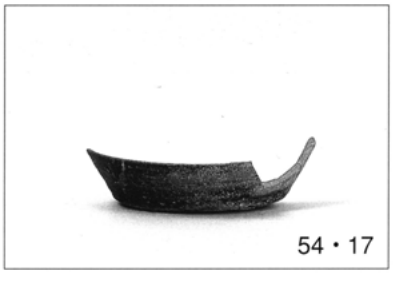

54・6


54・14

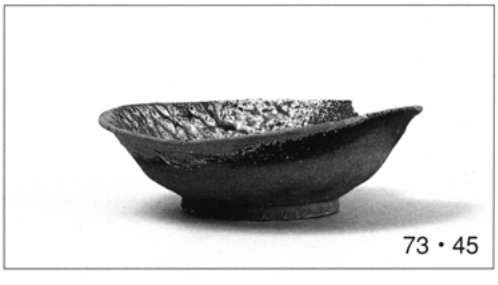

54・16


54・13

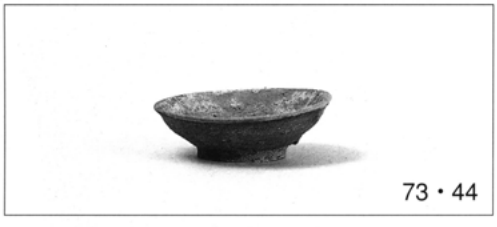

54・21


54・17


54・20


73・45


46・2

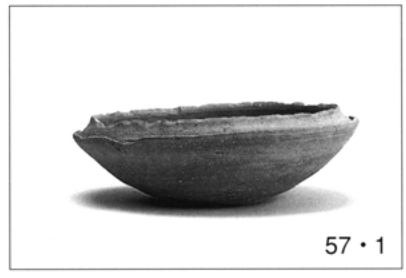

73・44


46・3


46・5


57・23


57・9

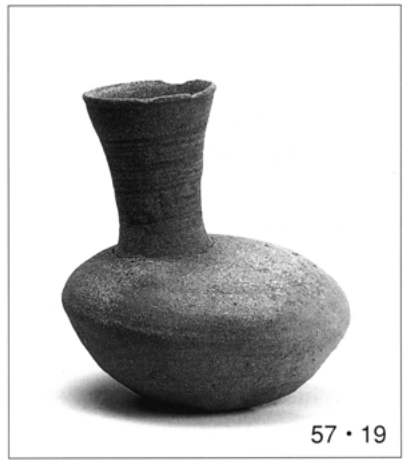

57・1


57・5

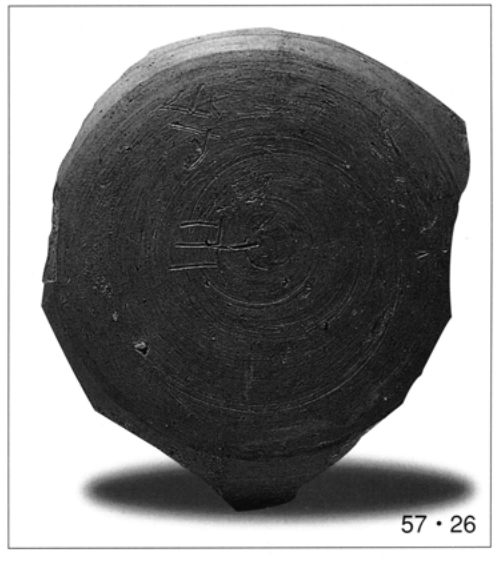

57・15


57・24

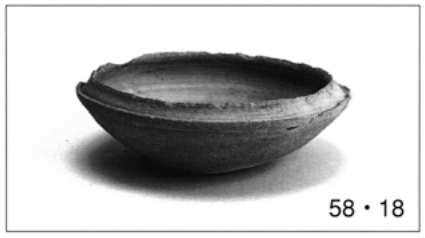

57・18


57・19


57・20

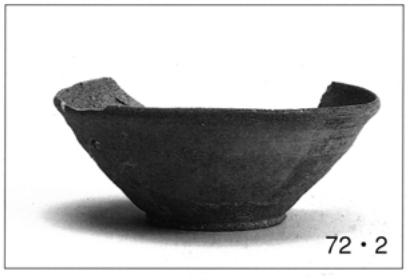

57・26

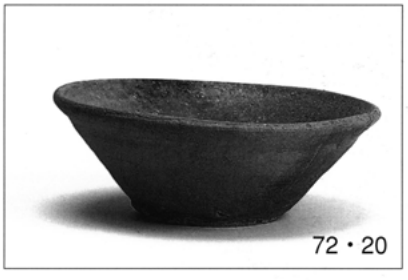

58・16

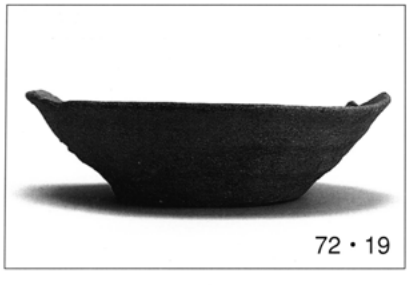

58・18


57・14


57・12

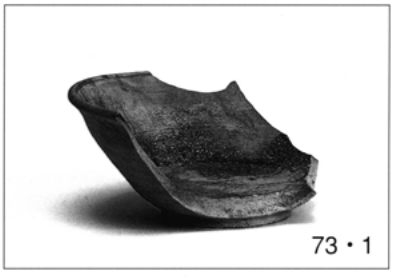

72・2


72・20


72・19


72・46


72・47

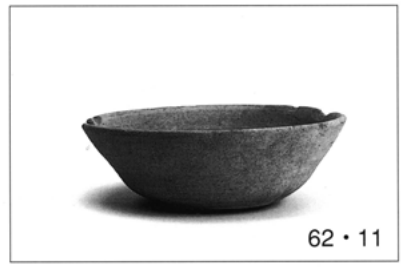

73・1

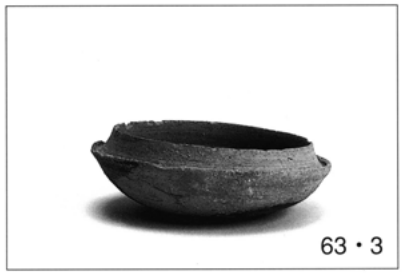

71・10

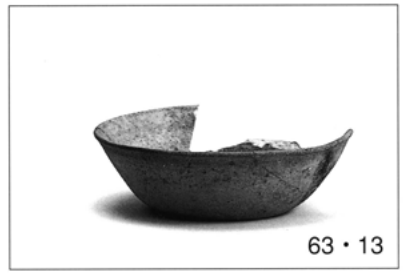

72・50


63・4

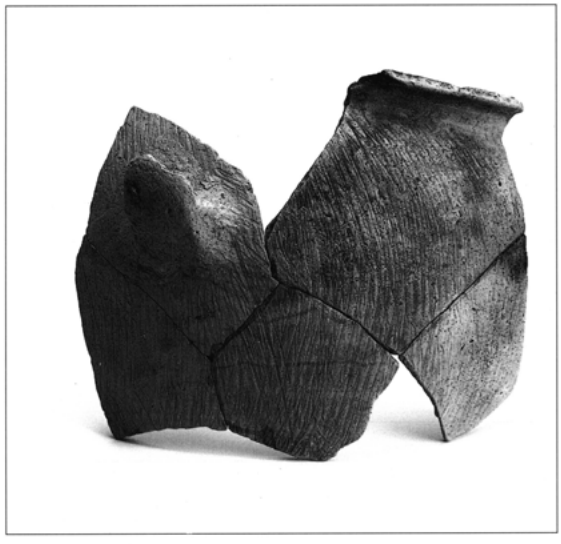

63・11


62・11


63・3


63・13


62・23



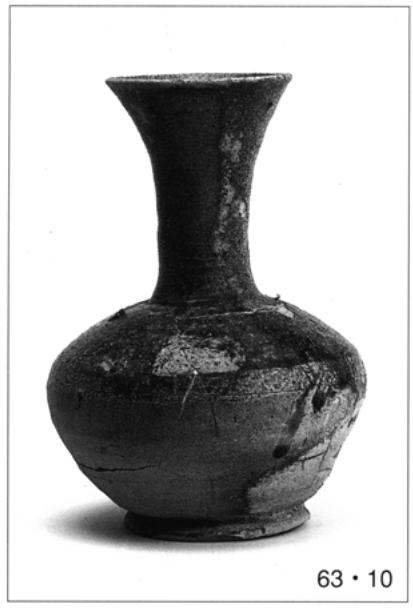


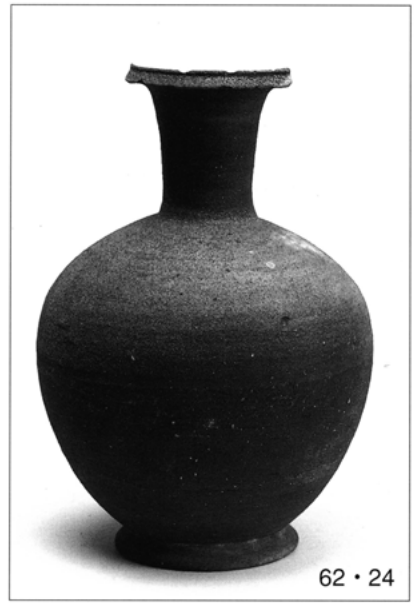
—70・2—

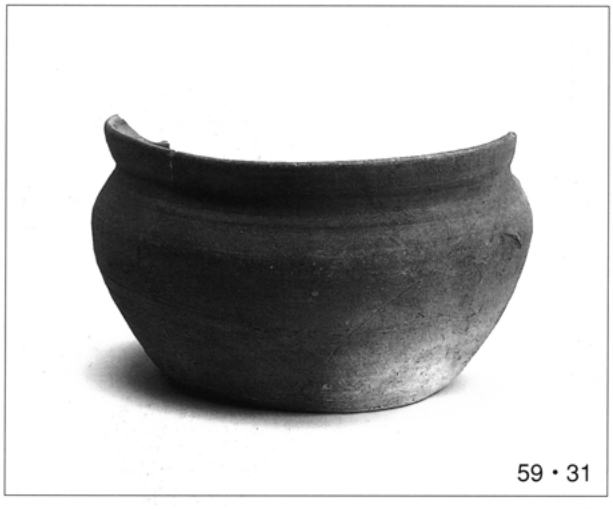

63・16


69・8

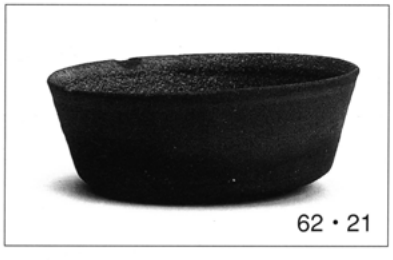

59・19

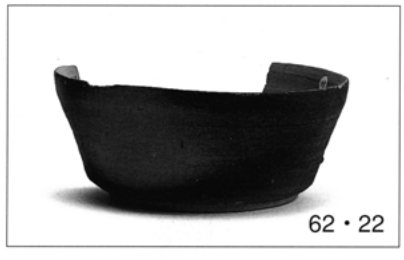

63・10

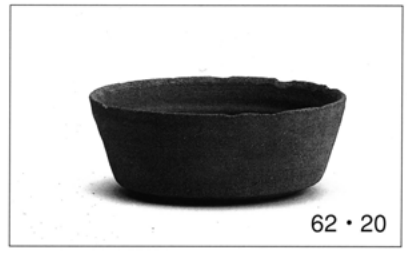

62・24

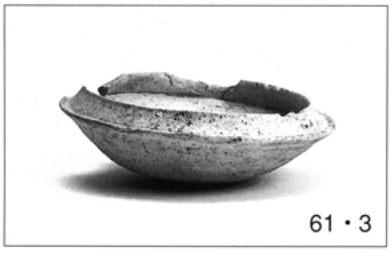

59・31

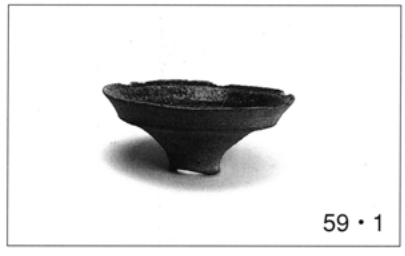

63・14

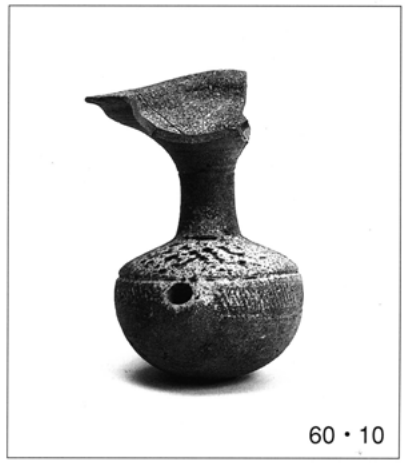

62・21


62・22


62・20


61・3


59・1


60・10

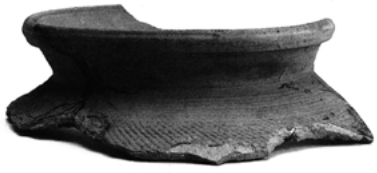

63・12


60・19


65・13


60・11


60・20


63・15


66・3


61・28


67・21


67・25


65・11


66・5

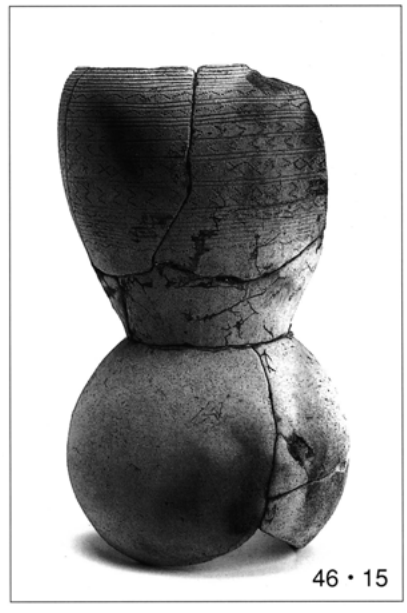

68・1


66・4


65・10

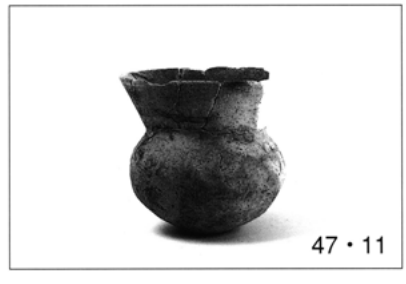

68・16

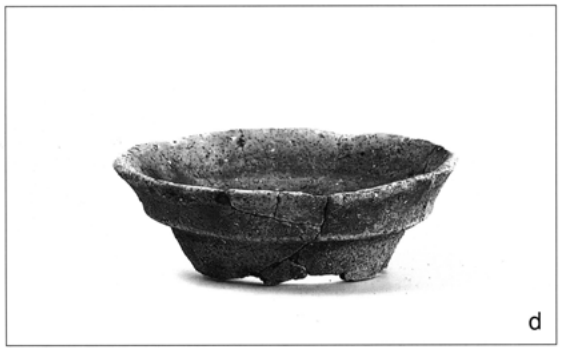

46・10


46・15

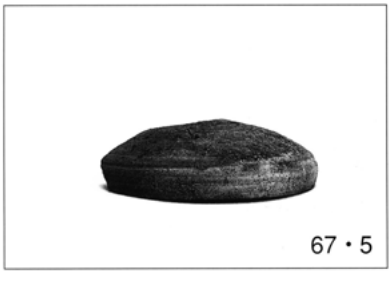

—46・7—

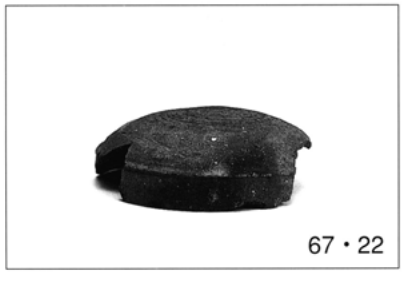



47・11


d

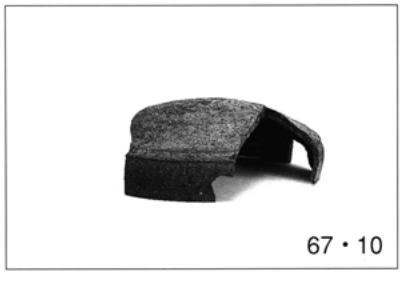

47・26

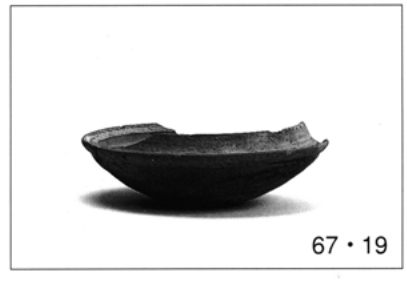

67・5


67・22


67・20


68・5


67・10

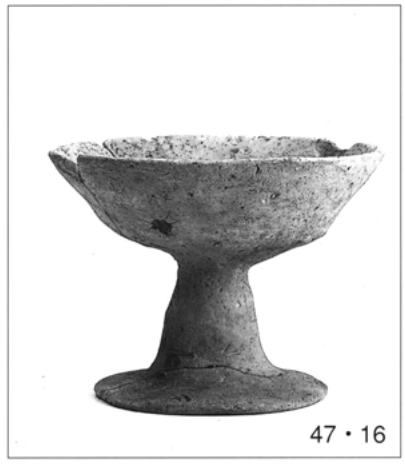

67・19

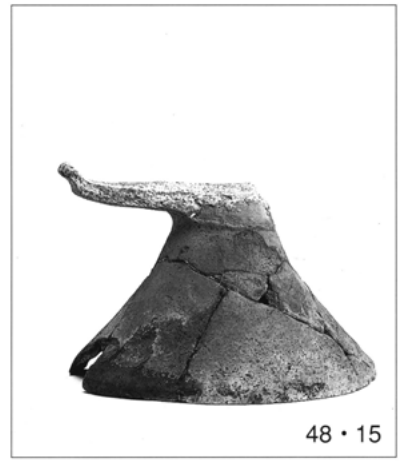

48・4


48・2


48・7


48・5

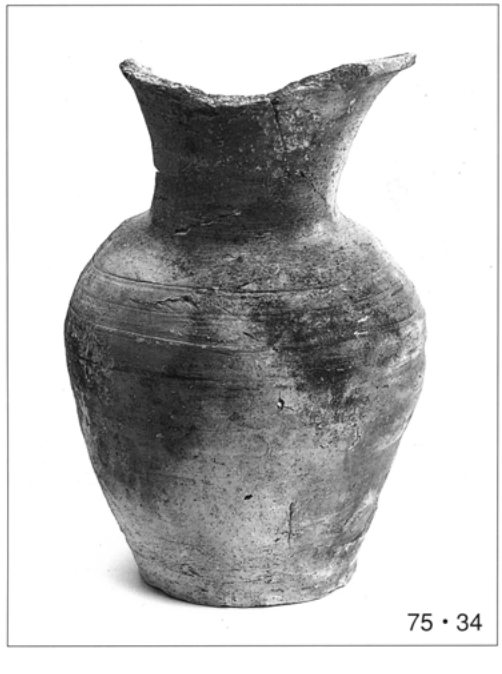

47・16

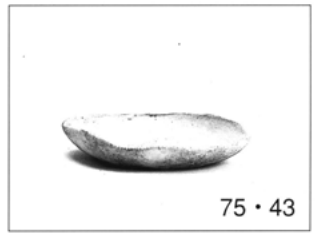

48・15

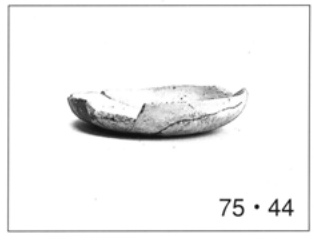

68・17

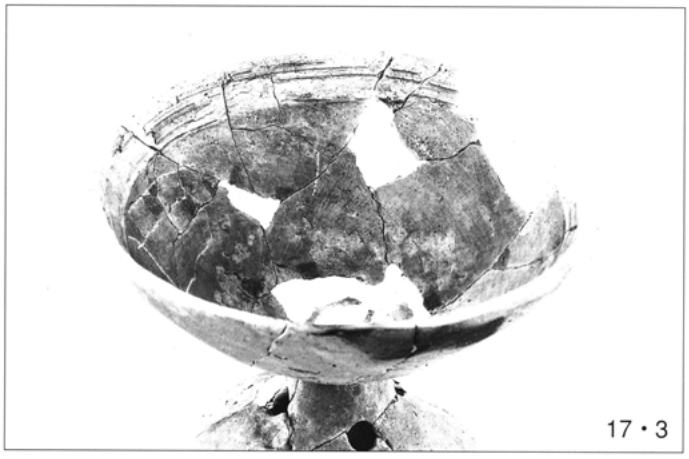

68・8


68・15


75・34


75・43


75・44

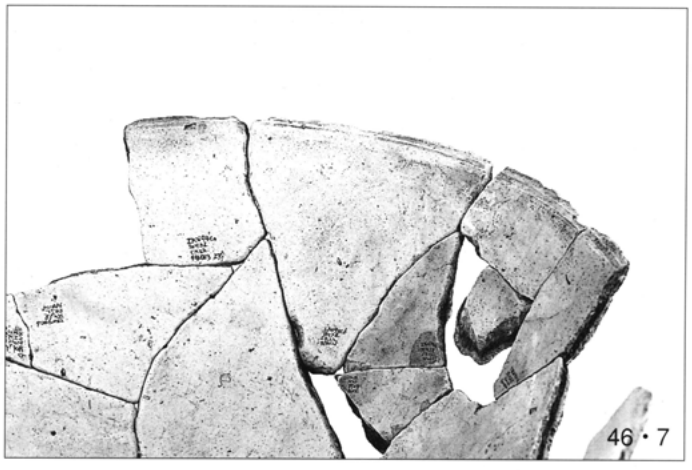

17・3


11・17


28・4

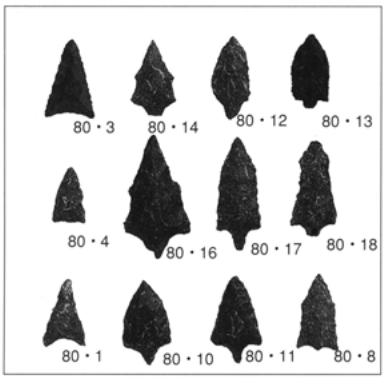

8・18

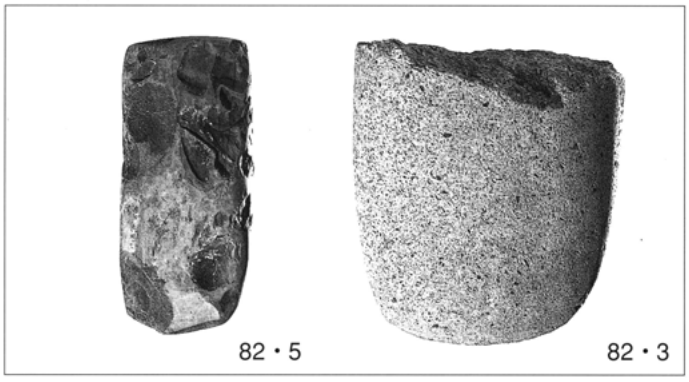

19・36


46・7

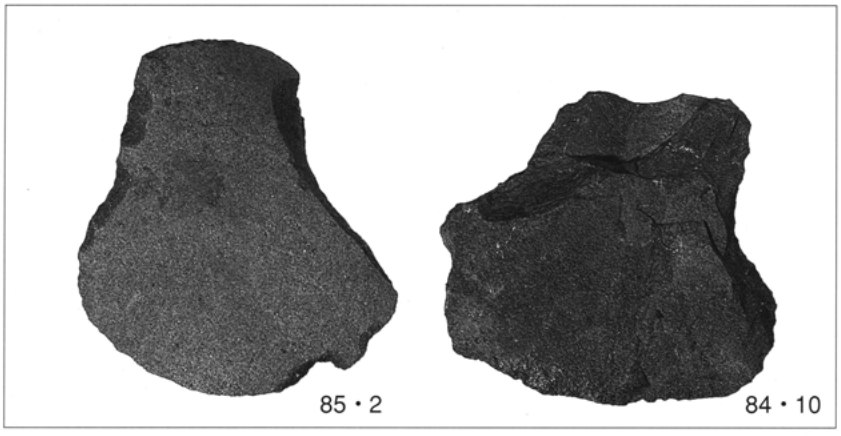

46・15


17・17

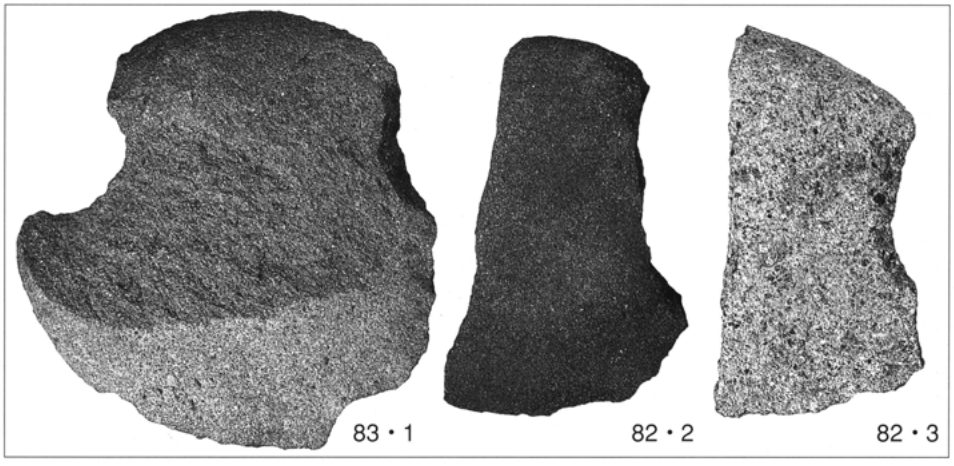

80・3
80・14
80・12
80・13
80・4
80・16
80・17
80・18
80・1
80・10
80・11
80・8

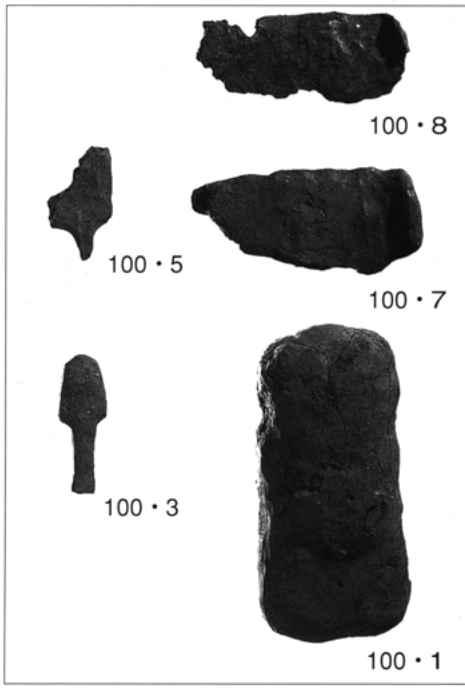

82・5
82・3

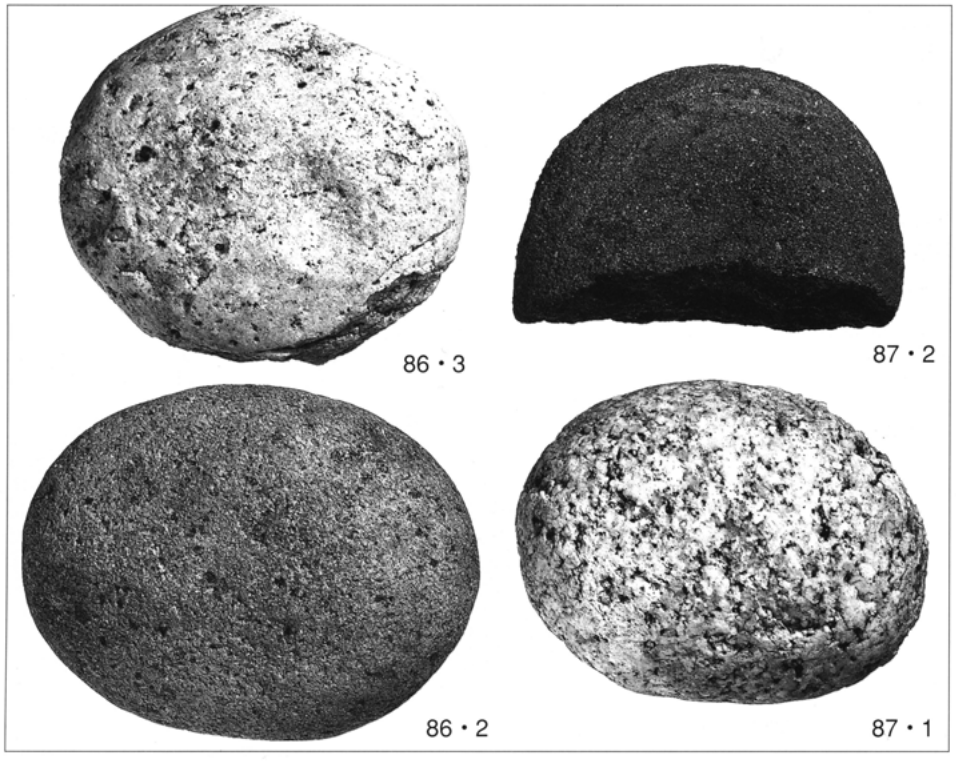

3・15


85・2
84・10


3・8
3・9


83・1
82・2
82・3

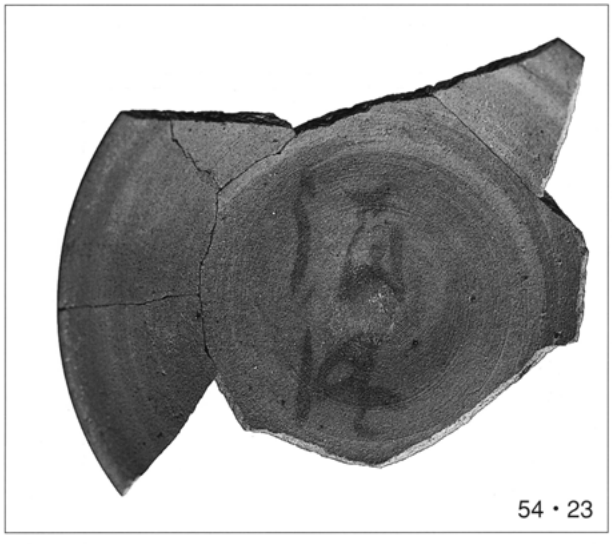

100・8
100・5
100・7
100・3
100・1


86・3
87・2
86・2
87・1



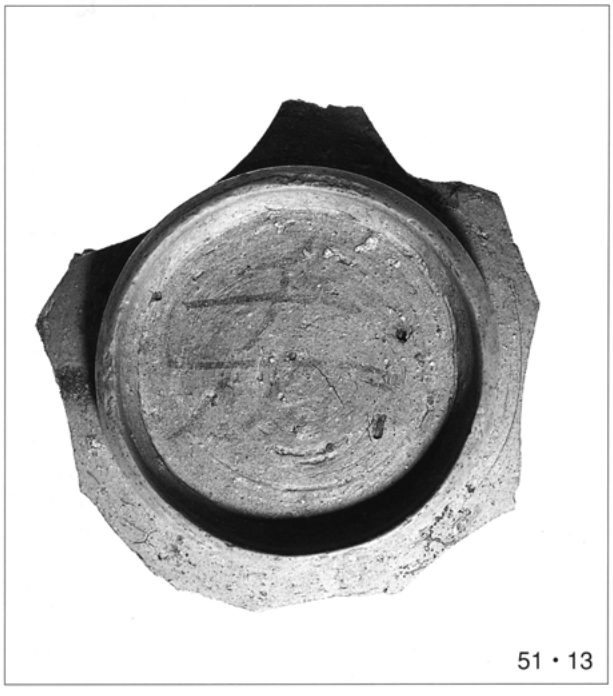

51・14


62・23


54・23


68・4


54・21


51・13

報告書抄録

ふりがな	かどまぬま
書名	門間沼遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第８０集
編集者名	石黒立人
編集機関	財団法人　愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498 - 0017　愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802－24
発行年月日	西暦　1999年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かどまぬま 門間沼	あいちけん 愛知県 はぐりぐん 葉栗郡 きそがわちょう 木曽川町 かどま 門間	25	005	35 度 20 分 20 秒	136 度 48 分 30 秒	199404～ 199703	28,440㎡	東海北陸自動車道建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
門間沼		弥生	溝・土坑	土器 石鏃・磨製石斧 粗製剥片石器	
	水田 集落 墳墓 集落	古墳	竪穴建物 掘立柱建物・井戸 水田 円墳	土師器・須恵器	丸太刳り抜きの井筒 琴 鍛冶関連遺物
		古代	竪穴建物 掘立柱建物・井戸 大溝	須恵器・灰釉陶器 製塩土器	紡錘車 「酒杯」 墨書陶器
		中世	掘立柱建物 井戸・溝	灰釉系陶器	小型硯

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第80集

門間沼遺跡

1999年8月31日

編集・発行　財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター
印刷　株式会社　クイックス

第80集　門間沼遺跡
正誤表

本文

頁	誤	正
35	図3・13：セクション図の付属大畦畔の 盛土部分が未表示。太線は基盤ライン。	「付属大畔」注記部分上部の第１層が盛土部分。
56-58	本文及び図3・34／図3・35のすべてのＳＤ番号。	ＳＤ番号プラス２したものが正しい番号。
57	図3・35　95Ｂ区古代Ｉｂ期遺構配置図（1/500）	図3・35　95Ｂ区古代Ｉ期遺構配置図（1/500）
73	図3・53セクション右列：水田（古墳Ｉ期）	水田（古墳時代Ｉ-ａ期）
77：下から2行目	ＳＸ06：土坑内・・・	ＳＸ08：土坑内・・・
78：上から二行目	ＳＸ08～11：方形土坑・・・	ＳＸ10～13：方形土坑・・・
149-190	遺構番号はすべて旧番号表記。	新番号は遺構一覧表で対照のこと。
201：中段下から5行目	古代Ｉａ・Ｉｂ期。	古代Ｉ期
201	図5・5　古代Ｉ・Ⅱ期遺構配置図	図5・5　古代Ｉ期遺構配置図
205	図5・9　遺跡周辺地籍図合成図３　古代Ⅲ期（1/5000）	図5・9　遺跡周辺地籍図合成図３　古代Ⅱ期（1/5000）
232：左段下から21行目	はなかった。であったはずだ。佐原　眞	はなかったはずだ。佐原　眞
図版23	９５Ａ区上面	９５Ａ区全体
図版63	９５Ｅ区北部下面	９５Ｅ区北部上面

一覧表

頁	誤	正
5	９５Ｂ区ＳＤ28の備考：古代Ⅲ期	古代Ｉ期
12	図版12・1～12・30	図版13・1～13・30に変更。
12	図版13・1～13・16	図版12・1～12・16に変更。
31	図版99・7以下の玉類番号の空欄。	図版3・／図版3・13／図版3・11／図版3・12／図版3・14／図版3・16／図版3・15、を順に記入。
32：金属製品の図版・番号	１行目から25行目の空欄。	100・1～100・25を記入。
32：金属製品の図版・番号	26行目から40行目の空欄。	101・1～101・15を記入。